

## 序

明治二十四年に言海が出て以來、大小幾多の國語辭書が續出して、大日本國語辭典・言泉の如き大部なものができると至つた。是等は語數の豊富と解釋の精確とを標榜して、遺憾なきものの如くあるが、その實なほ幾多の缺陷あるを免れない。その特に著しいことは、鎌倉以降江戸時代の語彙の不足と語釋の不備とである。これでは太平記や西鶴や近松は到底まんぞくに讀めない。奈良・平安兩期の文獻は國學者諸先輩の精勵によつてほゞ整理されたが、武家時代の物はまだ十分研究が盡されて居ない。上古より現代まで幾千年に渉る語彙を一人の手で纏めて完全を期するは、至難な事業で寧ろ不可能といふべきだ。或は部類により或は時代により、各専門の學者が分擔考究した結果を綜合集成して、始めて完全なる國語辭書を得べきである。この理想に到達する順序として、萬葉・源氏・謠曲・俳諧・西鶴・近松等、それ／＼特別の辭典がまづ成立すべきものと思ふ。

佐藤君の元祿文學辭典はこの期待に應ずる最初の試みで、陳勝・吳廣の勇しい意氣込を見せる。固より多少未熟不備な點もあらうが、慾をいへば際限がない。春秋に富み研究心の旺盛な君が、今後絶えず不退轉の努力を繼續して、漸次増補完成せられ、陳吳先倡の名に安んぜず、漢家百年の業を全うせられんことを至囑々々。

昭和三年七月十四日

藤 井 乙 男

## はしがき

この書を、初めて西鶴や近松を繙かれる諸君の座右に供へます。

さう申しあげたいのですが、實は私も西鶴や近松には初學者の一人であります。元祿文學——日本文學史上の大山脈、しかもその最秀峰とも稱すべき西鶴と近松との頂上を窮めるためには、私はまだ餘りに登山準備が熟してをりませんでした。唯その山口から一步々々と覺東ない足どりで歩み續けて、語釋上に採集し得た成績がこのさゝやかな一書であります。固よりその大部分は、今日までの學者の採集にかゝるものであります。私自身の發見にかゝる珍草も多少混じてゐることと存じます。そして初學者たる私は、却てまた初學者たる方々の道連れとして相應しい者ではないか、と言ふやうな勝手な理窟も手傳ひまして、敢てこの未熟なものを公にする氣になりました。たとへば、本書は辭典とは名づけたものの、しばしば諸君に對して問題を提供してゐます。或は自ら疑つてゐます。又、時には獨り合點をしてゐます。それにもこれにも、さぞ思ひあやまりや見當ちがひがあります。どうぞ、さうした場合には、諸君の御考によつて、愚考の及ばぬところを及ぶ限り役立たせるやうにして戴きたいと思ひます。畠山箕山は、色道大鏡に「もとより短才無智のしわざなれば、誤れる所多かるべし。しかはあれど、あやまりを捨て、心の通ふ所ばかりを見給ふべし」と言つてをります。私は、厚かましくも「あやまりを正し、心の通ふ筋を教へ給へ」と諸君にお願ひ致したのであります。

尙、本書の編纂を思ひ立つたそもくは、加藤武雄君の慇懃によつたことを一言して、同君に感謝の意を表したいと存じます。顧へば大正十二年の大震災火災の後、まだ咽せかへるやうな灰燼の中のバラックに、不幸な人々が復興の喘ぎを續けてゐる頃に、私は一代男を更めて讀み始めたのでした。その後、同君からは幾度か督促せられつゝも、公私の雑務に煩はされて、遂に六年目の今日に到つたのであります。或期間は、問題となるべき語彙をカードに採るべく、本文に圈點を施してはその頭文字を上欄に記し出すことが、携帯に便な有朋堂文庫本によつて、大部分は電車の中での仕事として續けられました。それを歸宅しての夜なべ仕事にせつせとカードに採りました。何分にも、當初僅に一二年の餘裕を與へられたさきりでありましたので、そのカードの整理にもなか／＼思ふやうな時間が恵まれず、語彙の研究も始終念頭には懸けながら容易に埒あかず、やう／＼大正十五年も十月に到つて稿を起しまして、ともかくこゝに曲りなりにも出版する運びとなりました。これは偏に先輩知友の直接間接の指導と聲援とによるものと、今さらながら有りがたさを覺えます。

最後に、藤井・吉澤・藤村三先生からそれ／＼序文を寄せられ、過分な推賞と將來に對する激勵の御言葉を賜はつたこと、並びに新潮社社長佐藤義亮氏が、無名の一學徒のために、かくの如きや／＼偏した辭書の刊行を快諾せられたことに對して、特に深甚の感謝を捧げます。

昭和三年即位の大禮を迎へ奉らんとする初秋

礪川の寓居に於て

編者しるす

## 凡 例

元祿文學は、西鶴の小説と近松の戯曲と芭蕉の俳諧とに代表されてゐますが、その語彙は、特に西鶴と近松とによつて代表されてゐるといはれます。本書は、その語彙を、主として西鶴の俳諧及び小説と近松の戯曲のおもな作品とから採りましたので、「元祿文學辭典」と題した次第であります。(別項出典書目概覽参照)

### 一、語彙の採擇方針

(一) 成るべく元祿時代の句ある語彙を採擇するといふ方針に従ひました。それ故に、一見、解するに及ばぬと思はれる語も、當時の色合の出た言ひ方のものは之を採りました。又、それと同時に、たとひ解釋を要する語でも、普通の國語辭典に譲つて然るべきものは之を省きました。例へば近松の時代物のうち、近古の軍記物の語彙知識で解決がつくやうなものは、大方之を割愛しました。

(二) 單語の外に、連語・句・故事・俚言の類をも採りました。

(三) 固有名詞、佛典・漢籍から出た語句・故事などは、特殊なものに限つて採ることにしました。

(四) 用例が少なく、時代的・地方的にあまり普遍性を具へてゐない造語・造句の類も、當時代とその作者の機智とを窺ふ料として採りました。

### 二、解釋上の用意

(一) 各語彙については、成るべくその用例を示すことに努めました。蓋し、用例は實にその語釋の缺を補ひ、その語の時代的・地方的・個人的の位置を語り、且、その語の眞の生命を現はしてゐると信じたからであります。

(二) 或は、僅にその一文例のための註釋といふに過ぎない解もあります。それらは、特に文例と結びつけて見られたものであります。固有名詞にまでも用例を挙げたのは、單にその例中の人物なり地名なりの解であることを示すためであります。

(三) 意義の廣汎で多様な語は、その時代に用ひられた特殊の意義を先として、(一)(二)の順を附して列べました。これは普通の辭典が、語意の歴史的變遷によつて順序を附して居ると、必ずしも一致してゐないことに注意されたいと思ひます。

(四) 用例のみを擧げて、解釋を省いたのも少なくありません。それらの中には、解を要しないといふよりは、何とも解釋がつかぬのが多いのです。これはたま／＼自らの淺學を示すもので、實に汗顔の至りです。しかし、その用例そのものが、讀者の眞面目な研究心に、必ずや或暗示を與へることを信じ、又、かく例のみでも擧げるその事が、辭典の語彙集としてのせめてもの役目を、多少なりとも果す所以であるとも考へましたので、敢て大方の示教を仰ぐことにしたのであります。

### 三、語彙の標出し方 (索引上の注意)

(一) 語彙の標出しは、すべてその出典に記された形のまゝに従ふことを方針としました。故に、標出語の形(主として假名づかひ)は、必ずしも正しいものではありません。これは、本書が特に讀書辭典として企てられた主旨に由るもので、形の正否に拘らず、出典に見えたまゝを採録する方が、當時の作品の讀書に際して、索引上却て便利であると思つたからであります。しかし、その標出語が誤りである場合は、解釋の文中に、必ずその正しい形を示しておきました。

(二) 出典の本文が正確を缺き、全くおなじ語彙と思はれるものが、甲の用例と乙の用例とでその形(主として假名)を異にしてあるときは、その兩者とも、それ〴〵の假名の部に標出しておきました。例へば、えとゑ、おとを、かとかく又はくは、いうとゆうなどについては、その何れにも當つて見られたいのであります。又、中の字音のちゆうはちうで、十と熟した語は、じふ又はじつで引かれるやうにしておきました。

(三) 人の假名は、五十音順の最後に排列しました。

(四) 引例の本文中、その標出語彙以外の部分は、假名遣ひやその他の用字を讀解し易く改めた所もあります。畢竟引例

文は、その標出語彙そのものの解釋のためで、その他の語句で讀者を勞するに及ばぬと考へた故であります。

(五) 俚言・故事、その他比較的長い語句で、全部假名書きで標出するに煩しいものは、初めから漢字まじりに致しました。體裁上不統一ではありますが、便宜に従ひました。

#### 四、出典書目概覽(主なるもの)

好色一代男	(略) 代男	本朝二十不孝(一名、新因果物語)	(二十不孝)
諸艶大鑑(一名、好色二代男)	(二) 代男	懷 硯	
好色一代女	(一) 代女	武道傳來記(一名、諸國敵討)	
好色五人女	(五) 人女	日本永代藏(一名、大福新長者教)	(永代藏)
好色盛衰記(一名、西鶴榮花咄)	(榮花咄)	武家義理物語	
男色大鑑(一名、本朝若風俗)		新可笑記	
大下馬(一名、西鶴諸國ばなし)		本朝櫻陰比事	(櫻陰比事)

世間胸算用

〔胸算用〕

西鶴置土産

〔置土産〕

西鶴織留(町人鑑・世の人心、合巻)

〔織留〕

西鶴俗つれづれ

〔俗つれづれ〕

萬の文反古

晝夜用心記(北條剛水著)

椀久一世物語

新小夜嵐物語

色道大鏡(富山箕山著)

以下俳書

俳諧師手鑑

大句數

虎溪の橋

物種集

西鶴五百韻

〔五百韻〕

兩吟一日千句

大阪獨吟集

三鐵輪

俳諧六日飛脚

〔六日飛脚〕

精進膾

大矢數

以下、近松の戯曲

出世景清

源氏冷泉節

松風村雨束帶鑑

釋迦如來誕生會

百日會我(一名、團扇會我)

源氏烏帽子折

長町女腹切

〔女腹切〕

淀鯉出世瀧徳

蟬丸

最明寺殿百人上臈

會根崎心中(お初天神記)

薩摩歌



心中重井筒  
 雪女五枚羽子板  
 傾城反魂香  
 心中二枚繪草紙  
 碁盤太平記  
 戀八卦柱曆(大經師昔曆)  
 堀川波鼓  
 緋縮緬卯月の紅葉  
 卯月の潤色  
 丹波與作  
 心中萬年草  
 五十年忌歌念佛  
 今宮心中  
 心中双は水の朔日  
 夕霧阿波鳴渡  
 冥途の飛脚  
 吉野都女楠

〔重井筒〕

〔二枚繪草紙〕

〔卯月の紅葉〕

〔萬年草〕

〔歌念佛〕

〔双は水の朔日〕

孕常盤(正しくは孕常磐)  
 大職冠(正しくは大織冠)  
 生玉心中  
 國性爺合戰(正しくは國姓爺合戰)  
 鎗の權三重帷子  
 壽の門松  
 日本振袖始  
 曾我會稽山  
 傾城酒吞童子  
 博多小女郎渡枕  
 心中天の網島  
 女殺油地獄  
 心中宵庚申  
 百合若大臣野守鏡  
 羈山姥  
 雙生隅田川  
 吉野忠信

〔國性爺〕

〔槍權三〕

〔博多小女郎〕

〔天網島〕

〔油地獄〕

一心五戒魂

浦島年代記

大磯虎稚物語

加古教信七墓巡

娥歌加留多

鎌田兵衛名所盃

傾城島原蛙合戦

源氏十二段長生島臺

國性爺後日合戦

持統天皇歌軍法

聖德太子繪傳記

曾我扇八景

曾我五人兄弟

曾我虎が磨

當流小栗判官

文武五人男

平家女護島

室町千疊敷

梶狩劍本地

日本武尊吾妻鑑

用明天皇職人鑑

(以下略)

芭蕉の俳諧・俳文に及ばなかつたのは、特に元祿文學辭典として遺憾であります。脱稿の約束期限も疾うに過ぎてしまひましたので、甚だ未熟ながら一先づ纏めることにしたのであります。私としては今後なほ精進して、少しでも、時代語辭典としての完成の域に近づかしたいと期してをります。

昭和三年十月

佐藤鶴吉識

元祿文學辭典 佐藤鶴吉編

あ

あい 相(あひ)。(同類) 仲間。吉野都

女楠ニ「又六腹を立、ム、扱はあひじやかゝる」(白鷹答。合鬪。二代男三「招けば頷く笑へばあいをなし」(白鷹の相手。二代男一「背は亂酒の與左衛門、あいの又あい、大あいと申し出して、雪に深草の花鹽を交せて、これ一種の口取にして呑むほどに」。堀川波鼓上「はてさて如何に飲まぬとて、餘りすぎない一つ呑みや。母があいをしませう」)

あいけん 合拳(あひけん)。馴れあひ。合意。相談の上のこと。薩摩歌中「お關が來たも皆あいけん、積られた、馴された」

あいたつ 挨拶。(同)應對。返辭。(同)語らひ。なか(仲)。えん(縁)。雪女五枚羽

子板上「中川殿と、此方様との挨拶が大抵並の事かいの」(挨拶をする人。仲裁人。淀鯉出世瀧徳下「爰の妙慶挨拶にて請出す談合極まると、聞くから胸が騒ぎ出し」)

あいたつきる 挨拶切る。挨拶をしない。關係を絶つ。冥途の飛脚上「梅川殿へも吹き込んで、此方から挨拶切り高屋の客にさらりつと請けさせて仕廻度い」

あいたつよし 挨拶好し。仲よし。睦じい。日本永代藏六「殊更何れも挨拶よく、其上身體も百姓の願ひのまゝに」武道傳來記「年ごろさばかりの好みも無く、殊に挨拶よからぬ人の妻子を預り匿し給ふいはれなし」

あいたざめ 藍鮫(あゐざめ)。鮫の一種。つのざめ(角鮫)のこと。皮を刀劍の柄に用ひる。一代男老「大腸差、少しそらして、あい鮫を懸け、鐵の古鐔小さく」あいぜんみやうわろ 愛染明王。愛慾を司る明王。三日六臂で獅子の冠を戴き、

身の色は日の光のやうで、常に威怒の相を現はしてゐる。一代女五「是より外に身過ぎは無き事かと愛染明王を恨み、次第にしほるゝ戀草なるに」。男色大鑑六「難波の大寺に立たせ給ふ愛染明王、役者おろかならず祈りて」

あいたしこ あ痛い。重井筒中「あいたしこ、あいたしこ、あいたしこ、冷える加減か俄かに疝氣が起つた」。丹波與作中「あいたあいたしこ。横腹をふみくさる何者ぢや」

あいだてない 分別がない。わきまへのない。理にはづれた。あひだち(間隔)無し(の)轉訛であると。油地獄下「餘り母があいだてない。どうばりが強うて、いよゝゝ心が直らぬ」。槍權三上「子を寵愛のあひだてなく」

あいのをんな 間(あひ)の女。一代男四「其跡はあいの女とて、茶屋にもあらず、けいせいでもなし、其後は遊び宿の口鼻となりながら自由になりぬ、そ

あ

れから婆々になりてすたりぬ。これは舞子の成人してからの生活の變化を語つてゐる。茶屋の女でもなく傾城でもなく、その中間といったやうな生活をする女といふのであらう。

**あいぶん** 相分(あひぶん)。お互つこ。

一代男セ「世之介聞いて、憎さもにくし、こいつ只是置かれじと、うれしきかへり事遣はし、手くだであいぶんにして」とは、世之介が怒得づくの遊女に對して憤慨してゐるところ。

**あいもん** あひもん(合文)の條を見よ。

**あいら** あれら。彼等。用明天皇職人鑑山語「あいらふぜい(彼等風情)を相手にして、云うて埒のあく事か」

**あいろ** 模様。區別。あやめ(文目)。「あやいろ」の約。曾我會稽山西「物のあいば見えざるに、松明出せと呼ばはれらば」

**あうむ** 鸚鵡。「あふむ」の條を見よ。

**あうん** 阿伝。阿吽。氣息の出入。呼吸。阿は生、伝は死の相を現はすともいはれる。心中萬年草下「伝と突込む切尖の、臍にあれば返返り、はりたやうんとくり通す、阿伝の息も消え」と「あうんのにわう 阿伝の仁王。阿の仁王

は口を開き、伝の仁王は口を閉ぢてゐるのでいふ。緋縮緬卯月の紅葉(廿三)目に角立てる仁王貌。物には阿伝ある故に。「阿伝の二天」ともいふ。

**あかうそ** 赤嘘。全くの虚言。軀山姥「親の敵を狙ふとは、跡方もない赤嘘」

あかうのどう あかう(赤木)の胴。「あかう」は、赤木といふ名木、胴は鼓や三味線の胴。雪女五枚羽子板中「殿はな、小鼓のヤ。えて物。あかうの胴に加賀皮くれ。赤木は「くわりん」、「からなし」ともいふ。材を床柱・三味線・鼓の胴・ちやぶだいななどに用ひる。

**あかかき** 垢搔。私娼の一種。風呂屋で浴客の垢を搔くところから、「猿」とも呼ぶ。「あかすり」、「髪洗女」、「呂衆」、「風呂屋者」などとも呼ばれた。一代男、表題



あかかき

「煩惱の垢搔、兵庫風風呂屋者の事」。風呂で浴客と談合を定め夜間密かに稼ぎに出たものである。「いか様、是を只是置かれじと、うす約束するよりはや、あがり湯のくれやう、ちらしをのませ、浴衣の取さばき、火

入に氣をつけ、鬢水の運び、鏡かすやら、そのもてなし何國もかはる事なし」とは、その談合後の「あかかき」の態度である。

**あかがしら** 赤頭。油氣のない、ばさばさの髪。じゃく毛がみ。もと、能樂にいふ赤頭から來た語であらう。男性大鑑入「江北の赤頭の子どもを江南の金剛(俳優の召使のこと)が手にかくれば、程なく太夫髪となり」とは、「江南の橋を江北に栽うれば枳となる」故事をもちつたもの。

**あかがねさかやき** 赤銅月代。さかやき(額から頂にかけて髪を剃ること)を剃つたあとが銅色に光るのをいふ。槍權三上「六十八でも生得堅氣、赤銅月代剃立てて」

**あかねのふきや** 銅の吹屋。銅を吹きわけ精錬する家。吹屋は、すべて金屬を精錬し又は鑄造する家。その人。源氏冷泉節下「昌に鐵氣(かなけ)のある所、何ぼう蒔いても育たぬ(中略)蒔いても育たぬは、和女が何處ぞに、銅の吹屋が棲んださうな」。次條参照。  
**あかがひ** 赤貝。心中宵庚申下「三百戒五百戒も、約る所は赤貝に留まるとのお

あ

談義。半兵衛が叱らるゝも貝のわざ。和女におれが異見するもの貝のわざ。前條もこの語も女のものを意味する。あがく 足搔。もと、歌が前足で地を搔くこと。轉じて、手足を動かす。氣をもむ。小兒などが、いたづらをするにいふ。わるあがき(悪足搔)參照。

あかごめ 赤米。赤味を帯びたひね米。一代女四「朝夕も餘所は皆赤米なれど、此方は播州の天守米」

あかさかやつこ 赤坂奴。槍・挾箱などを持つて大名の供をした若黨・中間。多く江戸の赤坂邊に住んでゐたのでいふ。雙生岡田川四「こりや大名のお通りだ。先退ける。振り込めさ。赤坂奴・髭奴、年中振つても振り止まぬ」

あかざのあつもの 藜の羹。極めてまづい精進料理。卯月の潤色中「浮世の世話を餘所に見て、藜の羹、かみぶすま、先づ盗人の恐れなく、寢覺がよい」との語は徒然草に出てゐる。

あがたぬこ 縣神子。小さい弓を弾き、合掌瞑目して、神降ろしといふことをやつて、神託を告げる巫女。いちこ。くちよせ。あづさみこ。かまはらひ。一代男三「すいしめの鈴をならして縣

御子來れり(中略)其有様尋常なるは中々お初尾のぶんにてなるまじ、不思議と人に尋ねければ、よき所へ心のかよふことぞ、あれも品こそ替れ、望めば遊女の如くなれるものなり。緋縮緬卯月の紅葉上「神子は合掌目を塞ぎ、珠数をくりひく梓弓、神おろしして寄せにける」。あづさ(梓)の條參照。

赤頭巾を着せたる鼻 鼻(ふくらふ)に赤頭巾を冠らせて、小鳥を捕ふる猨にもいふこと。これは、みづく(木菟)にせられた。一代男「赤頭巾を着せたる鼻、松桂草がくれ。兩吟一日千句」秋

獨吟集「みづく騒ぐ萩の下露、野の色も赤い頭巾やそよぐらん」あかね 赤根。茜草のこと。昔は此の根から赤黄色の染料を取つた。一代男「はじめの程は赤根など掘りてありしが」

あかべんけい 赤辨慶。道心堅固で、浮氣などない者の稱。萬文反古三「貴坊御事はつね、赤辨慶とある名を呼ばざるは、道心堅固の御身目出度存候」あかまつばいりろ 赤松梅龍。浪花にぬ

た軍談講釋の妙手で、江戸の赤松青龍軒に對した者であるといふ。戀八卦柱曆中「見るかげ細き釣行燈、太平記講尺赤松梅龍と記せしは」とあるのは、その實名を借りたのである。あがまへた 崇めた。曾根崎心中「今迄、様に様を付けあがまへた娘御に」あかまへだれ 赤前垂。紅晒の前垂。又、それをかけに、茶屋・料理屋・宿屋・遊女屋などの女中。一種の私娼。一代男三「色つくりたる女、はだには紅艷金の絹物、上にかちん染の布子、鳥糞子の二つわり左の方に結び、赤前垂して桐の引下駄をはきて(中略)あれは間屋方にはすはと申して、眉目大形なるを、東國西國の客の寢所さすため抱へて」

あから 酒の異名。飲めば顔が赤くなる義であるといふ。本朝二十不孝五先祖より酒の家に生れ、あから飲めといはれて此方、終に上戸に出合はず」あがり請ける 物價の騰貴するの待ち請けで儲ける。織留二西國米大分買込み、あがり請けたらば、太夫を根引にして「同「四十四貫目あがりを請けて、機嫌よく伊丹に歸り、親に小判の山を見すれば」

**あかりしやうじ** 明瞭子。現今の「障子」に同じ。一代男二「簾ほのかに、洗濯屋と書きしるして、あかり障子のたてこめ」  
**あがりつき** 飲み食ひする習慣のつくといふ意の敬語。松風村雨東帯鑑「一人の性によつて乳の合はざる事もある。あがりつきまで何時までも御乳を替へて見んと存じ」

**あがりなまづ** 死鯨。遊蕩などの爲めに、金銭を遣ひはたした者。色里で浪費することをぬめりといふが、其のぬめりの無くなつたものといふので、死鯨に譬へたのだといふ(色道大鑑)。

**あがりま** 揚間。風呂場で、衣服を脱いだり着たりするところ。あがりば(上場)。二代男「揚間は二間續きの甍にて寒ぎ、透し枕に十寸鏡、茶箱、提重の光りゐたり」

**あがりもの** 使へなくなつたもの。すたりもの。廢物。女腹切下「伯母さへ死ねれば科は一人に極つて、脇指はあがりもの、外に御詮議は残るまい」  
**あがりやしき** 上屋敷。犯罪人から官に沒收した宅地。最明寺殿百人以上蔵上「御勘氣、謀反の輩の、上り屋敷の明地多し」

**あか糸の茶碗** 赤色の釉で模様を畫いた茶碗。心中又は水の朔日上「あいと返事も花づきし、あか糸の茶碗手にすゑて出花一つあげましよと」

**あかをぬく** 垢を抜く。汚名をすゝぐ。心中萬年草中「こちの人、娘が垢をぬかつしやれ。うろたへて娘一人捨てさつしやるな」。五十年忌歌念佛中「勤十郎めが善惡たゞし、身の垢抜いて詫言せば、御機嫌もなほるべし」

**あかん** 阿監。宮中の女中頭。宮女の監督。國性爺合戦「御乳付の役人、其外乳母侍女阿監、役々の官女附添ひて」  
**秋風に薄の穂** (諺) 拾穂三上「お國中の男は、秋風に薄の穂、靡けてやろ」。よく靡くことの譬。

**あきがひ** 秋買。秋、物を仕入れて、冬の商ひの支度をする事。心中萬年草中「先も見えぬ秋買に、十五貫目のさきがね取り」

**あきなひがうらし** 商巧者。商法の上手なこと。又、その人。冥途の飛脚上商ひ巧者駄荷積り、江戸へも上下三度笠「あきなひがみ 商神。商家で祭る神。惠比須様。國性爺後日合戦相主「商ひ神は戎三郎」

**あきなひぐち** 商口。物を商ふ爲にする口のきき方。商品のよしあしを知り顔なる口ぶり。又、商品の效能など陳べたてる口調。男色大鑑八「よきもの人も知る事ぞと、最上人も商口を出して、萬に買物心元なし」。同「汝が見残し有るべしと俄に末社の商口、火桶は」と涼み頃賣るもかはりもの。永代藏「和國の商ひ口とて利徳を取らぬと空誓文」

**あきなひだんな** 商旦那。顧客。買ひ手。源氏烏帽子折三「年の始の商ひ旦那、随分御馳走申せや」

**商ひは草の種** (諺) 商賣は種類が多い。又、「身過は草の種」ともいふ。晝夜用心記「商ひは草の種といへり。伊勢の濱荻難波の蘆、京大阪江戸の風俗、賣買の聲まで、所によりてかはる事勿論なり」

**あきなひびやらし** 商拍子。商賣が拍子よくうまく行く事。壽門松上「二百兩から五百兩、段々儲けの商ひ拍子、千兩にするは、みつ羽の征矢」

**あきなひみやうり** 商冥利。商人の間に行はれる誓ひの詞。「商ひ冥加」といふも同意。冥利・冥加は、神佛から受ける

利益、加護。それを賭して物事を約し誓ふのである。博多小女郎波枕上「男冥利・商ひ冥利、虚言御座らぬ」天の網島上「最前は侍冥利、今は粉やの孫右衛門商ひ冥利、女房限つて此文見せず、我一人披見ひして、起請共に火に入れる。誓文に違ひはない」

**あきばら** 明腹。お産して、空虚になつた腹。孕常盤三「産み落して明腹の、常盤は死んでも構はぬこと」

**あきふところ** 空懐。抱くべき子のない懐。二代男「昨日までは子を抱きし乳母の、空懐になりて、泪兩袖を貫き」

**あくしやう** 悪性。うはきな行ひ。遊蕩。いたづら者。いたづら。淫奔。色道大鑑には「風呂・相撲・芝居・兵法・男だて、しやみ・そば切りに、ばくち・大酒」といふ、悪性の歌を擧げてゐる。油地獄下「互に忙しい際の夜き、爰へは何の用がある。悪性する年でもなし」。薩摩歌上「サア悪性に極つた。男は何者。模範破り飛入つて、二つ胴に斬り重ねぬ」  
**あくしやうがね** 悪性金。遊蕩費。淀鯉出世瀧徳上「あいつが此の前親且那の悪性金を十四貫目横取して」  
**あくしやうぐるひ** 悪性狂。遊蕩に耽け

ること。冥途の飛脚上「繼母がかりのわざくれに、悪性狂ひも出来るぞと、父御前の思案で」

**あくしやうじよ** 悪性所。遊蕩の場所。遊里。油地獄下「世間の義理は缺いても、金借つて悪性じよの拂ひして」

**あくしやうもの** 悪性者。浮氣者。いたづらもの。「悪性人」ともいふ。二枚繪草紙申「善次郎なれど悪性者、人の意見も馬の耳、餘所吹く風のふうくにて、夜ありき日ありき」

**あくしよ** 悪所。「悪性所」に同じ。「悪所場」ともいふ。一代男五「又悪所へか、颯と見て歸らう。是れ吉野、夜の花ぢやと、東口より入りて」

**あくしよおち** 悪所落。悪所に行くこと。一代女三「禮場よりすぐに、あくしよおちの内談」

**あくしよかご** 悪所駕籠。悪所へ通ふ駕籠。枕久「世物語上「浮世小路の悪所駕籠」

**あくしよがね** 悪所銀。「あくしやうがね」に同じ。二十不孝「長崎屋傳九郎として、京中の悪所銀を借出す男なり」  
**あくしよぐるひ** 悪所狂。あくしやうぐるひ(悪性狂)に同じ。天網島下「悪所

狂の身の果はかくなり行くと定りし、釋迦の教もあることか」

**あくしよぶね** 悪所船。悪所通ひの船。あくたがは 芥川。攝津國島上郡にある小川。伊勢物語に據つて、鬼の住む所として名高い。

**あくち** 小兒の口のまはりなどに出来る小さい瘡。姫山姥「主従共にあくちもきれぬ小悴ども」。あくちも切れぬとは、至つて幼少なこと。

**あくねんりき** 悪念力。おそろしい一念の力。傾城島原蛙合戦三「上ぐれば見上げ、おろせば見おろす悪念力」。

**あくめ** 悪目。悪いと見えること。悪い事情。曾我會稽山二「今朝曉の鳥鐘も一つ枕に聞いた仲。何を悪目に離別とは。同「貧しき曾我の悪目が、今日といふ今日見え初めしか」

**あぐる** あちこちとあさる意か。二代男八「あぐりしやれたる取肴、又飲みかけてよくく」の事の、三番太鼓が何時鳴つたやら」。

**あぐる** 安居院。山城國愛宕郡にあつた寺院。比叡山の東塔。竹林院の里坊であつた。今は廢址となつてゐる。蟬丸五「安居院の小聖を請じ、宇治川にて七

あ

七日魂しづめの法事をなし」

**あげ** 炬燵のやぐら(櫓)の一名。あげ。  
織留<sup>二</sup>「夜の中に爰を出て行く用意して、炬燵のあげに子を入れ、片荷に小鍋一つ」

**あげおろし** 織留<sup>六</sup>「琴もお慰みになるほどは仕ります、絹紬のあげおろしも、大かたには織り付けますと申して」。

**あげずのもん** 不開門。非常の時の外は開けない門。非常門。傾城反魂香占勝手は知らず中口の、あげずの門碎けてのけと扉をたゝき」

**あげせん** 揚銭。(一)賃銀。勞に報いる金。心中二枚繪草紙中「九軒のおろせが揚銭の、残りも今日はすつきりと、取つてくりやう二分の金」(二)遊女などを招く代。あげだ。織留<sup>三</sup>「揚銭は先銀わたしして買ひます、女郎さまは斷りなしに毎日なりとも御出なる」。二代男<sup>三</sup>「揚銭、太夫を晝夜七十四匁、格子は五十二匁なり。これは上方にて天神といふなるべし。晝ばかり二十六匁なり」(これは江戸に於てのこと)

**あげたみ** 一代男<sup>四</sup>「あげ墨といふ事は、篋子の下へ道をつけて、不首尾なればぬけきす也。」とは私娼の魂膽。

**あげちよろう** 揚女郎。「揚屋女郎」の略であらう。二代男<sup>二</sup>「近年の仕出し(中略)揚女郎にもさのみ劣らぬ姿を、一軒に五十人づつも見せかけ」

明けて奪ふも紫袂紗 論語陽貨篇「子曰、惡紫之奪朱也」に據つた句。戀八卦柱曆上「主人以春の巾着を、明けて奪ふも紫袂紗、印判そつと取出し」

**あげは帽子** 日本西玉母「對の塗笠うらに薄繪の花づくし、あげは帽子にしる帯」

**あげぶ** 揚鉢。油で揚げものにした鉢。一代男<sup>五</sup>「暮の松風あげ鉢の音、精進腹では酒も飲まれず」

**あげぼだし** 上羈絆。足を上の方に結びあげて、働かせないやうにすること。又、その物。出世景清<sup>四</sup>「七十五人して曳いたる桶にて、あげぼだしを打たせ」

**あげぼのじま** 曙縞。裾を白くしておいて、その上方を紅又は紫で、曙の空色のやうにぼかして染めるのが、「あげぼのぞめ」。そのあげぼのぞめにして縞を出したものが、曙縞である。男色大鑑

入「目に正月をさせて飾り繩の染出し浴衣、御所ぢらし、千筋、山づくし、あげぼのしま、友禪が萩の裾がき」

**あげまき** 揚卷。總角。小兒の髪のゆひ方。左右に分け揚げて巻き、雙角のやうに兩髻を結んだもの。男色大鑑<sup>六</sup>「身持ちたる者の娘と思しき、あげ巻程過ぎ、みめ姿うるはしき」。一代女<sup>二</sup>小町踊を見しに、里の總角なる振袖に太鼓の拍子」

**あげまきつけ** 總角附。鎧の名所、あげまきつけのいた。略。吉野郡女楠<sup>三</sup>「矢留り金物押附板、發傳、高紙、總角附、太刀は鳥首兵庫ぐさり」

**あげや** 揚屋。遊女を招いて遊ぶ處。一代男<sup>八</sup>「揚屋といふこと、むかし誰れかは始めて、年の若うなるたのしみ所」

**あげやいり** 揚屋入。遊女が遊女屋(置屋)から揚屋に行くこと。又、その儀式。道中。室町千疊敷<sup>二</sup>「室町殿の御所が揚屋になり、傾城を請返むと聞いた。さて、仰山な揚屋入り」

**あげやちよろう** 揚屋女郎。揚屋に招かれる遊女。揚屋に招かれるのは、遊女のうちでも一二流の上妓であつたので特にかく呼んだ。吉原で、「梅女郎」に次ぐ下等の遊女を稱した時代もあるが、後には一流の遊女のみを稱したといふ(笑ふ女の説)。雪女五枚羽子板<sup>初春</sup>

は、篋子の下へ道をつけて、不首尾なればぬけきす也。」とは私娼の魂膽。



「こゝに名に立つ色廓揚屋女郎の厄拂。尙、「あげちよらう」の條参照。

**あげやのどとけ** 揚屋の届。揚屋への附届。「つけとどけ」は贈物、心づけの金銭。二十不孝「久しく埋もれたる揚屋のどとけ、野郎の花代」

**あけらほん** 気がぬけたやうに見えるさま。大矢数序「あけらほんと雁首をのべて思ふに」

**あげる** 揚。遊女を招いて遊ぶことから轉じて、金銭を「つかひはたす」、「つぎ込む」の意となる。心中二枚繪草紙申「新地ぐるひに身代あげ、方々の借錢」

**あご** 網具。網の道具。松風村雨東帶鑑「釣竿擔げ下部共、網具取持たせ來つたり」

**あこぎ** 阿漕。あつかましい。どこまでも、おしつけがましい。夕霧阿波鳴渡中「心亂れて慮外の段御免遊ばし、あこぎな申しことなれど、お侍のお慈悲に、父かというて、私に抱付いて下されませ」。次の二條参照。

**あこぎながら** 堀川波鼓上「忝ない御情、此上はあこぎながら、逆もの事に今ここで、ちよつと〜と總りしを」

**あこぎに** しば〜。ひたすらに。丹波

あ

與作下「阿漕の海士の、あこぎにも、過ぎにし方を思ひ出で」。元來、阿漕は伊勢國阿濃津郡の東方にある殺生禁斷の地。古今六帖「あふことを阿漕が鳥に引く網の、たび重ならば人も知りなん」  
**あこや** 阿古屋。京都五條坂にみたといふ名高い遊女。出世景清三「清水坂の片ほとりに、阿古屋といへる遊君に、かりそめぶしのかり枕」

**罽を喰ひちがふ** (諺)見込みがちがふ。事が齟齬する。生玉心中上「こりや酒屋の九平次、醬油屋の徳兵衛をだました格を出したらば、ちつと頤を喰ひちがよう。ちよつと手をつけるが最期ぢやぞ長作」

**あさがけ** 朝早く出がけの時。雪女五枚羽子板上「和主如きの相手に、騎馬を向けるまでもなし。左衛門が足輕十騎ばかり差向けば、朝がけに擒つて洛中を引渡し」

**あざがけ** 博奕の語。大職冠四「そろを脇から二くすじの、三馬あざがけしのごつ、火をくわつ〜と擡立て」

**「めくり札」**の青札の一を「あざ」といふ、この「あざがけ」と關係があるか。又「馬」は「メクリ札」の青札の十一のこ

と。それを承けて「あざがけ」(前條の語)と洒落たか。

**朝がけの駄賃** (諺)朝は馬の元氣よく、重荷も苦にならぬ。物事のたやすい譬。天智天皇五「氣づかひなざるな、五人や十人は朝がけの駄賃」

**あさがほやき** 朝顔焼。朝顔の花の形に焼いたものであらう。男色大鑑七「簞笥の下より朝顔焼の天日出して是れまゐれのよし」

**あさきど** 朝木戸。朝早く芝居の木戸を開けること。當時の芝居は開場が早かつた。心中二枚繪草紙上「戌の顔見世、朝木戸をあけぼの深く提燈の」

**あさくさじま** 淺草縞。織物の名。役者などが着たものであることは、次の例で知られる。男色大鑑五「それまでは舞臺衣裳も唐木綿に更紗の置きがた(中略)淺草縞に紫つくれば見る人驚き、此上又も有るまじきと沙汰する程なりしに、近年の唐織金入毛類を着る事、いかに役者なればとて身の上知らぬぞかし」

**あさくづつ** 淺沓。漆塗桐製の上沓。(深沓に對する)裝束着用の時に用ひる。松風村雨東帶鑑三「髻を取つて引伏せ、履

七

あ

いたる淺沓碎けてのけと、腰の番をさ  
んぐに踏付け給ふ」

**あさごみ** 朝込。早朝遊里に入ること。

一代男七「あけそむるより朝ごみの客  
は、中の島の鹽屋の宇右衛門手代」

**あさじまふり** 朝事參。一向宗で朝早く  
御寺に參ること。陰曆十月の「お取越」

といふ親鸞忌のときも、朝行ふのを「お  
あさじ」など今も言つてゐる。今宮心  
中中「御堂のあさじ參りに、女子ども

起して、苦勞かけては後生にならぬと」

**あさづま** 淺棧。棧の端。二代男二「あづ  
まからげに、淺妻の濡るゝを厭はず」

**あさづま** 朝妻。近江國琵琶湖の東岸に  
ある入江。又、その入江の渡船の中で

色を賣つた浮かれ女。一代男五「本朝遊  
女の始まりは江州の朝妻、播州の室津  
より事起りて」

**あさづまぶね** 朝妻船。前條「あさづま」の  
ことを載せる船、又、その「あさづま」の  
こと。

**あさはら** 朝腹。朝食前のすきはら。曾

我會稽山「朝比奈も朝腹に、大力の母  
あぐみ果て」。「朝腹の丸薬」は腹に溜  
らぬこと、又容易なことの譬。

**あさぶさ** 朝、子供の目を覺したとき食

ふ菓子などをいふ。朝物(あさぶち)の  
轉訛か。天の網島中「二人の子供が朝ぶ  
さ前、忘れず必ず、くは山飲ませて下  
され」

**あさま** 淺はか。簡單。粗略。一代男七

「爰で外はよろづ淺まになりぬ。更け過  
ぎて床取るにも、三つ布圍か夜着、  
枕も常ならず、寝巻もありといふ物も  
なく」

**あさまる** 悲丸。平家重實の名劍。出世

景清「宗盛公よりたび給ふ、悲丸とい  
ふ名劍を景清に賜はり」

**あさみやく** 朝脈。朝、醫師が、病人の  
脈を見ること。朝の診察。織留「宵に

薬出し置き、朝脈に見舞へば、きのふ  
のお薬たべさせますと、腹にもやつき  
が出来まして、日まひ心に足が冷えま  
して、兎角物を申しませぬといふ。日  
本永代藏三「宿にあれば外聞あしく、毎

日朝脈の時分より立ち出でて、四の宮  
の繪馬をながめ」

**あさもよひ** 朝食の準備。或は朝の食事

前後の光景をも一般的にいふか。堀川  
波鼓下「京童の口ずさみ、家々ごとに朝  
もよひ、萬に心もみ瓜を刻む音さへ比  
叡の山」。松風村雨東帶鑑四「池田伊丹

の朝もよひ、賤の山人打連れて、さん  
さ露にしをるゝ眞柴探る」

**あさぶひす** 朝惠比須。朝早く惠比須様

を拜みに行くこと。永代藏三「二十年こ  
のかた、朝ふびすに參り給ふに、當年  
は日の入り」

**あさを握る** 博奕の語。「あさ」はめくり

カルタの青札の一のこと。最優等の札  
の一種。「握る」とは、その札を持つて  
ゐること。あさを握つてゐることは、  
利得になることで、うれしい物盡しに

も數へられる(賭博史)。轉じて、果報。  
利得の種を握つて、それを取逃さぬや  
うにする譬と見られる。雪女五枚羽子

板中「あさを握つて押せ、押込め乗  
込め米俵、でつかり踏まへた大黒々々、  
大黒舞と囃されて」とあるは、俵を結

ふあざ(糾なは)ともかけたものであら  
う。

**あし** 足。以上。金錢などの端數。心中

又は米の朝日上「銀を持つてござつた  
か、何程持つてござつた、四兩あしも  
ござるか」

**あじ** 阿字。梵語の第一字母。眞言宗で

は、この一字が、一切萬有の本來不生  
不滅なる玄理を示してゐると説く。こ

の理を觀じて悟りの法とするのが「阿字觀」である。

**阿字の一刀** 阿字觀の功力は、萬有本來の不生不滅の妙理を悟らしめて一切の煩惱の束縛を斷切るといふので刀に譬へたのである。夕霧阿波鳴渡相の山「只今某が切る髮は阿字の一刀、彌陀の利劍を以て、煩惱のきつな」

**阿字本不生** あじほんふしやう。阿字は、萬有の不生不滅の理を顯してゐるといふ義。不生不滅で、即ち一切は空に歸すること。心中萬年草下「分けて賜はる骨肉を、一つに返す阿字本不生、阿字の一刀是なりと、のんどにぐつと突立て」

**あしあらひ** 足洗。賤しい者を罵つていふ。人の足を洗ふやうな賤業の者。一説、賤業をやめることを「足を洗ふ」といふので、その足を洗つた者、成りあがり者といふ。井筒業平河内通三「なんと金吾、足洗ひ、成りあがりの手際を見たか」

**足利様の染手綱** だんだら染の手綱。  
**あしかがわん** 足利椀。下野國足利から産する椀であらう。源氏冷泉節上「辨當合子の足利椀、盞をかへての雪見酒」

あ

**あしくぶつ** 阿闍佛。光明皇后が千人の垢を洗はうと發願されたとき、癩病患者に化して皇后の信念を試みられたといふ佛。金剛界曼荼羅の中央、大日如来の東邊におはす。油地獄中「あたまの病は愛宕權現、足の病は阿闍佛」

**あししろ** 足代。あしがかり。あしがかり。轉じて、「したごしらへ」、「準備」などの意。新可笑記三「廣き御家中なれば殘らず相手になり、指南もなりがたく、稽古の足代と申しあぐれば」

**あしつき** 足附。あしつきをしき（足附折敷）の略。「あしうちをしき」ともいつて、普通の「をしき」に脚をうちつけたもの。あしうち。一代男「祇園細工のあしつきに、杉板につけて燒き



あしつき

たると、」

**あしてかげ** 足手かげ。足や手の陰。足や手のかげで見えない所。織留三「惣じて諸國の城下、又は入舟の湊などは、人の足手かげにて、さまざま「すぎはひの種もあるぞかし」即ち、こま〜とした雑仕事は、人の側へ行けばあるといふのである。

**あしふいご** 足鞠。足で柄を出入させて

風を起すやうにしてあるふいご。心中又は水の剃目上「横座に直つて足鞠、地鐵打ちくべ吹き立て」

**あしやがま** 葦屋釜。筑前國遠賀郡葦屋村から鑄出した釜。土佐光信・僧雪舟などの下繪で、松竹梅などの模様があり、茶家で珍重せられたもの。傾城反魂香中「今は團扇の繪あしや釜の下繪に露命をつなぎ」

**あじやぜたいし** 阿闍世太子。釋尊の法敵なる提婆達多に歸依し、その勧めによつて父王を弑し、また母后を幽して王位に即いたが、後には釋尊の感化によつて往事を懺悔し、佛教に歸依して功を立てた。孕常盤三「斯かる敵を身に持ちし、母が因果は何事ぞ。異國には阿闍世太子、婆羅門王を子に持ちし、昔語を聞きもする」。二十不孝三「天竺阿闍世、唐土の惡王にも劣らじ」

**あじやら** かりそめなこと。又、おどけたこと。たはむれ。埒もないこと。六日飛脚「あるい癖寝たか起きたか枕敷屋、あまりあじやらの深い篠竹」。假名手本忠臣蔵九「夫婦仲、睦じいとてあじやらにも、愷氣ばして去らるゝな」

無

あ

禮講などいふ類。兩吟一千千句「秋の夜はあじやらこうして膳を出す、喰はれうものか空のもち月」

あじろ 網代。織物の名。網代（薄く〜

いだ槍や竹などで、斜や縦横に編んだもの）のやうな模様があるもの。二代男八「其の時はやればとて、孔雀織網代、弁形、やうぎも和國などの大袖にて、女郎買とはいはれじ」

飛鳥川の茶入 焼物製の茶入の一種。壺形で口造り捻り返し薄手に、姿を花奢に細工したもの。薄赤色で土器に見る様な軟かみがある。地薬は濃紫色で一面に梨地がある。上薬を黒くし、肩を取巻いたものを肩黒手と稱して特に賞翫したといふ。政一朝臣といふ人が若い時にこの茶器を泉州堺で初めて見、其後伏見でまたそれを見た時に、大いに古くなつてゐたので、世の中は何か常なる飛鳥川といふ例の歌の心を取つて、飛鳥川と命名したのだといふ（以上、寛文十二年刊「茶器辨玉集」に據る）。五人女五「柄鮫、青磁の道具かぎりもなく、飛鳥川の茶入、かやうの類ごろつきてめげるもかまはず」。二代男五「家に久じき飛鳥川の茶入を、妹が轆轤

引にしづめ」

あすかるとの 飛鳥井殿。蹴鞠の名家。雅經以來累世蹴鞠の式を掌つてゐたが、飛鳥井雅庸に至つて、更に徳川家康に請うて、蹴鞠式の印章を受けた。雅庸は、歌人雅世の次子で、元和元年に卒した、年四十七。大下馬四「飛鳥井殿のまぼしづけの鞠を見て」。男色大鑑

「ある暮風絶えて鞠垣の柳風も動かず（中略）日比は家中一番の上手、飛鳥井の家にも生るべき人と沙汰いたせしに」

あせりかす おだてる。煽動する。織留

六「其子が我と手を口へはこび、笑顔せしとて、隣の驥たちがあせらかして、果報なる耳付、仕合せのそなはりし目の中と、一つ〜ほめそやせば、ふたりは死んでも此子が命よきて」

あそびどり 遊寺。世間寺。浮世寺などと同じ。男色大鑑入「せめては若道供養の爲と思ひ立ち、延紙にて若衆千鉢張貫にこしらへ、嵯峨の遊び寺に納め置きぬ」

あそびとり はしちよらう（端女郎）の別名。

あそふのまつわか 麻生（あさふ）の松

若。盜賊の名。謡曲「熊坂」に「さて北國には越前の、麻生の松若三國の九郎」とある。傾城反魂番上「あそふの松若物見の松」

あた（接頭語）「いま〜しい」、「憎らしい」、「いやに」などの意。すべて心の平かでない時にいろ〜の語につけていふ。

あたかしましい 大職冠三「あた喧しいうぬめら、つまみ出してくれん」

あたしただるい 二枚繪草紙中「市様まゐる身よりとは、はて扱々、あた舌だるい、皆の手前面目ない」

あた面倒な 日本振袖始三「エエあた面倒なと振上ぐる劔の影」。あたぶのわるい「あた鈍な」あた見られぬ「あたせいばる」「あた開慾な」など、此の他にも用例が多い。

あたどち 徒口。むだくち。でたらめ言葉。天の網鳥上「ほでてん〜ご、念佛に仇口噛み交せて」

あたけびくに 賣春を業とした比丘尼の一種。「往來は木綿服なれども、中宿にては紗綾縮緬鳥へ丈の紅襦袢を着す。夏冬黒ちりめんの投頭巾を着す、尤も長し。櫛笄さ〜ぬ遊女にひとしく、け

しからぬ有様也。其の頃(享保九年)淺草門跡の脇法恩寺前にも中宿あり、是は劣れり。宿は神田多町より出る。又、深川新大橋向より出る、安宅丸の跡の町家なり。是をあたけ比丘尼と云ふ、下品なり。(我衣)

**あたけまる** 阿武丸。安宅丸。將軍徳川家光の時、相模國三崎で造らせた船。龍頭鵜首を裝ひ、大いさ百八十尺。銅で包み、三重の櫓を設け、五色の幔幕を廻し、櫓の數二百挺。螺太鼓の合圖で進退せしめるといふ船であつたが、

大き過ぎて自由に動かず、元和年中、毀つて深川に埋めた。前條に見える安宅町はその跡である。大矢數二「我が物か連も天下の月の影、阿武丸には初あらし吹く」

**あたごちまき** 愛宕糍。山國愛宕邊で名産とする糍。本朝三國誌一「あたご糍の、じつと締まつた御二人中」

**あたごはくさん** 愛宕白山。あたごびやくさんを現はすにも用ひる。山城の愛宕現權と加賀の白山の神名とを呼びあげる心である。百日會我一「某が拜受の御馬、半分切取るとは、愛宕白山ゆびも

ささば、堪忍せぬ」  
**あだしがはら** 仇しが原。墓場。「あだし野」は僧惠空の説(鈴木弘恭訂正増補、徒然草文段抄)で、愛宕山麓の地名とされてゐるが、やはり墓地である。曾根崎心中書行「死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の籍」

**あだしぐさ** 仇草。仇のたね。譬となるもの。槍の權三書行「しんき」の空悟氣、終に我身のあだし草、世のそしり草」

**あだじやうり** 徒淨瑠璃。口から出まかせの淨瑠璃。天の網島上「浮かれぞめきのあだ淨瑠璃、役者物眞似、納屋端唄」

**あたたかな** 温度の「あたたか」、財布の「豊か」、愛情の「こまやか」、心持の「おだやか」の外に、「よい氣な」「人を見くびつた」といふ意がある。この最後の例、孕常盤二「ヤア温かな、頼むとはどの口で。ちと利口ぶり出さぬかい。

ならぬ」  
**あだて** めあて。見込み。たのみ。あてど。心中双は氷の期日上「さま」思案

して見ても、今で請出すあだてはなし。丹波與作中「牢を出しは出したれども、何をあだてに何とせう」

**あだなや** 「あどだてなしや」の意。一代女三「我れ後帯は嫌ひなれども(中略)よろづ初心にして、雪といふ物には何になつてあの如くに降りますと、家さばかるゝお嬢様に問へば、もまた其年も年なるに、あだなや親の懐育ちぞと、其後はよろづ心を許して使はれる」

**あだぼれ** 仇惚。かりそめの懸想。遂げ得ないで終る戀。一寸した戀仲。置土産四「此程あだぼれ遊ばし、是非に誓紙書くとて、まことらしくいぢられ」。松風村雨東帶鑑三「石車に乗つて仇惚するは、男の屑の葛餅、皆一口は食ふけれど、あとから割ける生壁の、釘ごたへせぬ戀ぞかし」

**あたま** 物事の初。出世瀧徳下「是はく吾妻がそめたよといとは、あたまでよいこと聞きさぬと」。博多小女郎浪枕上「知らずは知らぬと、あたまからいうたがよい」。傾城反魂香申「是迄窺ひ参りが、あたまのかゝりすがどうもなく、思はず慮外致せしなり」  
**あたまがくし** 頭隠。頭巾の一種。比丘

あ

「比丘尼は大方淺黄の木綿布子に、龍門の中幅帯前結びにして、黒羽二重のあたまくし、深江のお七ざしの加賀笠。あたまがち、頭勝。おごり高ぶるこそ。驕慢。曾我扇八景上「主の威勢を甲に着て、下々まであたまがち憎や〜そが殿原の」

頭を割らず 心を碎いて思案する。武道傳來記六「今それをいうて埒のあく事か、とかく此返事の仕やうはと頭を割らして、用助やう〜今分別出たりといふに」

あたらし 惜しい。一代男五「終に柴屋町見ぬことあたらし」。同「此二三年も来て亭主見しらぬもあたらしい」。事らしい。あんまりな事。松風村雨束帯鑑三「ヤアこれは新しい。此の憂き苦勞は何故ぞ。廻り逢ふ爲ばかり。一寸も放さぬぞ。サア此方へ」

あたらしや 新屋。京都島原の遊女屋。新屋の金太夫 置土置一「私も新屋の金太夫といはれしもの、好いた男ならば、命が何の惜しかる」  
新屋の小太夫 二代男二「そのかみ新屋の小太夫、平野橋の源といふ人、

二年餘、一日も他の男には見せず。金太夫・小太夫は、何れも名高い遊女。好色由來揃一「寛永十五年島原陣の頃、今の朱雀野に移さる。是によつて此里を島原とは名付しとなり。その後の出來物、八千代、ふぢゑ、三笠、かほる、小太夫、續で金山、金太夫、(中略)これらは本朝美人揃に載せたり」

あたりあひ 當合。ありあひ。ありあはせの物。俗つれ〜「あたりあひの枕引寄せ、大軒して一日の酔狂夢にや見るらん」

あぢ 味。一風變つてゐること。おつなこと。をかしたること。二代男二「七番に懸けたるは長崎の花鳥なり、變つて風月のあぢな所、奴三笠が生かへて」。槍權三上「心易い朋友なれども、申憎いが味な眞實で、むさと物のいはれぬ仁」。二うまく行くこと。うまいとこれ。心中又は水の朔日上「ちと借錢を輕め心爲、あぢな商ひあらんで」。二枚繪草紙中「親仁が手前をあぢにして、末永う出よう爲、少しの銀を延引した」。松風村雨束帯鑑一「宮様抱いた抱き心、あぢへ往かぬも理りや」

あぢまやか 味あること。十分に旨味あること。櫻陰比事五「兩方共に聞合せ味まやかに取持ち」

あぢらこちら 彼方此方。反對な。あぢこち。逆な。織留六「あぢらこちらなる事を申して、さま〜に難義させ」  
あつかはづら 厚皮面。鐵面皮。恥ぢしらず。長町女腹切上「おやまやら惣縁やら、厚かはづらな、晝日中、大阪の伯母で候と」

あつかひ 扱。調停。仲裁。とりはからひ。一代男五「出家社人のあつかひをも聞かざる者ども、いかにしても」。五十年忌歌念佛上「男と女子と喧嘩して濱納屋の下で組んづ轉んづしてゐたを、いくはなか見て來た。扱ひになりしやら、錢をついたも慥かに見た」

あつかぶ 扱。調停する。仲裁する。一代男六「おの〜懸合、義理をつめ、至極にあつかひ、其後太夫を入侍る。同七「めい〜取付き、さま〜あつかへども聞かず」  
あづかりてがた 預手形。預り證文。今の約束手形(債務者が債權者に對して、一定の時期に一定の金額を無條件にて支拂ふべきことを誓約したもの)の類。

日本永代蔵「世上に金銀の取りやりには預り手形に請判、随に何時なりとも御用次第と相定めし事さへ」

**預り物は半分** (諺)「預り主は半分」ともいふ。物を預れば、半分は我が物であるとの意。壽の門松下「預る物は半分の、主は忘れてゐさんすか。(中略)わしや百迄も忘りやせぬ」

**あづきをり** 小豆織(あづきおり)。赤と藍とで小さい格子縞を織り出した布。淀鯉出世瀧徳上「ころしも初冬のこのもちあづきをりのべんがら島」

**あつさ** 苦しき。困窮のあまり。出世瀧徳上「新七が言ひわけなく、身のあつさに斬つたと拵手前のふみかぶり」

**あづさ** 梓。梓弓の略。特に、口寄せの時に神子(巫女)の用ひるもの。



新可笑記「神子を招き亂人の様子を内證にて言ひ合め梓にかけて呼びいだす」

春の日「かほ懐に梓聞きゐる(雨桐)」  
**あつたほこしゆもない** 「あつた」は接頭

あづさ

語「あた」の轉訛「ほこしゆもない」は、つまらない、ばか／＼しい、引合はないなどの意。それを強めて、あつたほこしゆもないといふ。「ほつこしゆもない」参照。丹波與作上「やれ／＼あり様たちは、あつたほこしゆもない。(中略)人呼びまはつて何でやる」

**あつたら口に風引かす** (諺)折角口を出して物を言つた甲斐がない。無用の口に風引かす」ともいふ。

**あづち** 射塚。土を積みあげて、的をかける所。最明寺殿百人上臈上「一族集めあづちを射て、勝負を樂む射塚の前」

**あつち織** 厚地織か。あつち(彼方)織で、外國からの舶來の織物か。「一代男」「あつち織の中幅前にむすび」

**あつちくに** 彼方國。「遠くの外國。」あつちの世。死後行くべき國。大矢數「孔子の嘆き夢の春の夜、あつち國飛びそこなひの胡蝶あり、阿闍陀流の行方の風」

**あつちもの** 彼方物。「外國の人又は品。」主として阿闍陀人、或はその持ち來つた物などをいふ。大矢數「五月に入月にあつち物宿おとづれば、野邊はしゆちんの縫つめの色」。「死ぬと定つたもの。あつちの世へ行く者。快復の見込みない患者。」

傾城酒呑童子「次第々々に病もおもり、金の鎖で繋いでも、此度はあつち物と醫者様たちのお話し」

**あつびん** 厚鬢。頭の中央から額へかけて、狭く剃り落し、兩方の鬢髪を廣く、ふさ／＼と結つた髪。國性爺合戦「片はし剃るやらこぼつやら、糸鬢・厚鬢、剃刀次第」

**あつぶさ** 厚總。絲の總を厚く飾りとした馬の韁(おしかけ、馬の頭・胸脛にかける緒)。百日曾我「五色のあつぶさ馬よろひ」

**あづまからげ** 裾の端をかきあげて、帯に挿むこと。ちん／＼ばしより。あづまはしより。二代男「浦珍らかに女郎は、藤屋のあづまからげに、淺妻のぬゝを厭はず」源氏烏帽子折「今若はおとなしく、あづまからげに脚絆しめ」

**あづまぢやうじや** 東長者。東國の長者、東國での財産家といふ意であらう。永代蔵「や／＼百兩に積りて、それより次第に東長者となりぬ」

**あづまもの** 東者。東國人。東人(あづまびと)。吉野忠信「某はよろづ無骨のあづま者」

**あつめじる** 集汁。大根・牛蒡・芋・豆腐な

あ

ど入れた汁。「けんちやんじる」の類か。胸算用ニ「箸持ちながら集汁咽喉を通らず、今日の寄合に口惜しき事を聞きけると」

あてあてしく あてつけがましく。あてこするやうに。二代男六「是御法師様(中略)、人間の命は何とて救ひましまさぬぞ、あてくしく申せば」

あてこと 當言。(→あてこすり。あてくち。源氏烏帽子折「堪忍ならぬ當言し、尻目に睨む眼より涙を流しける」。(→それとなく遠まはしにいふ言。壽門松中「將基にことよせ、金銀出してあつかひ、與次兵衛命助けよといふあてこと、合點せぬお主でなし」。

あてみ 當身。人の急所に、拳或は肩尖などを突き當てて、一時氣絶せしめること。戀八卦柱簷下「悴の時より、柔術。當身を稽古して、すはと云はば、腕は細くとも、お侍の五人や七人は」

あとおひ 後篋。背に負ふ篋。普通には、單に篋といふ。行脚僧・山伏などが、佛具・衣服・書物・食器などを入れて負うて歩くもの。箱の形して脚がある。碁盤太平記「あと篋負うたる高野ひじり」

あとかた 後肩。輿・駕籠などの後方をか

つぐもの。「さきかた」の對。あとごし(後興)といふ語もある。源氏冷泉節上「よい／＼おのれ先肩昇け、後肩はこの法眼」

あとしき 跡式。家督を相続すること。遺産。織留「死にさまに看病おろそかにいたさぬは、跡式の望みゆるゑなり」あとしきさうろん 跡式争論。遺産争ひ。家督争ひ。雙生隅田川三「下々の跡式争論の様に、見苦しき悪口・雜言」

あとじやうり 「あとじより」ともいふ。あとじさり。後退。後へ退くこと。生玉心中「表へ出づれば嘉平次は、跡じやうりして入替り」。吉野都女楠「いとしかはいといはんした、言の葉はうそかいな。ヲ、しんき跡じよりさんすは早や秋風か」

あとごしらす あとをとらせる。家督の後をつがせる。五人女五「女は後夫のせんさくを耳にかけ、其死人の弟をすぐ跡じらすなど」

あとじり 跡尻。吉原の遊廓で、見世と勝手との間を仕切つて障子を立てたところ。番頭と遣手の居る處。松樓私語「もし用あれば跡尻へことわりて出る」

あとつき 跡附。太鼓持の異名。幫間。

あとつけ 跡付。道中馬で、乗客の後方にその荷物をつけること。又、その荷物。武道傳來記六「國を出さまに親より賜はりし新羅琴跡付に長國國宗の大小はなさず」

あとつけまくら 跡付枕。あとつけ(跡付)の荷を枕とすること。新可笑記「快くまどろみ、跡付枕に夢も結ばぬ程過ぎて」

あとつめる 後詰。廓言葉で、明朝まで買ひ切ることをいふ。天の綱島上「ム、そでない／＼氣遣ひなし。跡詰めてしつぼりと小春様、したじる櫛の生醬油」

あどなし あどけない。無邪氣なさまにいふ。阿波鳴渡中「おれにも大きな太夫買うて下されと、あどなき詞に、腰元共氣の毒がり」

あとへん ことの済んだ後。後の祭。生玉心中「ア、是も跡へん、今云うて返らぬこと」油地獄下「是はしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が参り次第」

あとめろん 跡目論。あとしきさうろん(跡式争論)。相續あらそひ。あないち 穴一。攤錢。子供が錢で行ふ賭けごと遊び。路上に小穴を掘つて、其の中へ錢を投込めば勝となる。單に



あ

路上に線を引いて投入れもする。「あなうち」は「あなうち」の轉であらう。昔は「穴印地」「穴ぼん」「意錢」「キゾ」「むさし」「かんきり」「六道」などいつた。地方によつては、お江戸、けし、筋打、ロクなどいひ、形式も少し異つてゐた。後には、錢のかはり、陶製の假面、蝶螺の蓋、キシヤゴ、むくろじでも行はれ、面てう、紋打などとも言つた。(賭博史に據る)百日曾我三「かぶる共は今に攤錢しますか」。心中萬年草上「猿袋はおれに下され、巾著にして穴市のつぶ入れます」

**あなぐらや** 穴藏屋。穴藏(地中に穴を掘つて倉のやうに物を藏する)を掘ることを業とする人。晝夜用心記四「むかし牛込近きあたりに、泥鍔右衛門とて上手なる穴藏屋あり」

**穴の端近し** 年老いること。「穴のはたを覗きかゝり」などともいふ。一代女四「何事も若い時、年寄つてはならぬもの



ちいなるあ

ぞ、親仁も科でない」と、穴の端近き無常觀じ行くに」

**あなむしやま** 穴蟲山。大和河内の國竊、笠置に近い山。

**あなもん** 穴門。穴のやうな低い小さい門。築地・石垣などを穿つて作る。新可笑記「常は明かすの穴門を、一人づつ通されしは、身に罪なくても心地よからず」。男色大鑑一「穴門のきびしきに合ひかぎを拵へ、闇にも林の星を怨み」

**あにじやう** 兄上。兄さま。薩摩方言。今、「あんによ」といふ。平家女驍馬三「康頼様は兄じやう、俊寛様はてゝ様と拜みたい」

**あぬまい** あるまい。吉野都女楠二「只今かやうの責め念佛に逢ふことも、出家の身にはあぬまいこと、あぬまい、あぬまい、あぬまいだ」。但しこれは、「南無まいだ」のもぢり。

**あねざと** 姉里。遊女の居る里。遊廓。雪女五枚羽子板中「嵐が雪をもつて北山東山、西に姉里戀廓。正月買の初君の」

**あねぢよらう** 姉女郎。姉分の女郎。傾城反魂香中「姉女郎や傍輩に、賣り負けまいぞ勝山と、名をかへ風を變へける

**あのさん** 彼様。廓詞。あのお方。あの人。生玉心中下「兄弟の契約して、あのさん便りに勤めたに」。淀鯉出世瀧徳下「あのさんは八幡の人、八幡に鯉はあるまいが」

**あののもの** 何のかのといふこと。あれやこれやと文句をいふこと。薩摩歌下「情なや疎ましや。あののものが喧しい。ちよつと戻つてさらりつと、埒明けて來ませうか」

**あはあはと** はら〜と。危険なことに對して心配して發する聲。百日曾我三「首尾はあは〜と思ひし故、是痞へが上つた」

**あはうぐるひ** 阿房狂。ばかぐるひ。放蕩。耽溺。天網島中「阿房狂ひする者の起請誓紙は、方々先々書出し程書きちらす」

**あはうじに** 阿房死。阿波鳴渡上「この雪が傾城に愴氣して、阿房死といはれては、いよ〜男の名を出す、と留るも殿御を思ふ故」

**あはうばらひ** 阿呆拂。武士の兩刀を奪つて追放する刑。阿波鳴渡上「殿様の御耳に立てば、よい仕合せで御改易、阿

呆拂か切腹か、死しても悪名消えばこそ」

**あはらせつ** 阿防羅刹。地獄の獄卒。

牛頭・馬頭の鬼、手に剛鐵劍を持ち、脚には蹄がある。孕常盤三「犯人遅しといふ奈落、牛頭馬頭の阿防羅刹、惡劫無盡の罪人待つ」

**あはらちぎ** 阿房律義。馬鹿正直。

**あはざ** 阿波座。大阪の廓、新町の通の名。二代男五「残る物とては珊瑚珠許りあるを(中略)銀三貫目に賣りて、阿波座に通ひ」

**あはざがらす** 阿波座烏。前條にいふ新町の阿波座にしばし行く、しかも金がない、ひやかしの客。攝陽落穂集に「あわざがらすが新町に行てかねももたずにかをくといへる事、人口に残れり」とあり、紀海音の新百人一首に「廓四筋を毎夜さざめく。とかくけんくわをしよさいにぞする。夜の目さの目もあはざの烏」とある。一説に阿波座といふ人形芝居に、常に出入して、見料を出さないでも誰も咎める者のない輩のあだな(燕居雜話)といふ。出世瀧徳上「九軒阿波座の野良鳥、月夜はなほか闇の夜も」

**あはしまどの** 阿波島殿。次條に同じ。

一代男三「あは島殿の若しも妹かと思はれし」

**あはしまのかみ** 阿波島神。淡島神。紀伊國名草郡加太神社の祭神、少彦名神であるといふ。加太はもと住吉神社の領であつたので、俗に、この神を住吉明神の妃神とし、婦人の病に靈驗があると信ぜられてゐる。淡島さま。物種集上「小便に腰より下やしたすらん、飲み過す茶のあはしまの神」。一代男四「夕暮は、あはしまの女神思ひやり、ながめにつづく山良の戸、戀の道かな」

**あはせゆぐ** 裕湯具。裕にこしらへた湯具。裏をつけた湯具。ゆぐ(湯具)参照。俗つれん「白き合湯具の裾に鉛のしづを掛け」

**あはだぐち** 粟田口。京都三條通白河橋の東、刑場のあつた所。胸算用四「おどれは又人賣の請でな、同罪に粟田口へ馬に乗りて行くわいな」。出世瀧徳上「科人は惣兵衛一味のあひずり十人餘あり、粟田口に獄手(阿和手)の森。二代男七「反魂香を焼きて、世に亡き姿を見しこと、本朝にも相州の阿和手の森

にて例あり」。又、尾張國熱田(下津の南)にも同名の森がある。  
**あはれかし** あはれ(感嘆詞)に更に「かし」といふ感嘆詞をついた語。あゝ、どうぞして。曾我會稽山四「あはれかし龜菊に逢ひたい事や」

**あはれぐひ** 暴食。武道傳來記八「堪忍せざる若者命惜しからずと、胸鼓焼きかしらまで餘さず暴食の中に」

**あはれぐみ** 放埒組。暴力に訴へて物を掠奪する盗人の群。二十不孝三「岸の姫松の邊にて、夜も拂曉なるに、此所放埒組後より八五郎を斬りて、葛籠を手に持ちて、阿波野に隠れぬ」

**あひ相**。「あい」の條を見よ。

**あひあひ** 相合。相共にすること、又その物にいふ。共同のもの。

**あひあひうし** 相合牛。大矢數二「女月やあい合牛をひいて行く」。同三「相あひ牛の時参りする、思ひの火燃えて見せうか宮所」

**あひあひぎせる** 相合煙管。二人して一つの煙管を使ふこと。丹波與作下「手を引きあうてゆるくと、歩みなぐさむ夕暮は、一はの火繩に火をつけて、相合ぎせる思ひ草」

にて例あり」。又、尾張國熱田(下津の南)にも同名の森がある。  
**あはれかし** あはれ(感嘆詞)に更に「かし」といふ感嘆詞をついた語。あゝ、どうぞして。曾我會稽山四「あはれかし龜菊に逢ひたい事や」

あひあひぐし 相合櫛。數人して一つ櫛

を使ふこと。又、その櫛。源氏十二段  
長生鳥寮「心許りの湯化粧と（中略）」

あひく櫛の水鏡

あひあひごたつ 相合炬燵。一つ炬燵に

二人であたること。冥途の飛脚相合「冷  
えたる足を太股に、相合炬燵相輿の、  
駕籠の息杖」

あひいしや 合醫者。かゝりつけの、よ

く患者の身になつた投薬をする醫  
者。源氏冷泉節上「生田法眼春樂は姫が  
合醫者、殊に領内の佳人、内外共に心  
安し」

あひえんきえん 合縁奇縁。愛縁機縁あ

いえんきえん」といふ佛語から轉じた  
語。即ち、合ふも合はぬ縁によるとい  
ふ意から、不思議な縁といふ意になつ  
た。合愛奇愛あひあひえんきえんともい  
ふ。卯月の潤色中「如何なる合縁奇縁に  
や、親も及ばぬ御厚恩」

あひおもひぐさ 相思草。煙草のこと。

曾根崎心中「通る煙管に煙ゆる火も、  
道の慰み熱からず、吹きて亂るゝ薄煙、  
空に消えては是れも亦、行衛も知らぬ  
相思草」

あひがしや 合貸家。同じ家主の貸家。

又、それに住む仲間。胸算用「この

合貸家六七軒、何として年をとる事ぞ」

あひぎん 間銀。口錢。手數料。あひせ

ん（間錢）ともいふ。胸算用「毎年の暮  
に貸入れの肝煎して、この間銀を取り」

あひけん 「あいけん」を見よ。

あひごし 合輿。一つの輿に二人相共に  
乗ること。松風村雨束帶鑑「はるや錦  
の轡に、宮を抱きてあひごしの、前驅  
は華族の公達」

あひさし 相差。互に相手の脇へ手をさ

し込んで取組む相撲の形。

あひし 相仕。相手。仲間。博多小女郎

波枕上「九右衛門相仕等招き寄せ、小聲  
になつて」

あひじやくや 合借家。「あひがしや」に

同じ。胸算用「七軒の合借家に餅に牛  
蒡一把づゝ」

あひずみ 相住。同居。胸算用「何をか

して内證の事は知らず、其奥の相住に  
二人の女ありしが」

あひずり 悪事の仲間。相盜。出世瀧徳

上「科人は惣兵衛、一味のあひずり十人  
餘り」

あひせん 間錢。物事の手間賃。手數料。

胸算用「火桶買うて來るにもはや間

錢取りて只は通さず」。あひぎん。

逢初めの限 最初で而も最後の逢ふ瀬  
といふ意。二代男「假にも枕を交は  
し、逢初めの限、思ひきられよ」

あひづらふそく 會津蠟燭。岩代國會津

地方から産する蠟燭で、模様など描い  
たもの。油地獄上「會津蠟燭が光りだて  
したら、此二人が心切つて、踏消して  
くれる。」

あひどこ 相床。一間に並べ敷く床。二

代男「寢間は相床近く取らせ、廣き所  
を好み」

あひどの 相殿。同じ社殿に二柱以上の

神を合せ祀ること。あひでん。源氏鳥  
帽子折五「外宮の御社は、此神の第一王  
子、あひに相殿の太神宮」

あひどり 相取。共謀の詐偽。「あひずり」

の類語。織留「この人置の相取、きり  
とては悪し。まことなる世帯やぶりの  
女、是非なく男と相對にて乳母に出け  
る」

あひのまくら 合の枕。相共に寝るに

用ひる枕。辨慶京土産「妾がこゝへ來  
る時は、唐の鏡が七おもて、あひの  
枕や夜着蒲團」(二)二つの枕。連れあひ。

卯月の潤色中「合ひの枕の與兵衛様」

あ

**あひのやま**

相の山。(一)伊勢國度會郡、尾上坂と浦坂との間(内宮と外宮との間)にある地名。もと宇治岡と呼んだ。

「あひのやまぶし」の略。傾城反魂香中「氣も沈み入る時しもあれ、心細げな鼓弓の聲、あはれ催す相の山、我れに涙を添へよとや、夕べ朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響け共、聞いて驚く人もなし。通りや、只の時さへ相の山、開けば哀れで涙が溢れる」

**あひのやまのこつじき**

間の山の乞食。

前條(一)にいふ相の山にあたる乞食。織留(一)「間の山の乞食、昔は遊女の如く小袖の色をつくして、味噌こし提げたるもをかし、其姿には似ざりき。中にもおたまおすぎとて、ふたり美女あつて、身の色を作り、三味線を引きならし、あさましや女のすゑと、伊勢節をうたひける」。永代藏(一)「相の山袖乞までも心ながく、道者の機嫌をとりにて饑えず寒からず」

**あひのやまぶし**

間山節。俗曲の名。伊勢國間山邊で詠ひ初めたといふ。ささら三枝に合せたもので一種悲哀の調子を帯びた歌曲。尙、前條所引西鶴の文に據ると、これはもと「伊勢節」とも

稱したと見える。更に一代女六に曰く

「神風や伊勢の古市、中の地藏といふ所の遊山宿に身をなして(中略)衣類は都上代の島原太夫職の着捨てし物に變らず、所柄とて間の山節、あさましや往來の人に名を流すと、何れが唄ふも同音にしておかしかりき」

**あひのをんな** 間の女。「あいのをんな」の條を見よ。**あひばん** 相判。連署の判。證人としての判。又その判を押す人。二十不孝(一)

「相判に家屋敷ある人を頼みしに、此二人に判代とて利なしに二百兩借られ」

**あひばん** 相番。當番なかま。大句數上

「半月の月を土圭や巡るらん、七夕の夜にあたる相番」

**あひびき** 相引。(一)袴の兩側下部、前後

縫合せた所。もゝだち。雪女五枚羽子板中「なふ悲しやと起上る、袴の相引しつかと取り」。(一)兩方で引き合ふこと。

**あひぶん** 相分。「あいぶん」の條を見よ。**あひむこ** 相聲。(一)妻の姉妹の夫。(一)姉

妹の夫が、互に呼ぶ稱。姪。又、以上の關係にある者を他人からも呼ぶ。曾

我會稽山(一)「和殿は祐經と姪、祐經を引

く心から此二宮を疑ふな」

**あひもん** 合文。あひことば。仲間だけにしかわからぬ文句。一代男五(一)仲間であひもんの言葉をつかひ、大方ならずなる

**あひやけ** 相舅。相親家。嫁と婿と、雙方の舅姑同志が相對する稱。「あひおやけ」の約か。壽の門松中「恥を知れ淨閑。相親家は元他人」。同「梶田治郎右衛門は、相親家の婿を思ふも娘の爲」

**あひよみ** 相讀。證人。傍で目撃した人。五十年忌歌念佛中「我親かたつて一札させ、人を損ふ工面とは、鏡にかけて知つたれども、相讀なければ是非もなし」**あひよめ** 相嫁。互に嫁である人。兄弟

の妻。源氏冷泉節上「何條矢矧の長者めが、伊東と相嫁ななどは、緩急過ぎたる言ひ分」

**あぶあぶ** ひやゝ。はらゝ。あやぶ

み氣づかふさまにいふ「あはゝ」ともいふ。長町女腹切下「まア待ちや。歸

られうかと思ひあぶゝする」

**あぶきあみ** 扇網。扇の形に開く網。男

色大鑑「細川の末に、あぶきあみ手毎

に」

**あぶきいか** 扇紙鳶。扇の形をした紙鳶。

**あふぎぐるま** 扇車。紋所の扇車の形に作つた車。廻りは燈籠の上などにもつける。

**あふぎながし** 扇流。扇を河に流して遊ぶこと。中古時代、大井川で試みられたといふ。その様を畫いた模様の名。

**扇の影の立烏帽子** (諺) 扇を半ば開いた影は立烏帽子に似てゐる。その立烏帽子又は寶の烏帽子とは、息子のことを稱する、巫女の常套語(明烏紗物語)。此方が立てば、彼方が立たぬといふ意。卯月の紅葉上「わが悪いとは云ひながら、扇の影の立烏帽子、身といひ元は伯父」

**扇の女** 班婕妤のこと。歌念佛下「何かその甲斐夏果つる、扇の女の物狂ひ」

**あふぎびき** 扇引。遊戯の名。甲の人が扇を掌に載せてさし出すと、乙の人は其の柄を握るや否や、甲の掌を打つ。甲は打たれまいと早く手を引く。乙が若し打ち誤れば、甲に代つて扇を出す方になり、甲が打ち方となる。一代男五「よい年をして、蝶まはし、扇引、なんこ呼びて、おのづと子供心になりて」

**あふぎぶろ** 扇風呂。大阪天満五丁目にあつた風呂屋。生玉心中上「幸ひと此清水屋は、私が前方扇風呂にゐた時から近付ゆゑ」

**あふご** 杓。合木。物を兩端にかけて荷ふ棒。てんびんぼう。あほこ。二代男五「昨日は天秤をなやみ、今日は杓一本にもなりぬ。薩摩歌中「水波合木押取り延べ、競合ふ中を容赦もなく」

**あふさか** 逢坂。俗つれん「今日の日暮さを逢坂の清水にて凌がんとある逢坂は、大阪天王寺附近にある。

**あふち** 煽。あふること。薩摩歌上「蚊帳打ちあぐる煽風有明消えて」。「あをち」の條参照。

**あふみがや** 近江蚊帳。近江國阪田・犬上・愛知・蒲生の諸郡から出る蚊帳。慶長年間八幡地方の人が創始したものであるといふ。織留「そも／＼近江蚊屋の出所は八幡の町より仕出して、これ諸國に廣まれり」

**あふみじま** 近江縞。近江から出る縞織物。二代男一「盆正月の仕着物、たとへば、近江縞一反裁ち合せば、風俗も見よきに」

**あふみすげがき** 近江菅笠。近江の名産。あふみあみがき。あみがき。武道傳來記七「これが西行の近江菅笠」

**あふみぶし** 近江節。近江大塚岡鳥語齋が語り始めた淨瑠璃。語齋節。二代男七「立別れ因幡が近江節の淨瑠璃、鴨町萬字屋の庄左衛門抱への浅妻常磐つれ唄」

**あふむ** 鸚鵡(あうむ)。物まねの上手な男のあだ名。末社の四天王の一人。永代藏「時なるかな都の末社四天王、願西、神樂、あふむ、亂酒にそだてられ」。二代男一「或時、願西の彌七、神樂の庄左、鸚鵡の吉兵衛、亂酒の與左衛門交りに、揚屋町を立破りて」。織留「彌七が文作、あふむが物まね」

**あふむさかつき** 鸚鵡盃(あうむさかつき)。青貝・鮫貝、又は阿古屋貝で造つた盃。男色大鑑「行水に鸚鵡貝の盃を流し」。又「情に沈む鸚鵡觴」とも用ひてゐる。

**あぶらかけ** 油掛。伏見の町名、京橋の東北油掛町。

**あぶらな口上** 油口。よくしやべる、なめらかな口上。浦島年代記三「底意の悪きを座興になし、言ひすべらす油口」

**あぶらちごく** 油地獄。煮えたつ油の地獄。油でいりつけること。女殺油地獄下「お吉が身をさく劍の山、目前油の地

獄。油でいりつけること。女殺油地獄下「お吉が身をさく劍の山、目前油の地

あ

獄の苦しみ

あぶらやぎぬ 油屋絹。茶花咄三「油屋絹の本ごろ半疋」。永代藏五「油屋絹の諸織をけんぼう染の紋付」

あぶり 障泥。「あをり」を見よ。

あぶりこ 焙籠。餅などをあぶる鐵製の網。心中刃は米の朔日上「鐵橋、あぶりこ、鐵火箸」

あぶれもの 無頼者。亂暴者。孕常盤一「能化指南も恐れぬあぶれ者。一山もてあつかひ夜中に追拂ひ候へば」

あべかこ べかかう。めかかう。赤ん目をすること。あかんべん。事をいとひ、こばむ時に言ひ、又、さうする。壽の門松上「此方や知らぬ。あべかこの新介」

あべかこふ 前條と同じ。槍の權三上「そりや成りませぬ。ア、あべかこふとぞ喚きける」

あべかほかみこ 安倍川紙子。駿河國安倍川から産した紙子。永代藏三「安部川紙子に縮緬を仕出し、又はさま」の小紋をつけ」

あべちや 安部茶。駿河國安部川地方から産する茶。一代女四「中間買の安倍茶、飯田町の鶴屋が餓頭、女ばかりの

一日暮し」

あぼししゅう 網干業。網干は播磨國の地名。即ち、その地の人達。一代男七「播磨の網干業」

あぼのおんかみ 阿暮の御神。阿菩大神のこと。神代の昔、畝傍山と耳梨山との争を出雲から仲裁に來られたといふ神。曾我會稽國一「山と山とが妻諍ひ（中略）出雲の國におはします阿暮の御神、是を扱止めんと」

あまかは 天川、あまかわ（亞媽港）が正しい。次條の略。二代男五「天川の玉一つあり、少し疵物なれども、四匁七分あつて色よし」

あまかはさんごじゆ 天川珊瑚珠。支那の阿媽港、即ち今の澳門から渡來したので名づける。珊瑚の上品なもの。傾城反魂香中「蒔繪の印籠、天川珊瑚珠はさもなくて」。あまかう。あまかん。

あまがへる 雨蛙。寛文（二三二）三二の頃、京都四條中島東門前北側にあつた「南京あやつり」（いとあやつり）の異稱。當時の小芝居（七座以外の芝居）には屋根がないのを常としたのに、この小芝居には板屋根があつて雨を厭はぬところからかく稱したといふ（歌

舞伎事始）。

雨蛙の家 小さい家。小兒の遊戯の名にいふ。もと蛙合戦で多く死ぬ蛙を小兒が弔つたものであるが、後に蛙の戦もなくつたので、小兒はわざと打殺しておいて弔つた「あまがへるどのはいつ死に給ひた」などと言つて弔つたのだといふ（嬉遊笑覽）。小さい家やら、穴やらを作つて、蛙合戦のあとを弔ふ心で遊んだものであらうか。一代男二「里のわらはべ、ねちかご、あまがへるの家などして」。猿蓑「麥藁の家してやらん雨蛙」

雨蛙の芝居 前條「雨蛙の家」ともいふべき程の小さい小屋。芝居は劇場の建物といふ。或は前々條「雨蛙」と關係あるか。置土産三「惣じて太夫元木戸の者、あまがへるの芝居なる小見世物の猿までも、御顔を見知つて鳥帽子を脱ぎぬ」

あまくに 天國、日本刀劍師の祖。文武帝の時大和國宇多郡に住した。平家の傳寶小鳥丸の作者であるといふ。雪女五枚羽子板中「將軍家の御重代天國小鍛冶義光、其外名に負ふ銘の物」

あまさかさま 不合理な。逆な。天地さ

かさまな。出世瀧徳上「エ、く惜しい無念な。あまさかさまな事にても、主に踏まれて恨はない。傍輩の言ひなし故踏まれたと思へば腸が燃えかへる」あまつぶり、かざつぶき 雨つ降り、風つ吹き。雨が降り、風が吹くといふこととを、勢をつけて言つた奴言葉。六方詞。

あまなは 甘繩。鎌倉長谷の大佛の東方、御輿嶽の山腹にある甘繩明神。源義家を祀るといふ。

あまの命 天命(てんめい)に同じ。源三位頼政四「御兩人の御蔭にてあまの命を拾ひたり」

あまのおもて 安摩の面。安摩の面のやうな、斑のある矢の羽。舞樂「安摩」に用ひる面は、紙で作り、山形の鱗が描いてある。

あまのぐち 天野口。高野山、西の大門から天野神社に至る道。天野は野上川の水源地。心中萬年草下「あれへ越ゆれば天野の口、去年かゝ様と連立ちて、拜みし事の忘れず」

あまのさかて 天逆手。(古語)人を呪ふ時の拍手。蟬丸「心にこもるねぎ事に、あまのさかてをうつつてうけへば、

験あらなん」あまのじやこ 天邪鬼、わざと人の意に逆ぶ者。(そまがり。つむじまがり。

あまのとりふね 天鳥舟。神代にあつたといふ船。國性爺合戦四「風はなけれど蟹小舟、天の鳥舟岩船の、空走り行く如くにて」

あまのはへきり 天蠅斬。素盞鳴尊が八岐大蛇を斬り給うたといふ名劍。「天羽羽斬」ともいふ。日本振袖始「あらあら凄じや荒神の、天蠅斬抜きそばめ(中略)切りかけ」

あまべ 餘戸。特殊部落のこと。一代男七「そのあとにて、はちひらき紙屑拾ひあつめてあまべに歸る」。あまりべ。あまるべ。

あまみや 勢餘つて飛ぶ矢。武道傳來記六「引きしほりて放つ矢、真た、中を射抜いて、(中略)あまみや矢向ひの尾に遊びし大石半九郎が右の肩骨よりむなもとまで筈ぶかに」

あまよりよ 雨龍。像なく、黄蒼色で尾が長いといふ想像の動物。龍の屬。良龍。蜻龍。胸算用四「大方の物にては錢は取り難しと吟味するに、定まつて好い物は、今まで見せぬ蜻龍の子又火喰

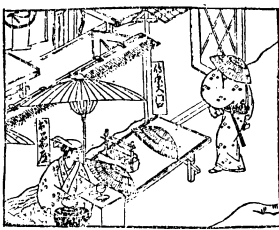
鳥など、未だ見せたことなし」あみがさじま 編笠島。今の大阪上福島、梅田橋北詰東のあたり、下等な遊里のあつた地。二枚繪草紙中「編笠島の笹屋の頭でござんする」

あみがさぜに 編笠錢。編笠など冠つた商賣のものを得る錢。浮世親仁氣質三「人だもの所へ出し、太平記の講釋さす思案であらうが、一文二文の編笠錢は、はかどらぬものぞ」

あみがさぢやや 編笠茶屋。遊廓に通ぶ者に編笠を貸す茶屋。二代男二「入口の茶屋に二歩、泥町の編笠茶屋に一步、(中略)これ中位の附屬なり」

あみじま 網島。大阪市東北隅、大和川と淀川と合する處にある三角洲。天網島下「南無あみ鳥の大長寺、藪の外面のいさゝ川」

あみだのひかり 阿彌陀の光。今の「あ



あみだのひかり茶屋

あ

みだくじに似た、富籤の一種。次の文がよく説明してゐる。長町女腹切申「町方にはやる阿彌陀の光といふ事をして、御一座のよね様方、誰様にも阿彌陀如来に當つたものが、豆腐と酒と買ひに行く役人。(中略) サア花様が阿彌陀ぢや。名代は叶ひませぬ。よね様に豆腐買はして、居ながら田樂たべませう」

網なうて淵のぞきそ (諺) 用意しないで事を行ふなといふ譬。永代藏五「小橋の下に魚はあれど、網なうて淵をのぞき」

あみのて 網手。紋所の名。曾我會稽山四「網の手は菅原殿、舞うたる鶴は茨木やの左門殿」

網の目にさへ戀風が溜る (諺) 遊女にも少しは眞の戀があると意。長町女腹切申「流れわたりの情である、網の目にさへ戀風が溜る。おぎのく上風身にしみくと、せめて一夜はうそなしに」

あめつうき 江鮭つ魚。さけ科に屬する魚。鮭魚。體の長さ四五寸、ますに似て腹は銀白、背は暗青色で黒い斑點がある。清冽な溪流湖水などに棲む。あ

め。あめます。みづぎけ。あめのうを。二十不孝三「此の川に江鮭つ魚すみけるに、武太夫水練を得て是に入り、手捕へにして毎々人をもてなしける」

あめのもり 雨の杜。日向國の名所。薩摩歌下「それぞ立つ名の憂き雲の、雨のもりと濡れて行く」

雨降らば降れ 蟬丸三「雨降らば降れ風吹かば吹け。山の奥こそ住みよけれ」。一休の歌に「有漏路より無漏路へ歸る一休み、雨降らば降れ風吹かば吹け」とあるに據つたのである。

あもとふもと 足下踏下の義から起るかといふ。身もと。素姓。身分家柄。天鼓三「あもとふもとも御存じなく、夫婦とは誠しからず」

あやかし (一) 妖怪。虎溪の橋「芝居の見せ物すかぬ黒雲、あやかしが付いて候腰の廻り」(二) 事實の明かでないこと、又は、もの。あやしいもの。武家義理物語「物のあやかし、かやうの事ぞと皆人に安堵させ」

あやかりもの しあはせもの。果報者。あやかる(背る)價值のある者との意。松風村雨東帯鑑三「そなたはほんに果報ぢやや。好い男の飯焚きやる、あや

かりものや」

あやぎる 氣持よく發音する。はぎれよく物言ふ。男色大鑑六「近代の稀者、口も動かさずして言葉のあやぎれて、聞くに情合み」

あやぎれ 音聲・言語の區切り明かなこと。はぎれのよい物言ひ。うるはしい轉り。一代女「八雲立つ國中の男女、言葉のあやぎれせぬことのみ多し」。櫻陰比事三「鶯殊更に轉る中に、三光ありありと聲のあやぎれしたる鳥の、柳の枝に高くとまつて」

あやけん あやぎぬ(綾絹)であらう。一代男六「太夫は肌にあやけんの巾着はなさず」

あやふにち 危日。この日は家作・婚禮・祭典には吉で、登山・渡海には凶といはれてゐる。單にあやふ(アヨウ)ともいふ。戀八卦柱曆下「なんの科なきそなたまで、あれ不義者とあやふ日、終に命のほろぶ日」

あやむ 傷害する。あやふくさせる。一代男四「押入有て物を取るのみならず、人をあやめて逃げて行く」

あやめ 五月のことか。菖蒲の節句の月であるので、かうも稱したと見える。



一代男七「延寶五年、あやめ八日の曙に空しくなりぬ」

**あやめざけ** 菖蒲酒。菖蒲の根を漬けた酒。五月五日に飲めば、息災でゐられるといふ。曾我虎磨中「今日の祝儀の菖蒲の酒も、我が爲には涙の酒」

**あやめのかど** 菖蒲門。五月五日、屋根に菖蒲を葺きさした門。曾我虎磨中「人やあやめの門の内、奥を遙かに見入りに」

**あやめのさかづも** 菖蒲酒を酌みかはして、祝ふ盃。生玉心中中「親子兄弟、菖蒲の盃するとして、今日の節句は嘉平次の顔が見えぬと、うぬが事悔んで」

**あゆみ** 歩。縁板。曾我會稽山四「のつきのつぎ假屋のあゆみ、ぐはつたゞ踏鳴らして」

**あゆみのいた** 歩板。船具。船から陸へかける橋板。わたりいた。一代男三「御縁があらばと、あゆみの板をあげて、取かちになほしてはや二三里も出で」(白前條と同じ。孕常盤「中門の歩の板、どうどと踏鳴らし」)

**あらがみ** 荒神。靈験あらたかな神。天網島下「かゝる尊き荒神の、氏子と生れし身を持つて、そなたも殺し我も死ぬ」

**あらしこ** 荒子。雇ひ兵。雑兵。百日曾我「大名小名列卒かり人、足輕荒子一同に」

**あらしさんゑもん** 嵐三右衛門。大阪の名優。初代三右衛門は元祿三年十月歿、年六十八。妻夜用心記「和尙は嵐三右衛門が六方、作助が鎌倉、新藏が馬奴そのまゝなり」

**あらしのしほ** 嵐の芝居。前條「三右衛門」の芝居。大阪道頓堀にあつた。生玉心中上「嵐の芝居の曾根崎の狂言が、面白うて再々見るとぬかしたが、よう見覺えた」

**あらしほだい** 荒鹽臺。四方(しほ)と關係あるか。脚の付いた膳のやうに出来てゐて、魚類を人に贈る時に用ひるもの。胸算用四「土で作りし惠比須大黒又荒鹽臺にの家、當年の惠方の海より潮が参つたと、せを祝ひまはりけるは」

**あらしやうりやう** 新精靈。新しい死人の靈魂。卯月の潤色中「三十五日の新精靈」。百日曾我五「今年はかげも新精靈の、棚に折りしく蓮葉の、孟蘭盆祭哀れなり」

**あらたむ** 禁止する。「しらべる」、「たす」といふ意から一轉したのである。五人女三「夫婦池のこさんとて子おろしなりしが、此身すぎ世にあらためられて、今は其むごき事をやめて」

**あらちやま** 有乳山。越前國海洋津の宿の北一里にある。物種集上「平産はまた此中のあらち山」

**あらはしやならだ** 悉曇の四十二字の始めの文字、我が「いろはにほへ」といつたやうなものであるといふ。釋迦如来誕生會三「青柳の翠は同じいろはにほへと、四十七字を四十二字、あらはしやならだと手習の」

**あらひがき** 粗椀。模様の名。椀垣(椀を薄くへいで、斜に網代のやうに編んだ形)模様の粗いをいふ。一代男五「あらひがきの袴帷子に、ふと布の花色羽織に」

**あららせんにん** 阿羅々仙人。釋尊出家の後暫く師事せられた老哲學者。王合

城の北、彌樓山に住んでゐたといふ。その修道終極の目的たる悲想・非非想の境域に於て、未だ人・我差別の妄想を脱してゐなかつたので、釋尊は之を去つたのである。釋迦如來誕生會曰「阿羅々仙人の弟子となり、無想有想を學ばせ給ふ」

**あられがま** 霰釜。茶の湯の釜、外面に霰の形をつぶく／＼と高く並べて鑄出したもの。槍の權三下「武道を研く霰釜、たぎる心は運次第」

**あられのまつばら** 霰の松原。大阪の南、住吉安立町の濱の名。次々條に同じ。

**あらればしり** 踏歌。たうか。正月禁中で行ふ一種の舞踊。その歌曲の終に、萬年阿良禮・萬年阿良禮と重ねて囃すのでいふ。あられ。

**あられまつばら** 霰松原。攝津國住吉郡の内・今安立町といふ(三才圖會)。

**ありきやう** 萬歳の歌ふ詞。今は「あいきやう」といふ。戀八卦柱曆下「徳若に御萬歳と、御代も祭えますすありきやうあら玉や、年立返るあしたより、水もわかやぎ木の芽もさし祭えけるは、誠にめでたう候ひし」

**ありきやうがり** 萬歳のことであらう。

前條の「ありきやう云々」と唄つて家毎に立寄るのでいふか。或は「ありきやうある」を「ありきやうがる」とも唄つたか。織留曰「伊勢神樂の勸進彌宜、鹿島の事ふれ、あたまに烏帽子被りきやうがり、舞まひまでも、入用の時は爰に行きて。尙、「ありけう」を見よ。

**ありきり** 有切。有るだけのもの。ありたけ。永代藏二「月に八十目づつ利銀わたし、この有切に五人口を過ぎよといはれし」

**ありけう** 「ありきやう」と同じ、源氏烏帽子折三「門松かげの小鼓や、ありけう有りける新玉の(中略)萬歳・鳥追とどりに」

**ありごと** 有事。事無。萬の文反古五「魚鳥は堪忍なれども色はと書きしはあり事なるべし」

**ありさま** お前さま。あなたさま。「われさま」の轉訛。置土産「既にありさまの鞆になる筈を、首尾せいでお仕合せ」。歌念佛上「エ、あり様は一口に八貫目、(中略)エ、こなたは皮か身か合點が往かぬ」

**ありすがのやま** 有栖河の山。大阪新清水寺のある高地の古名。往時有栖寺のあつた所で、望海の勝地として名高い。吉野忠信三「心だよりもありすがの、山松が枝に絶り寄り」

**ありたけこたけ** 有る限り。残らず。丹波奥作中「興作といふ博奕打のぬす人めに、有りたけこたけ仕あけて、(中略)稲稈が一枚無なさうな」

**ありたけはたけ** 前條におなじ。吉野都女楠四「これ見よかうした色遊び、酒も酢もありたけはたけ買うてやる」

**ありつべしう** 尤もらしく。「ありつべし」を副詞の形にした語。薩摩歌上「さも有りつべしう言ひければ、三五兵衛合點して」

**ありどほし** 蟻道。和泉國日根にある蟻通明神。

**ありなし** 有つても無いやうに。有つても無くてもよいやうに。一代女三「殿様われをありなしに遊ばし、御國元より美女取りよせ給ふ」

**ありなしもの** 有無者。有つても無いと同じく、かひのない者。藍染川二「扱はわらははありなしもの、根笹に引かれこなたの事御忘れありしとや」

ありべいがかり あるべき通り。平常の通り。おぎなりに。紋切りがたに。特に用意しないことにいふ。轉じて、手當り次第、やたらになどの意にも用ひる。「一代男七」とどけの文も、人の目を忍ばず、ありべいがかりをつい書きて、

其日の敵の心をそむかず」  
ありべいかかり 前條と同じ。曾根崎心中「それ煙草盆、お盃と、ありべがかりに立騒ぐ」

ありまふて 有馬筆。攝津國有馬の名産。色々の絹絲で軸を巻いて飾り、筆首が出たり入つたり、又、軸の上端から人形が出たり入つたりするやうにも作る。

人形筆。百官若大臣野守鏡三「みやげ召せ召せ竹細工、かごも品々有馬筆」

ありやうがり 「ありきやうがのり」の誤か。槐久「世物語上」鼓の音はありやうがりに聞き覚え」

ある處にはあらがね (謔) 金銭はある處にはあるもの。「無い處には無い」といふに對する。釋迦如來誕生會「ある處にはあらがねの、金銀は寶の最上」

あるな 有る名。正しくつけてある名。本名。俗つれ〜「此人あやかり右衛門といひ、ある名はいはざりき」。釋迦

如來誕生會「浮名は何と梅麿花、ある名あし名のいろ〜に」

あるへいたう 有平糖。ホルトガル語 Aljeon から轉じた。始め「アルヘイル」と稱したが、「金平糖」などから類推して、「あるへいたう」となつた。ありへいたう。砂糖を煎じつめて、餡のやうにした菓子。一代男六「山の芋のしめ、つちくれ焼、芹やき、あるへいたう、生貝のふくら煎り」

あれさま 「ありさま」と同じ。あなたさま。一代女四「何事もござらぬかといへば、あれ様のかはゆがりやつたこちらのお龜が、冬年二三日煩うて死んだが」

あゐさめ 藍鮫。角鮫(つのざめ)の異名。體細長く、頭は扁平。めじろざめ。皮を刀の柄に用ひる。

あをあみがさ 青編笠。青い編笠。よく遊廓に行く客の冠つたもの。冥途飛脚中「首尾を求めてあを〜とき、青編笠の紅葉して」

あをくげ 青公家。(一)取るに足らぬ公卿。(二)芝居で、青隈を採つて扮する、悪役の公卿。

あをさいろく 青才六。青丁稚め」など罵る意の語。才六は丁稚の隠語。

あをたうしん 青道心。心に染まぬ出家。信心堅固でない坊主。天網島上「ほうろく頭巾の青道心、墨の衣の玉塵」

あをち 煽。あふち。あふりの風。油地獄下「はためく門の幟の音、あをちに賣場火の火も消えて」。曾我會稽山「障子あをちざは〜、紙帳の騒ぎに目を醒し」

あをちびんぼう 如何に節約しても、又働いても、貧が煽り立てるやうにまといつて身を離れぬこと。どうしても免れられない貧乏のこと。胸算用五「女房に前垂させて、我も晝は旦那といはれて店にゐて、夜は門の戸をしめ置きて、丁稚が踏む碓を助けて取らせ、足も大方は汲みたての水で洗ふ程に氣をつけけれども、これかやあをち貧乏といふなるべし」

あをつ 煽。あふる。本朝三國誌「あをつ火燐の灰烟」

あをめのくりいし 青梅の栗石。武藏國青梅から出る小石。

あをり 障泥(あふり)。馬具の名。馬の兩脇腹に垂れて、泥の飛びはねて衣を汚すのを防ぐ皮製の物。百日曾我「あをの畜生を恐れては、誠の合戦たるべき

か。某が打殺し、皮引つばいであをりにせん」

**あををとこ** 青男。年若い、何事にも未熟な者を嘲つていふ語。武道傳來記六

「あの青男つねんの有様から生ぬるく、殊更つひに弓を手に取りたるを見る者なし」

**あん** 何。なん(何)の訛。梳久浮世十界

「疥癬もとよりぞつと寒いは、こりや又あんたる所譚だと」

**あんかうむしや** 鯨鯨武者。口には大言

を吐いて強さうであるが、心は臆病な武者を罵つていふ。最明寺殿百人上臈上「利殿の様に口廣い癖に、尾の細い鯨鯨武者とて何の役に立たぬもの。近頃笑止々々」

**あんげり** 口あんげり。あきれた様子。

あんごりともいふ。

**あんごのとう** 安居の頭。男山八幡宮の神事。日本永代蔵六「ある時石清水八幡宮を申しおろして、あんごのとうを執り行はれ、目出度き事山々なりしに」。安居は、元來僧徒が陰曆四月十五日から九十日間籠居して修行することであるが、八幡宮は宮寺であるので、之を營んだのである。頭はその神事を督む

暗の宿のこと。講に於ける頭人のやうなものである。

**あんじやうじ** 安祥寺。京都東山如意が嶽、境谷にあつたが、慶長年間に、宇治郡十二所權現山に移つたといふ。傾城酒吞童子ニ「はや安祥寺の人相の、音羽の峯に夕づく日」

**あんだ** あみいた(編板)の轉。徒輿。乗物の一種。竹木などを編んで作り、釣臺のやうな、日覆ひなしの粗末な輿。罪人又は傷者などを載せて昇くもの。あをた。あうた。あんぼつ。篠。雨吟

一日千句「行春の雨にはあんだゆるされて、蛙のあしを夜軍の時」

**あんだべんけい** 辨慶にまがふ者。まがひ辨慶。あほう辨慶。

**あんだら** 馬鹿者をいふ上方詞。油地獄中「おかち打擲きなされても、あんだらめには拳一つ當てずにほたへさせ」

**あんどぢよ** 暗女。くらのをんな(暗物女)のこと。一種の私娼。一代女六「暗女は妻の化物」

**あんどろにふだろ** 安東入道。新田義貞の妻の伯父。その自殺しようとした時、

義貞の妻が諫めたのを、大に怒つて説破した事は、太平記卷十に出てゐる。

戀八卦牝曆中「辯舌は講釋、事の道理は太平記、かたちは安東入道が、理窟をこねるもかくやらん」

**あんにや** 姉。伊勢國古市及び山田で娼妓のことをいふ。好色伊勢物語「女郎をも所によりて替名呼ぶ。浪華おなごは伊勢のあんにや」

**あんばんくもの** わんばんくもの(臆白者)に同じ。曾我會稽山「コレヤ打碎く程なれば己れは頼まぬ。あんばんく者め、又捻餅喰ひたいか」

**あんぶつ** 暗物。くらのをんな(暗物女)に同じ。その條を見よ。

**あんべる** あんべら(筵)の訛。國姓爺後日合戦「奥を掃いて拭うて、新しいあんなべる敷け」

**あんなとり** 按摩取。按摩すること。又、その人。一代男六「あんま取の休齋が、二階より落ちて、はや口に語るに」

**あんにやうせかい** 安養世界。極樂淨土のこと。安樂世界、安樂淨土、安樂國、安養界など皆おなじ。傾城反魂香中「極樂を願へば告げる檀木町。安養世界の夜見世には」

**あんにやうほうこく** 安養寶國。前條に同じ。賀古教信七墓巡二「さながら安養寶

國。前條に同じ。賀古教信七墓巡二「さながら安養寶

國に、生れつべしとたのもしく」  
あんらくせかい 安樂世界。前條に同じ。  
曾根崎心中「げにや安樂世界より、今この娑婆に示現して」とは、謡曲「田村」に據つたもの。

い

いあん 醫案。醫術の方案。平家女護鳥

三「和丹兩家の典藥、配劑醫案を盡せども更にその驗なく」

いうぜんあふぎ 友禪扇。京都の染工(或は畫僧ともいふ)、宮崎友禪の創めて作つた一種の扇。三代男五「柳屋が下緒、

いうぜん扇」

いうぜんゑ 友禪繪。前條「友禪」の畫いた繪又は模様。友禪が下繪を畫いた模様。或は、それに倣つた模様。武道傳來記七「あれに掛りし友禪繪の布呂敷

ふるけれども、破れぬが不思議なり」

遊女の買論 遊女を買ふに就いての論。一代男五「芝居子に氣をとられ、遊女の

買論、夜遊のわかちもなく」

遊女割竹集 西鶴の時代に流行した色里の評判記。二代男二「其後一條の甚入道

が、遊女割竹集にも推量の沙汰多し」  
いうてき 由的。儒者、宇都宮遷巷のこ昌三の門人で、俳諧を善くした。寶永四年十月歿、年七十五。「うつのみや」の條参照。俗つれ、三「春山花は遅けれど、たまぐ都の由的順正が席より東山に遊ぶ心地」

いうても 何と言うても。一副詞のやうに用ひる。晝夜用心記三「百兩までには、思ひきつて拂ひ申さんといふに、

いうても眞鍮なり、細工見所あれば、七十五兩にならば」。百日曾我二「判官殿のゆかりを尋ねるとむる穿鑿なれば、いふても天下の御大事」

いうらう 遊浪。さまよふこと。流浪する。浦島年代記五「佐伯の倉敷といふ人、此の浦に遊浪の折りふし」

いかいかと いかめしく、あらしく。源氏帽子折三「此童が着ようずる烏帽子は(中略)ひながたの間をあらく、櫛形をいか〜と、雙肩付きて」

いかず 温良でないもの。意地わるい人。今もいふと同じ。築花咄五「此里の戀と情と花奢と洒落とをまろめし中にも、

あんないかなずもありける」。又、役に立

たぬもの。

いかつげ いかめしげ。おそろしげ。ぶこつな。一代男四「太緒の雪駄いかつげに穿きなして」

いかつはいて いかめしげに。怒つたやうに。あらしく。副詞的に用ひる。出世景清四「最早ほつてもならぬ〜。侍者生犬たははくと、いかつはいてぞ申しける」

いかなこと (どうした)ことか。二十不孝一「米櫃にいかな事何にも無く」。どうしても。國性爺三「さもないうちはいかな事、ならぬ〜とねめつくる」

いがる いちめる。困らせる。懲らしめてやる。聖徳太子繪傳記一「牛頭馬頭惡鬼が責めよかし。此の婆がいがめてやる」

いきあひきやうだい 「ゆきあひきやうだい」(行合兄弟)を見よ。

いきかた 意氣方。氣だて。心いき。宵庚申上「男色たてぬく詞の優しさ。其のいきかたに猶なづむ」

いきかた やり方。仕う。油地獄下「ハテ姿な人はいきかたの悪い。手形の表こそ一貫匁、正味は二百目、今夜中に

済せば別條ない約束では無いかいの」

い

**いさかた** 行肩。ゆきかた。肩ゆき。衣の背縫から袖口までの長さ。薩摩歌中「我もそもじも脇あけの、其袖形の行肩も、何もかも未だはづしの糸の」  
**いさかたり** 「いさ」は罵る心持を表した接頭語。づ太いかたり。つら憎い騙り者。戀八卦柱簾下「簾用したらば、二三百日も来る筈ぢや。八百目預けたとは、いさかたりめ」  
**いきくち** 生口。口寄せて、生きてゐる人の靈を招いて、その意を述べさせること。又、その言。しにくち(死口)の對。卯月の紅葉上「あいくろ格子の若神子の、口と口とを寄せまほし。して先づ御用の事有りとは、生口か死口か」  
**いきくわさう** 生火葬。生きながらの火葬。平家女護島「熱や〜のこがれ死に、生火葬とは是れやらん」  
**いきげいせい** 傾城を罵る詞。壽の門松中「生きる死ぬるの難儀も誰ゆるぢや。傾城殿そなたゆる。いき傾城の耻知らず」  
**いきすぎる** 出過ぎる。出しやばる。曾根崎心中「やれ、いき過ぎた出しやばり者」  
**いきずり** すり(掬兒)を罵る語。出世瀧

徳上「かの新七のいきずりめ。お爲がほで旦那をひづめ」  
**いさせいはる** 息せいで張る。氣力をありたけ出す。氣込んですする。女腹切中「エエ息せいで張つて喉が濁くと、ごぶりごぶり」  
**いきたけ** かぎり。たか。ほど。浦島年代記「網船の綱手くゝつて止めても、いさかたの知れたる漁師一人」。「いきたけ」は行文で、下によく「知れたる」といふ語が来る。  
**いきだし** 息出。息をする所。いきぬき。天神記「船の屋形は蜘蛛手を結び(中略)息出しの物見より、僅かに洩るゝ月日の影」  
**いきづまる** 行詰。(狭く)苦しくなる。困りぬく。女腹切上「ちといき詰つた髪きふしの談合に、逢はいで叶はぬ事あつて、横着なこの有様」(短慮な。一微な。宵庚申上「いき詰つたる腹立は、調すくなくに凄じし」)  
**いきづゑ** 息杖。肩に擔つた物を支へて、息を休める杖。出世瀧徳上「駕籠の者、やあこりや狼藉して、息杖の胸打をくらふかと、振上ぐる」

る。俗に十里松といふ。松原の中に壺岐の社がある。西鶴五百韻「西國へ責めて狀にて附届け、上臈と待つ生の松原」  
**いきは** 行方。ゆきがた。ゆくへ。重井筒上「四百日は何にした。いきはを聞かう」同中「そなたは法華、己れは淨土、願ふ所が別なれば、先のいきはも覺束なし」  
**いきぼね** 息の音。聲。百日曾我「口に込み薬、いきぼね立たすな」出世景清「腕かなはずば。などいきぼねでも立てざるぞ」  
**いきほひかかる** 勇み立つ。萬年草中「女夫づれて明日早々のぼしてのけいといはるゝと、勢ひかゝる親の顔」  
**いきほひぐち** 勢のついたまぎれ。その拍子。女腹切上「はれやれ腹の立つ勢ひぐちに、叔母をも知らいで見しらした」  
**生身は死身** 生きてゐる者は必ず死ぬるものと諺。氷の朔日中「生身は死身、若しひとつと、死病うけたりとも」  
**いきめらう** いき女郎。女を罵る語。油地獄中「いき女郎め(中略)につくいほけた」  
**いきよ** 生世。生きてゐる時。この世。

傾城酒呑童子四「ちよつとなりとも生世のうち、逢はせましたさ」  
いさる 憎。いきま。りきむ。興奮する。俗つれ。ニ「此男少し急ぎて（中略）後とは申さぬ、現銀にかくの如くと、憚るうちに」

息を計りに（副詞句）息の限りに。息の續くだけ。出世景清四「助けてたべ父上様と息を計りに泣きわめく」  
いくきは 幾際。幾節季。「きは」は、月末、年末など勘定のしきり時をいふ。

いくすり 幾薬。幾多の薬。五人女四「つねの寝間に入れまゐらせて、手のつづく程はさすりて幾薬をあたへ、少し笑ひ顔嬉しく」  
いくせ 幾瀬。どれほど（多く）。どんなに（屢）。大職冠一「もし金松では有るまいかと、それはいくせの案じごと、是母ちやぞや」

生玉の馬場先 生玉神社の東門外にある八幡宮で、往時毎年五月五日に流鏑馬が行はれたといふが、その馬場先である。宵庚申下「こゝ生玉の馬場先に、法界無縁の勸進所」  
生玉の社 大阪天王寺の北方、高津の南にある神社。境内は大阪第一の盛り場

で、諸種の興行物などがあつた。曾根崎心中「得意を廻り生玉の社にこそは著きにけれ」  
いぐち 鬼唇。みつうち。上唇の中程が裂けてゐるもの。釋迦如来誕生會「そなたはいかい物識ちや。それならあの鬼唇は何の報いぢや」  
いくはな 幾組。幾場面。歌念佛上「濱納屋の上で組んづ轉んづしてゐたを、いくはなに見て来た」  
いくはへ 幾延か。心中宵庚申中「竝んでつむぐ綿車、手廻りもよくいくはへか、庭に五つのたなつ物」  
いけ いき（接頭語）の轉訛。「あた」の類語。罵る意を強めるにいふ。大職冠一「いけ年寄の推參者。捻り殺すはやすけれど」  
いけだずみ 池田炭。攝津國川邊郡東谷村一庫で焼く、同國豊能郡池田近在から賣出すくぬぎの木炭。いちくらずみ。ひとくらずみ。いつこずみ。重井筒申「焦るゝ紅葉はを盛つたる如き池田炭、遠慮も内儀が炬燵にうつし」  
いけどうすり 掏兒を罵る語。「いけ」に「どう」を添へて更に罵り卑める意を強めたもの。天網島中「やい治兵衛、女房

子供の身の皮はぎ、その金でお山狂ひ。いけどうすりめ」  
いけぶね 生船。生魚を入れて置く水槽。いけす。一代男五「笹葺の假湯殿、鯛すぎきの生舟、晝はらく書して行く水に油流し」

いげん 威言（ゐげん）。法螺を吹くこと。誇言。大言。日本西玉母三「いげんではござりませぬが、私の駕の中では皆且那衆が細かな寫しものをたさるゝ」  
いささがは 細流。小川。天網島下「南無あみ鳥の大長寺、藪の外面のいさゝ川」  
いざさら 「いざ更にか」。「いざさらば」の略か。忠臣身替物語三「互に恨みの残らぬ中、いざさら參るといひければ」  
いさめる 「諫める」意から轉じて「慰める」。「勇ましめる」に用ひる。二十不孝一「其金にて年取る事はと歎くを、人置いろくゝいさめて戻し」。傾城反魂香上「御徒然にいさめめの爲、嫁菜のひたしに豆腐の煮にしめ」

いさらへ 鑄凌。いさらひ。鑄た金屬に、たがねでみがきをかけ、滑かになるやうに凌ふこと。又、そのさらつたもの。一代女六「中古の鐵つば鑄さらへの目貫、羽織の胸紐」

いさらへ 鑄凌。いさらひ。鑄た金屬に、たがねでみがきをかけ、滑かになるやうに凌ふこと。又、そのさらつたもの。一代女六「中古の鐵つば鑄さらへの目貫、羽織の胸紐」

と

い

いしうち 石打。婚禮の夜、近隣の者が

その家に石を投げうつこと。いしいは

ひ。元祿二年禁ぜられた。今宮心中上

「きさが嫁入の談合に石打とは吉左右」

いしうり 石賣。石を賣る業。その人。

堀川波鼓下「今の石賣喚どもが」

いしうるし 石漆。しつくひ(漆喰)のこ

と。浦島年代記「吸ひついて離れぬ股

ぐらの鮑、石漆うるし、内裏様御繁昌

の吉相」

いしがき 石垣。京都遊女町の名。「いし

がけ」ともいつた。置土産「石垣の遊

女ども」。男色大鑑「祇園町石垣上八

軒」。二代男「石垣町の二階騒ぎ」。女

腹切上「四條石懸町、井筒屋と申す茶

屋」

いしがきくづれ 石垣崩。落ちぶれた遊

女。前條「石垣町」の茶屋に勤めてゐた

女の零落したもの云ふ。「一代女」何

とお内儀珍しいものは無いかと庭に立

「跡へも先へも動かぬ時、石車を銀にし

て欲しやと願ふに、思ひばかゆかず」。

坂などで小石を踏みころがして倒れ

ることいふ。

いしこぎ 石御器。石五器。茶碗。博多

小女郎上「石五器に一二杯、肝の束へ諸

白をいつけた陸摩二才、肥満男であ

つたんばん」

いしこづめ 石子詰。罪人を生きながら

坑に入れ、小石で埋め殺す刑の名。中

古、邊土で行つたもの。「いしこづみ」

ともいふ。源氏烏帽子折「己れこそ罪

人よ、塞の河原の石子詰」

いしざら 石皿。皿の状をなした石。石

器時代の遺物であるといふ。二代男

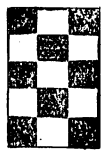
「丸盆に二つ盃、石皿にするめ裂き入れ

て」

いしだたみ 石畳。「模様の名。いちま

つもやう。あられ。

二代男「石畳の幅



めること、石築であらう。椀久一世物

語上「石突柱立すぎで、屋根葺くばか

り」

いしなご 女兒の遊戯。若干の小石を撒

き、その中の一つを空に投げて落ちぬ

うちに、撒いた石と共に取り、順次に

拾ひ盡して勝ちとする。石をお手玉の

やうに取る遊び。大句数上「二つ三つ四

ついいしなごの役、ふり袖の短き程ぞ知

られける」

いしなどり 前條に同じ。傾城酒吞童子

「おことも姫も同い年、鎌遊び石な

取、振分髪より中よして」

石に謎 (謎) うけ答へのない譬。油地

獄中「エ、もどかしい徳兵衛殿。石に謎

かけるやうに口でいうて聞く奴か。出

てうせ」

いしびや 石火矢。大砲のこと。彈丸と

して石をつめて用ひたのでいふ。後には

鐵や鉛を用ひた。出世流徳上「江戸屋



用心のよい人。但し、下例は馬子の名。丹波與作中「くさつ」の三介三藏、石部金吉泊りなら止めたも」

**いしやうがさね** 衣裳(衣裳)重。歳暮に遊廊で、新年の晴着を遊女たちに着せ試みることを衣裳着(いしやうきせ)といふが、その類の年中行事の一であらう。但し、下文は菊の節句頃行つたもので、ともかくも、ありたけの美服を着飾ることである。一代男七「さて今日よりは、色里の衣裳がさね、これのみる事、命のせんたく、たゞぬれつゝぞ山水の香ひも深き菊の節句の暮けしき」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

**いしやうづくし** 衣裳盡。衣裳の美を盡すこと。懷硯<sup>五</sup>「唐織の幔幕うたせ、袖がさねの衣裳盡し、鹿子ならざる小づまもなく、美を飾りての女酒盛」

い

ど、樹に綱を張つて、それに衣裳をかき連れて作る幕。天下馬<sup>四</sup>「館住居氣詰りも上野の花に忘れて(中略)衣裳幕の内には小町交りの女中」  
**いじる** いぢる(弄)。いぢめる。なぶる。一代男<sup>四</sup>「何にても藝をせよといじる」  
**石を抱いて淵に入る** (諺) 好んで禍を招く。再び救はれたいこと。韓詩外傳に抱石而沈于河とあるに據る。大職冠「ラ、天罰知らぬ邪の、力頼みは石を抱き、淵に入鹿が白骨は、此兩足の下にあり」  
**いしんぢよ** 堅い人。石丈、又、石千代とも書く。頑固一徹。大矢數<sup>四</sup>「それから先は石千代になる、他の家を承つて名付親」。壽門松上「て、御様は隠れもないいしんぢよなり」  
**いせあみがさ** 伊勢編笠。伊勢國から出る編笠。物種集上「着こみも染まるあけの玉垣、賀茂春日伊勢編笠に布頭巾」  
**伊勢移す** 伊勢神宮の靈を勧請する。天下馬「宮木を引き萱を刈り、ほどなう伊勢移して祟め」  
**いせかう** 伊勢講。伊勢參宮の路費にあてる爲に、かねてから人々が相約して齎金する會である。日を定めてその仲

間の或一人の家に會して、饗應を受けることもある。その宿をする人を頭人と稱する。又、齎出した金は、太々神樂を奉る費にもあつてゐるので「太々講」ともいふ。だいたいこう。重井筒中「今宵は我れら伊勢講、講中待つて居らるべし」  
**いせかぐら** 伊勢神樂。伊勢大神宮で行はれる神樂。織留<sup>四</sup>「伊勢神樂の勸進彌宜」  
**いせかはり** いせおんどう(伊勢音頭)におなじ。伊勢國古市に行はれた小唄。もと、その附近の川崎から起つたので、川崎音頭ともいふよし。男色大鑑<sup>四</sup>「地下人の唇動かし、投げぶし伊勢かはりなどとは格別にして、音曲さへかく豊かにおもしろければ」  
**いせき** むせき(堰)。水をせき止める所。女腹切中「南無三寶見付けられては足元暗き、いせきの石に踏みくじき、長さ緋絹裏足まとひ」  
**いせごよみ** 伊勢曆。伊勢國の曆師佐藤伊織通稱紙屋茂兵衛によつて板行された曆。胸算用<sup>四</sup>「上方の如く節季候も來ねば、只伊勢曆見て春の近づくを辨(いせざくら 伊勢櫻。櫻の一種。花は八

h

重で色が赤い。賀古教信七墓巡ニ「出雲八重垣八重樓さては〜、さては神明伊勢樓」

いせてんもく 伊勢天目。伊勢國から出る天目であらう。梶久一世物語下「ふとこゝろに伊勢天目、すひ口なしの烟管」

いせのおし 伊勢の御師。伊勢神宮の神職、資格の卑いもの。恭愼太平記「お祓ひ配りの伊勢の御師」

伊勢の御縁日 伊勢大神宮の御縁日、十二月十六日。地方ではこの日伊勢講を催すのである。重井筒上「明日は伊勢の御縁日」

いせびくに 伊勢比丘尼。伊勢國に住んでゐた、尼の装をして遊女。國姓爺後日合戦「ぬめの帽子の伊勢比丘尼」

いせぶし 伊勢節。あひのやまぶし(間山節)のこと。「あひのやまのこつじき」の條を見よ。

いせをどり 伊勢踊。伊勢音頭に合せて踊る踊。

いそ磯。沖に對して、磯は水が淺いので、物事を比較する場合に、及びもつかぬ方に譬へていふ。榮花咄ニ「工夫の水學磯なり、江戸橋の下より乗出して、髪振する間に、吉原へ通ひ舟たくみ

で。曾我扇八景「しころは磯よあら磯よ」。尙「富士は磯」の條參照。  
いそふれ いざ來れ。さあ來い。勵ます意にいふ。源義經將基經ニ「城に籠つて討死せん、いざや花石いそふれとて」日本振袖始一「靶(くつわづら)取つたる鬚首はたと蹴放し、いそふれ小童と馬立直し」  
いそもじ 急文字。いそがしいことにいふ。おはもじ(お耻し)の「もじ」とおなじ。生玉心中上「今に榮えて數萬人、心の顛立に、神のお身さへア、いそもじの、まして流れの憂き節や」  
いたがね 板金。大判金、小判金をいふ。殊に大判金をいふ。二代男ニ「ある公家方のお居室の床に、板金を山なして」  
いたちばり 立賣堀。大阪新町の廓の北の川を立賣堀川といひ、その川岸の通りを立賣堀といふ。卯月潤色中「立賣堀の伯母諸共に」  
いたつき 平題箭。銜。ヤビリ(鏝)の一種。角・木・鐵・錫などで作り、小さくて先を尖らせず、平にしたもの。多く稽古に用ひる。最明寺殿百人上臈上「大中黒の的矢、平題箭かけて引絞リ」。曾我會稽山「假名もなき銜の的矢」

三二

いたつき 板附。芝居の語。俳優が舞臺に出てること。又、その舞臺。その俳優。新小夜嵐物語上「松岡九七郎といへる若女形に思ひつき、其分には止らず、次第に板付に登りて」

いたみ 伊丹。伊丹酒の略。攝津國伊丹地方から産する酒。二代男「或時伊丹の明檜といふ男」とは、大酒呑みのあだなであらう。傾城酒呑童子四「抱への女郎伊丹諸白」とは、いたみを痛みと洒落たのである。

いたもと 板元。料理場の俎板を置く所。そこに居るもの。料理人。料理もと。(菓子屋では、のし板を置く所)。心中宵庚申上「三汁九菜の魚鳥づくし、身が身上を板元で切りはたくか。此獸立は誰が指圖」

いたやき 板焼。魚鳥の肉を平たく作り、板につけて焼いた料理。織留「鴨の板焼は火鉢をすぐにお座敷へ出すぞと」

いたらがひ (帆立貝の腹。殻は卵圓形、その面には隆起線がある。國性爺ニ「口あけてほや〜笑ふ赤貝に、心よせ貝、あゝいたらが貝。」紋所の名。曾我會稽山四「いたら貝は岩崎様、網の手は菅原殿」

いたつき 板附。芝居の語。俳優が舞臺に出てること。又、その舞臺。その俳優。新小夜嵐物語上「松岡九七郎といへる若女形に思ひつき、其分には止らず、次第に板付に登りて」

いたつき 板附。芝居の語。俳優が舞臺に出てること。又、その舞臺。その俳優。新小夜嵐物語上「松岡九七郎といへる若女形に思ひつき、其分には止らず、次第に板付に登りて」

いたり 至。物事の至り盡せることにい

ふ。綿密なこと、極上等なこと、氣の利いたこと、手のよく届いてゐることなどにいふ。次の各條の用例を見よ。

いたりしもやしき 至下屋敷。贅澤な別邸。俗つれ〱「今の難波の至下屋敷に、中二階の簾捲き上げ」

いたりぜんさく 至穿鑿。贅澤極まる物好み。永代藏〱「觀世太夫一世一代の勸進能ありしに、金子一枚宛の棧敷を京大阪に續きては堺へ取りける。至穿鑿これにて知れぬる」

いたりぞめ 至染。氣の利いた染めやう。傾城島原蛙合戦「綸子小袖のいたり染」

いたりだいじん 至大盡。行き互つて萬事に老練な遊び客。風流曲三味線「いたり大盡のしだしを見習ひ」

いたりぢやや 至茶屋。上等の茶屋。置土祿五「南江のいたり茶屋に遊んで、つらつら鐵眼建立の唐づくり詠めて」

いたりどこ 至床。男色大鑑八「夜の編笠けしれ者、いたり床にしかけ、伽羅の焼き殻下されませいと」

いたりばなし 至話。巧みに物知りがほに語る話。浮世親仁氣質「それから、むしやうに至り話」

いたりふう 至風。いきな風。曾我虎磨上「忍び出掛けのいたり風」

いたりまつしや 至末社。ぬけ目のない太鼓持。風流曲三味線「至り末社にもまれて、傾國の意氣力を聞き覚え」

いたりものがたり 至物語。「いたりばなし」と同じ。一代女「此中の古歌を大納言殿にお尋ね申したが、拙者聞いた通り、在原の元方に極まりたなど、いたり」語二つ三つ」

いたりれろり 至料理。上等な料理。永代藏〱「朝夕の鴨鱈杉焼のいたり料理が胸につかへて迷惑」

いちかねにをとこ 一金二男。遊興に大切なものは、第一に金、第二に男ぶり。音曲に「一聲二節」といふもちり句。榮花咄五「音曲にも一聲二節と申すり、色甲通ひもその通り」金二男と申すり、

いちかはりう 市川流。當時、京都在住の琴師、市川檢校の流。西鶴の作の長歌「春日野」は、市川檢校が作曲したといふ。二代男三「市川流の琴かと疑はれ」

いちがらう 一家老。第一の家老。家老の最上席者。武道傳來記「妻女は一家老市川右衛門息女」

いちげん 一見。(一)初対面。萬年草上「一見に馴れ〱しき事ながら、同國のよしみに申し、御落涙の様子」。(二)遊里で或遊女に初めて會ふこと。初會。天網島上「痛はしとも笑止とも、一見ながら武士の役、見殺しにはなりがたし」

いちげんきやく 一見客。初対面の客。初會の客。生玉心中上「さが大和の一言客が、今日は天満の社内の茶屋で、酒と出かけて遊ばんと」

いちご 一期。(一)生涯。一代。傾城酒呑童子三「五十貫とやらに、私が一期を賣渡す」。(二)生れてこの方。これまでの生涯。松風村雨東帶鑑三「一期に逢はぬ姉妹に、廻り逢ふも互ひの力」

いちごけいせい 一期傾城。一生を遊廓で暮らす傾城

一期と思ふ 一生連れ添はうと思ふ。二枚繪草紙上「一期と思ふ女房を、我が物顔の見憎さに、いらつは戀のくせなれども」

一期の始 生れて始めて。最明寺殿百人上臈上「ほんに男に手を捉られた、一期の始めにあた胴慾な。痕がひり〱ひりひりする」

一期の男 一生離れまいと思ふ男。一代

男四「二期の男に毒を飼ひて、そなたに思ひ替へしに、早くも見捨て給ひぬ」

いちざあそび 一座遊。廓詞。遊客同志が、各自の相手の妓を伴つて、座敷を一つにして宴樂すること。油地獄下「扇で忍び茶屋の客、一座あそびは女房めく」

いちざながれ 一座流。廓詞。一度のなじめで後は關係しないこと。一度同座したのみの仲。天網島下「さすが一座流の勤の者、義理知らず偽り者と(中略)おさん様の蔑しみ」

いちじがき 一字書。いくつかの文字を、一字のやうに、つづけてくづして書くこと。天網島下「光りは暗き門行燈、大和屋傳兵衛を一字書き」

いちじさんばい 一字三拜。一字書くごとに三度禮拜すること。いちじさんら(「一字三禮」のこと)。

いちだいこけ 一代後家。一生を寡婦で暮さうとする女。永代藏五「一代後家をせんさくして、彼是年ふるうちに」

いちだん 一段ひとときは。一層(よい)。油地獄中「扱はおかちが祈禱をなさるるか、一だんく」

いちだんな 一旦那。最も多く財物を喜

捨する檀家。第一の旦那。胸算用五「其跡から一旦那の一人子、金銀を使ひすごし(中略)母親の才覺にて御坊様へ(中略)預けに遣はしける」

いちでし 一弟子。第一の弟子。一番弟子。心中二枚繪草紙上「おれも鳥の一弟子で、よつほど節は覺えたが」

一度は思案二度は不思議(謔) 初め一度は思案するが、二度目は無分別になる。冥途飛脚上「一度は思案二度は不思議、三度飛脚、戻れば合せて六道の冥途の飛脚と」

いちにくじふ 一二九十。陰陽家が、人の脈とその死ぬ時期との關係を考へていふこと。「知死期、上旬一二九十年午卯酉、三四五丑未辰戌、六七八寅申巳亥」(節用大全)。扱は水の朝日下「あれ寺町の鐘の聲、一二九十は七七の、七つの知死期」

いちにちがひ 一日買。廓の遊女を一日中買ひ占めること。

いちにちはさみ 一日挾。一日おき。隔日。一代男六「何れを思ひ、何れを思ふまじきにあらねば、一日はさみにあひぬ」

意地にも我にも 意地を張つても、我慢

をしても。平家女護鳥五「づなう草臥た意地にも我にも、百里足らず二日にはきつい道」

いちねんきり 一年切。期限を一年とすること。武道傳來記八「夢樂の御方へ申して一年切に、其身とつかひ女と二人を仕着の外銀百五十拾目に極め」

一念五百生 佛語。僅かに一念の妄想を浮べたものも、五百生の長い生死に互つてその報いを受けること。男色大鑑六「念五百生と聞きし思入の魂の取付きたるよし」。懷硯三「此比丘尼墓所へ參る度毎に、石塔倒るゝ事の不思議や。一念五百生、懸念無量劫、誠なるかな」とは、大智度論の文句によつたのである。

一の裏は六 賽の目の一の裏(正反對側)は六であるので、悪い後は善いとの意。「ろく」は物事の正しく、完全なこと。

いちのかは 市の側。大阪淀川岸、天満橋の北詰の上手から、龍田町に至る間をいふ。天網島中「日は短し夕飯時、市の側まで使にいて、玉は何してゐる事ぞ」

いちのやぶし 一谷節。一谷十郎兵衛のことを唄つたもの。その節づけ。俗つ

れづれニ「四挺三味線を弾きかけ、一のやの十郎兵衛節を聲揃へて謡ひ」  
**いちばなかける** 一番最初に驅ける。楯狩劍本地「こゝに隠れ、かしこにうろたへ、いちばなかけて逃げてけり」

**いちばなたて** いちぢるしく、きは立つて。相崎五「杖のふりの下くゝる、雪の素肌の白々と、御客よりも限照いちばな立て、コレハ〜びやくらいどうもいへぬもの」

**いちばんうし** 一番牛。極めて大きい牛。置土置三「親の代より木綿賣りける銀子を貯めて、かためて見ば、一番牛の寝たほど譲り渡しぬ」

**いちばんだいこ** 一番太鼓。芝居の詞。顔見世狂言の初日の八つ時(午前二時)に、最初に打つ太鼓。二代男「一番太鼓を拍ち、お客立たしやりませいの聲忙しく、起きねばならぬ様子になりぬ」

**いちばんによぼう** 一番女房。最も働きある女奉公人。第一流どころの下女。織留五「一番女房の大所の勝手にあふ者、給銀四十五匁から五十目に極めて置きしに」

**いちばんをとこ** 一番男。勝れて大きな男。第一流の大男。萬文反古二「一番男

の六尺揃へて」  
**いちひめ** 市姫。市を守る女神。  
**いちぶ** 一分。一步。いちぶきん(一分金)、又はいちぶぎん(一分銀)のこと。金銀ともに、一兩の四分の一に相當するもの。いちぶこぼん。一分小判。一代女三「今くれかぬる一步を一握つづ蒔きければ」

**いちぶん** 一分。一樣。同様。同關係。一代男三「我とは兄弟一ぶん、申しかはせしにと、しみ〜弔ひ」

**いちぶん** 一分。其の人、一人の分際。面目。一身に負うた義理。稀に「いちぶ」ともいふ。傾城酒吞童子四「後指を指さるゝとは知らなんだ。一分が廢つた」。壽門松上「三度四たびふられては、此の彦介一分立たぬ、半分もたたぬ」

**いちぶんだて** 一分を立てようと思氣込むこと。「だて」は、さかしらだて、たのもしだて、などいふ「だて」で、接尾語的になつたもの。百日曾我四「それでは海野が一分たたず、了簡しなほせ朝比奈といへば、義秀えせ笑ひ、イヤこしやくな一分だて」

**いちむぢ** 意地無地。とやかく。ぐづぐづ。心中萬年草中「いたづらも悪性も、

男持たぬ先ならば、いはれぬ構ひぢやあるまいか。それに意地むぢいふ人は、ほからかいて置かしやんせ」

**いちもつ** 一物。胸中にたくらんであること。丹波與作中「どうで心に一物有る、わけを聞かねば遣りはせぬ」

**いちもんがひ** 一門甲斐。一家一族の間柄であるしるし。重井筒上「銀こそは成るまいし、判つくほどは一門がひ。殊に(中略)義理はかゝれず(中略)それで判を押しました」

**いちもんじがさ** 一文字笠。編笠の一種。菅又は笥皮で造る。圓形で垂れが少なく、殆ど平らなもの、天和頃の流行と見え、師宣の畫で屢々



接する。いちもんじ。でんちゅう。  
**いちもんじや** 一文字屋。京都鳥原の遊女屋の名。置土産四「京では一文字屋の今唐土(遊女の名)、大阪では扇屋の荻野逢へり」

**いちもんぶつう** 一文不通。一字も讀めぬこと。無智文盲。一文不知。油地獄上「一文不通の衆生まで、千手のお手のつかみどり」

**いちもんめかう** 一匁講。胸算用三「近年

と

我々が働きて、わづかなる身代の者共金銀を仕出し、二百貫目三百貫目、或は五百貫目までの銀持二十八人語らひ、一奴講といふ事を結び、毎月宿も定めず、一奴の仕出し飯を誂へ、下戸も上戸も酒なしに、遊び事にも始末第一、氣のつまる穿鑿なり」

一 奴取の女郎 銀一奴で買はれる女郎。置土産ニ「伏見屋の端局に、勝之丞とて一奴取の女郎が、節装束して人のうしろより来り」

一 文惜みの四十六奴を知らず 「一文惜みの百知らず」といふ諺のもぢり。四十六奴は太夫の揚代。好色山來揃ニ「太夫四十六奴、もらひの集禮外に十六奴(大阪新町の部)」。一代男五「傾城狂ひの始末と、下手に月代刺らすほど、世にいやなるものはなし(中略)」。一文惜みの四十六奴を知らず。尙、「四十六奴」の條參照。

いちやきり 一夜切。一夜かぎりのあそび。一夜妻を買ふこと。武道傳來記「旅人も一夜切の慰みに浮かれ、かざし扇するもあり」

いちやけんぎやう 一夜檢校。金千兩を納めれば、直ちに檢校になり得る内證

の便法があつたので、この語が出来たが、後には轉じて、俄か大盡といふ意になつた博多小女郎上「ちくら手くらの一夜檢校、終に日馴れぬ出立ばえ」

いちやづま 一夜妻。一夜だけの妻。ひとよづま。吉野都女揃「御身は定めて思ひ者か一夜妻、かりの情を忘れかね」

いちやながれ 一夜流。いちざながれ(一座流)の類語  
いちやをんな 一夜女。一夜妻とおなじ。いちらく 一落。一件といふにおなじ。菅原傳授手習鑑「此の一落は今日が目まで、わざとて、御へ知らしませぬ。それも何故」

いちりづか 一里塚。一里の道程毎に、標として築いたもの。塚上には木を植ゑたものである。大句數上「行秋や道せばからぬ一里塚、三人ならびに先手の者ども」

いちあつてう 壹越調。支那でいふ音楽の調子で、十二律の第一をいふ。日本振袖始「ヲ、覺えがなうて大將がなるものかと、壹越調をかすり上げ」

いちめん 一回。おしなべて。「みな」の意。轉じて、「少しも」、「一向」、「さらに」などの意となる。蟬丸「入道親子仰天

し、一回に心得ず、いか様仔細候はん、承らんと」

一を打つて萬を知れ (諺) 一事を見て萬事を察せよ。「一を以て萬を知る」、「一を以て萬を察す」ともいふ。薩摩歌中「ヲ、それ、お蝶の父の言やる逆り、一を打て萬を知れ」

いつかう 一向。いつその事。むしろ。大磯虎雜物語「さもなくば一向に時宗が首討て、返す刀に祐成も腹切るまでに候」

いつかがへり 五日歸。婚禮後、五日目に生家に歸ること。吉野都女揃「二王の様な大入道、五日歸りの花嫁と、しやなら」

いつかく 一角。一分(歩)銀又は一分金のこと。長方形であるのでかく呼んだ。こつぶ。重井筒上「人置の娘をかくでたのうだ」。一代女「一人を金一角に定めおきしは」

いつかがれんきりがれん 日本西王母三「弓取の言ひも習はぬ駕かき詞、成り下りたりだりばんどういつかがれんきりがれん駕やろいとぞ涙ぐむ」。振賣駕鼻などの用ひる隠語に、一をソク、二をブリ、三をキリ、四をダリ、五を

ガレン、六をロンジ、七をサイタン、八をバンドウといふ(鬼園小説)。

いつかんぼう 一開坊。大阪一開、即ち「一開紙子」、一開張の創製者として傳へられる人のことか。男色大鑑七、「一開坊の案内古跡物語も耳に入らず」

一季半季の者 奉公人の總稱。一年ぎめの者、半年ぎめのもの。歌念佛申「母様は傾城と、一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨」

いつきやく 一客。第一の客。唯一の客。曾根崎心中「さて話す事がある。これの初が一客平野屋徳兵衛めが」

いつくわくづけ 一晝附。男色大鑑四「それぞれに念頃らしき男二人づつ片寄りで、耳近くさやく風情、あるひは添寝、又は一晝附の筆慰み、扱は扇引するもあり」。以上は舟の中の事である。二人以上の者が相寄つて、互に一筆づつ書いて、一つの思ひがけぬ繪を仕上げて戯れることか、又は勝負事をして負けたものに墨を塗る戯れかと、「嬉遊笑覽」でも疑つてゐるが、上記の文に據れば、前説に従ふべきであらう。繪に限らず、文字でもよきさうに思はれる。

いつくわんちやう 一貫町。鳥原遊廓の大門口に接した町の名。編笠を貸す茶屋などのあるところ。傾城反魂香中「一貫町の茶屋が、よし簀の、よしやよし、里になげ打つ命ぞと」

一災起れば二災起る (諺) 凶事は一度あれば必ず二度あるもの。萬年草中「一さい起れば二さい起る、お國からは弟の敵ぢやとやら申して、理窟臭い侍が背打を喰はする」

一切經 二代男「或時伊丹の明尊といふ男、一切經といふ法師交りに。一切經は佛敎に於ける經・律・論の三藏全部七千餘卷の總稱。それを法師の名とした頓智がおもしろい。」

いつさう 一左右。たより。音信。歌念佛上「萬事は國より一左右せん。先づお歸り」

いつさく 一作。一趣向。一工夫。一策。天下馬「それにつき上書に一作あり」と。吉野都女楠「人目を憚り長持とは、宰相殿の一作」

いつさつ 一札。書きもの一枚。證文一通。歌念佛上「一札巻いて勘十郎、懷中にしつかと收め」

いつさつたしやう 一殺多生。一人を殺して多くの人をいかず。一人死んで他人の多くを救ふ。懷硯三「所詮我一人の越度なり、一殺多生と、孝との道に叶ふと思ひ定め」

一子相傳 親から其の「子だけに直傳する。その祕事。槍の權三上「東山殿より嫡傳、一子相傳の大事なれば」

一尺八寸の雲行 永代藏「時津風靜かに日和見乗り覺えて、西國の一尺八寸といへる雲行も三日前より心得て、今程舟路の慥なる事にぞ」

一種一瓶 一種の肴と一瓶の酒と。酒と肴と。源氏冷泉節上「人別に一種一瓶して、冷ゆる野がけの暖め酒」

一升入る袋は海川でも一升 (諺) 物には分量がきまつてゐる。又、事實はあらそはれぬなどの譬。萬年草中「京大阪では、其手のもがり(騙瞞)は廢つた。(中略)ヤイ一升入る袋は海川でも一升。肩のよいものの仕合見よ」

いつすんつぼね 一寸局。私娼の一種。江戸吉原の河岸にあつた遊女屋の局女郎の揚代三奴なのを「三寸局」、五奴なのを「五寸局」など呼んだのに倣つて、一奴位で賣るものと呼んだもの。これは元祿の頃、一度廢れたが、天明の頃

再興した由(笑ふ女)

いつすぬげ 一寸抜。當座のがれ。いつときしのぎ。「一寸のがれ」ともいふ。

遊君三世相。「一寸ぬげは言はせぬ」

いつせき 一跡。(い、ちどき。またたく間。永代藏三「冬神鳴(中略)落ちたくり、一せきを一つの鍋釜、微塵落灰にくだかれ。」特有。持ちまへ。唄山姥「ヤアラ丁稚奴、味をやるよ、身が一せきの臺詞の裏を食はずは曲者」)

いつせん 一錢。錢(ぜに)一文。錢は何文(もん)と數へる。百文を一緡(さし)として持つのが普通であつた。金は兩で銀は匁で數へる。この諸等的關係は、時に相場の高低はあつたが、大約、錢八十文位||銀一匁。銀六十匁||金一兩。俗つれど「百緡より一文抜きて投げ出し、これ信心の一錢にはあらず、これまで付かれし勢力を感じぬ」

一錢得がたし (謔) 金錢のまうけにくいことを言つたもの。出世瀧徳上「此の度吃度身を懲らし、一錢得がたしといふことを、我が魂に思ひ知らせ」

いつぞ いつか。早晚。一代女「いつぞの首尾にくだきかゝらば」

いつそに ほんとに。じつに。一代男「

「露をくだきて玉ちる風情、一木もやどりのたよりならねば、いつそに濡れた袖笠」

いつそになる 男女の仲深くなつて、人の譏りも構はぬやうになること(色道大鑑)。

いつちう 一中(いつちゆう) 二代男「光叔一中交りに楊弓の會も詠め」。

留「楊弓は一中がかりに大金具の看板」

いつちうぶし 一中節(いつちゆうぶし) 淨瑠璃節の一。延寶年中、都一中が山本土佐掾その他の流を折衷して作り出したもの。元祿寶永以後盛んに流行した。女腹切中「一中節の川風に、聲も廣がる扇屋の一」

一丁三所 衣物の縫目などのあらいと。一代女「當世衣裳の縫好み、いやながら請け取りて、一丁三所にくけてやりしも無理なり」

いつつ 五つ。時の名。午前午後通じて、今の八時頃。重井筒下「こは竹田が夜は何時ぞ。五つ六つ四つ千日寺の鐘も八つか七つの芝居」今の十二時を九つとして二時間毎に八つ七つ六つと數へて四つに至る。

いつつだろぐ 五道具。武家が外出する時、列中に立てる五本の槍。又、槍の外に打物立傘などを加へた五本をもいふ。曾我會稽山「大名小路の升形より、引馬に五つ道具、乗物の戸八文字に開かせ」

いつつち 五地。小鼓を打つ手の名。傾城酒吞童子「三つ地五つ地一セイの音に紛らす忍び路や」

いつつのかりもの 五つの借物。地・水・火・風・空の五つをいふ。佛説に、この五者が法界に別過し、人間の身體をも構成してゐる元素であるとしてあるので「借物」といふ。五輪。一休和尚の狂歌に、「借用の地水火風返辨申す今月今日といふ前書で、かりおきし五つの物を四つかへし本來空に今ぞおもむく」。

一代男「世は五つの借物、取りに來たとき閻魔大王へ返さうまで」。物種集上「されば身は五つのかり物ばかりにて」

(西鶴句)

いつつのかをり 五つの香。釋迦如來誕生會「旃檀、鷄舌、沈水香、丁子香、安息香、五つの香まじはつて、四河の流も芬々たり」

いつつをのくるま 五緒車。五緒の籠を



かけた牛車。(五緒の簾とは、左右の縁に平行して垂れた五條の風帯ある簾のこと)。堀川波鼓下「玉しきの、御垣にかこふ五緒の車」

いつてぶね 五手舟。十挺櫓の舟。即ち十人で漕ぐ舟。吉野郡女楠四「帆を十分にあげた所が、面白いよの、何にたとへん五手舟、鹽風寒く吹きかよふ」。伊豆手舟。

いつてんが 一天下。天下全體。壽の門松中「いつてたもるなく」。一天下の人よりも、そなた一人に恥かしい」

いつときだいく 一時大工。一時(今の二時間)を限つて雇ふ大工。二十不孝「一時大工六分、行水の湯沸して、一荷を六文」

いつときぶみ 一時文。一とき毎に書いて遣る手紙。萬文反古五「晝夜に十二の一時文、女郎のする程の事は、残らずかたさまへ勤め申候」

いつとく 一滴のこと。蟬丸五「初月は一氣體中に生まれ、其形あたかも鶏卵の如し。これ本来」とくの精水」

いづな 飯綱。狐を使ふ妖術。その術を行ふ者。信濃國戸隠山の飯綱の神から起るといふ。いづなつかひ。孕常盤一

「何條その小童、魔法・飯綱を行ふとも、變化鬼神も討てば討つ」。茶根尼天の法。

偽りの時雨 陰曆十月降る時雨。初時雨。續後拾遺集定家の歌「偽のなき世なりけり神無月、たが誠よりしぐれそめけん」に據つたもの。萬文反古四「折ふし偽りの時雨ふりて、今市堤せくさんの木も、しばしの宿にはなりがたく」。五人女三「是非なく日數ふる時雨も偽りのはじめごろ」

いつはりへうり 偽表裏。偽りと表裏との重言で、やはり「いつはり」のこと。國姓爺後日合戦三「稚き孫めに偽り表裏を稽古させ、うそつきに仕立つるか」

いづぶくいつしやう 一腹一生。同じ父母から生れた兄弟。姉妹。(異父又は異母の兄弟姉妹に對していふ)。百日曾我四「一腹一生の兄弟が親の敵をうつつ申すに、しらぬ貌する人間や候ふべき」。一腹一種ともいふ。

一過上人 「過く」といふ副詞の様に用ひた。俗つれん五「此身も色道の宿を定めず、一過上人に藤澤を越えて江戸に下りしに」。藤澤の遊行寺が、一過上人に開かれたといふからの洒落。別に二

代男一「八宗見學、女色一過上人の勧めに」なども洒落てゐる。

いつぼん 一本。同類。一味。卯月紅葉上「おのれが弟の傳三郎、今までおのれら一本と思ひしに、奇特にも」

いつまでぐさ 佛甲草(めのまんねんぐさ)の異名。いつもごと いつもあること。例の事。珍しくない事。薩摩歌中「いつも事なり、親ながら、おまんも餘り堪へかね、もうよい加減に黙らんせ」

いつも正月 常に氣樂なさま。置土産四「いつも正月の道安といへる按摩取」

いつてづら 出頬。出しゃばること。又、その顔を罵る語。最明寺殿百人上臈下「如何なる者ぞ見苦しや。あのさまで此の中へ出頬は何事と一度にどつと笑ふ聲」

いてふ 銀杏。髮の形。「いてふがしら」の略。曾我五人兄弟五「烏羽玉の髮は銀杏か立てかけか、おすき次第の還俗といてふがしら 銀杏頭。男子の鬚の一種。今の女の「いてふがへし」と異なつて、はけさきを銀杏の葉の形に末廣く平めたもの。六法むきの陽氣ものが好んで結んだといふ。

5

ん

いとうげんきち 伊藤源吉。伊藤仁齋の

こと。永代藏ニ「朝に伊藤源吉に道を聞

き、夕に飛鳥井殿の御鞠の色を見」

いとうち 絲打。絹絲で組んだもの。「う

つ」とは組むこと。男色大鑑ニ「葉菊の

五所紋、絲打の平帯、よしやづくりの

大小」

いとがたらげ 絲鹿峠。紀伊國有田郡糸

私の庄にある。

いとこづから 従兄弟の間柄。武道傳來

記「拙者ためには従弟づからなるが、

不慮に相果てける」

いとざくら 絲櫻。しだれざくらの異名。

二代男ニ「近衛殿の糸櫻、中院殿の歌ば

なし」

いとしばい いとほしい。かはいさう。

冥途飛脚中「肩の悪い梅川様、いとしば

い 川様お一人にとどめた」

いとしばげ かはいさうなさま。曾根崎

心中「それはそれはいとしばげに、微

塵わけは悪うなし」

雪女五枚羽子板中「いとしばなげに何

事ぞ、許したも頼む」

いとしばや かはいさうなことである

よ。出世瀧徳上「威陽宮も亡び時、一時

の間にいとしばや」

いとしらし 「いとし」とおなじ。かはい

らしい。一代男「いとしらしき坊様」

孕常盤四「ウウ〜といとしらしお

顔や。ほつかりと喰付きたい」

いとすぢ 絲筋。絲の筋から轉じて、

線などの結。一代女「常弄びしいとず

ち鳴らして戀慕の詩をうたへる」

いとづくり 絲作。料理の名。魚肉など

を絲のやうに細く切つて作つたもの。

二代男ニ「鯉の絲づくりも九軒では喰

はれず」

いとどかし 「いとど」といふ副詞に「か

し」といふ感歎詞を添へたもの。近松

の用例に「あはれかし」とあると同筆法

である。五人女ニ「椽屋いとどかし燃ゆ

る胸に焼きつけ」

く剃りさげ、兩鬢を狭く残して結ぶ。

あつび(厚鬢)に對し

ていふ。一代男「その

頃は捕手居合はやり

て、世の風俗も糸鬢に

して。陸摩歌上「これ〜前な糸鬢の、

鬢かりつけた鎌鼬奴」

いとほらし 「いとほし」とおなじ。

武道傳來記「いかなる縁にや是程い

とほらしき御方に逢ひ參らするも不

思議の一つ」

いとやもの 絲屋者。絲を賣る家に雇は

れてゐる者。殊にその女をいふ。一代

男ニ「小川の絲屋、室町のすあい、其外

して殿、妾にたよらぬ事なし」

糸より權三郎 俳優の名。「いとより」

は、もと延年舞に伴ひ、歌を歌ひなが

ら、篋(わく)に絲を繪つて巻きつつ、

男を待つといふ所作をしたもので、女

姿で演じたものであるといふ。これは

それを姓としたので、絲繪又は絲繪と

いんびん



本歌謡史)一代男ニ「我そもくは糸より權三郎殿にありしが」

いなおほせどり 稻負鳥。普通にせきれい(鶴鶴)の異名とされてゐるが、次の用例は、馬のことにしてゐる。丹波與作下「よさくく」と呼びよばれつる、いなおほせ鳥も音を入れて」

往なずに往ぬ 死ぬこと。胸算用ニ「そこな人、是非いねか、いなずにいんで見しよ」

いなせ 否と諾と。いやとか、おうとか。懷硯三「情なくいなせの捨言葉もなく」

傾城反魂香上「自らにいなせの返事。聞き切り參れとのお使」

いなづまばしり 稻妻走。電の如く斜に速く走ること。曾我會稽山ニ「あの馬留めよと云ふ程も、家來に乗りぬけ稻妻走り、尾筒を左手にから巻けば」

往にがけの駄賃 (諺)序でにすることの容易で利のあること。「いきがけの駄賃」ともいふ。丹波與作中「一人死のより人斬れば往にがけの駄賃ぢや」

犬が食ふ (諺)犬も食はぬ」といふ夫婦喧嘩のことを、かく肯定的にもいつた。出世景清ニ「阿古屋も心うち解けて、思ふあまりの戀ひいさかひ、犬が食ふと

5

や是ならん」

いぬつらばひ 犬のやうにつく這ふこと。唐船嶽今國姓爺下「犬つくばひにかつ突く這ひ」

いぬつり 犬釣。犬を毘などにかけて捕へること。又、それを商賣にしてゐるもの。即ち、その犬の皮などを剥いで賣ることを身過ぎにしたもの。手に定つた職のない男のする悪商賣とされてゐた。「犬を釣る」條を見よ。永代藏

「博奕仲間、山賣、人參のつき付、筒もたせ、犬釣(中略)いかに身過なればとて人外なる手業する事」

犬に論語 (諺)折角理窟を説き聞かせても益のないこと。

犬骨折つて鷹に取らる (諺)犬が追出した獲物を鷹に取られる。自分の手柄を他人に奪はれる。

犬も傍輩、魔も傍輩 (諺)同じ主を持つては氣のあはれない者同士も傍輩は傍輩である。仲が悪くても同僚には同僚の義理がある筈。賀古教信七墓廻「かういふ我も御扶持人、犬も傍輩魔も傍輩、この有様は何事ぞ」

いぬゐ 犬居。犬が前足を立てて坐してゐるやうな形。尻餅ついた形。曾我會

稽山四「百手を碎く氣も弱り、大居にどうと轉びしが」

犬を釣る 或はわな(罟)じかけにより、或は好餌を與へなどして野良犬を捕へる。つまり、犬をだまして捕へ、その皮など剥いて賣ることである。いぬつり(犬釣)の條参照。武道傳來記八「終夜野に出て、里の境垣に輪穴(わな)かけて犬を釣りにて之を賣り」。二十不孝一「日暮しに男は犬を釣りをれば、己れは髪を油を賣れど」

いねつむ 稻積。「寝る」を思んでいふ、正月の詞。元日から寝ねふすといふは不吉であるので、稻にかけていふ。烏帽子折五「よねのいねつみて、漏らすな漏らさじひめ初め」

いのちがはり 命代。大切なもの。命にも代ふべき品。曾根崎心中「此の金がなければわれ等も死なねばならぬ、命がはりの命なれども」

いのちがへ 命換。前條と同じ。博多小女郎浪枕中「命がへの割符をおやちに預けたとはどこへ、うまい事いふないふな」

いのちがらり 命ぐるみ。「がらり」とは、今でも、「大約」といふ意味に或地方で

5

は使つてゐる語。下例では「全部」「全體」といふ意。出世瀧徳下「山城屋といふくつわへ、中年四年四百兩、命がらりに身を賣りて」

いのちぎり 命をかけてすること。一代男「三笠に逢ひよめ、何事も命ぎりと申し合せて」

いのちさた 命沙汰。生命にかまはるること。生玉心中「夫れがぞもとに嘉平次が、うろたへ始め命沙汰に及んだ」

いのちしらす 命不知。(一)命を惜しまぬ振舞。又、さう振舞ふ人。(二)物の丈夫で破れぬこと。永代藏「この手袖の碁盤縞は、命しらすとて親仁の着られしが、思へば惜しき命」

いのちだい 命を償ふ代金。丹波與作中「これ見さんせと苧桶より金取出し、とつ様の命代落付いて下さんせ」

いのちづく 命をかけてのこと。命がけ。「づく」は「腕づく」「金づく」などの「づく」で、「盡く」の意。

いのちとり 命取。身命を忘れさせる程の美人。美少年。新小夜嵐物語下「堺町の名物、命取りの奴」

いのちぬすびと 命盗人。徒らに長命を食る人。一代男「兼好が見たらば、命

盗人と申すべき婆あり」

命の相場が一分五厘 (諺) 命の軽いことの譬。傾城反魂香上「首がけの博奕、命の相場が一分五厘、浮世又平と名乗つては」。大職冠「一分五厘に見限りし、浮世のならひぞ定めなき」これは、浮世を軽く見た譬。

命の洗濯 壽命の延びるほどの氣ばらし。一代男「今日よりは色里の衣装がさね、これを見ること命の洗濯」

命の洗濯講 命の洗濯をする爲の講(一種の會)。傾城色三味線「手代共十人ばかり寄合ひ、命の洗濯講といふを始め」

いのちのたま 命の玉。きんたま(舉丸)の異名。油地獄上「大事の命の玉、縮み込むほど蹴付けられ」

いのちみやうが 命冥加。神佛の冥々の加護によつて、不思議に命の助かること。命冥利。二十不孝「命冥加のある盗人」。槍權三下「やれ〜あぶなや。命冥加な孫共や。もし火を付けたらよいものか」

いのちもちらひ 命貰ひ。「命乞ひ」に同じ。

いはうじ いへぬし(家主)。但し女にいふ。即ち主婦のこと。丹波與作中「わめく聲に出女とも、いはうじ諸共表に出

る」。永代藏五「拙者が旦那は人に變り、定まる女房はいはうじなし」

岩木を分けぬ人心 岩木をわけて生れたでもない、流石に情を知つた人心。重井筒中「あるじも一旦懲らしめ、さのみ哀れと思ふにや(中略)岩木を分けぬ人心、奥の一間に入りけり」

いはく 曰。理由。仔細。事情。わけ。天網島上「お道理〜、いはくを御存じない故、御不審の立つ筈」

いはぐみ 岩組。岩が組みあつたやうになつてゐるところ。庭園などに作つた岩山。五人女五「杉村に入れば、後にあらけなき岩ぐみありて、西の方に洞ふかく」

いはざ 岩座。佛像の臺座の、岩石のやうな形をしたもの。又、一般に神佛を安置して祈禱法事を行ふ壇。胸算用「御幣の動き出づるは、立て置きたる岩座に壺ありて、其の中に鱈を生けおきける」

いはせの森 大和國岩瀬の森。紅葉の名所。

いはとび 岩飛。高い岩上から、水に飛入ることを巧みにする、水練に達した男のあだ名。五人女三「此濱の獵師調練

して、岩飛とて水入の男をひそかに二人やとひて」

いはひづき 祝月。忌月。正、五、九の三月をいふ。日次紀事に「凡一年中、正、五、九月凶月也。故忌之、却謂祝月」とあり、殊に九月については「九月、祝月。自今日至九日武家拜。地下良賤、各著袷、今日互相賀、俗曰祝月」とあり、よく神詣などしたのである。女腹切上「大事の甥が出世の門、祝ひ月を心がけ、愛宕かけての登舟」

いはらぎ童子 近松の戯曲「傾城酒呑童子」の主人公。これは、暗に、茨木屋幸齋(大阪の豪商、新町の妓樓の主人。常に緞子の外套を着用するので、緞子大盡と呼ばれたといふ。寶永中江戸に下つて、紀文と豪遊を競つたことがある。享保三年、その豪奢の甚しいかどで放たれた)を仄めかしたものといはれる。て、なし金の攫み取り、茨木童子と名に高く「傾城酒呑童子の三」

いはれざる 無用の。入らざる。武道傳來記五「生若輩なる口よりいはれざる過言」

いはれぬ 前條と同じ。用なき。それには及ばぬ。冥途飛脚中「只さへ貰ふこの

小判、かやすものをいはれぬ辭儀」。油地獄中「着婆でもいかぬ死病、いはれぬ氣骨をらるる」

いはわれみづ 岩割水。岩にせかれて、割れわかれて流れる水。釋迦如來誕生會三「岩割れ水に脈を曲げて、耳を洗へるよすがとなり、」

いはるかだいふぶし 岩井嘉太夫節。織留「小歌は岩井嘉太夫ぶし」

いはるはんしらう 岩井半四郎。大阪の俳優。初世は承應元年の生れ。元祿以前から狂言座の太夫元で、五世市川海老藏の弟子となり、名優嵐三右衛門と並稱された。元祿十二年歿。尙、二世三世と襲名して明治にまで及んだ。下の例は、初世であらう。男色大鑑八「行末の藝の事までも岩井半四郎と素面の時沙汰し置きぬ」。重井筒下「重井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎」

いひあがる 言ひつる。いふ言が激し

いひおち 言落。いへば却つて非に落ち

いひがかり 言掛。(言ひかかつたこと。いひ出して引かれないこと。(無實の事を誣むこと。)

いひかけ 前條(言)とおなじ。曾根崎心中を四五人して、ぶつたり踏んだり」

いひがひ 飯匙。飯具。飯を盛る具。杓子。二代男「野秋は飯を盛る管と定めければ、遂に飯がひ知らぬとは」

いひがひない 言甲斐無い。「言ふねうちなし」の意から轉じて、「埒あかぬ」、「意氣地なし」などの意になつた。釋迦如來誕生會二「大事の胤が胎内に、宿り給へばお命二つ。エ、言甲斐ない。早う早う」

いひかぶせ 罪をきせること。罪をいひかぶせること。緋縮緬卯月紅葉上「咎もない傳三郎に言ひかぶせ仕やるな」

いひかぶり かこつげごと。歌念佛上「形見の烏帽子は、行平のいひかぶり」

いひかふる 言被。いひ出して、わざと不利なことを身に被る。室町千疊敷「これ申し御臺様、かう並んだ三人は、皆殿様の手かけの身、格氣なされぬを悪いと申せば、身に言ひかぶるやうなれど」

5

**いひくろめる** 事實らしく言ひこしらへる。言葉でうまくごまかす。女腹切上「非の入りさうな事どもを、いひくろめたる情の程」

**いひげん** 遺言(ゆるごん)の訛。臨終に言ひ遺す言葉。萬文反古「旦那御いひげんの通り」同「貴様へ先づいひげんまかせ銀五十目の手形」

**いひじよ** 言條(いひでう)の訛。言ひぶがま。言ふところ。今宮心中上「それは我がまゝ、親のいひじよを背くかと、叱つても聞入れず」

**いひじらける** (言へば興がさめる。口きけばおもしろくなる。大職冠三「格氣したらば厭かれうかと、こらへてもこらへられず、いへばいふほど、いひじらけ」(言)話を中止する。

**いひたいがい** 言ひたいまま。卯月の潤色甲「女夫の衆が此のゐまを、酢でさいて飲むやうに、いひたいがいに云ひこめて」

**いひたて** 言立。言ひ張ること。口實。重井筒上「やあ、道ならちと送つて、それいひ立てに夜食くはうといふ事か」  
**いひなし** 言成。(言ひこしらへたこと。担造説。釋迦如來誕生會「それは人の

言成しよ。かゝる凡夫の身を以て(中略)中々思ひも寄らぬ事」(と)とりなしの仕やう。

**いひぶん** 言分。「いひぐさ」といふ意から轉じて、「いさかひ」「口喧嘩」などの意に用ひる。胸算用五「箱屋の九藏、今の先に掛乞と音分いたされまして、首締めて死なれまして御座る」

**言ふ事に槌の利く** 言ひつけることが、よく行はれるさま。恰も槌が釘にこたへるやうに、命令がよく實行されるに譬へる。俗つれ「依の數藏に積みて、金袋を擔げさせ、いふ事に槌のきくも、土釜頭巾を被つて、異見たらたらいはれし親仁の御蔭」

**いぶり** すねること。無理をいふこと。萬年草中「心に疵を持ちたれば、いぶりもならず、すねられず」

**いへうけ** 家請。やうけ。借家する時の保證人。たなうけ。一代男三「思へば假のうら店、三十日も定めなく、あそこに隠れ爰にかへて、家請の機嫌を取り」

**いへくら** 家藏。家の内に設けた土藏。うちくら。にはくら(庭藏)の對。永代藏三「表口廿間裏行六十五間を、家藏に立てつとけ」

四四

**家に杖つく頃** 五十歳の頃。體記、王制第五「五十杖ニ於家、六十杖ニ於郷、七十杖ニ於國、八十杖ニ於朝、九十者天子欲有問焉、則就其室、以珍從」。永代藏六「歴々の浪人、身を隠して、年も家に杖つく比なれば、さのみまとりの望みもなく」。新可笑記三「家に杖つく年まで堅固に勤め、一子に家督を譲り」

**いへのかぜ** 家の風。その家の傳へた流儀。いへかせ。「久方の月の桂も折るばかり、家の風をも吹かせてしがな」(拾遺集、雜上)の歌による。武道傳來記五「月に明かし花に暮らし、その家の風なれば歌道一しほに心をよせ」

**家をしる** 家を知る。家を治める。家の主人となる。永代藏三「忠助家をしてつて三十年餘り、勘定なしの無帳無分別」

**いほりがた** 庵形。紋所の「いほり」(鈍角二等邊三角形を屋根とし、それに二本長方形の柱をつけた形)のやうな形。俗つれ「庵形の挿櫛に切金の折菊」

**いほりにもつかう** 庵木瓜。紋所の名。百日曾我三「庵に木瓜付けたる挑燈こそ、祐經と見しはいかに」

**いまいり** 今入。新入。新に牢などに入

つて來ること。その人。一代男「奥より十人許の辭して、今入の小男、牢屋の作法にまかせ胴をうたすと立ちかきなる」

今牛若 現代に於ける牛若。「今」はすべて「現在、目前に於ける」などいふ意の語として名詞につけて用ひる。次の諸例を見よ。國性爺四「古木の松の片枝を、ずつばと切つて落せしは、今牛若ともいひつべし」

今中納言平さま 一代男二「左の方にわがさ、右の方にわか松と召され候ぞや、今中納言平様と名に立て」。是は謡曲「松風」の中納言行平のもぢり

今天神顔 二代男一「小川の糊屋の娘めが、今天神顔をしをつて」  
今文殊 平家女護馬一「智慧ことにするれば、今文殊ともあざ名せり」  
今六道 丹波與作中「今六道の次傳馬、三途の川を打ちまたぎ」

いまおり 今織。今風の織物。今どきの織方。永代藏二「下に絹物上に木綿の立縞を着て、大かた今織の後帯」。一代女四「耕地の今織、うしろ帯」

いまぎれ 今切。遠江國新居の鬮をいふ。女の鬮になつてゐたところ。一代男二

「抱の人に隙とりて、今切の女手形も、人の情にて立ちこし」  
いまだうしん 今道心。新參の道心者。頭を刺りたての出家。娥歌加留多四「なう、そもじも見れば今道心、さぞつむりが冷えさうや」

今の劍、昔の菜刀 「昔の劍、今の菜刀」といふ諺の逆用。永代藏四「程なく今の劍、昔の菜刀とさびて」

今の世は後生の晝にさがり 二十不孝三「淨土は二十八日を祝ふに、門徒は精進日といへり。今の世は後生の晝にさがり、西は極樂ぞ有り難し」

いまばし 今橋。大阪の町名。難波橋南詰の上手にあたる。今橋といふ橋の通り。永代藏一「今橋の片陰に錢見世出しけるに」

いまみや 今宮。今宮神社のこと。難波廿二社の一。茶臼山の西方、今宮村の内。卯月紅葉上「見たや見せたや難波橋、難波の今宮これからは」

いまぬすし 今井鮎。大矢數四「此秋より喰ひとまつたる今井鮎」。吉野都女楠四「木曾殿の御内に今井ずし、酒盛にかくれなき」騎當千の御者」  
いみもん 忌門。凶事のある際に開く門。

武道傳來記一「奥襟に婢の著物を打ちかけさせ、裏の忌門よりつれまして出しに」  
いもあらひ 一口。山城國久世郡にある地名。出世瀧徳中「はつめい月や一口、堤つたひの長繩手」

いもうとぢよろう 妹女郎。妹分の女郎。姉女郎に對する。  
いもかは 芋川。東海道筋、池鯉鮒と鳴海との間の地名。又、この地の名物、芋川うどんのこと。即ち、ひもかは。一代男二「芋川と、ふりに、(中略)所の名物とて、ひら饅頭を手馴れて」

いもせむすび 妹背結。夫婦の縁を結ぶこと。曾我會稽山三「こゝはの晴れと晴みし、一世一度の妹背結び、二人の嫁御、衣紋風」

いもふき 風吹。ふるふき(風呂吹)の類か。大矢數三「春の風芋吹にしてあたらうぞ、山々の雪残らぬ」)。嬉遊笑覽九「夷曲集、戀部題不知、めをとのみ入りぬる風呂はあかなく、せなに向ひて猶もいもふき」。ふるふき(風呂吹)參照。

いやかたぎ 嫌氣質。いやにかたくなな性質。きまじめ一方の氣風 男色大鑑

五「四十五人舞子ありしが、いづれいよかたぎの勤めといふ事もなく、招けばたよりに酒事にて暮し」。一代男三「袖を引けども合點せず、なるはいやかたぎなり」

いやつとめ 嫉妬。厭はしい勤。いやな仕事。榮花咄二「内のいや勤め、代りに鳥原がよひと思ひ」

いやどころ いや(嫉)なところ。感じの悪いところ。二代男七「紅の下結びも、いやどころ見えける」

いやふう いやらしい風。感じのよくない恰好。二代男六「小者に立綺の布圍を三尺手拭にからげさせ、このいや風に揚屋町に入ること」。一代女四「はやればとて今時の女、尻桁に掛けたる端紫の鹿子帯、目にしみ渡りて、さりとてはいや風なり」

いやもの 厭物。いとほしいもの。さらひなもの。武家義理物語三「されば、厭物を見せかけ、さりとて困りたる所」

いやをとこ 嫉男。いやと思ふ男。一代男七「五日はいばらきにて、御存じのいや男にあひ申候」

いよこの 俗語のはやし詞。増補「松の落葉」の唄「橋をいよこのかきやれ、

船橋を、橋をいよこの下には、橋の下には鶉の鳥が。今宮心中上「はしのいよ此の、はしの上にて賣る聲は、煙管岡扇煙草入」

いよしごげん いや〜御見。即ち、「いよよ御目にかゝつて」、「たび〜御めもじの別」などの意であらう。女腹切中「あかね別れの朝より、日文ちぶみの中」

附屑け、いよしごげんと書いたるは。「松の葉」二、文ことば「誠に文は閨の友、いよしごげんと書いたるは、ほだしの種か花すゝき」或は「いよよごげん」ともいふ。

いらたかじゆず 苛高珠數。つぶの平たい珠數。「いらたか」は角立つこと、粒が押しつぶしたやうになつて角立つてゐるのでいふ。油地獄中「いで一祈りと錫杖振立て、いらたか珠數、さらり〜と押揉んだり」

いらふ いろふとおなじ。さはる。いちる。冥途飛脚上「包は解くに及ぶまじ、いらうて見ても五十兩」

いらふ 入らつしやる。一代女二「夜前あなた方入らひて」

いらん むらん(遊亂)を見よ。卯月紅葉上「お龜與兵衛夫婦に譲り申候。外より

いらん少しもなし如件」  
いりあげる 入揚。つきこむ。人の爲に費用を出す。いれあげる。夕霧阿波鳴渡中「給分一文身につけず皆こなたに入りあげる」

いりえ 入縁。いりむこ。入夫。いりへ(入家)。胸算用三「男は米屋へ入縁して、惣故の老女房」

いりえん 入縁。前條とおなじ。又、その縁談。男色大鑑「歴々の入りえんあれども嘗て取りあはず」

入り替り男 胸算用四「此二三年入り替りといふ事を分別して、これにて持をあげける。互に懇なる亭主入り替りて留主をいたし、借錢乞の來る時を見合せ、御内儀私の銀は外に買ひ掛りとは違ひました、亭主の賜をくり出して埒を明くるといへば、外の掛乞どもは中濟まぬ事に思ひ、皆歸りける。これを大晦日の入り替り男とて、近年の仕出しなり」。即ち借金取を防ぐ一方法。

いりがや 煎樵。菓子の名。樵の實を煎つたもの。大下馬二「この中に御所落雁煎樵さま〜の菓子積みて」

いりこ 煎海鼠。なまこの腸をとつて、煮乾にしたもの。ほしこ。胸算用三



「地鳥の鴨いりこ串貝」

いりざげ 煎酒。酒に醬油、鯉節など入れて煮つめたもので、刺身や膾などの味附けに用ひる。出世瀧徳下「盃をさしみにせう。爰へちよくと御いり酒、うまい事ぢや」

いりびやうし 入拍子。打ち入れる拍子。一代女六「入拍子の撥撞木聞く人山をなして立重なりしに」

いりへ いらえ(入縁)とおなじ。重井筒上「徳兵衛殿はいりへと聞く」

いりまひ いらまへ(入前)の訛。收入。心中宵庚申中「れつきとしたる舞取つて、身の入りまひは上田の、田畠のせわ」

いりまへ 入前。(み)いり。收入。歌念佛上「清十郎といふ子を持つて、老の入りまへ暮しよく」。(入)入費。いりよく。いりめ。永代藏三「老の人前かしこく取り置き、世にある程の楽しみ暮し」

いり豆に花 (諺)決してあるまじきことの譬。永代藏五「一粒を野に埋みて、もし煮豆(いりまめ)に花の咲く事もやと待ちしに」

いりみ 入身。(相)撲の手の一、相手方に我が身を入れ込めて倒す法。(劍)術

の時、空手で立向ふことであるといふ。武道傳來記六「五助忝しと支度して(中略)次に竹刀、その入身には小石與四郎とて(中略)出でたるに、三本ながら突き止め」

いりめ 入目。入費。二代男七「太夫一年勤めるいりめを聞くに」

いりわけ 入譯。入りくんだ事情。理由。仔細。二枚繪草紙下「死んだ者が生返り、其のいり譯をいふにこそ(いふべからずの意)」

いりわり 前條とおなじ。萬年草中「こりやどうぞいのとおりわりも、いはず知らず泣居たり」

いりさやま 入佐山。但馬國出石郡宮内の此隅山につづく嶺で、歌の名所であった。今は位置が不明である。家隆の歌に「梓弓春のやよひも年月の入るさの山は花ものこらず」。一代男二「月はかきりありて入佐山、爰に但馬國かねほる里のほとりに」。大下馬三「入佐山の奥深く」。武道傳來記三「入佐山の麓に久松落月院といへる眞言寺」

いりちやう 入帳。入金を記しておく帳面。出納帳。釋迦如來誕生會四「悟りの道に入帳や、昔より、ある處にはあら

がねの、金銀は寶の最上」  
いれかへ 入替。うめあはせ。置土産五「この入替には思ひがけなき銀貫ひ給ふべし」

いれこぼち 入子鉢。大小組み合せた鉢。五人女二「棚より入子鉢をおるすとて」

いれこます 入子枡。一合・三合・五合。一升の四個の枡を重ねて一組としたもの。物種集上「入子枡はかりがたきは人ごころ」

いれじやうね 入性根。入れぢゑ。人から教へ込む考。百日曾我三「入れ性根する男あつて、勤め龜末にいたすに於ては」

いれずみ 入墨。(刑)の名、腕や額などに入れずみすること。(ほ)りもの。(入)れ筆。筆を加へること。雙生隅田川二「硯引き寄せ筆染めて、爰が眼と入れ墨の、寫ると等しく」

いれたて 自ら費用を出すこと。百日曾我三「あしだせきだにいたる迄、仕着のほかは身のいれたてとの定めなり」

いれつぶ 入粒。楠久「世物語上」入粒の柄鮫をほめ」

いれぼくろ 「いれずみ」の(に)おなじ。ほりもの。萬の文反古五「かたさまの年

と

5

の数二十七までの入れぼくろ、右ふともよにきせる焼

いろ 色。(一) 喪服のにび色。轉じて、葬儀の時の白衣。博多小女郎中「惣左衛門が葬禮にいろを著て供して見」(二) 情人。(三) 遊女。一代男二「今宵一夜と思ひながしかりける」(四) 遊廓。色町。胸算用ニ「寄合座敷も色近き所を去つて」

いろ 助詞「やら」の長崎方言。博多小女郎上「本踊いろ、唐子踊いろ、見事なこ

とばん」

いろあく 色悪。演劇で容姿は美しくてもも心中は奸邪な人物を表現する藝風を稱する。享保の頃、山中竹十郎といふ役者が始めたものであるといふ(日本演劇史)。

いろいと 色絲。三味線のこと。懷硯五

「美を飾りての女酒盛、撥音の色絲」

いろろはさ 色噺。色事のうはさ。浮世親仁形氣ニ「くつろいで色噺の仲間に入れてくれても苦しうない」

いろかご 色駕籠。遊女などの乗るかご。重井筒下「送り迎ひの色駕籠も、暫し途絶えばいづくにも、馴染々々の寝入花」

いろかはら 色川原。京都四條河原のこ

と。芝居小屋があり、男色を賣る若衆がゐたのでいふ。一代男八「京にて色川原、色里にて一座せし人々、世之介下りをめづらしく」

いろこ 色子。歌舞伎役者の男色を賣つたもの。かげま。子供俳優。胸算用ニ「酒の對手に色子ども、可愛や神ならぬ身の淺ましき」

いろこぼろし 色子が前髪にかけて戴いた紫色の帽子。

いろごゑ 色聲。色めかしい聲。一代女五「簾越しに色聲かけて、寄らしやりませいといふ」

いろさかぶり 色酒振。色めかしく、酒の座を巧みにもてなすさま。男色大鑑六「伊藤は古今の色酒振(中略)この太夫一人の仕掛にて格別世界の詠め」

いろざけ 色酒。色里で飲む酒。

いろざしき 色座敷。遊興の座敷。男色大鑑六「是ぞ出家に備はりし遊興、色座敷にも身の一大事を忘れず」

いろさど 色里。遊女の居る街。遊里。天網島上「酔興の餘り、色里にはある習ひ」

いろざみせん 色三味線。色三絃。いろじやみせん。遊里で弾く三味線。胸算

用ニ「遊び所の氣散じは、大晦日の色三絃、誰憚らぬ投節」

いろさわぎ 色騒。遊女など相手に騒ぐこと。置土産。「大阪の色さわぎ、天職より十五まで買ひあげ」

いろしかへ 色仕替。相手方の遊女を替へること。

いろしな 色品。(一) いろくの品。男色大鑑八「和朝にある程の事を色品詠め盡し」。(二) さまゝの手段。曾我五人兄弟ニ「色品替へて召さるれども」

いろじやうご 色上戸。酒を飲めば、顔色の赤くなる人。俳諧師手鑑「紅葉見や争ひかねて色上戸」

いろしり 色知。色の道をよく知つてゐる人。遊里などのことに慣れてゐるもの。二代男二「大阪より京の色しりの方へ、女郎狂ひを頼むのよし」

色そとに顯る 諺に「思ひ内にあれば色外にあらはる」。大學に「誠ニ於中ニ形ニ於外ニ。天網島上「ほんに色そとに顯はるでござんする。いかにも」紙治様と死ぬる約束」

いろちがへ 色違。驚きや怖れのために顔色のかはること。いろちがひ。戀八卦昔曆上「おさん親子ははつと許り肝

にこたへ胸にしみ、色ちがへする許りなり」

**いろぢやや** 色茶屋。色を賣るものを抱へおく茶屋。遊女屋(水茶屋の對)。新小夜嵐物語下「あれは色茶屋にして種類の菜好み」

**いろどこ** 色床。男女相ちぎる床。蟬丸「今宵は誓文がため、一世一度の色床は、佛もお氣の通らめと」

**いろどころ** 色處。色あそびするに都合よい處。人情のこまやかなところ。色の本場。博多小女郎上「上方は色處定めて深い譯がある。お咄あれ」

**いろともだち** 色友達。游興の友達。油地獄上「同商賣の色友達、はけの彌五郎」

**いろとり** 色鳥。いろ〜の鳥。五人女五「さし竿の中ほどを取りまはして、色鳥をねらひ給ひし事百たびなれども」

**いろなほし** 色直。昔の結婚式には、衣服調度室内の裝飾など、すべて白色を用ひる定めてあつたが、式後それらを常の色になほした。それが色直し。後には新婦が式服を別の色の衣服に着かへる事にのみいふ。一代男八「銚子、くはへの酒過ぎて、色直しの風情ありて」

**色の徳には隣あり** 論語里仁爲の「徳不孤必有鄰」をもちつた句。重井筒中「唐土の聖の曰く、色の徳には隣あり」

**色のない酒** 酌をする妓のない酒。女腹切上「どうでも色のない酒は飲まれぬと、にがい顔しながら、中腕にたつた三杯」

**いろはこもん** いろは小紋。「いろは」の文字を染め出した小紋模様であらう。椀久一世物語下「椀久は鼠色のいろは小紋の袷一つになつて」

**いろはぢやや** 以呂波茶屋。大阪道頓堀の濱側にあつて、板圍をし、内に床几を据ゑ芝居見物の人などの休憩に便した茶店。元祿十三年には合計四十八軒の水茶屋免許となり、いろは茶屋の稱呼はこれから起るといふ(南水漫遊續篇)。重井筒上「やあそんならいろは茶屋か。いえ〜、太郎左衛門橋筋に」

江戸では谷中と同名の水茶屋があつたが、それは私娼窟で玉代が四十八文であつた故であらうといふ。

**いろびと** 色人。「色を賣る人。色事の相手となる人。主として容色の美しい女。遊女。妓。一代男四「色人許り集り、酒飲みでありしが、石州(遊女の名)ひ

とつ受けて禿に申し付けて」。二代男一「近年の色人残らず、これに加筆せし」。

好色の男。粹人。浮世親仁形氣二「利銀取る事を、世の色人の傾城狂する程におもしろく思ひ込みて」

**いろふくさ** 色服紗。色染のしてある袷紗といふことか。下の例は、袷紗といつても「袷紗物」で、袋などのかかりに、煙草など包んだものであらう。一代男八「めい〜呑みの色服紗、呑みすての煙草盆」

**いろほがた** イロホの文字を染め出した模様。男色大鑑八「虎斑天鷲絨の羽織ばつと沙汰し侍る。勤め子の唐絨を着始めしは是を手本に、イロホ形曆小紋袖を争ひけると、平川吉六も有つて過ぎたる昔を思ひ出せり」(一代男五の三十七歳の條の挿繪に、これを着た女が見える)

**いろみなと** 色湊。遊女の居る港。色町のある湊。松風村雨東帯鑑四「神崎過ぎて音に聞く、此處ぞ江口の色湊」

**いろめ** 色目。けしき。やうす。五人女四「いよ〜思ひ極めて舌喰ひきる色の時、母親近く寄りて、しばしさ、やき申されしは」。女腹切上「叔母は色

目を悟られじと(中略)非の入りさうな事もをいひくろめたる」

いろやど 色宿。遊興する時の宿。遊女屋。二十不孝。「四條の色宿にて硯紙取出し、拂ひ方の覺書(中略)揚屋のとゞけ、野郎の花代」

いろゑぼし 色烏帽子。鈍色の烏帽子。永代藏五「葬禮のかし色ゑぼし、白小袖」

いあうじ 「いはうじ」におなじ。

鯛で精進おち 鯛のやうなつまらぬ魚肉で、精進落をするのはばかしくしいといふ處から、つまらぬものを相手として不義の名を取ることの愚なるにいふ。精進落は精進明ともいふ。精進の期を了つて肉食すること。堀川波鼓上「よく見れば下女子、エ、勿體なやいましくし。鯛で精進をおちようとした」

いわりじ 家童子。「いはうじ」又「いはうじ」に同じ。世の是沙汰「根引の松の色かへぬ家童子となるもあり」

いん 陰。光陰の陰で、年月、又、年齢の意。特に、四十歳以後をいふ。永代藏三「養生さかりを四十の陰まで、うかうか暮されし事よ」

いんか 印可。免許。ゆるし。師が弟子の藝道上達を證明すること。傾城反魂香上「今日より土佐の光澄と名づくべしと、印可の筆をあたふれば、修理はいたゞき墨を染め」

いんきよ 陰虛。漢方でいふ語。房事過度から来る神經衰弱。腎虛。大下馬「陰虛火動の氣色に極まじ、さりとは頼みすくなき身の上なり」

いんぎんこう 慇懃講。無禮講に對して、禮儀を保つてする集會。

いんぐわざらし 因果ざらし。業(ごふ)さらし。自分の罪業を他にさらすこと。又、その人。油地獄中「因果ざらしの物にならずに飽きはてた」

いんぐわにん 因果人。前世の惡業の報を受けた人。不運な人。因果者。丹波與作中「因果人ともごふ人とも」

因果は血のうち (諺) 因果は廻つて來るといふ譬。置土産三「因果は血のふちと人の笑ふも構はず、色里の文どもを庖丁の包紙にして見せる」

いんぐわばね 因果骨。勃起した陽物。松風村雨東帶鑑三「心で惚れたは氣の毒な、只いとしが因果骨、しみわたるとぞ笑ひける」

いんげん 因言。自慢。借上なこと。殊にかげでする無禮な言動。源氏冷泉節上「牛若とやら猿若とやらを韃に取つたるいんげんな」。天網島中「太兵衛めがいんげんこき、治兵衛身代いきついで、金に手づまつてなんどと、大阪中を觸れまはり」

いんげんがほ 因言顔。自慢顔。借上らしい面體。

いんげんちや 隠元茶。隠元禪師の始めたといふ唐茶の鍋煎。出し茶。煎じ出して飲む茶。

いんげんらし 隠元らし。「禪坊主らし」といふ意か。或は「高德の僧らしい」意か。隠元は承應三年明から來朝、我が國に於ける黃檗宗の始祖、宇治萬福寺の開山であるが、その固有名詞を形容詞的に用ひたのである。「孔子くさし」「古文眞寶なる」などの筆法。男色大鑑三「彼の山(高野山)の隠元らしき御法師の」

いんこく 隱國。國に隱退する。生國に隠れ住むこと。武家義理物語六「せめての働きに人々隱國いたさせ、世しづまつて後」

いんこく 陰國。北方の國。陰になつた

國。國性爺「穉軀は北、陰國にして月の國」

いんし 姪奴。容色を賣るもの。遊女。永代藏「姪奴の平生きよらを見するは渡世のためなり」

いんじやうだう 引聲堂。引聲念佛をする堂。日本では大阪天王寺に鳥羽法皇が建てられたのが創めであるといふ。引聲念佛とは、音聲に高低伸縮の調を附して佛名を稱へる一種の念佛。

いんじやじやうご 隠者上戸。飲むにしがたがって氣が塞いで行く癖のある酒のみ。

いんしんもの 音信物。贈り物。音信即ちおとづれの時などに遣はす品。いんもつ(音物)。萬文反古「物じて人に無心いふ前には念ごろにしかけ、又は音信物をつかひ、さまん、輕薄いふ」

いんす 印子。いんすきん(印子金)。極めてよく精鍊した舶來の純金。純金で作つた器物。晝夜用心記「かの本の印子の香爐は主に禮いうて返し」

いんだうせき 引導石。大阪天王寺西門石鳥居の南手にある。この石の邊に葬送の柩を置き、無常院の鐘を撞くと、聖徳太子がこの石上に影向あつて、亡

靈を善導引接し給ふとの傳説がある。

いんご 犬の子。小兒などが夢におそはれ、又物に怖れる時などに唱へる咒文の詞。賀教信七墓巡「お乳やめのと癖として、せなに子を負ひ寝させておいて、いんの子いんの子とゆたもなめなかけそ」

いんま いま(今)の訛。重井筒中「定めしいんまに來うほどに、まそつとしてから來て下され」

いんもつ 音物。贈物。進物。傾城反魂香中「方々の音物、樽よ肴よ巻物よ」

いんろろぎんちやく 印籠巾着。印籠のこと。腰に下げる小さい匣。もと印を入れたものであるが、後には薬を入れたものとなり、主として裝飾品となつた。三重又は五重にして緒で貫き、蒔繪など施して精巧に細工をしたもの。一代女「金づくりの木わきざし、いんろろぎんちやくをさげ」

うい 殊勝な。けなげな。かしこい。孕常盤「それ繩を解けよ。出來いたく」

う

うい坊主「ういらう うゐらう(外郎の唐音)か正しい。薬の名。透頂香(とうちんかう)のこと。元の歸化人、禮部員外郎陳延祐が、相州小田原で賣り始めたもの。大句数上「一步一歩と定めた假枕、浮世の旅は小田原外郎。丹波與作上「ヲ、飲みこんだ、小田原ういらう」。

うかし 浮かすもの。料理にいふ、汁の實。宵庚申上「かき立汁に小菜のうかし」

うかし 浮かすもの。料理にいふ、汁の實。宵庚申上「かき立汁に小菜のうかし」

うかし 浮かすもの。料理にいふ、汁の實。宵庚申上「かき立汁に小菜のうかし」

うかむせ 浮瀬。大阪天王寺の西にある料理屋の名。又、その家で珍藏する、大鮑の殻で作つた大盃の銘。心中紙屋治兵衛上「ほんに今日は大阪紙屋仲間の參會、この浮瀬で」と聞いた」



うかれがらす 浮かれ烏。夜の明るさに、

う

ねぐらに落ちつかず、鳴きさわぐ鳥。  
大職冠中「浮かれがらすの告げわたり、  
夜あけの空もほのく」と

うかれぞめき 「ぞめき」は、ひやかし、  
素見。遊里の店先を、方々ひやかして  
歩きまはるもの。天網島上「門行燈の文  
字が關、浮れぞめきの仇淨瑠璃」

うきあゆみ 浮歩。うけあゆみ。足を浮  
かせて歩くこと。一代女「三つ重ねの  
衣装着こなし、素足道中くり出しの浮  
歩、宿や入の飛足、座敷つきのぬき足、  
階子登りのはやめ足」

うきぐつ 浮沓。水泳の具。うきぶくろ。  
革や護謨などで作り、空氣を入れたも  
の。うき。うきだすき。男色大鑑「一挾  
箱にたたみ船を仕込み(中略)その外、  
浮沓・棒火矢を申し立てに」。大職冠三  
「波に沈まぬ浮沓かけ」

うきざうす 浮藏主。藏主は禪宗の僧侶  
の職名で、經藏を掌るもの。知藏。浮  
かれた、輕輕な藏主」といふ意。俗つ  
れづれ三「一つ飲み出すより、例の浮藏  
主が聲明聲の淨瑠璃もをかしく」  
うきしほ 憂いづらい場合。苦しいはめ。  
出世瀧徳上「身をこがらしの森の下道、  
憂きしほ踏むもあじきなき」。冥途飛脚

中「身の憂きしほで梅川も、こゝを思ひ  
の定宿と」

うきすけ 浮助。色めいた男。うかれ男。  
うきながら 憂き思ひをしながら。困り  
ながら。一代男「貯へに慾といふもの  
ありて、うきながら跡立つるも、身を  
思ふ故ぞかし」

うきばうす 浮坊主。浮れ坊主。色事な  
どにふける僧。男色大鑑五「諸山のうき  
坊主、代々の筆の物を賣拂ひ」  
うきふしやう 憂き不祥。つらく迷惑な  
こと。本朝三國誌三「世にうき不祥がご  
ざらうが、主に恨みがござらうが」

うきみ 浮身。遊女の一種。越前越後の  
方言。旅商人などの滞在、妾のやう  
な勤をするもの。芭蕉句「海に降る雪  
や戀しき浮身やど」

うきよ 浮世。凡そ、この語は、現世、  
現代、當世、今様、流行、時好にかな  
つたさま等の意に用ひられてゐるが、  
語源的にいへば「憂き世」が本であら  
う。それを「浮世」と書くやうになつ  
て、浮いて定めなない世、浮かれてゐる  
社會、といふ意になつたと見える。殊  
に西鶴は、今日の「花柳界」といふ意、  
或は「人生」といふ意にも用ひてゐる。

西鶴辭世「人間五十年の究り、それき  
へ我にはあまりたるに、ましてや、浮世  
の月見過しにけり末二年」。一代男二  
「先づ今日までの浮世、あすは親知らず  
の荒磯を行けば、自然水府となりなむ  
も定めがたし」。是等は、現世又は人生  
といふ意。尙、次の各條について、そ  
の種々の用例を見よ。

浮世の弦 現世を繋いでゐる弦。命の  
綱。雙生隅田川。「南無阿彌陀佛の一  
息を、引きも返さぬ梓弓、浮世の弦  
は切果てたり」

浮世の情 一生の慈悲。國性爺三「彼の  
姫に只一言物語する計り、妾一人通  
してたべ、まこと浮世の情ぞ」  
浮世は一分五厘 (諺) この世の價值  
なきにいふ。或は世を樂觀し軽く考  
へることにいふ。源氏冷泉節下「萬の  
病は心から。一寸先は闇の夜、浮世  
は一分五厘づつ」

浮世絲瓜の革頭巾 この世を何のへち  
まとも思はぬといつた風の、世間を  
馬鹿にしたやうに見える革頭巾。  
うきよがさ 浮世笠。若衆や女などの冠  
つた、流行の笠と見える。五人女三「素  
足に紙緒のはき物、うき世笠跡よりも

たせて

うきよがは 浮世川。戀の道、流の道な

どいふ程の意。吉野忠信三「思ひ廻せば  
御佛の、教に通るゝ浮世川、思ひきら  
せや切らぬ瀬は、流を立つる間なり」  
うきよきんちやく 浮世巾著。遊廓で禿  
などが持つ巾著。

うきよぐら 浮世藏。遊女からの贈物な  
どしまひおく藏。五人女二「毎日の届け  
文ひとつの山をなし、紋付の送り小袖  
其のまゝに重ね捨てし(中略)浮世藏と  
戸前に書付けてつめ置きける」  
うきよぐるひ 浮世狂。女色に耽ること。  
大句數十「状よりは歌でやはらぐ戀の  
道、紙子を着ても浮世ぐるひは」

うきよござ 浮世御座。石畳のやうに、  
模様を織り出したござ(簾)。織留一「し  
ばし假寢の夢、是に浮世御座、長枕」  
うきよこもん 笠世小紋。流行の小紋形。  
(小紋形は、細かい種々の模様を地一面  
に織り出した布)。永代藏二「浮世小紋  
の模様、御所の百色染」

うきよこんや 浮世紺屋。よく繁昌する  
染物屋、流行物を染める紺屋といふの  
であらう。男色大鑑六「あれは東の洞院  
の浮世紺屋の娘、姿のお春といへる名

とり

うきよざうし 浮世草紙。萬治寛文の頃  
に出た淺井了意の作と稱せられる浮世  
物語から起つたといはれる。従來の假  
名草子、お伽草子に對して、主として  
當時の實際社會の人情・有様を描いた  
小説をいふ。浮世本。

うきよざんせう 浮世山椒。普通精進料  
理などに用ひる山椒のこと。永代藏六  
「浮世山椒をうけて小袋に入れ行き、法  
談はじまらぬさきに、諸人のねぶりさ  
ましにこれを賣るべし」  
うきよせうち 浮世小路。(大阪の町名。  
新町通ひの駕籠の立場。南は高麗橋筋、  
北は今橋筋の真中にある細い小路で、  
東横堀から西横堀の間。二代男五「浮世  
小路の早駕籠」

うきよたたき 浮世叩。俗謡の一種。も  
と、胸叩から起つたもの。編笠を冠り、  
扇で拍子を取り、歌を歌ひながら門附  
などしたのもの。  
うきよだんご 浮世團子。江戸の名物。  
日本橋室町浮世小路、浮世屋平助の賣  
出したもの。

うきよちやや 浮世茶屋。いろちやや(色  
茶屋)などいふ類。大矢數三「悪銀など

を見ぬ者のため、浮世茶屋やうすがあ  
つて立破り」

うきよづきん 浮世頭巾。まるづきん(丸  
頭巾)の類であらう。下例は嬰兒が冠  
つてゐたものである。榮花咄一「召した  
る浮世頭巾を取つて捨て、焼印の大編  
笠を着せ」  
うきよてら 浮世寺。俗世間を離れない  
寺。賣僧(まいす)などの住む寺。一代  
女二「その後はさる寺のなづみ給ひ、三  
年切りて銀三貫目にして、お大黒様  
なりぬ(中略)、浮世寺のをかしさ」

うきよにんぎう 浮世人形。當時の風俗  
をうつした女の人形。陰部の形を具す  
るを特色とした。  
うきよねんぶつ 浮世念佛。信念の堅固  
でない念佛、精神のこもらぬ念佛をい  
ふのであらう。二十不孝一「十月十五日  
の曉方に、浮世念佛の連れ聲やさしく、  
殊勝に思ひ入り」

うきよのすけ 浮之介。好色一代男の主  
人公。世之介。浮世の介とさかき事  
十歳の翁と申すべきか(卷一の十歳の  
條)

うきよばうず 浮世坊主。俗僧。世間僧。  
信心をよそなる坊主。うきばうず。萬

う

文反古五「不義の云ひわけに浮世坊主の形とはなり候へども」

うきよびくに 浮世比丘尼。尼の風をして春を賣つたもの。一代男三「此の所(山城橋本の宿)も賣子浮世比丘尼あつまり、朝にもらひためて夕にみになにし、のこる物とて古扇あみ笠」

うきよぶくろ 浮世袋。絹布を三角形に縫つて綿を入れ、頂上の角に糸をつけたもの。匂ひ袋とし、後には小兒の翫びものとなつた。

うきよぼん 浮世本。「うきよざうし」と同じ。

うきよまち 浮世町。遊女町。虎溪の橋「浮世町分け入り給ふ御姿、親仁の首尾は結構な顔」

うきよもとゆひ 浮世髻(髻)。下文に據ると、好色一代女の主人公が好みにしたといふ、一種の髪のかひ方、或はそれに用ひる元結と見える。一代女「つとなしの投鳥田、隠し結びの浮世髻といふことも、我改めて物好み」

うきよもの 浮世者。浮かれた生活をするもの。歌舞伎役者などのこと。男色大鑑五「二人の法師も浮世者にて浮世の事を棄て、今にこの山を離れず」

うきよもやう 浮世模様。當世模様。はやり模様。胸算用。「其の時の浮世模様」

うきよやうじ 浮世楊枝。若衆の定紋など附けた楊枝。下文を見よ。男色大鑑七「えびす橋筋に根本浮世楊枝とて、芝居若衆の定紋をうちつけおきしに」

うきよゑ 浮世繪。當世の風俗を描いた繪。殊に芝居・役者の繪、美人の繪を主とし、風景をも描いた。土佐派の分れで、岩佐又兵衛が創めたといはれる。が菱川師宣を祖とすべしとの説もある。一代男七「扇も十二本、祐善が浮世繪、小ぎくの鼻紙」。男色大鑑五「承應元年秋の夜(中略)河原の野郎若衆聞きしばかりにて見ぬことぞかし。せめては其姿ありのまゝに寫せよと、浮世繪の名入花田内匠といへるもの美筆を盡しける」

うきよをとこ 浮世男。いろ好みの男。

うきゑ 浮繪。遠近法によつて畫く繪。もと劇場内部の土間と舞臺、棧敷などを寫すに用ひた手法を言つたものである。實物・實景のやうに紙面に浮いて見える。

うぐふ むくむ。はれる。狹狩劍本地三

「捻りもぐさのなまやいと、痕もうぐはず痛みもなし」

うぐるぐや 獨樂のうなる音。松風村雨東帶鑑四「据りもやらずうねどりと、うぐるぐや、うぐるぐつとも鳴つたるは、苗代小田の蛙獨樂」

うけ (一)請。請人(うけにん)の略。證人。胸算用四「おどれ(已)は又人賣の請でな、粟田口へ馬へ乗りて行くわいな」。

五人女 何事か知らねどもお七が約束せし物は、我れが請に立つ。(二)受。うけえだ(受枝、生花の用語)の略。聖德太子繪傳記「控への柏、梅もどきの受け」

うけ 有卦。占ひ、相地などを職とした陰陽家の用語。無卦(無氣)に對していふ。木火土金水の五行の相生相剋の理を、十干十二支に配して、人の吉凶を判斷したものである。有卦に入ると七年間は凶事が多くといふ。而して、木性人は酉の年に有卦に入るとか、火性人は申の年に無卦に入るとか説いてゐる。一代男二「明後日より金性の者は有卦に入りまする、年の七年は仕合せと申し侍る」



うけめゆみ 浮歩。「うきあゆみ」の條を見よ。

うけおひ 請負。うけあふ(請合)こと。保護。丹波與作中「小まんが父親(中略)水牢に入れられたを、小まんが願ひ請負ゆへ、出籠仰られた」

うけおり 浮織(うきおり)。細かい模様、綾などを、地の上に浮かせて織り出したもの。物種集上「湖の浪の紋はうけ織、をさになる根ざし尋ねて竹生鳥」

うけざかや 請酒屋。請賣りをする酒屋。小賣酒屋。造り酒屋の對。一代男「杉立ちて請酒屋あつて細路次長屋作りの入口ならべ」

うけざけ 請酒。前條の略。置土産三「僅かなるうけ酒、今まで江戸に並びなき酒だとなりしは」

うけしほぬ 請芝居。興行主が費用を負つて打つ芝居。物種集上「役人やふみよしのゝ里、きのふけふ入間の方へ請芝居」

うけじやう 請狀。引きうけの證書。物事約束の證文。五十年忌歌念佛中「口のあかれぬ事見せんと、證文出し、これ見たか、おのれが請狀」

うけたまはり 承り。命令。又、その命

命を受けてゐるもの。置土産三「道橋の再々崩れけるは(中略)血氣盛なる末社役者、あられなく渡りぬる故なりと、此處うけたまはりの菱屋六左衛門が穿鑿仕出しぬ」

うけたまはりごと 承事。承るべき價值あること。拜聴すべきこと。

うけとり 請取。引きうけた仕事。女腹切上「さぞ方々の請取、お忙しいは存じながら、どうぞちかんに」

うけとりごと 請取事。うけおひごと。うけとりしごと。萬文反古三「何ぞ請取り事してその請人に立て申す心ざし見るやうに候」

うけとりてがた 請取手形。金錢などの受取證書。武道傳來記八「金子拾五兩相渡し、請取手形いたせといふに」

うけとりぶしん 請取普請。請負普請。うけとる 請取る。引きうける。出世瀧徳上「茨木屋の手前は此の太郎が請取つた。手形一枚なさいでも、今の涙を手形にして、お前を爰で手放します」

うけなは 浮木繩。浮標をつけた綱(あみづな)。あみのうけなは。松風村雨東帶鑑「是も海邊に磯馴女の、蟹のうけなは請人や」

うけにん 請人。保證人。永代藏三「これにも請人印判吟味かはる事なく」。戀八卦柱曆上「主を賣らうも知れぬ奴、請人に預けて」

うけはん 請判。保證の印。又、それを押すこと。薩摩歌上「吉日なれば今日中に請判極め、今宵からお屋敷に泊らせよ」

うげんだ 右源太。山下右源太といふ女形の役者、即ち「おやま形」の俳優の名であるといふ(近松註釋辭典)。重井筒上「何んぢや太左衛門橋にいろはとは、ちりぬるをわか、よたれそつねと、吟じ返せば、それゝ其次の、らむうげんだとぞ答へける」

うごうご うごめく(蠢)やうに。もくもく。不景氣に。はりあひなく。置土産三「若盛にあてがひ世帯、うごくと生きてゐて何か面白事ある」

うこぎ 五加木。五加屬の落葉灌木。幹六七尺、小刺を逆生する。葉は掌狀複葉で長菱形。春季、黄綠色の小輪、繖形花序の花を開く。よく生垣とする。一代女「向ひは五加木の生垣にて人ぎれなし」。永代藏六「生垣も枸杞五加木を茂らせ」

う

うごつく。うごく(動)とおなじ。うごめく。二十不孝五「小升横槌を枕として目ばかりうごつき、嬉しやそれを食うて今日の命をと」

うこん 右近。右近源左衛門といふ女形俳優のこと。出所生死不明であるが、寛永時代の末期、京都にあり、又江戸にも下つて聲名が高かつた。昔々物語に「面禮奇麗の若者なれば女の如く見ゆる。さて藝とては海道下り、山崎下りなどいふ道行を、地話うたふ間小舞に舞ふ」とあり、又、この街道下りは、當時村山左近も演じたといふ(日本演劇史)。男色大鑑六「女形もむかし右近左近が時には面影のまぎらはしく、頭は置手拭にして大方に色作りしに、諸見物もそのなりけりに請取り」

うこんにんぎやう 右近人形。前條の右近源左衛門の舞姿を、木や紙で作つた人形。

兎死すれば狐これを悲む (諺) 曾我會稽山四「ヤイ兎死すれば、狐これを悲むとは、同じ類に禍の、來らんことを悼む故。もと縁者の端くれ、御咎めの飛ばしるかゝらんことを痛み」

兎の登り坂 (諺) 巧みに坂を登る譬、曾

我會稽山「月の輪も浮んで薄の波走る、番ひ兎の登り坂、駒馳せちがへ長刀に、のせとめしは小山の判官」  
うさる 失せる。消失する。なくなる。永代藏「大かたは吉藏三助が成り上り銀持になり、其時を得て詩歌鞠楊弓琴笛鼓香會茶の湯も、おのづからに覺えてよき人づき合ひ、昔の片言もうさりぬ」。織留「自然と氣力うさつて、只當分の暮らしをたのしみ」

うさん 胡散(廣東音であるといふ)。あやしい。うたがはしい。一代男四「何をか申すことぞ、胡散なるはとのかいめと、何でもなく聞き捨てしに」  
うさんがほ 胡散顔。ふしんらしい顔。  
うさんもの 胡散物。あやしいもの。如何はしいもの。女腹切上「伯母と名乗りて刀屋に、見するは胡散物なりし」  
うさんらし 怪しい。うさんくさい。

うしおき 丑起。丑の刻(午前二時)に起床すること。孕常盤五「牛若丸のうしおに」  
うしおに 牛鬼。牛の形をした妖鬼。枕草子には「名おそろしきもの」に數へ、太平記卷三十二兎丸鬼切の事の條にも出てゐる。百日曾我「猪はいはほに身

を伏せて、飛びかゝらんとする氣色、たい牛鬼ともいつつべし」

うしおにじま 牛鬼島。牛鬼が棲んでゐるといふ想像の島。一代男四「貌は色くろく髪ながく、兩眼に光あつて、そのまゝ世界の國に見し牛鬼島のごとし」  
うしざき 牛裂。刑の名。手足を四頭の牛に繋ぎつけ、牛に柴を負はせ、それに火を點じて、牛の四方に駛るにまかせて身體を四つざきにする。武道傳來記「其毒藥の事終にあらはれ出で、この科の果す處、牛裂にしても憚らずと」

牛つかむ計りの闇がり 非常に暗い闇夜。暗がりから牛」といふ諺に據つたものであらう。一代男三「牛つかむ計の闇がりまざれに聞けば、いはけなき姿にて逃げ廻るもあり」

うしのした 牛舌。くつぞこ(杏底)又はしたびらめ(鞋底魚)といふ、楕圓形な魚のこと。下の例は、小判の形を想はせたものであらう。源氏烏帽子折三「牛若殺して牛のした、大判小判の掴み取」  
牛の角文字 平假名のいの字のい。牛の角の形に似てゐるのでいふ。徒然草に「牛の角もじ、すぐなもじ」と出て

を伏せて、飛びかゝらんとする氣色、たい牛鬼ともいつつべし」

を伏せて、飛びかゝらんとする氣色、たい牛鬼ともいつつべし」

ゐる。締留「我がまゝ育ちの草を刈

り、野飼の牛の角文字より教へけるに」

丑の時詣て 丑の刻限に、神佛に祈願に

参ること。うしの時まゐり。狭義には、

嫉妬深い女子などの他を呪ふ爲めの祈

願のこと。蟬丸「この社は嫉妬を守る

はしひめの、丑の時詣でこれなんめり」

うしのほね 牛骨。素性の分らぬ人を罵

つていふ。「馬の骨」とおなじ意。胸算

用「何處の牛の骨やら知らないで、人

のかぶる衣裳つき」

牛は嘶き馬は唼え 物事の逆さまな譬。

うしほに 潮煮。料理の詞。鯛などの肉

や骨を水煮にし、鹽であんばいした吸

物。うしほ。菜花咄「うしほ煮の魚は、

所からに前とて新しく」

うしろづめ 後詰。あとおし。後援。先陣

に對していふ後詰の轉用。松風村雨東

帶鑑「親旦那にはかへられず。松風

をお討ちなされ、後詰は私と、誠にや

かに申しける」

うしろひば 後紐。うしろひも。衣物の

つけ紐を後に結んでゐるやうな幼時。

堀川波鼓中「姉は父御のそんを繼ぎ、後

紐から酒を呑む」

うすがき 薄柿。薄柿色の略。淡い柿色。

しぶいろ。重井筒上「京の吉岡紙子染、

やぼてりがきか、うすがきか」

白から杵 (謔) 縁あるものは遂に結び

つく譬。陰陽相合ふこと。「白と杵」參

照。陸摩歌上「彼方もぬからず四つ手に

組み、汗水流して組合ふとて、何や囁

きかいて、互に因果を晒屋の、白から

杵とは此事」

うすちやちやわん 薄茶茶碗。薄茶(挽

茶の一種、分量を淡くして立てるもの)

を飲むに用ひる茶碗。槍權三上「母様い

かいお世話、ちとお休みと指し出す、

薄茶茶碗の音羽山」

うすつきうち 白搗打。杵で白を搗くや

うにふりあげて打ちおろすこと。日本

振袖始「のつけに返せば突懸り、白搗

打に打つ鋤が、餘つて向ふへ越す處を」

白と杵 陰陽相和する譬。松風村雨東帶

鑑「心碎かず氣を研ぐこの確の白と

杵、陰陽和合の濡れのお師匠」

うすどり 白取。餅搗の手おはせ。搗く

杵に餅の粘りつかぬやうに、水をうち、

又餅を手かへしすること。夕霧阿波鳴

渡上「中居の萬が白取の、さッ、やあゑ

い、さッ、やあゑいさッ、さッさ搗け

搗け」

うすやくそく 薄約束。假の約束。確か

でない内約束。「一代男」重ねての日中

澤といふ里の拜殿に合ひての上にと、

しかんくの事ども薄約束して歸れ

ば」

うすゆき 薄雪。薄雪物語の略。この物

語(二卷)は、寛永九年の作で、平凡な

戀愛談を叙したものであるが、假名草

紙のうちでは、恨之介と共に最も著名

なものである。永代藏五「薄雪伊勢物語

の草紙取り廣げ、掛乞あまた打ちまじ

り。「薄雪風」などともいふ。

うずるもの きずるもの(氣隨者)の誤

か。あふひのうへ三「片腕斬りてもくる

べき身の、ほたへすぎたるうずるもの、

さあ従ふか従はぬか」

うせる 行く。来る。ゐなくなる。うす

(尖)の轉用。曾根崎心中「徳兵衛めが

うせ、まつかいさまに言ふとても、必

ず誠にしやるな。女腹切上「今朝から

ここへつら出せぬ、どこへうせた」。

同「目の前へ連れれていて、敲き殺して

腹をいる。さあうせぬか」

うそ(接頭語)うす(薄)の訛。少し、何

となく、どことなしなどの意。一代

男五「うそよごれたる顔より泪をこぼ

3

し。冥途飛脚上「忠兵衛は、うそ腹の  
出ち煩ひてゐる所に」。「うそさびし」  
「うそはづかし」など、多く形容詞に附  
く。

うそうそ きよろくなどと同じく、物  
を尋ねるさま。百日曾我三「小聲に呼う  
てうそ〜と、尋ねまはるは」

嘘に涙は出てぬ物（諺）心中宵庚申下  
「ム、思ひ合うた夫婦合ひ、誠にうは  
思はねど、嘘に涙は出でぬ物、眞實去  
るがぢやうぢやの」

うぞぶるふ 「うぞ」はおぞ（怖）の訛か。  
又は、接頭語のうそ（薄）と同系か。い  
とはしき、おそろしさに身ぶるひする。

歌念佛中「下部共、衣裳を削いで振袖  
の、汚れし綿衣に着せ換ゆれば、さし  
も美形の清十郎、山田の案山子とうぞ  
ぶるひ」。油地獄上「客は顛倒、花車も下  
女もうろたへ、小菊を圍うてうぞぶる  
ふ」

うたぐち 歌口。笛類の息を吹き入れる  
孔。娥歌加留多三「笛竹を歌口かけて二  
つに切り折り」。又、指でおさへる孔。  
うたぐち 歌曲に合せて物のそぶりを  
すること。松風村雨束帯鑑四「さて獨樂  
の威徳には、久しう廻ふが手柄にて、

或は曲舞ひ歌くどき」

うたざいもん 歌祭文。さいもん。一種  
の歌曲。もと山伏から起つたもので、  
小形の錫杖を振りながら、或は間の手  
に法螺を口に當てて異様な聲を出し、  
それに合せて神佛の靈験縁起などを語  
つたもの。徳川期になつては、これに  
小唄を交へ三味線を用ひて、山伏でな  
い者が俗間で試みるやうになつた。一  
説には説経淨瑠璃から變化したもので  
あるともいはれる。生玉心中下「我れ  
が噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、  
サイモン坂町邊のな通り筋、柏屋内にお  
さがとて、年は廿の、ヨイ花盛り」

うたせつきやう 歌説經。一種の歌曲。

説經節のこと。單に説經ともいふ。も  
と和讃から出て轉化し、佛寺の縁起靈  
驗などを曲節を附して歌つたのが起原  
であらうといふ。或は云ふ、園城寺の  
定圓及び延暦寺の澄惠等が、佛寺の本  
縁又は榮枯盛衰、因果應報の理を俗傳  
に作り、曲節を附して歌はしめたのに  
起ると。これが「歌説經」といはれる  
至つたのは、その佛教臭味を失ひ、か  
つ平曲・幸若舞・謡曲を參酌して、小説  
的説話に重きを置くやうになつてから

である。これを歌ふ説經師は、十徳を  
着て長柄の傘をさし、胡弓や箏を携へ  
て門に立つたものである。（日本詩歌の  
體系）。一代男二「兩戸に尻さしをして、  
寝るばかりに身ごしらへせし處に、誰  
とは知らずに顔隠して、連ぶしに歌説  
經あはれに聞えて、今までは手枕、さ  
だかならず」

唄にばかり唄ふ（諺）徒らに噂ばかりし  
て實驗しないことにいふ。大下馬三「十  
年餘も過ぎ行けど音信も無く、踊を見  
にと唄にばかり唄うて果てぬ」

うたねんぶつ 歌念佛。歌曲の一種。も  
と淨土宗の唱名念佛から出たもの。そ  
の念佛に曲

調をつけ、  
詞章は多く  
説經節や淨  
瑠璃などと  
ら取り、又  
新作もしたものであらうといふ。これ  
を歌ふものをば日暮しの某といふ。「ひ  
ぐらし」の條參照。一代男三「大和の猿  
引、西の宮の戎まはし、日ぐらしの歌  
念佛、かやうの類の宿とて、同じ穴の  
狐川、身はいろくに化けるぞかし」



佛念たう

うだのくにゆき 宇多國行。大和國の刀工。壽門松中「金はなけれど一腰の宇多の國行、二尺計りの大刀物(だんびらもの)」

うたのなかやま 歌の中山。京都音羽山の南方、峯つづきにある。その西側山腹に清閑寺がある。蟬丸三「のう四つ五つ五文字は、歌の中山清閑寺」。物種集上「小鼓の音羽の瀧や霞むらん、此方は三味線歌の中山」

うたひかう 謡講。謡の會。謡曲を稽古する會。懷硯三「常に寄合ふ謡講の宿には」。二枚繪草紙下「今宵は丸屋のうたひ講に往つたれば、町衆の語に」

うたびくに 歌比丘尼。歌念佛を歌ふ尼。後には色を賣るやうになつた。人倫訓蒙圖彙に「哥比丘尼。もとは清淨の立派にて熊野を信じて諸方に勸進し淨るが、いつしか衣を略し齒をみがき頭をしさいに包みて、小歌をたよりに色を賣るなり。功齡歴たるを御寮を號し、山伏を夫に持ち、女童の弟子數多取りて仕立つる也」とある。織留四「道者に取戻つて世をわたる歌比丘尼二人ありける。所の人異名をつけて、取付蟲の壽林、古狸の清春といひて」。五十年

忌歌念佛下「節はあはれに身は伊達に、歌は念佛の歌比丘尼」

打たる杖も床しい (諺) 他人に撫でられるよりは親の折檻が却てうれしい。親の打つ拳より他人のさするが痛い」ともいふ。又は米の期日中「親の事また云出して泣かさしやんす。打たる杖も床しいと云ふものを、拳一つ當てられず可愛がられた現在の親」

うちあげ 内上。内金。物の代金などの一部分を支拂ふこと。萬文反古「米屋へ金子三兩内上げにして、算用は追付年内に」

うちあける ずつと淋しくなる。「うち(打)は接頭語。「あける」は、あ(空)いて来る。からになる意。卯月の潤色甲「さて、石山の大繁昌、京大坂がうちあける」

うちうち ぐづぐづ。ためらつて。躊躇。曾根崎心中「とかうも言はず九平次は、うちうちしてこそゐたりけれ」

うちおき うんどんなどを、豫てからうつておくこと。その物。二代男四「うちおきのうんどんや急がせ」

うちかけ 内掛。相撲の手の一つ。四つ手に組んで我が體を寄せて、足を内か

ら掛けて相手を弔身に抱へて押し住き、抱へて上手で引倒すもの。井筒業平河内通五「内かけ、外かけ、大わたし」

うちかた 内方。→他人の家のこと。お家。女腹切上「こりや且那さんと御座らんすか。内方に居さんす半七殿に、一寸逢ひたう御座りんす」。→他人の妻のこと。一代女四「第一内方は愴氣深し、おもやの若い衆と物云ふことも嫌ひ給ふなり」

うちかだいふ 宇治嘉太夫。上方淨瑠璃の軟派の代表者と稱せられる人。受領して加賀掾となつた。竹本義太夫の先輩で、井上播磨の語り風を表として節配りを細かにし、優美清艶を生命とした。又、當時の太夫中で最も文字の才があり、自作の淨瑠璃があるのは此の人のみであるといふ。永代藏「淨瑠璃は宇治嘉太夫節、踊は大和屋の甚兵衛に立ちならび」

うちがたな 打刀。刺す刀に對して、打つ刀をいふ。即ち鋸をつけ、やや長くしたる刀。古くは短いのもあつたといふ。うちたち。つばがたな。曾我會稽山四「緋威の鎧着て、二尺餘りの打刀、三尺五寸の大刀横たへ」

3

うちがひ 打銅。筒になつてゐて底のな  
い長い袋。うちがひぶくろ。金銭など  
を入れて腰に巻く。油地獄下「このうち  
がひに新銀五百八十目、財布の錢も戸  
棚へ入れて」

うちがへ 前條におなじ。うちがへぶく  
ろ。

うちぐもり 内曇。鳥の子紙の一種。く  
もがみ。上は青、下は紫の雲形を漉き  
出したもの。凶事には其の色を反對に  
する。二代男ニ「昔の残る袖口より、内  
曇の短冊巻き延べて、萬年筆を染めも  
あへず」

うちぐら 内蔵。内庫。住宅の軒つづき  
に造つた藏。庭藏に對していふ。二十  
不孝ニ「立續ける軒端の内蔵は、景色朝  
日に映じて、夏ながら雪の曙かと思は  
れ」

うちしき 打敷。佛壇用の案の、横や、  
まはりにかける布帛。織留ニ「金入の鳳  
風の小袖は打敷、花ぐるまの縫の袷は  
天蓋幡にしてお寺へあげて」

うちしゆ 内衆。家内の人々。主人に對  
して、そのお供や、仕へてゐる人達を  
いふ。織留四「こなたは(中略)お言葉は  
そのまゝ出雲の言葉なれども、内衆ニ

人ながら長崎なり」。曾根崎心中「そ  
んなら且那樣、内儀さま、もうお目に  
はかゝりますまい。さらばでござんす。  
内衆もさらば」

うちてだい 内手代。我が家に同居せし  
めておく手代。五十年忌歌念佛中「内手  
代の源十郎に、帳を讀ませて算盤の」

打出の小槌 いろ／＼の財寶を思ふまま  
に打出すといふ小槌。織留ニ「内蔵には  
よろづの寶寺、打出の小槌は目前の油  
槌と心得て」

うちとのもの 家内中の者。皆のもの。  
重井筒上「方々のそうぶつ物、内との者  
の手は足らず」。萬年草中「平にこゝに  
酒盛なされ、此の間に内との者一献酌  
めや」

うちにかい 内二階。中二階(ちゆうに  
かい)のことであらう。二代男ニ「階の  
子上げば、内二階に衣裳箆筒あまたな  
らべありける」

宇治の橋姫 嫉妬の爲に宇治川に身を沈  
めたと傳へられる姫。宇治橋の東詰に  
ある橋姫神社は、この姫の鬼を祀つた  
のだといふ。物種集上「思へばあれも宇  
治の橋姫、戀の山間の山なる物もら  
ひ」。蟬丸「物すさまじき宇治橋の、

宮居にこそは着きにけれ(中略)此の社  
は嫉妬を守るはしひめの、丑の時詣で  
これなんめり」

内裸でも外錦(諺) 家の内では裸でも、  
世間へ出るには身なりを飾らねばなら  
ぬ。天網島中「のきも退かれもせぬ中  
は、内裸でも外錦、男かざりの小袖ま  
で、さらへて物數十五色」

内は野となれ山となれ(諺) 「あとは野  
となれ山となれ」の筆法。家内のこと  
を意に介しないこと。壽門松中「此方ゆ  
ゑに大事の家業もよそになり、内は野  
となれ山となれ、夜を日に次いでの里  
通ひ」

うちはやし 拍嗵。打嗵。太鼓や鼓を打  
ちはやす藝。俗つれ／＼三「此所のなら  
ひにて、惣じて男は家にありて拍嗵に  
暮らし」。歌念佛下「茶の湯、盤上、打  
嗵し、男の藝の一つでも、疵なき玉の  
盃の」

うちまたがうやく 内股膏藥。あちらに  
付きこちらに付き、定まる主のないも  
の。又、自分の意見、節操のない者を嘲  
つていふ。おべつかもの。へつらひも  
の。松風村雨束帶鑑三「我等は庄司が下  
人ながら、行平爲めにも下人分、どち

らへも附く内股膏藥」  
うちみしやぐ 打ちつばす。こな〜に  
砕く。天網島中「今の治兵衛が四ツ三貫  
匁の才覺、打ちみやいでも何處から出  
る」。國性爺三「石火矢放して打ちみし  
やげ、火繩よ玉よ」

うちやう 有頂。有頂天の略。佛語で、  
九天の中の最上の天。釋迦如來誕生會  
「上は有頂、下は大地の底までも」

うちやうじ 打楊枝。尖の方を打碎いて  
總のやうにした楊枝。ふさやうじ。つ  
ぼうちちのやうじ。一代男八「明けて見れ  
ば、扇の要、目釘竹、針、絹の糸、餅  
糊、耳搔、うち楊枝、七色ありて代三  
文」

内を出違ふ 訪れて來ると入りちがひに  
家を出ること。わざと外出して面會を  
避ける。五人女三「明けくれかせぎける  
程に、盆前大晦日にも内を出違ふ程に  
もあらず、大かたに世をわたりける」  
うづくまふ うづくまる(鷲)の訛。一代  
女三「お家久しき親仁、肴入の番の爲め  
に獨りうづくまひて臥しける」

うつけ 空洞。うつかりしたこと。ぼん  
やりしたこと。その人。薩摩歌上「小事  
に大事を忘れては、今までが皆空洞の

沙汰」。釋迦如來誕生會「空洞の所爲  
と思へども、又この罰の増すべきか」  
うつけもの。

うつじん うつけた人。ぼんやりした人。  
曾我七以呂波三「氣の通らぬうつじん  
やと、くつ〜とぞ笑ひける」

うつせがひ 空背貝。肉のない貝。曾根  
崎心中「戀風の身に蜆川流れては、其  
の空背貝現なき」。松風村雨東帶鑑三  
「干湯に照りし空背貝、うつつともな  
き風情なり」

うつそり うつかり。ぼんやり。槍權三  
上「色の上にてたらし込み、眞の臺子傳  
授の巻物してやり、權三めにうつそり  
させう」。雪女五枚羽子板中「うつそり  
者共、女と思ひ怪我するな」

打つたり舞うたり (謔)鼓を打つたり舞  
ひをしたたり。一人で何もかもやること。  
宵庚申上「半兵衛料理に心はせく、うつ  
たり舞うたり身は一つ」。油地獄下「内  
の仕舞と小拂ひと、油うつ(賣)たり舞  
うたりに、三人の娘の世話」

うつつなれば夢も結ばず 道歌「夢の  
世と思ふも今の迷ひかな、もとのうつ  
つもなしと聞くには」に據つた句。

うつつのひと 現の人。喪心した人。正

氣を失つてゐる人。大下馬三「曾てもの  
を言はねば現の人に逢へる如し」。男色  
大鑑三「物をもしはずして打臥し、現の  
人となりぬ」

うつつらわうじ 鬢頭羅王子。非常に長  
生したと傳へられる王子(智度論)。雪  
女五枚羽子板上「今年はくる〜廊の  
全盛、炬燵に火をせい床せい酌せい(中  
略)禿がぶんせに胸は古きに、寶引骨  
牌をうつつら王子が八千歲」

うつつをぬかす 恍惚とする。心を奪は  
れる。大下馬三「只夢のやうになつて、  
現をぬかしけるに」

うつな男 うつけない男。野暮な客。廓詞。  
うつのみや 宇都宮(人名)。下文の例は、  
宇都宮遷庵のこと。周防岩國吉川侯に  
仕へた。寛永十年の生れ。名は的、字  
は由的。遷庵はその號。松永昌三の門  
に學び、木下順庵と並稱された。大正  
四年十一月正五位を贈られた。「いうて  
き」の條參照。織留「茶の湯は金森の  
一俵、物讀は宇都宮に道を聞き」

うつばりの埃も落ちる 善く歌ふを賞す  
る句。文選の註に、發聲盡動三梁上塵。  
二代男五「一座に花夕、苜藻、連れびき  
連れ唄、古今名譽の上手、梁の埃も落

5

ちぬるばかり、人持心を移しけるに」

うつば 靱。(地名)大阪西區、干魚問屋、魚市場などある處。「靱油掛町」は今の靱下通二丁目。

うつばぐさ 靱草。唇形科の多年生草本。莖の高さ一尺、四角形である。六月頃紫色の花を穗狀に開く。しびとのまくら。ひぐらし。

うつぶね 空穂船。木をまぐつて作った船。うつぶね。丸木船。重井筒下「仇しが浦の空穂船、身を無きものと知りながら」

うづらがうし 鶉格子。遊女屋の格子の一種。鶉籠の形に似てゐて、扇女郎の居る處に立てるもの。

うづらごころも 鶉衣。つぎはぎした着物。雪女五枚羽子板下「錦繡の重ね引換へて、いつの間に鶉衣と綻びて、ほつれ出でさせ給ひける」

うつり つぎあひ。ゆかり。つながる縁。百日曾我三「せめて御兄弟のうつりにもなれかし、又は母御の御慰み、便りをだにもと心ざし」

うつろ うつろぶね(丸木舟)の略。懐硯「出家といへる徳にて、うつろを作りて縛りながら乗せ、行衛白波の定めな

き浮世に」

うてぐるま 腕車。腕を捕へてくることと引廻はすこと。傾城酒吞童子「腕車にどうと投げたりける」

うてず 野暮。無粋な者。冥途飛脚中「今日は鳥屋で、彼の田舎のうてずにせびらかされて頭が痛い。忠様はまだ見えぬかえ」

打てず押されず 負けず劣らず。五十年忌歌念佛上「大阪の娘子たちにまじりても、打てず押されず手入らずの、田舎生れのおぼこにも」

うててんがう 手でするいたづら。「てんがう」は、すべて「ふざけたこと」にいふ。

腕なしの振りづんばい (諺)手がなくて磔を打つやうな、とても叶はぬことの譬。「づんばい」は「つぶて」の轉訛。出

世景清四「その縛にあひながら、某を掴まんとは、腕なしの振づんばい。片腹いたし事をかし」。源氏烏帽子折「抜かぬ太刀の功名、腕なしのふりずんばい」

うてぬかほ 打てぬ顔。氣のりがしない顔。面白くないといった顔。天網島上「ア、小氣味の悪い女郎ぢやと、流石の

武士もうてぬ顔」

うてぼし うでふし(腕節)の訛。腕の關節。堀川波鼓中「子細をぬかせぬかさずば、長刀持つた腕ぼし共に、ねぢ折つてくれんず」

うつろ (空) から。新小夜風物語下「米(中略)、蟲さして皆うとなりて」

うとうやすかた 善知鳥安方。游禽類で、鳩に似た大いさを有し、羽は灰黒色で、嘴は橙黄色と黒色とを帯びてゐる。北海道地方(特に陸奥國津輕郡所謂外ヶ濱)に栖んでゐて、親がうとうと鳴くと、子はやすかたと答へると傳へられる。うとうどり。最明寺殿百人上臈下「熊千代が母おきいといふは、年ばいも磔べの善知鳥安方の子を後見て身を捨てず」

うとくに 有徳に。裕福に。活計に不自由なく。天下馬三「網の糸を商賣して、有徳に世を渡る人あり」

宇渡野の芦 宇渡野は鶉殿とも書き、攝津國島上郡にある野。この野に生ひる芦は、昔、笙・箏の舌に用ひられたと云ふ。うどのあし。うどのよし。一代男三「鶉殿野の蘆もまだ箏に見なして」



饅飩に胡椒 お定りの附物といふ譬。戀八卦柱曆上「本妻の情氣と饅飩に胡椒はお定り」

うなぎわた わたばうし(綿帽子)に同じ。項着綿(ウナギワタ)の義か。田村將軍初觀音「女中仲間へ皆引すがた、ぬらりくらりのうなぎわた、とり上げ婆の年玉なり」

うなるまつ 髻髮松。墓標に植ゑる松のこととして、源氏物語に出てゐるが、髻髮に結つた子供のことに轉用してゐる。夕霧阿波鳴渡中「餓頭なりの中判りも、目元賢きうなる松、千代を嘶ゆる土佐駒に」

うにかうる 獨角獸。うにこいる(英 Unicorn)一角(いつかく)の異名。哺乳動物、游水類、「いるか」の屬。身長二丈にも達し、上顎に二本の牙があるが、多くは左方のみがよく發達するといふ。平家女護馬三「彼の唐土のうにかうるといふけだものは」

うねおび 畦帶。縞が畦のやうになつた帶。男色大鑑八「白き下着に薄色の中形、縹分縞のうね帯、萌黃の袋うちの柄糸」

うねたび 畦足袋。晒木綿を絹糸で、田

畑のうねのやうに、刺し縫つた足袋。うねざしたび。一代男六「畦足袋に紅のくけ紐」

うねどる うねくと動きながら廻る。松風村雨東帶鑑四「すわりもやらずうねどりて、うぐるぐやう、うぐるぐつとも鳴つたるは、苗代小田の蛙獨樂」卯の毛で突く 兔の毛で突く。何の傷もつかない譬。櫻陰比事五「卯の毛で突いたる程も仔細は無し」

うはうどうじ 雨寶童子。天照大神のこを、兩部神道の家で稱する。曾我會稽山四「日の本照らす日の神も、雨寶童子の御名は普き天の下」

うはおき 上置。食膳の盛物の上に、更に賞飯の爲におくもの。又、飯・餅などの上におく副食物。傾城酒吞童子二「お汁には何なりと、尾餅のついた焼物、尤も飯は上置なしの生飯なり」

うはかぶき 上歌舞伎。浮華輕佻なこと。嬉遊卒覽五「容體のみつろろひて、實なきやうのことをうはかぶきともいへり」。一代女四「大阪は思ふより人の心上かぶきにして、末の算用あふもあはぬも縁組華麗を好めり」。五人女二「總じて世間の女のうはかぶきなることは

れに限らず」尙、「かぶきもの」參照。うはがへ 上交。うはま(上前)のこと。衣物の搔合の上になつたところ。源氏鳥帽子折二「小袖の棲のうはがへを、敷寝の床と片敷かせ」

うばがもち 姥餅。近江國草津で名物とする餅。織留二「草津の宿の矢倉といふ所は、姥が餅の名物、勢田矢橋の追分なり」。丹波與作上「乗りおくれじとどき草津、お姫様よりまづ姥が餅、一口ふた口」

うはきがらす 浮氣鳥。「うかれ鳥」とおなじで、時ならぬにねぐらを離れて騒ぐ鳥のこと。轉じて、遊客のこと。女腹切中「思ひの色を忍び駒、忍ぶに餘る涙かな、浮氣鳥とそやさされて、月夜も闇もこの里へ」

うはきざけ 浮氣酒。浮かれて飲む酒。出世瀧徳下「仁三郎がうはき酒、いき倒れては性根つかず」

うばざくら 姥櫻。葉の出ないうちに、八重の白い花を開く。なまめいた老女に譬へるが、葉のないを齒のないにかけたのだといふはいかど。賀古教信七墓巡櫻さい「色深き小町櫻も老いぬれば、身は百歳の姥櫻」。山本西武句「花衣ぬ

う

ふやおくびも姥ざくら」

うはざし 上差。上差の箭箆の征矢(そや)に差し添へる一對の鏑矢。「上差の鏑」。中川喜雲の句「うはざしや月の弓射るうつぼ草」

うはさまち 噂町。京都鳥原、出口の茶屋町のこと。二代男三「懐より一つ書を取出す、上書は、噂町の日記なり。此の二十年以来の諸分、是れに洩るゝこと無し」。榮花咄「女郎出口に送り(中略)噂町の茶屋が才覺、たんぼにあつがんの酒を急ぎ」

うはさやど 噂宿。前條噂町の宿。榮花咄「丹波口の噂宿に連れ行き」

うばぞろへ 乳母揃。乳母の勢ぞろへ。乳母の候補者を集めて揃へること。松風村雨束帶鑑「今様うばぞろへ」

うはづる うはざる。上氣する。氣が逆上する。槍権三「伴之丞も氣は上づり、楯はお留守を念がけて」

うはなりうち 後妻打。「うはなり」は後妻のこと。後妻のところへ、先妻が亂暴しに行くこと。轉じて、嫉妬すること。傾城酒呑童子三「問夫の後妻うつ波の、おゆらは夫太四郎が、こつか胸倉掴み合ひ」

うはに 上荷。上荷船の略。本船と陸上げ地との間を往復して、上荷を運ぶ三十石の船。永代藏二「上荷茶船かぎりもなく川浪に浮びし」。今宮心中上「在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有様のさまんくを、一時に見る舟遊び」

うはにさし 上荷差。船の上荷を運搬する人夫がしらと言つたやうな者であらう。一代男三「その果は、中業・上荷さしなど」と夫婦となりて」

うはのり 上乘。商船の事務や貨物を處理し監督する爲めの雇員。二十不孝二「大船を造りて、大廻しの江戸商ひ、此舟の上乗に若きものの抱へられしに」

うはばた 上機。かみばた。麻及び紬を織るに用ひるはた。懷視五「賤の手業には優しく、上機の箴の音、枕に響き渡り」

うはばり 上張。上に引つかけて着ておるもの。うはつばり。一代男三「帷子の上張、置手拭して」

うはぶち 上扶持。扶持米。又、その上前(うはまへ)。一代女「仲間につきぎの袋を持たせり、其中に上扶持はね三升四五合」

うはまい 上米。うはまへ(上前)のこと。すべて手數料のやうな性質のものにいふべきもの。永代藏四「敦賀の港は毎日の入舟、判金一枚ならしの上米ありといへり」

うはまく 上幕。人形芝居の舞臺などで、天井の前方に上から垂れる幕。一代男五「人形まはして遊べと、挾箱よりたみ家體取組み、上幕、つらかくし、首落し、五尺に足らぬ内に、金銀をちりばめ、自由を仕懸け」

うはめ 上目。秤ざをの上面に記した目を標準として量ること。一代女五「銀目引いて(中略)、秤の上目にかへ」

うはもり 上盛。最上のもの。第一のこと。二代男「人間遊山のうはもり、色里に増すことなし」。男色大鑑八「古今の藝子の上盛、萬人ともに思ひつくこと」

うはもる 上氣する。落ちつかぬ。油地獄上「切られたら死なう、死んだらどうしよう、心は沈み氣はうはもり、逃げてくれうと駈出で」  
卯はら辰も 灸を出す。灸を出すについて、忌む日と忌む部分とを言つた文句。卯の

日は腹にすゑず、辰の日には股にすゑぬものといふ。傾城反魂香中「今日は二日の拂日なり、灸もすゑたし、卯は辰も、背中腹に商賣には換へられず」  
**うはゑ** 上繪。染めぬいた布帛の模様の上を更に繪具で書き添へること。萬文反古五「紋所の上繪はげたるに」

**うはゑや** 上繪屋。前條の上繪を職業とする人。その家。

**うひちぎやう** 初知行。初めて貰ふ知行。初任の時に給される俸祿。武道傳來記三「御家に濟みて七十三歳まで堅固に相勤めしが(中略)、初知行三百石、今に立身なく」

**うぶがみまうて** 産神詣。うぶがみ、即ちうぶすながみ(産土神)に、小兒が生後始めて參詣すること。うぶすなまゐり。松風村雨東帶鑑上「日嗣の玉の男子親王、やす〜と降誕あり(中略)、齡千歳の坂本に、産神詣と聞えける」

**うぶちやんば** 生天婆。うぶ(生)は、きつする(生粹)の意。天婆は、占城で、今の安南邊にあつた國であるといふ。晝夜用心記五「脇差を持つて勝手へ行き相談するに、先づ拵への結構言語に絶えたり、鮫は玉蜀黍を並べたる生天

5

婆なり、日貫は家の連獅子金の無垢」  
**うぶめ** 孕女。姑獲鳥。うぶめ(産婦)が化生したといふ想像の妖怪。狐が人をだます爲めにする姿であるといひ、お産で死んだ女が化けたのだともいひ傳へられる(今昔物語)。「代女六」腰より下は血に染みて、九十五六程も立並び(中略)是れかや開傳へし孕女なるべしと氣を留めて見し中に」

**うへだじま** 上田竊。信濃國上田地方から産する紬の縞織物。永代藏「上田竊の羽織に木綿裏をつけて」

**うへぶ** 上品になる。上つがたらしくなり。源氏烏帽子折三「職人なれども烏帽子屋は、お公家交はり上びたる、しよさいに連れ、氣も至り」

**うへまぢもの** 上町者。堅氣者。きちやうめんな人。きまりのよい者。置土産

ニ「深入をせず、上町者の姿狂ひ、三十日に米一斗五升、六疊敷二奴の屋賃してやる分にて、是よりはと浮世を樂みける」  
**上見ぬ鷲** (諺) 暴慢至極の者。この上なしの心もちの譬。お伽草子「ふくろふ」には、上見ぬ鷲がうそ娘を殺す話が出てゐる。釋迦如來誕生會「一エ、如何に

上見ぬ鷲なりとも、言はば鳥類、爪鐵石にあらばこそ」。源氏烏帽子折三「會稽の巢立して、上見ぬ鷲の譽を見せん」  
**うへむらきちや** 上村吉彌。京都の俳優。女形の名人。延寶の頃、江戸に下つた。吉彌むすび、その他の女装に於て、當時の流行を支配したといふ。今宮心



上村吉彌

中上「上村吉彌はふしみ堀じやとおしやる、義理はの、舟板町の舟板の末には沖に乗出し、帆を十分の印として今から人やこがるゝといふ事」

**うま** 馬。ウ女郎の異名。好色伊勢物語「一説に女郎の異名を馬といふ。心は人を乗せてすべるといふ事なりとぞ。此馬を引廻す者くつわといふとぞ、さもあるべきことにや」。ウ將棋の桂馬。ウんすん骨牌の、騎馬人の模様ある札。  
**うまあひ** 馬合。意氣の投合してゐる仲間。仲のよい同志。幾内の方言。源氏冷泉節上「猪熊などを狩出し、物頭に馬

合つけ、箇の遠鳴させざるが残念なり」  
うまい盛りの十八疋豆 (諺) 十八疋豆  
(ささぎ)は、十六疋豆ともいふ。 檜権  
三上「甘い盛りの十八疋豆、柔かな内を  
一口食うて、せまりさがして置かうや」

馬追船頭お乳の人 (諺) 何れも人に物  
ねだりして我がまゝな者とせられてゐ  
る。 繞留六「心だての悪しきものを馬追  
船頭お乳の人と申せど」

うまおり 馬おり。山城國男山八幡宮で  
行ふ神事。三月中午の日の祭禮に、天  
皇が神馬を御覽になり、舞人等は山城  
歌を歌ひつゝ、馬場で馬に乗り廻すの  
であるといふ。出世瀧徳上「殘金二百兩  
は八幡の馬おりに請け取る筈」

馬が合ふ 意氣が投合する。壽門松中「小  
身なりとも侍に縁組みたい、何ぼう分  
限者金持でも、町人とは馬が合ふまい」

馬方船頭お乳の人 (諺)「馬追船頭お乳  
の人」ともいふ。その條を見よ。

馬がでてん打つ 馬が腹太鼓を打つ。  
雪女五枚羽子板中「アレ馬がでん」  
うつはいの。ア、こわやとぞ逃げにけ  
る」

うまけた 馬下駄。こまげた(駒下駄)に  
同じ。本朝川文章「野面みかげの馬下

駄も、雨の暗間の夕日かけ」  
うまさし 馬差。宿驛の役人で、人馬の  
役を指圖する者。丹波與作中「馬さしは  
居らぬか、當宿に泊つたる馬子共残ら  
ず召寄せよ」

うまず うまずめ(不生女)の略。賀古教  
信七墓廻「前の奥様はうまず殿」  
うまずの地獄 うまずめ(石女)の墮ちる  
地獄。子を産まぬ女は、この地獄に墮  
ちて、燈心で竹の根を掘る責苦にあふ  
といふ。主馬判官盛久四「是は又うまず  
の地獄、竹の林に衰へて、影もよるよ  
ろ」

うまつぎ 馬次。街道に駄馬・人夫を備へ  
おいて、旅人の便を計り、求めに應じ  
て馬の次ぎ立てをする處。うまつぎば。  
うまや。宿驛。檜権三下「海道筋の旅籠  
屋、馬次、舟場を穿鑿し」

うまつなぐ 馬繋ぐ。廓詞。時めく人の  
氣にたがはないやうにすること。又、  
かるたの語。大矢數一「其恨みはかぞへ  
加留多の馬繋ぐ、いつそに燃えて火の  
錢とやら」

うまつぶて 馬磔。馬をつぶてのやうに  
投げること。國性爺五「四足を掴んで馬  
磔」

うまとり 馬取。馬の口取。乗馬の口に  
附いてゐる人。うまつぎ。檜権三上「乗  
止むれば小者馬取、もうお仕舞ひかと  
走り寄り」

うまのさくり 騎射の時、馬を駈けさせ  
る爲めに作つた溝のこと。  
うまのり 馬乘。羽織の脊の下(又は半  
襦袢などの脇縫の下)の少し鈍ひ残し  
である處。二十不孝三「木綿縮の袴に、  
馬乗あけし長羽織」

馬は馬連れ (諺) 同類相伴ふがよいとい  
ふ意。牛は牛づれ」ともいふ。二十不  
孝「兩方互角の分限、馬は馬連れ、絹  
屋吳服屋さもあるべし」

うままはり 馬廻。主人の馬の側に附従  
ふ騎馬の侍。又、馬の側に供するもの  
を總べていふ。堀川波鼓中「主人の妹嫁  
政山三五平といふ馬廻り、是れも此度  
歸國なりしが」

うまもち 馬持。馬の世話の仕方。馬の  
あつかひ。檜権三上「いかう精が出て、  
馬持がよい故に、其月毛も一兩年めつ  
きりとよくなつた」

馬屋を得 馬のあつかひが上手である。  
馬の世話に妙を得てゐる。孕常盤「お  
のれは馬屋を得たるとや。當分それは

いらぬ事」  
**うまれうまれ** 生れ〜。生まれたまふ。生れるとすぐ。胸算用四「思へば此銀は、美しき娘を生れ〜出家にしたやうなものぢや、一生人手に渡りてよい事にも合はず」  
**うまれじやう** 生れ性。生れつき。生來の質。宵庚申中一とかく男に縁のない、生れじやうかと計りにて、聲も惜まらず泣居たる」  
**産れた後の早め薬** (諺)その事が過ぎてから騒ぐことの譬。後の祭。曾我會稽山五「ヤア生れた跡の早め薬、口計りの廣言いふないふな。既に我手に入つたる時」  
**産れぬ前の襦袢定め** (諺)事の早計に失する譬。釋迦如來誕生會一「一天の世繼かなはぬ時は、今の催し徒らに、生れぬ前の襦袢定めと、國民の笑ひ種」  
**うみす** 産巢。子を産むもの。子を孕む腹。松風村雨束帶鑑一「げに恰好は好けれども、三人までの産巢とは、難じて言はば子過ぎ腹」  
**うみながし** 産流。流産と同じ。釋迦如來誕生會一「もし難産にて産みながし來」

5

**うみのうら** 産の浦。(地名)。筑前國糟屋郡宇美村の海邊、神功皇后が皇子を産み給うた地であるといふ。  
**うみひろげる** 生廣げる。子を多く生む。油地獄上一「數の子ほど生みひろげ」  
**海も見えぬ舟用意** (諺)取越苦勞することの譬。日本振袖始一「そりやその時。何ぞ今から海も見えぬ舟用意」  
**有無の事** 否やの事。何とか定つた事。女腹切下一「甚五郎様にあひまして、有無の事を聞くまでは、わしや爰をいごかぬ」  
**うめ** 梅。「梅女郎」のこと。その條を見よ。  
**うめがへし** 梅返し。紅梅色の染物。羽織の裏などによく用ひたといふ。二代男一「二十七ばかりの男、梅がへしの布子、下に天鷲絨の襟をかけて」  
**うめぐよみ** 梅曆。梅の花のこと。山中では梅の咲くのを見て春を知るのといふ。武家義理物語四「月も覺えず、年もわすれ、軒端の梅を曆に、さては春にもなりけるかとおどろき」  
**うめざはのさと** 梅澤の里。相模國中郡の内。國府津の東北一里、曾て山西村と稱した一區。梅林があつたのでいふ。

**うめだ** 梅田。難波北郊曾根崎村の大字。下文は、特にそこに墓場があつたのでいふ。天網島上一「連れて飛ぶなら梅田か北野か」。心中又は米の朔日中一「四奴四分で白提灯(中略)、やがて梅田へ行く時に、どうでいらねば叶はぬ」  
**うめだづつみ** 梅田堤。今の大阪(梅田)停車場の邊。曾根崎心中一「梅田堤の小夜鶉。明日は我が身を餌食ぞや」  
**うめだばし** 梅田橋。堂島から福島に渡る西蜷川に架した橋。曾根崎心中一「夏も花見る梅田橋」  
**うめちや** 埋茶。「うめちやみせ」の略。  
**うめちやちよらう** 埋茶女郎。梅茶女郎。埋茶見世にゐた女郎。第三流の遊女を散茶女郎と呼んだのに對して、散茶の湯をうめてぬくしたとの意を利かせて「うめ茶」と稱したといふ。後には「ばいちゃ(梅茶)」とも記した。尙、次條參照。  
**うめちやづくり** 埋茶造。江戸吉原の遊女屋の見世造りの一種。散茶見世の様子をかへて、廣い庭をも取らず、大格子の内を扇座敷に仕立てたのを、散茶に對して埋茶と戯れに言つたのが、本名のやうになつたといふ(洞房語園)

うめちやみせ 埋茶見世。埋茶づくり」

の店。うめちや。

うめぢ女郎 梅女郎。江戶吉原では、

梅茶女郎の略名。京都島原では、天

神女郎の異名。うめ。當時、天神女郎

は二十五女に賣つた故、天神様の縁日

の二十五日に因んで、天神とも梅とも

稱したのである(好色伊勢物語)

うめのみめ 梅の雨。ばい(梅雨)のこ

と、生玉心中上「つれなや梅の雨、降り

へだててぞ別れ行く」

梅の木のは齋 梅の木蔭で、和申散を賣

る是齋。是齋は定齋ともいふ、薬種屋

である。梅の木のある處は、近江國粟

田郡六地藏村。

うめのみくらゐ 梅の位。遊女の四品の一。

「太夫」職の遊女を「松の位」といふに對

して、「天神」職である遊女を稱した。

この下に「かこひ」と「はし」とあつて四

品とする(桃源集)。

うめのみや 梅の宮。山城國梅津にある。

橘氏の祖廟。俗に懷妊の神様といはれ

る。

うめぼしはば 梅干婆。皺の寄つた老婆

を嘲つていふ。壽門松上「梅干婆が、す

いこな奴と思召す」

うらうちぐさり 裏釘鎖。裏打ちをした、

くさりかたびら(鎖帷子)。

うらぎく 裏菊。菊の花を裏から見た形。

衣服類の模様、紋所とする。薩摩歌上

「お駕籠の者は裏菊の、裾にませがき染

めたるは」

裏釘返す 物に打込んだ釘の、裏に突出

たのを打ちまげて返す。念に念を入れ

ることにいふ。國姓爺後日合戦「やあ

まだるいまだるい、裏釘かやすな、さ

あ来い」

うらざし 裏差。刀の小刀横に挿入した

小さい刀。小柄(こづか)。こがたな。

曾我會稽山「裏さしの筈(かうがい)、

暇の印と巻き込んで」

うらしまづか 浦島塚。浦島太郎のゆか

りの者が築いたといふ塚。長命を願ふ

ものが參詣するといふ。松風村雨東帶

鑑二「浦島塚とて壽命を守るげんぶく

しや、參りの絶ゆる事もなし」

うらしまのみ 浦島飲。盃をあけておか

ないで飲むこと。あけてはならぬ玉手

箱から言つたものであらう。

うらつけ 裏附。すべて裏を附けた物。

うらつき。一代女三「棚借りの者と見え

て、裏附の上に臍の袴を着るも有り」

とは、土用中の葬禮の有様を記したも

の。

うらてがた 浦手形。乗船證券といつた

やうなものか。虎溪橋「類船や京江戸

大阪三ヶ月、誰が浦手形落つる雁金」

兩吟「日千句「年切が旅の客附おし止

めて、舟をわたして此の浦手形」

うらどぶ 裏問。心中をさぐり尋ねる。

緋縮緬卯月の紅葉中「其の根心が聞き

たいと、騒がぬ顔で裏問へば」

浦の吟味役人 船着場にて、乗船客な

どを吟味する役人。前々條「うらてが

た」などをも調べたものであらう。武

道傳來記「むかし島原の舟つきに、辻

岡角彌とて浦の吟味役人してありし

が」

うらはん 裏判。證文の裏に押す判。

は代判の場合にするもの。今宮心中上

「私は印判持ちませぬ、そんなら父が裏

判をと、同じくすゑて」

うらやさん 占算。占ひする人。賣卜者。

晝夜用心記「相性八卦占や算、今の世

の阿部晴明と自身の取りなし」

うらゆき 裏行。おくゆき(裏行)のこと。

永代藏二「表口廿間、裏行六十五間を家

蔵に立て續け」

うらら 己れ等。われら。

うりかけ 賣掛。現金賣に對して、代金を後で受けとる事にして、賣ること。

その代金のこと。永代藏四「算用はあひながら、賣掛を取り集めて、買掛りを済ます程せはしき物はなし」

うりけんじやう 賣券狀。賣り渡したといふ證據の券狀。うりけん。萬文反古四「大宮に九間口の屋敷を買ひ（中略）賣券狀は此方に御座候」

うりこ 賣子。①商品を賣り歩く者。②色を賣るものをいふ。賣若衆、野郎の類。一代男三「橋本に泊れば、大和の猿引、西の宮の戎まはし、日暮しの歌念佛、かやうの類の宿とて、同じ穴の狐川、身は様々に化けるぞかし。この所も賣子浮世比丘尼のあつまり、朝に貰ひためて、夕にみなになし」

うりこやど 賣子宿。野郎、若衆の宿。新小夜嵐物語上「東方に賣子宿千里が外へ拂ひ退け」

うりしろなす 賣代なす。賣つて代金を取る。品物を金にする。出世瀧徳下「家屋敷田地まで賣代なし、ありがね十八貫日」

うりてがた 賣手形。賣つたといふ證文。「賣券狀」。「うりけん」の類語。武道傳來記八「金子拾五兩相渡し、請取手形いたせといふに（中略）いかにも仕るべしとて、賣手形體かに書きて」

うりへぎ 賣刺。物を賣つて取る利得。特に他人の物を賣つて、その幾分の利を私すること。置土産四「此程二貫目屋敷に賣りましたと語る。亭主領きて（中略）、さのみ賣りへぎもござるまいといへば」。出世瀧徳下「そなたの身を賣るほどならば、三百兩もしてやつて、うりへぎの百兩も手に持つたがよい筈」

うりわかしゆ 賣若衆。男色を賣る若衆。物種集上「尻を抱へて秋の草刈、賣若衆桔梗かるかや女形」

うるしばん 漆判。奈良晒に押した検印にいふ。下文を見よ。日本山海名物圖繪「奈良晒、麻の最上は南都也（中略）極の字のうるし判は生平（きむら）の時

の改め判なり。晒しあげての改め判は、南都御突服尺幅壹尺壹寸長六丈七尺五寸と朱印有り」。一代男二「近江にさらしの、縫じるしなどさせてかはいがられ、にくからず、かための誓紙、うるし判の、くちぬまでとぞ、いのりける」

うるしゑ 漆繪。墨の上に膠を塗り、金泥などを用ひて、光るやうにした錦繪。前句附「光りかがやく、光りかがやく、浮世繪にこの頃着せた黒小袖」（増補俚言集覽）

うるしみゆ 潤朱。黒色を帯びた朱の漆塗。一代男一「うるしみ朱の煙草盆に、炭團の埋火絶えず」

うれしがなし 嬉しきのうちにも悲しい。うれしく又かなしい。曾根崎心中「皆わし故と思ふから、嬉しがなしう黍し」

うれひぶし 愁節。淨瑠璃などで愁歎の情景を語る節。世間娘氣質二「阿波太夫がうれひぶしに打込み、四十八段目の三段目を覺えて、獨り慰みに語つては涙をこぼし、延の紙さへ一日に一束づつ入つて」

うろろちがぼ さまよひ、うろつく様子をした顔つき。

うろろちなみた おろく涙。おろく泣。と泣いて流す涙。重井筒下「丁稚の三太もうろく涙、心中といふものは、いかう寒いものぢや」

うろち 有漏地。有漏は佛語、煩惱のためにとらははれること。即ち、凡夫

の世界。この世。

うろん 胡亂。有論。あやしい。うさん。疑はしく合點の行かぬ。國性爺合戦三「一々覺えある事ながら、證據なくては有論なり」

うろんなり 胡亂者。うろんな者。怪しうい奴。うさんもの。

うみらう ういらう(外郎)を見よ。

うみらう積む 外郎積む。甘えて巧みに持ちかけることを、俗にかくいふか。

曾我虎磨十番新「名も愛甲の三郎と外郎つんでぞしなだれける」

うゑがみ 植髪。「いれげ」、又は「つけがみ」即ち「かつら」のことであらう。大句數上「植髪も白髪と見ゆる雪の暮、袖うちはらうてこの坊まはし」

うをじまとき 魚島時。魚の出盛りの時。

永代藏ニ「魚島時に限らず、生船の鯛を何國までも無事に着けやうあり」

うんざい 人を罵つていふ詞。のろま。

まぬけ。日本武尊吾妻鑑四「やあ罵しいうんざいめら」。多田院開帳四「いや推參なりうんざいめ」

うんざいおり 雲齋織。運齋織。斜に粗く織文のある厚地の織りもの。足袋底などに用ひる布。雲齋といふ者が創めた

たといふ。一代男セ「運齋織の袋足踏

(ふくろたび)、中ぬきの細緒をはき」

うんじや 雲蛇。雲の中をかけるといふ蛇。用明天皇職人鑑一「がん火あたりに散亂し、うんじやに巻かれて飛行する」

うんじやう 運上。率を定めて、工商などの營業者に課した税。運送上納の義であるといふ。永代藏四「淀の川舟の運上にかはらず」

うんすん 「うんすんかるた」の札の名。和蘭人から傳へられたカルタを、日本化せしめて作つたものが、「うんすんかるた」である。このカルタは、五種各十五枚で、すべて七十五枚ある。その五種の各の札には、「うん」「すん」その他都合六通りの上級札が更に添つてゐる。「うん」の札には福神、「すん」の札には唐人の模様が書いてある(賭博史)

大職冠四「大悲の利劍を親に打ちて、うんすんを二日飛びをれば、跡先しやんとぞしたりける」。この利劍の「劍」とは五種の札の一種で「イス」と呼ぶものである。

うんたち うぬたち。おのれたち。お前達。

うんつく ぼんやりもの。うつかり者。

のろま。

うんづく 運づく。運命にまかせせる。天運次第。運だめし。百日曾我三「運づくの勝負せん」と、祐成にわたしあひ、切りむすび切りほどこき」

うんのもの 運の物、危険なもの、運命にかまはるやうなものなどいふ意か。今宮心中中「ム、魚の中にも鱈(ばら)などは大うんの物、かねて無用と申した」

うんりう うんりゆう(雲龍)。次條の略。新可笑記一「七夕の半天しめやかに、烏鵲のはしかより、雲龍の水ひき、冷風にひるがへし」

うんりゆうすゐ うんりゆうすゐ(雲龍水)消火用の唧筒。「龍吐水」、「龍骨車」の類語。

え

えいかんぶし 永閑節。淨瑠璃節の一種。薩摩淨雲門下の四天王である源太夫の弟子、虎屋永閑の創めたもの。いはゆる公平淨瑠璃の類で、樂風は江戸一流のものであつたといふ。永閑は長命し

たといふ。一代男セ「運齋織の袋足踏(ふくろたび)、中ぬきの細緒をはき」



た人で、正徳五年中村座で坂東壽曾我を出した時、團十郎の出端を語つてをり、當時唯一の大音で、舞臺で語る聲が往來にまで聞えたとの事。二代男二「かはりまがきのつれ歌、永閑節の道行」

えいさらえい

物を曳く時などのかけごゑ。「えいさらおう」「えいえいおう」「えいや、うん」「えいやつと」など、すべて事をするに力を入れる時に發する聲で、「えいえいごゑ」と一括していふ。

えいじつ

永日。別れの挨拶の時、又は、手紙の收結などに用ひられる語で、「いづれ他日ゆるく」などの意がある。夕霧阿波鳴渡中「隨分弓馬の稽古精出し申さうぞ。永日々と暇乞して歸りけり」。餘は永日を期し」

えいらくせん

永樂錢。「永樂通寶」の文字が面に刻んである銅錢。支那明朝の永樂九年（我が應永十八年——二〇七一）に鑄造され、室町の頃我が國にも渡來して、盛に流行したが、慶長十三年十二月其の通用を廢された。近松には紋所の名として、用ひられてゐる。薩摩歌上「阿波、淡路の兩國主、撞木鞘と丸十文字、六尺は繋ぎ菱、つなげ

や繋げや永樂錢の駕籠印」  
ええろ 榮耀。えいえろ。さかえかがや、はでやかななどの意から、贅澤、我がまゝなどの意に轉用し、このまゝ名詞にも、「する」を附して動詞にも、「らしい」を附して形容詞にも用ひる。堀川波鼓上「姉様それは榮耀ぢや。私が様に根から男のない身でさへ、見事堪忍しまするぞや」。出世瀧徳上「お前のお蔭で榮耀する、今夜の人も大勢あるに」。出世景清三「何でも今宵はしつぱりと、積るつらさを語らんと、しとよれば、ゑゝ榮耀らしい」

ええろづかひ

榮耀使ひ。贅澤な金づかひ。重井筒上「四百目といふ銀を、何にするとして借つたぞ。くひ込んだか、へこんだか。女夫中の榮耀づかひか。えゝおとまじや」

ええろ

柄香爐。柄のある香爐。えぐ へぐ。水邊に生ずる芹に似た草。蘇。くろくわむ。雪女五枚羽子板下「萌ゆるえぐ摘む若葉摘む」

えぐち

江口。（地名）攝津國の遊女町。松風村雨束帶鑑四「こゝぞ江口の色淡」

江口の君 前條「江口」に居た遊女妙のこ。西行法師に宿を乞はれ、その斷り

の言ひわけを歌に詠んだので名高い。「世をいとふ人とし聞けば儂の宿に、心とむなと思ふばかりぞ」。謡曲の「江口」は、この話を仕組んだもの。最明寺殿百人上臈下「江口の君が假の宿に心留むと申したは、それは色ある徳法師」

えさうふぼく

依草附木。佛語。人間の靈魂の草に依り木に附することをいふ。二代男八「人皆驚き、依草附木の生靈かと立寄り見るに」。一心五戒魂、蕪姫道行「御身年比われを慕ひ、之まで來る愛着に、えさうふぼくの魂の假に顯れみえしなり」

えさしばうき

柄差箒。箒の莖に別に柄を差込んで長くしたるもの。冥途飛脚中「柄差箒逆手に取り、二階の下から板敷をぐわたくと突鳴らし」。女腹切上「えさし箒おつ取つて、さんくゝにぶち叩く」

えどうぐ

得道具。えもの。武器。得意の道具。孕常盤二「銀のづく打つたる鐵の棒提げ、これは源氏の大將鎮西八郎爲朝が得道具」

えつさい

悅哉。鷹の一種。ひよどり程の大いさで、よく小鳥を捕食する。狩に用ひられる。すゞめだか。雀銃。

え

えて 得手。得手勝手。わがまま。傾城

酒吞童子三「左様の時に得手のお方が、今宵一夜はおれが物、一寸側を放さぬと堅くろしいお方が御座ります」

えてもの 得手物。得意とするもの、わざ。雪女五枚羽子板中「アリヤゴリヤ。殿はな、小鼓のヤ、えて物」

えどがはせ 江戸爲替。江戸から送つて来る爲替の手形。戀八卦柱曆上「旦那の印刷一つ問屋へ持つて參れば、江戸爲替二貫目や三貫目、常住取りやりいたします」

えどざくら 江戸櫻。吉野櫻に同じ。吉野は吉野山の吉野でなくて、植木職の名から稱したものであるといふ。それによりの。賀古教信七墓巡禮祭文「武藏に神田江戸櫻」

えどじやう 江戸狀。江戸商店との取引狀。胸算用「只は居られず江戸狀どもをさらへ、失念したる事どもを見出し」

えどとも 江戸供。江戸へのお供。堀川波鼓上「床右衛門は病氣とて江戸供免され在國せしが」

江戸の新富士 もと、江戸本郷の地に富士淺間といふ小社があつたのを、新に駒込の地に遷したので稱するのであら

う。年代詳かでないが寛永以前の事といふ(船遊笑覽)。「二代男」水無月の夜を籠めて、江戸の新富士に參詣することあり。人皆白衣の袖を連ね、水道の流れに身を清め」

えどぶし 江戸節。俗曲の一種。江戸半太夫の始めたもの。半太夫はもと歌謡經、歌祭文を學び、後丹後太夫の子江戸肥前掾に就いて、貞享元祿の頃から名をなした人である。半太夫節。

えどぶね 江戸船。大きな屋形船の一種。遊行する爲めの船。胸算用「江戸船一艘、五人乗の御座船、通ひ舟付けて賣り申候」

えどもとゆひ 江戸元結。もと江戸で製出したのでいふ。守貞漫稿に曰く「武藏國名物類の内に摺結根本江戸に初る今世京都大阪にて専ら作之」。置土産「渡世に江戸元結の賃びねりして、一日暮しに、難波の堀詰に身を隠し」。女腹切中「はれ、よい好い男の。江戸元結に縋子繫、天窓つきは兩替町」

えはうがみ えはうがみ(惠方神)。としとくじん(歳徳神)のこと。えはう。出世瀧徳下「詣り納むる八幡山、此浪花津の惠方神、民安全こそめでたけれ」

えはうまゐり 吉方參(惠方參)。年始に、吉方にあたつてゐる神社に參詣して、年中の福德を祈ること。夕霧阿波鳴渡中「天満とやらの明神様(吉方參り)」

えびすまはし 惠比須廻。春の初、攝津國西の宮から出て、夷三郎の姿を眞似て舞ひ歩くもの。おもしろをかしい所作をして、家々の繁榮を祝ふのだといふ。一代男三「大和の猿引、西の宮の戎まはし、日ぐらしの歌念佛」

えびすむかへ 惠比須迎。惠比須様の繪を板に押ししたものをも「えびすむかへ」と言つて賣り歩いたとの事。正月に大和奈良の賤民がした身過ぎの業と見える。胸算用「漸う夜も明け方の元日に俵迎々々として賣りけるは。板に押したる大黒殿なり。二日の曙に惠比須迎として賣りける、三日の明け方に昆沙門迎として賣りける」

えびせめ 海老責。兩手を青細引で後へ曲げて縛し、兩足を前へ曲げて縛したる上、その手足を接近させて縛するので海老のやうになる。かうして拷問すること。晝夜用心記「古今にめづらしき盜賊なり。拷問せよと、海老責に仰せ付けられければ」

えもの 得物。得意とするもの。えても

の。一代男六「歌に聲よく、琴の彈手、三味線は得もの、一座のこなし。松風村雨東帶鑑三」今まで下部育ちなれば、科人の繩取、搦め縛りに得ものなんば、

えもんがばば 衣紋が馬場。(地名)京都六條の廓、二の橋(衣紋橋)附近。傾城反魂香中「西洞院中道寺、衣紋が馬場の一方口、まだ大門の遅櫻」

えもんざか 衣紋坂。(地名)江戸吉原遊廓の入口に近くある坂。遊客がそこで衣紋をつくらうつて行くから起つたといふ。二代男一「金龍山の戀知らず、撞鐘に驚き、又この中にと立歸る客の、衣紋坂までは夢も覺めざりしが」

えもんつき 衣紋附。衣服の着やう。衣紋つくりひ。博多小女郎上「顔を見合はす荒男俄かに嗜む衣紋つき、鬼が花見る風情なり」

えもんながし 衣紋流し。鞠の曲の名。蹴鞠の勢にいふことである。曾我會稽山四「鞠の蹴上げの鞠子川、衣紋流しのア、曲もなや」とは、その蹴鞠の言葉であやなしたものの。

えもんふう 衣紋風。えもんつき、衣裳のつけ方。

え

えら えら(家)いこと。高慢なこと。五十年忌歌念佛下「廣い世界を己れが口から、世間手代の習ひとは、えらが過ぎて聞き憎い」

えらぼね あごぼね(頸骨)。えらぼね。油地獄上「ヤあよこさいなけさい六、えら骨ひつかいてくれべいと、くらはす拳を請外しては打返し」

えりくりえんじよ 出入、凹凸の多い場處のこと。えりくりえんじよ。當流小栗判官二「手綱搔繰りくるくくく」えりくりえん所の馬場の土手乗上げ、乗下げ乗りおろし」

えりつき 襟附。重ねて着た衣裳の襟もと。又、その上下の衣裳。えりつき。一代女五「えりつき見立てらるゝが口惜しい。木綿布子でこそあれ、繼の當つたを着た事は御座らぬと、八寸五分の袖口をひけらして腹立つるを」

えりにつく 襟に付く。襟勢のある人に詔ひ附く。曾我會稽山三「京の小四郎といふ種替りの大悪人、慾に耽り襟に付、敵祐經が家の子同然に身を寄せ」

えんげつ 偃月。半月の形。大職冠二「偃月の鎧鞘外し、二人が日の先鼻の先。國性爺一「偃月の戟、會釋も無く振り廻

はし」

えんず 燕巢。雨燕の巢。白色透明で、處々に黒い羽が附いたものもある。食用とする。英文反古二「吸物燕巢にきんかん鉄、いづれも味噌汁の吸物無用に候」

えんせう 焰筒。くわやく(火藥)のこと。釋迦如来誕生會二「仕懸け置きたる埋火の、橋板赫と焼けきれて(中略)焰硝の音、風の音」

えんせき 燕石。燕山から出る石。玉に似てはゐるが、價値の少ない石。宋の愚人が、燕石を珍蔵してゐるのを、客が見て笑ふ話は荀子に出てゐる。雪女五枚羽子板上「枕元の太刀取らるゝ程の大愚將、山鶴を風風とし、燕石を珠と見て國を失ひ身を破り」

えんてい 淵底。深い事情。細かい内情。晝夜用心記五「もとより徳之助が伯父に言ひ立てたるは、淵底しりてしかけたる方便おそろし」

えんべん 縁邊。縁ある同志。縁者。縁家。縁を結んである間柄の者。一代男六「まことに此女はもと彼里にて藤なみにつきし春といへるや手なり、互におもしろづくの御えんべん」

えんまつ 閻魔卒。閻魔の廳に使はれ

てゐる鬼。獄卒。  
 えんめいしゆ 延命酒。灘の銘酒。椀久  
 一世物語下「伊丹屋の四季延命酒」  
 えんれいたん 延齡丹。薬の名。曲直瀬  
 道三の養子玄朔が自製したもので、延  
 壽院といふ自家の稱呼から命名したの  
 だといふ(雅州府志)。毛吹草に山城の  
 名産の一に「延壽院の延齡丹」と數へ  
 てゐる。一代男「わけもなう磯くさ  
 く、心地よからざりしを、延齡丹など  
 にて胸おさへ」

## お

おあし 御足。ぜに(錢)の異稱。近松は  
 この語を特に俗間に限つて通用したも  
 のとして、次のやうに使つてゐる。松  
 風村雨東帯鑑四「金錢はちと用意あり、  
 おあしとては持たねども、是非におあ  
 しとあるからは、これなりともと管に  
 さし、綾錦にていろくくに、飾りし錢  
 をぞ出さるゝ(司の前の詞)」  
 おいれ 老入。老いての後。老境。お  
 いり。梅狩劍本地三「おい人れの榮華  
 まで、この頃思案しめて置いた」

おいにぼる 老いに惚る。老いぼれる。  
 年寄つてぼける。大職冠「鎌足押へ  
 て、ヤレ老に惚れたる有風」  
 おいゑさま おいへさま(御家様)。大阪  
 で、中流以上の家の主婦にあたる人の  
 尊稱。「おゑさま」ともいふ。重井筒上  
 「女は亭主と座を組み、おいゑ様顔し  
 て居たりける」  
 おうご 「おふご」が正しい。枴。物を兩  
 端にかけて荷ふもの。てんびんぼう。  
 心中宵庚申下「商賣のおうご唄はせ、魂  
 に覺えさせん」  
 應長の頃の鬼 噂ばかりで確かなことの  
 知れないことに譬へる。二代男八「西國  
 へとも申し、又下博勢へ根引とも汰沙  
 かりにて、確かなることは知れず、是  
 も應長の頃の鬼が抓み申すやといふ」  
 徒然草第五十段「應長の頃伊勢の國よ  
 り、女の鬼になりたるを率て上りたり」  
 の章に據る。近松の「つれづれ草」に  
 もこの事が出てゐる。  
 おうへ 御上。(→勝手に對して奥の間を  
 稱する。(→入口を這入つて圍爐裏のあ  
 る廣間をいふ。戀八卦柱簾下「お前はお  
 うへに結構な蒲團敷いて、腰元衆づら

りと並べて」。心中萬年草中「二階は蠟  
 燭、庭もおうへも、燈心を掴み込んで  
 赫々とやれ」。曾根崎心中「おうへには  
 亭主夫婦、あがり口には料理人」  
 おおんとき 御時。源氏物語などの「おほ  
 んとき(おほみとき——大御時) から  
 來た語。大矢數百「袖の露雨の帝のお  
 ん時、年號替つて豊成秋」  
 おかかさま おかみさま。奥様。妻を賤  
 んでいふ「かか(驢)に、お(御)の敬稱  
 を添へたもの。品のよくない用語。槍  
 權三三「若い旦那殿とおかゝ様と苦の  
 蔭に屈んでぢや」  
 おかさま 前條におなじ。おかみさん。  
 一代男六「せめて今日こそ、人のおかさ  
 ま並みに、被衣を着せて出かけ」。傾城  
 酒吞童子三「上に立ては女御様、今で申  
 さばおか様ぞや」  
 おかた 人の妻を稱する。前條「おかさ  
 ま」ほどには敬意を含まない。おかみ。  
 一代男三「亭主のもてなし、おかたの輕  
 薄、とかく金銀の光ぞ有難し」。孕常盤  
 二「浪人めきし旅人、何とおかた、茶は  
 まだ有るまい、素湯一つ所望と、床几  
 に腰を懸けければ」  
 おかたぐるひ 人妻に狂ふこと。姦通。

大矢數三「屋形廣いに片脇の山、水莖の  
おかた狂ひはひつそりと」。一代男六  
「太夫手前の全盛、少し前方なるおかた  
狂ひの様に見えて」

**おかたこめや** 女主人の營む米屋といふ  
意であらう。大下馬「よくく聞けば  
五條のおかた米屋とかや」

**おかためく** おかたらしく見える。奥方  
らしい。一代女「もの柔く、人のおか  
ためきたるしかけ」

**おかししゆ** 御徒衆。徒衆即ち徒歩で供  
などする身分軽い士の敬稱。丹波與作  
下「それやこそと、お徒士衆、やにはに  
二人を縛りとめ兩方へ引きわくる」

**置かぬ棚をまぶる** (諺)初めから用意し  
て無いものを探す。求めても甲斐ない  
ものを求める。男色大鑑「今からも陰  
子隙あらんと思ひやられ、おかぬ棚を  
まぶる」。胸算用五「無いというてから、  
錢が一文置かぬ棚をまぶりてから出所  
なし」

**お釜を起す** 運よく財産を作る意。支那  
二十四孝の一人郭巨が、黄金一釜を掘  
り出したといふ故事に據る。釜は量  
名であるが、火にかけるお釜と俗解し  
たのである。十二段四「やれくお釜を

打起した、これ程嬉しいことはなし」  
**おがみうち** 拜撃(をがみうち)。太刀の  
柄を兩手に持つて、正面に高く上げて  
討ちおろすさまが、拜む様子に似てお  
るのでいふ。をがみぎり。百日曾我三  
「まれにあつたる親の敵、おがみ打にう  
てやとて」

**おかみけ** 御上家。貴族。又、その家。  
一代男四「我が戀は唯御上家の女中と、  
浪屋が腰懸にしばらくゐて」。二代男一  
「勤姿去つて、おかみけなる、御所風あ  
り」

**おかもじさま** おかみ様(奥方)のこと。  
かみ(髪)のことも「かもじ」といふが、  
「さま」を附けることはあるまい。松風  
村雨東帶鑑「御かもじ様格もじに、先  
づお暇といふ籬」

**おかんあげ** おかみあげ(御髮揚)の音  
便。髮を結ふこと。又、その結ふ人。  
男色大鑑「數多のおもと人、おかんあ  
げ」

**おきあがり** おきあがりこぼし(起上小  
法師)の略。不倒翁。紙の張抜きで人  
形を造り、底におもりを附け、倒して  
もすぐ起上るやうにした玩具。一代男  
一「芥子人形、おきあがり、雲雀笛を取

りそろへ、これく大事のものながら、  
さまになにをしるべし」  
**おきあげ** 置上。彫刻、蒔繪などの模様  
を、地より高くしたものだ。大下馬「金  
銀の置上げ、日本比類なき名荷なり」  
**おきあみ** 置網。網を張つておいて、魚  
の上流から下るを待つて捕へること。  
その網。三角形の囊狀の網を二本の竹  
の一方を結んで一方を開いたものに附  
けて仕掛ける。まちあみ(待網)。男色  
大鑑七「湊といふ所に置網引かせて見  
に罷る」

**おきおき** 起きたばかり。起きたて。孕  
常盤三「今朝おきおきにひよつこり來  
て茶一服飲んだばかりに」  
**おきがかり** 沖繫り。沖に碇泊してゐる  
こと。博多小女郎下「沖がかりの大船に  
通路を求め、波を漕り、水底をぬけ、  
船へ近づき」

**おきがた** 置形。染形に對して、布など  
の模様は形紙で繪具をおいたものをい  
ふ。男色大鑑「唐木綿の更紗のおきが  
た」  
**おきかんばん** 置看板。看板として置く  
物。座を占めてゐるのみで、無能なも  
のに譬へる。織留六「四條通の白粉屋の

おきかんばん

お

見世に置看板ばかりに呼びけるが、これも商ひ口叩かねば又退出されて」

**おきこひ** 置鯉。祝言の席などに据ゑ置く鯉。

**おきずみ** 置墨。墨で髪を生えきは濃くし、又は眉などを描くこと。きはずみ。一代女四「額際を火塔に取つて置墨濃く」。同一「眉そりて置墨こく、小枕なしの大島田」

**おきづきん** 置頭巾。まるづきん（丸頭巾）、即ち、はうろくづきん（燗烙頭巾）と同じ。永代藏「且那樣と呼ばれて、置頭巾撞木杖替草履取るも」置土産「その時殿様は、置頭巾して書院毛袂を持ち」

**おきつづみ** 置鼓。置いて打つ鼓。手鼓の對。傾城酒呑童子四「人に心を置鼓、横笛が稚な名を直ぐに附けたる竹の名の」

**おきてぬくひ** 置手拭。手拭を頭又は肩などに載せて置くこと。身分の低い女のする風。一代男三「帷子の上張、置手拭して」。女腹切中「姿も下女に二世かけし、男のためや徒歩はだし、つひに被なれぬ置手



おきぬくひ

拭」

**おきどこ** 置床。床の間のやうに作つて、移し置くことの出来るやうにした臺。置土産三「座敷はなれて涼みどころに拵へし置床に、枕もなく寝ころび」

**おきとり** 置鳥。祝言の席などに据ゑ置く鳥。

**おきなめめん** 翁面。おきなな假面。能の翁の曲にかぶる面。又、芝居の初めに舞ふ翁の面。心中二枚繪草紙上「既に今年の酉もたち戌の顔見世（中略）、翁の面のにこやかに」

**おきなます** 沖臍。沖で捕つた魚をすぐ醋に和したるもの。武道傳來記三「潮を漑へて數の魚を放ち、これぞ正眞の沖臍」

**おきめ** 置目。①掟。さだめ。②しおき。刑罰。戀八卦卦曆中「娘がおきめにあふならば、此の苦みを百千萬、かさねても物の數かは」。丹波與作中「盜をさせておきめにあふ」

**おきよどころ** 御清所。貴人の臺所。勝手もと。傾城酒呑童子二「おいとし様や勿體なや、親祖父代々おきよどころへ柴入れた冥加の爲」  
**おきわた** 置綿。わたばうし（綿帽子）のこと。

こと。眞綿を平たく延べて作つた帽子。もとは老官女が用ひたもの。一代男一「座敷に入りきまに、置綿を壁につけ、立ちながら行燈まはして。同三「佛さまに詣でけるにも、置綿ばら緒の雪踏音高く」

**おくがらう** 奥家老。奥づとめをする家老。

**おくぐち** 奥口。家の奥への通ひ口。丹波與作上「時に奥口さぐめいて、早御立ちと姫君の御與昇きあげ」  
**奥口せず** 反物などの商品に、奥即ち末端の方と、口即ち最初の部分との質をかへないこと。品質を全部でがたく調製しておくこと。永代藏四「唐土人は律義に言約束のたがはず、絹物に奥口せず、薬種にまぎれ物せず」

**おくごしやう** 奥小姓。奥づとめの小姓。（表小姓の對）丹波與作上「かゝはもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、互に若氣の戀風に、すれつもつれつ」

**おくごせん** 奥御前。おくがた（奥方）。貴人の妻。

**おぐし** 次條に同じ。孕常盤四「先づ御乳母の冷泉はおぐしの役、十五夜は額の役」

**おくしあげ** 御櫛上。貴人の髪を結ふこと。又、その結ふ人。薩摩歌上「お鬨といふお櫛上げ」

**おくじま** 奥縞。赤絲入の立縞。さんとも(稜留)ともいふ。もと西印度サントメ(聖多默)から渡來したもの。たうざん。よく上方の商人が用ひたといふ。戀八卦柱曆上「主も心をおく縞の、袴もと渡りの昆布の皮」

**おくすぢ** 奥鳥。奥州地方。奥州すぢ。大下馬四「諸鳥までもかく奥すぢはずすし」

**おくど** 奥土。奥の國。奥州。日本武尊吾妻鑑四「寶祚を傾け秋津洲の主たらんと、奥土を立ちて駿河の國沖津にたむろを構へたり」

**おくにばら** 御國腹。大名などが在國中に儲けた子。丹波與作上「丹波の國の一城主、由留木殿のお湯殿の子、しらべの姫はお國腹」

**おくよこめ** 奥横目。奥づとめの人々を監察する役。おくめつけ。一代女一「家久しき奥横目、七十餘歳を過ぎて物見するには日がねをかけ」

**おくらご** おこらご(御子良子)のことであらうといふ。「おこらご」は、大神宮

の神饌に奉仕する少女。大下馬二「一つの望は美しき娘をおくら子に備ふべし」

**おくりがう** 諺號。かひみやう(戒名)のこと。法名。傾城反魂香上「此の場で自害し、その跡のおくり號を待つばかり」

**奥を聞かうより口を聞け** (諺)事の一端を見て全體を推測すべきに譬へる。一事が萬事などいふ類。油地獄下「それそれ、奥を聞かうより口聞け、どこに心が直つた。嘘にも金貸してくれとはいはれぬ義理」

**おけゆひ** をけゆひ(箱結)を見よ。**おけろ** おけよ(措けよ)の意か。即ち「止めよ」といふことか。心中宵庚申上「縮緬は風にしぶき面倒な、重ねておける。是をくれると御意なされ、御手づから下された召替の木綿羽織」

**おごけ** をごけ(麻小荷)。麻をうんで入れるもの。苧桶。丹波與作中「賃苧もよつほどうみ貯めた、これ見さんせと苧桶より金取出し」。同「まめしげもなき浮世やと、おごけにひれふし救きしが」

**おごこ** おくご(御供御)の訛であるといふ。晝飯のこと、上方の方言。女腹切上「釋迦様の開帳の、相伴やらおごこや

ら、旅籠屋で支度して」**おこしかへる** 起し反る。烈火のやうに力みかへる。傾城反魂香上「八丁走井の間屋組頭、組長引具しおこしかへつて聲々に」

**おこしごめ** 興米。糯米を蒸して乾したのを炒つたもの。大矢數三「おこし米秋を重ねて飢饉年、あはれや爰に捨子泣き止む」

**おこたれ** おこたり(怠)の訛。**おこらご** 御子良子。大神宮の神饌に奉仕する少女。俚言集覽に「當宮には巫女なし、子良とていまだ夫婦のわざも知らぬ幼稚のをとめ子也、それが御膳をそなふる器用にて召つかはるゝ也」など、伊勢神宮參詣記の文を引いてゐる。

**おごりをとこ** 驕男。驕奢を極める男。おごりもの。置土産三「今の都のおごり男、然も風俗勝れて、見ぬ世の中將、中古の三左」

**おさあひ** をさない(幼)の轉訛。幼い者。横笛四「主へこの由申してたべ、おさあひ聞きて、あるじの僧は少用ありて、あれに見えたる里へ最前より越され候」

**おさかきだこ** をさかきだこ(箴搔疥眠)

お

お

箒を作る人の手に出来るたこ(餅紙)。をさかき(成盃)参照。織留二「このあるじ二十年以前までは挑灯の張替へして(中略)、澁油にきらを引いて、兩夜の挑灯といふを始めて、今七千貫目持と世間のさしづ違ひなし。おさかきはこの手せし人にもあらねば、都にも昔は大方に吟味して、歴々の縁組せし事、言ふもくどけれど、兎角世は銀の光ぞかし」

**おさかべぎつね** 於佐賀部狐。姫路に住んでゐたといふ有名な老狐。五人女「兎角女は化物、姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし」。次條参照。

**おさかべどの** 於佐賀部殿。前條に同じ。大下馬「諸國の女の髪を切り、家々のはうろくを破らせ萬民を煩はせたる大和の源九郎狐がためには姉なり。年久しく播磨の姫路に住み馴れて、その身は人間の如く八百八疋の眷屬を使い、世間の眉毛思ふまゝに讀みて人をなぶる事自由なり(中略)。二階堂の煤助、鳥居越の中三郎、隠笠の金丸、鶏喰の關太郎、野あらしの鼻長とて、於佐賀部殿の四天王一人武者これなりと、形を變へてぞ失せける」

**おささのさか** をささのさか(小笹坂)を見よ。

**おさし** 乳をさしあげる女。御乳母。丹波與作上「大上蒔小上蒔、おさし抱き乳母御乳の人」。雪女五枚羽子板中「大名方の若君の、おさし奉公と言聞かせ」

**おさへ** 押へ。行列の最後。しんがり。源氏冷泉節下「七つ道具に六つ武藏、辨慶は押の役」

**おさへの盃** 差さうとするのを、強ひて返して飲ませる盃。女腹切中「さつきの押への盃は、いつの世に戻る事」。尙、動詞としての「おさふ」の形は、下のやうに用ひてある。一代男三「いまだ古風やめず、一度々々におさへて、酒ぶりかたし」。堀川波鼓上「返盃申すといひければ、爰は母がおさへまし、あいを致してあげませんと、又引き受けてついとほし」

**おさへる** 押。酒宴にいふ語。前條を見よ。榮花咄四「盃を押へるといへば、こなたさまは大平なことをと」

**おさめ** をさめ(治)。をさまり。決定。松風村雨東帶鑑三「村雨の心のおさめ、委ものごし業平様に、微塵ほども違ひなし。及ばぬ人より此人を、近道にと

分別すゑ」

**おされぬ** 争はれぬ。否やがいはれぬ、事實である。戀八卦柱磨中「殊にけふは土用の入、それで跡がきつうどよむ。曆の事はおされぬと、減らず口して歸りけり」

**おさんだん** 御讃談。佛様の功德を讃して説くこと。お説教。御法話。冥途の飛脚下「鎌田村のお道場へ、京のお寺のお下り毎日のお讃談」。武家義理物語二「おさんだん半に、數多の人を見わけしに、佛前のおそれもなく、柿の夏頭巾をきたる頭」

**おしいり** 押入。強盜。おしこみ。一代男四「かや原といふ里に、押入有つて物を取るのみならず、人をあやめて逃げて行く」

**おしかけさんがい** 押掛三繫。馬具。馬の頭から轡にかける鞆(おもがい)、胸から鞍橋(くらばね)に繋げる鞅(むながい)、尾から鞍橋にかける鞅(しりがい)の三つをいふ。釋迦如來誕生會二「黄金の轡珊瑚の鞍、押かけ三繫、腹帯搖締め引立てたり」

**おしごと** 悪いと知りつゝさせる事。強ひ事。女腹切下「知つて居ながら此の



伯母が、を(お)し事したる其の咎め、因果とほか思はれぬ」

**おしごろ**

釈迦如来誕生會門「前生で嘘つけば、嘘ごろに生れる、火に入り水に沈むも、皆前の世の報いぢや」

**おしだいこ**

押太鼓。戦陣で進軍の相圖などに打ち鳴らす太鼓。陣太鼓。雪女五枚羽子板下「戦場のかげひき、御陣の押太鼓、萬里を響かす名人ゆゑ、則ち御代々の太鼓を預け召連れ候」

**おしの衾**

鴛鴦を縫ひものにし、又は畫いた衾。五人女門「灯の影に硯紙置きて、心の程を互に書きて、見せたり、見たり、是をおもへば鴛のふすまとやいふべし」。男女仲のよいことの譬。

**お十二銅**

十二銅とは十二文の賽銭のこと。俗に「おひねり」といひ、白紙に錢十二文を包んで捻つて神佛に獻じたものである。兼穂録「俗尼各施錢十二文」。卯月潤色中「神おろし致しては、お十二銅が一包み、御さき祓百二十、お望み次第」。

**おしほやま**

をしほやま(小鹽山)を見よ

**おしまひ**

御仕舞。物事の終り。殊に商

家の總勘定、店を閉ぢることなどに用ひる。永代藏五「當年のお仕舞は庭に三石、地米と見えました、いつもより早起餅つき(中略)このやうなるお仕舞江戸には知らず」

**おしもつき**

御霜月。霜月は十一月の異名であるが、門徒宗では、親鸞上人の忌日(二十八日)が十一月であるので特に「御」を附していふ。因みに、報恩講は十一月廿二日から七日間に亘つて行はれるが、それを十月に取越して替むのを「お取越」といふ。その條參照。大矢數三「御霜月難波の御堂執行あり、田蓑の烏や置綿の色」。心中二枚繪草紙中

**おじやれ**

「をじやれ」とも書いてあるが、「お出でやれ」であるから「おぢやれ」が正しい。宿驛などの賤しい賣女。出女。道中の客を「おぢやれ」(御出であれ)と呼ぶので稱したといひ、泊り客の方で「晩におぢやれ」といふのに應ずるところから言つたといふ。前説に従ふべきであらう。丹波與作中「勤めの身にもおぢやれの身は、下の下といふ

は爰のこと」。同「君傾城と云ふ者は、此のるいで王さま。それから段々有る内に、をじやれの身には何が成る」

**おじやん**

「おじやる」、「御座る」の訛。丹波與作上「馬次・舟渡し等にて、がうぎがきつを仕つたらば曲事でおじやんべい」

**おしやんす**

おつしやる(仰せらる)。言はつしやる。薩摩歌中「あのおしやんす事はいの」。

**おしゆくらう**

御宿老。町内の年寄役。取締りなどに任ずる。曾根崎心中「お宿老殿が仰せられしは、此印判は、先月の廿五日に落したとて町々に貼紙せし」

**おしよぼからげ**

着物の裾をからげて帯に挿むこと。よく女のする風。「おぢよぼからげ」の訛で、大阪の方言であるといふ。ちんちんばしよりに同じ。傾城反魂香中「大幅帳かたげて来るは、みやぢやないかといふ所へ、おしよぼからげのいそがしげに」

**おしらいし**

御白石。永代藏門「鳥原正月買ひの庭錢はすれど、京の人すぐれてしはしとお白石まく親仁もいへり」

**おすぎ**

おたま「あひの山のことじき」

お

の條を見よ。

**おすゑ** 御末。内裏又は將軍家などで、奥むきの室、又そこに詰めてゐる女をいふ。百日曾我ニ「中宮・女院・仙院十二の對の局々の女嬬お末、内侍所への刀自采女」。傾城酒吞童子ニ「京の御所より女嬬がおすゑか一兩人、呼び候はん」

**おすゑをんな** 御末女。前條「おすゑ」の轉。江戸時代、武家屋敷の奥女中として卑しい務めをした女。水仕業や姫君の乗物の世話など勤める。おすゑ。一代女ニ「御末女渡し女に至るまで懼りなく、三十四五人車座に見え渡りし中へ」

**おぞい** おぞし(悍)の音便。人の意表に出るやうな。わるがしこい。ずい。すごい。大矢數ニ「桶がおぞい事どもたくみては、二重底なる舟の行末」。歌念佛中「其方が今度のおぞい仕様、魔法でも適ふまい」

**遅牛も淀** (諺) 「遅牛も淀、早牛も淀」といふ。歸するところは同じであるとの譬。永代藏五「兎角身を捨ててかせがば、遅牛も淀車の廻り合せよくば、二度家の榮え行く事も」とは、この諺を

轉用したもの。

**おだい** 御臺。食物を載せる臺、即ち膳のことから轉じて、飯のことをいふ。心中宵庚申上「二合半のもり切りおだい、喉につまつてぎつち〜」。おだいがひ 御臺匙。前條の「おだい」をもる貝杓子。御飯貝。二十不孝四「舟間屋の勝手は、是で持った女房様の御飯貝といへり」

**おたいびつ** 御臺櫃。めしびつ(飯櫃)。大阪獨吟集「見渡せば花よ紅葉よおだい櫃、浦のとまやのさら世帯也」。又、「ちぎばこ」のことをいふ。**おたび** 御旅。おたびしよ(御旅所)の略。次條を見よ。今宮心中上「先はおたびの神かけて、跡先に又續く者がないは扱」

**おたびしよ** 御旅所。祭禮の時、神輿の假に鎮坐する所。おたびのみや。壽門松上「我等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のお旅所といひさうな住居」**おためがほ** 御爲顔。御爲めになるやうな顔つき。主人に忠義ぶる様子。出世瀧徳上「かの新七のいきずりめ、お爲がほで旦那をびづめ」

**おだゆむ** をだゆむ(小池)が正しい。雨などが暫く降りやむこと。をやむ、會

我曾稽山四「五月雨の一頻りおだゆみて、空さりげなく星々と、北斗の光輝かに」

**おち** 御乳。おちのひと(御乳の人)の略。丹波與作中「母はなほしも心くれ、命はお乳が貰うた、助けて下され侍衆と、わつとひれふし聲をあげ」**おちあゆ** 落鮎。晩春初夏に川を上つて来た鮎の、秋九月の頃に卵を産みに瀕を下つて行くのをいふ。萬文反古五「精進も落鮎のしのび料理。大酒の上の言葉とがめ」

**おちえん** 落縁。普通よりは一段低い縁。出世瀧徳下「聲に驚き梯より、ばた〜どうと落縁の、隅にかがんで慄ひ居る」**おちきしゆ** 御直衆。おちきしゆう。直ちにその主君に仕へる者。陪臣(またもの)に對していふ。ちきさん。雪女五枚羽子板上「大將の御座といひ、御直衆に慮外せしと、いはれては理非立たず」

**おちく** 落句。劣つてゐる句。俳諧の語。西翁の句「ほととぎすひとつとも聲の落句なし」

**おちたさかな** 落ちた肴。死んだ魚。心中宵庚申上「獻立に三汁九菜、おちた肴を吟味の役人、こりや目出鯛を三枚に

おろし

おちつき 落着。宿屋などに落ちついて、まづ飲食する物。傾城酒呑童子ニ「嫁入は大體祭同然、酒はもろみの手作り(中略)、落付はお雑煮、野川の鮎の鮎」おちのひと 御乳の人。「おさし」、「だきうば」に對して、特に養育掛の主任格をいふ。「おさし」の條を見よ。

おちま 落間。他の室よりも床の一段低いところ。油地獄中「落間にかはと突落せば」

おちめ 落日。おちぶれかかり。落魄しはじめ。おとろへゆく境遇。武家義理物語四「其のおちめなる侍衆、ならば望みなり」。吉野忠信三「惣じて女郎といふものが、おちめを救ふものでなし」

おちやうばなし 御町話。色町の噺。遊女・揚屋などの評判。二代男三「高雄が遣手の千代が噺、揚屋は桐屋の市左衛門もよし(中略)とお町ばなし」。おまちばなし。

お茶の通ひ お茶の給仕。食膳の御世話。武家義理物語四「先様に御合點あらば、身をまかせ、お茶のかよひ仕うまつり申すべし」  
おちやこしやう 御茶小姓。御茶の給仕

をする小姓。

おちやしよ 御茶所。神社や佛寺で、參詣人にかはつて神佛にお茶を供へ、又、參詣人を休ませる所。おちやどころ。心中二枚繪草紙中「講中お茶所の冥加錢残らず爰に持ち集り、お勤め過ぐれば表に出で」

おちやのこ 御茶の子。物事の容易なこと。苦にするに足らぬ事件。傾城反魂香中「廓は諸國の立合、常住、切つてのはつての是程の喧嘩は、お茶のこく茶の子ぞや。ア、仰山など笑ひける」  
おちやのま 御茶の間。上女中のゐる室。轉じてその女中をいふ。ちやのまをんな。仲居。織留六「さて仲居の役は(中略)廣敷より内の掃きさうぢ、屋敷方にてお茶の間といふに同じ」

おぢやれ 「おじやれ」の條を見よ。  
お茶を引く 賣女の客がなくてひまなごと。もと遊女の許で茶を立てたことがあるのでいふ由。

おちよば 十五六歳までの下婢。もと、京都の方言。武家義理物語四「秀吉公の御女蔦の花か、おちよばか、此の二人の艶なる風俗」  
おつ 落。白狀する。出世景清三「おのれ

落ちずばただ置かうかと、高手小手に縛りつけ」

おつ 乙。音楽にいふ甲に對する語。甲(カン)高い聲などいふに比して、低調な聲にいふ。二代男三「ものいふまでもおつへ入りて物靜かなり」

おつかかる おしかかる(押掛)の音便。「近づく」、「ならうとする」などの意を強めていふ。天網島上「三十に押つかゝり、勘太郎お末といふ六つと四つの子の親」  
おつかない (不安を感じるにいふ。おそろしい。こはい。二代男五「我おつかなく思召さずば、逢うて給はれと」(い)かめしい。仰山な。心中二枚繪草紙上「正月七日神前に於て、おやおつかない誓紙を書く」

おつかひばん 御使番。使番の敬語。江戸幕府の職名にもあるが、普通の武家に仕へて、種々の使に任ずる者をも稱する。武道傳來記三「同じ家中に福崎軍平といへる御使番を勤め、仁體すぐれて武藝に達し」

おつき 御次。貴人の御室に近い間。御次の間。奉仕の者はそこで御用を伺ふ。丹波興作上「通はせ文をお次に落し、小

お

目目附に拾はれ」

おつたてじる 追立汁。追立てるやうにして作る汁といふ意か。にはかの造り汁。雙生隅田川ニ「手際は古今かうの物、敵は味噌追つ立汁、吉田の家をあへ物には」

おつづらうま 御葛籠馬。葛籠を負うた馬の敬語。旅の荷物を運ぶ御馬。堀川波鼓中「さて見事なおつづら馬や、七つ蒲團に曲衆すゑて」

おつとつて (副詞)。もつばら、主として。思ふ存分に。新可笑記「是習ひ得て茶人の名を付けて見る程には、おつとつて十年の稽古なくてはなりがたし」。榮花咄五「彼女おつとつての撥音」

おつとまかせ よしきた。承知した。氣輕に物事を引受ける時に發する詞。「おつと」は感嘆詞、「まかせ」は任せておけの意。冥途飛脚申「早うこりや頼むと、又一兩投出す、おつとまかせと足輕く、走る三里の灸よりも、小判の利ぞ應へける」

おつとりがたな 押取刀。急いで手に取る刀。そゝくきと刀を取ること。堀川波鼓下「北か西かとおつ取刀、我れ劣らじとぞ走りける」

おつとりぐは 押取鉢。俄かに手に取る鉢。武道傳來記四「法師おつ取り鉢して塚のしるしを掘りのけ」

おつぼろがみ 垂れ亂した髪。小兒にいふ。

おていしや 御手懸者。お手もとに抱へておく醫者。おてまへいしや。武道傳來記五「歩行六尺數十人、御手懸者坂川玄春、御使者には今の御物甲斐品之丞をつかはされ」

おてかけもの 御手懸者。てかけもの(妾)の敬語。武道傳來記六「當分百兩請取り、金子に身を捨て、御手懸者といはれしも」

おてき 御敵。遊廓の詞。あひかた(敵方)の敬語。お客より相手の遊女をいひ、又、遊女より相手のお客をいふ。天網島上「思ふおてきなれば、のがさじと飛びかゝり」。博多小女郎浪枕上「それやこそおてきと色めいて、毛剃が連れども現をぬかし」。おてきさま。

おてまへ 御手前。そなた。足下。武道傳來記七「口をしくもやみく」と、御手前が手にかゝつて夫婦共に殺さるゝこと

者。おていしや。武道傳來記五「御手前醫者様々にし奉りし験もなく」

おてら 御寺。お寺様の略。坊さん。冥途飛脚下「京のお寺のおくだり、毎日の御譚談」

おと 乙。(一)弟又は妹をいふ。油地獄上「姉が手を引きおとは抱く、中はてゝ親肩車に」。(二)おとこ(乙子)の略。末子。同中「去りながら乙のおでんめは二つ子、乳がなうてはと不便に存じ」

おとがひ 頤。口の意に轉用した例、(一)雙生隅田川三「頤養ふ有り難し」とは、食ふ口のこと。(二)壽門松上「踏まれてさへあの頤」とは、しやべる口。

おとがひて蠅を追ふ(諺) あど(膠)で蠅を追ふともいふ。精力の衰へ果てたのに譬へる。丹波與作里梯子の下のごそゝが過ぎて氣色でも悪いか。餘りごそゝごそついで、馬は追はひでおとがひで、蠅おやろぞや

おとがひのしづく 頤の鬚。手近にあるが、我が物として思ふまゝにならぬ鬚。娥歌加留多「はや與様があるからは、おとがひの鬚、かなはぬうき世」

おとがひを聞く 頤を叩くともいふ。しやべる。戀八卦柱曆中「まだおとがひ

を聞きをるか、ほゞげた三つ四つくらはせて」

**おとぎ** 御伽。御伽するもの。御世話するもの。傾城酒吞童子曰「お伽どもがお髭の塵」

**おとぎこしやう** 御伽小姓。幼主の遊び相手たる御小姓。丹波興作上「いつもの歌を誦へ〜とせめ給へば、お伽小姓の玩是なし、十二三なが手を揃へ」

**おとぎばふこ** 御伽道子。白い帛で頭身を包み、黒い絲を髪とし、前方を左右に分けて垂れた人形。長さ一尺餘り。あまがつ(天兒)即ち小兒の守りの一種。

**おとごせ** 乙御前。おたふく(阿多福)のこと。大下馬「天井より四つ手の女、顔は乙御前の黒きが如し」

**おとごついたち** 弟子朔日。陰曆十二月一日。弟子は季子であるから最後の月十二月をいふ。胸算用「氏神の御拂團子、弟子朔日。厄拂ひの包み錢」。風俗文選「乙子の朔日とて節季候の來初むる日也(四季辭)」

**おとし** 落。話のおち。一代女「おてきさまへの申分けは、こちは存じませぬなどいふが、閑女郎の必ずおとしなり」

**おとしがけ** 落懸。髪元結の掛け方。

お

普通よりは髻に低く懸ける。男色大鑑「緋紗綾のふたの、蹴かへしにほのめきおとしがけのはね元結、すかし形のさし櫛」

**おとしご** 落子。おとしだね。落胤。一代男三「公家のおとし子かと思はれて、賤しき容にあらず」

**おとしつく** 落付。おちつかせる。静まらせる。男色大鑑曰「その後は命も危かりしを、いかにも〜一通り聞届けしと、松三郎に魂をおとし付けさせ」。

**おとしゑ** 落餅。鷹などが、その雛に上から餅を落し與へること。その餅。おとな 一番家老。譜代の老人。番頭とも書く。雪女五枚羽子板中「家の番頭文平次」。薩摩歌上「おとな殿へ申して取りかへ渡し」

**おとなくれる** 大人らしくなる。ませる。槍權三上「お菊はさすが姉だけの、母親略、いかにお世話、ちとお休みと差出す(中略)、おとなくられたる振を見て、ヲ、孝行な、よう云やつたおとなしうなりやつた」

**おとなくろし** 大人らしい。大人めく。おとなやく 大人役。大人としての役。成人したものと見なされること。

**おと(乙)**は血の縮 乙即ち乙子、末子。末子は最も可愛いといふ心。源氏十二段長生鳥蓋「乙は血の縮といとほしく、あくがれおと出で給ひ」

**おとはやき** 音羽燒。音羽山燒の略。京都五條坂清水邊で製する磁器。多くは染付である。きよみづやき。生玉心中上「錦手、乾山、音羽燒の皿の、鉢の、茶碗のと」

**おとはやま** 音羽山。(前條に同じ。音羽山燒の略。槍權三上「薄茶茶碗の音羽山、おとなくられたる振を見て」。(山名。京都東山のうち。清水寺はその山腹にあたる。)

**おとぼね** 音ぼね。こゑ。音聲。油地獄下「出合へとわめく一聲、二聲待たず飛懸り取つて引締め、おとぼね立つるな女めと、喉笛の鎖をぐつと刺す」

**おとまし** うとましい。疎むべくある。好ましくない。困りものである。重井筒上「エ、おとましや、身代は得持つまい」。油地獄中「今のまに脛が腐つて落ちると知らぬか。罰あたり、おとましやおとましや」

**おどもり** とどこぼり(滯)。未済の金などいふ。「よどむ」の轉訛「おどむ」の

更に轉訛した語であるといふ。雪女五枚羽子板上「こそ」宿の情事、身揚り分のおどもりも、東方朔が九千兩」

**おとや** 乙矢。弟天。射藝の語。一手矢即ち一對の矢のうち、はや(甲矢)に對していふ。武道傳來記「僕が持てる弟矢と一手に紛ひなき」

**おとりこし** 御取越。一向宗の佛事。陰曆十月に、在家で行ふ親鸞上人忌。正忌は十一月であるのを取越して行ふのでいふ。「おしもつき」の條參照。大下馬「折節十月二十八日、今宵御取越とて殊勝に御文を戴き」

**おどれ** 己れ。「おのれ」の訛。うぬ。なんち。胸算用目「おどれは又人賣の請でな、同罪に粟田口へ馬に乗りて行くわいやい」

**おないぎ** 御内儀。人妻の敬稱。國性爺を置去りに親子夫婦四人連」

**おなりも** 御成門。大名の家で宮方。攝家・將軍などの御成を迎へる時に用ひる門。永代藏「諸大名の御成門軒を並べて輝き」

**おなんど** 御納戸。御納戸方、又は御納戸役の略。即ち、武家で衣服・調度など

の出納をする役。御納戸を掌る役。男色大鑑「おなんどより路金まで賜はりて」

**おにうちまめ** 鬼打豆。おにやらひの時、鬼を打ちうつ豆。一代男「二日は年越にて(中略)鯛柁をさして、鬼打豆、宵より屏をしめて」

**おにきしん** 鬼鬼神。鬼神を強めていふ。おにだまい おにだまり(鬼溜)の意であらう。日本振袖始「寄手は大軍四方八面に切り立てられ、鬼だまいにくはつ」と、溜息吐いてぞ控へたる」

**鬼に衣** (諺) 表面は殊勝らしく見えて、内心のおそろしいこと。「狼に衣」ともいふ。織留五「形は出家になれども、中内心は皆鬼に衣なり」

**鬼の痴話** 氣味悪いことの譬。傾城酒呑童子「怖い事はないはないな、御座んせんあと、小手招き、鬼の痴話かと氣味悪し」

**鬼一口** 鬼の一口で嚙まれるやうな危険なこと。又、事の容易な譬にもいふ。傾城酒呑童子「武者ぶりつくをもぎ放し、鬼一口を通れし心」。槍狩劍本地五「惟茂殺すはおのれを頼まず、鬼一口に嚙んでやる」

**おにみそ** 鬼味噌。見かけばかりで内心の弱い者。よわみそ。(名のみで質の悪い味噌の意から轉じた)。日本振袖始「臆病の鬼ども一疋も出會はず、近比弱味噌鬼味噌の汁かけ鬼、喰ひ残す残念々々」。「鬼は弱味噌」ともいふ、臆病者のこと。

**おにもち** 鬼縶。鬼縶。荒くしほつたもちがた。又、綿摺絲或は麻絲の太いので紗織にした布、あらにもち織をいふのであらう。永代藏「麻袴に鬼縶の肩衣、幾年か折目正しく取置かれける」

**鬼をする** 毒味をする。鬼なめ。鬼とり。鬼役(おにやく)を勤めるなどともいふ。

**おにをどり** 鬼踊。寺の前で鬼の面をかぶつてする踊。鬼の踊。生玉心中下「罪業の程思はれて、呵責恐し鬼踊りの、寺の數垣物凄く、身を慄はしてぞ立ちにけり」。日本振袖始「悦び勇み跳廻る、鬼踊とも云つべし」

**おねば** 御根葉。まづびした菜。大阪方言。かひわり。心中宵庚申下「ヤ其のちよき」で夕飯のおねばきさめ」

**おのがしな** おのがしな。各自さまさま。おのがじし。出世景清「一番匠の

棟梁、木工の頭修理の頭、おのがしなる出立」

**おのさま** 己様。あなたさま。そなた。源氏烏帽子折三「自らは殿始、おの様は烏帽子始、めでたく間に御祝儀あれ」

**おのさん** 前條の音便。

**おのれざき** 己れと咲くこと。自然に野生して咲きいでる花。男色大鑑六「川原におのれ咲きの茶種の花を、二もと三もと」

**おのれに** おのづから。自然に。萬文反古三「まがきの菊萩おのれに咲きて、頓ての霜夜見ぐるしく成り行くを」

**おのれやれ** 己れやれ。「己れ、今に見よ」などの意か。將來に對する覺悟など述べるにいふ語。吉野郡女楠三「傍で見ろさへ胸せかれ、己れやれ二世とかはした大事の男、この儘では果させじ」

**おはぐろおや** 御商黒親。鐵乘親。男女始めて御商黒を附ける時、その世話をする女。親族又は知己の中で、福徳のある婦人が選ばれて之に當るといふ。かねおや。薩摩歌上「それに五年の馴染といひ、お果てなされた母様の、おはぐろおやにならせられ、おれとは姉妹同然に、一寸側を放さぬに」

**おはした** おすゑ(御末)と同じ。その條を見よ。一代男四「さる大名の北の御方に召しつかはれて、日のめもついに見給はぬ女郎達や、おはしたや、その心もなき時より奥の間近くありて」

**おはつほ** 御初穂。初穂の敬語。穀物、野菜果實など、すへて其の年出来た最初のものば神佛に進せるところから、一般に神佛への供物をいふ。神佛へ奉納の金錢・物品。おはつもの。お初尾。二代男「客無しの女郎が拜うで居らるゝ、無用の信心なり、それよりはならぬ親の方へ、少しづつのお初穂をあげたまへ」とは、やゝ轉用した例。

**おはふ** 追。おふ。おひかける。生玉心中下「追手の聲のあれくく、おはへて爰に北向の、八幡宮の燈明も」。薩摩歌上「妾も夢の相伴と、おはへてこそは入りけれ」

**おはまり** 事にはまり込むこと。執着すること。心を捕へられること。薩摩歌中「今の尼の咄が闇が噂に似た故に、そこを以ての惡推か、イヤ是はいかいおはまり」、又、たまされることにもいふ。

**おはもじ** お恥しい。女の詞。おはもじ様。傾城反魂香上「こちの人の吃と私が

しゃべりと、入合せたらよいころな、女夫が一组出来ませう。ア、おはもじやと笑ひける」

**おばらざし** 亂れ髪のことであらうといふ。紙屑買や草履賣などの風俗にいふ。源三位頼政四「女房姫君ぼたんの姫、おばらざしにいで立たせ、人目忍びて丹波路や、矢代の庄へと急ぎける」

**おはらひ** 御祓。御祓祭の略。大阪では毎年六月晦日大祓の神事が、各神社で行はれる。五人女三「鼻高く面赤く眼ひかり、住吉の御はらひの先へ渡る形のごとく」、胸算用三「十貫目入り五つ、青竹にて揃への大男にさし荷はせ、其のまゝ御祓の渡る如し」。御神社佛寺から出す厄よけの札。御祓箱の略。

**おはらひくぼり** 御祓配り。前條の御祓をくぼる者。甚盤太平記「お祓ひ配りの伊勢のお師、六十六部の納經者」

**おはらひだんご** 御祓團子。御祓祭の時、神に供へる團子。胸算用一「氏神の御祓團子」

**御祓の練衆** 御祓祭の時、行列して練り歩く人達。夕霧阿波鳴門中「此方程槍は振らねども、お祓ひの練衆御番替り、人の氣に入り」

お

**おはらひばこ** 御祓箱。御祓の札を納れる箱のこと。胸簪用。「毎年太夫殿から御祓箱に腰籠一連、はらや一箱」

**おひえ** ぬのこ(布子)。又、よぎ(夜着)をいふ女の詞。つめた。戀八卦柱曆上「そなたのねまきのおひえ(え)もかし

て、寝替はつてたもらぬか」  
**おひかけ** 追懸。遊廓の詞。客の意中を探る手段として、知らぬことを知つたやうに言つて返事を聞き出すこと。今日いふ「かまをかける」類。大矢數四

「先づ初手は唯やはらかに話しよる、やんれ追懸申綱仲人」  
**おひき** 御引。御引出物に同じ。心付の金錢、祝儀の品などいふ。戀八卦柱曆上「それ久三、挾箱、曆くばる家に寄つて御引が出る、只取ると思ふな」

**おひこみさじき** 追込棧敷。劇場の棧敷のうち、末の方にあつて、區劃(ます)のない入りごみのところ。兩吟一日千句「しく物も喰物もなし春の空、胡蝶の舞や追込棧敷」

**おひする** 笈措。巡禮が衣服の背のすれのを防ぐために着る袖なしの着物。羽織に類して、左右中の三部から成り、兩親ある者は左右が赤地で中が白地、

ない者は左右が白地で中が赤地のものを用ゐるといふ。おひずり。賀古教信七墓巡三「佛前に供へたる、順禮のおひずるを擲げて金銀を押包み」

**おひたき** 追焚。追炊。飯などが食ひ盡されて足りないうとき、後から追ひかけて炊ぐこと。又、その飯。大職冠四「大食さうなと申すこと、ヘア又聞違へたゆるせ」。日利は遣はぬ一人前に五人當、追焚すなとて入りにけり」

**おひとり** 追鳥。おひとりがり(追鳥狩)の略。  
**おひとり** 帯取。太刀の緒。太刀のあし(鞘)からんで腰に纏ふ緒。傾城酒呑童子「太刀の帯取寛きて、飾の金具搖ぎ出で、からり〜」

**おひとりがり** 追鳥狩。山野に出て、鳥などを追立てて狩りすること。おひとり。二代男「生駒の麓に誘はれ、追鳥狩に二三日も、見ましや損ばせを」

**おひばら** 追腹。主君の死を悲んで、後を追つて腹を切ること。武道傳來記「細川頼春の家來追腹始めて、今和朝の手本として」

**おひやくど** 御百度。御百度詣。神佛に祈願の爲に、その境内の一定の距離を

百度往來して、その度毎にその神佛を禮拜すること。曾根崎心中「丹波屋まではお百度ほどたづぬれど、あそこへも音づれないとある」

**おひえ** ぬのこ(布子)の條を見よ。  
**おびん** お比丘さん。比丘尼を呼ぶ詞。吉野都女楠四「やれきづまりや是れおびん、旦那がいなれたもう樂ぢや。歌はうと踊らうと夜中まではこつちのもの、こ〜」

**おふく** 御福。おたふく(阿多福)のこと。おかめ。傾城反魂香甲「たとへ餅屋のおふくでも」

**おぶく** 御佛供。佛へのお供へもの。一代女三「お佛供まだかと、お文様を持ちながら問ひ給ふ」  
**おふさ** をふさ。虹のこと。大矢數二「雲に雲鉛香合かさねたり、轆轤をひけば虹(オフサ)かゝれる」

**おふす** 負はせる。かぶせる。罪などをきせる。二枚繪草紙下「弟の善次郎は兄におふせて銀盗み」

**おふせかた** 負せ方。貸しかた。債権者。債主。俗つれ〜五「身體崩れて分散となり、門口に負せ方より厳しく番を付け置く折節」



**お船がすわる** 腰がすわるの類。御輿が据わる。容易に動かぬ譬。曾根崎心中「今宵も明日もあさつても、揚げづめの

大々盡、お船がすわつた」

**おふみ** 御文。門徒宗で報恩講などに讀む御文様(おふみさま)のこと。蓮如上人が眞宗の要義を通俗平易に認めて、時々その信徒に與へた消息を編輯した

もの。御文章。大谷派で特に「おふみ」と稱する。大下馬三「お取越とて殊勝に御文を戴き、有難き御談合に涙を流し」

**おふみさま** 前條に同じ。一代女三「お佛供はまだかと、お文様を持ちながら問ひ給ふ」

**おへきしよ** 御壁書。壁に貼りつけたお書附。揭示したお掟。「かべがき」「へきしよ」の敬語。雪女五枚羽子板下「御壁書を背き不義の科、高眼を掠め女を相具し」

**おほうちがた** 大内方。宮中方。朝廷方。出世瀧徳上「お公家様のお袖判を偽判し、金の取手はよみ人知らず、大内方より御詮索」

**おほうちぎり** 大内桐。五七の桐の模様。(名物)ぎれの一。金地などに、紋金の桐唐草のある裂布。大内義隆が明

お

國に囁して織らしめたものといふ。丹波與作上「窠に霞、大内ぎり、覆ひかけたる挾箱」

**おほうちそだち** 大内育。御所風のそだち。貴族そだち。その育てかた。孕常盤四「大内育にかしづきて、若紫の稚立ち」

**おほうちびし** 大内菱。(菱の花の形をした模様。戦國の初め、周防山口の大内氏の家紋として用ひた唐花菱の形したもの。(名物)ぎれの一。金地などに、大きき三寸ほどの二重菱の内に、紋金で牡丹を織り出したもの。一代女「天色の昔小袖に八重菊の鹿子紋をちらし大内菱の中幅帯前に結びて」

**おほうちゆかり** 大内縁。宮中に縁故あること。又、その人。蟬丸三「殊に某が妹は、女院様のお末の奉公仕る、大内ゆかりと申し」

**おほえなし** 覺えなし。覺悟なきこと、不覺のことにいふ。蟬丸三「さりとは覺えなし、恨みを晴れよ免してくれよ」

**おほえのきし** 大江の岸。大阪城以南一帶の稱。特に天満橋南の八軒屋の地。

**おほおろし** 大風。馬の曲乗の「法」。「こおろし」の條参照。

**おほかろし** 大格子。大きな構への遊女屋。

**おほかぎ** 大鍵。大鉤。紋所の「鍵」の大形のもの。薩摩歌上「煤竹羅紗の袋鞘、大かぎ打ちたる印こそ、庄内の主ぞ」

**おほかた** 大方。並み。特にすぐれた點のないものごとにいふ。轉じて、いゝ加減なこと、ざれごとなどに關しても用ひる。一代女四「敷じて母の親鼻の先智恵にて、大方に生れつきし娘自慢、はや十一二より格別に色作りなし」

**おほかながい** 大金書。大弓にいふ詞。俚言集覽に「今の世、大弓の上手の人、百本を九十・九十一中るを大金書、七十五以上を金書といふ。黒きぬり札へ名を記したるを云」。織留三「あるひは大金書の看板に付いてから何、此矢自然の時の用に立ち、せめて盗人を射とめるにもあらず」。おほかながひ(大金具)とも記す。

**おほかぶろ** 大禿。禿鞘(かぶろざや)の大きなもの。槍の鞘の一種。圓くて飾りのない大形のもの。薩摩歌上「花菖蒲菖蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前家六角の」

**おほかま** 大鎌。鎌は曲つてゐるので、

人の心の邪曲なのに譬へていふ。大いに心の曲つたもの。卯月潤色中「家では誰が點を打つた。大鎌の犬めらに、懲り果て死ぬる身を」

**狼に衣** (謔) 鬼に衣といふに同じ。胸算用「心の外の空念佛、思へば心の鬼、狼に衣ぞかし」。萬文反古五「其身は狼に衣、形は出家」

**狼の黒髯** 或才骨男が、犬の死體を貰ひ受けて黒髯にし、疳の妙薬になるとて、かく名づけて賣り歩いたといふ。日本永代藏「山家の作り言葉になりて狼の黒髯はと、聲のをかしげに賣りて」

**おほがんだう** 大強盜。大泥棒。「がんだう」は強盜の唐音。人を罵るにいふ。大職冠「大がんだうの生きずりめ」

**おほきど** 大木戸。大阪の廓新町の東の大門(新町橋の入口)をいふ。出世瀧徳上「霞が關か東口、安ぞ浮世のだての大木戸」

**おほくかず** 大句數。俳諧の詞。一時に數多くの句を吟ずること。やかず(矢數)俳諧ともいふ。大矢數十「天下に二つ也富士は雪大句數」

**おほくさり** 博奕の語。大まげ。大失敗。丹波與作中「宵からあかつきの明星が

茶屋で飲み干すやうな大くさり」

**おほくみがし** 大組頭。名主を輔けて事務を行ふ組頭に對して、國主に召使はれるその種のものをいふのであらう。武道傳來記五「佐渡の國主に召使はれし大組頭は椿井民部、御用ありて召されしに」

**おほぐれ** おほがら(大柄)の轉か。體格などの大きいこと。今宮心中「恰好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髪を」

**おほげさ** 大きく袈裟がけ(斜かひ)に斬ること。源氏冷泉節上「さあお慰みに大袈裟を遊ばせ、われは一の胴二の胴」

**おほげば** 大下馬。大きな下馬の標。室町千疊敷「大下馬の道具どめ、四尺四面の立て石」

**おほこ** あぶこ(枋)に同じ。  
**おほこ** 世になれてゐないもの。初心のもの。處女。大矢數「勤の内は雨でたらした、おほこさうな其君様は時鳥」。吉野都女楠「いとしい君の箱入(中略)、そのおほこながなほうまし、そさまを我が手に入れんため」  
**おほごし** 大腰。相撲の手の名。平家女護鳥「吾に聞えし能登の守、大腰に地

響うたせ尻居にどうと投げすゑたり」  
**おほこしやう** 大小姓。小小姓の對。奥小姓又は小姓組などの總稱。武道傳來記六「或時大小姓役勤めし赤西専八、廣間に傍輩二三人相詰めて居しを呼び立て」

**おほざうりとり** 大草履取。「やつこ草履取」のこと。主人の草履を持つて供する奴僕のうち、若者を小草履取と稱したのに對して成人したものをいふ。若衆姿でない草履取。一代男七「大草履取に笠杖もたせて、名ある太鼓のつくこそ、くらがりにも御女郎買とするぞかし」。晝夜用心記五「大草履取に振掛けさせたる廿四五の男」。萬文反古「御草履取大小二人、手代の一人づつ相つめ」

**おほさかさんがう** 大坂三郷。大坂の南組、北組、天満の三區劃をいふ。又は水の朔日上「身こそ貧なれ、大坂三郷隠れもない、鐵鎧煎餅三郎兵衛」。天網鳥上「天満大坂三郷に男も多いに、紙屋の治兵衛二人の子の親」

**おほさび** 大鏝。大鍬。烏帽子の鍬のあらく、高低の定らないもの。源氏烏帽子折三「このわつぱが著ようずる烏帽

子は、大鋪の顆を荒らかに、一くせみくせませ」

**おほしほる** 大芝居。大仕掛けの芝居。

元和年中、五奉行から七か處の櫓（即ち劇場）を公許せられ、尙ほ此の七か處以外の芝居を稱して小芝居といつた（日本演劇史）。これは京都のことであるが、更に降つて寛文年中に至つても、

やはり歌舞伎芝居は七座であつたといふ。その他の小芝居は大方歌舞伎ならぬ見世物であつたに對して、「大芝居」といへば即ち歌舞伎芝居のことであつた（同上）。大矢數四「東の片屋に出る月影、大芝居三十丈の山の下の」

**おほしまりう** 大鳥流。大鳥伴六の創めた槍術の一流。伴六、名は吉綱、加藤清正の臣であつたが後徳川頼宣に仕へ槍術を以て天下に鳴つた。武道傳來記

「弓は當流、鑑は大鳥流」  
**おほじやうらう** 大上臈。もと禁中の女官の最も重い職で、攝家の女が之に任せられたもの。後には幕府の官女にも用ひ、近松は更に之を諸侯の召使ふ女のことを用ひてゐる。丹波與作「大上臈小上臈、おさし抱き乳母御乳の人」

**おほじよるん** 大書院。大きな書院。武

お

家では客間とする。おもてざしき。永代藏三「廣間につづきて大書院、六十間の廊下」。武道傳來記三「家中残らず大書院に相詰め、大殿唐獅子の間に御安坐あそばされ」

**おほせかた** 負せ方。「おふせかた」に同じ。貸方。債主。永代藏三「或時十一貫日の分散に、ある物二貫五百目、おほせ方八十六人、毎日期定に出合ひ」

**おほたか** 大高。大高檀紙の略。備中。越前などから産する横皺のある紙。堅一尺七寸餘、横二尺二寸餘。尙、中高、小高などの種別がある。大高紙。檀紙。丹波與作上「お乳の人は大高にお菓子

さま／＼ぶんかうに盛り入れ」  
**おほたき** 御火焚。毎年十一月中、神社に於て日を卜して庭火を焚く儀式。お火焼の祭禮。胸算入三「稻荷の御火焼の比、河原の役者入り替りて」とあるのは、十一月八日である。

**おほたてあげ** 大立舉。總體を鐵製にした脇當（すねあて）。特に脇板を大きく高く作つたもの。吉野都女楠三「大立舉の脇當、こがね作りの太刀かたな」

**おほたばにでる** 大東に出る。物事をおほげさに、大風にする。出費などをを

しまぬ。置土産五「年に三度づつ銀捨てにばかり上れば、何事も大東に出て、末々まで喜ばせ」

**おほつかなつかし** 覺束懐し。物案じせられながらもなつかしい。不安であるがなつかしい。孕常盤四「何とか成らせ給ふぞと、いと覺束懐しく、思ひの数も千草の露」

**おほつぼ** 大坪。大窪。次條の略。武道傳來記六「馬は大窪が印可、居合は片山伯者流」

**おほつぼりう** 大坪流。大坪慶秀が創めた馬術の一流。慶秀は上總の人、足利義滿・義持に仕へ馬術を善くした。官は式部大輔に任じ又左京亮となつた。後、薙髮して道禪と號した。槍權三「かつし／＼と歩ます大坪流の鞍の内、稽古に心染手綱」

**おほつゑ** 大津繪。近江國大津から賣り出した戲畫。粗く走りがきしたもので、始めは佛畫が多かつたといふ。山村耕花氏に據ると、「今から三百年もの昔（寛永元年は西曆一千六百二十四年）日本の邊土の大和路に、ささやかに發生し、主に路行く庶民を對象に制作された」ものであるといふ。芭蕉句「大津

お

繪の筆のはじめは何佛。傾城反魂香上「物も得いはぬ吃めが推參千萬、似合うたやうに大津繪かいて世をわたれ」

おほてい おほふう(大風)。おほざつば。餘裕あるやう。こせよ〜しい風。一代女四「輝の母親も其如く分際より大ていに見せかけ、日比はそこ〜に氣つけて申せし始末も言ひやみ」二代男

六「この仲間のおほていなること、江戸に返りて明石が語りぬ」

おほどし 大年。おほみそか。一年の最終の日。永代藏四「元日より大年までを一度にもりつけて、其外は一錢も仇につかはず」

おほとりげ 大鳥毛。馬印の一種。又は槍の鞘にも稱する。鷹の羽を栗のいごのやうに大きく作つたもの。背庚申上「お供廻りが振り出す毛鏈、臺笠立笠大鳥毛、乗物引馬嘶き立」

おほぬさ 大幣。祓への時に用ひる大串につけた幣帛であるが、祓へ畢へると諸人がこれを引き撫でるといふので、引く手数多な物に譬へる。古今集戀四「おほぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」とある。大勢の手に觸れる。重井筒中「あゝ大幣

の此の蒲團、小六も寝つろ、小夜も寝つらん、房も寝よう、引く手にあまたに」

おほのら 大のなまけ者。「のら」は「のらくら」、「ぶしやうもの」のこと。女腹切上「やあ、この半七の大のらめ、帳面も埒あけず」

おほはしりう 大橋流。御家流書風の一派。大橋重保を祖とする。重保初め豊臣秀頼の佑筆となる。後、徳川秀忠の佑筆となり相模國高座郡に五百石を賜はる。元和九年、家光の上洛に供奉し、十年務を辭し剃髮して龍慶と號した。

正保二年二月歿、年六十四。その子重政その流を繼ぎ、家光の佑筆となつた。俳諧大矢數「白露を置いて見てから手を直す、大橋流の筆をおつとり」。男色大鑑七「大橋流に書きしるし、箱崎の明神への願文」

おほはずもの 大箸者。なげやりもの。ずぼらな者。横着者。懷硯四「隣の七條借りて二度返さず、代なして首尾を調べ、生れ付如才なくて、大箸者のいはれ、法中に嘲られ、學寮に佇みならず」

おほはづ 前條「おほはずもの」の「おほはず」であらうか。我がまま、おごり、

又は、調子に乗つてはずむ意か。二代男三「人に育てられて、大はづいふほどのお敵は、十に一つも物になるぞかし」

大原の實盛 伯耆大原の刀工で、「實盛」は眞守が正しい。安綱の子、横瀬氏。嘉祥(一五〇八)頃の人。或はいふ、弘仁承和年間の人で、平家の名刀拔丸の作者であると。男色大鑑三「ちぎれたる蒲筥より仕込杖の刀取出し、是大原の實盛二尺三寸、此の身になりても一腰は放さぬ」

おほはらみこ 大原神子。「あがたみこ」に同じ。

おほばん 大判。楕圓形の大きな金銀貨。慶長大判金・元祿大判金、南鐔大判銀・桐大判銀などの類。一枚は小判十枚に當てられた。一代女三「遣手まで大判三枚小袖代として給はりしこと、其時は世にほしがる金銀も珍しからず」

おほばんがしら 大番頭。江戸幕府の制では、大番組一隊の長をいふ。豊臣時代の各大家にもこれに類するものがあつたか。武家義理物語四「岡崎四平といへる大番頭の人なり」とは、秀吉時代の話である。

おほびたひ 大額。男子の鬢を小さく取

九〇

お

つて、額を廣く作つた形。

**おほぶく** 大服。大福。大服茶の略。正月元日に、茶の湯に梅干・山椒を入れて飲むもの。大福の義を取つて、年始めの佳例とするのであるといふ。胸算用ニ「大福ばかり祝うてなりとも、新玉の春に二人遇ふこそ樂みなれ」

**おほぶくろ** 大袋。槍鞘の一。袋形の大きなものであらう。薩摩歌薩摩歌「大袋は同國唐津」

**おほへい** 大柄。傲慢。横柄。油地獄下「人はいはれじ覺られじと、一倍大柄そらさぬ顔。河内屋の與兵衛でやすとつと入」

**おほぼろしよ** 大奉書。大判の奉書紙。縦は一尺三寸、横は一尺八寸。二代男ニ「請けかへす酒にうはがへの棲も厭はず、大奉書を用捨もなくつかはれ」

**おほぼとけ** 大佛。大きな佛像。だいはつて。永代藏五「おのが姿も大佛のあたりにて。永代心をせめ念佛」

**おほま** 大間。(地名)淀の附近、淀川の南岸にある。胸算用四「淀の小橋になれば、大間の行燈目的に、船を鱸より逆下しにせし時」

**おほまはし** 大廻。船で遠く荷を運送す

ること。二十不孝三「仕合丸とて大船を造りて、大廻しの江戸商」

**おほみね** 大峰。大和國吉野郡の内。修驗者が修行の爲めにこの山を巡ること。を、「大峰山上巡り」といふ。その熊野から入るのを「順の岸入」といひ、吉野から入るのを「逆の岸入」といふ。陰曆四月に入るのを例とする。

**おほみのやり** 大身の槍。刀の長大な素槍。

**おほみやどほり** 大宮通。京都の西端、南北へ通ずる町。猪熊、新町と並行してゐる。胸算用ニ「大宮通の喧嘩屋とぞいへり」

**おほめつけ** 大目付。(幕府の政務を監祭し、諸大名の糺弾を掌る役。(諸大名の家で、これに類する役のもの。武道傳來記三「折ふし御前に豊川隼人といふ大目付在合せ」

**おほもん** 大門。だいはもん。遊廓の入口の門。おほもんぐち(大門口)。

**おほやうじ** 大楊枝。大きな楊枝。ふさやうじの大きなものであらう。二代男三「道行づくしの淨瑠璃本、皮付の大楊枝」

**おほやかず** 大矢數。(或一定の距離を

射て届かされる矢を「通し矢」といふ、それを一晝夜つづけて行ふこと。日中のみ射ることを「小矢數」といふに對する。(轉じて、矢數俳諧、即ち一時に早くつづけ吟ずる俳諧の大興行のこと。

物種集一「大矢數入間の里に隠れもなし」。大矢數八「大矢數奉寄一日價四千」同二十五「騮も舌に及ばぬ事ぞ大矢數」

**おほゆな** 大湯女。湯女の年たけた者。小湯女に對していふ。殊に有馬の温泉宿でいふこと。大湯女また「かか」と稱する山。野守鏡二「大湯女・小湯女多き中に分けて名高き松が枝とて」

**おほよこめ** 大横目。「おほめつけ」に同じ。武道傳來記二「掟を背くもの穿鑿すべし、大横目兩役人に申し渡され」

**おほよせ** 大寄。遊廓の詞。客が大勢の友を誘ひ行き、遊女を數多寄せて、一所に參會すること。二代男七「越後町扇風方に大寄三十九人並べた所面白し」。同五日續きて大寄、上野の藤をここに移して。(狛繪次頁を見よ)

**おほる** 臙る。(動詞)おほれる。おほるになる。かすみかゝる。吉野忠信三「鐘の鳴る音も半ばより、冴えつ臙れつ春近けれど、野は風にちら〜と」



お ぼ ろ へ

**おぼろかご** 臙駕籠。幽霊の乗つてゐる駕籠のこと。あだかご(仇駕籠)。卯月潤色中「手にも取られぬ臙駕籠、姿の山に肩替ふる」

**おぼろぞめ** 臙染。染色の名。寛文(二三二—三三二)の頃、京都裕乗坊の辻

子紺屋新右衛門が、春月の色を見て始めて染め出したものといふ。重井筒下「道行血潮のおぼろぞめ」。姫山姥二月は山より臙染の橋」

**おぼろなるしみづ** 臙なる清水。次條とおなじ。一代男三「今宵は大原の里のざこ寝とて(中略)、いざ是よりと、臙なる清水、岩の陰道、小松をわけて其里に行きて」

**おぼろのしみづ** 臙の清水。京都北郊大原の名所。寂光院に行く途中の路傍に今も残つてゐる清水。大矢數二「皐月女つい大はらと成りにけり、臙の清水すいもの後」。傾城酒吞童子三「あれは御所へ柴入るゝ臙の清水のお嫁でないか」

**おぼろふじ** 臙富士。編笠の一種。

**おぼろまんぢゆう** 臙餛飩。上の皮をむいた餛飩。中の餡がおぼろに見えるからいふ。晝夜用心記「こゝに小川通玉屋臙餛飩の開山にて」

**おまち** 御町。おちやう。色町のこと。遊女町。轉じて遊女の意にも用ひる。置土産四「御町を我内にして、親の目ばかり宿に戻る人もあり」。同二「女もぶつつかに見えず、機嫌取りて立ちふる

まひもどこやらお町めきたる所あり」

**おまちしゆ** 御町衆。一前條の複數。二町内の人達、特に年寄五人組などといふ。萬文反古三「貴様へ先づいひげんまかせ銀五十目の手形、お町衆のさしづによつて癪ともたせつかはし」

**おまつ** 阿松。下女の通り名。胸算用三「女房に衣裳、おまつ御仕着は定めて柳煤竹に、亂れ桐の中形でござろ」

**おまへまち** 御前町。社寺などの前にある町。天網島中「天神橋と行き通ふ、所も神の御前町」とは、大阪天満宮前町、今の天神橋通。

**おまむきさま** 御眞向様。佛像又は佛畫のこと。常に眞正面に向いてゐるのでいふ。大句數上「おまむき様はただはもたれぬ、細金も錢ほど光るならひにて」

一代女三「あらけなき所作に御眞向様を動かし、蠟燭立の鶴龜を轉ばせ」

**おむす** おむすめ(御娘)の略。博多小女郎波枕上「ヲ、よい子持(中略)。おむすが着る物に有合せた緞子三本、縞子五本。此の緋縮緬裏によからう」

**おむつかしながら** 御面倒ながら。御手数ながら。織留五「梅花の油屋がまゐりましたらば、此の三十二文おむつかし

ながら済まして下さりませい」  
**おめいこう** 御影講。御命講。陰曆十月十三日の日蓮上人の忌日。おみえいく

(大御影供の訛。或は、おめいいく(御影供を特に他宗と區別するためにかく訓む)の訛か。晝夜用心記)ニ「法華宗御影講に手の届く比」

**御目鑑(めがね)を守る** おめがね(御眼識)に適つたことを有難く思ひ、それに償するやうに本分など盡す。武道傳來記セ「勝之助御目鑑を守り、御心底は忝しと、様々言宥めつかはしける」

**お目にぶらさがる** お目にかくる。今もいふ戯語。女腹切申「太郎、内にか。四五日お目にぶらさがらぬ」

**おもうち** 御饗應。御申。「御催し」の約であるといふ。おもてなし。心中宵庚申上「御膳部も一汁三菜(中略)、今日のおもうしも鹿相ほど御意に入」。大矢數ニ「御申の朝の春も近づきて、初音の鳥やこかねつり替」

**おもかち** 而舵。船首を右向にする舵の取り方。「とりかち」に對する。大矢數ニ「燈心つんでおも棍の音、嫁突や一二三四波の玉」  
**おもくさ** 顔面に出来るかさ(瘡)、にき

びの類をいふ、古語。又、そばかす(雀斑)をもいふ。今日「そばかす」は美人の相であるなどいふ、それのこと。一代男ニ「日のうちすずしく、おもくさしげく見えて、どこともなうこのもし」

**おもくる** おもくれる。おもたげに見える。ふくれて重苦しさうである。一代女ニ「帯なる着物の下がへに綿を含ませ、其姿おもくれて、今迄は隠せしが、我が身持も月の重なり、いつを定め難しといへば」

**おもしろをとこ** 面白男。おもしろい男。おもしろがる男。又、おもしろがらせる男。太鼓持など。榮花咄四「元來は我が眞似ながら(中略)、面白男どもにして取られ」

**おもちづつ** 御持砲。御持筒。將軍の鐵砲を預り、戦時には、與力同心を率ゐて、將軍の旗本を警戒する役。女腹切上「あの子が爲には祖父様、お持砲の鐵砲大將」

**おもちゆみ** 御持弓。これも前條と同じく、江戸幕府の職名で、持ちものが弓になつただけの相違である。しかし、諸侯の家でも主君の弓を持つものをかく稱する。碁盤太平記「拙者が親は前

殿様、御持弓の足輕寺岡平藏と申せし者」

**おもつら** 韃。おもがい。一説に、馬の鼻の上にかける飾であるといふ。日本振袖始一「のう／＼御馬暫くと聲をかけ(中略)韃取つて引き留め」

**おもてこしやう** 表小姓。おくごしやう(奥小姓)に對して、表向きの方とめをする小姓。槍權三上「表小姓の數々の、中にも笹の權三とて」

**おもてだい** 重手代。重い位置にある手代。かしらだつ手代。胸算用三「北國より重手代歸りて、只今二百貫目御倉屋敷へ渡すぞ」

**おもてだうぐ** 面道具。表道具。(顔の造作。日鼻口眉などの總稱。五人女三「面道具一つも不足なく、世にかゝる生れ付の又有る物かといづれも見とれて」。(儀式ばつた時に身につけるもの。身分を表はす爲のそよほひ。織留五「時々の著物に相應の羽織、麻の上下中脇指一腰は、町人の面道具なれば」

**おもてづかひ** 表使。江戸幕府の大奥で、年寄の命を受けて諸事の取次をする役。

**おもてはづく** 表(面)八句。連歌(又は

俳諧。でいふ詞。百韻の時、懐紙の第一頁に記す八句のこと。(最後の頁の八句を名残の裏八句といふに對する)。物種集上「戀は癖ものうらに引込、本妻を面八句や隔つらん」

おもなげ 面無氣。面目なげ。はづかしげ。

おものし 御物師。禁中に仕へる裁縫師、轉じて一般の裁縫師をいふ。一代男「御物師がぬうてくれし前巾着」。一代女「自らもいつとなく手の利きければお物師役の勤をせしに」

おもはく 思はく。思ひをかけること。戀ひしと思ふこと。その人。情人。おもはくさま 前條の敬語。物種集上「おもはくさまを揚屋の約束、上書を入々よるこび引明けたり」

おもはくちち 思ひ者達。女房たち。おもひいり 思入。思入ること。思ひをかけた人。おもひ人。今宮心中上「なぜに女房持ちやらぬ。但しどこぞに思ひ入りがな有るかい」

おもひいれ 思入。前條とおなじ。又、豫想、判断、心掛などの意もある。織留「只一時のうち」三十八貫目丁銀にてまうけ込み、此思ひ入れに油買込

み」。二十不孝「あとにて子ながら思ひ入れを嬉しく」

おもひぐさ 思草。(→思ひの種、その種になる人。(→おもひどり)の對)これに對する返盃を「おもひがへし」といふ。一代男五「本大臣さまへ盃をまゐらせける(中略)、地を踏み給はぬ御方さまいかさまにもと、思ひざしせしとなり」

おもひざめ 思覺。思ひさめ(冷)ること。思ひつづけて冷靜にかへること。冥途

おもひざし 思差。思つてゐる人に盃をさすこと。(→おもひどり)の對)これに對する返盃を「おもひがへし」といふ。一代男五「本大臣さまへ盃をまゐらせける(中略)、地を踏み給はぬ御方さまいかさまにもと、思ひざしせしとなり」

おもひざめ 思覺。思ひさめ(冷)ること。思ひつづけて冷靜にかへること。冥途

おもひざし 思差。思つてゐる人に盃をさすこと。(→おもひどり)の對)これに對する返盃を「おもひがへし」といふ。一代男五「本大臣さまへ盃をまゐらせける(中略)、地を踏み給はぬ御方さまいかさまにもと、思ひざしせしとなり」

おもひざめ 思覺。思ひさめ(冷)ること。思ひつづけて冷靜にかへること。冥途

おもひ出なる人心 思ひ出した事をすぐに行ふ心。はでな心。永代藏「當座々々の榮花と極め、思ひ出なる人心、是を思ふにほらなる金銀をまうける故なり」

點。心配になるところ。短處。缺點。

一代男六「小作りなるこそおもひど、顔うつくしく、心立もかしこし」。男色大鑑三「貌ばかりのおもひどにて、一生のうち執心のかけてもなく」。萬文反古「我等も十七年のうちに二十三人持ちかへ見申候に、皆おもひど御座候て歸し申候」單に「おもひ」ともいふ。

おもひどころ 思所。前條におなじ。二代男八「今まで太夫見盡せども、少しの思所はあり、若し地女に美人もありや」

おもひば 思羽。鶯鶯。孔雀、鴨、雉などの尾の兩脇にある羽。その形からいてふば(銀杏羽)ともいふ。つるぎば。雪女五枚羽子板中「情も何も鴨の羽、雉子の風切思ひ羽や、思ひの數を一と二た三、四う」

おもひば 思葉。(→木や草の茂りに生ずる病葉をいふか。男女相思の關係の生ずることにかけて用ひてある例が多い。大矢數「流れをば立る貌も本は猫、眞葛のしげり是ぞ思ひ葉」二代男三「あは鳥殿の若しも妹かと思はれて、お年はと問へば、うそなしくは今年二十一ちや、茂りたる森はおもひ葉となり、世之介二十七の十月、神のお留守きく

おもひど 思處。これはと考へを要する



お

人もなきぞと、さま／＼くどきて」。男  
色大鑑四「山の姿も妹背の中、蕨邊の思  
ひ葉分けて爰の百景詠めに餘りて。同  
二世をおもひ葉の二またの竹に。三装  
飾などにも用ひたと思はれる例には、  
一代男六「かたには注連繩、ゆづり葉、  
おもひ葉、數をつくし」。同八「紅井の  
網前だれ、より金の玉だすき、あや相  
のおもひ葉をかざし、岩井の水は千代  
ぞとて、亂れ遊びの大振舞」

思ひばか行かず 思ふ様にはかどらぬ。  
事が思ふ通り進捗しない。織留三「跡へ  
も先へも動かぬとき、石車を銀にして  
ほしやと願ふに、思ひばかゆかずして、  
自然ととまらねばならぬ首尾になつ  
て」。重井筒中「必ず妻子ある人と末の  
約束せぬ事ぞ。男の密夫同前にて、思  
ひばかぬ物ぞとよ」。

おもひばね 思羽根。おもひば(思羽)に  
おなじ。  
おもひわく おもひわける。思ひ分ける。  
分別する。

おもめ 重目。おもみ。日方。天下馬四  
「壹斗のおもめ片手にてはあがらず」  
おもや 母家。母屋。一「分家に對する本  
家、出見世に對する本店などの意。傾

城酒呑童子三「此の太四郎様の母屋は、  
ひらぎ屋の長とて隠れない大忘八」。  
生玉心中「惣じて其處は出見世で火  
を燒く事も御法度、母家は松屋町九之  
助橋の角」。(一)住居に用ひる家。ほんや。  
戀八卦柱屏上「明屋の二階忍び出でお  
も屋の屋根を四つばひの」

おもりづきん 重頭巾。左右の端におも  
りをつけて垂れるやうにした頭巾。俳  
優萩野澤之丞が始めたもので、「さはの  
じようばうし」といひ、又、おもりば  
うし、さがりばうしともいふ。菜花唱  
三「今の世の女昔なかつた事どもを仕  
出して、さりとは身をたしなみ、道具  
數々也。(中略)おもり頭巾、留針、浮  
世つづら笠」

おやがかり 親に世話をかけてゐる身  
分。親の保護を受けてゐる者。  
おやかた 親方。主人として仕へてゐる  
人。特に遊里などで、遊女を抱へてお  
く者を稱する。一代男一「やさしき女、  
ことばに數なく、見られたき風情にも  
あらず(中略)、この人かゝへの親方、  
此の里一人の貧者」

おやぎ 親木。接木をする時の臺木。  
お薬師さまへ土器 つんぼ(甕)が癒るや

うにと、社寺、殊に薬師様へ土器(か  
はらけ)を奉納する習慣があるのとい  
ふ。置土産五「小者に渡せど聞かぬ顔  
(中略)、さては此のでつちもお薬師さ  
まへ土器をかくるかといへば」

おやくゑん 御薬苑。薬苑の敬語。種々  
の薬用草木を栽培してある園。典藥寮  
の管理に屬する。永代藏二「紫野の邊御  
薬苑の竹垣のもとにして」。江戸幕府の  
ものは、小石川や駒場にあつた。  
おやしらず 親不知。極めて險しい危い  
通路の名に用ひる語。下例は、東海道  
の陸埴峠の麓の險路をいふ。一代男二  
「駿河の國、江尻といふ所につきて、ま  
づ今日までの浮世、あすは親しらずの  
荒磯を行けば」

おやだんな 親旦那。若旦那に對して、  
その父親たる旦那。おぼだんな。  
おやつぶ 親粒。日劍の裝飾にいふ語。  
親鯨の皮の、つぶ／＼したものであら  
う。女腹切上「猪熊の革づか、なぜに遅  
いと毎日二三度使が走る。醒が井の親  
粒もまだ入れてやるまいな」

親に跡やる 親を残して子が先に死ぬ。  
一代女二「戀に貌をせめられ、行末頼み  
少なく、おつつけ親に跡やるべき人の」

**親の孫を繼ぐ** 親の後を立派に繼ぐ。毛吹草に「辟よきは親孫なれや郭公」とある。轉じてただ親の跡を受けつぐことにいふ。

**親の恥は娘の恥** (諺) 「親の恥は子の恥、子の恥は親の恥」ともいふ。

**親の日** 親の命日。二代男ニ「若い太夫様に取付き(中略)、我が身は親の日ぢやがといはれければ、そのまゝ放ちける」**親罰かぶる** 親の恩に甘えすぎて、その罰を被る。勿體なき過ぎる。平家女護鳥ニ「此の賤しい蚤の身で緋の袴とは、おやばちのかぶること」

**おやま** お山。遊女のこと。女形人形使ひの名人、小山次郎三郎から出た詞であるといふ(近代世談)。近松は大和三山の争ひにことよせて、「今の世迄も美目よき女をお山といふも、此香久山の謂はれなるべし」(曾我會稽山) などといつてゐる。油地獄上「是賣女さまやすお山様」。女腹切上「お山やら惣嫁やら」

**おやまぐるひ** お山狂ひ。遊女に耽溺すること。女腹切上「お山狂ひで酒やら何やら過ぎる故、煩ひ暮して物も喰はぬ」

**お山見じ** お山を見よう、遊女が來たの

意。出世瀧徳上「十四の冬より今年まで、それにしみたる風俗は、いかなる家にも走り出て、お山見じと目をつけらる」

**おやまぶ** おやまぶし(御山伏)の略。油地獄中「ヤ珍らしいお山ぶ、こなたは見知つた白稻荷殿、妹が病氣祈の爲か」

**お湯殿の子** 御湯殿がかりの生んだ子。妾腹の子。丹波御作上「丹波の國の」城主、由留木殿のお湯殿の子」

**およびごし** 及腰。下體をそのまゝにして、上體だけを前に屈めて物に及ぼさうとする腰つき。

**およりばうず** 御寄坊主。一向宗でいふ御寄講の坊主。(御寄講は單に「おより」ともいひ、在家で行ふ簡単な法事である。又、「御霜月」「お取越」のこと) 大下馬三「この御寄坊主はじめの程は雫も嫌はれしが、人々に勧められてもろもろの小盃を振り捨てて」

**おらんだ** 和蘭。この外國名が、いろいろの意味に用ひられてゐる。(和蘭人。紅毛と記すのが常である。一代男ハ「紅毛は出島に呼うで戯れ、上方の町宿へも自由に取寄せ」。海外、又は海外の奇聞をよく知つてゐる者。三鐵輪「こ

と問はん阿蘭陀廣き都島、六町一里に つもる白雲」。白舶來の品物。洋品。大矢數「渡鳥貌を舟に顯して、紅毛よりも紙帳賣」。尙、この語の用例については次の諸條を見よ。

**おらんだい** 阿蘭陀系。淫具の一種。一代男ハ「りんの玉三百五十、阿蘭陀系七千すち」

**おらんだがやど** 阿蘭陀が宿。和蘭人の宿泊してゐる家。西鶴五百韻「讀めもせぬ御文殊に日外は、一座をいたす阿蘭陀が宿」

**おらんだずみ** 和蘭疊。インキのこと。**おらんだづけ** 阿蘭陀漬。漬物の一種。大矢數「きらうなら朝の空よ壺の口、阿蘭陀漬の風薫り行く」

**おらんだの文** 和蘭の文字、文章。横に列ねたものの形容。千宜理記「おらんだの文か横たふ天津雁」

**おらんだりう** 阿蘭陀流。俳諧の一流として西鶴の説明に曰く「阿蘭陀流といへる俳諧は、其姿すぐれてけだかく、心ふかく、詞新しく、よき所を、今世間に是を聞覚えて、たとへば唐にしきにふんどしを結び、相撲といはずに其句に聞え侍るは、一作一座の興にあり

やなしや(三鐵輪)。大矢數一「あつち國飛びそこなひの胡蝶あり、阿蘭陀流の行方の風」

おらんたろ

阿蘭陀櫓。逆櫓のこと。下文を見よ。最明寺殿百人上満上「今度の御舟には阿蘭櫓を立て申すべし。ム、ウ阿蘭櫓とは何ぞ。さん候、馬は乗人の心に任せ、退くも駈くる自由なれども(中略)、櫓邊に櫓を立達へ、傍舵を入れ、何方へも廻し易いやうに」

おりあふ

一所に群り來る。意氣込んで集り來る。力を合せようと來る。百日曾我一「切り入らん時、御所近くには、狼藉入りたりと、おり合はんは必定」。國性爺合戦一「公家にも武家にも誰有つて、おり合ふ味方のあらざれば」

おりすえ

おりすえ(折居)が正しい。紙を折つていろくゝの形に疊んだもの。折紙。大矢數一「花の雪四季諸共に詠物、盧齊が夢の蝶はおりすえ」

おりどめ

織留。布を織り留めること。留めておく、おしまひにすることにかけていふ詞。薩摩歌中「涙に袖は半晒、今ぞ一期の織留と、互に心太布の」

おりない

「無い」の意を強めていふ詞。槍横三下「すはといはゞ、双鐵を鳴らす

お歴々にも負ける事はおりないさ」。戀八卦柱脛中「むざと前垂奉公などに出すものではおりない」

おりは

降りる機會。おりる時機。出世瀧徳下「あんまり鯉々いはんすな。鯉も瀧へのぼりつめ、今ではどうもおりはない」

おりひめ

織姫。おりひめぼし(織女星)の略。たなばた(棚機)。一代女四「宿下りして隠し男に逢ふ時は、年に稀なる織姫の心地して」

おりやう

おれやう(御寮)。比丘尼、殊にその功齡經たものを稱する。賣女の一稱。一代女三「我もいつとなく、いたづらの數盡して、今惜しき黒髪を剃りて(中略)、此の道に身をふれしおりやうを頼み)。同六「われ歌比丘尼し時(中略)、人の惜む物を給はりて、お寮の手前を勤めける」。一代男三「勸進比丘尼聲を揃へてうたひ來れり(中略)、いつ頃よりおりやう狼になして、遊女同前に相手も定めず」

おりみの衣

駕籠などからおりて來た者の衣物といふ意。夕霧阿波鳴渡下「梅鹿御見廻四枚肩、おりみの衣、長羽織」

おれう

御寮。「おりやう」の條を見よ。

傾城酒呑童子三「私は今熊の貞月と申比丘尼の御寮、廿三四の弟子二人」

おれそれ

何やかやの挨拶。作法。情あらしらひ。傾城酒呑童子三「惣じて惨い目を見まいと物の哀れを知つたり、人のおれそれ、世の中の義理じゆんぎを知るが最期、貧乏神が乗移る」

おろおぼえ

うろおぼえ。ぼんやりした記憶。丹波興作上「父様は殿様のお氣に違つて、國をお出なされたは三つの時でおろ覚え」

おろおろ

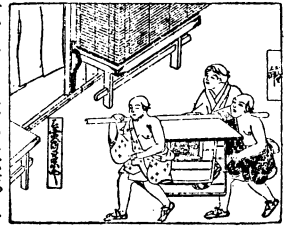
涙もろいさま。泣きごゑにいふ。(八の字を踏まず)、徐かに練り歩くこと。傾城反魂香上「米の育ちは上田の、水損なしの太夫職(中略)、おろし歩みの道中は、花の立木の其儘に、ぬめり出でたる如くなり」

おろせ

御寮。駕籠を昇くもの。かごかき。二代男二「亭主は何者と聞けば、鳥原へのおろせ、早雲孫兵衛と語りもあへぬ所へ」。

おろせかご

好色由来舖三「昔は鳥原かごとて、色里ばかりに通ふ駕籠なく、多くは歩行にてゆきしとかや。然るに



せろお

いづれの頃にか始りけん勘當箱と名付けて三枚肩、剌那が間に通路心やすく飛行する者を俗に呼んで御といふ

**おわりよ** 子供(まぼろし)の泣聲。おはりよ。或は、をはり(終)よと呪ふ意か。一代女六「蓮の葉笠を着たる様なる子供の面影、腰より下は血に染みて、九十五六程も立並び、聲のあやぎれもな

**おはりよ** 泣きぬ。おはりよ〜と泣きぬ

**おゑさま** おいゑさま。おいへさま(御家様)とおなじ。今宮心中申「おゑ様かみ様旦那様、三人の外介さまへさへ持たされぬ」とは、かみ様(御隠居)に對していつた例である。

**おんあぼぎや云々** 陀羅尼(呪語)の文句。心中萬年草下「おんあぼぎや(唵阿彌迦、べいろしやのまかもたら(毘盧遮那摩訶怛恒羅)、まにはんどまじんばらにはらりたや(摩尼鉢曇摩怛婆羅波

羅波利多耶)うん(呬)と突つこむ切先の膽に當ればのり返り」

**おんくはう** 蘊奥の轉訛であらうといふ。國性爺「只今某此濱にて、鳴の鳥と蛤希代の業を見受けしより、軍法のおんくはうを悟り開いて候」

**おんしと** 御尿。ねう(古語しと)の敬語。一代男二「敷松葉に御しと、もれ行き

**おんじやる** おじやる。おんざる。ござ(御座る)の訛。基盤太平記「常陸からつん出た、順禮さでおんじやり申す」

**おんすもじ** おするもじ(御推文字)御推察。女の詞。

**御田虎が涙雨** 五月廿八日の雨。「御田」とは、この日、伊勢の山田太神宮の神田を植ゑる式、即ち「伊勢の御田植」が行はれる故にいふか。男色大鑑七「きのふは廿八日御田虎が涙雨の名残を、けふも袖はれぬ計に降りぬ」

**おんつもり** 酒盃を納めること。最終の盃。おつもり。

**おんと** 糧當(をんたう)の訛。おだやか。おとなしい。すなほ。博多小女郎波枕上「亭主に連れて立廻る、女郎も田舎はおんとなり」

**おんど** おんど(音頭)の約。  
**おんどろ** 音頭。數人で唄など唄ふとき一人先きだつて調子をとること。おんどろとり。おんど。五人女二「鍋島殿屋敷のまへに京の音頭道念仁兵衛が口うつし、山くどき、松づくし、暫し耳にあかず」

**おんどろだうねん** 音頭道念。輿樗(きやり)の音頭、道念山三郎。京都の人。貞享の頃、盆踊りといふ唄を唄ひ出した。よく踊りの拍子に合つて、流行したといふ(近代世事談)。

**おんども** 已共。おれども。おれたち。博多小女郎上「おんどもが二十七の年、薩摩者と喧嘩した咄、嘘ぢやなかばん聞かつしやれ」

**御の字の客** 敬すべき人。よいお客。上上の大盡。織留三「今の世の御の字の客、その子細は若うて無事で銀を持ちて親がなうて其身利發で、しわうなうて、情がふかうて」

**おんぼぎ** 御母儀。昔貴族の母君を稱した。武家時代になつては、大名の母の敬稱として用ひた。母公。武家義理物語「幸ひ難波の大名の御母儀さまより、うるはしき御そばづかひお尋ねに

おんと

おんくはう

おんしと

おんじやる

て」

おんまはす 追廻。おひまはす。國性爺

一「數百萬騎の蒙古の軍兵、割立ておん廻し、無二無三に切入れば」

おんもみぢやま 御紅葉山。江戸城内の地名。慶長寛永の頃には、こゝに東照宮の廟があつた。織留ニ「富士を常住の蓬萊山、不老門の東に武藏野の満月、外天の光に同じからず、御紅葉山の木ぞ五千秋の色をまし、萬歳の海龜さゝ浪靜にすめる」

# か

かい がい(害)の轉。さはり(障)。さまたげ。松風村雨束帯鑑ニ「言へば夫の命のかい。言はねば夫を妹に取らるゝ」。重井筒上「羨異見もすべき身が、客衆とやらのかいになり、身代の妨と、嫂御のねすり言」

かいいき 改易。刑の一種。士人の名籍を除き、領地邸宅を沒收すること。蝿居より重く、切腹より軽い。武道傳來記七「其比不慮の越度ありて、改易に遭ひて備前の國に立退きけれども」。丹波

與作上「奉公構ひの御改易。其時母も一所に退けば」

がいがい がやがや。やかましいさま。かいからぐ 「かきからぐ」の音便。からげる。裾などつかねかきあげる。

かいきよ 海居。海への住居。(山居などの對)。萬文反古五「千里同風の其元海居の難義、難波風凌ぎかね」

かいく 皆具。一通り具はつた器物。特に馬具一式のこと。百日曾我「馬くら皆具のきらかざり、花と紅葉をむさしのに」。油地獄上「出合拍子に馬上の武士の、拾上下皆具まで、ざつくと懸るも時の運」

かいくび 搔首。かきくび。首をかき切ること。又、その首をいふ。かいくれ かき暮れたやうに。消えたやうに。一向に。まつた。懐硯「袖より金子五兩取出し、親たたる人に渡し、娘は皆くれに見えずなりぬ」

かいは 搔筒。風呂場で使ふ小桶。又、片手桶のこと。

かいはん 開眼。もと佛の眼を開く意で、佛像が出来あがつて、始めて營む法事をいふのであるが、轉じては、藝道に悟りを開くこと、更に物事の始め、器具の使ひぞめなどの義とする。五十年忌歌念佛中「人の來ぬ間に、彼の蚊屋の開眼をせまいか」

かひこそ 天智天皇「思無邪の三字は神拜の元本、母不敬の三字は祭典の至用、神を祭る神のいまずがごとくといへり、かひこそ和田のそこづつを傳へし秋津御代、君たるかな齊明天皇めぐみも廣き連や」

かひさいどき 皆濟時。年貢、借金などを、残りなく納入し、返濟すべき時。懐硯四「田畠五町、作徳大分なりしも、皆濟時には横に寝て、幾度か水牢に打込まれ」

かひさん 開山。もと佛寺にいふが、轉じて物事の創始者にいふ。「代男七」露に時雨に兩袖をぬれの開山、高雄が女郎盛を見んと」

かひしき 皆式。全く。みな。一代女ニ「酒はかひしき請けねども、誰氣をつけて挨拶する人もなく」

かひしき 搔敷。食物を盛る器に敷くもの。多く常磐木の葉を用ひる。委しくは、かひしきがみ(搔敷紙)といふ。二代男三「定宿の茶屋を見渡せば、店に柱のかいしき、鯛は薄鹽して小板の蒲鉾」

かか

胸算用三「かい敷の椿水仙花に金柑二つ三つ」

かいしゆ 皆朱。全部を赤く塗つた器物。漆塗の膳などにいふ。油地獄上「はけの彌五郎皆朱の善兵衛」とは、善と膳とをかけたあだ名。

かいたけ 開名。腫物の名。女に出来るものといふ。櫻陰比事四「若い時より身に開茸と申す難病を請け候、これは縁附致し二三年後痲ひ出だし、夫婦の中心さへ迷惑に存じ候」

かいつのぐる ぐる／＼巻きにする。髪などを無造作に束ねる。五人女二「うるはしき髪のかみたちまちとけて、あるじ之を悲めば、(中略)かい角ぐりて臺所へ出けるを」

かいどり 搔取。うちかけ(打掛)。單に「かけ」ともいふ。婦人の通常禮服として用ひたもの。帯した上に打掛けて著る小袖。その襟の開くのを手で搔取る義からいふ。

かいどりまへ 搔取前。搔取を著て、前の襟を取ること。一代男七「露分衣、かいどり前して」。二代男二「都の三夕、格別世界の道中なり、内八文字にかいどりまへして、胸あけかけて」

かいたる 搔取る。打掛の襟をかゝげる。傾城酒呑童子五「何時の間にやら里馴れて、しゃんと搔取る飛石の」

がいに 甚だ。非常に。大尉。雪女五枚羽子板上「お厄拂ひ／＼、厄つつ拂ひ申すべし。がいに目出度い此方の御壽命語るべいら」

かいは 海馬。「たつのおとしご」の異名。これは又「たつのおろしご」、「うみうま」ともいふので、お産を軽くするといふ迷信を生じたと思える。胸算用二「千代の腹帯子安貝、左の手に握るといふ海馬を才覺するやら」。男色大鑑四「右の御手に子安貝、左のお手に海馬を握らせ参らせ」

かいびやう 介病。病氣を介抱すること、牛若千入斬三「さま／＼介病申さるゝ心のうちこそたのもしけれ」

かいびやく 開白。法事の始めに、供養の事など佛に申しあげること。轉じて、發表し披露すること。開關の字もあててゐる。釋迦如来誕生會五「すはや御法もかいびやくの、ほうけいの聲告げわたる」。蟬丸五「都の辰巳思ひ立つ日を吉日とぞ、開關ある」

かいいん 改免。皆免。(一)農作の豊凶を改め見て、年貢を免ずること。一種の定免(ぢやうめん)。永代藏一「いつの比か諸國改免の世の中すぐれて八木大分此の浦に入舟、晝夜に揚げかね。(二)徳政のこと。即ち或時限内の貸借・質入れ等の契約に對する権利・義務を破棄すべしといふ制令を出すこと。又、棄捐(きえん)ともいふ。櫻陰比事三「古例に任せ天下徳政になして皆免の時、(中略)徳政の世と觸れ渡しぬ。八月下旬なるに、大年の心地になり、律義に請け拂ひするも有り、大帳を焼くもあり、手形取亂して男泣の宿もあり」

かいいもく 野暮太郎。全くの無粋な男。「かいいもく」は皆目。二代男一「皆目の野暮太郎は、酷うてならず、中位なる奴は、いつとても飛ばすなり」

かいらう 鹿の鳴聲にいふ。下文は借老とかけて用ひてゐる。松風村雨東帯鑑四「あれ妻戀の雄鹿雌鹿、さをしかが焦れ／＼、御影の森に鳴く、其かいらうの聲まで」。かいらう。

かいらぎ 梅華皮。(一)粒狀の硬い凸起のある鮫類の皮。刀劍の鞘・柄などの裝飾に用ひる。(二)その「さめかは」で作つた太刀。かいらぎ作りの刀。賀古教信七

慕巡「此方の家に置いて来た、かいらぎ  
欲しい程欲しい。」「せかいらぎ」參照。

**かいろ** 鹿の鳴聲。五十年忌歌念佛下「我  
は秋鹿夫を戀ひ、かいろと啼くと知ら  
せたま」。武藏野にかいよと鹿の鳴く  
頃は、尾花波寄る秋の夕暮」と藏玉集  
にある「かいよ」を「かいろ」といふ  
に至つたのであるといふ(燕居雜話)。

**かいゑ** 皆會。百日曾我「それ六字の名  
號といつば、華嚴經に南の字をあらは  
し、阿含經にて無の字をせつし、方等  
經にて阿の字をひらき、大般若にて彌  
の字をつづめ、法華經を以て陀の字を  
皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり」

**かいをつくる** 貝(かひ)を作る。泣き出  
しさうな顔をする。べそをかく。梟狩  
劍本地地「おりや焚喰じやといふ顔に、  
貝をつくるぞあはれ成る」

**かうあはせ** 香合。種々の香料を燒き、  
それをかいて優劣を評し、又、その香  
の名を中て、その適否を判じて勝負を  
定める遊び。人を左右に分けて行ふ。  
二代男三「沖之丞に源平香合の道具持  
たせて」

**かうがい** くわうがひ(光貝)。光る貝。  
釋迦如來誕生會「數千人の官女達、天

の漿、かうがいの杯、千顆萬顆の寶を  
捧げ」

**高歌一曲掩明鏡** 唐の詩人、許渾が秋思  
の詩の句。男色大鑑「腰より下の皺を  
悲しみ泪にしづみ、高歌一曲掩明鏡、  
昨日少年今日白頭と作りしも、此身の  
かはるに思ひくらべて悲し」。尙、この  
詩の起承の二句は次の通り「琪樹西風  
枕算秋、楚雲湘水憶同遊」

**かうかけやま** 高懸山。若狭國遠敷郡、  
今の三宅村字神谷にある。

**かうき** 拷木。拷問にかける木。罪人を  
縛りつける木。磔柱。孕常盤三「樗の立  
木を其儘に、枝を打つて科人の、かう  
木の柱と定めらる。廻りに拔身の槍長  
刀、數百本」

**かうぎがさつ** 我がまゝ粗暴。亂暴で粗  
野な振舞。丹波與作上「若黨仲間あらし  
こ小者に至るまで、大酒を致さぬ様に、  
馬次舟渡し等にて、かうぎがさつを仕  
つたならば曲事でおじやんべい」

**かうきき** 香聞き。香を聞くこと。又、  
その人。一代男五「手前に香爐の廻る時  
(中略)、此の木は何と御聞き候と申す、  
正しくもるかづらといふ、さても名譽  
の香きゝかな」

**かうぐり** 香具賣。(一)沈香や丁子や麝  
香など香合に用ひる材料や道具を賣る  
者。(二)香具を賣るかたはら、男色を賣  
るもの。一代男二「十五六なる少人の、  
との茶小紋の引きかへし、かのご纏子  
のうしろ帯中脇差、印籠巾着もしをら  
しく、高崎足袋、つゝ短かに、がす雪  
踏をはき、髪はつとすくになに、まげを  
大きに高くゆはせて、續きて桐の挾箱  
の上に、小帳、十露盤をかさね、利口  
さうなる男の行くは、人の目立たぬや  
うにこしらへて、見るほど美しき風情  
なり、是なん香具賣と申す」。香具師。  
次條と同じにも用ひる。

**かうぐや** 香具屋。香具を賣る家。その  
人。置土産三「西口の香具屋の新九郎と  
いへる、このほど取出の太鼓を頼み」

**かうが** 高家。江戸幕府の職名にもある  
が、もと文武兩家の名族を稱した。武  
道傳來記五「後柏原院大永の比、大和の  
武家がたより、都の高家の御かたへ御  
息女を送らせ給ひけるに」とあるは、  
歌道の家のことである。

**かうけん** 次條と同じ。威光。價値の存  
するところ。心中符庚申下「ホ、そが  
男のかうけん。貴人高位の娘でも、夫

が去るにんと申そ」。こうげん。  
**かうげん** 高間。權威。威嚴。品位。一代男七「色里の衣装がさね(中略)姿をほのかに名をしらぬ塵戀さへ、是はと心動かすは、よき日見るゆゑぞかし。ましてや高間すぐれて美しく、新艘引て、千里を行くも遠からず」

**かうざゑもん** 幸左衛門。姓は竹島。俳優。初世幸左衛門は元祿前半期に於ける大阪の立役者。父を大和屋傳助といひ、俳優の門閥からいふと、當時の名優坂田藤十郎や山下京右衛門などよりも遙かに上であつた。江戸・京都・大阪の各座に出演したが、根據は大阪であつたらしい。正徳二年十一月廿四日歿。二世幸左衛門は初世の養子で、享保の頃、京阪の重鎮であつた。美男で、山下京右を三分、初世幸左を七分がた取入れて仕出した藝風に、口上のあざやかさを以てし、武道詰開きの科白は天晴なものであつたといふ。位附上吉、下例はこの二世のことである。油地獄上「やつしは甚左衛門、幸左衛門が思案ごと」。同下「油屋の女房殺、酒屋に仕替へて幸左衛門がするげな」  
**かうさんけい** 講參詣。講(こう)、即ち

神佛を信ずるものが組合をつくつて、團體となつて參詣すること。二代男「講參詣の道者、岩の蔭道踏鳴らす中に」

**かうし** 格子。遊女の一階級。太夫の次、局女郎の上に位するもの。遊女居樓内の大格子の内に居るのでいふ。あづま物語に「今様をうたひ、扇おつとり、一ふししをらしく舞うたるを太夫と名づく、少し品劣れるをかうしと名づけ」とある。一代男三「隔子(かうし)局といふ事もなく、軒まばらなる板屋に、或は五人三人居ながれて其のさまをかし」。榮花咄五「はやるかと思へば、太夫格子にも隙あり」。格子女郎。

**かうしあたま** 孔子頭(かうしあたま)。ざんぎり頭。髪を切り、結ばないで撫でつけてゐること。さうがみ。二十不孝四「久しき浪人岩越數馬といひしが、近年孔子頭に變へて名も夢遊と改めける」。尙「孔子」を冠らせた語については「かうし」の諸條を見よ。

**かうしいはひ** 格子祝。遊里で、遊女たちが、客の來ない時、近邊を散歩して客の來るまじなひとすること。或は客引の爲の散歩であるといふ。重井簡甲

「房は今まで門にか。この寒いに物好きな(中略)とありければ、されば餘り餘所が賑かきに、格子祝ひに出来ましたと、言捨て二階へ上る體」

**かうしぢやうらう** 格子女郎。遊女の一階級。「かうし」同じ。格子太夫(かうしだいふ)。格子の君。冥途飛脚中「傍輩の掃部殿を始めとして、格子女郎衆の手前もあり」

**かうしよくいちだいをとこ** 好色一代男。男色大鑑「なんぞ好色一代男とて多くの金銀もろくの女に費しぬ、ただ遊興は男色ぞかし」

**かうしんきのえね** 庚申甲子。庚申の日と、甲子の日は、男女交合を慎むべしといふ俗傳がある。殊に庚申の夜に孕むと盜癖のある子を生むといふ。甲子は家内業を休んで相集り、大黒天を祭つて語り明かすべき習慣である。大職冠三「跡構はずにあた見られぬ、庚申甲子。一夜の間日もある事か」

**かうしんまち** 庚申待。かのえさるの日に、三猿の像をかけて、庚申背面(かうしんしやうめん)といふ神、又は猿田彦命などを祭ること。當夜は寝ると禍があり命を短くするといふ迷信か



ら夜を守つて寝ないでゐる俗習がある。かうしんゑ(庚申會)。大矢數三「鶏が鳴く庚申侍の事なれば、つき出し捨て七色の山」。置土産「霜月はをさめの庚申侍、わたくし小宿の水風呂の釜を仕替の御合力」

かうしんまゐり 庚申參。唐申青面を祭つてある庚申堂や、庚申塚などに參ること。織留五「其上六度の庚申參り、八月十二日宵藥師」

かうせん 香煎。大唐米(あかごめ)のことがしに、陳皮や山椒や茴香などの香料を細末にしてまぜたもの。白湯の上に撒いて飲む。こがし。「むぎこがし」のことをいふのは方言である。置土産五「素湯わかして香煎より人をもてなす物はなかりき」

かうせんをしやう 高泉和尚。山城國宇治黄檗山萬福寺の五世の住職。支那から來朝した僧。元祿五年歿。永代藏三「足もとなる高泉和尚の寺にも參らず」

かうそり かみそり(髮剃)の音便。(一)戒師が出家する人又は死者に戒を授けて髮を剃ること。(二)僧侶が在家の人の頭に剃刀をあて、剃髮のさまに擬して、佛道に歸依した證とする式。大矢數二

か

「月更けてゆく西の門跡、髮剃(かうそり)を戴く度に秋の霜」

かうちき 高直。高いねだん。高價。又、ねうちのある貴いものにもいふ。永代藏三「かゝる浦山へ馬の背ばかりにて荷を取らば、萬づ高直に迷惑すべし」傾城反魂香中「三月二日に隙をやるの一札、王様の御綸旨より高直な物握つた」

かうづ 高津。大阪天王寺の北方にあたる。東高津・西高津に分れてゐる。五人女「今時分は大阪に著きて、高津あたりの裏座敷かりて。萬文反古三「天王寺の櫻、住吉の沙干、高津の涼み、舍利寺まゐり」

かうづつみ 香包。香の包んである紙。紙包にした香。一代男五「江戸にて若山さまの香包と假初の袖にとめさせられ」

かうなん 佐藤忠信廿日正月上「凡そ三百餘人の衆徒、忍辱慈悲の衣がへ、怨憎會苦のかうなんに、修羅闘諍の勵みをなし」

かうにきる 「かさにきる」などいふに同じ。人の威をかりて侮る。役目などを鼻にかけて威張る。大磯虎稚物語五「御

使をかうに著て慮外をすること、侍の法なるか」

かうにん 高人。身分の高い人。貴族。高家。永代藏「煙(よめ)も高人の家は格別、民家の女は琴のかはり眞綿を引き、伽羅の煙よりは薪の燃えしきをさしくべたるがよし」

かうのづ 香鬮。模様の名。俗に「源氏香」といふ。五種づつの香を聞きわけて、それを鬮に記録したもの。薩摩歌上「とき／＼土佐の高知は中膨、お駕籠は紺に香の鬮なり」

かうの場 博奕の語。「かう」はもと迦鳥といひ、後に「かぶ」と稱したカルタ賭博のこと、九を勝目としたものであるといふ(賭博史)。即ち九の數になれば勝とするカルタに於て、「かうの場」といへば、終りぎは、總勘定などいふやうな意になるであらうか。大職冠四「斯くてかうの場に至りて、座中を見れば錢高は、三百文のごくどうが」

かうばこ 香箱。香を入れる箱。香盒。一代男五「書院硯、筆掛、香箱、さまざまの唐物道具」

かうばし 香箸。香をたたくとき、香を挟むに用ひる木製の箸。新小夜嵐物語下

「右の手に香箸、左に敷銀を持ちて、名香開き飽きて鼻血たらし」

**かうぶし** 夏ますげの異名。かやつりぐさの類で、夏季、一尺餘の莖を生じ、その頂に濃茶褐色の穂を開く。地下の塊根を薬用に供する。薩摩歌上「醫者衆に相勤め、町人参や香附子方の奉公は不案内」

**かうふり** かうもり(蝙蝠)のこと。大阪獨吟集「ふりさけ見れば淀のはしくる、かうふりの聲も跡なき夕まぐれ」

**かうべをわらす** 頭を割らす。心を碎き案ずる。頭は「あたま」とも訓ませてある。永代藏四「正直の頭を割らして、暫時も只居せず」

**かうもりばおり** 蝙蝠羽織。かはほりばおり。袖よりも胴の短い羽織。寛永正保の頃から流行したものであるといふ。晝夜用心記五「兩替町風の蝙蝠羽織に袴八丈の袴」

**かうやひじり** 高野聖。紀伊國高野山から、勸進の爲に諸國に出る僧。後には、名をこれに借りて、様々の悪事をたくらむ賣僧(まいす)のことに言つた。物種集上「旅つづら高野聖のときほどき、商口のめりのことはり」。萬文反古四

「此程は高野非寺里ども爰元の名物鳥袖を調へに罷越候が」

**高野六十那智八十** (謔) 高野紙一帖は六十枚、那智判紙は八十枚であるのでいふ。俗に僧侶の男色のこと、特に高野山で年寄るまで若衆たるものあるを意味する。薩摩歌上「近年高野に相勤め、小姓廻しはいせしが、高野六十那智八十、きんか頭の若衆にて、遂に月代剃つた事、ごはりませぬ」

**かか** 喚。口鼻。賤しい者の妻。母を「かか」といふ小兒の語の轉用である。一代男四「其後は遊び宿の口鼻となりながら自由になりぬ。二十不孝」「人置のかゝを招き、内證を語り」

**かが** 加賀。「かがぎぬ」の略。二代男一「榎嶺は四五年になる、幅廣の加賀、前巾着に質の札二枚」

**かががさ** 加賀笠。加賀國から産出する菅笠。天和の頃から大名衆の女が用ひたもの。前を竹で止め、寶永末年から縁を針金で止めたといふ。貞享元祿の頃は、町家の女房、比丘尼などが冠つた。槐久一世



物語下「薄紫の帽子加賀笠深く被きしは、又あるまじき若比丘尼」。油地獄上「ア、どうかせう、何と加賀笠お吉と見るよ」。加賀の地獄

**かががは** 加賀皮。鼓の皮として加賀國から産するものが名高い。雪女五枚羽子板中「あかうの胴に加賀皮くれ、くれなゐの調べを、千鳥がけにかけさせ」

**かがぎぬ** 加賀絹。加賀國から産出する絹布。二代男一「大宮の左吉結の水鹿子も、今加賀絹に變れど、姿は些少も見劣らざりしは」

**かがすげがさ** 加賀菅笠。「かががさ」に同じ。出世瀧徳上「是れは又加賀菅笠締め緒あらくと召しませとよ」

**かがせ** かがし(案山子)に同じ。吉野都女桶二「片手をのべ一突つけばこがらしに、かがせの倒るゝ如くにて」

**かかつたこと** かかはつた事。かかはるべき價值あること。かかりあふべきほどのこと。戀八卦柱曆上「お寝間へござる後ろつき、をかしいやら憎いやら、かゝつた事ではござんせぬ」。「かゝつた詮議ちやござんせん」などともいひ、否定の語が下に来る。

**加賀の金春** 胸算用三「過ぎし秋京都に

於て加賀の金春勅進能を任りけるに「**かがのごんぼ** 加賀は牛蒡の名産地であるのでいふ。萬歳歌に「そばのたな見たりや、豆に小豆、大根かぶら、加賀のごんぼ毛ごんぼ、からしの粉山椒の粉」とある。戀八卦柱曆下巻の初めはこれに據つたもの。出世瀧徳下「かがのごんぼと云ふことあり、そんならいつそう毛ごんぼ様」

**加賀の八** 白加賀の衣裳で傾城買を得意とした村山八郎兵衛のことかといふ。一代男「名古屋三左、加賀の八などと、七つ紋のひしにくみして」

**かがぶし** 加賀節。(加賀女(かがめ)といつて加賀國から出た遊女が讀ふ唄のことであらうといふ(貞丈雜記)。(萬治寛文の頃、狂言役者多門庄左衛門等が唄ひ出した小唄の節。「松の葉」に唄として第三卷に入れてある。一代女「太鼓太郎に加賀ぶし望みて歌うて引くを、それを心をとめて聞かず、小唄の半ばに末社に咄しかけ」。(淨瑠璃節の一派、宇治加賀掾の創めたもの。嘉太夫節。

**かかへおび** 拘帯。細く新けたおび。「しごき」のことをいふ大阪詞。一代女

か

「紺地の今織後帯、それが上を小取廻しに、紫の抱帯して髪は引下げて」。女腹切中「前垂取つて丸ぐけの、襷をぢみな抱帯、しゃんと結んで引締めて」

**かがみうち**は 鏡團扇。表面に小さい鏡を箝め込んだ團扇。百日曾我「あはでぞ戀は、どれくそれます、それます鏡團扇や奈良團扇」。榮花咄「鏡團扇にて招けど、早姿も見えず」

**鏡の家** 鏡を入れておく箱。三界に家なしといはれる女が、魂としてゐる鏡を入れおくその箱は、やがて女の唯一の家であるといふ意。油地獄下「嫁入先は夫の家、里の住みかも親の家、かがみの家の家ならで、家といふものなけれども」

**かがもん** 加賀紋。うはる(上繪)にゑがいて、色取つた紋所。加賀の國の人が多く用いたのでいふ。男色大鑑五「上に黒羽二重の両面芥子人形の加賀紋、宗傳から茶の疊帯」

**かかり** (接尾語) 物事のふう(風)、又その垂れた様子。油地獄下「そんじよ其處とは教へしかど、何れも同じ局のかゝり」(女)の髪

**がかり** (接尾語) 物事のふう(風)、又そ

の物事に關係し、似通うた有様を表はす場合に用ひる。一代男「若道のたしなみ、その比下坂小八がかりとて、鬢切してたて懸けに結ぶ事はやりける。同「大小小しやがかりに、編笠ふかく着て指しかゝる」

**かかりゆ** 風呂桶の外で、身體に注ぎかける湯。あがり湯。丹波與作中「据風呂もしゃんく、かゝり湯取つてかげん見て」

**かき** 岩花。牡蠣のこと。織留「岩花のお吸物出して」

**かきあみ** 餓鬼阿彌。癲病患者のこと。餓鬼阿彌陀佛の略。古淨瑠璃の小栗判官から起つた語で、もと、餓鬼の蘇生しようとして未だ生氣のないものをつた。孕常盤「力は地獄のがきあみ、御壽命は朝顔の、日影待つ間の露の身」

**かきらがやね** 牡蠣殻屋根。かきの貝がらを載せた屋根。かきがら茸のやね。大職冠「めかりの戸次は此の浦の、蠣殻屋根も福々と、人の羨む老人は」

**かきしやなぐる** 掻きむしる。曾根崎心中「これが腹がいるものかと、つかみ付き掻きしやなぐり、ぶてど叩けど」  
**かきたてじる** 搦立汁。おとし味噌汁。

か

「かききたて汁に小菜の浮かし」。大句數上「出来合のかき立汁に月の友」

**かきぢ** 書地。書いてある模様。例へば色紙(しきし)、扇などの形の書いてある布や紙の地をいふ。二代男三「書地の扇に、歌一首」

**かきつて** 限つて。上の語を承けて、「……にも一切」……にも斷じて」などの意をあらはし、下に否定の語を伴ふのが常である。武家義理物語五「親類かきつて此の沙汰する事なかれ」。天網島上「最前は侍冥利、今は粉屋の孫右衛門商ひ冥利、女房かきつて此の文見せず、我一人披見して」

**かきなます** 柿臈。千柿などを刻んで臈にあへたもの。傾城酒吞童子二「朝晩のかき臈、お汁には何なりと尾鱸のついた焼物」。一説に、大根を削つて入れた臈、搔臈であるといふ。

**餓鬼の目に水見えず** (諺) 渴してゐる餓鬼の目に水は、そばに水があつても見えず、却て他に求める意。渴望が甚しい時は、却てその物を見のがす。釋迦如来誕生會二「餓鬼の目に水見えずとは妾が事。嬉しや今日は聞えぬ事も何

もかも、言うて退けう」

**餓鬼の物をひんづる** (諺) 餓鬼の得た食物を奪ひ取る。窮乏してゐる者から物をせびり取る。「ひんづる」は「引き出づる」と賓頭塵とかけた語で、せびりとる、ひつ取ること。松風村雨東帶鑑三「たま〜逢うた男を餓鬼の物をひんづる、小猿の頬を押すやうに、餘り出来ぬ御差配」

**かぎばな** 鈎鼻。鈎のやうに曲つた鼻。ムノ字のやうになつた鼻。男色大鑑五「思ふ人の鈎鼻をなほし、思はぬ人の出額をも見よげに畫けば」

**かきぶね** 牡蠣船。大阪名物の一。冬季諸方の橋の上手や下手へ繋いで、温い牡蠣飯や土手焼、酢蠣などの料理を供する船上賣店である。かきは、安藝國廣島地方から積んで來るのであるといふ。重井筒下「假の現の假橋や、澤にうづもる」牡蠣船の、苦の隙間の」

**かきもち** (一) 正月の具足餅(鏡餅)を、手で一片づつに缺いたもの。缺餅。(二) なまこもち。瓜を押しつぶしたやうに作つた餅を輪切りにして、かげ干しにしたもの。炙つて食する。一代男五「晝も寝ながら、手づから搔餅を焼きて、それ

をなぐきみにして」。白こほりもち(凍餅)。薄く切つた餅をこほらせたもの。湯に浸して砂糖などかけて食ふ。双は水の朝日中「其のかきもちの水より、涙の水とけやらぬ、うき身の上こそ無慚なれ」

**餓鬼も人かず** (諺) つまらぬ者も、時には人数の足しにはなる。國性爺三「ヤア餓鬼も人数、しをらしい事ほざいたり」

**かきもん** 畫紋。(一) 畫いた紋所(染紋・縫紋の對)。(二) 畫いた模様(染模様・縫紋の對)。男色大鑑六「薄樺染の小袖に山盡しの畫紋、その景色もかすかになるまで清古し」

**かきやぶり** 垣破。通すべからざることを通さうとすること。「横紙やぶり」や「横車を押す」などいふにおなじ。

**かきやり** 鈎槍。柄の刃に近いところに十文字に鈎をつけた槍。薩摩歌上「劍鉞粒子の鈎槍素槍は、伊賀伊勢の津の御城主」

**かきあこそて** 書繪小袖。肉筆で模様を畫いた小袖。染模様の小袖に對していふ。織留三「近年書繪小袖を仕出し俄分限となりぬ」

**かく** 角。一分(歩)金、又は一分(歩)銀

の稱。關西(大阪は例外)では銀にいふが常である。一代男三「焼物一具とりて、一角計りよらせて」。尙、「いつかく」の條を見よ。

かく 掛。懸。今日他動詞下二段活用を、四段活用にしてゐる。一代男七「轆鼻禪の、かき替へもなき人」。同「下帯もかゝず」。冥途飛脚上「心易いは格別、高駄賃かくからは大事の家職」

かくかろがい 角筭。角ばつた形のかうがい(筭)。俗つれつ、四「伽羅の角筭に青貝の折菊」

かくしうら 隠裏。衣服の裏の見えないところに、他とは別の布をつけること。一代女「あやめ八丈に、もみのかくしうらを附けて」

かくしご 隠子。私にまうけた子。正妻ならぬ女に生ませた子。

かくしぜい 隠勢。ふせぜい(伏勢)。伏兵。吉野都女楠四「歸雁つらを亂るなる、隠し勢と心得取つて返して此森へ」

かくしだろぐ 隠道具。腰巻。湯具。ふたの。一代男「女の隠し道具をかけ捨てながら」

かくしほくろ 隠黒子。見えにくい處にするいれぼくろ(入黒子)であらう。

一代女六「手首に隠し黒子せし」  
かくしむすび 隠結。外から見えないやうに絲紐などを結ぶこと。一代女「つとなしの投局田、隠し結びの浮世髻」

同「小枕なしの大島田、一筋かけのかくし結び」

かくしめつけ 隠目付。内々で事を探り、監督する役。しのびめつけ。曾我會稽山五「住持が訴に限らず、隠目付の者共、背に耳へ達したり」

かくしまど 隠窓。外から見えないやうに作つた窓。一代女「あかり取りのかくしまど細く」

かくしもん 隠紋。衣服の裏につけて、外からかすかに見えるやうにした紋。五人女三「さりとは花車に仕出し、三つ重ねたる小袖、皆くろはぶたへに裾取の紅うら、金のかくし紋」

かくしよね 隠し妓女。公許の遊廓以外で、私に春を賣らせる爲に抱へおく女。かくしばいぢよ(隠賣女)。置土産四「清水町のかくし娼、百で酒肴もてなし様なるも可笑し」

かくしゑ 隠繪。ふと見てはわからないが、よく見るとその物とわかつて來るやうに畫いた繪。ゑさがし。一代女「當

流の仕出し模様、かくしゑのひとり笑ひ」

かくすけ 角助。やつこ(奴)の通稱。即ち武家の奴僕、一般にしもべ男の名として用ひる。大矢數四「敵討やうす知るまで波の音、角介と云ふ千鳥友呼」。二代男「御紋附の傘、角助がさし掛け」夕霧阿波鳴渡中「馬取の角介苦しい顔して」。槍權三上「年季の角介杖提げ、煙路の中に走り入り」

かくだいふぶし 角太夫節。山本角太夫の創めた淨瑠璃の一派。その語り風によつて軟派などと稱されてゐる。晝夜用心記「公平事もつづけ聞きは退窟、あちらには出羽播磨ぶし、こなたには加賀掾、角太夫ぶし」

かくない 角内。しもべ男の稱、角介などの類語。二代男「薄雲様の御迎(中略)、角内が背中に乗移り給ふ様は」。置土産五「次郎といへる大臣の長町の下屋敷不思議に残りに、角内忠兵衛、髭の半右衛門など面白く咄しくれて」

かぐぬし 家具主。家具を貸す店の主といふ意か。胸算用「家具主の所へ養子に行きて」

かくまへ たくは(貯)といふほどの

意。圍むの延語といはれる「かくまふ」の名詞形。圍つて物を貯へておくこと、又、その物。懷視五「溝越傳介といへる小百姓、四五年の不作に遇ひ、日比かくまへの悪しく、妻子とそれごとくに見放ち」

かぐら 神樂。神樂庄左衛門の略。西鶴

が末社四天王と數へてゐる中の一人。神樂の眞似や文作(もんさく)を得意とする男。大矢數四「かねつかふ大臣鳥に

殘されて、熊野を勸請神樂願西」。永代藏六「文作には神樂願齋もはだして

逃げ」。吉野忠信四「神樂を以て文作袖を齎せば。尙、「あふむ」の條参照。

神樂庄左衛門 前條を見よ。二代男七「神

樂庄左衛門黃金あらば一日にもなるべし(中略)、女郎は片寄せ、神樂に十露

盤置かして太夫一年勤める入費を聞くに」。同一「神樂の庄左、鸚鵡の吉兵衛」

かぐらせん 神樂錢。神樂を舞はせた禮として上げる金錢。神樂奉納の費。神

樂料。下の例は、これを轉用したもの。一代男三「かたじけなき御託宣、ありつ

る告を待たんとて(中略)、覺むるや名殘の神樂錢、袖の下より通はせて」

かぐらひめ 神樂姫。神樂を奏する女。

かぐらめ。武道傳來記「陰陽師は事かな笛ふかんと、神樂姫をこしらへ、お初尾袖にあまりて喜びの舞の拍子」

かぐらを 神樂。神樂を奏する男。かぐらをとこ(かぐらめ)の對。孕常盤五

「百俣百味の神供を捧げ、八人の乙女、十人の神樂男、朝の御神樂、夕の祝詞」

隠笹の金丸 狐の名。有名な老狐「於佐賀部」の四天王の一人。大下馬卷二「狐

四天王」に出てゐる。かぐろふ 「隠れる」か「げろ」などの意。

古語「かぐろふ」の轉。或は「かぎろひ」

「かげろふ」などから、類推を誤つたものか。大職冠四「五重の塔の雲水に、月の光のかぐろひて、暗きより暗きを照

す金堂の」。孕常盤四「小萩が下の一村に、立寄る姿かぐろひて、鏡に影はとどまらず」

角を 鐙のふちの四角なところ(かく)で、馬の胴を打つて走らせる。百

日曾我四「馬引きかへし八方へ、ふみちらし」鞭うちくれてかくをいれ、雲

をかすみに飛ばせける」

かけあひの食 萬文反古五「旅籠屋に立寄り、かけあひの食(めし)を出し給へ

といひて座敷に通り、少しのうち假枕」

出來あひ、有りあひの食といふ意であらう。飯を焚くことを、今日も飯をし

かけるなどいふが、そのかけであらうか。

かけおび 掛帯。古く女の髪飾りに用ひた

帶。裳に附屬したものであるといふが、「ちはや」を着た巫女などが用ひたと見

えて、「千早かけ帯」とよく續けてある。一代男三「千早かけ帯結びきげ、うす化粧して黛くろく」とは、あがた神子の

扮装である。二代男にも此の用例が見える。

かけかまひ 掛袴ひ。心にかけて愛ふべきこと。單に「かまひ」ともいふ。かけ

かまへ。

かけぎ 掛木。物をつりかけるに用ひる

木。五人女五「元渡りの唐織山をなし、伽羅掛木の如し」

かけぎん 掛銀。かけ賣りにした品物の代金。かけきん(掛金)。かけ。一代女

「其の女のかげ銀を我に任せよ。濟まざば、首引き抜いても取つて歸らん」

かけくら 懸鞍。馬にかける鞍。松風村雨東帶鑑「夫は弓取駒鳥の、懸鞍に腰も懸け帯の、本締役」

かけぐら 賭鞍。競馬のこと。或は前條

か

と同じであらう。蟬丸三「某は千手太  
郎忠光とて、古は賭鞍にも乗りし者」

かけご 懸子。箱や桶などの内部にある  
蓋。又、他の匣の縁にかけて入れこ  
なつてゐる匣(はこ)。大矢数二「おち  
おちも姉上蔭が引て行く、一つはなさけ  
かけご也けり」。丹波與作中「おごげの  
掛子の底るには、戀に心をひねり芋の」

かけこ 陰子。俳優の養つておく子供。  
舞臺へ立たないで、男色の求めに應ず  
るもの。かげま(陰間)。男娼。若衆。  
置土産四「陰子のはやるは、北濱の若い  
者の勢ばかりなり」。新小夜嵐物語上  
「京からつけめしの陰子を呼びて、名も  
知れぬやうに慰むことぞかし」

かけこくら 驅けくらべ。かけつくら。  
かけごひ 掛乞。かけとり(掛取)。かけ  
金を取りある者。

かけこだひ 掛小鯛。「かけだひ」におな  
じ。胸算用五「一年懸小鯛二枚十八匁づ  
つせし事もあり」

かけこみ 掛込。錢見世(兩替屋)の用語。  
或目方に對する利をいふ。要求の目方  
よりも多量に目をかけること。永代藏  
四「銀二匁三匁のうちにて五厘一分の  
掛込を見て、少しの事ながら積れば大

分の利を取り」  
かけざくら 影櫻。紋所の名。櫻の花の  
裏を紋にかたどつたもの。

かけざた 陰沙汰。かげぐち。うはき。  
又、内々の話しあひ。下相談。

かけすずり 掛硯。かけすずりばこ。掛  
子のある箱で、硯や墨や水入をその上  
に入れおくやうに作つたもの。別に引  
出もあり、蓋をして掲げることが出来  
る。大下馬三「家を荒らし染絹掛硯を取  
りて行くに」

かけせん 掛錢。かけきん(掛金)。心中  
萬年草中「頼母子の懸錢七十四文」

かけたかのとり ほとときす(時鳥)の異  
名。「ほんぞんかかけたか」とか、「てつべ  
んかけたか」とか啼くといふのでかく  
稱する。男色大鑑七「大振袖の橘かをり  
て、見物思ひを懸けたかの鳥の聲珍し  
く狂言の申程に」

かけだひ 掛鯛。正月に二匹の小鯛を藁  
繩で結び合せ、商売やゆづり葉など挿  
して籠の上などにかけるのをいふ。か  
けこだひ。永代藏二「掛鯛を六月まで荒  
神の前に置きけるは」。氷の朔日「人に  
情を掛鯛のむしり肴と呑めかす」

かけとうがい 懸燈蓋。吊しかけるやう

に作つた燈蓋。灯ともしざら(油皿)の  
つるあるもの。一代男七「懸燈蓋に火と  
もして見せる」

かけどうろう 影燈籠。まはり燈籠のこ  
と。

かけどく 賭徳。かけるく(賭祿)の訛。  
かけもの。かけごと。丹波與作上「朋輩  
衆とかげどくに道中双六打ちて、沓の  
錢程してこませうと思つたに」

かげにんぎやう 影人形。手や他の物を  
いろくに使つて、人や鳥獸などの形  
を影に映し出すあそび。影繪。置土産  
五「松風琴之丞、年十七、影人形能く使  
ひ申候」

かけねんぶつ 掛念佛。せめねんぶつ(責  
念佛)の類か。櫻陰比事三「大鉦打鳴し  
て掛念佛申すを、法華の方より是れを  
嫌ひ」

かげのわづらひ 影の病ひ。熱病の一種  
で、患者の姿が二つになり、何れが本  
人か分ちがたいといひ傳へられるも  
の。離魂病。かげ。

かけひげ 懸髭。つけひげの一種。紙で  
髭の形を作り、紙捻りて耳にかけて、  
編笠を打ちかぶつて、遊里へ通ふ者な  
どが人目を忍ぶ便りとしたものである

(還魂紙料)といふ。二代男八「忍ぶ人の爲とて、懸髷布頭巾賣など、冷や水まゐれといふ」

**かけびんかつら** 懸髷鬘。かつら(假髮)を被つて、男子の風をすること。坊主頭の者が、鬘を戴いて髷髪を調へた様子をするにいふ。曾我會稽山ニ「密かに寺を出で、御骨なりとも拾はん」と、懸髷鬘に髪を替へ、十日あまり此の營み」

**かげま** 陰間。「かげこ」を見よ。萬文反古五「爰元へも陰間の子どもまゐり候へども、近付にもならず候」

**かげまこ** 陰間子。男色を賣る少年。前條に同じ。男色大鑑六「愛染明王、役者おろかならず祈りて、紋提灯に和光の陰間子はしらず」

**かげまち** 影待。月の出る間を待つ義であるといふが、十七夜・二十三夜などに行ふ「月待」に類したことを満月前にも行つたのであらうか。五人女三「五月十四日の夜は、さだまつて影待をあそばしける、かならず其折を得てあひみる約束いひ越しければ」。芭蕉句「影待ちや菊の香の越る豆腐串」

**かげまぢや** 陰間茶屋。陰間と客の會ふ茶屋。かげまや(陰間屋)。

**かけま** と 賭的。物を賭けて的を射ること。新可笑記ニ「歌舞伎師かけの武士民も入亂れて、自然の鞘あて手づよく替めて」

**かけまひ** 陰舞。かげま(陰間)のこと。

**かけむかひ** 掛向。さしむかひ(差向)。大磯虎稚物語ニ「夫婦掛向ひ、田畑を作り候が」

**かけめやす** 掛目安。掛賣りの利得の歩合をいふか。一代女三「掛目安の談合、あるは又米の相場」

**かけも構ひもなし** 少しの關係もない。かけかまひのない。戀八卦柱曆上「なんのかけも構ひもなき、猫にまで濫口の」

**かけや** 掛屋。懸屋。武家に金錢の用途などする商人。兩替する富商。大矢數ニ「あらがねの槌の音より物がたう、懸屋のせんさく一卜の露」。永代藏ニ「後は大名家の掛屋、あなたこなたの御出入もつばらにしければ」

**かけや** 掛矢。懸矢。大きな木槌。恭盤太平記「外より小寺河瀬忠太夫、懸矢振上げどうくと打つ音に」

**かけろ** 陰郎(かげらう)。かげま(陰間)のこと。一代男三「かれらも品こそかはれ、かけろうと同じ」(香具賣の事

の條)。  
**かけろく** 賭祿。かけもの(賭物)。かけごとに使ふもの。かけごとをすること。懸賞。大矢數三「稻葉を分けて蕎取にやる、かけろくに秋風ぞふく夕間暮」。一代男八「初対面から私はふられますまいと(中略)、二十日鼠の宇兵衛を目付にあそばしかけろくに仕り、江戸によね狂ひに參ると申す」(情のかけろく)。

**かけ糸ぼし** 掛烏帽子。折烏帽子を、かけを(懸緒)を用ひないで頭に押入れ、後の針ばかりで留めおくこと。うちかけ糸ぼし。織留四「あの彦七に一つあやまりあり、掛烏帽子の緒を書き落したりといふ」

**かこい** かこひ(圍)。かこる(鹿子位)。かこい(十五)。又、鹿懸とも書く。京都鳥原や大阪新町で、太夫・天神に次ぐ第三流の遊女を稱する。即ち太夫天神よりは佞びてゐるといふ心から茶席に擬して圍(すきや)といひ、揚代十六奴であつた故、四四(鹿の古語)の十六の洒落で鹿子位といひ、賭博の語で「かこひ」は十五を意味するので、十五奴といふ。置土産四「大阪の色さわぎ、天



職より十五まで買ひあげ」  
**かこいぐるひ** 十五狂。前條「かこひ」階級の遊女を相手に遊蕩耽溺すること。

置土産五「十五狂ひをすれば三代にも盡きせぬ寶を、太夫に懸れば思ひの外はかの行く事を」

**かごはり** 籠張。籠に紙を貼つて作ったもの。武道傳來記「籠張の立烏帽子、門口に持ちかけさせ」

**かこひ** 團。「かこい」の條を見よ。一代

男五「天

神かこひ

七人掴み

て、誰に

思はくも

なく酒に

なして」

傾城酒吞

童子「黄金花咲く松と梅、百に餘りて

團、はし、二百餘人の玉蔓」

**かこひぢよらう** 團女郎。前條に同じ。

かこひしよく(團職)ともいふ。好色盛

衰記「天神は又むかしの鹿戀女郎よ

りは風儀悪しく成りぬ」

**かこひのま** 團ひの間。茶屋(數寄屋)。

又、別に離れた座敷。



**かこひめ** 團女。かくまつておく女。かこひをんな。かこひもの。外妾。吉野

忠信「團妾の隠家は、忍び亂れて葛枯れて」

**かこふ** 團。かくす(隠)。包む。傾城反魂香中「涙をかこふ神垣や、神も佛も見とほしに」

**かこふ** かこう。「かけよう」の約。費用などをかけよう(出さう)といふ意。今宮心中上「二百目近い給分を、唯の女子にかこふか」

**かごやろ** 駕籠早(かごかき)のこゑ。駕籠を遣らうと客に勤めるのでいふ。出世瀧徳上「天下は夜中八つ過ぎ、曲輪は戀の晝中や、駕籠やろばかりぞ寢聲なり」

**かごりき** 加護力。天地又は神佛の加護の力。冥護の力。

**かさえあふぎ** かさへ扇で、笠へ扇をあてること。一代男「罷出たるは此あたりに八百八彌宜の子供、諸方の浪人、友噪ぎにして、かさえ扇は何しのぶぞかし」

**かさから出る** 相手を威壓してかゝる。「かさにかゝる」ともいふ。すべて相手を呑んで、優勢を示す態度にいふ。冥

途の飛脚上「五十兩に足らぬ金、あたがしましう云ふまいと、かさから出れば

**かさぎ** 笠木。鳥居又は冠木門(かぶきもん)などの上に、横に渡した木。源氏烏帽子折「喚いて懸れば牛若丸、

(中略)華表の笠木に飛上り、からくと打笑ひ」

**かざきり** 風切。かざきりば(風切羽)、又、かざきりばね(風切羽根)の略。鳥の兩裂の下の方に生ひた長い羽。雪女五枚羽子板中「雉子の風切思ひ羽や、思ひの数を一と二た三、四う」

**かさきる** 「かさにかきる」と同じ意であらう。百日曾我「さつと時雨の雨かとして、こゑにかさきる夏のせみ、春秋しらぬ可憎世を」

**がさくさりう** 我流で文字を拙く書くこと。極めて粗雑な讀みにくい文字。關八州繁馬「手習きらひ、がさくさ流の口上書」

**がざけ** 我酒。無理に飲む酒。やけ酒。女腹切中「それ覺えてか一昨年、十七日のおぼろ月、宵の我酒にほのくと、

二人火燵のじやらくらを」

**かざしたに居る** 風下に居る。風儀を見

か

か

習ふ。(風上におくの對) 宵庚申申「忘れても烏田平右衛門が娘の風下に居るなど、娘持つた人々は寄合ひ、茶吞唾にも和女の噂」

かさじるし 笠印。笠標。兜の後部に附して、戦陣の部隊所屬の標とする布片。百日曾我「思ひ〜の笠印、袖印」。

かさだかに 嵩高に。わう〜(横柄)に。おどすやうに。おそろし。萬文反古。「家主へ五人組へ付け届け申すと、かさだかに云ふともこはい事はなく候」がさつ 粗野。亂暴。「がうきががさつ」を見よ。

かさづけ 笠附。俳諧の發句の、上五文字の句を出して、これに下句十二字を付けて一句を仕立てること。冠付(かむりづけ)。

かさどる 得意になる。調子に乗る。出世瀟德上「中にも惣兵衛かさ取つて、なんと何れも旦那のはばを御覽じたか。あれみな我等がさする事」

かさにかかる 「かさから出る」に同じ。前條も参照。室町千疊敷「主の威光のはね袴、かさにかゝつてきせかくれば」かさになる 前條に同じ。蟬丸「退つ敵をかさに乗り、くも手に追つ立て退つ

返し」

かさねがしは 重柏。紋所の名。男色大鏝「かさねがしはに巴、鈴木平七」かさねぎく 重菊。模様の名。小點を列ねて菊花の形としたもの。武道傳來記「九月九日の御禮日にお目見えすまし、家の悦をかさね菊醉をすゝめて」

かさねぎり 重切。物を重ねておいて切ること。不義の男女など成敗するにいふ。

かさねくぎぬき 重釘貫。紋所の名。薩摩歌上「六尺は重釘貫、白鳥の笠鋒鞘」かさねもりば 重盛羽。やりじるし(槍印)の名。羽を盛り重ねたやうに作つたもの。普通の大鳥毛の上に、今一重鳥毛を重ねたもの。薩摩歌上「重ね盛羽の大鳥毛、對のお道具突立てて」

かさねるづつ 重井筒。(紋所の名。井戸がはを重ねた形のもの。(近松作の戯曲名。出世瀟德下「此の夏、爰の芝居へ竹本が弟子が下つて、重井筒を語つた」)

かさほこ 笠鋒。傘鋒。祝ひ事や祭禮の時用ひる飾りもの。京都祇園祭の傘鋒は、二本あつて、一は絹傘の上に鶏を載せ、一は花瓶をおく。各々太鼓囃

をする者が附き添ふ。一般に開いた傘の骨の端には、ぐるりと模様のある布を垂れ、上には、作り花や鋒や長刀などを附ける。武道傳來記「正月三日の事なるに、若き者集りて、いざ文助に水掛祝ひといひ出れば(中略)、銀箔の柄杓五十本、衣装づくしの笠鋒十二本」

かさほこ



かさほこさや 笠鋒鞘。槍の鞘の一種。からかさを閉じたやうな恰好のものをいふのであらう。薩摩歌上「白鳥の笠鋒鞘」かさみ 蜻蛉。海産の蟹の一種。肉は食用にする。かざめ。平家女護鳥「鯛がこそぐる、かざみが抓める」

**かさやさんかつ** 笠屋三勝。舞妓の名。

元祿八年十二月六日の夜、千日の墓所で半七と情死したと傳へられる。米の朔日下「大和の國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、つまとつまとを引きよせて」

**かざりつぼ** 飾壺。床の飾りに用ひる壺。傾城酒呑童子「銀の毛彫の飾壺、宇治の葉ながをそのまゝに」

**かざりなは** 飾繩。正月門戸などに飾るしめなは。しめかざり(注連繩飾)

**かざりや** 飾屋。金屬で簪・金具などの裝飾品の細工をする職業。その人。飾職。飾師。

**かさをかく** 「かさにかかる」、「かさにのる」などとおなじ。蟬丸「否と云はば踏殺さんと、かさを掛けてぞ申しける」

**かし** 貸。遊女の身に關する語。他の客に揚げられてゐる遊女を、更に我が方に招くことを客又は親方から借るといひ、遊女又は先客(又はその揚屋)からは貸すといふ。この「借る」は「貰ふ」ともいふが、一時的に都合をつけて貰ふのが「借る」であることは、他の物品にいふのとおなじである。冥途飛脚中「忠様はまだ見えぬかえ、せめてのゆかりにこなさんの、顔が見たさに貸しに來

た」油地獄上「備前屋の松風めは先約があつて、貰ひも貸しもならぬと吐す」

**かしあみがさ** 貸編笠。編笠茶屋で貸す編笠。遊廓へ通ふ客は、これを冠つて忍び姿になつたのである。吉野忠信「片岡ばかり召連れられ、面影かくす貸編笠、深くぞ忍ばせ給ひける」

**かしざしき** 貸座敷。借座敷。今の「貸間」とおなじ。(遊女屋のことを稱するとは別である)。一代男「智恩院のもと、門前町にかし座敷、十日限りの手懸者を置きて」。俗つれど「上町の借(かし)座敷に色よき妾(てかけもの)が玉子酒して待つが面白くて」

**かじち** 家質。家をしちに入れること。家屋を借金の抵當とすること。その家。永代藏「烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ」。戀八卦柱曆上「町衆の加判におとし三十貫目の家質に入れたげな」

**かしはぎのまり** 柏木の鞠。源氏物語「若菜」の巻に、六條院の蹴鞠の會で、柏木大納言が女三宮を垣間見る話があるのでいふ。五十年忌歌念佛上「柏木の鞠、さんろが笛、古今その品かはれども、皆これ戀路の寄せがまち」

**かしまのことふれ** 鹿島事觸。每春(正月)

月日  
日か  
ら三  
日ま  
で、  
常陸  
國鹿  
島明神の託宣であると言つて、その年の吉凶について諸國に觸れまはること。又、その人。折鳥帽子に狩衣の神官姿で、襟に幣束を挿み、銅拍子を鳴らして歩く。ことふれ。武道傳來記「其後鹿島の事觸や告げ來りけん、此六月朔日を正月になして祝ふべし、さもなくば人間三合になるべしと、愚痴の世をはかりて神託とおどしければ」



れふみこのましか

**かしみつ** 炊水。米のとぎ汁。國性爺「糲糲王の臺處につくばひ、炊水でも吸つて命をつげとぞ呼ばはりける」

**かしりもの** 貸盛物。賃を取つて貸す盛物。盛物は食を盛つて膳に供へるもの。又、佛前に供へる食物。その器。二十不孝「念佛講の貸盛物、三具に敲鉦を添へて一夜を十二文」  
**かしやうぐひ** 嘉祥喚。六月十六日に、

か

疫病を除く爲めであると言つて菓子を喰ふこと。室町時代の末頃から行はれた風習であるといふ。單に嘉祥ともいふ。江戸時代に入つては、幕府の年中行事の一として、この日將軍は大廣間に出て、目見え以上の土に菓子を賜つた。二代男「今日嘉祥噴とて、二口屋が饅頭、道喜が笹粽、虎屋の羊羹、東寺瓜、大宮の初葡萄、粟田口の覆盆子、醒ヶ井餅、取交せて十六色」。かぢやうくひ（嘉定噴）、「かぢやう」ともいふ。

**かしやく** 家借。しやくや（借家）におなじ。他人の家を借りること。

**かしやしき** 貸屋敷。出養生の人などに貸す家。その家のあるところ。大下馬

≡「土手町の貸屋敷に行きて、年來目を懸けし者を叩き起し、忍びて養生する病人と申し、一間なる所へたて込み」

**かじゆつ** 菘蓼。菘茂。うこん（鬱金）の異名。熱帯産の植物。觀賞用とし、根莖から其處の染料を取る。薩摩歌上「季中に其處を追出し薬、それより心に菘蓼を張り」

**かしよく** 家職。家の職業。その家の商賣。二十不孝「それ〜の家職して

朝夕の煙を立てける」  
**かしら** 頭。初め、第一などの副詞に用ひる。あたま。一代男二「かしらから物

毎しらけて語りぬ。二代男二「こゝに口傳は、かしらからいやといはせぬ手

筈あり」。二十不孝「一年の利金ばかりかしらに取るなり」

**かしらが打つ** 頭が打つやうに痛む。づきづき頭痛する。氷の朔日中「ア、氣が疲れて頭がうつ」

**かしらがき** 頭書。書物などの上欄に註釋、批評など書くこと。その書いた文句。首書。頭註。懷硯五「古文の上巻を開き、朱を以て頭書き」

**かしらがみ** 頭神。疫病神の一。人の頭痛を司る神。日本振袖始二「腹痛頭痛の頭神」

**かしらせんじ** 頭煎。煎じ薬の第一回の煎じ汁。最初の煎じ出し。最もよく効能をあらはすといふ。大矢數三「くつきめの岩のはなから雪消えて、かしら煎じに風の行末」。男色大鑑三「次第弱り

の朝脈、夕のかしらせんじも更にきかず。五人女三「手づから薬籠にてかしらせんじのあがる時」  
**かしらのかかり** 頭の髪の様子。「かかり」の參照。

**かしらは** 一年物。諺であらう。頭髮は一年立てばもの通りになるといふこと。尼や坊主になつても一年で髪は延びる。五人女五「頭は一年物、衣をぬげば昔に變る事なし」

**かしらふる間** 頭を振る間。極めて少しの間。釋迦如來誕生會四「人の仕事も引取つて、碗拭き膳拭き菜大根、洗ひ揃へも一人して、頭掉る間もなき中に」

**かす** 貸。廓詞。遊女に關して、遊女自身と客と揚屋と親方との間に用ひられる。約束に因りて或客に買はれて居り、又は、既に或客の相手となつてゐる遊女に、更に他の客の相手を一時的にさせるをいふ。尙、「かし」の條を見よ。

大矢數三「大臣が大の眼に角を入れ、來る筈知つてどこへ貸したぞ」。一代男五

合ふつはもの頭はりに逃足強く、一人も手に立つ者候はず」

合ふつはもの頭はりに逃足強く、一人も手に立つ者候はず」

合ふつはもの頭はりに逃足強く、一人も手に立つ者候はず」

合ふつはもの頭はりに逃足強く、一人も手に立つ者候はず」

「高崎様と呼び立つる（中略）、一時程のうち、七八度づつ貸す程に、さても繁昌の所ぞ、馴染の客数もあるかと下のぞけば」

**かず** 數。接頭語的に用ひる。數多くあるもの、ありふれた、上等でない品に附していふ。次の諸例を見よ。

**かずあふぎ** 數扇。胸算用四「惣じて年玉は何國にても軽い事に極りて、男は一奴に五十本づつの數扇」

**かずぐそく** 數具足。大矢數三「用心や春の光の數具足、採取たて銀本のかね」

**かずせつた** 數雪踏。一代男二「高崎足袋、つゝ短かに、かず雪踏をはき」

**かずちやうちん** 數提燈。好色盛衰記一「千本の木末に紋付の數提燈を吊らせ」

**かすながびつ** 數長櫃。一代男五「數長櫃をこしらへ、遊女參會入るほどの諸道具をいれて」

**かすはおり** 數羽織。大矢數三「其時天鷲絨染も定まらず、唯數羽織子持すち引」

**かすばんや** 數番屋。二代男八「揚屋町の闇、送男の長棒、土手の數番屋燈

か

火映りて」  
**かすまり** 數鞠。持統天皇歌軍法三「首は飛んで數鞠と、戦ふ吾こそ」

**かすもん** 數紋。一代男一「上には卵色の縮緬に、思ひ入の數紋」。大矢數四「月もよしよしゃく」とよしや風數紋付て袖の稻妻」

**かすやうじ** 數楊枝。一代男一「のべ紙に數楊枝見せかけ、髪は四つ折りにしどけなくつかねて」

**かすや** 數矢。吉野忠信一「御諒の數矢少々射かけ」

**かすやり** 數鏡。國性爺合職三「列卒の者がさいたる劍・かり針・數槍、手に當るを幸ひに投げつけ」

**かすの作** 春日の作。元正帝の頃の佛工の名手、河内國春日郡の住人春日の作つたもの。松風村雨東帶鑑一「いや是れ大黒は我寺に、傳教大師の作もあり、春日の作も安置せり」。好色盛衰記二「乗物蒲團一つ、春日の作の守観音一體、三人まへの辨當」

**かすきやく** 糟客。利益にならぬ客。金を持たぬ下の客。二枚繪草紙上「上の客が三十三人中の客が卅三人、拙者が様な見る影もない粕客がたつた一人」

**かすくげ** 糟公家。尊ぶに足らぬ公家。松風村雨東帶鑑三「脂搾つて搾り粕の粕公家にしてくれんと、左足を踏んで打つてかゝる」

**かすけ** 糟氣。粕客らしいけぶり。賀古教信七墓廻三「間夫というては大人氣なし。客というては粕氣なし、齋坊呼んだと思召し」

**かすむらひ** 糟侍。つまらぬ侍。武士を罵る詞。浦島年代記一「ヤア糟侍のねだり者」

**かすせつた** 數雪踏。「かず」の條を見よ。

**かすてつち** 糟丁稚。取るに足らぬ丁稚。奴僕を罵る詞。源氏烏帽子折一「金王とかや云ふ粕丁稚、臆病者の腰ぬけの人でなし」

**かすねぎ** 糟禰宜。最も下等の禰宜。つまらぬ禰宜。俗つれ、三「狸々の亂れこれ一番、外は此所の糟禰宜、吭（のど）を鳴らして讃めける聲のをかし」

**かすのかせん** 數の歌仙。三十六歌仙のこと。百目曾我五「其後頼朝公拜殿に立出で給ひ、數の歌仙を御らんにて」とあるは、三十六歌仙の額のことである。

**かすまり** 數鞠。「かず」の條を見よ。

**かすみに千鳥** 物事のかけ離れてゐて、

相應しないこと、又、とても相及ばないこと。譬。霞は高く空に、千鳥は低く河海の邊に棲むところからいふ。日本武尊吾妻鑑ニ「主有る人を戀ふこそ、雲にかけはし霞に千鳥といふべけれ」

かすむ 掠。目をくらます。欺く。松風村雨東帶鑑「上をかすむる證據に、若宮を奪ひ奏聞せんと」

かすや 數矢。「かす」の條を見よ。

かすやつこ 糟奴。奴を罵る詞。傾城反魂香上「數にも足らぬ糟奴」

かすやり 數槍。「かす」の條を見よ。

かすらす かする(掠)に、す(使役助動詞)の接續した語。ほのめかす。諷する。孕常盤「あれこそ本のくらがりの牛、鞍馬の牛とかすらす。常盤はそれぞと心付」。心中萬年草中「その人の名は言ひかねて、思ふあたりをかすらす」

かすりずみ かすれた筆蹟。嶺山姥ニ「叶はぬ戀も假名書筆、ひらりしやらりのかすり墨」

かすりて 掠手。かすりきず。微傷。かすりや 掠矢。かすつて通る矢。かすりきずを負はせる矢。

かすり井 大和の色町木辻の近在にあつた井の名であらう。二代男<sup>四</sup>「色町(本辻)より直ぐに誘はれ行くに、かすり井も朽葉に埋もれ。傾城反魂香中「木辻の町の三つ山と(中略)、この手彼の手の枕の酒、爰談と隔つれど、解くれば同じかすり井の」とは、酒のかす(糟)につれば同じ谷川の水(澤庵和尚の歌)を踏まへてあやなしたるもの。懷硯三「三笠山に朝日の出でしより、乾井(かすりむ)の水をむすびて、目を覺すなど」

かすわつば わつば(童)を罵る詞。

かすを 糟尾。白髮まじりの髮。ごましろあたま。

かせ 枷。連れとなるもの。伴侶。又、ほだし。邪魔に入るもの。懷硯ニ「辛きが爲は秋より永く、遠里に麥搗く歌を枷に嬉しく」。油地獄上「なう氣の通らぬ、これどうぞと、中へ小菊がかせに入リ」

かせ 杵。かせいと(杵絲)の略。つむ(鍾)でつむいだ絲をかけて巻く具を「かせ」といふ、その「かせ」からはづした絲のこと。懷硯<sup>四</sup>「お圍は木綿の杵といふものを繰りて渡世とするも」

かせかひ 前條の「かせいと」(杵車からはづした一束をいふ)を賣買する者。

かせくび 悴首。やせ首。ほそくび。吉野都女楠ニ「いふに甲斐なき此の高家がかせくび、義貞公のお手にかゝり申すこと」

風くふ 風喰ふ。「風を喰ふ」と同じ。様子聞き知る。それと悟る。松風村雨東帶鑑ニ「宵のうちに酒呑んで、風くはるゝな、覺られな。しづまれく往て休め」

かせじよたい 悴所帯。やせじよたい。貧しい生計。雙生岡田川<sup>三</sup>「あるか無きかのかせ所帯、妻は手づまの賃仕事」かせせたい 枷世帯。悴世帯。前條に同じ。二代男<sup>三</sup>「勤めの内よりも、かせ世帯の心懸、手桶・米櫃・杓子・菜刀、遅からぬ調へ物して」

風破窓を射て 風射ニ破窓ニ燈易滅、月穿ニ疎屋ニ夢難成(百聯抄解)。貧しい住居の様をいふ。釋迦如來誕生會<sup>四</sup>「風破窓を射て」

かせほうこう 枷奉公。或は悴奉公か。

かぜまつちん 風待亭。「かぜまつちん」

か。男色大鑑ニ「ある夕暮風待亭に前髪  
數多召寄せられ名所酒數重なり、御遊  
興の折から」。離れ座敷などの名と見え  
る。

風を喰ふ 様子を知る。それと感づく。

國性爺後日合職ニ「きやつ等が風を喰  
はぬうち、組みしたる百姓ども、片は  
しに搦め捕り」

かせんぶんげん 歌仙分限。京都の富者  
三十六人を數へて、三十六歌仙に擬し  
た稱。分限は分限者で財産家のこと。

置土産ニ「洛中廣きに歌仙分限ときま  
れて、三十六人の中にも、ひだり座の第  
一」。織留ニ「一代のうちに、七千貫目ま  
で體に有り銀、廣き都に三十六人の歌  
仙分限の内に入りぬ」

かぞへがるた 數加留多。「よみがるた」  
と同じであらう。「うんすんがるた」の  
簡單にされたもので、四十八枚のもの  
である。めくりがるた」とも稱する(厩  
博史)。大矢數ニ「其根みはかぞへ加留  
多の馬繫ぐ、いつそに燃えて火の錢と  
やら」。同四「計へ加留多馬繫ぐなど話  
寄り、夫さへあるに悪性の宿」

かだ なまけること。務をしなないこと。

出世景清ニ「おのれ大分の錢を取りな  
がら、かだをして働かず。晝夜用心記  
ニ「男女に限らず物に油斷するものを、  
賀多なる奴といふとかや」

かたいき 片行。片方へのみ行くこと。

金銭のあるところにあつて、ないこと  
ろにないこと。貧富の差の生ずること。  
かたゆき。出世瀧徳上「さても金は片い  
きな。有る所には有るものか」

かだいふぶし 嘉太夫節。宇治嘉太夫の  
創めた淨瑠璃節。加賀節。精進贈「藻  
鹽草供部屋によむ加太夫節(西長)」

かたいれぼうこう 肩入奉公。肩を持つ、  
即ち加擔する志を持つてする奉公。特  
に好意を以てする奉公。大矢數五「仕舞  
店賣手營摩立て、山里いかで肩入奉公」  
晝夜用心記ニ「都にも諸職人の手間取  
肩入奉公(中略)、女房常に留守をつと  
むる事めづらしからず」

肩が怒る 得意の様子をいふ。肩がひろ  
い。

肩がいきる 肩身が廣くなる。顔が立つ。  
夕霧阿波鳴渡中「これでこそ、女房の肩  
もいきるわいの」

かたかうびん 片髪鬢か、片小鬢か。辨

慶京土産ニ「牛若丸のかたかうびん成  
共刺りおとさねば」

かたかた 片方。片一方。油地獄上「辨當  
かたかたに、姉を手を引鬢局屋  
の七左衛門」

肩がつかへる 肩が凝る。肩が張る。重  
井筒中「ア、一昨日の煤掃に、たんと肩  
がつかへた。そろ／＼揉んでたもらぬ  
か」

かたかなの木の間 片假名のキは、礎柱  
に似てゐるので、礎刑に處せられるに  
いふ。五十年忌歌念佛上「いやでも應で  
も清十郎は、片假名の木の空で、此の  
様に手を廣げ」

かたがよい 運のよい意。かたは、肩で、  
肩に俱生神が宿つてゐて、人の運命を  
支配するといふ俗説がある。心中萬年  
草中「かたのよい者の仕合せ見よ。盃せ  
ぬばつかりで、二十八貫目拾うた」

肩があるい 運のわるい意。冥途飛脚中  
「ひよんな心にならんした。肩のわるい  
梅川様、いとしばいは川様お一人にと  
どめた」

かたぎん 片吟。俳諧の詞。二人で吟ず  
るのを兩吟といふ對していふのであら  
う。獨吟の類語。一人で吟ずること。

か

大句數上序「我つねぐ片吟し、詠草書にして三千六百句まですることあり」  
**かたぐ** 刀などを佩びる。心中二枚繪草紙上「なまなか咎めて一本かたげ耻かこより、ハテ彼方から見るなら、此方からも見て」

**かたぐち** 片口。片方のみの言ひ分。詠へごとなどにいふ。傾城反魂香中「斯様の愚蒙の返答は、申すも似合はぬことながら、片口の御裁斷如何にしてもかろくし」

**かたぐち** 肩口。かたさき(肩先)のこと。  
**かたぐま** 肩車。子供を肩に載せ(頸に跨がせて)、兩足を支へること。地方によつては「ちまくま」「てんくるま」などいふ。かたくるま。かたくび。蓋門松下「子供設けて二人が連れて、お乳がかたくまおてゝが日傘、肩で風切る山崎に」。油地獄上「姉が手を引乙はだく、中は父親肩くまにのり」  
**かたくま** 肩車枝。前條「かたくま」のやうに乗るよすがとする枝をいふのであらう。傾城反魂香上「天津少女のかたくま枝や、腰掛枝の三がい松、月にさはらぬ枝々の」

**かたけ** 片食。一日一回の食事。特に旅

宿に於てする、朝食か夕食かの一回をいふ。織留五「麻の上下中脇指一腰は、町人の面道具なれば、たとへ片食は喰はずとも身を離つ事なし」  
**かたこうびん** かたかうびん(片髮髷)。一代男四「其の方が片かうびん、いかにしても合點のいかぬ事」

**かたこびん** 片小髷。片方の髷のはし(端)。冥途飛脚中「片小髷刺りこぼされ」とは尿での制裁であるといふ。  
**かたささま** 方様。第二人称の敬語。遊女の詞。あなたさま。一代男「御姿、今かたさまに思ひ合せ、昔が思はるゝと語る」。好色盛衰記五「一旦は風呂屋勤め分に、方様のまゝになりました」

**かたざむらひ** 堅侍。物堅い侍。雪女五枝羽子板上「馬鹿慥勤のかたざむらひ」  
**かたし** 片。片方。かたはし(片端)の約か。永代藏「所務わけとて箸かたし散らさず」(一)一挺。大下馬「剃刀かたし見えける」

**かたじけあり** 辱なくあり。「かたじけなし」と同じ。置土産「斯かる殖生の小屋へ御立寄、かたじけありといふものぢや」。賀古教信七慕廻三「是れはかたじけ有馬山、いなの小笹の粽の節句」

**かたしほ** 片潮。湖の一方にのみ打續いて引くもの。最明寺殿百人上臈上「落潮、片潮、雙潮、女夫潮」  
**かたしめぬき** 片目貫。刀の目ぬきの、片方の作りが異なつたもの。或は單に目貫の片方のこと。五人女三「お家主殿の井戸替(中略)、さがし見るに、駒引錢、目鼻なしの裸人形、くだり手のかたし目貫、つきくの涎掛、さまゝの物こそあがれ」。織留三「口のうちより虎のかたし目貫を取出し」

**かたす** 肩す。駕籠昇が肩を入れるにいふ。壽門松中「先へ急ぐは駕籠の足、せめてかたして留めもせず」  
**肩裾結ぶ** ぼろ(襦袢)をまとも。乞食などの風にいふ。博多小女郎上「肩裾結び手を引いて、人の戸口にすがるとも」

**かたすぼる** 肩がすぼまる。肩がちまはる。氣がひける。博多小女郎上「柳町には来たれども、金銀なければ肩すぼり、おのれと心奥田屋の」  
**かたせくるし** 肩背苦し。肩背が苦しいほど心が臆する。博多小女郎下「今朝肌薄く行く道は、肩背苦しき身の行く」

**かたそぎ** 片削。神社の屋根の千木の端が、片面を削いだ形になつてゐるも



の。大矢數四「秀倉(ほこら)を立て一日仕事、片そぎもつい住吉と成りにけり」  
かただすけ 肩助。力になること。助力。  
油地獄上「随分稼いで親達の、肩助けと心願立てさんせ」

かたちぐ 片ちぐ。片ちんば。不揃ひなことにいふ。五十年忌歌念佛中「上著を脱げば右左、振と詰とのかたちぐに、片枝は審み片枝は開き初めたる花衣」  
かたつき 肩衝。茶家で用ひる茶入の一種。二代男五「銀二百枚の手水鉢も買つて、肩つき一つ百貫目の質に取つて」

かたつきぶん 片附分。片附けておく分。遠慮して小さくなつてゐればそれでよい者。吉野忠信「こゝは端近中の間へ、かたつきぶんとぞ忍ばせける」  
かたつきむぎ 片搗麥。かたつき(はまつき)の對、麥を水にひたして、始めにつくこと)にした麥。孕常盤三「貧女が一錢、手の内の片搗麥を御鉢にうけ」

かたて 堅手。物がたいこと。しつかりしたも。天網島上「至極かた手の侍大きに無興し」  
かたてうち 片手打。(片手で斬りかゝること。(かたておち(片手落)のこと。物事の處置の偏頗なこと。五十年忌歌

念佛中「在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打ちのなされやう」  
かたてがらみ 片手絡。兩人の片手が互に相からまること。  
かたてに 「がてに」と同じ。「難く」の意ある一種の否定の詞。その事の、なしとげられずにあるさま。一代男七「夜前の行燈消えがたてに、物さびたる」  
かたてもちり 片手振。片手でねぢること。

がたなし がたし(難し)と同じ。今宮心中「恐ろしなんども詮方なく、放れがたなく門口に」  
刀にそりを打つ 刀を抜く時、鞘の方を上方に反らせる。抜刀の準備をする。武道傳來記八「一寸も開らせぬがと、刀に反を打てば」

かたなめ 刀目。刀の入るところ。刀の切り目。松風村雨東帶鑑三「うぬめは脂がありさうな、刀目入れてくゝしあげ、脂搾つて」  
かたなや 刀屋。刀劍の柄・鞘などを拵へる家。刀の拵へをする家。又、刀を賣る家。二十不孝五「刀屋徳内といふ者の悻」

かたにづり 片荷ずり。積んだ荷物が一方に片寄りずれること。「片荷ずる」の名詞形。松風村雨東帶鑑三「擔ひくらべし鹽桶の、片荷づりなる我が思ひ」  
かたのよい 「肩がよい」と同じ。運のよい。

かたのり 堅海苔。北海・山陰地方に産する海藻。長さ三四寸で暗紫色を呈する。出世景清三「いつ青海苔もかたのりと、身のさがらめをなのりそや」  
かたのわるさ 肩の悪いこと。運のわるさ。「かたがわるい」の條参照。曾我會稽山三「男も女も曾我一家の、是程かたの悪さはと、包みかねたる涙のさま」

かたばち 片撥。太鼓の打方。片手で撥を打ちいれること。男色大鑑三「金春太夫が舞に清五郎が鼓、又右衛門が片撥、いづれか天下藝」  
かたはづく 不具となる。かたはに生れつく。松風村雨東帶鑑三「ハテ放火強盜したでもなし。かたはづく程ぶちはする。助けてやれ」

かたはな 片端。一方の端を擔ふこと。吉野都女楠五「是れそこな衆、さき肩でも後肩でも、いづれもよつて片はななされ、片はなは我等一人」  
かたはなあげる 片端をあげる。身代の

一部分を遊女などの爲に入れあげる、消費する。二枚繪草紙上「天満屋のお鳥に、ぐわらりと片端うちあげて」

かたびら 帷子。(地名)武藏國橋樞郡程ヶ谷の字名。

かたびらがつじ 帷子が辻。京都の西郊。上嵯峨・下嵯峨・太秦・廣澤・愛宕等の分岐點。大矢數二「嵯峨野の末を今朝見るらん、すあい呼んで爰帷子が辻とかや」

かたびんき 片便宜。片だより。大矢數一「都への傳手を尋ぬる片便宜、彦作が母死んだか生きたか」。傾城反魂香中

「娑婆の便りも片便宜、之も届かず」

かたびんそり 片鬚剃。刑の名。罪人の片鬚を剃り落すもの。「かたこびん」の條参照。

かたぶくろ 肩袋。肩にかける袋。最明寺殿百人上臈上「修行の肩に懸けたるは、優しき縞の肩袋」

かたみららみ 片身恨。片方の恨み。或は、互に恨みあふこと。かたうらみ。或

國性爺合戦五「片身恨みのないやうに、國性爺は首引抜かん、兩人は兩腕と、三方に立ちかゝり」

かたみぐさ 形見草。葵、菊、なでしこなどの異名。

かたみせ 片見世。棟割長屋(むねわりながや)などの一方の店。同じ建物で軒を分けた片方の店。一代男七「丹波口の小兵衛方に行けば、朝歸りの人待貌に、片見世あけて起き出づるより」。永代藏三「すぐにかた見世にある黒米五合手束木買うて歸る」

かたむくろ 堅い一方であること。片意地。偏屈。男色大鑑七「田舎侍のかたむくろなる人」。出世瀧徳上「新七とやらいふ手代、かたむくろにせいだうし」

かため 岡。約束など確かにすること。「夫婦のかため」、「かためごと」、「かためのさかづき」などを用ひる。大矢數四「かための血判烏が事は成次第」

かだめ 加太和布。紀伊國加太浦で産す和布。出世景清三「歌によまれしひじき藻や、かだめ甘海苔春もまた」

かたもの 横着もの。なまけもの。ずる奴。「かだ」の條参照。雙生隅田川四「旅の疲れの御惱みを、不精者よかだ者と」

かたやまはうきりう 片山伯耆流。片山久安の創めた劍法。特に居合の流をいふ。久安は慶長十五年後陽成天皇の詔を奉じて參内し、其の技を御覽に供し

て從五位下伯耆守に叙任された。武道傳來記六「居合は片山伯耆流」。かたやまりう。

かたゆき 片行。「かたいき」とおなじ。胸算用三「金銀程片行のする物は無い、何としてか銀に悪まりました」

かたりく 語句。語りぐさ。話しもの種。五人女五「すにはかゝるうつけも有るものかな、すゝゝの語句に、そいつめが面を一目みた。懐硯二「是れ末代の語句なれば、見せて給はれと」

かたりごと 騙事。詐偽。かたり。壽門松上「をばの祖母のといふかたりごとは、古い〜」

かたりはんぶん 語り半分。話し半分。話よりも事實の小さいこと。話の方がいつも誇張されること。二十不孝一「語り半分ともいふに、是は元日から人の寄る年を若うならしやりましたと嘘をつき初めて」

かたわく 方分。二つに分ける。左右に組みわけする時などにいふ。國性爺一「梅と櫻の造り枝、百人づつ方わけて振りかたげ」

かたわぐるま 片輪車。輪の一つの車。二十不孝四「甚七は片輪車を作りて、七

十に餘る老人を乗せて」  
かたをか 片岡。重井筒下「我を紺屋の片岡に何とか思ひ染川は」とあるのは、片岡仁左衛門のこと。仁左衛門は、もと藤川伊三郎といふ三味線引であつたが、中年に俳優となり、片岡と改めた。享保元年二月三日歿、年四十四。

かちひしや、歩行醫者。駕籠などの乗物を用ひず、歩行で病家へ行く醫者。永代藏六「人の語りけるは、歩行醫者ながら療治よくせらるゝとて引きあはされ」

かちおとす 妨げて失敗せしめる。邪魔を入れる。浦島年代記「人の願ひをかち落し、皇子のお迎ひ俄かに望む下心此方合點」

かぢくろし かたくるしの轉か。はじめで、窮屈なといふ程の意であらう。一代男五「よろづかぢくろしく、あたら夜もすがら新三十石に乗合の心地するなり」

かぢのは 梶の葉。七月七日の夜、歌など書きつけて織女星を祭るに用ひる。大下馬三「星を祭ると、梶の葉に歌を書きて湖に流し遊ぶ時」。二代男六「梶の葉に墨筆を手向け、女郎の身が稀に

逢ふ夜ならば悲しさ何程と」  
かちぼうこう 徒士奉公。かちしゆう(歩行衆)即ちお供や走卒としての奉公。

かちまくら 柁枕。柁を枕にして寝るといふ心から、船中に臥すこと、又、船の旅の意に用ひる。薩摩歌下「おまんは驚く柁枕、我身は元の我身に、覺めても覺めぬ夢心地」

かちめつけ 徒士日附。日附の下に在つて、監察・探偵を掌るもの。武道傳來記「徒士日附戸井市左衛門といふ者に下され」

蚊帳の祝儀 嫁入蚊帳を新調した祝。五十年忌歌念佛中「今日は蚊帳の祝儀とて、萌黄の生絹六布七布、屋の内祝ひ賑へども」

かちわかたう 徒若黨。徒歩で仕へる郎黨。冥途飛脚上「迎ひ飛脚を遣して、早速に持參せいと、徒若黨も刀の威光」

かちんぞめ 禍染。かちぞめ。濃紺の色に染めること。又、その物。一代男五「かちん染の布子に、黒綸子の二つわり前結びにして」  
かつう 且。かつ。萬文反古五「それは

御氣づまりにて、かつうは御なぐさみにならず」

かつかつ 渴々。うゑの甚だしいさま。二十不孝四「甚七いつとなく人の慈悲を受けかね、渴々になりぬ」

かづかぶる 被さるもの。かぶりもの。其のかぶるは、買ひかぶる、だまされるの意。かぶらせられたもの。萬文反古二「いかにしても風俗のよきにほだされ祝言致し候へば、思ひの外なる所あらはれ(中略)、さても大きなかづき物と、次第にうるさくなつて」

かづく 被く。頭に物をかぶる。轉じて、買ひかぶる。前條參照。俗つれゝゝ「殊更よく著こなして、あられなき顔をも色作りて、笠の下など見ては必ずかづくものなり」。五人女三「闇にても人はかしく、老いたる姿をかづかず」

がつくり 氣のゆるむさま。がつかり。薩摩歌下「此のやうに無事な顔見まいかと思つたに、妾やがつかりとなりました」

がつそう 元俗。總髮。男子の髪を、中割せずに全體はやして、頂で束ねて髻を作ること。山伏・醫師の髪風。なでつけ。そうがみ。戀八卦柱廊中「によつ

か

と出でたる糟尾の元僧、紙子の廣袖革柄の大脇指」

かつつく 附くを強めていふ語。

かつつくばふ つくばふ(躑)を強めていふ語。

かつて 勝手。勝手方。かちみ(勝手)。

成りがたし。我は最期を爰に極む」

かつてづく 勝手盡。勝手をつくすこと都合のよいこと。便利なこと。武道傳來記三「今の世の中はかうした事が勝手づく、女房がよいとて御身代の便にはなりませぬ」

かつてびやうぶ 勝手屏風。勝手もとて用ひる屏風。一代女六「奥の一間をかたよせて脣張の勝手屏風を引立て」

かつてんくび 合點首。がてんくび。木又は竹の串に、首ばかり附けた玩具の形。一代男六「衣類と頭とは各別に違ひ、合點頭の如し。是れ如何なる女房やらん」と

がつてんたり 合點したりといふにおなじ。わかつた。よめた。國性爺二「ムウ合點たり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな」釋迦如來誕生會四「ムムがつてん合點たり。天人もはや佛法

に懲り果て、今は供養をせざるよな」がつてんづく 合點盡。がてんづく。承知の上のこと。合點の結果。日本振袖始四「來年は誰が身の上であらうやら。合點づくでは渡されまい」

かつにのる 勝つに乗る。「戦勝に乗ずる」といふことから、轉じて「圖にのる」、「得意になる」「調子づく」などの意となる。一代男五「おどろく顔をすれば、なほかつにのる事有り」。武道傳來記一「勝つにのつて我が儘をふるまひ」

合羽のこはせをする 合羽の前を合せるに用ひるこはせを附ける。大下馬二「北野の片傍に、合羽のこはせをしてその目を送り、一生夢の如く草庵に獨住む男あり」

かつふつ 皆。全く。まるで。(下に否定的の述語が来る)。槍狩劍本地三「色事かつふつ不得手なり」

かつぶり 瓜割。和蘭から舶來した小形のナイフであるといふ。男色大鑑八「今は山王祭さへ血を見ずに神輿も渡らせ給ふ(中略)、まして色座敷へは瓜割も出ぬがよし。西瓜も勝手にて切り」

がつぼろどり 合法鳥(がつぼろどり)。くわくこう(郭公)のこと。ほととぎす

に似た渡鳥。夏季山地に棲む。よぶこどり。卯月潤色上「杜の小鳥川千鳥、合法鳥も聲さびて、早東雲も近付けば」

かつぼこ かつぶく。身體の肥えまるんだ恰好にいふ。「かつぼこ」とも訛る。曾我五人兄弟五「お手前は辯舌といひ、好いかつぼこにて、淺ましき過ぎはひを召さるゝは笑止千萬」

かつまもめん 勝間木綿。こつまもめん。勝間(攝津國東成郡勝間村か)といふ所から産する木綿織物。一代男五「勝間木綿の下帯ときかけながら」。男色大鑑七「勝間の里にて織りし下帯」

かつみやう 渴命。饑乏に迫ること。又、饑乏に迫つてゐる命。主家を失つた者の身上などにいふ。葦盤太平記「譜代のお主に今一度と、十餘年の渴命は草の根を食み木の實を拾ひ、水を呑んでも暮らせしに」

かつめい 渴命。前條に同じ。永代藏二「諸事をかねて貯(置き)し故に、渴命に及ばざりき」

かつやま 勝山。承應明暦の頃、江戸吉原の遊女勝山といふ大夫が結び創めた髪。かつやまふう。下から上へ有平糖のやうに曲げて筭を横さまにさし

に似た渡鳥。夏季山地に棲む。よぶこどり。卯月潤色上「杜の小鳥川千鳥、合法鳥も聲さびて、早東雲も近付けば」

出す結び方であ

る。かつやまわ  
げ。又、「かつや  
まむすび」とも  
いふ。

かつらおび 登

帯。(一)長い布で髪を鉢巻きし、前に結  
び下げる。こと。(二)能樂、舞曲などで登  
を用いるとき、額の上に締める帯、端  
を後に垂れる。新可笑記「玉牡丹の  
簪、白綾の鬘帶、紅粉は白皮をいろど  
り」



かつらかつら 笑ひ聲。「かんらかんら

などの類。傾城酒吞童子「保昌大聲あ  
げかつらかつらと笑ひ、やれ腹筋や腹  
の皮」

かづらぎ

葛城。遊女の名。(一)京島原に  
全盛を歌はれた太夫。好色由来揃「の鳥  
原名女揃「野風憎からず、石州かはゆ  
らし、葛城又いやならず」一代男「そ  
の頃名高き中にも、かづらぎ、かをる、  
三夕思ひ〜に身請して」。(二)大阪新町  
藤屋に勤めた太夫。好色盛衰記「大阪  
に勤めしふぢ屋の太夫葛城がすがりと  
いふ」。色道大鏡によれば、寛永二十年  
の生れで、十五で太夫になり、寛文三

か

年に二十一で死んだといふ。

桂木常世 女形俳優の名。葛城常世。今  
宮心中上「桂木常世は五のこじまよ、  
なせ〜、五のころころ〜抱寄せて  
手飼に愛らしや」

簡條す 起詩文などにいる〜の簡條書

きをする。二代男「女郎の迷惑がる誓  
紙をたくめといふ(中略)、思ふまゝに  
簡條させて」

がてんす 合點す。がつてんす。考へる。

考慮する。大下馬四「大かた其方も合點  
して見よ、この浅しき内助に、さやう  
の美人躰き申すべきや」

かどうたひ 門詰。人の門口に立ち、唄

を歌つて物乞ひすること。かどづけ(門  
附)の類語。武道傳來記六「せんかたな  
くて門詰、

編笠深く冠

り、連節に

小濱町を通

るを〜

かどじやうる

り 門淨瑠  
璃。人の家  
の前に立つ  
て三味線を



門 説 經

引き淨瑠璃を語つて金錢を乞ふもの。  
羽織を着し、一刀を指し、編笠をかぶ  
つて歩く。萬文反古二「門淨瑠璃に錢米  
をとらせ」

かどせつきやう 門説經。前條に同じ。

かどだち 門立。遊里の詞。遊女が門口  
に立ちいで人待ちがほな風情をするこ  
と。もんりふじぶん(門立時分)の條參  
照。大矢數「門立のもろこし様に續く  
ものは、初瀬の寺のかね持て來い。傾  
城反魂香上「高き名の松の門立立ちな  
れて、人待顔の暮れならん」

かどちや 門茶。門前で茶を煮て、往來

の人に施すこと。佛家で七月初旬から  
廿四日朝まで行ふ。攝待。五人女「や  
りてに門茶を燒かせて歌念佛を申し」

かどづめ 門詰。家の入口。しきる。丹

波與作中「懸けを取つてそれからは、門  
詰も踏ませまいと」

かどばしら 門柱。門の柱。特に店のか

どばしら。その店の構へを代表する柱。  
油地獄中「五間口・七間口の門柱の主人  
にと、念願を立ててこそ商人なれ」

かどび 門火。(一)葬禮の時、又は婚禮の

興入の送迎の時、門の邊で焚く火。嫁  
する女を送る時は、生きて返らぬ證

とするもので、門の右方で焚くとしてある。檜櫃三下「可愛やおさるゝが嫁入の時、まあ爰で門火を焚き、千秋萬歳と祝ひし其道具」(七月の精霊祭の迎へ火、送り火の總稱)。

かどまり 門鞠。懷視三「此里(伏見)も目の内の隙をかしく、問屋の門鞠を見てゐし時」

かとも言はず 如何かとも言はず。一言の見舞も言はない。宵庚申中「歸らんと云ふ嬉しさに、親の病ひをか共いはず」

かどやしき 通り道の曲り角にある屋敷。男色大鑑「角屋敷ばかり六ヶ所、大名がしの手形まで腹がはりの弟に譲り」

かどをえる 角をえる。目かどを立てる。目をいからせる。大矢数二「辨慶が大のまなこに角を入れ」。同三「大臣が大の眼に角を入れ、来る筈知つてどこへ貸したぞ」。武家義理物語六「鮫鞘の中脇指、常住反りをかへして目にかどをえられ」

かどん 河豚。ふぐの異名。松風村雨東帯鑑一「海中に鱈鮠といふ毒魚あり(中略)、我が朝の河豚なるべし」

かどんで かど(門出)とおなじ。源氏

十二段長生鳥臺五「佐藤庄司、御かどんでを取行ひ」

がな (助詞)。確かにそれとはいはず、獨り自ら判断してゐるやうな心持を現はすに用ひる。「さうでもあらうか」などの「でも」に當る。大職冠三「誰が家とも知らねども、折しも乳がはつた故、縁でがなこの通り」。夕霧阿波鳴渡上「定めて里に遣つたも偽り、捻ぢ殺してがな捨てつらん」

かなあんどん 金行燈。金屬製の行燈。一代男一「文月七日の口、一とせの埃に埋もれしかなあんどん油さし」

かながはら 金瓦。銅の瓦。曾我虎磨下「大峰山上本堂上葺の金瓦の奉加」

かながひ 金具。金・銀・銅・錫などを薄片としたもの、蒔繪に嵌入するに用ひる。

かなからうす 金唐臼。一種の唐臼であらう。置土産三「其身はわたさねの油屋に通ひ、かなからうすを踏みて、足手のだるき」

かなじやくし 金杓子。金屬製の杓子。萬文反古一「いつもかなじやくし遣ひ申候方へ」

かなつちせんべい 鐵槌煎餅。大阪天満

老松町にある店から賣出した名物、手燒のせんべい。

かなづちろん 鐵槌論。無理に疊みかけで来る論。雙生隅田川三「ひつしひつしと生木に釘打つ鐵槌論、相手も負けじと燒石に水掛論」

かなどこおろし 鐵床下。鍛冶のかなどこからおろしたての、まだ仕上げないもの。唐船噺今國性爺上「つくろひなく、諷ひなき、おのが氣成りの鐵床おろし」

かなひわき 俳諧の詞。「かるい脇」か。發句の意に従ひかなつた脇句を附けること、即ちいはゆる「心付」の脇のことか。二代男六「助といふ人、當座に、誰ぢや知れぬめつた彌七が雪の中、と發句をすれば、内より彌七、寒夜にようものぼり助四郎、とかなひ脇して」

かなぶち 鐵鞭。かなむち。長さ四五尺の鐵棒。室町時代、警衛の爲に走衆の携へたもの。傾城反魂香中「雜式鐵鞭引き鳴らし(中略)、召捕り來れとの御説、尋常に繩をかゝられよとぞ仰せける」

かなもりそうわ 金森宗和。茶人。飛彈高山の城主、可重の嫡男。名は重近(又は長近に作る)、從五位下に叙せられ飛

彈守と稱す。父に學んで茶法を善くした。明曆二年四月卒。かなもリリウ(金森流)は、可重を祖とする。永代藏ニ「茶の湯は金森宗和の流れを汲み」

かなもん 假名紋。形をくづした紋所。曾我五人兄弟第三「弓張月をかな紋にすかし鹿の子の亂れ星、千葉殿の御紋ぞかし」

かなやま 金山。金銀類を採掘する鑛山。非常な儲け口を意味する。一代女「かな山にかゝりて、思ひの外なる俄大盡となりて」

かなやまがたり 金山騙。前條「金山」のことに關係をつけて人をたばかる詐偽師。晝夜用心記五「金山がたり、材木山、新田開の下肝煎、店さがし、葦中間、家に鼠、國に賊、油斷することなかれ」

かなやませた い 金山世帯。あとさき見ずに奢侈なこと(俚言集覽)。

かなわ 金輪。物を煮る時、鍋を載せかけるもの。鐵製の輪に足を三つ附けたもの。ごとく。蟬丸「仇と情と怨念と、三つの鐵輪に燃ゆる火に」。大矢數三「化粧部屋金輪の足に火をともし」又、みつがなわ(三金輪)の略。

る。一代男ニ「萬づ手代にまかすれば、いつとなく我になつて、様といふ尻聲もなく」  
かによふ 互に讓る。兼の字を訓む。「かねあふ」の轉か。永代藏ニ「誰の彼のと兼ひあひ」  
かねあきびと 金商人。(砂金など賣買する人。(金銭を賣買する人。兩替をして歩く者。せにうり。せにや。武家義理物語「金商人ゆゑ殺されけるや(中略)、私事去々年しめ殺しにあへる錢屋なりしが」かねあきうど。  
かねあひ 兼合。曲合。つりあひ。標準。薩摩歌下「男はおまんを除けん」としけれども、せきにせきたる手も伸びて、見込の曲合外れけん、おまんが左の肩先より、前は乳房を袈裟がけに兩へさつと斬下げられ  
かねあふ 兼合。(つりあふ。平均する。(ゆづり合ふ。氣がねし合ふ。  
かねうり 金賣。「かねあきびと」に同じ。平常盤四「都三條金賣吉次信高の定宿と承る」  
かねおや 金親。資本主。金子もと。かねもと。萬文反古五「まづ今時の商賣、かね親うしろだてなくては」

かねがたき 金が敵。(諺)金錢が禍のもと。又、金錢の得がたいことにもいふ。大矢數三「最辰があつてあんな男を、縁組も銀が敵のうき世也」

かねきんさん 金經山。支那鎮江府城の西北七里の江中にある名山であるといふ。大矢數三「淨陽の江は水の雜水、夫杓子金經山の麓より」

かねごと 豫言。かねてから言ひおいたこと。約束ごと。ちぎり言。百日曾我「めいよな不思議や中戸の豫言がはや七月」

かねしやう 金性。五行の中の金を、人の生年月日等に配して定めた性。一代男三「金性ならば二十四の金か、我とは十違ひぞかし」

かねせき 金でせきとめること。金錢の力で相愛の仲をさまたげること。天網鳥中「もし金せきで親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよ」

かねたたき 鉦叩。鉦を叩いて經文などを唱へて、物を乞ひ歩く者。永代藏三「京の鉦たゝき、盂蘭盆の比勸進にまはりしが」  
かねづまり 金詰。金錢の融通のつかぬこと。金が逼迫(ひつぱく)してゐること。

か

と。重井筒上「手附銀が遣りたいが、世間共に銀詰り、彼の邊は利も高し」

金てかす氣 金を貯める氣。富をつくる氣象。米の朝日上「そこ〜氣のつく職人の、金てかす氣ぞ各別なる」

かねどころ 金所。金のある所。金銀の融通のきとところ。又、鑛山のある地。

大矢數一「千軒あれば友すぎの秋、置露や爰は山崎かね所」

かねのを 鐘の緒。神社にある鈴、又は鰯口などに附いてゐる綱或は布帛。吉野都女楠「本社末社のかねのをとも

に大旗小旗の尺に切り」

かねぶち 鐵鞭。かなむち。「かなぶち」に同じ。傾城反魂香上「十手八方鐵鞭

を、ぶち立て〜捻ぢふせて」

かね見ならふ 次條「銀見る」ことを習ふ。金銀の質のよしあしや、重量などを計り見ることを習ふ。錢見せ即ち兩替屋を営む修業をする。一代男「世を渡る男藝とて、兩替町に春日屋とて（中略）此もと〜銀見習ふためとて、つか

はし置きけるに」。大句數上「惡筆ながら御年はいくつ、智慧付やかね見習ひに喰通」

かね見る 銀見る。分銅の見方や、厘秤

（りんだめ）のつかひ方に慣れて、金銀の質量を見るをいふ。當時は金銀を秤にかけて計算（兩替）したのである。一代男「手づから十替盤をかんがへ、銀みる利發も、女は埒のあき難き事ありて、萬づ手代にまかすれば」

かねもち 銀持。金持。二代男「平城の袖籠に、よい衆、分限者、銀持とて、是に三つの分ちあり（中略）、金持といふは近代の仕合せ、米の騰りを請け、萬の買置き又は銀貸し、自身に帳面も改むるなるべし、十千貫目あればとて、是等を歷々の中に入れて交る事なし」

かねもと 金元。きんすもと（金子元）。資本主。一代女「狂言芝居のかねもとにて」

かねやく 兼約。かねて約束すること。前からの約定。大矢數五「明日の芝居は成た物月、兼約の振舞の露やう〜と」

かねわけ 金譯。金錢の支拂。二枚繪草紙中「兄とは格別、こんな金譯惡うする男でない」

かの裏 二代男「下に淺草竊に、かの裏を付けて、木綿の中入」

かのきし 彼岸。佛語「ひがんに同じ。大矢數一「思へば淨土の春にいかうか、

彼きしや尻に帆かけて東風あらし」。かのくに。

かのくらゐ 鹿の位。「かこひ」に同じ。好色盛衰記「色にあまれる紅葉と名を替へ、鹿の位に下り、程なくほのかといはれて」

かのこ 鹿子。「かのこしぼり」の略。白き粒を斑に染め出したしぼり模様。一代男「この茶小紋の引きかへし、かのこ縞子の後帯」

かのこもん 鹿子紋。花などを鹿の子の様にしぼり染めにしたもの。一代女「空色の昔小袖に、八重菊の鹿の子紋を散らし」。或は紋所を鹿の子のやうにしたもの。かのこもんどころ。

がのみ 我呑。我飲。酒などがぶ〜飲むこと。味はずにむやみに呑むこと。男色大鑑「其後は我呑あらはれ、酒に馴れたる君達さへ色あそびの色に出で」

吉野都女楠「初手一盃ばつ〜飲み、二盃目ははやがのみにて、三盃からが義理一遍」

かはいし 皮石。兩吟一日千句「皮石も二つにわる〜おもひ川、跡より戀のせむる大筒」とあるは、堅い石のことを「川石」とかはゆし「可愛」とにかけて言

かはいし 皮石。兩吟一日千句「皮石も二つにわる〜おもひ川、跡より戀のせむる大筒」とあるは、堅い石のことを「川石」とかはゆし「可愛」とにかけて言



つたか。

**がばがば** 液體の流れ出る擬聲語。博多小女郎下「駕籠早き上ぐれば、がば」と、駕籠から漏れて流るゝ血は」  
**皮か身か** 物の差別のわからぬ譬。「身か皮か」ともいふ。歌念佛上「えゝ、こなたは皮か身か合點がいかにぬと頼しかめ」

**かはきり** 皮切。(一)最初にすゑる灸。大矢數三「烟管へて灸の皮きり、信濃なる山の腰骨さすり寄り」。(二)物事の手はじめ。出世瀧徳上「勤め皮切こらへた故、憂き沙うんだは身のやいと」

**かはく** 「爲す」の代動詞的に用ひる卑語。何々してゐる、又は、何々のやうすをするなどの意。今宮心中上「おきさに心有る奴が、てんがうかはくに紛れない」。戀八卦柱脛上「どこにのらをはかくやら」。源氏冷泉節下「女房共は(中略)何處にのらをはかいてゐる」

**かはぐくみ** 皮で全部を作ること。曾我虎磨下「火の用心のためとて、皮ぐくみの胴服」  
**かはぐち** 皮のまゝ。皮ぐるみ。本朝三國誌「どうもならぬちまき様、いっそかはぐち賞貳と、腰をじつと抱きしめ」

かはくぢら

皮鯨。鯨の皮を食用とする時の稱。永代藏「皮鯨の吸物」。平家女護鳥三「鱈や、さし鯖、かは鯨」  
**かはごさ** 川御座。川御座船の略。河川用の屋形船。兩吟一日千句「霞を引いてのぼる川御座、夕雲提重箱にくみ合せ」。男色大鑑「川御座に太夫子の後髪見ゆると」

**かはしきん** かはせぎん(爲替銀)のこと。爲替取組みの爲に、支拂人又は引受人の支拂ふ金。かはせぎん。永代藏「かはし銀につまりて難義、俄に取りひろげたる棚も仕舞ひがたく自ら小前になりぬ」

**かはせ** 爲替。(一)互に取りかはすこと。かへこと。とりかへつこ。百日曾我「その契約に虎御前を助け候へば、お禮はかはせに仕る。此の爪返辨申す間、花野とやらんに返してたべ」  
**かはせぎん** 爲替銀。「かはしきん」を見よ。冥途飛脚上「江戸小舟町米問屋の爲替銀、添状は届いたが、銀はなぜ届きませぬ」

**かはせてがた** 爲替手形。爲替銀を支拂ふべき旨を記した證書。二代男三「兩三十兩の御内用申越され、懇の男、

爲替手形より恐ろしき世とはなりぬ」

**かはぞめ** 樺染。かばいろ(赤みある黄色)に染あること。その物。置土産「樺染の平帯、長柄のひとつぎし」  
**かはたけまる** 河武丸。一種の船の名。二代男三「河武丸といふ船に、八疊出の紋紗の蚊屋、乳縁緋緞子、四角の唐織、匂の玉なびかせ」

**かはたちつけ** 皮立付。革製のたちつけ(裁着袴)。「たちつけ」は半袴の類で、裾をくゞつて膝につけ、下に脚絆を穿く。織留三「大巾著さげて皮立付を着て」

**川立ちは川で果てる** (諺)得意なこと却て身を失ふ。「河童の河流れ」に同じ。「かはだち」は「河育ち」の意。吉野忠信「誠に河だちは河にて果る、首の強きは首ゆゑ果る」

**かはちがひ** 河内通。業平河内通といふ古淨瑠璃。業平が河内高安の女の許へ通つた伊勢物語の故事を作つたもの。井上播磨掾の語り物であつた。近松にも「井筒業平河内通」がある。永代藏「玉川千之丞女がたして、河内通ひの狂言一番を一日小判一兩に定め」  
**かはづか** 革柄。刀の柄の革製のもの。

武家義理物語六「革柄に蟹の目貫」  
かはづかけ 河津掛。相撲の手の名。片  
手を敵の首に、片足をその足に掛け、  
反りかへつて敵を倒す法。かはづ。曾  
我五人兄弟三「正しう河津が勝つたる  
故、今に傳へて河津掛けといふ相撲の  
手ありと、小姓共の語りしに」  
川中には立てども人中には立たれず  
(義) 世渡りの困難なことに譬へる。三  
世相三「ゆん手も他人、め手も他人。一  
いと申す譬の候ぞや」

川西の奴等 川は堀川であらうか。京都  
で、いはゆる中京より西方の場末に住  
んでゐる貧乏人の奴どもをいふ。胸算  
用三「この若い者ども見知れる人あり  
て、評判するを聞けば、内證知らぬ事、  
持川西の奴等なり」  
かはぶぎやう 川奉行。川に關する事件  
を處理する役人。川奉行所に詰めてお  
る。晝夜用心記六「代官所へ申上ぐれ  
ば、それは川奉行の支配なりとて取上  
げ給はず。さらばとて川奉行所へまゐ  
り」とは傾城の川流れの始末について  
叙してゐるのである。

かはぶくろ 革袋。革製の袋。特に財布  
のこと。織留「やう／＼仕舞うて嬉し  
やと革袋枕に、残る物とて悪銀ばかり  
十八匁」  
かはらう 河伯。かつば。かはつば。河  
童。河太郎。傾城掛物揃上「水海のばけ  
物」とは、河伯かはおそなどのわざなる  
を」  
かはらおに 川原鬼。「川原歌舞伎子」川  
原者」の類語。京四條河原にあつた芝  
居の俳優、殊にその若衆即ち藝子は、  
客の相手となつて金錢物品をまきあげ  
ることをもしたのでかく稱する。新小  
夜風物語上「此の客の長羽織を、川原鬼  
が取残せしは不思議なれ」  
かはらかぶきこ 川原歌舞伎子。歌舞伎  
役者。殊に若衆をいふ。前條参照。  
かはらがよひ 川原通。京四條河原へ通  
ふこと。芝居見に通ふのであるが、若  
衆を買ふのが目的である。胸算用三「毎  
日の河原通ひに、同じ著物に色も變ら  
ぬ羽織に」  
かはらぐ 「乾く」、「つやを失ふ」などの  
意か。男色大鑑「前髪は風にからは  
ぎ、ばら／＼鶏の崩れ」  
かはらげ 瓦毛。川原毛。馬の毛色。白  
に黄赤を帯び、背の黒いもの。雪女五  
枚羽子板下「夏は稍も青の駒、祭に加茂

の瓦毛や」  
かはらなげ 土器抄。土器を高く投げ、  
或は山上から谷間に投げつてその空に舞  
ひ翳るのを見てたのしむ遊び。京都で  
は高雄山や愛宕山でよくやることであ  
る。本朝三國誌「當山の一景かはらけ  
投げ」  
かはらもの 河原者。俳優。一代女六「四  
條の河原者、さる藝子あがりの人なり  
しが」。二代男四「當世界の河原者の風  
俗を寫して、中折の髪先、拭ひ白粉の地  
顔など見て」  
がばり 我張。我意を張り通すこと。  
かはりかが 變加賀。加賀節の調子をか  
へたもの。節や詞を普通よりかへて語  
り又は謠ふ加賀節。置土産三「つれ節の  
かはり加賀、(中略)よね狂ひの意氣地  
を語りて」  
かはりさんさ さんざぶし(散々節)の調  
子のかはつたもの。武道傳來記四「吉野  
がつれ歌、替りさんさの節も、色にう  
つりて」  
かはりちんつ ちんつといふ三味線の音  
の調子のかはつてゐること。轉じて、  
下例は唯調子のかはつた言葉つきをい  
ふ。油地獄上「かはりちんつの國訛り」

一説に「ちんつ」とは愛し合ふ男女連をいふと。

かはりばんしゆ 替番衆。勞役などを代り合つて勤める者達。武家の殿中又は營中に仕へて、雜務警衛などに當る「番衆」。又、それに代つて勤めるもの。萬文反古四「替り番衆にやとはれ、手前の路銀つかはぬやうにして御くだり待ち申候」

かはりふ 變斑。普通と異なつた斑。矢の羽などにいふ。曾我五人兄弟三「變り斑の野雁の矢」

かはりまがき 貞享元祿の頃流行した小唄「まがき」の、普通の調子と異なつたもの。「まがき」は、萬治中大阪新町の遊女「まがき」が唄ひ出したものであるといふ。歌詞は貞享二年刊の「大幣」に收めてある。二代男二「祝彌四郎がかりの、かはりまがきのつれ歌、永閑節の道行」

かはりをどり 變踊。普通とかはつた踊。平家女護島二「舞子、をどり子、腰元まじり、さまじくの變り踊」

かはん 加判。連判。連署。織留二「加判して貰へば五人組年寄に口をたれ」。戀八卦柱屏上「下立賣の居屋敷を、町衆の

加判で、おとし三十貫目の家質に入れたげな」

かはん 加番。本職に對する副の職。江戸幕府の職名としては、城番の副となつて、城の警備を掌るもの。武道傳來記二「まづ城下の口々に加番をつけられ」。最明寺殿百人上臈上「跡より加番として、佐々木十藏廣綱を遣はさん」

かはん 博奕の語。「よみがた」にいふことと見えるが、未詳。大職冠四「火をくわつ」とかき立て、加番見れども青もなく、上りも知らぬひらよみに」

かひあはせ 具合。遊戯の一。三百六十の蛤の貝殻を、地貝(ちがひ)出貝(だしがひ)の兩方に分ち、地貝の甲を上に向けて悉く席に並べ、これに出貝一つづつを出して合せ、多く合せたものを勝とする。武家義理物語四「氣ばらしに具合、歌がはる取に、花草のまじはりよろづにかしこく」。かひおほひ。

かひがかり 買懸。かけがひ。現金拂ひでなく品物を買ふこと。冥途飛脚中「いづぞや締めた帳面、買懸りの借錢」

かひがかる 前條の動詞。かけ買ひする。二代男三「紋羽二重」疋、多分買懸つておこしたであらう」

かひかけ 「かひがかり」に同じ。二十不孝二「此の仕合せなれば買ひかけ濟ますべきやうもなく」

かひかづく 買被く。買ひかぶる。つまらぬ買ひかたをする。胸袋用二「棺桶一つ椀屋にまかせ、買ひかづきて今に心残りなり」

かひげ 匙筥。柄杓に似て、少し淺いもの。浦島年代記三「此の口の二つある金のかひげでお酌することか」

かひだて 飼立。子飼ひにすること。幼時から養ひ育てること。米の朝日上「さりとては旦那殿、舊功なしたかひだてを、可愛が定か、憎いが定か」

かびたん 加比丹。甲必丹。和蘭舶來の一種の縞織物の名。二代男二「木綿の中入、上にかびたんの玉子色なるを引返しに」

かひづめ 支へ。物の隙間などを作る爲めに用ひるもの。つつかひ。二十不孝二「長持の蓋開けて(中略)、片隅に木枕をかひづめにして」

かひな引 腕引。腕に刀を引きあて、血を出して誓ふこと。色道大鏡に「貫肉とは肘にても股にても、刃の先にかけて、肉むら突貫く事也。是は衆道に

か

おいて、奴などのすべき働なれば、當道の心中にあるべき事ならねど、古今稀にもある事なれば」とある。曾我虎磨上「心中見たいゆび切か、かひな引か入ばくろか、此きせるのやきがねかと一もんじにもつてかゝる」

**かひのみと** 貝御殿。龍宮殿の異稱。

かひのみやこ(貝都)ともいふ。

**かひものやくにん** 買物役人。武家で、臺所賄方などに用ひる品物を買入れる役人。かひものつかひ(買物使)ともいふ。晝夜用心記「買物役人と見ゆる侍中間に革袋を持たせ」

**かびらげだう** 迦毗羅外道。印度で釋尊以前に行はれたといふ教への一。迦毗羅仙人が始めたといふ。

**かびらてん** 迦毗羅天。古く印度で、世俗の福德を掌つた神であるといふ。かびらせんにん。前條參照。

**かひろん** 買論。物を買ふについての議論。壽門松上「昇夫揚屋の付届、初紋日の買論も、わしが獨りの胸算用」。「遊女の買論」(西鶴)

**かひをけ** 貝桶。貝合(かひあはせ)の貝を入れる桶。嫁入調度の一としてよく携へて行つたもの。二代男四「いづれ嫁

取りて(中略)、貝桶渡し、奉公雑の置き所」。傾城反魂香「嫁の手道具、御厨子鏡臺うちみだれ箱、葛籠貝桶挾箱」  
**かびんしやらてう** 迦頻羅羅鳥。雉子のことであるといふ。釋迦如來誕生會「彼の茅原にほろろうつ迦頻羅羅鳥があさりして」

**甲が舍利になる** 甲は「よろひ」と訓じて、かたいものを意味する。舍利はもと梵語で骨のこと。甲のやうな堅い物が骨となるといふ意(なにはみやげ)。物の變化の著しいことの譬と見える。或は甲は外がはにあるもの、骨は内部にあるものゆゑ、かく譬へるか。薩摩歌下「首は首、胴は胴、甲が舍利になるとも、親の手へは渡すまい」

**かぶきこ** 歌舞伎子。歌舞伎芝居の俳優、特に若衆のこと。少年俳優。役者の養つておく藝子。舞臺子。芝居子。虎溪橋「前髪を廿斗の山おろし、麓にかぶき子かへさせたまへ」。新小夜風物語上「向後歌舞伎子狂ひ止めに遊ばせ」

**かぶきもの** 歌舞伎者。冠氣者。嬉遊笑覽に「世の中に誤ひ媚びるものをかぶき者といひ、かぶき廻るなどともいへり。その後容貌のみつくるひて實なき

やうのことをうはかぶきともいへり」とある。要するに、華美輕佻なもの、又、好色な者はいふ。一代男五「昔は博多小女郎と申して、冠氣者ありけり」。一代女二「世のはやり事を習ひに、すぐれて踊る事を得たれば(中略)此道のかぶき者となり」。武家義理物語四「此程の遊女は、昔の如くかぶき者にはあらず、まづしき親の渡世のたよりに身を賣られて」

**かぶすべ** 蚊燻。かやり(蚊遣)のこと。かいぶし。椀久「世物語下「物の淋しき夕は、蚊ふすべの鋸屑賣、あしたは日貸しの錢取り」

**かぶに着る** 甲に着る。笠に着る。權勢ある者を後援者として人を侮る。己の施した恩を手柄に人におごる。傾城反魂香上「威をふるふ其山三めを甲にきて、のさばりまはる四郎二郎」

**株の家** 株(かぶ)とは、賣買した役目又は名跡或は家格の意。それを有する家。格式ある家。戀八卦柱曆上「それでも昔の株の家」

**かぶら** 蕪青。遊廓の語。初心者の稱であるといふ。

**かぶら** 蕪口鼻。人置のかか(女將)

かぶら

かぶら

か

の類語であらう。二代男八「十一歳より  
禿に仕立てられ、末は太夫にと謂はれ  
しに、燕口鼻より、火事の夜烟の吹る  
風雲の空より、すぐれて鼻の高く羽の  
生えたる人に抓まれ」  
かぶりする間 極めて少しの間。榮花唱  
二「髮振(かぶり)する間に吉原に通ひ  
舟」

かぶりのいた 冠板。かむりのいた。鑑  
の袖、梅檀板(せんだんのいた)、又は  
小手の最も上の板。文武五人男五「鍬形  
高く打つてつけ、間の金物、かぶりの  
板」

かぶりよく 合力。補助。寄附。金銀物  
品の施與。一代男三「とりなり、着物を  
も合力して、たのもしき事あり」。永代  
藏三「拔參りの者に御合力と御伊勢様  
を賣りて」

かぶる 噛んで喰ふ。かじる。二十不孝  
五「親仁はやうく一口かぶりて跡は  
捨てられし」  
かぶる 被る。買ひかぶる。だまされる。  
罪や過を負はされる。胸算用三「玉蟲色  
の羽織は、牛涎屋(にかはや)を何處の  
牛の骨やら知らないで、人のかぶる衣装  
つき」

かぶろ 禿。遊女に仕へる童女。遊女に  
に仕込む

べき子飼  
の少女。  
かむる。  
百日曾我  
一「遣手  
かぶる花  
街中」



るぶか

かぶろざや 禿鞘。槍の鞘の一種。圓く  
て飾りのないもの。禿の形をしてゐる  
もの。堀川波鼓申「天日ざやにかぶろざ  
や、ふれ〜ふれや」

かぶろだち 禿立。色道大鑑に「禿立と  
は傾城の性を譽めていふこと也。出世  
以前、禿にて先輩に仕へ、道をわかま  
へ知りたるといふこと也」とある。「か  
ぶろ」から仕立てた遊女。傾城反魂香  
下「とんと坐りし居住たまは、禿だち見  
る如くなり」。又、禿あたまの年頃のこ  
と。男色大鑑「三枝歌仙がかぶろだち」

かぶろまつ 禿松。葉の少ない松。又、  
笠のやうな(禿のやうな)形の松。冥途  
飛脚下「夜半の嵐に呼ばれては、こたふ  
る野邊の禿松」

かへかたびら 替帷子。取りかへて着る

帷子。豫備の帷子。二代男三「高蒔繪の  
書棚を飾り、替帷子の數を見せかけ」

かへが 替替。取りかへ。交換。狍狩  
劍本地「先づ此の乗物と替へがへす  
れば、兩方よしの兩徳」  
かへことば 代詞。あひことば。符牒の  
語。男色大鑑「代銀三枚あげしかへこ  
とばなり」

かへざうり 替草履。穿きかへの草履。  
二代男三「生平(きひら)の羽織、飛びさ  
やの下帯、替草履まで氣つけて」  
かへしぬひ 返縫。縫ひ終りの處から、  
もとの方へ二針三針返し縫ふこと。又、  
一縫毎に半針づつほど後へ返して縫ふ  
こと。かへしぱり。薩摩歌中「縫物に言  
よせて、問へば答へも返し縫ひ、心通  
はず端縫ひの」

かべに馬(謔) 物事の唐突であること。  
又、無理にせき込んで事に當る譬。女  
腹切中「壁に馬乗りかけては、明くべき  
埒も明かぬもの」。背庚申上「只今の殿  
様前代と違ひ、何かにつて輕いお身  
持、壁に馬乗りかけし今日の御成」。唐  
劉禹錫文「其難如頻策、驚進壁面」

壁に茶壺(謔) 身持した女の形容。娘  
歌加留多三「剩へてつばらは、かべに

ちやつぽとやら、今になつてお暇下さ  
れとや」

**かへめしつき** 替飯繼。かはり飯櫃。或

は、かはりの飯を椀に盛りつぐこと。宵  
庚申上「思ひ〜に給仕の作法、お汁が  
かはるかへ飯繼、初献の肴は鮓の足」  
**かへよぎ** 替夜着。かはりの夜着。一代  
男七「更過ぎて床とるにも、二つ蒲團替  
夜着」

**顔振る** 顔をそむける。出世瀧徳上「佛へ  
言ひ譯何とせう。お墓所へ參つても、  
顔振りて戒名を碑に拜みも致されず」

**顔振る間** 極めて少しの間。「かぶりする  
間」といふに同じ。曾我會稽山四「雨さ  
へ降らねばお立ちは今宵八つ立ちと  
や、顔振るまもある事か」

**かほみせ** 顔見世。①初めて人々に顔を  
見せること。②かほみせ芝居の略。毎  
年十一月に、歌舞伎役者や操人形師な  
どが、座を入替へ總出で観客に見える  
風があつた。その時の芝居をいふ。顔  
見世狂言。俗つれ〜五「此のたびの  
顔みせ、都に花を降らせんと、一筋に  
思ひ入り」。重井筒上「なんと顔見世見  
やつたか、札買やる錢遣らうか」

**かほみせじやうるり** 顔見世狂言の淨瑠  
璃。

**かほよばな** 顔世花。貌佳き花。「ひるが  
ほ」又は「かきつばた」の異名とする。  
美人に譬へる。曾根崎心中「十八九な  
顔世花、今咲き出しの初花に」

**かま** 鎌。根性の曲つてゐる者に譬へる。  
油地獄下「サア母のかまがわせた。何い  
はるゝとくるゝの穴、耳を付けてぞ聞  
きむたる」

**かまおやち** 鎌親仁。意地のわるい親仁。  
生玉心中「そこらを詰らぬ鎌親仁(中  
略)おきはと女夫になる迄門詰踏まさ  
ぬと、打たぬ許りの首尾なれば」

**かまがみ** 竈神。竈を守る神。古事記に  
いふ奥津日子神・奥津比賣命の二神を  
祀る。後世、俗に三寶荒神ともいふ。  
一代男三「あらおもしろの竈神や、おか  
まの前に松うゑてと、すゞしめの鈴を  
ならして縣御子來れり」

**鎌倉新藏** (人名) 鼻の低かつた俳優と  
見える。男色大鑑八「鼻は人の面の山な  
り」と古詞に傳へし(中略)。二つどりに  
は低きより高いに徳の有るべし。鎌倉  
新藏も童戯(どうげ)なればこそ人も見  
ゆるせ」

**かまくらやう** 鎌倉様。鎌倉武士及びそ  
の婦女等のする風。曾我虎磨上「鎌倉や  
うの掴みざし」。

**かまして呑む** 喰ませて呑む。魚に餌を  
喰ませておいて、その魚を呑むの意か。  
好餌を與へて人を謀る。百日曾我二「コ  
レヤ此の海野は手もおろさず、かませ  
てのんだる大手がら」

**かませんにん** 蝦蟇仙人。支那列仙傳中  
の一人。蝦蟇を頭に載せ、之を使つて  
妖術を行ふといふ。蝦蟇仙。

**かまどしやうぐん** 竈將軍。家内の大將  
軍、即ち家政に勢力を振ふ妻の稱。永  
代藏四「我夫婦よりはたらき出し、今七  
十五人の竈將軍、大屋敷願ひの儘に」。  
暎天下。

**かまどやく** 竈役。一家を立ててゐる者  
の義務。世帯主の賦役。五人女二「横町  
うら借家まで竈役にかゝつて、お家主  
殿の井戸替けふ殊にめづらし」

**かまぬりよし** 竈塗よし。竈を塗るには  
吉日を選んではるのでいふ。懸八卦柱  
曆下「紅蓮の井戸掘り焦熱の、地獄の竈  
ぬりよしなやと、急がぬ道を」

**かまばらひ** 竈拂(被)。毎月晦日に巫女  
が来て竈を被つて祭ること。又、その  
巫女。これが「一種の私娼の勤めもした」。

の婦女等のする風。曾我虎磨上「鎌倉や  
うの掴みざし」。

か

男色大鑑二「竈拂の神子、男ばかりの家を心懸くる。」

かまひ構。かまふこと。關係。かまひしつか。支障。刑の名。つひはう

(追放)罪の輕重によつて範圍を定め、その居住の地を追はれる。丹波與作上「奉公構ひ御改易其時母も一所に退けば」

かまひげ 鎌髭。鎌の形にはね上つた髭。奴などのよく生やしたもの。

かまひげやつこ 鎌髭奴。鎌髭を生やした奴。薩摩歌上「これく前な絲鬢の、鬢かりつけた鎌髭奴、今迄は何處に居て」

かまへて (副詞)。必ず。決して。心して。二代男三「かまへて疑ひたまふな」

がまんぐち 我慢口。我意を張つた口のきき方。出世景清四「和御前がやうなる我慢口の猿智慧を、獅子身中の蟲にたとへて」

がまんもの 我慢者。おごり高ぶり、我意を通ず者。わがまま者。槍權三上「我慢者の伴之丞、ハア、眞の臺子易い事(中略)、何でもない事。色々我等存じてゐる」

かみ上。おかみ。人の妻の稱。女腹切

上「下の町の酒屋のかみ」。一代男四「あのうちに上ひとり、様もまぎれて御入のよし」とあるは、「奥方」といふほどの敬稱であらう。

かみおき 髮置。小兒の始めて頭髪を著へる祝。公家は二歳、武家は三歳、民間でも三歳の時、多くは十一月十五日に行ふ。古くは白髪をかぶせ、白粉を頂に附け、櫛で左右の鬢を三度かくのを例としたといふ。一代男一「てうちく、髮振のあたまも定り、四つの年の霜月は、髮置はかま着の春も過ぎて」

かみおくり 神送。陰曆十月朔日、全國八百萬の神が出雲へ旅立ち給ふと傳へられるが、それを送ること。去來句「布子着て寂しき顔や神送」。俳句では、神の旅、神の留守などいふ。

神送の空 前條「神送といふ頃の空。神無月の時雨の空といふ心であらう。男色大鑑三「折ふし神送の空恐れげに。色の雲さわだて、雨はやさしく風はあ

らけなく、落葉は肩を埋みて」。神歸りの時のやうに天候が荒れると見える。その條参照。

かみおろし 神降。(神靈の御降下を祈ること。冥助を祈ること。冥途飛脚上

「胸に願立て神おろし、狂氣の如く氣を採みしが」。(起請文などで祈願する神の名を記したところ。一代男四「世之介四人の女に書かせたる起請散々に切り破り有りける、されども神おろしの處々は残りける」(白口寄せの神子(巫女)が神靈を身に憑らしめること。卯月紅葉上「神子は合掌目を塞ぎ、珠数をくりひく梓弓、神おろして寄せにける」

かみかしら 髮頭。かみ(髮)と同じ。永代藏三「毎日髪かしらも自ら梳きて」

かみが堅い 「かみ」は頭又は首で、それが堅いのは、健康であると信ぜられる。孕常盤三「上つ方の和子様は、悲しいこととありたけを揃へて祝へば、かみが堅い」

かみがへり 神歸。出雲へ集つておはす神々が、本國に歸り給ふこと。かみおくり「今宵けしからぬ風は、霜月朔日なれば諸國の神歸りの荒れなるべし」

かみぎぬ 紙衣。紙製の衣服。かみこ(紙子)に同じ。尙、その條を見よ。萬文反古五「山居も殊更松風紙衣を通し」

髪斬る 遊女が誓約の證に髪を斬ることをいふ。一代男六「段々わけあつて、藤

なみにきらせたる髪と爪なり。壽門松上「上林の高橋に、金遣うて、髪切らせた」

**かみこ** 紙子。厚い白紙に柿澁を数回塗

つて日に乾した後、一夜露にさらして揉み柔らげて製した衣服。澁を用ひないのを白紙子といふ。近代世談「元は律僧これを著す也。女の手をふれずしてなすものなれば也。寒氣を防ぐ服とす」。大下馬「何れも紙子の袖を連ね、時ならぬ一重羽織」

**かみころうり** 紙子賣。紙子を賣り歩く者。

後は見世棚で賣つたものであるが、元文寛保の頃までは、行商したのであらうといふ。俳諧集「夕紅(元祿十年刻)に、花叡の句「仙臺の淨瑠璃開かん紙子賣」とある(用捨箱)

**紙子着て川へはまる** (諺)。無謀なことの譬。「紙子着て川立ち」ともいふ。油

地獄下「紙子着て川へはまらうが、油塗つて火にくばらうが、うぬが三昧」

**紙子臭い** きなくさい。紙や布の火に煙

の匂ひをいふ。恭盤太平記「やいゝ岡平、火の廻り氣を付けよ、紙子臭い」  
**紙子四十八枚** 紙子は四十八枚の紙で作るのでいふ。即ち胴の前後に二十枚、

左右の袖に四枚、それに各裏がつくので四十八枚。兩吟一日千句「身は紙子四十八枚あはれなり、彌陀の願ひにもれぬ牢人」。織留「身上は紙子四十八枚ばら」となつて」

**かみこぞめ** 紙子染。紙子を染めること。

重井筒上「京の吉岡紙子染め、やぼてりがきか、うすがきか」

**かみこづきん** 紙子頭巾。紙子を作るに

用ひる紙で作つた頭巾。二十不孝門「甚七源七紙子頭巾を被り、棒組の口を揃へ、御厄拂に出でける」。胸算用「紙子頭巾深々と被り、山椒の粉胡椒の粉を賣り廻りて」

**紙子の火打** 火打(ひうち)とは、紙子の脇下の袖を付ける處にあてた三角形の紙をいふ。夕霧阿波鳴渡上「冬編笠も垢張りて、紙衣の火打、膝の皿、風吹き

凌ぐ忍ぶ草」

**かみこの廣袖** 紙子の袖の袂のないもの。俗にいふ「どてら」の形した紙子。

戀八卦柱曆中「によつと出でたる糟尾の元僧、紙子の廣袖、革柄の大脇指」

**かみこばおり** 紙子羽織。紙子紙で作つた羽織。一代男六「世之介、初雪のあし

た、紙子羽織に、了佐極めの手鑑」

**かみごま** 上駒。三味線の響をよくするために、棹の先端に寄つた方につける駒。金屬製又は竹製のもの。軀山姥「絲は昔にかはらねと(中略)、親のばち駒、かみ駒の音色優しく弾きなせり」

**紙子浪人** 紙子を着てゐるやうな、貧しい浪人。胸算用「其隣はむつかしき紙子浪人、武具馬具年久しく賣喰ひにして」

**かみさかづき** 紙盃。紙製の盃。二代男

六「さる格子には、紙盃に割竹を傳はせ、酒買はずなど」

**かみさかやき** 髪月代。髪を結び、月代

を剃ることなどをいふ。薩摩歌上「お小姓方の奉公は、髪さかやきにお好みある」

**かみさま** 上様。(一)貴人の妻。後室。一

代男上「後室模様のきる物(中略)かの衣類を着せて寝させ置き、去るかみ様と申しなして」(二)主人の母。御隠居。

今宮心中上「隠居の貞法七十三眼鏡い

らず杖つかず、齒は一枚も抜目なき、男勝りのかみ様にて」。同「どうでかみ様、おゑ様の、御口を借らねばまらぬこと」

**かみしだく** 噛みくだく。かみつぶす。



か

唐船断今國姓爺上「大人參擲んで口に  
入れ、噛みしだき、噛みしだき」  
上する かみ(奥向き)の勤をする。榮花  
咄三「必ず笑ふなと上する女房どもに  
もよく〜仕組み」。出世瀧徳上「時に  
揚屋の上する女子下男」。一代女二「上  
する男お床は二階へと呼立つれば」

かみだいどころ 上臺所。貴族の家の奥  
むきで、食物を調へる臺所(下臺所の  
對)。武道傳來記「下臺所には朝飯を  
炊き、上臺所には女あまたの慰み業に  
や、はや乾餅を取散らし」

かみたうじん 上唐人。上方の唐物商人  
のことか。或は上方の毛唐人、即ち、  
よく素性のわからぬ上方の人といふ意  
であらう。博多小女郎上「表の間借切つ  
た上唐人、船頭が名染、筑前迄乗せな  
けりやならぬといふ」

髪垂るる祝言 かみたれ(髪垂)の祝儀。  
小兒生後六日に産毛(うぶげ)を剃る、  
その祝ひ。うぶぞり。「切る」を思ふで  
「垂る」といふ。男色大鑑七「男子産出  
して、今日六日として親類集り、はじめ  
て髪垂るる祝言」  
かみづる 上づる。のぼせあがる。槍權  
三上「伴之丞も氣は上づり、柑はお留守

を念かけて」。うはずる。  
かみどひや 上問屋。普通よりすぐれて、  
手廣く營業する問屋。一代女五「萬寶帳  
難波の浦は、日本第一の大湊にして諸  
國の商人爰に集りぬ。上問屋下問屋數  
を知らず」。榮花咄「伊勢屋といへる  
上問屋、何れ長者に似たり」

かみなが 髪長。もと、そう(僧)の異稱  
で、齋宮の忌詞とされたが、後には、  
髪長いもの、即ち婦人の稱となつた。  
一代男三「備後の國、鞆といふ所にあが  
り、名に開きし花鳥・八鳥・花川とい  
へる髪長を定めもあへず、そこ〜寢  
て」。五人女五「明暮若道に身をなし、  
よわ〜としたる髪長のたはぶれ、一  
生知らずして」

かみのかたい かみ(頭又は首)の堅いと  
は、人に就いては壯健又のをいひ、物  
に就いては手丈夫な、長もちのするこ  
とにいふ。萬文反古三「是も本國寺てき  
の下のつや鹿子は、十二の内に六百  
四五十日の違ひあり(中略)、結句かみ  
のかたい物に候」。永代藏五「是はかみ  
の固き着物かな、此十七八年も冬中は  
人の藏にあつて、爰へもどりて正月を  
する事めでたいと」

神の綱 神の冥誼。賀古教信七慕廻。「神  
變奇瑞の善の綱、神の綱、佛の綱」  
神の松 正月に神棚などへ飾る松。新小  
夜嵐物語上「拾友揃へば神の松山草ま  
で買ふといふもあり」

神の留守 陰曆十月、諸國の神々が出雲  
に旅立ち給うて留守であること。「かみ  
おくり」の條參照。大矢數二「親方懸り  
は神の留守の間、性がわるい雲となり  
ては風となり」。一代男三「世之介二十  
七の十月、神のお留守きく人もなきぞ  
と、さま〜くどきて」

神は九善 諺に「王は十善、神は九善」と  
いふ。戀八卦柱曆下「王は十善、神は九  
ぜん、よろづやす〜浦安の」  
かみばた 上機。麻や袖を織るに用ひる  
はた。下機の對。俗つれ。三「生駒屋  
の傳六とて、下女に上機織らせ、麻布  
の細手をやう〜に仕出し」

かみばな 紙花。紙纏頭。遊廓などで客  
が白紙のみ包んで出す祝儀の心付。後  
に現金と代へるもの。雪女五枚羽子板  
上「三年前の紙纏頭、空纏頭、捨てたふ  
るがけ」。夕霧阿波鳴渡上「一つ飲みや  
れ肴せんと、ひらり紙花七九寸、木枕  
に打敷いて」

**神は見通し** 神は如何なる隠れたことでも、照覽せられる。卯月紅葉上「神は見

とほし、言はずとも心の底の只一つ」  
**かみばやし** 上林。京都烏原の遊女屋の名。色竹蘭曲集の「名古屋山三郎」に

「此の里に、上林道順とて、道ならぬ業なれども、あまたの女郎抱へ置き」(日本歌謡史所引)一代女「烏原の上林といへるに身を賣り、思ひ寄らざる勤めの姿」。一代男「今の太夫まさりて、上林の風をぞ吹かし侍る」。傾城反魂香中「今は六條三筋町、上林が内みやと云ふ流れの身」

**かみむかへ** 神迎。陰曆十月の晦日、出雲の大神から歸ります神を迎へる祭事。「神送」の對。「神歸」の條參照。猿蓑集の洒堂句「神迎へ水口たちが馬の鈴」

**かみやしき** 上屋敷。武家で主人が常にゐる邸宅。(中屋敷・下屋敷に對する)。吉野都女楠四「又後程見廻らんと、上屋敷へぞ歸りける」。高

**紙屋の宿** (地名)。高野山不動坂口の一宿。今「神谷」と書く。萬年草上「おれが親は、紙屋の宿で隠れもない雜賀屋の與治右衛門」

**かみをんな** 上女。奥向の用を勤める女。「上する女」といふに同じ。一代女五「家に勤めし上女の品定め」

**がむしや** 我武者。血氣にはやること。その人。曾我虎磨中「口も心もさかしく、我武者な上に氣も早く」

**がむしやもの** 我武者者。がむしやなものがむしやもの。猪武者。國性爺「中にも剛健といふがむしや者」

**かむつけの紙合羽** 懷硯「袈裟や浪人の有様(中略)鎌倉の繪圖の破れ、稽古乗の木馬、神付(かむつけ)の紙合羽、塗下駄」

**かむろ** かぶろ(禿)におなじ。一代男「所のならひとて禿(かむろ)もなく、女郎の手づから棚鋸の取りまはし」

**かめがね** 龜鉦。かたいやうな音のする鉦といふことか。諺に「龜の看經」と言つて、看經の拍子を、音のかたい鉦を打つに譬へるが、その諺に據つたものか。俗つれん「古へ念佛行者の龜鉦、今又鯨釜と里人の言ひならはせける」

**かめばら** 龜腹。(龜腹の中に一種の凝りてゐる腹。織留四「當年十三になりけるが、今に足立たずして、然も龜腹とか申して見ぐるしく」)  
**龜屋の羊羹** 京都寺町三條上りにあつた有名な菓子屋龜屋和泉の羊羹。傾城酒呑童子三「小豆は舌に障る。京の龜屋が羊羹をすり潰してせいと云へ」  
**かめやじま** 龜屋縞。かめあやじま(龜綾縞)、又かめあやともいふ。龜甲のやうな模様を細かくした綾縞の絹。二代男「いつの頃はやはりし龜屋縞の着物に、はしつぎのある帯、右の脇に結び」

**かめろさん** 龜井算。和算の割り方の一つ。掛算の九九を應用して行ふもの。普通の割算より早いとされる。二十不孝四「生牛の目を抜き、龜井算などは、中括りに巾着の口を締め」

**龜井の水** 大阪天王寺靈水の一。講堂の東背後に方つてある屋形の中に、大水盤があつて、その龜の口から流れ出る。

**龜井橋** 今の大阪西區大涉橋のある所。西に渡ると天神のお旅所がある。今宮心中上「其のはま萩の八重桐を、龜井橋ちやとおしやる、心はの、先はおたび

の神かけて」  
かもめじり 鷗尻。鷗の尾の羽が、はね上つてゐるやうに、太刀の尻を上にならせて佩くこと。又、秤の棹の分銅の方が高くはね上つてゐることにいひすべて高くはねた形容。(鷗の尻のよく並ぶより、落ちなく皆の人から物を取ることにいふとの説はいかが)。大矢數二「伊達な姿の池へはまるな、結び目の帯想像かもめ尻、互に起きて雪の明ぼの」。丹波與作中「百やる人も二百やる。一奴の貰ひもかもめじりに取る」

かや 櫃。この果實はよく酒の肴として用ひられたと見える。一代男「暫しは實のなき櫃をあらしてありしが。又、正月の縁起ものとして乾栗(かちぐり)などと共に用ひた。大下馬「櫃、乾栗、神の松、やま草賣の聲も忙しく」

かやき 家焼。火つけ。放火犯人。曾根崎心中「大阪堰かれさんしても、盗み家焼の身ではなし」

かやさま かへさま(反様)。さかさま。大矢數二「老の鷺足手かやさま、春の風今度輕わさ渡つたか」  
かやす かへし(返)の訛。萬年草中「かやすものをかやさずにおく與次右衛門

で、さらくなし」  
かやぶつ 栢佛。二代男七「二十三にして髪を下ろし、峰に笹葎を引き結び、夕は松の風、朝は任せ水の音のみ、手づから拾ひ集め、栢佛萬體、一生の大願ぞ」

かよひぐるま 通ひ車。深草の少將が、小野小町のものとに、九十九夜通つたといふ故事に據つて、「しぢ」又は戀の縁として用ひる。二枚繪草紙下「十夜・百夜、通ひ車のしぢみ川」  
かよひごしやう 通小姓。通勤の小姓。但し下例の小姓は、舞子(舞妓)あがり

の女で、寺に通つたものである。一代男「月代を割らせ、聲も男につかひなさせ、裏付け袴の股だちとつて、ぼつばの大小おとしざし、虚無僧あみ笠ふかく、太緒の雪駄、みかつげに穿きなして、奴草履取をつけ、これを寺がたの通ひ扨從(こせう)と申し侍る」  
かよひだる 通楸。祝儀に用ひる酒楸。槍權三上「これぞ冥途に通ひ楸、契りは借老同穴と」

かよひぼん 通盆。給仕に使ふ盆。物を載せ運ぶ盆。永代藏四「朝夕も通ひ盆なしに、手から手にとりて女房もりて食

ふ」  
かよひめ 通女。通ひ行きてあふための女。かこひもの。榮花咄四「下屋敷におき物、折々通ひ女にしてこそ色里の思はく一入慰みにもなりぬ」

かよひをとこ 通男。女のもとに通つて來る男。  
からうち 唐打。絲をあやに組むこと。又、その組んだ絲。うちひも。戀八卦柱屏上「我身は何とから打ちの、綱よりとけぬ契りぞや」  
からうり 唐瓜。きうり(胡瓜)の異名。又、たうなす(南瓜)のこと。五人女一「折ふしは秋のはじめの七日(下略)、下もそれとく唐瓜枝柿かざる事のをかし」

からおり 唐織。唐土から渡來した織物。金襴、緞子、縞子、錦の總稱。からおりもの。一代男四「物鹿子唐織類ひ、帯は胸高にして」。二代男一「唐織の金帯一筋懸つて」

からくむ 「からぐ」と「たくらむ」とから成つた語か。(一)組み立てる。構へ作る。國性爺五「八町四方の木城をからくみ、陣幕・天幕・錦の幕」。(二)いろ／＼に企て、たくらむ。陰謀する。傾城酒吞

か

童子三「まづ嫁に貰うて、跡では其腹な子を疵にして勤めさせうと、此の長が胸一つで斯うからくんだ」

からくらげ 唐海月。一代女五「我等百十九軒の茶屋何れへまるつても、蛭やなどの吸物唐海月でばかりで酒飲んだ事はない」

からくりになぎやう 機械人形。絡繰人形。ぜんまい仕掛けで、踊らせる人形。二代男六「からくり人形の歩くが如く、忍ぶは合點ゆかぬ」

からくりまこ 絡繰的。吹矢などで的を射ると、種々の人形などが顯はれるやうに仕組んだもの。

からこわげ 唐子髻。髻から上を二つに分け、頂の上で二つの輪を作る髪のかひ方。からわ。國性爺四「唐子髻に薩摩櫛、鳥田髻には唐櫛と」

からこをどり 唐子踊。唐子即ち支那風の姿をした小兒の身なりで踊ること。ややこをどり。博多小女郎上「氏神殿の祭、本踊いろ、唐子踊いろ、見事な事ばん」

からさんがい 唐三界。はるく、と遠い唐土。三界は佛語であるが、たゞ接尾語的に用ひたもの。國性爺二「いかにい

たづらすればとて、何時の便宜に唐三界、餘りな稼ぎぢや」

からしか 唐鹿。紋所の名。懷硯五「十七八なる若衆、空色の小袖に唐鹿の紋所」

からしし 唐獅子。獅子のこと。鹿又は猪を「しし」といふのに對していふ。大職冠二「唐獅子の毛蒲團三十枚」

からじり 空尻。脱尻。馬に附ける荷のないこと。大矢數一「附合に言はれぬ古事を出されたり、道中互に脱尻の月」又、「輕尻」で、宿驛駄送の荷は三十六貫を本荷としたに對して、その半分、即ち十八貫の荷のこと。

からじりうま 輕尻馬。前條を見よ。永代藏四「山田を出し時、新錢二百貫調へ、から尻馬に附けて」

からす 烏。下の例は「熊野烏」のことである。紀州熊野神社から出す「牛玉寶印」と記した符には、特に神の使であるといふ靈烏が印されてをり、よく誓紙に用ひられた。

烏が事 大矢數四「熊野を勸請神樂願西、堅めの血判烏が事は成次第」

烏の目 二代男一「彼の誓紙を取出し、(中略)、今世智賢き女郎が、指先破りて筆を染め、烏の目の所はよけて、

水に酒鹽を交せて裏よりまじない事して」

からすみ 臘子。ぼら(鱈)、めなだ(赤目黒)などの卵巢を取つて鹽漬にし、後、壓搾乾燥せしめて貯藏したもの。食膳に用ひる。新小夜風物語下「蒲鉾からすみいろへ取揃へ」

からぜい 空贅。贅澤を裝ふこと。虚勢を張ること。油地獄下「根から忘れぬ紙入の空贅吐いてぞ急ぎける」

からだいまやう 空大名。唐大名。名ばかりで、實の武力も金力もない大名。兩吟一日千句「古帳を遺手口より引きひろげ、から大名はあはぬ勘定」。永代藏四「世間には唐大名の見せかけ商賣おほし」。

からたけわり 幹竹割。幹竹を割るやうに眞直に二つに割ること。

からだだをし 體倒(からだだふし)。身體のみ大きくて實力のないものを嘲る語。見かけ倒し。本朝用文章二「藤太が首露もたまらず打落し、さつてもきれいな切小口、からだたをしの侍や」

からづくり 唐作。體格が支那人のやうに大きく出来てゐること。新可笑記一「兵法の名人風俗すぐれて、唐作りの大

男、黄石公が生れがはりといはぬ許りのかほつき」

からつや

唐津屋。舶來の品を賣る店。今の貿易品店の類。晝夜用心記三「本石町に唐津屋とて、虎の生膽、白象の鼻油、獵虎の毛貫袋、天龍の涎、一切の珍物、阿闍陀、東京(とんきん)、三韓の藥種、此の店に無いものはどこにもなし」。又、一説に、唐津物を賣る店、即ち陶器店をいふと。

からてうづ

空手水。水を汲まないで、柄杓で水をかけるかたをすること。孕常盤四「烏帽子装束あらためて、姫の閑とも白露の、からてうづ手向草」

からと

唐櫃。からびつ。からうと。脚の附いた櫃。前後におのゝ二本、左右に一本つづの脚があるのが普通である。冥途飛脚下「からと。米櫃。灰俵、打ちかへしてぞ探しける」。又、京都方言で、米櫃をいふ。

からど

唐戸。戸の棧を縦横十字に交はらせて、その間に板を入れて張つた二枚の開き戸。大職冠三「唐戸遣戸をはたはたと、さしもの入鹿堪りかね」

からな

唐名。支那風の名。轉じて、珍しい、風がはりの名。源氏十二段長生

烏臺二「横車とはな、いかずと云うて、おのれがやうな女の唐名よ」

からぬひ

唐縫。よつた糸で紋を縫ふこと。(よらぬ糸で縫ふのをぬひものといふ)。最明寺殿百人上臈よ「ひやう紋の唐衣に、唐縫したる柳裏」

からねこ

唐猫。たじ、ねこ(猫)といふに同じ。猫は唐から來たものでかく稱するといふ。槍權三下「唐猫の鼠を探す眼の光り」

からのかしら

唐頭。兜の上につける白熊のかざり。大矢數四「からのかしらは靡く持籠、物大將うけたまはつて此所」

からばと

唐鳩。かはらばと(河原鳩)のことか。五人女五「はつがんで唐鳩・金鶏さま」の聲して」

からばな

空纏頭。かみばな(紙花)の不用になつたもか。或は「紙花」のみで、後に現金とかへることをしないものか。雪女五枚羽子板上「子の日の松や根引の四年、三年前の紙纏頭空纏頭」

からふさ

唐房。唐總。美しく作つたふさ。「から(唐)は美しいものに冠らせる。一代男五「萌黄の薄衣に、紅の唐房をつけ」とは、遊女「高橋」の衣装をい

つたもの。萬文反古三「祝義の目錄高蒔

繪の長文箱に入れ、唐房の色をかざりて持たせ」。椀久「世物語」「不思議や唐房のつきし銀鍔(きんしやう)ありありと」

唐へ投げ金

(諺)。唐土へ金を投げるといふので、無益なこと、又、確かな目算なしに投資することに譬へる。俗つれ。「年玉を唐への投げ銀とおもひて、二三年も勤めければ」。榮花咄四「唐へ投げ銀して時代儲の分限、仕たい事して遊ばぬは一生の損なり」とは、徳倅で儲けたのであらう。

からまく

絡み巻く。曾我齋藤山三「尾筒をゆん手にかから巻けば」

からます

まぎらす。煩はす。胸算用五「皆世渡りの事どもにからまされ、參詣もなき所に」

からものや

唐物屋。舶來品店。貿易商。たうぶつや。又、養澤屋。非常な利得あるものとせられた。卯月紅葉中「唐物屋業さへならぬ程に、ぞべ〜と着飾つて、諸講の俳諧の」。大下馬一「徳乗の小柄、唐物屋十左衛門方へ一兩二歩に昨日賣る」

がらり

(副詞)。全く。そつくり。又、「大方、見つもりにして」、「ざつと」な

か

どの意もある。胸算用三「此方は乳袋もよいによつて、がらりに八十五匁、四度の御仕著まで忝ない事と思はしやれ」女腹切甲「がらり廿兩ま一年切まし、居なりに居れば借銭も先づ其分」。出世瀧徳下「中年四年四百兩、命がらりに身を賣りて」

**からりちん** 物、殊に金の皆無なことの形容。織留三「日暮しに遊びて、有る程はからりちんとなし、からるゝ程は借り集めて」

**がらりに** 「がらり」を見よ。

**からるしき** 唐居敷。門の柱の下に敷きつめた四角な石。からいしき(唐石敷)。傾城酒吞童子「門を固めし堤の彌惣、唐居敷を飛んで下り、地に鼻をつけて」

**歌流金子** (人名)。俳優袖崎歌流と金子吉左衛門。歌流は大阪の女形、金子は道化役で名高かつた。女腹切中「歌流金子も難波津へ、咲くや此花其花の、噺も戀の種ぞかし」

**かりぎ** 薤。ねぎ(葱)の異名。一代女六「今の薤まい(る)るな、お腹(なか)にあたります」

**かりくだす** 借下。目上の者から、物を借りる。貸し下げて貰ふ。吉野忠信五

「君が姓名をかり下し、敵を謀つて一先づ落し奉らん」

**かりつき** 借次。金銀の貸借を周旋する者。借手の依頼を受けて、金を借りてやる者。二十不孝「手形は二千兩の預りにして(中略)、此の内借次の長崎屋、世並にて百兩取つて占め。かりつきや(借次屋)。

**かりつぐ** 借次ぐ。前條の「かりつき」をする。又前の借人から、物を引きついで借りる。武家義理物語四「佗人に似合ひたる宿なれば、是をかりつぎて、奈良團扇の細工を勧めて」

**かりどり** 借取。借りたまま、自分のものにしてしまふこと。新小夜嵐物語下「傘提灯も借取りに、萬不埒は悪し」

**かる** 借。廓詞。「かし」及び「かす」の條を見よ。天網烏下「紀伊國屋の小春さん借りやんしよ」

**かるがる** 輕輕。手輕な。金のかからぬ。一代男二「かるゝなぐさみ所なるべし。斷りなしに腰をかけて」

**かるくち** 輕口。口から出まかせの、しかも、語呂のおもしろをかしい詞。その詞を話すこと。二代男一「袋は幸ひ袋、屋敷へ盛合せて、三に三右衛門酒を忘

れたかと、九つ小盃手に持ちながらの輕口」。又、地口、即ち一語を兩様の意義に用いて興あらしめること。駄洒落。次條参照。

**かるくちだて** 輕口立。得意になつて輕口を言はうとすること。天網烏申「これ玉、其の阿房め覺える程くらはしや、(中略)いやゝたつた今、お宮で蜜柑を二つづつくらはせ、私も五つくらうたと、阿房のくせに輕口だて」

**かるこ** 輕籠。繩で縱横に網の目を作り、四隅に繩をつけて物をはこぶやうにしたもの。輕子。一代男七「くわんせこよりを延べて、小さきかるこを仕懸け、天目をのせて、熱燗の酒をつぎ、我が口添へてそろゝ下せば」

**かるさい** 一種の粗羅紗。ホルトガル語の、Carraigの轉。博多小女郎上「金にあかした衣裝付、各さるぜ羅紗すため絨、かるさい、らんけん、繻子、天鷲絨」

**かるたむすび** 骨牌結。四角に帯を結ぶこと。若衆、小姓などのした風。男色大鑑二「まづ何がなしにかるたむすびの帯もとかず」。薩摩歌上「基盤格子の染帯を、骨牌結びや年配も、二十二三四

五六七

かるゆき 輕行。手輕く物事をする事。やすやすと事の運ぶこと。輕便なこと。大矢數三「或時は巾着となり根付となり、旅功者とは輕行にやる」。萬文反古五「爰之町人の風義中々かる行に身を持ち申候」。一代女二一人を金一角に定め置きしは、かるゆきなる呼びものなり」

かれひがは 鱧川。大隅國始良郡にある川。下の例は、親を呪めると鱧になるとの傳説によつて叙したるもの。薩摩歌下「親を恨みの日は涙、何に生れん鱧川」

がれん 五をいふ、駕鼻などの隱語。日本西玉母三「だり・ばんどう、いつかのがれんきりがれん駕やらい」

かろわる 擔はる。かつがれる。長崎方言。博多小女郎上「頭抱へてやといどにかろわれ、小宿さなへ往んだがの」

かわく 「かはく」を見よ。  
我を我に立つ が(我)を立て通す。意地を張りとはす。浦島年代記三「えい情ない親仁、構はぬといふ我を我に立て、目前我が子の討たるを見捨つるか」  
我を出す わが本性を顯はす。我欲を示

か

す。二十不孝一「松は永代此の家退くまじと我を出しける」

かをる 蕉。(人名)。京都鳥原の遊女の名。男色大鑑八「江戸にて藝子のを小紫とよび、京にてかをると付け、遊女の名も物やはらかにして聞きよし」。一代男「その頭名高き中にも、かづらき、かほる、三夕」

がをる 我折る。我がくぢける。閉口する。

かんおづ 肝臆。馬の驛が強くて、物に驚きやすいこと。大磯虎稚物語五「御馬は少し老けたれども、かけに早く肝臆ぢず」。肝強しの條参照。

かんかん 韓幹。(人名)支那晋の畫家、よく馬を描いたといふ人。傾城反魂香下「その胸は、晋の韓幹が馬を寫されし」

かんき 勘氣。主君又親などの氣を損じ、咎めを受けること。勘當。大職冠三「主親の勘氣の身、大事の時の御用に立たず」

がんぎ 雁木。橋の上に構へる棧。又、杙(くひ)の類。特に人の氣づかぬ處に出てゐて、邪魔になる棒などを呼ぶ俗語。槍權三下「此方衆は怪我しさうな」

雁木に躓き、おか様の大疵に、又疵のつかぬやうに用心々々」

かんくてう 寒苦鳥。印度雪山に棲むといふ鳥。夜の寒苦に堪へず、夜明ければ巢を作らうと鳴くが、夜明けて日光に浴すると、又夜の寒苦を忘れてしまふといふ。雪女五枚羽子板上「雪にて口を濡せば、身の内まで泌み凍り、寒苦鳥の苦みかや」

かんこくさい かみこ(紙子)臭い。きな臭いといふ上方詞。碁盤太平記「火の廻り氣を付けよ。かんこくさいと出でければ」

干五上句中六下口 笛の孔の八つの名。孕常盤四「思ひの數も千草の露、八つの歌口打濕し」

かんごゑ 寒聲。聲學を學ぶ者などが、寒中の朝晩聲を出して、美音を練ること。二代男五「厚裘の若き男、松ばやしの爲めにとて、寒聲を使ふ」

かんさう 甘草。豆科の植物。春芽を出し、葉は藤に似て、五月豆の花のやうな淡紫色の花を開く。根は黄色で薬用にすする。五人女四「夫婦連立ち出さまに、まくり甘草を取持ちて」

かんさき 神崎。(地名)攝津國に在る。

江口と共に古來名高い遊女町。松風村  
雨東帶鑑四「さして定めん泊船、神崎過  
きて吾に聞く、此處ぞ江口の色淡」

かんじや 勘者。眼の届く、智慧まはり  
のよい者。物事をよく看破するもの。  
武家義理物語三「人の氣のつかぬ所を、  
さりとは名譽の勘者と、彼の侍の事を  
感じける」

千將莫邪 千將と莫邪(ばくや)と、共に  
支那の名劍。吳人千將といふ者、その  
妻莫邪と二人相うちで、二ふりの鋼劍  
を作り、陽劍を千將、陰劍を莫邪と名  
づけたといふ。傾城酒吞童子一「中はい  
かなる名作の、千將莫邪御座んめれ」

かんじよ 閑所。雪隠。かはや。便所。  
晝夜用心記四「袴をぬぎ捨て刀もそこ  
に抜き置き雪隠へ行く(中略)、一時ば  
かり過ぐれども、此の侍閑所を出でず」

閑人琴柱に倚る 二代男六「我れ世にあ  
らん限りはと、神歌を唄ひ給ひし有様  
は、閑人琴柱に倚つて雷公を笑ふと申  
さるゝに同じ」とは、地震に恐れなかつた遊女丹州の話であるが、下の韓致元の雷の詩に據つたのである。「閑人倚柱笑雷公、又向深山霹靂怪松、必若存蘇天下、意何如驚起武侯龍」

かんす 寒す(動詞、佐行變格)。冷える。  
寒さを覚える。武道傳來記五「手飼の犬  
(中略)、あたゝかなる時とせしが、夜  
更け寒するをいとひて駈け出でたる」。  
懷硯三「近年稀なる寒じやう、雪は降ら  
ずして竹の破るゝ音」

かんせいぬひ 閑清縫。かんせんぬひ。  
袋物などの縁をば、糸を現はして打ち  
違へて、からげ縫ひにしたもの。二代  
男五「天川の玉一つあり(中略)、かん清  
縫の前巾着に附けて」。勘清縫。かんせ  
ん。

がんぜん 雁膳。雁の料理の膳。二代男  
五「年忘れの猷立(中略)、お吸物は輕う  
蛭、大しるがんぜんのさきは貝盛一つ  
で出しますと」

かんせんてん 甘泉殿。漢の武帝が、李  
夫人の姿をこの殿の壁に寫して嘆いた  
といふ。大矢數三「甘泉殿やひとり身の  
露、作り庭かゝる鳥とて霧が立」

がんぞうなます かんざうなます。「かざ  
うなます」の訛。夏の料理。種々の魚  
を作りませ、酢や鹽であんばいしてあ  
へたもの。但し、傾城酒吞童子四「飯も  
汁もがんぞうなます」とあるは、飯も  
汁も一緒にまぎつたといふ意に轉用し

たもの。  
がんたう 強盜。がうたう(強盜)の唐音。  
(押入りどろぼう。女腹切中「この半七  
を、掏兎の、騙りの、がんたうのとは。  
何時騙りした盗みした」。天綱島上「や  
がんたうめ、や、獄門めとは蹴飛ば  
かし」。(二)がんだうちやうちんの略。

がんだうらうつ 強盜打つ。強盜をはたらく。孕常盤三「晩の泊りに寢處へがんだうらうつて、やじりきつてくれうぞ」

かんだうきる 勘當切る。勘當して縁を切る。勘當する。永代藏五「十三歳の時、鼻紙に小杉入れしを見て勘當切り、播州の網干に嫁ありしが、この許に遣はしおき」

がんだうちやうちん 強盜提灯。ぶりき銅などで釣鐘の形に作り、中に廻轉自在の蠟燭立てを装置し、光りは正面一方のみを照らすやうにした提燈。自分の方は暗くなるので、人相を隠すには都合がよい。

がんだうづきん 強盜頭巾。目ばかり顯はして、顔、頭全體を包み隠すやうにした頭巾。からむしづきん。關八州繫馬「並木のあゆみ來る如く、一樣のがんだう頭巾」



かんだらばこ

勘當箱。遊廓へ通ふ駕籠の稱。色道大鏡「傾城町へかよふ肩輿をいふ。此の乗物に乗りて通ふ輩、終には勘當さるゝと云ふ心にてかくいへり。尙、「おろせ」の條参照。「勘當船」といふも同じ類の語である。

神田筋違橋

今の東京市神田區、萬世橋の邊にあつた橋。永代藏三「駿河町の辻より神田の筋違橋(すぢかひばし)までに一帯にあまる程取りあつめ。同五「書物好きの權六は神田の筋違橋にて太平記の勸進讀」

邯鄲

支那の邯鄲で、塵生が夢みた「炊の榮華の故事に據つて、「たのしい」、「悠長な」、又「はかない」ことがらに關していふ。

邯鄲の一日 一代男七「する程の事をかしく、女郎も客も、邯鄲の一日暮れ惜しむ所へ」

邯鄲の米かち杵 五人女五「かんとんの米かち杵、浦島が庖丁箱、辨財天の前巾着」

邯鄲の夢 冥途飛脚中「金銀降らす邯鄲の、夢の間の榮耀なり」

かんづか

髪束。髪をつかね。髻(もとどり)。こづか。本朝用文章三「觀念せ

よとかんづか引上げ、首を搔かんとし給ふ。世繼曾我三「飛びかゝり兩人がかんづか掴んで引伏せ」

肝強し

馬の勢の強くて馱しがたいこといふ。肝は驛であらう。槍權三上飼ひにかうたる月毛の駒、前脚とつて肝強く。大磯虎稚物語五「かつし〜とあゆます肝は強くて道ははやし」。「肝おぢす」などもいふ。「かんおぢ」の條を見よ。

がんどう

がんどう(強盜)に同じ。盗提灯)に同じ。龕燈提灯。

龕取坊

墓場の龕前堂で、葬儀の世話などする男、隱坊(おんぼう)の類であらうといふ。榮花咄三「揚屋へ預け置きたる金は、龕取坊が手に渡る野疊と同じ二たび本へ歸らす」

神無月儂り

「儂りの時雨」の條を見よ。五人女五「根笹の霜を打拂ひ、頃は神無月儂りの女心にして」

かんなべ

問鍋。爛鍋。酒の爛をするに用ひる鍋。一代男三「女郎の手づから、問鍋の取まはし、見つけぬうちはおかしく」



べなんか

問鍋の綱

「問鍋」は爛鍋で、前條に同じであるが、「渡邊の綱」をもちつて、大酒家の意を表した語。俗つれん「其の人一代三年酒を積くべし(中略)、今の世の間鍋の綱と面々口を開きける」

かんにち

坎口。陰陽家が、凶であると云つて忌む日。何事にも悪い日。戀八卦柱曆下「只何事も坎日と、聲も涙にかきくる」

かんにんぐら

堪忍庫。かんにんぶくろ(堪忍袋)に同じ。堪へ忍ぶ度量。堪忍庫の戸があいた」などいふ。

かんにんごろ

堪忍頃。堪忍のできる程度。がまんし得られる位。五人女三「鼻思ふには少し高けれども、それも、堪忍頃なり」

かんのたつ

目方の減ること。永代藏三「目を掛けしに思ひの外にかんのたつ事」

疳の虫

小兒の腸胃の病。又、その病のもと。正しくは脾疳といひ、食を食り食ひ、身體瘦せ、腹ばかりふくれるもの。二十不孝「子を思ふ夜の道手を打振りてあてどなしに、疳の蟲を指先からほり出しますといふもあり」

正月の儀式用とするもの。胸算用一「かんばし、塗箸、紀伊國五器、鍋蓋までさらりと新しく仕替へて」。同二「かんばし二膳買ひおきしが、一膳はいらぬ正月よとへし折つて」

かんばやし かみばやし(上林)の音便。その條を見よ。壽門松上「都島原上林の高橋に」

かんべう 干瓢。遊女の稱。うかれめ。越前國敦賀、越後國出雲崎、羽後國酒田などで公娼私娼を云ふ。「夕顔」の類語。一代男三「暮れ方より濱邊に出て、兼ねて聞及びし様子見るに、人の嫁らしき者、わざと舟子に捕へられて、浪の枕をならべ(中略)、物を取らせば取る、やらねばその通りにして歸る。これ此所(酒田)にて干瓢と申し侍る。夕貌を作りてひらしやら靡くといふことぞかし」

かんもん 肝文。肝要。大切なこと。胸算用三「人は盗人火は焼木の始末と、朝夕氣をつけるが胸算用のかんもんなり」。天網島上「道理々々の中取つて、主の身なれば御機嫌よかれ、道理の肝腎肝もん」

がんもん 雁門。雁の通る門。下文は、

廓などの門に轉用した例。一代男六「唐の咸陽宮に、四萬貫目持たせても、終には雁門を夜ぬけに近し」

かんやく 韓藥。漢藥、即ち漢方の藥のことか。韓から來た藥といふ意か。源氏冷泉節下「ヤア此の藥味は残らず石藥韓藥に、毒蟲などの處方は、毒藥にては候はぬか」

かんらから 勇者などの笑ひ聲。かんらかんら。雪女五枚羽子板上「和ぬし如きの相手に馬を向けるまでもなし(中略)と、かんらからとぞ笑はるゝ」

かんろほう 甘露方。かんろほふ(甘露法)のこと。即ち如來の教法の稱。佛語。一度味へば無上の功德利益あるを甘露に譬へたもの。出世景清三「此の水は觀音の甘露方と覺えたり」

きあがる 氣上る。のぼせる。上氣する。逆上する。津國女夫池三「くわつと氣あがり、顔は天火」

か

きあぐら 木の足代(あしろ)。聖徳太子繪傳記「練築地の棟瓦、木あぐら組んで待ちゐたる」

きあつかひ 氣扱。こころ使ひ。心配。天網島上「叔母一人の氣扱ひ、敵になり味方になり、病になるほど心を苦しめ」

きあひ 氣合。氣分。氣持。五人女二「おせん裏より見舞ひ來て、お氣合はいかがとやさしく尋ね」。今宮心中上「ア、おとましし事出來まして、一倍氣合に當りますと、溜息ついてゐたりけり」

氣合に構ふ 病氣にさはる。氣分をそこなふ。夕霧阿波鳴渡上「お氣合に構ふとて、初對面はお勤めなされぬも存じながら、呼びに遊ぜた」

きいち 鬼一。鬼一法眼のこと。姓は吉岡、名は憲海。京都堀川に住して軍術刀法を傳ふ。人推して京流の元祖とし、又堀川流といふ。その家に傳へた兵書「虎の巻」を源義經に傳へたといふので名高い。最明寺殿百人上臈「天狗に授かる飛行の術、鬼一が傳へし一巻の、太刀風騒ぐ虎の巻」

きいちもつ 氣逸物。氣のはやること。又、氣をはやらせる者。梶狩劍本地三「やがて名を取り知行取り、譽れを取る」と氣逸物、心ばかりは勇めども」

きいちもつ 氣逸物。氣のはやること。又、氣をはやらせる者。梶狩劍本地三「やがて名を取り知行取り、譽れを取る」と氣逸物、心ばかりは勇めども」

**きうかう** 求瘼。瘼(こう)は疣(いぼ)の小さいもの。求は球に通ずと漢字引にある。熟してやはり「いぼ」のことであらうか。二代男六「朝に血を出す指を悔み、夕に求瘼を悲み」と鳥原の遊女の行末について記してゐる。

**きうき** 窮鬼。きうき(牛鬼)で、牛の形をしたといふ怪物のことであらう。ばけもの。男色大鑑三「是は怪物窮鬼のたぐひ成るべし、尊き聖に仰せて祈り加持し給へ」

**九五の位** 天子の位。易經「九五、飛龍在天、利見大人」。易では九を陽とし、五を人君の位に當てる。吉野都女楠「二度九五の御位、後醍醐の帝と重祚ある」

**きうざ** 久三。きうざう。下男の稱。「京にて久三は一季奉公人をいふ、江戸にては、わたりものをいふ」とは物類稱呼の説。「一代男」「久三提灯ともしや」。男色大鑑二「水風呂の湯もすて、久三も取廻し賢く仕舞へば」

**きうざぶらう** 久三郎。前條に同じ。永代藏四「御意に任せ、久三郎諸肌ぬぎて鉄を取り、堅地に氣をつくし身汗水なして、やうく掘りける」

**きうしち** 久七。下男の異稱。殊に半季居の者をいふ。織留一「久七に若水汲めといへば、お家久しき人に汲ませよ。半季居は御作法しらず」。榮花咄一「久七此の季御奉公勤めし方は、さる仕まうたやの後家(中略)、久七お氣に入り仔細あり」

**きうじらう** 久次郎。下男の稱。一代男七「勝手より、久次郎が、宇治から唯今歸りましたと申す」

**きうすけ** 久助。九助。前條に同じ。新小夜嵐物語上「料理人の九助まで、當座鳥臺拵へて、大瓦盃に御紋を光らし」

**きうぢよ** 牛女。星の名。北方にあるもので、牛(きう)と女との二つであるといふ。唐船断今國姓爺下「北方の天に立ち給ふは、牛女、きしつ、きよしん星」

**きうぢ** 鳩尾。みづおち(水落)。胸骨の中央のくぼい部分。みぞおち。宵庚申下「諸肌ぬいで我れと我が、鳩尾と隣りの二所、うんと締めては引きくムリ」

**きうびさき** 鳩尾先。みづおちのさき。みづおちの下。歌念佛「この胸でたくさんだかと、鳩尾さきを背中まで、思ふ様に止めを刺し」

**きうべゑ** 九兵衛。久兵衛。俳優のお供

などする男の稱。「一代男二「思ひ染之介様、花澤浪之丞様(中略)、とかく酒にして、金剛の角内、九兵衛を呼出しよるこぶ物をとらして」。俗つれど「太夫が舞を聞き果てて(中略)、久兵衛が西面の座敷、入口は障りなれど、風の爲には折節の寝所と」

**休甫坊主** 戸齋休甫、攝津の人。狂歌を善くした(古今夷曲集)。大矢數四「一生は休甫坊主が夢なれや、難波の浦で夜とも晝とも」

**きうりきられ** 舊里被切。舊里をきられたもの。次條を見よ。二十不孝五「諸國の舊里きられを請け込み、首尾よく歸宅せぬもなし」

**きうりきる** 舊里切る。久離切る。人別帳から除く。帳外にする。無宿者にする。轉じて、縁を切る。勘當する。百姓町人が、その子弟の不届の罪に對する仕置。一代男二「配所の月、久離きられずして、二人見る物かはと、美しき女の書きつるも。永代藏二「我らも京の者なるが、舊里断られて江戸を頼みに下りけるが」。同「舊里を切つて子をひとり捨てける」

**きえぎえ** 消消。消えてなくなりきうな

さま。息などの殆ど絶えさうになるさま。國性爺三「もう物云はせて下さるな。苦しいわいのと計りにて、きえぎえとこそ成りにけれ」

きえん 起縁。えんぎ(縁起)といふこと。きえん。出世瀧徳上「きえん直しに酒にせう。毛氈しけ」。同下「申し醫者の名もきえんの物。始めは西の京の道偏と申す醫者の薬で、どうへんに有つた所を」

きおろし 着下し。衣物の着ふるし。又それを目下と與へること。一代男一「鳥原の着おろし、あやめ八丈から織のふる着も、此の里におくりにて」。同三「着おろしの長袴、足もとも定めかね」

きかが 生加賀。加賀絹の正眞なもの。純加賀ぎぬ。原産のままの加賀絹。萬文反古「日外の生加賀のひとつ、羽織、少し長く候」

きがさもの 氣嵩者。負けぬ氣の者。勝氣の人。曾我會稽山三「箱王の時より五郎は氣がさ者、すはといへば氣がはやる」

きかざる 聞か猿。兩耳を手で塞いで、物を聞かまいとしてゐる猿。三猿の一。榮花咄「内儀の當言いふも聞か猿の

神もんだる様な顔つきして」  
きがふれる 氣が觸れる。心を奪はれる。心が迷はされる。冥途飛脚中「さもしい金に氣が觸れた、見世女郎の淺ましさと、世間の唱へ」

氣が細い 氣の小さい。小心な。源氏冷泉節上「氣の細い上臈の、御氣合にさはれば一大事」

きがま 木鎌。木を切るに用ひる鎌。(草刈録の對)。二代男一「吉野が形よしなしと、木鎌で打碎き」

氣が戻る 氣が變る。進まうとする氣が沮む。丹波與作もじや言へば氣がもどる。餘の事おいてさあ早う、ここが出たうござんする」

きがらちや 黄枯茶。黄唐茶。黄色に淡い藍色をおびたもの。永代藏三「一人の娘に黄唐茶の振袖に菅笠を著せて」

ききいしや 腕前の優れた醫者のこと。大矢數一「郭公八わりましの名を上げて、さばる所がきき醫者の山」

ききおぢ 聞怖。聞いたのみで恐れること。戰陣などで臆病なことにいふ語。國性爺三「五常軍甘輝が、日本の武勇に聞怖する者でなし」

ききをとこ 利男。腕まへのすごい男。幅のきく男。一代男六「なんでも是はよう揃うた、五人ながら今の世のきく男手くだの勘定、懐にありし文を見るに一つも返事はなし」

きくがさね 菊重。菊月が重なるといふ心から、陰曆閏九月を稱する。曾我五人兄弟二「長月や閏加はる祝ひ月、菊重の祝儀になぞらへ」

きぐこしらへ 木具拵。即ち檜の白木などで作つた器物に盛つて調へた食事をいふ。一代男八「木具こしらへの茶漬

めし、雁の板焼に、赤鯛を置合せ」  
**きくざげ** 菊酒。①九月の節句に用ひる酒。又、菊花を浸して飲む酒。きくのさけ。新小夜嵐物語に初買の殿定め(中略)、昔は九月の菊酒より大方は約束せしに。②味醂の一種。加賀・肥後などに産する、極めて濃いもの。俗つれん、

④「菊酒は加賀屋よりの通ひ杖」  
**きくすり** 木薬。生薬。①調製しない薬。②生薬屋の略。織留④「惣じて類を以て集り、商賈見世も二條通りに鮫、木薬、書物屋ありと、諸國の人も見および」  
**きくぞろへ** 菊揃。菊花を列べ揃へて、その優劣を競ふこと。

**きくつば** 菊鏢。刀の鏢の、菊の形をしたもの。女腹切上「一條の御所さまの菊鏢も、九月の御用ちや合點か」  
**きくながし** 菊流し。菊の花を水に流した友禪模様の名であらう。武家義理物語②「あの菊ながしの衣装の女、懷中に仔細あり」

**きくらげ** 木海月。木耳。人の耳に似た茸。海の「くらげ」に對して、木につく「くらげ」の心で呼びなしたものを。耳を嘲つてもいふ。大矢數四「彌勒此の世に耳果報なり、木海月を其の曉に掴みと

り」  
**きけんじやう** 喜見城。佛語。帝釋天の居城で、その四門に四大國があつて、諸天人の遊樂場とする。故に無上の樂しい處に譬へて用ひる。二代男「目前の喜見城とは、吉原島原新町。傾城酒呑童子③「今の榮華は喜見城、女郎の爲には怖ろしき」

**きごつな** きごつないさま。ぶごつな。無愛想な。源氏烏帽子折③「なふ、きごつなの人々や。商賈といふ物は、賣るにも買ふにも品ぞ有る」

**きごみ** 著籠。上著の下に着込む鎖かたびらなどの稱。武道傳來記⑥「小者に持たせし著籠取出し」。男色大鑑③「心やすかれと、着籠を三人前取出し」  
**きさく** 氣輕なこと。今もいふ、氣がさくいこと。一代男②「あるじは舟木屋の甚介とて、氣さくなるもてなし」

**きさま** 貴様。第二人称で、敬意を含んだ代名詞。あなただ様。一代男①「貴様も萬に氣のつきさうなるおかたさまと見えて」。同④「外の大匠へ、五人も七人もきさま故に切ると文などに包みこみて送れば」  
**きさみいなづま** 刻稻妻。模様の名。稻

妻形を細く刻んだやうにして小紋にしたもの。一代女③「我れ後帯は嫁ひなれども、それ〴〵の風義に替へて、黃唐茶に刻稻妻の中形身せばに仕立て」

**きさみざや** 刻鞘。刀の鞘に刻み目のあつたもの。武家義理物語⑥「無地の鐵釘にくり色の刻み鞘」  
**きさる** 生猿。人馴れない猿。一代女「妾の花は咲きながら、梢のき猿」と言ひ觸れて」

**きさんじ** 氣散。氣苦勞のない。のんき。きばらし。男色大鑑⑥「法師ほど世に氣さんじなるものはなし」。薩摩歌上「寢て待つ男のあらばこそ、氣散じな獨り寢」

**きさんじもの** 氣散者。のんき者。氣樂な人。壽門松下「與平もとより氣散じ者。出来た〜、手形は取つた金取つた」  
**きしぎし** 物言ひに容赦のないさま。(物のきしる音から言つたものか)。つけつけ言ふさま。雪女五枚羽子板虫ハテ此處な人、あんまりきし〜言はしやるな」  
**きしね** 岸根。川岸などの水に近い處。又、きし(岸)。雙生隅田川④「押出す船

き

に差棹の底より深き主従の、縁ともいざや白波に、跡の岸根は隔りぬ」

きしねかはづ 岸根蛙。岸根で鳴く蛙。川岸にゐる蛙。男色大鑑六「岸根蛙の聲せはしきもゆたかに聞きなして」

岸の和田 (地名)。和泉國岸和田。萬年草上「雜賀屋へ出入致す、岸の和田の九兵衛と申す駕籠の者」

きします 氣をもませる。いらだたせる。からかふ。孕常盤四「それ彼の様か、うちときまして見さんせと申せば」。槍狩劍本地三「首尾氣づかひな、惟茂様にお目にかゝつたか、きしませずと咄しや」

きしむ 軋。(一)威張る。りきむ。二枚繪草紙上「初段から切まで語り抜かせにや堪忍せぬと、きしみまはれば」。(二)争ふ。拮闘する。冥途飛脚中「投付けつ投返し、腕まくりしてきしみ合ふ」

きしめく 前條に同じ。百日曾我一「せがれを殺さうのむさい心底。白癩きかぬとぎしめけば、誠とや思ひけん」

きしやう 木性。五行を生年月日に割り當てて、その木に當る人。懸八卦柱曆下「遂に木性の木の空に、かばねをさらし」

きしやう 起請。神佛に誓ひを立てて、偽りのない、約に背かない旨を記すこと。又、その文章或は文書。起請文。誓紙。起請誓紙。かための證文。血文(ちぶみ)。大矢數二「花は連理比翼の鳥と約束を、起請のかため春の泡雪」。一代男三「花川といへる女に起請を書かせ、指しほらせて名書の下を染めさせけるに」。歌念佛下「三日に三枚七日に七枚、起請誓紙の牛王のうらなく」。尙、からす(鳥)の條參照。

きじやう 氣情。こらへる情。忍耐心。氣ちから。宵庚申上「たつた一飛びと思へども、氣情も足も心ばかり」

きしやうもん 起請文。「きしやう」を見よ。

きじやく 氣癢。心配又は驚きのあまり癢を病むこと。癢氣。水の朔日上「こちの夫の長病ひ、漸々本復めきつたりや一昨年の大地震、私はきじやくで床につき」

きじやくてん 著鵲天。孕常盤二「此度宋朝より、著鵲天といふ名醫日本に渡り」。古印度の名醫者婆と、支那古代の名醫扁鵲とに據つた、近松の造語である。

きしゆくにち 鬼宿日。二十八宿の一つである鬼宿星の守るといふ日。嫁娶の外萬事を行ふ大吉日。出世懺徳下「ただ今曆を詮索すれば、明日は天赦鬼宿日、萬事揃うた大吉日」。松風村雨東帶鐙、「問ふもなか、鬼宿日、大晦日の鷹揚に、今日は最上吉日とて」

きする 軋。かじる。噛む。最明寺殿百入上願上「火刑に陥ちし罪人の、取りつゝ葛を黒白の、風きしつて、惡龍舌をふるふといふ苦海の譬へに異ならず」

きす 瘦きすなどいふ「きす」である。とげとげしいさま。天鼓三「きすな顔せずしつぽりと」

きすあらため 疵改。檢死の役人が死者の疵を改め見ること。女腹切下「人の斬つたと我が切つたは、疵改めに顯はれて、此方の言分むづかしい」

きすご ます(鱈)の異名。體の長さ六七寸やや圓筒形で、背は淡褐色、腹は銀白色を帯びてゐる。六七月の頃産卵する。萬文反古一「吸物きすごの細作り」

きせい 起誓。きしやう(起請)に同じ。一代男二「起誓かかけまくも、かたじけなき返事をとる事」

きせい 氣精。精力。元氣。孕常盤三「入

道殿お年は六十四歳で、御氣精の強いことではなにか、常磐御前は懐妊あり

きせい 奇正。軍衛にいふ語。奇襲と正而攻撃と。權道と正道と。吉野郡女楠

「軍は奇正變化にあり」

きそきそ はき〜。かひ〜しく。天智天皇三「有明月も傾きぬ、花舞がねの新枕、寢所は奥の亭、采女きそ〜手を引け、妹御はさし合、こゝに一人臥し給へ」。弱法師二「何時じやと思召すちときそ〜となされませ」

きそげ 著そげ。衣類のことであらう。天網烏重「著類著そげに疵付けられぬ間に取返してくれう」。後の秋成の「世間猿」にも「親の著そげを打ちまげて」とある。

きそはじめ 著衣初。正月に新衣を着初めること。その儀式。戀八卦柱曆下「かのきそ始め引きかへて、ひかるゝ駒の藏びらき」

きたな 薪棚。薪をおく棚。二十不孝一「簀で掃きたるやうに薪棚絶えて、米糶にいかなこと何にもなく」

き

町。油地獄上「北の新地の料理茶屋、あじなけれど咲く花や」

きたはま 北濱。大阪の北部、中の島の川南、米市場の在つた處。永代藏一「總じて北濱の米市は日本第一の津なればこそ」。出世瀧徳下「北濱邊のよい衆は火燧に水を入れます」

北枕の毒の鯨 諺に「北枕すれば毒が入る」といひ、又巾着河豚(きんちやくぶぐ)の異名を「きたまくら」といふので、この語を成したものと見える。北枕は、死人を寝ねしめ、又、婚禮の夜夫婦を寝させる外、一般に忌む。源氏烏帽子折五「父義朝の命を取りし北枕の毒の鯨、今我が爲には目出鯛々々釣つた所は心地よし」

きたむき 北向。遊女の下等なもの。「北向は北方の横町にあたり、鳩のこやのうちに住みて、夏冬なしに、すす鼻をたらし無常迅速を觀じ給ふ」(人倫訓蒙圖彙)



きむたき

一代男と京の北むきよりはおとりぬ。傾城酒呑童子三「北向のつま(遊女の名)が袖を控へ(中略)、尋ねたいこと合點ちや、私(つま)が位かへ、極つた通り五分でござんす。曾我扇八景北向の五分膳でも、相伴したし」

きたわき 北脇。大阪北濱のこと。「きたはま」を見よ。重井筒虫「北脇邊のよい衆は、大方炬燵に水を入れるげにござる」

きちがさ 木地笠。木地のままで、塗らない笠。男色大鑑一「木の枝に掛置きし木地笠をとり〜に」

きちざう 吉藏。下男の稱。永代藏一「惣じて大阪の手前よろしき人代々つづきしにはあらず、大かたは吉藏三助がなりあがり」

きちながもち 木地長持。塗りをかけず木地のままな長持。五人女二「二番の木地長持ひとつ、伏見三寸の葛籠一荷」

きちや 吉彌。上(玉)吉彌。延寶の頃に名をあげた女形俳優。男色大鑑六「吉彌はすぐれて美形を藝子にして」。同「是はお山の元祖大吉彌が下宿なるが」

きちやおしろい 吉彌白粉。前條「吉彌」が下宿で賣つたといふ白粉。男色大鑑

六「上々吉彌白粉かけねなし、四條通り高瀬川の橋詰に新見世出しに、京女一子細あるは、こゝに立重なりて求めて歸りし」

きちやがさ 吉彌笠。編笠の一種。もと併優上(玉)村吉彌が好みにした笠。五人女三「髪はなげ島田に平元結かけて、對のさし櫛(中略)、吉彌笠に四つがはりのくけ紐つけて」

きちやむすび 吉彌結。帯の結び方。唐犬の耳たれたる如く、二つ結びの兩はしをたたりとさぐる也。祐信が繪本に見えたるは、帯の兩端を丸くくけてふさを下げたり(都風俗鑑、畫證錄)。男色大鑑六「東の洞院の浮世紺屋の娘、姿のお春といへる名とりと語りぬ。吉彌これをうつしして、壹丈貳尺の大幅帯、くけ目の角に鉛のしづをかけ、世に吉彌むすびと始めて、今にはやらしぬ。きちや。きちやりう。きちやふう。」



びすむやちき

きつゐ (へ)えらい。すばらしい。唐船噺今國姓爺上「さて、きつゐ名人」。油地獄下「材木、諸色、諸入り目、見事に

我等仕る。きつゐものか」。 (へ)つら。酷な。無理な。平家女護鳥五「意地にも我にも、百里足らず二日にはきつゐ道」

きつう 是非とも。どうあらうとも。重非筒中「こんや登して明日の間に合せねば、きつう叶はぬ大事の用」

吉凶惡し 吉凶の占ひの結果が悪い。二十不孝「姉がこと憶へば吉凶惡しきとて、其の年を延べて十七の正月に祝言」

吉凶善し 占ひの結果がよい。縁起がよい。源氏烏帽子折「門出よし吉凶よし。天氣もよし道もよし。萬づ世の中義經が、天下を治めん瑞相」

きづくし 氣盡。心づくし。氣をもむこと。男色大鑑「かりそめの熱心も、大方ならぬ氣づくし」

源氏冷泉節下「扱こそ唯今申しつる、吉左右は是れなるぞ。兄弟見參始めてぞや。いざ花やかに出立つべし」

きつさり きつぱり。きちんと。必ず。支拂などのあやまりなく見事なさま。枕一「世物語下」追付け江戸より此返しをきつさり申すべしと」

きつじ 木辻。奈良の遊女町。置土産「南都東大寺門前に住みて、仙人坊と異名呼びて隠れもなき大じん、我里の木辻鳴川にはまりて。出世瀧徳下「奈良坂や木辻も戀の札所にて」

きつじぐるひ 木辻狂。木辻の遊女に狂ふこと。永代藏五「奈良木辻狂ひも程なくいやになりて」

きつしよ 吉書。(へ)書初(かきぞめ)(へ)書初するによいとして、曆の上に掲げ出した日。吉書はじめ。五人女三「天和二年の曆、正月一日吉書萬づによし」。(へ)公家又武家に於て、年始或は代替りに際して、始めて見る政治上の文書。轉じて、訴狀。又その文書を見る日。丹波與作「私が親の未進米、この六日の吉書に立てねばもとの水牢」



き

身の耻を振り捨て、厚恩の主君に忠節をはげむこそ、耻を知つたる侍、大丈夫の武士のきつすいといふ物ぞ、  
**きつたてざや** 切立鞘。烏毛を短く切つて立てた鞘。薩摩歌 諸國鐘標「青貝柄に切立鞘、信濃の松代」

**ぎつちやう** 毬打。毬杖。槌の形した杖で、彩糸をからんだもの。又、それで木製の球を打ちあひ、勝負をする遊戯。十二三間を隔てて、その間に線を引き球を線内に打入れるを勝とする。正月に行ふ男兒のおそび。ぎちやう。きてう。たまうち。雙生隅田川 四「幼遊びのぶり〜や、ぎつちやう手鞠つく羽根の、峯にこだまのどう〜」

**きつつけ** 切附。馬具の名。したぐら(下鞍)。鞍の下で馬の兩脇に當てるもの。藁又は毛氈で作り、皮で表面を覆ふ。  
**鞆** 最明寺殿百人上臈上「鞆太腹どうどう〜、波鞍壺に打越し〜」

**きつて** 切手。手形。關門の出入、乗車乗船などの際に證とした文書。切符。  
一代男 四「此の女上下二人御通しあるべしと、切手を見せて、御裏門を出て〜」  
**きつと目** 目をきつとさせること。監視の眼。戀八卦柱曆「此の玉がきつと目

になつて、おさん様のそばを一寸も離れぬやうに」

**きつね** 狐。巧みに人を欺くものを嘲る語。女腹切上「やあ、こりやどうぢや。かどにも叔母、内にも叔母、騙か狐にきはまつた」

**きつねがは** 狐川。山城國、淀、水垂村の南にある。淀川に入る(三才圖會)。

**きつねふく** 狐福。思ひがけぬ幸福。偶然な利得。二十不孝三「未だ四五年来分限、人も不思議立てける(中略)、大黒殿の袋を拾ふか、狐福ならむと沙汰し侍る」。大矢數 四「花の山様子尋ねる狐福、二年が内にこがね山吹」

**きつばし** 切端。きれはし。かたわれ。大矢數 四「案ずるほどにきつばしの月、願くば唯薄霧をさらり〜」

**きづまり** 氣詰。氣のつまること。窮屈なためありけるこそ氣詰りに見え〜  
**木で鼻** (諺)「木で鼻をかむ」、「木で鼻こくる」などともいふ。愛想なくあしらふ。冥途飛脚上「彼奴は木で鼻もぎだう者、唯は云ふまじ」

**きてんもの** 氣轉者。機轉者。氣轉のきく人。卽座に思慮をめぐらす者。きてんきき。生玉心中上「心のきいたる姉の利發、使はるゝ下稚も氣轉者」  
**きどくづきん** 奇特頭巾。黒い絹などで面部をおほひ  
目ばかり出すやうにした頭巾。天和貞享の頃行はれたもの。ともこもづきん。「目ばかり頭巾ともなり、さもなき頭巾ともなる、ともなりかうもなる頭巾といふ事にて、氣儘頭巾ともいふに同じ。今の袖頭巾なき前は、婦女子此の頭巾を用ひたり。さて奇特とは不思議と云ふ程の詞にて」いろ〜に用ひられる故に稱するとは柳亭筆記の説である。  
一代男 四「髪は水引懸けて、黒縹子のきどく頭巾、まづは首すぢの白きこと」。  
一代女 四「額ぎはを火塔に取つて、おきざみ濃く、きどく頭巾より目ばかりあらはし」。きどく。



んきつくどき

**きどくばうし** 奇特帽子。前條に同じ。津國女夫池「妬み憎みも女子氣の、きどくばうしに顔つゝみ」  
**きどくもの** 奇特者。奇特なもの。神妙なる人。出世瀧徳上「志を感じた、さりとては女子に奇特者」

きどのあふぎ 城殿扇。京都名産の扇。

もと鷹司通、城殿駒井氏の製のものであるといふ。城殿折りの扇。百日曾我四「なをなつかしみ御影堂、きどのがあふぎ召すまいか」

氣通る 氣が利く。粹をきかず。事情を察しぬく。女腹切上「二人引寄せ寢所の、障子の中に押入れて、伯母は氣とほり堀河通り」。蟬丸「一世一度の色床は、佛もお氣の通らぬ」と

きどる 木取る。建築の設計に適するやうに、材木を挽いたり、切つたりする。唐船嘶今國姓爺下「木取らず削らぬ樺の大木」

きなか 季中。奉公人の定めた季の途中。一季又は半季の期限に満たぬうち。一代女四「御奉公も成り難く、季中に病作りて御暇請うて」

きなか 半文。半錢。錢の徑一寸の半といふ義。(寸は「き」といふ)。錢十文の半分。又、物事の僅少なことにいふ。五十年忌歌念佛上「喧嘩は降物、和御察達若しもの事があつたりとも、いかな九文半文(きなか)でも勘忍ばしめさせるな」

氣な奴 氣象の變つた奴といふ意か。一

代男八「かけろくに仕り、江戸へよね狂ひに參ると申す、さても氣なやつかな」

木になる 木のやうに堅くなる。俗にしやちこばるといふのであらう。孕常盤五「内には十五夜。冷泉も木になつて、牛若君も姫君も、二度の汗をぞ流しける」

きによろばう 生女房。男に接しない女房。生娘である女房。一代女三「人疎み果てければ、是非なく生女房にて爰に下りぬ」

きぬかけやま 衣掛山。衣笠山と同じ。山城國葛野郡等持院の北方にある山。昔、定家三弟子の一人、衣笠内大臣家良の別業のあつたといふ所。曾て宇多帝が、六月の盛夏に雪中の景を眺め給ふ爲とて、この山に白衣をかけ渡させられたと傳へられる。二代男二「庭には金銀の鳥臺、卷櫛箱衣袋の色製ね、古の衣掛山をこゝに寫す」

きぬぎぬ 後朝。別々になる意。男女相會した翌朝別れることから轉じた。武道傳來記「びくともせば、首と胴との後朝、さあ只今返事は、と」と

きぬくばり 衣配。年末に、正月の料にとて親戚友人、又目下の者などに衣裳

をくばり與へること。中古にも、禁中で正月初の子の日にこの事があつた。胸算用四「此の二十一日に例年の衣配り」とて、一門中下人ども彼是集めて、男小袖四十八、女小袖五十一、小斷中斷の小袖二十七、合せて百二十六、篋屋にて調へ、それへ給はりける」

きぬばり 絹張。絹布の兩端に附けて引張り、皺をのぼす爲に用ひる丸い木の棒。一代男「はしたの女まじりに、絹ばりしいしを放して、戀の染衣是は」。又、絹布を糊で張る板をいふ。

きね 神に仕へる人。殊に神樂を奏するもの。源氏烏帽子折五「天照大神、事も愚や御本社は(中略)、供物は三杵きねが神樂を參らする」

杵であたり杓子であたる (謔) 方々にあたり散らす。やつあたりをする。出世瀧徳上「憎まるゝ覺えはなけれど、お心に従はぬ恨を、杵であたり、杓子であたる御仕方か」

きのえね 甲子。きのえまち(甲子待)、又はきのえねまつり(甲子祭)の略。この日は、夜の祭(ね)の刻まで起きてゐて、大黒天を祭るのである。夫婦の交りもこの夜は避くべしとされてゐる。

五人女ニ「物のせはしき世渡りの中にも夫婦のかたらひを樂み(中略)、過ぎつる夜甲子をもかまはず何事をかし侍る」

きのくにごき 紀伊國五器。五器は御器で、食物を盛る器。後は特に櫛の稱となる。紀伊國は漆器の産地で、就中黒江塗は有名である。胸算用一「かんばし、塗箸、紀伊國五器」

きのそら 木の空。礎柱。鼻木の上。戀八卦柱曆<sup>木</sup>木の空にさらされて、かばねを鎗でつかれても。歌念佛上「一人の棹が木の空で、引張風になるが、それも見てゐられうか」

氣のつき 氣が盡きること。退屈すること。胸算用<sup>四</sup>「此の銀箱が世間を久しぶりにて見て、氣のつきを晴らすべし」

氣の毒 心の苦痛。情なく感ずること。(自分のことにいふ。他への同情の意に用ひるは後のこと)。一代男五「折ふしは眠り、きのどくなる夜の明るるを待つは、そのまゝ籠り堂の如し」。永代藏ニ「身過ぎは缺けて暇のあるほど氣の毒なるものはなし」。油地獄下「ハツ逢うては氣の毒隠れたい。卒爾ながら御免なれ」

氣の通る 「氣通る」と同じ。粹な。察しのよい。夕霧阿波鳴渡<sup>木</sup>、悋氣せぬ氣の通つた女房。二枚繪草紙上「こな様程の粹様が、是は又氣の通らぬ」

きのふの今日 物事が昨日あつて、また今日あることにいふ。續いて事件の起る時の言。心中卯月の紅葉生<sup>木</sup>、大耻かいたる昨日の今日、親の藏のやじり切り

きのほり 木登。獄門にかけられること。「木の空」へあがること。雪女五枚羽子板「春早々から獄門の相伴とは(中略)、賢臣の斯波左衛門を木上りさするか」

きは 着婆。印度釋尊時代の名醫。阿闍世王の庶兄で、出胎の時、針筒藥袋を持つてゐたと傳へられる。釋迦如來誕生會「典藥着婆を召しけるに、着婆御脈を伺ひ」。油地獄中「着婆でもいかぬ死病」

木は木、銀は銀 (諺)「木は木、金は金」。物事にきまりよく、區別のあるべき譬。永代藏<sup>四</sup>「唐土人は律義に言約束のたがはず、絹物に奥口せず、藥種にまぎれ物せず、木は木、銀は銀に幾年かかはる事なし」

きはきは 際際。(まきは。(その季節)季節。「きは」は支拂などすべき時をい

ふ。刃は水の朔日上「去年の春からきはきはに、或は百日・八十日、かけの算用不埒にて」

きはさみ 木鋏。木の枝など切るに用ひる鋏刀(はさみ)。二十不孝「木鋏かたげて立木によらず作るを五分、接木一枝を一分宛」

きはさみ 際際。髪を生えきはを、鬚で濃く化粧すること。又、その鬚。おきみ濃く、髪はぐるまげに高く前髪少なく。榮花咄<sup>三</sup>「紅粉、白粉、齒黒、黛、きはさみ」

きはだか 際高。節季になつて物價の高くなること。世間子息氣質<sup>五</sup>「このきは高で仕舞はれぬ」

きはづき 際附。きは立つて見えること。特に汚れ目などの輪廓。きは立つて見えるし(汚染)。油地獄下「著し出でたる己れが袷、所々のきはづき、こはばり。大裡の廳より御不審」

きははづき 際が附く。前條の動詞形。二代男<sup>三</sup>「玉水の裾にきはづきも、始末心にはしをり」

き

**きはの日** 節季の日。商賈上の大事な日。

生玉心中「際の日に商人の見世を捨てて、何處へぬつくり這入つてぞ」

**きばへんじやく** 着裝扁鵲。「きば及び「きじやくてん」の條を見よ。武道傳來記五「着裝扁鵲が再來の如く稱賛すれば」

**きひら** 生平。いちび(きりあき)で織つた布。晒してないが、質が精細で上品である。近江國犬上郡高宮の名産。たかみやぬの。二代男二「越後縮の帷子に、生平の羽織」。萬文反古五「生平の帷子、絹帶一筋」

**きふ** 牛夫。夜出歩いて商賈する私娼(惣嫁)の爲に、客引やその他の世話をする男。(被樓に於ける妓夫と匹敵するもの)。一代女六「君が寝巻の一ふし唄うて見しに聲おかしげなれば、牛夫に付聲させ」

**きふきふによりつりやう** 急急如律令。陰陽家が、呪文の末に唱へて、悪魔を驅り退かしめる語。(律令は雷神に伴つて疾走する鬼であるといふ。又、支那の公文書末に用ひる語から來た成語であるといふ)。油地獄中「鈴錫杖をちりりんがら〜、急々如律令と責めかく

も」

**きふきやうふう** 急驚風。驚風は小兒の腦膜炎で、痙攣を起す病。その急性なものといふ。松風村雨東帶鑑一「若君は、わつとばかりに御目を見つめ、御息絶入り給ひけり(中略)、是はまさしく急驚風」

**きふじどころ** 急爾所。急所。身體の要所。陸摩歌中「これ、急爾所をまづ此のやうに、お給仕でも致さんと、脇差さして參つたが」

**きふしよ** 給所。與へられた所。領地。傾城反魂香下「永代知行なされと頂戴させ、さて田上郡は給所々々の入組にて、地わり中々むつかしし」

**きふにん** 給人。武家で扶持米を與へて抱へ置く平ざむらひ。百日曾我二「御家人給人商人見物、行きかふ人にまぎれども」

**きふぶん** 給分。給料。給金。大矢數二「東風かぜの福原の家は格別ちや、給分やすくと半季居て見よ」。一代男三「機織る女さへ給分のつもりあり」

**給分立つ** 奉公人が與へられた給金を、主人に拂ひかへすこと。釋迦如來誕生會四「主と病に勝たれぬと雖も、主には

金さへあれば給分立つて埒明ける」

**きほうれき** 儀風曆。唐の高宗麟徳二年李淳風の作つた曆。高宗の儀風年中我が國に渡來したので名づける。即ち渡來は天武天皇の五年頃であるが、行はれたのは持統天皇の四年十一月からであつた。胸算用一「曆は持統天皇四年に、儀風曆より改りて日月の蝕をこよみの證據に世の人は疑ふことなし」

**きほひぐち** 競口。いきほひの立つはずみ。まぎれ。女腹切上「腹の立つきほひ口に、伯母を知らいで、みしらした」

**きまくら** 木枕。木製の枕。二十不孝一「片角に木枕をかひづめにして」。夕霧阿波鳴渡上「ひらり紙花七九寸、木枕に打敷きて」

**きまぶり** 木守。きまもり。枝に探り殘されてある果實。吉野都女楠五「うぬらが因果の木まぶり、梢に残つて鳥の餌食とならんより」。又、殘黨。遺族。國性爺一「成人して若宮に、忠臣の根つぎとなれ。我等が家の木まぶり」

**きみ** 君。遊君。女郎。一代男五「はした錢を投げれば、君たち聲をあげて、ゆふべの事はと、餘の事にして笑ひぬ」。二代男一「思ひ〜の床入、君どもに夢

驚かし」

**きみけいせい** 君傾城。遊女の資格高いもの。又、單なる傾城の意。丹波與作中「のう小よし小女郎、かうした勤めさまさまあれども、君傾城といふ者は此の類での玉様」

**きみしりなすび** 枝からむしり取つた茄子。まだよく熟さない小さいもの。菅原傳授手習鑑「出くる子供の頑はなき、顔は丸顔きみしり茄子」

**きめる** 詰問する。叱る。さいなむ。重井筒上「四百目は何にした、いきは聞かうときめらるゝ」

**きめん** 貴面。面會の敬語。拜肩。俗つれづれ「其許の衆中明日御出で、心事貴面に以上」。天網島上「互に一座も打絶え、貴面ならねば便りも聞かず」

**きもいりがほ** 肝煎顔。とりもちがほ。世話やきがほ。一代男七「お膳が出まする二階へ御出と、太鼓持ども、肝煎顔に申せば」

**きもいりなかま** 肝煎仲間。周旋屋仲間。晝夜用心記五「徒黨を組みての肝煎仲

き

問

**きもいりやど** 肝煎宿。雇人口入屋。武道傳來記六「あなたこなたの肝煎宿を頼みしに」

**きもせい** 肝煎。とりもつ。周旋する。戀八卦柱曆上「なんと助右衛門、男にほしいか。肝煎つてやらうか」

**肝煎やく** きもいる。世話やく。薩摩歌下「いはれぬ肝煎やかうより、町所家主を頼んで連れて歸りませう」

**肝のたばね** 臍腑のまん中。五臓六腑が束ねてあるものと考へてか、いふ。最明寺殿百人上臍中「ひやうと放つ矢に、肝の束ねを射通され、まつかい様に跳返し」

**肝を煎る** 「きもいる」と同じであるが、下例は我がことにいふ。氣にかける。

心配する。一代男七「かねく、瀧川に戀する者ありて、きもをいり、返事待つ事あるが」

**きもんかど** 鬼門角。陰陽家では、鬼星のある方を鬼門といひ、鬼が出入すると言つて忌み嫌ふ。その友角、即ち東北の隅をいふ。きもんずみ。織留四「此家鬼門角なる事を氣にかけ、殊更當年の金神にあたるといへば」

**きもんこんじん** 鬼門金神。前條の「鬼門」に、金神がいますことをいふ。金神は白虎神ともいひ、人間に災をふらす神、その居所は年々に替るといふ。前條参照。油地獄上「目玉の鬼門金神もなどやかに」

**きやうかいだう** 京海道。京街道。京都への街道。二十不孝「山城の伏見の里、墨染といふ所に(中略)、今は其の時に變りて、京海道の辻井戸となり」

**きやうかたびら** 經帷子。死人に着せる衣。白麻で作り、おくみに南無阿彌陀佛など書くのが常である。男色大鑑「經

かたびらを縫はせ、早桶を誂へ。百日曾我三「兄弟最期のはれ小袖(中略)、歸る心に本来の、經帷子と觀念し」

きやうがる きやうがる。「興がる」で、もと面白く感ずることであるが、轉じて、奇怪に意外に感ずることにいふ。二枚綺草紙中「それはきやうがる今開いたと、頭を振り顔を擧めける」

きやうき 行基。(地名)攝津國阿邊郡昆陽野、昆陽寺門前邊の俗稱。この寺が僧行基の創建で、行基寺とも稱し、單に行基ともいふところから來たといふ。百合若大臣野守鏡三「きやうきか山田まで召しまして、それから前々お借りなされ」

きやうぎ 行儀。しわざ。おこなひ。行爲。戀八卦柱上「見限り果てた旦那殿しつかい盗人の行儀か」

ぎやうぎつよし 行儀強し。行儀正しい。よく行儀どほりにする。油地獄下「本親の旦那もぎやうづよく、義理も情も知つたる人」。堀川波鼓上「殊にお屋敷行儀づよく、此のやうな親里でも、一夜泊りも法度なり」

きやうこそで 京小袖。京染の小袖。日本武尊吾妻鑑三「京小袖似せむらさき

のかさね棲」

きやうごま 京獨樂。京都で流行した獨樂。松風村雨東帶鑑四「出て行く我は京獨樂、彼の人の心の内は獨樂の心」

きやうざうり 京草履。はちくの竹の皮で造り、びらうたなどで縁を取つた婦人用の草履。我衣に「京草履とてはちくにて拵へたるあり。元祿の頃は「やるといひ、圖も載せてある。もと京都で製出したので名づける。俗つれづれ三「淺黄緒の京草履に、片足は糸竹の男形はきませて」



履はうき

きやうざけ 京酒。京や上方から仕入れた酒。くだりざけ(地酒の對)。堀川波鼓上「方々吟味致せども、是れには中々京酒も及びなし」

ぎやうじ 行事。町内又は商人の組合などを代表して事務を處する者。卯月紅葉上「年寄行事も封を切らぬ書置を傳三が知らう筈がない」

きやうしや 香車。(一)將棋の駒の一。「やり」とも稱するので、(二)妓樓のやりて(遣手)の異稱となつたのであらう。置土産「香車の象が十四五手づつ先を

みすかし」。傾城反魂香下「供の又平日傘、さしづめ香車は女房なり。いつならはしの道中も、心つければ振りやす

きやうじやこう 行者講。大和國金峯山藏王權現に參詣する講中。山上講。山上參。油地獄中「山上參の、行者講のと、今年も身どもが手から四貫六百」

きやうすずめ 京雀。京都の地の事情に馴れた者の稱。柳亭筆記に「雀といひ鳥といふは、その郷に馴れ、又その道に馴れたる者をいふ」とある。用明天皇職人鑑三「やいそこな鉄取の京雀、おのれは上方案内もの」

ぎやうずるぶね 行水船。据風呂をしかけた小舟。港に碇泊中の舟々を漕ぎ廻り、湯錢を取つて舟人たちに入浴させるもの。永代藏六「後には思ひのほかなる智慧を出して、舟つきの自由させる行水舟をこしらへ」

きやうちやく 京着。京の地に着く。着京。武道傳來記「七月二十五日に京着して。榮花咄「定まりの道中、十一日目に京着して 先づ三條の橋詰に宿借りて」

きやうとし けうとし。氣のすすまない。

きやうとし

興ざめたいやな。工合の悪い。又、おそろしいさま。傾城反魂香中「まあ／＼きやうといことが出来まして、御苦勞でござんす」。孕常盤四「さざめく聲、ほの聞ければ牛若は、きやうとくも逃げ入らず」。薩摩歌上「きやうとや怖（こ）けや」

ぎやうな 仰山な。おほぎやうな。おほげさな。傾城反魂香中「それはぎやうな喰ひつき様、さうして互にあかせたら跡のためには珍重」

ぎやうに 前條の副詞形。仰山に。非常に。丹波與作上「エ、此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の内がけつこでござる」

ぎやうにん 行人。佛教又は修驗道などで、行を修める人。行者。修行者。一代男八「行人が水へ入るより易いこと」。二代男二「行人になつて、後の世を深く願ひたまふとや」

きやうねんぶつ 經念佛。經を讀み念佛すること。博多小女郎上「奥の間に、經念佛して御座るでないか」

京の太郎坊 京都愛宕山の天狗の稱。榮花咄四「京の太郎坊が掴みしやうにも沙汰いたせしが」

きやうはごいた 京羽子板。京都製の羽子板。胸算川五「正月の景色、京羽子板玉ぶりぶり」

きやうばし 京橋。(一)大阪城の西北口、北に渡ると片町網島大長寺に到る。(二)山城國伏見にある。宇治川に架ける。大阪へ往來する舟つき場。永代藏三「京橋に出て、くだり舟にたより、請賣の燒酎諸白」

きやうひ 狂斐。文章又は文字といふ意であらう。漢語としては、進取の氣に富み文飾ある」ことであるが、その轉用であらう。萬支反古三「今や拙き狂斐をつづりあつめて懷を逃ぶる」

ぎやうぶ 行步。あゆむこと。歩行。心中宵庚申中「五十といふ年の内は、行歩心に任せずながら、心は若かりし昔に變らず」

きやうものだな 京物店。京都産の品物を賣る店。男色大鑑「駿河なる府中の町に、京物だなを出だせし人の一子」

ぎやうや 行屋。佛教又は修驗道などの行を業にする家。祈禱の行をする家。その人。晝夜用心記三「今晴明と大看板をかけて、萬づ見通しの大法印あり。此の行屋へ八之丞を伴ひ」

きやうよむと町 經讀鳥。「ほととぎすを經よむ鳥といひ、又はめいどの鳥ともいふ。此事くはしく十王經に出でたり」(なにはみやげ)。又鳴く聲が似てゐるので、鶯の異名ともする。曾根崎心中「七千餘卷の經堂に、經讀むとりの時ぞとて」

きやうろく 京六で、京都でいふ六寸か。二代男一「黒糸の縫紋、きやうろくの幅廣帯、こぶし絹の二布」

きやきや 心配して胸を痛めるさま。ひやひや。丹波與作中「私やあぶなうてきやきやする。南無地藏様」

ぎやく 逆。道にはづれたこと。よこしまなこと。すなほでないこと、又、その人にいふ。油地獄中「ぎやくな弟に似ぬ心、順慶町の兄内屋太兵衛」

ぎやくえん 逆縁。願當でないことによつて佛縁を結ぶこと。武道傳來記六「逆縁ながらと道明寺の側に庵卜め、妙理比丘尼と名を改め」。轉じて、事の序でにすることにいふ。

ぎやくじゆの朱の色 ぎやくじゆ(逆修)は、生前に死後の誓をしておくこと。朱の色は墓石に刻んだ戒名に朱を入れ

たのをいふ。曾我扇八景上「河津の墓は

き

野づらの石、文字も苔に埋もれて、母の逆修の朱の色も露に朽ちてぞ残りける」

きやくしん 隔心。へだてる心。よそ〜しい心。隔意。背庚申中「よそほかでも有るやうにきやくしんがましい」。油地獄上「二十年添ふ中、隔心隔であるやうに」

きやしや 花車。華奢。①ほつそりとして上品なこと。槍襪三上「三人の子の親でも、きやしや骨ばその生れつき。②風流なこと。上品なものの好み。兩吟「千句「懷紙折桐の箱より出されて、都は惣じて花車な事のみ」

きやしやあきらひ 花車商。風流韻事に必要なもの、遊藝に用ひるもの、贅澤な好みに使ふ物を商ふこと。その店。永代藏六「鮫、書物、香具、絹布、かやうの花車商ひは、かざりの手廣きがよし」。胸算用三「花車商ひ諸職人の細工も思案變りて止めける」

きやしやあそび 花車遊。風流な、贅澤なあそび。監土産四「風待つ納涼床に名の木を薫らせば、初雪の晨は歌に心をなし、世にある花車遊を盡し、雨の折節は杜鵑も鳴けかし、鶯も數見る夜の

慰み

きやしやがる 花車が。上品らしくする。花車な風をよそほふ。一代男六「花車がつておとなしく、すこしすんどに見ゆる時もあり」

きやしやごと 花車事。風雅なこと。趣味あるすざび。風流談。二代男一「近衛殿の糸標、中院殿の歌ばなし、萬づ花車事で埒をあけ」

きやしやだうぐ 花車道具。優しいたしなみに用ひる道具。贅澤品。遊藝や化粧の道具。百合若大臣野守鏡三「袖に大事の名香あり。琴の爪でも鏡でも望みに遣らう乗せてたもやとありければ

(中略)そんなきやしや道具、米屋味噌屋に受取るか。尙、「きやしやあきなひ」、「きやしやものうり」の條参照。

きやしやづく 花車盡。物事を花車にする。こと。すべてお上品にふるまひ爲すこと。一代男六「餅花を散らし、炮烙に香らせ、一座花車づくをやめて向ふ商のつづく程くへど」

きやしやもの ①花車者。きやしやな人。聖徳太子繪傳記「女小姓のその中に、玉鶴といふきやしや者」。②花車物。花車ごとに用ひるもの。花車道具。次條

参照。

きやしやものうり 花車物賣。花車道具を賣る店。又、その人。加賀掾宇治嘉太夫の正本「亂曲揃」の「きやしや物うり」の條に擧げてある品目を見ると、「はつね」、「しらぎく」、「らんじやたい」などの名香、「御所ぶんど」、「だいらびな」、「おとぎばうこ」などの調度玩具、その他、うちは「琴・琴の爪や糸、色紙・短冊・香包・ふせごなど。

きやふ 脚布。婦人の腰巻。ゆもじ。ふたの。一代男三「とびさやの脚布、嫌ぶくる懸けて有りしはくせものなり」

きやみ 氣病。心配の結果起る病。出世瀧徳下「女房お半は、お身の上を苦に致し、氣病を煩ひ」。雪女五枚羽子板中

「思ひ積つて氣病となり、今養生の眞最中」

きやら 伽羅。①香料の一。沈香(ちんかう)に屬する木の、土中に埋もれたのを掘り出したもの。一代男二「夏をのがれたる蚊もあればとて、摺鉢にすり糠を煙らせける、烟と思へば是も伽羅の心地して」。同六「酒も出かしだてに飲み、伽羅も惜まざ焼きすて」。②金銀の隠語。用捨箱に、空林風葉(天和



三年刊)の中の季好の句「笑ひ顔伽羅もらはばや若夷」を引いて、「句意は花街の隠語に、金銀の事を伽羅といふ、それを貫はばやとて笑顔をつくるかと言ひたてたるなり」といひ、「若夷を遊女にとりなしたり」と説いてゐる。(何によらず、よいもの、上等なものを賞めていふ。平常整四「通ひ迷へる笹竹の、一節の情をかけ給へ、吾妻の伽羅とぞ申しける」とは、淨瑠璃御前のことである。「きやらの男」は立派な男のこと。

**きやらざいく** 伽羅細工。伽羅木(きやらぼく)その他いろ／＼の名木で、細工ものをすること。その細工品。それを職とする人。女腹切上「大阪の叔母御とは、伽羅細工の甚五郎の内儀か」

**きやらのあぶら** 伽羅油。髪附油の一種。正保慶安の頃、京都室町髭の久吉といふ者が賣り始めたといふ。(近代世事談)。

**きやらのじ** 伽羅字。金銀の隠語。用捨箱の「金銀を伽羅といふ隠語」の條に「あくる春のつかひとて、きやらのじつかはすべし」といふ、吉原雀(寛文七年刊)の文が引いてある。

**きやらぼく** 伽羅木。一位科に屬する常緑樹。名木の一。庭園に栽ゑて觀賞用ともする。津國女夫池四「伽羅木の床框、廣東沈の違ひ棚」

**きやらめ** 「きやら」の句と同じ。美人。器量よし。萬年草上「ぬしが妹にお梅と申して、ずんと伽羅めでござれども」  
**きやらや** 伽羅屋。伽羅の油を賣る店の稱か。或は、伽羅細工店か。懷硯五「その座に伽羅屋の新吉といへる美男に、二世まで思はれたきとて」

**伽羅割の鈍** 伽羅(香木)を割るに用ひる鈍(なた)のこと。武道傳來記八「矢管のもとに伽羅割の鈍などのありしに、何とやら此女奥ゆかしく」

**きやり** 木遣。重い材木などを運ぶこと。又その時のかげこゑ。萬年草上「時に麓の山どよむ、木遣に法のひんよゑい」。(きやりうた。即ち、材木に限らず、一般に重いものを動かす時に歌ふ唄。一人が音頭を取つて、他の多勢が之に従つて和す



りやき

るもの。用明天皇職人鑑三「この鐘を山路が木やりで引きあげよ」

**きよう** 器用。(一)上手。巧みなこと。(二)立派。美しい。かしい。槍權三下「彼の業人の畜生の人でなしの腹から、この様な器用な子を何ともして産み出した」。出世瀧徳下「氣遣しやるな、にげはせぬと、尤も器用な白狀一」

**きようがる** 興がる。めつさうな。奇怪な。すべて常軌を逸したことにいふ。「きやうがる」の條参照。松風村雨東帯鑑三興がる事を問ふ人かな、浦島太郎といふ人は、何百年か以前の事」。百日曾我四「朝比奈が我が儘今に始めぬ事ながら、是れは餘り興がつたり」

**きようちよ** 興女。遊女の異稱。一代女「只興女は酒なんとの一座は所々にて、りくつ詰なるつめひらき、少し勿體をつけ、むつかしく見せて物數言はぬこそよけれ」

**きようもの** 器用者。かしいもの。聞きわけある者。槍權三下「小さい奴等によく申し付けたるが、何と吠えはいたさぬかな、イヤ／＼器用者共、そこは氣遣めさるな」

**きよくするのえん** 曲水宴。ごくするの

えん。三月三日、水邊に宴し、盃を上流から流して、己れが前を過ぎないうち詩を作り、後盃を把つて飲むこと。支那から傳つた行事。大矢數三「月見花見町をはばかる計也、持合せたる曲水の宴」。一代男六「三日は曲水のゑんにたよりて、傳七があふ日也」

**きよくだいこ** 曲太鼓。種々のあひの手を入れ、さま／＼にあやなして打つ太鼓。五人女一「人むら立て、曲太鼓大神樂の來り、おの／＼のあそび所を見かけ」

**きよくつづみ** 曲鼓。前條の類語。鼓をあやなして打つこと。雪女五枚羽子板中「面白い事して聞かせうと、戀も鳴手の曲鼓」

**きよくてう** 曲鳥。山がらなど、曲藝をする鳥のこと。娥歌加留多一「さすが馴れたる曲鳥の、宙にて羽がやし二つ三つくるり〜」

**きよくのみ** 曲飲。酒などを種々の曲藝をしたがらたはむれ飲むこと。大下馬三「あうむ盃を交はし、曲飲するもをかし」

**きよくまくら** 曲枕。枕で曲藝をすること。枕の曲取り。傾城反魂香上「枕がへ

しの曲枕、おつ取りおつ取り、はらりはらり」。まくらをどり。

**きよくまり** 曲鞠。曲藝をしたがら鞠を蹴ること、又突くこと。鞠で藝をする。こと。大矢數五「曲鞠も今はすたり夜の月、あらし計りや小芝居の露」。吉野都女楠三「歌連歌の道にも達し、鞠は曲鞠の品々まで暗からず」

**きよくろく** 曲象。椅子の一種。寄りかかりを圓く曲げ、脚は牀几のやうに打違ひにしたのが普通である。丹波與作中「七つ蒲團にソソレハ曲象据ゑて、我も昔は乗りし身を」

**きよは** きよわ(氣弱)。氣の弱いこと。元氣のないこと。卯月潤色中「貧の病に肩身もすぼり、可愛やきよはな甥姪を踏付にさせ」

**きよま** 清間。きよめた間(部屋)。用明天皇職人鑑二「親王を奥のきよまに御とももの」

**清めの鹽水** けがれを清めるために打つ鹽水。米の朔日上「打つて清めの鹽水や、跡は火をかへ水をかへ」

**きよらう** 虚勞。精神衰弱の病。日本振袖始三「虚勞陰去火動神、腹痛頭痛の頭神」

**きよくりう** 支那人の名。傳未詳。百日常我二「養由が術、きよくりうが神變も、かなふべしとも見えざりけり」

**きよろり** ぼんやり。けるり。氣のぬけた様子。平氣なさま。國性爺二「のうのうもてう沙がさいて來る。何をきよろりとしてぞいの」

**居をくろむ** 住居をくらます。人に知られぬやうに住む。武道傳來記六「初瀬の里にゆかりの者を頼みて、爰に居をくろめける」

**きり** 雲母。(鐵物)きらら。うんも。白色と黒色との二種あつて、何れも紙のやうに薄く剝げる。これを細粉のやうにして紙などに引く。織留二「澁油にきらを引て、雨夜のちやうちんといふを始めて」

**きらず** 雪花菜。不切。豆腐のしぼりかす。から。堀川波鼓下「豆腐商ふ商人のきらずきらずと聲高に」

**きり** 切。(シ)しきり。期限。二代男八「身拔をさせぬ手形を書くなり、切り近づけば又借替へ。(シ)終り。芝居などの最後の幕、おほきり。今宮心中上「序にて作りし悪心の、切りで報いのくる時は」。(白)「きりふだ」の略。かるたなど

で、他の札を支配する力の特に大きな  
ふだ。大矢数五「馬のきりあがる所の小  
庭に、間屋つきして風の音信」。四駕昇  
などの用ひる、三の隠語。日本西王母  
三「きり、がれん駕やろいとぞ涙ぐむ」  
きりあな 錐穴。切穴。楊弓の、的の中  
央にある穴。一代男三「取弓取矢にして  
四本はづれず、一筋は切穴に通れば、  
座中目を覺して」

きりあひ人形 斬台ふやうに仕組んだ人  
形か。物種集上「舟人も肩で息する計  
也、浪のよせ来るきりあひ人形」  
きりおうち 切るかさ。きる分量。きり  
で。浦島年代記二「殊に切りおうちのあ  
ること、少し薄目にはやせば、片身で  
六十人のおかずは覚えが御さんす」と  
は魚をおろす時のこと。

きりか きりかみ(切髪)の略であるとい  
ふ。切髪してゐる人。老婆にいふ。傾  
城反魂香上「お茶の間のきりかが、五十  
餘りの厚化粧」

きりがね 切金。薄い金銀の板をいろい  
ろの形に切つたもの。蒔繪その他のか  
ざりに用ひる。俗つれど「一庵形の挿  
櫛に切金の折菊」

きりがやつ 桐谷。櫻の一種。鎌倉桐谷

から出た名。莖長く、淡紅色で八重に  
咲く。一重もまじる。くるまがへし。  
賀古教信七墓廻三「桐が谷、来るまじき  
は天眼にては火櫻や」

きりきり 早速。てきばき。ぐずぐず  
ず。戀八卦柱下「エ、きりぐずぐず戻りは  
せず、此身になつて恵方参り所か」。薩  
摩歌下「きりぐず戻りや迎ひに來た」

きりぎり 頭のつむじ(旋毛)。曾根崎心  
中「憎いとも無念とも、己れが頭のぎ  
りぎりから、爪先まで斬り刻んでも、  
これが腹がいるものか」

きりこだいこ 切籠太鼓。切籠がた(四  
角なもの)の角角を切取つた形)の太鼓。  
姫山姥三「影に映らふ燈籠の、色を換へ  
種を換へ、切籠太鼓のなりよし」

きりこどうろう 切籠燈籠。切子燈籠。  
切籠の形にわくを組み、四方の角々に  
花を付け、紙吊などを細く切つて飾り  
垂らしたものを。織留三「切子の灯籠上に  
釣り、下に節季候愛をせんと舞ふ所」

きりさし 桐差。桐指。桐村で作つた指  
物細工の稱。新可笑記四「桐差の枕箱三  
つあり」

きりしたん 切支丹。吉利支丹。天主教  
の僧が布教の方便として使用し、人々

をして魔術であると思はしめた理化学  
應用の技術。大矢数一「偽りのなき世な  
りせば吉利支丹、一たび百姓もと土は  
土なり」

きりじゆんぎ 義理順義。義理人情にか  
なつたこと。義理合ひ。作法。姫山姥  
一「若し此方が奉公の身で、義理順義も  
あるものと、一錢も身につけず、皆こな  
たに渡すぞや」

きりちやちやくる 所きはらず切る。き  
ずだらけにする。きりたたくる。堀川  
波鼓下「さても切つたはく。あら髪剃  
の刀は劍、天窓うちを切りちやちやく  
つた」

きりつけ 切附。物の形を切つて、衣服  
の模様などにつけること。又、その物。  
一代男六「上は緋緞子に五色のきり付」  
五人女三「上は鼠じゆすに百羽雀のき  
りつけ、段染の一幅帯」

きりづめ 義理詰。義理に迫ること。義  
理づく。義理でどうしようもなくなる  
こと。天網鳥上「あゝ死にまじよと、引  
くに引かれぬ義理詰めに、ふつと言ひ  
かはし」

きりど 切戸。門の脇などにある、小さな  
潜つて出入する戸口。くぐりと。一代

き

男「人静まつて後、これなるきり戸をあけて」

**きりととり** 切取。人を殺して物を盗み取るもの。冥途飛脚上「もし盗賊か切取りか、道からふつと出来心」。松風村雨東帶鑿「ハテ火つけ切りとりしたでもなし」

**きりなは** 切繩。斬罪人を縛るに用ひる繩。繩を適宜に切つて、部分々々を縛るのである。五十年忌歌念佛下「腕捻ちあげ、はや切繩にぞかけてける」

**きりぬきせつゐん** 切貫雪隠。一代男「四條の切貫雪隠といふは、故ある後室など(中略)彼の雪隠に入りて、それより内へ通ひありて、事せはしき出逢ひ也」

**きりのう** 切能。その日の最後に演ずる能。番組の最終になつてゐる能樂。兩吟一日千句「さて修羅道に地獄谷まで、きり能や一足飛に越えぬらん」

**きりのし** 切刃斗。のしあはび(刃斗鮑)を適當に切つたものであらう。一代男五「へぎに切刃斗の取者を持て」

**きりのと** きりのたう(桐蔭)のこと。紋所の名。轉じて、その「きりのたう」の形のついたもの、殊に「一步金」の

ことをいふ。一代女二「革袋一つ投げ出せば、楯のとの角なる物三升程打ち明け、今くれかぬる一步を一握づつ蒔きければ」。一代男七「光をかざる桐のとを貰ひ、機嫌のよき顔つきを見る事ぞかし」。榮花咄四「いでその時の白菊は楯のといふに替へて、小判貳百兩」

**きりばかま** 切袴。長袴に對して、普通のたけの袴をいふ。最明寺殿百人上臈下「長袴、切袴、へいれい、白丁」

**きりばね** 切羽子。羽子のはずみをよくするために、その端を少しづつ切りすたもの。雪女五枚羽子板中「きり羽子つん羽子、二役、三役、笑顔つく徳つく色がつく」

**嚢は袋** 「雉は袋」で、袋の中の雉が外に顯はれ易いところから、物事の秘密にできないことにかけていふ。堀川波鼓上「拙者は他言致すまいが、霧は袋と外よりの、取沙汰は存せぬ」

**きりびなは** 切火繩。短く切つて火をつけ、火繩鐵砲を發する時に用ひる火繩。**切火繩一寸** 時の短いことの譬。ときの間(ま)。またたく間。二十不孝四「切

火繩一寸のうちに、五里の所を早船にて」。榮花咄「早船を借切り古里の所

横渡しに、切火繩一寸立たぬうちに、かの町に着きて」

**きりぼんたう** 切棒黨。駕籠かき仲間。もと短い棒で昇くのが切棒駕籠で、それを昇く者をいふ。百合若大臣野守鏡三「色里の四枚肩、一度も不覺の名を取らず。きりぼんたうに隠れない此城へ」

**きりまい** 切米。扶持米を數回に分け、又は金錢に切りかへて渡すこと。その米、その金錢の稱。給料。給金。萬文反古「京より百兩きりまいのお妾女二人かゝへ」。武道傳來記五「即座に切米十石の御加増」。薩摩歌上「して切米は何程欲しい。半季に二兩二分下され」

**きりまく** 切幕。あげまく(揚幕)に同じ。大矢數「作り聲にてそれは鳴るか、きり幕の内より赤い顔を出し」

**きります** 切増す(動詞)。切(きり)を増す。期限を延ばす。女腹切中「がらり二十兩ま一年切りまし、居なりに居れば借錢も先づその分」。同「又年を切りまして、男に添はせまいとはあんまり酷うござんする」

**きりまど** 切窓。羽目板、壁などに切りあけた窓。敷居のない窓。一代男二「細路次長屋作りの入口を並べ、何れも北

あかりのきり窓よりのぞけば  
きりむぎ 切麥。小麦の粉をこねてうどんのやうに製し、細く切つたもの。素麵のたぐひ。夏には「ひやむぎ」として用ひる。薩摩歌上「譬へば饅餈と切麥、汁は同じ醬油」。同「切麥でさへ此のお情、こんな事なら箸ついでに、饅餈も一膳」

切目に鹽 (謔) 切つたきずあとなどに、鹽がしみる。身にしみてこたへる。譬。萬文反古「我等も只今御異見の事ども切目に鹽のしむやうに存じ」

きりあかう 切回向。淨土宗の回向のしかたであらう。天網島下「寺も念佛も切回向、有縁無縁乃至法界、平等の聲を限り回向の上より」

きれ 切。小判金や分判金を數へる時の用語。一步「一角」をいふ。きり。二枚繪草紙中「白銀五百日貳包、小判廿五兩壹歩合せて四十枚、改めて預つた」

きれかはる 切替。全くかはる。氣分、趣きなどの一變する。きりかはる。新小夜嵐物語上「よね狂ひもさしてきれ替たる事にもあらず」  
きれど 切戸。(地名)丹後國宮津に近く天橋立に渡るところ。文珠さまで名高

き

い。五人女三「やうく日數ふりて丹後路に入て、切戸の文珠堂に通夜してまどろみしに」

きれもの 切物。(よく切れるもの(双物)。(種の盡きてゐるもの。めつたに無いもの。國性爺三「方々尋ねても折しも悪う、お齒に合ひさうな相撲取が切れ物なりとぞ申しける」。新小夜嵐物語上「今都に冬めきて切れ物は、東山の郭公と女郎買ひ、(中略)、金子のある中お心の替らぬやうに祈れ」

ぎろつく ぎらつく。ぎら／＼と眼にさはる。薩摩歌中「見えぬ孝行せうよりもこれ鼻の先にぎろつく此の母に孝行なら」

きわきざし 木脇差。木製の脇ざし。木刀。一代女「金造りの木脇ざし」  
きわた 木綿。生綿。もめんわた。綿花。一代男七「親達の方に、木綿が入るとあれば、塵までよらして百斤迄、四五日あとも進上申」

ぎえん 「ぎえん」を見よ。  
氣を嗜む わるびれず。氣を張る。出世瀧徳下「そなたも死にや、おれも死なうと、若い同志は氣を嗜み、死を先立てて涙を隠す」

氣を詰める 氣のつまるやうな思ひをする。氣をふさぐ。氣苦勞する。壽門松中「一日も氣を詰めぬ人、煩ひも出でようが、何がな心慰みと」

きをとこ 木男。生男。まるきり男のみで、女氣のまじらぬこと。又、うぶな男。女に馴れない男。木強漢。一代男八「惣じて役者子どもの世の暮し、けふあつて明日は雪の柳の如し、きれいにほどなくもとの木男となりぬ」。同四「木曾の麻衣に着かへさせ、女郎に仕立てぬこそあれ(中略)、まんざらの木男よりはまさるべし」。松風村雨東帶鑑四「皆生男の合宿、氣遣ひでたりませぬ。女子衆と一所にどうぞ寢させて」

氣をとほす 氣を利かす。粹をきかす。お察しをよくする。一代男四「心のまゝ此の銀つかへと、母親氣を通して、二萬五千貫日、たしかに渡しける」。曾根崎心中「あげづめ大か盡、お船がすわつた。我々は氣を通すぞと、聲々にわる口言うて歸りける」

氣を取る 機嫌を取る。氣にあふやうにする。置土産三「芝居見の出家衆に氣を取り、札一枚讀込みても三文徳がある」

**きをり**に。木折に。氣折に。氣短かに。

容易に。無造作に。木を折るやうに簡單に事をする義ともいふ。つれづれ草二「數ならぬみ山木の、木折にならぬ戀の道」。浮世親仁形氣五「親仁の堅法華を知つてゐるゆゑ、木をりにならぬといつては、わせてから間もなきに親子喧嘩になつて」

**きをん** 祇園。きをんしやうじや(祇園精舍)の略。賀古敦信七藝廻五「摩訶陀國に邪を防ぎて祇園を構へ」

**きをんぐるひ** 祇園狂。京都祇園町の遊女に溺れること。祇園町のお山ぐるひ。女腹切上「どこへうせた。又祇園狂ひか宮川町か繩手か」

**きをんぢようらう** 祇園女郎。京都祇園町の女郎。織留六「けふは十四日の祇園女郎の物日とて」

**祇園の山鉾** 祇園神社の祭禮に出る山車(だし)。長刀鉾、函谷鉾、放下鉾、鶏鉾、菊水鉾、月鉾などあり、高さ十數丈。屋臺には錦織の幕を張り、正面に寶冠を戴き腰に羯鼓をつけた一人の兒、その左右に侍童がある。別に笛太鼓などで囃をする。屋臺の下は二双の車輪を附け左右に大繩を施して數十人で之

を曳き、町々を巡り行く。織留六「春秋も知らず、七日の祇園の山鉾の有様つひに見たる事もなく」

**きをんばう** 祇園坊。くしがき(串柿)のこと、大阪地方でいふ。傾城酒吞童子四「金絲の綱を透きかけて、髭籠に籠めし祇園坊」

**きをんははき** 祇園袴。二代男「見及び聞傳へしは、松の葉の塵なれば、祇園袴の跡までも、心の奇麗なる事ばかり顯はし、よし無き事は枯葉つるものにぞ」

**きをんまつり** 祇園祭。京都祇園神社の祭禮。きをんゑ。御靈會。昔は六月七日から行はれたが、今では七月十七日から廿四日までである。堀川波鼓下「是れで客に行つたらば、祇園祭ではなうて軍神の血祭ぢや」

**きん** 馨。鑿。讀經の前後、又その中間に於て桴(ばち)で打ち鳴らすもの。銅製で鈴の形をなし、徑が一、二尺あり、褥を敷いた臺の上に置く。各宗の寺で用ひられる。聖徳太子繪傳記四「日影うらなくさえわたり、きんに連れたる木魚の聲、殊勝氣に修行者の一」

**きんあん** 斥鷃(せきあん)の誤讀。斥鷃

は澤邊に棲む小鳥で、雄飛する力のないもの。藍染川五「この廣風を討たんとは、きんあんが鷄、猿猴が月」

**金一角** 一分(歩)判、猿猴のこと。角とはその形が長方形であるのでいふ。一兩の四分の一に當る。一代女二「一人を金一角と定めおきしはかるゆきなる呼物なり」

**金一枚** 判金一枚。七兩二歩に相當する。大矢數四「正眞まさに初瀬の觀音、極樂の光なりけり金一枚」。金子一枚

**銀一枚** 判銀一枚。特に三寸許りの平たい楕圓形をした銀、紙に包んで贈答に用ひるもの一枚。四十三匁に相當する。一代女「名を得し舞子も銀一枚に定めし」。男色大鑑六「吉彌はすぐれて美形を藝子にして、金玉を金子にて磨きける程におのづから太夫にそなはり、肌より銀一枚光さして」。銀一枚は當時若衆の値段であつたと見える。

**きん入り** 金入。織物の模様などに、金糸の入つてゐること。又、その物。一代男三「いづれも袖の品をかへ、金入の襟をかけぬといふことなし」。男色大鑑八「淺黄地の金入にて裏を打ちし菅笠」

**きんか** 金柑。次條の略。一代女六「天窓

はきんかなる人あり。大矢數二一月は  
峯きんかの山や光るらん、十筋右衛門  
が瀧の糸露」

きんかあたま 金柑頭。禿げて金柑のや  
うに光る頭。きんかんあたま。女腹切  
中「きんか頭に無用の提燈、門口にふつ  
と消し」

きんがきぐらる 金書位。大弓にいふ詞。  
百本の中、七十五本以上九十本以下を  
的中させる力量あるものの稱(俚言集  
覽)。かながよい。尙、「おほかながよい」の  
條を見よ。永代藏六「楊弓は金書ぐら  
る、小歌は本手の名人」

きんかた 銀方。金を貸す方。債權者。  
金主。戀八卦柱厩上「内證で八貫目の質  
に入れたを、前の銀方が聞きつけ」

きんかんふ 鉄の一種。金柑の形をした  
黄色の鉄。僧家でよく用ひる。萬文反  
古「吸物燕巢にきんかん鉄、いづれも  
味噌汁の吸物無用に候」

きんぎよ 銀魚。金魚の一種。置土産ニ  
「眞鍮屋の市左衛門とて、隠れもなき金  
魚銀魚を賣るものあり」

金銀が町人の氏系圖 (諺) 永代藏六「俗  
姓筋目にもかまはず只金銀が町人の氏  
系圖になるぞかし。たとへば大織冠の

系あるにしてから、町居住ひの身は貧  
なれば猿まはしの身に劣るなり。金銀  
が町人の身分を定めるとの譬。

金銀は廻はり持ち (諺) 金銀はつきく  
に人の手に渡つて行くことの譬。永代  
藏四「金銀はまはり持ち、念力にまかせ  
溜るまじき物にはあらず」

金銀は湧きもの (諺) 金銀も時には苦勞  
なくして出来る、いつか知ら儲けられ  
るとの意。一代女五「金銀はわきもの  
と、色好むうちに五十歳となりぬ」

きんご 金吾。遊女の一階級。天神に次  
ぐもの。かこひ。一代男七「庭には金吾  
の長持を運び」。榮花咄四「惟ふに遊女  
は貧乏公家と同じ(中略)、殊に金吾情  
あるやうに見えて、男いくたりか思ひ  
つき」

きんこくもく 金剋木。五行相剋の説で  
金は木に剋つとする。傾城酒吞童子一  
「大刀と割木の金剋木、火花を散らし切  
り立つる」。基盤太平記「金剋木火剋金  
白滅の相顯れたり」

きんこざね 金小札。鍔の小札(普通よ  
り小さい札)の金で作つたもの。金色  
のこざね。文武五人男「金小札の光こ  
そあらはれ渡る川霧や」

きんこじの冠 金巾子(きんこじ)、即ち  
金箔を押した巾子紙(檀紙を合せて厚  
くして中を切りさいたもの)を、巾子  
(髻を入れる爲に、冠の高く立つてゐる  
ところ)に附けた冠。天皇の召し給ふ  
もの。大職冠三「入鹿の大臣、金巾子の  
冠、菊塵の裝束、さながら天子のよそ  
ほひ」

きんざ 金座。金貨鑄造を掌る役所、勘  
定奉行の配下に屬してゐた。晝夜用心  
記三「臺歩小判御用ならば、金座とい  
うて公儀より仰付けらるゝ役所あり」

きんざ 銀座。金座と同様に銀貨鑄造を  
掌つた役所。織留二「諸國の惣年寄、金  
座、銀座、朱座」

きんざしゆう 銀座衆。銀座に勤めてゐ  
る人達。晝夜用心記五「乗物四枚肩にて  
手下下男六七人、挾箱の棒二間程ある  
は、銀座衆かと問へば」

きんざらさ 金更紗。金糸の繻を施した  
更紗。博多小女郎中「金更紗の財布とも  
に投げ出せば」

きんしうだん 錦繡段。詩集の名。文明  
年中五山の僧天隱龍澤が、唐・宋・元三  
代の七絶を選集したもので二卷ある。  
最明寺殿百人上臈上「四書・古文・三體

き

詩・錦緞段

きんしや 金車。遊里で金銀を澤山使ふ

ことをば「金車引く」といひ、又、單に「金車」といつて、その使ふ人も指す。轉じて、金銀を使ふ「馬鹿もの」の意に用ひ、更に、金車を金茶と訛つて「金茶金十郎」などと呼んだといふ。二代男三「今のはやりも呼んだといふ。ても、五日や七日には逢ふ事稀なるよね様と、同じ日おしやるも愚なる事や」

きんしや 金紗。金絲を織り込み、或はそれで緇をした紗。又、金絲のことをいふ。五十年忌歌念佛下「夜さ來といふ字を金紗で縫はせ」

きんす 金子。かね。金圓。小判。永代藏四「一世一代の勸進能ありしに、金子一枚宛の棧敷京大阪に續きては塚へ取りける」

きんす 銀子。銀を三寸許りの平たい楕圓形とし紙に包んだもの。白銀。又、前條の「金子」と同じに用ひる。生玉心中「手形の銀子不埒について、明後日お願ひ申す」

きんすすだけ 銀煤竹。色の名。煤竹色は赤黒く、煤竹のやうな色であるが、その白みがかつたものであらう。五人

女三「染分のかゝへ帯、銀煤竹の袴。胸笄用三「三番日のきんす、竹の羽織着たる男は、利をかく銀五貫目借りて」

きんせんきんせん 金銀銀錢。黄金で鑄たぜにと、銀で鑄たぜに。一代男セ「世之介金銀銀錢、紙入より打明けて、兩の手にすくひながら、太夫戴けやらうといふ」

きんたいし 錦袋子。明から傳へられたといふ祕藥(談草小言)。精進膾「星に影枕悲しき錦袋子」

きんたいゑん 錦袋圓。萬病錦袋圓といつて、江戸池の端仲町勸學屋大助といふものの創製した藥。もと大助の祖勸學坊といふ者が、肥前の興福寺開山如定禪師の錦の袋の中から、夢中に授けられた靈藥である(江戸名所圖會)。

菜花咄三「蕎麥切に西瓜の喰合せ、やれ池の端の錦袋圓といふ間に死去の由申來り、是非もなき世や」晝夜用心記四「腹痛しきりにて、錦袋圓を用ひ、すこし心よく」

きんたうてん 金刀點。書法にいふ語。大の字の右へ引く點、筆順でいへば最後の一畫。國性爺「勅筆の額搖ぎ出で大の字の金刀點、明の字の日偏、微塵

に碎け散つたるは」(大の第一畫は玉案、第二畫は犀角)

きんちちうくまで 禁中熊手(きんちちゆうくまで)。永代藏五「古鐵貫を呼び入れ、鏡臺の金物、銅網の鼠取り、禁中熊手一本、爪をれの五徳一つ、取集めてから錢百三十に直段付け」

きんちちやう 金打。武士が誓約のしるしとして、刀の刃又は鈔なとを打ちあはせること。女は鏡を打ちあはせる。かねうち。曾我會稽山三「誓文のため只今御前で金うたう。ヲ、尤も。いざ金打と兄弟刀抜き寛げ」

きんちちやう 銀錠。銀で作つた錠。一代女「武士の勤めとて袴かた衣刀脇差は許さず、腰ぬけ役の銀錠を預りける」

きんちちやく 巾着。寶春婦の異名。艶道通鑑「巾着のしめ込、荷葉のびらしやらも、馴れては同じ思ひ川」

きんちちやくざや 巾着鞘。槍の鞘の、巾着の形をしたもの。薩摩歌上「花色羅紗の巾着鞘、輪違の六尺は相州小田原」

巾着のいかのぼり 巾着の紙嵩。巾着が軽くなつて空に舞ひのぼる義から、財布の無一物になるをいふ。賀古教信七、墓廻三「手拭きへ買ひかゝる此の身代、



巾着のいかのぼり思へば無念千萬也」  
きんどろし 金童子。織留五「丹後國切戸  
の文珠堂に金童子といへる脇立あり  
(中略)、この童子智恵の箱といふ物を  
抱きて立たせ給ふ。こんどうし

きんとくとん 金徳丹。織留四「或醫師は  
年玉に埒のあかぬ煉薬をこしらへ、金  
徳丹と銘を打ち、諸病によしと書きち  
らし」

銀なる客 銀持ちの客。胸算用三「可愛や  
神ならぬ身の浅ましきは、銀成る客と  
思ふべし」

金の範 範は「さい」と訓み、「采配」のこ  
と。矢数の時、五百本毎に金の采配を  
振るのでいふ。采配の二字を草書した  
形から誤つたものか。大矢数二「第二の  
射初大鷲羽うつて金の範、のぞみは四  
千里舞鶴の春」。同四「手に取たり春宵  
一刻金の範、句数の天下泰平の花」。二  
十不孝五「和佐大八が弓勢にも、其道々  
にて劣らじ(中略)金の範こゝちしてそ  
れより飲自慢して」

きんばい 禁盃。酒盃を禁制してゐるこ  
と。禁酒。俗つれ、二「酒一盃とすゝ  
めぬれば禁盃とて取り擧げず」

きんばす 銀筥。銀で作つた矢筥。松風

村雨束帶鑑三「銀筥の眞羽の矢負ひ、時  
繪の弓を持たれたる」

きんびら 公平。金平。金平本に描かれ  
てゐる坂田金時の子。勇猛武骨なもの  
に譬へられる。藩門松上「勤めする身は  
先譽れ、公平のやうな男を煩はしたは  
此の吾妻」

きんびらごと 金平事。公平事。金平淨瑠  
璃のこと。坂田金時の子、金平といふ  
怪力ある者を主人公として作つた語り  
もの。晝夜用心記「竹は淨瑠璃、三味  
線に睡りをさまし、公平事もつづけ聞  
きは退屈」

きんみやく 吟味役。物事を調べる役。  
吟味方。吟味掛。武道傳來記三「天晴勇  
者と御耳に立ち、同心三十人預り、國  
中吟味役を仰せ付けられし」

きんもん 金文。金言を記した文。經文。  
聖徳太子繪傳記一「等勝堂獅子吼經の  
金文宛も符契を合する如く、一千餘回  
の法の花」

きんもんしや 金紋紗。金絲で紋を織り  
出した紗。井筒業平河内通五「金紋紗の  
片衣、あこめの小袴」

きんや 禁野。天皇の御獵場として、一  
般の狩獵を禁じたところ。特に河内國

交野(枚方の東)の御野を稱する。一代  
男七「交野きんやも跡に、淀の小橋は霧  
こめて」。蟬丸一「禁野も過ぎて波瀲  
院」

きんりうざん 金龍山(きんりようざん)  
江戸淺草寺(觀音)の山號。二代男一「三  
味線捨てて無常を觀する時、金龍山の  
戀知らず、撞鐘に驚き」

くあはせ 句合。歌や俳諧の句などを比  
べ、判者を立てて優劣を定めて慰むこ  
と。歌合の類。井筒業平河内通二「この  
頃續く春雨に、歌の句合、絲竹も、さ  
のみ心のかはらねば」

愚案に落ち 自分の心に理會する。わが  
腑に落ちる。吉野忠信三「御辭退に及び  
給ふは、何とも愚案に落ち申さず」

くいくい 愚癡などこぼすさまにいふ。  
くよく。曾我會稽山四「私や涙がこぼ  
れる。去りながらくいくと思はんす  
な。來らぬ時節は是非がない」。壽門松  
中「浪人の身でなくばと、くいくいとい  
て恨み言、多分今日も見えませう」

きく

くいつみ くいつみ(噴積)。正月の蓬萊

飾りのこと。その盛り飾つたものを噴つて長壽を祝ふのでいふ。又、重ね鉢に盛つたものをもいふ。壽門松上「樞勝栗、嘘で御座らぬ本俵、くいつみに土器、さすぞ盃」

くがい 公界。人なか。晴れの場所。生玉心中上「何事が起つた。こりや爰は公界ぢやぞ。誰も人の名はいはず、様子計りちやつといへ。構へて人の名をいふな」

くがい 苦界。苦海。遊女の境涯。大磯虎稚物語三「大磯の長が許へ、苦界十年足掛け二十年と定め、娘分の傾城に賣り渡し」

くがいもの 公界者。人中で顔を立ててゐるもの。世間に對して恥しくないもの。世評を重んずる者。冥途の飛脚中「傾城は公界者、五十兩の日腐銀取替へた僧上、若い者に恥かゝせ、川が聞いたら死にたかろ」

くかず 句數。句の數。俳諧に於て、多くの句數を速く吟ずること。即ち矢數俳諧のことにいふ詞である。おほくかず(大句數)の條参照。大矢數門「手に取り春宵一刻金の範、句數の天下泰平

の花」

九月五日 半季居の奉公人の出替り日。

織留五「此春寢道具入れて半概を持たせ行きしが程なく九月五日になりて、出替りせし男女の奉公人宿こそ、さまざまにかしけれ。昔いかなる賢き人の半季とは定め置きけるぞ」

九月八日 節句の前日で、殊に物忙しい日であつたことが、今日からは注意される。掛買、借銭の始末もこの日を一期限としたのである。織留二「折ふしは九月八日、我人物前とて足音つねとは變り、被きたる御所染すがたの京女崩も、とりなりかまはず道いそがしき世間憚りなく」

くぎ 釘。物に打ち付けて隙の出来ぬやうにする意から轉じて、男女の仲などの離れぬことに譬へていふ。傾城反魂香中「起請一枚書かねども、釘、かすがひより離れぬ中」。「釘も離れぬ中」

くぎかくし 釘隠。活け花の用語。聖徳太子繪傳記「四つ手、月の輪、釘かくし(中略)、是れ定りの花の法度」

くぎこたへ 釘應。物に打つ釘のきくこと。轉じて、物事にうけこたへのあること。堅固に長持ちのすること。油地

獄中「元が主筋下人筋の親と子、釘こたへせぬ管」

くぎしたち 釘下地。鍛冶にいふ詞。釘になるべき鐵材。又は水の朔日上「是は此度禁中様御内侍所の釘下地」

釘になる 手足の冷く凍えることに譬へた。父綱島中「こりや手も足も釘になつた、天様の寢てござる炬燵であたつて暖まりや」

くぎぬき 釘貫。(→櫛(さく)の類。柱を立て並べて横に貫(ぬき)を通したものの。町口などにある城戸(きど)。一代女四「人の透間を見合せ、釘貫木隠れにて彼の中間耳近く、我等に何ぞ用があるかとさゝやきければ」。紋所の名。

大矢數四「紋なしに雲の袂の衣配り、已前が悔し釘貫松かは」

くきをけ 莖桶。野菜の莖など漬けおく桶。永代藏三「北國の雪竿毎年一丈三尺降らぬと云ふことなし(中略)、明の年の涅槃の比まではおのづから精進して、鹽鯖賣の聲をも聞かず、莖桶の用意、焼火をたのしみ、隣向ひも香信不通になりて、半年は何もせず明暮煎じ茶にしておくりぬ」

くくしぞめ 拵染。くくりぞめ。しばり

ぞめ(絞染)と同じ。布を處々しぼつて括つて置いて染めたもの。その模様、又染め方のこと。くくし。縹縹。物種集上「竹の子の皮秋の夕暮、くくし染鳴たつ濱の浪の紋」。傾城島原蛭合戦五「是をくくしの摘み染め」

くくしや 絵師屋。前條「くくしぞめ」を業とする家のことであらう。大矢数一「めし腕のちと白浪かきなりて、物の上手か絵師屋の漣」

くくぢち 蕨立。菜の蔡(たう)。下の例は、な(菜)と「なぞ」とかけていったのであらう。大矢数五「くく立のなぞ」

くくめなは 兩吟一日千句「落し子に天津乙女も年を経て、同行なみだを松風の聲、くくめ細あはれ懸けたか時鳥、寝ぬに日覺すのら犬の数」

くぐり 漕。くぐりど(漕戸)。門の脇などに設け、くぐつて出入する戸。一代男五「夜の道をとめられて、晝さへ門をさして、獨りくぐりよりの出入」

たのもある。陸摩歌中「たがひに心懸け袖の、縁により絲括り袖」

くくりづきん 括頭巾。頂を括つたやうに作つた頭巾か。増山の井「かざす梅のつぼみはくくりづきん哉」とは、梅の蕾に形が似てゐるのでいふか。永代藏「林和靖が括頭巾」

くくりまくら 括枕。兩方から括つた枕。坊主まくら。箱枕の對語。一代男二「釣おまへの下に、くくり枕、第一日にかかる物ぞかし」

くけん 九軒。大阪の遊廓新町にある町名。佐渡屋町の東に接してゐる。當時最も立派な揚屋が揃つて居たといふ。永代藏三「世間見なんだ銀が人にまはりて、九軒の二日拂ひの用にも立ち」

くこん 九獄。さけ(酒)の異名。最明寺殿百人上落下「折節悪う九獄もなし。お英子はないか」

くさざうし 臭双紙。草雙紙。繪入の小説・物語の本。文學史上、赤本・青本・黒本・合巻物などの總稱。もと、その用紙がすきかへしで臭みがあつたからであるといひ、又、その文字が草假名であるからだともいふ。西鶴五百韻「俳諧や難波につけて替るらん、くさ草紙の

名も書籍目錄「草の靡(草)權勢や利のある方へ人心の靡くこと。大矢数四「戀は又草の靡と申也、片手をしめて生でつかます」

くさぶき 草茸。茅・藁・麥藁などで屋根を葺くこと。又、その屋根。くさぶきやね。男色大鑑「草ぶきの庵あつて、軒に女人堂と洒落板に書きつけ」

くさぶとん 草蒲團。草を敷いて蒲團とすること。轉じて、粗末なぶとん。出世瀧徳上「紋日の夜床引きかへて、禿もつかぬ草蒲團」

くさむすび 草結。物事の草創。くさわげ。新可笑記二「蕨葛蒲の生ひ繁りて荒れたる原野なりしに(中略)、其の草むすびより久しく里人に彌藤太と呼び續けて」。三「しをり(葉)。道先案内。「草結とは旅行く人の山野の道にまどはじとて、行くべき方の草を結びてしるしとすれば、後にゆく人もそれに隨てまどはぬ故なり」(類聚名物考)。晝夜用心記五「これ主なき石塔と見て、かたりの草結びの種としたる手立に極りけれども」。四「縁むすび。曾我虎磨上「少將様に頼まれ、弟の五郎様との草むすび」

くさり 鎖。くさりかたばら(鎖帷子)の

略。武道傳來記「鎖の肌著に隠し脇指」

くさり 賭博の語。失敗すること。しくじり。丹波與作中「宵からあかつきの明星が茶屋で、飲み干すやうな大ぐさり」

くさりあふ 腐合。男女狎れあふ。義理をかまはず離れがたい縁を結びあふ。曾根崎心中「天満屋のはつとやらと腐り合ひ、噂が姪を嫁ふよな」

くさりだま 鎖玉。武道傳來記「小筒に鎖玉を仕込み 火鉢切つて駆寄るを」

くさりはちまき 鎖鉢巻。鎖で鉢巻すること。一種の武装である。武家義理物語「肌に着込みくさりの鉢巻、女は刀の日釘をあらため」

くされ 腐れ。すてばちとなつて、物事を呪ひ又は誓ふ時にいふ詞。殊に「誓文くされ」と熟して、「どうあらうと……せず」と否定的述語を限定するに用ひることが多い。萬年草上「御げんの如く二世三世、くされ〜と血判を据ゑた」。百日曾我「お二人を、如才に思ふ心でも、祈經かばふ心でも、誓文くされなければども」。傾城島原蛙合戦「誓文くされ、明日出る廓をえ出でず、居ぐさりにする法もあれ」

くさわけ 草分。草別。くさわき(草脇)

歌の胸先のところ。曾我會稽山「せきにせいて放つ矢が(中略)鹿の草分ずんばと當り」

くしあはび 串鮑。串にさして干した鮑。雪女五枚羽子板上「揚屋にいりこ、くしあはび、幫間相客」

くしかた 櫛形。折烏帽子の名所。前面中央の三角形(まねき)の下の半圓形(櫛の形)になつたところ。源氏烏帽子折「此童が着ようずる烏帽子は(中略)、ひながたに間をあらせ、くしがたをいか〜と」

くしがひ 串貝。あはび(鮑)の別名。胸算用「地鳥の鳴いりこ串貝」

ぐしきみ 虞子君。虞氏、楚の項羽の寵姫。支那の代表的美人。一代男「唐土にも此慰みを楊貴妃虞子君の手にふれて」。同「繪に書きし虞子君は物いはず」

ぐし 五四。雙六の用語。五と四とをいふ。次條参照。

ぐしぐし 物事の混雜し、紙などの揉みくちやになるをいふ。ぐしや〜。出世景清「側にありける雙六盤片手に取つて投げつれば(中略)、でつくと

もせぬ丁稚めが、手柄しさうに見えたれども、ぐし〜となりけるは」の「ぐし」は、前條の「ぐし」の意をもかけてゐる。

くじごしんほふ 九字護身法。臨兵闘者皆陳列在前の九字を唱へながら、指頭で空中に縦に四線、横に五線をも、格子状に畫いて、身の護りとする秘法。もと道家から出て、修驗道、兵家に傳へたものであるといふ。萬年草上「九字護身法傳授して、禮拜化教も動むれば出家も同然」

くじだくみ 公事工。(一)公事は訴訟事、そのもくろみをする事。訴訟計費。大矢數「心の水に公事工みする、鈴鹿川深い所がどうよくな」。(二)理窟をいふことの巧みなことにいふ。永代藏五「或家に入れば公事だくみなる女、薄き唇を動かし」

公事のみやの 公事(くじ)即ち訴訟ごとのことを「くじみや」と俗に稱するもので、それを分割して言つたもの。「何か」を「何のかの」といふ類。「くじみや」の條参照。出世瀧徳上「此惣兵衛と公事のみやのと吐すげな。あはれでんとへ出やれかし」

九十六の錢百

錢九十六文を百文に當てて勘定することが行はれたのでかきいふ。後に天保錢が出来てからも、九十六文の天保當百などと稱された。傾城酒吞童子ニ「私が舅、九十六の錢百で一昨年死なれ」

くじみや

公事宮。訴訟ごと。「くじ」といふ發音を圖にかけ、更に「おみ圖」を出す宮にかけて、俗に「公事宮」と呼ぶに至つたといふ。卯月潤色中「お龜夫婦を引取つて、分立つて商ひさせ、公事みやしても己等に、がや〜口を利かせうか」。「公事のみやの」條參照。

くしやうじん

俱生神。人が生れる時、その左右の肩に在つて、善惡の業を見守つて記録するといふ男女の神。無量壽經の註に「人初生時、二人神在左右肩、一曰同生、一曰同名、人不見神、神見人、不簡晝夜」記「其善惡、是曰俱生神」とある。生玉心中「番は閻魔くしやう神、紺屋のもがり劍の山」

くじやくおり

孔雀織。二代男「其時はやればとて、孔雀織・綱代・升形、やうきも和國などの大袖にて、女郎買とはいはれじ」。孔雀の羽のやうに、綾を織

出した布であらう。

くじやど

公事宿。公事をする者の宿。訴訟人の宿所。兩吟一日千句「夕雲提重箱にくみ合せ、公事宿よりもわかる春の野」。二代男「島原の五つから晝まで、公事宿の見舞、ぶらりと居る所にてあらず」

くしゆめつたう

苦集滅道。佛語。苦は生老病死等の苦果、集は苦果の原因たる惑業煩惱の集積、滅は苦集を滅した悟境、道はその悟境に達する修行。これらを四諦といふ。舍利五「くしゆめつたうの四たいを觀じ」

くしろ

古昔、臂に纏うたかざりの環。下文の川ひ方は、玉の井の縁語。置土産五「松本といふ大臣のくしろにて玉の井様に未だ馴染もない中に、桃の節句の祝儀とて何心もなう金子百兩送られけるを。」

くすて

男色に關する語。相手に知れぬやうに行ふ手段といふ義か。次條「くすねぬき」と同義と思はれるが未詳。新小夜嵐物語上「かまへて〜若衆のくす手にて、抜く事沙汰し給ふな。又の世怖や」

くすねぬき

前條に同じ。俗つれ〜

「此若衆(中略)、痔の養生、糖味噌の行水、我が身の秘傳くすね抜の毛の穴までを、問はず語りの懺悔、後には聞く人うるさし」

くすねる

窃に取る。ごまかして盗む。大職冠四「此の錢を投げ出すべし。其の時人々力を添へ、くすね給へと約束し」

くすのきぶんげん

楠木分限。くすのきぶげん。楠の木の子びて行くやうに、次第にしあげた身代。俄か分限とちがつて、手ごたい財産家をいふ。織留ニ「楠の木分限といふ物にちく〜延びて朽つる事なく」。同六「年々根づよき商人を楠の木分限といへり」。永代藏ニ「金銀うめきて、使へど跡はへらず、根へ入りての内證よし、これを楠木分限といへり」

くすぶ

燻ぶの轉か。責める。非難する。とがめる。武道傳來記四「小間物賣と密通したるとくすべられしに、私何心もなく」

くすむ

じみである。陰鬱に老人めく。天網島上「引きずり入れたる姿を見れば、大小くすんだ武士の正眞」

くすりぐひ

藥喰。昔は獸肉をば穢があるとといふので喰はなかつたが、寒の内

に限り、鹿と猪の肉を喰つて、體を温め、血を調へる薬としたのである。大句數上「はけになる鹿の其身は薬喰、ふとんを敷きて夢野なるらん」轉じて、身の滋養になるものを食ふこと。一代男三「干鮭は霜先の薬喰ぞかし」

くすりこ 薬子。昔、正月元旦に、宮中で供御の屠蘇などを嘗め試みる童女のことを稱したが、下の例は、その試みることを儀式と考へて用ひたもの見える。百合若大臣野守鏡「早新玉の四方拜、節會薬子小朝拜」

薬鍋を北向に 薬鍋の口を北向にするは病氣を重くする呪ひであるといふ。源氏冷泉節下「是姫君の加減のお薬、生薬入れずに薬鍋を北向に、頭煎じ汁を早ああげよ」

くすりなやみ 薬惱。薬にあてられて病むこと。松風村雨東帯鑑三「姉も餘り飲み過して、薬なやみで此の仕合せ」

くすりぶろ 薬風爐。薬風呂。薬鍋をかける風爐。用明天皇職人鑑四「薬ぶろに火を起し」

くすりもむきさ 薬艾。身の薬になる艾。灸點にも用ひるもの。

くすりもんちやく 薬園著。薬を選む爲

にもだえること。薬選みに氣をやむこと。平家女護鳥三「お氣合がわるいとて、床も離れず薬もんちやく」

くすんごぶ 九寸五分。短刀の名。その長さからいふ。松風村雨東帯鑑四「二人が肌より九寸五分、するりと抜いて手に手をとリ」

ぐぜいのうみ 弘誓の海。佛様の衆生を救はうとなさる誓願の、弘く大きいことを譬へていふ。百日曾我五「人間生死の有様を浦漕ぐ舟になぞらへ、弘誓の海をわたり涅槃の岸に至るべき」

くぜつ 口舌。口説。口先のいさかひ。殊に男女の間の物言ひ。痴話の上のあらそひ。物種集上「此のほどは三人一所に口舌して」。一代男三「過ぎつる二十五日の口舌、天神にまげさせられ」

くぜつうた 口舌歌。心の不平を籠めた歌。

くぜつぶみ 口舌文。いさかひをしかける手紙。不満を陳べたふみ。賀古敦信七墓廻三「深い餘りの口舌文、淺きを招く肩げ文」

くせます 癖をつける、皺をつけることであらう。源氏烏帽子折三「烏帽子は、大きびの顛を荒らかに、一くせみくせ

ぐそく 具足。携へもつこと。伴ひ行くこと。武道傳來記七「西行も此處に心をとめる縁とて、その具足の物今に残れるよし」。又、鋸のこと。

ぐそくがね 具足金。具足を調へるための資金。武家義理物語一「武家の面目、此の時、具足金拾兩ありしに」。

九損一得に 諺に「鞠は九損一徳」といふので、下例は極めて僅かにといふ意に用ひた。続留三「鞠場の柳陰に目を暮し九損一得に早足がきけばとて別の事なし」

くだしごよみ 下し曆。京で作つた曆を、地方へ卸すこと。そのこよみ。宮家や貴族への進上曆に對していふ。戀八卦柱曆上「進上曆の巻包、江戸大阪のくだし曆」

くだのれん 管暖簾。細い竹に絲を貫したものを列ねて作つた暖簾。傾城鳥原蛙合戦三「おういと答へて、管のれん顔さし入るれば。軸簾」。

くたばりはづれ くたばりぞこなひ。死ぬ「ことと卑めてくたばる」といふので、生き残つてゐる者を罵る詞とする。雪女五枚羽子板上「のめりのめりとく

たばりはづれにあやかりなされ」  
**くだやり** 管槍。柄に管をはめて、それを握つてしごくに都合よくした槍。武道傳來記五「後より下人を拂ひ、管鎧をさしのべ」

**くだりさかづき** 下盃。安い盃。粗末な盃。「一代男三」たとへば下り盃一つ、燒物一貝とりて、一角計りとらせて」

**くだりて** やすもの(安物)をいふ。五人女三「駒引錢、目鼻なしの裸人形、くだり手のかたし目貫」

**くだんす** くださんす。くだされます。女腹切下「聞えぬこと云うてくだんす。生玉心中上「よう捨てて被てくだんす」。同「嵐の芝居へ便宜してくだんしたか」

**くちあひ** 口合。(→駄洒落、地口の類。同形の語、又は語呂の似た語を用ひてたはむれること。壽門松上「鹽の辛い梅子婆々が、すいこな奴と思召そ。お恥しやといひければ、ヲ、いや口あひやらるゝ、即ち「すいこ」は酔興と酸いとかけてゐる。(→仲に立つて口をきく人。口入れ。保證人。傾城酒呑童子三「禿共多いと申して二十人か三十人。肝煎口合ある内に、親もと慥の判を取り、吟

味に吟味が廊の作法」  
**くちうつし** 口移。直接に口で人の言葉を傳へること。口傳。轉じて、聲色など使ふ意に用ひたか。五人女三「京の音頭道念仁兵衛が口うつし、山くどき、松づくし、暫く耳にあかず」  
**口があがる** しやべることが上手になる。口上が巧みになる。出世瀧徳下「是れ仁三様、たんと口があがつたの」  
**くちがき** 口書。訴訟ごとに關する口上を筆録したもの。武道傳來記五「はや櫻の間に呼び出され、野澤口書をもつての詮議」。曾我會稽山五「奏狀・訴狀・口書等、數通御前に持參し、是は御狩中諸人の願ひ訴へ、諸檢使の覺え等にて御座候(中略)と伺へば」

**くちきり** 口切。夏から壺の中に封じておいた新茶の封切りをしを茶會を催すこと。陰曆十月の始め頃、爐を開いて行ふので、爐開きともいふ。永代藏六「茶の湯は出さねど口切り前に露路を作り」。恭盤太平記「文和三年天沓えて冬も半の雲水り、霞亂るゝ夜嵐に、口切の夜會を催し、數輩の客人」  
**くちぐすり** 口藥。(→火繩銃の發火藥。口どめ料の金。他言せぬ爲の賄賂。

菅原傳授手習鑑一「お供の衆には口藥、水撒く様に飲ましておいた」

**くちごはし** 口強し。馬の口のとりにくい、馱しがたいをいふ。曾我會稽山三「沛艾に口ごはく、乗り入れもせぬ野髮の馬」

**くちこひ** 口乞。口上で物を乞ひ求めること。俗つれん「五」金の土用干、伽羅の口乞」

**くちさかづき** 口盃。酒盃を用ひないで言ひかはすこと。天神記三「媒人入らずの祝言、盃なしの口盃、結ぶまいか」

**くちざみせん** 口三味線。(→口拍子。口を巧みにきくこと。冥途飛脚上「口三味線に乗せかけても、乗るやうな男でない」。(→口で三味線の音をまねること。

**くちすぎ** 口過。口をぬらし過ぎること。飯を食つて行くこと。生計。すぎはひ。世渡りのしごと。一代男三「一ふしあそばしたれば、口すぎと思はれて、舞臺勤めたまへ」。新小夜嵐物語下「生れ付いたる(爪)を、口過なればとて、よくもよくも切りける」

**くちすひごま** 口獨樂。松風村雨束帶鑑四「二つ並んで舞ふ獨樂の、ちよつと障つて退いたるは、人目忍んでくちす

く

ひ獨樂(當世獨樂づくし)

くちそへぎけ 口添酒。人の口を添へた  
盃の酒。萬文反古五「口添酒さへうれし  
がり、すぎにし菊の節句をつとめ」

くちつぎ 口次。人と人との仲に立つて、  
話を取り次ぐこと。その人。口入れ。  
世話やき。借次、人置などの類語。二  
代男八「小判百兩借れば、口次判代に十  
五兩引き渡す」。織留六「口次の鼻に身  
まかせて、お子五つまで作法の乳母に  
は出けれども」

くちてま 口手間。口をさく時間。室町  
千疊敷四「口手間入れさせ、何の詮もな  
い事」

くちてんがう 口の上のたはむれ。ふざ  
けて物言ふこと。ざれごと。油地獄下  
「役者物まね地の物まね、小歌淨瑠璃口  
てんがう」

くちとりなは 口取繩。牛馬の口取るた  
めの繩、六尺ばかりの長さがある。大  
磯虎稚物語五「行繩、追繩、口取繩、馬  
場前狭しと打つたりける」

くちなしいろの物 くちなし(梔子)の實  
は黄色であるところから、黄金をかく  
いふ。山吹色のものといふ類。枕久一  
世物語上「くちなしいろの物を造らぬ

番衆なれば、あけぬもことわり」

くちなは 口繩。口取繩に同じ。  
口に針 (諺)怒りを含む物言ひの譬。天  
網島中「おさんに暇やりや。つれに來た  
と、口に針あるにがい顔」

口ぬらす 物を飲食する。何かを少した  
べらしていなしや。いや、最早お茶もた  
べました」

口の世 (諺)口は世渡りする上に何より  
重寶なもの、口を利くので渡世もでき  
るとの意。織留五「つかひ盛り這出が、  
口の世で置いてくだされませいと詫言  
いふべし」。永代藏五「音曲好きの甚八  
は又九郎が芝居に入りて、やうく口の  
世で抱へられ、朝から晩まで尤役に  
つかはれ」

くちばし 嘴。口吻。物をいふこと。口  
を出すこと。日本武尊吾妻鑑三「此の季  
の女子共は、口吻が早うて、見る事聞  
くこと附けつ添へつ囀り、上へ筒抜け、  
用心せい」

くちばしす 齒をくひしげら。齒をきり  
きりさす。一代女三「是故か後の日惱ま  
せ給ひ、凄じく口ばしせらるゝは、人  
形の一念にもあるやらん」

くちばしをならす 嘴を鳴らす。齒がみ  
をする。切齒する。一代男四「後の方よ  
り女口ばしを鳴らし、我れは木挽の吉  
介が娘おはつが心魂なり」

くちひきををとこ 口曳男。馬の口を引く  
男。口取の男。二十不孝四「馬ばかり殘  
りて、口曳男立歸り」

くちへらず 口減らず。口きくことを止  
めず。どこまでも物をいふ。「減らず  
口」ともいふ。傾城酒吞童子「言はれ  
ぬ處へ出しやばつて、(中略)、顔ひく  
も口減らず」

くちひろし 口廣し。口はば廣い。物言  
ひのなまいきな。生玉心中上「やあしや  
ら臭い。常々の嘉平次とは違うた、口  
廣いこといふと思ふな」

くちまつ 口松。口まめ。おしやべり。  
松風村雨東帶鑑「峰の老松口松や、詞  
多きは馴染むほど、朋輩づきもいぶか  
し」

くちむしる 口捲る。無理に答を求める。  
物言ひをさそふ。嫉歌加留多一「なう、  
横笛どの、さうぢやないかと口むしら  
れ」

くちよす 口寄。「くちよせ」をする。次  
條を見よ。大矢數三「くちよせて目からふ



らす春の雨  
くちよせ 口寄。巫女(みこ)が、神おろしをして、自分の口を藉りて、死者や遠隔の地にゐるものの身上などを告知豫言すること。男色大鑑ハ「澤井作之助が亡跡を、梅の木のかきんに口寄さずもをかしくかなしく」

くぢらつき 鯨突。鯨を突くこと。その人。永代藏ニ「此濱に鯨突の羽指の上手に天狗源内といへる人」

口を垂る 下手に出て物を言ふ。自分を卑下して口をきく。織留ニ「何か恐るゝ事もなきに、加判して貰へば、五人組年寄に口をたれ」

くつ 杓。くつもち(杓持)の略。遊里の唐詞。太鼓持の異名。置土産ニ「昔の千歳唐崎は、禿遣手の外に、杓とて鬚切したる男草履取を連れける」

くつうち 杓打つ。杓を造ること。丹波興作上「夜は杓打ち、草鞋つくり」

くつかご 杓籠。杓を入れる籠。二十不孝ニ「其身は乗馬、後より挾箱持、杓籠、歴々の侍を見せ」

くつさめ くさめ。大矢數ニ「くつさめの岩の鼻から雪消えて、かしら煎じに風の行末」

くつさり くさり(腐)の音便。唐船嘶今國姓爺上「意地くつさりの根性わる」

くつされ くされ(腐)の音便。戀八卦柱曆下「八百貫目や八千貫は、誓文くつされ、利なしでやんす」

くつしうり 崩賣、少しづつ物を切り離して賣ること。分賣すること。博多小女郎波枕中「屋財、家財のくづし賣り、捨て賣りに相場なし」

くつとり 杓取。主人の杓を持つこと。その人。くつもち。姫山姥四「向後一命を擲ち君に仕へ奉らん。御杓取とも思召され候へ」

くつぬぎ 杓脱。戸口の穿きものを脱ぐところ。又、くつぬぎいし(杓脱石)の略。萬年草中「火を踏む如く爪立てて、慄ひく杓脱まで忍び出で」

くつもち 杓持。くつとりに同じ。國性爺一「帝も后もくつもち、我大王の履持にする事、目を數へて待つべし」。

くつわ 轡。忘八。遊女屋。遊女屋の主人。遊里。もと、山城の國伏見遊里撞木町を十字形に割つて、その形が馬のくつわに似てゐたから起るといひ、遊

女を馬のやうに御して使ふからの稱であるともいふ。又、「忘八」に就いては「孝弟忠信禮義廉恥の八つを忘れたる故と、唐人を戒めたり」と我衣に説いてゐる。一代男六「女郎はうは氣らしく見えて、心のかしこきが上物と、くつわの又市が申せし」。二代男二「轡へ金子十兩、内へ同じく五兩」。出世瀧徳上「曲がない情ない、忘八の譯が立たぬとて、兩度曲輪へ立歸り」

くつわごころ 轡心。馬を制馭する心持。釋迦如來誕生會ニ「轡心のよい御馬、鞭の鹽梅覺え置け」

くつわや 忘八屋。轡屋。遊女屋。特に揚屋に對して遊女を抱へおく家。くつわ。傾城反魂香中「忘八屋揚屋茶屋鴛鼻廓の年寄立合」

くつごう 俱泥劫。極めて長久な時間。俱泥は梵語。ニで、無數の意、劫は時。百億劫などいふに同じ。釋迦如來誕生會ニ「佛の胤宿りたり、はや、女を打殺し、娑婆世界の佛種を絶ち、魔界となして俱泥劫の本懐を遂げ給へ」

くつどうのけさ 九條の袈裟。布九幅を綴り合せた大袈裟。大職冠一「花原馨を打ち鳴らし、九帖の袈裟を覆ふまで、其聲

く

更に止まず」

くど 九土。佛語。九地ともいふ。五趣雑居地、離生喜樂地、定生喜樂地、離喜妙樂地、捨念清淨地、空無邊處地、識無邊處地、無所有處地、非想非非想處地の稱。釋迦如來誕生會「如是我聞く、九土區々に別れ、四生俗を異にす」くどきぶし 口説節。もと、迷懷・懷舊の思を怨み訴へるやうに敘する一種の曲節。後、音頭に似た一種の俚曲となり、普女などが三味線に合せて歌つたもの。

くどく 口説。我が意に従はせようとして切に説く。一代男「うらなく思はれたきとくどけば」。吉野都女楠「色かへ品かへくどきしを、つれなく返事も致さぬ間に」

くどくち 功德池。佛語。極樂淨土にあるといふ池。澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤澤、安和、除患、増益の八功德を具へた靈水。八功德池。吉野都女楠「此池こそみづからに、菩提を進むる功德池よ」

くどくちや 功德茶。路上で煮て、往來の人に施す湯茶。七月初旬から廿四日頃まで佛家で行ふ。攝待茶。攝待。俗

つれづれに「此釜に名譽の徳あり(中略)、再度功德茶をわかしける」

くどくど (うるさく。しつこく。戀八卦柱上「仰山さうにそれほどの銀、くどくどおつしやる事かいの」(くよくよ。思ひきりわるく。重井筒中「ならぬ事をくどく」と、思ふは愚痴の至りなり」(うぐぐぐ。つぶやくさま。曾我五人兄弟五「くどくどいひて埒明かず」

くにいり 國入。領主が己の國に赴くと。武士が主君の領地に赴くこと。傾城反魂香下「嫁入り・智入り・國入りして、本祝言の儀式はかさねて」

くにがらう 國家老。大名小名の本國に勤務する家老(江戸家老の對)。武道傳來記五「爰に國家老森尾兵庫御姫様の御病中を悲しみ」

くにくづし 國崩。國をも崩すほどの破壊力のある石火矢の稱。國姓爺後日合戦五「舟手には國崩し、大筒、小筒、種が烏」

くにさいく 國細工。おなかの細工。轉じて田舎育ち、田舎仕込みなどの意。

くにざけ 國酒。田舎で造つた酒。國も

との酒。一代女「我れ國酒を飲みつけて、外なるは氣に入らず、さてはるより樽二つ」

くにじま 國島。(地名)長柄の北。もと柴島(くにじま)に作る。攝津國西成郡の内。二枚繪草紙中「ちうそう國島北南の長柄で男といはれたる善次郎」

くにじやうらふ 國上蔭。地方にある貴婦人。殊に大名などの本國におく姿を呼ぶ。一代女「住み隠れし宇治に來て我を迎へて歸り、(中略)、望みの通り萬事を定めて濟みける、是を國上蔭といへり」

くにそだち 國育。おなかそだち。堀河波鼓上「誰も否とは因幡山、國育ちとは思はれず」

くにだいまやう 國大名。一國以上を領する大名。國持大名。國主。用明天皇職人鑑三「萬に一つも運に叶ひ、親王の首取つたらば、國大名と仰がる」

くにぢやらふ くにじやうらふ(國上蔭)に同じ。櫻陰比事三「大名方の國女蔭に遣はし」

くにつぐ 國次。刀工の名。來國次。又長谷部氏と稱し、三右衛門と呼ぶ。來國後の門人で、其の女婿となり、正應

の頃相模に來り正宗の門人となる。世稱して鎌倉來と云ふ。(これは山城の國次(初世)のことであるが、刀工としての「國次」の名は、なほ諸國に廣まつてゐる)。晝夜用心記「九重の守り、九寸三分の國次の守刀なり」

くにづくし 國盡。國の名を殘らずあげること。又、それを書き列べたもの。武家義理物語二「うちかけ委は人並に、國づくしの間にゐながれて」

くにとり 國取。國を領有すること。國持。その人。國に賊家に鼠(諺)物事には必ず害が伴ふことの譬。永代藏「用心し給へ國に賊家に鼠、後家に入舞急ぐまじき事なり」

國に杖つく 七十歳になること。「家に杖つく頃」を見よ。今川了俊「死生命あり、國に杖つき九々にあまりしことぶきの」

くにばら 國腹。大名などの本國に在るとき生れた子。國もとにある婦人の腹に出来た子。新可笑記「爰に信州の大名、國腹の子息兩人持ち給ひしが」

くにふ 口入。口を入れること。世話すること。その人。くちいれ。周旋屋。

置土産四「恐しき口入に書付を出し、騙り半分の借銀」。丹波與作下「口入たのみて銀四百目を、かりにやとうて女房と名づけ」

くにぶし 國武士。みなかざむらひ。槍權三下「身も堪忍々々と、一國に堅き國武士の、咽に涙ぞ詰りける」

くにむね 國宗。刀工の名。備前の刀匠正宗の流で備前三郎と稱した。貞永年間の人。武道傳來記六「長國。國宗の大小はなさず」

くにやく 國役。臨時の出費に際して、或る國を定めて賦課する税。又、國の事に努力を以て奉ずること。大矢數三「國役の蛇籠に春の水とめて、あたま讀ぬる村雲の空」

くにわき 國脇。諸侯の支藩のことであらう。薩摩歌上「御奉公は縁の者、これを取得に召置かれば、常江戸、脇城、國脇まで、申せば事も長い事」

くはいけい 「くはつけい」の誤か。而目、「肩身の廣いこと」などの意と見える。今宮心中上「店一軒の主に成り商賣もしにせて、親方一家にふるまふとは、此方ともくはいけい其身の手柄」

くはぞめ 桑染。桑色、即ち薄黄に染めること。その染めたもの。「一代男五」三人同じでたちにて、桑染の木綿足袋はかれしに」

くはち やば(野暮)のこと。ぐわち。不粹なこと。色道大鏡に「瓦智、當道不堪の者をいふ」とある。毒門松下「冠は被ねど大臣と、花車が轟く口舌の門、遣手が叩く禿が睡り、皆夢の間の境界と、破ればぐはちも無かりけり」

くはつ 桑津。(地名)大阪天王寺の東南に在る村。山上講などの團體の物語の人々を此處まで出迎へる習慣があつて、之を坂迎といつてゐる。油地獄上「講中何事なうお山勘めて有難い今日の下向は知れた事、念頃な友達は桑津まで迎ひにじや」

くはつけい 活計(くわつけい)。くらし。すぎはひ。轉じて、活計をたのしむこと。歡樂。舍利三「御邊には大國の二三ヶ國あてがひて、くはつけい歡樂にあらせん」

くはとり 鐵取。鐵で耕すこと。鐵を取人。用明天皇職人鑑三「名をば下部に引きかへて、鐵取の京雀と呼ばれ」

食はぬ殺生 (諺)食ひもせぬに殺生すること。徒らなる罪つくり。折角金を費

しながら、それだけの樂みをしないことと譬へる。置土産二「此女郎ども買捨てにして置くは、喰はぬ殺生、罪にもなるべし」。榮花咄三「思ひも寄らぬ惣買(中略)、己れが金銀で仕居る事ながら、餘り成る狼藉、これぞ喰はぬ殺生とつぶやき」

くはのゆみ 桑の弓。桑で作つた弓。男兒誕生の時、この弓に蓬の葉ではいだ矢をつがへて、四方を射、以て將來の發展を祝うたものである。松風村雨東帶鑑一「男子親王やす」と降誕あり、産屋の儀式桑の弓、蓬の矢事七夜の御賀」

くはばら 桑原。雷神を避ける呪ひとして重ねて唱へる語。ある時雷神が農家の井戸に落ち、農夫に蓋をされて出ることが出来ず、われは桑樹を嫌ふによつて、桑原々々と言ふ聲を聞く時は、決して落ちぬといふことを誓約して、農夫の免しを得たといふ傳説に據る。和泉國泉北郡桑原の地に、桑原井といふのがあつて、この傳説の由來した處といはれる。又、俚言集覽には「堂上の桑原は菅家なるをもつてなり、菅神を火雷神とするよりの事といへり」と

ある。日本振袖始二「御殿も搖ぐ雷聲。わつとひれふす女房蓬、世直し」桑原と、生きたる心地はなかりけり」

くはびら 鉄平。鉄の柄を除いた部分。又、それに似た形のもの。殊に足の平たく幅ひろいさま。くはびらあし(鉄手足)の略。萬文反古五「あづまそだちの女の足の鉄平がなほるにもあらず候」

くはへ 加。水さしに似た器。酒を銚子に注ぎ足すに用ひるもの。一代男八「祝言の如く、銚子、くはえ(へ)の酒過ぎて色なほし風情ありて」。二代男四「長柄加への品を盛り、千代かさねの白無垢」又、「くはへ」を持つ役をもいふ。

くはやま 桑山。小兒萬病の良藥。攝津國東成郡天王寺の北、珊瑚寺から賣出した小粒の丸藥。豊臣家の臣桑山修理太夫が、征韓役から持ち歸つた藥品の一つであるといふ。天網島中「二人の子供が朝ぶさ前、忘れず、必ずくは山飲ませて下され」

くはらり がらり。全く。すつかり。生玉心中「のめく共出られぬ首尾、出ねばくはらりと管違ふ」

すさま。槍權三下「片手なぐりに腰の番ひ、くはらりずんと切り下げられ、あつと計りに配札たりける」

くはりふた 配札。入場券。又、それを配ること。引札(ひきふた)。俗つれづれニ「配札を貰ひ、又太夫が舞を聞き果て」

くはを抜かず 我を抜かず。自失する。ぼんやりとなつて元氣を失ふ。生玉心中下「さぞ小辨もしんるかる、おれもくはをぬかした。爰で暫く休まふ」。國性爺三「和藤内ほうとくはを抜かし」

くはんぐはと がらぐらと。妄りに物を取出し費すさまにいふ。出世瀧徳上「惣兵衛といふ相手代、若い旦那の氣を詰めさせ、煩はせてはならぬと新七を遣出し、氣儘にぐはんぐはと遣はせる」

くはんさま くわんさま。觀様。觀音様の略。鳥原御影供紋目「御身ようせうの時よりもくはんさまをしんぐし、へんじやう女子をいのり玉ふ」

くはんじと (副詞)強く確に口で含みくはへるさま。藍染川五「化鳥はつと飛んで出、廣風が弱腰を、くはんじとくはへ輕々と、雲を凌ぎて上りしを」

くはんだやしやじん 鳩茶夜叉神。佛

教でいふ八部鬼衆の一。鳩槃陀。人の  
變血を食ひ、其の疾きこと風の如く、  
變化も多いとのことである。厭魅鬼。  
日本振袖始一「さばへなす授神・邪神、  
鳩槃茶夜叉神・藍婆神、此の神國に害を  
なさじと」

くびおとし 首落。人形芝居に使ふもの  
と見える。首のついてゐない人形衣裳  
のことか。一代男五「人形まはして遊べ  
と、挿箱よりたゝみ家體取組み、上幕  
つらかくし首落し、五尺に足らぬ内に、  
金銀をちりばめ、自由を仕懸け、六段  
ながらのでくる坊うごき出ける」

くびかきがたな 首搔刀。首切り刀。腰  
刀。聖徳太子繪傳記「大太刀・首かき  
刀、かき高に出でたちて」

くびかけ 首賭。首を賭けること。勝負  
ごとに命を賭けること。傾城反魂香上  
「あつちへやるか、こつちへ取るか、首  
がけの博奕」

くびかせ 頸枷。頸にかける刑具の一種。  
轉じて、自由を奪ふもの。きづな。大  
磯虎稚物語「子は三界の首かせよ」  
くびからうど 首唐櫃。首を入れる唐櫃。  
大磯虎稚物語「重ねて實驗せらるべ  
しと、則ち重忠仰せを蒙り、首からう

どに入れ持たせ」  
くびきり 首切。首を切られること。斬  
罪。冥途飛脚中「段々に巾著切りから家  
尻切、果ては首切、いかにしても笑止  
な」

くひさがす 食搜。食ふべき部分をさが  
して食ふ。出世瀧徳上「新七めがたべよ  
ごして、裏までかやしてくひさがいた  
ものを、この方所望にござらぬ」

くびじゆず 首珠數。多數の首を珠數つ  
なぎにしたもの。門出八鳥二「武藏坊辨  
慶は、首二三十珠數繋ぎにして引きず  
り來り、討たれし者の追善に、首珠數  
を思ひ立ち」

くびだい 首代。犯罪者の身代りとなつ  
て刑を受けること。又、その人。大句  
數上「拾貫目とられてぞ行革袋、夜前の  
ちぎりしれて首代」

くびちやう 首帳。首切られた者、及び  
首切つた者の氏名を記す帳簿。平家女  
護島「見物群集の聞く前、首帳を讀み  
立て」。國姓爺後日合戦「首帳つけの  
筆取に、けんべきの灸をすゑさせん」

くひつみ 食積。「くいつみ」の條を見  
よ。

くびつり 首釣。首を取つて釣錢の代り

とすること。槍狩劍本地三「豆板の兒  
玉、首つりを取つて替へんず」  
くひど 食跡。蟲などの喰つたあと。持  
統天皇歌軍法「我が裸身を蚊に與へ、  
親に代りし蚊の食跡」

くびひき 頸引。紐で輪を作り、二人の  
頸にかけて互に引き合つて勝負するこ  
と。男色大鑑四「けふは首引の繪を見合  
せてのやりくり」

くひぶん 喰分。くひぶち。食料。大職  
冠三「夜更けて貰ひ乳も仕憎いに、(中  
略)さてもこの子は喰分に仕合せな」  
ぐびん 狗賓。てんぐ(天狗)の異名。大  
矢數一「八重の霧狗賓の嶺や晴れぬら  
ん」。懷硯五「わざとつけを面に作り、  
狗品に掴まれし者と」。心中萬年草中  
「頼母しの懸錢七十四匁あつた物、定め  
て狗賓に掴まれたで御座らう、正眞の  
天狗頼母子ぢや」

くふうらしや 工夫者。智慧まはりのよい  
者。機轉の利く者。織留三「彼の工夫者  
の通りける程に、此事を語りければ(中  
略)、いづれもこの才覺を感じける」

工夫に落つ 考へつく。なるほどと思ふ。  
武道傳來記五「いよ／＼工夫に落ちず、  
終夜これを思索するに」

九兵衛 吟味立てする人間、理窟屋など

の意あるか。萬文反古五」とても人にも勤めける身なれば、つよう吟味だていらぬ物也。七二とはいかなる九兵衛か九右衛門か」

凹い所に水たまる (謔) 身分の卑い、又、

力の弱い者には、種々の困難が集つて来る。君子惡し居下流、天下惡皆歸之焉(論語)。釋迦如來誕生會三「假令提婆

の名に恐れ、人は詞の義に迫り、言うて勝たれぬ相手ゆゑ、凹い處に水溜る

搔破つてさへ痛い身を、むごらしうも切裂かせ、未だ其上に足らぬとや」

くまいちまる 九間市丸。熊一丸。江戸の涼み船の名。昔々物語に「萬治の末

右の涼舟造り出し、諸人借りて夏の暑さを凌ぎ(中略)次第に大きく七八間の

屋形を造り、後には船の名、川一丸。關東丸一丸。熊一丸。大關丸。十一丸な

どとして、山一は九間、熊一は十間、十一丸は十一間あり」とある。二代男

ニ「花火の盛りを見んと、淺草川の暮を急ぎしに、九間市丸の大船、金銀の飾

浪に映つて、見るに小座敷九つあるにつけて名の面白し」

くまがいがさ 熊谷笠。編笠の一種。普

通の編笠

より深いもの。

くまが

いざく

ら熊

谷櫻。彼岸櫻に次いで他より早く咲く。熊谷直實が一谷で先陣した事によせて名づけたといふ。賀古教信七墓

廻「猛き熊谷櫻さへ、罌染櫻諸共に」

くまがへ 熊谷。盃の一種。湯呑茶碗の形に似て深いもの。置土

産四「熊谷の大ぶりなる金の盃と、珊瑚珠の盃を重ねて、太夫に取らせければ」

くまたか 熊鷹。氣のあら〜しく慾の深い者。くまたかのやうな人間。卯月

紅葉上「このせいするな私を、熊鷹の、熊手の、掴みづらのと異名をつけ」

くまで 熊手。慾深い者。貪慾な人間。前條参照。出世流徳上「若いお手を唆か

すてばば 熊手婆。産婆を卑めていふ詞。孕常盤三「逆子、袋子、徳利子、跡

先膨れて中で詰つた瓢箪子でも、引つ



盃がまく



盃がまく

さらへて搔出すゆゑ、熊手婆とも申します」

熊野山若一王子 熊野權現の末社。孕常盤五「是より暇給はるべしと、熊野山若

一王子に奉納の御願狀」

熊野の牛王 紀伊國熊野神社から出す七十五羽の鳥を印した護符。面に熊野牛

王寶印の字を表す。鳥は熊野の神の使と稱される。牛王(ごわう)の文字は誤

りて生土が本来であるといふ。この紙は起請文を書くによく用ひられたものである。一代女三「文臺に入れしは熊野

の牛王、酢貝、耳かしましき四つ竹」

くまのびくに 熊野比丘尼。前條の熊野牛王を賣るかはら、色をも賣つた比丘尼。うたびくに。胸算用五「熊野比丘

尼が、身の一大事の地獄極樂の繪圖を拜ませ」

くまのまゐり 熊野參詣。紀伊國熊野神社にまうること。その人。くまのま

うで。くまのさんけい。胸算用「熊野參りの小米苞まで」

くまのむしや 熊野武者。紀伊熊野にゐる法師武者。吉野都女楠四「根來法師、

熊野武者を語らひ」

くまふて 隈筆。くまどりふで。くまど

り、ほかすに用ひる筆。傾城反魂香中「家を彩色く繪具筆、隈筆、藁筆、泥引筆、その筆先の金銀も」

くまへ 句前連歌・俳諧などで、句をつける前に當ること。永代藏四「そのあるじの句前の時、胡椒を買ひに来る人あり」

くみ 組。くみうた(組歌)の略。同じ趣の小唄を數多集め連ねたもの。三味線、又琴の唄にいふ。丹波與作上「お大名の宮仕、琴のくみでも誦はいで、誰に習うてはでな歌」

くみあゆ 汲鮎。鮎を網の中に追ひ入れ小さい柄杓や、さでなどで掬ひあげる。こと。大井川でやること。その鮎は蜷峨の名物といはれる。あゆくみ。

くみおび 組帶。糸を編んで作った帶。うちおび。武道傳來記二「紫絲の組帶しどけなく結びて。新可笑記二「金絲の組帶を取出し、是は子安地藏の腹帶なるが」

くみおびや 組帶屋。組帶を作り、又は商ふ家。一代男五「そなたは張箱屋又は組帶屋殿であるべしと」

くみがき 組垣。竹や木を組みあはせて作った垣。又、寢所のめぐりの垣であ

ると。二代男四「我が宿の組垣を叩きて助太刀頼むと呼ばるゝほどに」

くみかご 組籠。めかご(目籠)の類。二代男三「高砂屋の白味噌、川越風の組籠青鷲は大汁」

くみがしら 組頭。組中の頭。名主の事務を助け行ふ者。年寄。丹波與作中「庄屋・間屋・組頭」

くみこ 組子。組下のもの。ある組の部下。百日曾我一「組子には、思ひく」の笠印袖印」。曾我會稽田三「手の組徒(くみこ)に鹿猿狩らせ」

くみざかな 組肴。料理の語。大阪地方ですざりぶた(祝蓋)をいふ。鎌田兵衛名所歪下「今日の馳走の献立を知らずか、組肴の組手を定め、引つ組んで刺身庖丁」

くみした 組下。「くみこ」に同じ。曾我扇八景上「面々の手勢、組下入り亂れ」

くみちや 酌茶。うめちやちよう(埋茶女郎)のこと。

くみぢゆう 組中。組のうち全體。組仲間。女腹切下「組中・年寄月行事」

くみど 組戸。一そろひになつた戸。又、格子に組んだ戸(格子戸)をもいふか。一代男三「組戸に立添ひ、何おもふも知

らず、闇をとつて三度まで、三はうらみに存じまするといふ」

くみや 組屋。糸で紐などを組むことを業とする家。くみいとや。百日曾我三「室町の絲屋組屋ひさぎ女に」

くめん くめん(工面)。工夫。算段。薩摩歌上「いやく」武士の喧嘩にぐめんは入らぬ」

くめんごかし 工面ごかし。人のために工面(才學)してやるやうに、わざと見せかけること。曾我五人兄弟三「えゝ工面ごかし食ふ箱王でなし」

くめんづく 工面づく。工面の出来るだけを試みる。工面次第。

くもあし 雲脚。案(つくゑ)などの脚の雲形になつたもの。又、一般に雲の浮いてゐる形をしたもの。傾城酒吞童子四「花の時節は杉折の、雲脚・蝶形・洲崎形」

くもがみ 雲紙。鳥の子紙の一種。雲の模様を表したものの。色紙・短冊などに用ひ、又、長持の内側などに貼るにも用ひた。二代男四「長持の(中略)中を洗へば雲紙まこれ、二重底に百兩包にして」。大矢數五「初郭公雲紙の裏、見し相も塗長持に碎かれて」

くもきりまる 蜘蛛切丸。源頼光が膝丸(刀)で山蜘蛛を切つてから後、膝丸をかく稱したとのこと。大矢數三「蜘蛛切丸をぬいて懸つて、驚かす合點のゆかぬ枕なり」

くもすけ 雲助。蜘蛛助。住所不定の意から雲にかけていいひ、又、宿場などから巢を張つて往來の人につき纏ふ意から蜘蛛にかけて呼ぶのだともいふ。駕籠舁などの類。丹波與作中「そりや雲助の身持ぞや」

くもたてわき 雲立浦。くもたちわき。たちわき(相對する二線の中央がふくれ、兩端のすばまつた形)の中に雲形のある模様。世繼曾我「雲たてわきの狩衣」

くもてかろし 蜘蛛手格子。縦横に交又してきびしく組合せた格子。牢屋などにいふ。出世景清四「上三尺の詰牢にしこの木を以て蜘蛛手格子に切組んで」  
くもとり 雲鳥。雲に飛んでゐる鳥。模様などにいふ。大矢數「繪かきの上手雲とりの月」。二代男「入日の岡と想ふ所に、雲とりのうつくしく」  
雲にかけはし (諺) 雲みの達しがたいこととに譬へる。一代男「雲に懸橋とは、

昔天へも流星人(よばひど)ありや(中略)あはぬ時の心はと、遠き所までを悲しみ。尙、「かすみに千鳥」の條參照。

雲に汁が出る (諺) 雲に汁即ち雨が催して來ること。轉じて、物事に希望が生じて來ること。置土産四「雲に汁が出來て、雨のふりしこる跡は風と見定めんほに手をうち、思入の米買ひ」。丹波與作中「イヤ是くもにしろが出來てきた。どうした縁やら、三吉めが與作といふ名にほれて、常に己を大事にする」

雲に流る 瀧の流れ落ちる形容。大職冠四「雲に流るゝ布引の、瀧の白絲數散りて」  
雲の上着 美しいうはぎ(上衣)の形容。海門松上「霞の袂、虹の帯、雲の上着もゆりかけて、新艘つきだし出立ちばえ」

雲の裏 人目の届かぬところに譬へる。出世瀧徳下「雲の裏を尋ねても、おまより外世の中に、大事の人はなきものを」。日本振袖始三「親御に疵でも付いたらば、雲の裏でも云ひわけは有るまい」

蜘蛛の巢後光 「あみだのひかり」いふ

こと。「くじ」を蜘蛛の巢をかけたやうな形に畫き、その端にそれ〴〵金額などを記し、その部分を隠して入々に抽かせるのである。後光とは彌陀の縁にいふ。女腹切中「紙押し擔げ、蜘蛛の巢後光のべ引きさいて錢の高」。尙、「あみだのひかり」の條參照。

くものり 海苔の一種と見える。出世景清三「花にまがひの櫻海苔、天をひたせば雲のりに、月を包みて刈るとはすれど」

くもまひ 蜘蛛舞。網わたリ。絲を引き延べて渡る輕業。蓋し、蜘蛛に似てゐるのでいふ。置土産五「夜毎に蜘蛛舞ひの人形拵へて、朝に賣りて、此絲の細き事にて命をつなぎける」。平家女護鳥三「舞ひまひでも、蜘蛛舞でも大事な」

くもわた 雲陽。たら(鱈)の腸。淹藏して食用とする。萬文反古「青豆のあへ物・吸物・鱈・雲わた」  
雲をしるし あてにならぬことに譬へる。大句數上「うせもの雲をしるしの穿鑿じや、今まで爰に時雨の傘」。大矢數三「呼びにやれども着婆は留守也、飛車雲をしるしにどこ迄も」。永代藏五



「雲をしるしの異國船に投げ金もすたらず」

くもんじよ 公文所。訴へごとを聴く所。裁判所。出世瀧徳上「追放人の作法として八幡公文所の役人数多、てんでに割竹大地を叩き」

くやくや くよ〜。物事を心配するさま。「くい〜」ともいふ。一代女「女心にくやく〜と云うても叶はぬ罪を造りし」

くやみぐさ 悔草。くやんでの言ひごと。くやみの種。二枚繪草紙上「野路に兩人が悔み草、毒の草をも身の上と、知らぬ手元の暗さには燈臺草を思ひ出す」

くらかく 鞍掛。(動詞)踏臺のやうにする。またがる。傾城反魂香中「引舟も走つて来て、塀にくらかけ木に取付き」

くらかけ 鞍掛。鞍懸。鞍を掛けておく。臺。武道傳來記「長刀の鞘はづして、鞍掛に腰を置きて」

暗がりから暗がり (諺)ます〜分別しがたいさま。唐船噺今國姓爺下「これを見て了簡とは、なほ暗がりから暗がりぢや」

暗がりに鬼繫ぐ (諺)奥そが知れず氣味の悪い聲。何が隠れてゐるかわから

ず怖しい。永代藏四「此人は表向かうして内證のつよきこと、闇がりに鬼を繫ぐが如く、年越し毎に仕合せかきなり」。胸算用五「一年大晦日に節分ありて、掛乞厄拂ひ、天秤の繫ぎ、大豆うつ音まことに暗がりに鬼繫ぐとは、今宵なるべし怖し」

暗がりの犬の糞 (諺)他人の知らぬしくじり(矢策)を押隠す意。五人女三「あしき事は身に覺えて博奕打まけてもだまり、傾城買取りあげられてかしこ顔するものなり。喧嘩師ひけとる分かくし、買置の商人損をつつみ、是皆闇がりの犬の糞なるべし」

暗がりの牛 (諺)物事の鈍くて埒のあかぬこと、又差別のつかぬこと。「暗がりから牛」ともいふ。孕常盤二「彼の若衆の道のねばさは、あれこそほんのくらがりの牛」

くらげをけ 海月桶。食用の海月を鹽漬にしておく桶。永代藏六「海月桶のすたるにも蓼穂を植ゑ」

くらごころ 鞍心。鞍のかけ工合。鞍になじむ心。百日曾我三「鞍心しらぬ馬主をきらふと覺えたり、鐙を踏みしめしつかとめせ」

くらごと 暗事。人知れずすること。密事。秘計。大矢數三「宿屋の噂が自由にはまはる、くら事の合圖をしたる夜の月」。一代男四「惣じて斯様のくらごと彼是四十八ありける」

くらし 暗。とぼしい(乏)。不足である。(但し、否定的に用ひる)。國性爺二「我が縫粗は大國にて、七珍、萬寶暗からずと申せども」

くらする 暮す(佐行四段活用終止形又は連體形)の訛。大句數上「塵劫記智慧の外なる積物、隙で暮する嵯峨の片陰」

くらのうち 鞍の内。乗馬の術。鞍に跨がりてのわざ。當流小栗判官三「馬上のみごとき鞍の内、前代當代末代に、例し少なき達者かな」

藏は長者の花 (諺)櫻陰比事三「三階藏の白壁夕日うつろひ、皆内證はともあれ、藏は長者の花と云へるに、次第に下京まで繁昌して」

くらびらき 藏開。藏を開いて、中の財貨をあらためて見ること。又、商家の年中行事としては、正月の吉日を選んで倉庫を開き賣買をなす祝。五人女五「吉日をあらため藏びらきせしに、判金貳百枚入の書付の箱五百五十」。戀八卦



柱曆下「かのきそ始め引替へて、引かるる駒のくらびらき」

くらぶやま 暗部山。山城國愛宕郡鞍馬山の古稱。一代男「或日暗部山の邊に

しるべの人ありて梢の小鳥をさわがし」

くらのもの 暗物。淫賣婦。あんちよ(暗女)。京阪地方でいふ詞。江戸では「地獄」。

大矢敷三「蚊屋釣りかねてかしの夜着もなし、暗者とちぎる所が大矢敷。同「妹がりゆけば闇者僉議、傾城屋岩戸の前にて是を歎く」。一代男二「色には

こりず、小谷札の辻のくら者、月がかかりの手かけ者。あんぶつ(笑ふ女)

くらのものをんな 暗物女。前條に同じ。一代女六「裏かし屋に住める女の(中略)衣類と頭は各別に違ひ、合點頭の如し。是いかなる女房やらんと子細を尋ねしに、何れも世間を忍ぶ暗物女といへり」

くらのや 暗屋。淫賣宿。くらやど(暗宿)暖味屋。二枚繪草紙上「姫君は見放されはし、のくら屋へ下り、後には濱の納屋の影、藏屋敷。大阪にある諸藩の穀庫を管理する屋敷。各自の領地から

の米その他の産物は、こゝに廻送し、土地の商人と結托して賣つたものである。留守居、藏元などの役人が居た。置土産三「屋形奉公勤めて親許へ歸る、其時の人置、大阪に来て藏屋敷より請取りける」。女腹切上「大名の若殿へ藏屋敷から上げらるゝ大切な拵へもの」

くらやど 暗宿。「くらや」に同じ。一代男三「一間小暗くこしらへけるこそくせものなれ、爰はと友どちに聞けば、洛中のくら宿なり」

くらゐさま 位様。位の高い人を尊んでいふ。聖徳太子繪傳記三「お位様の御忌中は、月を日にかへて、十二月を十二日、我がまゝな成されやう」

くらゐだふれ 位倒。位ばかり高くて、實の伴はないこと。位のみで何の役にも立たぬこと。傾城酒吞童子二「何程お位高うても、借には勝たれぬ、ほんの位倒れぢや」

くらゐぬけ 位の高いものを罵る語。平家女護島四「清盛法皇をはつたと呪み、潮逆巻く大騾上げ、位ぬけ殿、法法殿」

くらゐぬすびと 位盗人。才幹なくて徒らに高位を得てゐる人。

くらをさめ 藏納。農家で、その年の收穫を藏に納める行事。源氏冷泉節上「年頭・八朔藏納、百姓並の禮式も、無禮なりと聞きけるが」

くりいし 栗石。栗ほどの大きいさの石。源氏烏帽子折四「塞の河原の石子詰と、神前の栗石を、追取りくつづて打ち」。生玉心中中「四邊を尋ね、くり石拾ひ、力に任せしやんくく」

くりうば 庫裡姥。寺の庫裡に召使はれる老女。五人女四「七十に餘りし庫裡姥ひとり十二三なる新發意一人」

くりがた 栗形。刀の鞘の差表(さしおもて)に、下緒をとほすために附けた半環状のもの。傾城酒吞童子一「返り栗形裏がはら、中にはいかなる名作の、千將英耶御座んめれ」

九里の渡 大隅國福山から坊の津に渡る舟路。薩摩歌中「九里の渡が近いげな、一足なりとも早い、がよし」

ぐりはま 物事のくひちがぶこと。順調に事が運ばれなくいふこと。ぐれること。曾我會稽山四「いふ事なす事ぐりはまに成り、曾我的運存へて幾何の憂目をか重ね見ん」

くる 来る。心がかたむいて来る。慕つて来る。ござる。一代女二「此の程つか

へたる肩までひねくらせた。これほどわれ等にくること、何とも合點がいかにぬ。色道大鑑「くる、是もほれらるる心也(中略)、功者なる男のしなして女よりしたふ心ざしの、早く來ると言心也、男が女へくるといはず」

くる うんすんカルタの用語。もと變語でクルとは太鼓の模様三巴のついた札(五色の札の一)である。大矢數四「貧僧にいな事が有百握、四くるを持つて衣うつおと」

ぐる 悪だくみの仲間。一味のもの。楢橋三上「めしろになるこの乳母はぐるなり」。傾城酒吞童子四「さては客に頼まれ、ぐるに成つて訴訟か」

くるくるしまだ 烏田鬻の一種。くるくるとわがねて結つたもの。大職冠三「都男に採まるれば、鹽じむ肌につとりと、油に髪の色赤ばりも、今は翡翠のくるくる烏田」

ぐるぐるわけ 「ぐるまげ」に同じ。平家女護鳥三「黄楊の小櫛も取る間なく、蝶螺の尻のぐるぐるも」。ぐるりわけ。くるしげさう 苦氣相。苦しき。くるげさうな聲音にて

くるひさき 狂咲。その季節でないのに花の咲くこと。その花。かへりさき。くるひ花。

ぐるまげ ぐるくくと無造作につかねた鬻。「只るぐるわけ」の條参照。一代男三「額は只丸く、きは墨こく、髪はぐるまげに高く、前髪すくなくわけて」

くるまざ 車座。多勢が輪のやうに内に向つて坐わること。永代藏二「御神樂といへど、社人は車座にゐて錢つなぎをり」

くるまぜんしち 車善七。(人名)江戸の非人頭(乞食の親分)。佐竹義宜の臣車忠次の弟。兄の誅せられたのを恨み、仇を報いようとして將軍秀忠に仕へ、草履取となつたが、事露れて縛せられた。秀忠その罪を許して仕へしめようとしたが聴かず、去つて非人頭となつた。永代藏二「身の置き所なく心の燃ゆる火宅を出て、車善七が中間はづれの物もらひとなりぬ」

くるまそう 車僧。車で諸方を巡り歩いた僧。謡曲に「車僧」の曲がある。又、和漢三才圖會に山城國太秦南市川村の海生寺に車僧の住したことを記し、且曰く「車僧は嘗て生國姓氏を著はさず。

常に破車に乗つて四方を往返す。能く七百年來の往事を歴試し、以て之を語る。呼んで車僧と稱す。又、七百歳と名づく。南禪寺の直翁侃に謁し、大悟して深山正虎と號す」と。大矢數一「しのび路や猶巡りゆく車僧、いつそに懸つて嵯峨の秋風」

くるまたいまつ 車松明。がんだうちやうちん(強盜提燈)のやうにしかけて、中に小壺に油をさしたものとしいひ、又束ねた松明三つ四つほど一つにして中を結び、車の矢のやうにして點じたものともいふ。

くるまづかひ 車使。車を曳いて使ひをすること。又、その者。大下馬四「烏羽の車づかひに、大佛の孫七とて、その生れつき千人にもすぐれて」

くるまながもち 車長持。底に車の附いた長持。大句數上「夜前引くらん車長持、似合の女房呼んで二親は」。五人女「かの七百兩の金置き所かはりて、車長持より出でけるとや」



車長持

車に切る 車切りにする。輪切りにする。武道傳來記「天理を以て討つ太刀早

く

く、車に切り放ち、靜かに鞘にをさめて」

車に拂ふ 前條に同じ。武道傳來記<sup>四</sup>「車に拂ひたふし、止めまで刺して」

車は海へ舟は山 (諺)物事のあべこべな譬。卯月潤色中「こちと夫婦は下人にて、いま兄弟は旦那顔。車は海へ舟は山、皆逆さまの憂さつらさ」

くるまばんや 車番屋。車をつけて移動するやうに作つた番小屋。曾我扇八景

「車番屋をゑいやらや」

くるまぶね 車船。兩舷に車をつけて、水をかいて進む船。天神記「和田の岬

の車船、浮世をめぐるとめしかや」

くるみあえ くるみあへ(胡桃齋)。料理の詞。胡桃を他のものに交ぜたもの。

一代男六「太夫の聲として、おれはくるみあへの餅をあく程とあれば」

ぐるりだか 髪結び方。「ぐるりおとし」に對するものであらう。ぐるり(周

圍)即ち鬘とたばとを高く掻きあげたやうにしたものか。二代男四「臺どころ

ににじり込み、ぐるり高なる娘を譽め」

くるりのや 矯矢。くるりや。桐又は楡で蕪のやや長い形に作り、小さい雁股の鏃を附けた矢。水鳥を射るのに用ひ

る。雙生隅田川三「一文字に池へざんぶと飛び入つたり、水にくるりの矢の如く」

くるる 樞。戸を開閉せしめる装置。くるる。又、戸のさるかき。さん(棧)。

おとし。油地獄下「何いはるゝと、くるるの穴、耳をつけてぞ聞きぬたる」

くるわ 廓。曲輪。遊廓。花街。色里。百日曾我三「金子百兩たしかに手取の

身は籠の鳥、(中略)年の間はくるわの外へ、一足にても踏みもかよはぬ」

くるわざた 廓沙汰。遊廓に於ての評判。吉野忠信二「是は傾城の不心中、差合くらぬ廓沙汰、仇名の立つが氣の毒さに、

喉笛劈きくたばつたにて候はん」

くるわさながい 廓三界。くるわの邊一帶。冥途飛脚中「此の忠兵衛が、五十兩

損かけうかか氣遣ひさに、廓三界披露して、男の一分捨てさする」

くるわふう 廓風。遊女町の風。くるわやう(廓様)。

くるわもやう 廓模様。くるわ向きの模様。遊里に流行する模様。傾城反魂香

中「傾城好きと聞きし故、此の小袖を見や、廓模様と言ひつけた」

くるわやう 廓様。くるわふうと同じ。

卯月紅葉上「髪結び小利口に、ひつくるく〜曲輪様、今は向かぬと縫箔の」

くるわよすぢ 廓四筋。大阪の遊廓新町。北から阿波座(又は佐渡屋町)、瓢箪町、

越後町、吉原町の四筋の通りから成るので稱する。油地獄下「曲輪四筋は四季

共に、散る事知らぬ花揃ひ」

くれえん 樽縁。縁がまちと平行に、縁側の長さに沿うて、横板を張つて造つた縁。(切目縁の對)一代男五「半弓に

鳥のしたの矢の根をつがひ、樽縁より下に飛下るるを」

くれてん 懷硯五「妻子の嘆き、九年跡にくれてんに見えざること、都度々々に咄しける」

くれとどめ 樽止。二十不孝一「八月二十三日の大風(中略)、板前も樽止のみ殘りて」。大句數上「八重葎の花おし春の

樽とどめ、明屋にしたる藤の店かり」

ぐれりぐれり ぐるりぐるり。ぐらぐら。

物のゆらいで、定らぬさま。松風村雨東帶鑑三「蠶の呼聲蚤小舟、ぐれりく

とかはり行く、男心は頼みなや」

ぐれん 紅蓮。佛語。ぐれんちごく(紅蓮地獄)の略。八寒地獄の一。鐵圍山

(てつちせん)の外邊の闇黒な處にあつて、罪人がこゝに墜ちれば、酷寒のため支體が裂けて、紅の蓮のやうになるといふ。戀八卦柱曆下「紅蓮の井戸掘り焦熱の、地獄の釜ぬりよしなや」

くろがうし 黒格子。いちこ。口奇の家。大阪天王寺推寺町の邊は、俗に巫女町と稱し、口奇せをする「いちこ」が住んでをり、殊に、林町にあつて格子を黒く塗つた「黒格子」と呼ぶ家が最も有名であつといふ。た卯月紅葉上「乙女子ならぬ御子町に(中略)、黒格子の辻とかや、上手と聞きしみこの門」。卯月潤色中「神子町の、黒格子お辻の方へ、在所の衆が呼ばしやんして」

くろがねのちやう 黒金の帳。閻魔の廳にある鐵のふだ。罪人の名を記して地獄に送るに用ひるといふ。卯月紅葉末後巻料「斯くまで重き罪咎の、閻魔の前には黒金の帳に附くといふものを」。くろき 黒木。皮のついたままの丸太。又、生木を竈でいぶして黒くしたもの。薪とする。傾城酒呑童子ニ「山がつが、八瀬や大原木・黒木・把ね木・柴召されとぞ賣りにける」。くろぼく。

くろきうり 黒木賣。薪とするくろき(前

條参照)を賣り歩く者。山城國愛宕郡八瀬・大原等より出て、黒木を頭上に載せて京都の市中を賣る。一代男三「戴きつれたる黒木賣に見付けられてはと、しのぶ間こそ面白の花の都近くや」。二代男八「黒木賣庄左衛門は、烏帽子着て、目鼻忙しきつくりがほ」

くろごめ 黒米。しらげない米。女米。置土産ニ「黒米の打込茶を飲み、病中の願に饑の刺身を食うて死にたいと思ふ心」

くろざね 黒實。黒核。西瓜などのたねの黒いもの。黒實のは殊に味がよいといふ。又、西瓜のこと。出世瀧徳上「顔が引きつった西瓜のやうな顔なれど、色は黒ざね、ずんと風味のよい男」

くろし (接尾語)くるし。名詞について、何々の趣あり、何々らしいといふ意の形容詞を作る。最明寺殿百人上臈下「大人くろしき懸烏帽子、行儀正しき割膝に」

くろしよぬん 黒書院。全體を黒漆で塗つた書院。傾城反魂香上「高手小手にいましめ、黒書院の床柱に思ふさまに縛り附け」

くろちやう 黒茶字。黒い茶字縞の絹布。

一代男六「我ぬぎ置きし、黒茶字のきる物」

くろび 黒日。萬事に忌むべき凶日。受死日。陰陽家で、曆に黒圈を上につけた日。戀八卦柱曆下「せめて未來のくろ目を遁れ、二季の彼岸に到らんと」

くろぶた 黒蓋。灸をすゑた痕の、黒くなつた所。一代男一「二月の二日に天柱すゑさせ給ふ折節、黒ぶたに鹽をそゝぎまゐらせけるが」

くろぼし 黒星。的の眞中の黒點。轉じて、ねらひ場所。づぼし。用明天皇職人鑑四「矢竹心の一念に、くろぼしを見しらせたり」

くろぼね 黒骨。扇などの骨の黒く塗つたもの。一代女六「延べの二折、似せ金の黒骨を持ちて、忽ちに委直し」

くろむ 黒む(他動下二)。紛らしかくす。欺く。ごまかす。二代男七「なんば夜見世でくろめ給へども、壁に行燈點けた様な腹のなり、十四五人も見えける」

くろむ (自動四)くらしの立つ。(前條の轉用か)。織留六「夫婦の人の心さへ變らずば、たがひに身のくろみて後、又一つの寄合成る事と申すにぞ」

く

**くろめる** くろむ(他動下二)の轉訛。黒くする。一代女「身持ち卑しく、脚布のつぎをくろめるも最もぞ」

**くろろ** くるる(稱)の訛。卯月紅葉中「倉の戸を明けてそつと入り、くろろをはたと落しける」

**くわいくわい** 晦々。曇つて四邊の暗いこと。最明寺殿百人上臈上「雲の脚さへ急潮に、底の岩稜巍々として、海上遙かにくわいくわい」たり

**くわいしよ** 會所。町の人々の集會する所。町内の公務を議する場所。胸算用「この町の會所にて札を開くと沙汰せられ。卯月紅葉上「町の會所の帳箱に、入納めた議り狀」

**くわいせい** 懷生。生活を營む者。衆生。釋迦如來誕生會「一切種智の光明に、齋々たる懷生、唱々たる生類」

**くわいせん** 廻船。回漕船。殊に遠方諸國に大廻りする船。博多小女郎波枕上「十四五反の廻船に、船頭水夫は襦袍着て」

**くわいちうがつば** くわいちゆうがつば(懷中合羽)。懷中に疊んで入れることの出来る合羽。永代藏六「三文字屋といへる人、むかし懷中合羽を仕出し、そ

れより馬道具の仕込次第にさかえて」  
**くわいぶん** 廻文。初めから讀むも終りから讀むも、同文になるやうに作つた歌句文章をいふ。大句數上「六義聞ゆる廻文の歌、さくら草定家の庭の櫻草」

**くわりんふう** 光琳風。尾形光琳の創めた畫風。又、光琳このみの假山の風。傾城酒吞童子「光琳風の築山を見渡す目さへ遙々」と、谷の岩組九十九折

**くわりんまつ** 光琳松。光琳風の好みに作つた松。前條參照。  
**くわくきよ** 郭巨。二十四孝の一人。孝子傳に、後漢郭巨、家貧養老母、妻生一子三歳、母常減食與之、巨謂妻曰、貧乏不能供給、共汝埋之、(中略)巨遂掘坑二尺餘、勿見黃金一釜、釜上云、天賜孝子郭巨、官不得奪、人不不得取と。釜は「かま」でなく、量

の名である。永代藏「郭巨が掘出し金の大釜、あれにて飯も焼かれまじ」  
**くわくらん** 霍亂。漢方醫のいふ語。急性の腸カタル。夏日の食傷から起つて、激しく吐瀉する。又は氷の朝日上「この暑さでは霍亂して」

**くわくわんふ** 火流布。ひねずみの毛織物。古昔支那で、石綿のことを南方の

火山に棲む火鼠の毛で織つた布と誤つたのであるといふ。國性爺「虎の皮、豹の皮、南海の火流布」

**くわげんけい** 花原馨。唐朝の寶物として傳へられたもの。石で造り、架にかけて打鳴らす、へ字形の樂器。大職冠「唐朝に傳はる花原馨、酒漬石、面背の玉、この三つの寶」

**くわこきん** 火尅金。五行の説でいふこと。火は金に尅ち、金は木に尅ち、木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅つとされる(相尅の説)。恭盤太平記「金尅木火尅金、自尅の相顯れたり」

**くわし** 花肆。色道大鏡「遊郭、總じて傾城町の事也。花肆、同じく傾城町のことなり」

**くわしや** 花車。くはしや。遊女を監督し指揮する女。茶屋の主婦をいふ。花魁(遊女)を廻はす、又、花(纏頭)で廻はる義から花車と稱されるときもいふが、香車とも書く。やりて(遣手)。遣女(けんぢよ)。天網島上「はるくで小春様と、あるじの花車が勇む聲」。冥途飛脚中「ヤア皆聞知つた妓の聲、花車、内にか」。油地獄上「申し花車さん同じ道ばかりで氣がつかる」

くわしやう 火床。船内の火を焚くやうに作つたところであらう。懐硯二便船の斷開いて、情ある人々は胴の間に乗り移りければ、我は火床の前に身を進め

くわしよぶね 過書船。過所船。淀川を往來した運送船の大きなもの。嬉遊笑覽に曰く「過書船、淀河筋運送の舟三百石をつむべし、今は川淺くなりて用ひがたし」と。南留別志に曰く「過所とは關の切手なり、關の切手持ちたる船を過所船といふより、今はその名ばかり残り」と。織留二過書の舟持、世上に名をふれて

くわしよまち 過書町。大阪船場の町名。今の内北濱の筋。前條參照。置土産五「過書町の大臣、男盛りに世を遁れ」

くわせいきゆう 華清宮。支那唐代の驪山の離宮の名。溫泉宮。玄宗が楊貴妃と遊んだので名高い。武道傳來記六「金盃甘露の醉の中に世にあらざらんたはむれのみ華清宮もこんな事なるべし」

くわぞめ くはぞめ(桑染)を見よ。  
くわだ 華陀。華佗。支那三國魏の名醫。字は元化。劉勳女の左膝の瘡を癒した話が有名である。薩摩歌下「黄陳といふ

南蠻外科、昔の華陀が仙方を傳へ」  
くわたい 過怠。課怠。過代。過失や罪科があつた時、そのつぐなひとして、財貨を出さしめ、又は勞役に服せしめる刑。武家義理物語一「落せしまことの錢に尋ね當るまで毎日過代をいひ付けけるに」。曾我會稽山一「半時の半時違つても越度、課怠仰付らるゝとの御意」。

くわたう くわとう(火燈)。瓦燈。「くわとうがた」の略。瓦燈のやうに上がせまく下が廣い形。一代女四「髪は引下げて、はね元結を掛け、額際を火塔(燈)に取つて置置濃く、」

ぐわち 「ぐはち」を見よ。  
ぐわちぎやうじ 月行事。一箇月交替の行事。つきぎやうじ。遊廓では、樓主の惣代といふ格である。冥途飛脚中「身請の衆は、親方が濟んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取らねば、大門が出られませぬ」

ぐわつかい 月蓋。次條に同じ。博多小女郎波枕上「天笠の大金持月蓋と名に高き、さつてもしくはは長者あり」  
ぐわつかいちやうじや 月蓋長者。印度毘舍離大城の金持。國中惡疫流行の際

佛の教に従つて彌陀三尊の像を鑄て祈念し、除疫の功を成したといふ。月蓋王とも稱されてゐる。傾城酒吞童子四「御所車一輛買うてくれ、乗つて歩こと法圖もなき、月蓋長者の隠居せられし如くなり」

くわつけい 活計。ゆたかな生活。贅澤なくらし。歡樂。永代藏六「御江戸に來りて奉公を致せばこそ、かゝる活計にあふ事よと、ひとりつぶやきて喜ぶ風情」。一代男七「吾妻請出して(中略)、活計歡樂の暮らし、是をうれしくもおもはず」。晝夜用心記六「存じよらぬ御馳走を悦び、近年の活計して」

くわてん 花田。はなだ(纏)の當字。はなだいろ(纏色)のこと。碁盤太平記「皆一様の花田の脚絆、由良之介が智略にて」

くわとう 瓦燈。瓦洞。ともし灯を點ずる陶製の具。方形で上がせまく、下が廣い。晝夜用心記一「蒲團一つ枕二つ、瓦洞に燈火細く氣を通しける」

くわとうがた 前條「くわとう」のやうに、上せまく下が廣い形。色道大鏡二「額のとちやうは丸きにしくはなし、丸きとて眞中ばかり高くあけて、富士

く

なりにとりたるはわろし、瓦燈がた。袴  
ごし、かたく是を制す」

くわら 掛羅。根つけ。又、根つけの附  
いてゐる巾着、印籠、煙草入などの稱。

一代男五「一人は象牙の掛羅よりもぐ  
さを取出し、三里に据ゑて貌をしかむ  
る」

くわら 掛落。掛羅。禪僧の着るもの。  
兩肩を通して胸間にかけての小さい方形

のもの。くわらげき。掛子。

くわらり 全く。すべて。残らず。がら  
り。又、物事の俄に一變するさまにい  
ふ。

くわらりぐわらり 固い物の觸れあふ音  
などにいふ。ぐわら〜。轉じて、金  
銀など惜しげもなく投げ出し、濫費す  
るさま。織留三「揚屋の下々迄もかゆ  
き所へ手の行くやうに、ぐわらり〜  
と嬉しがらせ」

くわらりずんと 「くはらりずんと」を見  
よ。

ぐわりやく 瓦りやく。くわれき(瓦礫)  
の訛。孕常盤二「香箱の内燃え出で、(中  
略)、微塵に碎け飛ぶ音は、瓦りやくを  
割るが如くにて」

くわんえいせん 寛永錢。寛永通寶錢の

略。大句數上「夫よりは二十一年冬の  
空、紙子にかゆる寛永の錢」次條参照。

くわんえいつうほう 寛永通寶。寛永十  
三年から萬延元年まで江戸幕府で發行  
した錢。銅・鐵・真鍮の三種あり、面に穴

の周圍に寛永通寶の四字を上下左右に  
分けて刻したるもの。物種集上「拾ひ文字  
あつめ〜て二十年、出世に及ぶ寛永  
通寶」

くわんおんこう 觀音講。觀音經を講ず  
る法會。觀世音の法事。胸算用。「肴屋

も、觀音講の出し前も、揚屋の銀も」

勸學院の雀 「勸學院の雀は蒙求を囀る」  
といふ諺は「門前の小僧習はぬ經」と  
同意。勸學院は藤原冬嗣の創立した學  
校。その庭の雀は、朝夕子弟の蒙求を

讀むのを聞き覺えて囀つたといふ意。  
吉野郡女楠一「合點々々智略はお家、勸  
學院の雀任せておけと小躍して」

くわんぎをん 歡喜園(苑)。佛語。切利  
天帝釋の居城にある四園の一。縱廣千

由旬、七重の垣は七寶から成り、諸天  
人が園内に入れば自然に歡喜の念が生  
ずるといふ。又、印度迦毘羅衛城に於  
ける釋尊降誕の園、藍毘尼園の別名し  
もいふ。孕常盤四「淨瑠璃御前と聞えし

は(中略)、百の媚百のしな、歡喜園の  
花の下、錦華帳の月影に、明けて三五  
の春秋を」とは、前者の例。

くわんくわつ 寛瀾。氣まへのはでなこ  
と。だて。驕奢。一代男八「奢々第一の世

之介が肝煎ほどに、よろづ寛瀾に申付  
けて」。男色大鑑六「この少人氣分は寛  
瀾にぞ生れ付きて」胸算用。「問屋の寛  
瀾女」

くわんくわつごゑ 寛瀾聲。寛瀾な聲。  
だてな呼びごゑ。

くわんくわつもの 寛瀾者。寛瀾な人。  
はで好みのもの。だてしや。一代女「く  
わんくわつものめと、人皆打ちながめ  
たる」

ぐわんぐわと 「ぐはぐは」と同じ。  
くわんくわん 寛寛。ゆるやかなさま。  
ゆつたり。釋迦如來誕生會二「提婆寛々  
と打ちうなづき」

くわんこうちごく 灌口地獄。酒客(さ  
つけのみ)が後生に到るといふ地獄。俗  
つれ〜。「そも〜」灌口地獄といふ  
は、直径五十由旬の爛鍋あり、それに  
湯玉立ち騰るほどに爛をして、銅の武  
藏野潰臈丸といへるに丁と注いで、温  
なる肉を肴に挟み、牛頭馬頭立ち重な

る



り腕を取り、何の興はなけれど最一盃とすゝ、強ひられて飲めば、五體蕩けて斷末魔の苦みより堪へがたく絶入すれば」

ぐわんごじ 元興寺。ぐわごじ。鬼のやうな貌をして、小兒を嚇すにいふ語。がごじ。がごぜ。昔、大和國の元興寺の鐘樓に、鬼が棲んでゐたといふ傳説に基く。大矢數三「あはれや爰に捨子泣き止む、元興寺をそれさへ夢か幻か」

ぐわんさい 願齋。願西。末社四天王の一人。名は彌七。神樂庄左衛門と共に文作(もんざく)を得意とした男。一代女五「願西にもまれ、神樂に太鼓を見習ひ」。永代藏六「文作には神樂願齋もはだし」。二代男「或時願西の彌七、神樂の庄左鸚鵡の吉兵衛」

くわんざし 貫差。貫繕。錢一貫文を貫く繕。永代藏「借錢一貫と云ひけるに、寺役の法師貫ざししながら相渡して。繕留四「錢拂の男貫ざしより抜きて、二人が中へ錢とらせて」

くわんさま 觀様。觀音様の略。一代男「かく暫くのことも、一世ならず觀様のお引合せ」。くはんさま参照。

くわんじん 勸進。くわんけ(勸化)する

こと。堂塔、佛像などを建立し修復するための資金を勸め出さしめること。喜捨。寄付。繕留二「ありのまゝなる法師とて、皆勸進をとらせける」

くわんじんじよ 勸進所。勸進の事務を扱ふ所。重井筒下「大佛殿の勸進所、身を捨つる藪となりけり」

くわんじんずまふ 勸進相撲。勸進すべき金品を集めるために行ふ相撲。大阪獨吟集「はや七日寢覺の床のゆめうつつ、勸進ずまふありてなければ」

くわんじんねぎ 勸進禰宜。勸進して歩く禰宜。勸化を求めてまはる神官。繕留四「伊勢神樂の勸進禰宜」

くわんじんのう 勸進能。勸進のために興行する能樂。見料を取つて觀させる能樂。又、能太夫が一世一代として權才能樂。永代藏四「京の北野七本松にて觀世太夫一世一代の勸進能ありしに、金子一枚宛の棧敷」

くわんじんばう 勸進坊。勸進してあるく僧。勸化を求めてまはる坊主。俗つれ。二「南都の大佛建立の勸進坊諸國を廻りし時」

くわんじんびくに 勸進比丘尼。歌を歌ひ、念佛を稱へ、地獄、極樂の繪卷物な

ど携へて繪説きをしながら諸國を勸進した比丘尼。後には墮落して一種の私娼のやうになつた。うたびくに。一代男三「御寺の門前より詠むれば、勸進比丘尼聲を揃へてうたひ來れり」

くわんじんびしやく 勸進柄杓。勸進の錢を受ける柄杓。五十年忌歌念佛下「姉様のこれの、勸進柄杓の笑顔よしとて柳が招く」

くわんじんひじり 勸進聖。くわんじんばう(勸進坊)と同じ。大矢數三「焼出しの鉢にて招く西の空、夫思ひたつ勸進ひぢ(じ)り」

くわんじんまと 勸進的。男色大鑑七「勸進的を世渡りにして有りける」。

くわんじんよみ 勸進讀。勸進を目的として讀み物すること。書物を讀んで金錢を乞ふこと。永代藏五「書物ずきの權六は、神田の筋違橋にて太平記の勸進讀み」

くわんぜこより 觀世小槎。紙を細長く切つて綴つたもの。くわぜより。くわんぜんより。くはんぜこより。一代男七「文ども引きさき、くはんぜこよりのべて、ちいさきかるこをしかけ」

くわんぜさ 觀世座。觀世流の能樂を演

く

ずる所。兩吟一日千句「觀世座は例をひいたる朝霞、びり〜〜雲雀笛ふく」

くわんたい 緩怠。(一)不作法。不届。失禮。出世景清二かゝる晴いの庭なるに類冠は緩怠なり、色代せよ。又、手おち。過失。なほざり。

ぐわんたて 願立。神佛に願をかけること。ぐわんがけ。生玉心中上「數萬人、心々の願立てに、神の御身さへ、あゝいそもじの」

ぐわんにんぼろず 願人坊主。乞食坊主。又、人に代つて、願がけの修行。水垢離などをする坊主。守貞漫稿「或人曰く昔台嶺の僧侶所願のことありて江戸に下り、屢々出聽すれども未だ之を果さず、衆僧在府年久しくして資盡き、遂に貧困に至り、市中を巡りて錢米を乞ひ、永く沈淪せる者也と、然りや否や京阪にこれ有るも同流か」。一代男六

「八わうじの柴賣、神田橋にたてる願人坊主」

ぐわんにんめ 願人奴。願人坊主を罵つて呼ぶ詞。蟬丸五「是願人奴、馬上にも用捨せず、傘をひらめかし、落馬させつる奇怪と」

くわんぬきざし 門差。貫の木のやうに、刀などを水平に差すこと。

くわんばい 勸盃。けんばい(勸盃)。酒盃を人にすすめること。

ぐわんほどき 願解。願がけを解くこと。願がけの事が叶つて、禮まゐりすること。出世瀧徳下「神々に、先づ願ほどきに悦びの、幣帛をあげ神樂をあげ、詣り納むる八幡山」

くゐ 油地獄下「此錢一文仇にはなるまい。肌身に付けて一かせぎ、お二人の葬禮に、立派な乗物に乗せうと云ふ氣がなければ、男でもないくゐでもない」

「くゐ」は「男でも何でもない」などいふ「何」にあたる、口拍子につけた語と見られる。

くゑにち 凶會日。萬事に凶であるとする日。陰陽家が、陰陽相尅すると考へた悪い日。戀八卦卦曆下「何くよ〜と凶會日の、悔むもよしな引きよせて」

ぐんしや 軍者。軍學に達した人。兵法家。新可笑記ニ「軍者の名言の如く、是を見掛け遠矢を射かけぬれば」

くんじゆ 群衆。多勢むらがつてゐる人達。鳥原御影供紋日「きせんくんじゆの其の中にも」

くんすわん 榎子椀。俗つれん(三)椀の口に附木曲げて、榎子椀にて汲む。寺院で用ひる食器と見える。くわんす(鑪子)のことか。

ぐんたい 郡代。江戸幕府の直轄地を支配する役。職掌は代官と同じであるが特に形勝の要地にある者、又、その管轄範圍の廣いものをいふ。大代官。武家義理物語ニ「右の段を御郡代衆へ御斷り申しあげ」

ぐんでうづよ 「組んでう(失)すよ」の意。もと平家物語の實盛最期の條に、「くんでうづよ」とあり、謠曲の實盛にも出てゐる語。但し下例は「組んだな」

「とりおさへたな」などの意と見るべきである。百日曾我ニ「ヤア搦めよ、あつばれおのれは日本一の剛の者をぐんでうづよと手をまはすを、高小手手にからみ付け」

ぐんない 郡内。織物の名。甲斐國都留郡、郡内地方から産する絹。永代藏「一日野郡内絹類一人、羽二重一人」

ぐんないじま 郡内縞。前條「ぐんない」織の縞物。一代男七「様々口がため、ぐんない鳥のおもてを、約束することそ氣の毒なれ」

ぐんばいしや 軍配者。軍配を取つて指  
揮するもの。監軍。大將。用明天皇職  
人鑑五「軍師・軍監・ぐんばいしや」  
ぐんばふだて 軍法だて。軍法を知つた  
かぶること。吉野都女楠四「童なら童の  
様にしてゐや、出るまゝの軍法だて」

# け

けあげ 蹴上。①蹴上げること。蹴上げ  
たもの。はね。雙生阴田川四「往きかふ  
人の蹴上げの塵、かゝる身となり梅若  
が」②地名。京都粟田口にある。「蹴  
上の水」のことは、牛若丸と關原與市  
との故事に據るといふ。戀八卦柱曆下  
「強きおきめに粟田口、蹴上の水に名を  
流す」

けいあん 慶庵。縁談・奉公口などの世話  
をする者。承應の頃、江戸京橋に住ん  
だ大和慶庵といふ醫が、縁談の媒介な  
どもしたので起つた名稱であるとい  
ふ。桂庵。慶安。轉じて、世辭。追從。  
輕薄。又それをいふ人の意。傾城酒吞  
童子四「さても出來た遊ばす〜、米取  
る能太夫もはだしちやと、慶庵とりど

け

り御機嫌何ふ折節」

けいあんさぶらひ 慶庵侍。世辭・追從を  
言ふ武士。慶庵口をきくさむらひ。曾  
我虎磨上「祈經諷ひのけいあんさぶら  
ひ、大磯邊方々を晝夜徘徊すると承る」  
けいき 景氣。けしき。景色。萬文反古  
三「嵯峨の人をたのみ、けいきよき所に  
庵をかま〜」

けいきよく 繼局で、「あとつぎ」の意か  
といふ。三社託宣「先帝二の宮雅仁親  
王を下さるゝの間、養ひ取つて二人の  
姫一人娶はせ奉り、一家のけいきよく  
たるべき」

けいけい 雉子。犬・鹿などの啼き聲。け  
んけん。百日曾我五「春の狩場にすむ雉  
子の、草葉に身をばかくせ共、妻こひ  
かぬる折々は、けい〜ほろ〜と鳴く  
聲に」

けいこ 藝子。俳優。役者。殊に年若の  
修業中のもの。胸算用四「四條の役者に  
近付ありて、これを頼みにして藝子に  
出して」。萬文反古「堺町にては名高  
き藝子になづみ、太夫元へのつけとど  
け」。又、遊女の稱。男色大鑑八「江戸  
にて藝子のを小紫とよび、京にてかを  
ると付け、遊女の名も物やはらかにし

て聞きよし」

けいこく 傾國。①美人。遊女。②遊廓。  
色里。吉野都女楠三「或は花見の開帳  
の、又は傾國・猿芝居、人立多き所にて」  
げいしや 藝者。①藝能に達した人。新  
可笑記三「諸事の藝者も極意まで習ひ  
得る事かたし」。②遊藝に巧みな人。藝  
人。聖徳太子繪傳記三「藝者の盲法師な  
ど、琴・琵琶・花鳥、なぐさみは梨み次  
第」。今宮心中上「役者評判扇賣、浪花  
藝者の風俗を」。今の藝妓でない。

けいすゐ 契水。精液。一代女「此川の  
流の如く、契水絶えずもあらまほしき  
といへば、友とせし人驚き、我は又女  
のなき國もがな」

けいせい 傾城。契情。遊女。女郎。出  
世瀧徳上「可愛い男の流浪したのを聞  
きなから、身の首尾を思ふ様な傾城ち  
やと思つて下さんすは、曲がない情な  
い、くつわの譯が立たぬ」

けいせいらげじやう 傾城請狀。傾城と  
して身を賣るについての證文。傾城奉  
公の保證狀。百日曾我三「けいせい請  
狀」  
けいせいぐるひ 傾城狂。遊女ぐるひ。  
傾城を買つて遊蕩に耽けること。一代

男五「傾城狂ひのしまつと、下手に月代剃らすほど、世にいやなる物はなし」  
けいせいづか 傾城柄。傾城買ひのこと。で服合ふ權勢。遊里で幅をかすこと。傾城佛原「此の男も傾城づかを握つたなれの果てぢや」

けいせいみやうが 傾城冥加。誓ひの語。傾城としみやの冥加。傾城たる幸福。眞心からの喜び・感謝を示す場合にいふ語。壽門松上「吾妻を見込んで頼むとは、いとらしい婆様、傾城冥加聞く氣でござんす」

けいせいや 傾城屋。遊女屋。女郎屋。二十不孝「それ〴〵の勤めもあれば、傾城屋に身を賣る事といふにぞ、志優しく」

けいせん 傾城。「けいせい」の訛。冥途飛脚下「忠兵衛殿と申すが、大阪へ養子について、けいせん買うて他人の金を盗み」

けいせんくわ 桂仙花。備前美作にて白頭翁を云ふ。と俚言集覽にある。白頭翁（おきなぐさ）は、莖の高き五六寸乃至一尺。花は四五月頃莖の頂に開く。外部は白毛で被はれてゐるが、内部は滑かで濃紫色である。各地に野生し、

又栽培して觀賞用とする。うねこ。こまのひざ。その他いろいろ、異名がある。生玉心中上「辛氣然して待宵に、似たりや似たり桂仙花」とは、傾城（けいせん）にかけて叙したももの。けいそ 麗鼠。「はつかねずみ」の異名。傾城島原蛙合戦「麗鼠神丘の下に穴掘つて、人のくすぶる患を免るとかや」

けいそくざん 鷄足山。印度、伽耶の東南七哩にある。摩訶迦葉尊者がこの山に入定し、彌勒の出世を待つと傳へられる。狼足山、尊足山ともいふ。釋迦如來誕生會「鷄足山の帝釋天に、智慧を祈りの日參」

けいちよろう 藝女郎。遊藝の巧みな遊女。けいづくし 藝盡。身に覺えあるあらゆる藝を演ずること。藝のありたけを盡くすこと。生玉心中下「人をいさめの藝づくし」

けいてんじ 慶傳寺。大阪、小橋東寺町にある。觀音巡り三十三番のうち、第十二番の札所。曾根崎心中「さてげによい慶傳寺」

けいはく 輕薄。心の篤實でないこと。浮調子なこと。轉じて、追従、へつら

ひ、お上手いふこと。一代男「亭主内儀が入替り、けいはく數を盡くし」。同「亭主のもてなし、おかたのけいはく、とかく金銀の光ぞかし」

けいはくざけ 輕薄酒。唯おつきあひに飲む酒。曾我扇八景中「面白からぬ輕薄酒に氣がつきはて」  
けいはくどころ 輕薄所。追従や世辭で商賣してゐる所。遊里の稱。榮花咄「もとより輕薄所なれば、まづは御目のうち、鼻の高き、大臣に備はりました御生れ付とそだてける」

けいはくらし 輕薄らし。追従らしい。油地獄下「生の母の追出すを、繼父の我等輕薄らしう留められず」  
けいばつにん 刑罰人。刑罰を受ける人。罪人。

けいふ 契夫。契つた夫。良人。一代女  
\*「此羅漢の中に、其身より先立ちし一子又は契夫に似たる形もありて落涙か」

けいぼう けいぼう（窺望）。強ひて希望すること。きそひてねがふこと。傾城酒呑童子「此御使ひ仕課せなば、頼光が將軍職を某けいぼう仕らん」  
けいらく 經絡。漢法醫の語。筋肉のつ

ながつてゐるみち。體內の筋のつながり。二枚繪草紙下「終に「そく切斷の、けいらく六脈たえん」に」

けいらうの山 鷓籠山。支那武昌府通城縣の南に在り、形が鷓籠に似、夜靜かな時、常に鼓の聲がするといふ。諸曲「班女」にも出てゐる。吉野都女楠「語りつくさぬ鐘のこゑ、鷓籠の山にひびきて、森の小鳥八こゑの鳥」

けいゑん けいえん。形艶。形の艶なこゝと。粹な風をいふか。一代女五「折ふしは形艶な風俗して見えさせ給ふが、是もいかなる御方なるべし」とは遊客のことである。

けうとい 「けうとし」の音便。うとましい。いとほしい。興ざめた、いやな、又、氣の毒な感じのするさまにいふ。天網島上「紀國屋の杉が、けうとい顔付にて(中略)、編笠おしあげ面鉢吟味」

けうとげ けうといやうすにいふ。いとほしげ。冥途飛脚上「手代の伊兵衛けうとげに」

けうとなげ 前條に同じ。油地獄上「エ、けうとなげな、身も顔も泥だらけ、氣が違つたか與兵衛様」

けが 怪我。あやまち。粗忽から招いたこと。そさう。一代男六「一座のさばき、終に怪我を見付けず、どこやらに

よき風儀そなはりぬ」。二十不孝「時節の怪我なれば是非なしと、野邊の送り急ぎ」。過失からの負傷。

けがあやまち 怪我過。「けが」と同じ。「うそいつはり」「隔心へだて」などいふ類の重言。薩摩歌中「心許なや、我が夫に怪我あやまちの知らせの夢」

けがき 夏書。佛家の語。陰曆四月十六日から七月十六日までの間、外出を謹み、修行として經文を書寫すること。萬文反古五「かたさまの一日に千べんづつの夏書、年中の日帳」。天網島下「夏に一部夏書せし、大慈大悲の普門品」

けがない 物のけはひがない。しんとして靜かであるさまにいふ。二代男六「早や門閉して、けがない、大勢の立騒ぐに、彌七出口の茶屋より起出づれば」

けがまくら 怪我まくら。「怪我をする」といふ意の惡體語。怪我しとさる。曾我七以呂波二「吉備津宮の大藤内ぞ、侮つてけがまくらなと、眼をいらゝげ」

けがれむら 穢村。ゑたむら(穢多村)。雙生隅田川「主殺しの惡罪人、踏付けて繩をかけ、穢れ村の手に渡し、竹鋸

逆礫にも掛くべきを」

けきやう 外瘡。外科。醫術の語。内科に對する。げくわ。櫻陰比事四「浴中に在る程の外科(げきやう)に御觸なされ」

けぎんちやく 毛巾着。毛皮製の巾着であらう。一代男三「五ふくつぎの煙管筒小者にへうたん、毛巾着ひなびたる事にぞありける」

けくて 結局。却て。いつそ。けつく。双は氷の朔日上「わしらに如在はないものを、恨みがけくて聞えぬ」。出世瀧徳上「哀しむこともなんにもない。けくて浮世が面白い」

けくわほんたう 外科本道。外科と本道と。漢法醫の語。外科は今日の外科、本道は内科のこと。武家義理物語「額に鹿の袋角のやうなるもの生ひ出で、美形をかしめになりて、外科本道も傳聞きたるためしもなく、此療治にあぐみぬ」

けくわん 下官。官の低いもの。下級官吏。けけう 化教。説教などすること。衆生を教へること。教化。萬年草上「己れは未だ髮こそ剃らね、九字護身法傳授し

け

て、禮拜・化教も勤むれば出家も同然」  
 げけしゆじやう 下化衆生。佛語。下界の衆生を教化し濟度すること。下化冥闇。上求菩提の對語。孕常盤五「下化衆生の願ひを充てんが其爲に、光を高天原にやはらげ」。釋迦如來誕生會四「池水に映る月影も、上求菩提下化衆生、皆觀念の便りぞと」

げげばな げんげばな。紫雲英のこと。源氏十二段長生鳥臺四「茅花・早蕨・土筆、つゝじげゝばな、つぼすみれ」

げこ 家子。妻子眷屬。日本振袖始三「近郷一の田地持、數多の家子下男」

げこ 下戸。酒の飲めない人。上戸の對。一代男五「ざつと水雑水をとこのみしは、下戸のしらぬ事なるべし」。二十不孝一「上戸は殊更、下戸の日にさへ行春の名残」

下戸と化物は無し (諺) 關八州繫馬三「姿は老女、頭は親爺、下戸は無くとも化物はある世なりとて吹き出しける」

下戸の建てたる倉もなし (諺) 胸算用五「我が家治めたる面貌して、世の中の下戸の建てたる藏もなしと誦ひて、又酒をぞ吞みける」

けさいろく 毛才六。丁稚などを罵る語。

理齋隨筆の説に曰く「面色の青きをさいろくといふ。菜色の字なるべし」と。油地獄上「ヤちよこさいなげさい六、鰓骨ひつ缺いてくれべいと」

げさうぶみ 懸想文。(一) 懸想の心を述べた書面。艶書。(一) 懸想文賣りの賣り歩く文。昔京都の町々を、元日から十五日まで毎日朝早く、清水の



懸想文賣

絃召(つるめそ)といふ者、(一) 説には陰陽家の輩であるともいふ、その装ひも時代によつて差があつた。赤い袴立烏帽子を着け、白布で覆面し、眼のみを露はして、洗米二三粒を包んだ紙、又は花の枝などに附けた紙に艶書の體に擬した文を書いて賣り歩いた。その紙符を懸想文といひ、買人はこれを良縁の縁起としたものである。代は一錢から百錢まで、買人の思召に任せたといふ。一代男三「世にある人の門は松みどりなして、物もうゝ手鞠つけば、

羽子板の繪も夫婦あるをうらやみ、懸想文よむ女、男めづらかに思はるゝ」  
 けさがけ 袈裟懸。袈裟をかけたやうに斜かひなさま。又、そのさまに切ることにいふ。けさぎり。けさ。薩摩歌下「おまんが左の肩先より、前は乳房を袈裟がけに、兩へさつと斬り下げられ」  
 げさく 下作。品の劣つてゐること。げびたもの。

げざけ 食酒。食事の時に酒飲むこと。又、その酒。胸算用五「昔より食酒を呑むものは、貧乏の花盛りといふ事あり」。永代藏三「食酒真若好き心あてなしの京のぼり」

けしあたま 芥子頭。頭髮の頂上だけ殘して剃つたもの。芥子の實の殻のやうな恰好の頭。芥子坊主。唐船唄今國姓爺二「綱手に老若・芥子頭、音頭の唐人も」

げしう 是非とも。たつて。どうしても。傾城反魂香中「逢はずに歸つて人外の名を取れか、げしう逢はせまいなれば、爰で腹を切らうか」

けしがね 罌粟銀。芥子金。小玉銀。小粒。けしぎん。二朱又一朱の貨幣。晝夜用心記五「紙入より罌粟銀七八十粒、貳銖、壹歩まじりなるを」

けしがね 罌粟銀。芥子金。小玉銀。小粒。けしぎん。二朱又一朱の貨幣。晝夜用心記五「紙入より罌粟銀七八十粒、貳銖、壹歩まじりなるを」

げじく (動詞) 着服する。私かに自分のものにする。曾根崎心中「女房へは一錢も戻さぬゆゑ、遣ひ捨てたの、げじいたのと、ねすらるゝ」

けしごころ 消し心。人の言などを取消さうとする心、諫言、忠告などする心といふ意であらう。榮花咄三「同じ事にて良いものあればと消し心を申せば」

けしとむ けしとぶ(消飛)の訛。跳ね飛ぶことを強めていふ。松風村雨東帶鑑「馬はけしとみ跳ねあがり、力革踏切りて」。蟬丸五「早廣が乗つたる馬俄にけしとみ跳上り、鞍を放れてどうと落つる」

けしにんぎやう 芥子人形。極めて小さい人形。豆人形。一代男「小箱をさがし、芥子人形・おきあがり。雲雀笛を取りそろへ」。男色大鑑五「黒羽二重の兩面芥子人形の加賀紋」

けしはうず 芥子坊主。「けしあたま」に同じ。國性爺二「韃韃頭の芥子坊主、ねち首貫き追伏せ切伏せ」

げじやう 化粧。見え。虚飾。だて。碁盤太平記「さいいた刀は、けしやうか伊達か」

げじやう 解狀。罪人召捕りの狀。今の

逮捕狀の類。戀八卦柱曆下「京のお役所から、爰の代官所へ解狀がついて、在在を尋ねる」。同「京都より解狀によつてからめ捕る」

けしやういくさ 化粧軍。見ものにする軍。戯れて形だけをまねる戦。武道傳來記「一人も助太刀無用と制し、股立取つて羽織をぬぎ、大振袖のひるがへるは、花紅葉の色亂れて、さながら化粧軍かとおもはれ」

けしやうづくり 化粧作。建築の語。軒、たるき、柱などに意匠を凝らして見えよく作ること。新可笑記三「名字仰山なる張札門柱にあらはし、化粧作りの玄關構、押出しての療治するなど」

けしやうわさ 化粧業。見えにすること。實意の伴はない仕業。薩摩歌上「源五殿への申譯、腹切らうと申すとも、よも切らせはなされまい、すれば入らぬ化粧業、何ともゐきやく千萬」

げしやくばら 外戚腹。本妻以外の腹に生れた子。めかけばら。下借腹。物種集上「せめて鼓はうたふ事じゃが、下しやく腹出生したる子なればとて」。晝夜用心記「まことの御袋さまは外戚腹ゆゑ、産屋にて御わかれ、今は外に奉

公の身なり」

げじゆ 偈頌。げ(偈)に同じ。韵文體の經文。四句から成るのが普通である。諷頌。四句。聖徳太子繪傳記「忽ちこんじ、こんでいの、げじゆの文とあらはれて、光明天にみちりたり」

げしゆく 下宿。下等の宿泊所。その泊客。(本陣に對していふ)。丹波與作中「本陣の上下残りなく、下宿の諸侍」

げしよく 下職。下等な職。男色大鑑「白鷺の清八とて、かかるげしよくに、人皆惜しむほどの若者なり」

芥子を干にも割る (諺) 非常に細かいものを更に細かくする。博多小女郎上稼ぐに追付く貧はなし。芥子を干にも割木の焚きやう、必ず灰を取る事勿れ

げしん 下心。心がけ。料簡。悟り「解心」とも書く。五十年忌歌念佛上「さり」とては、誰に似て下心のわるい忤めと。重井筒上「誂物も節季をもどう仕舞はんす事ぢややら、下心の悪い旦那殿」

げす 下主。下衆。身分の卑いもの。はしため。はしたをとこ。一代男三「御藏の扱挽とて、やとはるゝ女の有るぞかし、是は人のつかひ下主、隙の時はず

け

け

かはしける」  
**げすしごと** 下主仕事。下賤の者のする仕事。下種の業務。日本武尊吾妻鑑三「奥の栞庭の下主仕事、木の下の蔭のから白も」

**げすちかし** 下主近。下種に近い。下種らしい。げすびた。日本武尊吾妻鑑三「下主近き詞に乗り、且那御夫婦様、御苦みは遊ばせども」。最明寺殿百人上臈下「あゝ冷やと手を吹くも、げすちかうして猶やまし」

**げすてんにん** 下司天人。天人を卑しめ罵つていふ。釋迦如來誕生會四「汝等が眼に、下司女が天人と見えたるか。下司天人め」

**下主の智慧はあとから** (諺) 愚かな者の智慧は事後になつて出るもので、間に合ふことがない。下種の智慧は後から出る。生玉心中下「エ、下主の智慧は跡から、紋付の灯燈で尋ぬるは無分別」  
**げすほうこう** 下種奉公。下賤の仕事に服すること。嬬山姥「父没して孤兒となり、當所に賤しき下種奉公」  
**げせつ** 下拙。自分の謙稱。わたくし。拙者。孕常盤「是れていに御太刀を合されんは勿體なし、下拙こなし申さ

ん」。傾城反魂香上「下拙ことは、狩野四郎二郎元信と申すわづかの繪書」  
**げせつた** 毛雪駄。毛雪踏。雪駄の表に毛がはを附けたもの。二代男二「濃いかうじの革たび、毛雪駄を穿きて、縮入の頭巻」

**げそう** 下僧。賤しい法師。修行を積まぬ坊主。萬年草上「不動坂まで追出せと下僧下僕が小腕引つ立て」

**げそく** 華足。机・臺などの脚の、床につく部分の曲つたもの。(佛具の一。供物を載せるもの。華飾。句更に轉じて、その供物とする菓子などの稱。一代男六「おけそくの團子を手にふれ、茶事せし事見て興あり」。懷硯四「佛壇を飾る三具足の鶴龜、華足など」

**けたい** 卦體。うらなひ(卜占)のおもて。大矢數五「繰出す卦體の外に霧もなし、本膳に露山澤の水」  
**けたいがくもん** 外題學問。書物の外題のみを知つて、内容を研めないこと。書名だけを心得てをること。うはべの學問。傾城高原蛙合戦「書面ばかり聞きはつり、義理を知らぬは外題學問」  
**けたうじん** 毛唐人。唐人を罵つて呼ぶ。鬢髯などの多いのでいふ。國性爺三「和

藤内眼をくわつと怒らし、やい毛唐人。大職冠四「こゝな毛唐人めが娘の海女が命を捨て」

**けたうじん** 下唐人。前條に同じ。大職冠九「ヤア事おかしし下唐人。扱は(中略)この唐人めを頼んで降参と偽り」  
**げだうつきげ** 外道月毛。一種かはずた強暴な月毛の駒。外道とは、印度で佛教者が他宗門を排して呼ぶに用ひる語。それを轉用して名づけたのである。

曾我會稽山三「山路の近道急ぎの爲、某が秘藏の名馬狩場まで引かせしを、兄弟に餞せん、外道月毛、婆羅門栗毛是へ是へ」同「外道月毛を引寄せ乘らんとするに寄せつけず」

**けたえん** 桁縁。えんげた(縁桁)に同じ。縁のふち。えんがまち。えん。雪女五枚羽子板上「細路次の取次の桁縁の障子を明けて」  
**けたたまし** さわがしい。轉じて、あわただしい。性急である。生玉心中上「早う早うとせきつくる、あゝ心もとなひけたたましい、何事が起つた」。壽門松上「お暇申と立出る。あまといへばけたたまし。今宵一夜は苦しがるまい」  
**けたふし** 蹴倒。私妬の一種。けころば



し」ともいふ。艶道通鑑「白人・呂州・茶や・くさや・間短・蹴倒し、夜發まで」  
げたを預く 下駄を預く。京都の俗語。

底意を隠して、自分の勝手から他を誘ふやうな場合にいふ(近松全集註)。天智天皇三「奉公せよ召使はんなど、げ

たを預け給ひしか、しかれば元來本性は悪逆もなければ、追従表裏の倭臣どもが御尤のけいはく」

げちえん 結縁。佛道に縁を結ぶこと。

武道傳來記「紫式部が源氏の問を、長崎の長者開帳し給ふを結縁に拜みて」。懷硯四「三日の内は結縁の爲にと、勿體なくも(中略)釋迦入滅に異ならず」

げちがへる 躓退へる。筋肉などを蹴て常態を失はしめる。油地獄上「蹴上ぐる足音、刷毛が頤蹴ちがへられ」

げちぎり 假契。はしちよろう。色道大鏡「端女、端女郎とも、扇女郎ともあ

そびとりともいふ、げちぎり女の事なり。同「假契、同端女なり、端居してあふ假の契りなるゆゑにしかいふ。風

流談曰、十銭宛の假契にも腕ひとつ衝てなげ出すよりは、拔群勝れりと思ふ者、世におほかるべし。げち。彗星ともいふ。

げちげぢ 蝸。蝸蜒。蝸の名であるが、忌み嫌はれる者の稱とする。大磯虎稚物語「梶原が家來の蝸な、讒言いうて世を渡る」

げちみやく 血脈。佛語。僧が弟子に授ける、法統を書き記したるもの。法脈の譜。又、在家結縁の者に授ける法門相承の略譜。授けられた者は生前には厚く護持し、死後は死體と共に納棺するもの。夕霧阿波鳴渡下「野邊より彼方の友とては、血脈一つに珠數一連、これが冥途の友となる」

げつかい 結界。佛語。修法によつて魔障を入れしめない一定の地域。佛道修行の妨げとならぬやう淨めておく一區域。轉じては、出入禁制の意に用ひる。萬年草上「大師この方結界清淨の御山、假にも女犯の穢があれば、山暴れて震動し」

けつかる 「在る」、「居る」などの動詞に代へていふ語、罵り卑める時に用ひる。二枚繪草紙上「サア我が存分に見けつかれ、見ようが悪いと免さぬ」。生玉心中「氣味悪さうに見世の手水鉢で、頬を洗うてけつかつた」

けづきん 毛頭巾。毛皮製の頭巾。天網島中「治兵衛は内にお居やると、毛頭巾取つて入るを見れば、南無三寶勇五左衛門」

けつく 結句。(つつまり。結局。日本武尊吾妻鑑「あの和郎に踏ませたら、けつく飯米が御損であらう」。(ついつそ。却て。博多小女郎波枕上「人は知らじと思ふこと、けつく身の上知らずなり」

けつこ けつこう(結構)の約。丹波與作上「大名のうちよりも、こちのうちがけつこで御座る」

けつこう 結構。(たくむこと。もくろみ。(心だてのよいこと。お人よし。當然の權利も主張し得ないこと。天網島中「結構なばかりみめではない。男の性の悪いは皆女房の油斷から」

けつこうしや 結構者。おとなし過ぎる人。お人よし。意氣地なし。國性爺「ア、よし、今は是れまで、結構者

動し」

げ

も事による。重井筒上「お内儀は結構者、柳煤竹にやつてじやが」

けつこうじん 結構人。前條に同じ。釋迦如來誕生會「愚痴愚鈍の子を打擲し、我身は慈悲ある結構人になつて、我々に氣をゆるさせん智略の杖」

けつこうだて 結構立。結構ぶること。蟬強ひて氣だてのよい風をすること。蟬丸「エ、いひ甲斐なし、結構だても事による」

けつしよ 闕所。刑の名。領土、家財を官に没收すること。追放以上の刑に附加して行はれるもの。二十不孝「數年斯様の事を横領せし科とて、此家缺所せられて、親は所を立退き」

けつみやく 血脈。血統。血筋のつたがった者。血縁の者。源氏烏帽子折五「代々天下の權を執る、我れ其の血脈をつぐべき人相」

けづりかけ 削懸。正月十四日の夕、注連繩かざりを取つた後、柳の枝又は檜の枝などを、突き

かんで絲のやうに削つて門戸に掛ける。これを「削懸」、削花ともいふ。邪氣を拂ひ、福を招く咒であるといふ。



けかりづけ

削懸の神事 京都祇園神社で行ふこと。十二月晦日子の刻に、社前で篝火一つを残して他を悉く消し、闇中參詣人達は口を忝にして他人を誹る。人々これが爲めに諍ふことをせず。丑の刻になると、社司が拜殿に上つて咒文を誦し東西の欄に建てた削懸の木十二本を同時に焼く。俗説にその火の靡く方の國は五穀不作であるとして忌む由。又、削りかけの棒で、懷妊を望むもの尻を叩くことがあつたといふ。胸算用四「都の祇園殿に、大年の夜、削懸の神事とて諸人詣でける。神の燈火暗うして、互に人面の見えぬ時、參詣の老若右左に立分れ、悪口の様々いひ勝、それはく腹抱へる事なり」

けづりまはし 削廻。小智慧を弄して、種々にたくらむこと。又、そのたくらむ人。聖徳太子繪傳記五「芹摘を隠しおいたる削り廻しはおのれよな」

けでん 怪顛。氣が轉倒すること。びつくりして當惑すること。出世瀧徳下「吾妻、はつとけでんして、夢見た様な事どもやな」。化轉。

けでんがほ 怪顛顔。けでんしたやうな顔つき。當惑がほ。あきれがほ。油地

獄中「町中といふにぎよつとして、と胸つきたる怪顛顔」

けどう 戯動。たはむれの行ひ。たはむれ。凱陣八島「戯言も思ひより出で、戯動もはかるより起る」

けなし 博奕の語。殊に骨牌ばかりで用ひる語。容易いこと。大戦冠四「上りも知らぬひらよみに、そも三枚はいさ知らず、取得ん事はけなしなり」

けなひと けなげ(健氣)な人。感心な、まれな人。次條參照。

けなもの 健者。けなげもの。殊勝な者。丹波與作上「どれく三吉其處にか。まああ其方はけな者ぢや」

けなやつ 健氣な奴。前條に同じ。

けなり 「けなりの」の語幹。次條を見よ。二枚葺草紙下「こなさんは弟の身でけなりや機嫌がよささうな」

けなりい うらやましい。けなりの。大矢數五「天乙女七夕祭けなりいか、こがねの茄子行水の秋」。五十年忌歌念佛中「お夏様と髯様と、此の蚊屋でしげらしやんしたらば、いかな藪蚊もけなりかる」

けなりがる うらやましがる。けなりいことに思ふ。胸算用三「顔見世の初日

に、左方の二軒目の棧敷に(中略)、蓑子に目を使はせ、下なる見物にけなりがらせける」

**げばさき** 下馬前。(下)下馬すべき場所のあたり。下馬札の立てられた附近。げば。(⇒)槍持の供奴が、下馬先で主人に對して行ふ作法。薩摩歌上「御前が近い競合はず、下馬前をして振りませい」。同「小姓廻しの一通り、お江戸の勝手燈えてか。供先き、乗打ち、下馬前に、大名方の目標も知るや如何に」

**げはし** あわただしい。せからしい。はげしい。けたたましい。大下馬「親里五六里も離れしが、げはしく人造はし夜前頓死いたされ候」。榮花咄三「今遣らねば太夫が手前不首尾の文と、げはしく申されけるを聞捨てにはなり難く。二代男四「げはしく追詰められし女」

**げばな** 夏花。陰曆四月十六日から七月十六日まで、即ち、げ(夏)の間、佛に供へる花。二十不孝「朝水手向け、夏花摘むなど殊勝に」。武道傳來記五「夏花に笹山の栞をもとめ、世になき姫君の跡申ひ参らせ」

け

のしきりとなつてゐる溝のない敷居。**げはひ** けしやう(化粧)に同じ。おしろいやべにで、顔のおつくりをすること。井筒業平河内通三「げはひ頼むと白粉溶き差し出せば」

**げはひざか** 化粧坂。(地名)相模國鎌倉の西方、藤澤方面に通ずる路筋に當る。今もその坂路を呼んでゐる。鎌倉時代の遊里。百日曾我「大磯小磯化粧坂、朝がほ知らぬ里ぞかし」

**げはひでん** 化粧殿。化粧(けしやう)をする御殿。化粧の間。國性爺三「堀の水の上は、白らが化粧殿の、庭より落つる遺水の末は黄河の河水と流れ入る水筋なり(中略)白粉解いて流すべし」

**げばらかす** 古語「くゑはららかす」の轉用であらう。蹴散らす、蹴てひろげる。日本振袖始「御前を憚らず、袴の裾げばらかし、禮儀を頼して責めかくる」

**げびすけ** 下卑助。げびた人の稱。げびさう(下卑藏)。曾我虎磨「さつてもげびたるげびすけかな」

**げぶたし** 烟たし。氣がねな、氣づまりなことといふ。戀八卦柱曆中「わしをけぶたさうにして、そなたの文を焼いて捨てをつたも見てゐる」

**げふのほそぬ** 狭の細布。希婦の細布。古へ陸奥國希婦(げふ)の地から産出した幅の狭い白布。鳥の毛で織つた布とも傳へられる。新可笑記「所に織りなれし狭の細布を手業にして短き烟を立てける」

**げぼり** 毛彫。毛筋のやうに細い線で模様を彫刻したもの。又、それを彫ること、傾城反魂香中「大小對の金鏝、毛彫は波に山玉祭」

**げまはし** 蹴廻。袴や衣物の裾の、足さきのかかる部分。裾口。日本武尊吾妻鑑三「振袖に肩から裾の蹴まはしまで、五色縫のたぐり繩」

**けみ** 検見。毛見。年貢の取立てに先立ち、稻の毛を見る、即ち稻作のみのりよしあしを豫め改め見ること。「けんみ」の條參照。大矢數三「検見の時分の二村の山、おもくなるおもはん方の袖の下」。けみ業。けみの役人。

**けみやう** 家名。家を表はす名。みやうじ。かめい。源氏鳥帽子折三「本國、家名はいかに」

**けみやう** 假名。俗稱。通り名。實名に對していふ。曾我會稽山「本多が矢には假名もなき衝(いたつき)の的矢」

けんもない 少しもそのけはひがない。何も

もない。何でもない。博多小女郎上「なん

と遠見に見つけられはせんんだか。けんも

無い事いしけや烏絹が十五箱。「けがない」

の條参照。

けやき 毛焼。烏の毛をむしり、更に皮膚

についてゐる細毛を焼くこと。武道傳來記

八「鳥ども毛焼して萩柴をりくべ、酒事にな

して寒さを凌ぎけるに」

けやつこ 毛奴。毛の多い奴を罵る詞。雙生

隅田川四「それや振るは、虚吐き奴の粕奴、

微の生えた毛奴と笑つて散々歸りけり」

けやり 毛槍。烏毛の槍。槍の鞘に烏の毛をつ

けたもの。雙生隅田川四「ほたへ過ぎた餓鬼

めら、毛槍のそば杖喰ふな」。宵庚申上「お

供廻が振出す毛鏡、藁笠、立笠、大鳥毛」

けやりあたま 毛槍頭。毛槍のさきのやうな

恰好の頭。罵る詞。

けようびつ 下用糶。下用にする糶。下

がかつた用に供する糶。卯月潤色下「共に

に三途のかは葛籠、一荷に手を取り打渡り、

西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用糶、

忽ち上品膳棚に到らんと」

けらはらだち 螻蛄腹立。諺に、「螻蛄(け

ら)腹立つれば、鶉(つぐみ)喜ぶ」と

いはれてゐる通り、螻蛄は鶉の餌にさ

れるものである。故に、後難を慮らずむやみに

腹を立てれば、却て身を滅すこととなる譬と

する。立腹が結局自身の害となり、他人の利

となること。雙生隅田川二「天の與ふる時節、

この隙に鯉の繪を盗み取り、百連公に奉らば、

百連はつぐみの悦び、少將はけら腹立、そのほ

てつばら抉りぬいて遣らんものと」

けりやう 假令。(た)とへば、ままよ。釋迦

如來誕生會三「及で人の身を切裂く事、生き

ようと思つてなるものか。假令提婆の名に恐

れ、人は詞の義に迫り、言うて勝たれぬ相

手ゆゑ、四い處に水溜る」。(た)かりそめ。

なほざり。榮花咄五「商ひは假令にして、

明暮男自慢何れ女も好ける風俗」。(た)たま

ま。拍子よく。薩摩歌上「十二の年から十九

まで、人の盛を捨てて、けりやう道を守れば

こそ、若し氣がそれて淫らしたる、此方さ

ま斬つて捨てさんすか」

けるほどに 上の語の形と意とを受けて「さう

するほどに」と繰返す時に弄する詞。松風村

雨東帶鑑三「鳥渡したもやも

やが互に深うなつて来て、上る程にける

ほどに、まんまと京まで上りつめて、散々首

尾が違つて、又それから、下る程にける

ほどに、飯焚までに成下つた」

けれやう けりやう(假令)の條を見よ。

けわちやうちん (毛脇提燈。脇腹の骨

ばつたのをいふか。源氏冷泉節上「兵衛

佐殿の御手に掛つて成佛せい。サア御慰

みに大袈裟を遊ばせ。我々は一の洞二の洞、

毛脇提燈八枚目、雪を土壇の試し物」

けわしい 「けはし」に同じ。戀八卦柱曆

中「ヤア助右殿、夜中にけわしい、なんの

用でござる」

けん 料理の詞。刺身などのつま。つけ

あはせもの。大矢數五「盛かたや第一の

けんは梅の風、指身がのぼる花の瀧浪」。傾

城酒吞童子四「飯も汁もがんぞう臍、

けんには置いたるめうがの程ぞ恐るしき」

けん見。すけん(素見)。ひやかし。ぞ

めき。世間娘氣質一「八坂八軒繩手の茶

屋の戸をたゝきて、遊女の見して歸るなど」

けん險。けんさう(險相)。すご味のある

顔。きつい顔。槍權三上「雷がまちつ

と下つた。頼もげんで愛想がない」  
げん 驗。ききめ。物事の結果の著しく  
見えること。五人女一「はや揚屋にはげ  
んを見せて、手叩きても返事せず」

けんえいじん 元英神。冬を司る神であ  
るといふ。天神記「冬の神は北方の天  
に立ち給ひ、元英神と申すとかや」

けんがう 軒號。住居に附ける名。文人  
の雅號にも用ひるもの。織留三「菓子袋  
に押すやうなる印判をこしらへ、軒號  
にびくりさせ、一句一錢の點取に讀め  
ぬ所は評書なしに」

けんき 驗氣。薬や治療のききめ。效驗。  
病氣の快方に向ふしるし。永代藏三「四  
百四病は世に名醫ありて、驗氣をえた  
る事かならずなり」。武道傳來記二「妙  
春に針を打たせられしに、次第に驗氣  
をよろこばせられ」

げんくらうぎつね 源九郎狐。大和のい  
たづら狐で、播磨の於佐賀部狐の兄弟  
であるといふ。大下馬一「諸國の女の髪  
を切り、家々のはうろくを破らせ、萬  
民を煩はせたる大和の源九郎狐が爲に  
は姉なり」。「源九郎狐」のことは諸國  
里人談(俚言集覽所引)に出てゐる。そ  
の誤傳であらうか。

げ

げんくわ 現化。神佛などが法力によつ  
て姿をかへて現はれること。げんげ。  
化現。天神記四「變成男子の法力にて、  
男の現化を得させてたばせ給へよ」と

げんくわし 喧嘩師。喧嘩を職業のやう  
にしてゐるもの。喧嘩すきの者を罵る  
語。喧嘩買。油地獄上「利口さうに、そ  
れが信心の觀音參りか、喧嘩師ののら  
參り。買はしやんすお山も」

喧嘩は降り物 (談) 喧嘩はいつどこで起  
るか分らぬ。雨雪が思ひがけぬ折に降  
つて来るやうなもの。五十年忌歌念佛  
上「喧嘩は降り物、和御察たち、もしも  
の事があつたりとも、いかな九文半文  
でも勘忍ばし召さるな」

喧嘩屋 胸算用三「毎年夜更けてから、む  
つかしい掛乞ども来るぞとて、俄かに  
いさかひを拵へおき、萬の事をすまし  
ける。誰がいふとなく後には、大宮通  
りの喧嘩屋とぞいへり」

げんけん 慳慳。無愛想に。つんけん。  
態度、物言ひなどのべないさま。油  
地獄上「向ひ同士のけんくともなら  
ず。茶屋の内借つて振濯いで進ぜまし  
よ」。同下「詞ではけんく」と云うたれ  
ど、心で三度戴きし」

げんことり 拳固取。一箇價五文の餅。  
拳固は五本の指を握つたものであるゆ  
ゑ、五文又は五の數の隠語として雲助  
仲間などに用ひられた。丹波與作中「ハ  
テ親はなし一門なし、げんこ取より小  
さい首、意氣づくなら取つていけ」

げんこみぢん 拳固微塵。拳固の打碎け  
るほどに叩くさま。但し下例は、拳固  
取の餅にかけて、ころりと一かみに碎  
くさま。百合若大臣野守鏡二「息杖の續  
かん程げんこ微塵にさいんで、ころ  
りと腰にひつつけ、がれんく」と一か  
みに、嚼んでのけん」

げんこんのはこ 乾坤の箱。大矢數二「乾  
坤の箱をあけては何もなし、馬鹿つく  
されし親の跡取」。櫻陰比事一「乾坤の  
箱入にして千貫目、萬事息子に渡して  
樂隠居」。五百韻「出づるよりいる日覆  
やおもふらん、大工の道具乾坤の箱」。  
蓋と實(み)と、上下を合せる箱といふ  
義か。

げんざう げんざう(見參)の音便。對面。  
お目にかかること。物種集上「鈴舟も波  
爰元からりく、釣の翁にさつとげ  
んざう」

げんさきのなかじめ 劍先中締。薩摩歌

上「劍先の中締に、六尺模様がぐるぐる、御紋も車は越後の村上」  
けんさきぶね 劍先船。運送船の一種。船首劍のやうに尖り、一枚柵(たな)で横艫である。大形であるが板が薄く、よく淺瀬を行く。攝津から河内・大和の諸川に往來するもの。けんさき。賀古敦信七墓廻「憎くや」と押出して、詞に尖る劍先舟、家中舵をぞ取りかねける」

けんさきりうご 劍先輪子。薩摩歌上「劍先りうごの釣槍、素槍は、伊賀・伊勢の津の御城主」  
げんさま 玄様。遊廓の詞。吉原通ひをする份のこと。もと、醫者に玄といふ名が多かつたので醫者のことを稱したのが、轉じたのであるといふ。  
けんさを 間棹。間敷を量るに用ひる、目盛りのある棹。檢地竿。永代藏三「間棹杖に突くもあり」

けんさん 建山。乾山が正しい。元祿年中、尾形光琳の弟乾山が、洛外嵯峨鳴瀧村の土で焼き創めたといふ樂焼に似た陶器。生玉心中「中國のお屋敷へ親仁の棚から錦手、建山・音羽焼の、皿の鉢の茶碗のと」

けんじ 見じ。見るのこと。「けん」及び「お山見じ」の條を見よ。

けんじぐも 源氏雲。すはま(洲濱)のやうに金箔を押し、又は、ぬひとりしたももの。源氏物語の繪にのみ、さうした模様があると考えられてきたのであらうといふ(嬉遊笑覽)。傾城反魂香中、「二つ重ねの白無垢白茶字に、縫紋紅裏に源氏雲の裾くまみ」  
けんじざけ 源氏酒。銘酒。俳諧師手鑑「花にくむは壺前哉か源氏酒」(燕石)。一代男「須磨は殊更と、浪こももとに借りきりの小舟(中略)、源氏酒とたはぶれしもと笑ひて、海すこし見わたす濱びさしに舍りて」

けんじたはこや 源氏煙草屋。晝夜用心記五「夷劍釣竿町の源氏たはこやへ、案内なしにすつとはひり、笠脱ぎ捨てて著物著かゆる體」。同今の源氏煙草屋の母は娘なれば、似合の奉公の口聞き立つるうち。美人の居る煙草屋といふほどの意か。

けんじび 源氏火。二代男六「見知つた揚屋獨り子、源氏火にて文を読むなど、たまかな事なり」  
けんしやく 劍尺。曲尺の一尺二寸を八

段としたもの。刀劍を測り、それによつて、吉凶・善惡を評定することもある。又、佛像・門戸をも測る。ぎよくしやく(玉尺)。長町女腹切上「刀は水の流れ焼、以ての外の不吉の脇指、水は一尺四寸五分、けん尺は災難、是をその儘持つならば、三代迄は祟る」  
けんじよむき 見所向きか。賢女(けんちよ)むきか。或は表向きなどの意か。甲子祭二「義平辨慶に悟られじと、けんじよむきにて聲づくるひし」  
けんぜん 現前。まのあたり。眼の前。聖徳太子繪傳記「無量阿僧祇劫に於て自在の王となり、現前に讚歎せん」と今の如く

けんたい 兼題。和歌・俳句などで、豫め出して置く題。會の當日持ち寄るもの。宿題。二十不孝「嘶作りて點取の勝負はやりしに、折節の兼題に、返咲の花の蔭に哀れにをかききもの」  
けんたん 間短。契短。四國の方言。私娼の一種。つじぎみ(辻君)よたか(夜鷹)。曾我虎磨「身に相應の樂みあり、鶴が岡の濱茶屋で、けんたんん買へやと毒口・苦口・二口三口」  
けんぢやく 還著。還つてもとの身に著

くこと。經文に出てゐる語。「呪咀諸毒藥、念彼觀音力、還著於本人」(法華經普門品)。天神記五「つひにげんちややく於本人の敵は亡び失せにけり」

けんぢよごかし 賢女ごかし。強ひて側から賢女であると言ひはやすこと。壽門松中「お菊は奇特な情氣せぬ、賢女賢女と、賢女ごかしの拜み倒しに逢うて」

けんづく 權盡。けんべいづく(權柄盡)と同じ。權柄にまかせて、物事をしたり言つたりすること。穂狩劍本地「此の道ばかりは、權づくに押せど押されぬ茨の枝」

けんづけ 權附。權柄附の略。權柄で押しつけること。けんづく。

けんづもり 間積。長さの何間といふ見づもり。間數の測定。傾城・反魂香下「間づもり、知行高、剌那に相濟み申すべし」

けんどん 儉鈍。儉食。うんどん・そばきりの類。特に一杯づつの盛りきり、代りをすすめないもの稱。二枚繪草紙中「道頓堀の水茶屋の、或は饅飩儉鈍のそばで聞くさへ笑止なり」。長町女腹切上「腹の立つた揚句ちやに、けんどんを取りに遣れ」。けんどんそばきり。

け

けんどん 儉食。無愛想なこと。いち悪いこと。戀八卦柱曆上「あの人も、氣に如才はなささうなが、地體の顔が憎體に、儉食に見える故、詞もあいそがなささうな」

けんどんざい 儉食罪。儉食の報としての罪。人につらくあたつた爲に受ける罪業。釋迦如來誕生會四「かかる信者を夢にも知らず、侮り苦しめ耻ぢしめし儉食罪を許してたべ」

けんどんざけ 儉食酒。一杯盛りの酒。ゐざけ。

けんどんぢよらう 儉食女郎。喧鈍。儉鈍。下級の女郎。端女郎。洞房語園「寛文二寅の秋中より吉原にはじめて出来たる名なり。往來の人を呼ぶ聲喧すしく、周女郎よりはるか劣りて鈍く見ゆとて喧鈍と書きたり。其頃江戸町二丁目に仁左衛門といふ者、饅飩を拵へ、蕎麥切を仕込みて銀目五分づつに賣り初め、けいせいの下直に擬つてけんどんそばと名付けしより世間に廣まるなり」とあるが、いかが。

けんどんならちや 儉食奈良茶。一杯づつ盛りきりの奈良茶。

けんどんぶね 儉食船。けんどん・そばの類を商ふ船。又、儉食女郎を乗せて密賣する船。

けんどんもの 儉食者。儉食なもの。無慈悲なる人。釋迦如來誕生會四「慈悲を知らぬ儉食もの」

けんどんや 儉食屋。見頓屋。けんどんそば、けんどんめしなど、一杯盛りきりの食物を賣る家。その商人。生玉心中上「裏屋・背戸屋・けんどんや・三界、かけ取りに歩く」

けんなり 元氣のなくなつたさま。卑語。うんざり。ぐんにやり。丹波與作中「彼奴が盡へあてがうたは、どうした因果のかたまり、こちやげんなりとなる程八めはいきつて、馬を取つたとしがみ付く」

けんなん 劍難。刃物で殺傷せられる危険。刃傷上の災難。

けんによ けんね(懸念)の訛。「けんよ」ともいふ。心にかけて案ずること。心配。下に「なし」の否定の語が来て、「けんによもなし」となり、「思ひがけなし」、「心配なし」、「そ知らぬ」などの意に用ひられる。懷硯五「何と與太夫、(中略)如何なる因果ぞと、總り付き嘆くに、この男けんによもなき貌して、

我名は與太夫とはいはず、如何なる事に尋ね給ふぞ。曾根崎心中「手形を顔へ打付け、はつたしらむ顔付は、けんによもなげにしたららむし。日本武尊吾妻鑑三「しるしほもない身を捕へ、そんなけんによは無いこと」

けんねじ 賭博の用語。拳をして勝負するのだといふ。又、錢をつかんで、その數を言ひ中てて勝負するのだといふ。けんねじし。丹波興作中「傍輩どもが、けんねじついで錢儲けする羨ましき。勢多の久三がどうの時、百切はつて見たれば、勝つ程に〜」

げんのう 玄翁。「けんをう」を見よ。

けんぼう 兼房。憲房。(男だての稱。京都西洞院四條の染工、吉岡憲法といふ者、慶長十九年六月二十二日、御所に御能があつた時、雑色と喧嘩をして殺傷に及んだといふ。一代男ニ「けんぼうといふ男達、其の比は捕手居合はやり」(けんぼうぞめ(兼房染)の略。吉岡憲法の創めたといふ染模様。黒茶色の地に小紋を染めたもの。吉岡染。戀八卦柱曆中「白むく一重の兼房に、裾模様ある片に驚」

けんばふくろちや 憲法黒茶。前條に同

じ。

けんぶくあたま 元服頭。元服したあたま。新に元服した者。京阪の方言。國性爺五「小陸が髪の初元結、諸軍勢の元服あたま」

けんぶくしや 現福者。現に福徳を授け給ふ神佛の稱。まのあたりに靈験を示し給ふ神佛。松風村雨束帶鑑三「浦島塚とて壽命を守るけんぶくしや。參りの絶ゆる事もなし」

けんぶくよし 元服吉。曆の詞。元服するによい日。戀八卦柱曆上「曆が噂繰返す、思へばわしが嫁取よし、我が昔の元服よしの、日どりもよしや」

けんぶくをとこ 元服男。元服したばかりの男。さかりの男。「けんぶくあたま」の條参照。聖徳太子繪傳記三「鳥主殿はもとより侍所の勤、二十一の元服男」

けんぶん 見分。見たところ。みてくれ。みえ。萬文反古ニ「我々づれが娘はさながら下司ばたらきこそさせまじ、似合ひたる手業眞綿つませ糸屑成りともひねらせ置けば、見分はよくて世帯のために成申候」

けんぶん 檢分。見分。あらため見ることに。立ち合つてしらべること。

けんべい 權柄。(威光。權勢。樞要の位置に在るもの有つ威力。浦島年代記「それこそ男の權柄、氣に入らずば去つたがよし」(傲慢。わうへい。權柄をふりまはすこと。百日曾我「ヤア權柄なお侍」

權柄晴れて 天下晴れて。おほびらに。公然と。背庚申上「今日の料理の御褒美に、二人が事を且那へ訴訟、權柄晴れて念ごろさする」

けんべい 乾餅。乾かした餅。延して水分を去つた餅。武道傳來記「上臺所には女あまたの慰み業にや、はや乾餅を取り散らし、搔餅・穀餅を刻みぬしが」

けんべき 痲癖。頸から肩にかけて、筋のつり痛む病。その痛む場所。又、そこに据ゑる灸。次條参照。精進膾「詠むとて花にはいたし首の骨、痲癖に百火櫻の山」。出世景濟四「幸ひ此頃痲癖痛きにちつと擡んで貰ひたし」

けんべけ 前條の訛。一代女ニ「引舟女郎を招き寄せ手を少し借りたいと、袂より内に入れさせ、けんべけに据ゑたる灸をかきせ。同六「むづかしながらけんべけの蓋を仕替へてと肩をぬげば」けんぼ (副詞)まこと。ほんと。眞實



(に)。

けんぼう けんぼう(兼房)を見よ。

けんぼうぞめ けんぼうぞめ(兼房染)。「けんぼう」の條を見よ。永代藏<sup>五</sup>「油屋

絹の諸織を、けんぼう染の紋付」

けんぼがなし 玄圃が梨。玄圃は崑崙山

にある天帝の居處であるといふ。山海

經「崑崙丘有木焉、其狀如<sup>レ</sup>棠、而黃

花赤實、其味如<sup>レ</sup>李而无核、名曰<sup>ニ</sup>沙棠

云々。美味を有し、之を食へば水に溺

れないといふ。松風村雨束帶鑑<sup>三</sup>「園に

は玉の梢を連ね、西王母が桃、けんぼ

が梨、不老の櫻爛漫と」

けんぼくぼ 「憲法公法」の俗訛であらう

といふ。天下はれて。おほやけ。氣が

ねなく。傾城酒呑童子<sup>三</sup>「父様との堅め

で嫁入て来た私なれば、此腹の子はこ

なたの子、親且那と三つがなわで、け

んぼくぼはれて産んで見しよ」

けんぼなし 「けんぼがなし」を見よ。

けんまいによしよく 街賣女色。遊女。

女色を賣るもの。

けんみ 検見。あらため見ること。又、

農作の出来ばえを豫めしらべること。

更に轉じて、軍事の斥候。ものみ。碁

盤太平記「切込まんと存せし内、各方

が検見の爲、方々へ犬入るゝ。吉野忠

信<sup>三</sup>「京勢も検見の勢も一つになり」。

「けみ」の條參照。

けんみやく 見脈。脈を見ること。又、

外に見える脈のやうす。日本振袖始<sup>二</sup>

「天稚きつと目利して、疑ひもなき黃疸

神(中略)、さても見脈お見たての、奇

なる哉妙なるかな。持統天皇歌軍法<sup>一</sup>

「案の如く、御病氣見脈に顯はれたり」

けんもんかくち 見聞覺知。佛語。見る

こと、聞くこと、さとること、知るこ

と。轉じて、あらゆる經驗をすること。

酸いも甘いも嘗め盡くすこと。男色大

鑑<sup>一</sup>「朝飯まへに若道根元記の口談、見

聞覺知の四の二つの年まで諸國を尋ね

一切衆道の難有事のこらず書き集め、

男女のわかちを沙汰する」

けんよ けんによ(懸念の訛)の更に訛つ

た語。権輿の字を當ててゐる。「けん

よ」を見よ。一代男四「をせき、よいき

と歌へど、権輿もなし顔してゐる。こ

れはと様子替へて、松原越えてと踊れ

ば一度に手を拍つて喜ぶ」とは、「そ知

らぬかほ」、「氣にも留めぬ顔」の意。

けんらうちしん 堅牢地神。佛語。堅牢

地祇ともいふ。大地を堅固ならしめる

神。又、佛法流布の國に到つて、常に

法座の下から三寶を恭敬し守護するこ

とを司る神。卯月潤色中「不孝の上の不

孝の科、日月の怒を受け、堅牢地神は

大地を破り、奈落に沈め給ふべし」。又

は氷の朔日中「手を出して兩親を殺す

も同じ不孝人。堅牢地神のいただきに

釘を打つとのをしへ有り」

けんろ 蹇驢。ちんばの驢。脚の遅い、馬

に譬へていふ。持統天皇歌軍法<sup>四</sup>「ある

時は蹇驢に鞭打つて、衣を西山の雨に

濕し」

げんをう 玄翁。鐵の鎧の大きなもの。

玄應。げんのう。大矢數<sup>五</sup>「それ玄翁や

かたき岩角、痲癖所雲起つては烟らす

る」

こ

こ 小(接頭語)。(一)小さい。ちよつとした

等の意を示す。(二)輕しめ、憎みていふ

語に冠らせる。一代男三「店さばきせし

小分別ある者の才覺にて」。同一「浮世

の介ござかしき事十歳の翁と申すべき

か。二代男三「小さいたづらなる脇顔立

ち寄りて見るに」

**こあげ** 小揚。色道大鏡「こあげ。竹與乗物をかく匹夫をさしていふ。みなかの舟着にありて、荷物を運ぶ匹夫どもを中衆などいふ名目あり。これらこそあげともいふ。當道にては、朝夕郭へ通ふ駕籠舁の類を、こあげといふ」(名目鈔、人倫門)。

**こあげもの** 小揚者。遊廓への駕籠かき。前條を見よ。二代男七「末の女郎が、小揚者とねんごろしようとも、隣近くゐて膳立してやるとも、それは宿への奉公」

**こある** ござる(御座る)の訛。冥途飛脚中「五十兩や百兩、友達に損かける忠兵衛ではござらぬ」。宵庚申上「唐辛子五つ六つかぶつても、こんな熱い涙は出ませぬでござりまするでござりまする」

**ごあんす** ござんす。「御座りますす」「ござんす」「ごあんす」と次第に訛つた語。二枚繪草紙下「前は再々ごあんして何がこはうて逃げさんす」

**こいگی** 濃柿。染色の名。柿色の濃いもの。油地獄上「御代參の徒士若黨、揃ひ羽織の濃柿に、智惠の輪の大紋」

**こいきすぎる** 小意氣過ぎる。少ししやれ過ぎる。ややなまいき過ぎる。曾我虎磨下「まだ十二三であるさうな、愛敬のない、小いき過ぎた、且那振つた顔附はいやちやぞや」

**こいちやちやわん** 濃茶茶碗。こいちや(濃茶)を立てるに用ひる茶碗。生玉心中上「假初の薄茶茶碗も、馴染みては濃い茶茶碗屋」

**こいねぶり** こゐねぶり(小居眠)であらう。ちよつと居眠りすること。置土産五「二階座敷の籠を捲かせ、こいねぶりして女郎に鬚抜かせるの樂み」

**こいへきんみ** 小家吟味。細民の生活状態を調査することであらう。無職のものなどを咎めたことと見える。一代男二「小家きんみをおそれ、ひとりは男分に世間をたて」

**ごいん** 五音。もと宮・商・角・徵・羽の五音をいふ。音楽上の用語であるが、轉じて、こわね、音調、ことば、いひぶりなどの意。碁盤太平記「遠慮なしに膝元へつつと來いといふ五音、岡平も心付脇指抜いてからりと捨て」。又は米の朔日中「口にはいひて目は涙、さがは五音で推量し」

**五音の占** 物の音によつて占(うらなひ)すること。殊に人の聲音によつて、身上判断をすること。二代男三「神風や伊勢の右望都(よもいち)といふ座頭、五音の占を聞きて、萬の事を見通すぞかし」

**五音を聞く** 前條「五音の占」を聞くといふに同じ。二代男三「五音を聞くも名譽なり、身の上悪しくはなすまじと」

**こう** 劫(こふ)。圍碁の語。劫は「おびやかす」意。敵を直接に攻めず、遠い處におびやかす石を打つておいて、敵を牽制しつつ攻め又は守ること。大矢數二「小半の酒を出すは水を出せ、しはひか劫して波の夜裘、此堤一度にきるる樋口屋」國性爺四「手詰のせきを勝軍、敵のはまを拾ひあげ、國も御代も打ちかへて、手を盡したる劫もあり」

**どう** 拳(けん)の語。五のこと。冥途飛脚中「拳の手品の手も捲く、(中略)戀の高瀬が差す腕には、はま、さんきうどう、りう、すむゐ、それ〜何と」

**こうい** 鯨鯨。ふぐ(河豚)のこと。松風村雨東帶鑑「そも〜海中に鯨鯨といふ毒魚あり、味の甘きこと、西施乳とて美女の乳房に譬へながら、其肝腹

とて美女の乳房に譬へながら、其肝腹

中に入れて人を害す事、博物志に記せり。背青く腹白く、無鱗にして見憎しとあり。我朝の河豚なるべし」

功入る 軍功を経てゐる。「功を入る」ともいふ。もと佛道の修行について言ふ語。曾我虎磨上「龜菊は功の入つたる戀知りなりけり」

こうか 後架。厠。便所。はばかり。武道傳來記五「袴を脱ぎ後架に行きけるを」

こうがく 後覺。後學が正しい。後日のための學問。他日の學問のためになること。傾城反魂香中「出來たく。あつばれく御分別、後覺なり」

こうき 後記。後の記録。歴史・傳記の類。武道傳來記「兩人が首尾後記に留るべきことなるに」

こうき 後喜。平産後の喜といふ意か。嬰兒産後に行ふ祝ひにいふ語。武道傳來記「三年の契淺からず、男子を平産あり、名を市丸と改め、後喜の祝ひをなしけるに。好色盛衰記「今老の身となり、不思議の平産、而も男子なれば、夫婦後喜の祝ひを重ね、六日誰に名づけ親を取りて千三郎と改め」

こうき 公儀。おかみ。官。役所。一

代男四「重ねてせんさくすべしと人屋に入れられ(中略)、朝夕の暮しも、公儀の飯とは悲しく」。おほやけ。世の中。社會。特に、世間の作法。社交上のたしなみ。大句數上「せがれより公儀を廣う見覺えて、碁でも鞠でも歌でも詩でも」

こうぎぶり 公儀振。人あしらひ。社交ぶり。前條参照。大句數上「三盃のめやれ萩のやけ原、春の野や我物にして公儀ぶり、出頭人は君がためなり」。永代藏「一座の公儀ぶりよき人と、人譽むれば、野郎あそびに金銀をつひやしぬ」

こうきやう こうきゆう(後宮)の誤か。傾城酒吞童子「女御後きやう數多きぶらふ其中に、大納言爲光が娘恒子の姫」

こうげん 「かうげん」又「かうげん」に同じ。こうげん。萬年草中「急な事いうて下さんす。盃さへ延べて欲しけれど、親のこうげん是非なうて、どうなりともと云ひました」。今宮心中上「是非とも親のこうげんに、在所の男持てならば、已や死ぬるが合點か」

こうこう いかう(高)の意か。高

いさまにいふ。國性。爺四「要害嶮岨を帯びたりし、こうくの高櫓、揚る雲雀や歸る鷹」。鐘の音を寫した語。こんこん。出世瀧徳上「山崎寺の鐘の聲、はやこうくと響けども」

こうしがしら 前條に同じ。こうしがほ 孔子顔。きまじめな顔付。かたくるしい面持。

こうしくさし 孔子臭し。しかつめらしい。かたくるしい。西鶴五百詠「本朝通鑑一代の秋、洗濯物孔子臭くもうつ衣」。一代男「鴨の長明が、孔子くさき身のとり置きも、門前の童べにいつとなくたはれて」。男色大鑑八「孔子くさい顔つきは、所ならひにしてをさめすぎ、先の知れたる命の程を思へば樂みなし」

こうしつもやう 後室模様。後室などの着物にふさはしい模様。くすんだもやう。一代男「後室模様のきる物、大綿帽子、房付の念珠」

孔子の顔付 しかつめらしい顔付。こうしがほ。好色盛衰記四「古文眞寶にかまへて、孔子の顔つきして、此徳を五百

こ

石の米になし」

孔子の孫 しかつめらしい、分別のある者の譬。大矢數三「大方の浮世の事は峠があく、醫者が三人出家が三人、此里の孔子の孫を呼んで来い、枕に残る算用をする」

孔子の娘めき ものがたい、貞淑な女らしい。まじめな娘に見える。二代男三「小さいづらなる脇顔立寄りで見ると、無點の大學を心靜に讀みて、人近寄れば祕す、風情何とやら孔子の娘めきて堅い所に柔かなる物ごし」

こうじやうあきうど 口上商人。市や法會などの人ごみの場に出て、辯舌を以て人を集め、萬の合薬や鬘附のたぐひなどを賣るもの。又、蛇や人形など出し、物まねをして人を集める手段とする(人倫訓蒙圖彙)。

こうじやうがき 口上書。訴訟に關する口供を筆記したもの。くちがき。

こうじやうばる 口上張。口はば広いことをいふ。子細らしく、なまいきに口上を述べ立てる。

こうじん 功人。功勞のある人。物事に長じた人。

こうず かう(高)ず。つゝのる。物事の度

合が高まつて来る。吉野忠信「判官様にのぼり姿、餘程こうじた御中に、貴様にお逢ひなされてより、ふつつつ思し切り給ふ」

こうせん 貢錢。口錢。賣買取引の周旋料。仲立人の受ける報酬、手數料。永代藏三「定まりし貢錢とるをまたるく、手前の商をして大かたは仕損じ損をかかぬる物ぞかし」

こうた 小唄。詞の短い俗謡、三味線にあはせて唄ふもの。胸算用二「都の遊び所島原の入口を、小唄に唱ふ朱雀の細道といふ野邊なり」。

こうたう 勾當。盲官の一。座頭の上、檢校の下のもの。置土産五「いざ此坊主を勾當になせと、大分はずませ給へば」

こうたう 公道。質素。じま。ものがたいさま。こうとう。かうとう。五十年忌歌念佛中「己れが母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のためかき公道さ、千人にも稀なりしぞ。油地獄上

「こうとうな兄御を手本にして、商人といふものは、一文錢もあだにせず」

こうたひ 小謠。一番の謠曲の短い一部分を誦ふもの。その季節、その席に應じたものを誦ふこと。番誦(ばんうた

ひ)の對。永代藏一「若い時習ひ置きし小謠を、それも兩隣をばばかりて、地聲にして我ひとりの慰み」

こうたびくに 小歌比丘尼。小歌を歌ふ比丘尼。勸進比丘尼。百日曾我三「紀州熊野には、能き奉公の口ありと、聞くをするべに立越えしに、それは小歌比丘尼として、尼にするよし承り」

こうたぶし 小歌節。小歌をうたふ節。小歌のふし。

こうちゆう 講中。神佛の信者の組合。講の仲間。二枚繪草紙中「講中お茶所の冥加錢」

こうとう 「こうたう」(公道)の條を見よ。懸八卦柱曆上「器量に似合はぬこうとうな、かたくろしい偏屈な生れ付」

こうなりぶし 功成武士。成りあがりの武士。實力の伴はない武士。曾我會稽山五「扱々當代のきれ物は化物と功成武士」

こうにも立たぬ 「こう」は、劫(こふ)か。役にも立たぬ。「ごくにも立たぬ」ともいふ。その條及び「こふに立つ」の條參照。卯月潤色中「エ、こうにも立たぬ怪氣ぢやのう。今は左様の色茶もな

く、只お茶湯で暮します」

このうの阿彌陀 伊勢名所の一。丹波與作

下「このうの阿彌陀の影たのむ、其誓願の詞の縁、千貫松にぞ着きにける」

このうのふし 功の武士。功の入つた武士。年功を積んだ武士。川中島合戦三「隠れもない軍法者、功の武士なれど」。「功入る」の條参照。

このうばり 剛張か。氣象・氣だての、すなほでないこと。強情を張ること。油地獄下「このうばりが強うて、いよ／＼心が直らぬと」

このまゐり 講參。講を結んで神佛に參詣すること。講參詣。一代女六「出女の顔しるじろと見せて、このまゐりの通し馬を引き込み」

このうのり 紺屋糊。紺屋で模様や紋を染め出す時、白抜きにする部分に塗る糊。即ち「のりおき」に用ひる糊。重井筒上「必ずなんにもぬかすなと、口をとめたる紺屋糊」

このりやう 虹梁。柱と柱との間に架した梁。又、大きなうつぱり。織留四「此家昔から逆柱のわざといひて、夜々虹梁の崩るる如く、寝耳にひびきて」

このん 五蘊。色・受・行・想・識の五つをいふ。この五蘊が人身を成してゐると

いふ。賀古教信七慕巡三「生死五蘊の泡消えず。胎内の嬰兒は、あばらの疵を出身の、門と頼みて初産上げて誕生」

ごえうがう 御影向。みえいく(御影供)のことであらう。その條を見よ。武道傳來記四「おもしろやと太神も御影向、末社のぞめき爰なりと」

こおろし 小臈。馬術の語。曲乗の一法。當流小栗判官三「そも／＼馬に七かの祕事、三かの手綱五かの鞍、陰陽の鞭朝嵐、大おろし小おろし、はこび延足、地取足、靱ながしといふ曲を乗返し引返し」

ごかう 五香。梅檀・雜香・沈水香・丁子香・安息香の稱。小兒の良薬とする。織留六「世盛りの家に出生する子は(中略)襦袢のぬるゝ敷を吟味し、晝夜に三度の五香を用ひ。釋迦如来誕生會「五つの香まじはつて、四河の流れも芬芬たり、今の世までも嬰兒の五香の良薬、是此佛の方便力、有難し／＼」

ごかうのまつり 御幸の祭。次條「五香の宮」の祭禮であらう。「一代男二「御幸の祭又は五月の五日六日それ／＼の賣日とて」

ごかうのみや 五香宮。山城國伏見の東

に在る、神功皇后を祀つた宮。九月九日十日に互つて祭禮がある。永代藏三「祭にも五香の宮に參詣せず」

ごかし その人のために心を盡してゐるやうに見せかけること。親切に情あるやうに見せて人を謀ること。おためごかし。一代女二「命をとる男め、誰に問うてこの頭つきと、ひつしやりほんと叩き立ちにして行く事、いかなる帥もいやといはぬごかし也」

ごがし 香煎。「かうせん」に同じ。武道傳來記六「茶波む女香煎を酌みて乗物の側に行けば」

ごかし (接尾語)。或物事を口實辭柄として、他人の意を迎へ、つまりは自分の利益を圖る意に用ひる。男色大鑑七「この二人が帥ごかし、持嘘にして偽りとは思はれず」。津國女夫池二「うぬはよう、上意ごかしに打つたな」

こかす 倒す。又、人に損をさせる。くすねる。大下馬三「七八人も取り巻き、主人を斬りこかし。傾城酒吞童子三「エ、因果めと、はりこかす」。心中萬年草中「惠比須・大黒が乗移つた作右衛門をこかさうや。措いてくれとぞ罵りける」

**こがね心中** 黄金心中。心中。即ち心中の誠實の比類なく上々なること。又、その心中を有するもの。忠臣身替物語 善行「先々知らぬ道といひ、はるく」の所をばよくも尋ねて來られし、それ程君におもはくはくかや、是こがね心中め、さぞやくたびれたらん」

**こがひ** 子飼。幼い時から養ひ育てること。その育てられたもの。重井筒中「餘のお山衆と違うて、十歳の年から子飼ひにて。今宮心中中」さすが子飼の主心、叱る心はわきへなり、思はず涙を流さるる」

**こがふむさい** 五合無菜。一日五合の扶持で、菜の調へがたい身分。極めて小身薄給の分際に見える。

**こがまへ** 小構。構への小さいこと。小計書。小規模。二代男「越後の竹六といふ男、かりそめにも小構へなること嫌ひなり」

**こがらしのもり** 木枯の森。(地名)山城國葛野郡に在る。出世瀧徳初めん今朝ふる霜に朽ちそめて、身をこがらしの森の下道」

**こがれじ** 焦死。(焼)焼け死ぬこと。平家女護局「熱や〜のこがれ死に、生

き火葬とは是れやらん」。(戀)ひ焦れて死ぬこと。

**こぎ** 御器。五器。食物を盛る器物。木製・金屬製・土器をすべていふ。二代男五「缺五器、竹箸、面桶」

**御器さぐ** 御器をさげて門に立つ。非人・物乞となる。出世瀧徳上「今の間に御器さげて、心からの非人仇討、どこぞそこらの橋の下」

**御器の實** 御器に盛るべきもの。飯米。生活の種。丹波與作中「海道筋の五器の實をぶちあげ、菰かづかせて」

**こぎく** 小菊。下等の和紙。加賀・美濃・土佐に産する。鼻紙として多く用ひられる。こみの。こをり。一代男七「祐善が浮世繪、こぎくの鼻紙、運齋織の袋足踏」。晝夜用心記五「罌粟銀七八十粒(中略)、小菊についで捻りてつかはし」

**こぎさう** 鼠麴草。ははこぎさ。源氏十二代長生鳥雲四「鼠麴草はこべら佛の座、青菜すざしろ芹なつな、是を合せて打揃へ、それで七草」

**こぎぜんきのみね** 後鬼前鬼峯。大和國吉野にある峯。ぜんきこぎ(前鬼後鬼)を見よ。一代男二「旅の日數の今は後鬼前鬼の峰おそろしく」

**こぎばこ** 五器箱。御器箱。食器を入れておく箱。籠留四「油蟲ども、數千疋わたりきて、五器箱をかぶり、茶の水に飛び入り」

**こぎやうやぶり** 五行破。木火土金水の五行の順序を破壊すること。又、天地五行の氣を破ることであるといふ。國性爺後日合戦五「虚空を睨み、五行破りの秘文を唱へ、天地を責めて祈ると見えしが」

**こぎやかう** 鶉の鳴聲。厄拂の詞の終に唱へるもの。雪女五枚羽子板上「福徳圓滿惡魔外道、打拂うて西の海へ、さらり〜さつきこぎやかう」

**こきり** 小切か。小さくかはゆらしいさまにいふ。今宮心中下「稀な男のちよきりこきり小女房、花の様な和子を設けて」

**こきり** 次條の略。

**こきりこ** 小切子。放下師の持ちあるくもの。竹の筒に赤小豆など入れて作る。もち鳴らし、手玉に取り、いろ〜曲藝をなすに用ひる。ちきし。

**こきんさんてう** 古今三鳥。いはゆる古今傳授にいふ三鳥、呼子鳥、稻負せ鳥。百千鳥のこと。大句數上「山鴉しつた顔

なる花ざかり、もぎごとおしやる古今三鳥」

**ごぎんみじよ** 御吟味所。訴訟ごとなど取調べる役所の尊稱。寺社奉行の下に屬する「吟味物調役」の居る所。薩摩歌中「同罪といふ一筆の身拔がならうと思ふか、御吟味所へ引渡し、牢へ入るゝは安かれど」

**ごきんらん** 古金襴。古渡りの金襴。緯に平金絲で模様を織り出したもの。傾城酒吞童子四「そりやこそ御膳と呼子鳥。古金襴の膳覆ひ」

**ごく** 放。(動詞)の放つ。體外に出す。

ひる。一代男五「尻をつき出すを不思議に思へば、其のあたり響くほどの香ひ、二つまでごく所を火皿にて押へける。覺えありてこきぬる。」(三)言ひ放つ。ぬかす(物言ふことを卑しんでいふ)。孕常盤三「盗人こなすと白慢ごく」

**ごくいん** 黒印。黒色の印。令書の證として捺したものである文書。

すみつき。男色大鑑三「五百石の御黒印頂戴し、御納戸より路銀まで賜はりて」**ごくいん** 極印。金銀器物などの偽造を防ぎ、又、品質證明の爲に、その物品に打ち記す印影・文字。こつくい。

**ごくざう** 穀象。米麥に附く害蟲。昆蟲類中鞘翅類の一種。長さ一分ばかりで黒褐色。こくうざう。新小夜嵐物語下

「此の米年を經りければ、大方は穀象となんいへる蟲さしてうとなりて」**ごくざり** 五句去。連句の語。同字・同語。同事物を用ひるに、その前に用ひた句より五句の隔てをおくべしとする制限をいふ。大矢數三「世間はみなく夢なれや夢、五句去に暇の狀をやつてのけ」

**こくしやう** 黒汁。濃漿。料理の一種。鯉などの丸切りを濃い味噌汁で煮たもの。**ごくすみのえん** 曲水宴。「きよくすみのえん」を見よ。

**こくせう** 黒汁。「こくしやう」に同じ。國性爺三「お汁は家鴨の油揚、豚のこくせう」

**ごくだう** 獄道。悪事を行ふこと。その悪事。轉じて放蕩者を罵つてもいふ。油地獄中「野崎參りの折節、ごくだうの與兵衛めも參り合せ、友達喧嘩に攫みあふ拍子」。こくどう。

**こくたん** 黒檀。烏木。東印度及び馬來半島の原産。材は黒色、光澤あつて堅緻。器具用として賣ばれる。一代男四

「はきみ箱より接竿のこくたん、六すち懸を取出し、僕(でつち)うたへといへば」

**こくづけ** 刻付。刻限附の略。至急の取扱を要する文書などに、その取扱の刻限を記入してあること。武道傳來記一「日限は名月まで御待ち給はれと、都に刻付の早飛脚を立て、くはしき狀をつかはしける」。二代男八「毎日刻付の肩をさせ、情を忘れ、哀を知らず」

**こくてうのすゑひろ** 黒鳥末廣。黒鳥毛の扇形をした鎧鞆。薩摩歌上「黒鳥の末廣は、周防長門の萩の殿」

**ごくどう** ごくだう(獄道)に同じ。長町女腹切中「あの様なごくどうと腐り合うたお花が行末、流浪は知れた事」。人を罵り卑めていふ。大職冠四「三百文のごくどうが、此玉を起して夜食をたかせ」

**ごくに立たぬ** 役に立たぬ。間に合はぬ。用を爲さぬ。碁盤太平記「何のごくにも立たぬ奴、人手間取らせし憎さも憎し」。傾城反魂香中「肝心の時には念佛といふ物も、何のごくに立ちませぬ、南無阿彌さへすう〜陀佛までやらすに、轉りと取つていきました」

ごくに足らぬ 前條に同じ。傾城酒呑童

子四「人でなしの長めに蔑まれ、此の無念、身を切裂いても晴れやらざ、ごくに足らぬ身の上ばなし、語つて益なき事ながら」

ごくぬすびと 穀盗人。徒らに祿を喰んでゐる人を罵つていふ。才能功勞なくして扶持にあづかつてゐる者。ごくつぶし。

ごくめい 極命。重刑をいふ。櫻陰比事。「極命の所御赦免なし下され、京都を御拂ひ」

ごくもち 黒餅。石持。紋所の名。圓くて中に何も模様のないもの。たゞ圓い紋。矢びらきの祝ひの黒餅に象つたものであるといふ。くろもち。大矢數三「卯卯は爰に正しき袖の月、淺黄にこくもち七夕の布」。永代藏五「世間は何染何鳥がはやる共かまはず、淺黄の七つ星日紋に黒餅」。傾城反魂香中「今日五日日の麻上下、雑屋の黒餅子持」

ごくもん 獄門。獄屋の門。又、刑の名。「さらしくび」のこと。斬罪に處した者の首を獄門ちかくの木の上、又は仕置場の木架に晒らすのでいふ。壽門松中「槍玉に上げられうが、獄門に上がら

うが」

ごくもんだら 獄門道。前條に同じ。ごくもんのき 獄門木。鼻首する木。又、次條に同じ。大磯虎稚物語「由井が濱に、獄門の木に鼻け晒らし」

ごくもんばしら 獄門柱。油地獄中「其の根性が續いたら、門柱は思ひも寄らず、獄門柱の主にならう」

こくらだち 小倉立。こくらおり（小倉織）の布で仕立てたもの。小倉裁。一代女六「小倉立の蒲團、木枕も新しき二つ」

こくる 色道大鏡「の五」こくる。是もほるる心也。されども此こくるといふ名目には子細有。はじめは何とも思はぬ女を、功者なる男のかゝりて、其男のしなしいひなしにめでて、ひた／＼と女のおもひつく所をこくるといふ。是は物を立置て引に、我思ふやうにこなたへこくるやうの心也」

こくる 酷に扱ふ。その事をはげしくする。日本振袖始「非人か又は盗人の引入かと思ひ、擲かぬ計に叱りこくつて追出した」

こくゑん 國遠。遠國へ出奔すること。逐電。二代男七「一年あまり關所を限り尋ね、さては國遠と恨をなし」。男色大鑑「龍左衛門國遠身に謬りのあればなり」。浦島年代記「泊瀬の王子はどれ何處に（中略）、三年前國遠、雲介同然の王子」

どげ 碁筒。碁石を盛る器。碁盤太平記「碁筒なる石を引掴み搔掴み、目鼻もわかずばらり／＼と投付け／＼」

こけい 虎溪。支那廬山に在る溪の名。慧遠法師の「虎溪三笑圖」の起つたところ。男色大鑑七「自然と蒔繪に虎溪のむかしを畫きぬ」

どげぐるひ 後家狂。後家の容色に溺れること。

どげご 後家御。後家の尊稱。後家様。萬文反古「是は後家御もまんぞく成る事と町中申され候に」

どげざや 後家鞆。刀身をなくした鞆。間に合せの鞆。もと／＼刀身と合せて作つたでない鞆。女腹切上「大切先の大刀物、身ばかり買うていなれたは、後家鞆に極まつた」

こけさる 群猿の仲間をはづれた猿。織留三「群猿數かぎりもなく渡りに、二疋つれたるこけ猿が、栗の梢を傳ひ、此川を渡りかねたる風情」。又、愚かな



猿。年老いた猿。丹波興作上「美しい黒

髪を此のやうに剃りさげて、手足は山の  
ごけだふし 後家倒。いなこき(稻扱)の  
こと。後家の職業を奪ふ義であるとい

ふ、畿内の方言。永代藏五「唐箕千石通  
し、麥こく手業もとけしなかりしに、  
尖り竹をならべて是を後家倒しと名づ

け、古代は二人して穂尖を扱きける  
に。ごけなかせ。やもめだふし。

ごけにん 御家人。家人の尊稱。武家の  
臣下。江戸時代では、將軍家の直參で  
御目見以下の士。曾我扇八景下「御馬副

より昇進して、御家人なみの安堵の御  
判」

こけら 柿。材木を削つた細片。薄くへ  
いだ木片。こつば。こぼ。五人女二「こ

けらは胸の焼付さら世帯」。置土産  
「薪も船大工のこけらを徳と氣をつけ」

こけらぐし 木屑。はやずし(早屑)の  
こと。大矢數三「長寝して朝日將軍容

也、浮世の費食がさむるに、風の前一  
つも散すな木屑、油火までも蓋所帳」

こけらぶき 柿茸。苔羅茸。こけら(木  
片)で茸くこと。その屋根。胸算用三  
「苔羅茸の屋根もそこねぬ中に差粉(さ

しぐれ)したり」

こける 轉。倒れる。ころぶ。轉じて、  
かはる。一變する。今宮心中「日比そ  
なたに心を盡す由兵衛め、どうこけて

もうぬが爲のよいやうに書いたは定」  
ごけん 御見。お目にかかること。御面  
會。一代男六「成程けふきりに飽きまし

た、御げんも、今より後はと申し捨て。  
女腹切中「日文ちぶみの付屑け、いよし  
ごげんと書いたるは」。出世瀧徳下「明

日御げんなりませう」  
ごげんもじ 御見文字。お目もじ。ごげ  
ん」に同じ、女詞。姫山姥五「鬼の娘に

御げんもじ」

ごこくご(供御)の訛。食物。召しあが  
りもの。双は米の朔日上「あれみなおこ

ごの時分ちや、サア先づ内へ、それ平  
兵衛馳走しやや」  
ごこくつぶし 五穀潰。「ごくぬすびと」  
に同じ。

ごござ 小御座。小御座船の略。御座船  
の小形なもの。俗つれど「三少し後よ

り、小御座に暮を下して人を忍び顔に」  
ごごしやう 小小姓。元服まへの近習。  
萬年草上「傍輩は皆小小姓の、顔を赤め

て挨拶せず、久米之介は年嵩にて」

九つの

花の  
臺  
佛語

「九  
品蓮  
臺」  
をい

ふ。  
極樂

淨土の蓮のうてな。賀古教信七墓廻三  
「合掌の十の蓮花や九つの、花のうてな  
の花の額」

このところ 九所。女の容姿のすべて  
の點をさしていふ。一代女三「惣じて九  
所共に揃うたる女は稀なるに」

九童の守袋 武道傳來記「手箱を明け  
て一步五十、肌著の襟に縫ひこみ、九  
重の守袋を掛けさせて、暇乞の盃出せ

し時」

ごごちはち 五五八八。五は時の「五  
つ」で、「五五」と重ねたのは晝の五つ  
と夜の五つとを意味し、八八も同様に

晝の「八つ」と夜の「八つ」との兩時を指  
す。また、この「五五八八」の時は十二  
支でいへば、辰戌が五五に、丑未が八



う や し ご こ

こ

八に當る。さて月の上旬の三四五の三箇日は、丑未辰戌の四時が知死期であるといふ陰陽家の説によつて、その日に於ける人間の死期を示した語である。宵庚申下「時も時分も六々に、胸はわけたき五々八々、血死期近づく計りなり」

こはのとき 爰はの時。ここぞといふ時。まさかの時。槍權三上「見かけばかりで、こはの時の用に立たぬ」

こごめ 小米。粉米。搗く時、くだけた米。

こごめや 小米屋。小賣米屋の義か。一代男三「惣領の手を引き、小米屋に行きて、計り吟味するもあさまし」

こごりふな 凝鮒。煮てこぼらせた鮒。にこごりの鮒。一代男六「迎の遅き女郎(中略)、こごり鮒の鉢をあらし、湯の水のと口の隙なく」

こころいき 心意氣。心だて。氣まへ。曾根崎心中「流涕こがるゝ心意氣、こゝとわりせて哀れなれ」

こころいれ 心入。物事に心を入れること。心づかひ。熱心。川意。たしなみ。一代男五「及ぶ事の及ばざるかと、身の程いと口惜しと嘆くを、或者太夫に知

らせければ、其心入不便と、ひそかに呼び入れ。」同「世之介此女の心入を驚き、様子を聞けば、隠れもなき人の御息女なり。」槍權三下「虎次郎稔々しげなる旅装束、おのれ此のさまは何處へ行く心入、小病者め」

こころえたるべし 心得太郎兵衛。心得たといふ語の口拍子にいふ、元祿頃の流行語。女腹切中「それ男ども退ひいだせ。心得太郎兵衛・長兵衛・五助」

こころえたんぼ 前條に同じ。曾我扇八景中「それ申し附けよと云ひければ、心えたんぼ。又は米の荆日中「内衆酒の爛しやれ(中略)といひければ、心得たんぼを漬生羹」

こころぜいもん 心藝文。心の中に立てる藝文。心中のちかひ。永代藏五「此家へ重ねて商ひいたさじと心藝文立てても」

こころだま 心玉。心魂。こころね。精神。又、精。二代男三「飛び立つ心玉にも、彼の一粒の銀をいろうて見る。同四「心玉が出て身の焼印。男色大鑑七「道頓堀の野暮の煙に無常の心玉しほし静まりしが」。又、普通の心の義にも用ひる。

こころだより 心便。心にたよりに思ふこと。心だのみ。博多小女郎波枕上「まさかの時は心だよりになりましよ」

こころづけ 心付。その人に心をとめて遣はず金品。二代男一「數々の心付、中にも木地のさし枕を一つ渡して」

こころびやうし 心拍子。心の中で取る拍子。心のはずみ。堀川波鼓下「りんりんと、心拍子に乗りかけは」

こころまめし 心賃。心がけの忠實なさまにいふ。傾城酒吞童子四「心まめしう一人の客も取りはづさず」

こころもと 心元。胸先。胸のあたり。五人女三「おせんかなはじと覺悟のまへ、鉦にしてこころもとをさし通しはかなくなりぬ」

こころせん 「こころを先途」といふ類。「こころを大切な場合」、「こころを専一」などの意。織留三「節孝候爰をせん」と舞ふ所を高蒔繪にしたるを見れば」

ござ 古座。古參。古くつかへてゐる者。武道傳來記四「殿の權威をかりて、古座の諸士をないがしろにするさへ憎し」。ござ 御座。御座船の略。やかたぶね。大矢數四「乗物の御座が出て行く難波より」

**ござらさ** 御造作。饗應の敬語。御馳走。大矢數三「御造作や百味の飲食備へられ、寒い事なしほしい事なし」晝夜用心記六「芝居にての御造作、殊に金子まで御とらせかたじけなく」

**ござろりと** 小草履取。草履取の名目で武家の抱へておく着衆。男色の相手。(大草履取の對) 大矢數三「庄之介とて究竟の者、見立ては小草履を置かれたり」。一代男三「或は小草履取の鼻すぢけだかきをかやうに仕立て、東國西國の屋敷方、一年ばかり長屋住居の人をだます物ぞかし」

**ござろつぷ** 五臟六腑。はらわた。腹のすみずみ。五臟(心・肝・肺・腎・脾)と六腑(大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱)と。槍權三上「五臟六腑をはき出だし、鐵の熱湯が咽を通る苦み」

**ござくら** 小櫻。櫻の一種。花が細かくて色の淡いもの。

**ござくらをどし** 小櫻絨。鍔の絨の一種。地色は藍で、花形を白く出した皮でをどした鍔。小櫻皮絨。ござくら。一代女六「小櫻絨といふ具足を京へ染直しにやらしやつた」

**ござござぶね** ござた〜入り雜つて乗る

乗合船のこと。御座船にもちつていつたもの。今富心中上「老いも若いも下人も主も、男女がござ〜船に、袂涼しき川風は」

**ござしいづ** 小差出。(動詞)ちよつと差出口をきく。さし出ることを憎んでいふ。

**ござしき** 小座敷。母屋(もや)に續けて立て出した屋。はなちいで。又、小さい座敷。一代男七「襖障子を明くれば、八疊敷の小座敷」。戀八卦柱曆上「夜の小座敷も掃除しや」

**ござさして** 小差出。「ござしいづ」の口語。松風村雨東帶鑑三「エ、業平様も小差出た。どうぞ差配の仕様もあらう」

**ござぶね** 御座船。天子・公卿・將軍・大名などの貴人の乗る船。屋形船。いろ〜種類がある。三鐵輪「中納言残しおかるゝ腰障子、御座舟でいざ山陰の月」。一代男五「天下の町人の思ひ出に、御座舟のうちには、外山千之介、小鳥妻之介など取りのせて行く」

**ござまく** 御座幕。御座船に垂れる幕であらう。男色大鑑四「諸人遊び舟を仕立て、新堀より乗浮かれて、都まさりの女中御座幕の物見に面影うつり、波に

聲あつて小歌松に音して」

**ござまくら** 筵枕。ござむしろ(御座筵)を枕とすること。又、そのござ。

**ござめり** 「ござんめれ」の訛。曾我會稽山四「ヲ、好い敵ござめり」

**ござやりまうす** ござり(御座在)申す。用明天皇職人鑑四「御託宣でござやり申すでござり申す」

**ござりやない** 御座無し(御座在)の訛。用明天皇職人鑑四「偽りはござりやない」

**ござりやまうす** 「ござやりまうす」に同じ。

**ござりんす** ござりますの訛。廓詞。女腹切上「こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に、一寸逢ひたう御座りんす」

**小猿の頬を押すやう** (諺)小猿の物を食べてゐる頬を押して吐き出させるやうに、弱者に無理を強ひること。松風村雨東帶鑑三「たま〜遇うた男を、餓鬼の物をひんづる、小猿の頬を押すやうに、あんまり出来ぬ御差配」

**ござん** 五三。五十三匁の略。寛文の頃以後の烏原遊女の揚代。その値段の遊女。色道大鏡一「五三、三八、天神、圍として皆一日の遊料の數をたとへ名とせ

り。「五三の君」。大矢數「五三に逢うて夢か現か」。次々條參照。

**ごさんすことば** 「御座んす」を多く用ひる詞。やさしい、なまめぬい物言ひのこと。雪女五枚羽子板上「古流な事をサラリと止め、奥方の女中の中の通り者其外浴中に娘子供の色好きが、御座んす詞の酒のこなし、上覽に入れん爲、召寄せ置いて候」

**五三のあた** 「あた」はあたひ(價)で、代金を意味し、「五三」は、五十三匁で鳥原の遊女の上級なものの揚代金の略。即ち太夫の揚代。一代男五「小刀鍛冶の弟子、吉野を見初めて(中略)、宵々毎の仕事に打ちて、五十三日に五十三本、五三のあたいをためて、いつぞの時節を待てども」

**こしあて** 腰當。腰にあてて敷くもの。もと、毛皮で作る。山を行く時などに腰に着けた物。油地獄上「金剛杖、腰に腰當、首に珠數、巾着代の水吞」

**こしあふぎ** 腰扇。腰にさした扇。そのさす事。油地獄上「迷ひを開く腰扇」

**こじえ** 居士衣。道服の一種。法體の人などの着る物。遁世者の着る衣。俗つれづれに「棕桐竹の杖つきて、居士衣の

紐を高く結び」。懷硯「頭は霜を梳りて散切りとなし、居士衣の袖を仔細らしく」

**こしおし** 腰押。腰を押すこと。轉じて、力ぞへをすること。後援。しりおし。後援者。黒幕。槍權三上「悪性があつたらば、この姑が怪氣の腰おし」

**こしがた** 腰形。衣物の腰にある模様。腰模様。一代男「御りやうにんさまの不斷着、此のなでしこの腰形、くちなし色のぬしや誰」

**こしかはり** 腰變。小袖などの染模様の腰から下の變つてはでななもの。こしあき。油地獄上「桔梗染の腰變り、烏じゆの帯、しやじやはひのく」。一般に腰に相當する部分の染模様の變つたのをいふ、下文は槍標の例「鱗形の腰替り白頭の振り禿」(薩摩歌上)

**ごじぎ** 御時宜。御挨拶。禮儀。武道傳來記「先づこなたに、いや御時宜に及びませぬと、いはれぬ所で禮儀を述べて埒あかざるを」

**こしざし** 腰差。腰に挿すこと。その物。日本振袖始「腰ざしの名筆噛み濕し」

又、こしがたな。(腰刀)。腰に附く。腰に挿すこと。その物。日本振袖始「腰ざしの名筆噛み濕し」

に入れて持った錢。曾我會稽山「合羽は取置腰錢を取落すな、馬よ鞍よ」

**こしぞへ** 興添。興に付き添ひ行くこと。その人。曾我五人兄弟「女の乗物近づくに、興添への下女を見れば」

**こじただる** 小舌たらい。いやになまめかしい。物言ひなどのあまえていやらしい。「したたらい」を憎みさげすんでいふ。あたしたたらい。槍權三上「これ見よがしの其帯は、定紋の三つ引と裏菊と、小じたたる引並べ」。夕霧阿波鳴渡中「下地がにやこい且那樣、小舌たるう仕懸けたら、ほつかりと喰付いて、田も遣らう哇も遣らうで」

**こしぢやうちん** 腰提燈。柄を腰にさしてさげる提燈。こしざし提燈。

**ごしつ** 牛漆。牛膝。みのこづち。多年生草本、高さ三四尺。莖は方形、膨れた節を有つ。葉は楕圓で尖り、花は小形で綠色。地下部を利尿薬などにする。ふしだか。こまのひさ。みのくづち。一代男「唐が道らしの粉、牛膝百斤、其

外色々品々の賣道具」

**こしつぎ** 腰附。「こしぞへ」に同じ。腰に附く。腰に物を附けてゐるやうに、人を自由にする。我が掌中のもとなす

る。本朝三國誌ニ「惟任が髭首は、久吉が腰に附けたもの」

**こしぬけやく** 腰拔役。働きのないものにも務まる役。一代女「腰拔役の銀鏡を預りける」

**腰の物** 刀。腰刀。一代男ニ「お腰の物の柄に懸けられ、我がうすぎぬのあらく裂き給ふ」

**こしはう** 小四方。四方（三方に似た、物を載せる器、四方に孔がある）の小さいもの。こじほ（お）。娥歌加留多ニ「小四方引き寄せ、昆布に添うたる鬘斗引つ掴み」

**ごじはつけう** 五時八教。佛語。五時は五時教のこと。釋迦一代の教法を五時に區別した稱。華嚴は三七日、阿含は十二年、方等は八年、般若は廿二年、法華は八年であるといふ。八教とは化儀の四教（頓・漸・祕密・不定）と、化法儀の四教（藏・通・別・圓）をいふ。百日曾我「其の中間の五時八教、中にも薩達磨芬陀利花」

**こしはり** 腰張。壁・障子などの下部に紙を貼ること。又、人の腰の力。一代男八「床敷のうちには、太夫品定のこしはり」。同一「思はぬ慾もいできて、人を

むさぶりて我が身の外のこし張りをたのみ、あらし防ぎ候」

**こしばる** 小芝居。小規模な芝居。大芝居の歌舞伎を演ずるのに對して、主として見世物などを興行したもの。どんちやう（緞帳）芝居。兩吟一日千句「小芝居の中は十六左八つ、羅漢うごけば太鼓の一曲」。懷硯ニ「小芝居に播磨が六道のからくり、閻魔鳥は是ぢや」。茶花咄ニ「首かくす物腹切の小芝居」

**こしびやうぶ** 腰屏風。たけの低い屏風。腰の高さほどな屏風。陶算用ニ「道具置きの棚を釣らせ、腰屏風、枕箱」

**こしびやうらう** 腰兵糧。腰につけて持つ當座の兵糧。

**こしふをん** 去此不遠。極樂の近きにあるをいふ。阿彌陀佛去此不遠（觀無量壽經）。卯月潤色中「妻の位牌の手向草、兩々たる谷に下りては、去此不遠の水を荷ひ、盤々たる山路に薪を拾ひては、十萬億土の月をよむ」

**ごじぶん** 御自分。第二人称の敬語。貴殿、貴公の類。武道傳來記六「心の剛なる事は、中々御自分におとる者にあらず」。傾城反魂香下「姫君の事に付、御

じぶんさま、御懇志の趣」

**ごじぶんさま** 御自分様。御自分を更に敬つていふ。武道傳來記七「御自分様七年以前に御越の時」

**こじほらし** いささかしをらしい。ちよつとかはゆらしい。どことなくやさしい。孕常盤ニ「出花を上つて下さんせと、小じほらしげにあいしらふ」

**こじまさげ** 小鳥酒。肥前國小鳥に産する酒。男色大鑑八「明け暮れこじまさげも面白からず」

**こしもとづかひ** 腰元使。貴人の側に侍して雑用に仕へる女。侍女。腰元。又腰元として仕へること。腰元奉公。俗つれ、五「腰元づかひの若葉といふ女」。五人女ニ「棟たかき町屋に腰元づかひして月日をかさねしに」

**こしもとぼうこう** 腰元奉公。前條を見よ。戀八卦柱曆中「素浪人の伯父が力には、絹氣を引張らせて、腰元奉公に出す事もならぬ」

**こしやう** 小姓。武家にあつて、主人に直屬して使はれるもの。大小姓・中小姓・小小姓などの別がある。

**こしやうたち** 小姓立。小姓から生ひ立つたこと。小姓から仕込まれたもの。

小姓あがり。

ごしやうだて 後生立。後生願ひを口癖にする。わざとらしい後生だのみ。

曾我扇八景下「今更俄かに後生だて、子細がなうては叶はず」

五障の雲 女人に五つのさはりあることを雲に譬へていふ。一に梵天王、二に帝釋天王、三に魔王、四に輪轉聖王、五に佛身となることが出来ないといふその障。萬年草下「辿り越ゆればあか月の、五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ着きにける」

ごしやうまはし 小姓廻。小姓たちの上に立つて世話すること。又、その役。薩摩歌上「近年高野に相勤め、小姓廻しは致せしが」。次條参照。

ごしやうめつけ 小姓目附。小姓衆の監督役。小姓廻しするもの。丹波與作上「通はせ文をお次に落し、小姓目附に拾はれ」

ごしやくてぬぐひ 五尺手拭。五尺のたけある手拭。松の落葉五「五尺いよこの手ぬぐひ、五尺てぬぐひ中染めて、おれにいよこの呉りより、おれにくりよより宿におけ」。出世瀧徳上「駕籠の仲間から、三尺手拭拘帯とて進上す」。

これはかの、五尺いよこの手拭と、歌に誦ひし手拭か」

ごしよおしろい 御所白粉。白粉の名。もと、御所方で用ひられる白粉といふに起るか。織留一「素顔でさへ白きに、御所白粉を寒の水にてときて、二百へんも摺り付け」

ごしよがき 御所柿。柿の一種。果實がやや扁平で方形。方柿。もと、大和國葛上郡五所村から産した故の名。吉野都女楠五「面こそ見えね大かたそれと知つたな。尤もく御所柿と誦柿とは皮むかいても知れるもの」

ごしよがさ 御所笠。御所方の女房の被る笠。御所風の笠。

ごしよかづき 御所被衣。御所方の女房の着けたかづき。御所風のかづき。五人女三「御所かづきの取りまはし、薄色の絹足袋」。置土産四「谷町の藤の黄昏に、御所かづきの深く、随分身のふりやめて」

ごしよぐるま 御所車。五緒車。牛車(ぎつしや)即ち牛に挽かせる車。古くは一般に乘用したが、應仁の亂以後には宮中の大儀にのみ用ひられることとなつたので、俗にかく稱する。二代男一

「千代の古道には御所車」。男色大鑑四「我が家の榮花、たとへば御所車に乗りても人はとがめず」

ごしよざくら 御所車。櫻の一種。花は大形重瓣で、五つ一房となつて咲く。川中島合戦三「情の花の、やれ御所櫻」

ごしよぞめ 御所染。御所ごのみの染模様。御所ちらしの類。近代世事談卷之一「御所染。寛永のころ女院の御所にて好ませられ、おほくの絹を染めさせられ、宮女官女下つかたまでに賜はる。此の染京田舎にはやりて御所染と云」。大矢數二「なりふりのあの御所染はいらぬもの、髪をきつてもどこやらはまだ」。二代男五「御所染かづき一連れ皆よし」。一代女一「御所染のはやりしも明暮雛形に心を盡せし以來也」

ごしよちらし 御所散。前條の一種。上品なちらし模様。男色大鑑八「目に正月をさせて飾り繩の染出しゆかた、御所ちらし、千筋山づくし」

ごしよづくり 御所作。御所風の家づくり。

ごしよもやう 御所模様。御所風のもやう。ごしよぞめ、ごしよちらしなどの類語。

1110

**ごしよらくがん** 御所落雁。菓子、落雁

の一種。氷砂糖を溶いて、糯米の挽粉をこねて製したものである。大下馬二御所落雁、煎餅、さまざまの菓子

**ごじよるん** 小書院。「ござしき」に同じ。

一代男六「けふは傳授物の土用ばし（中略）、小書院に一つの箱あり」。武道傳來記「御吉例の御講初（中略）、法體は小書院にて見物仕らるべし」

**ごじりあて** 鑑當。「ごじりとがめ」に同じ。

**ごじりつまる** 小尻詰まる。刀の鞘の末端の詰まることから轉じて、借錢などの拂ひが出来ず、にっちもさつちもならぬにいふ。首がまはらぬ。動きが取れぬ。胸算用「今といふ今、小尻つまりて一夜を越すべき才覺なく」。冥途飛脚中「方々の肩け金が不埒になり、當る所が嘘八百、いかう小尻が詰まつて来た」。油地獄下「今宵ごじりの詰まりの分別」

**ごじりとがめ** 小尻咎。武士が往來で刀の鐙の觸れ合つたのを無禮として咎めること。鞘當。鑑當。又、つまらぬ小事からのいさかひ。「一代男五」戀も遠慮もむしやうやみに、見しりごしなる悪

口、或は小尻とがめ、又は男だて、一町に九所の喧嘩

**腰をよる** 「よる」は纏る、又はよちるで、腹すぢをよるなどいふ類。をかしさに堪へないさま。大笑ひするさま。一代男七「興に乗じてまだ所望々々といふ程に、後は大道に出て、もんさく、いづれか腰をよらざるはなし」

**ごすい** ごすむ（五衰）。「ごすむさんねつ」を見よ。戀八卦柱下「思へば天一天上の、五すい八せんま目もなし」

**ごすぎ** 小杉。紙の一種。次條の略。永代藏五「十三歳の時、鼻紙に小杉入れしを見て勘當切り」

**ごすきはら** 小杉原。杉原紙の小判のもの。鼻紙に用ひる。色道大鏡三「鼻紙は小杉原に限るべし」。同「鼻紙は當道に於ては、男女ともに小杉原の本とす」

**ごすぎばら** 子過腹。多産の腹。子の出来過ぎた腹。松風村雨東帶鑑一「三人までの産巢とは、難じていはば子過腹薄き乳の緒は如何ぞ」

**ごすて** 吳洲手。吳須手。吳須燒の陶器。支那で明の中頃から製した染附燒の稱。曾我會稽山二「御相伴には五郎丸、赤繪吳洲手の錦皿、下し給はつて是で

喰ふ」

**ごすむさんねつ** 五衰三熱。五衰（頭上華萎・眼瞬・身上光滅・腋下汗出・自然離於本座）は天人の衰滅の兆。三熱は一日に三度づつ熱い目に逢ふといふ龍蛇の苦。松風村雨東帶鑑五「龍玉の威勢に押され、五衰三熱歎む事なし」。大職冠二「玉を奪つて龍帝の、五衰三熱をまぬかれんと」

**ごすんつぽね** 五寸局。局女郎の、一夜を三度仕切り、其の一切りの揚代五匁のものをいふ。布帛の切賣に擬した語である（笑ふ女）

**ごせ** 御前。警女。三味線を引き、歌を歌つて物を乞ふ盲目の女。ごせんのう。今宮心中上「憚りながら介様へ、お着にごせ殿一節頼む」

**ごせかいだう** 御所海道。大和國南葛城郡御所村を通る街道。冥途飛脚下「是を路鏡に御所海道へかゝつて、一足も早う退つしやれ」

**後世の引入** 一代男四「後世の引入といふは、美しき尼をこしらへ、身は墨衣をさせ置き、なりさうなるおかた達に附けて遣はし、わが宿は是、ちと御立寄と取りこむ事もあり」

こ

こせる こそつく。こそせしめる。新可笑記五「大名の御物好、こせらぬ事をこそ豊かなる詠めなれ」

後世を取りはづす 後世(死後の安穩)を願ふ考をなくする。道心を失ふ。五人女五「さて世にかゝる美童も有るものぞ(中略)と、後世を取りはづして暮方まで詠め」

ごせんざげ 御前酒。貴人の前で飲む酒。俗つれづれ三「大宮人の御前酒、爰に住めばこそ地下人の口にも合へり」

ごせんさま 御前様。御前を更に敬つた語。又、貴人の奥方の敬稱。一代女三「女役を勤めし時、淺草の御下屋形へ御前様の御供仕ふまつりて」同「俄かに御前様の御顔ばせあられなく變らせ給ひ」

ごせんばん 御膳番。君公の御膳の事を掌る役。槍權三上「御舎兄伴之丞とは、御膳番の淺香一之進に茶の湯の相弟子、心易い朋友」

こそげぞり 刮刺。けづりそぐやうに刺ること。軀山姥「中刺、逆刺こそげぞり」

こそこそちぎり 祕密のうちに契ること。孕常盤五「假初めのこそこそちぎり

ばつとなり」

こそこそやど 内密に忍びあふ宿。曖昧宿。雪女五枚羽子板上「こそこそ宿の情事」

こそつく こそこそ音をさせる。丹波與作中「あんまりこそこそついで、馬は追はいで、頤で蠅かおるやぞや」

こそていかに 小袖風。いかのほりの一種。小袖がたに作つた紙蕨(たこ)。

こそてだんす 小袖箆筒。小袖など入れの箆筒。槍權三下「小袖箆筒、挾箱、葛籠」

こそてまく 小袖幕。花見などの時、小袖を脱いで、暮のやうに紐にかけ連ねたもの。五人女二「花見衆も藤山吹はなんとも思はず、これなる小袖幕の内ゆかしく、覗き遅れて歸らんことを忘れ」

こそばい 「こそはゆし」の訛。聖徳太子繪傳記「首筋に手を入れ給へば、あゝこそば。曾我虎磨上「きやつら掴み挫きたい、手がこそばい、はがゆい」。戀八卦柱屏上「ア、こそばあ。又してはく、抱きついたり手をしめたり」

こそばふ こそばう。次條「こそはゆし」の變化。「こそはゆく」の音便の訛。孕常盤四「ア、騎つた事はかり。はしこぶ

ても、こそばふても、たとへざるふて跡で口が腫れても」

こそはゆし 櫛られるやうに感ずるさまにいふ。くすぐつたい。こそつばし。こそばい。浦島年代記「内裏の住まいこそはゆく」

こそべ 古曾部。(地名)攝津國三島郡の内。能因法師の住居の地、又古曾部饒産地として知られてゐる。曾我會稽山四「傳へ聞く古曾部の能因法師、苗代水にせき下せ(中略)と、詠せし歌は國土の爲め」

こだいふかのこ 小太夫鹿子。かのこしほりの一種。近代世事談卷之一、衣服門「小太夫鹿子。貞享元祿のはじめ、伊藤小太夫といふかぶきもの、江戸にて此のかのこぞめを着たり。江戸中に此のそめがのこはやる。又、京大阪にはやりて、江戸がのこ云」

ごだりりき 五大力。女の文の封じ目に書く語。佛家で五大力菩薩を道祖神に習合するものがあるので、遠國へ遣る手紙を嚴封し守護して貰ふ心から用ひたのであらうといふ。三世相三「袖から渡す一結び、片假名のより五大力」。尙次條を見よ。



ごだいいりきばさつ 五大力菩薩。佛語。

三寶を護持する國に往つて、その守護に任ずる五菩薩、金剛吼・龍王吼・無畏十力吼・雷電吼・無量吼の稱。「五大力苜」として女の文の封じ目に記す。略して「五大力」ともいふ。永代藏「封じ文一通拾ひあげしを取りてみれば、花川さままゐる二三よりと裏がき、そくひ付けながら、念を入れて印刷おしたるうへに、五大力苜とそめくゝと筆をうごかせける」。物種集上「片あし上げて古郷詠むる、五大力ばさつも文のたより也」

ごだうし 吳道子。(人名)吳道玄。道子は初の名。唐の玄宗に召された著名な畫家。新可笑記「唐土にも吳道子といへる畫師の官女のうつつし繪に、こぼれ墨其のまゝに悲子とうたがはれしも」

五道の冥官 五道は佛語、五趣に同じ。即ち地獄・餓鬼・畜生・人間・天人の五道の衆生の善惡を裁斷する官人。

ごだうりさま 御道理様。道理に合つた事がらを敬つていふ。壽門松上「押遣れども腹立たず、おゝ御道理様や、御免なりませ」

こだかのはをり 小鷹の羽折。相撲の手

の名。

こだくさん 小澤山。澤山なことを卑しめていふ。やゝ澤山な感じを與へるもの形容。

ごたくさん 前條に同じ。油地獄中「何ぢや、ごたくさんに三貫目」

こだち 小斷。我ち方にいふ。小供の衣物のこと。小裁、胸算用四「男小袖四十八、女小袖五十一、小斷中斷の小袖二十七」

ごたち 御達。中古語。宮仕への女房たちの敬稱。御女中方。松風村雨東帶鑑四「御達、腰元・女の童」

ごだん 後段。饗應の時、飯の後に更に出す飲食物。食後。それを出すこと。武道傳來記「馳走さまゝなる體にもてなし、後段濟むと心持ち例ならず」。萬文反古「後段に寒ざらしのひやし餅」

ごたんしやうらい 巨且將來。日本振袖始三「吉備國の百姓、食保(うけもち)の長が惣領巨且將來、近郷一の田地持」

ごたんぼ 五端帆。五端は五反であらう。五反ばりの帆かけ。武道傳來記三「五端帆の舟二艘を出島の宿の縁の前まで釣り揚げ」

ごだんまげ 五段曲。女の髮の結び方。番の一種。「一代女三」さる御方に御髪上げに宮仕を仕うまつりける。其時にかはり兵庫曲古し、五段曲も見にくし、昔は律義千萬なるを、人の女房かた氣と申侍りき」

ごちゆう 後住(ごちゆう)。寺の後の住職。先住に對する語。吉野都女楠二「蓮臺寺と云ふ淨土寺の後住に、無海と申す法師なるが」

こちやう 小帳。小さい帳面。行商人などの持つもの。「一代男三」桐の挾箱の上に、小帳、十露盤をかさね」

ごちよく 小童。遊女屋などで女兒を呼ぶ。又、童兒を卑しめていふ語。こわつば。孕常盤三「やい若い者共、此處なごちよく奴を知つたか、終に中間で見馴れぬ奴」

こつあげ 骨上。火葬にした者の骨をひるふこと。はひよせ(灰寄)。骨揚。大矢數二「いつそに燃えて火の鏡とやら、骨揚のやうすを問うて泣涙」

こつひ ぶこつな。頑固な。やばな。がさつな。ごつひ。生玉心中上「こつひ客の癖に、揚げの日は半時も側に置かねば、損のやうに吸付いてゐたさうな。

それで勤が續くものか」

こづか 小柄。刀の小刀櫃に挿してある小刀。男色大鑑七「當座に小柄を貰ふもあり」

こづか こうで(小腕)のつかね。特に上膊の臂に近いところ。緋縮緬卯月紅葉上「こづかを取り、引伏せ」踏んづ叩いづ。傾城酒呑童子三「おゆらは夫太四郎が、こづか胸倉掴み合ひ、敷居で轉ぶ、雪駄は飛ぶ」

こづがらをとこ 骨柄男。骨柄の立派な男。骨格のよい男。

こつくい こくいん(極印)の訛。  
こつじきにすぢなし 乞食に筋なし。

(參)乞食には系圖がない。乞食は父親傳來のものでない。織留「紅葉の錦紙子となり、四季轉變の乞食に筋なし」  
こつそろう 元僧。「がつそろう」を見よ。  
こつそり すつかり。全部。残らず。唐船嘶今國性爺下「賣りだめの金銀、根からこつそり」

こつちやう 骨張。骨頂。最上。第一。特に悪いもの、又は愚かなことの極點。罵る語。源氏冷泉節上「エ、古狐の骨張め、最前に打殺し、皮引剥いでくれんず物」。生玉心中上「嘉平次様といふ人

は嘘つきの骨頂」

こつちり 濃厚なさま。こてこて。こつてり。孕常盤二「いかな宇治の極上も、驛が茶には及ばぬと、女夫の中のこつちりの、出花を上つて下さんせと、小じほらしげにあいしらふ」

こつづ 小筒。小銃。銃。(大筒の對)。  
武道傳來記「小筒に鎮玉を仕込み、火鉄切つて駈寄るを」

こつてい ことひ(特牛)の訛。牝牛の強健なもの。頭の大きな牛。  
こつていうし 前條に同じ。日本振袖始

ニ「牝牛(こつていうし)の二足連」  
こつてり 「こつちり」に同じ。しつこい濃厚なさま。出世瀧徳上「ヤアこつてりと味な事、妓狂ひよりあの方の實入が能からう」

こつてんわう 牛頭天王。佛語。天竺の北にある九相國の吉祥國の王で、祇園精舎の守護神。佛家では素盞鳴尊をその垂跡であるとす。京都の祇園神社の祭神は是れである。大阪では天王寺の南東の門前に之を祭り、廿二社の内に數へてゐる。緋縮緬卯月紅葉上「天王寺には十五社の鎮守を一社と伏拜み、扱十四番十五番、南東の門前の、牛頭

天王に我が願ひ」

こつねんしけん 忽然之間。忽ちの間。俄かに。法華經提婆品十三「龍女忽然之間變成男子」。源氏冷泉節下「女人成佛の提婆品、高晋に遊ばし、忽然之間變成男子と讀上げ給へば」

こつばい 骨敗。細かに打ちくだくさま。  
こつばみちん 聖徳太子繪傳記「うぬが頭を爪先まで、微塵、骨敗に引裂き」

こつぶ 小粒。(一)一分金のこと。小粒金(豆板銀をいふ上方の方言。(二)身體の小さいもの。

こつぶり こくび(小首)に同じ。首を卑しめていふ。

こつぼとけ 骨佛。骨になつた人。死人の稱。傾城反魂香中「おみやとはいはず佛々と申したに、あつたら佛をやくた

いもない骨佛にしてのけた」  
こつぼり 細奥。京都の遊里の名。穴奥とも記す。祇園町・八坂などと並稱された。嬉遊笑覽九「このこつぼりといふ處は猶そのかみはやりたる處なり。似我峰物語に、今の都のはやり物云々し

ばがき町にこつぼり町と見えたり」。男色大鑑六「祇園町石垣上八軒家穴奥八坂清水の茶屋。一代女三「此男やうく

細奥町上八軒の茶屋遊びの諸分ならでは知らずや」

**こつまもめん** 古妻木綿。膝間木綿と同じ。織留<sup>三</sup>「我も昔は日に一筋づつ下帯かきかへたる男、今古妻木綿も恥しからず」

**こづめ** 後詰。軍勢の後に控へたもの。又、その控へてゐること。先の者の手

だすけ。後援。武家義理物語<sup>三</sup>「夢ながら其場にゆきて、後詰して残る處なくうちとめさせ」

**こづめづ** 牛頭馬頭。地獄の獄卒。牛頭で人身のものと、馬頭で人身のものをいふ。孕常盤<sup>三</sup>「犯人遅しといふ奈落、牛頭馬頭の阿防羅刹」

**こづめやくしや** 小詰役者。下廻りの役者。はした役者。天網鳥上<sup>一</sup>ついに指さぬ大小ぼつこみ、藏屋敷の役人と、小詰役者の眞似をして痴(ばか)を盡した此の刀」

**こづらにくし** 小面憎。「つらにくし」を更に卑み憎む度を強めていふ語。一代男<sup>一</sup>「この男まだ合點せぬを後には小づらも憎し」

**こづる** 小莩。唐織(からおり)の一種。織留<sup>二</sup>「これ小莩といふ唐織、世に稀と

云ふ」。永代藏<sup>三</sup>「此唐織申すもおろか時代わたりの柿地の小づる淺黄地の花鬼」

**こてい** 小體。物事の小さくつづまやかなこと。織留<sup>三</sup>「遊興をやめさせ給へば居室も毀り残し、商賣物も小體にして渡世に取りつづき」

**ごどうのけさ** 五條袈裟。五つ幅の布で作つた袈裟。七條の袈裟などともいふ。五條の法衣。大職冠<sup>二</sup>「首引包む五帖の袈裟」

**ごてさん** 御亭様。御亭主さま。茶屋の詞。

**こてんじん** 小天神。娼妓の一階級。「天神」女郎の一種。天神より品の下つたもの。一代男<sup>五</sup>「高洲の色町中の丁(中略)、あたま數よびていくらが物ぞ、天神小天神とせちがしこくきはめぬ」。好色盛衰記<sup>一</sup>「その揚屋に小天神にて口きよし女郎」

**ごど** 後度。後日。のち。他日。松風村雨東帶鑑<sup>一</sup>「日前の勝利に後度の天罰受けんより」

**ことかき** 事缺。その事、その物の缺乏してゐること。物事が不足で不自由なこと。永代藏<sup>四</sup>「夜半油をきらして女房

の髪の油を事かきにさすなど、かゝる不自由なる事を見る」。男色大鑑<sup>一</sup>「素盞鳴尊老の事缺に稻田姫に戯れ」

**ことかけ** 前條に同じ。椀久<sup>一</sup>「世物語上」よきものは何國にても勤めに隙なく、やうく旅芝居の花川順之助が方へことかけに尋ねしに」

**事がな笛吹ん** (諺) 事あれかしと準備して待ちかまへること。事あらば笛を吹いて囃し立てよう。武道傳來記<sup>一</sup>「陰陽師は事がな笛ふかんと神樂姫をこしらへ」

**事が延びれば尾鱸がつく** (諺) 物事は延びれば、その間にとかく故障などが生ずる。薩摩歌中「事が延びれば尾鱸がつく。男其はをらぬか、此奴が宿は坊の津にあるげな、家主へ渡し来てい」

**ことづくり** ことづかり(託)の託であらう。好色盛衰記<sup>三</sup>「大阪より十里の所を魚荷が言づくり來るさへ文一つを錢十文に定め置きしに」

**ことなふ** 殊なう。殊の外。殊に。非常に。源氏烏帽子折<sup>二</sup>「今宵は殊なふ冷えささらふ。先づ盃と温めて」

**こととはじち** 言葉質。後の證據にとらへておく人のことば。言葉。胸算用<sup>三</sup>「言

こ

こ

葉質取られて迷惑せぬ様に」。二代男一「いかなる男もせき出でて、いふ事不出來にて言葉質を取られ」

ことはじめ 事始。十二月十三日に煤拂ひなどして、正月の準備をなすこと。又、十二月八日といふ説もある。江戸では八日に正月の儀式を始め、上方では十三日に物を贈答する風習があつたといふ。正月事始。おことはじめ。おこと。胸筑用ニ「大分物入りの正月を請合ひ、萬事の入用を早極月十三日に事始めとて遣はしける」

ことばだたかひ 言葉戦。言葉を戦はすこと。言ひあひ。口論。武道傳來記五「生若輩なる口よりいはれざる過言中略」それを俵人といふと、色を變へて詞だたかひするを」

ことばつひえ 言葉費。むだごとを言ふこと。詮ないことに言葉を費すこと。ことばづめ 言葉詰。言句の出ぬやうに言ひつめること。理窟づめ。

ことひうし 特牛。牡牛の強くすこやかなもの。偉大なたくましい牡牛。永代藏ニ「特牛程なる黒犬なるを立ち寄りてこれを貰ひ」

ことぶれ 事觸。事を言ひふらして世間

二二六

に知らせること。殊に、「鹿島の事觸」の略として用ひる。大矢數四「鹿島の神の自由にならぬ、事觸は宿老殿から其次に」。永代藏五「惣じて産業の道、かせぐに追付く貧乏なしと言觸れがいてまはりしに」。二枚繪草紙上「檢非違使が鹿島の事ふれ、鳥様とつくとお聞きなされ」

ごどみそ 五斗味噌。豆二斗、糠二斗、鹽一斗を搗き合はせて用ひるのでいふ。じんだ糞汁みそ。

ごども 子供。かげま。少年俳優。男色大鑑一「芝居の顔見せ前に、子供的情深うなると」。萬文反古一「役者子どもの義まづ御乗候事御無用に候」

ごどもたらし 子供をだますこと。ごどもや 子供屋。かげま茶屋。男色を賣らしめる家。子供茶屋。萬文反古四「揚屋子ども屋手形借しれたる買ひがかりは」

ごどもやど 前條に同じ。男色大鑑一「子供宿から闇に提灯かきぬと」。胸算用「島原の揚屋、四條の子供宿」

ごどりまし 小取廻。次條の約。ごどりまはし 小取廻。取りまはしよいこと。小器用に氣のきくこと。事を簡

易にするさま。始末のてきばきしてゐること。織留六「下女ごどりまはしに働きければ」。一代女五「加賀絹の平紐をごどり廻しに紺短く」。男色大鑑七「小取りまはしに諸藝を藤田小平次に採まれて」

ごどをつく「ごど」は「後度」であらう。後日事を尋ねる。後になつて仔細をなじる。傾城反魂香上「其女房は何者と、ごどをつかるゝ念の爲、今こゝで私と夫婦かための盃して、とつと前から藤袴と契約有と申さば」

ごないほう 御内方。妻の敬稱。奥方。雪女五枚羽子板中「御内方の調へ給ふ金子」

こなから 小半。一升の半分を更に二分した量。二合半。酒にいふことで、少量を意味する。大矢數三「小半の酒を出すは水を出せ」。二代男四「口の缺けたる徳利に小半合入れて」

こなからいり 小半入。二合半を入れること。その入れもの。二合五勺入の徳利。大矢數二「小半入に一生は夢、此ごとく吹と思はぬ浮世かせ」

こなからさげ 小半酒。二合五勺の酒。少量の酒。一代男三「家請の機嫌を取

り、小半酒に兩隣をかたぶけ」。榮花咄  
四「この時の小半酒、明日は一分に成る  
事ぞかし」

こなさあ 此方様。「こなさま」の訛。こ  
なたさま。第二人稱の敬語。女の詞。

傾城反魂香上「こなさまに似合うたあ  
ほふの木とも見さんせと、無駄言なし  
の言ひ捨ては、田舎よねとて笑はれず」  
こなさま 此方様。「こなたさま」の略。

前條参照。油地獄上「こな様も連立ちた  
い者がある。同下「ア、こな様は小氣  
味が悪い」

こなさん 前條に同じ。生玉心中上「こな  
さんが大和橋の濱納屋借つての出見世  
も、私が近くにおよようため」。天網烏甲  
「こなさんが浮かかゝと死ぬる氣色も  
見えし故」

こなし 熟。物のとりなし、あつかひ、  
調節。座配。さばき。雪女五枚羽子板  
上「浴中の娘子供の色好きが、御座んす  
詞の酒のこなし、上覽に入れん爲、石  
寄せ置て候。曾我會稽山四「輪逆やの  
花咲が、一座の座配(こなし)、逢ふ夜  
のわけ」。色道大鏡一の五「こなし。男女  
ともによく取入て、心の儘にかけひく  
貌をいふ。麥をこなすなどいふに通ふ

詞なり」。次條参照。  
こなす 熟。(動詞)。取りさばく。始末  
をつける。孕常盤一「是れ體に御太刀を  
合はされんに勿體なし、下拙こなし申  
さんと、面もふらず斬りかくる。同三

「盗人こなすと自慢こく」。前條参照。  
こなひと 此人。「こなひと」の約。こ  
の人。油地獄下「こな人何いやる。節季  
に寄らぬ金の、過ぎて寄つた例はない」

こなまり 小訛。すこしの訛り(詞)。な  
まり。武家義理物語六「すこし物ごしに  
こなまりあつて、四國そだちとはしれ  
ける」

こなまる 小訛。(動詞)少し訛る。なま  
る。雪女五枚羽子板中「これゝは是は  
何事ぞ。小なまりになまつて、何うす  
べいかうすべいと、男らしう遣らうぞ  
やと、ささやけば」

こなをとこ 此男。こなをとこ。この  
男。曾根崎心中「有様いへば憎うない、  
こな男めと纏るれば」

こなんど 小納戸。江戸幕府の職名。將  
軍近侍の役で、若年寄の下に屬し、御  
髮・月代・御膳番、御庭方などの事務を  
掌る。又、諸侯に於てもそれに準ずる  
者を稱する。

こなんどがた 小納戸方。小納戸役の人  
達。永代藏二「御祝言又は衣配の折から  
は、其役人小納戸がたの好みにて一商  
して取りける」

こなんどしゅう 小納戸衆。前條に同じ。  
大矢數四「小納戸衆は風の音する、さ  
く花を散らせぬままに御爲づく」  
こにたたく 粉に叩く。こなんぐに碎く。  
女腹切中「この身になつた半七を、粉に  
叩いても一歩一つ誰が貸さう」

ごにんぐみ 五人組。五戸を一組とし、  
その中の一人を長として、比隣を相互  
に取締りさせた自治機關。五保。織留  
三「年寄五人組の連判にて」

子の命は親の命 (諺)子と親とは切つて  
も切れぬ關係にあるをいふ。軀山姥三  
「此の身を一寸だめしに刻まれても、見  
殺しにするものか、子の命は親の命」

このてがしは 側柏。萬葉集の「奈良山  
のこのてがしはの二面に、かにもかく  
にもねぢけ人の友」の歌によつて、物  
のふたおもて(二面)なことにかけてい  
ふ。雪女五枚羽子板中「男女の二面、側  
柏や此の手振り」  
このはざむらひ 木葉侍。つまらぬ武士。  
こつば(木端)ざむらひ。

このり 鷹の一種。はいたかの雄。百日曾我一「扱御鷹は、つみまつきいさしやしやう準このり」

このゑりう 近衛流。和様書體の一流。慶長の頃、近衛信尹の創めたもの。天網島下「走り書き、諸の本は近衛流」

こはかす 婿(コハ)かす。大矢數三「影はまだか更行月に料理好、亭主婿かす薄亂れて」。婿びてふるまふことか。又、婿びへつらはしめることか。

こぼたけ 小島。鼓の名家。幸流と稱して、紀州藩のお抱へであつたといふ。

こぼたけぞめ 小島染。置土産。「近年の大臣は小島染の両面、又はべんがらの大絹の風呂敷に暑き時分も暮方の用意して、單物袷羽織を入れさせ、利根なる小者連れたるは、古金買に見せても三百目より内の身體にはあらず」

こはつき こわつき(聲付)。聲の様子。枕久一世物語下「寢覺めに聞きしが、其のやさしきこはつき、人間とは思はれず」

こはつとどころ 御法度所。奉行所。法度を出す役所。新可笑記三「女不屈の書付、國の御法度所へ言上申せば」

こはひ 粉灰か。こなみちん。こつばい。曾我會稽山三「微塵・粉はひになればとて」

こはや 小早。走ることの早い小舟。鱧の数が二挺立てから四拾挺立てまであり、物見、使番、飛脚船などに用ひる。一代男三「浪は次第に荒く、潮境より小早に乗りうつりて」。大下馬二「沖より十二人乗りし小早横切れに押すと見えしが」。武道傳來記五「此三人小早浪をくぐらせて程なく追付」

こばんぢやらう 小判女郎。小判(金)を女郎に譬へて、愛すべき意に用ひた語。出世瀧徳下「今日は金を突きつけて是非とも詫びて貰ふ思案。耳を揃へて懐中した(中略)。どれく、ホウくくく可愛らしい小判女郎」

こばんにんぎやう 碁盤人形。碁盤の上で舞はせる人形。曾我五人兄弟五「碁盤人形・指人形、二人のかぶろが欲しがりし」

こひあきびと 戀商人。遊女のこと。こひあきうど。大磯虎稚物語三「大門より見渡せば、戀商人のわけ里や、往き來の女郎色盡す」

こひぐるわ 戀廓。いろざと。遊里。雪

女五枚羽子板中「西に姉里、戀廓」。こひぢのやみ 戀路の闇。戀の爲に心に分別のないのに譬へる。堀川波鼓上「わめき廻る勢に行燈を踏倒し、戀路の闇の暗がりと、唄ふは物か是も亦、由なき事の迷ひなり」

こひつづか 戀塚。戀のために死んだ者の塚。下例は、袈裟御前の塚で、鳥羽の淨禪寺門前にあるもの。一代男七「淀の小橋は霧こめて、鳥羽の戀塚、合點じやと目覺まし」

こひつみ 古筆見。古筆の眞偽を見ること。古筆鑑定。その人。男色大鑑四「鳥の勘左衛門といふ古筆見と指さしてをしへける」

こひのいちば 戀の市場。遊廓のこと。こひのかたまり 戀の固。胎兒のこと。大矢數二「戀のかたまり二子の貌、木戸番は或夜しのびて通ひしに」。同「手懸を置くに玉笹の末、降菫是こそ戀のかたまりじや、心中通すやなみつくらふ」

こひのめんめんかせぎ 戀の面面積ぎ。諺に「色中は銘々稼ぎ」ともいふ。戀は影のくしがちであるとの意。出世瀧徳下「こなさんと吾妻様とはあんまりで小腹が立つ。しんきのわく程浦山し

い。見ぬが増しぢや。戀のめん／＼稼ぎぢや」

**こひはやみ** 戀は闇。(謔)戀には心の分別なくなる事。戀は盲目」ともいふ。又、戀は秘密裡に成立する意にいふ。

一代男「其火けして近くへと仰せられける(中略)、如何にして闇がりなしてはと御言葉をかへし申せば、うちうなづかせ給ひ、戀は闇といふ事を知らずやと仰せられける」

**こひむこ** 乞舞。特に望んで貰ひ受けた舞。武家義理物語三「御親父とけいやくしての乞舞なり」

**こひむこ** 戀舞。戀ひ慕つてゐる舞。槍權三上「舞は子の相傳、一之進聞かれて満足、第一私が戀舞」

**こひめ** 乞目。戀目。双六などで、おのれが欲する賽の目。一代男四「細工に雙六の盤をこしらへ、二六、五三と乞目をうつ内にし」

**こひやくはちじふねん** 五百八十年。長きことをいふ諺。末長きを祝ふ意。武遣傳來記入「茂七郎殿の長生、鳥をまゐらぬ人々は五百八十年も生残りて見給へ」と

**五百八十の餅** 婚禮の三つ目の日、又は

五日目に、舞男共に餅を掲かせて五百八十七に丸め、藁のかますに入れて使に持たせてやり、途中で出會つて、互に餅を受け取り渡して祝ふこと。傾城反魂香中「けふは五日め五百八十の餅を掲いで、里歸りと云ふこと縁邊の式法なれども」

**五百八十七** 前條参照。大矢數四「生延びて五百八十七まかり、御寶物やくるくるの帯」

**こびる** こましやくれる。ませる。老成する。ひねこびる。永代藏五「森鳥權六といふ男すこしこびたる者にて、學力あれば道を忘れず」。雪女五枚羽子板上「ヤアこび過ぎたる奴等かな」

**こひをしへどり** 戀教鳥。せきれい(鶴鶴)の異名。諸冊二神がといふに學んで夫婦の道を始め給うたこの鳥に神話の故事に據る。日本振袖始四「あの鶴鶴の鳥來り、妹香の道を教へしより(中略)さてこそあの鶴鶴を、庭來鳴、庭叩、戀教鳥とも云ふぞとよ」

**こぶ** 劫。「こう」を見よ。

**こぶく** 五福。人間の受ける五つの福。長壽、富裕、無病、徳を好むこと、天命を以て終ること。浦島年代記「人間

の五福を備へ、三萬里の蓬萊指顧の中」

**ごぶくざし** 吳服差。布を度るに用ひる物差。ごぶくじやく。鯨尺。新小夜風物語下「是を怨む泪は袖にも餘る吳服ざしとや」

**ごぶぐし** 五分櫛。櫛の厚さ五分ばかりの櫛、元祿頃流行したも。五人女三「金元結にて結はせ、五分櫛のきよらかなるさしかけ」

**ごぶくじよ** 御服所。衣服を調達する所。吳服物を賣る店。ごぶくだな。胸算用三「誰様の御服所、何人方の掛屋」。永代藏「本町吳服所京の出見世」

**ごぶくつぎのきせる** 五服繼煙管。つぎぎせる(繼煙管)の一種。又、火皿を大きくした煙管ともいふ。一代男二「鳥部山の煙とは、五ふくつぎの煙管筒、小者にへうたん」

**ごぶくめ** 香合。香が焼きしめてあること。五人女四「其證據には是ぞとごぶくめの袖をかざしけるに、白菊などいへる留木の移香、どうもならぬとうちなやみ」

**ごぶくろ** 小袋。小さな袋。特に、舉丸の異稱。日本振袖始三「お名染の疝氣の

神(中略)、近比慮外な小袋に、屈みま  
すと顔しかめ」

**こぶくろざか** 小袋坂。(地名)相模國鎌  
倉の内、雪の下から山の内へ行く坂道。  
今は切通しになつてゐる。最明寺殿百  
人上臈よ「自らは小袋坂、金龍水の池の  
邊に年經て栖むものなるが」

**こぶしぎぬ** 絹織物の名。二代男「きや  
うろくの幅廣帯、こぶし絹の二布」

**こぶしやう** 御不祥。御迷惑といふほど  
の意。武道傳來記五「とかく御不祥なが  
ら我ら相手に此方を致すといひかけら  
れて」

**こふしよう** 前條に同じ。他人の蒙る物  
事の不祥(迷惑)を推察していふ。萬文  
反古三「鑑あづけ置候御ふしようには、  
妻戸御あけなされ」

**こふにたつ** 劫に立つ。閑恭の語。敵に  
對して、攻守ともに直接に試みず、お  
びやか(劫)す爲の石を間接において戦  
ふ。「こふ」の條參照。轉じて、物事を  
かさに著て、人に對するにいふ。日本  
振袖始ニ「美濃國の惡鬼退治を劫に立  
てられんとはおろか」

**こふにん** 業人。前世の惡業の報によつ  
て、この世に耻をさらす人。業さらし。

業つくばり。源氏冷泉節下「世にも人に  
も捨てられ、便りもない業人」。重井筒  
上「惡人とも業人とも盗人とも」

**こふのはかり** 業の秤。罪業の輕重をは  
かる秤。傾城反魂香中「流れの罪をかけ  
て見る、こふの秤の重みには」

**こふのや** 業の矢。因果應報の矢。尙、  
下文を見よ。曾我會稽山「的矢は業の  
矢とて、親の敵を射る故實あれども、  
鹿を射る法はなし(中略)、的矢を業の  
矢といへばとて、惡業の業と心得、親  
の敵を射ることと故實を一偏に覺えし  
な」

**こぶら** 腓。脛の背面、肉のふくれたと  
ころ。ふくらはぎ。こむら。丹波與作  
中「すりちがひに小腕を取り、こぶらを  
蹴かへし」

**こぶら** 小風呂。小さい風呂。男色大鑑  
四「暮れて小風呂に入りまじり」。陸摩  
歌上「小風呂に入れば風邪引いたの、物  
が出来るの何のとて」

**こぶん** 五分。下級の女郎の揚代。又、  
その女郎の位にいふ。傾城酒吞童子三  
「私が位かえ、極つた通り五分でこん  
す」。二代男三「位こそ五分と四拾六匁  
なり」。「こぶんをんな」の條參照。

**こぶん** 御分。そなた。貴君。貴殿。出  
世景清五「尤々御分が手にもかけつら  
め、又重忠も確に見て候はいかに」

**こぶん** 古文。古い文章。特に「古文眞  
寶」の略。懷硯五「花は見ずして、古文  
の上巻を開き、朱を以て頭書」

**こぶんきき** 古文聞。古文眞寶の講義を  
聽聞すること。武家義理物語三「女のい  
らざる四書までも讀みて、此のほどは  
古文聞に氣をつくしける」

**こぶんざう** 五分藏。揚代五分の遊女。  
榮花咄三「その後は分に於て、五分藏に  
成り、よし原町の中程に腰張なしの局  
住ひ」

**こぶんしんぼう** 古文眞寶。(書名。前  
後二集各十巻から成る。編者不詳。古  
來我が國で好く讀まれたのはその後集  
である。後集に收める所は、楚の屈原  
から宋の作家まで三十三人、詩賦文章  
六十四篇を十七類に分つて掲げてあ  
る。何れも古くから文學界で必讀の文  
として推稱されたものである。(轉じ  
て「かたくるしきこと」、「しかつめら  
しきこと」などの意を寓して、西鶴は  
之をいろ／＼に用ひてゐる。以下の諸  
例を見よ。大矢數三「誰か跡四千に止る



にあり大矢敷、我夏しらぬ古文眞寶」。置土産三「朝に道を聞いて夕に通ひなれ、何の古文眞寶」

古文眞寶なる 眞面目なる。しかつめらしい。二代男八「古文眞寶なる顔色せずとも、千三百餘人の姿を見るべし」

古文眞寶に きまじめに。神妙に。武道傳來記四「常は古文眞寶にかまへし男も、釣罷に様はかへながら」。好色盛衰記四「古文眞寶にかまへて、孔子の顔つきして」

こぶんぞう ごぶんざう(五分藏)。揚代五分の遊女の稱。

こぶんめく 古文めく。古文眞寶めく。しかつめらしく見える。俗つれんニ「言葉に子細を籠めて、古文めきたる顔つきして」。置土産四「此揚屋古文めきたる顔つきして」

ごふんをんな 五分女。下等な遊女。その場代から呼びなしたるもの。織留三「忍びへに端女郎ぐるひして、夜見せ過ぎて霜月の比、よし原町の五分女に、虎之助といふ局に」

ごぼうぎ 御母義。おんぼぎ(御母儀)。御母様。母御さま。萬文反古「第一御母義様御しかけ悪敷存候は」

ごほうぜん 御寶前。神佛の御廣前。賽銭箱のある所。永代藏二「御寶前に立ち寄りて借銭一貫といひけるに」

ごぼくぜめ 古木責。木につるして責めること。出世景落三「此分にてはおちまじきぞ、やれ古木責にせよや」

こほりやまぞめ 郡山染。大和國生駒郡郡山から産する染絹。重井筒上「隠居の親父が來ると、家内はしみこほり山染になるはいの」

こぼれぐち 河堀口。(地名)大阪天王寺の東南、大和街道に出る地。冥途飛脚下「二人が涙こぼれ口、明けぬ間は暫しとて」

こまかしく こまかく(細)に同じ。置土産五「日には見ねども彼の噺こまかしく譯をも知ることかな」

こまがね 細金。小間金。はしたげに。こまかにしたかね。小粒の貨幣。男色大鑑「川原の金剛にこまがね預けておくと」。同五「草履取にもこまがね二奴とらし」。榮花咄三「覺悟の前巾着に駒銀を入れて」

こまくら 小枕。髻(かもじ)の根に入れる木。一代女「小枕なしの大鳥田、一筋掛のかくし結び」。百日曾我三「髻小

枕取つてすて」  
こまざらへ 細糧。齒の細かいざらひ。つちくれ(土塊)などを、かきざらふ用具。永代藏五「鐵の爪をならべ、細摺(糧)といふ物を拵へ、土を碎ぐに是程人のたすけになるものはなし」

こまだるい まだるい。こめんどう(小面倒)。まだるつこい。傾城酒呑童子四「ア、こまだるい、あとを聞くまでもない」

こまちをどり 小町踊。盆踊の一種。十二三以下の少女が、たすきがけで鉢巻きし、團扇太鼓を鳴らしながら輪に列んで歌ひ踊るもの。一代女「ゆかた染の花の色も移りて小町踊を見しに、里の總角なる振袖に太鼓の拍子、四條通迄は靜にゆたかにいかさま都めきけり、それより下は町筋かきりて聲せはしく、足ばたつき、かくもかはるものぞかし」

こまと 小的。小さい的。大的の對語。直徑一尺ぐらゐのものといふ。最明寺殿百人上臈上二族集めて小的射で、勝負を樂む」

ごまのはひ 道中で旅客をたぶらかして物を盗み取る者。晝夜用心記五「道中つ

れなき者につき、路錢ある出家を見かけ、さま／＼品をかへて、語人を誑かして金銀を捻ぢ取る。是護摩の灰といふ者なり」

こまひ 小舞。ちよつとした舞。少し舞ふこと。永代藏五「小歌小舞に氣を移し」

こまひき 駒引。次條の略。男色大鑑五「むかし印籠になめし革の巾著に駒引の根付を下げ」

こまひきぜに 駒引錢。駒牽錢。人が駒を引いてゐる形を表した錢。猿卸駒・砂金駒・賀字駒・衣冠駒・浪飛駒その他種

種ある。昔、まじなひに用ひたといふ。一文で錢十文に相當したもの。五人女二「駒引錢、日鼻なしの裸人形」

こまひきぜに



こまへ 小前。商賣などを、小規模に、うちわに替むこと。永代藏一「俄に取ひろげたる棚も仕舞ひがたく自ら小前になりぬ」。胸算用一「尤も小前に怪我はなけれども、皆人沙汰せらるゝ通り

利を得る事なし」  
ごまもち 胡麻餅。小麦粉に白砂糖を混ぜて作つた餅。大矢數三「胡麻餅や松は本より煙るらん、千とせの鶴の子共たらしに」

こまよせ 駒寄。馬の走り狂ふのを防ぐために、門前などに設けた棚。こまよけ。武道傳來記七「疲れて立ちかぬるを駒寄せに取付かせて」。男色大鑑一「彼男を夜更けて丹之助門外の駒よせに搦めつけ」

こまぬ こまひ(木舞)。櫓(のき)に連なる木。垂木(たるき)の端にあるもの。出世景清一「珊瑚樹のこまぬをひつしと打たる臺には」

こみち 質素。節約、始末などの意。置土産三「地議の歸りさまに鹽買うて行くなど、こんなこみちなる所を見ては、一日になが／＼と暮らさるゝ所とは思はれず」

こむさい 小ぎたない。よごれ(汚)たことを卑しめいふ。大矢數三「されども入るな水風呂の溜、こむさいは七日のぼりし泊客、蚊屋釣傘ねてかし夜着もなし」

御夢想の餛飩 餛飩の一種。大阪天満天

神の前の店で賣つたもの。俗つれど五「天満天神の鳥居筋に花屋の奎兵衛住みぬ。これが女房は御夢想の餛飩して面々活計」

こむやくしい 小無益しい。むやく(無益)しいことを憎んでいふ。むだな、つまらぬ、ばか／＼しい。夕霧阿波鳴渡中一「奥様はうつそり鼻明いて仕廻らんしよ。小無益しいあた分の悪い。こりや御無用に遊ばせ」

こむらさき 小紫。遊女の名としてよく用ひられた。男色大鑑八「江戸に藝子のを小紫とよび、京にてかをと付け、遊女の名も物やはらかにして聞きよし」

こむろぶし 小室節。昔、諸侯が入府の時、馬前に立つた馬子に誦はしめたものであらうといふ。萬治年中には、江戸の日本橋・飯田町・淺草見附の三箇所から飾り立てた白馬に跨り、馬子二人に小室節を誦はせて吉原へ通ふことが行はれた(日本歌謡史)。一代男五「七つ蒲團を白縮緬にしめかけ、馬の脊にも唐縁をはかせ(中略)、其時は小室ぶりの最中、宿入にうたひて、馬子も兩口をとるぞかし」。榮花咄三「投節も小室節に替へさせ、後は諸分を辨へ」

御夢想の餛飩 餛飩の一種。大阪天満天

**こめかちきね** 米搗杵。米を搗く杵。米つきの手杵。五人女五「かんだんの米かち杵、浦島が庖丁箱」

**こめかみ** 米嚼。比丘尼の弟子の稱。一代男三「あれは正しく江戸減多町にて忍びちぎりを籠めし、清林がつれし米かみ、其時は菅笠がありくやうに見えしが、はやくも其身にはなりぬと」

**こめざくら** 米櫻。こごめざくら、又、こめさきざくら(米裂櫻)と同じであらう。西鶴五百韻「こしきより香ひの通ふ米櫻、千年の春庭の名水」

**こめざし** 米緝。米刺。米俵にさし込んで、米粒を出して見る時に用ひる竹製の筒で、その刺し込む一方を斜に削いで尖らしたるもの。二代男三「米緝さして、袂に大豆を入れ」。永代藏二「米さしの先を争ひ、若い者の勢虎臥す竹の林と見え」

**こめらう** 小女郎。こむすめ。こめわらは(小女童)の轉。又は水の朔日中「平野屋の小めらうが風呂敷包打ちかたげ」  
**こめろ** 小女郎。前條の約。小女童。二代男一「小女童(こめろ)、故郷の垢も自然に落ちて」。長町女腹切中「そなたが

娘お花が事、そも〜小めろの時分から、手形の表まる七年」

**ごめんひつ** 御免筆。御家流(おいへりう)。御家やう。伏見天皇の皇子、青蓮院尊圓法親王の筆法を傳へた書體。胸算用五「十枚綴ぎの蠟地の紙に、御免筆の名印まで記したるを賣りけるに

**ごもう** 虚妄。うそ。假構。傾城酒吞童子三「第一君の御爲方便の偽りは罪にあらずと、佛さへもこもうの御法を説き給ふ」

**ごもそうあみがさ** 虚無僧編笠。虚無僧のかぶる編笠。ごもそうがさ。ごもがさ。一代男四「ばつばの大小おとしざし虚無僧あみ笠ふかく」

**ごもちすぢ** 子持筋。太い筋に細い筋を並行せしめて引いたもの。婚禮の時の器物や衣服などに祝として用ひる。最明寺殿百人上臈下「是も二人の子持筋に、鶴龜染めたる紫袍袴」

**ごもちむしろ** 子持莖。子持が子と共に寝るやうに、幅を廣くした莖。二人用の「比翼むしろ」といふ二枚幅の莖があるが、その類であらう。出世景清三「みづからは子持むしろの裏ふれて、見る目にいやとおぼすれども」

**ごもつ** 御物。(一)貴人の所持品の敬稱。(二)武家に於て、その君公の御物を持つて侍する少年。小姓。妓童。武道傳來記五「御使者には今の御物甲斐品之丞をつかはされけるに」

**ごもつあがり** 御物上。前條(一)の「御物」からあがつた者。もと御物であつたもの。小姓あがり。大句數上「なびかする御もつあがりの松之丞、角は入れてもつけざしならば」。大矢數三「上意を以て隅からすみまで、御物あがり今は毛抜や恨むらん」。武道傳來記八「この二人は大殿の御物あがりにて祿も同じく」。雪女五枚羽子板中「女とも見え男なら、御物上りの若者と、擬ふばかりになりけり」

**ごもつごしらへ** 御物裝。御物むきの作。貴人の所用にふさはしいごしらへ。男色大鑑七「榮光の中脇指の御物装へなるをおくりけるに」。織留三「御物ごしらへの脇ざし」

**ごもつたいなし** 御勿體無。「勿體なし」を更に謹んでいふ。

**ごもつぶくろ** 御物袋。御物を入れる袋。大矢數三「山は夏青磁の貌顯して、御物袋を出る朝風」

**こもの** 小者。武家で走り使ひなど勤める若者。又、町家の召使の男をもいふ。一代男四「挟箱持、小者を召しつれ。二代男五「六尺小者手車に載せて」

**こものあがり** 小者上。小者からあがつた者。もと小者であつた者。一代男一「或夕暮、小者あがりの若き者を招き」**こやぎんみ** 小家吟味。「こいへぎんみ」を見よ。

**こやすのはふ** 子安の法。安産のための修法。蟬丸五「姪婦安平子安の法」

**こやど** 小宿。ちよつとした宿。又、男女密會をする宿。密賈宿。一代女四「小宿の噂が機嫌取に心つくるもおかし」**こやどばいり** こやどばいり(小宿入)。前條の「こやど」に入ること。私娼などにかかはること。二代男一「年もあけば直に昔の里へは歸らず、小宿ばいりをして」。織留六「町人にも世盛りの家に出生する子は(中略)、家久しき年寄を横目に付けて、かりにも小宿ばいりをさせず」

**こやのもの** 小屋の者。こやもの。非人。穢多などの稱。博多小女郎下「豫て相闘のこやの者、十手引提げくる〜と追取り巻き」

**こゆな** 小湯女。有馬の温泉宿に使はれる婢、大湯女に對して年若いのをいふ。下文を見よ。攝津名所圖會「旅客をとむる家七十餘軒あり。廿坊の家ごとに二婢あり。一人を大湯女と稱し、總て之をカカと呼ぶ。一人は十三四歳より十八九までの若女、美顔を選んで容色をかざる、之を小湯女といふ。二婢ともに入浴の客に隨從して、入浴の時を知らせ、浴衣を肩にかけて案内し、衣類を預りなど侍女の如くす。或は酒席に出でて歌ふ」。百合若大臣野守鏡三「有馬の湯に來て見れば、老いを養ふ瀧よりも、小湯女が情身の薬」

**こゆひ** 小結。侍烏帽子のまねきに、穴をあけて通した組紐の懸緒。又、烏帽子の小形なものをいふ。源氏烏帽子折三「左折に小結をゆひ、御烏帽子出來たり。自らは殿始」。孕常盤二「螺鈿の手箱に横笛一管小結の烏帽子」

**こよぎ** 小夜著。小さいよぎ。一代男八「衣桁に十二の袖を懸け、こよぎ山をかさね、小蒲團錦の峯のごとし」

**こよざ** ごようじん(御用心)の轉訛。天網鳥下「せき〜廻る火用心。ごよざごよざ〜も人忍ぶ」

**こよみごもん** 曆小紋。模様的一种。曆の表を象つた小紋。男色大鑑八「勸子の唐織を着始めしは、是を手本に、イロホ形曆小紋袖を争ひけると」

**こよみばり** 曆張。曆の表を屏風などに貼つたもの。一代女六「噂は奥の間をかたよせて、曆張の勝手屏風を引立て」

**こよる** 小夜。小夜着(こよぎ)のこと。織留五「當世ごしらへの衣裝こよる小ぶとん手道具まで、此程の煙入り荷物を質に置き、銀七貫目借りて行く」。萬文反古三「こよるこぶとんふた通りは此方より仕立とらせ申候」

**こらへせい** 堪性。忍耐する性。こらへ忍ぶ根氣。日本振袖始三「こらへせいなき無法者、女房の頬先撲りこかし」

**こらへぶくろ** 堪袋。かんにんぶくろ(堪忍袋)。大坂獨吟集「懸名も分別盛の秋更て、こらへ袋に入相のかね」。槍權三上「こらへ袋、ふつつりと緒が断れた」**こり** 垢離。神佛に祈願することある折、冷水で身心を清めること。轉じて、一般に水で身の不淨を除くこと。「垢離をかく」、「垢離を取る」などと用ひる。戀八卦柱曆中「三光天を拜むると、七十になる道順が、朝毎垢離を取る時は、

惣身の骨はこほれども」。男色大鑑八「天満川にて折離をかき、女を見し目を洗ひ流し」

こりきや 樵木屋。樵木を賣る家。その人。薪屋。懷硯「七條通り町の町人に、樵木屋甚太夫といふ男、薪の行く水につれて、熊手にして掛け上げけるが」

ごりしやう 御利生。利生の敬語。ごりやく(御利益)。神佛から受ける恩恵。釋迦如來誕生會「帝釋天の御利生、我が信心の納受有難し〜」

ごりやうにんさま 「ごれうにんさま」を見よ。

ごりん 五輪。佛語。地・水・火・風・空の五つの稱。五大。人間の身體は固より、宇宙の萬物は皆この五要素から成つてゐるといふ。傾城反魂香中「被打ち着たる五輪の影、五つの假の夢現」

ごれうにんさま 御寮人様。御寮人の敬語。貴人の息女。人の妻の敬稱にもいふ。一代男「戀の染めぎぬ、是は御りやうにん(れうにん)さまの不斷着」  
これさた 是沙汰。世間で専ら評判してゐること。誰もこの噂にのぼること。その噂。話柄。大矢數五「溜池に一つの小島出現して、けさ人だから是沙汰の

松」。一代男「門口まで善吉おくる事、前代にはためしもなし、是沙汰になりて、親方せけども」。一代女「都に是沙汰の女尋ねて」

これさま 是様。こなたさま。こなさん。出世瀧徳中「我名床しきあづま屋でこれ様の忍び寝」

これに懲りようさうい坊 (諺)「懲りよ」を強めていふ。五十年忌歌念佛中「是に懲りようさうい坊、ほんに孫子に傳へても、主の娘と念比など駿河の富士と一里塚」

これみつ 惟光。太鼓持(替間)の異名。色道大鏡「の」惟光。同太鼓持の事也。惟光は源氏の君の心しりにて、常に付したがひ奉りし心なるべし。筑紫がたにいひ馴れて、上方筋にはこれもちひず」

ころく 小六。慶長の頃、江戸赤坂に住み、美男で唄の上手であつたといふ馬追關東小六のこと。彼の所持したものは、馬の鞭・杖・扇などまで賤女どもが乞ひ受けて持てはやしたといふ(柳亭筆記)。大矢數「普請奉行小六突いたる竹の杖、尺八つくもおためづくなり」  
ころくのみや 小六の宮。前條「小六」

は氷川大明神を信ずること深く、家は富み榮えたので、折節の宮の大破に對して、四間四面の御堂を造營して奉つたといふ。小六の宮の稱はこれに據るといひ、又、小六の死後氷川大明神の宮に葬つた所から起るともいふ(柳亭筆記)。男色大鑑三「小六の宮のほとり」

ころくぶし 小六節。小六(その條を見よ)のことを唄つた歌に起るといふ。三味線二節切に合せて唄つた小唄。ころく。ひさご「移り香の羽織を首にひきまきて、小六うたひし市のかへるさ」  
ころする 「殺す」の誤用。男色大鑑三「髷ころする袖の雪」

ごろふくれん 吳羅服連。吳絹服連。吳絹服林(ころふくりん)。蘭語 Grofreen の訛。舶來の毛織物の一種。もと駱駝の毛を用ひたが、後には羊毛、綿麻を交へて織る。普通平織であるが、綾織もある。ごろ。ごろふく。一代男「羽織はごろふくれん、くろきに、縞天鷲絨の裏をつけ」

ころものたな 衣棚。京都室町通りの町名。二代男「金子五十兩と、衣の棚に家を一軒欲しいとの願ひ叶はず」。榮花唱三「京の室町通、衣の棚の若き者ども

は、見た所は柔にして強い事あり。百日曾我ニ「衣のたなや珠敷屋町、めぐりめぐりて室町の」

ころもびくに 法衣比丘尼。表面だけは法衣を纏ふ比丘尼といふ心か。俗つれづれニ「男憎みの法衣比丘尼、世はさまさまの遊興所」

ころり 駕籠昇などの貨錢に用ひる符牒。錢百文のこと。博多小女郎下「先宿迄駕籠賃幾許、石薬師迄は、道は二里有駕籠賃ころり、ころりは知らぬ、知らずは錢百、それは高い」

ごわろ 牛王。神社・佛寺から出す符印、俗にいふ守札の一種。牛王寶印、又、牛王寶命などと記す。熊野社、淺間社高野山、那智、祇園社などから出すものが著名である。牛王の文字は、生土(うぶずな)の生の一の畫が、土の字の上に附いたのを見誤つたものであると説き、或は牛玉(牛寶ともいふ、至珍なもの)の字の誤りであるともいふ。よく贅文・起請を書くのに用ひられたのは熊野牛王印である。一代男ニ「二月堂の牛王、西大寺、心を付けて遣はし侍る」。傾城反魂香中「熊野三つのお山の名を穢し、牛王の咎めも恐ろしく」

こわきざし 小脇差。小さい脇差刀。一代男七「茶小紋の着物、小脇指の仕出し」

こわつば 小童(こわらは)の轉。小供、又は勢力のないものを罵つて呼ぶ。孕常盤「何條其小童、魔法飯綱を行ふとも」

ごゐしよ 御居所。御すまひどころ。萬文反古「重九郎様御事何とももてあまし、(中略)、御居所(ごゐしよ)のごふくだな預り申候者ども、おそれながら愚札を以て所存の通り申上候」

聲ある 美聲の。よい聲をもつ。置土産ニ「天神かこい、店の聲ある女郎ならべて」

聲なうして人を呼ぶ (謔) 聲を出して呼ばないでも人々が集る。徳の有る人には、誰れもが自然と馴染んで来る。織留四「入用の時は爰に行きて是を調へければ、聲なうして人を呼びよせ、居ながら渡世の種とぞなりける」

こゑやま 聲山。大きな聲。永代藏五「彼の煙約束の如く恰氣仕出し聲山立つれば、世間懼り自ら色遊びやめて」緋縮緬卯月紅葉中「聲山立てて町へ聞え、下で済まぬ詮義になれば、如何なるおき

めにあふとか思ふ」

子を失ひし蘆邊の鶴 (謔) 「燒野のきぎす夜の鶴」などと同じく、親の子に對する眞情をいふ。槍狩劍本地四「いとし悲しと育てつる、子を失ひし蘆べの鶴」子を一人育てるに生くる潮か死ぬる瀬が七度ある。(謔) 子一人を育てる辛苦を譬へたもの。萬年草中「——とは幼いうち十七八に背丈も伸び、親に夜のみもねさせぬか」

こんがう 金剛。(一) こんがうざうり(金剛草履)の略。藁・藁などで造り普通より大形の丈夫な草履。俗つれ(一) 四



うがんこ

「惣淺黄金剛をはきて擦足にあゆみ」。(一) 俳優のお供。おくり。その履物が、いつも金剛草履であつたから起つた名稱。一代男五「樂屋歸りの御あとに忍び(中略)、けふは東山への御會と、こんがうどもひそめくを聞きて」。男色大鑑「川原の金剛にこまかねあづけておくと」

こんかき 紺掻。こんや(紺屋)。こやや。染物屋。こんかきしもへ 紺掻下部。紺色の「だ

いなし」を着た下部か。又紺屋の下部か。孕常盤三「紺かき下部高髻に」

こんげん 根元。おほもと。原因。理由。事の次第。曾我會稽山「巴御前は根元知らず、何事やらんと氣を盡し」

こんごう こんがう(金剛)のこと。一代男「兎角酒にして、こんごうの角内、九兵衛を呼出し」

昆吾溪の寶劍 昆吾は支那の夷の國の山名。その溪谷から出る鐵で作つた劍は銳利でよく玉をも斷つことが出来るといふ。「昆刀切玉」。松風村雨東帶鑑五「昆吾溪の寶劍は、人を照すこと水を照すが如しとかや」

こんこつ 喉骨(こうこつ)の訛。又、額骨の訛かともいふ。國政を執るべき大臣の相にいふ。源氏烏帽子打五「六孫王經基より(中略)、我其血脈を續ぐべき人相、尋常に變り、こんこつの生れ有り。雙の肩は八幡の八の字、兩眼の瞳には月日の光」

こんこん 盃をかはすさま。武家義理物語五「常よりは物靜に、こん／＼盃事して、梅丸に満足いたさせ」。「懇々」と、一獻二獻の「こん」とかけていふか。こんじやうばね 根性骨。こんじやう。

こころね。性根(しやうね)。大句數上「奉公人渡りくらぶる根性骨」

こんじん 金神。陰陽家で祭る方位の神。金氣の精で、萬物を枯殺することを掌るといふ。年によつてその在る方位は違ふが、その方位に當つては、その年はすべて土木を起し、出行し、婚嫁することなどを忌む。戀八卦柱曆中「今年は爰が金神に當つた。それで是方祟り」

こんずわらち 紐と乳とを布で作つたわらち。戰陣などに用ひた。武者草鞋

こんたいりやうぶ 金胎兩部。金剛界と胎藏界と。萬年草上「只今懇ろ切る上は、金胎兩部の大口も御照覽ませし」

こんだてかんぼん 駄立看板。駄立をしるした看板。萬の文反古四「ちかき比より東福寺のほとりに駄立看板といふ物を出し置き、一分から二匁まで當座食を仕出し」

こんづ 漿。濃漿。こみづ(濃水)の轉。米を煮た汁。おもゆ。美味な飲物に譬へていふ。釋迦如來誕生會「天の漿、かうがいの杯」。曾我會稽山四「天の甘露、仙家の漿、此酒に勝らんや」

こんづわらち 「こんずわらち」に同じ。こんていごま 毬陟駒。釋迦の天子であ

つた時、王宮を逃れて、境特山に入る際乗つたといふ白駒。金泥駒、乾陟駒なども記す。百合若大臣野守鏡三「佛も元は若草の、馬草刈飼ふ毬陟駒の」

こんのたいなし 紺色のたいなし。紺無地の著物。「たいなし」は下僕などの著る物。宵庚申上「御門脇の長屋より、紺のたいなし、裾七のづまで引つからげ」

こんぼん 根本。ほんもと。元祖。新發明、極上又は珍しいものを賞していふ。男色大鑑七「根本浮世楊枝とて芝居若衆の定紋をうちつけおきしに」

こんぼん こんぼう(懇望)の訛。一代男五「後には様付てよぶ、よし野はこんぼんの事」。又、前條に同じ。

こんぼんしだし 根本仕出。仕出しのほんもと。新發明・新趣向の本家。曾我會稽山三「旅人の立寄る所天下一、根本仕出しの家と、看板冷やり米室山」

こんりんさい 金輪際。佛語。大地の最下底の所。轉じて、物事の極度、どこまでも、絶對的などの意にも用ひる。釋迦如來誕生會三「道なき岨を下りては、金輪際かと過たれ」

こんわうざくら 金玉櫻。江戸澁谷八幡社内にある櫻。昔、澁谷金玉丸の植ゑ

たものと傳へられる。男色大鑑三「野末に澁谷といふ里に、金王櫻も今血氣盛なる若侍」

こんわう 金王。大和の刀匠、金王丸のこと。名は國吉、又國守・正枝ともいふ。千手院重弘の子、文治年間の人。或は正治頃の人、又嘉元頃の國吉と同人だともいふ。薩摩守忠度五「なきなたはたへまの定生、金王正枝、力王一王」

ち

さい 拳(けん)の掛けごゑ、拍子。七を意味するといふ。冥途飛脚中「拳の手品の手もたゆく、ろませ、さい、とうらい、さんな、同じ事とよ」

さい ぶんざい(分際)の略か。特にその身分に似合はぬしうちを憎んでいふ。傾城反魂香中「ア、黙つて居や構ややるな。嫁入する身に女のざいで、只のことは思はぬ」。百日曾我三「時宗やらぬのがさぬと、女子のざいにあんまりな。さうしたものではないぞや」

さい 采。範(ざい)。さいはい(采配)のこと。範を「ざい」と訓むのは、「采配」

の二字の草書を見誤つたであらうか。弓術の語「金(きん)の範」の條を見よ。大矢數五「鬼神も下馬鶴の羽音ぞ大矢數、銀の範ふる掟の夏山」。同四「大句數是にて耻ぢよ時鳥、世間の範に銀の卯花」。兩吟一日千句「一つ采(采)室の八鳥や見えぬらん、那須野の露もしまつ月にかるゝ、つゞくりて屋並繕ふ軒の月」

ざいがう 在郷。都會から離れた地方。

ざい。みなか。ざいご。

ざいがうま 在郷馬。田舎で農事に使ふ馬。驚馬を卑しんでいふ。孕常盤三「サア長きに當るが役馬ぞ、寄つて引けと出しける。いや我等は仲間はずれ、二の瀬村の在郷馬」

さいかく 才覺。オの働き。工夫。機轉。都合をつけること。くめん。算段。織留「資本持たぬ商人は、随分才覺に取リ廻しても利銀にかきあげ、皆人奉公になりぬ」。一代男二「安こそ假寝の夢ばかりと密に才覺してかすかなる亭に入れば」

さいぎやちかづき 西行被。西行法師の行脚姿のやうに笠を被ること。織留二「五十ばかりの法師、麻の衣の袖まくり

手して、竹笠を西行被きに雪打捕ひ、彼の店に立寄り」

さいきよ 裁許。裁決して許可すること。

裁判して物事を許すこと。大矢數一「玉川の蛙も隙に相手どり、浪たちさばぐ重ねて裁許」。同二「裁許二裁許まで待つが花、惣年寄の懸る松蔭」。新可笑記「夫れよりはいらぬ所へ分別出し、公事裁許口論或は夫婦いさかひの事までもあつかひにかゝり」

さいきよば 裁許場。裁許を行ふ場所。大矢數二「勝過したるきのふ六番裁許場を慈悲の心に思ひやる」

細工貧乏ひと置 (諺)細工など巧みにする者は、人だすけにはなるが、つまり自分には利を得ないこと。物事に器用な人は、他人に重寶がられるだけで、自分のためにはならぬ。大矢數四「利發があまつて庭の白露、花の木や細工貧乏人寶、夫山吹は小鏝なり」

ざいご ざいがう(在郷)の訛。二代男一「在郷(ざいご)より逢ひに寄られたる人」

ざいごろま ざいがうま(在郷馬)に同じ。丹波與作下「舌をくふか身を投げるか、似合つた様に在郷馬(ざいごろま)



さいこく 西國。さいこくじゆんれい(西國巡禮)の略。又、西國へ身をくらまし行くこと。傾城酒呑童子四「我親遊は人に知られし名ある武士。子細有つて浪人し、我五才の時西國、今の親の養子と成」

さいさい 再。しばしば。たびたび。生玉心中上「定めてさい」行先で恥をかきつらう。傾城酒呑童子二「京の御所でさい」見た御公家様達じやはにや」

さいしく 彩色(さいしき)を動詞とした語。いろどる。その形をあらはす。蟬丸五「さて五月に及んで、六根手足をさいしき、五體残らず連續す」懐胎十月の由來)。傾城反魂香中「家をさいしく繪具筆、隈筆葉筆泥引筆」

さいしやう柿 伊豫國西條から産する柿を、西條柿といふ、それと宰相とをかけていふ。吉野都女柿五「うぬは坊門のさいしやう柿、かはいや生れはよけれども、持ちなしわるさにしぶ柿に劣つたな」

さいしよかご 在所駕籠。在所の駕籠。田舎むきの駕籠。壽門松中「藤屋吾妻が

わくせきの、思ひを乗せて在所駕籠、淀の川水流れの身」

さいしよがはら 西所川原。最勝河原のこと。火葬場。傾城反魂香中「思ふ願ひが叶はずば、西所川原か舟岡へ、直に飛ばうと思ふ氣で」

さいしよちよろしゆ 在所女郎衆。女郎は乙女といふ程の意。田舎の娘達。日本振袖始三「在所女郎衆は皆美しい聲で、一に麥歌ナ二に茶摘歌、三に早苗歌、四に仕事歌」

さいそく 催促。うながし、すゝめる。油地獄下「未來は諸々の業苦を除き、本願往生疑ひはよも有るまじ。此の御さいそくに心驚き、いよゝゝ一遍の唱名も悦んでお勤めなされ」

さいたいじ 西大寺。藥の名。奈良の西大寺の坊中で賣る懸心丹のこと。一代男二「あすは國本に歸るよしの名殘とて、二月堂の牛王西大寺心を付けて遣はし侍る」

さいたう 西島。鳥原の異稱。京都西方に在るのでいふ。置土産五「西島(さいたう)の細道名残をしきはと歌へる朱雀の野邊」。榮花咄五「後家もうるさくなりて、又西島に通ひ、左門と言へる

に氣を盡し」

さいたづま 東風菜。いたどり(虎杖)の異名。又、春の若草の稱。蟬丸三「春のゆかりのさいたづま、小笹姫籠引く袖に」。雪女五枚羽子板下「萌ゆるえぐ摘む、若菜摘む、茅花杉菜にさいたづま、妻は誰が妻老いぬれば」

さいたらばたけ 白いづれでもよいこと。なりゆき次第にまかせること。聖徳太子繪傳記二「神道汚れの生首、佛道には五體不具どつちつかずのさいたらばたけ」。白小才のきく者。物の呑み込みが早く大成しないもの。轉じて、いらぬ世話を焼くもの。おせつかいもの。雪女五枚羽子板中「落つる所を猪早太、九刀ぞ刺いたら島」。白才太郎島ともいふ。大阪千日寺の火屋のある空地(島)の俗稱。新小夜風物語上「身に悪事なければ、地獄にもやられず、律義千萬まるこきのうつけなれば、是より山越えて、佐伊田羅島にやるべしと、鐵一挺渡されて、心任せの作り取り」

さいづちあたま 槌頭。槌のやうな形の頭。前額後腦のつき出た頭。雪女五枚羽子板中「辨慶が七番目の末子、七つ道具のさいづちあたま、法然上人の一の

御弟子」

さいはい 劑配。とりさばき。とりなし。座配。晝夜用心記五「榮耀なること京都の歴々も及びがたき萬の劑配なり」

さいはひぎ 幸木。正月、九州地方で庭に立てた木。下文を見よ。胸算用四「萬につけて所價はしの可笑しく、庭に幸木とて横わたしにして、鱒、海鼠、串貝、雁、鳧、雉子、或は鹽鯛、赤鯛、昆布、大口魚、鰹、午夢、大根、三ヶ目に使ふ程の料理の物、此木に釣り下げて縮を販はせ」。一説に、粥杖のたぐひ、又、門松の根に立てる木をもいふ。

さいはひびし 幸菱。紋所の名。武田家の所用。又、模様の名。一代男三「とも糸に幸菱をかすかに縫はせ」。曾我會稽山四「竹に雀は仙臺屋の陸奥殿、遣手は露の幸ひ菱」

さいめ 采目。雙六の采の面に記した點。賽の目。

さいめ さかひめ(蠟目)の約。際目。さかひ。津國女夫池二「馬草刈場の領界、さいめの棒木真ん中に」

さいめぬの 細目布。ほそめぬの。織目の細かい布。男色大鑑六「小倉の男帯に、細目布のはしつぎ」

さいめろん

際目論。境目論。田島などの境界あらそひ。兩吟一日千句「際目論あつかひはさておのづから、恥をかき出す大溝の末」。大矢敷三「ぬるみ行く水繩打つて際目論、物にかまはぬ尼蛙まで」。胸算用三「東隣へは無理いひかゝつて、さい目論も濟まぬに、遊山に出るは氣違ひの沙汰なり」

さいもくかたばら 細目帷子。ほそめかたばら。織目の細かいかたばら。二代男六「細目帷子着て、左巻の木綿帯したる男は」

さいりやう 幸領。運送荷物の取締のため附添つて行くこと。又、その人。冥途飛脚上「幸領がうちがひより(中略)、方々の爲替金高八百兩ぐわらりと取出す」

さいれん 西蓮。筑前國博多の刀工。名は國吉。伏見帝の御世の人。千載集五「筑前に、談義所のさいれん、沖の濱のひだりが打物」

ざいん 座隠。碁を打つこと。圍碁。國性爺四「市中を離れし座隠の遊び面白し」

さう 左右。たより。しらせ。消息。音信。國性爺三「川水赤く流るゝは、叶は

ぬ左右と思召し」。壽門松中「死ぬるか本復か、二つ一つの左右次第」

ざうがふ 藏合。美作國にあつたといふ財産家の名。永代藏五「美作にかくれもなき藏合に立ちつゝきて(中略)、藏合といへる家は、藏の數九つ持ちて富貴なれば、これ又國の限りぞかし」

ざうがんつば

象眼鈔。象眼の施してある鈔。夕霧阿波鳴渡上「ばつばの鮫鞘、象眼鈔」

ざうさ 造作。(→)もてなし。饗應。壽門松下「當正月には造作の上、貴殿が世話に難與平」(三)厄介。難儀。迷惑。陸摩歌中「一年でも多ければ弔はるゝ佛も徳、こつちも造作が少ない」

ざうしろもの 相州物。刀劍にいふ語。相模國鎌倉に住んだ五郎正宗の流派の刀匠が造つたもの。雪女五枚羽子板中「好き折紙の相州物の(中略)、盗みといへば氣も後れ、前後棒鞘身はふるひ」

ざうづせん 象頭山。中印度迦耶市の西方にある。山狀が象の頭に似てゐるの

でいふ。釋尊が修行し説法した所である。さうづさん。釋迦如來誕生會三「惠みは猶も彌高き、峯は木深き象頭山、麓に靈河漲つて」

さうてんちや 宗傳茶(さうてんちや)。

京の宗傳といふものが染め出したといふ茶色。融大臣ニ「その鶯茶聲あげて、人に春をやさうでん茶、風にしなへてたよ」と。「さうでんからちや」ともいふ。

さろなみ そうなみ(總並)。昔人のすること。世間なみ。習慣。風習。胸算用

四「惣じて年玉は何國にても輕い事に極まりて、(中略)女は煎じ茶を少しづつ紙に包みて輕薄らしき事、此處の總並なれば可笑しからず」

相場が悪い 模様がわるい。雲行がわるい。曾根崎心中「九平次も氣味わるく、さうばがわるいおじやいの、こゝな奴

衆は異なことで、おれらがやうに金造ふ大盡は嫌ひさうな」

さろはひきやく 相場飛脚。各商業地の相場を知らせるための飛脚であらう。

晝夜用心記三「物に心得たる京大阪の萬相場飛脚とて、此の親仁に念比にはたらき」

さかい さかひ(境)。接續詞。の故に。から。ので。二代男三「借着ちやと思はしやるか、親仁が呉れたさかひに着る」

さかいはひ 逆視。不吉なことを言ひ並べ祝ひとすること。孕常盤三「ナラ憎々しいよいお子や。惣じて祝ひは逆視ひ、

下々は目出たう祝ひ、上つ方の和子様は、悲しい事の有りたけを、揃へて祝へば頭が堅い」

さかうらみ 逆恨。恨みに思つてゐる人から反つて恨まれること。松風村雨東

帶鑑「夫を取られし我こそは、蛇(へび)とも蛇(じや)ともなるべきに、逆恨みこそ安からね」

さかおくび 逆衤。衣服の仕立方。四つ身で、衤を逆に用ひ幅をひろくするをいふ。薩摩歌中「思うた事言うた事今は

あだなるさかおくび、三寸落しにたち切つて」

さかがはらけ 嵯峨土器。山城國嵯峨から造り出す土器。

さかがみ 逆髪。逆立つたやうに生えた髪。下例は、髪が逆さに生えてゐたのでいふと傳へられる。蟬丸四「都一條大宮に、逆髪姫宮とて、蟬丸の御姉宮

在します」

さかがるこ 酒輕籠。かるこ(輕籠)に酒盃を載せて出すこと。「かるこ」の條を見よ。一代男七「口添へて酒輕籠」

さかさかは 逆川。他の川と反對の方へ流れる川。川の一部の水が逆流するをいふ。二十不孝三「親の身の子を弔ふ

は逆川に沈みて死なれぬ命のつらく」

さかさまな回向 親が子のためにする回向。老少の順に反するのでいふ。冥途

飛脚下「何卒して逆縁な回向させなと念比に頼みまする」

さかしほ 酒鹽。煮物の味をつける爲に用ひる酒の稱。鹽の代りに酒を用ひること。榮花咄「けふは餠汁して死なば

其身の仕合なり、(中略)酒鹽さして盛れといふ」。日本振袖始三「梅干を酒鹽で喰へば、痰の薬」

さかたとうじふらう 坂田藤十郎。俳優の名。正保二年に生れ、京に住み、寶

永六年十一月一日に歿した。當代の妙手、特に濡れごと、傾城買の役を善くしたので名高い。俗つれ「今程は上方に坂田藤十郎と申しまして、やつし藝の名人あれども、それは寫らぬ處もござります」。出世瀧徳下「坂田藤十郎が夕霧を、ま一度見たいと思つたが」

**さかづきながし** 盃流。盃を川水に浮べ流して興すること。ごくすみのえん(曲水宴)の稱。大矢數二「附句きこゆるすみよしの浪、延さぬぞ殊に三月三日切、大振舞の盃ながし」

**さかづきをどり** 盃踊。盃を持つて踊ることか。或は盃を廻はすことか。酒宴の座興であらう。男色大鑑ハ「江南の淺瀬に水覺船を寄せて、大臣は勿論おせさ、よいこれ盃踊、右から左へ移る間に」

**さかて** 逆手。拍手の一法。手を後方にまはして拍つもの。凶事に行ひ、呪詛に用ひるものであるといふ。古事記に天逆手(あまのさかて)を打つ話がある。取明寺殿百人上臈上「よそに見るめを、かづきする、あまもさか手を打休み、波の遊魚もとぶ鳥も通ふ方なき要害なり」

**さかとうじ** 酒藤次。酒刀自。酒をつくる男。晝夜用心記五「見事なる酒家に立寄り(中略)弓矢八幡愛宕白山を繰返しつばやくを、酒藤次見とがめ」

**さがない** 「さがなし」、「さがなき」の音便(口語)。善くない。仕方のない。壽門松中「夫の恥辱、さがない女房といは

れまい、たしなんで居れば」  
**さかなかけ** 肴掛。魚懸。干魚などを釣しかけておく鈎。又、串ざしにした魚を刺しておく菓づと。一代男六「肴懸のするめも動き、煎海鼠も踊るほどの事ぞかし」。永代藏四「毎年餅搗おそく、肴掛に鱈もなくて春を待つ」。二十不孝一「悲しや年の暮も餅搗かず(中略)、世にある人の衣配、丹後鱈の肴掛を羨み、  
**さがなさ** さがないこと。詮ないこと。意に副はず悪いこと。夕霧阿波鳴渡上

「無い事さへいふ世のさがなさ」  
**さかなまひ** 肴舞。床あげ祝ひの舞。兩吟一日千句「肴舞岩根の床を踏みならし、童子がすみか隣はどかれ」

**さかねだれ** さかねぢ(逆振)。理窟をいふべき方で、却て言ひこめられること。なじりかけられたのに、反つてなじりかへすこと。曾根崎心中「町内へ披露して、却て今の逆ねだれ、口惜しや無念やな」

**さかばしら** 逆柱。材の木理(もくめ)を逆さに用ひた柱。大矢數二「災も三年目には千年山、逆ばしら朽ち松は久しき」。織留四「この家昔から逆柱のわざといひて、夜々虹梁の崩るゝ如く、寝

耳にひびきて魂を失ひければ」  
**さかばち** 逆罰。神佛に及ばぬことを祈願して、却て罰を蒙ること。生玉心中「及ばぬ願のさかばちか」  
**さかばやし** 酒林。さかばうき(酒簀)のこと。酒屋で、杉葉を球狀に束ねて、軒先に釣し、看板とするもの。一代男七「手越といふ里に酒ばやしあり、これぞ昔千手の前の親仁の所よと語る」

**さかばりつけ** 逆磔。體を逆さにして磔にすること。武家時代の極刑。さかばつつけ。さかはたもの。  
**さかびん** 逆髻。髪のかひやう。髻(もとどり)を高く取り、鬢の毛ながが頂の方へ逆さに向つてゐること。永代藏三「逆髻にして天窓つきをかしく」。二十不孝一「美男を俄かに逆髻にして、身を見苦しうなし」。榮花咄二「逆髻の頭つきも當世風にかはり」

**さかぶ** 酒駄。置土産五「是にて朝めしを喰へといふ。無用といへど、是非にとめける程に、然らば酒駄一種といふ」  
**さがまつたけ** 嵯峨松茸。山城嵯峨の邊から産する松茸。萬文反古二「都ながら



酒林

櫻を見ず涼みにゆかず、秋の嵯峨松茸も喰はず」

さかむかひ 酒迎。坂迎。京都の人の旅から歸り、又、旅立つのを逢坂關で待ち迎へて馳走すること。又、轉じて一般に人を待ち迎へててもなすこと。五人女ニ「ようもく二人づれて下向したことぢやまで、久七やせんが酒迎に寢所をしてとらせ」

さかもどし 酒戻。借りた酒を戻すこと。又、贈られた酒のかへし(返禮)。壽門松下「めくさり金、樽代としてよこした。酒戻しはせぬ物ゆゑ、まア受取つて置いたぢや」。川中島合戦ニ「飲んだ酒を返せとは、法を知らぬ侍どの、酒戻しはせぬもの」

さかやき 月代。男子の髪を額から頂まで剃ること。一代男四「月代をすらせ、聲も男につかひなさせ」

さかゆ 酒湯。「ささゆ」に同じ。男色大鑑ニ「若殿六歳にして、もがきの山は富士の氣色かはつて酒湯の跡一面に」

さかよみ 逆讀。文章を逆さに讀むこと。物種集上「四三五六花めづらしき初櫻、いろはのさか讀み京近き山」

さがらめ 相良和布。海藻の一種。かぢめ(搦布)の異名。遠江國相良から多く産するので稱する。出世景清三「いつ青海苔もかだのりと、身のさがらめをなりのりそや」

さがり 下。物價のさがること。下落。油地獄中「價上げしたい祈には、強氣に上り高天が原の八百萬神、旗下衆のさがりを祈るは、高きお山を時の間に、麓に下る嵯峨の釋迦」

さがりをうく 下りを受く。値段の下落するとき、物品を商賣する。買込んだ物品の値がさがること。あがりを受く。の對。大矢數ニ「繪草紙も下りを請けて送狀、心中の末は年寄女房」

さがりまつ 下松。枝の垂れ下つたやうに出た松。傾城反魂香上「力も元よりさがり松、腰もかがんでむざり松」

さがる 下。後に残る。おくれる。丹波與作中「三吉より一時も跡にさがつてなるまいが、こなさんどう思うてぞ。」曾我會稽山三「若き子共を先立、跡にさがる冥途の道」

さきいき 先行。さき廻りして利益などをわがものにすること。又は水の朝日

上「正しうもない銀を取り、伴ひつきあふ己が先いきせうと思ふか」

さきおり 割織。裂織。布帛の細く裂いたのを緯に織り込んだもの。一代男四「さき織の肌馴れしを、木曾の麻衣に着替へさせ」。五人女三「身には割織を着て、藤繩の組帯して」。男色大鑑五「北國にかくれもなき男、その様をかしげに割織着て、ほくそ頭巾に山刀して」

さきかた 先肩。物を二人して早く時、その前方を早く者。その前方。あとかた(後肩)の對。源氏冷泉節中「よいおのれ先肩昇け、後肩はこの法眼」

さきぐり 人より先廻りして事をすること。さきくぐり(先潛)。

さきしやう 前生。ぜんせ(前世)。この世に生れ出ないまへの世。釋迦如來誕生會四「昨日はさきき生けふは此世、あすは來世、一日でいふ時は、今朝はさきき生今は此世ばんは來世」

さきじやう 前狀。爲替金などの前に來る通知狀。送金案内狀。冥途飛脚上「金三百兩九日に來る管、前狀がのぼつた、何とて遅い」

さきちやう 左義長。正月十五日の朝、門飾にした松などを、ドンドヤと嘩し

ながら焼くこと。書初などもこの火で焼き捨てる。もと、宮中清涼殿の庭上で、青



うやちぎさ

ひ囉す式を稱した。どんど、爆竹。物種集上「左義長の器用はたをや見せぬらん、清涼殿の板の目通利」。胸算用「柱餅とて、仕舞ひ一白を大黒柱に打ちつけ置き、正月十五日の左義長の時、これを炙りて祝ひける」

さきちゆひ 左吉結。二代男「昔の筋綴子、八端掛の八丈、大宮の左吉結の水鹿子も、今加賀絹に變れど」

さきばしり 先走。①先に立つて走ること。②その役を勤めるもの。③主君に先立つて腹を切ること。源氏冷泉節下「主君の妻に毒を盛り、その罪科を弟子に塗る法眼にてはなき物を。冥途のお

供迄もなし、先走いたさんと、突込まんとする手に取附きて」

さきばら 先腹。前條の①に同じ。おひばら(追腹)の對。武道傳來記「細川頼春の家來追腹始めて、今和朝の手下として、その譽世に高し。只我々は先腹切つて、死出の山路の案内せん」

さきゆき 先行。將來の繁榮。先へ行つてからの幸福。出世瀧徳上「身のさきゆきのする事は、今生で思ひ切つたぞ。先の事は知らねども、まづは此の世の暇乞と」

先を折る ヤリかけた事の邪魔をする。事の進行を妨げる。堀川波鼓下「エ、拍子に乗つたる先を折る。如何はせん」

さくい 作意。作らうとする心。特に詩歌などを吟詠しようとする意。大矢數三「日本國作意がはたらき花に鳴、水にすむ蛙高麗の海」

の入唐遊ばして後、信長公の御前にての物語に」

さくさう 作藏。陰莖の異稱。一代男「命にはかまひなきやうに、作藏をさられます」

さくすく 作介か。下男の名と見える。虎溪の橋「誰が浦手形落る雁金、蘆の花さく介五年極りて」

さくづし 座崩。一座の興をさますることか。榮花咄「この堺程の所に太夫の出來ざるは、そも、姉女郎のこざかしき風儀を見習ひ、今に座崩しの女郎ありとて、大笑ひして」

さくとく 作得。作徳。地主の得る小作米の稱。又、田畠の收穫から貢米を引いた後の得分。懷視四「田畠五町、作徳大分なりしも、皆濟時には横に寝て、幾度か水牢に打込まれ」

さくらがさね 櫻髷。①櫻の色目の名。表は白、裏は赤花又は菟菖菖染のもの。尙、他にいろゝの説がある。②蹴鞠の曲名。一代女三「春音靜に鞠垣に袖を纏して、櫻梨・山越などいへる美曲を遊ばしける」

さくらがひ 櫻貝。殼は白又は淡紅色、櫻色を想はせるやうな美しい貝。はな

がひ。國性爺ニ「娘の花具・櫻具」

さくらだひ 櫻鯛。櫻花の時節に、殊に多く海面近く浮び来る鯛。うきだひ。賀古教信七墓廻ニ「おろすや釣の糸櫻、釣つた姿の櫻鯛」

さくらの姿の櫻の丸。圖様の一。櫻花を輪の形に描いたもの。心中又は米の朝日上「新地平野屋敷ぐるに、櫻の丸の花の露、花の雫もなまめきて」

さくらのり 櫻海苔。西海、殊に壹岐國から産する海苔。櫻色で美味。出世景清ニ「花にまがひの櫻海苔、天をひたせば雲のりに、月を包みて刈るとはすれど、手にはとられぬ」

櫛(さく)をふる 櫛を設ける。釋迦如來誕生會上「取置の櫛をふり、鳥も通はぬ御殿の様」。ふる(振)の條参照。

酒が酒を飲む (諺) 酔がまはつてますます酒を呑む、鎌田兵衛名所盃下「鎌田も酒が酒を呑む、大酒盛りになぞなりにける」

さげがみ 酒神。酒のことをつかさどる神。國姓爺後日合戦四「松の尾は酒神にて、少名彦名は醫者の神」

さげしたち 下下地。女の髪結びひ方。大名の奥方・姫君などの結んだもの。む

さうりう。

さげじち 酒質。さかじち。置土産ニ「商賣の店つきよきは、酒質を取りて南都東大寺門前に住みて、仙人坊と異名呼ぶて隠れもなき大じん」

さげしまた 下島田。島田まげの根のさがつたも。根を低く結つた島田髷。なげしまた。

酒は憂ひの玉ははき (諺) 酒は憂ひを拂ふ具となる。津國女夫池四「酒は憂ひの玉ははき、千金春宵一こく飲み、御酒の機嫌も義輝公」

酒は情の露華 (諺) 酒は情合をなめらかにするもの。傾城酒呑童子ニ「こんな時にはとかく酒、酒は情の露華」

さげばやし さかばやし(酒林)に同じ。二代男四「上戸の目からは横川の杉も皆酒林と見ゆる」

酒盛つて尻切らるる (諺) 「酒盛つて尻踏まれ」ともいふ。恩を仇で報いられること。傾城佛原「世話に申す如く、酒盛つて尻切らるゝとは某でござる」

さげもの 提物。腰部に提げ携へるもの。巾着・印籠の類。五十年忌歌念佛中「提物差換へ取出せば、包みの小判七拾兩」

さげをだれ 庇(ひきし)のこと。織留四「我等が鼻が高いによつて、こなたのさげをだれへ構ひまして、出入に難儀をします程に」

さこか大福 「さこ」は左近で、人名か。一代男六「出口の茶屋に腰懸けながら、さこか、大福祝ふて三度、御ざりませいとのお御使誰じゃ」

さごし さはら(蘇)の小さいものをいふ。織留六「食物は朝は白粥に飛魚さごしの外は毎日改め」

さごじゆ さんごじゆ(珊瑚樹)の約。男色大鑑五「二つさご珠の色よく、ぬき鮫の大腸差」

ざこじる 雑魚汁。ざこ(雑魚)を實(み)にして作つた汁。種々の小魚を煮た汁

大矢數ニ「難波あたり持網のあと、雑魚汁をするかと見え煙立つ」

ざこね 雑魚寝。雑魚のやうに、男女が打雑つて寝ること。昔、節分の夜、京都の北郊大原村の氏神なる江文神社に近村の男女が參籠し、拜殿に通夜して暗中にかたらひを爲した俗のこと。もと、此處に大蛇が出たのを里人が恐れて一所に集り臥しかくれたのに起るといふ。大矢數ニ「契のかため雑魚寝なる

らん、皇月女ついで大はらと成にけり」。  
一代男三「まことに今宵は大原の里のざこ寝とて、庄屋の内儀、娘、又下女下人に限らず、老若のわかちもなく、神前の拜殿に所ならひとて、みだりがはしく打伏して、一夜は何事もゆるすとかや」

ざこば 雑魚場。うをいちば。魚市場。出世瀧徳上「茨木屋の大盡、鯉にはあらで雑魚場の人」

さこん 左近。女形役者の名。村山左近のこと。寛永十九年三月、京都から江戸に下り、村山座で始めて女形に扮し、大に世にもてはされたといふ。男色大鑑六「女方もむかし右近左近が時は面影のまぎらはしく、頭は置手拭にして大かたに色作りしに、諸見物もそのなりけりに請取り」

ささ 笹。さげ(酒)のこと。女詞。一代男六「起き別かるゝ風情もしとやかに、さゝもよき程に飲みなし」。同八「太夫様がたより、おのゝ襟見送りて、爰にてさゝより、程のゝと仰せける」  
さざいがら 蠐螬殻。蠐螬の貝がら。轉じて拳骨のこと。にぎりこぼし。鐵拳。戀八卦柱曆上「たぶさを取つて、さざい

がら、二三十くらはせ」。又、尻のすわらぬ者の異名。大職冠三「わごりよの處にばつかり居て、内に尻がすわらぬとて蠐螬殻の五郎介と、土地で異名が付いて有」

さざいのともし 蠐螬の燈。蠐螬殻に油を入れた燈火。鑛山で用ひたもの。辨慶京土産カ「開く山にほがらかに出入人も光そふ、さざいのともし影あかく」

ささえ 小筒。竹筒。小提。小竹筒。竹筒に漆を塗つたもの。酒を入れるに用ひる器。



え さ さ

又竹筒の食器。新小夜嵐物語上「鼠糸の長柄を見せかけ、小提開かせて呑出し」。源氏冷泉節上「彼奴に小竹筒の食事と與へ、力一杯逃げさせ」

ささきげんさう 佐々木源藏。名は季義。高綱の父。もと義朝に仕へ、義朝の歿後、苦節を守つて敢て平家に服せず、即ち、二君に仕へないといふので稱される。背庚申上「佐々木源藏は二君に仕へず、襤褸の肩を裾に結び、頼朝の御代を待ちしは心の錦」  
ささく さく(裂)の轉か。荒れる。皮膚

などごそ〜となる。武道傳來記五「美しき御形の青ざめて、胸痛ませ、口中さゝけて、夜をねさせ給はねば」  
ささげ倉 挽久一世物語上「一間ある納戸の神にも燈明進じて、よく清めて置けといふ。こゝは何の爲と申せば、知らずや女郎衆のさゝげ食の齒固めをなさるゝ所と申す」

ささごと 酒事。さかもり。冥途飛脚中「お客待つ間の酒事(さごと)」

ささじん じんた(糶汰)の異名。(ぬかみそ(糠味噌)のこと。(糠に麴と鹽とを混ぜてならしたるもの。酢又は酒で食ふもの。)

ささぢん 酒蘆。前條(に)同じ。男色大鑑「賤の家の糠味噌までも酒蘆と言葉をあらため、物毎やさしくよきを見做ひ」

ささど 笹戸。笹竹で作つた戸。又、笹の生ひ繁つた門。男色大鑑「亂れ姿にてさひ繁つた門。男色大鑑」

さざぬけ さあ〜と雨が屋根からぬけて漏ること。置土産四「取葺屋根のさゝぬけするを、此四年も葺きかへる事なりかぬる人の色道は分別の外ぞかし」



**ささぶき** 笹葺。笹の葉で屋根を葺くこと。その屋根。その家。一代男二「人の住みあらしたる笹葺をつゞりて」。同五

「笹葺の假湯殿」

**ささぶね** 笹舟。笹の葉で作った舟。小兒のもてあそびとするもの。井筒業

平河内通二「熊笹ちぎり、船こしらへて、淋しさ流す笹船の」。同三  
こぶね。天下馬四「笹舟に棹さして内助といふ獵師、妻子も持たず只ひとり世を暮らしける」

**ささぶろ** 笹風呂。風呂屋の名であらう。大矢數三「郭公開いたかきかぬか按摩執、笹風呂をしてさそひ顔也、見るに欲礙(さは)るに煩惱よいの口」。同四

「笹風呂に入てはかへるぬれ(の?)夜、よう御ざつたはお仕着の時宜」

**ささへぐち** 支口。中に立つて人を悪しざまにいふこと。中傷。緋縮編卯月紅葉上「陰言・中言・さへぐち、起つてはふすべ、ゐては誹り」

**ささめ** ささめごと(私語)に同じ。ささめ。曾我五人兄弟五「夜半のささめにたきしめし、とめ木の蕪りうすくとも」  
**ささやじま** 笹屋縞。しま織物の一種。一代男一「しのべ竹の人よけに、笹屋島

の帷子、女の隠し道具をかけ捨てながら」

**ささゆ** 酒湯。小兒の痲瘡が癒えた後で酒を加へて浴せしめる湯。又、それに浴せしめること。さかゆ。新小夜嵐物語上「露もまだ干ぬに横といふ娘の子、痲瘡輕う仕舞うて、四五日跡に酒湯(ささゆ)かけまして、顔美しく」

**さざれこなみ** 細小波。さざなみ(小波)に同じ。

**さざれすな** 細砂。こまかい砂。まさご。  
**さざれに** 細荷か。小荷物の意か。雨吟一日千句「恥のふくろや布引の瀧、さざれ荷や生田の里を過ぎぬらん」

**ささゑ** ささゑ(小筒)に同じ。傾城反魂香上「嫁菜のひたしに豆腐の煮染、ささゑでも致しまして」

**さざんざ** 慶長の頃流行したといふ小唄。さざんざぶし。一代男三「壁一重あちらにも酒飲みかけ、六七人聲して、三國一ぢや、拍子があふのあはぬのと

同じことのみ歌ひける程に、亭主に様子きけば、此頃上方よりさざんざと申す小歌がはやり來り、爰元の若い衆いろいろ稽古致せども、聲がそろはぬと申侍る」

**さざんざ** 陽氣に歌ひさわぐこと。薩摩歌中「お墓の花も枯れ次第、持佛の香も消え次第、さざんざ所ぢやござんすまい」。源氏冷泉節上「峯の吹雪も御酒宴の、さざんざ調ふる計なり」

**さし** 差。さしむかひ(差向)の略。堀川波鼓上「お袋様とさして是には如何なり、あの御座敷へ參らん」

**さじ** 匙。調劑に用ひるところから轉じて、劑をいふ。西鶴五百韻「月の都供もつれずに出でしかど、劑(さじ)がきいては乗物にのる」

**さしあひ** 差合。(さしつかへ。さはり。故障。一代男二「さし合ある時は、慇懃に仕かけ」。武道傳來記八「彼の女姥さまといひて差合をいはせざりし」。同連歌俳諧で禁じてある用語・用字。さり(去)きらひ(嫌)などを用いふ。大句數序「花の座月雪の積れば一千六百韻、見渡せば柳にから碓、櫻に横槌を取ませ、即興のうちにしし合もあり」。同女の月經。

**さしあひどうじ** 差合同字。前條(の)差合同字と。同字とは、連句に同じ字面のかきなることを忌むこと。織留三「作者も俳道のわかまへあつて、すこし

さ

の差合同字、見おとしの吟味をとげて、  
たがひの修行になしぬ」

**さしあひみ** 差合見。連句を興行する  
とき、その差合を吟味すること。又、そ  
の役。大矢数序「一日四千句の矢数俳諧  
を吟ず、當地宗匠親疎ともに連なり、  
内五人の差合見、八人の筆とり」

**さしあへ** 差替。差しかへること。又、  
その物。殊に刀にいふ。緋縮緬卯月紅  
葉申「用意し置きしさがへに、夫の白  
き帷子緋縮緬に結びさげ」

**さしかまふ** 差構。故障をいふ。異議を  
申し立てる。曾我會稽山三「願ふ所と有  
難く、畏つてお受申す所、榛谷の四郎  
差構ひ、曾我に縁者の此お使心もとな  
しと押さへ諍ひ」

**さしがみ** 差紙。名を指して呼び出す紙。  
官よりの召喚状。丹波與作申「是の小ま  
んに付て代官所のお差紙(中略)と云ひ  
渡す」

**さしきこじき** 座敷乞食。連歌師、俳諧師  
を卑しめていふ語。  
**さしきなり** 座敷形。ざなり。その場合  
だけをつくらふこと。

**さしきのう** 座敷能。座敷で演ずる能。  
舞臺で演ずるものに對していふ。二十

不孝二笛、鼓、太鼓を列べて、朝暮座  
敷能を、善入、太夫をし給へば」

**さしきや** 座敷屋。かしせき(貸席)を業  
とする者か。料理屋の類と見える。俗  
つれん、三「萬は南江の座敷屋、砂の加  
兵衛承り、臺所舟に四五十人前の膳組、  
髭籠もりの刺身一つで出すと見えて」

**さしきやうきゆう** 座敷楊弓。座敷で行  
ふ楊弓。普通の矢場で行ふものよりも  
小形のもの。織留留「座敷楊弓の見物、  
又は治部少輔亂の長話、病人もなき所  
の茶を呑みあらしぬ」とは、はやらぬ  
醫者の話。

**さしきらう** 座敷牢。座敷を閉ぢきつて  
牢のやうにしたところ。座敷のうちに  
設けた牢。壽門松申「日かげも見せぬ堅  
敷牢」

**さしくる** 差繰。馬の手綱などゆるめる。  
**さしぐれ** 差粉。粉は樽(くれ)か。木材  
など差込み、つくらふことであらう。  
胸算用三「吾羅葺の屋根も損ねぬ中に  
差粉したり、柱も朽ちぬ時より石で根  
繼ぎをして」

**さしこみ** 差込。さしがね。干涉。入れ  
智慧。重井筒申「皆おか様のさしこみ  
と、思ふも地體こちの無理」。又、飛脚

の幸便に托して、書狀を送ることをも  
いふ。

**さしさば** 刺鯖。鯖を背から切り開いて、  
鹽漬にしたもの。二枚を重ねて一刺と  
する。大矢数序「涼み床に枕を傾け、さ  
し鯖賣るころより、はや元日の發句を  
おもひよる人。永代藏三「盆のさし鯖、  
正月の鏡餅」

**さしさを** 差竿。小鳥をさすに用ひる竿。  
武道傳來記六「野末の茅花摘み捨て、差  
竿手毎に持たせ」

**さしすて** 指捨。宴席で酒盃を人にさし  
たまふにしておくこと。返盃を受けぬ  
こと。  
**さしすてをぶね** 棹捨小舟。漕ぎ捨てお  
く小舟。二代男二「桂川にさし捨小舟、  
清瀧に白玉を砕き」

**さじだうにん** 左慈道人。支那三國時代  
の人、奇術を善くしたといふ。織留留三  
「左慈道人我朝の果心居士、これらが技  
術の法は亂のもとぬ」

**さしぢ** 差乳。乳をあたる姥。又、乳  
房にいふこと。小さくて、嬰兒に含ま  
せるとよく乳のさし込んで来る乳袋。  
さしぢぢ。松風村雨東帶鑑二「氏位よし  
氣質よし。此人をとて内よりも、それ

とさしぢの乳袋も、はるや錦の鞞に「さしづ 指圖。(一)繪圖。圖面。一代男五

「硯引きよせ、家の差圖を書いて居る。いひつけ。命令。轉じて、評判。取沙汰。織留ニ「今七千貫目持と世間のさしづに違ひなし」

さしつぎ 差次。差繼。すぐ次ぎ。次位。武家義理物語ニ「さしつぎの弟本部喜介と申せしは。懐硯ニ差繼の弟甚介兄に代りて」

さしつたり おゝ合點。心得た。よし來た。松風村雨東帶鑑ニ「すりちがひにしつかと抱く。さしつたりとむんずと組み」。大職冠ニ「入鹿が眞中指通さんとする處を、さしつたりと引つばづし」

さしづめ 差詰。まのあたり。さしあたり。當座。傾城反魂香下「供の又平日柄傘、差し詰め花車は女房なり」

さじとり 匙執。匙を手に執つて藥など盛ること。調劑。その人。源氏冷泉節下「毒藥の匙執りは、此の春甫」

さしとりひきつめ 差取引詰。多くの矢をつづけさまに早く弓につがへるさま。さしつめひきつめ。さしとりひきつめ 差取引取。前條に同じ。鎌田兵衛名所盃上「寄手の源平色め

く所を爲朝えたりかしこしと、さし取引取雨の如く」

さしなは 繕繩。さし。ぜにさし(錢差)さしになひ 差撥。前後二人で物を荷ふこと。相荷。俗つれつゝ「酒樽一つ相荷にし」

さしば 鷹の一種。全身茶褐色で、胸腹部に白色の横條がある。鷹狩に用ひる。百日曾我ニ「御鷹は、つみ・ゑつさい・さしば・しやう」

指羽さす 指羽(さしば)を使って小鳥を捕へしめることか。男色大鑑ニ「ひよ鳥のおもしろきに、指羽などさせてお目にかげんとする時」

さしひき 差引。差引くこと。總勘定。差引した殘金。胸算用四「正月五日より互に取り遣りの差引する事例年なり」。同ニ「この島中に一錢も差引なしの男」

さしほらす 大刀を誇らしげに指す。「ほらす」は「惚る」の轉で、もと、しまりなく指すさまを言つたもの。傾城酒吞童子ニ「坂田の公時、例の大太刀前下り

兩替屋もあり」

に指ほらし、のつさゝと歩み來る」

さしまくら 指枕。はこまくら(箱枕)に同じ。二代男ニ「數々の心付、中にも木地のさし枕一個渡して、此の箱は道すがら、ものゝ寂しき寢覺にあけ給(中略)彼のさし枕心に懸ければ(中略)、菜刀を搜して釘目を開けて見るに、引出し二つ。男色大鑑八「脇指ぬきてさし枕に拇指をあてゝ音もせず押切り」

さしものはた 指物旗。戰陣の目じるしとして持つた。さしもの。織留六「正成が一戦のさし物旗に、非理法權天、この五字を書きしるして」

さしわたし 差向ひといふ類か。二人相對したきり。一代男ニ「更け行くまでさしわたし、かしらから、物毎しらけて語りぬ」

さしわたす 胸算用四「一人の男は、さしわたして弟を連れて、この度四條の役者に近付ありて、これを頼みにして藝子に出して」

さす (動詞)さしつかへる。さはる(障)薩摩歌中「いや事介はちとお寺にさすこと有る、かゝさまの今藏にござる間に早う出たい」

さすが 腰刀の小さいもの。又、懐劍の

さ

一種。最明寺殿百人上臈上「紫檀のさす  
が矢立の筆百八の菩提樹ならで、御身  
に添ふる物はなし」

さすてひくて 差手引手。舞の手。手を  
前に出すこと、引くこと。轉じて、「何  
かにつけて」、「事毎につけて」などの  
意。薩摩歌中「そなたの母御は十四年  
忌、一年でも多ければ弔はるゝ佛も徳、  
此方も造作は少いと、差手引手に算用  
なり」。油地獄中「父親が違ひし故、母  
の心がひがんで、悪性根入るといはれ  
まいと、さす手引手に病の種」

さすまた 刺股。罪人を捕へる武器。喉  
頭を押さへつけるに用ひる。長さ七尺  
五寸の木の柄の頭に、鐵製の股になつ  
たものを附ける。その股の形から琴柱  
棒（ことちぼう）ともいふ。出世景清  
「つく棒・さすまた・鐵の棒、兵具つし  
と並べしは、さながら修羅の獄卒が、  
八逆五逆の罪人を、苛責にかくる如く  
なり」

させいほう 牛を追ふ聲。狂言には、「さ  
せいほうせい」と出てゐる。日本振袖  
始三「牛の角文字急げば急ぐさせいほ  
う」

さぜんごま 坐禪獨樂。獨樂のよく廻つ

て登んでゐるところを稱した語。松風  
村雨東帶鑑四「しやんと据わつて音立  
てず、搖ぎもせぬは釋教の、觀念獨樂  
や坐禪獨樂」

さぜんまめ 坐禪豆。黒大豆を甘く煮に  
しめたもの。僧侶が坐禪の時、小用を  
少くする爲めに食したのに起るとい  
ふ。

さそく 早速。早足。臨機の處置。機轉。  
頓才。武道傳來記二「自休早足利かし  
て、其手を取つて」。懷硯二「夫婦手を  
拍つて、女の早速には扱も〜と、我  
が子ながら頼もしく」

さたろぞめ 砂糖染。永代藏四「近年砂糖  
染の仕出し、重い智恵者の京なれば、  
大方の事にて利を得る事思ひも寄らず  
と」。砂糖は當時珍重されたものである  
から、これを染料とした染物は、又非  
常に珍しかつたのである。

さだうばらうず 茶堂坊主。茶道坊主。茶  
道を司る坊主。茶坊主。さだう。武道  
傳來記二「茶道坊主に申付けられし時」

さだつ やうす。模様。特に紛擾の有様  
をいふ。卯月の潤色中「二度三度とは往  
かねども、家のさだつも見取つた」。  
傾城酒吞童子三「おゆら様とのもやも

やが此耳へは入らぬか。内のさだつが  
面白いか」

さだむね 貞宗。相摸國鎌倉の刀匠。も  
と近江國野洲の人。五郎正宗が諸國を  
周遊した時、師弟の契を結んで鎌倉に  
移住し、その養子となつたといふ。元  
應建武或は永仁貞和年間の人と傳へら  
れる。尙、同名の刀匠が越中・肥前・大  
隅・薩摩などにもあつた。武道傳來記三  
「貞宗の刀、孫六の大脇指」

さつしよ 百合若大臣野守鏡四「はしり  
の隅のげぢ〜鳴き、犬の長啼き、お  
ぢいの長欠伸、釜の鳴るこゑ薪のさつ  
しよ、豆腐のぐつ煮豆がらのばら〜  
迄、五音はおるかかぎ嗅いでも、一分  
一點ちがひなし」

ざつしよ 雜書。相性とか、開運とか、  
その他いろいろの俗説を記した書物。  
三世相命鑑・萬年曆などの類。一代男七  
「戀はざつしよの通り、はじめよし、後  
わるし、金性の男ありける」。二十不孝  
三「爰に住馴れて晒葛屋の彦六といへ  
る人あり、家榮えて何事に不足もなし。  
雜書の通娘の子ばかり五人、何れも生  
れつきて美しみ、女に仕合の種なり」

さつぱりだて 物事をきれいきつぱり

と、處置するやうに見せかけること。  
曾我會稽山「人に心を許させんとさ  
つぱり立受けとらぬ」

ざつぷ ざつと、ざんぶなどいふ類の寫  
聲語。百日曾我「矢よりも早く飛び來  
り、腰のつがひを横懸けに、ざつぷと  
懸けてぞ落しける」

さつまふし 薩摩節。淨瑠璃節の一種。  
寛永の頃、薩摩淨雲の創めたもの。淨  
雲節。

さどしまでんばち 佐渡島傳八。俳優の  
名。おどけ役者として名を得たもの。  
出世瀧徳上「色は眞黒に、横肥つたる菊  
石類、道頓堀の佐渡島傳八、はつとし  
らけて立退けば」

さどことば 里言葉。(一)遊里即ち廓(さ  
と)で用ひる言葉。田舎出の遊女の國  
なまりを隠すために、特に使はせた遊  
里の詞。(二)田舎言葉。

さとしり 里知。遊里の事に通じた者。  
吉野忠信「此の里知りの名取川、世を  
あだ波に濡るゝにや」

さとすずめ 里雀。廓雀。遊里に通ひ慣  
れた者。下例は忠兵衛と雀の啼聲とを  
かけて叙したるもの。冥途飛脚上「駕籠の  
鳥なる梅川に、焦れて通ふ廓雀、忠兵

衛はとほくと」  
さぬきのとんど 讃岐の天狗。讃岐に流  
され給うた崇徳院が、天狗になられた  
と傳へられた。榮花咄「此女郎は讃岐  
の天狗が抓みたるやうにも風聞、京の  
太郎坊が掴みしやうにも沙汰せしが」

さぬきゑんざ 讃岐圓座。讃岐から産す  
る圓座。さぬきわらざ。二十不孝五一金  
比羅の祭にあまたの見物、讃岐圓座の  
所狭きなく」

さねかづら 五味子。木蘭科、南五味子  
屬の常綠木本。蔓莖の粘液をば糊料又  
は髪油用とする。一代男「髪はさねか  
づらの零に梳きなし」。蟬丸「我が黒  
髪はさねかづら、逢阪山にぞ着き給ふ」

佐野のくくだち くくだち(莖)は、菜の  
莖(たう)である。最明寺殿百人上臈下  
「熊谷村に盃の、佐野の莖着にて、強ひ  
とぐめん」と詠みおきし、古歌を吟じて」  
とは、「篠原や佐野のくくだち着にて、  
旅行く人を強ひとぐめばや(夫木集)  
に據つたもの。

さはい 差配。とりあつかひ。周旋。處  
置。ふるまひ。置土産。「見事なきはい  
しすごし、是も智恵すぎてやむるには  
あらず」。松風村雨東帶鑑三「弟御様の

御差配で、今の間は我れらと夫婦」。同  
「エ、業平様も小差出た。どうぞ差配の  
仕様もあらう」

ざはい 座配。(前條の轉か)。あしらひ。  
とりもち。席上での態度。禮容。身のこ  
なし。一代男「歌の三味線の、只やか  
ましくなつて取じめなく、おのづから  
かうした座配いそがし」。同六「取入て  
はよき事おほき人にして、座配にぎや  
かに、床しめやかに」

さばき 捌。(一)物事を始末すること。身  
じまひすること。二代男「二歳過ぎ  
て、各々さばきの身となれば、着類の  
他は手もとめとなつて」。理非曲直を  
裁斷すること。「さばく」の條參照。

さばきがみ 捌髪。解き散らした髪。ば  
らばらがみ。大下馬三「さばき髪をまん  
中にて、金紙に引きむすび、この美し  
きこと何ともたとへがたし」

さばきて 捌人。(一)理非をさばく人。(二)  
心のひらけた人。賀古敦信七墓廻三「身  
代よしの粹大盡、心のくれたさばきて  
の、やりてにたんと物くれるよい客さ  
まを千人程」

さばく 捌。(一)物事を處置し、整理する。  
一代男「同じおも屋の、内さばく人と

申しかはして。(白)振舞ふ。一代男三「日  
來の大臣、よろしくさばき置かるゝと  
見えて」。源氏冷泉節上「卓怙は捌くま  
い物と、思ひつめても便りなく」。(白)理  
非を裁判する。

さはち さはち(血鉢)の略。皿の形を  
した大 ききな鉢。曾我會稽山三「梶原が睨  
み付た眼はさはち皿打落し、豆の粉は  
いに砂まぶれ」  
さはのじようばうし 澤之丞帽子。元祿  
の俳優萩野  
澤之丞の始  
めた帽子。  
左右の端に  
おもりをつ  
けて垂れるやうにしたもの。おもりづ  
きん。さがりばうし。



澤之丞帽子

さはむらちやうじふらう 澤村長十郎。  
京都宮川町の生れ。寶永正徳の頃、や  
つし役者として名をあげた。女腹切中

「あれは澤村長十郎、あつたら男を、  
やがて大阪へ下り舟」

さばよみ 鯖讀。順序を偽つて物を數へ  
ること。計算をごまかして利を貪るこ  
と。男色大鑑五「外へは年をかくし、節  
分の大豆も鯖讀にして、くらがりにて

内證は濟ませども」  
ざばらひ 座拂。芝居の座の拂ひ。觀劇  
料。永代藏三「世間見なんだ銀が入手に  
まはりて、九軒の二日拂ひの用にも立  
ち、道頓堀の座拂ひのたよりともなる」

さはり三百 (諺)一寸觸れたばかりの者  
に三百文の損がかゝる。一言を挿んで  
も迷惑を蒙る。喧嘩、物言ひなどに關  
していふ。大矢數三「晝はなほ夜の明る  
をもかまはねば、すいて喧嘩はさはり  
三百」。胸算用「これぞ世にいふさは  
り三百なるべし」

さはりましよ 酒宴の詞。盃にさはり、  
酒をつぐことにいふ。おさへませう。  
「おさへの盃」の條を見よ。榮花咄三「江  
戸の勝山が押へますと言ひはじめて吞  
む由、其の後京の三夕がさはりましよ  
と言ひけるは、更に又しほらし」

さはるに煩惱 (諺)見るに目慾ともい  
ふ。接觸すれば煩惱の慾が起るをいふ。  
晝夜用心記四「二十あまりの色女、此男  
の膝にわざとならず、所せき燒きしめ  
たる句も、うつるばかり寄り添ふを、  
身を縮めてゆるつるばかり寄り添ふを、  
女もうれしげにもたれよるに、随分か  
たい男、さはるに煩惱とはなれり」

さびあゆ 金精鮎。荒鮎。秋になつて、  
鮎が産卵の爲に川を下る時は、體色が  
錆びたやうになるのでいふ。落鮎。く  
だり鮎。大矢數五「金精鮎や松浦五郎が  
九寸五分」。大磯虎稚物語五「相摸川の  
さび鮎捕つて一獻酌まん」

さぶ候。さぶらふの約。出世景清三「き  
やつが有様たゞものならず、何ものさ  
ふとがめける」  
さぶくち 雜口。筋のない物言ひ。そし  
りごと。悪口。國性爺三「腰が抜けて司  
矢の義を忘れしと、雜口人の雜口にか  
けられんは必定」

さぶながもち 雜長持。雜多なものを入  
れおく長持。兩吟「日千句」逢ふ夜半は  
おかかなうては叶ふまじ、雜長持にい  
るゝたなばた。萬文反古三「雜長持に  
は、しいしきぬばりなどの入物なるに」

さぶらひ (士) はたがひなり 士は互な  
り。「武士は相見互」の諺に同じ。武  
道傳來記五「士さぶらひ」はたがひな  
り、我々も彼者ゆゑにこそ流浪いたせ、  
何をか包まん」

さへにん 支人。仲裁人。生玉心中上「さ  
へ人踏んだ堪忍せぬと、相手がどれや  
らめつた撲ち」

さへにん 支人。仲裁人。生玉心中上「さ  
へ人踏んだ堪忍せぬと、相手がどれや  
らめつた撲ち」

さほうのうちは 作法(さほう)の乳母。作法を教へる乳母。特に嬖方にまであづかる乳母であらう。織留六「乳のあるにまかせて二子の取捌きもうひくしく、口次の噂に身まかせて、お子五つまでの作法の乳母には出れども」

さま様。(代名詞)第二人称の敬語。又、第三人稱にもいふ。あなた。あのかた。又は氷の朝日上「是はとゝの手焼の鐵鏡煎餅、さまに進せて下さりませ」

さまくぐり 狭間潛。城壁のさま(狭間)をくぐり出る意から轉じて、逃亡者の稱。亡命客。

さます 醒。すます(濟)。通れる。百日曾我「おいやるなく、此場をさまし重ねて曾我がゆかりとて、一人の手柄にせんとたくみ」

さまた 又股。小股。(こまた)。また。浦島年代記四「熊のさまたへ片足かけ、どうと引きふせ、乗つかゝれば」。次條の略。

さまたがへし 小股返。相撲の手の名。こまたに手を當てて、轉倒せしめる法。座摩の御旅。大阪上町石町にある座摩太神宮の御旅所。廿二社詣の最後の番。座摩太神宮は生井神外二神を祭り、六

月廿二日と九月廿二日と、兩度に祭禮が行はれる。六月のは御祓の祭で、西堀河で祓をする。氏子中から、練物、山車を出して賑かである。緋縮緬卯月紅葉上「座摩の御旅に廿二社、拜み納むる袖神樂」

座摩の大明神 大阪船場渡邊にある座摩の社。二十二社の八番。前條参照。緋縮緬卯月紅葉上「人の祈りはさまくぐり大明神や其次は、仁徳帝の宮所」座摩の練物 座摩太神宮の祭禮の練物。練物は行列して練り歩くもの、ねりしゆ(練衆)。前々條参照。一代女五「提灯賑かに見えて跡の淋しき女、釋迦がしらの久米、座摩のねり物」

さみす 褊。蔑。あなどる。輕蔑する。釋迦如來誕生會四「我が正法をさみし釋迦を尊むくせ者」。吉野都女楠三「其方をかたりなどゝさみせられんは男の耻」

さむらひどうじ 侍同事。さむらひ(武士)と同じ資格といふ意か。懸八卦柱階上「此大經師は禁中のお役人、侍同事の町人」

さむらひみやうが 侍冥加。さぶらひみやうが。侍として神佛から受ける加護。

轉じて、武士としての運。侍冥利。武道傳來記四「いやましに憂目をかきぬること、是程侍冥加にも盡きぬるものか、よしく是迄と」

さむらひみやうり 侍冥利。さぶらひみやうり。前條と同じ。天網鳥上「最前は武士冥利、今は粉屋の孫右衛門、商ひ冥利」

さめ 鮫。さめかは(鮫皮)の略。鮫の皮を乾したもので、刀のつかや鞘に用ひるもの。多くは輸入され、種類も多かつた。永代藏六「惣じて店付のよしあし鮫、書物、香具、絹布かやうの花車商では、かざりの手廣きがよし」。織留四「商賈見世も二條通りに、鮫、木藥、書物屋ありと」

さめざや 鮫鞘。鮫の皮を巻いて造つた刀の鞘。武家義理用語六「鮫鞘の中脇指、常住反りかへして目にかどを入れ」。さもさぶづ さ(然)もさう(候)ず。しか候ふぞ。その通りであらう。出世景清「おゝ、さもさぶづさもあらん」

さもじ 左文字。吉野朝の頃、正宗の弟子、博多の鍛冶左衛門三郎の鍛へた刀の稱。左の文字を銘してある。傾城反魂香中「コレは重代の左文字、二千五

百貫の折紙あり」  
ざもちぢよらう 座持女郎。座敷持の女郎か。共同の座敷でなく、獨占の座敷を持つてゐる女郎の義、即ち「へやもち」といふ類か。置土産二「昔を語れば申さぬ事か鳥原の座持女郎、土佐といへる流なり」

ざもと 座本。座元。芝居、その他興行もの頭。その座の持主。胸算用三「今日はその座本、明日はこの太夫本、其次は誰が座に大阪の若衆方が出るなど沙汰して」

ざや 紗綾。あやに似た統(ぬめ)地の絹織物。稻妻、菱垣などいろ／＼の模様を浮織にする。  
ざやあて 鞘當。刀の鞘に觸れたのを咎め立て、いさかふこと。瑣細の事からの喧嘩。物種集上「鞘當や源平互に急度見て」。武道傳來記八「眼に角を入れて往來に鞘あてをして噪ぎ來る、これかや春の物ぐるひと、人皆怖れをなして」

さやくち 鞘口。刀の鞘の口もと。こひぐち。雪女五枚羽子板中「上は立派なさやく口に、へらを使うて別れける」とは、「さや」を「さやかな」きれいな意にかけて叙したものの。

さやし 鞘師。刀の鞘を作ることと職としてゐる人。本朝三國誌五「鞘師の曾呂利」  
さやとがめ 鞘告。さやあて(鞘當)に同じ。永代藏五「鞘告、武勇達、年中我がまゝをふるまひける」。俗つれ／＼「義理づめ、意趣の外は鞘告なかりき」

さやもちだて 鞘持立。助勢しようとする風を示すこと。加勢の様子。娥歌加留多三「一座の諸武士虫肩々々、兩方へ立ちわかつて、すはや喧嘩のさや持ちだて、因唾を呑んでひそめく所に」

さよがうし 小夜格子。一種の格子。豎が竹で、横が木になつてゐるもの。重井筒中「月は早、渡り初めて中橋や、六軒町の小夜格子」

さよがらす 小夜鳥。夜の鳥。曾根崎心中「梅田堤の小夜鳥、明日は我が身を餌食ぞや」

さよぶとん 小夜蒲團。夜の蒲團。よぎの美稱。重井筒中「顔をならべて見るやうで、抱き付けば小夜蒲團、涙に濡れてひやくと」

さよまくら 小夜枕。夜する枕の美稱。源氏十二段長生鳥臺三「情さかりの面影を獨り寝がちの小夜まくら」

さらさかぶろ 更紗禿。更紗模様の衣裳を着たかぶろ。更紗はよく禿の仕着せとした。冥途飛脚中「袈衣深きは見世女郎、さらさ禿を知るべして、橋が架けたや佐渡屋町」

さらしつき 晒搦。布を搦きさらし、白けること。その人。薩摩歌中「晒搦の女子男ども」

さらしもの 晒者。さらしの刑に處せられた者。首や尻をさらされたもの。  
さらじよたい 新世帯。新たに持つた世帯。永代藏五「久米の更山さら世帯より、年月次第に長者となり」

さらばの鳥 別れ時を告げる鳥、鶉とか鳥とかをいふのであらう。一代男三「夜のあくるまで、山水の絶えず飲みかはして、さらばの鳥に別れて、日數程ふり」

さらへ さらひ(竹把)の訛。土塊などをかきならすに使ふ具。頭に齒があつて長い柄をつけたもの。五人女二「里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ」

さらゆる 凌。さらふるの訛。國姓爺後日合戦三「引つ捕らへ引つ捕らへ、悪黨の根をさらゆるまで」

さららやま 佐良良山。大阪郊外甲可村



にある。油地獄上「佐良々山に一ツ橋渡して救ふ御願力」

さりきらひ 去嫌。(→)連句の法則。前句に用ひたのと同じ物、又、類似の語を後句に用ひるのを忌むこと。去は、或物を讀込むに掟の句數だけ隔てねばならぬこと。嫌は去に似てやゝ軽いさま。 (→)すききらひ。えりごのみ。釋迦如來誕生會「所も時節も何のその、去り嫌ひが入るものか」

さる 猿。(→)小弓に髪を毛を弦に張り、それに「くくりさる」を滑らせること。一代男「過ぎにし秋、白らが黒髪をぬかせられ、猿などして遊びし夜は」。 (→)風呂屋にゐる淫賣婦。湯女。あかかき。ふるやもの。一代女五「一夜を銀六匁にて呼子鳥、是れ傳受女なり。覺束なくて尋ねけるに、風呂屋ものを猿といふなるべし」

さるかはうつば 猿皮鞆。猿の毛皮を鞆の穂につけたもの。猿が種もんだ顔 胸中の不快をおさへてゐる、はつきりとしな顔つきに譬へる。あてとすりなどを聞かぬふりしてゐるさま。榮花咄五「内儀の當言言ふも聞か猿の種もんだる様な顔つきし

て」。世間娘容氣一「驕が當言ふもきかざるのひももんだ顔して、無念ながらうごゝとして」

猿が佛を笑ふ (諺) 小智で大智を量ることの不可能な譬。猿が帝釋天を嘲るともいふ。頼朝濟出三「本多くつゝ」と笑ひ、それは猿が佛を笑ふとやらん」

さるぐつわ 猿轡。人の口に物をはませて頭で締め、聲を立てさせぬやうにすること。その物。大矢數三「志賀の浦それ人買よゝゝ、麓に山王猿轡あり」

さるしばり 猿縛。猿を縛るやうに四肢を一所にくゝりしばること。

さるしはる 猿芝居。猿に衣裳を着せて演ぜしめる芝居。吉野都女楠三「或は花見の開帳の、又は傾國猿芝居、人立多き所に」

さるぜ 舶來の毛織物。ホルトガル語 *Shawl* の訛。博多小女郎上「金に飽かした衣裳つき。各々さるぜ、羅紗、すためん、(中略)、下著上著も渡り物」

さるたち 猿太刀。織留三「山中にてむら猿、舞を望みて後、太刀を一ふり褒美に出しける。これ猿太刀とて幸若の家に傳へり」

さると 猿戸。粗末な門の一種。丸太を

柱とし、扉は横板を棧及び框にとりつけ、竹で押しぶちしたものを用ひる。男色大鑑三「露路の猿戸を錠おろして」

さるのこしかけ 猿腰掛。胡孫眼。菌類の一種。枯木又は老木の樹皮に生じ、半圓形の傘のみを有する。病氣の妙藥になるといふ。松風村雨束帶鑑「頬も眉間も搔破り、猿縛りに絡げつけ、猿の腰懸にしてくれん」

さるのすずひろ 猿末廣。前條に同じ。蟬丸四「姿は銀杏の葉の形にて、偕も合點ゆかぬ物、是は猿の末廣か、否々天狗の筭ならぬ」

猿のつら笑ひ (諺) 自分の缺點に氣づかず、他人の缺點を笑ふ。猿は我が顔の赤いのを知らないで他の猿を笑ふといふゝ意から用ひる。日本振袖始三「ヤアこれゝ誤りなしとは猿の頬笑ひ身の上知らず」

さるぼほ 猿頬。貝の一種。殻は赤貝に似て小さく固く厚い。國性爺「憎やそもじの猿頬に、喰はせたいぞやさい貝」

猿松の風車 玩具の名。猿松とは猿狩で多辯なものを罵る語であるといふ。又小兒の異名であらうともいふ。猿松笛

といふものもあつた。永代藏六「童子すかしの猿松の風車をするなど」

さるまめ 猿のやうにまめくしいこと。

さるわか 猿若。中村勘三郎の創めた猿若狂言。又、その猿若のまねをして歩く乞食。後には唯一人で滑稽な狂言を演じて人を笑はせるものをいふ。

さわがし 騒。いそがしい。せはしい。二十不孝「世を渡る業として竹箒の細工さわがしく」

さわきうた 騒歌。江戸で吉原通ひなどする當世男の歌つた小唄。懷硯五「通町の中橋邊の某、噪ぎ歌に四五人、頭を振つての手拍子、何れか當世男ならざるはなし」。二代男六「櫻町と唄ひしは、三野通ひの騒ぎ唄なり」

さわきびと 噪人。騒人。遊蕩の客。遊里や芝居などで遊ぶ人。男色大鑑五「此法師等限ある都遊び、萬の物入を構はず、今の世の噪人の氣の毒とぞなれる」

さをだち 棹立。馬などの後足だけで棹のやうに立つこと。棹立ち。

さをなくるま 梭(をさ)を投げる間といふ義。極めて早く時の過ぎるにいふ。忙しい間。ときの間(ま)。百合若大臣

野守鏡三「さをなくるまの世の業も、子故の闇と哀れなれ」

さん 三。三味線の第三の絃。大矢數三「筋を諫め過して二筋に、三がきれては引くにひかれぬ」

さん 讚。畫に題する文辭。轉じて、人品を批評し、身分など判定する言葉。二代男「出口の茶屋に腰懸けながら、朝歸りの客に、讚附くるに、一人も違はず」。更に轉じて非難、なんくせ。宵庚申下「死ぬるは二人が兼ねての覺悟、發親にさんもつかず、在所の親の遺恨もなく」

さんえ 三衣。僧の著る大衣・七條・五條の袈裟の總稱。轉じて僧侶のこと。吉野都女楠三「三衣に似合はぬ麥盜人、子細を申せとねめつくる」

さんおき 算置。算木をおくこと。うらなひ。易者。大矢數「水性木しやう櫻散る山、算置が春の心はいか計」。一代男四「世界見通しの算置が申せしは」

さんがい 三界。或地名に添へて、その地の遠隔した心持を示す語。丹波與作上「山も見えざるかりそめに江戸三がいへ往かんして」。「からさんがい」の條参照。

さんがいがさ 三蓋笠。紋所の名。笠の三層になつた形を側面から描いたもの。

さんがいぐら 三階藏。三階建ての藏。永代藏三「一に依二階造り、三階藏を見わたせば、都に大黒屋といへる分限者有りける」

さんがいぼう 三界坊。この世をさまよひありく者。流浪者。流浪人。津國女夫池「我は是より三界坊、やい海上、ともに發心。お供などて」

さんがいびし 三蓋菱。紋所の名。菱形の三層に重なつたのを側面から見た形。

さんがいまつ 三蓋松。枝の三層に重なつた松。又、それに象どつた紋所。傾城反魂香上「天津少女のかたくま枝や、腰掛枝の三がい松、月にさはらぬ枝々の」

さんがいむあん 三界無庵。無庵は無安の轉用。この世に定住の庵がないといふこと。武家義理物語「僧にあらざ、俗にあらざ、三界無庵同前にて、六十三になりける我」

さんかう 三考。漢方醫の診斷にいふ語。源氏冷泉節上「流石の法眼手も戦ひ、浮中沈の三考も、心肝腎も命門も、右に

在るやら左やら」

さんがつ 三筒津。京都、江戸、大阪の三都の稱。殊に京の鳥原、江戸の吉原大阪の新町を指す。二代男「目前の喜見城とは、吉原・鳥原・新町、此の三ヶの津にまたす女色のあるべきや」。胸算用三「京・江戸・大阪三ヶの津への年神は、中にも徳の備はりしを選び出し」

さんがふどし 三合年。大歳(木星)と大陰(月)と害氣とが合ふ年の稱。この年は凶災があるといふ。にんげんさんがふ(人間三合)の條参照。

さんかん 算勘。算盤の勘定。算術。そろばんの才。出世瀧徳上「手代並になされしが、さすが育ちが恥かしい。算用算勘存ぜねば、何を奉公御恩を送らう様はない」

さんきう 三九。拳(けん)の掛聲。冥途飛脚中「拳の手の手もたゆく(中略)、はま、さんきう、ごう、りう、むする」

さんまら 山歸來。百合科の攀縁植物。莖の長さ七八尺、幅一寸ばかり。葉腋から花軸を出し、二三十筒の紫黄色の細花を簇生する。もと支那から渡來したもので、地下莖を薬用とする。大矢數「紅葉亂れて六はい機嫌、山歸來何

さ

かは苦しかるべきと」。一代女五「昔の悪病山歸來などにして隠し置きしが」さんぎり 散切。髪を一束ぎりにして、結ばぬこと。なでつけ。さうがみ。一代男「いつとなくさん切になでつけ」。武道傳來記三「自休と名をかへ、散切にして身を隠し」

さんきん 三筋。みすぢ。三味線の稱。二代男八「玉琴に須賀垣をのせ、三筋に投節」

さんぎん 三吟。連句を三人で吟ずること。(獨吟、兩吟などに對していふ)

さんぐ 三具。佛具、みつぐそく(三具足)のこと。花瓶・燭臺・香爐の一揃をいふ。二十不孝「念佛講の貸盛物、三具に破鉢を添へて一夜を十二文」

さんくづし 算崩。算本を崩し亂したやうに、三筋づつ縦横に石畳みにした模様。二代男三「算崩しの袖縞に黒い半襟をかけ」。同五「算崩しに入るこさんくわい 參會。會合の仲間に入ること。又、よりあひ。集會。源氏冷泉節上「一門の參會にも、彼奴等と膝を組まん事」。百日曾我三「幼少よりひかげの身、武士の參會も絶え、百姓土民に打ちまじり」

さんくわう 三光。三光鳥の略。燕雀類の一種。體は雀の大きいので、嘴は尖つて赤く、頭と腹とが白く、背は淡紫色で翅は淡藍色。鳴く聲が、月・星・日と轉るのに似てゐるといふので名づける。二代男三「鶯の子を三光に附くと、鳥その聲を囀るぞかし」

さんくわうてん 三光天。日天、月天、星天の稱。三光。戀八卦柱曆中「願かけぬ神もなく、祈らずといふ佛もなく、三光天を拜むとて」

三月五日 奉公人の出替り日。織留五「世の定めとて三月五日九月五日、猫は仕きせなしの奉公の身」

さんぐくいち 三國一。日本・支那・天竺での第一。祝言の時の囃として舞や嫁を褒めて歌ふ詞。萬文反古四「是非祝言させて、三國一を歌うて仕舞ひ申候て」

三五の十八 物のあはぬこと。三五の十五の定めとて三月五日九月五日、猫は仕きせなしの奉公の身」

三五の二十五 前條と同じ類の語。二代

男三「今の男は三五の二十五、追附けあはぬ算用」

さんさ 俗語の嘲し聲。男色大鑑七「上方ははや唄うて仕舞ひぬる、春の山道はさんさなど、今になりてから強いて」。

松風村雨束帶鑑四「賤の山人打連れて、さんさ露にしほる、眞柴探る」

さんさがり 三下。三味線の調子。本調子より三の絃の調子を下げてひくもの

室町千疊敷三「三味線(中略)、心は二上り三下り、撥もしどろに弾きなせり」

さんさき 三崎。(地名) 江戸、谷中の内。所謂岡場所の一。一代男二「品川の

連飛、白山、さん崎の、得しれぬもの」

さんざぶし 散散節。さんざしがれ(散散時雨)に同じ。「さんざ時雨か、葎野

の雨か、音もせで来てぬれかかる」などの類。仙臺地方から流行した小唄

(上の唄は伊達正宗の作であると傳へられる)。男色大鑑四「過ぎにしやさん

ざぶしを誦はせてたはむれし事も、手に手をとりかはし、湯の水になるまでなげくを」

さんざめかす ざわくくと騒しくさせ

る。さわがしく聲を立てる。ざざめかす。孕常盤五「三千餘騎を相具して、ざ

んざめかいて何公する」

ざざめく ざわくとする。ざざめく。薩摩歌上「花かいらぎと散る花と、ざん

ざめいたる掃庭の」

さんざらめく 前條に同じ。松風村雨束帶鑑四「松の響きか、ざんざ、ざんざ

らめけば」

さんしきひだりなは 三色左繩。三いろの布で、左よりになつた繩。だて姿の

帯などにする。一代女二「黒きそぎ襟を掛けて、帯は三色左繩後結びにして、

金作りの木脇差」

さんじつこく 三十石。三十石船の略。三十石積の船。一代男五「あたら夜もすがら新三十石に乗合ひの心地するなり」

さんじてん 三時殿。春夏秋の三季それぞれの最も景色の佳い所を選んで立てた宮殿。釋尊の少時、父王がその出家

を思ひ止らせようとして建てたもの。釋迦如来誕生會一「提婆は一先づ本國

に立歸れと、三時殿に入り給ふ」

山市の晴嵐 支那瀟湘八景の一。山市とは山間に在る市街。二代男二「山市の晴嵐、西湖の萬景」

三十三の相 良馬の具備する相好である

といふ。大磯虎稚物語五「先づ御馬はあけ七歳、やき八分に立ち仰びて、三十三の相現はれ青龍白虎の四つすね、驅くらば千里も速しとせす」

さんじろくりん 三十六鱗。鯉の異名。鯉には脇腹に一條三十六枚の鱗があるのでいふ。六六鱗。六六魚。雙生隅田

川三「黄金の鱈、金の三十六鱗々」

さんじやうこう 山上講。大和國山上が嶽、即ち大峰(北は金峰山に連なる)參

りをする講。春秋二季に行はれ、修驗道では之を峰入といふ。行者講。油地

獄上「おんあぶら屋仲間の上講、俗體ながら數度のお山」

さんじやうまゐり 山上參詣。前條に同じ。油地獄上「こちのどろめは山上參り

の行者講のと」

さんじやくてぬぐひ 三尺手拭。長さ三尺ほどの手拭。出世瀧徳上「駕籠の衆の仲間から三尺手拭、抱帯とて進ヒす」

さんじやくばう 三尺坊。遠江國秋葉山の僧。天狗になつたといふ。一代女三

「米の相場、三尺坊の天狗咄し」

さんしゆのさんぎ 三種の三祇。三種の神器をいふ。吉野郡女楠五「新田義貞楠

正行、三種の三祇御迎に來り給ひしが

さんじよ 産所。産する所。産屋。男色  
大鑑七「今夜の産所へ見舞ひ給はずや」  
さんしよごんげん 三所権現。紀州熊野  
の本宮、新宮、那智の三権現をいふ。傾  
城反魂香中「南無日本第一大靈驗、三所  
権現と伏し拜み」

さんじん 散人。官に仕へない人、世事  
を外にする人の自稱。閑散な人。槍權  
三下「此度我等お暇下され、世の散人と  
なりたれども」

さんす (動詞)爲さる。敬語助動詞「さ  
す」の轉か。曾根崎心中「大阪を堰か  
れさんしても」。長町女腹切中「恐い事  
などさんせぬか」

さんする 山水。さびしい、閑静なさま  
をいふ。色道大鏡の六「山水。物のさび  
たる事に言ふ。少ぶんなる事にもいふ。  
山水を繪がきたるは、さびしき體なれ  
ばかくいへるか」。曾我扇八景中「さん  
するな住み處と曠き合ふを」

さんするををとこ 山水男。物さびしげな  
男。みすばらしい男。傾城反魂香上「身  
こそ墨繪の山水男、紙表具の體なりと  
も、朽ちて朽ちせぬ金沙子、極彩色に  
劣らじと」

さんずんなは 三寸繩。罪人を縛る繩の

法。雪女五枚羽子板下「直に此繩戴け  
と三寸繩に括りあげ」  
三寸の見直し (諺)大工のいふことで、  
物の長さも見直せば三寸の差がある。  
よく見ると缺點があるものといふ譬。

大下馬「顔も三寸の見直し、なかくぼ  
なる女房、手足逞しき、大工の上手に  
て世を渡り」。織留五「物に三寸の見直  
しとはいへど、大抵に四寸程幅の廣き  
足なれば」

三寸組を見抜く (諺)眼力の鋭きこと。  
胸算用三「猫さへ目三寸組板を見抜き、  
着懸ごとりとしても聲を出して守りけ  
る」

さんせう 三小。馬を品する詞。耳と鼻  
丸と陰莖との三つが小さいのをいふ。  
槍權三上「飼ひに飼うたる月毛の駒、  
(中略)雪噛みくたく白泡に、さんせう  
よしや尾は背柳の」

さんせき 三夕。遊女の名。一代男「其  
頭名高き中にも、かづらぎ、かほる、  
三夕思ひくゝに身請して、嵯峨に引込  
み」

さんぜさう 三世相。過去・現在・未來の  
因果善惡・吉凶などを説くこと。佛説・  
五行説・卜筮の法などを交へ、その人の

生年月日、人相などに據つて三世の因  
果を相すること。生玉心中「さる人に  
三世相見てもらひしに、前生で佛前の  
茶湯の茶碗打割りし報いあり、慎めと  
の物語」

さんぜさうめいかん 三世相命鑑。前條  
「三世相」について、人の因果・運命など  
を分るやうにした書物。永代藏三「癸の  
辰の年、辰の日の辰の刻に因果てられ  
しといへば、これも不思議の宏才ある  
人ありて、三世相命鑑を繰りけるに」

さんぜめいかん 三世命鑑。前條の略。  
最明寺殿百人上臈上「大江僧正廣辨が  
三世命鑑を考へ、九郎判官義經の生變  
りと申されしに」

さんせん 散錢。神佛に上げる錢。賽錢。  
胸算用五「面々に散錢取返して下向し  
て給はれ」

さんぞきつね 三足狐。はくさうす(白  
藏主)の條を見よ。

さんた 三太。犬などの前足をあげて立  
つこと。「犬にさんたせよ」といへ  
ば、前足をあげとびつく事あり(中  
略)手をくれといふが、此の餘波とも  
いはんか。三太はでつち又小僧などい  
ふ下童の通稱なれば、かのでつちの狂

さ

ひまはるまなびをせよと云ふ事なるべし(足翁翁記)。一代男六「おもての見世に出、犬にさんたさせて遊ばるゝこそ少しは憎し」。俳諧江戸廣小路「犬ざくら花にさんたの役もなし」

さんだはら 小口俵。棧俵。俵の兩端の蓋として用ひる藁製の圓く平たいもの。永代藏「小口俵のすたるをひろひ集めて錢ざしをなはせて」

さんだん 讚談。佛徳などを讚する話。法談。説教。談義。胸算用五「毎年節分の夜は、定まつて平太郎殿の事讚談せらるゝなり」。同「只三人に聞かせまして讚談するも益なし」

さんだんまわり 讚談參詣。讚談を聞きにまゐること。胸算用五「今宵は道場に平太郎殿の讚談參詣群集すべし」

さんちゆうみん 三重韻(さんちゆうみん)書名。韻字を集めた作詩用のもの。萬文反古三「是には一作と胸に三重韻を繰りかへすうち」

さんちや 散茶。散茶女郎に同じ。二代男二「面白きは初買なり。これがならずば、それゝゝに爰にもさん茶といふは、ふらぬと申す心なり」。置土産四「ならぬ時はならぬやうに、散茶も暫くの慰

み

さんちやぢやらう 散茶女郎。江戸吉原の遊女の一。梅茶女郎の一等上級に位するもの。「寛文五年、岡より來りし遊女(風呂屋者)は、未だはりもなく、客をふるなどいふ事はなし。されば意氣張りもなくふらずといふ意にて散茶女郎といひけり。それは吉原の遊女共が時の戯れに散茶女郎といひしが、云ひ止まらずして今(享保)に散茶といひもて來りしなり」(洞房語闕)。

さんちやづくり 散茶作。吉原遊女屋の造り方。元祿以後改作したもので、風呂屋作りを用ひ、局見世を廣くかまへ大格子を付け、庭も廣く取つたもの。

さんちゆう 三重。淨瑠璃の節。三段に句ぎりして、て・てんといふ如く、結末を附けたもの。出世景清「尾張の國を立出て奈良のみやこへ 三上らるる」

さんちよ 三女。妻女を離別すべき事由の三つを稱したのであらう。支那にいふ「七去」の何れか三つを指したものと見える。松風村雨東帶鑑四「總じて嫉妬深きは三女の一つ、娶ること勿れといふ本文あり」

さんづ 三頭。馬の髻の上部、百會(背の後方の高いところ)の後にあたる。最明寺殿百人上臈上「太刀を抜いて水底を切拂ひ、三頭にどうと乗りさがり」。三途。三圓。

さんづはちなん 三途八難。佛語。佛の道に入るのに障りとなるもの。地獄。餓鬼。畜生の三途と、それに、長壽天。薨軍越。盲癩瘡。世智辨聰。生在佛前佛後を加へた八難との稱。俗つれ、三途八難の苦は女人を根本と、南山大師の法語なり

さんてうこかぢ 三條小鍛冶。京都三條の刀匠。姓は橋、名は宗近、信濃大掾を拜した。康保長元間の人。或は永延ごろの人といふ。薩摩守忠度五「山城に三條小鍛冶宗近、權五郎景政が名をばあげはの蝶丸や」。吉野都女楠三「三條小鍛冶が劍にも、なう貧苦の敵は防がれず」

さんど 三度。三度飛脚の略。冥途飛脚上「來月二日出の三度に、金子三百兩差しのぼせ申すべく候」。同「そちが商賣は三度でないか」

さんどがさ 三度笠。顔を深く隠すやうに作つた菅笠。三度飛脚がよく用ひた

ので名づける。我衣「貞享の頃より、三度笠とて、飛脚馬上にて睡り、落馬しても鼻をうたぬやうに深くしたる菅笠、旅人かむる者多し。享保の末より道中笠に定る。冥途飛脚上「商ひ功者駄荷積り、江戸へも上下三度笠」



さがどんさ

三度の数が合ふ 諺に二度あることは三度あるといふが、丁度その三度目になつたの意。壽門松下「お助けはかたじけない。三度の数が合いました」

さんどひきやく 三度飛脚。江戸大阪間を毎月三度往復せしめた飛脚。元和元年、大阪城番の侍と、東海道各宿驛の長と協議の上定めたのに起るといふ。碁盤太平記「我等は鎌倉の三度飛脚、大星山良之介様の内衆岡平殿とは此方か」

三度まで三 御圍を引いて、三度まで三が出たといふ意。三は第三の凶の圍である。観世音百籤に「第三凶。愁惱損忠良（忠節なしても用たず）、青霄一炷香（大空に線香一つ炷した様）、雖然防し小過（少し防ぐもとがなる）、閑慮學時長（二三年も時節を待て）」など

ある。

さんどめ 棧留。聖多駄。西印度國にある地名。國性爺「じやが太郎兵衛、さんどめ八郎」(聖多駄から渡來した縞織物、さんどめじまの略。たうざんさんどらに) によろ サンゴスタラコニス(龍血の意の訛といふ。熱帯地方の樹の脂から製した血止薬。麒麟血。大職冠「さんどらに) によろ 萬能膏と、かうやくの名をいへば」

さんな 拳のかけ聲。「さん」は三、「な」は感動詞。冥途飛脚中「拳の手の手もたゆく、ろませ、さい、とうらい、さんな、同じ事とよ」

さんねつ 三熱。佛語。龍蛇の受ける三つの苦熱。一は熱風熱砂の骨肉を焼くこと、二は悪風荒んで居所衣飾を失ふこと、三は金翅鳥が娛樂の場に入り來つて龍の子を食ふこと。轉じて龍以外の者の苦境にもいふ。大矢數三「煤はき悪乞修羅の戦ひ、三熱の鍋をぬくべき習ひ也」。大職冠三「玉を奪つて龍奇の、五衰三熱をまぬかれん」と  
さんねんだけ 三年竹。三年經つた竹。竹は三年目に切るのがよいとせられる。  
三のづ 馬にいふさんづ(三頭)の轉用

か。脊椎骨を下から數へて三つ目のあたり。油地獄下「道も知つたる曾根崎へ、たつた一飛び一走りとも、尻三のづまで引つからば、揉みにもうでぞ」  
三の間の水 宇治橋の第三の間(左岸から數へて)で汲む水。茶道に貴ばれる。一代男七「久次郎が宇治から、唯今歸りましたと申す、水こしの詮義あり、さては三の間の水を汲みにやられしと、一入うれしく」

さんばうくわろじん 三寶荒神。(龍の神。もと印度で、悪人を治罰する如來。亂。忿怒の三荒神を現する神の稱。佛法、僧の三寶を守るといふ忿怒を現はす三面六臂の神。二枚繪草紙中「是は夢か現か、三寶荒神の御利生か」)馬の脊の左右にわくを結んで、子供二人を乗せ、中央に大人を乗せること。もと伊勢道中にいふ(但言集覽)。三人乘りに用ひる火燧の櫓のやうに作つたもの。二代男三「參宮人も立騒ぎ、丸飴賣の軒場に、三方荒神引掛け、そりやあたるわ退いてと、與作丹波が馬方の言葉つきも」。五人女三「相坂山より大津馬を借りて、三寶荒神に男女一つに乗るを、脇から見ではをかしけれど」

**さんばうちんぎ** 三方論議。三人の者が互に負けじと論争すること。百日曾我一「三方論議の意地づくは、あやうくもはれがまししく」。傾城酒呑童子一「三方論議の眞中へ、坂田の公時、例の大太刀前下りに指しほらし」

**さんばさ** さんばそう(三番叟)の約。源氏烏帽子折三「さし舞はう日出度やと、三番さの烏帽子を着し」

**さんばそう** 三番叟。猿樂の翁の曲に出る老人。黒面をかぶつて舞ふもの。出世瀧徳上「常住酒で足ひよろつき、三番叟も高砂も、皆狸々の亂れかと思ひ」。又、芝居の序幕の前に行ふ舞。

**さんばち** 三八。遊女の一階級。京都鳥原で、その揚代の三十八匁であつたものにいふ。色道大鏡一「大夫と天神との間の職なり。此の名目當時(延寶)は斷絶す。五三、三八、天神、鬨とて、皆一日の遊料の數をたとへて名とせり」。一代男三「内證きけば三八と申し侍る」。

**さんばんたいこ** 三番太鼓。時を知らせる最後の太鼓。これを合圖として廊の門を閉じたものである。寛永末までは亥の上刻、寶永頃は丑の刻(午前二時)ごろであつたらうといふ。「四つ門」の

條參照。二代男三「隙な男は晝から来て三番太鼓の過ぎまでゐれば」。出世瀧徳上「三番太鼓つてんでん、天下は夜なな八つ過ぎ、鼓は戀の晝中や」

**さんびやくりやうをどり** 三百兩踊。三百兩のもので懸けてある踊といふ意か。椀久一世物語下「習ひ置きし三百兩踊をと申せば、皆々所望と申す。椀久無用の腕まくり、あづま請出すを二三度踊りて」

**さんべいじまん** 三平二満。おたふく。額と鼻と腮とが平かで、兩頬が膨れてゐる義。傾城反魂香上「五十餘りの厚化粧、三平二満の口紅、しなだれ懸る命釋顔」。さんべいじまにん。

**さんぼうくわうじん** さんばうくわうじん(三寶荒神)を見よ。

**さんほんうちば** 三本團扇。紋所の名。三本の團扇を、柄を中心にして三方に向ふやうに描いたもの。

**さんほんからかさ** 三本傘。紋所の名。三本の唐笠を、柄を中心にして三方に向ふやうに描いたもの。曾我會稽山四「ぬれた印の三本傘、雪折竹は奥州様」

**さんほんごへい** 三本御幣。三本の御幣を取りつけて指物としたもの。

**さんまい** 三枚。三枚肩(さんまいがた)の略。

**ざんまい** 佛語「三昧」の轉。心のまよ。氣の向き次第。吉野都女楠五「供なりと昇きなりと、己がざんまい皆来い」。

**ざんまい** 三昧。三昧堂の略。即ち、茶毘所。葬地。武道傳來記八「最前の焼香の遺恨に心をなし、三昧はなれて福智山の入口にて求馬を討つて」

**さんまいあはせ** 三枚袷。表と裏との間に、更に一枚入れて仕立てた袷であるといふ。二代男八「三枚袷きるほどになくては、おくぶかには見えず」

**さんまいがた** 三枚肩。駕籠に昇夫(かきて)の三人附くもの。さんまい。二代男三「疊より直ちに三枚肩に乗り移れば」

**さんまいぐさり** 三枚鎖。三枚鎖、即ち三枚兜の鎖のことか。忠臣身替物語一「墨染の衣を着し、三枚ぐさりの兜の緒を締め」

**さんまやかい** 三摩耶戒。佛語。眞言宗の特殊の戒法。大職冠二「金剛不壞の左右の小手、三摩耶戒の脇當」

**さんみやく** 三脈。三所の脈搏を検して、その人の吉凶を判ずる占法。三脈術。



即ち、右の手の拇指と中指とで下顎を横に押へ、指頭で左右の頸動脈を検し、更に左手で右手の脈を押へ見て、その三脈同時に搏つ時はその日は無事、不整な時は凶事の兆とするのだといふ。聖徳太子繪傳記「是が老醫の機轉の療治、右の手の三脈が三下り、二下りにびん〜したる見立なり」

さんめんだいこく 三面大黒。顔が三つある大黒。永代藏三「随分かしこき人の貧なるに、愚なる人の富貴、この有無の二つは三面の大黒殿のまゝにもならず」

さんもち饅頭 物種集上「八島のうらはさんもち饅頭、二口屋能登の守とぞ名乗りける」

さんもんめとり 三匁取。遊女の下級なもの。その揚代三匁であるのでいふ。一代女ニ「三匁取はさのみ賤しからず、客揚れば、ゆたかに内に入れ」

さんもん糸 三文繪。値段がやすく粗末な繪。つまらぬ繪。傾城反魂香上「察する所、店に張つたる三文繪を、生物と見違へしか」

さんや 三谷。江戸の遊女町。今の淺草區の内。吉原。三野。二代男四「三野歸

りの酒樓の男ども」。永代藏五「三野色道を教へ大分の金銀をつかはせける」

さんよう 算用。計算。勘定。目算。一代男六「やり手が慾ばかりの算用もきかず、いやしき物は手にもたず」

さんようあひ 算用合。勘定。會計。天網鳥下「最前の金で、そなたの算用合ひも仕まひ」

さんようだて 算用立。算用を殊更にすること。勘定を念に入れてすること。出世瀧徳下「前髪もある私が親程な山城屋、算用だても申しにくし。母妙慶を遣りまして」

さんようなし 算用無。向ふ見ず。無目算。俗つれ〜「飛上りの彌吉、算用なしの藤介」

算用の大じん 經濟の上手な大盡。始末のよい大じん。但し下例は、その反語に用ひたもの。萬文反古四「算用の大じん出申候、あはぬ物とは知りながら、又當年も二千兩まで請合ひ、新芝居取立て」

さんり 三里。灸點の語。膝頭の下の外側で少し凹んだところ。一代男五「もぐさを取出し、三里にすゑて貌をしかむ

る」。源氏冷泉節中「裾をからげて行く足、灸も道も三里半、飛ぶが如くに歸りけり」

さんろが笛 「用明天皇職人鑑」に於ける花人親王が、亂を避けて筑紫に下り、山路と名をかへ牛飼となり、笛を吹き草を刈る境涯となつて、長者の娘玉世姫との戀を遂げるといふ故事をいふ。戀を誓むよすが。五十年忌歌念佛上「柏木の鞠、さんろが笛、古今その品變れども、皆これ戀路の寄せがまち」

さんろの道行 「用明天皇職人鑑」にある「さんろ玉世の姫道行」をいふ。前條参照。二枚繪草紙上「なんと鳥様、今日のさんろの道行は、本で語ると直に聞くとは又各別」

し

じ 字。賭けごとを用ひる錢のこと。紅白の紙に包んで楊弓や雙六などにかけるおあし。松風村雨束帶鑑四「さてもさても美しい。こんな錢はついに見ぬ(中略)これは楊弓雙六の勝負にかくるおあしならんとありければ、司の前聞き

さし

し

給ひ、いや〜字にて候はず。又、錢一箇の稱。もん(文)。冥途飛脚上「如何様とも仕送つて、一錢一字損かけまじ」

しあげ 仕上。仕事の終り。轉じて、後の事、法事にいふ。俗つれ〜「これ不孝の第一と諫めて、七日のしあげ過ぎて、涙の海を是非なく歸る浪の」

しあはせ 仕合。次第。始末。運。一代男二「すぐならぬ戀より此の仕合、かたれと申す」。二代男四「是非に及ばぬ仕合」

しあはせびやうし 仕合拍子。拍子よく幸運に際會すること。壽門松下「手拍子口拍子、仕合拍子の三々九度」

しあひ 時合。よい頃合。又は氷の朔日中「仕直しに遣つたらば、多分晩のじあひにならふ」

しいし 簀。布を洗張し、又は染める時、その兩縁にさしてばねのやうにし、しわを伸ばすに用ひる竹の串。しんし。簇。一代男一「絹ばりしいしを放して、戀の染めぎぬ是は、御寮人様の不斷着」。萬文反古三「雜長持にはしいしきぬばりなどの入物なるに」

しいる 仕入。仕込む。しつける。教へこむ。教育する。胸算用一「長崎水衛門

が仕入れたる鼠使の藤兵衛」。薩摩歌中「小狗仕入れて鼠捕らせ」。又、商品などを買ひ込む。

しいれ 仕入。しいれること。仕込み。天下馬四「物は仕入れによつて何事も、近年關東のかたに友よび雁といふ物をこしらへ」

しろきくの柳 蹴鞠(けまり)の遊戯場に植ゑた柳。武道傳來記三「一家中に蹴鞠の柳なびかせ」

しろうぎの石 祝儀即ち結婚式のある家に投げ入れる石。「石打」「石祝」ともいつて若者がその家に對する祝ひとして打固める意から行つた習俗。萬年草中「二階の酒のしゆんだ比、祝儀の石を打込んで、騒ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし」

しらく 秀句。かけ言葉を利用した文句。しやれ文句。大句數上「是からは將菜をやめて秀句つめ」。一代男一「口びるそつて中高なる顔にて、秀句よくいへる女あり」

じうしやむこ じゆうしやむこ(従者舞)自分が選んで連れて來る舞。我が氣にかなつた舞。戀八卦柱曆上「このさんが従者舞、よい男猫添はそゝえ、ヲ、かわいやと猫なごゑ」

し

しうちやく 祝著。よろこぶこと。満足に思ふこと。大職冠五「さま〜のさ〜げもの祝著せり」

しうとめざり 姑去。姑のために妻を離別すること。姑の意見で嫁を去ること。宵庚申下「半兵衛が母が、嫁を憎んで姑去りにしたと沙汰あつては」。同「姑去りに殺したと、悪名つけて世の人の」

しおき 仕置。①しおくこと。作法。永代藏「親方にははらず鍋蓋火打箱の仕置、これより外はしらず」。②處罰。刑。大矢數三「石川か爰に住みなす峯の月、仕置の大釜下紅葉たく」。③とりしまり。規則。警戒。一代男三「御仕置かたく、定めての遊女といふ事もなく

て」

しおきしや 仕置者。しおきを行ふ役人。刑の執行に任ずる者。武道傳來記五「藏人これを腹立して、仕置者にさし尚ひ、此所に醫師の住宅御法度ならば横川周益も追立て給へと」

しおきばなし 仕置咄。「しおき」①に關する話、きまり、常習などについての話。一代男二「所の仕置咄し、錢は一步に何程賣るぞ、あらまし申付けて」

しか 鹿。遊女の一階級。かこひ(圍)、

又、鹿子位、鹿懸のこと。置土産五「吉原の揚屋町鹿ばかりの寄り所」

しが 缺點。貧弱なさま。不足なところ。置土産四「其の客のしがを見出し、裏懸のある肌着、龍門の羽織に木綿入るからは、何とも合點がゆきませぬ」

しかけ 仕掛。①たくみおくこと。人をいつける手段。ごまかし。堀川波鼓申「且那樣のお聞きなされたら、高い物を買ったと叱られうかと思つて、錢はしかけでやりました」②しぐみ。やり方。作法。きまり。架花咄四「何國もこの里の仕掛替る事なし」

しかけごと 仕掛事。しかけたこと。たくらみごと。

しかけもの 仕掛者。人をたばかるためのたくみごと。そのたくみをする者。

永代藏五「借錢の宿にも様々の仕掛者あり。油断する事なかれ」。織留六「同じ姿にて各別の仕掛けものあり」

しかげやまぶし 仕懸山伏。にせ山伏。騙り山伏。胸算用一「今時は仕懸山伏とて、さまざま護摩の壇にからくりいたし」

しかたはなし 仕方咄。いろ／＼の手まね身振をしながら語る話。物種集上「仕

方ばなしをするをとこ山、苺若盆有こし物を取てのけ」

しかのまきふて 鹿の巻筆。①鹿の毛でこしらへた筆。奈良の名物。出世瀧徳下「硯引きよせ墨をすり、鹿の巻筆を懸鹿」②小唄の文句。一代男五「昔は爰も遊女ありて、淡路に通ふ鹿の巻筆を歌ひしが、それも夢なれや」。二十不孝三

「鹿の巻筆の小歌唄へば、観音經讀むもあり」。③書名。元祿五年、仕方咄の名人鹿野武左衛門の著した經口の本。

しからず 仕枯らす。仕盡す。精力を盡してする。薩摩歌上「武家の奉公しからせば、糠味噌汁の花散りて」

しきえ 色衣。墨染衣以外の法衣。晝夜用心記三「衣屋にて色衣、補羅、緞袈裟三口」

しきがね 敷銀。商賣、貸借などの證據金。しききん(敷金)。しきぎん。永代藏五「敷銀にして物を賣るとも、前より殘銀かさむ時は、見切つて是を捨つべし」

しきがはら 敷瓦。敷きならべた瓦。又それにかたどつた模様。五人女三「帯は敷瓦の折びるうど、御所かづきの取りまはし」

しきぎん 敷銀。嫁入の持參金。織留四「浪人の娘などの仕付所のなく、すこし敷銀あるをよび入れ」。胸算用二「あの身代の敷銀は、二百枚も過ぎ物」。尙、「しきがね」参照。

しきさんば 式三番。能の最初に三人で演ずる舞。近代世事談三「式三番。翁は天照太神、千歳は八幡大神、三番叟は春日明神と稱す。諷(うたひ)ものは多羅尼の神道の言葉を雜へたる也。是佛者の作る所と云ふ」。大矢敷二「植初めてなほ千年の松一木、式三番や暮上げて出る」

しきしき 敷蒲團のこと。小兒の語。油地獄下「母を見習ふ姉娘、夜の衾をしきしきに、英座よ枕よ」

しきしきに しきりに、にぎやかに、或は、儀式ばつての意か。萬文反古二「中居女に口上いはせ、しき／＼に仕掛けぬれば、つまみ錢にてはやられず」

しきしやう 式正。正式。本式。一代男八「亭主袴肩衣、女房は着物あらため、(中略)八百屋屋屋いさみをなして、しきしやうの庖丁人、この威勢一世の思ひ出也」

しきだい 敷臺。支關にある板敷。客を

送迎して挨拶するところ。男色大鑑三「敷臺に織田の何がし建部四郎急ぎ燈あらはし。丹波與作上」式代の段ばこに身を投伏して」

しきだう。色道。いろごとの道。懸に關したること。一代男「浮世の事を外になして、色道ふたつに寝ても覺めても夢介と」

しきねのふね。敷寝の船。寶船のこと。七福神その他寶物を載せた船を畫いて、枕に敷いて眠り、吉夢を見ようとする習俗は、「寶船敷く」といふ俳諧の題にもなつてゐる。男色大鑑八「年越の夜の厄拂ひが高聲、老の浪立敷寝の船の春に近づくを驚き」

しきまつば。敷松葉。庭などの霜よけのために、又、風致を増すために、敷く松の枯葉。一代男「雨天の下葉しげりて、敷松葉に御しともれ行きて」

しきもくし。式目所。政權を執る所、政所の稱であらう。最明寺殿百人上臈下「自ら執權の與奪ぞと、烏帽子際氣高く、水干の衣紋かき繕ひ(中略)、式目所の上段に、悠々と坐し給へば」

しきり。陣。陣痛。分曉に先立つて腰の痛むこと。兩吟一日千句「彼玉をしき

りが來ては産み落し」。置土産三「さあ今ぞとしきりは來れども、取上げ婆の約束もなく。大下馬」しきりがまるつたら、腰は我等でも抱きすが」

しきり。仕切。次條の略。天網島上「六十日六十日に問屋の仕切にさへ追はるゝ商賣」

しきりがね。仕切金。賣主が買主から受取るべき代金その他の諸入費の總金額。しきりきん。冥途飛脚中「手金のあらう様もなし、定めて何處ぞの仕切金その金に疵をつけ」。天網島中「岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれども」

しきりがはせ。仕切爲替。仕切狀を添へた爲替。總勘定の爲替。冥途飛脚上「是れ忠兵衛、仕切爲替の作法は、金と手形と引替へ。若し御持參なきならば、一筆ちよつと書かせませしや」

しき。四九。賭博の打ち方であらう。めぐりカルタの一種の「キング」に於て、「九ツびん四ツびん、親の附目」などいふ(賭博史)、そのキングのことか。丹波與作中「今は布子と襦袢と、たつた二枚の四九をやつて、親方の駄賃の算用も立たぬげな」

しきせいぐわん。四弘誓願。一切の佛・菩薩の通有する四箇の誓願。一にあらゆる衆生の救済、二に盡きざる煩惱からの解脱、三に諸有の法門の學知、四に無上至極の佛道の證悟。曾我會稽山三「庭と上とに四人の願ひ、四弘誓願ぞ有難き」

しきのもん。四九の門。兩吟一日千句「渡る雁四九の門をば過行て、文字も空にうつる雲霧」

しきはつく。四苦八苦。生・老・病・死の四苦と、これに愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦の四苦を合せた八苦とをいふ。非常な苦痛。釋迦如來誕生會五「うけ難き御法を請け、四苦八苦を免れし」

しぐみきやうげん。仕組狂言。事件を仕組んで作つた狂言。單に狂言といふに同じ。男色大鑑八「さりとはは義理にも涙はこぼれず、仕組狂言に泣く事、是を思ふに身過程悲しきはなし」

しぐれのちん。時雨の亭。洛西小倉山にあつた藤原定家卿の閑居の名。大下馬三「折ふしは冬のはじめ時雨の亭のいしへを思ふに」

時雨もいつはり。「いつはりの時雨」の條を見よ。

しげいと しげいと(絳絲)。繭の上皮から取つた粗末な絲。普通の絹糸よりも色黒く、太く光澤が乏しい。しげ。生玉心中下「下緒の房のしげ糸を、ほくちとなしてかち〜〜」

しげうち 繁打。紐の繁く細かく打つたもの。重打。一代女五「名古屋打の帶、重打の下緒。梳久一世物語上「禿市十郎に重打の紫帶と」

しげかなもの 繁金物。鍔などに繁く打つた金物。  
しげぬひ 繁縫。繁く縫つたもの。繻ひの細かいもの。源氏烏帽子折四「十五六なる君達、しげ縫の大口に左折の小結着て」

しげる 男女しめやかに語る。五十年忌歌念佛中「お夏様と舞様、此の蚊屋でしげらしやんしたらば、いかな藪蚊もけなりかろ。今宮心中「こちも盆には在所へいて、あは畑でしげる」

しこ 相撲の語。足をいふ。「しこ」は四股か。傾城酒呑童子「尻引つからば、しこを踏み」

しごく 至極。(一)尤もなこと。本當。まこと。男色大鑑六「是ればかりは至極と大笑ひして」。(二)主意。尤もと考へつめ

たこと。武道傳來記「八月十四日に相果つる至極、段々語り聞かせ」  
至極さす (動詞) 至極と思はせる。尤もと悟らしめる。懷視「親人不孝第一、是非と至極させて、無理やりに又も入縁を取組み

至極す (動詞) 尤も宜しと思ふ。道理ありと考へる。二代男三「大臣をはじめ一座至極して、今の世の太夫諸事餘るわと、横手を打つ」。同五「剃刀持つ手を各押留むる、男も是に至極して」

しごくへんろ 四國通路。阿波・讃岐・伊豫・土佐の四國で弘法大師の像の安置せられた八十八箇所を順禮すること。四國めぐり。晝夜用心記五「四國通路、似せ目付、鹿島の事觸れあり」

しこたむ 澤山貯へる。むやみに溜める。永代藏「萬に氣をつけて、其身一代に二千貫目しこためて行年八十八歳、世の人あやかり物とて」

しこだめ 澤山。どつさり。重井筒上「こりや三太郎、其方に大事の物遣らう(中略)、あいく〜、さらばしこだめ參らう」

しこなし しこなすこと。物事を處置し、ふるまふこと。經營。取扱。萬文反古「

「親且那のよろしく御しこなしなされ、只今で三十四人緩々と暮らし」  
しこのき 「しこ」は醜(シヨ)か。粗末な炭乗一方な木材の意であらう。出世景清四「地へは七尺ほり入れ上三尺の詰牢(つめろう)に、しこの木きもつて蜘蛛手格子に切りくんで」

しこむ 仕込。商品を仕入れる。武道傳來記「小間物のいろ〜を仕込み、笈箱に心覚えの刀を入れ」  
しこりばくち 博奕にこること。痼疾のやうになつて、止めようとしても止められない賭博ぐせ。丹波與作中「しこり博奕のわる遊び、さてもつれない氣と思へば」

しこる 頻りに物事をする。ふける。こる。生玉心中上「奥には猶も飲みしこり、踊るやら諾ふやら」

しころづきん 鍔頭巾。筒を長くし、後の鍔のやうな垂れを一尺位に仕立て、左右の耳と顔とを包むために、小鬘にも細いしころを附けたもの。寛永の唄、俳優澤村宗十郎が冠り始めたので、宗十郎頭巾ともいふ。

しころ槌の拍子 二代男三「いやなる女郎、隙日に宿の廣敷に出でて、片肌脱

し

ぎてさばき髪になつて、片手に水呑みながら、しころ槌の拍子唄はるゝを、男物蔭より見て戀を捨てける」

じざい 自在。じざいかぎ(自在鉤)の略。

爐などに上から物をかけるに用ひ、自在に上げ下げ出来るかぎ。じざいだけ。

一代男八「折節初紅葉のかげに、自在をおろし、金の大燗鍋、もろこしの酒功講をうつすと」

しざいがほ 子細額。子細ありげな額。

日本振袖始三「巨且將來鼻に皺寄せ子細額」

じざいだけ 自在竹。自在鉤に同じ。「じざい」の條を見よ。兩吟一日千句「冥途にすゆる釜をとらうり、みじか夜の月にかげゝる自在竹」

しさいなく 子細無く。面倒なく。わけなく。二十不孝二「おのれ出づれば子細なく助かる親を、これ例もなき女なり」と

しさいもの 子細者。子細ありげな者。特別な好みを持つてゐる者。理窟すきな者。一代女五「かくれもなき大扇屋ありける、此亭主子細者にて敷銀付く女房も呼ばず」榮花唱三「太鼓持の何がしが宿に仔細者四五人集りて、品定

も事古し、女郎と對の物を寄せんと書きつけしに」

しさいらし 子細らし。わけがあるらしい。わきまへあるらしい。心得がほな。

一代男五「世之介、中にも子細らしき女に、さてわれは何者と見えますといふ」

しさう 四相。生・老・病・死を一期の四相といひ、生・住・異・滅を有爲の四相といひ、我相・人相・衆生相・壽者相を識境四相といふ。出世景清「景清は二相を悟り候へども、重忠は四さうを悟る」。松風村雨東帶鑑「四相を悟る恒寂が、それも見知らじと思ふか」

しし 肉。にく。一代男六「なり恰好しとやかに、しゝのつて眼ざしぬからず」

しじ 指似。小兒の陰莖。置土産三「おもはく女郎が胎内より出でし若君と、具足の草摺を揚げて、各に指似を見せてむすこを知らせて歸る」

ししおき 肉置。にくづき(肉附)。一代女二「腰しまりて、ししおき逞しからず」

ししがき 鹿垣。竹と木の枝であらく組んで結んだ垣。猪鹿などの侵入を防ぐための垣。百日曾我「突棒からりと投

げ捨てゝ、ししがきを破破り、高這ひして逃げれば」

ししがしら 獅子頭。木彫りの獅子の頭。獅子舞に用ひるもの。

ししきしゆ 四職業。室町幕府の役所。侍所の所司に任じた赤松・一色・山名・京極の四家をいふ。雪女五枚羽子板上「偽らば繩をかけ、四職業の白洲に引据

五)

獅子に踏 (諺) 鬼に金棒といふに同じ。強い者が益々強くなる譬。國姓爺後日合戦三「獅子に踏あるその勢ひ」

ししひ 干(ひ)てこはばることか。懷硯三「明くる曙急ぐ草鞋がけ、脚絆のしゝ干になるまで、兩爐裏の縁に掛けて」

四十九日の餅盛 人の死後四十九日目に修める法事の供へものとして盛つた餅。五人女四「それより四十九日の餅盛など、お七親類御寺に参りて」

四十二の二つ子 父親の四十二歳になる時、二歳になる男兒。即ち四十一歳の時に生れる子は、親を食ひ殺すといひ傳へ、その厄を免れるためと稱して假に捨て、他人に拾はせる習慣がある。

四十二の音は四二(死)であり、四二に二を加へて四四(死死)となるのを忌ん

だのであるともいふ。二枚繪草紙中「さ  
る人の四十二の二つ子にて、産屋より  
もらひ守立て」。槍權三下「此子は父御  
の四十二の二つ子にて、祖母がお捨と  
付けたが」。但し、女兒の場合は、反つ  
て吉とする俗説もあつたと見える。浦  
島年代記「ア姫君は殿の四十二の二  
つ子、女子なれば家繁昌と俗説にたが  
はず」

四十八夜 彌陀の四十八願に因んで、四  
十八夜の間、念佛を申すこと。その念  
佛。永代藏三「その跡の金銀御寺へあが  
り物、四十八夜を申してから役に立た  
ぬ事なり」。梶久一世物語下「寺では四  
十八夜を申して名に觸れ」

四十振袖 四十歳で振袖を着ること。年  
老いて若づくりすること。日本武尊吾  
妻鑑三「四十振袖投鳥田」

四十六又 大阪新町の遊女の揚代。その  
遊女の位。大夫。二代男三「夕霧が泣く  
も、丹州が大聲も、昔心の臍からなり、  
位こそ五分と四拾六又なり、目鼻手足  
首筋をしめるまで、女に違ひはなし」。  
祭花咄三「太夫職勤むるは何ぞ一つ人  
に勝れる徳あるべし。今の世の賢き人  
うかく」と四十六又は出さぬ管なり」。

尙、「一文惜みの四十六又を知らず」の  
條参照。

しじみがは 蜷川。大阪曾根崎新地の前  
を流れる小さな川。その新地をいふ。  
織留三「折々の氣のばしに、蜷川にあそ  
び」。曾根崎心中「蜷川の天満屋のはつ  
奴とやらと腐り合ひ」  
しじめく さざめく。ざわ／＼さわぐ。  
大矢數三「まだ巢立せぬ雲雀しどめく」

ししや 鹿矢。獲矢。狩に用ひる矢。野  
矢。百日曾我「いく年ふりし猪の、牙  
は劍の如くなるが、しし矢三つ四つ負  
ひながら」  
ししよみやうじん 四所明神。春日神社  
の祭神、天津兒屋根命、武甕命、齊主  
命、姫太神の四神をいふ。大職冠四「花  
のしなへは春の色、四所明神の黒木の  
小祠」

ししをどり 獅子踊。鹿踊。三味線の手  
の名。一代男七「獅子踊の三味線を弾か  
る」。松風村雨東帶鑑四「風のすがか  
き鹿踊、あれ妻戀の牡鹿牝鹿、小男鹿  
がこがれ」

ししんぼん 自身番。町々の四辻に置く  
番屋。町内の家主自身が交替して之を  
守り、町内の事件の處置に任じたので

かく稱する。書役があり、自身番書役、  
又、自身番親方ともいふ。地主仲間  
で年給を與へる。一代男三「用心時の自身  
番にも人頼みすることあれ」。大句數上  
「鎌や長刀幾代へぬらん、自身番岩井の  
水の數手桶」

しすののら 四睡の虎。畫題にいふ。  
支那天台山の豐干禪師と寒山・拾得と  
が、虎と共に眠つてゐる圖。傾城反魂  
香上「豐干禪師が四睡の虎、李將軍は虎  
をくむ。繪にかく虎を動かすは」

じせつすい りせつする(李節推)の誤。  
蘇東坡に深く心を染めた若衆である  
といふ。俳諧初學抄「ある時李節推風水  
洞といふ亭に行きて、東坡を待ちはべ  
る、溪橋の水より梅花しきりに流れ  
来るを、東坡あやしく思ひ、跡をした  
ひ尋ね行き待る心を詩に作れり、溪橋  
曉溜浮梅萼、知君繫馬岩花落」。一代男  
一「笹竹の、葉分衣にすがり、東坡をじ  
せつすいが、風吹土にて、さき立て待  
ちしが」

じせつと 時節と。時節が來て、偶然に。  
自然と。武道傳來記八「猿澤の池の前な  
る宿にとまりけるに、時節と隣に茂三  
郎も一宿せしに 互にかくとは知らざ

し

し

りし」  
しろう 紙窓。紙を張つた窓。明障子の  
ある窓。武道傳來記「眼夢入道うた  
たねの枕にひびき、紙窓を明けて見渡  
し給ふに」

しそく 紙燭。脂燭。室内でともすた  
いまつ。松の木を長さ一尺五寸、徑三  
分程に圓く削り、尖を黒く焦がし、油  
を引いてあぶり乾かし、本を紙屋紙で  
巻いたもの。紙燃りに油を浸してと  
もすもの。一代男七「禿に紙燭灯させ、  
雪隠の入口に付置きて」。源氏烏帽子折  
二「十八九なる女房の、紙燭かかけて縁  
に出で」

じぞり 自剃。人手によらず、自分で髪  
を剃ること。雪女五枚羽子板中「髪月  
代は手馴れしが、自剃自鬢の初元結」  
しぞろはなぞろ 四揃花揃。花カルタの  
用語であらう。四揃は同種の札の四枚  
揃つたこと、花揃は口調上添へたもの  
で、美女の揃つた意味をもかけてゐる。  
雪女五枚羽子板中「侍にも女共、腰元  
にも女共、四そろ花ぞろ、きりばね、つ  
んばね二やく三やく」

しだにおくり 次第送。順おくり。順次  
に或物事のめぐり来るをいふ。二代男

五「禿も召使ひなればとて、さのみ荒く  
當るべき事にもあらず、次第送りの朋  
輩ならずや」

じだいおやち 時代親父。時代を經た親  
父。舊式な頑固な親父。關八州繫馬  
「ひと理窟あるじだいまおやち」

したいがひ したい方の。したい放題。  
油地獄中「サア此方の其正直を見抜い  
て、どろく者めがしたい甲斐に踏付け  
る」

じだいがみ 時代紙。時代のついた紙。  
古きをもつた紙。永代藏四「中にも定家  
の小倉色紙、名物記に入りたる外六枚  
見る程時代紙、正筆に疑ひなし」

じだいきぬ 時代絹。時代のついた絹。  
古物となつた絹。永代藏「品々の時代  
絹、中將姫の手織の蚊屋」

しだいこじき 次第乞食。頭陀行十二種  
の一。身に着せず、衆生を輕んぜず、  
貧富を選ばず、平等に順次に門並みを  
乞ひあるくこじき。孕常盤三「中にも次  
第乞食とは、長者をも親まず、貧者を  
も厭はず、次第々々の門並みを、請う  
て通る法なれば」

じだいにじやうるり 時代淨瑠璃。時代物  
即ち歴史上の事實を材とした淨瑠璃。

世話淨瑠璃に對する。

じだいまき系 時代蒔繪。時代を經た蒔  
繪。古色の生じた蒔繪。一代男八「床に  
は懸物、書棚、香箱、文匱、煙草盆其  
の外手道具時代蒔繪をひからせける」。  
大矢數二「硯に霞乾坤の箱、花は雲時代  
蒔繪の山見えて」

じだいまうけ 時代儲。しだいまうけ  
(次第儲)の誤か。榮花咄四「是みな唐  
へ投げ銀して、時代儲の分限、仕たい  
事して遊ばぬは一生の損なり」

じだいわたり 時代渡。古くわたつて來  
たもの。もとわたり。古渡り。永代藏  
三「時代わたりの柿地の小づる淺黃地  
の花兎」

じだいをとこ 時代男。年老いた男。男  
色大鑑五「此の主人、時代男にて七十餘  
歳まで風をも引かず」

しだう 祠堂。神佛のお堂。ほこら。  
次條の略。孕常盤「黄金は毒を消  
す。先年奥州の黄金三千兩(中略)、祠  
堂に御渡し候」

しだうがね 祠堂銀。祠堂金。菩提寺な  
どに奉納して先祖の供養にあてる金。  
長生銀。しだうきん。懷硯三「有銀四百  
貫目、祠堂銀に入れて、常念佛をとり



たて」

したうぎん 祠堂銀。前條に同じ。萬年草上「祠堂銀五百枚奉納いたされ候」

下帶の錦 (諺)見えぬところに美を盡くすこと。梨花咄「櫻も吉野も金太夫も根引と思ひし金銀を、面白からぬ遊女にむなしく、これぞ下帶の錦、人の見ぬ事に結構を盡くし、阿呆烏の月夜に夜が明けて」

したがひ したがひ(下交)。衣物の合せ目の下になつたところ。うはがひ(上交)又はうはまへの對。したまへ。内襟。松風村雨東帶鑑「小蛇跳り出で、松風の下がいに飛入れば」

したかせい したくばせい。爲したくばせよ。丹波與作中「ヤイ男達はおいでくれ、錢濟まいてしたかせい。腕づくならサア来い」

したがひ 下交。「したがひ」を見よ。薩摩歌中「親のことばにしたがひの、よその小棲にとちられて」

したがへ 下交。前條に同じ。一代女ニ「着物の下がへに綿を含ませ」

したく 支度。食事。萬文反古四「膳品道具きれいさ、夜舟に乗る都人是にて仕度をして」。夕霧阿波鳴渡上「平でも壺

でも、此方仕度より御坐る」  
したさく 下作。人の地を借りて料を拂つて耕作すること。小作。冥途飛脚下「この藁葺は忠三郎とて、下作あてた小百姓」

したし 仕出。(ハ)作り出すこと。工夫。

新案。新趣向の風、よそほひ。一代男七「茶小紋の着物、小脇指の仕出し、常とはかはり」。二代男二「近年の仕出し(中略)、揚女郎にもさのみ劣らぬ姿を」。(ハ)料理など註文に應じて作つて持ち出すこと。

したしぐわし 仕出菓子。新しく趣向を凝らして作つた菓子。

したしぞめ 仕出染。新案の染め方。その染模様。晝夜用心記「あらゆる當流の仕出し染、鳥羽繪模様手廣く」

したしな 仕出名。趣向のかはつた名。新案の名稱。

したしにうばう 仕出女房。しゃれ立つた女房。盛装をこらした婦人。俗つれ四「日にとまるものは今時の仕出女房、諸山の花もよしなき京に咲きて、美女に春を奪はれ」

したしにんぎやう 仕出人形。新工夫の人形。その人形を操ること。二代男七

「おやま甚左衛門が仕出人形、そろま七郎兵衛が二王の眞似」

したしめやう 仕出模様。新趣向の模様。した女。姿にたしなみを見せた女。仕出女房。晝夜用心記「一人は四十には足らぬ粹なる仕出し女、さすが夫ある身とも見えず」

したたむ 食事をする。調へ食ふ。傾城酒吞童子四「何れも勝手へ立つてしたためしたため。我も飯食ふ膳を出せ」

したため (名詞)食事。腹をこしらへること。日本振袖始「お吸物など御無用、諸軍勢もしたためよし」

したたるい 物言ひがあまたるい。なまめかしい。しつこい。うるさい。傾城反魂香中「ア、したどるい手の隙がない。通りやく」

したたるし 前條に同じ。松風村雨東帶鑑「大黒にして下さんせと、猶舌たらく引きとむる」

したちご 下地子。かぶろ(禿)などの稱か。新小夜嵐物語上「萬事氣の盡きる數、下地子の布子、下女が割りし刺身皿まで、皆大臣の迷惑となつて」

下地は好き (諺)委しくは「下地はすき

し

し

なり、御意はよし」といふ。生來すきな上に、幸ひに他からの思召もある。長町女腹切上「下地は好きに据ゑる臍、うまい首尾とぞ成りにける」

したちまど 下地窓。助枝窓。壁の一部を塗り残して、その下地の竹のまゝを格子とした窓。一代男七「戸あくるをも音せず、下地窓より供部屋を覗けば」

色大鑑三「下地窓より供部屋を覗けば」したてぐち 仕立口。衣服の仕立てぶり。裁縫の仕方。傾城酒吞童子四「衣裳の模様、仕立口」

したない 下内。内證。ないない(内内)大矢数四「あちづくになつた所がおもしろい、定て此の事下ないですむ」

したながし 舌長し。響るさま、大言するさまにいふ。口はば廣い。國性爺三「身が生國は大日本、風來とは舌長し」したぬき 下貫。人を迷はして、私の利を得ることにいふ(色道大鑑)。遊里の詞とされてゐるが、下文は賭博のことである。大職冠四「負腹の習ひに勝逃げ忌めば、あたりに近づく下ぬきなし」

したの茶碗 下の茶碗。祖末な茶碗か。使ひふるし茶碗か。五人女四「あはれやせて湯なりとも呑ませよと有りし

に、飯焼の梅が下の茶碗にくみて、久七にさし出しければ」

舌の延びたる 舌の長い。物言ひの出過ぎた。釋迦如來誕生會三「どれどの口で、舌の延びたる奴ばら」

したばや 舌早。口のきき方の早いこと。早口。くちばや。

したみ 滑。滴瀝。雫をたらしたるもの。特に酒にいふ。したみざけ。二十不孝一「木の蔭にて飲みかけ、間もなきしたみ、露より輕きことなれども」

したや 下屋。下家。母屋(おもや)に附屬する小屋。曾根崎心中「二階の口より差覗けば、男は下屋に顔出し、招き領き指さして」

したやど 下宿。逗留してゐる宿。げしゆく。男色大鑑六「是はお山の元祖大吉彌が下宿(したやど)なるが、相應なる商賈せしといへり」

したよこめやく 下横目役。横目即ち監視の役の補助。やがて横目になる者。武道傳來記五「切米十石の御加増、殊に女中部屋の下横目役仰付けられ」

じだらく 自墮落。身持のしまらぬこと。だらしないこと。ふしだら。一代男五「着物も自墮落に帯ゆるく」

しだらてん 震動雷電の字音の轉であるといふ。大風、大雨の日。どよめき騒がしいこと。大矢数一「しだらてん雲忽に入亂れて、小便の曉秋はきまにけり」

したるし (形容詞) しなだれたさまにいふ。やさしい。なまめかしい。置土産五「少ししたるき野郎を招き、色付の柱にもたれて」

舌をなやす 舌をまはらぬやうにする。なや(萎)すは、なよ〜とさせる。働きをにぶらせる意。俗つれ〜「家々に入りて舌をなやして作り訛り」

したんだ 頓足。足をばた〜すること。雙生隅田川三「鯉鮒が蓮の花笠しやんと着て、踊る形がしほらし、石龜も頓足(したんだ)鰻鮫は不形(ふなり)な物よ」

しち 釋迦如來誕生會三「名のみ異なる西天竺吳竹をしちといひ、ひつたきやとは青柳の」

しち 榻。牛車の牛を取り放した時、その轆の軛を支へ、又は、車の乗り降りの臺とするもの。緋縮緬卯月の紅葉上「猶しも思ひ深草の、しちに通ひし車長持」

しちかく 七學。「七覺」が正しい。覺は

覺了覺祭で、それが七種に分支してゐるの、覺支、又は覺分といふ。即ち擇法・精進・喜・頼安・念・定・行捨の七覺の稱。釋迦如來誕生會「太子は圓智明けき御かんばせ、七學を表して七あゆみ」

しちく 糸竹。俗つれんニ「會て色作りたる風情はなく、淺黄緒の京草履に、片足は糸竹の男形はきませて」

しちく 紫竹。漢竹。からだけ。白くろちく(烏竹)孟宗竹。それれゝの異名。蟬丸ニ「紫竹交りの藪の下、春の縁の東風菜」

しちじ 七二。九といふ意を示す洒落。人の名に關していふ。丹波與作中「松坂の七二は何として見えぬぞ(中略)。其の七二とは九郎助のことか」

七十一 奴 京都の遊女、太夫の揚代。二代男「萬花車事で埒をあげ、寶の床へ入りながら、七十一 奴の損して歸る」

しちたらじゆ 七多羅樹。たらじゆ(多羅樹)の七倍。多羅樹は印度の喬木であるが、その高さも尺度の稱とし、一多羅樹を七倍とする。似は七尺に當る。日本振袖始「尊の劔の稻光、恐れて虚空に飛上り、其高さ七多羅樹」

しちてう 七條。七條袈裟の略。七幅の布で作つた袈裟。懷硯四「隣の七條借りて二度返さず、代なして首尾を調へ」

しちねんもの 七年物。ころを經たもの。老いたもの。特に獸などの年を經たもの。味を増したもの。百日會我ニ「富士の根の方より、七年物の男鹿八つ股の角ふり立て、嶮岨苔路をのさ〜と」

七の圖 「さんづ」などいふ類か。脛の上部をいふ。背庚申上「紺のだいなし、紺七の圖まで引つからげ」

しちのふだ 質札。質物の預り證として、質屋が質主に渡しておく票。しちふだ。一代男「日外の立綺のきる物の質の札は、手もとに御座るか」

しちまいぎしやう 七枚起請。七枚の紙に書いた起請文。又、七枚繼ぎの紙の起請。女腹切中「いくよ〜の憂き勤め、七枚起請そら誓文、日本國の神さんを欺した罪か」

しちみやうねん 七明年。氣のながいこと。末の永いこと。待ち遠く思はれることにいふ。二代男四「七明年なる親ども許嫁して、年長けて娘は想ひの外美形に立ち、男ははげ天窓になるも、未は見ぬことなり」。傾城色三味線「隠居

の庭に柿の核を植ゑて、八年したらば孫どもに木練の取飽さすべしと、七明年なる事をたくみ」

しちやう 紙帳。紙で作つた蚊帳。一代男「米櫃は物淋しく、紙帳もやぶれに近き身代」

しちやう してう(翅鳥)、圍碁の語。逃げようとする敵の石を、斜に追ひ詰めて死石とすること。國性爺四「四目殺しに中手を入れて、しちやうに懸けて打切つて」

しちやう 四町。大阪の遊女町新町の稱。俗つれん「五」大阪にある大臣、世間をつら〜思ふに、この四町の女郎高下合せて千三百餘人」

しちりんがま 七厘釜。焜爐。物を煮るに炭代七厘で足りる義であるといふ。しちりん。置土産四「七厘釜にて洗足を沸かし」

しづ おもり。物をしづめ垂らすに用ひるもの。一代男四「帯は紫のつれ左巻、結びめ後に、くげ目のすみに鉛のしづを入れ」

しづかい 悉皆。みな。ことごとく。懸八卦柱脣上「見かぎりはてた旦那殿、しづかい盗人の行儀か」

し

しつく 仕附。禮儀作法を習はせる。轉じて奉公させる。嫁入らせる。又は米の朔日よ「あの子ばかりを大坂へ、伯母をたよりに何方へも、仕付けて呉れと登されしが」。織留五「十六十四になる娘二人もたれしが、(中略)舞は願ひのまゝの所へ仕付けられしに」

しづくも 零も。露ほども。少しも。一寸も。出世瀧徳上「じめんづくに頼むからは、零も是に偽りない」

しつけかた 仕附方。躰方。禮儀作法。又、それを教へる者。二十不孝「京より仕付方の女を呼寄せ、萬事おとなしく身を持たせ」

しつけどころ 仕付所。しつける所。嫁がせる所。よめ入の口。織留四「浪人の娘などの仕付所なく、すこし、數銀あるを呼び入れ」

しつけめ 濕氣眼。しっ・ひぜん等の皮膚病、疥毒などによつて起つた眼病。一代女五「昔の悪病(中略)、年寄るにしたがひて上へとりあげて、しつけ目を病ひ、何れも過ぎにし身の耻を語り慰みぬ」

しつこう 「しつこく」の音便。執こく。濃厚に。あつさりでなく。置土産三「今

一度千兩ぎりにしつこうせず、爰の氣色を見たし」

じつごと 實事。もと、俳優のしぐさにいふ語。浮氣沙汰でなく、まじめ、眞實のさまを演じ出すこと。(ぬれごと、口説きなどに對する)轉じて、眞實な戀などの意。重井筒上「入違つて徳兵衛、突つと通つて羽織をうしろへひらりと投げ、實事の格は見覺えたり、女房の膝元にむずと居て」。五十年忌歌念佛中「お夏涙を押しのごひ、そなたと我が身は實事にて、口説などする挨拶か」

十歳の翁 諺に「十歳の翁八十の童」といふ。子供でありながら、ませてゐる者もあれば、老いて愚かな者もある譬。一代男一「浮世の介こさかしき事十歳の翁と申すべきか、もと生れつきうるはしく、若道のたしなみ」。牛若千人斬三「誠に十歳の翁、八十の童子よな、かしこくも言はれし」

じつさうむる 實相無漏。「實相」とは宇宙の真相。實在のこと、眞如ともいふ。「無漏」とは身體の汚れを去り、煩惱の塵を離れてゐる境地。四字熟して、正覺を得た世界の意。松風村雨東帶鑑三「恨めしや、實相無漏の大海に、五塵六

慾の風は吹かねども」

じつし 自子。實子。實の子。わが生みの子。萬文反古四「母人賞様はふびんをかけ、自子(じつし)の私をしみじみ」と惡み」

じつし 十死。唇にいふこと。病人に限らず萬事に凶な日。遠出も忌む。戀八卦柱膝下「やがて、ゐのこや五里六里、十しも過ぎて」

しつしごきのおび 「ひつしごきのおび」の誤。

じつしゆかう 十炷香。十種香。香合せの語。十種とは、もと人々が一種づつ出して合はせたのを、その數が多いので大よそにかく稱したのであらうかといふ(俚言集覽所引現果錄)。織留一「十炷香は山口圓休に賜き覺え」。同三「十炷香はいよゝ福徳そなはれる閑人の花車あそび」

しつちつるなく (副詞)失墜なく。失念することなく。忘れずに。あやまちなく。永代藏一「これ觀音の錢なれば、いづれも失墜なく返納したてまつる」

しつちやう 膝錠か。膝にかけた、歩行が自由にならぬやうにする錠であらう。出世景清四「足を牢より引出し、左

手右手へ取違へ、(中略)ほだしをうたせ、しつ錠詰金、たうくくる」

じつとく じふとく(十徳)の音便。素襖に似て脇を縫ひつけた衣。後には腰から下に襷(ひだ)をつけて、醫者その他、法體となつたものがよく着用了なもの。一代男三「朝ごとに髪ゆはするも心に懸れば、十徳にさま替へて。二十不孝ニ「法體しての十徳、名を善入と呼ばれて」

しつとと しつぼりと。むつまじく、しめやかに。油地獄上「しつとんとん」

しつとんとん しつとと逢ふ瀬の浪枕」

しつとんとん 「しととん踊」の歌の囃子詞。松の落葉四「花の繪島へおせやれ男、えどやつき、須磨や明石の月を見しよ、しつとんとん、しつとんとんしつとんとん、しととん。前條参照。

しつは しつば。しつこいこと。執拗なさま。しつぼり。念佛往生記五「なびけやなびけ、しつはとなびけ」

しつばうくれ 十方暮。十方暗。曆の上の語。甲申の日から癸巳の日まで十日間十方の氣が暗くなつて、萬事に凶であるといふ。戀八卦柱曆下「鞍壺に傳ふ涙の十方暮、泣く引かれ行く姿」

じつばうだんな 十方旦那。諸方にある旦那。施主、寄附者、得意先などの特に何人と定らず、方々にあることにいふ。大矢數二「野寺の建立十方旦那。同三「今度のもくるみ十方旦那。晝夜用心記五「其の施主の宿はいづかたにてさふらふと問へば、十方旦那なれば宿は知らずといふ。宵庚申下「十方旦那の機嫌を取り、隙ある日には町中を振賣し」

しつはく 執拗なことを「しつは」といふ、それに形容詞の語尾を添加した語か。念佛往生記五「扱もくしつはくなる念佛者や」

しつびつ 執筆。連歌、俳諧の時、懐紙に句を書く役。筆とり。大矢數四「脇碎や心ほそくも立霞、まづ書て見て執筆に見せる」

しつほ 情を含んでしみじみ。しつぼり。しつば。世織曾我四「殊に名に負ふ虎少將、しつほと口説くに二人の者たよたよおろくころりとして」

しつぼり しんみり。しめやか。男女間の情合のこまやかなさま。釋迦如來誕生會二「ほんに一夜もしつぼりと、面白事もなふ、身もちになつて苦しむは

いかい損じや。長町女腹切上「これ半七伯母は粹じや、跡でしつぼりと咄しやいの。又春雨などのしとしと降るさま。濡れるさま。

しつぼる 前條の動詞となつたもの。しつぼりと濡れる。男女のちぎることにいふ。

してどの 「して」は工女といふ意。それを敬稱的に「して殿」といふ。一代男二「小川の糸屋者室町のすあひ、其外して殿愛にたよらぬ事なしと」

して 四手。幣。しめなは(注連繩)、又は玉串などにつけて垂れる物。麻又は紙を用ひる。一代男七「棕櫚箒に、四手切つて、むしこよりによつと出せば」

してろ 翅鳥。「しちやう」を見よ。大句數上「きのふもたはけの死んだと申、一番はしてうにかけてやぶられて」

してろがはら 四條河原。京都加茂川四條の河原。芝居小屋が設けられて、野郎・若衆で賑つたところ。色河原。置土産三「野郎狂ひやむ事なく、明暮河原に通ひける」

してから 仕立ててから。作つてから。衣服にいふ。胸算用二「我等が私銀三百五十兩、長堀の角屋敷拾賣りにしても

し

し

二十五貫目が物、してから袖も通さぬ衣裳六十五、一人の娘より外にやる者がござらぬ」

してばしら シテ柱。能舞臺の橋掛りから舞臺へ入る角の柱。シテの所作の起點となるもの。又、芝居の舞臺の上手にある柱。主人物のよりかゝる柱。男色大鑑六「この狂言に瀧井山三郎が出ますると云ふ時入りて、正面のシテ柱の方に身をよせ、これ一番とながめし時」

してんげ 四天下。佛語。須彌山の四方にある大洲。南瞻部、東弗善提、西牛貨、北俱盧をいふ。須彌四洲。釋迦如来誕生會三「月を手に取り日を操り、四天下を魔界となし」

してんたう 四顛倒。佛語。迷界の衆生は、無智であるために、正理を顛倒して解するものとされる。これに四種あつて、非常を常、非樂を樂、非我を我、非淨を淨と解するので、かく稱する。四倒。釋迦如来誕生會二「世間の榮華を樂むといへども、四顛倒の憂ひ少時も離れず」。晝夜用心記三「是四顛倒とて、不淨なる物を奇麗におもふより、執心ふかく」

してんはつたう 四顛八倒。七顛八倒の類語。四顛は七顛の發音を訛つたものであらう。苦しみ、もがくさま。

しとしと しとやか。しづか。しめやか。堀河波鼓上「挨拶座配しと〜と、物やはらかで吃として」

しとと はたと。はつたと。びつたりと。物を打ち叩き、又は相寄せる時の擬聲的副詞。出世景清四「もとの牢屋に走り入り、内よりくわんぬきしと、締め」。

しどなさ しどけなさ。亂雑でしまりないこと。だらしなさ。背庚申中「半兵衛是見や此のしどなさ、歸らんと云ふ嬉しさに、親の病をかともいはず」

しどもなし だらしない。しまりない。しどけなし。しどなし。五人女三「髪はいつ櫛の齒を入れしや、しどもなく亂れしを、ついそこ〜にからげて」

しどろあし 亂れて取りとめない足。よろよろ足。國性爺「はつと氣も消え立留まり、進みかねたるしどろ足」

しとんはちべん 四音八辯。四辯八音の誤。四辯は佛が有するといふ、法無碍・義無碍・辭無碍・樂説無碍の四無碍辯の

稱。八音は、極好音・柔軟音・和適音・尊慧音・不女音・不誤音・深遠音・不竭音の稱。佛は四辯によつて説法に自在を得、八種の色ある音聲によつてよく聽者を解悟せしめるといふ。談義の流暢なさま。蟬丸五「四音八辯流るゝ如く、語り給へば往來は、皆々禮して通りけり」

しながどり かいつぶりの異名。大矢數三「へつたりとそこへこけたるしなが鳥」

しなし すること。しうち。しきたり。慣例。一代男三「女郎は上方のしなしありて取亂さず」。同六「數々かたじけなき御しなし、いやといはれず」

しなしたり 爲損じた。しくじつた。しまつた。出世景清四「是は扱しなしたりしなしたり、不便のごとを見る物かな」

しなす甲斐 死なないことが、せめてもの幸ひ。死なぬが見つけもの。殆ど死ぬほどのことにいふ。曾根崎心中「理屈に詰まつてあげふには、死なす甲斐の目に逢うて一分は勝つた」

しなせぶり なまめき媚ぶるさま。嬌態。しなだま 品玉。手品(てじな)。てづま。

又、毬を投げては巧みに受けて弄ぶ技。織留「放下師までも品玉とる種の行き所をさきへ見せ」。五百韻「品玉はふたつ見えたる下の帯、かの海底に飛入は風呂」

しなだれをとこ しなだれる男。人に甘えて寄り添ふ男。出世瀧徳下「中にも立田の藤と云ふ、しなだれ男纏ひ付」

しなのうめ 信濃梅。こうめ(小梅)の異名。

しながき 君選子。柿の一種。幹の高さ二三丈、六月頃花を開く。山地に自生し、又庭園に栽培される。果實は澁を取り、熟したものは食用とし、材は器具用とされる。さるがき。まめがき。

しなのごま 信濃駒。信濃國から産する駒。大磯虎稚物語五「北國立ち、關東立ち、信濃駒、甲斐駒」

しなのつむぎ 信濃紬。信濃國から織り出す紬。生玉心中中「かりの世に死なねばならぬ信濃紬の糸よりも、心が細く氣も弱く」

しなをやる 品をする。品をつくる。嫺態を示す。二十不孝「不斷も加賀染の模様よく、色を作り品をやれば、誰いふともなく美人絹屋と門口に立つ人絶

えず」

しなんぼう 指南坊。指南する坊主。師たる法師。一代男「憚りながら文章を好まんと申せば、指南坊おどろきて、さはいへいか書くべし」と

しにいくさ 死軍。死を決してする戦。死を賭してゐる軍兵。吉野忠信五「もとより味方は死軍、思ひきつたる事なれば」

しにいし 死石。圍碁の語。敵に殺されたる石。

しにいちばい 死一倍。親が死んだら、二倍にして返すといふ借金約束。不孝な遊蕩兒などのすること。置土産三「世には不孝の子ども、親の死一倍といふ銀借る事は聞きくが」。二十不孝「死一倍の借金、千兩才覺させけるに(中略)まだ十年や十五年に灰寄はなるまじ。死一倍に貸されまじきといふ。新小夜嵐物語下「親懸りの大臣、死一倍も才覺ならず」

しにくち 死口。口寄せにいふ語。死者の靈魂が巫女に乗り移つていふ言。いさくち(生口)の對。緋縮緬卯月紅葉上「あ、申し、ちと口寄せを頼みませふ(中略)、してまづ御用の事ありとは、

生口か死口か」

しにくどの 「してどの」の讀みあやまり。變體の「て」を「にく」と二字に見たあやまり。

しにす 仕似す。父祖の家業をよく眞似て守る。基礎を確かにし、手がたく商賣を續ける。永代藏四「讓狀にて家督請取り、仕にせおかれし商賣」。胸算用「家業は何にても親の仕似せたる事を變へて利を得たるは稀なり」。織留「親の時より次第にしにせたる見世にて」。今宮心中上「商賣もしにせて」

しにせ 老舗。前條の名詞形。代々續いて手がたい商店。天網島中「かみは正直商賣は、所がらなり、老舗なり」

しにたはけ 死白痴。正氣をなくして死ぬもの。死を願ふたはけもの。二十不孝「腹搔割いて夢とはなりぬ。(中略)三人の弟ども他の人の顔して死白痴と申しなし、亂氣の沙汰になりて済みぬ」

しにちくしやう 死畜生。人を罵る語。今宮心中中「生畜生の死者生と、所存極めし涙の體」

し

しにてんごう 死轉業。死轉合。死ぬたはむれ。胸算用二「この忙しき中に無用の死てんごうと存じた」

しにびかり 死光。死後の光榮。死んでからのほまれ。二十不孝二「野邊の送り、花を降らし、死光とや提燈道を輝かし、葬禮までを人の羨みける」。殊に死後に金銀を残すこと。織留四「親でも子でも欲に極まる世の中なれば、死跡に金銀を残すべし、これを死光りといふ」

しにむしや 死武者。死を決した武士。しにめらう 死女郎。女を罵る語。丹波與作中「死ぬらうのふりはりめ、竹のぶちをくらふな」

死ねがな眼くじる (諺) 強慾非道なこと。「死ねがな目くじらん」ともいふ。利慾にかけては、人の死をも願ひ、その眼玉をくじり取らうといふ意か。二代男三「死ねがな眼くじる、慾の世の中なるに」

死ねがな目くじろ (諺) 前條に同じ。胸算用四「如何に欲の世に住めばとて、念佛講仲間の布に利を取るなどは、寔に死ねがな目くじろの男なり」  
じねんごしらへ 自然拵。無理をせず、

長い間、心かけて作ることか。二十不孝四「縁附頭の妹ありて、母親自然拵への衣類手道具まで盗み出して賣り拂ひ」

しのけ 師の卦。易にいふ六十四卦の一。難波土産「八卦の坤を上卦とし、坎を下卦としたる卦體なり。卦の義理は専ら軍の事を斷りたる卦也」。國性爺三「我等が本卦師の卦に當つて、師は軍の義なり。坤上坎下の卦體、一陽を以て衆陰をすぶるといつば」

しのだづま 信太妻。上方淨瑠璃の曲名。山本角太夫の正本の一。一代男五「去程に、信太妻の女房、江戸風のしよていと申」

しのづか 篠塚。俳優篠塚治良(又は次郎)左衛門のこと。實徳の名人。重井筒下「重ね井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎」

しのに 四の二。賽の目の四と二と、しぬに「の轉「しのに」とをかけていふ語。しげく。しきりに。兩吟一日千句「しのに物をばおもふ賽の日」。百日曾我二「本名は六藏、かへ名は四の二物思ふ、流れのうき身をすててん」  
しののいしはら 篠の石原。篠竹の生え

た小石の多い原。百日曾我四「空の曇さはしのがれぬ、しのゝ石原日にやけて、蝶も翼をやすめかね」

しのびあみがさ 忍編笠。遊廓に遊ぶ者が、途中の茶屋から借りて、身を忍ぶために冠つて行く編笠。

しのびおび 忍帯。女が衣服を合せて着たすぐ上(抱帯の下)に締める細紐のことであらう。俗つれ、おくび先を少し揚げて帯の下に挟み、抱帯なしに細き忍帯を締め」

しのびがへし 忍返。屏などの上に、尖つた木や竹や釘などを逆に斜に立て列べて、人の忍び入るを防ぐもの。男色大鑑三「寅の上刻と思ふ時、忍びがへしを切り入り」

しのびごま 忍駒。三味線のこまに物を挟んで、しのび音にすること、即ちあまり音の立たぬやうにして弾くこと。置土産五「八筋懸を忍駒にてひかせられしに」

しのびとどな 忍戸棚。一代男四「しのび戸棚と申すは、是れも内證より通路仕懸けて、男を入置き達はする事也」  
しのびのを 忍緒。(兜の願紐(あごひも))。外から見えないやうにして髮に



括りつける緒。しのびもとゆひ。織留  
四「彦七が時代までは髪に忍びの緒を  
付けて留めける」

しのびび 忍火。音のしないやうに打つ  
切り火、男色大鑑四「小者に忍火を打た  
せ、二たび立添ひて見るに是はしたり  
専十郎なり」

しのびもとゆひ 忍元結。外から見えな  
いやうにかける元結。好色盛衰記三「首  
筋より上ばかりに入る物十六品あり  
(中略)、先づ髪油、髪付、長かもじ、  
小まくら、平元結、忍び元結、筭、さ  
し櫛」

しのびをんな 忍女。私娼。遊女。一代  
男三「磯島といへるにも、舟子の瀬枕、  
しのび女有る所ぞかし」

しのぶの細染 榮花咄三「此の程京にた  
くみ出して、しのぶの細染といへるは、  
片面を六拾五匁に出来しぬ」。しのぶず  
り(忍指)の一種であらう。

しのぶをぎり 忍小桐。小袖などに仕立  
てる染模様の一種。胸算用五「中形のし  
のぶ小桐の衣裳きる中に」

しのべだけ 忍竹。長間竹。竹の一種。  
篠芽竹。節の間が長くて、葉の長いも  
の。その幹を垣根、棚などに作る。一

し

代男一「しのべ竹の人よけに笹屋島の  
帷子、女の隠し道具をかけ」。男色大鑑  
五「しのべ竹ならべたる佛棚に表具な  
しの六字を掛け」

しはうがみ 四方髪。總髪。なでつけ。  
又、撫附髪をかき手拭で包んだもの。  
織留五「門の戸明けて四方髪、男にが  
にがしき顔さし出して」

しばがきぶし 柴垣節。明暦の頃流行し  
た端唄。初めは踊りに合せて謡つたが、  
後には單に比丘尼などのびんざさらに  
合せて謡ふものとなつた。次條参照。

しばがきをどり 柴垣踊。前條「しばがき  
ぶし」に合せ二人相並んで手或は胸を  
打つて踊るをどり。しばがき。一代男  
三「柴垣踊をしつてかと思ねけるに、夢  
にもしらすと申す」

しばさかな 芝魚。芝浦でとれる  
小魚。江戸の名物の一。「繪本東わらは」  
に江戸名物を述べた中に「淺草海苔に  
江戸前鰻、新場鮎に芝魚。又、俚言集  
覽「いとより」の條に「小魚。海魚な  
り。五六寸ばかりにて鱗細く、黄に黒く  
して美事なる魚なり、是らを芝魚とい  
ふ」。一代女四「朝の買物芝魚を籠に入  
れ、片手に酢德利附木を持ちそへ」。永

代藏三「芝魚もそれ〴〵に喰ひ覺え、築  
地の門跡に日參して」  
しばさかもり 芝酒盛。芝生の上での酒  
宴。都富士一「くらもの呼んで芝酒盛」  
しばしばめ 目をしばたたくこと。泣く  
ことをおさへてしばたたく目つき。壽  
門松中「喘ぎあげ〴〵泣きければ、淨閑  
もしば〴〵目」

しはすあぶら 師走油。十二月の節季に  
油をこぼすと火に祟るといつて、こぼ  
した者に水をあびせてまじな俗習が  
あるのでいふ。今宮心中「師走油が身  
の上にかゝる涙とこぼれそひ」

しはすばうず 師走坊主。みすばらしい、  
不景氣なやうすの者に譬へる。師走の  
忙しい時は、坊主などに構つてゐる暇  
がないので言ふ。胸算用一「極月坊主と  
て、此月も忙しいに取まぎれ、親の  
命日も忘れくれねば、是非もなく錢八  
文にて年を越しける」。同五「浮世に住  
むから、師走坊主も暇のない事ぞか  
し」

しはすらうにん 師走浪人。前條の類語。  
夕霧阿波鳴渡上「紙子さきはりが荒い荒  
い。是れ引けば破れる。搦めば跡に師  
走坊主、師走浪人」

しはすらうにん 師走浪人。前條の類語。  
夕霧阿波鳴渡上「紙子さきはりが荒い荒  
い。是れ引けば破れる。搦めば跡に師  
走坊主、師走浪人」

し

**しはちのさうがう** 四八相好。四八三十二で、佛の三十二相をいふ。釋迦如來誕生會四「出山の釋迦牟尼佛、四八の相好、八十種香」

**しばつかみ** 芝撮。楊弓の語。食指を伸べて矢をつまむこと。下文を見よ。本朝世事談綺「芝撮。かの五郎・未願元祿頃の楊弓の名人」がなす所なり。矢をつまむに食指を曲げて撮むに、芝撮は食指を伸べてつまむ也。矢のぬけ心よしと、専ら傲ふ」

**しばつなぎ** 芝繫。馬を芝地に止めておくこと。當流小栗判官二「雲雀の床のしばつなぎ、とある所に乗りしづめ、ひらりと飛んで下り給ひ、かく口弱き此の馬を、など鬼鹿毛とは付けられしぞ」（小栗鬼かけ曲乗の段）。

**しばびと** 柴人。柴を刈る人。きこりの類。一代男二「鹿・山吹・みつとて此の三人、その比柴人のすさみにもうたふ程の女とて」。五人女三「やうく／＼峯高くのぼりて（中略）、なほ行くさき柴人の足形も見えず」

**しばべや** 柴部屋。柴をおく部屋。柴小屋。柴屋。一代男七「柴部屋にしるびて物の蔭より睨けば」

**しばやまち** 柴屋町。近江國大津の遊女町。一代男五「隙なくて、終に柴屋町を見ぬ事あたらし」

**しばりくび** 縛首。罪人を麻繩で後手に縛り、首を前方に出さしめて斬ること。**しばるこ** 芝居子。芝居の役者。特に少年俳優。若衆、太夫子の類語。俗つれづれ四「今時の芝居子、三十六七までも大振袖は、これ世わたりの袖ぞかし」。新小夜嵐物語上「男色野郎の地獄とて、前生にして芝居子に遊んで諸分の悪しき大臣」

**しばるこぐるひ** 芝居子狂。芝居子を相手として遊蕩にふけること。男色大鑑六「戀のはじまり芝居子狂ひ、是ぞ出家に備はりし遊興」

**しばるなみの利銀** 芝居を興行する時の資として借りる金の利子。普通の借金の利子より高かつたので「芝居並」と稱した。うけしばる（請芝居）などの時その興行主は高利の借金したものでしい。胸算用三「よく／＼せはしければこそ、芝居並の利銀にて何でも借らるゝなり、此利をかきて芝居の外何商賣して胸算用が合ふと思召すぞ」

**しばを** 柴男。しばをとこ。しばびと（柴人）に同じ。男色大鑑三「此山の若衆髪を柴男のあらけなき手して事缺きに撫でさばきさすこと心に叶はず」

**じひがひ** 慈悲買。慈悲の心から買ふこと。賣手をあはれんて買ふこと。一代女一「折節の秋の淋しき女郎あまた慈悲買にして、太夫出羽を慰めける庭に」

**しびとばな** 死人花。まんじゆしやげ（曼珠沙華）の異名。石蒜。

**しびり京へ上れ** （謔）しびり（瘡）をなほすまじなひの語。兩吟一日千句「五日をきつて地誦の役、しびり京へ上り下りの仕出し食」

**じびん** 自鬘。自分で自分の髪を結ふこと。萬文反古一「朝は七つ起きして自鬘に髪をゆひ」。じぞり（自剃）の條參照。

**しひんせき** 洩濱石。支那の洩水の河岸から出る石。磬（樂器）又は硯などに用ひて尊ばれる。大職冠一「唐朝に傳はる花原磬、洩濱石、面向不背の玉、此三つの寶を」

**しぶいてこら** しよびいて來い。「しぶく」は「しよびく」で、「引く」を強めた語であらう。吉野都女補四「寝る時はおみ圍でしぶいてこら」

**しぶかたびら** 澁帷子。柿の澁を引いた

かたびら。永代藏月「身に澁帷子を著せ、頭に紙子頭巾を被せ」

しぶく 繁吹く。しきりに吹く。吹きあふられる。宵庚申上「縮緬は風にしぶき面側な」

しぶく 時服。その時節に著るべき衣服。一代男八「太夫様より宿への時服、庭錢まきちらす」

しぶくち 澁口。皮肉な口をきくこと。苦言。槍權三上「此様に落馬のはやる時、むさと云分などなさるゝな。首が落馬いたさうぜと、澁口いふも茶の湯者を韃に持つたる身の習ひ」

しぶくどよう 十九土用。土用は十八日を一期とするが、その中に没日がある

と、十九日に數へる。没日は陰陽家の忌む日で、一切の事に凶であるとする。俚言集覽「土用中に没日あれば十九日也。これを十九土用といふ」。一代女

三「十九土用とて人皆凌ぎかね、夏なき國もがな汗かぬ里もありやと」

しぶさんかね 十三鐘。大和國奈良で、鹿を殺した十三歳の子が、石子詰にされたといふ俗説がある。一代男二「卯月十二日、十三鐘のむかしを聞くに哀れ、今も鹿ころせし人は、其科を赦さ

ず大がきまはすとかや」  
十三かね 俳諧六日飛脚「誰が子のためのたのみの節句、けき奉行十三かねを持たせ来て、閨がついてはまはる御年貢」

十三月 正月のこと。轉じて、悠長な「いつも正月」といふさまにいふ。永代藏五「工商の家には十三月なる顔つきかまへ、貧乏花盛り待つは今の事なるべし」

しぶさんになち 十二月十三日。煤掃の日。男色大鑑二「時節を待つ年も暮れて十三日は煤拂ひ」

しぶし 「じつし」を見よ。しぶしちふじ 十七文字。發句。俳句。大矢數三「雨にあらしに舟間也けり、今日

の月十七文字をおもひつき」  
しぶしちやだいまち 十七夜代待。十七夜の代待。代待は願入坊主の類で、衣服・手甲・股引・脚半すべて白木綿を用ひ、施米箱を胸にかけた出かける。五人女三「十七夜代待の通りしに十二灯

を包みて、我が身の事すゑく知れぬやうにと祈りける」

しぶしゆかう 十種香。十炷香。「じつしゆかう」を見よ。

執心の鐘 安珍清姫の故事か。一代男六「執心の鐘鐺の場、善の綱かと思はれ」

じふて 十手。賊など捕へる時に、獄吏の用ひたもの。短い鐵棒の中程にかぎのあるもの。じつて。てぎ。

じふとく 十徳。「じつとく」を見よ。じふにとう 十二灯。十二文の燈明料。もと十二銅であらうといふ。神佛への獻金。五人女三「十七夜代待の通りしに十二灯を包みて、我が身の事すゑく知れぬやうにと祈りける」。卯月潤色中「神おろし致してはお十二銅が一包み」。次條參照。

じふにとうぐみ 十二灯組。前條「十二灯」を毎月集めて取扱ふ講の名。十二は十二箇月から起つたといひ、十二因縁に據つたともいはれる。油地獄上「おんあぶら屋仲間の山上講(中略)、十二とう組吹出す法螺のかいゝしげなる金剛杖」

じふにとうさんせん 十二銅賽錢。「じふにとう」に同じ。

じふにのづだ 十二の頭陀。十二種の頭陀行法。一に住阿闍若處、二に常行乞食、三に次第乞食、四に一食、五に節量食、六に過中不飲漿、七に著弊袖衣、

し

し

八に但三衣、九に塚門坐、十に樹下坐  
十一に露地坐、十二に但坐不臥の稱。  
孕常盤ニ「四分律に十二の頭陀を説か  
れたる、中にも次第乞食とは」  
十人よれば十國の客。「十人よれば十國  
のもの」といふ諺の轉用。永代藏ニ「十  
人よれば十國の客、難波津の人あれば  
播州網干の人もあり」

十念を授く 十念とは、阿彌陀佛の名を  
十回唱へることであるが、淨土宗では、  
僧侶がその南無阿彌陀佛の六字の名號  
を信者に授けて、佛に結緣せしめるこ  
とを、「十念を授く」といふ。宵庚申下  
「百萬遍の御回向より、聞入れたとの御  
一言、知識長老のお十念を、授かる心  
とばかりにて」

じふはちころ 十八公。しぶはつこう。  
松の字體が十八公の字劃から成るの  
で、松の異稱とする。槍權三上「松も女  
松の十八公、其年頃の振袖の」  
じふはちささげ 十八苳豆。じふるくさ  
さげ(十六苳豆)の別稱。

じふばんぎり 十番切。曾我五郎が、親  
の仇工藤祐經を討つた際、頼朝の館に  
入つて十人を斬つた故事。槍權三下「隣  
丁八丁九丁町、十番切の五月闇、夜討

の入りたる如くなり」

じふふんはい 十分盃。櫻陰比事ニ「昔都  
の寺町通りに、十分盃を和朝にて初め  
て工夫の細工人あり唐土の僱師がから  
くりにも劣るまじき者と云へり」。兩吟  
一日千句「仕合せは十分はいのごとく  
にて、隱居をしての不斷かけ物」。大矢  
數四「さまざまの智慧を集めて水手桶、  
十分盃はいの比より、月に酒吞てま  
はする底ぬけか」。俗つれ「三」昔唐  
人の細工に十分盃とて、人の心をつも  
り物にして之を渡しぬ」

十枚のりの付紙臺 銀十枚と書いた包紙  
を、糊で貼りつけた臺。小判十枚を載  
すべき進上臺。堀川波鼓下「對の奴草履  
取、十枚のりの付紙臺、足打ち早め敵  
の門」

じふめん 十面。謔面。きげんわるい顔。  
しぶつら。大句數上「一番はしてうにか  
けてやぶられて、こちらは十面そちら  
は鼻聲」。大下馬「男十面作りて、物  
をも言はざりしが」

じふもんいろ 十文色。十文で買はれる  
色、即ち辻君。私娼の下等なものを。淫  
賣婦。冥途飛脚上「心は蜘蛛手かくなは  
や、十文色も出て来るは、南無三寶日

が暮れると」

じふもんぎり 十文切。酒などを茶碗に  
一杯盛りきりにした代が、十文のこと。  
吉野都女楠四「蜘蛛手かくなは十文き  
りの茶碗に一ばい酒でも斟でも」

じふもんじ 十文字。十文字槍の略。永  
代藏五「乘馬に十文字をもたせ」

じふもんじがみこ 十文字紙子。萬文反  
古ニ「すこしの銀子にて十文字紙子を  
請賣いたし候へども」

じふもんもり 十文盛。一杯盛り十文の  
飯。源氏冷泉節上「六尺共も我等も、道  
中の十文盛掻込んだばかりで、宿へ著  
いても薬師如來ぞ、茶も喫わずに駈附  
けた」。丹波與作中「酒が四升五合、十  
文もりが七十杯」

じふや 十夜。淨土宗で、陰曆十月六日  
から十五日まで十夜の間、別時念佛を  
唱へること。胸算用三「淨土宗の十夜談  
義、東福寺の開山忌參り」

しぶりかは 謔皮。しぶかは。垢じみた  
皮膚。うすぎたないはだ。縫留五「すこ  
ししぶり皮のとれたる女には、宿拂ひ  
請合ふやら、又小遣銀持てきてやるや  
ら」

じふろくがた 十六形。十六むさしがた

の模様であらう。一代男六「後の朝の名残をそめ〜と書きつづけたる着物、十六形の地紫、あれは花崎様のかたみ」  
**じふろくむさし** 十六六指。十六卒で一力士を圍むことに擬した遊戯。大矢數三「夕詠十六むさし果しなく、あつたら隙に何事か又」。大下馬「常に十六むさしを慰みにさむれけるに」  
**じふんがら** 時分柄。時節がら。その時節に相應すること。出世瀧徳上「時分がら心中の地下か。又義太夫が口の端に」  
 時分がらの世の中 時節が時節であるといふ意。特に、何事も金次第の世の中。五人女二「時分がらの世の中、金銀の入る事ならば思ひながら成り難し」  
**しぶんりつ** 四分律。佛書。佛滅後百年、曇無德羅漢が四度互つて集めた律本。小乗人の戒を説いたもの。孕常盤三「四分律に十二の頭陀を説かれたる」  
**しべいやく** す(爲)べき役。仕るべき役。釋迦如来誕生會四「野良かはいて仕べい役を投(ほ)からかし」  
**しべばうき** 葉筈。わらしべで作つた筈。一代男七「人の見るをまかはず、しべ筈にて禿に背なかをたゝかせ」  
**しほ** 潮。愛らしいところ。つややかさ。

やさしさ。愛嬌。丹波與作中「春はござれの伊勢衆でないか、日元にしほがこぼれる」。五十年忌歌念佛中「浮世恨みて尼が崎、尼が崎とは海近く、何故にそなたはしほがない」  
**しほがしら** 潮頭。満ち来る潮の波がしらであらう。最明寺殿百人上臈上「いかなる千尋の大海にも、しほがしらしほわかれ、のぼりしほおちしほ」  
**しほがひ** 潮貝。鹽貝。海に棲む貝。松風村雨東帯鑑三「浦のしほがひうつせがひ、双をふむがごとくにて」  
**しほがま** 鹽竈。次條の略。男色大鑑五「ある日東山の櫻に行きて、盛に近き鹽竈の一枝を初太夫持ちて歸り」  
**しほがまざくら** 鹽竈櫻。櫻の一種。葉まで(漬で)、美しいといふ洒落から來たといふ。關八州繫馬四「しほがまざくら、瀧櫻」  
**鹽釜の大匠** 源融、即ち河原左大臣のこ。永代藏三「むかし千賀の浦を七條に移されし鹽釜の大匠あり」  
**しほがみ** しほ紙。しほ(紙)を寄せて作つた紙。表面に細い凹凸をつけて、皮まがひに製つた紙。永代藏六「ちやんぬりの油がはらけ、しほ紙の煙草入、外

の人のせぬ事に」  
**しほくび** 入首。潮頭。槍の穂の柄に接したところの稱。ほくび。けらくび。武道傳來記五「管槍をさしのべ、脇腹をつらぬき、又突きかゝるを兵庫入首より二尺ばかり切落し」  
**しほこしのまつ** 潮越の松。越前國坂井郡濱坂村にある名松。西行の歌に「よもすがら嵐に波を運ばせて月を垂れたる沙越の松」。傾城反魂香上「名高い松とは流石やさしき都人、まづ當國の名木は、西行が鹽越しの松」  
**しほけぶり** 潮煙。潮が岸の岩などに打ちあつて飛び散るしほき。潮しほき。  
**しほざかい** 潮境(しほざかひ)。潮の流れの分れる境。一代男三「浪は次第にあらく、しほざかいより小早に乗りうつりて」  
**しほじり** 鹽尻。鹽田で、潮水を汲みかけて鹽分を凝着せしめる塚。形が挿鉢(すりばち)を伏せたやうなので、挿鉢の異名とする。俳諧師手鑑「鹽尻や頭は隠す雪の不盡(調和)」  
**しほぜ** 鹽瀨。絹織物の一種。地厚く博多織に似たもの。二代男一「鹽瀨が服紗を取添へ」

し

しほちや 鹽茶。番茶に鹽を少し加へたもの。酔をさます効がある。出世瀧徳下「明日御見なりませふ、鹽茶を飲んで寝てくれふ」

しほつけ 鹽付。智慧をつけるために旅などさせること。諺に「鹽を踏ます」といふこと。好色伊勢物語「好色男かんだうせられて、京やすみうかりけん東の方に行きて鹽付に友のあくしやう人」(俚言集覽)

しほづる 鹽鶴。鹽漬にした鶴の肉。一代女四「しほづるの骨すこし、菓子杉重の殻までも取り集めて」

しほて 鞍。四方手。馬具の一。鞍の前後輪後輪それらの左右に附ける緒。胸がい、髻がいを止めるもの。吉野都女楠四「息をはかりに走り付、鞍のしほでをむずと取り、留めても引いても駄馬の」。鹽手。四方出。

鹽の長次郎 名高い手品師。置土産五「品玉、鹽の長次郎まさりに候」。晝夜用心記「鹽の長次郎が馬を呑み、牛を弄玉の曲」。重井筒上「片手をかう振上げ、投る顔で鹽の長次郎、錢は手にとまつた」

しほめ 鹽目。人品。人がら。薩摩歌中

「媒人が袷羽織も鹽目よき、大鯛、昆布、柳糖」

しほやいと 鹽灸。灸の黒くかさぶたになつた痕に鹽を附けること。とがめなためであらう。一代男に「黒ぶたに鹽をそゝぎまゐらせける」(一卷九歳の條)とあるもそれであらう。五人女「後程煙つよくなりて、鹽灸を待兼ねしに、自然とすゑ落して」

しほよる 皺寄る。宵庚申中「打萎れ、目元しほよる縮緬の、二重廻りの拘帯、涙の色に染めかへて」

しほりたばこ 絞煙草。よりたばこ(擦煙草)のことか。葉煙草を繩のやうにして、熱と壓搾とを加へたものか。懷硯三「古綴の火繩僅に煙を立て、絞煙草を樂むより外に、自ら求め少なきは自然と聖賢なるべし」

しほりたばこいれ 絞煙草入。武道傳來記八「女房は人目を忍び、絞煙草入を縫貫わづかを顧みず」

しほわかれ 潮別。しほざかひ(潮境)のことであらう。最明寺殿百人上臈上「潮頭、潮別れ、上り潮、落潮」

しほをふます 鹽を踏ます。難儀をさせる。

しほつけ(鹽付)の條参照。西鶴五百韻「ちいさいときは鹽をふます」。緋縮緬卯月紅葉中「江戸長崎へも退下し、鹽を踏ませて人にしや」

しまいがた 四枚肩。四人に駕籠を昇かせること。急ぎの駕籠を意味する。二代男六「大阪より四枚肩は二十四奴の定めなり」。源氏冷泉節上「門外に四枚肩、春樂お見舞」

しまうたや 仕舞屋。商賈をやめた家。特に商賈もせずに豊かに暮して行く家。しもたや。一代男五「浮世の事はしまうたやの金左衛門」。俗つれ、五

「祖父より三代商賈は仕舞屋にして、二十人餘の男女、心に任せて」

しまぎり 烏桐。縞縹。まさめの通つた桐材。一代女二「しま梧の掛物宮より女繪を取出し」

しまざらし 烏晒。烏曝。縞のあるさらし布。又、島でさらした布であるといふ。條布。縞晒。一代男六「烏曝のかたびら、薄玉子の帯やはらかに結び」

しまじゆ 縞縹。しまじゆす(縞縹子)の略。油地獄上「桔梗染の腰變り、島じゆの帯」

しまだい 烏臺。蓬萊島を模したもので

あるといふ。洲濱に松竹梅を作り立て、鶴龜や翁媪を飾りつけた、婚儀などの飾り物。一代男八「島臺、金の大土器、祝言の如く」

しまだわげ 島田髷。しまだまげ。もと

東海道島田の宿の遊女が常に結つてゐた髪の風であるといふ。貞享元祿以後、結婚前の少女が一般に結ぶことになつた。武道傳來記入「下女によく」申し合め、島田わげの髪の中へ彼の文を入れて」



しまだまげ

しまつごころ 始末心。始末しようといふ心。儉約の心がけ。五人女ニ「萬の始末心を捨て、大焼する慾を見ず」

しまばら 島原。京都の遊女町の名。本名は朱雀野。もと、六條西洞院にあつたが、寛永十五年、肥前國島原の亂の頃、朱雀野に移したので起つた名であるといふ。又、その廓が島原の城郭に似てゐたからであるともいふ。傾城色三味「昔より風俗器量は島原の女郎にして、吉原の張を持たせ、難波の九軒で遊びなばあつたものではあるまじ」

しまひ 仕舞。をはり。すゑ。轉じて總

勘定、しめきり勘定。胸算用四「浦住居の徳には、生着のつかみ取りの商賣して世渡り樂々としてから、毎年の仕舞には少しづつ足らず」

しまひがね 仕舞金。仕舞に入る金。支拂の金。萬文反古「信國の小脇差(中略)、頼みて賣拂ひ、仕舞ひがねのたよりいたさるべし」

しまひだいく 仕舞大工。仕事を終つた大工。その日の仕事を切りあげた大工。永代藏三「屋形々々に行きて殿作りしまひ大工、屋根葺、おのが一連に二百三百人」

しまひだいのこ 仕廻太鼓。仕舞太鼓。遊廓でその夜の閉門どきを告知らせる大鼓。三番太鼓。夕霧阿波鳴渡下「跡より遣手の責め來るは、呵責の責より猶辛く、仕廻太鼓の音までも、寂滅爲樂と響くなり」

しまひだな 仕舞棚。しまひものを賣る店。時節はづれの物、賣れ残りの物など賣る店。見切品店。二代男四「大門筋の仕舞棚に昔長持の目出度も煙機度か遁れしを(中略)、今賣物となりぬ」

しまひつく 仕舞つく。始末がつく。きまりがつく。物事の處置が程よく出来

る。重井筒上「徳兵衛も仕舞付かず、詞なければ」女腹切上「逢ふもあふなし、逢はぬも又、仕舞の附かぬ我身ぞと、夜着引被り生きたる心地はなかりけり」

しまひもの 仕舞物。店じまひの時の賣物。拂ひもの。賣殘品。生玉心中「京の清水焼にずんと安い仕廻物が有と聞き」

しまふ 仕舞。をはる。すます。轉じて、支拂ふ。勘定する。胸算用二「妾にはまだ得仕舞はぬかして、取亂したる書出し、千束の如し」。織留二「油賣わづかの事に仕舞ひかたて、借錢の方へ有る物をわたして」

しまふたや しまうたや(仕舞屋)が正しい。その條を見よ。榮花咄「さる仕まふたやの後家で、大人しき繼子の後見つておはしける」

しまわうごん 紫磨黄金。四種黄金(即ち青・黄・赤・紫磨)の中で、最上等のもの。磨は無垢純精の意。紫磨金。紫金。二代男一「女來善光に負はれ、御身よりの光、今の玉蟲色の御小袖、しま黄金の肌、胸高にあけかけ」

しまゑ 鳥繪。縞繪。隈どるべき所をも

し

細筆で線を引き、縞模様のやうにした  
 襷であるといふ。二十不孝五「鳥繪を書  
 きて世を渡る墨屋剛兵衛といふもの」  
 しみましたるし なまめかしい。やさし  
 く、しつこい。したたるい。宵庚申上  
 「男色たてぬく詞の優しき。其のいきか  
 たに猶なづむと、しみしたたるふ取廻  
 せば」

しみづく 染著く。しみこむ。又、凍り  
 つく。しみづく。ぬれ浸る。森門松中  
 「どうぞ御命助けたさ、女房舅が泣きし  
 みづき、父御様とも争ふ程の大事の  
 命」。冥途飛脚下「素足に雪踏しみつけ  
 ば、空に雲の一曇り」

しみやく 死脈。死期に近づいた脈搏の  
 状態。重井筒中「とかく二人に死脈が打  
 つ。どこもかしこも一時に、汐のさい  
 て来る如く、ばら／＼と首尾わるく」  
 じみやく 自脈。自ら己れの脈を取つて  
 病を診察すること。源氏十二段長生島  
 臺三「是れ／＼疼(つかへ)がのぼるは  
 と、自脈取るやらもだくだと、居姿く  
 づれてわけもなし」

しめぎ 緊木。挫木。油をしめ取る機械。  
 木と木と食ひ合ふやうに作つたもの。  
 一代男「秋の初風はげしくしめ木に

あらそひ、衣うつ槌の香物かしましう」  
 しめし 示。をしへ。たしなめ教へるこ  
 と。二代男「自然旅籠屋の女房になら  
 りよも知れぬ浮世といふ、此のしめし  
 聞きどころでござんす」

しめす 濕。火を消す。恭愍太平記「第  
 一は火の用心螢ほどの火もしめせと」  
 しめつけしまだ 付島田。締付島田。  
 たばを特にしめて、長く出さぬやうに  
 結つた島田鬚。武道傳來記五「里びたる  
 風情なく、髪を結振、信貴の城下には  
 やる／＼付島田のふき髪、不思議に思ひ  
 より」

しめの髪 「しめ」はしゆみ(須彌)の訛。  
 しゆみの髪。たてがみ。當流小栗判官  
 三「はだせに乗つて見せ申さんと、しめ  
 の髪をかいつかみ、ひらりと乗つてし  
 づしづと」。源義經將菜經「野髪・取  
 かみ・しめの髪」

しめましよ 酒もりの語。盃をおさへて  
 酒をつぐ時の挨拶。菜花咄三「大阪の大  
 和、是は少ししめましよと言へるは、  
 猶また座興なり」

しめりなき 濕泣。しめやかに泣くこと。  
 ひそひそと泣くこと。しくしく泣き。  
 じめんづく 自前づく。面と向きあつて

話などすること。人だのみでなく、自  
 ら直接に會つてすること。出世瀧徳上  
 「勝二郎様の女房になる程の吾妻じや。  
 じめんづくに頼むからは、雫も是に偽  
 りない」

四も五も 何もかも。何でもかでも。ど  
 んな手段でも。多くは、下に否定の語  
 が来る。二代男八「四も五も構はず男ど  
 も、鱧手も叱らず、禿も眠らず」。蟬丸  
 四「下郎と思ひ侮るな。四も五も食ふ男  
 でなし。足手息災な内、早々歸れと怒  
 りける」

しもさか 下阪。刀匠關八郎左衛門のこ  
 と。關孫六の家筋。近江國滋賀郡西坂  
 本下坂村に住んだので名づける。天正  
 年間の人。女腹切中「銘なしの下阪、寸  
 も焼も替らぬを、八兩で買ひ」

しもさかこはち 下坂小八。人名。評判  
 の高い若衆であつたと見える。一代男  
 一「其比下坂小八がかりとて、髪切して  
 たて懸に結ふことはやりけるに」  
 しもさき 霜先。やがて霜の降り初める  
 頃。寒冷を覺えそめるころ。一代男三  
 「干鮭は霜先の薬喰ぞかし」。菜花咄五  
 「霜先の男何とぞつなき置かば、正月の  
 遣ひ物になる事もと跡先の思案して」



**しもさきの金銀** 「霜先の小判」ともいふ。霜先即ち年末に近づく頃の金銀は、平生の金銀よりは一層大切であるとされる。胸算用三「身體さもなき人霜先の金銀あだに使ふことなかれ」。新小夜風物語上「霜先の小判を丸雪の如く蒔きける」。前條の例「榮花咄」の文を参照せよ。

**しもだいどころ** 下臺所。大家でしもじもの人達の食物を調へる所。上臺所の對語。武道傳來記「下臺所には朝飯を炊き、上臺所には女あまたの慰み業や」**しもつて** 「しもりて」の音便か。小さい浮子(うき)に青貝をつけて、沈むやうにしたものを「しもり」といふ(嬉遊笑覽)が、それを動詞にしたか。自然居士「舟はしもつて荷も人も皆川下へぞ流れける」

**しもどひや** 下問屋。取次をする問屋。上問屋に對して規模の小さい問屋。「かみどひや」の條を参照。**しもばくらう** 下博勞。博勞の手下になつて働く者であらう。二代男入「下博勞へ根引とも沙汰いたし」**しもばた** 下機。おもに綿布を織るに用ひる機。上機の對。大矢數五「朝霞下機

立る窓に入て、前垂たすき鶯の歌」。永代藏五「さもいそがはしき片手に、下機に木綿一端これを織りおろして」

**しもばら** 霜腹。霜の降る夜の寒さに冷えて起る腹痛。大矢數四「毎年をこる山は霜腹、大夜着に嶺の肩や重からん」**しもやしき** 下屋敷。別邸。別荘。しもやかた。一代男五「せめてはお下屋敷におかせられ、折ふしの御通ひ女にと申せども」

**しもやしきもの** 下屋敷者。下屋敷におく者。かこひもの。前條の例文参照。俗つれん「井筒か小太夫かを掴んで、かゝる下屋敷者にして置かでは一分立たぬと」

**しや** (感動詞)。人を罵りあざける時、間投詞的に用ひる語。出世景清「浮世狂ひも年による。しや、ほんにをかしいまで、よい機嫌じや」。釋迦如來誕生會「しや、小癩なり。おりまいが何とする」

**しや** 己れ(代名詞)の意。壽門松下「しやが父に似て父に似ず、子は色里に初音ふる」**しや** 者。それしや(夫者)の略。その道になれたもの。遊女にいふ。くろうと。

油地獄上「アレ〜あそこへ桔梗染の腰廻り、烏襦の帯、しやじやはいのしやじやはいの」

**しやいもない** うちもない。わけもない。たわいもない。東山殿子日遊「誠にしやいもない御しかた」**しやう** 鷹の一種。せう。兄鷹。百日會我「さて御鷹は、つみ・五つさい。さしば・しやうはやぶさ・このり」

**じやう** 豊前國小倉でいふ、私娼の一種。又、一種の接尾語であるといふ。一代男三「小倉に着きて、朝げしきをみるに、木綿かのこのちらしがたに、茜裏をふきかへさせ、(中略)おもひ〜に道いそぐをきけば是なん此所の着賣、内裏、小島より出る、たゝ、じやうと申す、伊勢言葉にやゝといへり」

**じやう** 狀。手紙。書付(かきつけ)。或は紙花をいふか。一代男七「世之介金鏡銀鏡紙入より打明けて、兩の手にすくひながら、太夫戴けやうといふ(中略)、高橋しとやかに打笑ひ、いかにも戴きますと、そばにありし丸盆に請けて、今日の前でいたゞくも、内證にて

**じやう** 情。殊に剛情。かたいぢ(片意

地)。今宮心中「傍へ寄ればびかしやかと物言の有るじやう」。同「我を立て、己れが情を情にたて」

生あれば食あり (諺)生(しやう)、即ち生命あるものには、食(じき)、即ち何等かの食物があてがはれる。生ある以上餓死はしないものである。武道傳來記四「冬野の草枕して乞食四五人集りて、生あれば食あり、これを代なして

中間の酒手にせんと」。轉じて、必要なものは必ず供給されるものであるとの意にも用ひる。榮花咄五「生あれば食あり、何國にても女に事缺く所なし」

じやういうち 上意討。主君の意を受け、罪人を討つこと。武道傳來記四「日外の上意討、柏崎茂右衛門殿手にかけて角彌殿を討たれしに」

じやういごかし 上意を口實にすること。上意をみえにすること。津國女夫池一「うぬはよう上意ごかしに打つたな」

じやうえと 常江戸。常に江戸に在府すること。又、その大名や臣下の稱。薩摩歌上「常江戸、國城、國脇まで、申せば事も長い事」

じやうかう 常香。常に絶えず佛前に供へる香。一代男三「無分別の常香を盛

り、終には消ゆる命、爰はと庵を捨て」

じやうかうばん 常香盤。常香を焼(た)くに用ひる香爐。五人女四「夜や八つ頃なるべし、常香盤の鈴落ちて、響きわたる事しばらくなり」

じやうがさげ 生薑酒。生薑をすりおろして酒にませて爛したもの。風邪の薬として用ひる。重井筒中「今も今女ども生薑酒を飲(たべ)させうと、手づから生薑おろすやら」

じやうかちげ せうかちげ(消渴氣)。痲病らしい。はかばかしく注がないさまにいふ。大下馬三「ばらり〜と痲病(しやうかち)げなる雨を降らしけるとぞ」

じやうがちや 生薑茶。おろし生薑をまぜた煎じ茶。重井筒中「今も今、ある方で生薑茶をくれたを」

じやうきさん 正氣散。漢方の粉ぐすり。源氏冷泉節上「手先を揃へて、おつと肩を正氣散、腰を据ゑては、はい〜排毒散の風薬、是ぞ汗かき乗物昇き」

じやうぎん 上銀。質の上等な銀。又、佐州銀の一種。即ち佐渡の國から出る銀で作つた貨幣には、上銀・銀一分・元印銀・新印銀などの種類がある。油地獄

下「親仁の謀判して上銀二百匁、今晚きりに借りまし」

じやうぐわつかひ 正月買。遊女を正月に買ふこと。初買。遊女(傾城)の方から言ふ賣日、即ち物日又は紋日に、各月何日といふ定めがあつて、その日に買ふことを客の方では大に得意としたのである。色道大鏡に「正月買。年中物日の内の大會也、是を請取るを客の矩模とす」(卷一の三)、又、「正月買をする男節分を買ひ、盆買の男七夕を買ふ事、是定れる法也」(卷二)などいひ

「盆買」、「節供買」に對して更に大切な物日であつた由を説いてゐる。二代男一「勤日大晦日より十五日まで、十七日八日廿日廿五日廿八日まで、正月買の役なり。右は六十目小判に直し、六十兩一步にては諸事しまはるゝといふ」

じやうぐわつことは 正月詞。禮儀正しい詞。體裁をつくらつた詞。世辭。雪女五枚羽子板上「馬鹿慙慙の頑侍、卷舌の諸禮、折目正しき正月詞、さぞ御窮屈と存じ」

じやうぐわつじまひ 正月仕舞。正月の支度。迎年の準備。永代藏四「毎年世間がつまり、我れ人迷惑するといへど、

二八八

それ／＼の正月じまひ、餅搗かぬ宿も  
なく、數の子買はぬ人もなし。萬文反  
古「世帯の大事は正月仕舞」

しやうぐわつぬのこ 正月布子。正月の  
料に新調した綿入。胸算用四「そこな男  
よ、正月布子した者と同じ様に口を利  
くな、見ればこの寒きに綿入著ずに何  
を申すぞ」

じやうこく 上刻。時を三分した、その  
初めの時間。中刻下刻の對。丹波與作  
上「刻限は巳の上刻」

しやうごくぐわつ 正五九月。正月五月  
九月の稱。これらの月は忌月といひ、  
婚儀など忌み、精進齋齋して、神佛に  
詣つて冥福を祈る習慣があつた。置土  
産三「此隱者も何祈るらん、正五九月と  
て廿四日に思ひ立ち愛宕參詣と、ひと  
へ二日の旅用意」

上戸の腹の石橋山 上戸(酒ずき)の腹に  
一種の石があつて、飲んだ酒を吸ひ  
取るといふ俗説があるのでいふ。源氏  
冷泉節上「若侍のけつき酒、上戸のはら  
の石橋山、頼朝はうつぼ木に、軍理の  
工夫を得給ひて」

しやうごん 正勤。爲めになること。ね  
うち。幸福。もと「せうごん」の假名を

用ひてゐる。油地獄上「隨分稼いで親達  
の肩助けと、心願立てさんせ。わきへ  
は行かぬ其身の上げやえごん」

じやうこん 上根。すぐれた根柢。絶倫  
の精力。上機根。織留四「この際に見わ  
たらぬ鬚書を、才覺して寫し本にする  
程の上根なくては、この道の出世はな  
り難し」

しやうじやうかう 猩猩講。酒飲みの大  
會。上戸大會。二十不孝五「長崎の湊に  
して狸々講を結び、相村のうちに松の  
尾大明神を勸請申し、廿日辛口二つの  
壺を列べ、名のある八人の大上戸集る」

じやうじやうきちもろはく 上上吉諸白。  
とびきり上等の諸白。諸白は米も麴も  
よく精げた原料を用ひて醸した上酒。  
永代藏二「上上吉諸白の軒ならびには  
出しけれども、鴻池伊丹池田南都根づ  
よき大木の杉の香に及びがたく」

じやうしやうじん 常精進。何日間と日  
を定めず、常に精進すること。男色大  
鑑一「其身は常精進となつて、岩倉山に  
とり籠り、手づから剃刀にて惜しや黒  
髮を」

しやうしやうてい 女郎のこと。長崎の  
方言。博多小女郎上「筑前さなへ此舟廻

はし、しやうしやうてい共請出して、  
上方さなへつつ走る」

しやうじやうのみ 猩猩呑。狸々のやう  
に酒を飲むこと。多量な酒をがぶのみ  
に一切のこと。二代男五「あの暮のうちに  
は一節切のつれ吹き、人形まはし、狸  
狸呑みをするもあかり」

じやうじやうもろはく 上上諸白。極上  
等の酒。轉じて上等なものにいふ。じ  
やうじやうきちもろはく「參照。大矢  
數五「夏の月どこに捨て、も一萬石、上  
上諸白きく郭公」

しやうじんあぐ 精進上。精進の期を終  
る。精進明(しやうじんあけ)をする。  
二代男二「明ければ十月二十一日、勝手  
に笑聲して、亭主も精進あげて、月代  
を刺り座敷に出で」。二十不孝一「跡を  
顧みず還俗して、上りの舟路にて精進  
をあげ、昔に歸る家もなく」

しやうじんあけ 精進明。精進の期限が  
終つて肉食すること。精進落(しやう  
じんおち)。

しやうじんいり 精進入。精進の生活に  
入ること。又、精進の期日に入るにあ  
たつて、肉食すること。椀久一世話話  
上「是より精進入とて、目の前の肴物、

しやうじんいり 精進入。精進の生活に  
入ること。又、精進の期日に入るにあ  
たつて、肉食すること。椀久一世話話  
上「是より精進入とて、目の前の肴物、

し

し

思ひし物好み重ねて、咄しの種とて生貝百はい五人に残らず呑みくらして。しやうじんがため「精進固」。

しやうじんおち 精進落。精進の期限を了して肉食すること。しやうじんあけ。「鯛で精進おち」の條を見よ。

しやうじんばら 精進腹。野菜のみ食してゐる腹。「一代男」あしたの豆腐賣さへ稀に、なほ精進腹のどこやら物淋しく。

じやうせつ 上刹。淨刹。淨土に同じ。夕霧阿波鳴渡下「九品の上刹に往生し、半蓮をわけて待つてゐや」

じやうそん 聖尊。大聖釋尊をいふ。釋迦如來誕生會「じやうそん妙法の旅ならずは、誰かは通ふ深山路の、露よしづくよ」

じやうだい 上代。むかし。往古。一代女。衣類は都上代の鳥原太夫職の着捨てし物に變らず。置土産「今の二十兩は上代の二十兩にもかけあひます」

しやうだいなし 正體無。本心もないやうに取亂すさま。正氣のない。吉野都女楠「心を沈め能く見給へ、義貞にては候まじ。歎を止め歸り給へ。しやうだいなや」。宵庚申中「悪口まじりの口

説き泣き、二人の娘も正體なみだ」

じやうだいやうぶみ 上代様文。上代様に認めた文。古風の文字で書いた文。

じやうだよゑもん 生田與右衛門。鼓の高手であつたと見える。永代藏「能は小名の扇を請け、鼓は生田與右衛門の手筋」

じやうぢうぎ 常住著(じやうぢうぎ)常に着る衣物。ふだんぎ。永代藏「このうへは萬の唐織を常住着となすべし」

じやうぢうてい 常住體(じやうぢうてい)常にかはらぬやうす。平然たるさま。武道傳來記「いよゝゝ常住體にてもなし、少しも色を見るべからず」

じやうつき 祥月。人の死んだその月。命日のある月。永代藏「明くれば去年のけふぞ親仁の祥月とて、且那寺に参りて」。「祥月命日」の略。

しやうつきめいにち 祥月命日。死者の一年忌以後の、その月のその日。正忌。

しやうと 先途。行き着くべきところ。目あて。出世瀧徳上「方々の家屋敷まで取上げられ、着のまゝでの御追放、何

處をしやうどにござらうぞ」。排縮緬卯月紅葉上「どこをしやうどにさして行く、笠屋與兵衛は在所へも、面目なしと戻りかね」

じやうとき 常齋。時を定めて、常に僧侶に齋(食事)を供すること。その齋(とき)。大矢數四「しのお内にも常齋がある、狂言に布施ない經を讀まれたり」

しやうとく 生得。生れつき。生來。槍權三上「六十八でも生得堅氣」

じやうどじゆず 淨土珠數。淨土を願ふための珠數といふ心からの稱であらう。二十不孝「麻の衣の墨染、淨土珠數を取出し、自らが縁は佛様に結ぶ志なり」。男色大鑑「是を形見と持ち馴れし淨土珠數を渡せば」

じやうどずごろく 淨土雙六。振出しを南國浮洲とし、上りを成佛とした雙六で、萬治の頃流行したものが。途中に初地・十地・等覺・妙覺などがあり、悪い目を振れば地獄に落ち、善い目を振れば天上界に上れる。二代男「火わたし、糸と上り、淨土雙六、心に罪無く浮かれ遊ぶを」

じやうなみ 城浪。三味線ひきの名。城春参照。一代男「丸盆割りて、さらぬ

遊ぶを」

體に直しおき、城浪が三味線ふみ折りて、しらぬ顔にして置所かへらるゝ」  
じやうねんぶつ 常念佛。常住に念佛を唱へること。絶えず唱へる念佛。懐視

三「有銀三百貫目、祠堂銀に入れて、常念佛をとりたて、老母諸共に後の世の願ひ」。薩摩歌上「諸譯の五十相傳うけ四十八夜の常念佛」

しやうばせんじん 生馬仙人。口から、手樽や黄金の小鍋や十四五の美女などを吐き出し吞み込むことが自在であつたと傳へられる老人。大下馬三「生馬仙人といふもの、毎日住吉より生駒に通ふと申し傳へし」

じやうはる 城春。三味線ひきの名。一代男五「城春が三味線の奉加帳」。元來、城は城方又は八坂方(都方の對)といふ琵琶師の一派に屬する者の名に用ひるが、これもその城から來たのである。

じやうび 狀日。晝狀の來る日。永代藏ニ「江戸棚の狀日を見合せ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事は爰に尋ね」  
しやうふう 正風。正しい風。くせのないすがた。俳諧に於ける正風とは、談林派に對して芭蕉の創めた一派の稱であるが、談林派の俳人は、當時、自ら

の風を正風とした。西鶴の大坂獨吟集に對する西翁の判詞に「是こそ俳諧の正風とおぼゆるは、ひがごころえにやあらん、知らずかし」といつてゐる。

しやうぶがたな 菖蒲刀。五月五日、男兒のある家の祝として飾る木刀。あやめがたな。胸笈用一「菖蒲刀の箔の色變り、鼈太鼓を打ち破り」

しやうぶがは 菖蒲草。藍色の地に、菖蒲の花と葉との模様を白くぬいた鹿のなめしがは。山城國八幡の神官が内職に染め出したものであるといふ。菖蒲は勝武に寄せたもので、多く武器に用ひられる。薩摩歌上「菖蒲皮の角十文字」

しやうぶづくり 菖蒲作。刀の細工の仕方的一种。女腹切上「三條小橋の下細工菖蒲作りの拵へも、五月からの詠へ」  
しやうへい 承平(正平が正しい)。次條の略。染模様的一种。正平革(しやうへいがは)から、布地にても應用したものである。二代男五「また其年も二十

にはなるまじき女、地は薄玉子に、承平の染紋、下には花柴の千種がへし、虹縞の糸屋帯、少し譯らしき風情」  
しやうへいぞめ 正平染。正平革の染め

方。白地を柿色に染めて、獅子唐草などの模様、及び「正平六年六月一日」の八字を所々に白くぬいたもの。正平六年征西將軍懷良親王が熊本の革工に命じて染め出させられたのに始まる。もと武器に用ひた革模倣。

しやうほ 章甫。儒者の冠。支那股の世のもの。後、孔子が之を冠つたので、儒者の冠として貴ばれる。縮布の冠。大職冠三「錦の袂、綾の沓、章甫の冠、石の帶」

章甫の冠を沓に履く 上下顛倒の譬。賈誼の弔屈原賦に、章甫薦履兮、漸不可久に據る。雪女五枚羽子板上「章甫の冠を沓に履かれんより、首陽山に蕨餅を練り」

しやうみやうごゑ 聲明聲。聲明するやうな聲。聲明は佛徳を贊嘆して唱へるもの、梵唄(ほんばい)に同じ。俗つれづれ三「例の浮藏主が聲明聲の淨瑠璃もをかしき」

しやうもだき 焼亡焚。しやうまうだきの約。建物など焼き亡すやうに盛に焚くこと。一代男六「次第に沓の煙くらべ後は焼亡(しやうも)だきにして林洞に酒の間をさす事」

し

**しやうや** 庄屋。領主の命を受け、那代・代官の下にあつて村の事務を統べる役。國性爺合戦ニ「庄屋の斷り代官所の詮義、何の彼のと喧しく」  
**じやうらくがじやう** 常樂我淨。佛語。常に我が心の清淨なのを樂むこと。常住安樂。常樂。一代女曰「女ばかりの一日暮し何の罪もなく、心にかゝる山の手の月も曇なく、是が佛、常樂我淨の身ぞと思ひしに」

**じやうるりごぜん** 淨瑠璃御前。三河國矢矧の驛の長者の娘。その源牛若丸と契つた事實が、淨瑠璃の起源をなしたと傳へられる。大下馬ニ「さきの娘の美しさ、昔の淨瑠璃御前も及ぶまじ」

**じやうをつく** 狀をつく。手紙を出す。狀文を遣はず。武道傳來記ニ「新平かたへ狀をつけ、今晩柵原にて仕合致すべき由ひやり」

**しやが** 鳶尾。蝴蝶草。莖の高さ一二尺。葉は劍狀で平行脈があり、光澤をもつ。花は四五月頃開き、形がかきつばたに似てをり、白色で紫葎があり、中心が黄いろい。織留五「昔日立花の家より鳶尾の前置を金子百兩の質に入れられける」

**じやかういぬ** 麝香犬。麝香鹿の異稱。交趾支那・ネパール及び中央亞細亞地方に産する。牡の臀部の皮腺から、いはゆる麝香を放つ。麝香獸。じや。じやかう。榮花流ニ「唐人船の大港、錦の山白絲の瀧、花れ木の御羅を筏に組み、麝香犬は和朝の猫より見え渡り」  
**じやかうねこ** 麝香猫。印度から産する肉食獸の一種。體の長さ二尺ばかり、やゝ猫に似てゐる。麝香の匂を放つといふ。かをりねこ。持統天皇歌軍法ニ「麝香の猫も同然の愚鈍者」

**じやがたら** 咬嚼吧。「じやがたらじま」の略。昔、南洋のジャガタラ島から渡來したといふ織物。物種集上「橋の小島がさきを渡り者、せいらすじやがたらさらす細布」

**しやかにひ** 釋迦擔。行路のの人などを片つける作法。戸板に載せたまま擔ふことか。油地獄下「無縁の手にかゝらうより、いつそ行倒れのしやかにひが、ましておじやるは」。曾我扇八景下「知らで手向の南無阿彌陀佛、釋迦になひして通りしは」

**釋迦も錢ほど光る** (諺) 釋迦も金錢のお蔭を蒙つて光り給ふ。「佛のひかりも

金次第」の類。胸算用五「南都大佛建立の爲めとて、龍松院立出で給ひ、勸進修行に廻らせられ(中略)、一升柄杓なるに、一步に一貫、十歩に十貫、或は金銀を投入れ、釋迦も錢ほど光らせ給ふ、今佛法の晝ぞかし」  
**しやぎる** さへぎる(遮)の轉訛であらう。頼朝伊豆日記ニ「先づ暫くと止め給へば、姫君猶も止まらで、とめて思ひをさせんとや、イヤなりませんとしやぎらるゝ」

**しやく** 杓。酌。私娼の稱。飯盛。出女の類。俚言集覽「奥羽二州にて賤妓を杓子と云ふ、又杓とばかりも云ふ、又ひしやくとも云ふ」。下の文は越後酒田町の問屋での話。「一代男」上方のはすは女とおぼしき者十四五人(中略)、是皆問屋の召仕の女にはあらず、銘々に宿を持ちて有りながら、旅人を見かけ集るよし、是を思ふに、此のいたづら津の國有馬の湯女に替る所なし、異名を所言葉にて、しやくといへり。人の心を波むといふ事かと、そこの人に問へども子細は知らず」

**じやくけい** 若契。若道の契。男色の關係を結ぶこと。男色大鑑「一萬の蟲まで

二九二

も若契の形をあらはすが故に「しやくし 佐古志(坂越)。播磨國赤穂郡の港の名。松風村雨東帶鑑五「夜さの泊りは何處泊りぞ〜、那波かしやくしか室がとまりか〜」

しやくし 杓子。賤妓の稱。しやく(杓)を見よ。

しやくしくわはう 杓子果報。食物の上にも果報を受けること。幸にも美食にありつくこと。大句數上「出来合のかき立汁に月の友、杓子果報も夕暮の秋。二代男一「日本一の御吸物ありと(中略)なまぐさ物と焼立て、繼目離るゝ時、これから杓子果報と、嵐が盛り」

しやくだらう 若道。若衆を弄ぶこと。男色の道。一代男一「もと生れつきうるはしく、若道のたしなみ」。男色大鑑三「何事にもあれ女の業を見ることなし、世に若道より外はなきにといふ」

しやくだらうるひ 若道狂。若道に溺れて遊ぶこと。男色に耽けること。衆道狂ひ。

しやくだらうざかり 若道盛。若衆として全盛を極めること。若道の最も盛な年頃。男色大鑑四「金澤に若道盛りの人のあるが中に」

じやくぢよ 若女。若道と女色と。若衆と遊女と。二十不孝一「金銀を若女二つに費し」。椀久一世話語下「若女二つの色遊び過ぎて」

じやくは雨 寂は雨。俚言集覽「じやくは雨。(上略)死に了るを云ふ」。宵庚申下「見れば此世の本望と、思へどじやくは雨とふる、涙隠くすぞ哀れなる」

じやくぶ 若武。若衆の武士。少年武士。男色大鑑一「かゝる激しき場にして其身は深手も負はず、また例もなき若武いづれも袂を泪になきぬはなし」

しやくま 赤熊。支那に産する犁牛といふ獸の尾を赤く染めたもの。拂子、旗、兜の飾などに用ひる。又、縮毛で作つた入れ毛の稱。下例



まくやし

は赤ら髪を罵つていふ。薩摩歌中「頭は赤熊、猫背中、鳩胸に顔は猿」

じやくめい 若命。若い身命。若衆の命。武道傳來記一「互に衆道の義理を耻ぢかはし、且那一人の御心に兩人若命を惜まず」

しやくる しゃくぶ。掬ふやうに、上にあげる。天網島下「車戸の(中略)しゃくつてあくれば、しゃくつて響き」

じやくれん 若戀。若衆との戀。若道の戀愛。男色大鑑六「一日を暮らす片手にも若戀を忘れもやらす」

じやくろぶろ 石榴風呂。石榴口を帯へた風呂。ざくろぶろ。湯槽に入る時に、身を屈めて入るやうに造つてある。

じやくうま 驛馬。あばれ馬。大句數上「邪々馬に神主一人引きのせて、夜前不思議の夢の御たづね」。釋迦如來誕生會一「跳ね馬じゃ〜馬放れ馬、心任せに跳ね廻れ」

しやくしやり 舍利から来たか。「味もしや〜りもない」と熟して、味も何もないことにいふ。

しやくちく 車軸。大雨のこと。「車軸の雨」、「車軸の如き雨」、などいふべきを略した語。永代藏四「俄かに黒雲立ちまよひ、車軸平地に川を流し」

じやくちくす 車軸す。大に雨ふる。二代男六「頻りに車軸して、行く水の流れ程身の淺間しきはなし」

車軸をさす 大に雨を降らす。天下馬「七日が中に車軸をさして、人種のないやうに降り殺さんと」。車軸を下す。車軸をふらす。

しやくばりかへる 鯨張返。しやちほこ

のやうに反りかへる。大威張りでふんぞりかへる。

しやちらごはい こはばつて硬いさまに

いふ。傾城反魂香上「是がなんの藤袴、

しやちらごはい皮袴と、どつと笑ひ」

しやちらさんぼう めちやくちや。手あ

たり次第。又は水の朔日上「私も近年彼

故に旦那の懸鏡も何もかもしやちらさ

んぼう、近づき中に痛手を負はせ、動

かれぬ身となり」

しやつぶり 水など注ぎかけるさま。「ざ

ぶり」の強い言ひ方。曾我會稽山ニ「胡

椒辛子の水鐵砲、唐辛子の石火矢、左

手へ廻つてしやつぶり、右手へ廻つて

しやつぶり」

しやにかまふ 斜に構ふ。剣道の語。刀

の柄を両手で持ち、すぢかひに構へる。

轉じて、しつかと身構へする。待ち構

へる。女腹切中「ヲ、用意すり子鉢、刷

匙、襦子木、しやに構へ、待つてをり

ます早う〜」

しやにん 社人。神社に仕へる人。しや

じん。神人。神官。永代藏ニ「貧乏神の

社人になれとて、一門中これを見かぎ

る」

じやのしそん 蛇の子孫。大酒家。大酒

の家筋。出世瀧徳上「並びもない飲み拔

け、親茂庵といふたも命を酒にかへら

れた(中略)、どちらへ似ても蛇の子孫」

しやのくどうじ 車匿童子。悉達太子(釋

尊)の王宮を出で給ふ時、馬の口取を

した童。釋迦如来誕生會「小童が在所

は流沙の川邊、車匿童子と申す者。上

は有頂、下は大地の底までも、君の爲

には御供」

しやまだるい てぬるい。まだるい。「し

や」はいま〜しさを表はす辭。出世瀧

徳上「しやまだるい。最前に惣兵衛め斬

損うたも女房故短氣も短慮もいること

か、思案は此胸にある」。薩摩歌下「ヤ

ア、しやまだるい男ども、おまんを引

立て連れて來い」

しやむ 沙室。しやも(車鷄)の異名。男

色大鑑入「沙室の鷄合いさぎよく」

じややなぎ 蛇柳。高野山の奥の院近く

一の橋と二の橋との間に右に入つた溪

流の畔にある柳。大蛇が地に蟠るやう

に見える柳。蛇身が大師の教化によつ

て柳に化したと傳へられるもの。萬年

草下「深く心を奥の院、渡らぬ先に渡ら

れぬ、みめうの橋の危さも、後世のみ

せしめ蛇柳や」。椀久「世物語上「佛法

名山の奇特は御朝の橋近く(中略)、蛇

柳の影より血まじりに小指の流るゝ

事」

しやら しやら(洒落)。しやれ。いき。

こしやく。曾根崎心中「やあ、洒落(しや

ら)な丁稚上りめ、投げて呉れん」

しやらくさし 洒落臭し。いきで、しや

れてゐるさまにいふ。轉じて、なま

いな、こしやくなさま。置土産ニ「梅鉢

をつけしは越前が定紋、さてもしやら

くさし」

じやらくら なまめいて、いとほしいさ

ま。じやらつくこと。女腹切中「二人

火燧のじやらくらを、憎や烏に起され

て」

しやらごゑ しやれた、なまめいた聲。

傾城酒吞童子三「とんと靠たれて寄添

ひの、無い事有る事しやら聲に、かみ

する女子の取廻し」

しやらどく すらりと解ける。當流小栗

判官ニ「ひつしごき帯しやら解けし」

しやらほどけ しやらどけ。自然とすら

りとほどけること。いつか結び目のゆ

るみとけること。五人女「袖枕取亂し

て、帯はしやらほどけを其のまゝに」。二代男三「髪はしやらほどけの後ろつ



じやれ 戲。たはむれ。じやれること。ふざげること。ざれごと。萬年草上「法印様の奥様の髪は結ばずに済みますかと、じやれを眞受けの顔ひねて、足らぬ心の花之丞」

じやれいた 晒板。風雨に晒されて、木目などのあらはれた板。「一代女」「なげしの上、しやれ板の額かけて、好色庵と記せり」。男色大鏡「軒に女人堂としやれ板に書付け」

しやれかひ 曝貝。水に洗ひ曝された貝。榮花咄「由井が濱の干潟に出で、薬を容るゝしやれ貝を拾ひしに」

しやれぶふん 洒落分。洒脱な、手輕なさま。氣が利いて、輕快な風にいふ。置土産四「今洒落分になつて、太夫に逢へる客の末社をも連れず、時の風俗とて木綿の仕立著物で、出掛けぬる人あり」

しやれもの 洒落者。しやれた行動をする人。はでやかな者。いきな、氣位の高い者。置土産四「亂酒の上にて一步一つ大事さうに取出し、女郎におくれば、是はと嬉しき顔つきにて、ひそかに戴

きけるを、何が都の洒落者、ちらりと見て、さもあるまじき事なれど、此太夫のすたるほどさもなく見えける」

じやれもの 前條に同じ。二代男六「爰に浦鳥といふ男、隠れなきじやれものにて、人より先に萬の事好む」

しやれる 洒落る。はでにふるまふ。氣まへを見せる。人の氣の物に慣れて深いのをいふ（色道大鏡）。織留三「太夫職になじみて此道にしやれるほど、揚屋の下々までもかゆき所へ手の行くやうに、ぐわらりぐわらりと嬉しがらせ」。は身なりをはでにする。めかす。白しやくなさまをする。きいた風に行ふ。

しやれをんな 白女。賣女。女郎。榮花咄「浪路を走りて播磨湯室の色港にさつと着きける（中略）、此所のしやれ女小左門といへるは、風俗戀の奴子にして、江戸の勝山が仕出しに替る所なし」。永代藏三「柴屋町より白女（しやれをんな）よび寄せ客の遊興晝夜のかぎりもなく」

しやんしやん 物事の定まつた時にする拍子の擬聲語。轉じて、事の落着をいふ。今宮中上「しやん」。さあこれ

から本ざけ「しやんと 整つたさま。確かなさま。きちんと。ちやんと。しかと。二代男「梅の一重なるがしやんとしたるも見よし」。松風村雨東帶鏡三「如何にしても冠がかたい。しやんと取らせて月額が刺らせて見たい」。同日「豊の明りの神樂獨樂。しやんとすわつて音たてず」

じやうしやむこ 従者。従者。じやうしやむこの條を見よ。

しゆうだう 衆道。若衆の道。男色の道。若道。西鶴五百韻「薄の様子尋ぬるは戀、月夜よし衆道女道のあなめ」。一代男四「我れ若年の時、衆道の念ごろせし人、住家もとめてありしを」

しゆうたふし 主倒。主人に損をかけること。一代女「金遣ふ客を疎かにして、不斷暇で暮らすはしゆうたふし、我が身知らずのなんびんなり」

主と病には勝たれぬ（談）織留五「主と病には勝たれまい程に、ふしやうながら宵から眠らずとも」

**しゅうちてり** 主早。奉公すべき主人の

ないこと。主取りに事缺くこと。雪女五枚羽子板中「主日ではいかず、斯波に扶持を受けんとは勿體なし」

**しゆがき** 朱書。楊弓の語。二百矢の内、五十矢以上の中すること。

**しゆがきくらゐ** 朱書位。前條「朱書」の位。朱書の程度。一代男三「折節楊弓はじまりて、おのくやうく朱書くらゐにあらそはれしに」

**しゆがく** 修學。家計のやり方、身代の持ち方などの意か。又、修業、身持の意か。懷硯五「我始めは身代人に負けず、讓銀三百貫目ありしを修學悪しく、次第に減りて、只屋敷一つ残れり」

**しゆきんおび** 手巾帯。手巾のやうな帯。腰帶。しごき。卯月潤色中「白縮緬のしゆきん帯、衣の上よからうと氣の付いた」。賀古敦信七墓廻三「しゆきんの上帯くるくと」

**しゆくいり** 宿入。宿所又は宿驛に入り來ること。特に多勢が宿に入る場合にいふ。一代男五「京より結構なる伊勢参りがあるはと(中略)、其の時は小室ぶしの最中、宿入にうたひて、馬子も兩口をとるぞかし」

**しゆくおくり** 宿送。宿驛から宿驛へ繼ぎ繼ぎに送ること。郵傳。

**しゆくがよひ** 宿通ひ。宿へ通ふこと。特に宿の遊里へ通ふこと。

**じゆくしくび** 熟柿首。熟柿のやうに、落ちやすい首。弱蟲どもの首。吉野都女楠五「鳥の餌食とならんより、じゆくしゆゆすり落し踏みつぶしてくれん」

**じゆくしばうず** 熟柿坊主。熟柿のやうに赤い坊主。吉野都女楠五「おのれこそ赤面の熟柿坊主」

**しゆくちん** 宿賃。借家料。家賃(やちん)のこと。織留三「大屋敷ども求めて此宿賃ばかり三十貫目一年に取りて」

**しゆくのもの** 宿の者。賤民のこと。しゆくどの(宿殿)。胸袋用四「都の外の宿の者といふ男ども(中略)例に任せて祝ひ初め、富々富々といひて、町中を駈け廻れば、家毎に餅に錢添へて取らせける」。しゆくむら「参照」

**しゆくはつ** 祝髮。髮を剃ること。祝は斷つ意。落髮して佛門に入ること。傾城反魂香下「三代四代の聖朝に仕へ、祝髮の後藏前の法眼、玉川齋永仙と號ししゆくむら 宿村。しゆくのもの」の住する村。夙村。特殊部落といふ類。又

は米の朔日上「大事の銀に行詰り、やうやう大和の宿村が、詭物を天のあたへ時の間を合せたく」

**しゆくらう** 宿老。町内の年寄役。町の取締。曾根崎心中「お宿老殿が仰せられしは、此判判は、先月の二十五日に落したとて」

**しゆくこうさん** 酒功讚。酒の功德を讚した文。即ち支那劉伶の「酒德頌」をいふ。一代男八「折節初紅葉の蔭に、自在をおろし、金の大間鍋に、唐土の酒功讚を移すとて、遊女三十五人思ひくの出立」

**しゆざ** 朱座。お上の監督の下に、朱及び朱墨の製造や賣買の事を掌つた所。兩吟一日千句「朱座はもと堺の浦をてもとにて」。大下馬四「此女朱座の門に立ち、または兩替屋の表に立ち」

**しゆさん** 朱三。雙六の語。賽の目が二つとも三の出ること。重三。

**しゆし** 朱四。雙六の語。賽の目が二つとも四の出ること。重四。前條参照。同様に疊一、重二、疊五、疊六などいふ。「重三重四の目に朱を差されてより以來、朱三朱四と呼ぶ」(委しくは、平治物語卷の一の八、叡山物語の事に出

は米の朔日上「大事の銀に行詰り、やうやう大和の宿村が、詭物を天のあたへ時の間を合せたく」

しゆくらう 宿老。町内の年寄役。町の取締。曾根崎心中「お宿老殿が仰せられしは、此判判は、先月の二十五日に落したとて」

てゐる)。

しゆじげさ 種字袈裟。佛語。わけさ(輪袈裟)に同じ。略式のけさ。僧の頸にかけるもの。

しゆじやく 朱雀。朱雀野の略。京都鳥原のこと。出世瀧徳上「月常住の夜見世かや。朱雀三谷もいかなこと、直下にみつの浪花の里。しゆじやか。

しゆじやくほそみち 朱雀細道。しゆじやかほそみち。朱雀野、即ち鳥原へ通ふほそ路。

朱序が母 朱序は支那管の人。字は次倫。曾て梁州の刺史となつて襄陽を鎮してゐたが、苻堅の苻苻丕が来てその城を圍んだ。序之を固守するや、序の母韓自ら城に登り、謂へらく「西北角まづ弊を受くべし」と、遂に百餘婢並びに城中の女丁を領し、その角に二十丈の城を築いた。賊その西北角を攻めたが遂に抜く能はずして退いた。襄陽の人此の城を夫人城といふ(晋書卷八十一)。  
最明寺殿百人上臈下「古へ晋の朱序が母、千餘人のをんな武者を領じて、襄陽に城を築き、賊敵を防ぎ、夫人城と名づけしは、上代異朝の賢婦ぞかし」

し

鬘を出して固めた髪。縹子のやうに光澤のあるので稱したと見える。安永年間まで流行したといふ。源氏冷泉節下「兜をぬいで太誓結、鬘附縹子びん天鷲絨脚結」。女腹切中「はれよい男の、江戸元結にしゆす髪」  
しゆずる 守隨。秤師の姓。卯花園漫録「東照宮關東御打入の後、甲州にありける秤を造る守隨三郎と云ふ者、井伊直政に申して、關東黄金白銀等を商賣するに、定りたる秤を用ひられん事を願ひければ、夫より今の制は定めさせ給ひけり」。量ること、掛けることの縁に用ひる語。兩吟一日千句「兩方の目から五月雨の空、守隨意豊後聲を掛けたる郭公」。大矢數二釣替に守隨もならぬ花盛、わか紫は三千兩まで」  
しゆせんざけ 集錢酒。集錢出して買った酒。頭わりの出金で酒を買ふこと。  
次條参照。武家義理物語「今宵の月に集錢酒呑まん」と各、勇みをなせり」陸摩歌上「天目にごきしゆせん酒、一兩二歩の取替を」  
しゆせんだし 集錢出。頭わりに錢を出し合つて食物などを買ふこと。あみだくじ(阿彌陀籤)。大矢數二「鱈鮓き

り空々寂々、集錢出しかなる雲のかさなりて。二代男「今日は集錢出しの濱焼、腹膨るまゝの晝寝」。同三「集錢出しのひともしの残りはないか」  
しゆだう 衆道。若衆道。男色の道。一代男「全く衆道のわかち、おもひよらず」。置土産「一座は衆道の色に前後忘るゝ酔心」  
しゆだうぐるひ 衆道狂。男色におぼれること。若衆狂ひ。兩吟一日千句「衆道くるひ尻聲のなき花の山」  
しゆだうごと 衆道事。衆道に關した事。男色。晝夜用心記五「今時衆道事は、野郎の外に沙汰なき世界に」  
しゆだうけいやく 衆道契約。衆道のちざりを結ぶこと。武道傳來記「一向兄分に頼み奉るべしと、俄かにいとほしくなりて、衆道契約の状をつくれば」  
しゆだうずき 衆道好。衆道を好むこと。又その人。兩吟一日千句「唯二人遊ぶ所は衆道ずき、出家をおつる善導法然」  
しゆだうのみち 衆道の道。男色の道。武道傳來記八「茂き小笹をわけて衆道の道に入り初むるは、出羽の國の戀の山ばかりにはあらず」  
しゆだうひみつ 衆道秘密。眞言秘密の

もぢり。男色のことにかけて、高野山のことにいふ。萬年草上「女嫌やる高野の山に(中略)、俗も尊む若衆のなきけ衆道秘密のお山とかや」

しゆちろうくわ 酒中花(しゆちゆうくわ) 酒盃の中に、山吹の莖の髓を縮めて作った花鳥の形などを泛べて、脹れ開か

しめる戯れ。俗つれ(五)「櫻をある時酒中花に仕懸け、是にて小錢を取る様なるも」

しゆちん 緋珍。しちん。緋子地に種々の色糸で模様を織出したもの。婦人の帯地羽織裏などに用ひる。大矢數五「野邊はしゆちんの縫つめの色」

出家侍犬畜生 (諺)出家と侍と犬と畜生と、何れも農工商の三者からは相手に取りにくい者といふ意。又、何れも相似寄つたやうなものとの意。吉野都女楠「侍たる身が坊主を相手にする物かと、云捨て逃げて行く。ヤア出家侍犬畜生餘すまじと、ぼつ立く」

しゆつとう 出頭。政務上の要職にある者。君側に侍する権臣。武家義理物語「御疑問近う召され出頭時を得て」。同「御判役承り出頭むかしよりは今ぞかし」

しゆつとういち 出頭一。前條「出頭」の第一位に居るもの。出頭第一。百日曾我「出頭」の祈經が首取つて、高名三度の都合にせん」

しゆつとうがらう 出頭家老。權勢ある家老職。君側に侍して要務に當る家老。

しゆつとうだいいち 出頭第一。しゆつとういち(出頭一)に同じ。曾我會稽山「出頭第一の祈經と、陪臣の本多が鹿論」

しゆつとうにん 出頭人。出頭たる人。出頭に同じ。その條を見よ。織留三「男盛りの出頭人、然も色を好みけるが」

しゆつとない 術無。じゆつなしの音便。苦し。せつない。博多小女郎下「苦しう御座ろ、じゆつないかと、いふも涙に掻き暮れて」

しゆとう 手灯。手燭。てしよく。てとほし。柄のついた小さい燭臺。五人女「夏中は毎夜手灯かゝけて大經のつとめおこたらす」

しゆはうづけ 種方付。處方書。藥の調合材料と分量とを記したるもの。武道傳來記五「玄芳見立に至極の所あり、彼に種方付いたさせ、いづれも吟味の上御藥調合さすべし」

しゆびす 首尾す。事の結末をつける。都合よくまとめる。特に男女相會ふこと

しゆぶた 朱蓋。朱塗の蓋(煙草盆などの)。その蓋あるもの。一代男「左の御手に朱蓋のつるを引提げ、立出づるより淋しさうなる」

しゆみ 須彌。しゆみせん(須彌山)の略。吉野都女楠三「しゆみの四方の四天王」

しゆみの鬘 塵尾の髪か。須彌と記す。馬のたてがみ(鬘)の髻甲(きかぶ)の上にあるもの。とりがみ。槍權三上「小波寄するしゆみの髪、しつくと乗戻し」。しめの髪參照。

じゆみやうの松 壽命の松。河内國北河内郡甲村大字岡山(大阪の陣の時、徳川秀忠の陣營に當つた處にある古松。長久の松ともいふ。油地獄上「こゝは名におふ壽命の松、御代長久の岡山を」

しゆもくざや

撞木鞘。槍の鞘の撞木(丁字)形に作られたもの。薩摩歌上「阿波淡路の兩國主、撞木鞘と九十文字」

しゆもくまち

撞木町。山城國伏見にある遊女町の名。織留五「撞木町の遊女、手づまりし時、誓紙を質に置くこそをかしけれ」

しゆら

修羅。修羅車の略。大石・大木などを載せて引く車。帝釋(大石)を動かすのは、阿修羅でなくては出来ないといふので名づけたといふ。兩吟「日千句」筑波山入札にして袖入れて、爰はめと木をしゆらでひく音」。又、石を載せる舟にもいふ。

しゆらい

集禮。諸入費。雜用。いろ／＼の勘定。大阪方言。「一代男三」集禮は五匁の外。「一代女四」一日六分宛の集禮忙しく。男色大鑑五「茶屋へは銀貳兩ほどの集禮なれば」

しゆらいだい

集禮代。前條に同じ。二枚繪草紙中「商賣の元手も利喰の月をどる泥躰汁のしゆらい代」。しゆらいせん(集禮錢)。

しゆらてたち

修羅出立。しにいでたち(死出立)。しにしゃうぞく(死装束)。死ぬ覺悟の身支度。傾城反魂香中「思ふ

願ひが叶はずば、(中略)、私がための修羅出立」

しゆらもやす

修羅燃やす。心をいらだたせる。忿怒の念を燃やす。いかりもだえる。狩庚申下「兎角如來の御方便、修羅燃やすそなたを、呼びに来るも彌陀如來」

しゆりさんまい

趣理三昧。理趣三昧の誤。法要の一種、二箇法要を行じて、その中に理趣經を讀誦すること。蟬丸五「六七日は法よ、うのしゆり三昧」

しゆりはんとく

殊利榮特。周利榮特。梵語。繼道、又は路邊生と譯す。佛弟子中、第一の魯鈍者であつた。その魯鈍の故に、兄のために祇園精舎の門外に返はれる。時に佛その號泣を聞き給ひ、掃帚を與へてその名を誦せしめたが、遂に悟る所があつて阿羅漢果を得たといふ。油地獄下「お談義に聞くやうな、殊利榮特の阿房でも」

しゆりやうしよく

受領職。受領とは、もと國司の稱であるが、後に實際その任に就かないでも、官名だけを許された。その受領たる職名を有する者。女腹切上「刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職」

しゆん

旬。果物、野菜類などの食べごろ、出來秋をいふ。轉じて、一般にその事を爲すに最も適當な時機の稱。二代男二「薪の買ひしゆん、味噌の突込の時」。永代藏六「小判は賣り旬かと相場聞くなど」

しゆん

むし(染)、又は、すむ(濟)の訛か。或は前條「しゆん」の轉用か。萬年草中「二階の酒のしゆんだ頃、祝儀の石を打込んで」は盛になつた頃の意。

しゆんき

順氣。氣分を順調にすること。醫療の語。源氏冷泉節下「香附子などにて血を開き、順氣の御療治然るべし」

しゆんぎ

順義。順序義理。道義にかなつたこと。武家義理物語「尤も至極、それは世間の順義ながら」。傾城酒吞童子三「世の中の義理じゆんぎを知るが最期、貧乏神が乗り移る」

しゆんけいまち

順慶町。大阪船場の町名。新町の廓の東口筋。油地獄中「ぎやかな弟に似ぬ心、順慶町の兄河内屋太兵衛」

しゆんけんしゆ

巡見衆。巡檢衆。物事を見まはりしらるる役人達。政道の成績、農作の豊凶などを見まはる人達。大矢數二「巡見衆曇らぬ月の空見えて、

唯御傳馬は渡る雁金

しゆんしやうまきゑ 春正蒔繪。山本春正の創めた蒔繪。春正については、或は山城の産で國學者であつたといひ、或は木下勝俊の門に入つて歌道の蘊奥を極めたともいはれる。傾城酒吞童子「嘘でござらぬ本膳は、春正蒔繪の價千金」

春宵一衣、價千枚 春宵一刻直千金といふ、蘇軾の春夜の詩句のもぢり。即ち花有清香月有陰、歌管樓臺人寂々、鞦韆院落夜沈々とある絶句の起句である。一代男六「春宵一衣、價千枚所也、花も火ともす時分になつて」

しゆんのまひ 順の舞。順次に舞ふ舞。順々に舞を舞ふこと。懷硯「水主楫取も目出度今日の酒盛と、順の舞の藝盡し面白く」

しゆんのみねいり 順の峯入。山伏修驗者の輩が、大和國葛城大峯に入ることゝ峯入といふ。毎年三月に熊野から入つて吉野へ出るのを順の峯入といひ、秋に吉野から入つて熊野に出るのを逆の峯入といふ。單に峯入といへば、春季の指す。一代女三「ある時吉野の奥山を見しに、そこには花さへなくて、

順の峯入より外にあはれ知る人影も見ざりき

しやうきだいじん 鐘馗大臣。唐の玄宗皇帝の夢に見えて、鬼を拉いだといはれる勇士。眼大きく、髯多く、黒い衣冠を着けて抜劍した姿が、今日も五月の幟に描かれてゐる。源氏烏帽子折一「風神雷神厄神も、取りひしぐべき威勢は、鐘馗大臣獅子王の暴れたる姿も斯くやらん」

しやうぐんちざう 勝軍地藏。甲冑を着け、右手に錫杖を持ち、左手に如意寶珠を載せ、軍馬に跨つた地藏菩薩。勝軍不動明王が、持法の行者守護のため四十八人の使者をして諸種の鬼王の身を現せしめたが、その第二十三、炎羅諸天王の稱。下文にあるものは、京都白川の北方、勝軍山にある地藏堂のことである。薩摩歌上「折々は京東山、勝軍地藏の隠遁者に因み」

松根に倚る 倚三松根二而摩三腰、千年之翠滿手、折梅花二而挿三頭、二月之雪落衣、和漢朗詠集、子日序、橘在列。傾城反魂香上一手ふる頭ふる年ふる松の、松根によつて腰つきも、千年の縁寫せしは作意なりけり」

しやうまんざん 勝鬘山。大阪天王寺の北西勝鬘院愛染堂のある所。むかし、聖徳太子が勝鬘經を講ぜられた靈地であると傳へられる。

しやうまんまゐり 勝鬘參。前條にいふ勝鬘院愛染堂にまゐること。勝鬘院は六月一日が祭禮で、大阪の遊女は盛裝を凝らし色駕籠に乗つて參つたものであるといふ。又は米の朔日中「あれく勝鬘參りの妓様達、駕籠が戻る」

しよがいな 歌のはやし詞。しよがへ、しよがへ、しよんがへなどともいつた。端唄の一種、「しよがひなぶし」の雛である。晝夜用心記「踊の一流に名を得ししよがひなの婆」

しよがひなぶし 端唄の一種。しよがいな、しよがへ、しよんがへなどと囃すもの。しよがへぶし。晝夜用心記「命をしよがひな節につなぎぬる所に」

しよがゑ しよがへ。「しよがいな」の條を見よ。吉野都女楠「夜さ様のねすがた窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、さかりまだしきねやの内、さては野に咲く百合の花、しよがゑ、少くわん」とぞ謠ひける」

しよくえつ 食悦。美食に有りつくこと。

食福にあふこと。美食大食を悦ぶこと。「のぞみ次第の食悦さすべし」。出世瀧徳上「大酒食悦お蔭を蒙る八十末社」  
しよくどの 「してどの」の「て」を、板本に變體假名で「よく」とも「よく」とも讀めるやうに書いてあるので(一代男)、從來「しよくどの」又は「しにくどの」と讀みあやまられてゐる。

しよげ しまげること。氣力のなくなること。そのさま。雪女五枚羽子板中「さすかの藤内しよげになり、扇の骨で白壁に、小坊主書いてぞめたりける」  
しよげどり しまげ鳥。氣力の衰へたさまを鳥に譬へていふ。しよげどり、戀八卦柱曆中「中に挟まるしよげ鳥の、浪人の巢の鳥聳き屋根」

しよげる (一) 意氣が衰へる。しをくとなる。(二) しげるの訛。むつまじく語る。男女のちぎるにいふ。吉野都女楠四「一盃あげてしよげるべい。ヤ、酒賣の又六がもう來る時分と、比丘尼一人に侍三人」

しよこしよこ ちよこく。小走りに走るさまなどにいふ。出世瀧徳下「仁三郎いそがしげにしよこく」と立出で「しよさ 所作。しわざ。次第。いはれ。

祭花咄五「何の所作も聞かずに、八右衛門宿とばかり曲者なり」

しよさい 所在。ひま(隙)なこと。但里集覽「所在。愚案、此所在は俗に閑居無事なるを所在がなと云へる所在在(續無名抄世話字盡)。源氏鳥帽子折三「職人なれど鳥帽子屋は、お公家交はり上びたる、しよさいに連れ氣もいたり」

しよさい 所在。(二) すること。しわざ。轉じて身分。常のふるまひ。丹波與作中「しよさいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小まん」。孕常盤四「伊達を所在の女房達、淨瑠璃御前の夕化粧」。しよさいなしの略。冥途飛脚中「辛やしよさいと恨むらん」

じよさい 如才。ぬかり。油斷。今宮心中上「眞法さま、いよく頼み上げますと差出せば、ヲ、く是では此方も如才がならぬと、數珠袋に納むる内」  
しよさくる 所作をする。仕事をする。はたらく。しよさくる。浮世親心形氣二「店へ出てしよさくりてゐるゝ所へ」

しよしき 諸色。諸品。いろく。の品。壽門松下「道具諸色に封印付き」。博多小女郎上「毎年の如く諸色を仕込んで下る處」

しよじやく 諸釋。諸種の釋書。いろいろの佛教書類 武道傳來記「觀念の南窓に諸釋を集めて、見臺氣を移し」  
しよそく 初足。初めて足を運ぶこと。初めての訪問。男色大鑑「かゝる野末までの御初足、またもや袖風の尾花も騒しき此夕」

しよたい 所體。しよてい。みなり。すがた。身裝。曾根崎心中「歩みならはざ行きならはねば、所體くづをれア、耻しの、森で裳裾がはらくく」  
しよたいかか 所帶嗅。生計のみにあくせくしてゐる妻。世話女房。

しよたいがた 所帶方。家政向き、生計に關する事。  
しよたいじうて 所帶染みて。所帶になれて。生計にばかり心を向けてゐるさま。今日、大阪で「しよたいじゆんで」といふ。油地獄上「所帶じうて氣がこうとう、好い女房にいかい疵、見かけばかりでうまみがない」

しよたいもち 所帶持。世帶持。一家を持つて生計を立てること。その人。永代藏四「下人一人も使はぬ人は、世帶持ちとは申されぬ」  
しよち 所知。知行。所領。上から貰ふ

し

し

祿。武道傳來記「千石所知くだしおか

しよちいり 所知入。所領を受けた大名

が、初めてその國に入ること。日本振袖始「歩き振は家鴨の所知人、物ごしは破れ鍋」

しよつう 初通。初めて通はせる文。最

初の文通。一代女「しよつうよりして、文章命を取るほどに、次第々々に書きこしぬ」

しよつう 書通。文通。書面を通はせる

こと。男色大鑑「いづぞは書通に心を御知らせ申すべし」

しよてい 所體。なりふり。身なり。姿。

様子。一代男五「信太妻の女房、江戸風のしよていと申」。薩摩歌上「かゝげおろして前掻合せ、所體つくれば」

しよてん 諸天。佛語。もろくの天上

界。又、その天上界の神々。武道傳來記「爰は方便の偽り、諸天もゆるし給へ」

しよまんにん 諸萬人。幾萬人。數萬人。

油地獄上「此諸萬人の群集を、突きのけ押しわけ目に立つ風俗」

しよむわけ 所務分。かたみわけ。遺産

分配。胸算用「所務分の大法は、たと

へば千貫目の身代なれば、總領に四百

貫目、居室につけて渡し」。二代男三「他人の所務分取つて、跡形はぬより酷し」。永代藏「あまたの親類に所務わけとて箸かたし散らさす」

しよやくごめん 諸役御免。家柄の特別

なもの、又武家の御用を承りる者が、總べての課役を免ぜられること。一種の特別待遇。武道傳來記「高家なれば、諸役御免あつて、世を遊樂にその名を埋み」。女腹切上「刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職」

しよれい 諸禮。諸種の禮儀。いろく

の作法。又、その禮儀作法による物事。燕門松上「初盃の内祝ひ、過ぎて諸禮の妓揃へ」

しよれいがた 諸禮方。諸種の禮儀・作法

に關する物事。儀式ばつたこと。織留三「出家の淨瑠璃、百姓の諸禮がた、これ皆よしなし」

しよれいしや 諸禮者。禮儀作法に通じ

てゐる者。禮法の師匠。俗つれん「御所がたの作法心得たる女の諸禮者を呼びくたして」

しよろいじんの大阿羅漢 「しよろ」は諸

漏で諸種の煩惱。「いじん」は已盡で已

に盡きること。「諸漏已盡、無復煩惱、

名阿羅漢」(金剛經註)。傾城酒呑童子「諸漏已盡の大阿羅漢、神通力を試さんと」

しよわけ 諸譯。諸分。いろくの事情。

細くこみ込つた次第。特に遊里、遊興に關する諸種のふるまひ、しきたり、作法などの稱。又、諸雜費。一代男七「諸分の日帳」。二代男五「此の道の學問の島原にて、十年ばかりの諸分覺え給へ」。榮花咄三「諸分の女人成佛の咄しばかりに暮しける」。永代藏「此内二奴はいづぞやの諸分、その残は皆合力」

しよらんけぬき 書院毛抜。書院用の煙

草盆に添へておく毛抜。刺らずに、毛抜で髭を作ることが行はれた當時の備品である。置土産「殿様は、置頭巾して書院毛抜を持ち」

しよみんすずり 書院硯。一代男五「四尺

の長机に、書院硯・筆掛・香箱さまの唐物道具」

しらいしかみこ 白石紙子。奥州の白石

から出る紙子。胸算用「これにて御勘忍あれと、白石の紙子二反差出して」

しらおび 白帶。風呂屋者などが締めた

白地の帯。一代男「風儀は、ひとつ着



物、つまだかに白帯心のまゝ引きしめ、やれたらば親方のそん。しろおひ。

しらがり 白頭。白毛で作った、槍鞘のかざり。薩摩歌上「白がしらの大かぶろ、これ越前家」

しらかはいし 白川石。碑石。敷石などに用ひる色の白い石。京都市外白川村の山中から産する。堀川波鼓下「白川石を商ひに賤の驛らが馬追ひつれて」

しらがまち 白髮町。大阪の町名。今の新町南通三丁目の邊、白髮橋の北の通。

しらぎごと 新羅琴。新羅國から傳來したものと云ふ。十二絃の琴。その絃に十千及び天地の名目を附する。武道傳來記六「親より賜はりし新羅琴」

しらく 白く。(動詞)(興さめる。一代男七「かね捨てながらしらけて、人に笑はれ」。(ウ)うちあける。あからさまにする。一代女三「此人にあふ時は更に身を遊物を語りけるに」。(ウ)間が悪くなる。具合が悪くなる。五人女四「此寺の大黒になりたくば、和尙の歸らるゝまで待てと目を見開き申しける。お七しらくて走り寄り、こなたを抱いて寝に來たといふ」

しらごかし おためごかし。好意などを特に言ひたてること。二枚繪草紙中「いつやらの紙花も思ひの外に遅なはり(中略)と、捻ぢて出せし鼻紙のしらごかしこそ笑止なれ」

しらごゑ 白聲。黄いろい聲などの類。かなきりごゑ。男色大鑑五「風吹けば沖つ白聲にて諷ひ出して」

しらさえび 二代男三「比丘尼船の仕出し、山伏舟、しらさ海老賣る眞似」

しらさ海老にて鰯を釣る(諺)少し與へて多く得る譬。「海老で鰯を釣る」ともいふ。

しらす 白洲。玄關前の白砂を敷いた處。百日曾我四「外垣二かは押通り、御白洲の内がきにひしくとすがり付」又、訴訟を裁判し、罪人を糾問する處。

しらすが 白須賀。東海道五十三次の内、荒井と二川との間、遠江國濱名郡にある宿驛。丹波與作上「吉田二川、白須賀ちよいと越えて」

しらすみ 白炭。しろすみ。石灰。胡粉などで白く色をつけた枝炭。茶の湯などに用ひるもの。新可笑記三「池田山の奥にて白炭焼きて僅かに煙立てしが」

しらちやう 白茶字。舶來の絹布。多く

は茶字絹といひ、袴地などにする縞物であるが、その白地のものの稱。傾城反魂香中「二つ重ねの白無垢白茶字に、縹紋紅裏に源氏雲の裾」

白波の太鼓 白浪即ち盗人のやうな太鼓持。慾ばかり深い頼間。出世瀧徳下「吾妻に深く染附の、龍田や沖津白波の太鼓も連れず」

しらばけ 白化。そらとばけ。しらばくれ。織留五「精進腹では酒が呑めぬとしらばけの輕口」。同「只白化に放下師までも品玉どる種の行き所をさきへ見せ」

白齒の腰元 未婚の侍女。最明寺殿百人上臈下「左右に白齒の御腰元、島山ほどいて若衆齋」

しらはり 白張。のりをつけて張つた白布の狩衣。はくちやう。神官などの着るもの。榮花咄「黒衣を着すれば出家烏帽子しらはり着れば神主」。懷硯三「白張の袂を烏帽子をかしげなる様したる」

しらびくに 白比丘尼。白衣を着てゐる尼をいふか。歌比丘尼の稱であらう。西鶴五百韻「白比丘尼とてそでの露霜、むしの音もほそりを一つのぞまう

しらびくに

し

か

白髭の神 近江國滋賀郡小松村にある白髭大明神。祭神は猿田彦命。源氏烏帽子折五「白髭の神、なみはさら〜さらさらゑつさらゑい」

白髭の岩飛 水練の上手な男であつたと見える。綽名。大下馬四「近江の湖にて白髭の岩飛、吉野の瀧おとし、それ皆練磨なり」

しらべ しらべのを(調緒)の略。鼓の皮のへりにかけて、胴に引きつけしめる紐。置土産「柳行李に物を入れ、鼓の調(しらべ)の古きにてからげ」

しらぼし 白乾。魚鳥・野菜などを鹽をつけずにそのまま乾すこと。そのもの。すぼし。

しらむ 白む。衰へる。勢くじける。負色になる。源氏烏帽子折四「平家の兵切立てられ戦しらんで見えにけり」

しりげた 尻桁。尻の出ばつた部分。しりべた。一代女四「時花ればとて今時の尻桁に掛けたる端紫の鹿子帯、目にしみ渡りて、さりとはいや風なり」

しりこぶた 尻の肉。しりこぶら。しりたむら。しりべた。曾我會稽山四「頬先肩先尻こぶた、弓手の太股馬手の足音」

しりごゑ 尻聲。名前の下へ附ける呼びごゑ。一代男二「いつとなく我になつて、様といふ尻聲もなく」

しりざし 尻刺。戸を閉すために刺すもの。ささる。一代男二「雨戸にしりざしをして寝るばかりに身拵へ」

尻に窓の明く 後姿をよく視る形容。織留五「風俗國に變れば尻に窓の明、程見送りける」

尻割ける 隠してゐたことがあらはれる。素姓がわかる。化の皮があらはれる。男色大鑑七「此座の若衆尻の割ける事をおそろしく」

しりばすね 尻蓮根。皮膚病・腫物の類。二代男「脚布より下のおもひどは、今歴々の太夫達に、尻ばすねもあり、田虫もあり、見える所の錢瘡(ぜにがさ)も」

しりびき 尻引。鶴鴿の異稱。こひをしへどり。男色大鑑「浮橋の河原にすめる尻引といへる鳥の歌へて、衆道にもとづき」

尻結はぬ絲 尻ぬけになつて物のたまらぬ譬。しめくりのないこと。永代藏三「傾城狂ひ、野郎遊び、尻も結ばぬ絲の如く、針を藏に積みても溜らぬ内證」。俗つれ四「尻も結ばぬ絲をい

やるな、それは後へ抜け事」

しるしつけのくわん 印附環。槍の帶胴金の所にある、槍じるしを附ける環。しるしの立ちくらみ 一代男四「しるしの立くらみといふは、出合茶屋の暖簾に、赤手拭結び置きぬ、必ず此所にて病ひ出して、爰を借るとてはいる事あり、氣を付けて見てそれと知り給ふべし」。男女會合の魂膽。

しるしの杉 百日曾我五「さてこそ所も三輪の山、しるしの杉のふる事を、我が身の上によそへたり」。我が庵は三輪の山も戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門(古今集十八、雜下)の歌に據る。しるしの神杉。

しるしのたのみ しるし(證)の類み。結納品。たのみ。武道傳來記二「婚禮を調へ、しるしの類みをはこばせ」

しるしほ 汁鹽。うるほひ。色氣。艶氣。しれたる 痴れたる。愚かなる。織留二「手代あぐみて扱もしれたる御坊かな」

しろうきやく 素客。遊びに馴れない客。しろうとである客。俗つれ三「延紙の仕舞ひ所は肌着の上替、襖先を綻ばせ置きてこれへ隠し、素い客に不思議がらす」

しるしのたのみ しるし(證)の類み。結納品。たのみ。武道傳來記二「婚禮を調へ、しるしの類みをはこばせ」

しるしほ 汁鹽。うるほひ。色氣。艶氣。しれたる 痴れたる。愚かなる。織留二「手代あぐみて扱もしれたる御坊かな」

しろうきやく 素客。遊びに馴れない客。しろうとである客。俗つれ三「延紙の仕舞ひ所は肌着の上替、襖先を綻ばせ置きてこれへ隠し、素い客に不思議がらす」

しろいひと 素人。前條に同じ。置土産ニ「九月二十日過に時づけ屑の小判、さては素い人なるべし」。しろうと。

白兔の子を貰ふ 仕合を得る。幸運に會ふ。曾我會稽山四「私も運が悪いは。まあ二三日狩場に居れば、白兔の子を貰ふもの。何も時節と思はんせ」

しろうるり 徒然草に出てゐる故事。盛親僧都が或僧を見て、「しろうるり」と名づけたのを、しろうるりとは何ぞと人に尋ねられて、我れも知らず、もしざる者あらば此の法師の顔に似たものであると答へたと云ふ。蓋し、しろうり(白瓜)を「しろうるり」と誤つて言つたのを紛はしたのであるといふ。兩吟一日千句「守山の陰もかたちもしろうるり、草津の姥はぬんなりとして」

榮花咄ニ「徒然草に不埒なる時代違ひの白うるりか、又は難波の大寺に住める目なし稚子といへる化物なるべし」

しろがねや 白銀屋。銀の細工をする人。その家。しろがねし。懷硯四「京三條通の西、白銀屋彦九郎」

しろがらす 白鳥。白の白い鳥。有り得べからざるものと譬へる。白鳥里評判記の名。貞享頃に流行したと見

える。二代男ニ「宗吉が白鳥にも書くには盡きせず」。榮花咄「胸の焼きつけといへる書物は、榮屋町の白鳥なり」

白きを後 繪の事にいふ。論語八佾篇の「白きを後と花の雪」、野山や春を畫くらん」

しろごらう 四郎五郎。俳優の名。立役者中村四郎五郎。

しろざ 四郎三。俳優の名。櫻山四郎三郎のこと。親仁役が得意で、「中肉にして柔かなる實事師」と呼ばれて居たといふ。油地獄上「幸左衛門が思案ごと、四郎三が愛いごと、ちんつゝ」

しろすけかご 次郎介駕籠。二代男「長者町の次郎介駕籠を飛ばすに」。鳥原通ひの駕籠と見える。

しろづき 白突。白搗。米などよく搗きしらげたもの。大矢敷「白突に俵藤太が夢覺めて」。同三「秋の霜今白突の餅となり」。五人女三「白突三升五合ほど、鏝一つ」

しろど 遊女の名。一代男三「神崎中町にしろど、白日などいへる遊女の出でし所やと、見ぬそのかきもなつかしく」

しろとすい 素人帥(しろとすゐ)。しろ

うと(素人)で粹人ぶるもの。遊興に物馴れぬのに粹をまねる人。一代女「物に馴れたる客は格別、まだしき素人帥は恐れてこなす事ならず」。半可通。

しろとをんな 素人女。しろうとをんな。遊女・賣女に對して普通女の稱。男色大鑑七「わけ里とて、女の風俗もしろと女よりは見よげに」

しろなす 代爲す。代價となす。金にする。賣る。大職冠三「海澤利布を代なし」。女腹切上「夜の物まで代なしして三百貫の折紙代」

しろぬめ 白紙。白色のぬめ。一代男「白紙の着物給はり」。胸算用「白ぬめの足袋はく」

しろねずみ 白鼠。大黒様の縁者とせられるところから、福の神の意に用ひ、又、主人を大黒に比して、そのために盡すものとして、よく働く番頭の意にも用ひる。壽門松中「白鼠の富貴と榮えるを、親鼠が見るうれしき」。一代女四「京且那のために白鼠といはれて、大黒柱に寄り添ひて」

しろむ 白む。たじろぐ。衰へる。しろむ。出世景清ニ「景清は飛鳥の術を得た

し

れば、さうなく討たれんやうもなし。  
 雙方しるみて控へたり」

しろめ 白目。白女。江口の遊君の名。

大江玉淵の女。古今集の歌人。一代男

三「なほ行末に神崎中町に、しろと。白

目などいへる遊女の出でし所やと、見

ぬさのかみもなつかしく」

しろめぶち 白目斑。二代男二「こぶし絹

の二布、白目斑の挿櫛、淺黄緒の雪踏

を鳴らし」

しろもち 白餅。搗いたまゝの餅。餡な

どつけない餅。

しろもと 城本。城のある地。領土の城

ある處。薩摩歌上「御城本は但馬國、京

の屋敷は千本通り」

しわぢい 皺爺。しわおやぢ。老いて皺

の寄つた男。老父。國性爺五「此の皺爺

が命一つに仕損ぜしといはれて」

しわばら 皺腹。老人の腹。その腹を切

ること。吉野忠信「是にて皺腹仕り」

しるし 籤(しんし)。しいし。堀川波鼓

上「しゐしゝを張物に、かいまみ覗く

鼓の手に」

しをりど 枝折戸。木の枝など折りかけ

て作つた扉。柴折戸の類。一代男三「枝

折戸より聲も惜まず唄へば」

信あれば徳あり (諺)信心する者には福

徳が惠まれる。永代藏二「信あれば徳あ

りと、佛につかへ神を祭る事おろかな

らず」

しんい 嗔恚。いかり、いきどほり。轉

じて煩惱・情慾などの意。五人女二「人

目せはしき宿なれば、うまい事は成り

がたく、しんいを互に燃やし、兩方懸

にせめられ」

しんえき 神易。神慮によつて現はれる

占。最明寺殿百人上臈上「神易と名づけ

六十四本のみくじを能ぬ」

しんえふ 心葉。こゝろば。挿頭(かざ

し)として冠につけるもの。金銀で作

つた梅の枝の形などを用ひる。日本振

袖始二「錦の著長、銀の心葉鬘づらに取

つてつけ」

しんがく 心學。明の王陽明の學說に、

神道佛敎の趣意を加味した實踐道德の

敎。二十不孝目「その頃備前は心學盛に

して、人の心もすなほになり」

しんかけ しんかけ(神陰又は新陰)流に

かけていふ。大矢數三「用心時の木刀ひ

つさげ、しんかけの影面白き空の月」

しんき 心氣。心のいらゝすること。

心のもだえ。辛氣。一代男一「昔行平何

ものにか足さすらせ、しんきをとらせ

給ひ」。同七「吾妻しんきの片手に、文

共引きさき」

しんきやせ 心氣瘦。心を勞して瘦せる

こと。松風村雨束帶鑑二「聞いて羨むし

んきやせ、此君ゆゑと洛中に、肥えた

女や絶えけらし」

じんぎぐみ 神祇組。男だての組合の名。

俗つれゝ「義理づめ、意趣の外は鞘

咎なかりき。よしや組も若盛り的事、

大小の神祇組も、天の岩戸の靜かなる

この御時」

じんぎだて 仁義立。仁義ぶること。親

切らしく振舞ふこと。冥途飛脚中「仁義

立ておいてくれ」

しんきなき 心氣泣。心氣を沸して泣く

こと。もだえて泣くこと。五十年忌歌

念佛中「是れ程思うた中、何故に女夫に

なれぬと、しんき泣きにぞ泣きむたる」

じんきよ 腎虛。漢方の病名。房事過度

の爲めに起る身心の衰弱症。一代男八

「女譚の鳥に渡つて(中略)、腎虚してそ

この土となるべき事、たまゝ一代男

に生れる、それこそ願ひの道なれ」

しんぎん 新銀。新に鑄造した銀貨。特

に享保銀の稱。享保銀は以前の四寶銀

に對して、四倍の價値があつた。天網鳥中「小春が命は新銀七百五十匁吞まされば、此世に止むることならず」しんくいごふ 身口意業。佛語。身と口と意とがする業(善惡種々の業)。さんごふ。

しんくな しんき(心氣)なるの轉。面倒な。うるさい。女腹切上「しんくな仕事で御座りんす」

しんぐわいむべつぼふ 心外無別法。佛語。吾人の認識する諸現象は、各自の心識から出たもので、別にその物が存在するのでないといふこと。聖徳太子繪傳記「心外無別法、佛も法も心にて夫婦も亦心なり」

しんこ 倅粉。梗の粉を水でこねて、蒸して餅のやうにしたもの。しんこの團子。女腹切上「ハテ茶ばかりで済むものか、しんこの様なものなりと、茶の子甥の子、のこく振舞や半七」。眞饅(しんこ)

じんこぶき 塵劫記。算盤(そろばん)の書物。大句數上「塵劫記智慧の外なる積物」

しんざいけ 新在家(新座地)。連歌の宗匠花下の稱。和泉國泉南郡山直(ヤマ

タベ)郷の大邑。その地は宗祇以來宗匠の居住地であつたのでいふ。織留「連歌は新在家へ立ち入り」

しんざいけしゅう 新在家業。新在家の人達。前條を見よ。永代藏五「風俗も自ら都めきて新在家業の衣裳をうつし」

しんざう 新造。新艘。新に傾城になつた女。色道大鏡「新艘。禿なるも、禿ならざるも、傾城となりて初めて出世したる砌をいふ。船を新しく造り立てたる詞より出たり」。百日曾我「井筒屋のひがきと申す新造と、傍からいふも耻かしく。壽門松上「新艘の初床より、面白いと悲しいと、わけのありたけ仕盡して」。又、人の妻の稱。

しんざもの 新座者。しんざんもの(新參者)。新に奉公などに參つたもの。武家義理物語「同じ家中に新參者七尾久八郎と云へる人の子に」

じんざあもん 甚左衛門。俳優。大和山甚左衛門。坂田藤十郎の感化を受けてやつし役を得意とし、小坂田と呼ばれて上々吉の位附を興へられた(延寶五年

享保六年)。油地獄上「やつしは甚左衛門幸左衛門が思案ごと、四郎三が憂いごと」

新左衛門の澁紙 俗つれん(五)「毎年六

月中は小判の土用干を遊ばしけるに、新左衛門の澁紙一枚に百づつ針金括にして」

しんざん 新三。次條の略。晝夜用心記「大阪より京へ十三里の夜舟新三とて一睡の中に上り下れば」。同「石屋の濱より新三に乗合船、一夜の事と互に膝をならべ」

しんざんじつこく 新三十石。京都と大阪との間を通ふ乗合船の名。前條參照。一代男五「あたら夜もすがら新三十石に乗合の心地するなり」

しんし 簾。布を張る時に、その兩縁に

さしてばねのやうにし、伸張をよくさせるに用ひる竹の串。しいし。

しんしが鶴 「しんし」は晋州。支那周の靈王の太子晉が、白鶴に乗つてゐたといふ列仙傳中の故事に據つて稱する。松風村雨東帶鑑「孔雀鳳凰、しんしが鶴、松と竹とに舞ひあそべば」



しんし

し

しんしやう 身上。身代。家の財産。資産。緋縮緬卯月紅葉中「おのれ不義者しんしやうの敵」

しんじやう 身上。身の上。一身。生命。女腹切「お腹へぐつと押立て、右の脇まで一筋に、唯一言の義に依つて、身上を果されたり」

しんじやうごよみ 進上曆。進上する曆。贈呈用の曆。戀八卦柱曆上「算川場には手代共、進上曆のまき包み、江戸大阪のくだし曆」

しんじやうすむ 身上濟む。しんだいすむ(身體濟む)と同じ。新可笑記「丹州に親類有つて、其人取持ち身上濟みて」

しんじやうだい 進上臺。進上物を載せて出す臺。堀川波鼓上「口上陳べて、進上臺を差出せば」

しんしやく 斟酌。加減すること。遠慮。辭退。永代藏「思ひの外なる藥代、くすしも再三の斟酌」

しんしやくがほ 斟酌顔。斟酌する顔附。ためらふ様子。斟酌なること 遠慮すべき事。武家義理物語「此儀は少し斟酌なることながら、何事も命かけてと申しかはせし義

理にせめられ、此事請合ひければ」しんしんと しみぐと、身にしみるさまか。深々か。一代女三「情しりの腰元がなれの果と、舞扇の風しんしんと、

相村のこなたは稻荷の鳥居の邊にて、裸身に覺えて」

信心に徳あり (謠)「信あれば徳あり」

に同じ。永代藏「信心に徳あり次第に祭え、家名を大黒屋新兵衛としらぬ人はなかりき」

じんずる 腎水。精液。一代男「うなるこよりこの方、腎水をかへほして、さても命はあるものか」

じんずる 神水。神に供へた水。又、靈驗ある水。

しんずるはんきやうてん 心隨萬境轉。佛語。心は種々の境界に隨つて轉ずる。宵庚申下「心隨萬境轉と聞くときは、心は境界に従つて轉じ變る。そなたも千世といふ名を、ふうがく良訓信女と改め」

じんせい 腎性。腎情。じんずる(腎水)に同じ。西鶴五百韻「花ぞかし君うちとけて山の芋、春行水のまさる腎せい」。大矢數「また涌くでなし夜の腎性、昔男互に脱(から)に成りにけり」

しんせん 新錢。新に鑄造した錢。永代藏「山田を出でし時新錢二百貫調へ、

から尻馬に付けて。織留「新錢をなぐる人は稀にして、年々伊勢中の損つもり難し」

しんぞ しんざう(新艘)の約。油地獄上「船はしんぞの乗り心サヨイヨエ、君とわれと、我と君とは圖に乗つた乗つて来た」

しんぞ 眞ぞ。神ぞ。眞に。まことに。實に。曾根崎心中「色に焦れて死なうなら、しんぞこの身はなり次第」。五十年忌歌念佛中「朝晩に心をつけ、しんぞ思ひを盡せども」

しんぞしんぞ 神ぞ。前條の「しんぞ」の重言。もと、誓詞の「神八幡」などいふ神(しん)から来た語。全く。眞に。置土産「是はどうした仕方、神ぞ」筋なき金を貰ふべき子細なし」。萬文反古「迷惑さに申すには神ぞ神ぞ御座なく候。同五「命を捨つるより候はなく候、神ぞ」死にかねぬ女に

しんたい 身代。(身)身のしろ。その身に屬する財産。しんしやう(身上)。身體。身袋とも記す。武道傳來記三「身袋よろ

しきに構はず、心底のいさぎよき男、町人にはしほらしき。(二)身分。地位。武道傳來記五「村芝與十郎といへる舟改め、身體は輕けれど、水主船頭にあがめられ」

しんだいあく 身體明く。家産を空にする。「身代打つ」に同じ。二枚繪草紙中

「新地狂に身體あげ、方々の借錢」しんだいありつく 身體有付く。仕官する。出仕する。武道傳來記六「行末はいかやうとも申上げて、庄之介をも身體有付くべき心から、他事なく思ひかはして」

しんだいうつ 身代打つ。身代を打込む。資産を皆投ずる。

しんだいかせぐ 身體稼ぐ。身代を得ようと働く。生計の道を立てるため稼ぐ。武家義理物語四「妻子は國かたに預け置き、身體かせぐうち」。同二「妻子はかゝる節の難儀、又身體を稼ぐうちに」

しんだいぐすり 身代薬。身代を保つための薬。かたぎの女房の稱。今宮心中上「女房がなければ、人の世帯は落着かぬ。身代薬の女房を早う持つて落ちつきや」

しんだいすむ 身體濟む。仕官の身となる。出仕する。俸祿を得る身となる。武家義理物語六「岐阜中納言秀信公に身體すみて、武藝は外になし、歌道専らに心がけしが」。武道傳來記六「此里近き城下に又身體濟みければ」

しんだいそてかがみ 身體袖鑑。資産家一覽ともいふべき書物。蓋し假想のもの。俗つれ、五「現銀三千七百貫目持つて大きな額をしゃるな、都の身體袖鑑を見るに、やうく四十七番目に書けり」

しんだいとりくむ 身體取組む。「身體濟む」、「身體有付く」などに同じ。新可笑記一「此御家中にするべあつて、身體取組みしに、此浪人楠正成が末葉なりとて」

じんたいらし 人體らし。ひとがららしい。人品のあるらしい。容貌などの勿體らしい。二十不孝二「大膽者には追刺の働きを習はせ、人體らしき者には騙の大事を傳へ」

しんち 新地。遊里。遊廓のあるところ。天網島中「しんちへ御出でか、御せいが出ます」

しんちがよひ 新地通。遊里に通ふこと。

しんちぐるひ 新地狂。新地の遊女におぼれて遊蕩すること。二枚繪草紙中「新地狂に身體あげ、方々の借錢」

しんちゆうだて 心中立。男女の契を立てて貰ふこと。約を守り通すこと。外に心移さぬを、「心中を立てる」といふ。

しんていづく 心底づく。心底次第。心底を頼みとする。出世瀧徳上「契約お違へなされども、此の方からは尋ねませぬ、勿論催促仕らぬ、これから互の心底づく」と

しんでん 深殿。奥深い殿か。寢殿のあやまりか。武道傳來記五「西の深殿なるかたより告げ來り」

しんどう しんどし。しんど。苦しい。かたつたるい。くたびれ、疲れたさまに。關西方言。女腹切上「皆様御免、ア、しんどうと腰かけて」

じんどう 神頭。鏝の一種。多く木で作る。長楕圓球の一端を截つた形で、長さ二寸ばかり、漆で黒く塗る。草鹿(くさじし)丸物等を射るに用ひる。磁頭。矢頭。曾我會稽山「淺川の與市が神頭の弓勢、足鷹山に足くらべ」

て祭る神。冬至の日は、特に神農祭と稱して、赤豆餅・赤豆飯又は酒餅を調へて、親戚・知友を饗應する習俗があつた。永代藏三「内に神農の掛給も身ぶるひして、(中略)醫師も傾城の身に同じ」。織留四「隨分爰を大事と神農を祈るべし」

しんのだいす 眞の臺子。正式の茶湯に用ひる臺子。又、茶の湯の作法中、最も重要な、一子相傳になつてゐる秘法の稱。檜權三上「御振廻御馳走の爲、眞の臺子の茶の湯なざるべしとの事」。同「ハア、眞の臺子易い事傳授許しは請けねども」

しんはちまん 神八幡。誓ひの詞。神八幡にかけて。實正である、偽りなしなどの意を強める詞。大丈夫。確かに。新小夜嵐物語上「いのと御意なされましても、神八幡止める男」。吉野忠信「神八幡も照覽あれ、必ず虚言これあらじと、誓を立て、宜へば」

親は泣き寄り (諺)親戚同志は哀しいことのために寄り合ふこと。「他人は食ひ寄り」と對していふ。宵庚申中「父様は寢入ばな、泣くな」と言ひつゝも、つたふ涙の血筋とて、親は泣き寄る憐

れさよ」  
しんふき 新吹。新に吹きわけること。新に鑄造すること。そのもの。新鑄。晝夜用心記三「正眞も正眞、金座の新吹なり」

しんふじ 新富士。「江戸の新富士」の條を見よ。  
しんぶつ 新物。新年に用ひる物か。新しい品物か。五人女四「通町には破魔弓の出現世、新物たび雪踏」

しんべ 新參の小女郎(こめらう)。小さい下女。「しもべ」の轉か。傾城酒吞童子三「此方のしんべはこゝらへは見えぬか」。同「この春抱へた廣文が口入のしんべめも、明暮吠え廻れども」

しんまち 新町。大阪の廓の名。長堀川と立賣堀川の間にある。越後町・佐渡島町・瓢箪町・阿波座・九軒町その他に分かれてゐる。一代男七「新町の夕暮、島原の曙」

しんまちばし 新町橋。新町廓の東出口西横堀河に架した橋。  
じんみやく 腎脈。物種集上「宇治橋よりは右か左か、腎脈の水のさかまく所をば」  
しんもつて 神以て。神かけて。神に誓

つて。しんはちまん(神八幡)などの類語。武道傳來記一「御心ざしのうれしさ神もつて忘れがたし」

しんもつばん 進物番。幕府の職名。若年寄の下に在つて、大名・旗本などからの進物に關することを掌り、又、賜與する物のことに關係する者。轉じて、大名の家に於てもそれに準ずる役を稱する。檜權三上「進物番の岩木忠太兵衛六十八でも生得堅氣」

しんもん 神文。神かけて誓ひを立てた文。神明の名に據つてする誓約書。誓文。起請文。武道傳來記一「二人神文取りかはし、かための言葉もあだに」。大職冠五「永く野心有るまじきとの神文血判せらるべきか」

しんもんでつくわ 神文鐵火。神文と火起請と。神に誓ひの文言を述べて、鐵火を擲り、心の正邪を試みること。櫻陰比事一「面々の身晴に神文鐵火といふ人あり」

しんやぐ 神役。神主。社人。男色大鑑四「當社西の御門に神役の家高き大中井兵部太夫一子に大藏といへるあり。同じ神職に高岡川林太夫」  
じんやぐ 腎藥。精力増進藥。西鶴五百



韵「戀病を思へば世界の圖法師じや、  
天地の二つあはす腎薬」

しんやま 新山。新しく材木又は鑛物を  
採り出す山。町人の勃興に伴つて新田  
即ち新しく田地を開墾することや、新  
山の爲には、よく投資することが行は  
れたのである。俗つれ、五「熊野の  
新山に懸り、身體崩れて分散となり」

じんゆ 人油。人間の油。二十不孝二「倒  
に釣揚げ、手足の筋を取りて人油を絞  
られしは、生を更へずに地獄の責にあ  
ひぬ」

しんろ しんど。しんど。苦しい。せ  
つない。生玉心中下「さぞ小辨もしんろ  
かる、おれもくはをぬかした。爰で暫  
く休まう」

しんる しんじ(心耳)の訛か。又、心意  
(しんい)か。大職冠三「樂は平調波返  
し、しんるも澄みて覺えける」

# す

すあい 牙儂(すあひ)。もと物品賣買の  
中立するもの。當時は専ら衣類など行  
商しながら、密かに淫をも賣つた女。

牙婆。小相。大矢數一「小相呼て爰帷子  
が辻と  
かや」。同  
四「今あが  
ります浴衣  
もてこい、  
御出入の外に  
すあいを呼び  
にやる」。一代  
男二「小川の糸  
屋もの、室町のすあい」

すあひをんな 牙儂女。前條に同じ。一  
代女五「一人は室町のすあひ女、是は諸  
國の人、遊山作病の逗留、借座敷を心  
がけ、さまざまの染衣賣りしが」

すあま すはま(洲濱)の訛。洲のある濱  
邊の出入した處。懷硯四「南面の縁側、  
西のすあま、人皆立舉り」

すい 粹(すゐ)。「すゐ」を見よ。一代男  
六「すいらしき男ははまらせ、初心なる  
人には泪こぼさせ」。同二「物をもつか  
はず、恐らく、今といふ今すいになつ  
たと存ずると申せば、宿屋をかしき者  
にて、まだ足らぬ所があり、まことの  
すいは爰へは參らず内にて小判をよう  
で居ますると申せば」



すいあて 推當(すゐあて)。あてずるり  
やう。俳諧師手鑑「香や知るべすいあ  
てに折る雪の梅、平吉」

すいかづら 忍冬(すひかづら)。蔓生小  
灌木。初夏、葉腋に花を開き、花筒長  
く、蜜があり香がある。山野に自生し、  
薬用にする。えびかづら。一代男三「吳  
竹の奥ふかく、すいかづら、晝顔の花  
踏みそめて」

すいがほ 帥顔(すゐがほ)。粹らしい顔  
附。一代女二「頭に帥顔せらるゝによつ  
て、こなたからもむつかしく仕掛け」

すいこ すゐきやう(醉狂)の約。壽門松  
上「鹽の辛い梅干婆々が、すいこな奴と  
思召そ」

すがかき 菅搔。須賀垣。琴の弾きかた。  
轉じて三味線の手にもいふ。歌を伴は  
ず唯絃を弾ずること。二代男八「玉琴に  
須賀垣を上げ、三筋に投節」。松風村雨  
束帯鑑四「かぜのすががかしむをどり」

すかしあぶぎ 透扇。杉の薄板で作つた  
扇の板をすかし彫にして、白いすだ  
など張つたもの。すきあぶぎ。百日曾  
我四「すかし扇にたうあぶぎ、あぶぎ  
あぶぎ、あぶぎ召せ」

すかしまくら 透枕。透彫(すかしぼり)

の飾りがある枕か。二代男六「透枕に十寸鏡、茶箱提重の光りゐたり」

すがたのいけ

委の池。大和國春日野にある野守の池のこと。雄略天皇の御狩の時、鷹が外れて去る。野守の男が、この池に映つた鷹の姿によつて、その所在を坐ながらして明示したといふので「野守の鏡」とも「委の池」とも稱するに至つたと傳へられる。兩吟一日千句「佐保姫や早見る頃の前後、すがたの池は白粉の水」。萬文反古五「女前におのれが惡事をさらし申候」

すがたのいけ

菅田池。大和國平郡郡に在る歌枕。俗に、「こもが池」といふ。

すがたのはな

委の花。花の委といふに同じ。男色大鑑六「あかず眺めは委の花、若道のさかり」。胸算用五「四季一度に眺め、委の花の色香ぞかし」

すがたまくら

委枕。枕繪に同じ。春雲。一代女一「菱川が書きし小氣味のよき委枕を見ては、我を覺えず上氣して」

すかぬめ

好かぬ目。いやなこと。大下馬三「一代にこれほどすかぬめに逢ひつる事なし」

すかぬをとこ

透かぬ男。すき(隙)のな

い男。ぬげめない男。永代藏三「觀音信仰にはあらず、これをすべき手だて、さても透かぬ男」

すがみこ

素紙子。紙子だけ着ること。雍州府志「稱素紙子倭俗每物不雜他總謂素或作空」。二代男七「まだ秋ながら素紙子を着て」

すがり

すがれたもの。次條の名詞形。衰へかかつた物。すがれ。なれの果て。一代女一「いつ焼捨てのすがりまでも開傳へし初音これなるべし」。祭花咄五「大阪に勤めし藤屋の太夫葛城がすがりといふ」。同四「三野もすがりの折ふし、ばつとしたるよねぐるひ」

すがる

末枯る。末になつて衰へる。終りぎはとなる。祭花咄四「身の用心の傾城買も、すがらぬ中に分別すべし」

すき

好。このみ。趣味。たしなみ。しこなし。又、好色。一代男五「首尾の時の手だれ、わざとならぬすき也。假にもさもしき事はいはず」

すぎちゆう

杉重。白木の杉板などで作つた重箱。大矢数一「杉重や事が果てての松の陰」。一代女四「菓子すぎちゆうのからまで取集め」

すきてをけ

杉手桶。杉材で作つた手桶。

陶算用三「割蓋の杉手桶に、宇治橋音羽川と書付しと並べ」

すきと

さつぱり。すつかり。とんと。戀八卦柱曆下「日かどの強い人じやの、毎年のもでもこちはすきと覺えぬ」

すぎなり

杉形。杉の木の生えたやうな形。上方が尖つて、下方が次第に左右に張つた形。又、「すぎなりざや」の略。薩摩歌上「白熊のすみ袋、杉形の中締は豊前の小倉」

すぎなりざや

杉形鞘。槍鞘の一種。「すぎなり」になつたもの。薩摩歌上「名にし奥州五十四郡の旗頭、旗は白旗黒羅紗の、杉形鞘に羽織着て、お駕籠昇くのは是ばかり」

すぎはひは草箒の種

生葉は、零細なものを箒で掃きためるやうにすれば興るとの諺か。永代藏一「すぎはひは草箒の種なるべし。この濱に西國米水揚の折ふし、こぼれすたれる筒落米をはき集めて、其日を暮らせる老女ありけるが」

すぎばへ

杉生(すきばえ)か。下を廣く上を狭く、金字塔形に俵物などを高く積むさま。永代藏一「杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬につけ送れば大

道藩きて地雷の如し。すぎなり參照。  
すぎはら 杉原。次條の略。一代男三「杉原に便書きつゞけ」

すぎはらがみ 杉原紙。播磨國柘東郡杉原村から産する紙。奉書紙の類で、薄く柔かく、種類が多い。天網島上「小春ぐるひが杉原紙で、一分小判紙ちり塵紙で」

すぎびさし 透廂。建物と建物との隙間に造つた廂か。又、欄間に透し彫などのある廂か。辨慶京土産五「御座の左右は武藏常陸兩勇、鎌田の三郎斎座せり、扱又すぎびさしの廣間には、五十四郡残りなく、受領武衛の門葉ら」

すぎびしやく 杉柄杓。杉材で作つた柄杓であらう。俗つれく三「飲み次第の杉柄杓、神の物にてもてなされ」

すぎびたひ 透額。冠の一種。甲(いそ)の上の廣い部分)に月形の穴をあけ、羅を張つて透かしたるもの。元服の後、十五六歳の者が用ひる冠。源氏烏帽子折三「今日が情の初冠り、あはれ人目のすぎみ、風折烏帽子折もがな」  
すぎみ 剃身。薄く切つた肉。一鹽漬の魚の切身。  
すぎめ 好目。色好みの者。好色漢。好

す

色らしいこと。榮花咄二「如何なる好目に掛けたりとも、これその少しもひける事にはあらざるに、女郎は抓み取の中に来て、その事もなく歸るをさぞ口惜しく思ふべし」

すぎもとりう 相本流。鍼醫の一派。大矢數四「相本流の露を散らして、針立も次第々々の近付に」

すぎや 數寄屋。茶の湯の會に用ひる小庵。かこひ。茶室。二代男三「數寄屋の懸繪は、雪村の觀音と見えしが」

すぎやうじ 杉楊枝。杉の木で作つた楊枝。五人女二「まんぢう・御所柿・唐ぐるみ・落雁・榎・杉やうじ、是をあらましに取合時」

すぎやき 杉焼。杉板の上に魚肉を載せて焼いたもの。杉の香の移つたのを賞美する。又、杉の箱に入れて焼くこともある。大矢數二「相焼の箱を明けては夢ごころ」。二代男三「鯛は杉焼、葱も喰うて、匂は後で壁土を替めてやめり」。永代藏四「朝夕の鴨膾杉焼のいたり料理が胸につかへて迷惑」

すぎをり 杉折。杉を薄くへいだ板で作つたをり。食物・菓子など入れ、よく祝儀物に用ひる。一代男五「祝儀を取急ぎ

榎杉折の山をなし」

すぐす 過す。暮して行く。生計を立てて行く。二十不孝二「肩の上の働きしても、両親過ぐし兼ねべきにあらず」。すぐす。

すぐち 兔唇。上唇の中ほどが裂けたもの。みつうち。いぐち。一代女二「人手代・鉦たつき、ちんば、すぐちに限らず、あふを嬉しく、思へば世に此道の勤め程悲しきはなし」

すぐばけ 直化。遊里の詞。色道大鏡直化。實事にはあらず、是は手だての内にて、いひまはさず、ありのまゝに言ひてきかしむる謀也(一の五)。白化。二代男二「唯何事もすぐばけがよしといへば」。新小夜嵐物語上「いやがる悪口を云ひ盡し、直化になりて身に構はず」

すぐやきは 直焼刃。刀劍の焼き方。きめを眞直に現はして焼いたもの。  
すけべゑ 好色のこと。又、その人。すけべゑ。助平。助兵衛。西鶴五百韻「はいの實のからなりてもすけべゑいじや(吟)、むかしは花をやるさくらべゑにしてすこびたる 甚だこびた。いやにませてゐる。こましくやれて、ちよびくし

てゐる。大職冠<sup>三</sup>「エ、すこびた餓鬼め」。源氏烏帽折<sup>四</sup>「主有る女に抱付くはすこびたる徒者、生けては我が道立たず」

**すさき** 洲崎。水邊の洲が崎となつて、突き出てゐる處。その模様にいふ。胸算用五「萌黄色に染鹿子の洲崎、裏は薄紅にして」。すさきがた(洲崎形)

**すし** 遊廓の詞。(一)馴れ過ぎて、いやみあることであるといふ。下文を見よ。色道大鑑一の五「すし。すしひくとも、すしなることをいふともいへり。酸也、又酢也、なれ過ぎたるといふ心也。こなたにはさまで思はぬに、さきより無理に心易きふりし、言ひたきまに云ふなどを、憎しと見る所よりいふことば也」。一代男六「衣裳よく着こなし、道中たいていに替り、すこしすしに見えて、幅のなき男は、恐れに會ふこと稀なり」。(二)轉じて、粹(すゐ)な、いきな様子にいふ。曾根崎心中「おのが妻戀ひやさしやすしや」。萬年草中「まだ十七のほところ子、名さへお梅は氣もすしや」。蓋し、粹、帥など記す「すゐ」は「すし」の音便「すい」がもとである。

**すずかけ** 篠懸。修験者(山伏)の服の上

に被る衣。麻で作る。山路の篠の露を防ぐために著るものだといふ。蟬丸五「胎金兩部の峰をわけ、七寶の露を被ひし篠かけに、不淨をへだつる忍辱の袈裟」

**すずし** 錫師。錫又は鉛で鉢・茶壺など造る人。

**すずし** 涼し。清い。いさぎよい。きれい。萬年草中「證據々々と涼しさうに云やるな」

**すずしめ** 神慮を清め鎮めること。一代男三「あらおもしろの籠神や(中略)、すずしめの鈴をならして縣御子來れり」。男色大鑑八「先づすずしめの神樂」

**すずどけ** するどけ。するどいさま。傾城反魂香中「戀故今はある躰、すずどけなうて智慧まん」

**すずどし** するどし。鋭敏である。大下馬四「諸鳥までもかく奥筋はすずどし」。胸算用五「若手の時よりすずどく無用の欲心なり」

**すずの笹原** 「すず」は篠、小さい竹。單に笹原といふに同じ。篠原。槍權三上「すずの笹原さら〜、さら〜さつ」

**すずのもり** 鈴の森。鈴が森。武藏國荏原郡の内。五人女四「鈴の森松風ばかり

残りて、旅人も聞きつたへて只は通らず」  
**すずぶね** 鈴舟。鈴をつけた舟。大名などの乗船では、この鈴を鳴らして相圖をした。

**すずめこゆみ** 雀小弓。雀を射るほどの小弓をいふのであらう。武家義理物語三「雀小弓、名譽に一筋よもはづさず」。一説に、絲で括りつけておく雀を射て遊ぶに用ひる小弓であるといふ。

**すずめずし** 雀酢。いなの子の腹に飯を多く詰めたもの。形が雀に似てゐるのでいふ。今宮心中上「口中のしより〜したる雀酢」

**雀の巢もくふに溜まる** (諺)雀は僅かづつ物を運んで来て、遂には立派に巢くふ。そのやうに、些少な物でも溜まれば多量になる。「塵も積れば山となる」の類。油地獄上「商人といふ物は、一文錢もあだにせず、雀の巢もくふにたまる」

**雀の千聲、鶴の一聲** (諺)つまらぬ者の千言より、勝れた者の一言の方が効力がある。

**雀の角** 雀に生えた角。弱小な者の武器をさげすんでいふ。津國女夫池三「何條

三好づれ、一國に威を振ふとも、天下に比ぶれば雀の角、鼠の牙の災、何事か候べき」

**雀の松原** 攝津國菟原の住吉村から、西御影村までの海濱の小松原。物種集上「楊弓の雀の松原見渡して」

**すそがき** 裾書。衣の裾に模様を書くこと。その模様。男色大鑑入「幽禪が萩のすぞがき」

**すそがた** 裾形。裾に書いてある模様。裾模様。胸算用五「千本松の裾形も古し。當年の仕出しは、夕日笹の模様とぞ」

**すそとり** 裾取。裾をつけること。そのつける布帛。すそまはし。五人女三「黒羽二重に裾取の紅うら、金のかくし紋」

**すそぶくら** 裾影。槍鞘に用ひる袋の裾の、ふくらんだもの。薩摩歌上「裾ぶくらの對のお道具出雲の松江」。同「白滑皮の裾ぶくら」

**裾を取る** 裾をつける。一代男六「紋所も小さくならべて袖口も黒く、裾も山道に取るぞかし」

**すたすたばうす** 京都で藝文拂といつて商人が神社に詣でる時、代つて垢離を取つた乞食坊主。江戸では願人坊主(ぐ

す

わんにんばうす)と云つた。又、寒中裸體のまま、繩の鉢巻をし、腰に注連繩を巻いて、錢五七文を串に指して、わりかけの竹に挟み、之を振り鳴らして踊つたもの。その囃詞にすたすたを繰返す。雙生隅田川四「難行苦行のすたすた坊主、すたすた云うぞぞ加持しける」

**すたのはぶし** 小唄の節の一種。元祿頃流行したもの。

**すためん** 織物の名。(蘭語Sammet)和蘭から舶來した、羊毛に麻を交へて織つたもの。博多小女郎上「金に飽かした衣裳つき、各さるせ羅紗すためん」

**すだれがひ** 簾具。貝類の一種。蛤に似て圓形・橢圓形・類三角形を呈し、介殼の表面に成長線に沿ふ隆條が並列してゐる。各地の淺海に産する。國性爺三「汐吹きあげの簾具、ちらと見染めし姫貝に」

**すだれぢやや** 簾茶屋。簾をかけて作つた粗末な茶屋。大職冠四「餅賣・酒賣・簾茶屋」

**すぢがね** 筋金。刀の鞘、槍の柄などに拵め込み、又、門の扉などに張りつける細長い金屬。傾城酒吞童子二「筋金ひる金のしのぎの金、(中略)中はいかなる

名作の、千將莫耶御座んめれ」

**すぢかひはし** 筋違橋。江戸神田須田町から下谷への出口(ほど)今の萬世橋の位置に當つてゐる)で、神田川に架した橋の稱。二代男二「神田の筋違橋を渡つて湯島の宮の前なる」

**すぢどんす** 筋緞子。筋入の緞子。縞になつた緞子。二代男一「衣裳も昔の筋緞子、八端掛の八丈」

**筋なき乞食** 「乞食に筋なし」といふ諺の轉用。永代藏三「身の上の事共、物がたりをするを聞くに、皆筋なき乞食」

**すぢめ** 筋目。家すぢ。索性。血縁。男色大鑑三「筋目もあらまじに御尋ねあそばされ、その日より召替の御馬にて御上屋敷に入り」。同一「お家に筋目もあつて御入候やうに」

**すぢりもぢる** 身をさままんにねぢる。まがりくねつて行く。冥途飛脚下「里の裏道畔道を、すぢりもぢりて藤井寺」

三一五

す

と無いが定なり。新小夜嵐物語上「貳  
奴五分ですつきりと仕舞ふといふもあ  
り」

すつきりしやん すつきり。さつぱり。  
浦島年代記三「峠で飲んだ酒氣が、すつ  
きりしやんと醒め果てた」

すつきり そつきり。そのまゝ。残らず。  
大職冠四「雪の白つきすつきり」と

すつきり 物の重いさま。又、物の多い  
さま。どつきり。藩門松下「千兩包みの  
木地の臺、前へずつきり飾らせたり」

すつばのかは ぬすびと。竊盜。詐偽師。  
ナリ。すつば。二十不孝三「此道のすつ  
ばのかはに出合ひ、そろ／＼取上げら  
れ」

すつべり さつぱり。さわやか。残らず。  
晝夜用心記四「亭主は留主にて何も知  
られませぬと、すつぱりと答へける」。

すつぼり 愚鈍なもの。ぬつぼりといふ  
類。天鼓三「やい宇治太郎のすつぼり  
め」

すてがね 捨金。身受けなどする時の内  
金。奉公人などの給金として差當り渡  
す金。又、返済をあてにしない金銭。

一代女二「そも／＼奉公人の肝煎渡世  
とする事、捨金千兩の内捨兩取るな  
り」。一代男三「縫箔屋のおさつといへ  
るを、捨金百五十兩(中略)、宿にも十  
分一の外、満足させて」。すてきん。

酔てさいて飲む 他人の缺點などを委細  
に言ひ立てるさまにいふ。囁みなす  
やうに悪口を假借なくいふ。卯月潤色  
「女夫の衆が此のるまを酔てさいて飲  
む様に、いひたいがい云ひ籠めて、  
死んでもまた云ひ足らぬか」

すてさかづき 捨盃。返盃を求めない盃。  
酒宴の終りなどに、人にさしたまゝに  
なつてゐる盃。懷硯五「捨盃を取上げ、  
給仕せし小坊主につげとて差出しけれ  
ば」

すてばうず 捨坊主。世をすてた坊主。  
不眞面目な坊主。坊主を罵つていふ。  
榮花咄三「何の僉議なしに捨坊主にな  
し、折ふしの遊び寺、佛もなし鉦もな  
し」。五人女五「その身は戀より捨坊主  
になりけるとなり」

すてはら 捨腹。甲斐ないものと搔捨て  
る腹。日本振袖始三「悪事を勸むる鰯香  
背を、君忠臣と御覽有り、我等は不忠  
佞人と見て、討つて捨腹搔破り、命を

三一六

捨て、諫言申す」  
すてんどう 人を投げ倒し、ころがす時  
などの擬聲語。すていどう。曾我會稽  
山二「組んづ轉んづ真逆さまにすてん  
どう」

すないやい 「すない」は「するなよ」の  
意。「やい」は「やよ」の轉。馬子など  
の詞。「よせよ、やい」。丹波與作中「五  
十三次に汗かけて、かみこなす與作じ  
や。すないやい／＼ほてつばらめ」

すなぐるま 砂車。石車などいふ類。砂  
の上をちかき歩くことであらう。俗つ  
れん／＼四「あるひは七野社に砂車、我等  
が爲めと跳參詣」

すなすな 靜かに歩むさま。しな／＼。  
しよな／＼。しやな／＼。曾根崎心中  
「上りやすなく、下りやちよ／＼」

すなせつちん 砂雪隠。石を据ゑ、砂を  
まいておく一種の雪隠。茶湯で設ける  
もの。大句數上「四海浪しづかになつ  
た腹こゝろ、砂雪隠にかよふ龍神」

すなどけい 砂時計。砂土圭。時計の一  
種。中のくびれた硝子壺に砂を入れて、  
之を倒し、そのくびれの小孔から砂  
の漏れ落ちる時間を計つて時を知る装  
置にしたもの。沙漏。大矢數五「砂土圭

水の響きあらはれて」。胸算用。「灯明は臺に砂時計をしくはし」

砂にする 無駄にする。無益に物を捨てて。曾根崎心中「預つた二貫目を、とう／＼砂にしおほせたに、内にあつたと知られては」

すなば 砂場。(→)砂地のこと。(→)大阪新町廊の西出口の南にある地名。出世瀧徳上「萬手廣き大曲輪、色に擲つ金銀は、土か砂場の西口や」

すならすなら 「すなすな」に同じ。しよならしよなら。

すなりすなり 前條に同じ。井筒業平河内通五「おめず臆せず土俵のうち、すなり／＼と振り込んで」

酢にあて粉にあて 何彼にあたりちらして。五人女「盛形さしみをなげこぼし、酢にあて粉にあて、一日此事いひやまず」

酢につけ粉につけ 何につけ、かにつけ。女腹切中「そなたはお花が繼父、酢につけ粉につけ憎いもことわり」

すねあらひざむらひ 脛洗侍。人の脛を洗ふほどの賤しい侍。又、今まで下賤であつた、成上りの侍。何れも卑しめていふ詞。

す

すねくろし 拗ねたやうすにいふ。ひねくれてゐる。「くろし」は、「ひねくろし」、「あいくるし」などいふ類の接尾語。

すねすねし 拗ねてぢぢけてゐるさま。しつこくひがんでゐる様子。日本振袖始「容醜く不東にて、心迄すね／＼しく」

すねはたばる 拗ねて強情を張る。傾城酒吞童子五「情知らぬ親方と、すねはたばつて勤龜末にする奴等、棒の先で勤めさしよ」

すのこ 簀子。簀(す)で作つた床又は縁。すのこえん(簀子縁)の略。一代男四「簀子の下へ道をつけ。武道傳來記七「溝縁より簀子の下に隠れ」

すはろぎ 蘇枋木。蘇芳木。葦科の喬木。樹幹の削屑を煎じて染料とする。永代藏四「蘇枋木の下染、其上を酢にてむしかへし」

すばく 寸白。(→)病名。婦人の腰の痛む病。すばこ。すんばく。大句數上「寸白病足立たずしてかり御殿」(→)蟲の名。さなだむしの異名。又、寸白の病を蟲のしわざと考へて、「寸白の蟲」ともいふ。

すはすは 感動詞「すは」の重言。そらそら。但し、動くさまにいふは、謡曲の道成寺「すは／＼動くぞ祈れただ」の句に據つたものであらう。物種集上

「十貫目すは／＼うごくは此のかねか」大矢數「巻下にのぞむ所の上り龍、すは／＼うごくはよしや風」

すはだむしや 素肌武者。甲冑を着ないで戰場に出る武者。吉野都女楠三「鏝一領あらばこそ、すはだ武者の鎧刀」

すははちまん 諏訪八幡。誓ひの語。諏訪の神と八幡様と。「愛宕白山」などいふ類。百日曾我「すは八幡も照覽あれ。馬人共に一うちと」

すはひ すあひ(牙脛)の訛。その條を見よ。

すはへ 櫛(すはえ)。「すはえ」が正しい。木の枝また幹などの細長く、ますぐなもの。若く新しいものに譬へる。國性爺「うつろふ枝を櫛にかへて、互に力を合すべし」

すはまぐりうり 素蛤賣。何のつやけもない蛤賣。蛤賣の殺風景なのをいふ。「す」は、すでつち(素丁稚)、素町人などの「す」である。男色大鑑七「色黒く足ふときすはまぐり賣りも、前髪あれば

す

やさしく見えぬ」  
**すひがら** 吸殻。中の汁などを吸ひ取つてしまつた殻。轉じて、男としての精力がなくなつた者。大職冠三「一期運添ふ大事の男、すひがらにせまいと本女房さへ懸引する」

**すひづつ** 吸筒。酒など入れて携帯する筒の形をした具。俗つれど、「九太夫は吸筒を道の友として、寒いも恐いも忘れ」。大下馬ニ「酒一つ盛るべし、これへと見え渡りて吸筒も無く」

**すぶくろ** 柄袋。素袋。刀の鞘袋の類であらうといふ。或は、つかぶくろ(柄袋)のことか。二代男六「中脇差に柄袋を懸け、さしおろしの菅笠を被きて」

**すべい奉公** すべき奉公。定まつた奉公。女腹切中「お花はおれが女房。すべい奉公仕舞うては、繼父殿でござらうが、もがり殿でござらうが、主ある女房」

**すへごし** 「すゑごし」を見よ。  
**すへもの** 居物(すゑもの)。据物。他家(行かずに、その宿に居て密かに春を賣る女。一代女六「すへものは其内へ客を取込み、外の出合にゆかず」。

**すへものやと** 居物宿(すゑものやと)。据物宿。前條「据物」の宿。密賣宿の

一種。一代女六「我れまた身の置所なく、居物宿に行きわけの勤も耻かし」  
**すべらかし** 女の髪のかき下。背後に髪すべらせて、長く垂れ下げたもの。  
**すべしがみ(垂髪)**。一代男三「平髻(ひらもとゆひ)太くすべらかに結び下げ」

**すぼね** 美少年を稱する語。男色に關係あるか。大原御幸「十五六歳ばかりなる、いとやんごとなき美少年、直貫つとんと腰をぬかし、抱き上げ奉り、鍔の塵を打ちはらひ、去るにても世の中にかゝるすぼねも有るものか」

**すぼる** 窄る。せばまる。すぼまる。縮まる。不景氣なさま、得意でない物事にいふ。胸算用四「我等は近年銀と中違ひして、箱に入りたる顔を見ませぬと、世のすぼりたる物語して」。織留五「一門の付合ひに肩身もすぼりて」

**すぼん** 素本、又は數品と、すぼん(物を筒などから一氣に抜き取る音)とをかきつけていふか。大矢數序「益心のたねをきはり出し、すぼんの功をへ、水に瓢箪の輕口、誰か流れを波まざらむ」

**すぼんぬき** すぼんと抜くこと。轉じて、人を出しぬくこと。不意をくはせること。丹波與作中「馴染みのおれをすぼんぬきに逢はせた」

**すまき** 簀巻。一種の私刑。人を簀で巻いて水中に投げ入れること。松風村雨東帶鑑ニ「夜に入つて切戸の沖へ、簀巻にして沈めかけよ」

**すまた** 素股。(一)股間による交接。男色大鑑七「銀が敵と是非もなく自由させながら、祕密のすまたを持つてまゐり」。(二)何も穿つてゐない、肌のあらはれた股。武道傳來記「すまたへ切り付けし間に脇指ぬきあはせ」

**すまた** 物事の豫期に違ふこと。拍子はづれすること。祭花咄「知らぬ謠にすまたの手拍子、盃のあひを頼めば、もたとへ戻さず」。天鼓三「氣の毒な、且那の思案とは皆すまたじや」

**すまたぎれ** 素俣切。素勝切。二十不孝「惣領は文太左衛門とて今年二十七になりぬ。しかも素勝切ありて大男、生れ付きての類髭、眼光りて」

**すまふごま** 相撲獨樂。相並べて勝負を競はせるやうにして廻はす獨樂。松風村雨東帶鑑四「番ひくを立分けて、其勝ち負けを争ふも、秋の季を取る相撲獨樂」



**すまふとりぐさ** 相撲取草。すみれ(菫)の異名。二枚繪草紙上「起きつ轉びつさ

ざめして、相撲取草を思ひ出す」

**すみいる** 角入る。前髪(すみ)を入る。額の髪の生えぎはをかく

(角)に剃りつける。少年の元服前にすること。下例はその轉用。大矢數四「めでたい事は前廉の春、薄役角入れてからおろしたり」。「すみを入る」参照。

**すみがた** 墨形。墨で書いた模様。墨色のもやう。五人女三「白じゆす墨形の肌膚」

**すみくち** 濟口。事の濟むところ。解決。事件の落着。男色大鑑五「往來の人更に山をなして此の濟口を見るは危かりし」

**すみづつく** 角角掃。今日の大工が水準器を見るに類したることか。即ち、みづもり(水盛)することか。「すみづ」参照。大矢數三「くさび一つは大ことも大事、業平の罷出られて角角掃、そこな番匠時しらぬ山」

**すみぞめ** 墨染。山城國伏見の北にある地名。二十不孝「山城の伏見の里、墨染といふ所に、昔は櫻咲きて都の人をも爰に招きて入日を惜ませ」

**すみぞめざくら** 墨染櫻。櫻の一種。花小さく、單瓣で細い。色白く、莖・葉ともに青く、薄墨のやうである。又、伏見墨染の地にある傳説上の櫻。「深草の野への櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」といふ上野岑雄が藤原基經の死を哀しんだ歌によつて名高い。大句數上「手爾於葉を直して貫ふ花の浪、筆を點する墨そめざくら」

**墨染の水** 伏見墨染の櫻のもとにあると傳へられた水。二十不孝「あたらし櫻は枯れて名のみ残りて、墨染の水といふはその庭にありて、秀吉公の御茶の水ともなれり。一代男「新枕とよみし伏見の里(中略)、道の程はやく墨染の水飲みあへず」

**すみづ** 角水。澄水か。今いふ水準器の用をなしたのか。新可笑記「かの大工墨かね角水の見やうはおろかにして」

**すみづきん** 角頭巾。後方に、しころのやうな垂れのある頭巾。寛永の頃流行したもの。蟬丸五「墨の袂にすみづきん 經論少々懐中し」

**すみながし** 墨流。すみながしぞめ(墨流染)の略。墨汁を、水に流し混じて、

それを紙・絹にうつし染めたもの。多くは雲形渦卷の模様をなす。後には墨の外、各種の顔料を用ひた。越前國武生を名産地とする。男色大鑑四「近日越前への便りに、墨流し幅廣の鳥の子三十枚御申遣し頼み入り候」

**すみながしぞめ** 墨流染。前條を見よ。

**すみぬく** 角抜く。前髪(すみ)の生えぎはを抜いて角(すみ)をつくる。角を入れる。懷視「床髪結ひさへ、所の若者の角ぬいて居るなど、此里(伏見)も目の内の隙をかしく」

**すみびたひ** 角額。すみまへがみ(角前髪)にした額。角(すみ)を入れた額。室町千疊敷「指添へ抜いて角額、縁の御ぐしふつつと切つて」

**すみぶくろ** 角袋。槍標の一種。槍鞘にかぶせる袋のかどばつたもの。薩摩歌上「白熊のすみ袋、杉なりの中じめは、豊前の小倉中津のあるじ」

**すみまへがみ** 角前髪。元服前の少年が前髪を立てた額の角(すみ)の髪を少し剃り落すこと。角

す

す

角



すみまへがみ

を入れた前髪。武道傳來記三「村之助といふ人、今年十八、角前髪ながら美道の花の香残りぬ」

**すみよし** 住吉踊。人倫訓蒙圖彙七「住吉踊。住吉のほとりより出づる下品の者也。菅笠に、赤き絹のへりを垂れて顔をかくし、白き著物に赤前垂、岡扇を持ち、中に笠鉾を立てて踊る。あとのとめは住吉様の岸の姫絡めたさよ、千歳樂萬歳樂といふ故に、住吉をどりと云ふ也」

**すみれ** 蕈。催の誤か。懷硯四「木屋小八兵衛問屋の第一なりしに、かけ木の千斤のおとりを試し、蕈に取りかへ、此の重みの違ひ數、大分の事なれば、利徳存じの外に取込み」

**すみをい** 角を入る。すみをい（角入る）すみぬく（角抜く）の各條を見よ。

又、すみまへがみ（角前髪）の條参照。一代男三「十五歳にして、其三月六日より角をも入れて」。椀久「世物語上」其後角を入れさせ、間もなく元服させて名を久兵衛とあらためて一段の男になしぬ」

**すむ** 拳の語。四のこと。冥途飛脚中「拳の手の手もたゆく（中略）はま、さ

んきう、ごう、りう、すむゐ」  
**すもじ** 推量。おしはかる意。女の詞。孕常盤三「ア、待つ身より待たるゝ身の千々の思ひを御すもじ」

**すもどり** 素戻。空しく歸ること。女腹切上「折角來て素戻りか」

**すもり** 巢守。⇒孵化しないで巢の中に残る卵。源氏烏帽子折「玉子の中にも巢もり有るは尤もかなく」。⇒荒れた所に残されをること。又、女が孤獨を守つてゐること。天網島中「女房の懷中には、鬼が住むか蛇が住むか、二年といふ物巢守にして」

**すやり** 素槍。穂先の直ぐな槍。（十文字槍・鎌槍などに對する）。男色大鑑三「御枕に近き素槍の鞘はづし」

**すらうにん** 素浪人。無一物の浪人。浪人を卑めていふ。

**すり** がらし 喰ひ詰めておちぶれたこと。その人。今の「すれからし」とはやゝ違ふ。薩摩歌上「氣味よい頭のすり鉢びん、江戸すりがらしと見えたよな」

**すり** 粉。男色大鑑「女の乳は飲まじ、摺粉あまものにて、人間育ちたる例數多あり」

**すりこぎ** あたま 摺粉木頭。すりこぎの先のやうに圓くすべこい頭。

**すりはく** 摺箔。金銀の箔をすり切つてくること。又、そして作られた物。物種集上「すりはくにする鶴の毛衣、小鼓のうらはあしへの片帆浪」

**すりばちびん** 摺鉢鬘。摺鉢と撥鬘を掛けていつたもの。撥鬘（ばちびん）は、「寶永頃淨瑠璃太夫江戸半太夫、ばちびんにてはけ長く、たてかけといふ中そり有り（我衣）」とある通り、兩鬘を刺り込んだ男の髪の方である。薩摩歌上「打割松の油煙髭、氣味よい頭のすりばち鬘 江戸すりがらしと見えたよな」

**すりはり峠** 磨針峠。近江國犬上郡の内。彦根の東一里。中仙道の通路。丹波與作中「天津八町で八百まける（中略）、すりはり峠の氣が細うて勝たれぬと」。すりはりやま。

**するがづつみ** 駿河包。駿河半紙に包むこと。又、その包んだもの。冥途飛脚上「紙押廣げくる〜と、駿河包に手ばしこく金五十兩」

**すれもの** 遊興に馴れたもの。遊里の事に通じて、享樂を巧みにする者。粹。

粹人。一代男三「まことのすいは爰へは參らず、内にて小判をようで居ますると申せば、一座是は尤もといふを餘所ながら聞くに、かゝる所にもすれものありやと」。同六「五に男ぶりをあらそひ、野秋にあひそめ、兩方すれ者、後は金銀の沙汰にもあらず、命あぶなし」

すわう木 蘇芳木か。兩吟一日千句「くれにけり正長か弓と年の矢と、餅つき米味噌鹽にすわう木」

する 粹。帥。世の中の酸いも甘いもよく経験して、人間生活の表裏に通じてゐること。殊に、遊里、遊興に關する事情に明かて洒落であること。「性慾に執着しないで、男女の接近交際に現實生活の情趣を味はひ、自他の満足を遂げ得るに至る意味が根本であると思ふ」(藤村作博士説)。語源については、「抜粹」の上略であると説くもの外、辟、推、水、吹、好などの字を當て、上るものもあつて、定説がない。もと、上方の言葉で、すし(酸)の音便と考へられる。「すい」及び「すし」の條參照。いき。つう(通)。又、粹を得た人。粹人。通人。一代女「いかなる帥もいやとはいはぬこかし也」。重井筒上「阿呆な顔

す

でも損をせぬ、造る粹よりは粹ならん」

するあて 推當。あてずりやう。おしあてに物を考へること。大職冠「物知り顔の推當」

ずいこつ 隨意講。無禮講。醒睡笑。老僧。兒。若衆いひ合せて隨意講のまはし始まれり。兒、汁の椀に酒を受けられたり、後見の法師、目をきつと見いだしければ、兒顔をおさへ、南無三寶隨意講はやぶれたよ」

するがく 水學。水からくりで名高かつた人。九州から上つたといふが、傳不詳。大矢數「そもまくら蚊屋いかなる細工、水學も心の底の浪に夢、夫五十年日塞いでゐる」。同三「世間の秋は皆からくりじや、水學が水は忽ち湯となれば、日をあらふたり足洗ひ時。榮花咄「工夫の水學磯なり、江戸橋の下より乗出して髪振る間に、吉原へ通ひ舟たくみて、二挺立を仕かけ、韋駄天の茂作といふ船頭さる大臣を乗せけるに」

するかくぶね 水覺船。水學船で、水學の工夫したものであらう。男色大鑑「江南の淺瀬に水覺船を寄せて、大臣は

勿論おせきよいこれ盜路」

粹が身を食ふ (謔)粹人は粹のために身を滅す。榮花咄「情の重なるうちに帥が身喰とや、都に隠れなき兩替の何がしとはりあひ」

ずりま 芋莖。芋苗。いもがら。宵庚申「藤ま生妾お笑止と、悔めば夫は芋莖の涙」

醉狂す 酒を飲んで酔ひ狂ふ。酒の上でたはまれる。一代男「大じんわざと酔狂して、あたりあらく踏立て」

するしやう 帥匠。粹の道に達した者。榮花咄「此の帥匠をあげて銀遣ふからは、人の教は聞く迄もなしと、大臣仲間申合せぬ」

するふう 水風呂。すゑふる(据風呂)の訛。むしぶろ(蒸風呂)に對して、普通の湯の風呂をいふ。又、水湯の義であるといふ。永代藏「十二月二十八日の夜、水風呂に入りしを」

するり 水入。およぎの上手な者。水練者。五人女「此濱の獵師調練して、岩飛とて水入の男をひそかに二人やとひて」

すわれん 水練。およぎ。又、水練の上手な者。五人女「すわれんは浪の下へ

す

す

くどりて思ひもよらぬ汀にありがりける」

すゑごし 居腰。据腰。腰を据ゑて上體を崩さぬ姿勢。その腰つき。一代女三

「遊女かぶき者のなりさまを移し、男のすなる袖口廣く、居腰蹴出しの道中」。

茶花咄四「なか／＼居腰にならひあり」

すゑだくみ 末工。後々の計畫。將來のたくらみ。

末の八句 名残の裏八句。連俳の語。百韻の場合、懷紙四つ折の最後のべいじに記す八句。初の表八句に對する稱。

兩吟一日千句「かやうの月私體にて候へば、せすに通して末の八句め」

すゑもの 「すへもの」を見よ。

すゑものやど 「すへものやど」を見よ。

すん 寸。ながさ。寸法。殊に刀劍にいふ。女腹切上「刀は水の流れ焼、以ての外の不吉の脇指、寸は一尺四寸五分」

ずん 順。頭(一)の訛か。又、寸とも記す。傾城反魂香上「印可の筆を與ふれば、修理はいたゞき墨を染め、虎のすんにさし當て(中略)筆引くかたに従つて、頭前脚後脚、胴より尻先に至るまで、次第に消えて失せけるは」

ずんぎりざや 寸切鞆。槍の鞆の先が輪

切りにしたやうになつたもの。薩摩歌上「ずん切鞆に銀の笠、手杵は島原平戸の城主」

ずんすん すげないさま。つれなくあたるさま。つんつん。國性爺二賢女だてしてすん／＼と、素氣なき御心が心を表し、梅花を味方に參らする」

すんぜんしやくま 寸善尺魔。善事は少く、必ず悪事が出来て邪魔をすること。生玉心中下「南無三寶見知りのある柏屋の灯燈、サア寸善尺魔いかがはせんと、うろたゆる」

すんど 鏡。「すんど」の訛。一代男六「花車かつておとなしく、すこしすんどに見ゆる時もあり、いづれか太夫にしていやとはいはじ」

ずんと すぐれて。よほど。非常に。隨分。澤山。松風村雨東帶鑑三「瘦せる程な懸ならば、ずんとする氣ぢや、男の日利き、教へてたも。出世瀧徳上「色は黒實、ずんと風味のよい男、しんぞ」

ずんど 前條に同じ。重井筒上「こいつはずんど捌巧者で、言ふなといふ事はぬ奴」

ずんなり しなやかなさま。しとやかな

さま。本朝三國志二「細柄の薙刀かい込うで、ずんなりすなりと歩み來る」

ずんばく 寸白。「すばく」を見よ。

ずんぼろぼう 次條の略。室町千疊敷「彼の賣女、髪の毛引きぬき、ずんぼろぼうに仕る」

ずんぼろぼうず 坊主を罵つていふ語。すべすべする坊主頭の意であらう。曾我會稽山五「鳥の毛を引く芥子の花もぐ、ずんぼろ坊主、ねつたい坊主鉢坊主、是がお寺の長助」

# せ

ぜい 贅。おごり。贅澤。豪奢。全盛。二代男五「例へば唐總の玉をつまぐりもせず、贅に見せかけしも。同「お敵の氣を取る事を得て、ぜい昔に變らず」。又、おごりをする人。贅澤な人。一代女二「我等は國元のぜいばかりなれば、太夫でなくば望みなし」

ぜい言ふ 贅澤をいふ。我がままを言ふ。曾根崎心中「酒にするじやと贅言ひて、物真似聞きにそれそこへ」

せいぐすり 精藥。精力をつける藥。強

壯劑。

せいぐわ 清火。清淨な火。最明寺殿百  
人上薦中「御教書の封をきり、下人に持  
たせしせいぐわをとつて、うちかくれ  
ば焔炎々と」

せいげつ 清月か。卯月潤色下「廿二歳  
一睡の夢を拂つて、せいげつ己の眉間  
に施し、今月今日髮剃の、又に滅し畢  
んぬ」

ぜいこき 贅こき。ぜいを言ふこと。又、  
我がまま勝手をいふ人。壽門松上「ほん  
に〜贅こきの彦さん、しかもづぶづ  
ぶ酔うた足本」。天網島上「あの贅こき  
の太兵衛が浮名を立て云散らし」

せいごん 誓言。誓ひの詞。神佛の名に  
かけて誓約する言。天網島上「しん八幡  
侍冥利他言せじ(中略)、なじみよしみ  
もない私、御誓言での情のお詞、涙が  
こぼれて添ない」

せいし 誓紙。誓言を記した紙。起請文。  
二枚繪草紙上「正月七日神前に於て、お  
やおつかない誓紙を書くその誓紙の文  
言に、斯様に申し交はすからは、未來  
迄も變るまじい虚をつくまい隠すまい」

せいし 誓詞。誓言(せいごん)に同じ。  
津國女夫池ニ「誓詞を破つて云うての

せ

けう

せいし 青侍。あをざむらひ。少壯な武  
士。蟬丸ニ「右大辨早廣青侍ばらにもの  
のぐさせ」

せいし 西施。支那古代の美人。又、越  
の西子をいふ。絶世の美人で、越王勾  
踐彼女を吳王夫差に獻じ、夫差をして  
國を傾けしめるに至つた話が名高い。  
萬文反古三「吳國寵愛の西施、日本名譽  
の小町」

せいしにう 西施乳(せいしにゆう)。河  
豚(ふぐ)のこととしてある。松風村雨  
東帶鑑ニ「海中に鯨鯨といふ毒魚あり、  
味の甘きこと、西施乳とて美女の乳房  
に譬へながら、其の肝腹中に入つて人  
を害す(中略)、我が朝の河豚なるべし」

せいじゆ 生受。なまうけあひ。物事を  
なまなかに請合ふこと。なまうけ。懷  
硯四「我に談合ありしに依つて、心元な  
かりしより、生受せしに即座に壹歩十  
を手付とて給はる」

せいすい 清粹(せいすい)する。精華。清淨  
潔白なさま。我愆のないこと。卯月紅  
葉上「是與兵衛さま、此のせいすいなわ  
たくしを、熊鷹の熊手のつかみづらの  
と異名をつけ」

せいすゐ 精水。精液。蟬丸五「初月は一  
氣體中に生まれ、其形あたかも鶏卵の  
如し。これ本来」とくの精水」

せいいたう 政道。とりしまり。處置。監  
督。禁制。天下馬四「我れ一山の身にか  
はり、魔道へ落ちてあのせいいたうをす  
べし」。蟬丸一「堅き約束候へども、奥  
襟せいいたうつきにや、お約束も夢と  
なる」。背庚申上「女のみだらは、下々  
まで御政道、衆道にはお構ひなし」。せ  
いだう。

政道す 前條の動詞形。一代男ニ「旦那ば  
かりには、其事もゆるして、外はかた  
く政道して」。出世瀧徳上「新七とやら  
いふ手代、かたむくろにせいだうし」

せいたん 背短。背の短いこと。二代男  
四「抑も此男、せいたんにて、猪首にし  
て」

せいづかひ 勢使。軍勢の召集。勢揃。  
最明寺殿百人上薦下「北の方の勢づか  
ひ、彼是以て入道が妻子ぞや」

せいばい 成敗。しおき。處罰。特に死  
罪に處すること。丹波與作中「エ、小し  
やく者、かるい科を成敗とは、古今の掟  
にない事」

せいばいもの 成敗者。死罪に行はれる

者。しおきもの。

**せいもん** 誓文。神かけて誓ふ文言。起請文。誓紙。縫留留「天照太神を何々誓文我女郎屋にはあらず」傾城反魂香上「佛神かけての女夫ぞや、誓文々々繪筆をとらぬ法もあれ」。轉じて、「眞實」、「しんそこ」などの感動的副詞に用ひる。油地獄上「わしが心は誓文かうじやと、ひつたり抱き寄せ」

**せいもんがため** 誓文固。誓文をかはして固く契ること。蟬丸「今宵は誓文がため、一世一度の色床は、佛もお氣の通らぬ」

**せいもんくされ** 誓文腐。「誓つて」、「断じて」などの意。下に來る述語を強く打消す場合に用ひる。百日曾我「じよさいに思ふ心でも祈經かばふ心でも、せいもんくされなけれ共」

**誓文くつされ** 前條に同じ。戀八卦柱曆下「八百貫目や八千貫は、誓文くつされ利なしでやんす」

**せいもんだて** 誓文立。誓文立てること。大びらに誓文をかはずこと。傾城反魂香上「誓文だての歪、いやは成らぬ」

**せいもんばらひ** 誓文拂。陰曆十月二十日に京都の商人又は遊女が、誓文返し

の神と稱せられる四條京極の惡王子の社にお參りすること。平素懸引して客を欺いた罪を赦ひ、神の罰を免れようと請ふものであるといふ。當日は吳服店などで特に賣出しをする。二代男「今世智賢き女郎が指先破りて筆を染め、烏の目の所は避けて(中略)、科から先へ免るゝ誓紙を取りて嬉しがるこそあさまじけれ。十月二十日は誓文拂ひ、唯だ商ひ大事にして、何の事も無う買うて遊ぶべし」

**せいらす** (蘭語 *Seiras*)。江戸時代の初め、和蘭人の初めて舶來した一種の縞絹。せいらすじま。物種集上「せいらすじやがたらさらす細布」

**せいわうぼがも** 西王母が桃。西王母は仙人の名。漢の元封元年に武帝の殿に降り、蟠桃を渡す。帝欲留核、母曰、此桃非世間所々有、三千年一實耳(列仙傳)。松風村雨束帶鑑「園には玉の梢を連ね、西王母が桃けんぼが梨」。雪女五枚羽子板上「東方朔が九千歳、西王母が桃の核」  
**せうき** 小氣。氣の小さいこと。小膽。雪女五枚羽子板上「さても小氣な、往來も見る。門の内へ些と御入」

**せうきもの** 小氣者。氣の小さい人。小膽者。

**せうくはん** せうくわん。比尼丘の歌ふ唄の前後にいふ拍子。歌念佛下「裾に清十郎と寝たところエ、小くはん」。吉野都女桶「さては野にさく百合の花、しよがゑ、少くわん」とぞ誦ひける」

**せうごん** 正勤。「しやうごん」を見よ。  
**せうざん** 小産。りうざん(流産)のこと。孕常盤「それは小産ばし召されての事か」

**せうし** 笑止。氣の毒に思ふこと。同情すべきこと。俗つれど、「我一代の仕損じと、世間構はず涙を溢す、兩人笑止には思ひながら」釋迦如來誕生會「ヲ、哀れなり笑止なり。いとほしや敵の軍兵」

**せうじん** 少人。呪人。若衆。美童。一代男「戯れし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人」。同「少人氣の毒こゝに極まり、年は舊りても戀知らずの男松」

**せうじんずき** 少人好。若衆を好んで愛すること。その人。男色大鑑「古今類なき少人ずき」

**せうち** 少知。小知。少しの知行。僅か

の領地。武家義理物語五「昔は少知も取れる者なりしが」

せうぢかくれ 小路隠れ。大阪市内の小路、例へば今橋と高麗橋通の中間の浮世小路などは、小宿、圍者などの巢窟であつたが、そこへ入りびたること。古語の「こうぢがくれ」とは別であらう。卯月紅葉申「異見をすればいぶりを出し、商ひは袖にして、小路がくれの家出のと」

小の蟲を殺して大の蟲を助く (諺) 小さいものを犠牲にして大きいものを助ける。

せうまんまゐり 勝蔓参 (しようまんまゐり)。その條を見よ。

せうめい 照明か。「せう」は正(しやう)か。百日曾我五「君御感まし〜、せうめい荒神あら人神といはひ」

せうもだき 焼亡焚。せうばうだき。せうまうだきの轉。伽羅など惜しげもなく焚くこと。烟が火事のやうに立つていふのであらう(足薪翁記之三)。一代男六「次第に奢の煙くらべ、後は焼亡だきにして林彌に酒の間をさすこと」。しやうもだき。

せかい 世界。世間。世の中。浮世。俗

世

世。武道傳來記四「今は世界に望なし」。又、地球上の諸國。一代男四「世界の圖に見し牛鬼島のごとし」

世界見通し 世間一切の事を見ぬこと。天下の萬事を測り知ること。一代男四「安部の外記といへる世界見通しの算盤が申せしは」

せかいらぎ 背梅華皮。背鍼。刀劍の鞘柄などの背にあたる處を梅華皮で作つたもの。女腹切上「小川通りのせかいらぎ、今日明日に持たしてやれ」

せかいらげ 前條の訛。一代男三「染分の組帯せかいらげの長脇指」

せき 關。國恭の語。彼我互に攻め圍んで、中に若干の目があるが、先づ石を下す方の不利な場合に、雙方共に捨ておく場所をいふ。國性爺四「攻手搦手斷ち切つて、手詰のせきを勝軍」



せきいづみのかみ 關和泉守。美濃國關に住した刀匠。武家義理物語三「關和泉守の刀一腰、金子百兩はなむけしてせきおくり、關送。京都から伊勢參宮に行く人を、逢坂關まで送ること。大句敷上「關送りして跡の留主事、逢坂の山

はひがしに西の家」。一代男五「京より結構なる伊勢參りがあるは(中略)、其のあけの日は禿共が立酒、さいはひ關送りとして格子の女郎ひとりも残さず、一日買とふれなし」

せききりよう 石季龍。萬文反古三「天性の御産れつき美麗にして、是やこの鄭挑が紫綸巾を石季龍に曳き、董賢が袞龍袖を漢の哀帝にたつものなり」

せきしう 石州。京島原の名妓の名。好色由来揃「石州かはゆらし、葛城又いやりならず」。一代男四「色人ばかりあつまり、酒のみてありしが、石州ひとつうけて禿に申しつけて、門にゐる善吉に(中略)、さりとは石州が見立、おのゝ感じて」

せきしうほね 石州骨。石珠骨(せきしゆぼね)。吉原の遊女石珠といふ者が創めたと稱する一種の扇。骨が細く、花車である。後には茶人も好み用ひ、石州骨と誤つたのであるといふ。

せきぞろ 節季候。せつきせろ。毎年十二月の節季に至つて戸毎を廻つて米錢を乞ふ者。大抵は二三人づれで、編笠の上に齒孕の葉をさし、赤い布で面を覆ひ、割竹を叩きながら、せつせ、せ

せきぞろ 節季候。せつきせろ。毎年十二月の節季に至つて戸毎を廻つて米錢を乞ふ者。大抵は二三人づれで、編笠の上に齒孕の葉をさし、赤い布で面を覆ひ、割竹を叩きながら、せつせ、せ



ろぞきせ

きぞろ、まいねんまいとしなど繰返し歌ひながら踊る。胸算用四「上」方如く節季候も来ねば、只伊勢曆を見て春の近づくを辨へ」

**せきだい** 石臺。石の臺。鉢植などの臺。生玉心中上「忍ぶ戀路をせきだいの女蘭・男蘭は呂州の姿」

**せきぬひ** 背縫(せぬひ)と關(せき)とをかけていふ。薩摩歌中「戀のさはりのせき縫の積る思ひをかたあけて」

**せきの地蔵** 關は伊勢國鈴鹿郡の宿驛(五十三次の内)。その町の中ほどにある九關山寶藏寺地藏院の稱。胸算用一「東海道關の地藏に近き旅籠屋に出女せし時」。丹波與作申「色こそ道の關の地藏、しろく屋の左次が内、小まん小女郎小よし」

**關の孫六** 美濃國の刀匠。赤坂關一派で

名は兼元。初世・二世・三世・四世と續き、その後裔にも兼元と稱するものが多い。下例は、孫六の作つた刀をいふ。天網島上「心もせきに關の孫六一尺七寸抜放し」

**せきひつ** 石筆。(→黒又赤色の粘土を乾かして筆の尖の形に作り、管に挿んで字を書くに用ひたもの。(→矢立(やたて)、即ち墨壺に筆を入れる筒の附いたもの。一代男七「鼻紙に石筆をはやめ」男色大鑑五「懐より石筆取出し、所書たしかに」。日本振袖始「腰さしの石筆嗜み濕し」)

**せきふだ** 關札。(→關所の通行札。(→宿札。その宿に何某が泊ることを示した。嵐山姥「頼光のせき札引抜いて、清原右大將殿御泊と高々と押立、引並べて、右衛門頭平政盛同泊と、せき札ぞ立たりけり」)

**せきまくら** 關枕。動かないやうにした枕か。二十不孝三「寢姿も足を延ばさず、頭は關枕にてとどめ、身を固むるに残る所なく」

**せきやく** 石薬。礦物質を用ひた薬劑。源氏冷泉節下「此薬味は残らず石薬・樟薬に、毒蟲などの處方は、毒薬にては

候はぬか」  
**せきやぶり** 關破。關所破の略。關所を破つて通ることであるが、廓内を脱出することにもいふ。

**せきりん** 石淋。尿に砂石のやうなものの混じて出る病。又、その尿に交つた砂石やうのもの。雪女五枚羽子板中「勾踐は石淋を管めて會稽の耻を清めしためし」

**せきれいざし** 鶴鶴佩。刀をうしろに長く、鶴鶴の尾のやうに指すこと。  
**せく** 堰。塞。通りを止める。殊に男女の仲をさへぎる。妨げて互に會はせぬやうにする。一代男四「親方せけどもそれも構はず、身を捨て、女の方より深く歎く程の男」。二代男二「問夫をさへせく親方が」

**せくざんの木** せんだんの木の誤であらうといふ。萬文反古四「今市堤のせくざんの木も、しばしの宿には成りがたく」  
**せぐりあく** せきあげる。しやくりあげる。  
**せぐりいき** せきあげるいき。しやくりあげる呼吸。本朝三國志三「舌もこはばるせぐり息」

**せぐる** せきくる。こみあげる。浦島年



代記三「やうく、緩む手を合はせ、言はんとすれどせぐり来る、涙は聲に先立ちて」

せぐるしごゑ、「せぐるし」は「せぐる」と「くるし」とが錯雑して合したものであらう。うめくやうに苦しい聲。せつない聲。宵庚申中「奥には親のせぐるし聲、(中略)我が伽せぬか、うせぬかと、急しく老の氣もいらだて」

せけん 世間。(→自家以外のこと。見え。交際。外聞。(→外氣。天網鳥中「世間がひえる、子供に風ひかしやんな」)

世間が張る 交際が廣くなる。見えを張るための費用が増す。戀八卦柱曆下「勤の身はな、全盛する程世間が張つて、辛いものでござんす」

せけんぎ 世間氣。世間に見えを張る氣。世間體をつくらふ心。虛榮心。一代女中「戀の外さま、心のはづかしき世間氣、何れの人も替る事なし」

せけんぐち 世間口。俗世間の話。日常の俗事に口をきくこと。出世景清四「觀音經の讀誦のほか、世間口を閉ぢたれば、聲聞耳に閉せり」

せけんする 世間の交際をする。社會の人々と交はる。世間むきの

ことにあづかる。宵庚申中「世間する若い者、呼びに来まいものでもない。少少の事は聞きのがしにしゃいの」

せけんそう 世間僧。俗僧。眞に世間を通れきらぬ僧。萬文反古五「大かたは世間僧是非なくさまを替へし者なれば、世の噉咄もつばら」

せけんてら 世間寺。世間僧のゐる寺。俗氣を離れてゐない寺。うきよでら(浮世寺)參照。西鶴五百韻「世間寺いつのころより秋の風、稽古囃子に松蟲の聲」。一代女三「太鼓持をば連れ、世間の有徳なるを聞出し」

世間の範 範は「さい」と訓み、采配の意であらう。即ち「世間の評判」の意かと思はれる。「さい」については、「金の範」を參照。大矢數四「大句數是にて耻ぢよ時鳥、世間の範に銀の卯花、既に雲白旗さらすけしきにて」

世間張る 世間體をはる。見えばる。戀八卦柱曆中「銀子一貫目、家實の利息のたし銀に、黒谷の和尙より借つたれども、世間はつて何にせん」

せごう 背甲(せかふ)か。曾我會稽山三「せごうの元げたる盗人鹿、惣構の柵をくゞる所を」

せごし 瀕越。物の度を越すこと。しすごすこと。

せごたいこ 列卒太鼓。勢子太鼓。狩の列卒が打鳴らす太鼓。その音。せごづつみ。

せごめまはず 虐待する。いぢめる。こき使ふ。卯月潤色中「掴みづら兄弟が、お龜女夫を踏付に、せごめ廻はすと云ふ事を、盲目でさへ知つてゐる。そなたに二つ眼はないか、但し知つての指圖か」

せじさい 定齋。ぢやうさい(定齋)に同じ。丹波與作中「どつこいどこそで此の損を梅の木のせさいの辻で、身粉にはたいやつて見た」

せしめうるし 石漆。樹皮から掻き取つたままの漆液。ねばり強く、物をつぐに用ひられる。

せしめる うまくなしとげる。人の物を巧みに我が物とする。占有する。文武五人男「彼奴をさへ討取れば、最早天下はせしめたり」

せじやう 世上。世間。世の中。戸外の様子。一代男三「世上もしづまりて門に立ちよれば」

世上を見限る 俗世間の事を思ひきる。

せ

一代男六「世上を見限り、尼寺にかけ込

み」

世上をやめる 前條に同じ。俗つれ、

二「世上をやめて人にも逢はず、只茫然として月日を過し」

せせくしや 皺だらけ。もみくしや。傾

城酒呑童子三「文引裂いてせくしやの、小棲ほろく立出れば」

せせくる (他動詞)せまる。つつきまはす。いぢる。

せせくる (自動詞)せまる。こせつく。

つぶやく。抱狩劍本地二「せまくり寄りて問ひかくる」

せせなき 溝。どぶ。下水。もと「せせらぎ」と同じ。

せせりばし 箸で物をせせりさがすこと。つつきまはすこと。その箸。二代

男二「三ツ葉の浸物など、せまり箸して、すまし汁吸ひもあへず」

せせる 攻めかかふる。せまりつつく。いぢる。弄ぶ。せせくる。永代藏五「佛の道にかしこく身をせまる蚤を殺さず」

女腹切上「後からせまるやら、前からは毛の生へた大きな足を突出すやら」

せせる 口軽くしやべる。笑談言ふ。一代男七「九軒の住吉屋に行きて、四郎左

にせまる輕口云はせ」

せそんじやう 世尊寺様。世尊寺流の書風。藤原行成の創めた書風。行成の祖父の第を世尊寺と稱したので起つた名。御家流の書風。川中島合戦三「世尊寺様の走り書き」

せたいぐすり 世帯薬。世帯を持つたためによいこと。生計の爲になること。その人。即ち世話女房。所帯尊。萬文反

古二「年の行きたるが世帯薬と存じ、(中略)順禮宿の娘、男に死別れてもど

りなるが、あの方から二十七と申せば」

せたいぶつぽふ 世帯佛法。次條の略。胸算用五「古人も世帯佛法と申されし

事、今以て其通りなり」

世帯佛法腹念佛 (謔)衣食の爲の佛法、

餠口の爲の念佛。佛に詣るもつまりは活計の爲である。佛法よりも衣食が肝

佛である。今宮心中と「世帯佛法はら念佛、口に喰ふが一大事」

せたいやぶり 世帯破。一度夫を持つて夫婦別れした者。人妻となつて後、その家を出て獨身となつたもの。織留六

「乳母に出る奉公人を見るに、大かたは世帯破り、又は下子共男定めずたはれ

て、やうく其子を中宿に産み捨て、

乳のあるにまかせて」

せたらなき 瀬田鯉。近江國瀬田から産する鯉。俗つれ、四一勢田鯉、近江

鮒、茶壺は宇治にて詰めさせ」

せたく 唐。しへたく。轉じて、追ひ立てる。いそがす。せく。せめる。唐船

嘶今國姓爺「年貢は一粒も残さずせ

せたらおふ 背を擔めて負ふ。背中を曲げて物を負ふ。

せちがしこし 世智賢。世智にたけてゐるさま。轉じて、打算にたけたさま。

せちがらい 行動などを形容する語。一代男五「いくらが物ぞ、天神小天神とせ

ちがしこきはめぬ」。榮花咄五「商人心のせちがしこく、此里の女郎、高下に限らず、十露盤入れて惣高を聞く

に」。二十不孝「世智賢き人の心見えすきて、始末を所帯の大事といへり」

せちがな 世智がな。せちがしこい。せちがらい。勘定だかい。前條参照。生

玉心中上「己れもせちがな奴じや者、銀も見ずにあたまかに請取をせうわいな

あ」

せちがふ せがむ。せつく。容赦なく物を請ふ。油地獄上「どうだくと責め

**せちがふ** 世智なり。(形容動詞)せちがしこい。せちがらい。打算的なことにいふ。永代藏ニ「親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず」。菜花唱四「自由なる大騒を見てこそせちなれ、爰程の事又外になし」

**せちぶるまひ** 節振舞。節日の振舞。季節の變りめなどにあつて催す饗應。特に新年を無事に迎へた祝の振舞。大矢數ニ「芝居はあらし書初は筆、節振舞又口上が肩かねば」

**せちべん** 世智辨。奇譚。けち。世智がらいこと。二代男ニ「人の女房家主のせちべんなる事を思へば(中略)、盆正月の仕着物、譬へば近江縞一反裁ち合せば風俗も見よきに、残して何の役にも立たざりし切れを惜み」

**せちべんたび** 世智辨足袋。足袋を汚さぬために穿き用ひるもの。もと、始末の心から考へたものなのでかくいふ。信田小太郎ニ「物の値段を推がほに、さし出過ぎたる心いき、せいべんたびもにくていらし」

**せつ** 切。切。心の切なきま。深切、懇篤なきま。大矢數ニ「一重羽織でせつひ

(い) 町醫者。壽門松上「せつのお前のお心入、立ちながらの盃に酌流さんもお本意でなし」

**せつ** かい 刷麴(せつかひ)。飯杓子の頭を縦に半切にした形のもの。搦鉢に附いたものを搔きおとすに用ひる。切麴。女腹切中「ヲ、用意搦鉢、刷麴搦鉢木しやに構へ」

**せつ** きごゑ 節季聲。落ちつきのない聲。忙しく口をきくさまにいふ。二代男ニ「或る太夫殿は格子へ紙子を近寄せ、拾二匁錢にして取るより、三分輕い分には取つて歸らりやと世間も構はず、節季聲を出して、見れば秤を持つて居ながら、賤しきは是ぞかし」

**せつ** きじまひ 節季仕舞。節季に當つての諸支拂をすますこと。節季の總勘定。萬文反古ニ「一家無事に大かた節季仕舞いたされ候よし満足申候。十二月の節季仕舞は、特に、正月仕舞ともいひ、總勘定をすまして正月の支度などすることである。

**せつ** きぞろ 節季候。「せきぞろ」を見よ。せつきやう 説經。説經節、又は説經祭文のこと。妻帯の法師などが、佛法の教義などを詞に綴り、浮世話を交へ、

節をつけて唄つたもの。後には一種の俗語となつた。俗つれ、「昨日も日暮小太夫が説經を聞けば」

**せつ** つくはじめ 節句始。生れた兒の初めの節句を祝ふこと。又、遊女がその廊で初めて節句(紋目)にあふこと。雪駄の裏に灸。雪駄(せつた)又はせきだ)の裏に灸を据ゑるのは、長居の客を辭去せしめる呪ひであるといふ。今宮心中「佛頂顔に二郎兵衛艾に火をつけ庭の隅、卜庵の雪駄の裏、物は試しと煽ぎ立て煽ぎ立ててぞ煙らす。まじなひは理外にて卜庵氣にや徹しけん。是は不思議千萬、俄に宿へ歸りたい。もう往にましよ」

**せつ** ちやう 殺生(せつしやう)の轉訛であるといひ、「切打」であるともいふ。せめさいないみちめること。こき使ふこと。傾城酒吞童子ニ「此八百兩の戻程、餘の女郎共をせつちやうせいと(中略)、茨木童子が劍みづら」

**せつ** ば 切羽。刀劍の鏢の両面、鞘と柄とに接する部分に添へた金具の稱であるが、物事の急迫した場合をもいふ。雪女五枚羽子板上「此太刀も、主の目抜の盗み物、生きる死ぬるの切羽ぞと、

せ

心も後れ手も頼ひ」  
切羽腰金する 切羽(せつば)も腰金(はばき)も、共に刀劍の金具の名稱であるが、熟して、「談判する」、「詰めひらきする」などの意に用ひる。切羽は急場で、「はばき」はさばき(裁)といふ音の類似から洒落たものか。五十年忌歌念佛上「勘十郎殿先刻にから切羽腰金する通り金渡ししたら損であらう」

せつひ 「せつひ」を見よ。

せつようしふ 節用集。簡略な日用辭典の一種。織留「節用集に見えわたらぬ難字を庄屋殿より度々たづね給ふに」  
せつり 刹利。せつていり(刹帝利)。印度に於ける四姓の第二位にあるもの。王及び武士の種族。百日曾我曰「冥途の道に入りぬれば、刹利も首陀も、かはらざりけり」

せとものちやう 瀬戸物町。江戸日本橋に近く、魚河岸の北詰町の東側にあたる町名。鳥類の賣店が多かつたと見える。榮花咄三「けふは白い鳥を瀬戸物町にて、金子五十兩に求め」。胸算用五「瀬戸物町廻町の雁鳥」  
ぜにちり 錢賣。かねあきびと(金商人)の條を見よ。

ぜにがさ 錢瘡。皮膚病、たむしの類。癖。二代男五「田蟲もあり、見える所の錢瘡も、是には土龍の手して搔くが妙薬なり」。兩吟「日千句「土龍身はあまがほのはかなくて、おもひあかしの錢瘡をかく」

ぜにぐら 錢藏。錢を入れて置く藏。銀藏などに對していふ。永代藏三「錢藏銀藏は渡して、三間に五間の小判藏一つ」

ぜにざ 錢座。錢貨を鑄た役所。豊臣氏以後おかれたが、江戸時代に入つては、寛永十三年六月に創設し、延享二年に廢された。その後明和二年八月に又設けられたが、安永三年九月に廢された。女腹切中「無いか聞かぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて」とは、京都大佛の西の地名になつたものである。  
ぜにさし 錢差。孔錢を貫いて束ねる繩。さし。永代藏一

「小口俵のすたれを拾ひ集めて、錢さしをなはせて」



錢する 錢を受取る。代價を貰ふ。吉野都女楠四「是々寝入らぬさきに錢しませふ。是且那衆、はて手のわるい狸ね

いり、酒代早ふとゆり起す(中略)。サアそなたから錢せふとねだれかゝる。ぜにだいに 錢太鼓。(小兒の玩具にする小さい太鼓。二代男一「此所は浴中のお乳の人の集り所なり。錢太鼓、唐人笛の響、竹馬の鈴の音、物の騒がしき中へ。三味線に合せて、踊をはやし、酒宴の席などを賑はす小さい太鼓。今日のは、撥を筒にし、錢を入れて、打つ拍子、振る拍子に錢の響がするやうにしたもの、或は、孔錢を差し連ねて太鼓形(輪)とし、その柄を振つて音を響かすやうにしたもの。博多小女郎上「なふ欲市殿、その拍子では踊られぬ、錢太鼓の三味線、知らずば知らぬと頭からいふたがよい」。同「私共二人錢太鼓稽古してゐたりや、欲市の三味線で邪魔しやりんす」

ぜにみせ 錢見世。兩替店。分銅屋。永代藏一「今橋の片陰に錢見世出しけるに、田舎人立ち寄るにひまなく、明けがたより暮れがたまで、わづかの銀子とりひろげて、丁銀こまがね替へ、小判を大豆板に替へ、秤にひまなく懸け出し」

ぜにや 錢屋。前條に同じ。又、古金物

せ

商のやうな者をも稱したか。ぜにうり  
(錢賣)の條参照。榮花咄「これまで  
頼みし旦那は次第に衰へて、昔の見世  
つき替り、錢屋となつて、絹物は帯に  
もせざる亭主が手輕き縫にて煙管の火  
皿を叩き伸ばして居れば」

錢をつく 錢を筒から突き出す。錢をつ  
かませる。歌念佛上「男とをな子と喧  
嘩して(中略)、扱ひになりしやら、錢  
をついたも慥に見た」

ぜひ 是非。是でも非でも。むやみに。  
一代男三「そのまゝ美しき貌にも、是非  
おしろひを塗りくり、額は口丸く、き  
は隈こく」

せびらかす せびるやうにする。強請す  
る。無理にねだる。せがむ。冥途飛脚中  
「今日は鳥屋で、彼の田舎のうてずにせ  
びらかされて頭が痛い」

せふやう (爲)う様。爲(せ)んやう。  
致し方。せんすべ。出世龍徳上「お笑止  
とも氣の毒とも、いふた計りで爲ふ様  
なし」

せまくら 瀨枕。川や、海の潮などの流  
の速くて、立つ波の枕を打ちかへすや  
うなさまにいふ。晝夜用心記三「汐間瀨  
枕たかく、渦まく白浪、鳴波に似たる

難所にて」

せみ 千味。せみくぢら(脊美鯨)のこ  
と。永代藏二「そのたけ三十三尋二尺六  
寸、千味といへる大鯨」

せみをれ 蟬折。(鬢先を上にもそらして  
蟬の形した男の結髪。天和の頃流行し  
たといふ。(三)唐から渡來した寒竹製の  
名笛の名。牛若丸愛蔵のものも傳へら  
れる。孕常盤四「この直垂大口は、母の  
手づから縫物し、蟬折の一管と、とも  
に形見に賜ひ給ふ」

せむ 責む。馬を訓練する。乗り馴らす。  
武道傳來記八「我が買ひたる馬(中略)、  
定めて小松馬場にて責むべし」

せめうま 責馬。馬を馴らすこと。馬の  
訓練。槍權三上「せめ馬の、鞍も鐙も汗  
に成り」

せめぐち 責口。攻口の轉用であらう。  
大矢數二「負せ方より責口の次郎」

せめねんぶつ 責念佛。心にもなく強ひ  
て念佛を唱へること。或は、強ひて高調  
子に早く唱へる念佛。大矢數一「盛物や  
當寺さかんの法の花、責念佛の生玉の  
春」。二代男一「三月十五日、これから萬  
日の廻向じやと、藥籠を叩いて責念佛、  
願以此功德、これでしまへとまた寢所

に入り」。永代藏五「我と心をせめ念佛、  
申しても、口惜しき身の行くする」  
せりかく 迫掛。迫つて詰めかける。曾  
根崎心中「やらぬとせりかける」

せりふ 臺詞。舞臺上の役者の詞。轉  
じて、いさかひ言。判斷。理窟をなら  
べること。女腹切中「コレ半七、お花は  
こちの奉公人。親仁とのせりふなら、  
何所ぞ外でしたがい」

せりもの 競物。競賣の品物。萬文反古  
「中間のせり物を大ぶん取込、是を損  
して賣拂ひ」

世話入れる 世話をする、手をかけるな  
どの意か。博多小女郎上「世話入れた漆  
七桶」

世話かく 世話をする。世話やく。薩摩  
歌上「此中夫婦が用意して、餅と杵よと  
世話かくが、そなたの目には見えぬか」

せわきやうげん 世話狂言。現在の出来  
事、平民的の事實を仕組んだ狂言。世  
話物狂言。時代狂言に對する稱。重井  
筒下「二人が噂世話狂言の、脚色の種と  
なるならば」

せわことは 世話詞。普通の詞。日常の  
通語。釋迦如來誕生會「詞かはると聞  
ゆれど、文字にうつせば天竺も、日本

も同じ世話詞、筆につらぬる御佛の、國の教へぞ」

せわやまひ。世話病。世話をやきたい癖。世話焼性分。

世話やむ。世話を焼いて苦に病む。女腹切下「大事の甥を連合に、見限らするが口惜しい。此の世話やむも大切き」。生

玉心中上「嘉平次がいとししいばつかりに世話をやんで病み死の母様の恩をはや忘れ」

ぜんあくふに。善惡不二。善も惡もつまりは佛法の理に歸すること。善惡無

二。釋迦如來誕生會「善惡不二の御座の紐」。同四「迷へば佛敵、悟れば味方善惡不二のしるしはこれ」

ぜんかうみ。線香見。矢數俳諧の時に、時間を測るための線香を見る役。大矢

數「線香見、池山西戎」

せんきう。川芎(せんきゆう)。植物の名。繖形科、川芎屬の多年生草本。莖の高

さ一二尺、葉は羽狀複葉、香氣がある。秋季、白色の小花を複繖花序に開く。根は薬用とする。下例は、疝氣とかけて用ひた。薩摩歌上「地體我れら川芎持ち」

ぜんきごき。前鬼後鬼。前鬼は大和國吉

野にあつた村の名。古へ前鬼と言つた山民の裔であるといふ。後鬼は葛城に居たが後には一村に住した。髮髯など生ひたままの頑民であつたが、延寶の頃から奈良と往来するに至り、風俗も改つたといふ。又、役行者の前後に隨行したといふ童形の鬼。

せんきすぢ。疝氣筋。疝氣の時張つて痛む筋。轉じて、正しくない筋。正系にはづれたすぢ。雪女五枚羽子板中「崑山の重忠も、縁者續きの先祖にて、三浦大介が疝氣筋」

せんきまんぎ。詮議まんぎ。詮議のこと。「まんぎ」は口拍子に添へたもの。傾城反魂香中「お身に覺えがなうてから詮議まんぎも喧し」

せんぐわんえだ。千貫枝。松などの枝ぶりのよいもの。「一枝千貫の價」などともいふ。傾城反魂香上「ぬつと出せし片足は、慮外千貫千貫枝、筆捨枝や久方の、天津少女のかたぐま枝や」

せんぐわんじ。千貫樋。せんくわんどひ。數多く長く續けた樋。天下馬三「兩村の大勢千貫樋に群り」

せんぐわんまつ。千貫松。枝ぶりなどのよい老松の稱。京都武者小路通笹屋町

筋にもあつたといふ。織留「庭に枝もふりたる松あり、北野の千貫松、淡路の萬貫松にも劣らず」。下例は伊勢にあるもの。丹波與作下「この阿彌陀の影たのむ、其の誓願の詞の縁、千貫松にぞ著きにける」

千軒あれば友過ぎ (諺) 千軒の戸數があれば、各職業が有無相助け相通じ、互に共存して行ける。大矢數一「詠めやる醫者智者福者今日の月、千軒あれば友すぎの秋」。二十不孝一「それく」の家職して朝夕の煙を立てける。千軒あれば友過といへるに、爰にて何をしたらばとて渡りかぬべきか」

せんごくどほし。千石通。農家の用具。筵(とほし)の類。上に大きな匣があり下に斜になつてゐる飾があつて、春米を糠と米とに分けるに用ひるもの。永代藏五「唐箕。千石通し、麥こく手業もしどけなかりし」

せんごくとり。千石取。千石の俸祿を取る身分。大身(たいしん)。

せんごくぶね。千石船。千石積の舟。大船の形容。姫山姥三「船に積んだら千石船」

前後にくる。前後不覺になる。前後をわ

きまへないやうになる。釋迦如來誕生會四「罪障懺悔の血の涙、暫し前後にくれるが」

**善五郎** 金貨の周旋などする者の擬名

か。永代藏六「京の室町歴々の男子、何も賣買なしに善五郎などを頼み、大分の銀がして世を渡り。」善六六參照。

**ぜんざい** 善哉。善い哉と感じた時、喜んで發する語。佛家の用語。釋迦如來誕生會四「仙人退去つて禮をなし、善哉々々、釋迦牟尼如來天人師佛世尊、昔の所願満足して。」次條の略。

**ぜんざいもち** 善哉餅。つぶし溜の汁粉。京阪でいふ。萬年草上「法印様の相伴で、善哉餅を十三杯」

**ぜんざく** 穿鑿。詮索。探り求めること。事の根本を知らうとすること。又、物に理窟をつけ、仔細あらしめること。

大矢數三「下紅葉」はい過す織部殿。飛子の名には奢つたせんさく。」一代男二「假初にもかゝる一座にて年穿鑿は用捨あるべし」

**せんしやう** 僧上(せんじやう)。身分不相應な振舞。見えを張つた行爲。したままの豪奢。大言壯語。一代女五「若い時には遣ひたき金銀は儘ならず、せ

んしやうはしたし、我も人も必ずすることぞかし。」次條參照。

**せんじやう** 僧上。前條に同じ。俗つれん二「さのみ馴染もなけれど、借上げかりに請けるといひふれど。冥途飛脚中「傾城は公界者、五十兩の目腐銀取替へた僧上、若い者に耻かゝせ、川が聞いたら死にたかろ」

**煎じやう** 藥の煎じ方。但し、漢方醫の藥袋には「煎じやう常の如し」ときまり文句に記すので、「常に云々」と續け熟語のやうに用ひられる。永代藏三「煎じやう常とはかはる問藥」同二「冬も羽二重のひとへ羽織、煎じやう常に變らぬ衣装つき」

**せんじやうをとこ** 僧上男。僧上を振舞ふ男。傍若無人な男。永代藏四「長柄の傘さしかけさせ、世上かまはず僧上男、いかにおのれが金銀つかうてすればとて天命を知らず」

**せんじゆ** 千手。千手觀音の略。孕常盤二「此度小松様の御願の爲、千手の眞言十萬遍」

**せんじゆは** 専修派。専修寺派の略。眞宗の一派。伊勢國庵藝郡一身田専修寺を大本山とするもの。高田派。織留四

「御隠居に専修派の長念佛もうし出され」

**せんしやう** 先勝。先勝日の略。陰陽家で、急用・變事・訴へ事などに關して幸運ありとする日。月によつてその日を異にする。下列はこれを刻限のことに轉用したものである。堀川波鼓下「運のさかり刻限先勝の時至れり」

**せんすぢごより** 千筋紙撻。幾筋か澤山に撻り合せたこより。五人女二ぬり笠にとら打て千筋ごよりの緒を付け。ちすぢごより。

**せんすぢぞめ** 千筋染。千筋の染め方。細いたてじま模様染めること。一代女一「よねの好きぬる風俗は、千筋染の黃無垢の上に黒羽二重の紋附」

**ぜんせい** 全盛。盛りを極めること。特に遊女などの、客多く、盛んにはやること。

**ぜんせいむすめ** 全盛娘。年頃の娘。美しい盛り娘。永代藏三「内義の乗物、全盛娘に琴歌がた」

**ぜんない** 闍提。佛語。因果の理を信ぜず、佛法を誹謗するもの。佛法に縁がないもの。釋迦如來誕生會四「外道闍提の施物を受くれば、三惡道に落つ」

せん

せん

せん

せん

せん

**せんだいじやうるり** 仙臺淨瑠璃。奥羽地方で流行した淨瑠璃節。内容はいはゆる古淨瑠璃で、三絃を用ひず、扇子で拍子を取つて語つたものであるといふ。おくじやうるり。

**せんだの木の橋** 梅檀の木の橋。大阪では梅檀を「せんだ」といふ。淀屋橋と難波橋との間にある橋の名。中の島の劍先から船場にかけての橋。油地獄下「此脇指はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見えぬ沙汰」

**せんだらげ** 游陀羅花。印度に産するといふ一種の花。

**せんだん** 棟 觀賞用として庭園に栽培され、又、材は建築・器具に用ひられる。幹の高き二三丈、羽状複葉で、春季、淡紫色の小花を圓錐花序に開く。あふち。あみのき。くもみぎさ。せんだんのき。一代男二「せんだんの丸木引切り枕」

**せんち** 先知。以前領してゐた知行。男色大鑑三「間もなく先知六百石にて濟みぬ」

**せんだう馬方お乳の人** (諺)「馬方・船頭・御乳の人」ともいふ。その條を見よ。丹波與作上「さて〜利口な野郎じ

やな。船頭馬方お乳の人、此方もそちらとおなじこと。して年は幾歳」

**せんにち** 千日。(一)多くの日數。(二)大阪の地名。刑場のあつた所。冥途飛脚甲「お名残惜しいと申さうか、千日いうても盡きぬこと、其の千日が迷惑」と。油地獄上「すぐに引立引出す、果ては千日千人開き」

**せんにちてら** 千日寺。大阪法善寺の別稱。寛永年中、千日の念佛を執行してからの稱であるといふ。重井筒下「此處は竹田か夜は何時ぞ。五ツ六ツ四ツ千日寺の、鐘も八ツか七ツの芝居」

**せんにちまうて** 千日詣。(一)千日間、毎日神社に詣ること。(二)陰曆七月十日、觀世音に詣ること。此の日一日の參詣は、千日の參詣にあたるといふ。四萬六千日ともいふ。せんにちまゐり。

**せんにんざり** 千人斬。多くの人を斬ること。腕だめしなどの心願の爲に、千人の辻斬をすること。「代女六」幟は紙をきけるに、辨慶は目を細く、牛若丸は恐ろしく、あちらこちらへ取違へ」

**善の綱** 開帳・常念佛・萬日供養などの時

本尊の手にかけて、參詣の人に引かされる綱。結縁のためにするもの。御手糸。善の綱。物種集上「卯花の垣根まで引く善の綱山時鳥本尊開帳」。一代男六「床柱より琴の糸を引きはへ、(中略)

この有様は執心の鐘鐺の場、善の綱かとおもはれ。又、送葬の時、柩を挽く綱。

**せんばい** 千倍。喜怒哀樂の情の非常な度を表すに用ひる。特に大満足の意。歌念佛中「おゝぞつとする程お嬉しい。恨みの雲と晴渡り、これで千倍々々」

**せんばに** 船場煮。千把煮。鹽物の魚を汁にて煮出したるもの。船場(せんば)五人女「金じやくし片手に目黒のせんなば煮を盛る時、骨かしらを取りて、清十郎にと氣をつくる」

**せんぶくりん** 千輻輪。佛語。三十二相の一。足の底の網形の紋が、千の輻輪のやうに見えるもの。

**せんぼんねぶつ** 千本念佛。せんぼんねんぶつ。京都上京千本通り引接寺の閻魔堂で行ふ念佛。毎年五月廿四日から十七日間を期とする。はなねんぶつ。千本の釋迦念佛。俗つれ〜四一山城國都の北なる千本念佛に、女は物見たけ



せそ

くて出ける」

せんぼんまつ 千本松。駿河國沼津の海岸の稱。並木の松がある故にいふ。

せんまいだうぐ 千枚道具。小判千枚を價する道具。金千兩の代物。大句數上

「國の春千枚道具はこび来て、にしきの袋八重のしほ海」。二代男「此の無疵千枚道具なり、こんなものを買はぬは、目の利かぬ大臣や」

せんまいもの 千枚物。前條に同じ。晝夜用心記「これ天下に貳腰の名劍なり、千枚物とはこれなり」

せんみつ 千三つ。千いふことの中、三つだけが眞であること。うそを言ふ人。うそつき。曾我五人男「何と其繪は出来申さぬか、但し例の千みつか、如何に」

宣命の邊 せんみややうのはん(宣命版)をおく邊といふ意であらう。宣命版は長さ一尺五寸、幅一尺、高さ八寸許りの箱で、公事ある時中務が庭中に置き、宣命使が着いて宣命を讀む所である。大職冠五「萬戸も飛び下り、宣命の邊の大石かる」と掲げ歩み寄る

千里が竹 支那にあつて、虎が棲むといふ假想の地名。國性爺「出合ふ所は唐

土に隠れなき千里が竹にて相待つべし」

ぜんろく 善六。善五郎と同じく、金の貸借など周旋する者の擬名か。大矢數

「善六に手形計りは残りける、或夜の夢に鬼の契約」。西鶴五百韻「かし銀や利は朝の間にまはらん、はつちにいろ、善六が門」

そ

そうあげ 惣揚。あるだけの遊女を皆揚げて遊ぶこと。女腹切中「今夜は妓衆の惣揚見事な事か」

そういち 惣一。すべてで第一に位するもの。第一。隨一。俗つれ、四「數年花見に諸國人をあまた見し中にも、これ惣一古今の稀物、この所に都のありし昔も、かゝる女は傳へ聞かず」

そうか 惣嫁。總嫁。淫賣婦。京阪の語。暗い處にゐるのであればさうかと分り難いのでいふと。一代男「此所にて干瓢と申侍る、夕貌を作りてひらしやら靡くといふことぞかし、京大阪に惣嫁といふ者に違はじ」。壽門松上「太夫様

でも、

畢竟直

段の高

じ總嫁

じやないか」

そうがまへ 惣構。

すべて一體に構へたくるわ。惣がこひ。曾我會稽山三「御吟味きびしき惣構、鹿の皮を被り、忍び入らんせし」

宗祇の蚊屋 (謔)うそを言つて見えを張ること。昔宗祇法師と同じ蚊帳に寝たといへば、連歌師の誇であつた。物種集上「忍び逢よるは宗祇の蚊屋釣て、古今の大事傳へられけん」

そうげき 念劇。せはしくいそがしいこと。さわぎ。武道傳來記「されば此度の念劇止む事なく」

ぞうさき ざうさ(造作)に同じ。

ぞうさん 宗三。一節切(ひとよぎり)の名人であつたと見える。永代藏「一節切は宗三に弟子となりて」

そうじぶらうづきん 宗十郎頭巾。「しこるづきん」に同じ。

そうしやばん 奏者番。大名が將軍に謁する時に、取次をなし、又、江戸參勤の時に上使を務める役。堀川波鼓中「侍



大將奏者番、旗大將の跡先に「  
そうしやくやく 奏者役。武家に於て、主  
公への取次役の稱。前條参照。丹波與  
作上「與作殿は段々に、そう者役番頭千  
三百石までお取立」

ぞうする 増水。雜炊。粥に味をつけて  
野菜など入れて煮たもの。俗に「おじ  
や」といふ類。永代藏ニ「七草といふ  
謂はれは(中略)、あれは神代の始末は  
じめ増水と云ふ事を知らせ給ふ」

そうそう 惣惣。すべて、ことごとく。  
傾城酒呑童子曰「惣々の女郎の心が反  
れたら、五千兩や七千兩の損が見たい  
迄」

そうちち 惣中(そうちゆう)。一同。仲  
間全體の稱。新可笑記ニ「此儀いよく  
惣中御訴訟申上ぐべし」

そうづり 總釣。女の髪を結ひ方。下げ  
島田に結つたものを、斧で全部浮かせ  
て釣つたもの。榮花咄「あの子をさて  
我物になして、惣釣に結ひたる髪わか  
げ目を、此鼻先へ觸らせ」

そうてんからちや 宗傳唐茶。京都の人  
宗傳が染め創めた茶色。男色大鑑五「宗  
傳から茶の疊帯」。同六「祇園林の鳥の  
羽色も宗傳唐茶に見なし」

そうどしより 總年寄。年寄役の頭。町  
村の取締役の頭。織留ニ「諸國の惣年寄  
金座、銀座、朱座、此外過書の舟持」

そうはぢ 總恥。皆の恥。すべての者の  
恥。百日曾我三「妾計りか勤めたる身の  
總恥なり」

そうぶつもの 贈物もの。そうもつ(贈  
物)の重言。おくりもの。進上物。重  
井筒上「中の島のそうぶつ物も昨日限  
の約束」。同「方々のそうぶつ物、内外  
の者の手は足らず」

宗味が石鐘 宗味は鑄物師の名か。石は  
刻(こく)の當字であらうといふ。宵庚  
申下「宗味が石鐘の開眼、鹿相な非時致  
します」

そうよう 總容。一座の者皆を呼ぶ敬語。  
又他人の家族一同を呼ぶ語。

そうれい さうれい(葬禮)であらう。萬  
文反古「そうれい待ちていつまでか  
定めがたき心當して」

そうわき 僧脇。わきそう(脇僧)の誤  
か。大矢數四「僧脇も衣かたしきうたれ  
けり、張貫にした山の秋風」

そがい そのやう。そんな(其様)。佐賀  
方言。博多小女郎上「むさうらしげに、  
そがいにせでも大事なかたん」

そがぎく 曾我菊。黃菊の異名。承和菊  
と書くが本来である。もと、承和の帝  
(仁明天皇)が、黄色を好み給うたので、  
承和色が黄を意味し、承和菊といふ名  
も起つたといふ。百日曾我五「今日は重  
陽の折に幸ひ曾我菊や、種たやさじと  
若共に」

そぎそて 殺袖。袂(たもと)を丸くそい  
で仕立てた袖。明暦萬治から元祿まで  
流行したものの。俗に元祿袖といふ。女  
腹切中「抱き締めたるそぎ袖も、涙にひ  
たす計りなり」

そぎやうじ 殺楊枝。杉の割木であらう  
といふ。五人女ニ「重菓子入に焼飯、そ  
ぎやうじ、茶瓶わするな」

そぎゑり 殺襟。半ゑりのこと。本襟と  
同じ長さのものを長襟又は丸襟といふ  
に對して、半襟又はそぎ襟と稱した。  
一代女ニ「白小袖を重ね、黒きそぎ襟を  
掛けて」

ぞくしやう 俗性。俗姓。俗に通稱され  
てゐる氏姓。今日の族籍、又は家柄な  
どいふ意味合に用ひられた。永代藏八  
「俗性歴々の浪人」。同「俗性筋目にも  
かまはず、只金銀が町人の氏系圖にな  
るべし」

**ぞくたく** 屬託。懸賞。又、その賞金。

**囑託**。又、則録とも當てる。

**そくび** 素首。首を屬つていふ。そつく

**び**。國性爺三「安大人が素首を掴んで指上げ」

**そくふ** そこひ（内療）。もと眼底に翳

（ひ）があるだらうと誤つて稱した病

名。瞳子の上に物が出来て見えぬ病

又、外見は常と變りなくて瞳子が動か

ないで見えぬ眼病。底翳。日本振袖始

ニ「急難急病内損外損あかどりそくふ

（内療）癩の神に至る迄」

**そくふ** つりあふ。相應する。但し、否

定に用ひられるのが常である。松風村

雨東帶鑑「殿に退かれて此三歳、一本

だちの木に竹や、そくはぬ連れも便り

には、僧正通昭伴ひて」

**そげ** 竹又は木などの殺げたもの。端

のそげて劣つたもの。白脇道へそれて、

ねぢけたもの。横着者。主馬判官盛久

そ

男七「一町の鳴りをやめて可笑しがる

事、京中のそげ者の寄合、さも有るべ

し」。前條（參照）。

**そこしん** 底心。心の底。したごころ。

そこい（底意）。關八州繫馬「頼信様

にそこしんから、命かけて思ふ故」

**そこせい** 駕籠かきの掛聲。氣を附けよ

などの意。博多小女郎下「道は一筋駕籠

二挺（中略）小川じや、そこせい、かた

せい、まつかせ」

**そこそこ** そこもここも。隅から隅まで。

又は氷の朔日上「そこ／＼氣のつく職

一人の、金出かす氣の格別なる」。又、心

せはしいさま。いそいそ。

**そこだめ** 底溜。物の底に溜ること。そ

もの。特に懐胎にいふ。大職冠三「是

舞殿の土産物、腹に八月のそこだめも

生まれぬ前の陸じく」

**そこぶか** 底深。大酒家の擬名。底抜（そ

こぬけ）の類。もと「大蛇丸底深」と

して水鳥記に出てゐる人物の名。俗つ

れん、「梅次、底深も今に歸りて語ら

ねば合點まるらず念を押す」

**底を押す** 念を押す。槍權三上「お侍の

詞、底を押すは如何なれど」

**そさま** 第二人稱代名詞。あなた。そこ

もと。大矢數三「世俗にいふ程なく嫁が

姑に、そさまの心替る行末」。吉野都女

楠「其おぼこなが尙うまし、そさまを

我が手に入れんため」

**そしりはしり** 誘ふこと。「はしり」は口

そ

れば、名山の煙立上り、燒止まる時節はあるまじ」

**そそりだす** 颯出。そそり始める。浮かれ出す。一代女四「神ぞ情知りさまと凭たれかくれば、此親仁颯出して、久六呼びて袂篋を明けさせ」

**そそりたつ** 前條に同じ。本朝三國志二「浮かれ浮かされ、大將・雜兵そそり立ち」

**そそりびと** そそる人。浮かれさわぐ人。そそりもの。一代女六「過ぎにし上手を出して、粹こかし、そそりびとの氣を取りけれど」

**そそる** ①浮かれさわぐ。一代女二「いたり物語二つ三つ、頭にそそらずして、萬事おとしつけてゐたる客には太夫氣を呑まれ」②遊里に通ふ。ぞめき歩く。油地獄上「まだ肌寒き川風を酒にのぎてそそりゆく」

**そだてる** おだてる。煽動する。いやにほめ立てる。二代男二「人にそだてられて、大はづいふほどのお敵は、十に一つも物になるぞかし」。榮花咄「大臣に備はりました御生れ付とそだてける」

**そつくび** そくび(素首)に同じ。

**そつくり** 「がくりそつくり」と熟して、物のちぐはぐとなり、又、くじけ曲るさまにいふ。日本武尊吾妻鑑三「駿馬、谷の板橋がくりそつくり、歩みなづむが如くなり」。がつくりそつくり。

**ぞつこん** しんそこ。眞心から。心の底まで。曾我會稽山四「今宵の雨は身に掛り、ぞつこん通つてわぢ〜と、物悲しう罷成る」

**そつと** 一寸。少し。わづかばかり。博多小女郎上「九右衛門と申して、そつと致いた唐商賣」

**そつぼづれ** 物の端。かたはし。はしくれ。その仲間の一人を卑めていふ。

**そつぼう** そつぼう(外方)。そとの方。わきの方向。

**そつぼうめつぼう** 外方滅法(そつぼうめつぼう)。滅法を強めていふ語。めつたやたら。めつたむしやう。めちやくちや。博多小女郎上「惣七水棹おつ取つて狂ひ出で、ヤア海賊めら、(中略)とそつぼう滅法打立つる」

**そてかちる** 袖香爐。衣の中に携帯するやうに作つた香爐。廻轉仕掛けで、香爐を常に平に保たしめてゐる。二代男五「右の手より袖香爐出して」

**そてかがみ** 袖鑑。世上の事柄をば、古今に互り類集して一覽に便した書。二代男六「平城の袖鑑に、よい衆分限者、銀持とて、是れに三つの分ちあり」

**そてがき** 袖垣。門扉など添へて低く結うた垣根。一代男一「袖垣のまばらなる方より女を呼びかけ」。同七「萩の袖垣など靜かにながめて」

**そてがさ** 袖笠。袖をかざして笠のやうにすること。釋迦如來誕生會三「一村雨に暫しとて、被く袖笠眩笠や」

**そてがさあめ** 袖笠雨。袖笠で凌ぐほどの雨。歌念佛下「袖笠雨の宿りにも、心止めぬかり枕」

**そてがさね** 袖果。袖重。袖を連ね重ねること。懷硯五「唐織の幔幕うたせ、袖果の衣裳盡し」

**そてごひ** 袖乞。乞食。ものもらひ。乞食すること。一代男一「往來の人に袖乞ひして」。戀八卦柱曆中「命の内は袖乞でも、頼みないは後生の事」

**そてしのうら** 袖師の浦。①駿河國庵原郡の内。②出雲國八束郡竹矢(ちくし)村馬湯の海邊。日本振袖始四「若にかたしく袖師の浦、磯に寄り來る浮藻玉藻」

**そてしまげんじ** 袖島源治。俳優。女形

の名人。殊に目もとがよいので評判であつたといふ。

**そですり** 袖摺。次條の略。椀久一世物語下「軒は萬かづらのしげり、袖摺の長露地」

**そですりまつ** 袖摺松。袖がふれて摺れるほどの小松。袖摺りの松。大矢數ニ「襟付けて舌がまはつた風の音、玄關によりて袖すりの松」。槍權三上「引廻し乗る袖摺の、松も女松の十八公」

**そでついち** 袖築地。門の兩側、塀などに添へた築地。

**そでなり** 袖形。薩摩歌中「我もそもじも缺腋の、その袖形の行肩も」

**袖にあしらふ** おろそかにする。疎んずる。冷淡にあつかふ。傾城酒吞童子ニ「胡散らしげな大小に、さすが袖にもあしらはず、亭主太四郎揉手をして」

**袖にす** 前條に同じ。堀川波鼓中「いとしき我が夫を、そでにしての不義ではなし」

**袖になす** 前條に同じ。萬年草上「兄分を袖になし、こゝろざしを無下にした」  
**袖になる** 袖にするやうになる。うとましくなる。大磯虎稚物語ニ「勤の外の戀衣、ばつと立つ名におのづから、外の

枕は袖になり」  
**袖の淺** 今の博多港の稱。虎溪橋「きはつきて袖の港はわるくさい、もろこし舟にばいた寄見ゆ」。俗つれく「袖の淺の故郷思ふ筑前の侍」

**そではん** 袖判。書物の前後書き残した餘白に押し印のこと。又、認可の證として公文書類の端に署した花押。認證の書き判。精進庵「御袖判反古に花の埋れて」。出世瀧徳上「その公家様のお袖判を偽判し」

**そでひやうし** 袖表紙(そでへうし)。巻物・軸などの表紙をいふか。俳諧師手鑑「金衣鳥の翅や經の袖表紙」

**そでびやうぶ** 袖屏風。袖で顔をおほひかくすこと。袖几帳ともいふ。槍權三上「萬は氣轉才覺もの、目ませ領き權三を圍ふ袖屏風」

**そでふくりん** 袖覆輪。袖口の裏地を表に返して縫つたもの。袖のへりを丈夫に仕立てたもの。そでぶき(袖杜)。永代藏「龍門の袖覆輪かた〜にても、物の自由に賣り渡しぬ」

**そでぼうが** 袖奉加。袖乞ひして貰ふ奉加金。雙生隅田川「一錢・二錢の袖奉加」

**そとがき** 外垣。外がはの垣。そとがこひ。そとがまへ。百日曾我三「必定夜盜と覺えたり。大道へ出でつらん。此處を捨てよそとがきより山ぎはを捜されよ」

**そとがけ** 外掛。相撲の手の名。我が足を相手の足の外側からかけること。

**そとのはま** 外の濱。外が濱。陸奥國津輕郡西方・東方の海岸を總稱する。殊に東方の海岸、青森に近い上磯・下磯の地の稱。武道傳來記セ「外の濱の某處とやらんへ立忍ばれたると語る」

**外の不動様** 高野山不動坂の路傍にあつた不動尊。堂は二間四面で、本尊は弘法大師の作と傳へられる。今は兒が瀧の上に移された。萬年草下「頼む佛の御名問へば、我をば外の不動様」

**そとばだに** 卒塔婆谷。高野山刈萱堂附近にある谷。萬年草下「死出の山路を越ゆるかと、心細しやそとは谷、こゝな塚はと引きとめ問へば」

**そとはちもんじ** 外八文字。歩く時の爪先を開いた形。遊女の道中などの姿にいふ。内八文字の對。壽門松下「忘れぬ物よ見厭かぬ君が、外八文字の道中姿」

**そねざきてんじん** 曾根崎天神。大阪曾

そ

根崎の地にある天神。二枚繪草紙下「是こそ曾根崎天神の、松と棕桐との連理の森」

曾根崎の狂言 「曾根崎心中」の狂言。近松が世話浄瑠璃(心中物)の初作として、劃期的に名を揚げたもの。元禄十六年五月、翁の五十一歳の時、初めて竹本座に上演。後に増補改題して「お初神天記」と稱した。大阪内本町醬油屋平野屋の手代徳兵衛と、北の新天地天満屋お初とが、曾根崎天神の森で情死を遂げるに至る始末を仕組んだもの。生玉心中上「蜷川の芝居の曾根崎の狂言見て、醬油屋の徳兵衛と我等が思ひ引合せ」

曾根崎の森 大阪曾根崎天神の森。曾崎崎心中「風しん〜たる曾根崎の、森にぞ辿り着きにける」

園生に植ゑても紅 (影) 優れたものは何處にみても顯はれる譬。萬緑叢中紅一點。源氏烏帽子折目「園生に植ゑても紅の、流石なる御ふるまひ」

そばえる そばへる。「そばゆ」又「そばふ」の口語。「そばふ」を見よ。

そばえかす 「そばへかす」を見よ。  
そばきり 蕎麥切。今の「そば」のこと。

蕎麥粉を捏ねて、伸して切つて作るのでいふ。一代男「正月着物は夏秋をしらず賣りて、蕎きり酒に替へて」

そばぐろのゆみ 側黒弓。竹を塗らず、木だけを黒く塗つた弓。側白木(そばしらき)の弓に對する。堀川波鼓中「いざやしら木にそば黒の、弓に靱に矢籠矢箱」

そばそは 落ちつかぬさまにいふ語。丹波與作申「此方もいふ事ある管ぢや、そば〜せずと待たんせ」

傍杖にあふ 傍に居た爲めに迷惑を蒙る。傍杖を喰ふともいふ。無關係な事で難を受ける。まさぞへを受ける。

そばふ そばへる。そばえる。ふざける。ざれる。傾城反魂香上「虎は勇んで元信の、縛を噛み切り、背を差しむけてそばへたり」

そばへかす そばえるやうにする。ざれさせる。一代女「飼猫をなつて、夜もすがら結び髪にそばへかしけるほどに」

そびを飼ふ 「そび」はかはせみ(川蟬)の異名で、鶉又は翠鳥と記す。この鳥は水乞鳥(みづこひどり)とも稱せられ、雨の降らうとする時鳴くと傳へられ

る。みそごひ。そびを飼ふとは、雨を降らせるたくみをするといふ意。日本振袖始「ヤア怪しからぬ空の雨風、鬼殿そびを飼はるゝな」

そへこ 副子。腰刀の差裏(さしうら)に挿し込んである小刀。うらざし。

そへごし 添興。葬禮の時、輿に附添うて行くこと。一代女「鉦鏡鉢を打鳴らし、添興したる人、さのみ愁にも沈まざ」

ぞべぞべ しまりないさま。長い衣服など着てぞろぞろしてゐるさま。日本振袖始「百姓の子は小さうても、ぞべぞべと旦那顔して埒あかぬ。尻引つからげ徳かたげ」

そまいり 袖入。袖山に入ること。材木を伐るために山に入ること。

そまいれ 袖入。袖山に斧を入れること。伐木。斧で伐ること。雙生隅田川「悪魔のさいた大椽の首筋へ袖入れば、我れらが得物」

そみかくだ 修驗者(しゆけんじや)の異稱。蘇民將來と書いた札を修驗者が人に與へるので、「蘇民書く札」といひ、それが約つた語であるといふ。

そみんしやうらい 蘇民將來。(日本振

そ

袖始に出て来る人物の名。素盞鳴尊が南海に赴き給うた時、尊を厚遇し奉つた功によつて、尊から茅輪(ちのわ)を帯びて疫病をよけることを教へられたといふ傳説上の貧人である。日本振袖始<sup>三</sup>「畔の柳を手折らせ給ひ、これを削り小札とをし、紅の總を付け、蘇民將來子孫なりと書付け、幼き者の襟に付けよ。疫病瘧病、疱瘡はしか、一切の悪病を免るべし」。もと、陰陽道から出た神様を、素盞鳴尊のことに習合したものであらうといふ。かかくて、災厄を除き、福德・冥利を祈る守札の稱となつた(金鳥玉兎集・神社啓蒙)。一代男八「小さき弓矢に、蘇民將來の守りをとゝのへて、行末ながく御息災に、身あがりも遊ばさず」

**そめいひ** 染飯。東海道瀬戸の宿の名物。強飯をくちなしで黄色に染めたもの。その形は小判程で、うすい。但し食料品ではない(東海道名所記)といふ。丹波與作上「藤枝岡部瀬戸のそめ飯、うつの山邊の十間子、所々の名物買うて」

**そめかは** 染川。俳優染川重郎兵衛のこと。重井筒下「我を紺屋の片岡に、何とも思ひ染川は、豪詞に泣いてくれよか

**し**

**ぞめき** ぞめくこと。浮かれさわぐこと。遊廓に客の騒ぎ入ること。ひやかし客。武道傳來記「太神も御影向、末社のぞめき爰なり」と。女腹切中「四條の河原幾萬人、ぞめきの中に彼の人が、若しやと」

**ぞめきうた** がやがやと騒ぎうたふ歌。ぞめきの歌。宵庚申下「彼れ一群に聲高く、下向の衆のぞめき歌、見付けられじと影隠す」

**ぞめきすがた** ぞめく時の姿。うかれた風體。

**ぞめく** 浮かれ立つて、騒ぐ。騒ぎ歩く。二代男八「ぞめきたがる若い者ども、手前に引附けて置きし報なり」

**そめこみもん** 染込紋。染め付けた紋。(縫紋に對する)。

**そめそめ** 染染。見事に文字を書くさま、墨跡などのあざやかなさまにいふ。墨跡淋漓。又、しみじみ。一代男六「後の朝の名残をそめしと書きつゞけたる着物」。二代男三「行末とても變らせ給ふなど、そめし筆の跡」。五人女三「そめそめと返事をして」

**そめどの** 染殿。染物屋。(宮中にあつた

ものと異なる)。百日曾我二「西國方へ身をしぼる、豊後の國の染殿や、そこをすでに立わかれ」

**そもじ** 其文字。第二人稱代名詞、そなた(其方)に同じ。女詞。緋縮緬卯月紅葉上「二世と契りていとしいもの、そもじに怨みのあるべきか」

**そもそも** 抑。最初。はじめ。おこり。一代女二「自らそもしは賤しからず、母こそ筋なけれ、父は後花園院の御時、殿上人の交はり近き人のすゑに」。俗つれん<sup>三</sup>「そもし賤しからぬ人なりしが」

**ぞもと** 原因。物事のおこり。もと。生玉心中「コリヤ長作十六兩たゞしられ夫がぞもとに嘉平次が、うろたへ始め命沙汰に及んだ」

**そもや** 抑や。「そもやそも」ともいふ。「そも」を強めていふ語。どうして。何とあらうとも。下に反語が来るのが常である。重井筒下「詮議のあるを、じろじろと、そもや見てゐられうか」

**そやす** ほめたてる。おだてる。丹波與作中「ヲ、頼もしい、命掛けて頼んだと、ありたけそやさされ」

**そらぎしやう** 空起請。いつはりの起請。

そら 誓文。加古教信七墓廻五「千つか百つか文車、しゝのはしがきそらぎしやう、きのふの誓紙、けさの夢」

そらけいはいく 空輕薄。いつはりの世辭。から世辭。

そらざや 空鞘。刀身に比べて、不釣合に長い鞘。孕常盤三「赤銅鏝も物錆びて、雲の空鞘削げまはり、月山の端に二合半」

そらせいもん 空誓文。偽りの誓文。そらぎしやう（空起請）。重井筒中「銀も渡す、其場にて見すく、嘘の空誓文。とても遁れぬ此の罰」

そらて 空手。虚手。何故ともなく手の痛むこと。神經痛、りうまちなどの類か。一代女六「けんべけの蓋を仕替へてと肩をぬげば、此二三日は空手が發りましたと見ぬ顔をする」。武道傳來記三「左は虚手が痛むとて、外科の玄庵に持たせて、二人して打つ鼓」

そらね 空値。うその値段。かけね。源氏烏帽子折三「飾りたる烏帽子の内、何れが所望ぞ善きも悪しきも空價なし、望次第」

空寝入の戀衣 密會の魂膽にいふこと。一代男四「空寝入の戀衣と申すは、次の

間の洞床に、後室模様のできる物、大綿帽子、房付の念珠など入置きて、ふづくりなる女より先へ男を廻し、かの衣類を着せて疑させ置き、去るかみ様と申しなして、下々に油斷させて逢はする手だてもあり」

空の足 雲の脚。雲ゆき。壽門松下「西北に風起り、東南に向ふ空の足」

空耳漬す 偽つて聞えないふりをする。曾我虎磨下「後より呼びかけ追つかけても、空耳漬して見向きもせず」

空目する 偽つて見ないふりをする。曾我會稽山四「空目して死なせてたも。双物たもれと縄り付く」

そらや 空矢。あだや（徒矢）。あたらないで、むだになる矢。

そらよろこび 空喜。喜んだかひのないこと。悦ぶべきことでないのに悦ぶこと。

そらりんき 空悋氣。みだりに氣をまはして悋氣すること。對象人物のはつきりしない悋氣。槍權三下「獨り留守寢の床の内、心も澄みて眼も冴えて、しんきしんきの空悋氣」

そりさげ 剃下。頂を廣く剃り下げ、兩鬚を狭く残して結んだ男子の髮。絲鬚。

冥途飛脚下「其處へ見える剃下は、昔は大貧乏」

そりさげやらう 剃下野郎。剃下にした野郎あたま。野郎あたまの一種。

そりわん 反腕。塗りが削げて反つた腕か。二代男三「松屋町焼の土火入に、反腕の貫入、取集めたるめけ煙管」

そりをうつ 反を打つ。刀の鞘のそりを上向にして、抜く姿勢を取る。傾城反魂香中「瀬兵衛刀の反を打ち、六尺徒士衆おつ取廻し」

そりをかへす 反を返す。前條に同じ。一代男四「ありのまゝに此事語らずば後とはいはじと反を返して怒れば、御ゆるし候へ」

それさま 其様。そなたさま。雪女五枚羽子板上「長老様寢酒の御伽に、それ様を三年限つて置きたいとの事」

それしや 其者。その事を業とするもの。その道に馴れたもの。くろうと、二代男三「世の中の巾着切も、腹の中からのそれ者にあらす」

それや 其屋。客商賣するもの。遊女に關する商賣屋。茶屋。重井筒中「さすがそれやの女房とて、世間咄しに氣をゆるませ」

三四二



それやど 其宿。前條に同じ。榮花咄四

「打ち撥の音、いかにそれ宿なればとて、此の折柄は奢りなり」

そろ 博奕の語。うんすんカルタにいふ。

札の揃ふ義か。大職冠四「つんばねあざばね、にぎりのそろでぞ勝つたりけり」

そろばんはし 算盤橋。手輕にかけるといふ洒落か。國性爺九仙山「こりや見よ遂に見ぬ雲梯、必定國性爺奴が日本流の算盤橋、壘橋などいふ物ならん」

そろへがこ 揃駕籠。揃へつづけた駕籠。駕籠を連ねて乗ること。

そろべくそろ 候べく候。物事をはつきりときまりつけぬこと。もと、女の手紙に「候べく候」を草體でなぐり書きにしたのでいふ由。傾城反魂香下「本祝言の儀式は重ねて。先づ今宵は祝うて、ざつと目出度う候べくそろばんつぶに萬代積るぞ豊かなる」。女腹切中「どうせうか斯うせうこ場を、候べく候にやつてすて」

そろま ころまにんぎやう(野呂間人形)のこと。又、その人形つかひ。京阪の方言。二代男七「おやま甚左衛門が仕出人形、そろま七郎兵衛が二王の眞似」

そろまあふぎ 野呂間人形の持つほどの

小さい扇。

存外す 動詞(佐戀)。存外なことをする。不都合な振舞をする。懷視「娘ばかりの内證に入りて、存外せし故なし。已等세의 掟を背く物取なるべし」

ぞんざい 物事に慎重を缺くこと。どうでも構はぬこと。粗忽。亂暴。無禮。二十不孝二「身をぞんざいに持ちて、浮名の立つ事うたてし」。出世景清「扱扱ぞんざい千萬なる奴めかな。頬冠を取らずんば、誰かある、それ打て擲け」

そんじやう 其れと指す意を強め、或はわざと曖昧にいふ語。そこその・それなどの上に接して用ひる。一代男七「其文はそんじやう其太夫様より參らぬかと申す」。槍權三下「毎日そんじやう其處其處と、相圖をしめて甚平一人」。津國女夫池三「そんじやうそれと名を指して白狀せば」

そんじよそこ そんじやう其處の約。油地獄下「東口にて尋ねしに、そんじよ其處とは教へしかど」

そんしん 孫辰。字は元公。詩書に精しかつた人。家貧しくて、冬は藁の内に起臥しつゝ勉強したといふ。曾我會稽山三「樂みは似ぬ孫辰が、藁屋の紙帳漏

りくる風」

そんぜん 尊前。尊いものの前。神又は貴人の前の尊稱。日本振袖始「一剩へ宮中といひ、三種の神祇(器)の尊前にて、神も君も憚らず」

ぞんのほか 存外。ぞんぐわい。思ひのほか。

そんはづれ 孫外れ。孫を嗣がぬこと。血筋を引いてゐないこと。源氏烏帽子折「卯の中にも巢もり有るは尤もかな尤もかな。親兄弟の兵に似たる方なきそんはづれ。次々條參照。

そんあんやう 尊圓様。御家流の元祖、尊圓法親王(青蓮院)の書風。武道傳來記「兩扇の書付を見しに、尊圓様の筆のあゆみ正しく」

そんをつぐ 孫を嗣ぐ。血統を引く。遺傳を受ける。「そんはづれ」の條參照。堀川波故中「姉は父御(ててご)のそんをつぎ、後紐から酒を呑む」

たあいない 他愛ない。たわいない。考がない。分別がない。張合がない。と

た

りとめない。唐船嶺今國性第一「餘念他愛もない顔附」

だいち 大。紋所の名。曾我會松山

「大」大萬大吉と、我を折烏帽子立烏帽子」

だいかいどうじ 大海童子。住吉明神の眷屬であるといふ。國性第一「我れ日の本に昔より、住馴れたれば住吉の、大かい童子と申す者」

だいがらし 臺格子。格子の一種。釣格子に對して、出張らぬ格子の稱か。民家に用ひたもの(和漢三才圖會)。二十

不孝三「大道筋の南向、二十七間檜木造りの臺格子に、二重座の提燈を打輝

き、奥深に豊かなる住居」

たいかうちやう 退紅丁(たいこうちやう)の條を見よ。

だいがさ 臺笠。大名などの行列の時、袋に入れ棒に附けて持たしめた笠。時

庚申上「お供まはりが振出す、毛鍔臺笠立笠大鳥毛」

だいがしら 大頭。舞の一種。幸若の類。室町時代に行はれた女舞。おほがしら。

くせまひ(曲舞)。傾城反魂香上「帯々大頭の舞をすき、妾諸共つれわきにて舞

はれしが、節の有ることは少しも吃り

申さず」  
だいからうす 臺唐白。唐白の一種。地に埋めないで、動かぬやうに臺を附けたもの、即ち「ちからうす」の對語であらう。一代女四「下男は臺唐白、下女はさし足袋に暇なし」。榮花咄四「家名も残らずひよんなものに衰へて、臺唐白を踏むべくも世は知れぬものなり」

たいき 大氣。度胸の大きいこと。氣

まへの大きいこと。おほやう。大度量。

一代男六「情あつて大氣に生れつき。胸算用五「諸大名の子息に限らず、町人までも萬に大氣なる故ぞかし」。氣

太くなること。大膽。贅澤。おほふう。

永代藏二「大氣にして主人に損かけぬ程の者は、よき商賣をもして、取り

過しの引負をも埋むる事はやし」

だいきち 大吉。紋所の名。曾我扇八景

紋並「大」大萬大吉、山の内の一黨」

だいきちや 大吉彌。俳優、女形の名人玉村吉彌のこと。大は美稱、又、大吉

とかけて稱したと見える。男色大鑑六

「是はお山の元祖大吉彌が下宿なるが」

又、吉彌の創めた風姿についていふ。

二代男五「今日の參詣幾萬人の女、近年は大吉彌を移し、風儀好く、何れかい

やなる所なし。「きちや」の條參照。

たいきもの 大氣者。大氣な者。度量の大きい人間。性行の大まかな者。男色大鑑七「大氣者にして、人の欲しが

る黄色にて重き物をも手に持たず、さもしき事のなきに」

だいきやうじ 大經師。もとは朝廷の御用職人で、經卷佛畫の表裝を勤めたもの。後は一般の經師屋をいふ。又、毎

年新曆の上梓權を有し世に廣めるものを稱した。五人女三「爰に大經師の何がし年久しくやもめ住みせられける」。

戀八卦柱曆上「梅の曆の根本大經師以春とて、袴いらすの長ばおり」

だいきんりきん 大筋力(だいきんりきん)の訛である。極めて強い筋力をいふ。

「たいきんりきんの獅子」

たいくつ 退屈。いやになること。閉口すること。胸算用四「年々の事にて姨も退屈いたされて」

たいくわ 胎化。母胎の内で化育すること。

だいくわんじよ 代官所。江戸幕府直轄の地を支配して、その年貢公事などを掌る地方官の居る役所。だいくわんじよ

ころ。晝夜用心記六「此事公事になり

三四四

て、代官所へ申上ぐれば、それは川奉  
行の支配なりとて」

たいこ 太鼓。(一)たいこもち(幫間)の  
略。雪女五枚羽子板上「幫間(たいこ)。  
相容・宿屋・駕舁の附届け」。(二)たいこち  
よらう(太鼓女郎)の略。

たいこうちやう 退紅丁。桃色に染めた  
布の狩衣。それを着た下部の者。最明  
寺殿百人上臈安輪「平禮白張たいか  
(一)うちやう、袖を運ねしよそほひ  
は」。たいこう。

たいこかね 太鼓鉦。物を探すのに叩く  
太鼓や鉦のこと。鉦太鼓で探すともい  
ふ。傾城酒呑童子五「一人娘三月より行  
方知れず、狐狸の仕業かと、夜な〜  
の太鼓鉦」

たいこく 大黒。梵妻。僧坊に侍する女。  
厨にのみ居て表  
へ出ないので  
いふ由。五  
人女四「此  
寺の大黒にな  
りたくば、和尙  
の歸らるゝまで待  
て」



たいこくかう 大黒講(たいこくこう)。

た

大黒天を信ずる者の組合。二代男三「大  
黒講の懸錢を借つて」。胸算用二「大黒  
講を結び、當地の手前よろしき者ども  
集り」

たいこくまひ 大黒舞。大黒天の姿をま  
ねて、打  
出の小槌  
を持ち、  
面を戴き  
頭巾を着  
け、門毎  
に立つて  
年年新作の祝ひ歌を唄ひ舞ふもの。又  
その唄。江戸では、正月から二月にか  
けて吉原に來て物眞似狂言などして錢  
を乞ふ者をいふ。胸算用「東隣には舞  
舞住みけるが、元日より大黒舞に商賣  
かへければ、五文の面、張貫の槌一つ  
にて、正月中は口過ぎすれば」



ひまくこいだ

たいこじやうらふ 太鼓上臈。太鼓女郎  
に同じ。大矢敷三「契りも今宵はたいこ  
上臈、念比に語り申せば只金じや」  
たいこすぎ 太鼓過。廓詞。刻限の太鼓  
の鳴つた後。廓の門を閉ちる時刻を知  
らせるのをば「三番太鼓」と稱した。  
その條を見よ。

たいこぢよらう 太鼓女郎。幫間女郎。

牽頭女郎。京都烏原、大阪新町にあつ  
た特殊の遊女。揚屋に呼ばれて座興を  
助けた藝娼兼業の者の稱。守貞漫稿「昔  
は藝子これなし、遊女三絃を弾く。其  
の後未熟の遊女は弾くことを得ざる者  
あり、或は尊大を極めて自ら之を弾か  
ず。一日千軒に曰く、太夫・天神自ら三  
絃を弾かざる故に、幫間女郎を呼ぶな  
り。隘土産二「太鼓女郎ふたりまで、  
九奴が所ひき草臥て、三味線の筒を枕  
に足もたしあうて懺悔話」。又、遊女と  
しての品位十分ならぬ女郎、下賤の女  
郎の意にも用ひた。一代男四「世之介は  
たいこ女郎にさへふられて」。同六「太  
鼓女郎にも大方なるわけは見ゆるし」

たいこねんぶつ 太鼓念佛。太鼓や鉦の  
拍子を揃へて踊りながら唱へる念佛。  
繁昌の所へ出て踊りつつ念佛するは、  
人人から勸進を得るためであるといふ  
(嬉遊笑覽)。ほうさい念佛。「をどり念  
佛」の類。一代女六「秋の彼岸に入日も  
西の海原(中界)、自ら無常にもとづく  
鐘の聲太鼓念佛とて、其曉の雲晴れぬ  
ども、西へ行く極樂淨土有り難くも殊  
勝さも、入拍子の撥撞木聞く入山をな

して」

**たいこまへ** 太鼓前。廓詞。門限の時刻を知らせる太鼓の鳴る少し前。たいこすぎ(太鼓過)の對。椀久一世物語上「禿々といふ聲に目を醒して、太鼓前かといへば」

**たいこもち** 太鼓持。幫間。遊客の機嫌を取り、酒興を助けることを業とする男。太鼓衆。末社。一代男六「いつも獨寝のうらみ、いはねばこそなれ、太鼓持の女房には、成るまじき物とおもふぞかし」

**だいさぎ** 大鷲。涉禽類の一種。白鷲の中で最も大きいもの。全身純白、頂に冠毛なく、脚は黒色又は淡黄色、嘴は夏季に黒く、冬季に黄色となる。白鶴子。ももじろ。兩吟一日千句「夕されば浮世の間に目なしどち、あしのまろやにたい鷲をうる」

**だいさん** 第三。連俳の詞。發句・脇のつぎに来る句。連句上第三位の十七字句。大矢數「思ひ草桔梗かる荳脇になり、さて第三はそこで遊ばせ」

**大事ある** 秘事口傳などある。大事にすべきことのある。胸算用三「この度大事ある關寺小町するといへば、これは一

番の見物と」

**大事がる** あぶながる。大事と思ふ。一代男「御足もと大事がりて此く奉るを」

**大師講の粥** 天台宗の開祖、智者大師の忌日に行ふ佛事に際して食ふ粥。大師粥。又、十八粥(正月十八日に食ふ小豆粥)をいふ。

**大事ない** 大事を取る必要がない。心配ない。かまひない。松風村雨東帶鑑三「あれは妾が妹の村雨といふ者。はてさて大事ないはいの。二代男「松に懸藤の杖垂るゝもだいじないもの」

**大師の二たび** 弘法大師の再来。織留四「はや三歳にて習はずして花鳥風月大文字書けば、大師の二たびと、是をおろかにせざりしに」

**たいしゆ** 太守。國主大名の稱。國の守(長官)。武道傳來記「越の國の太守に増倉治部大夫と聞えし」

**だいしゆん** 大舜。⇒支那二十四孝子中の一人。永代藏三「まづ大舜の耕作の所」。⇒聖天子の舜をも稱する。

**大乘八軸** 大乘教を説いた法華經の八卷。出世景清「妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大乗八軸の骨髓」

**たいじよだて** 怠狀立。怠狀即ち詫び状を出させる義から起るといふ。叱責すること。誠めること。源氏烏帽子折「今日より左様の惡戲せば、コレつめつめするぞとたいじよだて、牛若を搔抱き」。日本振袖始四「今捕へて籠に入れ、たいじよだてして放さん」

**だいしりう** 大師流。弘法大師の書流。大師様。寒夜用心記六「手跡は大師流」

**たいしん** 大身。祿を多く貰つてゐる身分の者。小身の對語。槍權三上「御身達は大身、人手は多し飼はよし」

**だいじん** 大盡。大臣。⇒遊里の語。金銀を多く散ずる客。豪遊する。豪人。一代男三「揚屋に行けば、日ごろの大尽、よろしくさばき置かるゝと見えて」。同四「弓矢八幡百二十八社共を集めて、大々々じんとぞ申しける」。⇒富豪。資産家。

**だいじんかこ** 大盡駕籠。大盡を載せて廓に出入する駕籠。

**だいす** 臺子。茶の湯に用ひる四本柱の



んじいた

棚。風爐・茶碗・茶入などの諸道具を載せておくもの。萬年草上「床に掛物、臺子の塵埃、掃いつ拭うつ忙しさ」

たいす府 臺灣府。國性爺「是よりたいす府へ渡らんと、見れども折節船一艘も、渚に流うて」

だいそれた あるまじきこと。分不相應なこと。見當ちがひなことにいふ。

だいたい 大大。太太。太太神樂の略。だいたいしやろぎ 大大將菜。盤の縦横各十七目、駒數百九十二ある將菜。新可笑記「大々將菜をさし得て、是を我が宿の亭にしかけ」

だいたいじん 大大盡。大盡の優なる者。「大大じん」とも重ねていふ。博多小女郎上「聞も及ばぬ大々臣。お獨びと顔に書付」。「だいじん」の條参照。

たいてんなく 退轉無く。おこたりなく。おろそかでなく。大職冠「例幣奉幣たいてんなく、絶えず盡せぬ萬代の目茶碗。織留「煎じ茶を臺天目にてはこばせ」

だいでんもく 臺天目。臺に載せた天目茶碗。織留「煎じ茶を臺天目にてはこばせ」

だいでんもく 臺所船。本船に附屬して、食事を調へる船。男色大鑑「若衆七八人の花舟(中略)、臺所舟なる小者

に其若衆の御名を尋ねけるに」。俗つれづれ「臺所舟に四五十人前の膳組」

だいなごん 大納言。だいなごんあづき(猪肝赤)の略。赤小豆の一種。吉野都女桶「大納言は小豆餅、唐人もろこし分別あん餅」

だいなし 下僕などの著る物。紺無地で仕立てた筒袖。一代女「紺のだいなしの袂をまくりあげて」。薩摩歌上「かくては果てじとこんのだいなし薑一片、腰に一本藥研鐔」

大なれ小なれ 大きからうが小さからうが。大にせよ小にせよ。ともかくも。曾我五人兄弟「大なれ小なれ、御身は曾我の世繼なり」

だいねんぶつは 大念佛派。大念佛宗の一派。天治年間、僧良忍が創めた融通念佛宗の別稱。攝津國東成郡平野郷村の大源山大念佛寺を本山とする。卯月潤色中「大和の國平郡谷、大念佛派の庵室に」

大の字の金刀點 「きんたうてん」の條を見よ。

だいは 提婆。提婆達多の略。釋尊と同日の生れ。共に珍寶仙人について學習したが、仙人の一人娘の婿たらんこと

を願つて成らず。後、娘が釋尊に嫁するに及んで、大に怒り、未來常に佛を惱さうと考へた。佛の怨敵。轉じて、憎憎しい者を罵る時にも呼ぶ語となつた。油地獄中「ヤイ業酒しめ、提婆め」

だいはちぐるま 大八車。代八車。もと八人力の代用ななす義といひ、又、大津の八町の地は、古から雜車のあつた處であるので稱したかともいふ。大きな、輪を丈夫に造つた一種の荷車。二代男「大聲に笑ふは大八車の如し」

だいはぼん 提婆品。提婆達多品の略。法華經二十八品中の第十二品。惡虐な提婆のやうなものも、釋尊はこれを我が過去の善知識として、未來永劫の後には天王如來となるべしとの豫言を與へたと説く。だいは(提婆)の條参照。

又、龍女が八歳で成佛した由をも説いたところが名高い。源氏冷泉節下「女人成佛の提婆品、高音に遊ばし」

だいきもの 臺引物。膳部に添へて出す引物。魚類・菓子など。宵庚申上「平の蓋ありがた固めの臺引物」

たいふ 太夫。大夫。(能役者、又俳優などの頭だつたもの。特に女形役者の稱。立役に對していふ。俗つれん)ニ

「配札を貰ひ、また太夫が舞を聞き果てて」。(二)遊女の階級に於て、最上位の者。」

代男一吉野は(中略)、なき跡まで名を殘せし太夫、前代未聞の遊女也」

(三)神職。御師(おし)。織留留「神風や伊勢の宮ほど有難きは又もなし(中略)、いづれの太夫殿にても定まりのもてなし」



(二) 太夫

たいふがひ

大夫買。傾城買。遊女を買ふこと。もと、大夫職の遊女を買ふこと。又、その狂言。

たいふがみ

太夫髪。太夫の結ぶ髪。一人前の俳優の髪つき。男色大鑑ハ江戶の赤頭の子供を江南の金剛が手に懸くれば、程なく大夫髪となり」

たいふきやく

大夫客。大夫職の遊女の相手たる客。

たいぶく

大服。「おほぶく」を見よ。壽門松上「福の神のお迎ひ(中略)、まづ大ぶくの口明に、變つた話」

たいふくちゆう

大腹中(たいふくちゆう)度量の廣いこと。おほやう。大氣(た

いき)永代藏六「人みな大腹中にして諸事買物大名風にやつて見事なる所あり」

たいふくらうど

太夫藏人。男色大鑑五「難波のむかし、太夫藏人お國が女歌舞伎も絶えて、若衆をあまた抱へ」

たいふぐるひ

太夫狂。大夫狂。遊女に溺れること。傾城狂。お山ぐるひ。

たいふご

太夫子。大夫子。俳優の太夫たるべき子ども。少年俳優。若衆。藝子。舞臺子。男色大鑑五「村山又兵衛が物まね狂言づくしに仕掛け、太夫子あまた集めしに」。胸算用四「我が弟ながら形も人に勝れて、太夫子にもなるべきものと思ひしに」

たいふしよく

太夫職。女郎の太夫たる者の稱。おしよく。織留三「天神などまだるくなつて、太夫職になじみて」

たいふたう

虎溪橋「つめ奉公に情かたぬ、たいふたうあまふもからふも世に住な」

たいぶつぎせる

大佛煙管。京都方廣寺大佛邊に製造元があつたのでいふ由。

たいぶつじま

大佛島。大阪富島町、北は安治川、南は古川に圍まれた島。

たいぶつもち

大佛餅。奈良大佛を本尊とする誓願寺(京都京極通り)門前の餅屋で賣出したのに起るといふ。京阪地方でよく賣られる餅。一代女五「天満のたいぶつもち」

たいふまへきんちやく

太夫前巾着。書物の名。色里評判記の類と見える。二代男「伏見の浪人が作りし太夫前巾着といふ惡書も、見分ばかりにてをかしからず」

たいふもと

太夫元。太夫本。芝居の興行主。座元。胸算用三「顔見世芝居の時分は(中略)、今日はその座本、明日はこの太夫本、其次は誰が座に、大坂の若衆が出るなど沙汰し」

たいへいきかうしやく

太平記講釋。太平記讀ともいふ。路傍で太平記を講じ錢を乞うたもの。「江戶にては、見附の清左衛門と云ふ者始也、年來淺草御門傍に出て、太平記を講ず。此の者は理盡抄と云ふ太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松青龍軒といふ者堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗りに筆談を講ず。京都にては原永揚といふ者世に鳴る」(近代世事談)。戀八卦柱曆中「見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは」

たいへいきかうしやく

太平記講釋。太平記讀ともいふ。路傍で太平記を講じ錢を乞うたもの。「江戶にては、見附の清左衛門と云ふ者始也、年來淺草御門傍に出て、太平記を講ず。此の者は理盡抄と云ふ太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松青龍軒といふ者堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗りに筆談を講ず。京都にては原永揚といふ者世に鳴る」(近代世事談)。戀八卦柱曆中「見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは」

たいへいきかうしやく

太平記講釋。太平記讀ともいふ。路傍で太平記を講じ錢を乞うたもの。「江戶にては、見附の清左衛門と云ふ者始也、年來淺草御門傍に出て、太平記を講ず。此の者は理盡抄と云ふ太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松青龍軒といふ者堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗りに筆談を講ず。京都にては原永揚といふ者世に鳴る」(近代世事談)。戀八卦柱曆中「見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは」

たいへいきかうしやく

太平記講釋。太平記讀ともいふ。路傍で太平記を講じ錢を乞うたもの。「江戶にては、見附の清左衛門と云ふ者始也、年來淺草御門傍に出て、太平記を講ず。此の者は理盡抄と云ふ太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松青龍軒といふ者堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗りに筆談を講ず。京都にては原永揚といふ者世に鳴る」(近代世事談)。戀八卦柱曆中「見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは」

たいへいきかうしやく

太平記講釋。太平記讀ともいふ。路傍で太平記を講じ錢を乞うたもの。「江戶にては、見附の清左衛門と云ふ者始也、年來淺草御門傍に出て、太平記を講ず。此の者は理盡抄と云ふ太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松青龍軒といふ者堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗りに筆談を講ず。京都にては原永揚といふ者世に鳴る」(近代世事談)。戀八卦柱曆中「見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは」

たいへいきかうしやく

太平記講釋。太平記讀ともいふ。路傍で太平記を講じ錢を乞うたもの。「江戶にては、見附の清左衛門と云ふ者始也、年來淺草御門傍に出て、太平記を講ず。此の者は理盡抄と云ふ太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松青龍軒といふ者堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗りに筆談を講ず。京都にては原永揚といふ者世に鳴る」(近代世事談)。戀八卦柱曆中「見るかげほそき釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは」

太平記の勸進讀

勸進のためにする太平記讀(たいへきよみ)。太平記讀をして民衆から金銭の喜捨を願ふこと。永代藏五「書物好きの權六は神田の筋違橋にて太平記の勸進讀」

たいへいきよ

み 太平記讀。前條及び前々條を見よ。



讀記平太

だいまち 代待。代祭の轉訛であらうといふ。人に代つて神佛に詣り、物を貰ふ一種の乞食。特に月待に關していふか。大句數上「千代までの月待日待代待に、惡筆ながら御年はいくら」。三鐵輪「淨瑠璃の末へ行程涙川、夜中はこがれ代待の空」。今宮心中「廿三夜の代待や、門の通りは未だ四ツ」

だいまん 大萬。紋所の名。曾我會稽山「大」大萬大吉と(中略)、白一文宇黒一文字屋の山の井殿、竹に雀は仙臺屋の」

だいまやうがし 大名借。大名貸。町人が大名に金を貸すこと。二代男「大名借する男、唐土一座にて」。織留三「大名借の銀親へたのみて、是を預け置き

しに」

だいまやうぎ 大名氣。度量のひろいこと。寛濶な氣風。おほやうな心持。大氣。胸算用五「橙」つ金子二歩せしに、高うて買はぬといふ事なし(中略)、爰を以て大名氣とはいへり」

だいまやうごもつ 大名御物。大名の愛する少年。男色大鑑「大名御物の大書院に坐したと、築地女郎のしどけなき立姿と」。ごもつ(御物)の條參照。

大名と針とは遠目に見ゆる(諺)大名は行列が長いので、又、針は光るので、何れも遠目に見ゆる。曾我虎磨中「大名と針とは遠目に見ゆるといふからは、いざこゝに待受けて、遠目に見ん」

だいまやうにち 大明日。陰陽家で、萬事に大吉であるとする日。大明。松風村雨東帶鑑「問ふもなか、鬼宿日、大明日の應揚に、今日は最上吉日と」

だいまやく 代脈。代つて脈を診る者。代診。大句數上「代脈に明日からはたつ霞、大かた仔細をみよし野の山」。源氏冷泉節下「法眼様の手助かり、代脈にでも出る様に」

だいまくをどり 題目踊。お題目を唱へながらをどる。山城國愛宕郡松が崎で、七月の盆に男女打混じて行つたといふ。櫻陰比事三「折ふし七月十三日、この祝ひに題目踊を始めて」



りどをくもいた

だいまつ 代物。代金。女腹切上「代物問へば三百貫の折紙」

だいまんぐち 大門口。大きな門の入口。特に廓の大門の口をいふ。冥途飛脚中「片小鬘剃りこぼされ、大門口に曝され」とは、廓の制裁であるといふ。

だいまんび 大紋日。常よりも盛大な紋日。紋日を見よ。

たいや 待夜。逮夜。忌日の前夜。半齋。宿忌。孕當盤「今宵は父の逮夜ぞと、烏帽子裝束あらためて」

たいやまゐり 逮夜參。僧侶が、檀家の逮夜の誓みに行つて讀經すること。一代女三「待夜參りの更けるを待ちかね」

たいようす 對用す。罪科などに對して

あてはめ用ひる。適用する。源氏冷泉節下「此の罪科に對用する地獄とてはよもあらじ」

たいらくの平馬のせう 大樂の平馬の允。いはゆる曾我の十番斬に、第一番に斬られた男。百日曾我三「たいらくの平馬のせう、祐經が討たれしうへは、らうぜきものは曾我殿原」

たいらげ 貝の名。「たひらぎ」の訛。玉珧。萬文反古「小あぢの鹽煮たいらげの田樂」

だいらおほばん 内裏大番。内裏を警固する任に當つた武士。京都二條城に在番してゐたもの。

だいらさま 内裏様。宮中の貴き御方方の稱。内裏の敬稱。一代男五「此舟遊び京の山にはまさりしを、内裏様にも見せし」。同八「大みや通りを南がしらにひかせ行く、内裏様の國なればこそ、餘所でなる事か」

だいらはごいた 内裏羽子板。京都製の羽子板で、夫婦の姿を畫いたもの。地方製のものに對していふ。大下馬三「此女袖より内裏羽子板をとり出して、獨り羽子をつき」

だいらべつたう 大理別當。檢非違使別

當の唐名。下文は之を遊にいひ、且、町奉行などの意に轉用したのである。油地獄下「胸がい攪んでねぢすゆるは、檢非違使の別當大理の廳の官人なり」

たいろう殿 待漏殿。國性爺一「大司馬吳三桂たいろう殿にて篤と聞き、御階欄干踏散らし」

たうあふぎ 唐扇。扇の一種。唐風に作つたもの。百日曾我四「すかし扇にたうあふぎ、あふぎ、あふぎめせ」

たうあみ 唐網。投網(とあみ)に同じ。手元は狭く、末に至るに従つて廣がるやうに、末端におもりを附けた網。うちあみ。卯月潤色中「戀といふ其のたう網にからまれて、浮みもやらぬお龜とは、外には人も水くらき」

たういんひじ 業陰比事。書名。桂萬榮の著、慶安四年刊行。西鶴の本朝櫻陰比事はこれを模したるもの。新可笑記「業陰比事など枕にして」

たううち 唐團扇。唐風に擬した團扇。軍陣の指揮に、采配の代りとして用ひたので軍配團扇ともいふ。角力の行司にも用ひられる。武道傳來記四「眞先に金の烏帽子を冠りたる男唐團(たううち)をかたげ」

たうがさ 唐瘡。梅毒のこと。唐人の長崎に來た者が毒を傳へたのでいふ由。兩吟一日千句「通ひなれて夜の契は茶々むちやこ、よこ町ぐるひにうつる唐瘡」

たうき 當歸。藥草の名。莖の高き二三尺。葉は三出複葉で互生する。夏秋の候、小形白色の花を複繖形に開く。うまぜり。かはくさ。すずかのかうほん。薩摩歌上「地體われらは川苧持ち、同じ處に當歸まで」

たうきゆう 唐弓。わたうちゆみ(木綿彈弓)のこと。和漢三方圓會「竹弓、棉糸の撚繩を以て弦となし、竹篋を用ひて之を弾く、呼んで手弓と曰ふ。明曆年中、華人木弓を長崎の人に傳へて始めて之を作る。長さ五尺ばかり、鯨筋を以て弦と爲し、小槌を用ひて之を擊彈す、呼んで唐弓と曰ふ、今盛に世に行はる」。わたゆみ。わたうち。

たうきゆううち 唐弓打。唐弓を打つこと。又、それを業とする人。榮花咄四「上間屋は唐弓打ちとなられ」

たうぎん 當銀。料金の受渡しをその場ですること。當金。現金。萬文反古三「同じもち物ならば當銀とおもふ心



と、女房つねの欲心」

だうぐおとし 道具落。武家の語。戰場で、兵卒又は兵器を失ふこと。

たうぐら 唐櫛。齒を甚だ細かく密に作つた梳櫛(すきぐし)。

道具と女房は有合(謬) 道具と女房とは、たとひ有合せでも、無くては叶はぬものである。卯月潤色中「ほんに忘れた其筈じゃ、道具と女房は有合せ、尤もじや〜」。道具屋の娘じゃもの」

だうぐどめ 道具止。道具は武器、特に槍をいふが、その入るを禁ずること。又、その旨を標したものの。

だうぐもち 道具持。槍持のこと。夕霧阿波鳴渡中「道具持の槌右衛門、一人残つて臺所覗き」

たうくらげ 唐水母。くらげ類の一種。傘状部が藍青色で甚だ厚く、外面は平滑。口腕は八つあり、上下の二部に分れ、數多の吸口を具へてゐる。備前國兒島灣内に多く産し、食用に供される。びぜんくらげ。一代女五「蛭やなどの吸物、唐水母ばかりで酒飲んだ事はない」

たうぐるみ 唐胡桃。てうちぐるみ(胡桃)の異名。てうせんぐるみ。からずぐるみ。各地の山地に自生し、幹の高

き二三丈に達する。種子を食用とする。

五人女三「御所柿・唐ぐるみ・落雁・榎・杉やうじ、是をあらまし取合す時」

だうけ 道外。道化。おどけ。滑稽。又、だうけがた(道化形)。滑稽役者。大下馬四「四藏といふ古き道外のありしが」

たうけんごんべゑ 唐大権兵衛。承應(二三一二)——(二三一四)頃の侠客の名。一代男四「世之介は又江戸に来て、唐大権兵衛がかくまひてありける」

たうけんびたひ 唐犬額。前條にいふ唐犬権兵衛の頭つきを眞似たもの。額の毛を廣く、角(すみ)を雉のやうに尖らせて抜きあげること。

たうご 擔桶。「たご」の轉。田子が潮汲む桶といふ意から起つたといふ。水汲み桶。になひをけ。榮花咄三「芭蕉布をうはばりに着て持つや、擔桶(たうご)二つ難波の闇はあやなし、晝も身を耻ぢず」

だうごにち 道虚日。陰陽家で、外出を忌む日。毎月六・十二・十八・二十四の各日と晦日とをいふ。

たうざ 當座。すぐ。二十不孝一「脈に頼みなく、當座に露と消えしを」。(たうざほつく(當座發句)。即吟。

即詠。一代男七「この雪其のまゝ詠め給ふ事はと、當座を望み、懸物に、めいめい書きの五句」

たうざうり 當座賣。即賣。その場で賣ること。織留二「買ひ寄る人蓬萊の山をなし、一日五十兩餘りが當座賣り」

たうさかつき 唐盃。槍標(やりじるし)の一種。槍の鞘にかける、熊の毛皮などで作つた袋。薩摩歌上「伊豫の松山は、黒熊の唐盃、お道具持が酔うたとさ」

たうさかひ 當座買。當座の入用だけ買ふこと。二代男三「夜は當座買の蠟燭」

たうざぎん 當座銀。その場で金銀を受渡しすること。即金。當銀。當金。現金。永代藏五「此米屋も當座銀にして、俵なしにはかり賣り」

たうざさばき 當座捌。後のことは兎も角、一時だけの處置。その場かぎりの仕向け。其の場のがれ。五人女三「何心なく當座捌きに語りける」。萬文反古四「關東は中々さやうの當座さばきは合點いたさぬ所に御座候」

たうざほつく 當座發句。即興の發句。二代男八「是に附ての當座發句など書附くる、紙硯よと呼びしに」

た

たうざやき 當座焼。すぐその場で焼くこと。又、その焼いたもの。松茸狩などしても、すぐその山で「松煙らせて、當座焼に酢のかをり」(男色大鑑)を味ふなどいふ。

たうしやうばい 唐商賣。唐物の商賣。支那その他外國品の賣買。又、その商賣人。博多小女郎上「某は長崎者、九右衛門と申して、そつと致いた唐商賣」たうしやじふん 道者時分。道者の多い時分。神社佛閣に參詣する人の多い季節。傾城反魂香上「道者時分で見世は忙し、洗濯物は支へる、仕事にははかいかず」

たうしよ 道書。道教の教義を説き記した書物。たうしん 道心。佛語。十三歳若くは十五歳以上で佛道に入つた人。一代男ニ「まことの髪剃りて世に捨てられ、たのみし人に捨てられ、道心とぞなれる」たうじん 道人。俗事を捨てた人の自稱。世捨人。行脚僧などの意にもいふ。懷硯ニ「道人は及びなしと、觀音堂に通夜せんと」

たうじんがき 唐人笠。冑(かぶと)の一種。筋があり、總縁のまはりに鏢を附

は、内目煎が繪のやうなもの。薩摩歌上「名乗つて出羽の米澤は、つみ鳥毛の唐人笠」

たうじんふえ 唐人笛。一種の笛。もと西洋から來たもの。形は喇叭のやうである。ちやるめら。ちやんめら。哨呐。二代男「錢太鼓、唐人笛の響」たうじんをどり 唐人踊。支那人の踊に擬した一種の踊。からこをどり(唐子踊)の類。二代男三「禿の金作に唐人踊をさせしより」

たうせいりうた 當世歌。當世流行の歌。當世向きの歌。たうせいがほ 當世顔。當世の人のすく顔。現代向きの顔。一代女「年は十五より十八まで、たうせいがほは少し圓く」

たうせいじたて 當世仕立。當世風に仕立てること。當世流行の仕立て方。當流仕立。たうせいをとこ 當世男。當世ごのみの風俗・身なりをした男。浮世男。一代女「美しげなるたうせいをとこの、とりなりしどけなく」

たうせいをんな 當世女。當世向きの女。風俗・態度が當世ごのみの女。五人女三

「室町通り仕出し衣裳の物好み、當世女のため、廣い京にも亦あるべからず」たうちろう 道中(だうちゆう)。旅行の途中。旅中。たび。遊女が盛裝して廓内を歩くこと。俗つれづれ五「揚屋の晝を勤めて身仕舞に歸るに、道中緯(ゆたか)に、右左に對の禿歩みながら眠れるほど、靜かに位を取つて。壽門松上「情こぼるゝ道中は、往來の人も立留り、花を見捨つる雁金も、歸り廓の晴れ處」



(二) うちうた

双六、南無諸佛分身と、書いた六字を六角の、さいは櫻木」

だうちうづけのあふぎ 道中付の扇、扇

の一種。柳亭筆記に「今専ら行はれて

人の知る事なれど、古くよりありし」とある。道中宿驛の里程名所などを、一

覽されるやうに描いたもの。一代男七

「安倍川を渡れば、東の方に、びんざさ

らに載せて、こず待たする殿はうら

みと歌ひしは、やれ、爰の傾城町とや、

見ずには通らじと、尻からげをおろし、

道中付の扇をかざして、とかくは見ぬ

さきと、沙汰なしにすることそ、よくよ

くおもしろからずや」

たうちや 唐茶。支那から渡來した茶。

博多小女郎波枕上「茶出しに唐茶摘み

込む、注ぎ出す色は薄けれど」

だうちやう 道場。佛道を修業する場所。

又、佛像を安置し、説教をするのみで

住僧のない寺。冥途飛脚下「鎌田村のお

道場へ、京のお寺のお下り、毎日のお

讚談」

だうちやうまみり 道場參。道場へ參る

こと。讚談の聽聞に行くこと。その人。

だうちゆう 道中。(この語及びこの語と

熟する語は、すべて「だうちう」の假

名の部を見よ。) たうて 當手。この手。當方。味方。我が方。

だうねんぶし 道念飾。貞享の頃、京都

の道念山三郎の唄ひ出した盆踊の口説

といふ唄から出た小唄。

だうふく 道服。眞宗で、素絹・直緩(ち

きとつ)・法服と區別して、色衣を稱す

る。俗つれ、二山の端染に魚子織の

道服著て、北様といはれしことも」

たうへなげがね 唐へ投金。「からへなげ

がね」の條を見よ。孕常盤「目前日本

の寶を、見えもせぬ後世の爲、異國へ

渡すうつけ者、それこそ唐へ投金とい

ふ物」。永代藏「和國は扱置きて唐へ

なげがねの大氣、先は見えぬ事ながら」

たうまる 唐丸。唐雞。鶏の一種。體が

黒色で肥大し、重量が多い。冠の厚い

ものが貴ばれる。武道傳來記「秘藏せ

し唐鶏を突殺し。胸算用三「庖丁取り

廻はす所へ、唐丸唖鳴らして來る」

たうめ 唐目。秤目の一種。一斤が百六十

匁。大和日などの對。永代藏「南京よ

り渡せし菓子金餅糖(中略)、唐目一斤

銀五匁づつにして調へけるに」

たうやく 當藥。胡黃連。苦參。「せんぶ

り」の異名。大矢數目「聲をのみまた蟲

腹や發るらん、草の所縁(ゆかり)の胡

黃連の末」。永代藏「二六波羅の野道に

て僕もろ共苦參を引いて、これを陰干

にして腹藥なるぞと」。又、すいは(酸

模)の異名。

たうゆみ 唐弓。繰綿を弾き打つてやは

らかにする弓のやうな器。わたゆみ。

彈弓。置土産「正月の事どもやかまし

き二十九日の宿に、豊なる琴の音、唐弓

の弦音かと疑はれ。たうきゆう參照。

たうりう 當流。當世流行。當世風。武

道傳來記「男は當流、諸禮はむかしの

物堅きこそよけれ」。又、我が屬する流

派の自稱。

たうりうじたて 當流仕立。當流に仕立

てること。又、その物。當世風の仕立。

流行がた。雪女五枚羽子板申「霞の衣當

流仕立、しゃんと着こなす四尺八寸」

たうわ 當語。當座の話。その場に當つ

ての話。當意即妙の口のきき方。大職

冠「ム、其方も博奕打チやら、斯う取

つた手付は、骨牌握つた手付がある。

鹿相して後悔す。手つけふだじやと

云ひければ、ヤア當語のきいたる奴め

かな」。答話(たふわ)。

た

**たうわなし** 當話無し。答話無し。即座

に氣のきいた挨拶のないさま。即答に當惑してゐるさま。雪女五枚羽子板中「嫌はんすかとじろりと見たる顔付は、惚れて欲しさの目元なり。小晒もたうわなく、親達の言ひ付には」

**たえす** 絶えす。たやす。たえしめる。

五人女五「夏中は毎日の花を摘み、香を絶えさず」

**たか** 高。物事の結局・成行を見越してい

ふ語。(今の用法に同じ)。つまり。せいぜい。冥途飛脚中「生きらるゝだけ添はるゝだけ、高は死ぬると覺悟しや」

**たかうて** 高腕。臂と肩との間の稱。高

手。源氏十二段長生島臺「高腕取つて捻ぢすゑ」

**たかからげ** 高桀。裾を高くからげること

と。歩く時の姿にいふ。

**たかきふとり** 高給取。高い給料取り。

給金を多く取ること。又、その人。

**たかごしかく** 高腰掛。高いところに

腰かけて、傲慢にかまへる。孕常盤三「後悔めさるが笑止など、店前に高腰掛け、揚げ足してぞおはしける」

**たかさきたばこ** 高崎煙草。上野國高崎から産する煙草の稱であらう。萬文反

古「高崎煙草を賣り候へども、是も掛に罷成り」

**たかさきたび** 高崎足袋。上野國高崎製の刺足袋の稱。一代男三「印籠巾着もし

ほらしく、高崎足袋、筒短かに、かず雪踏を穿き」(香具賣の姿をいふところ)。

**たかじやう** 鷹匠。鷹を飼養して、狩に従ふ役。たかし。たかがひ。

**たかじやうがしら** 鷹匠頭。鷹匠を率ゐ、鷹狩・鷹飼養の事一切を統べる役。又は

水の朔日上「父親は播磨で鷹匠頭の奉公人」

**たかせ** 高瀬。たかせぶね(高瀬舟)の略。男色大鑑三「高瀬棹す人顔も見えて」

**たかせがは** 高瀬川。京都加茂川の分流。慶長年中、魚倉了以の計畫に成つた運

河で、下流淀川に通じてゐる。(他にも同名の川があるが省く)。織留三「都の嵯峨の角倉は其家榮えて長者の如し。然も二十餘人の子寶祝ひの水の高瀬川

にすぐなる道橋のわたり初めして」

**たかせぶね** 高瀬舟。河船の名。古への

は小さくて深い。後世のは大きくて淺く平たい。前條の高瀬川を上下する舟

とのみ考へるは俗見であらう。女腹切上「二條通りの高瀬舟、すぐに大阪へ下りける」

**たがだいまやうじん** 多賀大明神。近江

國犬上郡多賀村に鎮坐します。官幣大社。祭神は諸册二神、又いふ、犬上縣主の祖神と。俗に壽命の神として信ぜられる。二十不孝「江州多賀大明神に參り、親の命を短く祈れど何を利きし」

**たかだすき** 高蹠。袖を高く襟でくりあげること。日本武尊吾妻鑑「狩袴まくりあげ、くまりを解いて高だすき」

**たかつき** 高槻。(地名)攝津國三島郡の内。松風村雨東帶鑑「氣がはやぶさ

の高槻や、同じ思ひの思ひにも」

**たかて** 高。臂から肩までの間の稱。

たかうて。又、高手小手に縛りあげることにいふ。五十年忌歌念佛下「矢來の内にと壇を構へ、高手を許し羽がいじめ」

**たかてこて** 高手小手。縛りあげること

にいふ。兩腕を後に廻して、高手と小手とに繩をかけてくくすること。出世景清

三「高手小手に縛りつけ、六條河原に引出し」

たがのかみ

多賀の神。たがだいまやうじん(多賀大明神)に同じ。源氏烏帽子折五「滋賀唐崎の御神は、是も八岐の蛇ぞと、伊吹嵐にたがの神」

たかば 鷹場。鷹狩の場所。大矢數五「山公事や繪園造もなし富士の雪、鷹場に極る頼朝已來」

たかばうず 高坊主。背の高い坊主、大入道などの意であらう。氣味悪いものとしていふ。大句數上「聞及びたる敷の下道、物さびしよるは必ず高坊主」。大矢數四「夜の騒にそれやした事は、出たといふ目の一つある高坊主」

たかまやま 高間山。高天山。河内國金剛山の別稱。

たかみやじま 高宮竊。近江國高宮から産する竊織物。高宮布、高宮平など稱する織物。二代男六「夜は高宮竊に着更ゆるも可笑し」

たかやす 高安。能樂の脇師の一派、高安流の祖、高安伊十郎のこと。大句數上「近日わきをなされ玉水、高安が少しふつたる前うしろ」

たかやすがよひ 高安通。伊勢物語廿三段の話、業平の「河内國高安郡にいきかよふ所いで來にけり」といふ故事。

た

大下馬三「昔業平の高安通ひの、息つぎの水といふ所まで」

高安の大明神 河内國高安郡にある大明神。暗峠の南方、北高安字神立にある玉祖神社の稱。「高安の神」ともいふ。油地獄中「高からず安からず中をとつて河内の國、高安の大明神」

たかやりど 高遣戸。高く造つたやりど。雪女五枚羽子板上「高遣戸の小庭から、椿畑の妻戸を明け」

たがらす 田鳥。農夫を卑めていふ。五十年忌歌念佛上「鳥作りのたがらすや、鶯が産んだる高給取の、手代は主の代りをも」

たからてら 寶寺。山城國山崎にある楠陀落山寶積寺のこと。寺寶に、龍宮から捧げたといふ打出の小槌がある由。一名山崎寺ともいふ。大矢數三「身につかぬ所のぞむ寶寺、かり衣裳をば打出の小槌。永代藏五「俄に昔の寶寺を祈る甲斐なく」。織留二「内藏にはよるづの寶寺、うち出の小槌は目前の油槌と心得て」

寶は身のさしあはせ (諺) 身につけて持つてゐる物は、賣つて當座の用に立てられること。寶は持合せてゐれば、身を救ふ料となること。「寶は射の有合せ」ともいふ。傾城酒吞童子四「三が國の價ともなる名劍、寶は射の指合せ、代なしてそなたが射の代と」。胸算用五「寶は身の差合せ、これを賣りて當座の用に立つるより外なし」

寶は湧き物 (諺) 寶は得ようとすれば得られるもの。財寶は何としてでもまうけられる。博多小女郎波枕上「寶は湧きもの、お命さへあるなれば、私や嬉しう御座んする、私が心でお前一人はどうなと成る」

たからぶねうり 寶舟賣。寶舟の繪を賣り歩く者。正月二日、初夢を見ようとする枕の下に敷く料に賣り歩いたものである。一代男三「二日は年越にて、(中略)夢がひの猿の札、寶舟賣など、鯛柁をさして、鬼打豆」

たからまん (一) 比叡山で木の芽漬の稱。(二) 呪文の語といふ。(三) つくばね(植物)の異名。

たがり 田刈。田の稻を刈ること。曆の詞に、「田がりよし」などいふ(柱曆下)だきいね 抱稻。紋所の名。門出八鳥「抱笹・抱稻・花鞞・波に兎のしるしこそ、龜井・片岡・伊勢・駿河」。抱稻苗、抱苗丸、

抱稻丸三星などいふのもある。

**だきうば** 抱媪。抱姥。守りするだけの老女。本乳母に對する語。織留六「本乳母・抱媪とて二人まで氏素姓までを吟味して」。五人女三「腸顔に横に七分あまりのうち疵あり、更にうまれ付とは思はれず、さぞ其時の抱姥をうらむべし」

**たきかけ** 燒掛。(香をたきかけた匂ひ。五人女四「わけらしき小袖の仕立、燒かけ残りてお七心にとまり」。(髪に香を焚き留めるために、香爐を入れて枕とする箱。薰掛。

**だきかご** 抱籠。竹を編んで造つたもので、夏、寝る時に抱いて涼を取るに用ひる。太さ二圍、長さ三四尺乃至五六尺。竹婦人。兩吟「日千句」夏まくらとてくまりそめけん、抱籠の目ごと風のかよひきて」

**たきぎ** 薪。たきぎのう(薪能)の略。二代男四「十四日の薪を見果て、明日は大坂に歸る」

**薪に花** (諺) いやしい姿の、粗野なうちにも、ゆかしい、やさしい風情のあるに譬へる。

**たきぎのう** 薪能。奈良興福寺南大門の

芝生で、二月七日から七日間行つた能。古へ寺僧の法要を管む間、その奴僕の寒さに堪へないで火を焚き、俳優の戯をして暖を取つたのに起るといふ。能にも焚火し、四座の太夫が勤めたものである。薪の能。

**だきざくら** 抱櫻。紋所の名。  
**だきざさ** 抱笹。紋所の名。

**たきじま** 瀧綺。綺織物の一種。大小の筋の平行した綺物。男色大鑑「髪は黒き筋なき男の瀧鳥の着物に、梅かへしの衿羽織」

**たきつけ** もえぐひぐさ 燒付燃杭草。延寶五年開板の遊里評判記に「たきつけ。もえぐる・けしずみ」といふ三卷で一部を成してゐるものがあるが、そのことであらう。二代男七「傾城程實なるはなしと、燒付燃杭草に書き集めたる中に是ばかりは誠を記せる」

**たきつける** 焚附ける。おだてる。けしかかる。煽動する。夕霧阿波鳴渡申「小無益しいあた分の悪い。こりや御無用に遊ばせと、焚付らるゝ女心」

**たきまつり** 瀧祭。水氣を司るといふ神(廣瀬・龍田の神と同體)の祭。又、伊勢神宮の北の川邊に祭る神も瀧祭の神と

いふ。大矢數一「近日に是から出す瀧まつり、若い物たて白き筋なし」  
**たきもとぼう** 瀧本坊。山城國丹波にありの坊(寺)。書流の一派瀧本流の祖、松花堂昭乗はこの坊の住職であつた。大矢數一「瀧本坊の花の初山、筆勢は水際のため朝霞」

**たきもとりう** 瀧本流。書道一派。松花堂流ともいふ。前條を見よ。一代男「瀧本流をよくあそびしける程に(中略)、手本紙さゝげて」。甚盤太平記「人は見ずとも硯水、瀧本流の墨色や、なまなか常に無筆ぞと」

**たくしかく** まくしたてる。つづけざまにしやべる。冥途飛脚上「ヤハ右衛門、此中は久しい。昨日も、今日も、一昨日も(中略)、や、れそが言傳したぞや、近日一座致したとい、たくしかくれば」  
**だく** だくつくさま。湧きかへるさま。出世瀧徳下「腹のつかへだく」と胸に踊るをさすりさげ」。又、汗・血などの流れるさま。

**だくつき** だくつくこと。動悸すること。むなさわぎ。堀川波鼓上「世間の沙汰を如何せん。胸のだくつき堪へ兼ねて、下女呼び起し酒の畑」

**だくぼく** 高低凸凹のあるさま。でこぼこの坂の下へと別れる。  
**たぐる** 手繰る。奪ひとる。急いで取る。ひつたぐる。堀川波鼓申「何事か存ぜね共、御勘忍と縄りつき、箒をたくれば」。強ひて願ふ。せがむ。宵庚申上「こりやさ拜み申す、呉れ申せと、たくりかゝれば」。

**たぐる** 流す。あふれさす。こぼす。大職冠三「在天悲しきたまられず、兩眼に涙をたぐり」。しはぶく。暖をす。天網鳥下「上の町から番太郎が、くるくたぐる風の夜は、せきく廻る火の用心」。はずみに聞かず與兵衛が、たぐりかけて打つ泥砂」。

**たけ** 竹。箒、笛などの類。下例は尺八が一節切かであらう。置土産五「よし野の山を歌ひしを、ゆきつき次第に、竹にのせたるこそ色もありて聞きよけれ」。

**たけ** 竹。擬名。下女にいふ。生玉心中上「腰の太い尻のひよつと出た女子、姉の内の竹といふ飯たき」。

**たけがうし** 竹格子。竹で造つた格子。一代女九「表に竹格子を附けて、奥深に

た

小園き家づくり」  
**たけがさ** 竹笠。竹の網代笠。竹を網代に組んで作つた笠。織留三「竹笠を西行被きに雪打ち拂ひ」。

**たけがたな** 竹刀。竹で中身を作つた刀。たけみつ。雪女五枚羽子板上「身は竹刀抜きかねて」。

**たけくまのまつ** 武隈の松。奥州の名松。傾城反魂香上「奥州武隈の松と云ふ名木は、いにしへ能因法師さへ、跡なくなりしと詠みたれば。「武隈の松は此の度跡もなし、千歳を経てや我れは來にけん」(能因)。

**たけささえ** 竹小筒。ささえ(小筒)におなじ。  
**たけじざいてん** 他化自在天。佛語。じざいてん(自在天)。欲界六天中の第六にある。その主を天魔といふ。第六天。又、三十三身の一、觀音の表はす天子魔の形。

**たけすがき** 竹簀搔。たかすがき。竹で編んだ簀子(すのこ)を床にしたもの。生玉心中下「重ぬる床の竹すがき、死顔見せじと押包む」。

**たけだ** 竹田。竹田近江。又、そのからくり人形芝居のこと。重井筒下「名残

盡せぬ濱側、此處は竹田か夜は何時ぞ」。竹田出雲。

**たけたば** 竹束。戰陣に用ひるもの。丸竹を束ねて、矢丸を防ぐ楯とする。雪女五枚羽子板下「軍大將竹束際に駒を立て」。

**たけとりのま** 竹取の間。竹取物語の繪を模などに描いた部屋。曾我會稽山「竹取の間に給へば(中略)、金泥砂子竹とりの、翁が娘のさいしきも光を恥づる許りなり」。

**たけなが** 丈長。紙の名。奉書の類で、質厚く、糊氣なくて、縦一尺六寸五分横二尺三寸あるもの。たけながぼうしよ。ゆひ(元結)の一種。たけなが奉書で作つたもの。ひらもとゆひ。雪女五枚羽子板中「小枕捨て、丈長も、より元結に大たぶさ、眉の引きずみ男」。

**たけなるこま** 丈なる駒。馬の丈は四尺を定尺として、それ以上は、單に寸を以て稱する。丈なる駒とは、定尺以上ある馬をいふ。日本振袖始「たけなる駒に鞭かれて、舍人も連れず只一騎」。

**たけのうれん** 竹暖簾。竹製の暖簾。  
**たけのこがさ** 筍笠。竹の皮を編んで造

つた笠。法性寺笠。五人女目「竹の子笠に面をかくし、腰裏身にまとひ」

筍の親まざり (彦) 子が其の親より優れたことに譬へる。

たけのもん 竹の紋。竹本筑後掾(義太夫)の紋。二枚繪草紙上「賣る聲にまで節籠る、竹の紋つく道行の、本を召せ召せ目關笠」

武文が松浦を追懸くる 秦武文の故事。

元弘の亂に土佐におはす尊良親王(後醍醐天皇の一の宮)の命を奉じて、御息所を京から迎へて土佐に行く途中、尼崎の浦で松浦五郎に謀られて御息所を奪はれたのを怒り、海上遙かに松浦の船を追懸けるが遂に及ばずして自盡する。後に武文は怨靈となつて松浦の船を散散に惱ませる。(太平記第十八、春宮還御の事附一宮御息所の事)。二代男三「浪を蹴立るに變ぬる有様は、武文が松浦を追懸くるに變らず、彼の舟を捕へ、あらけなく吟味する時」

たけもと 竹本。竹本義太夫のこと。出世胤徳下「此夏爰の芝居へ竹本が弟子が下つて重井筒を語つた」

たけもとぞいだいふ 竹本義太夫。淨瑠璃義太夫節の始祖。姓は藤原、名は博敬

通稱五郎兵衛。慶安四年攝津東成郡天王寺村の農家に生れた。初め、井上播磨の門人清水理兵衛に就いて淨瑠璃の奥義を極め、後、京都に出て更に宇治加賀の門に入り、其の技ますます進み清水理太夫と稱し、四條河原で興行した。かくて日夜罷勉、巧みに播磨と加賀との風を折衷して、遂に一流を立てた。貞享二年大阪に下り、始めて竹本義太夫と稱し、道頓堀に操芝居を興行。

元祿十四年、竹本筑後掾を拜した。時に近松門左衛門淨瑠璃作者を以てその名都鄙に鳴る。筑後の爲に常に傑作を提供したので、兩兩相俟つて名聲いよいよ揚つた。寶永二年老を以て座元を退き、正徳四年九月十日に歿した。年六十四。男色大鑑云「竹本義太夫伊織などに一二段かたらせて」

たけもとたのも 竹本頼母。竹本義太夫の高弟。大阪新町の西口に住み、髪の油などを商うてゐた。冥途飛脚中「禿どもちよつと往て、竹本頼母様信つて來い」

たけもとちくご 竹本筑後。義太夫のこと。晝夜用心記云「竹本筑後が淨瑠璃に竹田近江が細工を一芝居に仕組み」

たけりをかか 猛をかか。哮り出す。高く叫び出す。

たけれんじ 竹橋子。竹で造つた橋子。たご 擔桶。水など汲むをけ。はなひをけ。又、こえたご(肥桶)の略。もと、田子の潮汲む桶の義であるといふ。

たこくさんがい 他國三界。他の遠い國。他の國の果て。

だごくにん 毘獄人。地獄に墮つべき人、又落ちた人。大罪人。

たごのぼう 擔桶の棒。一般に天秤棒の稱。京都の方言。

ださけ 駄酒。質の悪い酒。味がよくない田舎酒。雪女五枚羽子板中「日出たいをりから、駄酒でも打ちくらつて、唐辛をかつ囃り」

たざゑもんぼし 太左衛門橋。大阪道頓堀川、戎橋と相合橋との間に架した橋。重井筒上「何じや太左衛門橋にいろはとは」

たじない 他事ない。親しい。仲がよい。よそよそしくない。博多小女郎中「それ程他事ない中で、譯わるい仕方」

たしやかに 「たしかに」と同じ。藍染川三「諸事御頼みませとさもたしやかに」

かには云ひけれど」



たじろぐ

傾く。衰へる。永代藏三「小判藏一つ、主人のまゝにもせざる内は、其家たじろぐ事は思ひも寄らざりしに。」又、避け退く。劣る。

田代源右衛門

二代男入「吊ふ血書は千枚重ね土中に突込み、誓紙塚と名付け、田代源右衛門と同じ供養をする」

田代如風

男色大鑑入「田代如風は千人切して、津國の大寺に石塔を立て供養をなしぬ」

たすき

紐又は線などを、襷のやうに、斜に打ち違へること。又、その模様。丹波與作上「時代の金欄鶴びしたすき花うさぎ」

たた

豊前國小倉地方で、魚賣女（私娼を兼ねた）をいふ。「じゃう」の條参照。

たたき

叩。叩扇で手を叩き、流行唄など唄ひつつ門附して歩いたもの。鳥追の類。諸國遊里好色由來揃「鳥羽の三四郎は、中にもたゞきといふ事すぐれしと也」。うきよたたき（浮世叩）の條参照。叩刑の名。

たたきがね

叩鉦。敲鉦。佛具の一。下に伏せて置いて、撞木で叩き鳴らすもの。ふせがね。二十不孝「三具に敲鉦を添へて一夜を十二枚」

たたきざや

敲鞘。叩鞘。槍などの鞘の漆を塗つた上を、絹で包んだ細い棒先で叩き、一面に凹凸を作つたもの。

たたきなつとう

叩納豆「薄ひらたく四角にこしらへ、細かき菜豆腐を添ふなり。値安く、早わざの物。九月末二月中、賣りに出る」（人倫訓蒙圖彙）。

菜花咄

「突米の當座、叩き納豆、あさりの抜き身居ながら調へて」

たたきばん

叩番。敲番。「たたき」の刑を執行する役人の稱か。大矢數二「叩番まで天命を知る、道を道に通ずる町送り」。同二「火付めが硫黄が鳥に取籠、叩番行く八重のしほ風」

たたすのもり

糺の森。京都下賀茂神社の森の稱。俗つれど「糺の森の下納涼申し合せ候」。「ただすの神路山」などともいふ。

ただずみ

佇。ぶらつくこと。暫く止まること。又、その止まる所。假のやどり。宵庚申中「心ふじやうに身體を持ちくづし、たどずみもない様に成り果てあかぬ別れ」

ただち

直路。すぐな路。轉じて、事の徑路。なりゆき。次第。花落受法記「して何といふ寺に火をかけ又何者を

斬り給ふぞ、聞かせ給へと宣へば、いやなふ、しかとたどちちは知らねども」

只取山の時鳥 勞せずして利を得ること、うまい仕事をするにいふ。三世相

「先へ廻つて池へおつばめ、何の手もなく殺しなば、たどちる山の時鳥、ほとようつては是因果奴。佐藤忠信廿日

月上「うまい、只取山の時鳥と阿古屋が縛めきりほどき」

ただのこなやま 多田の銀山。攝津國河邊郡多田村にある古い鐵山（伊丹の北

約二里の所。永代藏二「多田の銀山出盛りし有様書かせける」

たたみおび 疊帶。心（しん）を入れない

帶。五人女三「さてもたくみし小袖に、十二色のたゞみ帶、素足に紙緒のはき物」

たたみかく 疊掛く。物事を續けざまに

する。餘裕を與へずに行ふ。今宮心中上「眞向を四ツ五ツ疊掛けて喰はする」

たたみがみ 疊紙。たたうがみ。懐中し

て、鼻紙又は歌の詠草などに用ひる疊んだ紙。横二つ摺四つに折るを常とする。懐紙。

たたみこしかけ 疊腰掛。折疊んで扱ひ

に便利なやうに造つた腰掛。二代男六

「格子より疊腰掛を出して、それに坐して」

**たたみこむ** 疊込。心に刻みこむ。思ひ込む。又、疊んで中に入れる。

**たたみざん** 疊算。疊占。疊で是非吉凶を占ふこと。簪などを落して、その落ちた場所から疊の編み目を端まで數へて、丁半の數によつて占ふ。婦女子のすること。胸算用ニ「鼻は疊占(たたみざん)置きて、三度までいたして同じ事、御男子様に極まりましたと」

**たたみたたき** 疊叩。疊を叩くこと。又、その叩く棒、雪女五枚羽子板中「こりやこりや刀の身を見よ竹の笥、(中略)冬としならば此刀を、疊叩きに賣らうもの」

**たたみぢやうちん** 疊挑灯(たたみてうちん)。大矢數三「龍燈あがつて疊挑灯、此細工久しう懸つて見せまする」

**たたみ灯籠** 雨吟一日千句「あまねく智恵をたみみ灯籠、見上織それは女の鼻の先」

**たたみばし** 疊橋。折り疊むことの出来る橋。國性爺四「日本流の算盤橋、疊橋なんどいふ物ならん」

**たたみぶね** 疊船。組み立てて用ひ、又

折り疊んで持ち運ぶに便利なやうに造つた軍用船。ながもちぶね。

**たたみまくら** 疊枕。折りたたんで、携帶に都合よいやうにした枕。大矢數四「疊枕や暮方の夢、舟遊山忘れた物は御座らぬか」

**たたみやたい** 疊家體。疊屋臺。組み立てて用ひ、又、折りたたんで持ち運ぶに都合よく造つた屋臺(人形などの踊舞臺)。一代男五「人形まはして遊べと、挿箱よりたみみ家體取組み、上幕、つらくし、首落し」

**たたむ** 疊む。責める。いちめつつける。ひどい目にあはせる。一代女六「女房初めに我に掛り、さま／＼所作を盡され、間もなくたまれ、提灯の消ゆるが如く二十四にて鳥邊野に送りしが」

**ただやしなひ** 徒養。むだに養ふこと。徒に衣食せしめること。

**ただの** 徒居。只居。何事もしないでゐること。ただ日を暮らすこと。永代藏四「暫時も只居せずかせげども、毎年餅搗おそく」

**たちぎき** 轡の頭の輪。おもがいを着けるところ。又、そこにつけた總(ふき)。

**たちぎみ** 立君。夜、辻に立つて客を誘

ふ賣女。つじぎみ。夜發。緋縮緬卯月紅葉中「高麗橋の西東、床も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて」

**たちぎけ** 立酒。出立の際に飲む酒。又、立ちながら飲む酒。又、それを飲むこと。一代男五「其のあけの日は、禿共が立酒、さいはひ關送りとて」。油地獄下「つぐも受くるも立酒を、お吉見つけて、そりや何ぞ、忌々しい」

**たちさばき** 太刀捌。太刀の扱ひやう。太刀の使ひ方。

**たちすくばる** たちすくむ。久しく立つてゐて足がすくむ。

**たちちち** ひるんで、よろめくさま。釋迦如来誕生會ニ「立上れば兩足朱になつてちち／＼」

**たちつけ** 裁著。袴の一種。裾を紐で括り、膝の所にあげて、下に脚絆を穿くもの。伊賀袴。丹波興作上「きんか頭に顔色も、しゅちんの裁著りしげに」

**たちつとひ** 立筒樋。直立せしめた竹筒の樋。上から落ちる水を受ける樋。

**たちふるまひ** 立振舞。立居振舞。起居動作。(たちふるまひとは別語)。川中島合戦三「總じて敵の國へ入る時は、起ち振舞にも氣を附け、一言半句の言葉

をも謹み」

たちやく 立役。役者の男形に扮する者の稱。大夫の對、男色大鑑八「櫻井和平など皆根強き立役勤めけるが、これらもむかしは若衆ならめ」

立ちろひ男 西鶴五百韻「秋の霜立ちろひ男はめらりひよん、一日暮らしときくの花咲く」

たづえは 奪衣婆。佛語。三途の川岸に居て亡者の衣物を奪ひ取り、衣領樹上の懸衣翁(けんえをう)に渡すと傳へられる奥婆。五十年忌歌念佛中「半櫃・簞筒引出させ、ぐはらり」と打明けて、衣類引出し取放らすは、三途川の奪衣婆の、呵責も斯くやと哀れなり」

たつがしら 龍頭。龍の頭首の形したものの。兜の前立物、葬禮の旗頭などにつける。二代男「龍頭を擔ぎ、熱田大明神のお初穂を申請にあるかしやる」

たつくりぼつくり 坂道などの凹凸あるさま。だくぼく。

たつじま 縦縞。たてじま。一代女三「たつじまの布子に、鏝無しの脇指」

たつしやごと 達者事。力業。力くらべ。天下馬四「少しも力なくて、達者事にひけをとる事たびく也」

たつしやづくり 達者作。からだの作りの健康なこと。體格の丈夫なこと。

たつては 達てしては。強ひて詮義などしては。出世景清三「たとひ行方を知つたればとて、婿の訴人はいたされまじ、たつては此方の不調法」

たつばい 答拜。丁寧なもてなし。手厚いあしらひ。もと、尊者の來臨に際して、主人の降り逢つて、共に拜すること。

たつたま 達摩。數珠に貫く大珠。孕常盤。「千手の眞言十萬遍、唱へ込みたる大事の數珠、(中略)でしとだつたまは珊瑚樹ぞや」

たつみあがり 巽上。辰巳あがり。大きな音聲、度を越えた高ばなしなどの形容。永代藏三「おのが一連に二百三百人、辰巳あがりなる高咄。胸算用三「王城の辰巳あがりなる聲して、叡山へも響き渡る程の騒ぎ」

たて 伊達。意氣任俠を衒ふこと。はでに振舞ふこと。時の好尚に投じた風をすること。見えをかざること。語源については、物事を立て貫かうとする立ての濁つたものとする説、伊達正宗の部下の華美を装うたことに起るとする

説などあるが、次條と同系の語と思はれる。

たて (接尾語)形容詞の語幹、名詞又は動詞(名詞形)などに附け、その意味を強め、その事をわざと示さうとする場合に用ひられる。一代男「譯知りだてなる茶縹子の幅廣、はきみ結びにして。武道傳來記「諸事でかしたてに物毎子細らしく吟味するに」

たてかけ 立懸。男の髪結び方。寛永の頃淨瑠璃語り江戸半太夫の結び始めたものであるといふ。元結を巻き立てて、上反りになる様にする故の稱か。一代男「下坂小八がかりとて、鬘切して立懸に結ふ事はやりけるに」。宵庚申上「打揃うたる血氣ざかり、立かけのんこのあたまがち」

たてかご たて駕籠。「たて」は立か。伊達か。織留四「京女と見えし廿二三の風俗、人の目だつ程なり。たて駕籠ならべて男ざかりの若い者乗りちらして通りける」

たてがさ 立傘。長柄の傘を、天鷲絨又は羅紗などで作つた袋に入れたもの。大名などの行列の時、供に持たせる。堀川波鼓申「臺笠。たて傘。馬印、こ

れぞと名にし大鳥毛」。又、立傘の形した指物(武具)。

たてがみ 立髪。月代(さかやき)を久しく剃らないで、長く延ばした髪。二代男

ニ「立髪の小者、べんがら縞の風呂敷包に竹のねぢり杖を持ち添へ」

たてがみ 伊達髪。伊達風に結つた髪。たてがみかづら 立髪髻。たてがみ風に

撰したかづら。一代男ニ「墨染の長袖、又は立髪かづら、化物が通るとは誠に

是ぞかし」 立枯し。道を立て、操を立てた甲斐のないこと。釋迦如来誕生會

ニ「后といふは名ばつかり、御夫婦のしるしもない。正眞の立てがらし」

たてごころ 伊達心。伊達な心。はでな氣だて。遊興に勇む心。源氏烏帽子折

三「都は戀の名所とて、おのづからなる伊達心、町には惜しき姿なり」

たてこそて 伊達小袖。伊達風な小袖。はでに仕立てた小袖。大句數上「うつ碯

かけてきぬらんだて小袖、ふるさとさびし若女方」。源氏冷泉節下「御供の上

下残りなく、鍔の上の伊達小袖、兜をぬいで太もとゆひ」

だてしや 伊達者。伊達な風を好む者。

薩摩歌下「時折りくにはやり行く、山ぞ伊達者の山葛」。槍權三下「槍の權三は伊達者で御座る」

たてしゆじまん 伊達衆自慢。伊達者たることを得意とすること。又、その人。

天網島上「のんこに髪結うて野良らしい、だて衆自慢と云ひそな男、たしかに太兵衛かと見た」

たてずな 立砂。車よせの前の兩側に、編笠のやうな形に、高く圓く盛つた砂。

釋迦如来誕生會ニ「運の盡きぬる伯子頓、立砂に躡踏ん込み、のた打つところを」

たてぞめ 伊達染。はでに染めること。又、その織物。「だて染小袖」。

たてつく 橋突く。はりあふ。向きになつてかかる。栢をつく。

たてど 立所。物を立てる所。止まる所。百日曾我三「天にもあがる嬉しさに、足のたてども覺えばこそ。たてどころ。

たてぶみ 立文。書状の一形式。包紙で堅に巻き包んだ書狀。立て封。二代男

ニ「當座書きのたて文、淺黄縮緬の服紗包潜に送る」。同三「女筆の立文五ツ」

だてまわり 伊達參。伊達に神佛に參ること。油地獄上「足をそら／＼空吹く風

に、散りぬ色香の伊達參り」

たてやしなひ 立養。だて(伊達)に人を養ふ義か。兩吟一日千句「餅つき米味噌鹽にすわう木、一代はたて養にかね

寒て」。大矢數四「隣は庄屋隣は唐臼、立養ひ愚癡蚊虻の御出家を」

判。いろいろの取沙汰。出世瀧徳下「豎横沙汰を聞きふれて、戀の大和の色好み、吉野の花も振り捨つる三木の索麩喰付いて、買ふ人餘れど賣る日は足らず」

たてりあきなひ 立理商(堂鳥舊記)。空米相場(から相場)のことであらうといふ。永代蔵「北濱の米市は日本第一

の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目のたてり商も有ることなり」

たてわく 立浦。「たちわき」。「たてわき」ともいふ。纒模様の一種。二線相對して、中間がふくれ、兩端がすぼまつた形を繰返して、縞を成すもの。雲立浦、龍膽立浦などがある。

たてわけ 立分。わけがら。義理。義理だて。宵庚申上「一通の封を切らぬがいづれも様への立分。どなたに隨ふ心もなし」

たてをつく 楯を突く。張り合ふ。抵抗

する。雪女五枚羽子板甲「親が子をたばかれば、子は親に楯を突く」

だてをまとこ 伊達男。だてな男。俠客。

男だて。丹波興作下「興作丹波の伊達男」と、歌に詠ふはあの人か」

だてをんな 伊達女。だてな女。

たどろたどろ たどたどしいさま。歩み

のはかの行かない様子。釋迦如來誕生會「月も袂を上り坂、たどろ～の御難行」

たとんと たんと(澤山)と同義に用ひた

か。二代男「好い鳥が懸つたと、鳥原

にたとんと嬉しがらんす事あり」

たなあきなひ 棚商。店商。店内で商ふ

こと。(行商に對する)。「代女四」紅の片袖龍門の帯一筋取つて行く、棚商に

掛けは堅くせぬ事なれども、此女にほ

だされ、若い口からいやとは言ひかね」

たなうけじやう 棚請狀。店請狀。借家

人の身元保證書。店請證。虎溪の橋「座禪の床のうとんそば切、極樂の花の臺

の棚請狀」

たなおろし 棚下。店下。商品を調査し、

前年中の收支を精算すること。胸算用五「五日にせし店下しを三日にして、俄

に身の取り廻し賢く」。轉じて、他人の

缺點などを一指摘すこと。

たながし 店貸。家屋を貸すこと。

たなきやう 棚經。孟蘭盆(うらぼん)の

精靈棚の前で僧が經を讀むこと。五人女五「燈籠かすかに棚經せはしく、迎ひ

火に麻がらの影さえて」

たなさがし 店賃。(貸家をさがして、

周旋してくれる者。晝夜用心記五「新田開の下肝煎、店さがし、鶯仲間、家に

鼠、國に賊、油斷することなかれ」。(遊廓の詞。揚屋に泊つた客が、人の静

まつた夜更けに起き出して、酒など飲んで興すること。色道大鏡に「夜起」を

俗にかくいふよしを記してゐる。

たなじた 棚下。店の軒下。店さき。店

頭。五人女四「棚下を引連れ立ちて、こんく小目くらにお一文下されませい

の聲やかましく」

たななしぶね 棚無船。船の傍板(わき

いた)のないもの。ふなだな(船棚)のない船。「一代男三「棚もなき舟、飛ぶが

如く磯をおさせ」。二代男二「漕ぎ行く

棚無し船に、揚屋への通ひ」

棚な物取る (諺)容易いことの譬。効驗

の顯著なことにいふ。油地獄中「法力

のまいたなること、棚な物取つて来る

如く」

たなばし 棚橋。板で棚のやうに架した

橋。「一代女四「裏の御門の棚橋を渡る時のうれしき」

たなめつけ 店目付。店の商品を監視す

るもの。賣品に對する横目附。晝夜用心記六「左の袖口より紅を壹疋懷へ引

入れけるを、例の店目付見付けて、この侍の側にねぢより」

たなもり 棚守。前條の類語であらう。

店の監督。永代藏「棚守手代それ」の得意の御屋敷へ出入、ともかせぎに

勵みあひ」

他人は時の花 (諺)他人は一時の花のや

うなもので、永久には頼みがたいといふ譬。

たねがしま 種子島。銃の名。鐵砲。天

文十二年八月、大隅國熊本郡に屬する種子島に、葡萄牙人が始めて鐵砲を傳

へたのでいふ。大句數上「鐵砲あつる足輕にすむ、十石は妻子養ふたねが島」

たねはら 胤腹。父と母と。兩親。双は

水の朝日上「たねはら」一つの兄もあり、妹もあれど」

たのしみぎせる 樂煙管。樂しみつつ飲

た

む煙草。なぐさみに手にする煙管。

たのしみざけ 樂酒。たのしみに飲む酒。

たのしや 樂屋。樂しく暮して居る家。

富貴安樂な家。天下馬三「上長者町に酒造り込み、春夏は陳なるたのしや屋あり」。

織留「林勘兵衛といふ名はひそかにしてのたのし屋なり」

たのふだひと たのうだひと(頼人)が正しい。主と頼んだ人。主人。(狂言に「ふ語」。松風村雨束帶鑑五「たのふだ人のうつばが、ことの外そんじたについて」)

たのみ 頼。結婚の結納。舅とたのみ、妻とたのみ、嫁とたのみ、夫とたのみ祝儀の義であるといふ。永代藏六「此家より頼みを奢りのはじめとして」。織留三「男の方に偽いふからは頼み言ひ入の絹巻物、包銀も當座借りにして婚禮調ひ」

たのみだる 頼樽。結納の樽。永代藏六「世間に笑はぬ程のたのみ樽、二十五人肩を揃へておくりける」

たのもし 頼母子。たのもしこう(頼母子講)の略。無盡ともいふ。數人組合つて、毎月又は毎日など定めて、或期限の間、金を出し合ひ、圖によつてそ

の先取者を定め、一時に多くの金の融通をはかるもの。萬年草中「煙草入を落しました。中に頼母子の懸錢七十四文あつた物」

たのもしだて 頼もしく見せかけること。傾城酒吞童子四「新艘の横笛め、浪人の娘とやらぬかして、頼もし立すると聞く」

たのもしづく 頼もしいことを條件とすること。たのもしづくめなこと。又、たのもしだて。俠氣。壽門松中「此度の騒動も人違ひを、頼もしづくでお身の難義もわしから起る」

たはげ 戯。たはむれること。本氣でないこと。(「あはう。ばか。たはげもの。一代男六「たはげども、太夫はそれによるものか」)

たはこきり 煙草切。煙草を切ること。又、それを業とするもの。五人女三「誓願寺通の末なる煙草切の女といへり」

たばつく 束附。たばねつける。結ぶ。蟬丸三「水櫛の齒もよしやよし、何時を頼みにたばつけん、我が黒髪(の)さねかづら」

たはね 束。しめくくり。取締。博多小女郎中「此の心清町一町の束ねをする

年寄則ち家主、うつかりと見てよいか」

たばねぎ 束木。(「たばねた薪。たばねまき。一代男三「束木の當座買ひ、やがて立消ゆる烟なるべし」。(「紋様の名。薩摩歌上「駕籠は束木丹後の宮津」)

たばねまき 束新。前條の(「)に同じ。

たばねわた 束綿。越後國から出る色の白、質の濃やかな真綿。戀八卦柱曆上「此家のたばね綿の小紋の羽織、主も心をおくしまの」

たばひやう かばひやう。庇つて置く方法。貯へ方。晝夜用心記三「六月の青蜜柑、八月の蒔の臺(中略)、自然と作り覺え、たばひやうの鍛練ありて、珍客をもてなす」

たばらかへし 俵返。物を擔ふさま。俵を擔げる時のやうに、一端を下腹部に押當て、そこを支點として他端を廻轉し上げること。

たはらご 俵子。ごまめ(鰯)の異名。雪女五枚羽子板上「井戸へ釣られた大黒天も、好い客踏まへた俵子や、蜜柑柑子大々盡」

たはらごし 俵腰。俵のやうな腰。太い腰。丹波與作中「庄野のふのお米が俵腰に喰ひ附いて」

**たはらむかへ** 俵迎。胸算用四「漸う夜も明け方の元日に俵迎々々と賣りけるは、板に押した大黒殿なり」

**たはらもの** 俵物。俵に入れた物。へうもの。

**たはれめ** 戯女。遊女。うかれ女。西鶴五百韵「戯女とらへて早い事した、品玉はふたつ見えたる下の帯」

**たはれめぐるひ** 戯女狂。たはれ女に溺れること。大矢數二「三味線も皆長持に打込て、戯女狂ひ分散の月」

**たびがらす** 旅鳥。他郷から来たものを卑めていふ。

**たびぎせる** 旅煙管。旅行用のきせる。男色大鑑七「七日夜走りけはしく、假宿に旅煙管など忘れて、本意なし」

**たびこ** 旅子。旅興行などしつづつ、男色をも賣つた俳優の稱と見える。置土産五「今日は私の物好、藝子さらりとやめて京からの旅子、各様を見知らぬを七八人取寄せて、ざつと踊りじまひに」

**たびこやし** 旅功者。旅巧者（たびかうしや）であらう。旅になれた者。旅をしつづけてゐるもの。大矢數三「或時は中着となり根付となり、旅功者とは輕行にやる」

**たびこぐるひ** 旅子狂。旅子を相手として遊蕩すること。永代藏九「この跡取金銀あるに任せて少し取出で、手掛者に聞き立て、旅子狂ひを心ざしけるに」

**たひつり** 鯛釣。小兒の玩具。はりこなどで作つた鯛を、釣つたやうにして竿に繋いだもの。胸算用一「小刀細工に、馬の尾にてしかけたる鯛釣もはやりやめば」

**たびてい** 旅體。たびすがた。たびいでたち。

**たびはおり** 旅羽織。旅行の時に著る羽織。

**たびはこ** 旅箱。旅行に携へる箱。二代男八「其子は土踏まず三枚肩、前に旅箱、後には紫の縮入」

**旅は人の情**（謔）旅中は人の情が何よりも頼みになること。旅中の不自由は人の情で慰められる。一代男一「垢馴れしを手に掛けさすも、たびは人の情といふ事ありと申されければ」

**たびやつられ** たびやつれ（旅鯁）に同じ。旅の疲れで、容貌などのやつれてゐること。一代女六「旅やつられでさへいとしらしき男と、笠の緒のあたり、頬げたをさすり」

**たふ** 太布。布の一種。しなの木、又は楮の皮で織つたもの。一代男五「太布の經色羽織に、直徑四寸五分ばかりの紋」

**たふれの種** 男色大鑑七「半彌泪忍びて身をまかせ、たふれの種をしかけ、手を取れども」

**たふわ** 答話。たうわ（當話）に同じ。場當りの滑稽ばなし。男色大鑑六「童戲坂東又次郎が輕口、萬能丸五郎兵衛が答話」

**玉ある淵は岸破れず**（謔）智者の多い國は滅びることがないとの譬。國性爺「玉ある淵は岸破れず、龍住む池は水濁れず」

**たまか** ①つづまやか。儉約。しまつ。二代男六「源氏火にて文を読むなど、たまかな事なり」②忠實。實直。五人女二「博奕後家ぐるひもせず、たまかならば取らすべきに、いかなる者とも知れず」

**たまかがみ** 玉鏡。玉で作つた鏡。又、鏡の美稱。二代男六「直徑三尺五寸の水品の玉鏡」

**たまぎつちやう** 玉毬打。「ぎつちやう」を見よ。

**たまごちぢみ** 卵子縮。卵子色に染めた

た

ちぢみ織物。

卵の中にも異もありあり (諺) 同じ兄弟の中にも役に立たぬ者があるなどの譬。卵を渡る 危険な譬。五十年忌歌念佛中「亂れて唄ふ鶏の卵を渡る危さの、狂女となるこそ哀れなれ」

たまざさら 玉彫。ささら(彫)の美稱。

夕霧阿波鳴渡下「あつと涙の玉彫、うたふ聲にも血の涙」

たまさて 玉狭網。玉叉手。叉手(魚をすくひ取る具)の美稱。俗つれれ<sup>三</sup>「蠅がしらの鮫釣、玉狭網に落しかけて」

たましづめ 鎮魂。もと、天子の御魂をしづめ奉り、御代の長久を祈る祭、たましづめのまつり(鎮魂祭)をいふ。下例は、亡き人の魂をしづめる法事の意に轉用したのである。蟬丸五「安居院の小聖を請じ、宇治川にて七々日魂しづめの法事をなし。同「謹上再拜々々敬つて申す魂しづめ」  
だましや 騙矢。不意をうかがつて射る矢。

たまつくり 玉造。大阪郊外の地名。今、東區關西線の驛名となつてゐる。俗つれれ<sup>二</sup>「玉造出離れに草の屋借りて、

埒もない女を定め」

玉箔稻荷 大阪、豊津稻荷神社の稱。廿二社めぐりの第廿番。

たまび 玉火。魂火で、ひとだま(人魂)などいふ類のものであらう。大下馬<sup>三</sup>「橋本狐川の渡に見馴れぬ玉火の出でしと里人の語りし」

たまぶちがさ 玉縁笠。萬治頃から流行した女の編笠。若衆なども用ひた。丸い紙を二つ折にしたやうな形で、縁を見事に組んだので名づけるといひ、又、革で美しく縁を取つたので稱するともいふ。たまぶち。一文字笠。男色大鑑

たまぶり 正月の玩具。柄に彩絲を絡んだ六稜形の榎で、木製の玉を打つて遊ぶもの。きつちやう。(毬打) ぶりぶり。ぶりぶりぎつちやう。胸算用五「正月の景色京羽子板、玉ぶり<sup>一</sup>、細工に金銀を鏤め」<sup>織</sup> 留<sup>三</sup>「玉ぶり<sup>一</sup>の箔のはぐるを惜み、



たまぶり(左) はまゆみ(右)

紙に包みて」

たまぼこ 玉銚。玉銚之(たまぼこ)といふ道の枕詞から轉じて、足のこと、或は歩みのことにかけていふ。二代男<sup>三</sup>「是れより末は玉銚の、足許も塵埃に埋めば」。蟬丸<sup>三</sup>「急ぐとすれどとけしなき、牛の玉銚おそくとも」

たまみそ 玉味噌。そら豆を煮て麴と鹽とを混ぜ、よく搗いて團子の大きいさにし蜜苺にして竈の邊に置いて乾し、一二年後、磨つて汁や調理に用ひるもの。俗つれれ<sup>三</sup>「納所坊主に輕薄いひて玉味噌の片破も千金に替へず」

たまみづ 玉水。(地名)山城國綴喜郡の内。雪女五枚羽子板中「胸にほどかせ手に掬ぶ、玉水の邊に着きにけり」

玉蟲拾ふ 玉蟲を拾ひ取つて装奩に藏めし。事に初心の者などの、うらははづかしく、うちうちしてゐるさまにいふ。孕常盤四「さどめく聲、ほの聞ゆれば牛若は、きやうとくも逃げ入らず、玉虫拾ひ玉笹の、露を飼うてぞおはします」

たまむしいろ 玉蟲色。玉蟲の羽のやうな色。金緑色。二代男五「十八九なる大振袖の娘、肌には黄うこんのひつかへし、中は玉蟲色の綸子」



**たまやでら** 靈屋寺。廟所のある寺。菩提寺の類語。萬丈反古三「肥の後州につき、清正のたま屋寺に連句の朋友ありて、是に尋ね」

**たまよばひ** 魂呼びひ。招魂。死人の魂を呼び返すこと。反魂。新可笑記三「唐土の魂よばひとて、空しきからだを呼び生けたる其の例多し」

**たまわた** 玉綿。種のついたままの綿。まだ繰らない綿。大矢數二「冬は雪かと玉綿の山」織留六「今まで玉綿繰つて覺えずうたゝ寝しましたといふ」

**だむ** 訛。たむ。言葉がなまる。音聲が濁る。

**だむ** いろどる(彩)。特に箔などつけるにいふ。一代男八「日本一の餓頭ありと申す、それはと聞けば、一つを五匁宛にして、上を金銀にだみて、其數九百。俗つれ」五「兩人丸裸になつて惣身を金箔にだみて、そのまゝ黄金の踊佛」

**たむらがは** 田村川。近江國土山から伊勢阪の下に行く道筋、田村大明神の坂下を流れる川。源氏烏帽子折四「解けて流れて田村川、水嵩増つて波早く」**ためしもの** 試物。ためしぎり(試斬)にするもの。卯月潤色中「心中の作法に

て、死損なひし片方は、試物になると聞く」

**ためつく** 搦着。搦めて着ける。永代藏一「あれは何屋の誰殿の髻ぞと、五節句に袴肩衣ためつけ、紋付の小袖に金拵の小脇指」

**ためぬり** 溜塗。漆の塗り方の一。中塗面に朱漆を塗つて乾し、其の上を木炭で研いて艶消をし、更に、すき漆又は梨子地漆を塗つて仕上げたもの。又、色を附けず、漆ばかりで塗ること。赤うるし。大矢數五「ため塗の階のぼる風もなし、布目の雲を通す一撓」

**たもとはりひぢ** 袂張脇。脇を張り、袂が廣がるやうにして、威儀をつくらふこと。雪女五枚羽子板中「袂張脇のししと、歩むとすれど襦(かいどり)の、身癖顔癖引包む」

**たもまじ** 給ふまじの約。二代男二「とても限りのある男、急に埒明きたもまじと了簡して」

**田も遣らう** 畦も遣らう (諺) 何もかも與へよう。考へなしに人に物を遣らうとする譬。夕霧阿波鳴渡中「下地がにやこい且那樣、小舌たるう仕懸けたら、ぼつかりと喰ひついて、田も遣らう畦も

やらうで、奥様はうつそり鼻あいて仕舞はんしよ」

**たもん** 多門。佛語。多門天王の略。四天王の一。須彌山の第四層、北水精宮の北方の守護に任ずる神。毘沙門天。多門天。孕常盤三「死出の山には馬と成り、多門持國に口取られ」

**たららばう** 太郎坊。山城國愛宕山の天狗をいふ。晝夜用心記三「中将姫の花の帽子、太郎坊の羽根圍(うちば)」**たらごゑ** たら聲か。又、たらたらと締りない聲か。生玉心中上「奥の客がたら聲にて、こりやさがは何してじや、色が無うては飲めぬはい」

**たらじゆ** 多羅樹。梵語(Dracaena)。椶櫚科に屬する喬木。印度に産する。その葉は長く、廣く色澤あり、經文の書寫に用ひられ、又、その幹は尺度の稱に用ひられる。即ち一多羅樹は七尺とせられ、一俵は七尺であるゆゑ、一多羅樹とは、四十九尺の長さといふことになる。日本振袖始一「聲の劍の稻光、恐れて虚空に飛上り、其高さ七多羅樹」

**たらす** 誑。情慾などによつて人をだます。惑溺させる。又、小兒などすかしだます。一代男一「お慰みに奉ると、此

た

にてたらせども嬉しきうなる景色もな  
く」

たらたら 厭ふべきことをしやべり續け  
るさまにいふ。天網島下「口合たら〜」  
立ち歸る」

だらつきごゑ ぐづぐづと、不活潑な音  
聲。

だらつく だらだらする。勢がなくなる。  
しまりがなくことにいふ。「だらり」の  
條参照。

たらひぐち 鹽口。大きな口に譬へる。  
だらり 陀羅尼の訛かといふ。又、陀羅  
尼を讀む時の鐘の音。女腹切中「建仁  
寺、だらりが鳴るぞだらつくまいぞ」

だり 四のこと。振賣、駕鼻などの隠語。  
日本西王母三「弓取の言ひも習はぬ駕  
かき詞、成り下りたり、だり・ばんど  
う、いつかのがれんきりがれん駕やろ  
いとぞ涙ぐむ」

たりひづみ たりひづみ。たるみ、ゆが  
み(歪)。邪曲。難すべき缺點。松風村  
雨束帶鑑三「二人が中の挨拶は、たりひ  
づみない弦懸けの升で置る懸路でも心  
で惚れたは氣の毒な」  
たる 垂。そる(剝)に同じ。「そる」を忌  
んでいふ。重井筒中「あんまりよい月か

げに、額たれうと思つて」  
だるい たゆし(弛)の訛。たるい。まだ  
るい。まのろい。椀久「世物語下」嵐三  
右衛門が六法、是れき此の男、中々だ  
るい事見てゐる事でない」

たるきはな 梁鼻。垂木の端。男色大鑑  
四「柱は眞檜、相丸太、(中略)又は唐木  
を使ひ、一つ／＼品を替へ、色々の椽  
鼻(たるきはな)壁も五色に」。永代藏

三「瑪瑙の釘隠し、青貝の梁鼻」  
たるつぐ 椽次。地黄坊椽次といふ酒袋。  
水鳥記に出てゐる人物。俗つれ〜「  
椽次、底深も今に至りて語らねば合點  
まゐらず、よし〜その熱爛が好物な  
り」

たるむ 弛。たゆむ。隙が見える。張が  
ぬける。堀川波鼓中「長刀取りのべ閃か  
し、たるまば切らんず勢ひなり」  
たれむし 垂蒸。麻の布簾。あさのれん。  
男色大鑑六「板敷の縁に引き、垂むしの  
敷くぐりて絹ばりの障子出きあけて」

たわけ 戲氣。たはけ。たはむれ。ばか  
な事。一代男入「よい戲氣とおもひ、銀  
つかうて慰みにすると見えたり」  
たをれ たふれ(倒)。損失。生玉心中下  
「さがが死ぬると大きなたをれ」

だんがふしむ 談合占む。相談してきめ  
る。二十不孝二「跡先構はず談合占め、  
此の通り申せば」

だんがふばしら 談合柱。思案、談合の  
たよりとするもの。相談の相手。大矢  
數二「てにはの悪い所はなをせ、削らせ  
て談合はしらを立られたり」。出世瀧徳  
下「是からが大事の思案、火燵の椽を談  
合柱」

だんぎ 談義。説法。説教。讚談。  
短氣は未練のもと (諺)短氣に事を處置  
すれば、後悔して未練の振舞をする基  
となる。

だんきまゐり 談義參。寺院に參り説教  
を聴くこと。重井筒上「おれらが談義參  
りして、一文投げる賽錢さへ」  
たんど 丹後。丹後太夫の略。正保慶安  
の頃出た淨瑠璃太夫。淨雲門下の四天  
王の一人。一代男四「折節芝居始り時  
分、丹後が本節はちやと呼ばはる」

たんごぶり 丹後鱒。丹後國の海岸で取  
れる鱒。特に美味を賞せられる。永代  
藏四「肴掛に丹後鱒、雉子をならべ」  
たんしう 丹州。名妓の名。二代男三「夕  
霧が泣くも、丹州が大聲も皆心の臟か  
らなり」

**だんじり** 山車。樂車。だし。祭禮の時

に曳いて廻る、飾物をした車。臺尻(たいじり)の轉であるといふ。雪女五枚羽子板上「樂車うつて囃した、樂車うつた見さいな藤内太郎」

**だんじりまい** 樂車太鼓。だんじりの囃しに用ひる太鼓。

**だんじりまひ** 樂車舞。樂車の上で舞ふ舞。

**たんせきりう** 丹石流。劍道の一。流。衣斐丹石入道が創めたもの。武道傳來記

三「其比また太田鬼トといふ浪人、丹石流の兵法の師をして」

**だんせつつのあふき** 團雪の扇。地の白い

圓い扇。班婕妤の詩に、「新裂齊紈素、鮮絮如霜雪」、裁成合歡扇、團々似明月とあるに據る。百日曾我團雪の扇雪なれど、消えてものこる世の中に」

**たんぜん** 丹前。たんぜんふう(丹前風)の略。

①たんぜんぶし(丹前節)の略。②六法。③どてら。その他、丹前風のおみの物事にいふ。次の各條を見よ。

**たんぜんあたま** 丹前頭。丹前風に結つた頭髪。

**たんぜんおび** 丹前帯。幅の廣い帯。丹前風をした人の用ひたもの。

**たんぜんがさ** 丹前笠。丹前風の人の冠つた編笠。

**たんぜんじま** 丹前縞。丹前風の人の著る縞織物。

**たんぜんせきだ** 丹前雪踏。丹前風の人

の用ひる雪踏。

**たんぜんたてがみ** 丹前立髮。一種の丹前頭。月代(さかやき)を長くはやした

もの。もと、丹前風呂に通つた若侍どもが、病氣あがりてまた月代を剃らず

においた風の、伊達に見えかのに做つたものであるといふ。

**たんぜんふう** 丹前風。江戸神田松平丹

後守の邸前にあつた風呂屋の湯女勝山の風をまねて起つた風俗。遊治郎・俠客の間に主として流行したすがた。たんぜんすがた。一代男、「抑も丹前風と申すは、江戸にて丹後殿前に風呂ありし時、勝山といへる女、すぐれて情も深く、髪かたちとりなり、袖口廣く、つま高く、萬づに付けて、世の人に替りて、一流はよりはじめて、後はもてはやして、吉原に出世して、不思議の御

かたにまでそひぶし、ためしなき女の

侍り」。勝山風。

**たんぜんぶし** 丹前節。承應明暦の頃、江戸の遊里に行はれた小唄節。芝垣踏の歌に湯女勝山の事を作り入れたものであらうといふ(柳亭筆記)。たんぜん。

**たんぜんぶろ** 丹前風呂。江戸神田松平丹後守の邸前にあつた風呂屋。寛永の頃からあつたが、明暦三年に禁止された。「たんぜんふう」の條参照。兩吟一日千句「丹前風呂もさわぐ夕暮、替り

音色三筋の糸の引出しは」

**たんぜんもとゆひ** 丹前元結。普通のより太い元結か(柳亭筆記)。天和笑委集

八「よしや風俗つかみざし、熊谷編笠丸ぐけの帯、(中略)たんぜんもとゆひ四角まげ」

**たんぜんもやう** 丹前模様。天和笑委集「當世丹前はでもやう、色香ことなる都染。次條参照。

**たんぜんもん** 丹前紋。柳亭筆記に曰く、

「丹前雛形といふ模様の本あり(中略)、丹前もやうの百年の昔は流行せしを思ふべし。此の雛形に、丹前紋と云ふあり、戀といふ字に櫻の折枝、袖といふ字に菊の花の類にて、今加賀紋といふ

た

物に似たり」と。

**だんぞめ** 段染。だんだらすち(段段筋)に染めたもの。だんだらぞめ。五人女

三「段染の一幅帯、胸あけかけて身ぶりよく」

**だんだらすち** 段段筋。横筋が異なつた色で段段になつてゐる模様。男色大鑑

七「西の木陰にだんだらすちの暮の内に琴の音」

**たんたん** 擬聲語。鼓の音などにいふ。

堀川波鼓上「舌鼓たん」と打ち」

**たんでき** 端的。まのあたり。てつきり。用明天皇職人鑑「たんできの法を以て帝位にのぼり、かの姫を後宮に立てんはいかに」

**たんと** たくさん。多く。大いに。(今もいふ)。一代男八「たんと氣の毒がる顔つきおかし」。置土産四「たんとといとしく思ふに候」

**だんどく** 檀特。曇華。「かんな」の一名。その實を數珠に用ひる。大下馬三「善光寺如來の御影、檀特の淨土珠數」

**だんない** 大事な。意とするに足らず。かまひなし。差支へない。百日曾我三

「なふお二人様、だんないはいなあ。きせ川の龜菊じやはいなあ」。出世瀧徳下

「きつと堅う二百兩に賣らさいでもだんないこと」

**だんなでら** 旦那寺。わが家の歸依する寺。菩提寺。榮花咄四「黒谷の旦那寺へ先退かせられ」

**だんなばう** 旦那坊。次條の略。榮花咄三「介中の末寺に旦那坊を頼み、いやながらの段染」

**だんなばうず** 旦那坊主。旦那寺の坊主。置土産一「四十九日の朝は旦那坊主よびて、夕食に精進あげて」

**だんなまはり** 旦那廻。得意先を廻ること。信者の家を廻ること。永代藏四「諸國檀那まはりのお定まりの狀一つ錢一文づつにして」

**だんなやまぶし** 旦那山伏。常に我が家に入入してゐる山伏。大下馬一「旦那山伏の多聞めでたき事ども語れば」。胸算用三「旦那山伏が來て、變生男子の行

**たんの** たんのう(堪能)の約。満足すること。「足んぬ」の轉とする説はいかが。永代藏四「乞食のたんのする程錢とらせし人なかりき」

**たんのう** 堪能。(かんのうの誤)。満足すること。心ゆくこと。氣のすむこと。物事に上達するといふ意から轉じてい

ふ。出世瀧徳上「命が寶袖乞非人の身となつても、二人一所に居る上は堪能ではあるまいか」。夕霧阿波鳴渡下「忍ぶ事も時に依る、娘とも思ふ夕霧が、臨終の心が堪能させたい」

**たんばいがき** 丹波筑籬。いがき(竹で編んだかご)の一種。二代男三「丹波筑籬に入れて、杉著を洗うて干して置かせしは」

**たんばぐち** 丹波口。京都烏原遊廓の、丹波街道に通ずる口。一代男六「妾の入物、おろせがいそげば、丹波口の初朝、小六が罷出て、御慶と申納」

**だんばご** 段箱。敷臺に上る箱やうの段。たんばごえ 丹波越。(京都から丹波へ山越しすること)。かけおち。「京の諺、亡命(かけおち)する事をいふ。按に、はじめは烏原にての流言なるべし(柳亭記)。榮花咄五「親の身として久離を切る事大方ならず、昔は丹波越とて京都を離れしが、是も古くなつて近年は江戸々々と下りけるに」

**たんばたらう** 丹波太郎。丹波國の方面に當る山から出る雲。陰曆六月の頃、この雲が出ると夕立があるといはれる。京阪の方言。一代男四「水無月の

末、山々に丹波太郎といふ村雲おそろしく俄かに夕立して、神鳴へそを心かけ

だんびらずね 段平臚。幅の廣いすね。平たい恰好のすね。

だんびらもの 段平物。刀劍の身の幅ひろなもの。だびらびろ。だんびら。壽門松下「宇多の國行、二尺ばかりのだんびらもの、折紙とともに引換へ」と

たんぶ たつぶり。なみなみ。酒盃などを十分に受けるにいふ。堀川波鼓上「盃取り(中略)たんぶと請けて一息飲み、文六にぞ戻しける」

たんぶ 擬聲語。さんぶ。水の飛び散る音、水に物の落ちるにいふ。油地獄上「小川へだんぶとはね落され」。釋迦如来誕生會四「底澄む水を汲まうよ、だんぶ」と汲めば」

だんぶくろ 段袋。駄荷袋。「だにぶくろ」の訛かといふ。底を堅くした布製の袋。今の旅行に用ひる信玄袋に似たもの。荷物袋。兩吟一日千句「寢道具いれの衣かせ山、行千鳥くびへかけたかだん袋」

たんぼ たんぼ。酒の爛をする器。ちろり。刃は氷の朔日中「心得たんぼをつけ

生姜、しほがひに花鯉」  
だんぼらぼ どんぶり。深い水中に物を投げ込む擬聲語。博多小女郎上「大勢かかつてだんぼらぼ。ほとりも知れぬ海の中、眞逆さまに打込んで」

だんまつま 斷末魔。佛語。息を引取る間きは。死にきは。曾根崎心中「斷末魔の四苦八苦、あはれといふも餘りあり」

だんもやう 段模様。段段に染めた模様。だんだらぞめ。だんぞめ。傾城酒吞童子「段模様の染かつき、供の女が頬かぶり、御所のひんぬき二人が中へ」

たんれん 鍛錬。修行すること。新小夜嵐物語下「高野に住みて、衆道のわけをこまかにたんれんしながら、野郎に用捨もなく」

# ち

ちいしやう 地衣裝。俳優の平素著る衣服の稱。舞臺衣裝に對する語。男色大鑑七「地衣裝も残らず取つて歸れば」。

同八「皆之丞がうつくしげなる風情(中略)風俗地衣裝の、外に替りて、黒羽

二重に白小袖重ねて見る事も飽かず」  
ちいみ 血忌。曆の語。鍼灸・婚嫁・雇入れなどに忌む日。血いみ日。兩吟一日千句「山人の袖ぬぎかけて灸のあと、血忌を除けて大やら小やら」。戀八卦柱曆下「是でそもじを殺す小やら」。ちいみも今はいつはりと、二人は顔を打合せ」

ちう 宙。そら。虚空。又、そらに覺えてゐること。釋迦如来誕生會三「七歳八歳で手本をあげ、四十二字を宙で書く」

ちう 中(ちゆう)。中途。途中。百日曾我三「福經病氣と中にて御所へお返事申し、今宵のお成をとめ申さん」

ちうろ 中有(ちゆう)。佛語。死後、未來の生を受けない間。四十九日の間。中陰。釋迦如来誕生會四「中有の闇の結縁をと願へども、一燈の油の價なく」

ちうえう 中天(ちゆうえう)。珍事中天。非常の災難。晝夜用心記四「何事も時の中天といふ物なれば、堪忍いたされよ」

ちうおん 中音(ちゆうおん)。餘り高くなき低くなく、中位の高さの音。枕久一世物語上「伊勢物語義經記などを中音に讀みて居て、外へ心を移さず」

ちうかうじ 中柑子(ちゆうかうじ)。永代藏五「中柑子の皮足袋一足、これは縫

ひちぢめてはくべし」

ちうがさ 中笠か。中嵩か。茶碗の大きな中位なものをいふ。油地獄下「肴も盃もいらぬ、中がさ添へて持つて来い」。宵庚申中「今朝も粥を中がさに三よそひ」。ちうわん(中挽)の條参照。

ちうがた 中形(ちゆうがた)。染模様の名。大形・小形に對する語。形のいささかあらひのもの。中形染。胸算用五「中形のしのぶ小桐の衣裳きる中に」

ちうがり 中刈(ちゆうがり)。髪を中途から短く刈ることか。ざんぎりか。俗つれん「唐様に構へて、天窓は中刈にして髭剃らず」

ちうかん 中眼(ちゆうがん)。眼を半ば開いてゐること。武道傳來記「二人ながら中眼にひらき、笑へる顔ばせ常にかはらず」

ちうぐくり 中括(ちゆうぐくり)。物事をよゝ加減に考へること。根據のない見積り。榮花咄三「遊女の秘傳まで中ぐくりせられしは、聞き傳へ見及びての分にてはならぬ事」。永代藏四「萬を中ぐくりにて、雲をしるしの異國船に投げ金もすたらす」。ちうづもり。

ちうけい 中啓(ちゆうけい)。扇子の一

種。親骨の上端をそらせて、疊んでも頭部が開いてゐるやうに作つたもの。

晝夜用心記三「此扇屋にて、三本五本物中啓箱入七百八十本」

ちうげん 中間(ちゆうげん)。武家の奴僕の頭だつ者の稱。中間男。宵庚申上「庭の締りは中間小者、役め」に立別かる」

ちうげんがひ 中間買(ちゆうげんがひ) 中間(或は仲間)の用に買ふものか。中間に買はせることか。一代女四「中間買の安部茶、飯田町の鶴屋が饅頭、女ばかりの一日暮し、何の罪もなく」

ちうげんぜん 中間禪(ちゆうげんぜん) 佛語。有尋有伺の天と、無尋無伺の天との中間にある禪定。梵天王の境涯。離欲高淨の境地。國性爺四「浮世を離れし手談の技、中間禪の高臺かと」

ちうげんをとこ 中間男(ちゆうげんをとこ)。「ちうげん」を見よ。

ちうごしやう 中小姓。武家の役目。小姓組と歩行衆との間の扈從。大下馬四「この男やう」中小姓ぐらゐの風俗、女の好かぬ男なり」

ちうし 重四(ちゆうし)。采の目が、二つとも四の出ること。しゆし(朱四)の

條をも見よ。大矢敷上「心中に重四朱三を思ひ込み、さては首たけ加茂川の水」

ちうしやうぎ 中將棋(ちゆうしやうぎ) 將棋の一種。盤は縦横十二目で、駒の数は九十二。小將棋と違つて、駒を取りすてにするもの。物種集上「取りすてもする浦の貝から、中將棋和歌吹上にさしかゝり」。男色大鑑「宵より中將棋さしてありしが」

ちうじやうひめ 中將姫(ちゆうじやうひめ)。横佩右大臣豊成の女。母は藤原百能。三歳の時母を亡ひ、繼母の爲めに苦しめられる。十五歳の時、禁中に入つて筆を奏し、その技の絶妙なるを以て、三位に叙せられ、中將の名を賜はつた。寶龜元年大和國當麻寺に入り善心尼といひ後妙法と稱した。傳へ曰ふ、翌年七月十日、觀世音・彌陀佛共に來り、五色の蓮糸を作り、姫をして曼茶羅布を織らしめた。天應元年(一四四一)寂、年二十九。五人女「傳へ聞く中將姫の再來なるべし」と

ちうそ 十三(じふさう)。(地名)攝津國西成郡の内。淀河の分流中津川筋にあたる。二枚繪草紙中「ちうそ國鳥北南の長柄で、男といはれたる善次郎」

ちうそ 十三(じふさう)。(地名)攝津國西成郡の内。淀河の分流中津川筋にあたる。二枚繪草紙中「ちうそ國鳥北南の長柄で、男といはれたる善次郎」

ちうそ 十三(じふさう)。(地名)攝津國西成郡の内。淀河の分流中津川筋にあたる。二枚繪草紙中「ちうそ國鳥北南の長柄で、男といはれたる善次郎」

ちうそ 十三(じふさう)。(地名)攝津國西成郡の内。淀河の分流中津川筋にあたる。二枚繪草紙中「ちうそ國鳥北南の長柄で、男といはれたる善次郎」

やが何と見た」  
ちうだいまやろ 中大名(ちゆうだいまやろ)。江戸幕府に於て、柳の間に詰める大名の稱。

ちうだち 中斷(ちゆうだち)。中裁。本裁と四つ身との中間の裁ち方。「なかだち」と訓むはいかが。本裁の身ごろから襟をとる裁方。十三四歳の者の著る衣服にいふ。胸算用「男小袖四十八、女小袖五十一、小斷中斷の小袖二十七、合せて百二十六」

ちうづもり 中積(ちゆうづもり)。おほよそに見積ること。よい加減の推量。榮花咄「さて此の里かしこくなり給ふと言へば、大方中づもりにして、未だ一年足らずに、二十二三貫目の學問と言へり」。永代藏「大方中づもりにも違ふまじき四十八九か」

ちうとほり 中通(ちゆうとほり)。「なかとほり」を見よ。男色大鑑「腰元通りの女までも皆色めきて」  
ちうとも 少とも。ちつとも。少しも。大矢数序「執筆は忽ち疲れにけり、其身は少(チウ)とも倦むことなく」  
ちうなれ 中馴れか。「なかなれ」と訓むはいかが。中ぶる。少し古くなつたも

の。五人女二「扇流しの中なれるゆかた、裏ときかけたる木綿たび」  
ちうに 重二(ちゆうに)。采の目が二つとも二の出ること。「ちうし」参照。

ちうにかい 中二階(ちゆうにかい)。普通の二階よりも低く構へた二階。守貞漫稿に「近年小民専爲之、表を庖厨とするの製也、仕事師等の宅に多し、又長屋に多し」と註してゐるが、西鶴の時代には必ずしもさうでなかつたらしい。一代男六「中二階の古きに氣をつけ、亭主よび出し、是では置かれじと普請をうけあひ」とは高原の廓内の話。五人女五「すこし左のかたに中二階四方を見晴し、書物棚しほらしく、爰は不斷の學問所とて」とあるは、「御代官」の邸内のことである。

ちうねん 中年(ちゆうねん)。中年奉公の略。年が長じてからの年季奉公。出世濃徳下「山城屋といふ忘八へ、中年四年二百兩、命がらりに身を賣りて」

ちうば 乳媪。乳母。乳を飲ませる女。抱き姥の對。大下馬三「娘一人設けて乳媪を取りて育てしに」  
重箱を搥粉木で洗ふ (謔)寛大な處置をいふ。「重箱の隅を楊枝でつつく」の反

對。  
ちうびねり 中捻(ちゆうびねり)。腰のあたりをひねるやうにして、しなを作る。五人女三「ぬき足中びねりのあるき姿」

ちうぶくら 中膨(ちゆうぶくら)。槍鞘の袋の中部がふくらんだもの。薩摩歌上「とき／＼土佐の高知は中膨」  
ちうぶん 中分(ちゆうぶん)。(一)當分にわけること。五分五分であること。曾我會稽山「互に遺言(遺恨)なき様に、中分の扱ひ、御了簡に任すべし」。(二)中流の人。中位の身分。二代男六「中分の人遊び所には、撞木町なくば事の缺けるなるべし」

ちうりこ 地賣子。その土地で賣る人。(他國に出かける者に對する)。戀八卦柱屏上「江戸・大阪のくだし曆、地賣子どもの取捌」

ちうりよ 中呂(ちゆうりよ)。四月の稱。もと十二律の一であるが、四月に配する。仲呂。國性爺「崇禎十七年中呂上旬」  
ちうろくてん 物事をよい加減に推しはかるさまにいふ。たしかな據りどころのないさま。置土産「此男も北濱に源

ち

といはれ、諸分ちうろくてんにくゝり、あまり先繰を仕掛けしに」

**ちうわきざし** 中脇指(ちゆうわきざし) 大ききの中位な脇指。一代男三「かのこ縶子のうしる帯、中わきざし、印籠巾着もしほらしく」

**ちうわん** 中腕(ちゆうわん)。大ききの中位な腕。「ちうがき」の條参照。傾城反魂香上「門出祝ふ中腕に、例の熱爛三杯ひっかけ」

**ちうゐん** 中陰(ちゆういん)。死後の四十九日の間の稱。中有。二代男三「中陰と見えて、庭には四十九日の餅搗く音」

**ちえくる** ちちくるの誤か。兩吟一日千句「先世帯夫婦と現じたまひけり、其二はしらちえくりあふて」

**ちおろし** 血荒。血下。子おろし。墮胎。一代女六「子供の面影、腰より下は血に染みて、(中略)さては昔血荒をせし親なし子か可悲」

**ちがき** 血書。誓紙など血で書くこと。又、その物。ちぶみ。二代男八「弟ふ血書は千枚重ね土中に突込み、誓紙塚と名付け」

**ちがちが** 跛(ちんば)の歩むさま。ちんちんもがもがすること。百日僧我「片

足立つてちがくと、列卒の中にぞ逃げ入りける」

**ちがのうら** 千賀浦。陸前國宮城郡鹽竈浦の別稱。永代藏三「むかし千賀の浦を七條に移されし鹽蓋の大臣あり」

**ちがみ** 地髪。入髪に對して、實際に生えてゐる頭髮の稱。百日僧我三「かもじ小枕取つてすて、地髪ばかりを鉢卷し」。夕霧阿波鳴渡下「かもじ入れずの地髪ふさく」

**ちかやき** 直燒。板燒などに對して、ちかに火にあてて燒くことであらう。大矢數四「花の香も手つまのきかぬ膽皿、鯛の櫻はちか燒にせよ」

**ちからいくさ** 力軍。力で戦ふこと。腕づくのあらそひ。

**ちからおび** 力帶。強く引きしめ結ぶ帶。ちからがみ 力紙。力士が相撲する時、その身體を清めるに用ひる切紙(きりがみ)。化粧紙。四本柱の左右に吊しておく。大矢數四「なんの手もないとつたり相撲、力紙一枚二枚露りて」。(一)一艘に門出の身支度などにも用ひたものか。堀川波鼓下「門出を祝ふ力紙、拳を固め四ツ辻に四人さまよひ立ちあむたり」

**ちからぐさ** 力草。鷹の獲物あるとき、身を支へるために掴む草。轉じて、力とたのむもの。頼りとするよすが。二枚繪草紙上「隔つる中の垣根草、力草なく泣きかはす、心ぞ思ひやられたる」

又、「かぜくさ」、「すみれ」、「ちからしば」などの異名。

**ちからだて** 力立。力を見せかけること。力自慢。

**ちぎ** 千斤。杜斤。扛秤(ちぎ)が正しい。重い物を量る秤。ちぎり。永代藏三「才覺らしき若い者、杜斤の目りんと請取りてかへしぬ」。懷硯四「かけ木の千斤のおとりを試し」

**ちぎやうげん** 地狂言。しろうと(素人)が稽古して打つ芝居。地芝居。大矢數四「落所見よ神鳴の露、地狂言罷出でたる月の影」。繞留三「地狂言は子ども時なり、髭のはえたる口から罷出たる者は、いかいうつけの沙汰して、見る人汗をかきけるに」

**ちぎやうざと** 知行里。知行してゐる土地。領してゐる村里。特に僧家で寺領。檀家のことをいふ。男色大鑑三「隠元らしき御法師の、知行里の牛飼童子を無理に拵へ」



ちぎやうじよ 知行所。知行してゐる所。領地。源氏冷泉節上「田地を取りあげ、知行所を退拂へ」

ちぎやうてら 知行寺。知行を持つてゐる寺。寺領のある寺。薩摩歌上「來迎院と申す知行寺へ後住の約束」又、且那寺といふに同じ。織留五「知行寺の外はかく且那の機嫌とらるゝ事出家に似合はざるとも申し難し」

ちざりき 乳切木。棒狀の杖。ぼうちざり。ちざり。源氏烏帽子折「いさかひ過ぎての棒乳切木、後の廣言腹の皮」

ちざりのへだていた 契の隔板。密會の魂膽にいふ。一代男四「ちざりの隔板といふ事あり、是は小座敷の片隅に、ぬぐひ板敷合せ、女樂殿をす(下略)」

ちくえふ 竹葉。竹の葉。又、酒の異名。一代女「竹葉の一滴を玉なす金盃にうつし」

ち

ろの色に染めた、細かい手のこんだ模様。胸算用「千種の細染百色がはり染賃高く」

ちくすだれ 軸簾。くだすだれ(管簾)ともいふ。細い篠竹などの軸で造つた縦の簾。胸算用五「筆の軸を集め(中略)、我が手細工にして軸簾を拵へ、一つを一匁五分づつ、三つまで買ひ拂ひ」。

ちくら 對馬海中の沖の名。日本と韓國との潮ざかひにあたるので、いづれともつかぬことにかけていふ。博多小女郎上「頭は日本、胴は唐との襟ざかひ、ちくら手くらの一夜檢校」

ちくらがおき 前條を見よ。大職冠三「姿は唐人身は日本、是やちくらが沖津波」

ちぐるま 地車。重い物を運ぶ車。車體の低い輪の四つあるもの。男色大鑑「都は地車の響き、天秤の音さへ物のか

しましきに」

ちげにん 地下人。宮に仕へない者。土著の人。庶民。二十不孝三「神主にもあらず、地下人とも見えず」

ちごいしや 兒醫者。稚兒醫者。小兒科の醫者。ちごくすし(兒藥師)。丹波與作上「稚兒醫者は御興つき、大上藤小上崩、おさし抱き乳母御乳の人」

ちごがたき 兒が瀧。高野山不動坂を上り盡した處にある。昔、兒が投身したと傳へられる。外不動、岩不動などこの附近にある。萬年草下「今宵散り行く初櫻、兒が瀧とぞ涙ぐむ」

ちごく 持國。持國天王の略。四天王の一。東方の守護に任ずるもの。持國天。孕常盤三「多門持國に口取られ、佛土に参りおはしませ」

世す」

地獄の上の一足飛び (諺)危険なことの

譬。五人女三「たましひ消えて、地獄のうへの一足飛び、玉なる汗をかきて」。

新可笑記三「是れに乗るは地獄の上の一足飛び、命がけの働き」

地獄の釜こげ 罪の深い者を罵る語。

地獄の釜の蓋もあく (諺)盆の十六日と正月十六日とは、如何なる忙しい人も休息すべきをいふ。

地獄の地蔵 (諺)地獄で佛に同じ。油地獄上「お吉と見るより地獄の地蔵、やお吉さま下向か、わしや今斬らるゝ、助けて下され」

ちごくみみ 地獄耳。聞いたことをよく覚えること。強記。或は、言ふことを聴かぬ耳か。大矢敷「くどけ月一度は落ちよ地獄耳。同」地獄耳とてそんな事聞く、火付めが硫黄が鳥に取籠

ちござくら 稚兒櫻。山櫻の變種。花の形が小さく、まばらに開く。

ちごびたひ 稚兒額。ちごのやうな額つき。若衆の前髪を取つた額つき。一代男七「稚兒額にして金の平元結をかけて、其の時の風情天津乙女の妹などと

是を云ふべし」

ちごもんじゆ 兒文珠。ちごわかしゆ(稚兒若衆)たる文珠。男色の道に勿體をつけて、文珠に創まるといふ。萬年草上「お寺小姓の稚兒櫻、兒文珠の御相傳

大師の廣めおきたまひ、俗も尊む若衆の情」

ちごわかしゆ 稚兒若衆。「ちご」、又、「わかしゆ」に同じ。男色大鑑三「叡山の兒若衆、これこそ戀の根本」

ちざうなほし 地蔵直。圓顔におつくりをすることか。新小夜嵐物語上「此程は美形の女郎も稀なれば、無理やりに宜しからぬ天神の御作を、下手佛師の地藏直しに太夫にすれども、顔圓く色の白きばかり當世女にして、風俗腰付ゆがみなりに」

ちざけ 血酒。契を固める時に、血を盃に滴して飲むこと。博多小女郎上「長崎には物の堅めに血酒飲むとヤ」

ちさぶらひ 地侍。(ちさむらひ)。その土地の侍。地方の武士。男色大鑑「その日の當番は、下賀茂の地侍篠岡大吉九歳」

ちざん 地算。珠算でなく、もと算木を置いて計算したものを稱したかといふ。又、地上に算盤の珠を畫いてする

算用ともいふ。永代藏「行く水數かく砂手習ひ、地算も子守の片手に置き習ひ」。同五「小者は地算置きならひ、家の訓ふ事ばかりなり」

ちしご 知死期。もと陰陽家で、生年月を干支で繰り、又、陰陽と人間の脈搏との關係を考へ、死期を知ることと言つたが、誤つて、その死ぬ時期を意味することになつた。しにぎは。末期。

血死期。男色大鑑「早桶をあつらへ、今宵の知死期を待つ時、はかなき枕をわれとあげて」。薩摩歌中「暫しの知死期を松が枝の折るゝまでの命ぞや」

ちしごのみちゆき 血死期(知死期)の道行。死を目的とする道行。心中するために立立つこと。二枚繪草紙下「血死期の道行」

ちしぱり 藍染川三「背に切りたる腹なれば、次第にちしぱりかつばと伏し、遂にむなしくなりければ」。しぱりは「じまじり」の轉で、血の凝結減少することか(近松全集註)

ちしやう 血性。血の氣(け)。血のもちまへ。日本振袖始三「血性が脱けて、早い骨のこはばりやうぢや」

ちしりばたけ 地尻島。邸宅地などの端

の方にある畠。宅地の餘りの畑。櫻陰  
比事ニ「たとへ地尻畠にても」

ぢしんかみりの時。地震神鳴の間。地

震や雷鳴の時に逃げ入るための部屋の名。織留六「大名公家がたには地震神鳴の間とて番匠にたくませ、(中略)いなびかりの影移るより、奥様これに入らせ給へば」

ちすぢごより 千筋紙縷。「せんすぢごより」におなじ。俗つれん「木地のつづら笠に(中略)、千筋紙縷の紙紐を付けて、後なる下女に持たせ」

ちそろう 馳走。かけはしること。ふるまふこと。轉じて、世話をすること。面倒を見ること。念佛往生記ニ「都まで馳走して連れ上らん」

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ちそら 地空。大地。地面。二枚繪草紙

ち

ちちす 遅遅す。遅疑す。ためらふ。武

道傳來記五「三九郎も退かれぬ所、二言と遅々せず、是非なく詞をつがひ」

ちちつたんぼぼ 鼓をしらべる音色。擬

聲語。傾城酒肴童子四「樂屋にちちつたんぼぼの調へも伽羅に埋れて、鼓の音さへ蒸り来る」

ちちもり 乳守。「ちもり」を見よ。

ちぢやう 治定。さだまること。決定。

武道傳來記五「勘忍ならぬに治定して、親類も同心の後」。新可笑記ニ「拾ひ首に治定して」

ちぢり 松穂。まつかさ。まつふぐり。

近畿方言。

ちづか 千束。多くのたば。多くの文。

一代男ニ「いろく道ならぬ事を書きくどきて、千束送りけるに」

ちつくと ちよつと。いささか。ちつくり。今宮心中「雪駄をちつくと直し」

ちつくり ちよつと。ちつと。すこし。

丹波與作中「髪がちつくりちんだ」

ちつべい 小兒を罵つていふ。ちつぽけなもの。

ちとくわん ちつと。くわんじん(勸進)

を願ふの意。歌念佛下「裾に清十郎と寝たところ、ゑ、ちとくわん」

ちとせがは 千年川。香爐の名。一代男

五「醉覺ましに、千年川といふ香爐に、厚割の一木を燒きて聞かせけるに」

ちとせどり 千歳鳥。鶴の異名。二十不

孝「豊なる御代の例、松に音無く、千歳鳥は雲に遊びし、限りもなく打鬮き九萬八千軒」

ちとせやま 千年山。千歳山。松の生えてゐる山。松山。千年の縁をたたへる

山の義からいふ。大句數十「百姓に下刈をさす千年山」。大矢數「災も三年めには千年山、逆ばしら朽ち松は久しき」。胸算用五「町並の門松、これぞ千

歳山の山口、尙ほ常盤橋の朝日影」

ちどり 地鳥。その土地で捕獲した鳥。

胸算用三「地鳥の鴨・いりこ・串貝」

ちどりあし 千鳥足。馬の足なみの、

はらはらと千鳥の羽音のやうなこと。

百日曾我ニ「御馬に鞭うち給へ。心得たりと乗り出す。(中略)、とどろくと千鳥足、四足を折つて恐れしは、不思議なりける次第なり」。左右によるめいやくこと。

ちどりがけ 千鳥掛。絲をかがるに、千鳥のつらなり飛ぶやうに、斜にうち違へにすること。雪女五枚羽子板中「紅の

調べを、千鳥がけにかけさせ、合せ打つたるは、さつても打つた小鼓と。又、道筋などを斜にうち違へに進むさまにもいふ。

**ぢなし** 地無。布の全面に箔の模様があつて、明いた部分のない織物。萬文反古ニ「さいはひ菱の袷、地なしの綸子小袖」

**ぢなしこそて** 地無小袖。全面に箔の模様を置いて、地のないやうにした小袖。前條参照。

**ぢによはう** 地女房(ぢにようばう)。かたぎの女房。普通の人妻。遊女に對していふ。置土産ニ「地女房は一巾帯の腰を抜かしける」

**ぢねんぶつ** 地念佛。在家で催す念佛のことであらう。兩吟一日千句「耳たれもなほりてはきく地念佛、一座のつきあひ是から極樂」

**ぢのおや** 乳親。乳を飲ませる親。乳母。ちおや。

**ぢのこび** 千嬌。多くの愛嬌。男色大鑑ニ「千嬌ある御鏡ばせてやさしくも見かへし給へり」

**ぢのしゆ** 地の衆。官位のないもの。地下の人。ぢげにん。置土産ニ「地の衆の

文は皆までも讀み給はず、小宿にかいやりて捨て」

**ぢのみちもち** 血道持。血のみちの持病あること。

**ぢのものまね** 地の物眞似。地の文句を眞似ること。油地獄下「口たゞおくは耻らしく、役者物まね・地の物まね、小唄・淨瑠璃・口てんがう」

**ぢのり** 地乗。馬術の語。足並を揃へて歩ませること。ぢみち。

**ぢのりのえびら** 千箭の箎。古語「ちのりのゆぎ」に做つた語。日本振袖始「千箭の箎、櫛の弓、管高に振立て」

**ぢはなし** 地咄か。常の座談をいふか。男色大鑑八「太鼓は持てど、地はなしがならぬ」と立ちゆくに」

**ぢはむしろ** 茅葉筵かといふ。萬文反古ニ「岩の平かなる所に、ぢはむしろを敷て、石地の芋を鹽煮にして」

**ぢはや** 千早。禪。巫女の水る服。白布で、身二幅、袖一幅に作り、水草・蝶鳥などの模様を山藍で摺りつけ、袖を紙よりで括るやうにしたもの。一代男ニ「ナヅしめの鈴を鳴らして縣御子(中略)、千早懸帯を結び下げ」。二代男ニ「千早や掛帯解いて取らせば、羽織を取る」

**ぢぼん** 血判。けつばん。誓紙などの記名の下に、指など切つてその血を判としておすもの。蟬丸ニ「血判を染めて給はりし、誓紙も今はよしなし事」

**ぢびき** 地引。漁具。ひきあみの一種。磯邊へ引いて魚を捕るもの。ぢあみ。ぢびきあみ。又、それを引き寄せること。一代男五「境の浦の櫻鯛地引をさせて、生きたはたらきを見せんと」

**ぢぶぎやう** 地奉行。その土地の、市街・道路・屋舎等の事を掌るもの。大矢數ニ「五月雨に大溝筋の芥川、爰によせ來る地奉行の波」

**ぢぶく** 地腹。土地の質。作物を仕立てる土壌。轉じて、女としての體質。源氏冷泉節下「子の五人や十人は、地腹さへよければ、年々にも出來る事」。即ち子の出來る鳥の意。地腹。地輻。

**ぢぶみ** 血文。血で認めた文。起請文などにいふ。「一代男六「女郎・若衆固めの證文、大方は血文なり」。二代男ニ「血文は消えず今更に」

**ぢぶみ** 地踏。相撲の語。股を高くあげて地を踏むこと。しこを踏むこと。「しこ」の條参照。

**ぢぶるひ** 血振。産後の病。血の道で身

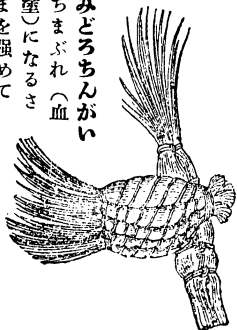
ぢべに 地紅。染物の地の紅色なもの。  
べにぢ。

ちべり 乳縁。蚊屋などの縁につけた乳首状のもの。つりて。二代男ニ「紋紗の蚊縁、乳縁緋緞子、四すみの唐總」

ちぼゆ 小さい聲で吠える。小聲で鳴く。奴詞。

ちまき 粽。端午の祝ひに造つて贈りものなどに用ひる菓子。わらちまき。あめちまきなどがある。後世は米の粉をこねて、菰笹などで包み、蒸して造る。

ちみどろちんがい



ちまき

ちまぶれ (血塗) になるさ  
まを強めて  
いふ。ちだらけ。

生玉心中「天窓の鉢、覺えたか覺えたかと、打碎かれて錦手の、目鼻血みどろちんがいに」

ちみやく 持脈。地脈。平生の脈。その

ち

人の持前の脈。俗つれ。五「不斷醫者持脈を取り、此の太夫御祈念の日待坊も毎日御見舞申上」。源氏冷泉節上「幼少から自らが地脈はそちが覺えたぞ」

ちもり 乳守。(地名)和泉國堺の南郊にある遊里。椀久「世物語上」堺の港まで椀久駕籠にも乗らず(中略)、歩行にてやう／＼南の端の橋わたる時、乳守女郎門立時分にて。二代男「堺のやさ男逢うたこそ一景、朝夕の新町よりはと、乳守に誘はれ」

ちやいれぶくろし 茶入袋師。茶を入れる袋を製造する人。

ちやう 茶字。ちやうじま(茶字縞)の略。雪女五枚羽子板上「女が帯の若紫、茶字の袴の信天摺」

ちやう 丁。(偶數。(半の對)。二で割れる整數。大句數上「咄し伽近うめされてちやうか半、同じくらゐの白石くろ石」。(丁度。まさに。檜權三上「私は成で丁六十」)

ちやう 町。色町。お町。一代女ニ「若い男の小意氣過きたる風俗、正しく町の髪結らしく思はれける」

ちやう 定。定まつたこと。確かなこと。必定。出世瀧徳上「それは定か有難い」

ちやうい 詠意。御詠の旨。上意。  
ちやういし 丁石。道程など標した石。何丁と丁數を記した石。椀久「世物語上」お山前と申しける(中略)、旅人の心やすめに建ておかれし丁石の書附「ちやういはひ」帳祝。正月四日に、商人が年中の物價を記す簿冊を綴ち改めてこれを祝ふこと。ちやうとぢ。大矢數ニ「手細工に一東五帖帳祝ひ、人の不足の闊魔王」

ちやういん 定印。佛語。印を結んで定(ちやう)に入ること。釋迦如來誕生會四「窟の内に入りかはり、定印正しく坐し給ひ」

ちやううち 町打。間數を定めて的を立て、銃の射撃を習ふこと。又その射撃を教へること。武道傳來記ニ「町打の鐵砲を申し立てに三百石くだし給はり」

ちやうおくり 町送。行旅病者などの難澁してゐるものを、町内の自身番などが世話をして、順次に隣の町へ送りやすること。大矢數「叩番まで天命を知る道を通する町送り」

ちやうかう 長康。支那の畫家、顧長康。傾城反魂香下「長康、張僧、陸探の三人を、異朝の三祖と學びきて、和國に筆

を、異朝の三祖と學びきて、和國に筆

ちやうかはん 長か半。「丁か半」が正しい。ちやう(丁)を見よ。國性爺四「海士の子供の打群れを、弾き石なご又長か半、三つ四つ五つ數へては」

ちやうきちぶね 長吉船。ちよきぶね(猪牙船)に同じ。江戸山谷通ひの船。もと長吉といふ者が造り出した故の名と傳へられる。「ちよき」の條參照。

ちやうきれかね 帳切銀。帳面・證書に記入しない銀か。即ち、勘定に入れない銀か。織留ニ「近年分限なる者ども我が名代にして家を求めても、借家の出入をむづかしく、たとへば百貫目にも其高に應じて帳切銀さへ才覺すれば、何程にても銀子取替へ家主となし、年寄五人組の連判にて賣券狀の上、利銀は家賃分にしして是たかしかなる借物(かしもの)なり」

ちやうぎん 丁銀。挺銀。長楕圓形(海鼠のやうな形)で、常是の字、寶の字大黒の像など極印にした銀貨、一枚四十匁内外とする。慶長丁銀・元祿丁銀・寶字丁銀など種類が多い。胸算用ニ「正眞の丁銀にしてから誠に致さぬ」。重井筒上「丁銀四百日包の通り、吟味なき

れ」

ちやうごふやくのうてん 定業亦能轉。前世から定つてゐる業報をもよく轉じて、苦果を免れしめようとする菩薩の願。若其機感厚、定業亦能轉(法華文句)。男色大鑑六「定業亦能轉の經力も此の戀力には叶はず」

ちやうさい 定齋。夏季の諸病に効があるといふ藥。豊臣氏の頃、大阪の藥種屋定齋が、明人沈性敬の藥法を傳へて製したものであるといふ。定齋藥。ちよさい。ぜさい。兩吟一日千句「山田の僧都定齋の上、後家やまめそろゝ勸入らるゝ」

ちやうじ 丁子。丁香。香料又は藥用にする植物。馬來群島の原産。幹の高さ二丈餘、葉は對生、長楕圓形、鋭尖頭で全縁。淡紅色の花を叢生し芳香を放つ。榮花咄ニ「丁子は葉茶の煮殻の如く捨てありき」

ちやうしち 長七。太鼓持の名。一代男六「柳の馬場の長七、提燈草盆に大團扇を持ちませ、人尋ぬる風情」

ちやうじのあぶら 丁子油。丁子の花の蕾から製した香油。ちやうじゆ。ちやうじ。一代男八「丁子の油を二百粒、山

椒藥を四百袋」

ちやうしばる 定芝居。常に興行してゐる芝居。定小屋で打つ芝居。兩吟一日千句「定芝居稍涼し茂りあひて、また月は出ぬ西の二軒目」

ちやうじま 茶字島。茶字縞。印度のチャウル(Cheer)の原産で、波斯を経て、和蘭船によつて日本へ來た絹織物。琥珀織に似て軽く薄い。袴地などにする。一代男「茶字島の切れにて、御物師が縫うてくれし前巾着」

ちやうじや 長者。いろいろの意があるが、富豪としては、當時は下のやうに用ひられた。永代藏ニ「銀五百貫目よりしてこれを分限といへり。千貫目のうへを長者とは云ふなり」

ちやうじやきやう 長者經。富豪になる秘訣を經文に擬して記したものの。博多小女郎上「長者經」

ちやうじやぐわん 長者丸。長者(金持)になれるといふ藥。永代藏ニ「長者丸といへる妙藥の方組傳へ申すべし」朝起五兩〇家職二十兩〇夜詰八兩〇始末十兩〇達者七兩、此五十兩を細かにして、胸算用秤目の違ひなきやうに手合せ念を入れ、これを朝夕吞むからは、長者

にならざるといふことなし」

長者に二代なし (諺) 置土産「長者に二代なし、女郎賢に三代なしと京の利發者が名言なり」

ちやうしゆ 町衆。町内の人達。町の役人等。戀八卦柱脛上「下立賣の居屋敷を町衆の加判で、一昨年三十貫目の家賃に入れたげな」

ちやうしゆん 長春。長春花。かうしんばら(月季花)の異名。高さ四五尺、葉は羽狀複葉で光澤があり、莖・葉ともに刺をもつ。四季絶えず枝端に開花し、一重もあり八重もあり、色も紅・白さまざままで美しい。ぼたんいばら。いさこひばら。しざきいばら。日本振袖始キ

「芙蓉・林檎、長春・半夏草」

ちやうすけ 長助。寺男の擬名。曾我會稽山五「ねつたい坊主鉢坊主、是がお寺の長助」

ちやうすなり 茶臼形。茶臼のやうな形。寛いで坐するさまなどにいふ。今宮心中中「茶臼形になるを見て」

ちやうすやま 茶白山。大阪天王寺西門の西南にある小山。大阪陣に徳川氏の勝を制した地で俗に御勝山といふ。形が茶臼に似てゐるので呼ぶ。

ちやうせつ 定説。きまつて動かぬ説。轉じて、疑ひないことにいふ。萬年草

下「夜明けなば、生死の定説隠れあるまじ」

ちやうそろう 張僧。支那の畫家。張僧繇のこと。ちやうかう(長庚)の條参照。

ちやうだい 帳臺。古く、貴人の寢間又は御座所をいひ、特別に造られた所であつたが、下文は、町家の主人の居間の意に用ひた例である。重井筒上「男は寢取られ、寢間・帳臺は見探され、阿呆の數々讀盡され」

ちやうだい 町代。名主の次に位する町の役人。女腹切下「組中・年寄・月行事・町代・夜番が捧ちぎり木」

挑灯ほどな火が降る (諺) 貧窮の甚しいさまに譬へる。一代男三「内證は挑灯ほどな火が降つて、大晦日の空怖しく」

永代藏二「且那の身袋も挑灯程な火がふらうと、思ひもよらぬあだ口」

ちやうど 丁と。物の打ちあふさま。又、その機をはづさず、巧みに立ちまはり振舞ふさま。女腹切中「親仁は横手ちやうど打つて」。百日曾我一「猪は一期の死に狂ひ、(中略)くるりと廻はつてちやうど駈け、くるりくはた〜」

ちやうとくじ 長徳寺。廓詞で金一步の稱。駿河國府中の片山にあつた長徳寺

の座敷の借賃が、日に金一步の定めであつたのに基くといふ。男色大鑑上「鼻紙入より長徳寺四つ五つ蒔散して、先程よりのなぶり賃に、是れ紅のぼつとたまはりける」。置土産五「先づ女郎へ

長徳寺二百、宿の驛に金子十兩」

ちやうどころ 町所。町年寄の詰めてゐる所。町の事務所。會所。出世瀧徳上「二門衆、町所まで頼んで、土藏々々に封をつけ」

ちやうとち 帳繰。商家で帳面を繰ちて上書して祝ふこと。ちやういはひ(帳祝)ともいふ、その條を見よ。胸算用五「今年は今までの嘉例を祝ひかへるとて、十日の帳繰を二日に取り越し」

ちやうなみ 町並。町ごと。各町。又、町内の家家。曾根崎心中「今日町次の判形觸れて参りしゆゑ」とは、家毎に印を檢する旨のお觸れをいふ。

ちやうにんかがみ 町人鑑。町人の模範。織留二「江戸は天下の町人、北村・奈良屋・樽屋をはじめ、諸國の惣年寄、金座・銀座・朱座(中略)、これ皆町人の中の町人鑑といへり」

ちやうにんごしらへ 町人拵。町人の風

をする事。町人の姿に仕立てる事。

町人の面道具 面道具は表向の必需品、

即ち儀式ばつた場合などの調度や衣類

織、麻の上下中脇指一腰は、町人の面

道具なれば

ちやうはん 丁半。(一)丁と半と。偶數と

奇數と。(二)博奕の一種。采の目の丁か

半かをあてて勝負をきめるもの。大句

數上「天にあらば地にはあないち面白

や、雲のたもとにちやうはんの錢」

ちやうはんづきん 長範頭巾。日の當る

ところだけ残して、他は全く覆はれる

やうに作つた鍔付の頭巾。熊坂頭巾。

山法師などの被るもの。女腹切巾「若し

やと目をも花色の、長範頭巾しよんぼ

りと、番屋のかげに佇みしは、體にさ

うぢや」

ちやうひやく 長百。丁百。錢九十六文

を百文とすること(九六錢)に對して、

百文を百文とすること。丁錢。長錢。

調錢。丁陌。萬文反古「錢讀ますれば

り、若死あそばして大ぶん損かな」

ちやうぶんせい 張文成。遊仙窟の著者。

唐の則天武后の頭の人。傾城酒吞童子

上「千度見れば千々の想きびし、一度見

るに一つの面白し事深しとは、張文成

が仙女に契りし詞」

ちやうめいぐわん 長命丸。精力増進劑、

春藥の一種。置土産「此美君を詠め參

らせ、長命丸といふ藥なり。仙家の不

老不死の妙藥取りにやる迄もなし」

ちやうめん 定免。(一)或年限を定めて田

租の幾分を免ずること。(二)五年又は十

年の毛見(けみ)の田租額の平均率を定

め、年の豊凶に拘らず、その率によつ

て或年限の間田租を徴すること。

ちやうやく 町役。町内のつきあひ。町

民共同で勤める事。織留五「町役の野

おくりには出ぬ事なり難し」

ちやうらかす からかふ。なぶる。戀八

卦柱脛上「姫君のやうに、猫ちやうらか

してござつても濟まぬ事」

ちやかす ごまかす。瞞着する。緋縮緬

ちやきんさばき 茶巾搦。茶巾の扱ひ方。

茶の湯の詞。檜權三上「小さい時から茶

杓の持ち様、茶巾さばきも習うておき

や」

ちやくたうすずり 著到硯。著到をつけ

る時用ひる硯。受付用の硯。日本振袖

始「一紙の巻物、著到硯」

ちやくちやく 嫡嫡。嫡流の義から轉じ

て、凡そ、その仲間で勝れて立派なも

の稱。ちやきちやく。薩摩歌下「一錢

持たねど侍のちやく、十萬貫日持

ちやつても琉球屋の新兵衛」

ちやくちやくと ちやくと。ちよつと。

手ばやに。手がるに。ちと。源氏烏帽子

折四「ちよつと咄さん、聞けといふ

(中略)、さあちやくちやくと咄さば咄

せと、不祥がほにて聞きあたる」

ちやくと ちよつと。少し。又、すぐさ

ま。ただちに。「代女「帥と思ふとち

やくと言葉に色をつけて。百日曾我「

「忠常ちやくと思案を出し」

ちやく 茶こく。茶こく。お茶を引く。生玉心



ち



ちやうせんらり

まふ事。伊勢國の方言。  
**ちやこもん** 茶小紋。茶色の小紋。  
**ちやさかもり** 茶酒盛。酒の代りに茶を汲みかかすこと。男色大鑑三「石すゑて土甕をかけ、茶酒盛をはじめ」  
**ちやし** 茶師。茶を製し、又、賣る人。  
 一代男「宇治の茶師の手代めきて、かかる日は違はじ」  
**ちやしやく** 茶杓。抹茶をすくひ取る小さいさじ。ちやさじ。又、煎じ茶の汁を汲む小さい柄杓。茶びしやく。二代男「銀の器物取出だし、茶杓が無いといふ(中略)、軒の吳竹を所望して、茶杓といふものに切るといふ」  
**ちやせん** 茶筌。(1)抹茶をかきまはして、泡を立てるに用ひるもの。三寸ばかりの竹筒の半分以上を細かくさいて、其の末端を内側に曲げたもの。茶箋。(2)ちやせんがみ(茶筌髪)の略。武道傳來記八「立てかけの髪茶筌になりぬ」  
**ちやせんうり** 茶筌賣。茶筌を賣り歩く

者。懷硯二「茶筌賣は衣かたしきてうたゝね」  
**ちやせんがみ** 茶筌髪。(1)男の髪を結び方。髻(もとどり)を元結又は紐などで巻いて後方に下げ、その先を茶筌のやうにほほけさせたもの。二代男二「茶筌髪の男、澤を震はして」。榮花咄五「月代剃つて茶筌髪(中略)、少し目立つ大臣に誘はれて」。(2)未亡人などの髪を結ひ方。鬢・髻(たぼ)を取つた髪の尖を、茶筌のやうに切り下げたもの  
 二代男六「一文字屋の喜右衛門抱への夕霧は、(中略)、黒髪切り捨て身は坊主衣を着て、(中略)今茶筌髪殊に面白く、手を盡して逢へども」  
**ちやぞめし** 茶染師。布を茶色に染めることを業とする人。  
**ちやたう** 茶湯。茶を煎じた湯。卯月潤色中「釜を焚付けて、お茶湯一服供へませう」。特に佛に進ぜる煎茶の稱。  
**ちやたうてんもく** 茶湯天目。佛に進ぜる茶湯を汲み入れる天目。五人女四「鏡鉢鉦を手水だらひにし、お茶湯天目も假のめし椀となり」



みがんせやち

**ちやたうばうず** 茶道坊主。貴人の家で茶事を掌り、又、雑事を勤めるもの。  
 ちやばうず。  
**ちやだし** 茶出。急須(きふす)のこと。  
 博多小女郎上「茶出しに唐茶つまみ込む」  
**ちやちやうま** じやじやうま。驛馬。  
**ちやちやくる** だいなしにする。さんざんにする。むちやくちやにする。堀川波鼓下「あら髪剃の刃は劍、天窓うちを切りちやくくつた」。又、ごまかす。ちちくる。  
**ちやちやむちやこ** むちやくちやなこ。無分別。やたらむしやう。亂暴。  
 無茶。「ちやちやむちやく」とも、「ちやちやほうちや」ともいふ。兩吟「日千句」通ひ馴れて夜の契は茶々むちやこ、よこ町くるひにうつる唐窟」  
**ちやつ** 椀子。(椀子の宋音であらうといふ)。大きくて淺い、底が縁尻(いといじり)になつてゐる木の皿。菓子など盛るに用ひる。銘銘盆。五人女二「椀家具壺平・るす・ちやつ迄とりさばき、手毎にふきて膳棚にかさねける」。ちやつう。  
**ちやつと** ちよつと。少し。源氏冷泉節

下「法眼様春市殿、ちやつと〜と呼ばはれば」。又、速に。すぐ。手みじかに。生玉中上「申しおる様、ちやつとお歸りなされませ、(中略)様子ばかりちやつと言へ」

茶壺を抱いたやう 懐胎した形容。五十年忌歌念佛「お夏様のおなかは、茶壺を抱いたやうになる」。諺に「壁に茶壺を寄せたやう」といふ。

ちやのこ 茶の子。(一)茶菓子。(二)法事などの供物。くばり物。薩摩歌中「あんまりな惣づら、(中略)、今日はおまん様本の母御の十三年忌、茶の子一つ配る事か」。(三)手輕な馳走。轉じて事の容易いさまにいふ。おちやのこ。傾城反魂香中「是れほどの喧嘩は、お茶の子お茶の子、茶の子ぞや」

ちやのまをんな 茶間女。下女。めしつかひ。「おちやのま」参照。一代女「自らも寄る年に随ひ身を持たせて、茶の間女となり、一年切に勤めける」

ちやのゆしや 茶湯者。茶の湯の道に達してをり、又、料理なども心得てゐるもの。ちやのゆもの。

ちやひきぐさ 茶引草。ちやひき(雀麥)からすむぎ。すずめむぎ。各地の原野

に自生する禾本科一年生草本。女郎の「お茶を引く」といふことにかけて用ひる。二代男三「それは皆様への差合ひ、茶引草と申す」

ちやひきにんぎやう 茶引人形。大矢數一「慈悲にたつる茶引人形巡來て、五月五日の中空の雲」

ちやひきばう 茶引坊。茶を挽く坊主。徒然で隙がちな坊主。大矢數三「茶引坊其松原を詠めやる、木曾殿の御内に隙有かある」

ちやびん 茶瓶。(一)茶を煎じる釜。(二)くわん(藥罐)のこと。京阪方言。(三)藥罐代用の陶磁器。土瓶。

ちやびんあたま 茶瓶頭。茶瓶天窓。茶瓶のやうな頭。はげあたま。きんかあたま。女腹切申「茶びん天窓を振りたて、河原を西へと歸りける」

ちやぶね 茶船。(一)運送用の川船の一種。檣權三下「傍に茶船を漕ぎつれて、饅頭・蕎麥きり、きり〜と押廻し、豆腐奈良茶を賣るも」。(二)川遊に用ひる二階なしの船。遊山船の一種。大矢數三「茶舟中間の浪の行末、磯馴松しなだれ懸つて伽やらう」

ちやべんたう 茶辨當。外出の時に、茶道具一式に辨當を添へて携へる具。孕當盤二「ゆゝしき女乗物に、茶辨當かたげしは」

ちやもうる 茶色のモール(葡萄牙語モールの)。モールは緞子に似た浮織。莫队爾。二代男五「目だたぬ茶もうるの帶して」

ちやや 茶屋。茶屋小屋の略。又、京阪では特に遊女(下級なもの)を揚げて遊ぶ家をいふ。重井筒上「茶屋へ往きやるが、山衆を買やるが、且那は且那」

ちややくる ちやちやくるに同じ。

ちややくるひ 茶屋狂。茶屋あそびに耽ること。大矢數二「逢阪の關を過れば茶屋狂ひ」

ちややくや 茶屋小屋。客に酒色の遊興をなきしめる家。引手茶屋。青樓。ちややざけ 茶屋酒。茶屋で飲む酒。色座敷の酒。

ちややぞめ 茶屋染。當世風の染模様であらうといふ。又、歌繪の模様である茶屋の茶釜も夜一時 天網島下「茶屋の茶釜も夜一時、休むは八つと七つとの間にちらつく短檠の光も細く更くる夜

ちややもの 茶屋者。茶屋に奉公する女で、酒色の遊興の相手となるもの。下品な遊女の意に用ひる。一代女五「身をそれになして、都の茶屋者とはなりぬ」。生玉心中上「茶屋者と縁きつて、おききと女夫になるまで門詰も踏まされぬ」

ちややをんな 茶屋女。前條に同じ。  
ちやるなん 茶宇稿の原産地、印度のChaulに、なん(南)を附して戯はれたものか。國性爺三「ちやるなん四郎ぼるなん五郎」

ちやるめら 哨哨。葡萄牙語 Charamela の訛。喇叭に似て、木製の管に二つの孔があり、頭と尾とは銅又は眞鍮製。唐人笛。簫。二代男八「喇叭・ちやるめら、萬の物の音までも豊かに」。ちやるめら。

茶を挽く 茶を挽くは隙人の仕事であるので、轉じて、遊女などの相客なきことにか。お茶をひく。雪女五枚羽子板上「かず數の子も御盛んや、何時大服の茶は挽かず」

ちやん 金錢の異稱。ちやんから。ちやんころ。永代藏五「七つの鐘の鳴る時

かないかなちやんが一文なくて」  
ちやんぎり 鉦の音。特に山車の唯の鉦の音などにいふ。しやぎり。しやんぎり。堀川波鼓下「世上にばつと唯し立、言渡したる山鋒の、ちやんぎりしつきり切つたりや」

ちやんぬり 瀝青塗。瀝青を塗つたもの。瀝青はタールを蒸溜して得た粘汁である。木材などの防腐劑とするが、下例のやうに土器に塗るのは別か。永代藏六「ちやんぬりの油がはらけ」。胸算用六「ちやん塗の土器仕出して世に賣れども」

ちゆう (中と熟する語は、すべて「ちう」の諸條を見よ)。  
ちゆう (重と熟する語は「ちう」の部を見よ)

ちよがさね 千代襲。「千代襲の白無垢」  
ちよがらかす 「ちやうらかす」におなじ。なぶる。「嘲弄」の音と縁あるか。又、物の先を削ることであるといふ。然らば、「尖らかす」の轉か。油地獄上「大事の金錢を湯水の様川遊び、ちよがらかされや来申ささい」

ちよき 猪牙。ちよきぶね。八水隨筆「さんや舟をチヨキといふこと、其のかみ

二挺立のはやりし頃、専らに乗りし船頭を長吉といひしが、二挺立禁止の後も、是が船は格別早かりし故、人々長吉をもてはやし、後は名目になりて、長の字をつめてチヨ、吉の字を略してキ、合せてチヨキと呼びしとなり。ちやうきちぶね。

ちよきぶね 猪牙船。前條を見よ。

ちよきりこきり 小さくして愛らしいさまにいふ。今宮心中下「ちよきりこきり小女房、花の様なる和子を設けて」

ちよけん 女見。女術。即ち「ぜげん」であらう。榮花咄三「江戸より女見といふ者來りて我を見立て、是非遊女にと勧めしが」

ちよこさい 猪口才。小なまいき。小オのあるものを卑めていふ。  
ちよこちよこ 物をこきざみにするさま。釋迦如來誕生會三「ヤイちよこく切つてはやかましい、此身を秤にかけ見て、いる程取つてあとを返しや」  
ちよつこり ちよいと。ちよつと。僅か



きよち

ち

の間。壽門松中「ちよつこりと歩で合ひ致そ」

ちよつばくさ ちよぼくさ。ささやきかはすきまなどにいふ。

ちよつる 少し切りはつる。國性爺後日合戦ニ「波舊苔の髭をこそげる、頭ちよつる、中切・中刈・所まだらに刈ちらし」

千代の古道 京都郊外の名所。葛野郡の内、嵐山の附近。二代男「嵯峨野の名所盡、其處が嵐山、是れが廣澤の月、大井川には花筏、千代の古道（ふるみち）には御所車」

ちよびかはす まめくしく働く。かひがひしげに見せかける。背庚申中「エ、憎い女子共、我が見る前ではちよびかはして、一寸立てば早何處へ」

ちよぼいち 樗蒲一。博奕の一種。一つの采を振り、豫定の目が出れば賭金の四倍、又四倍半、若しくは五倍を取り、豫定と違へば賭金の全部を胴元に没收されるのである。ちよぼ。

ちよぼくさ ささやき語るさまなどにいふ。ちよつばくさ。

ちよぼくち すばんだ口つき。圓く細めた口つき。

ちよらうづか 女郎柄。女郎と遊ぶ手腕

技倆をいふか。大矢數三「女郎柄盡は人目の關越えて、自然心中の刀あづかる」

ちより 女里。色里。遊里。櫻陰比事ユ「この大臣は女里の御色好みと聞き傳へしに」

ちよろく すぐに、すつかり、などの意か。一代女「九月の節句といふても間もない事じやが、定めてお約束が御座らうと、女郎の好く問樂を申せど、そんな事などちよろく見え透き、九月も正月もさる方様の御厄介になりますと取りあへぬ返事に」

ちよろけん 著羅絹。楮羅絹。印度の Chant 絹の義であらうといふ。然らば「茶字絹」と同種類のものか。甲斐絹に似て木目のある絹布。もと和蘭又は支那廣東邊から舶來したものと云ふ。一代男七「一日二日過ぎて、ちよろけん」巻有合ひて送るの由、其中に「一歩五十、此事は何とも書かずに」

ちよろしゆ 女郎衆（ちよらうしゆ）。女郎たち。娼妓に限らず、常の女達の意にもいふ。織留五「風のよい女郎衆を置いて見せ給へ」

ちよろまかす 榮花咄ウ「ちよろまかすと言ふはやり言葉もこれをかし。西南

二つの色所より、役者末社の言ひ出して、一座の興に成るぞかし。罪にならざる當座の偽をまぎらかすと云へる替詞と聞えたり」とは、第一の義。又、ごまかす。目をくらまして取る。置土産「さもしき心にて紙一枚ちよろまかすといふ事なし」

ちよろり 手ばやく、人目をかすめて事をするさま。大下馬ウ「ちよろりの新吉といふ男（中略）、手ばしかく切り立て」

ちらい 地雷。地上に響く雷聲。永代藏「大道轟きて地雷のごとし」

ちらかす こぼむ。追ひちらかす。榮花咄ウ「其の宿も差合ひ此の揚屋もいやとて（中略）、三十九軒の揚屋にたれちらかさぬは一軒となし」

ちらし 散し。散茶（さんちゃ）。又、香煎（かうせん）のこと。二代男ウ「ざつと揚場にちらしなど飲み、浴衣疊む間見合せけるに」。一代女五「煙草片手にちらしを汲みて、一入水ぎは立てもてなす風情」

ちらしがた 散形。ちらし亂した模様。ちらしもやう。

ちらしだいこ 散太鼓。芝居などの終りに打つ太鼓。客を散らし歸す時の太鼓。

二枚繪草紙上「今を春べの顔見世に、(中略)はや今日のお暇と、散らし太鼓の下とどろき」

ちらしふくき 散袱紗。祭禮及び踊の傘に釣るすふくき。遊女源氏全盛競「日傘には家々の紋をつけ、(中略)ちらしふくきは墨繪の源氏」(柳亭記)。

ちりからからり 鈴の音に擬した語。出世景清「ちりからからりの鈴鹿山」

ちりけ 身柱。天柱。灸點の名。項(うなじ)の下で、兩肩の中央にあたる處。大矢數四「五人の子あとや枕に近う寄れ、引捕へては天柱すゑのき」。一代男「過ぎし年二月の二日に天柱すゑさせ給ふ」。又、小兒の病の名。

ちりけもと 身柱元。前條に同じ。又、ちりけの下部。ちりけのあたり。大矢數三「ちりけもと今此の娑婆に腫れあがり、ぶたれた拍子に蘇りする」。武道傳來記五「手に汗を握り、身柱もとより何ものやら抓みたてる」

ちりめんこあゆ 榮花咄四「左庖丁が冲膾、ちりめん小貼の煎物」

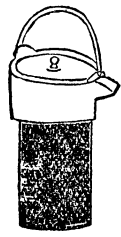
ちりめんづきん 縮緬頭巾。縮緬で作つた頭巾。戀八卦柱簷上「頭を撫げれば縮緬頭巾」

ち ち

ちろちろめ ちら〜する眼。はつきり見定めることの出来ないさまにいふ。

生玉心中上「さがのお山と取違へ、愛宕山へ上るとした。御免々々のちろ〜目、あたりを見廻し」

ちろつく ちらつく。ちろ〜する。眞鍮製で筒形、つぎ口がある。大阪方言で「たんぼ」といふ。銚子。油地獄下「立つて戸棚へ徳利から、銚子(ちろり)へうつけば、アこりや〜、爛せいででも大事ない」



ちわう 地黄。さほひめ。支那から渡來した薬用植物。莖の高さ六七寸。葉は長楕圓形で鋸齒がある。黄白色に紫色を帯びた唇形花を開く。薩摩歌上「地黄に大根しらがまで」

ちわうぐわん 地黄丸。地黄の根を原料とした丸薬。精力増進劑。一代男八「地黄丸五十壺、女喜丹貳十箱」。虎溪橋「山寺の教やぶりて玉子酒、衣をかけて何地黄丸」

ちわうせん 地黄煎。地黄の根を入れて製した飴。又、それに擬した飴。二十不孝四「摺粉地黄煎を與へ、膝の上に抱きあげ」

ちわごと 痴話言。男女間の情話。いろばなし。痴話。

ちわす 千話す。痴話をかはす。色話をす。兩吟一日千句「花の春穂は千話して冬火燵」

ちわぶみ 千話文。痴話文。戀する男女のかはす文。いろぶみ。艶書。物種集上「うしろ手を取る戀の中宿、千話文も兄弟子あつておとゝ弟子」。傾城酒吞童子「上々とても痴話文は別にかはらず」

ちゑしや 智慧者。智慧の多くある者。思慮に富む者。利口もの。

ちゑたて 智慧立。智慧を自慢にすること。利口ぶること。

ちゑつけ 智慧附。智慧をつけること。修行させること。一代男二「ぬれ草鞋に物すごき岩角を、智慧つけなればとて、踏みならはして」

ちゑのはこ 智慧の箱。織留五「丹後國切戸の文珠堂に金童子といへる脇立あり(中略)、この童子智慧の箱といふ物を

ち ち

抱きて立たせ給ふ」

**ちゑのわ** 智慧の輪。(一)小兒の玩具の名。

(二)紋所の名。船田氏の家紋。下例は高槻氏の家紋と見える。油地獄上「そろひ羽織の濃柿に智慧の輪の大紋、手振りの先供はいく」

**ちゑもんじゆ** 智慧文珠。文珠は智慧第一の菩薩であるのでいふ。

**ちをんな** 地女。その土地の女。又、遊女に對して普通の女をいふ。しろうとの女。胸算用二「傾城と地女と別に變つた事もなければ、第一氣が鈍で、物がくどうて」

**ちん** 沈。沈香の略。傾城酒吞童子四「沈の脇息煙草盆」

**ちんおし** 陣押。進軍。行軍。

**ちんがい** 「ちみどろちんがい」などいふ。ちんがいは、口拍子・箒拍子に添へた辭。

**ちんかう** 沈香。香木。伽羅・眞南伽・眞南蠻・佐尊羅・羅國・寸門陀羅の六種の質がある。ちん。一代男三「是れなん香具賣と申す、心移りて呼び返し、沈香などの入るの由申して」。又、瑞香科の植物、俗に沈丁花といふ常緑喬木。東印度の原産。かをりぎ。きやら。

**ちんからり** 涼爐。こんろ(焜爐)のこと。即ち内を空にし、中段に火を盛る網狀の架を設け、下部に口をつけて風通しをよくした爐。座敷で物を煮るに便したももの。土製が多いが、鐵製もある。一代男四「ちんからりに羽釜一つの樂み、明日の薪には風を待ちて落葉を掻き集め」。五人女五「賤の屋にありしちんからりとやいへる物一つに、青き松葉を燒き捨て」。置土産一「ちんからりに釜かけて」

**ちんからり** 物が全く無いさま。無一物。からつぼ。椀久一世物語下「化物屋敷ちんからり、傾城買のなりの果」。天網島中「又引出してもちんからり。有りたけこたけ引出しても、繼ぎれ一尺あらばこそ」

**ちんこ** 塵籠。だこ(唾壺)。唾を吐き入れる壺。又、塵芥など入れ、今の屑籠のやうにも用ひた。塵壺。一代女五「手に塵籠もあるに、栢のから、煙草盆に捨て」。二十不孝「大溝の掃除、熊手竹箒、塵籠まで持ち來り」

**ちんじま** 質縞。質を取つて縞物を織ること。二代男二「質縞織りても世は渡るべきに」

**ちんず** 陳ず。いひわけする。釋明する。主張する。武道傳來記六「死ぬる事は好かぬによつて、爰は陳じてやるにはしかず」。又、詐つて言ふ。百日曾我「まっすぐに白狀すべし、ちんじなばがうもんせん」。大職冠四「いかやうに珍んじても鎌足がゆかりに紛れなし」

**ちんそ** 質苧。質を取つて麻をう(替)むこと。丹波與作中「まच्चつとの所は質苧もよつほど續みためた」

**ちんた** 葡萄酒から舶來した葡萄酒。葡語 Vinho-tinto 略。tinto は赤色の義。大職冠二「ちんぶんかんするちんたの酒盛」

**ちんたいまつ** 陣松明。陣營でもとす松明。曾我會稽山四「下部の青合羽、陣松明に道照らさせ」

**ちんてう** 鳩鳥。文那にゐるといふ毒鳥。嘴は紫黑色で頸が長い。其の羽を浸した酒を飲めば死ぬといふ。鳩。大職冠四「鳩鳥海に隠れて鯨を害すといへり」

**ちんの煙** 沈香の煙。「ちんかう」の條參照。油地獄五「あたご山にヨエ、ちんの煙が三筋立つ」

**ちんば新介** 幫間(たいこもち)の名。二代男三「幫間は善右衛門ちんば新介な

ど勇をなし」  
ちんぷらり 物の無いこと。「ちんからり」などの類語。日本振袖始三「譲りし上田(中略)、皆人手に渡し、身代ちんぷらりと聞くより内へも寄せつけず」

ちんぶんかん 譯のわからぬ人。又、譯のわからぬもの言ひ。雪女五枚羽子板申「ヤア誰なればちんぶんかん」。珍莢漢。

ちんまり 小さくまとまつてあるさま。つづまやか。小ちんまり。五人女二「三條の西づめにちんまりとした座敷をか

りて、おかゝ殿は六條まゐりをさせまじよと」



づ 圖。五。かたち。なり(形)。轉じて、ためし(例)。天網島上「茶屋へ来て産所の夜伽する事は、ついにないづとぶつつけば」

つい(接頭語)。動詞に添へて、意味を強め、又は、ちよつと、無造作に、突然などの心持を示す。「一代男」小紙に「つい書きて」。「一代女」「つい見せける

に。「つい結び」。

ついち 築地。堂上方。公卿。もと築地塀は堂上方の邸にのみ用ひられたのでいふ。菅原傳授手習鑑三「松玉梅王櫻丸、懼り有りや冥加なや、烏帽子子に成下され、御恩は上なき築地の勤め」

ついちぢよらる 築地女郎。前條の「築地」に勤めてゐる侍女。即ち貴人の家へ、かたりらしいこと云うて来た」

ついまつとり 對松取。うたがるた(歌骨牌)、又は、うたがひ(歌貝)を取ること。二代男八「慰み替へて對松取り、是に勝負の定め」。娥歌加留多「いざついまつの歌がらた、いかがあらんと宣へば」

つうくつ 通屈。詰開(つめひらき)。談判。交渉して處置すること。出世瀧徳上「殘金二百兩八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衛とつうくつ致し」。傾城酒呑童子三「今宵の中に俵屋と通屈して、せ

んよを明日から呼取り」

つうじ 通事。通辭。通主。言語の自由ならぬ者に代つて、その意志を相手に通ぜしめること。又、その人。通譯。傾城反魂香上「夫はなまなか目禮ばかり、女房傍から通主(つうじ)して」。男色大鑑八「お手が鳴らば猫までに通事させよといひ駈入にする事」

つうじことば 通事言葉。通事に用ひる語。通譯語。大職冠「唐人の行列、通じ詞の次第」

つうづ 通塗。普通。なみ。凡庸。特にかはつたことのない物事にいふ。雪女五枚羽子板中「女と思ひ怪我するな。並みや通塗の女でない」

つうてん 通天。(一)紅葉の一種。(二)通天橋の略。京都東福寺境内の谷に架した橋。附近は通天の紅葉に名高い。二代男三「東福寺の開山忌に詣でて通天の紅葉見るに」

づがいはち 頭鉢。づはち。頭のはち。づがい(頭蓋)。  
づろす 通路す。通ふ。往來する。重井筒上「向後房と通路せぬ」。曾我會稽山三「久しく通路もせず、漸うこの頃來かゝつて」

つうゑんぢやや 通圓茶屋。茶人通圓の

茶を賣つてゐた店。宇治橋東詰にあつたといふ。榮花咄ニ「長橋越えて東詰通圓茶屋の前に編笠深くかぶりて」。俗つれん、三「虹は映りて掛橋の詰なる通圓茶屋に、しばらく川音を聴きしに」

つかいと 柄絲。刀の柄に巻く絲。一種の組絲。

つかうど つけ〜と言動するさま。つつけんどん。無遠慮。意地わるく。博多小女郎上「内には乞食と尖り聲。餘り物は遣つてしまつた。通りや〜とつかうどなり」

つかざめ 柄鮫。刀の柄に用ひた鮫の皮。又、その柄。雪女五枚羽子板上「生きる死ぬるの切羽ぞと、心も後れ手も顛ひ、持つたる太刀の柄鮫や、鰐に追はるゝ心地して」

つかつか 無遠慮に言動するさま。無造作に。戀八卦柱曆下「首桶提げ、つかつかと出で」。油地獄中「母がつか〜と親仁殿へ咄し、跡で知れては」

つかがなし たわいない。分別ない。わけもない。「つかがない」の條参照。壽門松上「可愛と思つて下されと、耻も哀も打明けて、つかがなくこぼす正月の、涙

も顔に憎からず」

つかひげす 使下種。召し使はれる下男、又は下女。使下主。

つかひざかり 使盛。金錢を使ふ盛りの年頃。三代男ニ「つかひ盛りの男、しかもよい器量して」

つかひちやう 遣帳。支出を記入する帳面。小使帳。二代男ハ「太夫様入り帳遣ひ帳」

つかひにつき 遣日記。前條に同じ。小使日記。支拂簿。二十不孝「萬事の拂十兩までは入らずと、遣日記を御目に懸くる」

つかひばん 使番。江戸幕府の職名。若年寄の下に屬し、戰陣では使命を傳へる役を勤め、平時は諸方に出張して役人の能否、大名の治績・行動を視察する。又、諸大名に於て、之に準ずる役目の者をいふ。堀川波鼓中「心拍子に乗りかけは六番がしら・使番、侍大將・奏者番」。使番をする人。走り使ひの仕事をあてられる者。

つかひぼつく 遣ひぼつく。遣ひちらす。亂費する。油地獄中「丁稚も使はず肩に棒、稼ぐ程遣ひぼつく」

つかぶ番 彼此接せしめる。關係のつ

くやうにする。大職冠「后妃の位に立つべき山、望みつかひしかば、鎌足悦び」

つかぶくろ 柄袋。刀、脇指の柄に被ひかける袋。旅行や雨雪などの時に用いたもの。榮花咄ニ「羅紗の柄袋、大小質に取られて」

つかふど 「つかうど」に同じ。丹波興作上「きり〜乗らつしやれ、馬やろいとぞつかふどなる」

つかへ 疔。胸のつまる病。女腹切上「頭痛のつかへの何のとは、皆茶屋酒が過ぎるから」

つかまき 柄巻。刀劍の柄を毛又は革などで巻くこと。又、それを業とする人。つかまきし 柄巻を業とする人。

つかまきや 柄巻屋。前條の類語。刀、脇差の拵へをする家。刀屋。女腹切中「柄巻屋の半七と云ふ蟲が差いて」

つかみからげ 摺絡。楯(うちかけ)の楯などをつまみからげること。傾城島原



つかまきし



蛙合戦ニ「名残のふた道中、品は替れど一つまへ、つかみからげに脛見へて」

つかみさがす 掴み探す。つかみついで探す。身のまはりなどくちや〜にする。「一代女六」驛は古帷子上ばりにして（中略夜の明方に宿に歸る風情、宵とは格別に掴み探され、ふなく〜と腰も定めかね」

つかみざし 攫差。掴挿。つかんでさすこと。いきなりさすこと。懷視五「黒繻子の袴股だち取つて、攫差の大小、浮世笠にて貌を隠し」

つかみづら 掴頬（面）。慾ばりがほ。よくづら。又、慾張者。卯月潤色中「此の掴み頬兄弟が、お龜女夫を踏付けに、せこめ廻すといふ」

つかみぼうこう 掴奉公。草履掴みの奉公。薩摩歌上「命菜種に油の涙、掴み奉公いたしても戀しい奴めにま一度と」

つかもたない たわいない。ばからしい。あられもない。この語が當時よく用ひられたことは、二代男卷二の五に、遊女の口癖を記して、「八木屋のつかもたない、金田屋の名利、明石屋のうるさき、丹波屋のむげない」などあるのでも知られる。長町女腹切下「ア、愛な人つか

もない。孕常盤三「ア、つかもたない、色の黒いが辨慶ならば、鍋やちやん茶釜は皆辨慶か」

づから（接尾語）名詞に添へて、「何々の關係あるもの」といふ意に用ひる。みづから（自）などから類推したものであらう。武道傳來記ニ「拙者ためには從弟づからなるが、不慮に相果てける、御弔ひあそばされ給はれ」

つきあげまど 突揚窓。鴨居に戸の上端を蝶番などで取付けて、捧で突きあげて開けるやうにした窓。又、屋根を切り破つて、明り取りとしたもの。大下馬三「物の淋しき突揚窓よりやさしき聲をして、伊織さまと名を呼ぶ」

つきあし 繼足。踏み臺。ふみつぎ。日本振袖始四「ヤレ梯子よつき足よ、棒よ杵よとひしめきける」

つきうま 繼馬。次馬。宿つぎの馬。驛馬。物種集上「宇津の山邊に暮れかゝる公家、次馬の脊音高し鞠子川」

つきがかり 月掛。一箇月づつの約束で關係すること。月ぎめ。「一代男三」月懸りの手かけ者、出合女、のこらずさがしり。「一代女六」月掛りの男、萬金丹一角づつに定めて、富座の男は相對づくに

て一 つきがんな 突鉤。擗鉤。鉤の一種。双が廣くて、その兩端に柄をつけ、兩手にその柄を持つて前に突き出すやうにして物を割るもの。出世景清ニ「天の河原に橋柱、しらげたつるや擗鉤、雲をそなたに遣鉤」

つきぎせる 繼煙管。つき合せて長くし、取りはづして短くすることの出来るやうに作つた一種の煙管。貞享頃、流行した懷中用の長煙管。「一代女五」繼煙管を無理取に、合羽の切の煙草入をしてやり」

つきぎやうし 月行事。月々交替で、町内や商人の組合などを代表して事務を執る人。女腹切下「組中・年寄・月行事・町代」

つきぎり 月限。月切。一箇月ごとに、區切ること。月で期限を定めること。月ぎめ。月がかり。松風村雨束帶鑑一「是は都の月限りに、隠し置かれし手せんじや」

つきこみおび 突込帯。帯を結ばずに、先の方を折り込んでおくこと。巻いてはさんでおく帯。さしこみおび。

つきごめ 突米。搗米。つきしらげた米。

花朶咄四「突米の當座、扣き納豆」

つきさを 繼棹。接竿。三味線などの竿の、繼ぎあはせたり、取りはづしたり自由に出来るもの。「一代男四」挾箱より接竿の黒檀六筋がけを取り出し、僕（でつち）唄へといへば」

つきじやみせん 繼三味線。つきさを（繼竿）の三味線。女腹切中「やつちの繼三味線、心くらべの連弾きに、思ひの色を忍び駒」

つきしろ 月代。月のこと。太陰。又、月の出ようとする時、空のしらむこと。月白。「一代男」揚屋町は斯の最中、二十三夜の月代もあがりて」

つきだし 突出。突出女郎（つきだしちよらう）の略。又、初めて遊女として客を取ることを。「一代女」我れは突出しとて、俄かに風俗を作れり。萬づ町方の物好きとは違へり。壽門松上「雲の上著をゆりかけて、新般突出し出立榮え」

つきだしちよらう 突出女郎。新に女郎となつたものの稱。百日曾我二「五月十五夜突出し女郎」

つきだしびん 突出鬘。鬘を特に張り出して結つた髪。その鬘。夕霧阿波鳴渡

上「突出し鬘の下弁、鼈甲挿櫛」

つきだしもの 突出者。突き出されたもの。逃げもの。

つきづき 蕪。つくく。よくく。壽門松上「吾妻つきづきをかしき堪へ、笑ひ殺す笑止類」

つきつき 繼繼。次次。（）繼ぎの多いもの。つきだらけ。又、寄せぎれ（布片）で作つたもの。「一代女四」年構なる中間につきくの袋を持たせり。（）主の次に侍するもの。従者。おつき。「一代男」御替草履參らせ、懷より櫛道具（中略）、つきくの者に渡して」

つきつきに 次次に。たびごとに。その都度。「一代男二」我れ後家を引歸けると度々なり、葬禮のつきくの様子尋ねて」

つきつけ 突付。次條の略。永代藏四「博奕仲間、山賣、人參のつき付、筒もたせ」。大矢數二「春の野に出つて付人參、まだ息が霞に通ふ君がため」

つきつけあきなひ 突付商。強ひて賣りつけること。おしうり。つきつけうり。永代藏二「狼の黒焼はと（中略）、知るも知らぬもにつき付商」

つきてんま 繼傳馬。宿つぎの傳馬。つ

ぎたて馬。驛馬。丹波與作上「臺所荷はつき傳馬、おつら荷物は通し馬」。同中「今六道の次傳馬、三途の川を打ちまたぎ」

つきともなひ 付きとも無い。ふさはしくない。その折でない。つきのわるい。二枚繪草紙中「尤も掛けは負うたれども、節季でも有る事か、つきともない今日に限り、此の様にせがむのは、ムム合點じや〜」

つきひと 月人。三鐵輪「月人やことにすぐれてふとるらん、くはれて残る小男鹿のかは」

つきひとをとこ 月人男。大矢數三「火ともしの月人男五十年」。同五「痘瘡もとの御手をとどめん、年日とぞ月人男罷出」

つきふさがり 月寒。陰陽家で、月によつて或方角を忌むこと。即ち、正・五・九月は北、二・六・十月は東、三・七・十一月は南、四・八・十二月は西の方角を忌むこと。

つきぶし 次節。江戸吉原で流行した小唄。つぎうた。

つきほこ 月鉾。京都祇園祭に引き出す山車的一种。「一代男八」六月十四日今日

は都のながめ残す月鉾の渡る時」  
つきま 月待。十七夜・二十三夜など  
の月の出るのを待つて拜すること。榮花  
咄「月待・日待御一代の吉事御判」。

又、遊里などではこれとは別の催しご  
とをいふか。二代男四「五月三日の夜、  
花月、月待を催して、歌うたふ程の末  
の女郎を宿に招き、酒の事重なり、夜  
更けて女客も歸り」

つきめ 突目。目を物で突いたために、  
その目の痛むこと。物種集上「硯の墨に  
紅葉みだるゝ、突目よりこぼす泪は水  
の秋」

つきもしほもない 「つき」は付、「しほ」  
は機。何の關係もない。だしぬけな、  
突然なきまにいふ。女腹切上「つきもし  
ほもなう半七に、何用有つて登られた」  
月夜に釜を抜かる (諺) 案外な失策の  
譬。甚だしい油断をいふ。織留「一身の  
一大事を忘れ、いつも月夜に釜をぬか  
れ、借錢乞と無理の口論」

づく (接尾語) 盡の字を當つべきか。名  
詞に添へて、その事の限りを盡し、そ  
の事を目的とし、その事に打ちまかせ  
る意などを示す。百日曾我「運づくの  
勝負せん」

つくからに 突くからに。杖を突くので。  
蟬丸三「此の杖は御道しるべ、實に〜」

是も突くからに、千歳の坂も越えなん  
と、彼の通昭が詠みし杖から。古今集「千  
早ぶる神やきりむつくからに千年の  
坂も越えぬべらなり」に據る。

づくし 盡。(接尾語) 名詞に添へて、そ  
の類を悉く列べあげることにいふ。「洛  
中づくし」。「獨樂づくし」。

つくしごと 筑紫琴。今の十三絃の琴の  
稱。寛文の頃、筑後國善導寺の僧法水  
が關東に來て、その技を世に弘めたと  
いふ。

つくしべんけい 盡辨慶。遊里の詞。う  
つけを盡す人。たはけもの。

つくにう 木菟入(づくにふ)。木菟入道  
の略。みみづくのやうに太つた坊主姿  
を罵つていふ語。

づくにふ 木菟入。前條を見よ。  
つくばふ 突這。蹠。兩手を突いて體を  
平たくする。うづくまる。一代女五「智  
恵の有る男を頼み、(中略)二貫出して  
つくばはれける」。織留「五日に一度  
づく軽い遣ひ物して這ひつくばひ」

つくぼう 突棒。狼牙棒。罪人などを召  
捕るに用ひる道具。木製の長い柄の先

に、鐵製の撞木がた(多くの商の出た)  
をつけたもの。そこでがらみ。その商に  
袖などからむのでいふ。出世景清「つ  
く棒・さすまた・鐵棒」

つくまのまつり 筑摩祭。近江國坂田郡  
筑摩に祀つる神の祭禮。四月一日に  
行はれる。この日は、村の婦女の結婚  
した男の數だけ鍋を戴いて參詣する習  
慣があつたといふ。大矢數四「火の雨が  
降つてきたれば鍋かづく、筑摩の祭取  
りこして月」

つくもがみ 九十九髮。江浦草髮。老女  
の白髮をいふ。勢語「百年に一年足ら  
ぬつくもがみ、われを戀ふらしおもか  
げに見ゆ」の歌に據る。日本振袖始五  
「酒にもまるゝ九十九髮、亂れ心は何故  
ぞ」

つくりきやうげん 作狂言。つくりごと  
の狂言。假構した狂言。  
つくりくぜつ 作口舌。わざと構へた口  
論。ことさらに考へた口舌。一代女二  
「作り口舌して重ねて咄しに來ること、  
手に取つたる客なり」

つくりつんばう 作聲。故意に聞えない  
風をすること。わざと世事に耳を貸さ  
ぬこと。櫻陰比事「何時となく作り聲

になつて、浮世を隙に成して」  
つくりひげ 作罷。墨で畫いた髭。奴僕  
などのしたのもの。一代男

「僕(でつち)が作罷  
の落ちん事をかなしま  
るゝ折ふし」  
つけあひ 附合。連歌又は  
俳諧に於て互に句を附け合ふこと。大  
矢數「附合に言はれぬ古事を出され  
たり、道中互に脱尻(カラシリ)の月」



つけいし 付石。かねつけいし(金附石)  
の略。珪石の一種。質緻密で色黒く、  
金銀を摺り付けて、その良否を試みる  
に用ひる。試金石。紀伊國那智地方か  
ら産する。那智黒。永代藏「先づ付石  
にてあらため、その後秤の上目にて一  
匁二分、りんとあることをよるこび」

つけいだす 附出。探し出す。あとを附  
けて見つけ出す心か。蟬丸州「滋賀の里  
にて、早廣を附け出だし」

つけがね 附金。廓詞。附け肩けの金。  
特に、格子から茶屋へ贈る金銭。

つけがみ 附紙。門口などに取附けて、物  
事の合圖、目じるしとする紙。二代男  
「東の門口に附紙をして置さけるは、  
遣手のせく男に、小宿に歸つた間を知

らすためなり」  
つけがみ 付髪。假に附け添へた髪。か  
づら。萬文反古五「付髪こしらへて芝居  
奴の口まね」

つけがみだい 附紙臺。金銀を人に遣は  
す時に用ひるもの。黄金一枚、銀一枚  
などと書いた包紙を、臺に張付けたも  
の。つけだい。薩摩歌中「五色のちりめ  
んもみ。まわた、付紙臺、折紙臺、三荷  
に擔はせ」

つけごゑ 附聲。本人に代つて傍から聲  
を出すこと。本人の聲につけて物言ふ  
こと。一代男「唄うて見しに聲おかし  
げなれば、牛夫に付聲させ」。薩摩歌上  
「暗がり附聲して、寢させたは外の  
者、源五兵衛をだました」。又、つけこ  
わいろ(附聲色)。

つけざ 附差。次條の略。浦島年代記「  
人がつけざを望まば、鳥渡吸つて飲ま  
すがよし」

つけざし 附差。口をつけた酒盃(又は  
煙草)を人にさすこと。虎溪橋「おく  
り膳には付ざしの酒」。大下馬「後に  
はつけざしさまん、我を覺えず酔ひ  
出でければ」

つけじろ 付城。根城の外に、國境など

に築いて敵に備へる城。でしろ(出城)。  
國性爺四「所々に付城築き、兵糧軍兵込  
めおいて」

つけずみ 付墨。墨で記號などつけるこ  
と。織留三「一句一錢の點取に讀めぬ所  
は評書なしに付墨し」

つけたけのこ 漬竹子。筍の漬けたもの。  
心中宵庚申上「松茸、つけ竹の子、生に  
かはらぬ仕様が祕密」

つけとどけ 附扇。謝禮のために贈る金  
錢。心づけ。又、交際上・義理合上の贈  
物。一代男「同道の人に附扇善きやう  
に頼めば、心得て、主人に三百、驛に  
百、はたらく女共に貳百、合せて六百  
文撤き散らせば」

つけひぢ 付臑。臑を胴につけること。  
女の身のこなしにいふ。俗つれ四  
「わづか俯向き、首筋あり〜と見せ  
て、付臑に左の手先に袖口を揚げ、  
右の肩より袖行きしとやかに流し」

つけめ 附目。博奕の語。二代男五「四五  
人寄り合ひ、附目の跡で置かぬかと、  
貫錢の音は小勝負なり」。大職冠四「つ  
けめには八むし並居たり。其の外、中  
目、二目おり、通れがたしや我が命」  
つこころど 「つかうど」に同じ。百日曾我

二「早く通れとつこどどにいひはなす」  
つこどこゑ つかうどな聲。とがりごゑ。  
女腹切中「お容の前で耻ぢかゝさうか  
よ、昔作りのつこど聲」。宵庚申下「は  
よ往かれやれおりや往かぬ、きり〜  
さしやれとつこど聲」

つじ 辻。(一)つむじ(旋毛)の略。(二)笠又  
は傘の頂。織留三「辻のぬけたる葛笠を  
被き」。句すべて物の交叉した所、頂に  
なつた點をいふ。一代女二「秋の小袖ゆ  
るし色にして惣鹿子、此辻を一つ〜  
紙燭にて焦がし抜き」

づし 鬮子。途子。こみち。横ちやう。  
つじあんどらう 辻行燈。辻番所の前に備  
へた行燈。一代男七「順慶町の辻行燈に  
立ち忍び」

つじらら 辻占。偶然に遭遇した物事に  
よつて、吉凶を判ずること。一代男四  
「邊を見れば黄楊の水榭落ちてけり、あ  
ぶら臭きは女の手馴れしかたみぞ、是  
にて辻占をきく事もがなと」

つじがうしやく 辻講釋。辻にあつて軍  
談などして、往來の聽衆から錢を乞ふ  
こと。又、その人。つじだんぎ。つじ  
ばなし。

つじぎみ 辻君。夜間、往來の辻に立つ

て春を賣つたもの。  
つじだらう 辻堂。路傍に建てた佛堂。一  
代男三「其の夜は辻堂に明かし」

つじだち 辻立。路傍に立ち止まること。  
往來に待むこと。一代女二「近付にもあ  
らぬ人の辻立にも見返りて、好いた男  
のやうに思はせ」

つじだんぎ 辻談義。「つじがうしやく」  
に同じ。織留二「辻談義も佛のまねの口  
をあき、つまる所は喰はねばひだるい  
ひだるいといふにぞ」  
づしど 厨子戸。ふくろど(袋戸)。床の  
間などの脇に、壁に張り出した袋棚の  
戸。又は米の朔日中「遣ひ棚のづし戸を  
明け、夫を押し入れ」

つじなし 辻無。笠・傘の頂の無いこと。  
懐視二「辻なしの傘一本、日光挽のはし  
た盆」

つじのう 辻能。路傍に小屋掛けして興  
行する一種の能。晝夜用心記四「七本松  
に辻能、放下師」

つじのもん 辻の門。町の境の門。堀川  
波鼓下「辻の門に手をかけて柱を俤ひ  
貫木ふま」  
つじはうか 辻放下。辻に立つて、石な  
どの曲どりし、さきさきで舞ひなどして、

往來の人に錢を乞ふもの。つじはうげ。  
萬文反古四「見物事は錢の入らぬ辻放  
下にも目をふさぎ」。大職冠四「若草山  
の煙草賣、つじら山には辻放下」

づしりづしり 物の揺れ響く擬聲語。ど  
しりどしり。日本振袖始三「三尖二刀の  
鈴軽々と横たへ、づしり〜と搖ぎ來  
る」

つじみど 辻井戸。路傍にある井戸。み  
ちばたの泉。二十不孝「墨染の水とい  
ふは(中略)、今はその時と變りて、京  
海道の辻井戸となり」

づせき 鬮籍。地圖・書籍。鬮書。  
つちおしろい 土白粉。白粉の一種。こ  
なおしろい。伊勢白粉の類で、粗惡な  
もの。一代女六「夕食過ぎより、姿を作  
り成し、土白粉なんべんか塗りくり、  
硯の墨に額のきはをつけ」

つちくればと どばと(鴿)の異稱。普通  
の人家に飼ひ、特に佛間神社に養はれ  
るもの。一代男六「山の芋のにしめ、つ  
ちくれ鳩、芹やき」。織留二「霜前に土  
くれ鳩をわざとつとにして、山家から  
くれました」

つちけ 土氣。土くさい氣。田舎めいた  
様子。又、その様子あるもの。俗つれ

5

づれ四「山家育ちの形の小野、葛の根の土氣離れず」

つちすず 土鈴。土製の鈴。子供の玩具。織留四「稻荷の前なる土鈴の細工人が見出し」

槌で庭掃く (諺)あわてふためいて人をもてなす。はげしく世辭・追従をいふ。女腹切中「それ〜花車も亭主も槌で庭掃く人よびに、走る足元おかるぢやないか」

つちど 土戸。表面に泥土又は漆喰を塗つて作つた戸。土蔵の戸口・窓などに用ひる。薩摩歌上「これは〜土戸の錠が下りずにある」

つちのこ 槌の子。閏年には槌の子まで孕む」といふ諺がある。下文はその諺によつたもの。雪女五枚羽子板上「梅が香の、解け初めたる下紐は、心ありげにつちのこまで、春めく御代こそ豊なれ」

つちほぜり 土穿。つちほじり。農夫をいやしめていふ。土百姓。五十年忌歌念佛上「身共は和泉のどん百姓、土ほぜりでおじやれども」

土佛の水遊び (諺)身の破滅になることを知らないでゐる譬。危険に對する無

智を笑つたもの。置土産三「をかしからぬ遊興に土佛の水あそび、いつとなく身を崩して」。榮花唱五「是も土佛の水遊び、身は何時となく、いな人になられぬ」

つとお 筒落。次條の略。出世瀧徳上「旦那の身上で、一年に千兩二千兩は、つとおでもあること」

つとおちごめ 筒落米。米さしの筒からこぼれ落ちた米。つとおちごめ。懷硯三「敦賀に賣られ、筒落米拾ひし事を忘れたかと」

つとおははき 筒落箒。筒落米を掃く箒。しべぼうき。永代藏一「筒落箒」

つづくりぶしん 綴普請。つくろひ普請。假りの手入れをしておく普請。織留三「子の代になつて無用のつづくり普請」

つづごかし顔 筒轉顔。筒がころがつたやうに装つた顔。錢の受渡にあつたやうに、百文入の竹筒が倒れて、錢が溢れたやうな風をすること。何くはぬ顔で、錢をごまかすにいふ。萬年草中「これ内の奴等にも、何がなしに三百宛お引をやるが合點ぢや。つづごかし顔で、つらりと九文十文づつ、百の口を抜いておけや」

つづこみ 突込。男子の髪のかきひ方。二代男八「太夫・天神残らずも、髪はつこみ、大振袖、何れも美少人の如く、僧俗心を奪はれける」

つづさや 筒鞘。筒形の槍鞘。周圍を六角形などにし、色漆で塗る。薩摩歌上「六角の筒鞘の二本道具は若狭の小濱」

づつしり 物の多くあるさま。どつさり。戀八卦柱下「賣りためて千貫、繋ぎたて、萬貫、惠方の御藏づつしり、納めて家も福々」

づつない 苦しい。せつない。上方詞。じゆつなし(術無)の轉であるといふ。「づつない」は相摸方言で頭痛のことといふが、同系の語か。油地獄中「アムつくない苦しいと悶えわな〜きそどろ言」。生玉心中上「それで走つて來ました、ア、つゝなやと息をつぐ」

づつぬき 筒抜。物にはまつてゐる筒を引抜くやうに、首を引きぬくこと。

づつぬけ 筒抜。蓋も底もない筒に、さはりなく物が通るやうに、話などがあからさまに人の耳に達すること。大職冠三「寝耳へでも入事か、五郎介殿へ筒抜け」

つづぼり ぼんやり。戀八卦柱上「玉は

寝もせず、寢所に、たゞつつぼりと起  
きむたり」

つつまり 筒護符。筒守。小さい竹筒

に鈴をつけて小兒の守りとするもの。  
嬰兒の宮參りや、外川の輿の先や、日

傘などにもかける。古くは、婚禮に携

へ行つて厨子に置いたもの。二代男一  
「昨日までは子を抱きし姥の、空懐に成

りて、涙兩袖を貫き、筒護符を持ちて、  
神を恨み佛に歎き」

つづみくさ 鼓草。たんぼぼ(蒲公英)の  
異名。

つづみづき 包突。方々から包むやうに  
突きかゝること。百日曾我「銚ひつさ

げて兩方より、上段下段のつづみ突き、  
はつし〜と突きかゝる」

つづもたせ 美人局。妻が夫と談合の上、  
他人と姦通し、それを言ひがかりにし

て金銭をねだり取るもの。なれあひま  
をとこ。永代藏「人參のつき付、筒も

たせ、犬釣、乳呑子を養ひてほし殺し」

つづらちま 葛籠馬。葛籠を荷ひ運ぶ馬。  
丹波與作中「さても見事な、そんなはお

つづらちまや、七つ蒲團に、そんなは曲  
象すゑて」

5

つづらがさ 葛笠。網代笠(あじろがさ)

の一種。市女笠(いちめがさ)に似て、  
みねのやゝ低いもの。天



さがらづつ

和の頃、若い女の間に流  
行した。江州水口を名産

地とした。一代男「首す  
ぢの白き事、木地のつづら笠に、白き

紐を上につ結ばず。織留「辻のぬけた  
る葛笠を被き」

つづらし 葛籠師。葛籠を作るを業とす  
る人。

つづらちま 葛山。大和國奈良若草山の  
異稱。大職冠「つづら山には辻放下」

つづらをかさ 葛小笠。つづらがさ(葛  
笠)に同じ。

つづる つつく(突きつく)の訛。萬文反  
古「兩眼つゞる間もなく世界は闇と

なつて」

つづを つつお(筒落)に同じ。

つと 髷。たぼ。結び髪、後方へ張り  
出した部分。髷。一代男「髪はつと少

なにまげを大きに高く結はせ」。一代女  
「つとなしの投烏山、隠し結びの浮世

もとゆひ」

つとがみ 髷髮。裏髮。たぼ髮。たぼ。  
つと。男色大鑑「つとがみの色深く、  
あさがほぞめの大振袖」

つどつど こま〜(細々)。委しく。い  
ちいち。五人女「はじめよりの事ども

つど〜に語り。織留「榮花なる事  
つど〜に言ふまでもなし」

つとんと つとに(夙)。太鼓の音とを  
かけていふ。雪女五枚羽子板下「とうか

らつとんとうつぼれた、なるかならぬ  
か、戀の中の町」

つない 鬨無。方鬨もない。非常にすぐ  
れてゐるさまにいふ。曾我會稽山「扱

扱つない大矢、御覽なされ景高公」

つなきぜに 繫錢。錢さしに貫いてある  
錢。二代男「袂よりつなき錢取りいだ

し」

つなきびし 繫菱。紋所の名。又、菱を  
横につないだ模様。薩摩歌上「六尺は繫

ぎ菱、繫げや〜永樂錢の駕籠印」

づなさわぎ 鬨無騒。方鬨も無いさわぎ。  
大さわぎ。女腹切中「色里に無いづな

騒ぎ」

づなし 鬨無。非常に大きい。づない。  
宵庚申上「さつても鬨なし。御當地は芋

所か一生の見始め」

つなすくみ 馬など綱で引かれながら、  
恐れすくんで進まぬこと。丹波與作下

すくみかや

つなぬき 網貫。(一)雪香(ゆきぐつ)の一  
種。牛の皮で作り、底に釘を打つたも  
の。かはぐつ。大職冠ニ「三摩耶戒の臨  
當、忍辱慈悲の網ぬき」。(二)つらぬき  
(頰貫)。

つねだいじん 常大盡。遊廓の詞。常々  
来る大盡客か、又、平凡な大盡か。二代  
男八「お客立たしやりませいの聲に驚  
くは常大盡、四も五も構はぬ男ども」

つねてい 常體。常のさま。なみ。普通。

つねわんざん 常和謔。常のわる口。平  
生の讒言悪口。薩摩歌中「尼奴も共に出  
て失せうと、常わんざんとは事變り」

つのがる 角繰。髪をぐる〜と巻く。  
角繰結にする。賤しい女などが、ぐる  
ぐる巻きにした髪に笄をさしたのを、

「つのがるむすび」といふ。一代女五「髪  
はつのがるぐり、顔に白粉絶えて」

つのはじめもんじ 角十文字。十文字形の  
槍鞘の、角形にそいだやうになつたも  
の。薩摩歌上「葛蒲皮の角十文字」

つのだいし 角大師。  
兩角のある黒鬼の  
形したものの。疫神  
よけとして門戸に



しだのつ

張る繪像。又、小兒の髪の長くなつた  
のを、頂と前後左右五所で結んだもの  
の稱。

つのだらひ 角鹽。角のやうに左右に柄  
のある小さいたらひ。多くは漆塗であ  
る。手洗ひ又は齒にかねをつける時、  
口そそぎなどに用ひる。耳だらひ。織  
留六「角鹽見ては何になる物と人に  
たづぬ(る)程いやし」

つのだる 角樽。柄が兩角のやうに上に  
長く出てる朱塗の樽。祝言の時など  
に酒を贈るに用ひる。えだる。天野樽。  
人形樽。永代藏六「角樽一荷に鹽鯛一掛  
銀一枚、言入れの祝儀おくと見せ」

つのがきん 角頭巾。「すみづきん」に同  
じ。

つのがめだつ 角目立。目かどを立てる。  
感情を害して互にあらそふ。百日曾我  
三「蝸牛の角のつのがめだち、いどみかけ  
むと雖も」

つのがやくり 角屋作。本家から突き出  
して造ること。又、その家屋。永代藏  
五「小百姓ありしが、牛さへ持たずして  
角屋作りの淺ましく住みなし」

つば 鏢。男色大鏢六「およそ唐人の若衆  
にしてから鏢のしれた事」

つばうち 鏢打。刀の鏢を手で打つこと。  
刀を抜かうとするさまにいふ。

つばきは 鏢際。(一)鏢もと。(二)事のまぎ  
は。いよ〜といふ場合。二代男五「太  
夫も更々身を捨つるを、鏢際になつて、  
少しも惜まぬに、いとどしき男を殺すと  
思へば」

つばさ 翅。翼。鳥のこと。二代男一「沖  
より目馴れぬ翅の飛び來つて、是れは  
女護國に住む美面鳥なり」

つばさ七ぶん 曾我五人兄弟一「八の巻  
の五番善神、つばさ七ぶんのりきゆう  
を與へて加護し給へやと」

つばちぶん 頭八分。頭から少し高いさ  
まにいふ。づはちぶ。薩摩歌上「手先上  
りの頭八分、腰のひねりに足取りに」

づはづれ 圓外。非常に大きなもの。づ  
ぬけ。法外。

づばなかず 芽花(つばな)の穂のやうに  
する。綿などをつまひるげて、ほゞけ  
させる。

づばめ 鏢目。つばきは(鏢際)におな  
じ。

づばめ 燕。燕算用の略。仕上げ勘定。  
合算。しめ。胸算用一「毎月の胸算用せ  
ぬによつて、つばめの合はぬ事ぞかし」



つばめあはせ 燕合。合算すること。燕算用をすること。女腹切上「跡のこじり帳面の、つばめ合せと親方が、鞘鳴りするぞ道理なり」

つばめざんよう 燕算用。合計すること。合算。計算。燕合せ。

つひ つい(接頭語)に同じ。二代男「太子の御傳記を、つひ讀みて見る面影見るに」

つひしか つひ(終)に。いまだに。絶えて。

つひど ついど。未だ會て。遂に。つひぞ。

つぶ 粒。小錢(こぜに)。小額の錢。びた。女腹切中「打ちみしやいでも、つぶ三文ないは知つてゐる」。萬年草上「糠袋はおれに下され、巾着にして、穴市の粒入れます」

つぶし 潰。遊里の詞。放蕩者の異名。

つぶしまた つぶししまだ(潰島田)のこと。女の髪のか結び方。島田の鬚をひらたくしたものの。

つぶつぶ くだく物言ふさま。くだく。五十年忌歌念佛中「つぶ〜い、やんな喧しい」

つぶつぶ 泥酔したさま。壽門松上「つぶ

つぶ酔うた足もと」

つぶてうち 磔打。つぶてを打つこと。小石をなげること。

つぶねち 粒振。雪踏(せつた)の鼻緒の一種。色道大鏡「はき物は草履を本とす。雪駄を次にす。雪駄の鼻緒には(中略)さま〜付け來りぬれど、わきてつぶねちよし」

つべこべ かれこれと、小なまいきにしやべり立てるさま。今もいふ。

つぼいり 壺入。遊里の語。深く相手方に馴染み込むこと。揚屋に呼ばず、特にその相手方の宿に出かけて行つて遊興すること。一代男「よき野郎の方に、二三日壺入」。俗つれ〜五「直に芝居に行きて玉村吉彌に壺入」。男色大鏡「水仙の早咲に壺入の客には雪むかしの口を切り」

つぼいりじまん 壺入自慢。壺煎自慢。壺入りして、わがまに遊興すること。一代男「世之介取持つて心任せに逢はする事、後は少し壺煎自慢して、固め證文まだ疑ひ」。新小夜嵐物語「親しく成りて壺入自慢になれば、後にはたをやかなる風情の帽子もせず、不斷着の袖短く、三尺帯の前結び」

つぼうちちのやうじ 壺打楊枝。ふきやうじ(房楊子)の類。織留「延の鼻紙に壺打のやうじ取り添へ」。男色大鏡「壺打の楊枝手ふれて齒を磨くなど」

つぼかさり 壺飾。茶道の語。茶室(數寄屋)の裝飾。槍權三上「茶の湯の圖中略)、三幅對三つ具足、壺飾りの品々、印可の卷許しの卷」

つぼくち 壺口。口をつぼめて尖らすこと。ちよぼくち。

つぼくめんさい 頭北面西。佛語。頭を北面を西に向けて寝ること。釋迦の涅槃に入つた相。委しくは頭北面西右脇臥といふ。二代男「常住不斷の上首尾、頭北面西の樂、床限りを知らず」

つぼさら 壺皿。食器。つぼ。又、眼の大きなのに譬へていふ。

つぼつぼ 壺壺。小兒の玩具にする土器。底が平たく、中ほどがふくれ、口のせまいもの。榮花咄五「稻荷の前つぼ〜かま〜作り賣り、是も土佛の水遊び」

つぼつぼぐち 壺壺口。「つぼくち」に同じ

つぼね 局。はした女郎の居るところ。

つぼねちよう(局女郎)の室。又、局女郎の略。二代男「隣局より來て取持

つ

ち、否應なしに戸を閉せば。物種集上「さく花のよし野おろしてはし局」。一代男三「隔子局といふこともなく、軒まばらなる板屋に、或は五人三人なながれて、其のさまをかし。」(貴人の家で、局(室)を持つてゐる女の稱。もと女官にいふ。源氏冷泉節上「伊東の家の瓊瑣なり。我が娘から穿鑿せん。局はなきか。姫を是へ連れ來れ」)

つぼねありき 局歩。局女郎をあさり歩くこと。

つぼねかひ 局買。局女郎を買つて遊ぶこと。

つぼねきやく 局客。局買ひする客。局女郎に通ふ客。

つぼねぐるひ 局狂。局女郎に溺れて遊興に耽けること。

つぼねちよろう 局女郎。吉原及び島原で最下級の遊女をいつた。長屋を數戸に仕切り、一戸は、普通間口四尺五寸乃至六尺、奥行二間。奥は襖で仕切り、襖を開けば抱主の居間になつてゐた。揚代三奴なのを三寸局、五奴なのを五寸局と言つた。又別に、端女郎・切見世女郎、長屋女郎などと呼んだ。(笑ふ女に據る)。永代藏「封じ文一通(中

略)、これは島原の局女郎の方へやるなべし。榮花咄三「十五(かこひ)はまた局女郎より淺ましく」

壺の入口記 武家義理物語「山城の宇治の里に身を隠して住める牢(浪)人あど書きて、あなたこなたの氣に入り、年月爰に重ねけるに」

壺の口切る 茶の湯を催す。茶壺の口を切るのでいふ。一代男七「初雪の朝、俄に壺の口切りて、上林の太夫まじりに、世之介正容して」

つぼふし 圖法師。西鶴五百韻「戀病を思へば世界の圖法師じや、天地の二つあはす腎藥」。俳諧六日飛脚「世の中の肩もくさ一倍、圖法師か輕さ重さを知られたり」

つぼむ 窄。狭いところに小さくなつて住む。つづまやかに暮しを立てる。博多小女郎中「老體の親別住居も異な物と、一所につぼむ談合で」

つぼや 壺屋。人家に附屬した物置のやうなもの。女腹切中「藥師如來の引合せ、つぼ屋の客と脈を取る」

つぼせる 壺折。衣物の兩襟を折つて帯などにはさむ。二代男「庭の手水鉢に

藥酒を湛へ、紅着物つぼ折りて、初めの程はわざと足許はよるゝと諳ひしが」。同四「女郎十八人(中略)、上着を壺折り、皆竹杖もしやれて、(中略)都にても成るまじき旅送りに逢ひて歸る」

つまごと 夫婦の仲。女夫ごと。女腹切中「乗合舟の女夫づれ、思ひ無き身の高笑ひ、餘處のつまごと美し」

つまさきそる 爪先反る。足の爪先の上向になるをいふ。好色家のよしとする一つの相。

つまだか 棲高。衣の襟を高く取り上げること。

つまなげだし 棲投出。衣物の襟を兩膝の外方へ投げ出したやうにしてゐること。一代女六「いつ見習ひけるつまなげ出しの居ずまひ、白羽二重の下紐をわざと見せるはさもし」

つまなる 妻馴。妻を求めてそれに馴れる。一代男二「山は山、野は又更に町に駆けりて、己がさまへ妻馴るゝもをかしく」

つまはづれ 棲外。爪端。もと、爪の切り方に言ふ。すがた。様子。態度。一代男二「末々の女までも、水波み石白

を引きたるつまはづれにはあらず。武  
道傳來記六「爪はづれの尋常、倂のやき  
しきにつけても」。蟬九「目元のくら  
みつまはづれ、育ちゆかしき女なり」  
つまばらみ 爪孕。代指。指の先が腫れ  
て膿を持つ病。重いものは爪が皆落ち  
るといふ。松風村雨東帶鑑四「つらやと  
がりてつまばらみ、やすからぬ世にま  
い〜と」

つまべに 爪紅。女が手の爪の先に紅を  
さして化粧すること。曾我會稽山「爪  
紅血走る爪み合ひ、百花亂るゝ女中の  
騒ぎ」。色道大鏡三「爪べにの濃きはい  
やし、さして後洗ひ切りたるがよし」  
つまみな 撮菜。間をすかすためにつま  
んで抜きとる菜。おろぬいた菜。大阪  
獨吟集「須磨の上野にはゆるつまみな」

つまより 爪撻。矢を吟味すること。矢  
を左手の指先にのせ、右手の指先で繰  
り廻しながら、矢がら・羽・鏃などを検  
すること。

つまり 詰。すみ。くま。はて。極處。  
つまりざかな 詰肴。俚言集覽に「宴飲  
の畢り、殺核盡きてやむ事を得ずして、  
物などを羹湯にいたすを云ふ。因つて  
術盡きて一の下策を出すをそれに喩へ

云ふ」とある。即ち、肴の材料がなく  
なつて間に合せに調へる肴。又、窮餘  
に考へ出すその場の策案。二代男「詰  
り肴には戎大黒」。武家義理物語四「寝  
酒呑みかはして、つまり肴には鹽鯛の  
かしらを、なた振り上げて打割り」。男  
色大鑑五「其の花を賜はれ、けふのつま  
り肴に酢味噌で食べるといふ」

つまりつまり 詰詰。こゝのつまり、か  
しこのつまり。すみ〜(隅々)。くま  
ぐま。かど〜。一代男四「所々つまり  
つまりに肴をすゑ、かゝる人改め」  
つま 雀鶴。鷹の一種。えつさい(悦哉)  
の雌をいふ。鷹狩に用ひられる。

つみとりげ 摘鳥毛。鳥の毛を摘んで作  
つたものにいふ。鳥毛。薩摩歌上「名乗  
つて出羽の米澤は、摘鳥毛の唐人笠」  
津村の新御靈 大阪津村(古名)、平野町  
筋にあり、鎌倉権五郎景政を祭るとい  
ふ。二十二社詣の第七番。

津村の御堂 本願寺の別院。所在は前條  
と同じ津村。五人女二「津村の御堂まゐ  
りてかたぎぬは持たせしが」  
つめ 詰。振袖に對して、脇を詰めた衣  
の義にいふ。年増女。としま。丹波與  
作中「振袖なりとつめなりと足さすつ

て腰うつて」  
つめがね 詰金。刑の具。手足などを詰  
めるやうにするための金屬の具と見え  
る。出世景清四「ぼだしをうたせ、しつ  
錠詰金、たう〜くるゝ千引の石材木  
を積み重ね」

つめとりよし 爪取吉。曆の詞。爪を取  
るによい。戀八卦柱曆下「寒の入り、涙  
ぞ指の爪取りよし」

爪に火をともし (護) 極めて吝嗇なさま  
をいふ。頼朝も使はず、爪に灯をとぼ  
すといふ義。大矢數「音羽の山の世帯  
が専一、爪に火を枯れたる木にて燈さ  
れたり」。萬文反古二「年中の始末第一  
薪の高い所なれば、箸より細かに小刀  
割の黒木、爪に火ともしとは此事に候」  
つめばら 詰腹。他から強制せられて腹  
を切ること。

つめひらき 詰開。色道大鏡二「兵法より  
出でたる詞也。爰にいふは物の差配、  
ことわりの是非を糺し、道理を盡す詞  
也。又、詞の外に人々への音信音物な  
どに就いて、そこそこへ氣を配るをつ  
めひらきといふ。一代女「一窟窟詰な  
る爪開き、少し勿體も付」。二代男三「色  
里色町のつめひらき、一度も不覺を取

らず。男色大鑑六「古今武道美道の詰  
開き、日本若道の鑑」

つめひらく 詰開。前條の動詞。談判す  
る。話をつける。二枚繪草紙上「喧嘩仕  
掛ける體と見た。黙つて居るはひけた  
事。あがつて一ツ詰開かん」

つめぼうこう 詰奉公。途中で暇を乞は  
ず、ずつと詰めて奉公すること。虎溪  
橋「此の上はお暇〜いとまあれや、つ  
め奉公に情がつかぬ」。大矢數三「年を  
重ね生の松原詰奉公」

つめらう 詰牢。狭く造つた牢。出世景  
清四「上三尺の詰牢にし、この木を以て  
くも手格子に切組んで」

爪を放つ 男女の間の誓約に行はれたこ  
と。特に遊女がその心中の誠の證とし  
て、相手の客に遣はすために自分の爪  
を放したのである。一代男四「女郎の心  
中に髪を切り爪を放ち、先へやらせら  
るゝに」

つもり 積。見はからひ。豫算。豫想。  
枕久一世物語上「枕久も世上のつもり  
よりは早く墨まれし事不思議なり」。  
又、際限。程度。きり。俗つれ〜ニ  
「銀もつかふつもりある物ぞかし」  
つもりつもり 積積。おほよそ。大略。

胸算用五「四十五年このかた吞み暮し  
ける。(中略)毎日二十四文の錢、つも  
り〜十二匁錢にして銀に直し、四貫  
八百六十目なり」

つもる 積。見積る。見くびる。見  
くびつてだます。夕霧阿波鳴渡中「是程  
まで、ようも〜此の左近をつもりし  
な」。薩摩歌中「お蘭が來たも皆あいけ  
ん。積られた、騙された」

つやおしろい 艶白粉。色つやをよくす  
る白粉。次條参照。

つやつくろひ 艶粧。つや〜しく化粧  
すること。薩摩歌上「日頃塗つたる艶白  
粉の、つやつくろひも入らばこそ」

つゆ 露。狩衣などの袖括りの垂れた  
端。豆板のこと。こまが  
ね。鉦ともいふ。轉じて、纏頭(はな)  
として與へる金錢。廓などで御祝儀と  
して與へる金。一代男「前巾着に細か  
なる露を盗みためて」。置土産五「我れ  
世盛りに七夕の目の中に六十兩露にう  
ちしも。俗つれ〜五少しの露を打  
たしやりましよ」。次條参照。少しの  
もの。もろいものに譬へる。

つゆうつ 露打。纏頭の金錢を與へる。  
前條参照。榮花咄五「一人に五六兩づつ

露打ちければ。男色大鑑五「少し露う  
つ間が遅ければ、長き秋の夜を四つ前  
から呼び立て」

つゆちり 露塵。極めて僅少なさま。つ  
ゆいささか。今宮心中下「憎みは我が身  
一つにて、そこは露ちり厭はねども」。  
又、少しの惜しげなく捨てることにも  
いふ。

つゆはらひ 露拂。先導して路を開くこ  
と。物事を第一番目にする。特に  
遊藝などの場合、第一に演ずること。  
又、その人。新可笑記「露はらひの踊  
太鼓、それより打ちつゞきて、胡蝶菊  
若二人の美兒(びせう)」

露を打つ つゆ(露)及びつゆうつ(露打)  
の條を見よ。

つよき 強氣。相場師の用語。將來昂騰  
するであらうと豫想すること。弱氣の  
對語。油地獄中「値あげしたい祈には、  
強氣に、上り高間が原の八百萬神」

つよざう 強藏。男子の性慾の強盛なも  
のをいふ。一代男六「いかなる強藏もみ  
だれ姿になつて」。一代女三「旦那は強  
藏にて水碎きて顔を洗ひ」

つらうち 面打。面前でわざとあてこす  
りに言動すること。つらあて。松風村

雨束帯鑑一「契りも今は偽りの、憎い男の面打ちなれば」

つらくし 面隠。人形使の用ひるもの。顔を隠すために冠る袋状のもの。一代男五「人形舞はして遊べと（中略）、上幕、面かくし、首おとし」

つらみ 辛み。人につらくあたる物言ひ。五十年忌歌念佛中「恨みもつらみもあ

とを見ていうたがよい」

つらみせ 面見世。頼見世。かほみせ芝居のこと。かほみせ(を)を見よ。大句數上「定舞臺つらみせ時めめぐり来て」。

大阪獨吟集「芝居のしぐみ明日はつらみせ」

つらくせ 面辭。一癖ありさうなかほつき。又、顔面に表はれるいろくの癖。口をゆがめたり、眉を寄せたりするかほくせ。

つらだし 面出。顔を見せること。出頭すべきところに出頭すること。かほだし。

つらね 連。淨瑠璃・小唄などで、縁語を以て連ねいふ文句。又は氷の朔日下「よそのつらねも我が命も、一よぎりなる憂きふしや」。又、芝居の顔見世狂言に、主なる役者の述べた臺詞、雄壯な語句をつらねていふ。

つらばち 面恥。面目を失するやうなはち。曾根崎心中「頼に毛抜もあてる身が、つら恥かいて何として、人中へは出られぬ管」

つらぶち 面扶持。家族の人数によつて

與へた扶持米。めんぶち。虎溪橋「西門に數年を経たる花散りて、つら扶持ばかりの老の鶯」

つらみ 辛み。人につらくあたる物言ひ。五十年忌歌念佛中「恨みもつらみもあ

とを見ていうたがよい」

つらみせ 面見世。頼見世。かほみせ芝居のこと。かほみせ(を)を見よ。大句數上「定舞臺つらみせ時めめぐり来て」。

大阪獨吟集「芝居のしぐみ明日はつらみせ」

つらくせ 面辭。面目をあげる役目。面ばれのこと。

つらりと 物をうち揃へたさま。ずらりと。又、よく行きわたるさま。堀川波鼓下「私等までつらりと三百宛あたまつた」

つり 系。血すぢ。系圖。永代藏六「金銀が町人の氏系圖に成るぞかし、例へば大織冠の系(つり)あるにしてから、町屋住居の身は貧なれば猿廻しの身には劣りなり」。つりがき(系圖書)参照。

つりあんどん 釣行燈。八方(ハツバウ)のこと。商家の店・臺所の上などに釣る。大形に竹で輪を作り、菅笠のやうに縦に骨を組み、紙で張つたもの。八

間(はつけん)。八角。曾根崎心中「つり行燈の火はあかし、いかゞはせんと案ぜしが」

つりあんどん 釣行燈。前條に同じ。

つりおまへ 釣御前。持佛の繪像をかけたもの。釣持佛。ござん。一代男「釣おまへの下に括り枕、第一目にかかる物ぞかし」。胸算用「釣御前に佛の具添へて」

つりがうし 釣格子。釣隔子。外部へ張り出して造つた格子。即ち、出格子の一種。特に、格子のぬき(横桁)の一本であるもの。又、その格子のあるところを部屋とする女郎。吉原

草摺引「右局見分けやう、五寸はうづらぼうし(鶉格子)と云ふ、よこのぬき三とほり也、三寸はつりがうし(釣隔子)と云ふ、よこのぬき一とほり」。即ち、三匁取などの下級女郎のゐるところ。二代男「おもてに釣格子のあるは、二匁取のしるしなり」



しうがりつ

つりがき 系圖書。吊書。系圖を「つり」といふは、物を吊したやうに表で示す故か。櫻陰比事「己れ等が吊り書して其町の者どもに是れを見すべし」。「つり」の條參照。

つりかへ 釣替。(一)銀の位の歩入(ぶいり)より劣り、歩引(ぶひき)の位より優れたもの。大矢數「釣替に守隨もならぬ花盛、わか紫は三千兩まで」。(二)とりかへ。交換。國性爺「四百餘州と釣替の姫宮をしつかと預け置くから」は

つりがま 釣釜。吊して用ひる釜。武家義理物語六「釣釜に素湯たぎらして」

つりぎ 釣木。棚などを上に釣るために添へる木。織留「年徳棚を買ひければ、釣木・釘まで持ち來りて、惠方をあらため釣りに歸りぬ」

つりぎつね 釣狐。狐をわななどにかけて捕へること。きつねつり。大句敷上「つり狐にはとぼすいさり火、後の世の報いの程を松の風」

つりしまだ 釣島田。當時流行した、女の髪のかき方。なげしまだ(投島田)などと反對に島田の根を高く結つたものか。世間娘容氣「有徳人の息

女、美形當流の釣島田、針金入のヒ鬘(はねもとゆひ)、かしらから常の仕出しに替り」

つりてなは 釣手繩。蚊帳などを釣りかける紐。釣手。

つりはげ 釣髥。髪を結ふ時、髪をつりあげて引きしめるために、額ぎはに出来る髥をいふ。弱法師「色のゆかりはつりはげのあと許り」。信田小太郎「若衆の時の釣りはげ」

つりひげ 釣髥。(一)口髥の先端を釣つたやうにはね上げたもの。又、中間、奴などのつくりひげ(作髥)の形に稱した。大下馬「女房自慢なる顔つきに、さらば釣髥と、墨すり筆に染めて、物の見事に作りければ」。一代男「庄左衛門は、炮烙に、釣髥を作り出せば」。(二)頬ひげ。男色大鑑「此の男の上髥は残して、物の見事に左の方の鬢剃りて、(中略)京への土産に此の男の釣髥を持ちて還れば」

つりまと 釣的。釣り下げた的。

つりめやす 釣目安。訴訟状の一種と見える。無記名で役所の門などへ張つて訴へたものか。櫻陰比事「近年の賣掛重なり、身體續かざることを迷惑して、

釣目安を調へて銀高ばかり書き付け、相手の名も無く三十八所として御番所の御門に張り付けおきしに、役人衆是れを取つて御前へ此段申上ぐれば。大矢數「浪たち騒ぐ重ねて裁許、つり目安其の末々は捨小舟」

つりやく 釣夜具。次條に同じ。

つりよぎ 釣夜着。つりやく(釣夜具)。夜具の重みを軽めるために、紐で上から吊りかけるもの。永代藏「重ね蒲團・釣夜着・ばんやの括り枕に身がこそばく」

釣を取る 物事の、あたりまへよりも過ぎるにいふ。それ以上である。宵庚申上「御家中の二番ばえ達のさまを見よ、木挽町堺町の役者からつりを取る衣紋つき」

つるかけ 弦掛。冥途飛脚下「彼の爺は弦掛の藤次兵衛、八十八で一升の飯残さぬ」とは、八十八歳の老人に、升搔を切つて貰ふことを縁起よしとする俗習があつたので、「升搔」と縁ある「弦掛」と「八十八」とで、之を併諧的にあやなしたのである。「弦掛」は弦掛拵の弦掛で弓の弦掛ではない。

つるかけます 弦掛拵。釣掛升。拵の一

5

隅から一隅に、對角線に鐵準を弓弦のやうに張り渡したものを。米など量る時、その準に満たして升搔を用ひる。武道傳來記ハ「酒屋に入りて釣掛升に引つけて、それながら差しつ差されつ」つるし。吊してあるもの。店に吊してある果物・その他の食品などをいふ。宵庚申下「松よ、又見世のつるし唄ふな」

弦なき弓に羽抜鳥 緋縮緬卯月紅葉上情ないやら無念なやら、弦なき弓に羽抜鳥、立つも立たれず、ゐるも居られぬ家の内」

つるなべ 鉦鍋。鉦のついた鍋。

つるねぶと 蔓根太。臀部や大腿などにできる腫物の、筋張つたもの。蔓を張つたやうに凝る根太。大矢數「つる根太他人になつて爰押せい」。同「つる根太押付けられてうみ少し、須磨のうしろの腰中の月」

鶴の粟 鶴が啄み拾ふ粟は少量であるので、野などの意の如くならぬにいふ。丹波與作中「私仕事の賃芋うみ、(中略)小万といふ名でぼつ〜と、鶴の哀や淺ましや。(謔)鶴の粟を拾ふが如し。鶴の彦 玄孫(やしはご)の子。自分から

五等親の直系卑族。松風村雨束帶鑑ニ「三百餘年の齡を経て、玄孫鶴の彦を見る」

鶴の孫 前條に同じ。松風村雨束帶鑑ニ「先祖浦島(中略)、其子其孫彦やしは浦島、某は六代の鶴の孫、一子由良太は浦島の、七世の孫といふ物よ」

つるのまる 鶴丸。紋所の名。鶴の翼をひろげたところを丸い環の形にしたもの。まきぎる。

つるびし 鶴菱。紋所の名。鶴の翼をひろげたところを菱形にしたもの。榮花咄「墨衣は着れども鶴菱の紋の付きたる小袖に」

つるべかく 連掛。鐵砲などを間斷なく撃ちかける。つるべうち(連打)にする。

つるべずし 釣瓶鮓。鮓のすし。盛つて置く器が釣瓶に似たのでいふ。大和國吉野の名産。大矢數曰「釣瓶鮓には蓋の書付、六月の十八日の吉野山」。俗つれづれ曰「名所の里ながら、さりとて女の悪しき所ぞかし。(中略)、釣瓶鮓の横平たく」

つるべとり 釣瓶取。釣瓶が落ちた時に取る鐵製の鉤、二丈ばかりの細引綱をつけた物。萬文反古ニ「釣瓶取を小舟

のいかりかと不思議さうに見れば」。一代男七「柏屋より釣瓶取を出す」

つるべばなす 連放。鐵砲などを間斷なく撃ち放す。つるべうち(連打)にする。連發する。

鶴屋が饅頭 米饅頭のこと。本舖は淺草の鶴屋。近代世事談「米饅頭・根元は淺草金龍山聖天宮の麓鶴屋也。慶安の頃、此家の女におよねと云あり、すぐれて才智也。此女始めてこれを製す故、およねがまんぢうといへり。皮を米の粉で作つた饅頭。一代女曰「飯田町の鶴屋が饅頭」。

つれ 連。連れること。とも。帯皮などの兩側同じなこともいふ。一代男曰「帯は紫のつれ左巻、結目後に」

づれ つれ(連)の轉か。輩・等・ども。風情などの意あり、上に接する名詞。代名詞を卑しめていふ接尾語。萬文反古ニ「我々づれが娘は、さながら下司ばたらきこそさせませまじ」。源氏冷泉節上「頼朝を掣にせば、長者づれと談者になる、(中略)伊東の家の瑕瑾なり」

つれうた 連歌。ともに連れて唄ふ歌。合唱。天下馬ニ「手を引合ひそのあたりを、つれ歌唄うて歩きしが」

つれじやみせん 連三味線。つれびきに  
する三味線。三味線の合奏。

つれだうしん 連道心。相連れて佛道に  
志すこと。連れだつた道心者。

つれづれ 熟。つらつら。つくづく。冥  
途飛脚下「顔をつれづれながむれば、梅  
川いとどむねづばらしく」

つれなみだ 連涙。他人の泣くのに連れ  
て出る涙。ともなみだ。

つれびき 連弾。琴・三味線などの合奏。  
女腹切中「纏三味線、心くらべの連引  
に、思ひの色を忍び駒」

つれぶき 連吹。笛などを他と共に吹き  
合はすこと。武道傳來記三「鶴の巢ご  
もりといふを三人の連吹、鳴く音も自  
ら衰れに」

つれぶし 連節。他と共に節を合せて叫  
ぶこと。つれうた。合唱。一代男二「連  
節に歌説經あはれに聞えて」。武道傳來  
記六「門談、編笠深く冠り、連節に小濱  
町を通る」

つれやつこ 連奴。連れた下僕。とも  
の奴。一代男三「多門庄左衛門が連奴」

つろよ 「釣らうよ」の約。兩吟一日千句  
「つろよつろよおか様つろよ古狐」

つゐ 「つゐ」を見よ。宵庚申上「つゐ皮

むいてちよき〜、葛醬油の出し  
鹽梅」

つゐしゆ 堆朱。朱漆を厚く塗つて、山  
水花鳥などの模様をうづ高く彫り上げ  
た細工。香箱・盆・印籠などに施すもの。  
その細工のしかたに各種ある。孕常盤  
一「堆朱の香箱御前に差出せば」

つゐちやうちん 杖挑燈。杖のやうな、や  
や長い柄のあるぶ

大鑑一「横目  
夜廻りを忍び、  
委をかへて小者の風  
情に丸袖をかざし、杖挑燈を提げて行  
く時もあり」

つんと とんと。一向に。さつぱり。下  
に否定の辭が来るのが常である。曾根  
崎心中「在所へ往かんしたといへども、  
つんと誠にならず」。生玉心中上「おう  
と云うたが何の事ぞ。つんと此方に覺  
えがない」

つんなまぐさし なまぐさい(腥)を強め  
ていふ。つんと鼻を打つなどの意を持  
たせていふか。男色大鑑七「高野参りな  
れば、つん腥き鍋の移り香の」

つんばい 磔を投げる遊び。竹の先を割



んちやちあつ

つて、そこに小石を挿み、打振つて遠  
くへ投げる遊び。ふりづんばい。ぐん  
ぐんなげ(相模方言)。出世景清四「其  
の縛めにあひながら、某をつかまんと  
は、腕なしの振りづんばい。片腹いた  
し事をかし」

つんばね 博奕の語。骨牌で行ふものに  
いふ。大職冠四「つんばねあざばね、に  
ぎりのそろでぞ勝つたりけり」。又、突  
く羽子。雪女五枚羽子板中「きり羽つん  
ばね二役三役」

つんぶん 無愛想なさま。つんけん。つ  
んぶん。つつけんどん。傾城掛物揃中  
「敵と二人寢屋に入、つんぶんともなる  
まいし、誠らしうあしらはど」

てあはせ 手合。(一)談合すること。手  
をうつこと。(二)自分で調合すること。我  
が手で調劑すること。松風村雨束帶鑑  
三「醫者心もあるかして、葉平袖の下と  
いふ手合せの萬病圓、殊に女子によ  
う利くげな」

てあひ 手合。なま。つれ。徒。一代



男五「新町に手合ひを拵へ、溜めて置いて一度に鳥原で遣ひ捨てる事尤也」  
てあひがしら 出合頭。行き合ふはずみ。出合拍子。その途端。織留六「中通りの女とて、出合ひがしらに二人、一度に連れて来りけるが」

てあひぢやや 出合茶屋。遊里の語。男女の出合ふ茶屋。まちあひぢやや。密會の宿。一代男四「出合茶屋の暖簾に、赤手拭結び置きぬ、必ず此所にて病ひ出して、爰を借るとではいる事あり」  
てあひびやうし 出合拍子。「てあひがしら」におなじ。

てあひやど 出合宿。出合ひをする宿。  
てあひぢやや(出合茶屋)の類語。  
てあひをんな 出合女。出合ひをする女。密賣婦。一代男三「小谷札の辻のくら者、月懸りの手かけ者、出合女、残らず探して知らぬといふ事もなく」  
てあふ 出合。男女密會する。出合する。

てあみびがさ 手編笠。自分もちの編笠。「しのみ編笠」に對していふ。  
てあやまち 手過。過失。特に失火をいふ。大矢数三「手あやまち近れがたしや隣まで」  
てあんす 「お出でなされ」の意。一代男

六「鶴屋の傳左方よりてあんす」と申す、さらばそれへ行かうかの」  
ていり 泥入。金銀の粉末を膠の液に溶かして塗つたものである。友禪雛形などに施したものである。友禪雛形「地たまごいろ、うへにてさいしき繪、金銀のでい入」でいがき(泥描)。でいびき。

ていかかづら 定家葛。絡石。夾竹桃科、絡石屬の常緑灌木。蔓莖で他物にからみつく。山野に自生し、又觀賞用として栽培される。せきだかづら。つた。  
ていかづくゑ 定家机。歌人などの用ひる机。大下馬三「一間四面の閑居を拵へ、定家机にかゝり、二十一代集を明暮れ寫しけるに」

ていかのづし 定家の陌。陌は園子又は途子で、こみち、よこみち、ろちなどの意。晝夜用心記「時雨の亭のほとりに定家の陌あり」  
定家の小倉色紙 京都小倉山の寓居で、藤原定家の物したと傳へられる色紙。永代藏四「定家の小倉色紙、名物記に入りにたる外六枚」

ていけ 手活。手生。自分の手で草木の枝をいけること。轉じて、自分の手で

飼養すること。てがひ。又、遊女などを獨占すること。二代男一「正月買の若男、二十五日まで手生けなれば、心の行く時」

ていしや 手醫者。抱へておく醫者。かかりつけの醫。織留六「手醫者間もなく見まはれ、榮花なる事つどく」に言ふまでもなし。武道傳來記五「御手醫者坂川玄春、御使者には今の御物甲斐品之丞を遣はされけるに」  
ていたい 手痛。てあらい。はげしい。今宮心中上「私は幼い時より大阪に育ち、手いたいことは仕付けず」

ていちがふ 手一合。兩手で拵つた分量。約一合。たつた一合。永代藏五「その中の一粒を野に埋みて(中略)、秋は自ら實入りて手一合にあまるを」  
ていばう 亭坊。あるじの坊主。住職。胸算用五「亭坊勤行過ぎて、少時世間の事も考へ」

ていびき 泥引。金銀のでい(泥)を塗ること。でいがき。でいり。胸算用五「大座敷の壁にも砂粉は光を嫌ひ、泥引にして墨繪の物好、都に變ることなし」  
ていびきふて 泥引筆。泥引に用ひる筆。傾城反魂香中「家を彩色く繪具筆・隈筆

て

藁筆・泥引筆、その筆先に金銀も」  
ていらず 手不入。男の手のかゝらぬ。  
處女をいふ。萬年草中「疵のない手入ら

ずの女房が持たる。」  
ていり 出入。(→)出ると入ると。支出と  
収入と。費用。入費。丹波與作中「父様  
の出入も、夏の物共人手に渡し、傍輩  
にも無心云ひ、百三十匁とゝのへ」。(→)  
もめ。悶着。葛藤。

ていりほうこう 出入奉公。永い期間を  
續けてでなく、自分の家から、時々そ  
の家に出入して奉公すること。折々の  
通勤奉公。織留三「先づ兩人は別家を持  
たせ、一日替りに出入奉公と定め」

てう 町(ちやう)。「ちやう」を見よ。  
てう 丁(ちやう)。「丁度。まさに。又、  
丁半の丁。五百匁」てう九十匁にふり  
ても躍出、紅葉うつろふ御朱印傳馬」

てうき 調義。もくろろみ。工面。才覺。  
やろきり。永代藏二「諸事につきて其の  
身調義のよきゆゑぞかし」。同六「さま  
ざま調義をするに成りがたく、自然と  
其の家をつぶし」

てうぎん 丁銀(ちやうぎん)。「ちやうぎ  
ん」を見よ。永代藏二「丁銀こまがねか  
へ、小判を大豆板に替へ」。権久一世物

語下「丁銀を天秤響きわたる程、日には  
百度もかけ」  
てうしに 調子に。はずみに。しほに。  
機會に。武道傳來記三「頂き給ふを調子  
に、竹縁にねちあがりて」

てうせき 朝夕。朝と夕と。轉じて、朝  
夕の食事。食事。永代藏四「朝夕も通ひ  
盆なしに手から手にとりて女房もりて  
食ふなど」。俗つれん三「朝夕はいふ  
に及ばず、折々の菓物まで心をつけて」

てうせんさや 朝鮮紗綾。朝鮮から産出  
する絹織物。紗綾の類。一代男二「朝鮮  
さやの二の物をほのかに」

てうだつ 調達。印度、白飯王の長子。  
調婆達多の略。天熱又は天授と譯す。  
阿難尊者の親兄、釋尊の従兄弟。生々  
佛怨をなすといはれる。提婆達多。單  
に、提婆、達多ともいふ。新可笑記四  
「調達が六萬藏の經を誦せしも奈落を  
免れず」

てうちてうち 手打手打。小兒を慰めあ  
やす言動。「てうち〜」といひつゝ兩  
手を打ち鳴らすこと。一代男二「二人の  
寵愛、てうち〜、かぶりの頭も定ま  
り」

てうど 十分。酒盃の獻酬などにいふ。

生玉心中中「てうど飲めと、瓢箪傾け注  
ぎ懸くる。酒にはあらぬ粧の色」。宵庚  
申上「納の盃、坂部もてうど下されて」  
てうどかけ 調度掛。弓矢をかざつて掛  
けおく臺。又、弓矢を預る役。最明寺  
殿百人以上薦下「御太刀の役、調度かけ、  
作法正しき廣庇」

てうはつだいで 超八醒醐。八教(化儀  
四教・化法四教)を超越し、醒醐(五味  
の内の最上味)の味あること。法華涅槃  
の教の優れて高いことに譬へる。百  
日曾我四「衆生成佛の直路、超八醒醐の  
驚のみね、うへなき法と説かれたり」

てうへ 手上。その術、その力などの他  
より勝れてゐること。うはて(上手)。  
蛇は雉を取つて食ひ、猪はその蛇を取  
つて食ひ、狩人はその猪を射ようとす  
る。此の如きを「手上々々におさるゝ」  
といふよし(俚言集覽——尤草紙)。新  
可笑記三「それ〜の手うへあり、此の

てうはつだいで 超八醒醐。八教(化儀  
四教・化法四教)を超越し、醒醐(五味  
の内の最上味)の味あること。法華涅槃  
の教の優れて高いことに譬へる。百  
日曾我四「衆生成佛の直路、超八醒醐の  
驚のみね、うへなき法と説かれたり」

てうへ 手上。その術、その力などの他  
より勝れてゐること。うはて(上手)。  
蛇は雉を取つて食ひ、猪はその蛇を取  
つて食ひ、狩人はその猪を射ようとす  
る。此の如きを「手上々々におさるゝ」  
といふよし(俚言集覽——尤草紙)。新  
可笑記三「それ〜の手うへあり、此の

てうはつだいで 超八醒醐。八教(化儀  
四教・化法四教)を超越し、醒醐(五味  
の内の最上味)の味あること。法華涅槃  
の教の優れて高いことに譬へる。百  
日曾我四「衆生成佛の直路、超八醒醐の  
驚のみね、うへなき法と説かれたり」

てうへ 手上。その術、その力などの他  
より勝れてゐること。うはて(上手)。  
蛇は雉を取つて食ひ、猪はその蛇を取  
つて食ひ、狩人はその猪を射ようとす  
る。此の如きを「手上々々におさるゝ」  
といふよし(俚言集覽——尤草紙)。新  
可笑記三「それ〜の手うへあり、此の

てうはつだいで 超八醒醐。八教(化儀  
四教・化法四教)を超越し、醒醐(五味  
の内の最上味)の味あること。法華涅槃  
の教の優れて高いことに譬へる。百  
日曾我四「衆生成佛の直路、超八醒醐の  
驚のみね、うへなき法と説かれたり」

人に印可とれとて、前後をあらそひける

てうもく 鳥目。せに(錢)。殊に銅・鐵

で鑄造したもの。圓形で、中央に孔を穿つた形が、鶯鳥の目に似たのでいふ。

驚眼。轉じて、一般に金錢、せにかねの異稱。松風村雨東帶鑑「鳥目一貫取出させ、(中略)乏少なから御酒一つ」

ておぼえ 手覺。かねて手心の覺えあること。試みた經驗あること。

ておほひ 手覆。手の甲を覆ふ布製の杓子形のもの。てつかふ。手甲。五十年忌歌念佛下「花の手おほひお手を引かれた、是も熊野の修行かや」。こて(籠手)。

ておりじま 手織縞。自家製の縞織物。質素で田舎向きな縞物。一代女三「手織の帷子の上に、縮入羽織」

手があげば口があく (諺) 仕事がなければ、暮しが立たぬ。商賈をやめれば喰ふに困る。又は氷の朔日上「お禮に参る筈なれども、夫婦はつかりの商賈、手があげば口があくで、おのづからの御無沙汰」

てかいた 出かした。うまくやつた。成功した。百日曾我四「おぬしは近頃でか

いたり」

手が入れば足も入る (諺) 一度氣をゆるせば遂に全く侵されてしまふ。事のだん／＼深入りする譬。

てがうし 出格子。外へ張り出して造つてか窓の格子。つりがうし(釣格子)。

てかがみ 手鑑。古人の筆蹟を集め、又、それを寫して集めて帖としたもの。一代女六「了佐極めの手鑑、定家の歌切れ」。俳諧師手鑑(西鶴編)。

てかけぼうこう 手懸奉公。妾奉公。めかけぼうこう。

てかけもの 手懸者。妾者。めかけ。せふ。一代男二「月懸りの手かけ者、出合女」

てかけをんな 手懸女。前條に同じ。武道傳來記六「手懸女は、いたづらの晝も蘭帳のうちに房付枕つたかにかしら撫でさせ」

てかしがほ 出來顔。出かしたやうな顔つき。功を誇るかほつき。得意がほ。てかしたで 出來立。でかした風をすること。又、俠氣にはやること。武道傳來記一「出頭家老にて、諸事出來しだてに物毎子細らしく吟味するに」。一代女二「小尻咎め、

出來しだてにして命の果つるをも更に覺えず」

てかせ 手控。てかし。囚人の手にはめて自由をさせないやうにする刑具。手鑑。國性爺三「繩はおろか、あしかせてかせに掛つても」

てがた 手形。(一)昔、文書に押して證とした手の形。日本振袖始二「人民に仇をなさじと手形の誓をなしけるに」。同「残らず手形を懸せば、巻軸は首領の三熊、左右の大手をしつかと押し」。(二)手形を押した文書。一般に證券・證文・切符の類。一代男八「身あがりも遊ばさず、手形の十年より外に、年切りまして」。男色大鑑一「大名がしの手形まで

腹がはりの弟に譲り」

てがね 手金。手もとにある金。自身の所有金。冥途飛脚中「手金とては、家屋敷家財かけて十五兩」

てがひ 手飼。自分の手で飼ふこと。又、そのもの。轉じて、人の子を養ひ育てるにもいふ。

手がわるし しかたが悪い。仕打ちがにくい。源氏烏帽子折四「吞逃げするは手が悪い」。吉野都女楠一「逃げ入らんとする所を、是々彦さん手がわるい。幾

瀨心を盡すとは偽りか、何處へいかにす」

てき 的。敵。廓詞。あひて。相方。一代男二「てきもをかしき奴にて、古里の山の神見て瘧慄うたら是にて落すべしと笑うて。同六「是程に思ふとは、よもや敵様はしらすやと申せし」

てきあきんど 出来商人。俄かに成功した商人。忽ちに身代をこしらへた商人。永代藏六「鐵山の請出して次第分限の人も有り。これらは近代の出来商人、三十年このかたの仕出しなり」

てきしゆつとら 出来出頭。成上りの出頭。俄かに權勢を得た家臣。武道傳來記七「南江主膳といふ出来出頭に適合ひけるに」

てきぢぢら 出来地藏。急に地藏になつたもの。物種集上「米に成るべき庭のすゑ石、出来地藏今この娑婆に顯れて」てきてん 傳。嫡傳(ちやくでん)。正統を受け傳へること。嫡々相傳。新可笑記二「安部の晴明が傳、凡そ三千世界を見透し名譽の陰陽師」てきない 苦しい。せつない。つらい。加賀、越後の方言。宵庚申上「喉につまつてぎつち〜。てきないこんでごは

りまする」てきなりひら 出来業平。俄仕立の業平。急ごしらへの好い男。一代男二「初冠して出来業平と申し侍る」

てぎね 手杵。中央の握りだけを細くした棒狀の杵。かちぎね。

てきぶげん 出来分限。俄かに富豪に成つた者。にはかぶげん。物種集上「此島にはかに出来分限あり、中濱の砂かね迄もつかみ取」

てきぶんげん 出来分限。前條に同じ。

てきふんべつ 出来分別。俄かの分別。急の思案。五人女五「出来分別にて息も引きとらぬうちより、女は後夫のせんさく」

てきまくら 手木枕。大句數上「賀の歌の枕言葉や手木枕、五十の秋に襦袢一まい」

てきもの 出来物。(一)にはかごしらへの、つまらぬもの。晝夜用心記四「目利研屋に見すれば、本播磨といふ出来物なり、五匁や三匁には主あるべし」。(二)立派に出来た物。(三)腫物。てぐさ 手でなぐさみすること。てなぐさみ。つれづれに何かと手を働かせること。

てぐすねひく 手薬煉引くか。「てぐすね」は矢筈のすべらぬやうに弓弦に引く脂であるといふ。轉じて活劇の準備を十分にすることに譬へる。手に唾するといふ類。出世瀧徳上「くどり襟をすぐすね引き、女房しつかと引つとらへ」

てくだ 手筈。(一)人をたたらすてだ。いつはりの手段。大矢數二「明けぬれば暮るゝ事とは手筈の文」。一代男六「一座のこなし、文つかけ高く、長文の書き手、物を貰らず、物を惜まず、情ふかくて、手くだの名人」。(二)間男(まをとこ)。密夫。かくしをとこ。二代男二「隠し男を補橋(うちかけ)のうしろに包み、(中略)手筈も斯かる賢き人とありたきものと、見る人の義む」。一代男四「本のは手くだの男につかはし」

てくだをとこ 手筈男。前條(一)に同じ。

一代男七「此の人、勤めの外は忘れても人に手も握らせず、(中略)手くだ男はよもやあるまじきと思ひしに」

てぐみ 手組。軍隊で部隊の組合せをいふ。轉じて、仲間。むれ。連中。男色大鑑七「いつもの手組の客まじりに、大鶴屋の二階座敷に冷酒の限りもなく」

てくら てくだ(手筈)の(一)におなじ。て

てぐらまぐら 手暗目暗。あやふやに。前後の思慮もなく。ごまかすさま、又、むやみなことにいふ。織留五「艦から舳へ身體のかちを取つて、手ぐらまぐらと年波を渡りける」。同六「毎月晦日に算用あひを聞けば、物毎せはしきゆゑに、手ぐらまぐらの銀まはしもならず」

てぐらもの てくら(手管)のあるもの。ごまかしもの。

てぐり 手繰。手て繰りよせること。

たぐり。手から手に物を受け渡して運ぶこと。大下馬「烟鍋鹽辛壺を手ぐりにしてあげさせ」。てぐりあみ(手繰網)の略。手で繰つて使ふ打網。武遣傳來記「豫州宇和島といふ所に手繰の網をおろさせ、女まざりに今やひくらん」

てぐりかせ 手繰網。繰は「ぬのいと」又は「あさいと」。手繰にした麻絲。大矢數「手繰繰霞たつ鳥と成にけり、人間はじめて姑懸り」

て

たといふ、大阪伏見間往復の早船をもいふ。いまぬね。

てくるぼう 出来坊。出狂坊。てくのぼう(木偶坊)。人形。くぐつ。てく。大矢數「出来坊さいの川原にすたりたり、さあ、覗く箱根路の末」。大下馬「越中の二郎兵衛と名づけし出来坊泰(ゆたか)に出づれば」

てくろ てくだ(手管)の同じ。てくら。大矢數「晝は消えつゝ逃尻聲、五月影親仁の前に手くろして」

てくろもの 「てくらのもの」に同じ。虎溪橋「手くろ者關はゆるさじばくち打、勘當帳をたからかに讀む」

てこねる 死ぬ。こねはん(御涅槃)から、「こねる」と轉じ、「てこねる」ともいふよし。死ぬことを罵りいふ。五人女「こなたのお内儀さまはと尋ねけるに(中略)、旦那にがい顔して、それはてこねたと言はれける」

てこのしゆ 手子衆。木槌の衆。役卒。下まはりの勞役者。刃は氷の朔日上「鍛冶屋のてこの衆、てつかりこころり、ちんからり」

てこのぼう 「てくのぼう」でくるぼうに同じ。丹波與作上「堺町木挽町の、て

んつく〜でこのぼう、辨慶や公平が「てこのもの 挺者。「てこのしゆ」に同じ。

てざし 手差。手でさし示すこと。ゆびさし。又、てだし(手出)。ふれること。てさま 出様。出るとき。でしな。

てし 弟子。弟子珠の略。數珠の珠の内、四箇の小珠の稱。孕常盤「大事の數珠勿體なくも氣にかゝる。(中略)でしとだつまの珊瑚樹ぞや」

てじな 手品。手のふり。てつき。てぎは。松風村雨束帶鑑「より絲しごく手品よく、手玉も優に獨樂まはし」。又、人の目をくらまして演ずる變幻の技術。人をたばかる工夫にもいふ。

てしまむしろ 豊島薙。攝津國豊島郡から産するござむしろ。てしまござ。一代女「豊島薙のせまきを片手にして敷き」

てしや 手者。技藝に熟達した人。手練者。大下馬「小浪の中へ突き落しけるに、遙かの舟にあらぬ。いかなる手者もだますにはと、大笑ひすれども」

大鍋にひじきを入れ、十枚の挽盆を一  
枚もそのまゝは置かず」

てじろみけ 手白三毛。猫の毛色にいふ。

三「隠居がたの手白三毛をかはゆがら  
るゝ人」

てずいらす 出ず入らず。ちやうどよく  
合ふこと。又、いづれにも間に合ふさ  
ま。冥途飛脚上「酒も三つ四つ五つ所、  
紋羽二重も出ず入らず」

てすぢ 手筋。世話を頼む人。てづる。  
つて。二十不孝「浮世も罷め難く、手  
筋聞出し、長崎屋傳九郎を頼み、死一  
倍の借金」永代藏「上がたにのぼり、  
手筋を頼み大名衆へあげて、大分の金  
子申し請けて」。俗つれづれ「此度の  
御望み我が手筋より調へさせ給はれ  
と」

てずまふ 手相撲。うでずまふ。腕押し。  
一代男五「更けゆくまで糸取。手相撲し  
て、折ふしは眠り」

てすりぶたい 手摺舞臺。手摺のある舞  
臺。殊に、人形操り芝居の舞臺。

てせんじ 手煎。自分て自分の身を苦  
しめること。墮胎薬を煎するといふこ  
とから、女の身の上にいふ。織留「男

と一つになつて、身の裸になる事はき  
ておき、後には手せんじする事、世に  
あるならひぞかし」(二)てかけもの。  
妾。松風村雨東帯鑑「是は都の月ぎり  
に、隠し置かれし手せんじや、なべと  
り公家の子は産めど、後腹痛ますのか  
たわれ舟」

てそだて 手育。わが手一つで育てるこ  
と。又、その者。てがひ。

てそぼくり てそぼり。手をもち／＼す  
ること。羞恥のさま。てなぐさみ。  
てだい 手代。商家で、番頭と丁稚との  
間に位する召使。一代男「御供申せし  
手代に、それとあればかしこまつて」

てたいまつ 手松明。小さい松明。手に  
執つて焼く對松。

てたち 出立。出で立つたさま。いでた  
ち。よそほひ。扮装。男色大鑑「五十  
餘りの親仁、若き男壹人、大脇指の出  
立、町人とは見えける」

てたちたく 出立焼く。出立の用意に朝  
飯を焚く。兩吟一日千句「跡つけの箱  
根の山を別れ行き、出立焼いたるしろ  
水の坂」。一代男三「今までは手枕、さ  
だかならず目覺めて、出立焼く女に、  
あれは如何なる人の唄ひけるぞや」

てたちばえ 出立榮。いで立つたさまの  
立派なこと。装ひをして一層美しきの  
増すこと。

てだま 手玉。手の飾りにつける玉。松  
風村雨東帯鑑「墨紙を押廣げ、より絲  
しごく手品よく、手玉も優に獨樂ま  
はし」。又、お手玉。

手玉のすくひあみ 置土産「田夫なる  
男の、小さき手玉の掬網に、小桶を持  
添へ、(中略)何ぞと見れば棒振蟲、こ  
れ金魚のゑばみなるが」

手玉につく 「手玉にあげる」ともいふ。  
手玉のやうに投げあげる。一代男四「手  
玉につきて、あぐる時息はきれ、おろ  
さるゝ時息づき」

てだらひ 手鹽。手水鹽。小さい洗面用  
鹽。

てだる 手樽。つのだる(角樽)におな  
じ。その條を見よ。重井筒上「竹は手樽  
を振つて見る、酒の通ひ路引きかへて、  
夫は北へと出でける」

てだれ てだり(手足)の轉といふ。技藝  
のすぐれてゐること。遊里では客あし  
らひの巧みなこと、又その女にいふ。  
一代男五「寝懸姿のうつくしく、是は動  
きがとられぬと首尾の時の手だれ、わ

ざとならぬすき也」。椀久一世物語上「椀久も其の時分は、手だれ共にもみ入られて、大方に帥になつて」

てちがふ 出違ふ。入れちがひに他出す。特に、わざと留守にすることなどいふ。胸算用ニ「我等が身代知らぬ人はもしは借錢乞はれて出違ふかと思ふもあれば氣味が悪い」

てぢやや 出茶屋。出見世の茶屋。路傍に出した茶屋の支店。兩吟「日千句」すみよしの出茶屋はどうも動かれぬ、三里あようでにじる蛤。二十不孝ニ「仕合せなれば直に出茶屋の女に戯れ、酒にその目を暮し」

てつかい 鐵粉。空中におのが姿を吹き出すと傳へられてゐる仙人。姓を李といふ。人と爲り魁梧、早く道術を得た。蝦蟇仙人とともによく晝廻とされる。宵庚申上「煙管くはへて吹く息に、鐵粉が鐵を延ばしけり」。一代女ニ「昔の姿に返るは、女鐵粉といはれしは、小作りなる生れつききの徳也」

てつかい 大きい。いかめしい。甚だし。薩摩歌上「てつかく冷ゆる寒國の髭に氷柱の朝嵐」

てつかい がたけ 鐵粉綠。攝津國武庫郡

須磨浦の西方、鉢伏山と對峙してゐる。高さ約七百尺。源平の古戰場。

てつかちけない 次條に同じ。用明天皇職人鑑四「御寶殿よりつかちけない光り物が、鉦紫の方へ飛び」

てつかちない 非常に大きい。でかばちない。二枚繪草紙上「向臈からでつかちない光物が飛んで出で、巾著の扉が八文字に開け」

てつかひ 手使。手くばり。手都合。てはず。

てつかり どつかり。しつかり。重いものがすわり、又は踏まへてゐるさま。雪女五枚羽子板中「押込め乗込め米俵、でつかり踏まへた大黒々々、大黒舞とはやされて」

てつかん 鐵眼。「てつげん」を見よ。

てつきう 鐵橋。鐵弓。細い鐵條で綱のやうに、又格子のやうに作り、物を爰るに用ひる具。橋のやうに造つて脚を附けたものもある。てつき。双は氷の朔日上「煮ても焼いても嚼まれぬは、鐵橋あぶりこ鐵火箸」

てつく 重五。疊五。雙六で、采の目が二つとも五の出ること。でく。出世景清ニ「側にありける雙六盤(中略)、で

つくともせぬ丁稚めが、手柄しさうに見えたれども」

てつくわきにぎる 鐵火を握る。赤く焼かれた鐵を握る。火起請をいふ。即ち、罪のないものは之を握るも害を受けないといふ。双は氷の朔日上「誓文偽りな」と見る前で鐵火を握れ。心に誠あるものは氷よりも冷やかなり」

てつけふだ 手附札。骨牌の用語。手をつけた爲に、引き負ふ札。お手付札。大職冠四「鹿相して後悔すな、手つけふだじや」

てつげん 鐵眼。(一)禪僧、鐵眼道光のこと。攝津國瑞龍寺の開山。佐伯氏、肥後の人。初め一向宗の教を取、後、黄檗山に入つて木庵禪師に教を受く。天和二年二月寂す、年五十三。大矢數三「新地の所取立て、寺、鐵眼のちいさい口からふかれたり」。(二)鐵眼建立の寺即ち瑞龍寺のこと。俗に釋迦堂ともいふ。男色大鐵七「その夜詫びて鐵眼の鐘の鳴る時、少し夢結びけり」

てつきつ 鐵札。鐵製の札。閻魔王臨で、地獄に墮すべき悪人の名を記すといふ札。金札の對語。

てつしよく 鐵職。鐵を扱ふ職人。鍛冶

て

職。二代男五「都の吉野は鐵職に見え、江戸の尾崎は病難人に身を任す」とは、一代男卷五の一、小刀鍛冶の弟子に吉野が情をかけた話に據つたと見られる。

てつせんくわ 鐵線花。有毒の蔓草。夏季、青紫色又は白色の大形の花を開く。てつせん。てつせんれん(鐵線蓮)。又、紋所の名。

てつち 重一。雙六で、二つの采の目に、何れも一が出ることを。調一。

てつち 丁稚。商家などに年季奉公する若者。又、一般に奴僕、小草履取などを稱し、更に子供を卑めてもいふ。一代男五「廣い京にもならびなき小草履取、諸人の目にたつ僕(てつち)なり」

てつづつ つたないこと。不調法。不束。薩摩歌中「針道違ひ着憎しと、手づつの浮名は取るまいとよ」。背庚申上「生花も手づつながら間に合はするも奉公」

てつづつきん 手づつ頭巾。手縫ひの拙い頭巾。不出來な頭巾。菅原傳授手習鑑三「私が縫うた手づつ頭巾」

てつづつば 鐵鐙。鐵製の鐙。一代女六「中古の鐵鐙鐙さらへの目貫」

てつづつみ 手鼓。小鼓のこと。撥を用ひ

ず、手で打ち鳴らすので稱するといふ。てつぼうたいしやう 鐵砲大將。鐵砲を執る隊の頭。鐵砲組の大將。武家義理物語三「弓大將に隼人とはいへるあり、又鐵砲大將に外記といへるあり」

てつぼう 鐵鉢。僧侶の食器とする鐵製の鉢。もと瓦で造つたもの。てつべい てつべん(天邊)の轉。兜のいたゞき。又、人の頭の頂。雪女五枚羽子板下「七草叩いててつべいわか水、裸の花聲」。傾城酒吞童子「てつべい、そつばう、肩骨、胴骨、天窓の鉢」

てつま 手爪。手妻。手さき。又、手さき仕事。手先の巧み。大矢數四「花の香も手つまのきかぬ膾皿、鯛の櫻は直か焼にせよ」。榮花咄四「音曲又は手妻の拍子利きにて、殊更一節切の名人」。俗つれぬ。三「手づまの利きし人は間もなく數釣りける」。又、てじな(手品)。

てつら 出類。顔出しすること。出席を罵つていふ。てつわ 鐵輪。懷視二「昔の鐵輪は三足の是は一足も見えねど、尾の隠れぬが氣の毒」

ててうち 丹波栗のこと。おのづから種を出て落ちる栗の意で、「てておちぐり」といひ、それが「ててうちぐり」と轉じ、更に「ててうち」と約されたといふ。博多小女郎上「おんらが在所は、奥山のとてうちもの、てんぐんぐりぐり栗の木の根を枕にころび寝」

ててごぜん 父御前。父の敬稱。ててなしがね 父無金。元手なしで儲ける金銀。資本なしの利益金。傾城酒吞童子三「二百余人の玉蔓、夕べに産みいだす、てなし金の攫み取り、茨木童子と名に高く」

ててなしご 父無子。父のわからない子。私生兒。ててら ち(父)のこと。雪女五枚羽子板上「てらからくらにちいばよくさくさい」

ててら ふんどし(禪)。男の下帶。ててれ。又、襦袢。膝きりの着物。二代男六「横に長き大盥に、女郎も同じ枕に、二布てら(れ)にうちとけて、何程か湯を水になし」

ててれ 前條を見よ。てどほし 手遠し。手もとから遠い。及びがたく遠い。身分などの相違にいふ。二代男三「禿にすがりてお名を聞きわけて、手遠き戀の思ひ立ち」



手と身になつての思案 身一つになつての思案。身外無一物になつてからの分別。永代藏五「俄に昔の寶寺を祈る甲斐なく、手と身になつての思案、何とも埒の明かぬ世渡り」

てとり 手取。相撲の手の巧みなこと。

又、その力士。二十不孝五「上手の手取、在郷の力業、見て面白さはぞかし」

てどり 手取。手取金の略。諸入費を引いて實際我が手に入る金。二十不孝「千兩のものを手取は四百六十五兩」

てとる 手取る。手を取る。手を引く。俗つれ五「あの者を大名の御隠居に仕立て、九軒の帥ども手とらして一興とありしに」

てにつぎ 手日記。手びかへの日記。手帳。一代男一「五十四歳まで、戯れし女三千七百四十二人、少人の弄び七百二十五人、手日記にしろ」

てぬき 手抜。手を抜くこと。ひまをつくること。手をやすめること。

てのうち 手内。自分分のもの。特に、施しにする米・錢など。釋迦如來誕生會四「我等風情まで、手の内で施さば、曲事なりとの言ひわたし」(⇒うでまへ。

技倆。(⇒案の内。成功疑ひないことに

いふ。手の見えたる男 素姓・身代などのわかつた男。お里の見え透いた男。一代女二「妾自慢して手の見えたる男には言葉もかけず」

てのもの 手物。(⇒自分のもの。自分の手に入つたもの。(⇒自分の得意とするもの。得手のもの。

てのもの 手者。自分の部下。てした。手のよし 身なりなどのよい。風俗の美しい。織留四「其の跡から手のよき一連、あれはどこ衆といふ。あれは奈良からの参り、皆歴々に見えてから、それは〜始末なる」

手のおわるい 前條の反對語。品のわるい。又、やり方の悪い。仕打ちのにくい。萬文反古五「格子の先にて、手のわるい女郎のくわたいに」。吉野都女楠四「是れ且那衆、はて手のわるい猫ねいり」。

「手がわるし」參照。ては 出端。立ちいでようとすする折。又、能樂・芝居などで、役者が登場する時に用ひる囃子や唄をいふ。一代男三「品之丞が出る端の唄に人並に頭をふつて」

てばしかし 手捷。てばしこし。手が敏捷に働くさまにいふ。武道傳來記七「九

郎治を水もたまらず泡となしぬ。手ばしかく仕舞ひ」。俗つれ五「料理人手ばしかく、煮方の者は火吹竹を取り廻し」

てばしきこと 手ばやい事。てばしこい事。「てばしき事」の誤かといふ。織留四「その見事さ早さ(中略)、扱これをあへる事大半切に入れ、鉄にてこの手ばしき事見てゐるうちなり」

てばまり 手陥。自分で穿つた穴に、自分が陥ること。

てはらばひ 手腹道。手と腹で這ふこと。ゐざり(壁)のさまにいふ。

てはん 手判。關所の通行券。名主・五人組などの證印あるもの。丹波與作上一「白須賀ちよいと越えて、手はんござるか振袖に、(中略)悪い目うてばはんをとり、元の京へ立歸る」。もと、手に墨を塗つて證として押すこと。又、自筆の書き判。

てはんまひ 手飯米。自辨の飯米。食料を自辨すること。

てふはながた 蝶花形。紙で蝶の形を折つたもの。祝宴の銚子などに飾りとして附けるのは、蝶が酒毒を消すと傳へられるからである

て

てぶり 手振。(手)に何も持たないこと。

徒手 てぶら。永代藏「心は働きなから、手振で掛る事は、今の世の中に取手の師匠か、取揚婆々より外に銀になる物なし。出世瀧徳上「金銀にうとまれ、手ぶりになつたる我なれば。」(と)もびと。従者。もと道具を持たないお供の意。國性爺二「お先手の手振の衆、ちやぐちう左衛門・東蒲塞右衛門」

てぶろうぐひす 手振簷。聲を立てず、手ぶり様子で意味を示すといふ洒落。

手ぶりはお供の手振にかけてゐる。油地獄上「随分叔父が目に懸るなど、いひたけれども侍氣、聲せぬ夏の手振簷」てぶるまひ 出振舞。我が家から他所へ出て饗應すること。他所に人を招いて振舞ふこと。一代女「諸國の侍衆又はお年寄られたる方を、東山の出振舞の折ふし」

てぼそ 手細。頬冠などに用ひる絹の布。男色大鑑六「編笠をぬげば、紫の手細にて冠して顔は見せざりき。俗つれん」三「舞臺子の洒



落て紫の手細取り捨て、男なりけるも面白し。又、江戸方言に、縮帽子をい

てほんがみ 手本紙。手本を書くに用ひる紙。一代男「手本紙さゝげて、懼りながら文章をこのまん」。又、手本の稱。國性爺二「和漢女の手本紙、筆にも寫し傳へたり」

てまだう 手間どつて面倒なといふ程の意。徒勞(無駄)になることを「だうな」といひ、保元物語に「矢だうな」「だうな」と縁があらう。佐々木大鑑二「弱き平氏の侍、一人づつ殺さん事、てまだうなりと、盛綱は熊手を提げ、三百餘人乗つたる舟の船床に打懸け」

てまたし 手全。手がたい。おとなしい。實直なさまにいふ。織留六「しやれたる女を成程手またく作りて、物とりの腰元、是れは初めの程人の懐子のやうに見せて」

手先づ遮る 和漢朗詞集、春の部、曲水の宴の詩句に「礎石運來心竊待。牽流過過手先遮」とある。堀川波鼓上「手まづさへぎる盃の、母甲斐に私から、お

炯を見て」てまはし 手廻。手もとのくりまはし。やりくり。戀八卦柱曆下「預りの八百

目、たい置くよりはと、少し手まはし致し、急にはどうも調はぬ」

てまはり 手廻。手ちかかに侍するもの。側近の従者。武家義理物語「手まはり

の侍二人めしつれて。てまひま 手舞。舞のてぶり。まひのて。

てまひま 手間隙。手間と隙と。ひま。森門松中「五百貫目に間のない金、手間ひま入らず儲け溜め」

てまへ 手前。(手)自分のしごと。自家の事情。一代男七「手前取りこみ、早々申し残し候。(と)しかた。わざ。技倆。武道傳來記六「三手の矢五本中り、殊更手前見事なるに」。特に、茶を立てる所作。一代男七「手前のしほらしき、千野

利休も、此の人に生れ替られしか」。人の見る前。人前。一代男六「太夫手前の全盛、少し前方なるおかた狂ひの様に見えて。(と)生計。經濟狀態。てまへがね 手前銀。手前の銀。自分所持の金銭。

てまへさいく 手前細工。自家の細工。自分の手くする細工。

てまへさいく 手前細工人。自家の細工人。店つきの職工。永代藏「數十人の手前細工人立並び、即座に仕立て」

てまへしや 手前者。手前の都合よろしい人。家計のゆたかな者。財産家。永代蔵三「伊豆屋といへる手前者自然と倒れ」

てまへのかぶろ 出前の禿。遊里の詞。間もなく一人前の遊女として、店に出ようとする禿。店に賣り出す前の禿。置土産二「頓て出前の禿、我身を人のものにして、しどけなく腰まで裾のまくるゝもかまはず」

てまへのぢよろう 出前の女郎。遊里の詞。勤めの年が明けて、間もなく廓を出ようとする女郎。廓の生活から出る前の遊女。二代男五「勤めの程も今年に足らず、何處にても出前の女郎は淋しくなるものぞかし」

手前のならぬ人 金銭の都合のわるい人。永代蔵四「いかに利發がほしても手前のならぬ人の云ふ事聞く者なし。愚にても福人のすることよきに立つなれば」。次條参照。

てまへよし 手前よし。金銭の都合よし。又、その人。富める人。織留一「門徒寺の手前よしに、此の行先の師走には銀子五百目御貸し給はれと」。次條参照。てまへよろし 手前宜し。前條に同じ。

身代よろしい。金のある人にいふ。武道傳來記四「泉州堺の手前よろしき町人の娘を呼びむかへ、様々我がまゝ重なりしを」

てまり 手鞠。○手鞠櫻の略。○手鞠花の略。即ち、あぢさゝること。てまりこ 手鞠子。手まゝの櫻を突く子。てまりざくら 手鞠櫻。櫻の一種。手ま

てみせきん 手見せ禁。將棋の語。手に持つ駒を見せぬこと。壽門松甲一包む涙も手見せ禁、命手詰と見えにけり」

てみそ 手味噌。手前味噌と同じ。自慢。てめ 手目。手盛の意で、賽の目を自分勝手に出す義からいふか。又、手前四の意か。一代男四「多く手目のならぬ御方は彼の雪隠に入りて、それより内へ通ひありて、事忙しき出合ひなり」

てもめ 手もめ。小腹をきること。「もめる」は物をつかふ意。我が手から入費を拂ふこと。油地獄下「太鼓過ぎてと囁くは、女の手もめのふるまひ客」

手盛を喰ふ 欺かれる。一ばい喰はされる。

てやり 手槍。柄の細く短い槍。武道傳來記五「手鎗提げてかけ出、ぼつ詰めて

突きとめ」  
てゆふぎり 手夕霧。夕霧の狂言を自分で演ずること。自分で打つ夕霧の芝居。出世瀧徳下「坂田藤十郎が夕霧を、ま一度見たいと思うたが、この紙子で手夕霧を仕る」

てら 寺。てらせん(寺銭)の略。博奕をする場處の借賃。賭博場の主へ支拂ふ口銭。懷硯二「布袋屋骨牌の(中略)、てらを打たせけるに、是さへ金子十兩に餘りぬ(中略)、てらの内より金子二歩と銭二百貫ひて」。萬文反古四「てらばかり十五六貫目春中に取り申候」

てら 寺。てらせん(寺銭)の略。博奕をする場處の借賃。賭博場の主へ支拂ふ口銭。懷硯二「布袋屋骨牌の(中略)、てらを打たせけるに、是さへ金子十兩に餘りぬ(中略)、てらの内より金子二歩と銭二百貫ひて」。萬文反古四「てらばかり十五六貫目春中に取り申候」

てら 寺。てらせん(寺銭)の略。博奕をする場處の借賃。賭博場の主へ支拂ふ口銭。懷硯二「布袋屋骨牌の(中略)、てらを打たせけるに、是さへ金子十兩に餘りぬ(中略)、てらの内より金子二歩と銭二百貫ひて」。萬文反古四「てらばかり十五六貫目春中に取り申候」

てら 寺。てらせん(寺銭)の略。博奕をする場處の借賃。賭博場の主へ支拂ふ口銭。懷硯二「布袋屋骨牌の(中略)、てらを打たせけるに、是さへ金子十兩に餘りぬ(中略)、てらの内より金子二歩と銭二百貫ひて」。萬文反古四「てらばかり十五六貫目春中に取り申候」

てら 寺。てらせん(寺銭)の略。博奕をする場處の借賃。賭博場の主へ支拂ふ口銭。懷硯二「布袋屋骨牌の(中略)、てらを打たせけるに、是さへ金子十兩に餘りぬ(中略)、てらの内より金子二歩と銭二百貫ひて」。萬文反古四「てらばかり十五六貫目春中に取り申候」

てら 寺。てらせん(寺銭)の略。博奕をする場處の借賃。賭博場の主へ支拂ふ口銭。懷硯二「布袋屋骨牌の(中略)、てらを打たせけるに、是さへ金子十兩に餘りぬ(中略)、てらの内より金子二歩と銭二百貫ひて」。萬文反古四「てらばかり十五六貫目春中に取り申候」

てら 寺。てらせん(寺銭)の略。博奕をする場處の借賃。賭博場の主へ支拂ふ口銭。懷硯二「布袋屋骨牌の(中略)、てらを打たせけるに、是さへ金子十兩に餘りぬ(中略)、てらの内より金子二歩と銭二百貫ひて」。萬文反古四「てらばかり十五六貫目春中に取り申候」

宵庚申申「八百屋伊右衛門、淨土宗の願手、了海坊の談義に打込み(中略)、大阪中の寺狂ひ」

てらこ 寺子。寺子屋に入った子。寺小屋に通ふ子。

てらこしやう 寺小姓。寺恩從(てらこしよう)。寺の住持の側に仕へる小姓。

ちご(兒)。一代男三「竹一村の奥に、ちらりとお寺恩從の見えける」。萬年草上

「お寺小姓の兒櫻、兒文珠の御相傳」

てらことり 寺子取。寺子を取ること。

弟子入に應ずること。又、その人。でしとり。傾城酒吞童子三「年頃六十あまりの女房は、柳の馬場のおこうと申す綿摘み教へる寺子取」

てらせん 寺錢。燈を「照らす」ための料の義であらうといふ。博奕宿の主に拂ふ口錢。てらきん。てら。

てらどうぎやう 寺同行。寺參詣の同行者。佛寺に常に連れ立つて參る仲間。

永代藏五「柿染の夏羽織、袖の鼠喰ひを(中略)、寺同行の仁左衛門殿へ進ずべし」。どうぎやう(同行)参照。

てらともだち 寺友達。寺子屋通ひの友だち。寺子屋友達。學友。源氏烏帽子折「古への寺友達、(中略)澁谷の金

王丸効顏疑ひなし」

寺をあぐ 卒業する。手習を仕上げて去る。織留「すこし手を書くを種として、所の手習子ども預り、(中略)、ひとり寺をあぐれば又悲しくなりて」

てりふり 照降。晴天と雨天と。轉じて、人の心の變りやすいのに譬へる。

てりふりあめ 照降雨。照ると降るとも見定めつかぬ雨。又は水の朝日上「てん〜天氣も照降雨に、五十餘の女房の、とつて置きをば濡らさじと」

てるてひめ 照手姫。「常流小栗判官」の女主人公。横山郡司の娘。小栗判官兼氏が流人となつて相模に居た時に戀し、兄のために妨げられたが、後常陸小萩と假名し、美濃青墓の長の許に水仕奉公を勤めてその戀を遂げる。傾城

反魂香中「いはで心の熊野路や、照手の姫のやつれごとき、常陸小萩も夫ゆゑに

てれふれなし てりふり(照降)無しのこと。晴雨に拘らず。確かに。萬年草中「てれふれなしに七百石、すればお前も

お手柄」

てれめんていな 丁列綿油。舶來のテレピン油。樹の脂から製するものといふ。

葡萄酒語 teadithina の訛。大職冠三

「玄理を招き、てれめんていな。ばじりこん、さんたらにいによう萬能符と、膏藥の名を言へば」

てれん 手練。人をたばかる手段。てくだ。傾城酒吞童子三「此の長が胸一つで斯うからくんだ。(中略)この様な手練をせねば分限者にはならぬ」

てをんな 出女。驛女。宿駈の飯盛女。賤しい賣女。

おぢやれ。おぢやれ。一代女六「天の岩戸の小闌より出女の面白々と見え

て。胸算用「東海道關の地藏に近き旅籠屋の出女せしとき」

てん 點。(一)灸點の略。灸をすゑる所に記す點。又、灸をおろすこと。今宮心中「風氣もなし點を致さう、硯々といひければ」。時刻。時刻。又、時刻を數へるにいふ。姫山姥「明日の御立ちは明け六つ、其の點に合ふやう。百日曾我「御發向は寅の一點」

てんいち 天一。天一神の略。一に「な



な を で

て

かがみ」といふは、一方に長く滞る義で、長神であるといふ。この神の遊行する方角を塞がりといひ、この方角を犯してはならぬとしてある。次條参照。  
てんいちてんじやう 天一上。曆の詞。天一神の天にやうといふ日で、癸巳の日から十六日間の稱。この間は四方へ出て行くに障りなしとする。戀八卦柱曆下「思へば天一天上の、五すい八せんま日もなし」

てんうつ 點打。批點を打つ。批評する。非難する。傾城酒吞童子曰「家内にての我儘に、點打つ人は有るまじと思ふは」  
てんうん 天運。天の運行。曾我會稽山五「運關三百六十輪、天運三千六百周、頼朝公の武運に和し」

てんがう ぶざけること。いたづら。じやうだん。たわいないこと。男色大鑑四「前後辨へず歎くにぞ(中略)、てんがうにとは云ひ難く、立ちながら二世ぞと詞を固め。孕常盤三「いやらしい何ぞいの、てんがうも折による。尙ほ、「てんがふ」及び、それと熟した語の條を見よ。

てんがうかはく 「てうがう」をする。ぶざける。いたづらする。今宮心中上「お

きさに心ある奴が、てんがうかはくに紛れない」  
てんがうねんぶつ ぶざけて人を笑はせるためにする念佛。おどけ念佛。天網鳥上「あれ一丁目からなまいだ坊主が、

てんがうの念佛申して来る」  
てんがうのかは 俚言集覽に「いらぬ事をするをテングの皮と云」とある。大矢數四「仁王門よりてんかうの皮、花の咲く頃しも歌の三味線の」

てんがうのみ ぶざけて酒を飲むこと。一代男五「昔心易きつき合ひ、見知つた紋付の小盃にて、てんがう飲み、とやかく云ふうち」

てんがく 田樂。古く、耕作の勞を慰めるために、農夫などの演じた一種の舞樂。後には一藝となり、法師の業となつた。てんがくどうふ(田樂豆腐)をいそぐ塗直し物、でんがくやさめて嵐の通るらん」

てんがくぐし 田樂串。田樂豆腐の串。二代男五「田樂串を一把づつやつて通る」とは、乞食への施しである。

てんがくどうふ 田樂豆腐。長方形の豆腐を串にさし、味噌を塗つて炙つたも

の。でんがく。  
てんがくほふし 田樂法師。田樂を舞ふ法師。兩吟「日千句「きり能や一足飛に越えぬらん、田樂法師かるき春日野」

てんがくや 田樂屋。田樂豆腐、又は田樂焼など賣るを業とする家であらう。二代男六「田樂屋の甚吉らも、晝は袖なし、夜は高宮織に着更ゆるも可笑し」

てんがくやき 田樂焼。魚・菜などに味をつけた味噌を塗つて焼いたもの。てんかげい 天下藝。天下一の藝。天下に雙びない藝。大矢數三「句毎の花誰か譜(め)ざらん天下藝、鳥も詐もかへり見ぬ山」

てんかぢやや 天下茶屋。殿下茶屋。攝津國西成郡住吉街道にある茶屋。豊太閤殿下が堺へ往復の途次屢々立寄つた故の名といふ。

てんがふ 轉合。「てんがう」に同じ。大矢數四「袋といふも雲なり風也、轉合に大黒殿の中かへり」。二代男一「貰吸ひ付けて煙の輪などを吹き出し、または鼻から通はせ、てんがふの有るほど盡して後」

てんがふがき 轉合書。ぶざけて書きし

て

したるもの。戯著。一代男跋「かいやり捨てられし中に、轉合書のあるを、取集めてあらましに寫し書」

てんがふのかは 轉合の皮。「てんがうのかは」及び「てんこの皮」の條參照。大矢數二「削ては葎の宿の鳥賊の甲、鶯など一羽轉合のかは」

てんきう 典廐。左右馬寮の唐名。典廐令。恭盤太平記「背より參る筈なれども、典廐の御所に御用有つて遅參せり」

てんぐかせ 天狗風。つむじかせ。旋風。萬年草上「男女破戒の御告め、俄に吹來る天狗風、岩も枯木もどうくどう」

一種。とみ  
(當)。とみ  
つき(當突)  
路傍で往來  
の人を招い  
て試みるも  
のなどもあ  
つた。下文  
を見よ。二  
十不孝三  
「己は勝間  
邊の海道端に出で、漚紙を敷きて、曲



天狗額母子

物に一から十五までの木札を入れ、右の手に錐を持ちて、天狗頼母子と名附け、道行く人をたらし、馬かた。古着買・味噌澁賣を招き、是も博奕業にて相取を拵へ、愚なる人の錢を取りて。置土産五「鼻の高い子供を揃へて、是ぞ天狗頼母子突當て次第の遊興と」。むじん(無盡)の一種。當籤して金を取つたものは、その後の懸金を出さぬことにした頼母子講。天狗無盡。とりのき(取退)むじん。「天狗」と冠するのは、天狗太郎坊の愛宕神社で初めて興行した頼母子講の形式である故にいふか(賭博史參酌)。俗つれど「愛宕の天狗頼母子とて、あまたの御機嫌取の男ども立ち騒ぎ(中略)銘々の仕合せ次第に取り當りし」。萬年草中「頼母子の懸錢七十四文あつたもの、定めて狗竇に掴まれたてござらう。正眞の天狗頼母子ぢや」

てんこ 天鼓。大矢數二「亂杭を打てば露ちりて、さては天鼓か先陣の跡」。諸曲の「天鼓」の故事か。

てんこつ 天骨。自然にそなはつた風骨。天性の才能。

てんこのかは 天鼓の皮か。いらぬ事をするのを「てんごの皮」といふ(俚言集覽)。「てんがうの皮」の條參照。大句數上「約束は先へまむしのむし印、てんこのかはを手ならひの中。兩吟一日千句「衣裳繪をたゞみよせては上細工、てんこのかはのうき草の花」

てんごふ 戲業。「てんがう」又は「てんがふ」に同じ。

てんじ 天字。神代文字をいふか。以呂波物語三「ほんじ・かんじ・わじ・天じ、一百億の文字を考へ、四十七字を選びつゝ」

てんじや 點者。連歌・俳諧などの批點を加へる人。判者。織留三「點取の巻してつかはしけるに、其頃の點者は百韻一句々々聞きかたを脇書にして明白なり」

てんじやうまゆ 天井肩。肩の作り方。元服後に、頭を濃く、末を薄く句はせたものであるといふ。よこまゆ。

てんしやきしゆくにち 天赦鬼宿日。曆

の詞。天赦日で鬼宿日に當る日。天赦日は一年中の最上吉日。春は戊寅、夏は甲午、秋は戊申、冬は甲子の日といふ。鬼宿日は、鬼宿(星の名、二十八宿の一)に當つて、その星の守護するといふ日。嫁娶の外は何事にもよい日。出世瀧徳下「只今曆詮索をすれば、明日は天赦鬼宿日、萬事揃つた大吉日」

てんじゆめ 轉手。「てんぢゆめ」を見よ。

てんしゆまい 天守米。城米とする、上等米の意か。一代女曰「朝夕も餘所は皆赤米なれども、此方は播州の天守米」

てんじゆめ 傳授物。文學、技藝などで口傳すべきもの。ならひもの。祕事。祕事を記したもの。又、大切に後に傳ふべき寶物。一代男「けふは傳受物の土用ぼしすると仰せられける(中略)、この中に女郎わか衆かための證文、大

てんしよく 天職。遊女の階級の一。てんじん(天神)の別稱。一代女「我れ天職勤めけるうちに、頼みに掛けし客三人までありしに」。榮花咄「五百貫目の幅にては天職も思ふ儘なり難し、まして太夫は及びもなし」

てんしるちる 天知る地知る(諺) 誰

も知るまいと思ふ事も、天が知り地が知つてゐる。「天知る地知る我が身知る」ともいふ。後漢書楊震傳の四知(天知、地知、我知、人知)の故事に基づく。戀八卦柱曆下「天知る地知るで、こつちこそ見知らね(中略)、あれが云ひこれ

てんじん 天神。遊女の階級の一。京阪

で太夫に次ぐものの稱。天神とはその揚代が廿五匁であつた故天神様の縁日にかけていふ洒落である。



江戸吉原の格子女郎に當る。太夫を上職といふに對して、天職ともいふ。梅女郎。うめ。一代男「天神、かこひ七人抓みて、誰に思はくもなく酒になして」。一代女「あれほど美しきはまたもなきに、天神になしけるは内證に悪しき事のありや」

てんじんからくさ 天人唐草。松竹梅を唐草にくづした模様であるといふ。胸

筑用「お仕著せは定めて柳煤竹に亂れ桐の中形でござる、(中略)、片脇には今に天人唐草目にしむなどと、内儀に物をいはす様に仕懸け」

てんせい 天性。天成。人爲に對して天然・自然なることにいふ。生得。偶然。おのづから。大矢數五「天せいくだる半夏生の水、溜池に一つの小島出現して」。永代藏「これらは才覺の分限にはあらず、てんせいの仕合せなり」

てんだいにうくわ 天台乳花。(てんたいにゆうくわ) 天台宗では五時教を五味に配し、第一時の華嚴經を乳味に配したのでかくいふ。百日曾我「せつたいに天台乳花の茶をせんじ、往來の人に施し」

天道見通し(諺) 天道は天の神で、「神は見通し」といふに同じ。大矢數四「男のあるにあの女七夕、しのぶ夜の月は天道見通しじや」

てんぢくらうにん 天竺牢人。天竺浪人。住所不定の流浪人。生玉心中上「母様の恩をはや忘れ、可愛げにおきはほんの天竺牢人」

て

夢幻といふ。李白の春夜宴桃李園序に「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢」とある。

てんぢゆ 天柱。てんじゆ(轉手)が正しい。琵琶・三味線の頭部にあつて、絃を巻きつける棒。傾城反魂香中「亭主誦へと三味線の、天柱に貌をすぢかひ身」

てんでんうつ 太鼓を打つ。特に、馬が陰莖で腹太鼓を打つをいふ。雪女五枚羽子板中「アレ馬がでん〜うつはいの。ア、こはやとぞ逃げにける」

てんと (副詞)とんと。全く。又、ずんと。この上ないさまにいふ。

てんど 出所。(一)人の出るところ。晴れの場所。人なか。戀八卦柱脛上「町中へも斷つて、でんどで耻をかゝせませす」。(二)おかみ。公儀。法廷。最後に出頭すべき處の意。出世瀧徳上「この惣兵衛と公事のみやのとぬかすげな。あはれでんどへ出やれかし」

てんど 顛動。物に驚いて心の平靜を失ふこと。びつくりして度を失ふ。動轉。百日曾我四「五戒十善の窓の前に

は、てんどうの霧立ちのぼり(中略)修行の天地にいたりたき愚痴の凡夫」。油地獄上「客はてんどどう花草も下女も

うるたへ」  
てんとぼし 天道千。日光にさらして干すこと。又、露店あきなひ。てんたうぼし。

てんとり 點取。連歌・俳諧などで批點の優劣を争ふこと。得點の多寡を比べて勝負すること。大矢數「點取に負けてのいたる暮寂し、又明後晚松かぜの音」

てんにんをどり 天人踊。歌舞伎狂言の終に踊つたものと見える。晝夜用心記四「狂言かぎりありて、天人踊の立並ぶころ、もはや見る事なし」

てんのあみ 天の網。かすみあみ(霞網)のこと。即ち、極めて細い絲で作り、高く張つて小鳥を捕へる網。ひるてん。一代男二「梢の小鳥をさはがし、天の網小籠にもちななどをなひかせ」

てんばつきしやうもん 天罰起請文。起請文に違へば天罰を蒙るといふので、契約を破る場合の起請文をかく呼ぶのである。天網島中「比翼の誓紙引きかへ、今は天罰起請文、小春に縁切り思ひ切る」

田夫なる男 いやしい、みすばらしい男。田舎男。置土産三「田夫なる男の、小さき手玉の掬ひ網に小桶を持添へ、此の

宿に來りぬ」  
てんぶもんまう 田夫文盲。無學の田舎者。曾我五人兄弟二「田夫文盲の和主らが嘲るは何事ぞ」

てんぼ 次條の略。置土産四「雨のふりしこる跡は風と見定め、てんぼに手をうち、思入の米買ひ一時あまり立續き」。永代藏「たのもしの入札(中略)、突き當りたる方へ家を渡すなれば、てんぼにして銀四匁と札を入ける程に」。てんぼ。てんぼ。

てんぼのかは あてもなくすること。てんぼやつあたり。でませ。まよ。女腹切中「そんな事に今まで歩いた事なけれど、てんぼの皮往つてのけう」。

吉野都女楠三「御法度を背きしは、いつそてんぼの皮巾着、お根付衆に咎められ、括られましたと申しける」

てんぼふ 傳法。攝津國の地名。大阪の西北郊外。傳法船などの語もある。

てんま 天満。大阪、天満天神社のある一區劃の稱。

てんま 傳馬。宿つぎの馬。又、てんまぶね(傳馬船)の略。  
てんまおほさかさんがう 天満大阪三郷。大阪の總稱。大阪を南北二組に分ち、



それに天満地方を入れての稱。

てんまがは 天満川。淀川の下流。大阪

天満橋あたりからの稱。今宮心中上「漕  
出て見れば天満川、市の側なる初甜瓜」

てんまこみ 傳馬込。船の名所。舳・楫の  
左右に在る出入口。かいのくち。博多  
小女郎波枕上「惣七奴が見えぬ。探せ  
探せ。コリアア〜爰に、傳馬込にとい  
ふ聲に」

天満に七つの化物 五人女ニ「天満に七

つの化物あり。大鏡寺の前の傘火、神  
明の手なし兒、曾根崎の逆女、十一丁  
目のくびしめ繩、川崎の泣坊主、池田  
町のわらひ猫、うぐひす塚の燃えから  
うす、是れ昔年をかさねし狐狸の業ぞ  
かし」

てんまはじゆん 天魔波旬。天魔におな

じ。波旬はその名である。悪魔。おそ  
ろしく強いもの。百日曾我三「天魔波旬  
と呼ばれたる曾我の五郎時宗を、御所  
の五郎丸が生捕つたり」

てんまぶし 天満節。淨瑠璃節の一。天

満八太夫の語り創めたもの。萬治から  
寶永の中頃まで流行した。

てんまぶね 傳馬船。大船に添へてある  
船で、人馬、貨物の陸揚げ、上船などに

用ひる。はしぶね。はしけ。あしつき  
ぶね。てんま。

天命を知る年 五十歳のこと。知命。五

十而知天命(論語爲政篇)。永代藏一  
「天命を知る年になつて、平生の不養生  
にて頓死をせられ」

てんもく 天目。天目茶碗。淺くて挿鉢

形に開いたもの。もと、茶家で抹茶を  
立てる時に用ひたもの。一代男ニ「もし  
御茶をまらばと、ゆとに天目置きて  
歸る」。薩摩歌上「天目にどき、しゆせ  
ん酒」。又、指物(さしもの)の名。

てんもくあたま 天目天窓。天目茶碗に

似た頭を罵つていふ。  
てんもくざけ 天目酒。天目茶碗に注い  
で飲む酒。茶碗酒。榮花咄ニ「天目酒も  
忘れて、盃の遣繰も覚え」

てんもくざや 天目鞘。槍鞘の一。天目

のやうな形したものを。薩摩歌上「白熊の  
天目鞘、これが秋田の佐竹殿」

てんもくだい 天目臺。天目茶碗を載せ

る臺。茶の湯の器。  
てんもくぢやわん 天目茶碗。「てんも  
く」を見よ。

てんもくとりげ 天目鳥毛。槍鞘の一。

鳥毛で天目形に作つたもの。天目鳥毛

鞘。薩摩歌上「天目鳥毛は同國柳川」

天目に竹窓 天目茶碗は茶家に用ひるも  
の、竹の窓も茶室につきものであるの  
で、かく二つ並べて諺のやうに用ひた  
ものか。二十不孝四「貫ひしものをひと  
つに炊けば、搗かぬ米あり、新米あり、  
赤米、眞搗き、小豆に限らず、様々の  
色なして、天目に竹窓、生あれば食あ  
りと腹ふくるゝに外の願もなし」

てんもくのみ 天目酒。五人女ニ「こなたに

飲むこと。天目酒。五人女ニ「こなたに  
は女酒盛、男とては清十郎ばかり、下  
下天目呑に思ひ出申して」

てんもくびしやく 天目柄杓。水を汲む

部分を天目茶碗の形に作つた柄杓であ  
らう。天下馬四「二郎兵衛は庭に下り  
て、天目柄杓を取つて呼吸(いき)つぎ  
の水飲む有様、舌の音して」

てんもくらひゐ 電目雷威か。傾城反魂

香上「口にて虎をぞ書きたりける。てん  
もくらひの目の光り、怒り毛怒り斑  
怒り爪、千里も駈けん勢なり」

てんや 店屋。あきなひみせ。商賣屋。

てんやく 典藥。醫藥の官。大醫。釋迦  
如來誕生會ニ「典藥者婆を召しけるに、  
者婆御脈を伺ひ」

てんやもの 店屋者。商賣屋の女。賣女。遊女。生玉心中上「わしやてんや者じやないぞや、身を賣る女子じやないぞや」

てんれう 點料。俳諧などの點をした料金。

點を致す てん(點)の條を見よ。

點を打つ てんうつ(點打)の條を見よ。

點をかかく 記號の點をつける。帳面の調べずみの條に、かきじるしなどつける。

松風村雨東帶鑑「難じて言はゞ子過腹、薄き乳の緒は如何ぞと、帳には點もかゝらざりけり」

と

とあみ 投網。唐網。「たうあみ」の約。

どう 胴。筒。賭博の席を貸して料金を取る人。どうとり。胴元。胴親。采を入れた筒を振る義から起るといふ。丹波與作中「勢多の久三がどうの時、百切はつて見たれば」。大職冠「三百の抵當に張つて、既にどうへ取らるゝところを」

どう (接頭語)罵る意を強めていふ。と。

「どうずりめ。」「どうこんじやう。」「どうあひ 胴間。胴の長さ。胴。どうかいづくり」とかいづくり(渡海造)の訛。海船の一種。旅客又は荷物を載せて大阪と門司との間を往復したものの。五六反帆より七七八反帆の大ききで、總屋形・總矢倉で、左右に葎と臺とあり、垣立は艦にのみある。こくらぶね(小倉船)。とかい(渡海)。

とうかくじんぬ 等覺神威。等覺は佛道修行上最後に至り得る菩薩の位。その神通は佛のそれに同じ。神威とはその神通の力の敬稱。百日曾我「とうかくじんぬのほととぎすは、めうかくくきやうのみねになき」

どうがへし 胴返。もと、劍術の語で、相手の胴を撃つた刀をその儘返して、わが面を防ぎ、更に相手の左胴や面を打つこと。轉じて、元手の金の同額の利を得るにいふ。をりかへし。博多小女郎中「我等も七十八まで商ひで食べた者、胴返し利なればとて、儲けるには法圖がある」

どうぎやう 同行。同じ道の修行者。寺參詣などを共にするもの。寺同行。織留「念佛講の同行平野屋の久齋様」

どうぎやうしゆ 同行衆。同行の人々。同行なかま。永代藏「二世までの同行衆、寺の長老様まで頼みまはり」

とうきん ときん(頭巾)の訛。大句數上「大天狗月夜にとうきんかづかれて、時料申そ稻葉みだるゝ」

どうぐすり 胴藥。鐵砲の胴へこめる藥。彈藥。火藥。たまぐすり。

どうこ 洞床。戸棚のことであらう(晝證録)といふ。一代男「次の間の洞床に、後室模様さる物、大綿帽子、房付の念數など入れ置きて」

どうごゑ 胴聲。濁つて太い聲。どうまごゑ。

どうこんじやう どう根性。根性を罵つていふ。今宮心中「移りやすいどう根性」

どうさはり 胴すわり(据)の誤。丹波與作下「與作も名ある弓取の、家に生れし氣質とて、きつと死に身に胴さはり(すはり)、土手へ飛びおり」

東寺の長 東寺は京都九條にある眞言宗の大寺。長は、寺男などの擬名か、不詳。二代男「或時朱雀の野を行くに、東寺の長と見えて、あらがねの土を砕く男に、中道寺の今朝の女郎の氣遣ひ

は何としたと尋ねれば、我等六十九に罷りなれども、未だあの中へ行かねば、今の金太夫が美しいも、堀の内に石佛の有るも知らぬと云ふ」

どうしゆく 同宿。(→同じ寺に住むこと。又、その僧侶。一代男五「様子を見れば悲しき寺の同宿也」(→同じ旅宿に泊りあはすこと。又、その仲間の人。)

とうしん 燈心。燈油に浸して火をとぼすも。蘭のなかごの髓、又は綿絲などをを用ひる。二代男一「燈心掲げて、その邊あらはになし」

どうしん 同心。與力の下にあつて、諸上司の雑役を務めるもの。今日の巡査のやうな役目の卒。大下馬二「間もなく同心らしき大男二三十人亂れ入りて」。又、心を合せること。一味の者。

燈心て須彌山を引き寄せる (諺) 到底力の及ばぬ譬。燈心て磐石。

どうすげなし すげなし(情なし)を強めて、罵る心をもこめていふ。日本振袖始二「命を助け給はれと、はら／＼溢す血の涙、鬼の泣くのは人よりも、どうすげなくて哀れなり」

どうすりめ すりめ(搦摸奴)を強めていふ。どろばうめ。又人を罵り卑しめて

呼ぶ。曾根崎心中「そこな九平次のごうすりめ。阿呆口を叩いて人が聞いても不審が立つ」

とうだいくさ 燈臺草。澤漆。毒草で、莖の高さ七八寸。莖頂に倒卵形の葉輪生し、晩春の頃、葉間に五箇の花梗を抽出。すずふり花。二枚繪草紙上「知らぬ手元の暗さには燈臺草を思ひ出す」

とうだんご とをだんご(十團子)の條を見よ。丹波與作上「うつの山邊のとうだんご、所々の名物買うて」

とうち 十市。とほち。大和國十市郡(今は磯城郡と合併)の名邑。一代男二「櫻井の里を過ぎ、十市布留の神のやしろを北に詠めこし」

どうづき 胸突。土突の轉といふ。建築の地がためすること。又、それに用ひる具。

どうづきぶね 胸突船。軸を鐵で巻き固めた、水戦に用ひる船。敵船の腹を突き破る義から呼ぶ。

どうつよし どう強し。「どう」は接頭語。胸の字を當てるはいかが。「強い」を強め罵る心でいふ。油地獄上「投げてくれんず面構へ、阪東者のどう強く、何さぶい／＼共」

どうて どうせ。何れにせよ。曾根崎心中「どうで女房にや持ちやさんすまい」

どうてん 動轉。非常に驚いてあわてる。びつくりして度を失ふ。てんどう。武家義理物語四「女は少しも動轉せず、只何心もなし」。二枚繪草紙中「この壹歩置所にどうてんし、口へ入れたる目へ入れたるうらたへ廻つて」

とうとう たうたう(蕩蕩)。傾城酒吞童子三「文武の徳のとう／＼と、威有りて猛からず、げに名將の源の、水上清き印には。君子坦蕩蕩(論語述而篇)」

どうとり 胸取。どう(胸)を見よ。吉野郡女楠二「我等は博奕のどう取、この比つとく不仕合せ」。油地獄中「どう取のいのりは、四三五六しや大明神」

とうないたらう 藤内太郎。雪女五枚羽子板の中的人物。管領斯波義將の家臣。どうなは 胸繩。胸を縛る繩。

どうのま 胸の間。船の名所。船の中腹にあたる艙床(ろご)の間。中倉。東方に西方に 山伏が唱へる呪文の句。「東方に降三世明王、西方に大威徳明王」などいふよし。胸算用「珠數さらさらと押しもんで、東方に西方にと、獨鈷錫杖にて佛壇を擧げなく打てば」

東坡が竹は新酒の醖 宋の蘇東坡は竹の

墨繪を善くしたのでいふ。竹は即ちさ  
さ(笹)で、酒を意味する。俗つれど  
三「東坡が竹は新酒の醖(しるし)のた  
めに聿き」

とうぶ 東武。江戸の別稱。俗つれど  
四「筑前の侍東武の勤に下られしが」

とうぶく 胴服。羽織の古稱。又、ど  
ぎ(胴着)のこと。

とうぶくら 胴脹。どまんなか。眞最中。

「とう」は接頭語か。胴の脹れた眞中と  
いふ意の轉か。傾城反魂香中「悲しゆて  
ならぬどうぶくらに、あた聞きともな  
い通りや〜」。戀八卦柱曆上「袴いら  
ずの長羽織、家居も京のどうぶくら、  
諸役御免の門作り、名高き四條烏丸」

どうへん どうもへん(如何にもあやし  
い容態)の洒落。出世瀧徳下「京の道偏

と申す醫者の薬で、どうへんに在つた  
所を、昨日から三條の元喜と申す醫者  
で、めつきり元氣が見え」

どうぼう 同朋。將軍家に於て、殿中の  
諸侍の雜役を務め、主公他出の時は御  
長刀など持つてお供をした剃髮の者。  
茶の事を掌るを茶同朋といつた。足利  
家では何々彌と名のらせたものであ

る。童坊。同坊。薩摩歌上「お江戸は貴  
賤群集の中、御どうぼうを連れらるゝ

は、外に數なき類なき」  
どうぼね 胴骨。胴の骨。又、度胸。き  
もだま。二代男六「此のいや風に揚屋町  
に入るこゝ、大方の胴骨にてはなるま  
じ」

どうやまぶし 山伏を罵つていふ。油地  
獄中「何を知つて、去れ〜、どう山  
伏、おきをれ」

とらい 拳の語。十(とを)のこと。冥  
途飛脚中「拳の手じなの手もたゆく、ろ  
ませ、さい、とらい、さんな」

とらいあん 東來圓。長壽の薬でもあ  
るか。大矢數三「仙人の日の暮るゝ事か  
まはねば、東來圓は賣りしまふまで」

とかい 渡海。海船の一種。「とうかい  
づくり」を見よ。

どかぞん 一時に非常な損をする。「どか  
まうけ」を見よ。

とかはりをどり 十替踊。一夜のうち、  
舞臺面の十たび替る踊であらう。二代  
男八「石垣町の二階騒ぎ、祇園町の十替  
踊、見ぬ事は人にも咄されず」

とかへりのはな 十返花。松の花をいふ。  
松は百年に一度、千年に十度花咲くと

いふ。  
どかまうけ 一時にどかつと儲けるこ  
と。俄に巨利を得ること。壽門松上「ど  
か儲けすればどか損する」。同下「人い  
ためずのどか儲け」

とがりあふこ 尖り杓か。あふこ(杓)の  
端の尖つたものか。武道傳來記五「里人  
のとがり杓に蘆包み好もしく、佛臭き  
買物」

とき 齋。僧家の食事。午前に食するを  
法とし、午後のを非時といふ。或は僧  
に供する饗應の稱。卯月潤色中「大阪  
の名物榎の上の切荒布(中略)是れ齋に  
も非時にも重寶な」。重井筒中「鎗屋町  
の隠居(齋に參る約束)」

とき 伽。寢所に待すること。無聊を慰  
めること。曾根崎心中「うつら〜と  
小座敷に、ねぶりをとぎに居たりし」

ときあけもの 解明物。縫糸を所々解い  
てある著物をいふと。又縫直しの衣を  
いふと。一代男六「庭におろして木綿の  
ときあけ物を着せて、味噌こしを持た  
せ、豆腐より出でし細かなる物を買ひ  
につかはしける」。織留三「世上に綿入  
れ着る時、ときあけ物に風をしのぎ」

とぎう 斗牛。星の名。二十八宿の中の

北斗星と、牽牛星と。  
ときぎり 時切。時刻に豫め限りを定め  
ること。時に制限あること。晝夜用心  
記三「此の飛脚の者、三十里の所、時切  
に雇ひ候賃二十五匁」。曾我會稽山二  
「時切の御使仕損じ腹切るが見たいな」

ときぎれ 時切。前條に同じ。曾我會稽  
山一「二の宮は時切、おのれを宥すも時  
切」

ときだいこ 時太鼓。時刻を知らせる太  
鼓。二代男四「加賀の大正寺の時太鼓、  
夜明をいそぐ日待の遊び」

ときだしまきゑ 研出蒔繪。金銀の粉を  
蒔いた上に漆をかけ、その上を研いで  
下の色を現した蒔繪。

ときつろみ 時津海。時つ國の海。時つ  
風の吹く海。程よい風の吹く海。

ときつづくに 時津國。四季の順調な國。  
よく治つて天の時を得た國。

ときづけ 時付。時刻を記すこと。ひづ  
け(日附)などの對。又、時刻を限るこ  
と。大阪獨吟集「またくれ方の月に挑  
灯、約束も時付をして仲人かゝ」

ときづけとどけ 時付届。時付をして届  
けること。又、その物。置土産三「九月  
二十日過に時づけ届の小判、さては田

舎の素い人なるべし」  
ときつなみ 時津浪。時になつた浪。  
程よく立つ浪。懷硯二「詞論も絶えて静  
かなるとき津浪、笛鼓打收まりて」

ときどり 時取。時刻を限り定めること。  
刻限をきめること。又、その刻限。ひ  
どり(日取)の對語。大下馬三「その夜の  
明け方、七つの時取をして灰寄せに行  
くに」。榮花咄四「ざつと遊びて時取を  
して、又立ち歸る浪の上」

ときのかね 時の鐘。時を知らせる鐘の  
音。大矢數三「時の鐘六田のあたり眞黒  
に、松は寂しき見世さしませう」  
ときのき 時の氣。その時に變る氣分。  
其の場の移り氣、俗つれ五「かゝる  
調菜今の身にして違ふ事は思ひ寄らず  
と、又時の氣になつて、町人ながら大  
名ぞと」

ときばうず 齋坊主。とき(齋)を供すべ  
き坊主。虎溪橋「日牌や立行雲の奥の  
院、其曉の齋坊主よぶ」ときぼん。

ときひじ 齋非時。とき(齋)と、ひじ(非  
時)と。「とき」を見よ。物種集五「甲  
ひや齋非時續くとろゝ汁。俗つれ六  
一「月忌命日の齋非時にも、固く酒鹽の  
入りたる料理することなく」

ときぶね 伽船。淫賣婦など載せた船。  
客に枕の伽をさせる船。孕常盤四「蘆の  
假疑の伽船も、比丘尼に一夜の宿は貸  
す、今宵一夜は隣かそ給へ」

ときまい 齋米。齋(とき)にする米。僧  
に施す米。永代藏二「齋米入れし明袋持  
ちし片手に」

ときまをし 時申。ときまうし。時を申  
すこと。時刻を告げること。緋縮緬卯  
月紅葉中「町の夜番が時申し、又長持の  
蓋あけて、抱きあひてぞ忍んだる」

ときみやう 時見草。松の異名。  
ときやう 土形。土人形。土偶。田村將  
軍初觀音「郊原に白骨はさらすとも、  
魄は此土にとどめ置、どぎやうはまさ  
に我姿、末世に残す清水寺田村堂とは  
是なりけり」

ときんがしら 兜巾頭。槍鞘の一種。兜  
巾のやうな形のもの。薩摩歌上「ときん  
がしらと大身の槍は、下總の國佐倉の  
御城主」

ときくあんづつみ 徳庵堤。北河内徳庵村、  
寢屋川堤。野崎參詣の道筋。  
どくぎん 獨吟。一人で詩歌・俳諧などを  
吟詠すること。特に、俳諧を一人で作  
ること。物種集一「今年大かた百になる

と

もの、獨吟をねりたいたいほどにねりつけ  
て」

とくじよう 徳乗。金工の名人。後藤徳  
乗のこと。祐乗から五代の孫、名は光  
次。寛永八年十月十三日歿。年、八十二。  
大下馬「私持ち来りたる徳乗の小柄、  
唐物屋十左衛門方へ一兩二歩に昨日賣  
る事紛れなれども」

とくせい 徳政。かいめん(改免・背免)  
の(を)見よ。新可笑記「此の子は母親  
の腹を貨物なり、徳政の通り此方に損  
をして、父の物にと云ひける」

とくだう 得道。(→佛語。悟の道を得る  
こと。新可笑記「野夫が諷りに得道し  
て、是れぞ修行徳と悦ぶは、その身正  
道發明なるが故なり」。(→納得するこ  
と。承知なること。二代男「女郎より  
は美形なきことを得道して、又揚屋に  
入るとかや」

とくだち 毒斷。身體を害し、又、服藥  
の効を妨げるものを毒として食はぬこ  
と。とくだて。永代藏「然れどもこれ  
に大事の毒斷あり」

とくだて 毒斷。前條に同じ。  
とくべん 獨辨。一人分の辨當の意か。  
武道傳來記「二人は行燈の光をうけ

て獨辨をひらき、對者に煎茶など運は  
せて、淋しさをまぎらしか」

とくりこ 徳利子。(→兩手又は日鼻口耳  
のない不具な兒。織留「道頓堀にて見  
せ物にせし徳利子の萬太郎は、其の人  
の子にて世に恥をさらし」。(→頭部に比  
して臀部の大きい兒。  
とくりをとこ 徳利男。徳利子の男。前  
條を見よ。

とくわか 徳若。とこわか(常若)の意。  
萬歳の歌詞。戀八卦柱曆下「徳若に御萬  
歳と御代も榮えますます」

とけい 土圭。時計に同じ。當時のもの  
は、多く砂時計であつたらしい。大矢  
數「算用や世界のこらず砂の數、土圭  
仕懸けてめぐる月影」。一代男「花を  
活けかへ土圭を仕懸けなほし」。又、永  
代藏「晝夜の枕にひびく時計の細工  
仕掛け置きしに」とあるは、自鳴鐘と  
いふ類か。

とけいのま 土圭間。土圭の仕掛けてあ  
る部屋。時刻を報告する者が詰めてあ  
る殿中の間。男色大鑑「何となく時計  
の間を出でしに」

とけしなし 「とけしなし」の口語。薩摩  
歌下「九里の渡も千里の如く、とけしな

いやら怖いやら、氣が草臥れてとろと  
ろと」

とけしなさ もどかしさ。待ちどほしき。  
松風村雨束帶鑑「我が身の契いつい  
つと、その果しなさどけしなさ、心の  
疲れ戀彼れ」

とけしなし 物事の遅いさま。又、その  
はかどらぬを待ちわびる心を示す形容  
詞。まのろい。もどかしい。永代藏  
「溜るはとけしなく減びるは早し」。武  
道傳來記「一年にあまり逢はざるこ  
とをとけしなく」。新小夜風物語上「男  
のあるまで待ち賣りにするなればとけ  
しなかりき」

とけなし 「とけしなし」の「し」を脱した  
か。大句數上「爰をさる事淨土すごろ  
く、恙なくあひた弘誓の舟のとけなし、  
輕帷子の帯を仕なをす」

とげん もと(元)。素姓などの意か。榮  
花唱「此悲しき銀遣ふ男を、いかに根  
のとげんがしたたとて、そこ〜にあ  
しらひ」

とこあしらひ 床あしらひ。間中でのも  
てなし。床での客あつかひ。  
とこづら 床鶴。巢に居るうづら。  
とこがまち 床樞。とこぶち(床縁)に同

じ。

とこかみゆひ 床髮結。髮ゆひを髮とす  
る家。かみゆひどこ。又、その髮を結  
ふ人。大矢敷三「眞直に四條の辻は髪か  
とよ、床髮結にやうす尋ぬる」。懐硯  
「床髮結さへ、所の若者の角ぬいて居る  
など」

とことば 床言葉。床の中で用ひる言  
葉。閨中用語。一代女二「おほかた仕掛  
け定まつての床言葉あり」

とこじき 床敷。床にしく物。座席など  
に敷くもの。一代男八「床敷の中には太  
夫品定の腰張、大綱に女の髮筋を捻り  
ませ」

とこすずみ 床涼。床を設けての納涼。  
特に京都四條河原で床を設けて納涼す  
ること。

とこぶち 床縁。床の間のゆかいた。又  
は床だたみの端を隠すために横に渡し  
た化粧木。とこがまち。一代女三「御居  
間の床縁を枕にし給ひ」

ところとは 所言葉。その所の言葉。  
土地言葉。方言。一代男三「異名を所言  
葉にてしやくといへり」

ところせきなく 「所狭く」といふに同  
じ。なく「は、をさなく」などの「なく」

から類推して添加した辭。せまくるし  
く。にぎやかに。永代藏四「判金一枚に  
てかりさじき論じて、所せきなく見物  
する事、千秋萬歳の御代にぞ住みけ  
る」。二代男五「この廣き野山までとこ  
ろせきなく、小提開くべき方もなし」。

永代藏三「京の祇園會、大阪の天滿祭に  
かはらず、毎日の繁昌この御時、君が代  
の道廣く、通町十二間の大道所せきな  
く、此の橋の上に馬乗一人出家一人餘  
一筋、朝から晩まで絶ゆることなく」。  
俗つれんぐ「精進日には諸山の出家  
衆駕籠所せきなく」

ところどころ 處處。その土地その地で  
物事の相違するをいふ。萬文反古二「關  
東の釣鍋に大東くべて二時間ばかり焼  
けども、物のにえ不申候を處々ををか  
しく存じ候」。又別々の場所。所を異に  
するにいふ。天網鳥下「からだがある世  
へ連れ立つか、ところ々々の死にさし  
て、たとへ此のからだは葛島につゝか  
れても、二人の魂附きまつはり」  
ところならはし 所習。その土地の風習。  
方俗。ところならひ。ところふう。  
ところならひ 所習。前條に同じ。男色  
大鑑八「孔子くさい顔つきは所ならひ

にして、をさめ過ぎ」

ところばらひ 所拂。その住居の土地か  
ら追ひ拂ふ刑。

ところわき 所わき。わきは脇か、別き  
か。ところぐ「模様を違へたものか」。

萬文反古三「縫箔の小袖、所わきのさい  
はひ菱の袷、地なしの綸子小袖」

所を送る ところばらひ(所拂)の刑に處  
する。永代藏五「主はこの善惡をたゞさ  
ず置きしに、世の浪人改めに皆々所を  
送りける」

どこんじやう 根性を罵つていふ。どし  
やうばね。

どさうちおろし どさぐと粗製するこ  
と。おろし(下)は織りあげること。日  
本振袖始「どさうち下ろしの荒筵」

どさくさまぎれ どさくさと、混雑する  
中に紛れてすること。二代男二「どさく  
さ紛れに、よい事と云ひ捨て、船も  
さし戻さす時」

とさごま 土佐駒。土佐國から産する馬。  
夕霧阿波鳴渡上「國隣の土佐駒引かせ、  
乗つた姿は天晴平岡左近が世繼、七百  
石の主なり」

どさごゑ 濁つた聲。蠻聲。  
とさぶし 土佐節。淨瑠璃節の一。土佐

と

少掾橋正勝の語り創めたもので、寛文・延寶の頃から江戸に流行した。

とさま 外様。(一)世間。表向。人まへ。(内證の對語)傾城反魂香中「外様へは借宅見たての其の間、廊に少し逗留分。二枚繪草紙中「一在所が駈集まりとさまの詮議そ是非もなき」。(一)武家で、一族・譜代でない臣下の稱。「どさまさむらひ」。「とさましゆ」。

とさをどり 土佐踊。土佐國の盆踊をうつした踊であるといふ。胸算用「白紙人形に土佐踊さすなど」

とさん 臺盞。渡盞。盃をすゑる臺。しりざら。一代男「れいのとさん出て、祇園細工のあしつきに、杉板につけて焼きたると」



とさん

とさん 戸棧。戸の骨、特に横の骨をいふ。榮花咄五「戸さんを踏まへて、立石の上にもたげ下りて」

としがひ 年買。遊里の詞。一箇年と定めて遊女を買ふこと。二代男「元より年買ひと定め、四季の衣裳を請合ひ、様々求めて遣はしける、二人の女郎勝

れて美形なり」

としがまし 年を多く取つて居ることの形容。としがまへ(年構)から類推した語であらう。萬文反古三「跡にて年がましき人丁簡あそばし」

としがまへ 年構。年を相當に多く取つてゐること。一代男五「臺所に年がまへなる男が、(中略)女房どもを横柄によびける」。二代男三「年がまへなる女房出でて、九兵衛に頼むは」

としぎれ 年切。年によつて樹木の果實を結ばないことをいふ。としぎり。二十不孝「大風諸木根を打覆へし、殊に年切して」。胸算用「この前も橙の年ぎれして、一つを四五分づつの賣買なれば」

としごもり 年籠。年の暮から正月にかけて神社佛寺に參籠すること。一代男三「年籠の夜、大原の里にて盗みし女に馴れそめ」。胸算用「萬仕まうたとて年籠りの住吉參り」

としごろはい 年頃配。年頃の程。としごろ。年配。(重語の一種)。槍狩劍本地「絹上下の撫附男、年比配も三十一文字」

ること。老若を詮議すること。永代歳三「兩隣あつまり暮ちかき年せんさく(中略)大かた中づもりにも違ふまじき四十八九か」

としたり 年竹。印を結ぶと、年齢の數を告げる竹であるといふ。下文を見よ。男色大鑑七「あるじの法師のいはく、爰に幸ひ年竹とて知れぬ年の正直に知る物こそあれと、彼の若衆に年竹を持たせて立たせ置き、子細らしく印を結びければ、しばしありてこの竹を拍くけるほどに、皆々同音にて數とりける、十七八九までは何心もなく、それより上は耻かしくなりて、左右の手に力みを出し、随分拍たぬやうにしけれど、不思議や拍ちやむことなく、三十八にしてかの竹兩方へわかりぬ、若衆赤面して、まことしからぬ年竹とかいやり捨てられしを」

としとく 年徳。歳徳神の略。もと陰陽家の祭神であるが、一般民家でも祭る。その年の大將軍塞がりの方と反對の、吉方(恵方)を司る神。

としとくじん 年徳神。前條を見よ。

としとくだな 歳徳棚。歳徳神を祭る棚。正月、その歳の恵方に棚を作つて、注



連(しめ)などを引きわたして、種々の物を供へて祭る。惠方棚。物種集上「年徳棚やしろ定めつ、かはらけに字知の那の魚までも」

どしのおび どしおりの帯。攝津國の産物といふ。一代男三「木綿鹿子の散らし形に茜裏を吹きかへさせ、どしの帯前結びに、平もとゆひ太く」

年の數つけば夏瘦せず 羽子突きにいふ俗談。羽子を蜻蛉に見立て、蜻蛉は蚊を喰ふので、この語に「蚊が喰はぬ」と續けていふ。雪女五枚羽子板中「どなたの羽子か存せねども、年の數つげは夏瘦もせず、蚊が喰はぬと申す故、少しの間借りまする」

としは 年端。齡の程。年齢。年ばへ。としばい 年ばい。年配。相當に多く年取つてゐること。としばへ。としがまへ。重井筒上「徳兵衛殿は此方かと、年ばいなる仁體なり」

としはつけ 年八卦。年齢でその人の吉凶を占ふこと。又、年の干支などによつて、その年の占ひをすること。一代男四「年八卦のあふ事、必ず疑ひたまふな(中略)、二十八の年は、出來心にて人の女を戀ひて、一命あぶなし。壽門

松上「今年は戌の年、犬は土に寝る物、年八卦に叶うた、コリヤ人の巳午が恵方ぞ」

としはへ 年延。としかさ(年嵩)。としのまさつてゐること。年配。又、年配の者。

としまへ 年前。としがまへ(年構)の類語。置土産三「其の女は年まへなるが、廊下走りやう、只者とは思はれず、くどき寄りて昔を語れば、申さぬ事か鳥原の座持女郎、土佐といへる流なり」。としま(年増)。

としまめ 年豆。節分の夜にまく豆。年越の夜の煎豆。雪女五枚羽子板上「追儼の御祝儀行はる。年男には熊橋犬二郎満景、御年豆を献ずれば」

どしやうね 次條に同じ。どしやうばね 性根を罵つていふ。どしやうね。どこんじやう。生玉心中申「その悴がどしやう骨、茶屋の銀負うて逃げかくれ、死んでも恥の抜けはせぬ」土砂の功徳 眞言の撒けば柔かくなるをなつたのに土砂を撒けば柔かくなるをいふ。土砂加持の法。萬年草下「土砂の功徳の眞言秘密、善男子善女人堂」

中と同格の大奥の女中の重職を稱し、諸侯では家老をいふ。又、町村では、組頭などの稱。町長・村長格のもの。織留二「年寄五人組の連判」。緋縮緬卯月紅葉上「年寄行事も封を切らぬ書置き、傳三が知らう筈がない」

としよりこい しらこばと(白子鳩)の異名。小さな鳩。脊は灰褐色、下面及び頭は微紅色、後頭に半輪狀の黒斑がある。尾はもと黒く末が白い。夏來つて冬去る。じゆずかけ鳩。

としをとこ 年男。武家で新年の諸儀式を勤める男。若水を汲み、節分の豆打などをする。後には一般の家庭にもいふ。永代藏二「年男の福太夫といふ家來、子細らしき貌つきして」

とすぢゑもん 十筋右衛門。髪の中の少ない人を嘲つて、名のやうに呼ぶ語。一代女三「髪は少なくて、なる事のなげかし、これ見よと引きほどき結へばかもし幾つか落ちて、地がみは十筋右衛門」

渡世は八百八品 (諺) 世渡りの道は多様であるとの譬。織留四「渡世は八百八品といふに、醫者は其の中のものより腐なるべし」

と

とだる 斗樽。桶にかぢみを取りつけた形の酒樽。太鼓樽ともいひ、婚禮に用ひるもの。

とだん 土壇。土で築いた壇。源氏冷泉節上「雪をとだんの試し物、珍しからん」

とぢぐち どちらち(何方此方)の訛といふ。あれこれと入組んで、くひ違ふさまをいふ。ちぐはぐ。

とぢやう 戸帳。斗帳。帳臺又は神佛の龕などの上に垂れるとばり。女腹切中「知らぬが佛の戸帳ぞと、井筒が暖簾櫃木杖にてひらりと上げ」

とつか 取柄。弓。鞭などの手で握る所。そこには特に細工を施す。曾我五人兄弟三「枝珊瑚にてとつかしたる楊弓、變り斑の野雁の矢」

とつかは あわてせくさまにいふ。急遽。二枚繪草紙下「知らぬかといはるゝ故、とつかはとして戻つた」。丹波與作上「道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川こえ」

とつく とく(疾)の訛。早く。速に。雪女五枚羽子板中「色に溺るゝの嘲弄のがれ給はじ、とつく御供申さん爲參上仕る」

とつくりご とくりご(徳利子)に同じ。下文は、とくりご(の)例。孕常盤三「逆子・袋子・徳利子、あとさき膨れて中て詰まつた瓢箪子でも」

とつくりによらう 徳利女房。兩腕のない女房。徳利子(とくりご)の轉用。

とつけりと とつくりと。篤と。おちついで。聖徳太子繪傳記三「内でとつけりと精進あげの間はないぞえ」

とつこ かたり(騙)。人を欺いて物を取る者。騙盜。天鼓四「身が一門を守つて取らせんとは、大騙りのとつこめ也」

どつこ 獨鉛(どくと)。古代印度の武器。金剛杵(こんがうしよ)の一。密教で煩惱打破の表章として用ひる眞鍮又は銅製の法具。その兩端の分岐してゐないものをいふ。三鉛・五鉛などの對語。胸算用「獨鉛錫杖にて佛壇をあらげなく打てば」

とつこのかは とつこ(騙盜)を罵る語。孕常盤三「おのれこそ横取の、とつこの革、枋のむね打ち頂くか」

とつさか 心のかどくしいさま。圓満でないさま。背庚申下「仰せ背かぬ宮仕へ、氣のとつさかな始に、せりくいちりたてられて」

とつたり (一)とりて(捕手)。(二)相撲の手の名。相手の手を押へて、自分の後方に投げけるもの。物種集上「大力思ひのきづな何のその、いでとつたりにあふせ白浪」

とつちぢよらう 土地女郎の訛。その土地の女郎。田舎女郎。晝夜用心記五「身どもが國のとつち女郎のおつかないを見くらべては」

とつつまひつ とつおいつ(取りつ置きつ)などいふと同じ。思案にくれるさま。何れとも決しかねてゐるさま。とつおいつ。源氏烏帽子折二「助けては道立たず、搦め捕つては情なしと、とつつまひつ思案して」

とつと ずつと。時間・場所などの遙かに離れてゐるさま。傾城反魂香上「とつと前から藤袴と契約有り」と申さば(中略)この道計りはせんが先。同中「手形の口附をとつと跡の月にして」

とつばい がしら 突盃頭。兜の鉢の頂の突つたもの。とつばい。

とつばさつば 忙しく立ちさわぐさま。どさくさ混雜するさま。丹波與作中「あの様に大名のお姫様、今日で三日の逗留、宵あした百六十人、とつばさつば

とつばさつば 忙しく立ちさわぐさま。どさくさ混雜するさま。丹波與作中「あの様に大名のお姫様、今日で三日の逗留、宵あした百六十人、とつばさつば

といそがしい」

**どてぶし** 土手節。江戸吉原通ひの六方男達のものゝ専ら唄つた小唄の節。さんやどてぶし。寛文から元祿に至るまで流行した。或は、元祿のものは初期のものとは異なるといふ。

**とてもない** とんでもない。とはうもない。日本振袖始三「ハテ譯もない、とてもない事云やん」

**とてものこと** 一つそのこと。むしろ。いつそ。重井筒上「とてもの事に年寄つて、一夜の心もやすめたし」

**とと** をつと(夫)。小兒語とと(父)の轉用。又は米の朔日、「是れはととの手焼の鐵鎚煎餅、さまに進せて下さりませ」。

**ととかか** とと(夫)のやうなかか(驢)。夫よりも妻の方が權勢のあるをいふ。驢天下。最明寺殿百人上臈下「めん鶏が時を作るか、鎌倉殿はととかかゝじやな」と嘲つても」

**とどし** 十歳位の年。油地獄下「あいとはいへどとどしでは、手も肩かねば立ちあがり」

**ととりやま** 砥取山。山城國葛野郡高尾附近。砥石を探る山の義。武藏國高尾山近くにも同名の山がある。二代男一

「定家の亭に蔭かつら、砥取山に時鳥、双の岡に若松の數茂り」

**とどろきの御坊** 轟御坊。京都清水寺内の坊(古慈心院)。出景清二「人の咎めも如何なり」とどろきの御坊にて、一七日は通夜申す」

**とのごころ** 殿心。男を懐ふ心。一代女「しばし針宮により掛りて殿心のおこり、ゆび貫糸巻も手につかずして」

**とのごのみ** 殿好。男をえりごのみすること。男に對する好み。

**とのごもやう** 殿御模様。男子の著るにふさはしい模様。又、その模様の著物。とのたち 殿達。廓詞で、遊客を呼ぶ。色道大鏡「傾城・遣女・舉屋等より、客をさしていふ詞なり。武士の奉公人のみをいふにあらず。傾城買をば押しなべて殿達といふ」

**とのちやこもん** 彌茶小紋。彌茶の地に小紋を染め出したものである。彌茶は赤黒い色の勝つた茶色である。一代男二「十五六なる少人のとの茶小紋の引返し、鹿子縞子の後帯、中脇差、印籠巾着もしをらしく」

**とのはじめ** 殿始。始めて男を持つこと。始めて殿御に接すること。源氏烏帽子

折三「自らは殿始、おの様は烏帽子始、目出たく闇にて御視儀あれ」

**とのぶり** 殿振。殿御ぶり。男ぶり。とはうなし 途方なし。手段の施しやうがない。とてつもない。條理も方針もない。背庚申中「口も氣儘あとはうなし」

**とはかは** 「とつかは」に同じ。五十年忌歌念佛上「日は傾く、いざ歸らんとちよこく」走り、とは川口にぞ著きにける」

**とびあがり** 飛上。突飛な言動をするもの。むかふ見ずの者。又、へうきん。織留四角前髪の若い者同じ心の飛びあがりども四人。俗つれ〜「飛上の彌吉、算用なしの藤介」

**とびうめ** 飛梅。菅公が太宰府に左遷せられる時、愛する梅に對して、東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそと詠じたので、その梅が後に配所へ飛んで行つたといふ故事に基づいて用ひられる語。一代男五「都より飛梅、筑前の柳町を見にまかりぬ」。生玉心中上「道頓堀を天神へ、駕籠も一里を飛梅や」

**とひぐすり** 問藥。試みに用ひる藥。轉じて、氣を引いて見る話などのこと。

と

と

一代女「九月の節句というても間のない事ぢやが、定めてお約束が御座らうと、女郎の好く問薬を申せど。永代藏「煎じやう常とはかはる問薬」

とびこ 飛子。旅かせぎするかげま。他國を巡つて男色を賣る若衆。兩吟一口千句「一座のつきあひはから極楽、飛子なみの内ならばこそあしからめ」。一代男「仁玉堂と申して、京大坂の飛子しのび宿」。同「無類の此の道ずき、是れは飛子のうき灘を越ゆるが如し」

とびざや 飛紗綾。紗綾に似た織物で、地が厚くとび〜に花の模様あるもの。一代男「棹竹のわたし、とびざやの脚布、糠ぶくる懸けてありしは曲者なり」。二代男「生平の羽織飛ざやの下帯」

とびだらぐ 飛道具。弓矢・鐵砲の類。遠くから飛ばして敵を撃つ武器。櫻陰比事「町人に似合はざる飛道具持ち出づること故なし」

とびたもの 飛田者。飛田は大阪天王寺の西、昔の刑場。故に仕置者をかきいふ。飛田行きのしる物。所刑者。曾根崎心中「どうで野江か飛田ものと、誠にやかにいひ散らす」

とびなかま 鳶仲間。とびよく(鳶職)の仲間。消防夫たち。晝夜用心記「店さがし、鳶仲間、家に鼠、國に賊、油断する事勿れ」

とびにんぎやう 飛人形。竹の串を膏藥で煉りつけて、はね返るやうにした張子人形であらうといふ。或は紙で人形の形を切つて飛ばしたものが。大矢數「飛人形や假む半空、花に風手妻のきいた事こそあれ」。男色大鑑「玩具として飛人形又は染分の手拭」

とびはちぢやう 鳶八丈。鳶色と黄色との糸で縦横に織つた太織物。黄八丈まがひのもの。天網局中「大ひき出しの鏡明けて、箆筒をひらりととび八丈、けふ縮緬のあすはない夫の命しら茶うら」

とひまる 問丸。後世の問屋、即ち品物をおろし賣る店の稱。一代男「三條通の問丸に着きて」。船商人の宿所であり、販賣の周旋をし、物貨運送の傳馬を供給することを見としたもの。永代藏「難波橋より西見渡しの百景、數千軒の問丸堯をならべ」  
とひやうも 途方もないことをするもの。無鐵砲者。

四三四

とひやづき 問屋着。問屋に物貨の到着すること。船商人の宿所(問丸)に荷物を選びつけること。大矢數「問屋つきして風の音信」。榮花咄「熊本より商賣は米を買入れて問屋着して、しかも難波津始めての遊興に」。胸算用「毎日數萬駄の問屋づき」

とひやまち 問屋町。問屋の續いてある町。二十不孝「問屋町の宜しき方へ奉公に頼みければ」  
とふ 十布。十編。目を十筋に編んだもの。男色大鑑「十布の菅薦七ふには君の御寝姿を見て夢も結ばず」とは、夫木集の「陸奥のとふの菅ども七ふには、君を寝させて三ふにわれねん」に據つたのである。

どぶつて 「どうつりて」の假名遣ひやら音便やらである。即ち「如何に吊りて」である。又、「どう續きて」、如何に關係があつてなどの意。「つり」は系統の意。「つり」及び「つりがき」の條參照。傾城反魂香中「人の所縁(ゆかり)はしれぬもの、どれからどれへどぶつて、誰が悲みにならうやら」  
とぶらひいくさ 弔戰。戰死者の鬘を復してその靈を慰めるための戰。とむら

ひ合戦。

とへうきず 頓瓢疵。土俵疵の戯語か。或は「とへう」は「とひやう」で、途方の轉か。大矢數二「五三に逢ふて夢か現か、はりあいのありてなげれば頓瓢疵」

とほがけ 遠掛。遠くから掛ること。遠くから物に近寄ること。二代男五「あれが娘三歳の霜月に、店に遊びしを、愛の餘りに、遠掛に抱かうと呼べば、走りかゝつて下に落ちて」。又、遠駆。遠方に疾走すること。

とほけいやく 遠契約。遠い將來をかけたの契約。出世瀧徳上「人間どしの遠契約は、騙りのやうにも思はんしよ」

とほざむらひ 遠侍。武家で、當番の侍の詰めてゐる所。主殿より遠く離れて、中門の際などにあるのでいふ。恭盤太平記「爰等ぞ遠侍、廣間はこれよりはまでな」。とほざむらひ。

とほし 篋。底のあみ目の荒い、竹又は銅線の大形飾(ふるひ)。一代男二「篋の底入、引白の目きり」

とほしな 通。馬車など、中つぎや宿泊など、次條の略。丹波與作上「殊にそちは

と

通しちやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はうといや」

とほしうま 通馬。荷馬など出發地から目的地まで雇ひづめにして、途中でつぎ替へしないもの。一代女六「出女の面しろく」と見せて、譚參りの通し馬を引込み」

とほしかご 通駕籠。つぎ替へなしに出發地から到着地まで乗り通す駕籠。とほしたつ 燈立つ。色に耽る。放蕩する。卯月潤色中「弟の傳三めが、旦那まざりにとぼし立て、(中略)主ある我れが袖棲引き」

とほしや 通矢。一定の距離に矢を射て届かせること。特に、京都三十三間堂の後で、長距離を射て通すこと。とほりや。「おほやかず」の條参照。とほとほ 足もとの定まらぬさま。あゆみのしつかりとしないさま。よぼく。博多小女郎中「こりや姥、何をとぼくする」

とほみ 遠見。遠方を見わたすこと。又、警戒・偵察のために、高所から四邊を見張ること。又、その人。博多小女郎上「なんと遠見に見付けられはせなんだか」

とほめ 遠目。遠くを見ること。五人女三「四座かりて遠目を使ひ、もしも我れを知る人もと、心もとなく見しに」

とほりきつて 通切手。次條に同じ。とほりてがた 通手形。關所の通行を保證した手形。通切手。通行手形。二代男二「御關所の通手形まで、残る所なう、御心を付けられ、この嬉しさ」

とほりもの 通者。名の廣く世に知れ渡つた者。又、世情によく通じた者。情知り。通人。粹人。二十不孝五「亭主も通者、金銀あれば爰へは下られぬ管なり、それを儲けにこそと、合點して情を懸けぬ」。雪女五枚羽子板上「奥方の女中の中の通り者、その外落中に娘子供の色よきが」

とほりや 通矢。「とほしや」に同じ。兩吟一日千句「さては通り矢二千里の月、花草くさびをうつて大軍」

とほん ぼんやりと。間がぬけたさま。茫然。ぼうつと。陸摩歌上「小萬の君の夜なか起き、庭にとほんと風受けて、ア、なま熱や」。重井筒中「房は一人とほんとして」

**どまくる** うろたへる。途方にくれる。

まごつく。吉野都女楠四「一千餘騎の兵の、どまくれみだれうろたへし」

**どまくれる** 前條の口語。宵庚申中「さてこそ縁を切り来た、と思ふ心に口どまくれ、去駄さま能うござつたと、云へども何の氣もつかず」

**とまへ** 戸前。藏の入口の戸のある處。又、その戸。又、藏を數へるに用ひる語。

**とまる** 留。腹に子のとまる。やどる。源氏冷泉節上「隣の嫁に子のとま(妊)る灸點して」

**とみつ** 富突。賭事的一種。富札といふものを、千枚以上七千五百枚ほど、一枚一朱位で賣り出して、一番當り千兩とか五百兩とか、二番當り百兩とか五十兩とかいふ定めで、社寺の大廣間で興行したものである。その多數の札を大箱に入れて、がら／＼とまぜた上、一方の小穴から錐で突き、その錐先に付いて来たのを一番當り、二番當りと云つたのである。もと「天狗たのもし」から起つたといふ。とみ。とみくじ。

「てんぐたのもし」の條参照。椀久一世物語上「毎年正月七日に津國箕面山の

辨才天の富突とて、諸人福徳を願ひまゐることあり」

**とむ** 留。香を衣裳に移し留める。男色大鑑七「形見の衣移り香初瀬といへる名の木留めけるに、なほ又その人花ぞむかしのかほどまではゆかしき」

**とむね** 胸を強めていふ。こゝろ。驚く義に「とむねを衝く」と用ひる。吉野都女楠四「二呑みに侮つて、油斷したる追手の勢、とむねをついて色めく」

**とめ** 留。生花(いけばな)の詞。「ねじめ」ともいひ、天地人三才のうち、地に相當する。

**とめき** 留木。香木を焼いて、その香を衣裳などに移し留めること。又、その移し留めた香。二代男二「御袖の留木さ(常ならず)。同六「留木の煙立並び」。榮花咄五「重ね蒲團留木の蕪り深く、やはらかなる枕一つ」とむ(留)参照。

**とめきう** 止灸。最後に据ゑる灸。病の再發を止めるための灸。博多小女郎下「重ねて悪事を止灸の、顔に焼鐵いればくろ」

**とめきやら** 留伽羅。伽羅といふ香木を衣裳などに焼き移らしめること。又、その香。大矢數一「分別どころ袖のとめ

伽羅、今晚の床はふらうかふるまいか」

**とめちやう** 留帳。書き留めておく帳。控帳。冥途飛脚上「町まはりの狀取り立歸つて、それ／＼と留帳つくる所へ」

**とめぶろ** 留風呂。他人を入れないう風呂。獨占の風呂。轉じて、女など獨占するにもいふ。吉野都女楠四「今夜は身がとめぶろだ、イヤ身が先だとせり合へば。とめゆ」

**とめやま** 留山。人の入るを禁じてある山。狩獵や伐木を禁じた山。たてやま。俗つれ／＼曰「水物は留山の梢、四季折折の枝もぎ」

**とめゆ** 留湯。(とめぶろ(留風呂)に同じ。(浴後)一晚とめおいて、更に翌日用ひる湯。

**とめをけ** 留桶。風呂屋で流しに用ひる小さい桶。

**とめをとこ** 留男。やどひきの男。旅客を宿屋へ誘ふ男。

**とめをんな** 留女。やどひきの女。でをんなの類。丹波與作中「これ泊りじやないか否、泊りなら泊らんせ。泊らんせ泊らんせ」

**ともうち** 友討。仲間で討ちあふこと。同士うち。吉野都女楠四「人にて人をせ

きふさがれ、同志討友討度を失ひ」  
**ともきりまる** 友切丸。曾我會稽山四「源氏重代友切丸肩に打ちかけ紙合羽、しめたる笠の快れじと」

**ともぎんみ** 共吟味。相互同士の吟味。同僚仲間でしらべあふこと。雪女五枚羽子板中「家來面々身開きに、上下騒いで共吟味」

**ともこ** 友子。ともだち(友達)に同じ。  
**ともさき** 供先。ともまはりの先手。扨從者の中の先に立つもの。

**ともし** 照射。夏の夜、獵師が山中に火串に附けて松明をともし、又木蔭に篝火をたいて、鹿のこれに寄り来るを待つて射殺すること。物種集上「札付の切を入れたる箱根山、ともしの鹿子おとしはんゑり」

**燈火一つの身代** 非常に貧しい暮しむきの譬。胸算用五「紙屑集めし者は、ちやん塗の土器仕出して世に賣れども、大晦日にも燈火一つの身代なり」

**ともすぎ** 共過。友過。共に稼ぎあつて世を過して行くこと。ともかせぎ、又、持ちつ持たれつの渡世。共存。大句數上「相互世はとも過に友千鳥妹がりゆけば似合の縁。「千軒あればとも過ぎ」。

**ともすぎをんな** 共過女。共過する相手の女。ともかせぎの女。萬文反古三「下下の共過女は、けふを暮しがたく義理かき申すも是非な候」

**ともづる** 友鶴。雌雄そろひの鶴。轉じて、よい配偶者。「幾代の友鶴」。「千代の友鶴」

**ともはやし** 供ばやし。ともびと。お供のこと。主人の御出を、早う〜と囁し立てる義から呼ぶといふ。永代藏「風俗も人のやうになるに随ひ、供はやし、能、舟あそびにも召しつれられ」

**ともまはり** 供廻。供の人々。從者の群。二代男五「人の知らぬ供廻りを、男もすぐりて、其の身も宜しき出立ち」

**ともよびがん** 友呼雁。雁を捕へるやうに馴した雁。下文を見よ。大下馬四「近年關東の方に友よび雁といふ物をこしらへ、廣野に放ち飼ひして置きしに、空行く鳥を呼びおろし、さま〜なつて後は、殺生人の宿につれて来て、骨をも折らず捕へさす事あり」

**どや** どやくこと。どや〜すること。さわぎ。大聲。俳諧六日飛脚「かやうのどやはすぎ玉かつら、なき上手涙くらべの郭公」

**どやく** 大聲を立てる。さわぐ。どなる。二代男三「人買舟よとどやく」。一代女五「お龜殿干してありし脚布が落ちたとどやく」。五人女二「もたし掛けて置きましたとどやきける」

**どやくや** とどやくさま。どや〜と、さわがしいさま。混雑。どさくさ。生玉心中中「ハア、今のどやくやに同道めが掴んで走つた」

**どやくやまぎれ** どやくやの紛れ。どさくさまぎれ。萬年草中「騒ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし、どやくや紛れに、久米殿の手を引き」

**とやとや通** 奥州の名所、むや〜の關(陸前名取郡笹谷にあつた古關)に通ずる道。油地獄上「夕べの如く云はないけりや、とや〜通りのむや〜の關、二度と越し申さない、どうだ〜」

**どよぐ** 動搖ぐ。大聲する。どやく。二代男一「武藏野の土になるぞと動搖ぐを、何と聞いたやら」

**とよくの** 豊國野。伊勢國河藝郡高野尾の東。錢掛松といふがあつて、神宮の遙拜所とされてゐる。丹波與作下「心もひろきとよく野とこそ樂しみし」

**どよむ** うづく。づき〜痛む。とよむ

と

(響動)の轉用。戀八卦柱曆中「頰けた三つ四つくらはせて(中略)、それでこれ方崇り、殊に今日は土用の入り、それで跡がきつうどよむ。曆の事はおされぬ」

とら打つ 五人女三「ぬり笠にとら打て、千筋ごよりの緒を付け」。金具を打つ事かといふ。或はうら(裏)打つの誤か。男色大鑑「淺黄地の金入にて裏を打ちし菅笠」などあるが、いかん。

とらがあめ 虎雨。五月二十八日に降る雨。大磯の遊女虎御前が、曾我十郎の爲に祈つて、その涙が雨になつたといふ傳説に基づく。虎が涙雨。虎が涙。曾我の雨。次條參照。

とらがなみだ 虎涙。虎涙雨の略。前條を見よ。百日曾我三「頃しも五月二十八日、空さみだるゝ黄昏の、虎が涙や少將の、よるの雨さへしきりなるに」。双は水の朔日上「ヤア虎が涙のしるしが見え空が曇つた」

寅の一天 一天は一點が正しく、一時(二時間)を四刻に分けた最初の一刻の稱。寅の時の一點で、即ち、午前四時半に當る。曾我會稽山「明くるも寅の一天に、虎の御門ぞ開ける」。てん(點)の

條參照。

とらのこわたし 虎子渡。苦しいヤリくりをすること。無駄な手数を厭はず都合をつけること。癸辛雜記に「虎生三子、必有二彪。彪最狼惡、能食虎子也。余聞獵人云、凡虎將三子渡水、慮先往則彪食子、則必先負彪以往。彼岸、既而擊一子、次至、則擊彪以還、還則又擊一子、往、最後始擊彪以去、蓋極意關防、惟恐食其子故也」とあるに據る。置土産曰「賣指して爰もとの付届をしたり、又は切りの延びる、藥種を買受け、其の藏ながら質に置き、虎の子わたしにはし給へども、一度は蛇(わに)の口を逃れず」

寅の年には洪水(謠)武家義理物語四「とらの年には必ず洪水と語り傳へり。むかし駿河の國、安部川のわたり絶えて、十日の雨やどりして、旅人の難儀せし事あり」

とらのまき 虎巻。祕法を傳へた書。俗に源義經が鬼一法眼から傳授された兵法の書と稱されてゐるが、六韜の虎韜の巻から起つた名であらうといふ。とられんばう 江戸吉原の流行語。遊女にだまされて金銀を取られる客のこ

と。狂歌「やかれつゝ金のあるほどとられんば、後は必ず補伏せと知れ(あづま物語)」

とりあげがみ 取上髪。たゞ搔上げて束ねた髪。たねがみ。二代男五「取揚髪、物塗りたる顔にもあらずして」

とりあげば 取上婆。産婆。助産婦。とりあし 鳥足。一種の高足駄。普通の

まじりあし



下駄の臺の下から長い鐵製の棒を附け、その端を鳥の脚のやうに前三本。後一本の股とした高足駄。行人(修験者)などの穿くもの。大下馬「行人鳥足の高足駄を穿くも道を靜かに歩み行く」とりうり 取賣。骨董。古道具を賣買すること。又、その人。兩吟一日千句「冥途にすゆる釜を取賣り、短夜の月に掛けゝる自在竹」。二代男三「爲家の歌書を取賣に渡し、雲龍の卓香爐を賣捨て」とりおき 取置。取つて置くこと。かたづけること。轉じて、處置。始末。よく一身上のことに用ひる。一代男「鴨



の長明が孔子臭き身の取置も、門前の童にいつと無く戯れて」。胸算用「常住身の取置、屋賃その晦日切りすます」。又、取つておき。特別。釋迦如来誕生會ニ「御門々々に屏風折の蝶つがひ、取置の柵をふり、鳥も通はぬ御殿の様」

**とりおひ** 鳥追。年頭に人の門に立ち、祝ひの歌を唱へて物を貰ふ一種の乞食。歌は胡弓、箴後には三味線にも合せ、多く女のすることになった。もと公卿などの莊園に雇はれて、作物の害鳥を追ふことを勤めた下賤の者が、庭門に伺候し、當年の耕作の豊穰を祝福したのに起つたであらうといふ。源氏烏帽子折ニ「萬歳鳥追ととり」に、春は賑はふ折からの」

**とりおや** 取親。もと、養育を引き受ける親。後に名義だけで、奉公人の資格を高めるために、假に立てる親の稱となつた。「一代女」「賤しき者の娘には取親とて、小家持ちし町人を頼み、其の子分にして出すなり」。松風村雨束帯鑑「惣じて上つ方のお乳のめとは、とり親といふ事あり。氏素姓にも構ひなし」

**とりかち** 取棍。船首を左に向けるための棍の取り方。おもかち（面棍）の對語。「一代男三」あゆみの板をあけて、取かちに直して、早二三里も出て」

**とりかへ** 取替。立てかへること。萬文反古ニ「今度買物の銀子取替へ申すに付、迷惑さに申すには神ぞ御座な候」。又、かけかへ。ひかへ。

**とりかへぎん** 取替銀。物と取りかへに受けわたしする金錢。奉公人の雇入の時に渡す金などにいふ。「一代女四」御氣に入り給ふ女房衆なりと、取替銀も値ぎらず、其のお家久しき姥らしき人喜び連れ歸る」

**とりき** 取木。園藝に用ひる語。木の枝を摘め、その先端だけ残して地下に埋め、埋めた部分から根を生ぜしめ、新株として他に移植する法。桑の木のみなどはこの法によつて取る。歴條。

**とりきり** 取切。悉く取つてしまふこと。新小夜風物語「いつとなく銀嵩上つて、書付に一夜の夢を驚かし、取切と思へど止めがたく亂れて」  
**とりくび** 鳥首。太刀の一種。柄頭を鳥の頭の形に似せて作つたもの。とりくびのたち。吉野都女補三「太刀は鳥首兵

庫ぐさり」  
**とりげのやり** 鳥毛槍。槍の鞘に鳥の羽毛をつけたものの稱。傾城「反魂香上」まだほのぐらき曉の、鳥毛の鎌さき揃へしは、土佐が魂寫し繪の、精靈なりとも知らばこそ。とりげざや。

**とりこ** 取粉。搗きあげた餅を扱ひよくするために用ひる米の粉。しろこ。  
**とりこし** 取越。その期に先立つて事を行ふこと。特に忌日を繰上げて行ふ法事にいふ。おとりこし（御取越）の條參照。今宮心中「來月は母の七年忌、此のごろ取越致した此の母を、奈落に墮しませう」

**とりしづめ** 取靜。しづまり止むこと。出世瀧徳下「根引にするの請出すのと、取靜めない借上は」

**とりだち** 取立。小兒の物に取りすがつて立つこと。大下馬四「はや取立の時分より、六尺三寸の棒を持ちならはせ」。  
織留四「誕生日に取立してこの方、晝夜横寝をしたる事なく、我が家を年中ありきてばかり暮しぬ」

**とりて** 捕手。取手。罪人を捕へる者。柔術の一種。捕縛術。大句數上「岩に

と

羽衣袖まくり」。永代藏三「手振でかゝる事は、今の世の中に取手の師匠か、取揚婆々より外に銀になる物なし」

とりて 取出。出はじめの者。かけだし。

榮花咄「その初心をかきし、今を取田の大臣の下地と見えしが。置土産一「この前取出の時分、家買うて取らせたる太鼓が方へ走り込み」

とりなは 取繩。人を捕へて縛る繩。はやなは。一代男四「鼻ねち、取繩、きり

とてはあさましき世の暮し」

とりなり 取成。なりふり。身の様子。そぶり。舉動。一代男一「髪かたちとなり、袖口廣く、つま高く」。男色大鑑

六「當代諸國の風俗、都の女をまねて、やさしくゆたかに、とりなりに生れ付の恥を隠すを」

とりした 鳥舌。矢の根の一種。その形からの稱であらう。一代男五「半弓に鳥の舌の矢の根をつがひ」

とりのはねより 鳥羽選。鳥の羽毛で米つぶなど選りわけること。鳥の羽箆で一粒えりにすること。俗つれ、四「八木は近き里より鳥の羽よりして運び」

とりのまご 鳥孫。「鶴の孫」などいふ類。その條を見よ。櫻陰比事一「松は千年藏

とて、鳥の孫曾孫(ひまご)まで居喰にしても」

とりばうき 鳥箆。鳥の羽で作つた箆。俗つれ、五「鳥箆にて埃を拂ひ、箱に納めて封を付け」

とりはだ 鳥肌。鳥の羽毛を抜いた皮膚のやうに、きめのあらい肌。一代女五

「色は造れど筋骨立つて鳥肌にさはりて」

とりぶき 取葺。屋根の葺き方の一種。そぎ板を並べて、石又は丸太などを押へにしたもの。永代藏三「取葺の屋根」

とりぶきやね 取葺屋根。取葺にした屋根。胸算用一「笹竹を(中略)、取葺屋根の押へ竹に使ひ」。永代藏六「一萬三千兩持つまで取葺屋根の軒の低きに住みしが」

とりべの 鳥部野。京都清水寺の南方、山腹にある墓地。胸算用四「おのれはな、三ヶ日の中に餅が咽喉に詰つて、鳥部野へ葬禮するはいやい」

とりべやま 鳥部山。前條に同じ。武道傳來記六「皆々なき跡を弔ひ、軀は鳥部山の灰とはなりぬ」

とりまはし 取廻。とりなし。舉動。振舞。一代女二「取廻しの賤しからずと

て、國なる獨子の嫁にしても苦しからじ」。武道傳來記四「専左衛門を打つて捨て、取りまはし好く立ち退き」

とりまはす 取廻。取巻く。とり囲む。五十年忌歌念佛中「身動きせば、男どもぶちのめせと取りまはせば」。又、程よく扱ふ。とりなす。

とりもの 採物。神樂の時、舞人が手に採り持つて舞ふもの。神幣・杖・篠弓・劍・鉾・杓・葛などの稱。日本振袖始一「御神樂、採物、諸物、御魂の鏡世を照らす」

とりや 取矢。楊弓の語。四本の矢を一手とすること。一代男三「或御方の道具を借りて、取弓取矢にして四本けづれず、一筋は切穴に通れば」

とりゆ 取湯。粥から取つた湯か。榮花咄五「老人なれば療治盡きて、蛤貝にて取湯など少しづつ進めける」

とりゆみ 取弓。矢と共に弓を取ることか。とりや」の條参照。

とりみだち 鳥居立。鳥居のやうに兩脚を踏張つて立つこと。傾城反魂香上「貫の木も折るゝばかり踏みたゝき、鳥居立ちにぞ跨つたる」

「酔ひどれ」。大下馬ニ「兩方ともどれになつて、色々の物語盡きて」  
どれさま どなたさま(何方様に同じ)。  
一代女六「どれ様ぞお慰みなされませぬか」

どれる しだらなくなる。亂れまぎれる。  
二代男七「住吉の濱に蛤探らせ、松露を探し、落葉集めて、冷酒は飲まれじと、皆々どれで立ち騒ぐは」

どろ だら。大阪では放蕩者を「どろぼう」といふ、その下略であると。どろくもの。油地獄中「こちのどろめは、山上参りの、行者講のと、(中略)神佛の願も思はぬどろく者」

どろく 世馴れぬこと、「うぶ」などの意か。本領曾我三「思案を砕くさざれ石、岩ほにこけの娘さま、奥のとろくの御住居、誰がいつの間に粹にして」

どろくもの だらうらくもの(道樂者)の訛。遊蕩兒。どら。「どろ」はこの下略とも見られる。前々條參照。油地獄中「どろく者めがしたいがひに踏付ける」

どろまち 泥町。廓に行く客が、足手を洗つて風俗を作る處で、田町などの名稱と類し、江戸では吉原遊廓に近い、出女などのある下級の遊女町をいひ、

編笠茶屋などもこの町にあつた。又、伏見の遊女町では、撞木町に比して、一段低級の場所の名としてある。下例は伏見の語である。一代男一「若し氣に入たるもあらばと、見つくして、又、泥町に行くもおかし」

どろめん 兜羅綿。「とろ」は梵語で棉花の稱。綿絲に兔の毛を交へて織つた舶來の布。和製のもある。槐久物語下「とろめんのかつたび、細緒の奈良草履」とをし とほし(篋)を見よ。

とをだんど 十圍子。駿河國宇津谷峠で賣る名物の小團子。黄・白・赤などの團子を十箇づつ數珠のやうにつないで賣る。一代男七「宇津の山邊にのぼり詰め(中略)、苔地のつたひ道おるれば、草葺のかすかに、十圍子賣る女さへ美しく見えて」

どんくさい 鈍臭い。ばかくさい。阿呆らしい。曾我會稽山四「どんくさい。又雨が延びて來た。お立ちが降ると入るもあり」

どんぐりのづし 團栗の團子。(地名)京都四條南側芝居の裏手、建仁寺町の二丁目と三丁目との間の横町。「づし」は塗子、又は辻子で「こみち」の義。女腹

切中「走るとすれど夜中の太鼓、どんどんぐりのづしを出れば建仁寺」  
どんげ 鈍氣。鈍らしいこと。まぬげなさま。重井筒上「女房共は何處へ往た。エムどんげな。一言おれが言はねば、もうそれほど間が明く」

どんさ 鈍さ。おろかさ。出世流徳下「此の鈍さから此のつらさ、何にも得はなけれども」

とんさく 頓作。にはかに作ること。即興の作。轉じて、頓智の利くこと。機智のはたらくこと。新可笑記三「頓作なる人の知らせて 先づ占ひを見給へとて」

どんたらう 鈍太郎。鈍な男の稱。物種集上「此ほどは三人一所に口舌して、どん太郎殿の兩の手車」

とんてき ひやうきんもの。とんちき。とびあがり。蟬丸三「朝敵にもせよんてきにもせよ、武士の一言論言より重し」

どんなこと 鈍なる事。ばからしい事。國性爺三「日本人はどんな事聞いてゐぬ、小むつかしい、城内に入らidem 大事な」

とんひつ 頓筆。物を書くことが早くて

達者なこと。櫻陰比事四「賣掛の書出しをも頓筆ゆゑ頼まれける」

どんびやくしやう どびやくしやう（土百姓）の轉であらう。鈍百姓とするは泉かが。五十年忌歌念佛上「身どもは和泉のどん百姓、土ほせりでおじやれども」

# な

ない 應答する時の辭。口語の「はい」に類する。もと・肥前・奥州などの方言であるといふ。薩摩歌上「下馬さきをして振りませい。ないと應へて振出す」。夕霧阿波鳴渡中「屋敷へ歸つて八ツ時分迎ひに來い。ない。其の中ちと早く來い。ない。油断するな、と入りければ」

ない なる（文語）、又、な（口語）と同じ様に用ひられる辭。「いとけない」、「かたじけない」などの「ない」からの類推によつて生じたもの。二代男三「年明き前の女郎の、しかも不敵ない人座を占めて」。博多小女郎中「ハア、冥加ない有難いと、夫婦わつと泣出し」

ないぎ 内儀。人の妻の稱。うちかた。内方。一代男三「亭主内儀が入替り、けいはく敷を盡くし」。重井筒中「内へ歸れば主人の内儀、（中略）ちつと心をしめやう、とありければ」

ないしやう 内證。自分のうち。一家内のこと。世間の對語。一代男五「世間。内證ともに心を付けぬる。向くらし向きの事。家計状態。ふところぐあひ。壽門松下「以前は金銀内大臣、今日參るは内證に様子も金もある大臣」。向大びらにすまじき事。特に遊女の階級。揚代など。一代男三「太夫の中にも外はなく尋常なり、内證きけば三八と申し侍る」。向主人又は家族のゐる居る部屋。内證間。一代男五「しのび戸棚と申すは、是れも内證より通路仕懸けて、男を入置き逢はする事也」。大下馬「内證より内儀聲を立て」。なほ、次の各條参照。

ないしやうあそび 内證遊。こつそりと隠れて遊興すること。二代男四「鳥原の大坂屋に内證あそび」

ないしやうがり 内證借。内々で借りること。又、その借りた物。一代女三「銀八十日に詰まり、内證がりして」

ないしやうちやう 内證帳。内證のこゝを記す帳面。男色大鑑五「思ひの焼付は火打石賣、玉川千之丞内證帳の事」

ないしやうてだい 内證手代。家計をあづかる手代。金錢の出納を掌る手代。俗つれ。向「何れも路銀を内證手代の徳右衛門より請取りて」

内證は曾我殿 金錢の乏しいといふ譬。曾我兄弟は常に貧乏してゐたと傳へられるのでいふ。女腹切中「天窓つきは兩替町、内證は曾我殿、見せかけ力身おいてくれ」

内證は張物 世は張物（はりもの）といふ諺の轉用。家計は豊であると見せかけるのが、世間の常であるといふ意。椀久「世物語下「人みな内證は張物ぞかし。子に太鼓を打ち習はせ、娘に物鹿子を着せ、鞠楊弓に日を暮し、大やうに見掛けばかり、さりと恐るし」

ないしやうま 内證間。ないしやう向に同じ。二代男三「是れが御内證間とて見する。八疊敷の所に四つの隅に炬燵を四つ切りて、同じ色なる蒲團をかける」

ないそなないそ 「泣きそな泣きそ」の音便。泣くなよ泣くな。「若みどり」四の

「二上り」の句に「ないそなないそ五月にやもどる、おそて六月中頃」とあるに據る。蟬丸「我は袂の乾く間も、ないそな、いそ澤邊の蛙、斯かる思ひはよも知らじ」

ないつう 内通。内々の通知。祕密の通信。武道傳來記「内通あるかと、その日夜まで相待つに其の義なく」。又、男女の私通。密通。

ないはう 内方。ないぎ(内儀)に同じ。新可笑記「この内方に限らず、男情なき時は必ず悪心さし挟み、一命終る事を厭はぬやからは女心なり」

なかうどがき 仲人がき。「がき」は書で仲人に對して書いた證書か。媒灼人への礼金など記したものか。萬文反古「敷銀三貫目付けて(中略)、十分一取る仲人がきも入れ、是は仕合せと呼入れ申候へば」

ながえもち 長柄持。長柄の傘、長柄の槍など、長柄の物を持つて主人に従ふもの。新可笑記「長柄持の中より、小男鎧をさげて一人進みて」

なかぎ 中著。襦袢と上著との間に著る衣服の稱。  
なかぎやう 中京。京都の内、最も商家

の多い、賑かな區劃。上京・下京に對していふ。織留「中京に住みなれて、世間沙汰もはやく聞付け」

ながくら 長藏。長倉。數戸を一棟に長く續けて建てた倉。置土産「裏の長藏を小借屋に直し」

なかぐろ 中黒。紋所。輪の中に太く黒く一帯を引いたもの。一つ引兩。吉野都女楠「中黒のはた二ツ引兩、巴の旗も輪違ひに」。又、矢羽の名。

なかごと 中言。雙方の仲を裂くやうな言。卯月紅葉上「かげ言・中言・さゝへ口、立てはふすべ、居てはそしり」

なかごと 中事。兩者の中に起つた事。兩人で、仕出かした事。二人の内證ごと。兩吟一日千句「飛ぶ螢尻におもひの野郎とも、雲の上まで戀は中事」。武家義理物語「兩人の中事と首尾よくして別れける」

ながさきあきなひ 長崎商。肥前國長崎でする商。貿易商。永代藏「鬼角は長に任せて、長崎商ひせし人、筑前國博多に住みなして、(中略)海上の不仕合せ、一年に三度まで大風」  
長崎勘十郎 置土産「一節切の指南する長崎勘十郎」

長崎の伊左衛門 長崎じこみの粹男といふ暗喩。長崎は華美なところとしてあつた粹客。博多小女郎上「長崎の伊左衛門様、とは違つたもの。もう踊らぬぞや」

長崎半左衛門 大下馬「長崎半左衛門が柄杓の曲づくしを、めいよと思へば」

長崎水右衛門 歌に色々の藝を仕込んで、見世物にした藝人であつたといふ。胸算用「長崎水右衛門が仕入れたる鼠使ひの藤兵衛を雇ひに遣はし」

ながざしき 長座敷。座敷に長く居ること。長座。ながしり。二代男「山の端逃げし酒嫌ひを引留め、長座敷になれば」

ながし 流。生花の詞。ながしえ(流枝)の略。天地の間に、延ばして流したやうにした枝。孕常盤「笑顔ばかりの梅櫻、流し控への覗み合ひ、しんには中の思ひかや」。生玉心中上「先づ鉢植の作り松、すんと流しの一枝は」

なかじめ 中締。槍鞘の一。中ほどが締めたやうな形のもの。薩摩歌上「筆形の中締は、江州彦根の御大將」  
なかしゆ 中衆。なかし(仲仕)ともいふ

な

な

即ち船着場にゐて、荷物の運搬などする人夫。こあげ(小揚)、うはにきし(上荷差)を参照。

**ながそて** 長袖。長い袖。又、長袖の着物を着る人。特に、公卿・僧侶・醫師などの稱。大職冠四「此方とても長袖、此の上は運づく」。曾我會稽山一「長袖となつたれども、家に生れ弓馬の道は入道こそよく知つたれ」

**ながだうぐ** 長道具。槍・長刀・太刀・鎌などの稱。武道傳來記ニ「兩方より長道具にて挟み立て」

**なかだち** 中立。仲立。中介すること。中介人。特に男女の仲を取持つ者。一代男七「中立あつてのおとづれ」。同七「世之介と淺からぬ中立は越後町の或宿の口鼻」

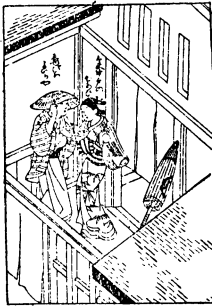
**なかだち** 中斷。「ちうだち」を見よ。  
**なかづかひ** 中使。雙方の間に立つて互の意志を傳へる者。兩方の使ひするもの。生玉心中上「買主の手へ渡りさうな物が、中使の手に握つてゐるとはの」

**ながづきん** 長頭巾。丈の長い頭巾。しころの長い頭巾。一代女六「達者なる若男三人、羽織に鉢巻又は頬かぶり、或は長頭巾を引込み」。又、長羽織の稱。

長頭巾を冠つた醫者が皆着用したのでいふ。

**なかく** 中手。圍碁の詞。相手の目を缺くために、その目の中に石をうつこと。又、その石。國性爺四「吉野の碁盤忠信、(中略)先手が味方へ廻りくる、四ツ目殺に中手を入れて、しちやうに懸けて打切つて」

**ながてん** 長點。和歌・俳諧の秀逸なものに附ける點。上から句の切目まで引き、更に一點をその上に附ける。なが。轉じて、物のすぐれたことにもいふ。大矢數三「勝を見せたる宿の燈、つれなくの心付には長點か」。松風村雨束帶鑑一「使ひごろよし乳も若し、若宮のお乳の人、長點なりとありければ」



どか

口から見世庭を通り、内庭へ入る戸口。娼家では、その中戸の手前られたと見えひびきなどによく用ひられたと見え。一代男七「うれしき物、その日の男早ういぬるの、中戸で會うての別れ」。榮花咄五「盗みて中戸の苦しみより、うつけになりて床取らして、ともし火で顔見て」。曾根崎心中「這ふ〜中戸の沓脱より忍ばせて、縁の下屋にそつと入れ」

**ながといんろう** 長門印籠。江戸塵拾「秋月長門守屋敷より出る牛皮にて造る印籠なり」。槍權三上「まあ二三年して顔も直し、脇詰めたらしつくりの長門印籠」

**長門練りの無地の印籠** 前條の印籠と同じ。練り「は煉りで、漆を煉つて塗るのいでいふか。永代藏五「鹿の角の根付、長門練の無地の印籠」

**なかどほり** 中通。中位なもの。又、次條の略。ちうとほり。遊里では、てんじん(天神)の別稱(色道大鏡)。

**なかどほりをんな** 中通女。中居(なかむ)。上女中。縫留六「中通り女とて出合ひがしらに、二人一度に連れて來りけるが、(中略)さて中居の役は」。「ちう

とほり」の條參照。  
**なかどり** 中取。中に立つて横取すること。中使(なかつかひ)などの不正な行為にいふ。

**なかなえ** 遊里の詞。色道大鏡「中なえ。大かた能き女郎を仕込み置きたる所に、珍しき男かゝりて、その方へ心移り、馴染の方薄くなるさまをいふ。又、わきへ心は移らねども、何ぞ恨むる事もあるか、疑はしく思ふ心にて、まはりぐち違ひ、よろづひかゆる躰に見ゆるをいふ」

**なかなれ** 中なれ。「なれ」は、馴又は藝で、古くなること。中ぶる。五人女「扇流しの中なれるゆかた、裏ときかけたる木綿たび」

**なかぬき** 中抜。(中)中から抜くこと。うるぬくこと。その抜いたもの。まびき(間引)。二代男「車の早緒といふものを襷に懸けて、中抜の大根揃へる片手に」。(中)なかぬきざうり(中抜草履)の略。藁しべで造り、緒には藁に白紙を巻いて糊つたものをつけた草履。持草履。すべざうり。わらみござうり。一代男「運齋織の袋たび、中ぬきの細緒を穿き」

**なかぬきざうり** 中抜草履。前條を見よ。  
**なかのふう** 中の風。新町の風。大阪の北・南の新地は公然の廓でなく、新町が唯一の遊廓であつたので、「なか」と呼んでゐた。油地獄上「鳥ちどみに鹿の子帯、たしかに中の風と見た」

**なかのゐのこ** 中の亥猪。十月には北斗が亥の方向を指すといふので、古く禁中でもこの月初亥の日に餅を馱する儀式があつた。中とは三度ある、その中の亥の日をいひ、猪は多産するといふので、後世民間では子孫の繁榮を祝ふ意味で、餅を食ひ又は贈答する風が起つた。單に「ゐのこもち」「ゐのこ」ともいふ。胸算用「中の亥猪(ゐのこ)を祝ふ餅の米、氏神の御拂團子」。天網島中「昨年(の)十月(の)亥の子に、炬燵あけた祝儀とて、まあ爰で枕並べて」

**なかばし** 中橋。大阪道頓堀川に架した橋。太左衛門橋と日本橋との間、現在の相合橋のこと。重井筒中「月は早、渡り初めして中橋や、六軒町の小夜格子」

**なかばらひ** 中拂。盆と師走との二季の支拂の中間にする支拂。天網島下「買物の爲京へ上る、大分の用なれば、中拂ひの間にあふ様に歸るは不定」

**なかばん** (長崎方言)「無いから」の意。博多小女郎上「薩摩者と喧嘩した咄、嘘じやなかばん聞かつしやれ」

**ながまくら** 長枕。たけの長い枕。二人で寝るに用ひる枕。又、その枕すること。二十不孝四「浮世とは斯かる事ならんと、長枕の端に書殘し、男の夢に若しも見られぬうちと、寝巻ばかりの亂姿にして、此の宿を忍び出で」。二代男四「釣夜着・長枕・帯懸の屏風」

**なかまご** 仲間事。仲間のある仕事。共同でする事。永代藏三「仲間事に始末する人なく、遣日記に饅飴・蕎麥切・酒肴さまんくの菓子好み」

**なかめ** 中目。博奕の詞。「うんすんかるた」の詞。大職冠四「つけめには八むし並居たり、その外中目、二目おり、遁れがたしや我が命」

**ながめざと** 眺里。眺めのよい里。男色大鑑四「南は障りなく、浮き雲も心ありげに、晴天のおもふまゝなるながめ里」

**なかもどり** 中戻。中ほどから戻ること。中途で引きかへすこと。ちゆうもどり。

**なかやしき** 中屋敷。上屋敷(かみやしき)の控へとして用ひる屋敷。上屋敷・下屋敷の對語。一代女三「この事御中屋」

な

な

敷へ漏れ聞えて、殿様驚かせ給ひ、あらましを御尋ね。櫻陰比事四「本妻果てて後、筋目好き方の然も美形なる呼び迎へ、是れは中屋敷に置きて折々通ひ、本宅には」

**なかやど** 中宿。宿もとのない奉公人が、出替り時に、宿もとのやうに、滞在してゐる家。奉公人の下宿。男屋の密會宿。小宿。一代男三「あれは男屋方にはすはと申して(中略)、下向もすぐには歸らず、中宿に明かして、物つかふ男を招き、いやといはぬ程の御無心を申し。上方で、揚屋、又は引手茶屋をいふ。

**なからじに** 半死。死にきらぬこと。半死半生。重井筒下「氣もうろたへ目もくれて、どうして死なれうぞ、なから死して恥さらし。卯月潤色上「男は淺疵なから死」

**ながれあるき** 流歩。あてどもなく歩くこと。流浪。女腹切中「親方に見限られつゝ筒井筒、心の水もかへ干して、流れあるきにとぼく」と

**ながれくわんちやう** 流灌頂。水流に卒塔婆を立て、白布を釣り、椿などそなへて修する法事。その塔婆を流すのも

ある。一般に水死した有縁無縁の亡靈、特に難産で死んだ婦人の亡靈を得脱せしめる縁とするもの。大矢數三「弔の流灌頂あはれ也、帛袖香水けぶり立つ」。二十不孝三「涙は袖行く水に經木を書いて、流れ灌頂を立て、親の身を弔ふは流れ川」。薩摩歌下「夢か現か幻か、亡に分ちも七流れ、流灌頂血の上の、亡者浮ぶる法の流れ」

**ながれごと** 流事。その時かぎりで、いつか止めてしまふこと。お流れ。

**ながれだれいもく** 流題目。流灌頂の類か。大矢數三「霧の海波静なる四貫島、夫天台の流れ題目」。懷硯「降り續きたる五月雨(中略)、末々の枝河、諸木も葉付の筏を流し、三條暖すさまじく、頂妙寺の惣門につきて、佛壇おのづから流れ題目となれり」

**流れに耳を洗ふ** (謔) 山川の間に隠れる。浮世を遁れて暮らす。許山の故事に據る。津國女夫池三「人も頼まぬ高名だて、知行欲しげに無益の事と、流れに耳を洗ひたのしむ所」

**ながれはすね** 流連根。はすね(連根)の一種。「はたけがさ」といひ、癩、又は粟癩と記す。尙、「はすね」「しりはす

ね」の條参照。一代男二「ながれはすねの、あとをもちぬ、躰のあたりの、垢かき流し」

**ながれやき** 流燒。刀劍の燒刃に水の流れのやうな象があるもの。女腹切上「双物の相性見る人に、目利きして貰ひしに、祖父様父様同じ火性、刀は水の流れ燒 以ての外の不吉の脇指」

**ながれわたり** 流渡。世を放浪して渡ること。世間の風潮に身をまかせて過すこと。壽門松下「命つれなき流れの身、流れ渡りの世の中に、しばし留まる踐が家の、軒を尋ねて惱みけり」

**流れを立つ** 流れの身、即ち遊女として立つ。遊女の意地を立てぬ。流れの道を守る。傾城酒呑童子三「嫁に勤をさするは、むす子の太四郎は女房に流れを立てます、と悪名を立てられう」

**なかわん** 中腕。親腕の次の大きい腕。汁物を盛るに用ひる。一代男七「岩倉の松茸を焼いて、中腕にふたつ飲み」

**なか** 中居。仲居。殿中の奥の間の一。また、そこに勤める女。商家の女中の一。一代男一「中居ぐらゐるの女房」。京阪では特に遊女屋・料理屋の女中の稱。客をあしらふ女。女腹切中「聲



も廣がる扇屋の、仲居のまんが供して通る。なかるをんな。

なかをり 中折。(→紙の名。鼻紙用などの半紙。紙を帖のまゝ半分に折るのでいふ。なかをりがみ。二代男「奉書五枚・中折半帖・封じ紙三枚」。(→髪)の結び方の一。俳優などの結つた髪。二代男「當世男の河原者の風俗を寫して、中折の髪先、拭白粉の地顔など見て」

なかをりがみ 中折紙。石見・土佐・豊後などから産する半紙。前條の(→)を見よ。なきしみづく 泣きしみづく。泣く涙に濡れる。冥途飛脚中「泣きしみづきて語るにぞ、一座の女郎(中略)、連れて涙を流せしが」

なぎなたさうり 薙刀草履。穿き古して經(たて)が切れ、長刀のやうに表が歪んだ草履。やぶれ草履。夕霧阿波鳴渡上「今はやうく長刀の草履を脱いで編笠の、中の座敷に通りが」

なぎなたばこ 長刀鉢。祇園會に引出す山鉢の一。長刀又はその形したものを中心の飾とした山車。列中の第一番に進むもの。堀川波鼓下「六月七日祇園會の、長刀鉢の刃先に、打ちかち時の鶏鉢」

な

なきをとこ 無男。智慧の「なき男」といふ洒落にいふか。懷硯「世の中は皆あの通り、過不及なる事のみにて、無男といひ、餘程足らぬ者が、今の女房など持つべし」と

泣く子も目をあけ (諺)泣く子も周圍の形勢を見ることを忘れるものでない。いかに不分別者でも、少しは思慮するところあれ。源氏烏帽子折「泣く子も目をあけ、咄しどころか、そちが様な隙ではなし。重ねて聞かん」

なぐりなきげ 無氣(なげ)の情。本氣のともなはぬ情。なげのあはれ。なげ 投。(→相撲)の手の名。四つに組んで相手の禰を取り、腰を入れて投げるもの。上手投、下手投などの區別がある。(→投節(なげぶし)の略。置土産上「引き唄ひのなげも勤めとて」

なげいれ 投入。投げ入れ。活花の一種。花を自然のまゝ投げ入れたやうに挿すこと。夕霧阿波鳴渡上「我が身を横に投入れの、水仙きよき姿なり」

なげかき 投鍵。投げて物を引きかけるに用ひる鉤。水戦などの時、敵船を目がけて投げかけ、引き寄せる具としたもの。

なげがね 投銀。投金。資金を投ずること。投機的の出資。物種集「なげかねをして渡る君が代、唐潮の巖となりてさゝれ石」。一代男「日本物を買ふべきなげ石と仰せらるる」

なげかやす なげかへす(投返)の訛。薩摩歌中「追付け頼みが来る筈、なげかやいて見せうぞと喚き散らす」

なげくび 投首。首を投げ出すやうにして、思案すること。頭を傾けて考へること。

なげざや 投鞘。槍の鞘の一。毛皮製で、先方を長く餘して垂れたもの。薩摩歌上「奥大名の長道中、奴が首も投鞘に、紺に手杵をつく」

なげしほ 投潮。投げるやうに潮の波のくだけることか。最明寺殿百人上臈上「片潮・もろ潮・女夫潮・投潮・わき潮なんど申し、潮合を見て」

なげしまた 投島田。さげしまた(下島田)に同じ。二代男「卑しからぬ女の、髪は投島田に結うて」

なげそ 投げそ。な投げそ。投げるな。陸道節「悟氣心に枕な投げそ投げそ枕に料はよもあらじ」。百日曾我「抱力なき草枕なげそ枕にとがもなや」

**なげづきん** 投頭巾。四角に縫った頭巾

の上端を、後の方へ折つてかぶるもの。

一代男五「男は小さき編笠かづき、女は

投頭巾に大小を指すもありて」。二代

男八「九一郎が投頭巾、あれもすきにと

いふ」

**なげぶし** 投節。貞享元祿の流行唄の一。

もと、歌詞の終をヤンと投げて謡ふと

ころから起つた名であるといふ。當世

投節・新投節など多少の種別があつた。

松の葉「なげ節の事、元來江戸弄齋の

ふしを直してうたひ來るとかや。吾聲

しめやかに、調子は低き方よし」。一代

男六「投げぶし唄ふ女に紫檀のつきざ

をはずみ」。胸算用目「おやま茶屋で唄

ひ習ひし投節を」

**なごやうち** 名古屋打。丸打の太い紐。

又、帯にもいふ。一代女五「時の首尾に

よりに名古屋打の帯、重打の下緒、思

ひの外なる商事もするぞかし」

**なごやおひ** 名古屋帯。丸打の組帯。兩

端に總があり、幾重も廻して帯とした

もの。袋打のさなだひも。なごやおひ。

もと肥前國名護屋から産したので名づ

けるといふ。前條参照。油地獄上「町で

なごやの胸高帯は、小笹に露のたまら

ぬ始末」

**なごやさんざ** 名古屋三左。傳未詳。天

和笑委集に

「ちかきは名

古屋山三郎、

浮世好色四天

王」とあり、

舞曲扇林には

當時の美男五歌仙の一人として數へて

ゐる。出雲阿國の情人としての名古屋

山三郎も名高い。何れにしても、好色

の美男子であつたと見える。一代男一

「名古屋三左、加賀の八などと七つ紋の

ひしに組みして、身は酒にひたし」。②

傾城反魂香の中の人物、名古屋山三春

平のこと。



(端上右) 山三やごな

**なごり** 名残。俳諧の詞。百韻・歌仙など

の時、懐紙の最後の一枚。名残の表と

名残の裏とがある。物種集上「百韻もす

でに名残の花所、卯の花の垣根まで引

く善の綱」

**なさか** 汚名、悪評などの意か。天鼓一

「澤瀉が家の寶、狐の革の鼓をもあげよ

との宣旨なるが、是にはほうと困つた

り、どうぞなさかの立たぬやう奪ひ取

りやう有るべき」

**なさけざかり** 情盛。情ごころのある盛

り。いろざかり(色盛)の類語。

**なさけしり** 情知。情をわきまへてゐる

こと。又、その人、わけしり。粹人。

一代女四「神ぞ情知り様」

**なさけせうじん** 情少人。情をわきまへ

てゐる若衆。情知りの美童。

**なさけだい** 情代。情を賣る代金。揚代。

花。一代女二「一夜づつの情代、金子二

歩」

**なさけづめ** 情詰。人情にからまること。

情に攻められること。なさけせめ。丹

波與作下「背より積る愛きなみだ、理づ

め、義理づめ、情づめ」

**なさけづかひ** 情目遣。情のあるやう

な目づかひ。いろある目で見ること。

**秋波**。一代女二「前から來る人をよけ

ず、情目遣ひとて近付にあらぬ人の辻

立にも、見返りてすいた男のやうに思

はせ」

**なさけもやう** 情模樣。情味あるもやう。

粹なもやう。當流小栗判官五「前垂だす

き脱ぎすて、情もやうの色小袖、追

風あさく薫らせて」

なさけやど 情宿。なさけをかけて人を

宿すこと。五人女四「雪の夜の情宿、戀の道しる似せ商人あり」

なさけらし 情らし。情あるらしい。い

きで人をひく様子にいふ。「一代男」其の面影情らしく、よきとほむる人のあらば只是通らじ」

なさりんす 爲さりますの訛。遊女の詞。

油地獄下「金のこととは存じやせぬ、やり手にお問ひなさりんせ」

なしうち 梨子打。梨子打烏帽子の略。

次條を見よ。

なしうちゑぼし 梨子打烏帽子。「なしうち」は「なやしうち」の約で、柔かに造つた烏帽子。冑の下に冠るもみゑぼしの一。表はふしかね染めの綾、裏は薄様の黒漆塗りで、縫つて作る。源氏烏帽子折三「梨打烏帽子、直垂着流し太刀佩いて」

なじほ 名鹽。紙の名。攝津國名鹽村(寶塚の北方)から産する紙。委しくは、名鹽松葉と稱する。

梨も礫もうたす (諺)「梨も礫もせず」ともいふ。何の便りもない譬。何の音汰沙なし。曾根崎心中「この頃は、梨も礫もうたせんぬ」。槍権三上「それから

梨も礫もせず、お文行く度毎に、此方から返事せう」

なしものをけ 鱧鮒桶。「なしもの」即ち

しほから(鹽辛)を入れるをけ。用明天皇職入鑑「汝が五體に七つ輪を入れ頭から爪先まで、鎧鎧を見知らせてなし物桶にしてくれん」

なすくる なすり(擦)くろむるの轉訛か。瞞着する。だましてまゐめる。

なだ なみだ(涙)の六方詞。

なだい 名代。名題。(名目。名義。その名によつて事をするにいふ。織留「我が名代にして家を求めても」。(名高いこと。又、そのもの。名うて、評判。

なだいをとこ 名代男。名代の男。評判男。名物男。一代男三「是に身を染めて、名の立つは合點、名代男になりぬと申すは」

なだてがまし 名に立ちやすいことにいふ。名の立つらしい。名だたしい。緋縮緬卯月紅葉上「なだてがましき天満屋お初、他所に聞くさへ身に蜆川」

灘の鹽甌 灘の地で鹽を焼いてゐる海人。胸算用五「灘の鹽焼は、黄楊の小櫛もさまで、と詠みしに」とは、伊勢物

語に「蘆の屋の灘の鹽焼いとまなみつけの小櫛もさびず來にけり」とあるに據る。

なちいし 那智石。紀伊國那智地方から出る石。質が密で純黑色、うるはしい光澤をもつ。赤石・庭石に用ひ、又試金石とする。なちぐる。一代女五「小ぐらき家作り、盆山に那智石を蒔きて、石菖蒲の根絡み」

なつぎ 臍。あたま。うなじ(項)。

なつげ 夏毛。鹿の毛の夏になつて、色黄に白斑のあざやかに生えたもの。筆の穂として賞用される。傾城反魂香中「ならびなつ毛の狩野の筆」

なつげ 名附。いひなづけ(許嫁)の略。今宮心中上「在所でなづけの方より、急に欲しいと申すに付」

なつしよ 納所。寺で施物を納めておく所。又、その事務を掌る僧。納所坊主。萬年草上「祐辨律師を始めとして、納所同宿入替り立替り」

なつしよばうず 納所坊主。納所を掌る僧。前條參照。五人女四「この若衆いかなる御方ぞと納所坊主に問ひければ」

なつづきん 夏頭巾。絹又は紗などで作つた、夏かぶる頭巾。昔のは麻で作つ

な

な

たといふ。麻頭巾。男色大鑑ハ「若衆みな丸袖の羽織をかしく、夏頭巾の山はきながら錦を夜かぶりて」

なづみ 泥。なづむこと。心を引かれること。執心。なじみ(馴染)。次條参照。

なづむ 色道大鏡一の六一なづむ。思ひ入りて執着する心なり。心、外にあらざして、一寸ちに傾く貌なり。なづむといふも古き詞也。宵庚申上「そのいきかたに猶なづむと、しみしたるう取廻せば」

夏瘦もせず蚊も喰はず (諺) 羽子を自分の年の数だけ突けば、夏瘦せず蚊が喰はぬと傳へられる。「年の数つけば夏瘦せず」の條を見よ。源氏鳥帽子折「羽子さ(も袖に留りて(中略)夏瘦もせず蚊も喰はぬ、年の数々おもしろや」

なてがく 撫角。撫で取つたやうに滑かな丸みある角。又、その形あるもの。男色大鑑ハ「萌黄の袋うち柄米、なて角の金鈴、髪結ふさまも一際目立ちて」

なてぐし 撫櫛。髪をなてつける櫛。なてつけぐし。撫附髻。撫で附けた髻。なてつけがみ。髪を頂の後方に撫でつけて垂らしておく、その髻。な

でびん。國性爺四「若衆出立にさまをかへ、撫付髻の大たぶさ、翡翠の大髷ふつきりと、稱宜の息子が膏藥賣か」

なてつけをとこ 撫附男。撫附髻の男。撫附がみの男。

なと なり(助刺詞)と(助詞)の略。なりとも。博多小女郎上「女房にしなと殺しなど、否か應かど生き死にの大事の返事でごさんする」

なとやかに なごやかに。おだやかに。平穩に。油地獄上「目玉の鬼門金神もなとやかに」

なとり 名取。名を得てゐること。名聲高いこと。名うて。評判。又、その人。男色大鑑六「あはれ東の洞院の浮世紺とかたりぬ」。釋迦如來誕生會二「五天竺第一の美人の名取、心まで戀に我の張る御氣だて」

ななおもての明神 七面明神。江戸郊外、日暮里の延命院といふ日蓮宗の寺に安置すると、いふ七面大明神(江戸名所圖會)。一代男二「谷中の東、七面の明神の邊、心も澄むべき武藏野の月より外に、友も無き吳竹の夏」

四五〇

ななたまがは 七玉川。玉川と呼ぶ川七つを數へて言ふ。男色大鑑五「七玉川の外に小歌の名所に、千之丞がむかし、風吹けば沖つ白聲にて歌ひ出し」

ななついろは 七ついろは。七つの違つた字體で書いたいろは假名。七體いろは。

ななつがしら 七つ頭。刻限の稱。單に「七つ」は午前又は午後の四時頃。その少し前を「七つがしら」といふ。槍權三「時は夜明けの七つがしら」。次條参照。

ななつさがり 七つ下り。晩の七つを過ぎた頃の稱。又、物の盛を過ぎ、古くなつたことなどにも轉用する。懷視二「日は早七つに下ると引込みけるに」

ななつたうぐ 七道具。(武勇あるものが背負つて戰場に臨んだといふ七種の武器。具足・刀・太刀・矢・弓・母衣・兜の稱。又、鎌・鋤・槌・斧などの稱であると。いふ。(大名などの行列の時、供に持たせた槍・長刀・笠笠・立傘などの稱。雪女五枚羽子板申「引馬・乗物・徒士侍、七ツ道具を押立て」

ななつだち 七つ立ち。七つの刻限に出立すること。午前四時出發。武道傳來

記八「あすは七つ立にして伊賀越に行くとて」

**ななつなからのをさ** 七半の篋。三百本の絲すぢを通すやうに造られた篋。四十本の絲を一紀(よみ)と呼ぶので、その七倍半の篋といふ義。胸算用一「蓋なしの小重箱一組、七半の篋一挺」

**ななつばち** 七鉢。七つの鉢を入子にしたもの。七箇重ねた入子鉢。五人女ニ「さては晝も棚から入子鉢のおつる事もあるよ、いたづらなる七つ鉢め」

**ななつぶとん** 七蒲團。道中の馬上などに、七枚の蒲團を重ね敷いて乗ること。一代男ハ「乗懸馬(中略)かれこれ三疋揃へて、七つ蒲團を白縮緬にしめかけ、馬の脊にも唐糸をはかせ」。堀川波鼓甲「扱も見事なおつら馬や、七つ蒲團に曲衆すゑて」

**ななつぼし** 七星。紋所の名。永代藏五「淺黄の七つ星小紋に黒餅」

**ななつもん** 七紋。衣服に七つの紋所をつけること。五つ紋、三つ紋などに對する語。背筋の一つ、兩袖の前後兩面に各一つ、胸の前の兩方に各一つ、都合七つ。一代男「加賀の八など、七つ紋の菱に組して」

**ななつや**

七屋。しちや(質屋)の隠語。一六屋。一六銀行。壽門松上「春風り顔に七つ屋の藏の戸出づる鶯の茶の布子」

**ななところ**

七所。刀、脇指その他の道具の拵へ方にいふ語。各部分をそれら、専門の者に拵へさせたものであらうといふ。念入りの精巧なもの。七所ごしらへ。一代男セ「町人ごしらへ、七所の大脇指、少しそらして、あい鮫を懸け、鐵の古鏢ちいさく、柄長く、金の四つ目貫うつて」。傾城反魂香中「大小對の金鏢、毛彫は波に山王祭、七所御物蒔繪の印籠」

**ななのやしろ**

七野社。次條に同じ。或はいふ、七野とは京都の郊外平野・内野・北野・蓮臺野・柏野・紫野・淺野の稱である。俗つれ四「北野殿を祈るもあり、又、貴船に頼みを懸け、あるひは七野社に砂車、我等がためと跳まむり」

**ななのやしろ**

七之社。京都大宮通りの北にある。文徳天皇の仁壽元年染殿皇后が、奈良春日明神を勧請せられたといふ。これに、伊勢・石清水・稻荷・賀茂・松尾・平野を併祀して七の社といふ。

又、山王七社をいふ。油地獄中「八つこうなみのやしろ」

**ななはかまゐり**

七墓參詣。京阪の古い風習で、七月十五日の夜、鉦・太鼓を叩いて七所の墓地を廻つて拜すること。又、その巡拜者の稱。七墓とは梅田・葎原・蒲生・小橋・高津・千日・飛田をいふが、時により葎原の代りに長柄を、或は蒲生・千日の代りに、長柄・野江を加へることもあつた。後には、單に七箇所の寺を巡拜するを稱したといふ。七墓めぐり。二代男四「七墓參詣に逢ふは昔の」

**七重の膝を十重も折る**

「七重の膝を八重に折る」の轉用。丁寧ニ丁寧を極めること。聖徳太子繪傳記二「七重の膝を十重も折り、兜の天邊を地に付け申さん」

**七や十四五すつとんと**

若みどり五「枕かるやま蒲團も肌につけあへず、心よき夢二つ三つ、七八十四五すつとんと」とんとうちこむ色里に(かるやま)

**ななよまち**

七夜待。神佛に七夜續けて參詣して祈誓すること。新可笑記二「諸神に祈誓の七夜待ちを懈怠なく、天子に見ゆる事を願はせ給ひぬ」

な

**なにがさて** 何が扱。勿論。何はともあれ。いかにも。重井筒上「大儀ながら隠居へいて、今の誓文一通り聞かせまして下されかし(中略)とありければ、何がさて、譲り受ければ我が爲にも親同然、つい一寸いて来う」

**なにはげいしや** 難波藝者。難波の歌舞伎役者。大阪俳優。「げいしや」の條参照。今宮心中上「役者評判扇賣、浪花藝者の風俗を、橋々名所になぞらへ」

**なにはてら** 難波寺。大阪天王寺の古稱。  
**なにはのこばう** 難波の御坊。大阪北久太郎町と久寶寺町との間にある。東本願寺、南御堂の稱。冥途飛脚下「これは難波の御坊の御普請の奉加帳」

**難波の祖師の名號** 法然上人が、天王寺の西、一心寺で修行の時書かれた南無阿彌陀佛の字を、俗に「難波の名號」と稱へたといふ。

**なにははし** 難波橋。大阪大川(淀河)に架した橋。天神橋の下手、北濱と天満とを通ずる橋。

**なにはやき** 難波焼。なんばやき。大阪高津から製出する赤色の陶器。大矢數「花の火に其影うつる難波焼、梅は五つのはした天日」

**なぬかまうて** 七日詣。七日間續けて神佛に參詣して祈願すること。なぬかまゐり。孕常盤二「自ら御祈禱の七日詣を偽り」。ななよまち(七夜待)参照。

**なぬかみそ** 俳諧師手鑑「こまなめていさ水かはん七日みそ」(正伯の句)

**なのき** 名木。香の名木。めいぼく。俗つれ〜ニ「琴の遠音、一節切、名の木蒸りに、墓の煙も立ち消えするなり」

**なば** 那波。(地名)播磨國の港。松風村雨東帶鑑五「夜さの泊りは何處どまりぞ〜、なばかしやくしかむろが泊りか〜」

**なはさんずん** 繩三寸。さんずんなは(三寸繩)と同じ。油地獄下「繩三寸に締めあぐれば、はや町中が駢付け〜」

**なはつき** 繩付。繩で縛られてゐること。又、その者。罪人。戀八卦柱曆中「やあうぬめは、繩つきで預けるさ〜昔からない作法」

**なはて** 繩手。(町名)京都加茂川東岸に沿うた通りで、四條と三條との間の稱。女腹切中「祇園狂ひか宮川町か繩手か」

**なはぶし** 繩節。繩の節になつたところ。  
**なはめ** 繩の結び目。なはめ。  
**なはめ** 繩目。(前條と同じ。後)繩で捕

縛されること。吉野秘女補二「かゝる繩目にあふことも、夫の武運のつたなき故」

**なはん** 名判。名と判。姓名と印判。織留「銀八百渡しけるに、請取帳に名判をしろし」。又、花押(かきはん)。

**なひませ** 綯交。さまざまの色糸などを綯ひませたもの、紐、綯などにいふ。一代男五「菅笠に紅裏うつて、なひませの紐をつけ」。天網島中「明けて惜氣もなひませの、紐付袋押開き」

**なふ** (感動詞)「のう」の假名ちがひ。なう(喃)。發語又は呼掛として用ひ、句の末にも附ける。釋迦如來誕生會四「なふ物問はん、淨飯大王の御太子」

**鍋が茶屋** 河内國枚方のかんなべ山の茶屋であるといふ。出世瀧徳上「紅葉たけたけなべが茶屋、枚方樟葉これもまたなべじりやき 鍋尻焼。鍋尻の世話まで焼くこと。臺所の事にまで心を用ひ過ぎること。生計の苦しいことにいふ。

新小夜嵐物語下「鍋尻焼は鹽・味噌・米・薪一色かけても、下帯かゝぬ若衆の如し、外からは見えずして内證氣の毒のみ」。次條を参照。

**鍋尻や** (諺)嬉遊笑覽に「寶倉に、家

の内のうしろ見など頼めるを鍋尻やくなどいへり。世話焼き肝煎などの煎、焼よりかゝる諺も出来しにや」とある。又、夫婦世帯を言つた語であるといふ。

**なべとりうり** 鍋取賣。鍋取(鉦のない鍋釜をおろす藁製の具)を賣ること。又、その者。懷硯ニ「裏店借りて草履を作り、鍋取賣など、誰知らぬものなし」

**なべとりくげ** 鍋取公家。公家を嘲つていふ。前條「なべとり」の形に似た老懸(おいかげ)を着ける公家といふ意。松風村雨東帶鑑ニ「鍋取公家の子は産めど、後腹痛まらずの片破船」

**なほなほがき** 尙尙書。手紙にいふ語。本文に書きもらしたことを、宛名の後に「尙々」と書き足すのでいふ。おつて書き。二伸。一代男「わざと書きつづけて、もはや鳥の子もないと申されければ、然らばなを(ほ)〜書をとのぞみける」

**なま** なまゑひ(生酔)の略。足もとのあぶない程度の酔。二枚繪草紙下「お鳥は酒に酔ひくづおれ、ひよろり〜となまになり」

**なまいたに釘** (諺)なまいた(生板)に釘うつやうに、入りやすい譬。生木に釘

ともいふ。大矢數ニ「聞いたかといふ出るより大笑ひ、生板に釘山ほととぎす」

**なまいだばうず** 一種の乞食。炮烙頭巾に墨の衣襟がけなどにいでたつて、鉦を鳴らしながら、なまいだ〜と囉拍子を入れて、淨瑠璃物真似などして歩いたもの。天網鳥上「あれ一丁目からなまいだ坊主が、てんがう念佛申して來る(中略)といふ間程なく炮烙頭巾の青道心、墨の衣の玉だすき、鉦の拍子も出合ごん〜」

**なまうだ** なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)の略訛。生壁の釘(諺)壁に釘。豆腐に鏡ともいふ。手ごたへなく、張合のない譬。松風村雨東帶鑑ニ「男の屑の葛餅、皆一口は食ふけれど、あとから剥げる生壁の、釘ごたへせぬ懸ぞかし」

**生木に釘** (諺)生板に釘に同じ。なまぐさてら(諺)生臭寺。なまぐさ坊主のゐる寺。あそび寺。浮世寺。世間寺。

**なまごころ** 生心。なまかなな分別心。なまじひに物を考へる心。男色大鑑ニ「世間にはか〜ぬ命なるべき事に、なま心に獨りぐち〜と胸に固めて説かず」

**なまこびすぐ** 生媚過。こび過ぎてゐることを憎んでいふ。ひねこびてゐる。生意氣にこましやくれてゐる。雪女五枚羽子板下「ヤアなまこびすぎたる奴原かな」

**なまこわ** 海鼠輪。好色家の閨中に用ひた具。一代男八「阿蘭陀糸七千すぢ、海鼠輪六百懸」

**なます** たたく。膾に叩く。肉を細かに切つて膾を作るをいふ。轉じて、人をひどい目に會せる意にいふ。

**なますもる** 膾盛る。女と床に入る。傾城色三味線「随分強藏、自慢を申し、汝は鯨何歪もつたと所々のはやり詞にて、床に入る事を膾盛るとは申しならはせしが、何の腎張が申しいだせしやらん」

**なまづいか** 鯨風。鯨のやうな形のいかのぼり。又は氷の朔日中「空も涼しき夕風に、はやる今年のいかのぼり(中略)鯨風算・鯨いか、吹かぬ風もつ扇いか雲をゑどるに異ならず」

**なまづがは** 鯨川。大阪郊外の鯨江川をいふ。河内の徳庵・住道などの村里を経て、大阪城北の寝屋川に合し淀河に合する。野崎詣の水路。油地獄上「なまづ

な

な

川よりゆら／＼と、野崎参りの屋形船「なまづがま 鯨釜。或孝行娘が両親の命日に功德茶を涌かしたといふ釜。朝に仕懸けて夕まで水をさす事なしに、數百人の溺をいやすといふ重寶なので、或法師が盗み出して山寺に持つて行つた。處が、常の釜と變りなくなつたので法師は立腹して瀧川に投げ捨てた。娘は之を嘆いたが、大鯨がこの釜をかづきあげてくれたので再び功德茶を涌かすことが出来たといふ。」いにしへ念佛行者の鯨釜、今又鯨釜と里人の言ひならはせける」(俗つれ／＼卷三、世には不思議の鯨釜)

**生爪はなす** 遊女などが契約を違へぬ證據に、我が身の生爪を放して、相手の男に渡すをいふ。心中の誠を示す行爲とする。堀川波鼓中「私が夫婦にならんと生爪放して入れたる文、これが嘘か讀んで見よ」

**なまづら** 生面。生きたつら。生きて平然たる顔を罵つていふ。出世景清四「夫の訴人をしながら、何の生面さげて今この所へ來りしぞ」

**なまづをつくり** 鯨尾作。刀劍のこしらへ(制)にいふ詞。菖蒲作りに同じであ

らうといふ。鯨の尾に似たところがあるのでいふか。

**なまぬかる** 生抜かる。抜かるを強めていふ。身を入れないで不覺を取る。松風村雨束帶鑑一「生抜かつて侮られな、坊主頭が隠し鑑し」

**なまぶし** 生武士。なまくら武士。なまぬるい侍。百日曾我二「猫にかつを、武士に似合はぬあまいこと、これ、こゝななまぶしたち」とは、なまりぶし(生節)とかけて叙したるもの。

**なまぶろ** 生風呂。虎溪橋「大宮人のなま風呂の聲、此上はお暇／＼いとまあれや」。西鶴五百韵「生風呂に入方惜しむ空の月、めつたにたつてきたる薄霧」。兩吟「日千句」むかし男根ぶとうみや流すらん、なま風呂ふかれてありこし物を」

**なまりちらす** 訛散。國訛のある聲でどなり散らす。冥途飛脚上「早速に持參せいと、徒士若黨も刀の威光、銀ごしらへも胡散なる、なまり散らして歸りしが」

**鉛のしづ** 帯の端などを垂らすに用ひる鉛製のおもり。男色大鑑六「壹丈貳尺の一幅帯、くけめの角に鉛のしづをかけ

世に吉彌結びと始めて今にはやらしぬ。「しづ」の條参照。

**なまりぶし** 訛節。國訛りのある節で歌ふこと。歌の節が訛つてゐるのを洒落ていふ。浦島年代記「道々聞いた海老釣歌(中略)歌は西國訛ぶし、ゑんびやらう／＼」

**なみかへし** 波返。舞曲の名。又、青海波の曲に於ける太鼓の打ち方ともいふ。大職冠三「樂は平調波返し、しんるも澄みて覺えける」

**なむさん** 南無三。次條の略。壽門松中「ハア、南無三、この馬落ちた」。生玉心中申「南無三、帯が切れたか、表から廻つておじや」

**なむさんぼう** 南無三寶。不意の出來事に驚いて發する語。もつと佛・法の三寶に加護を祈る語。嗚呼。しまつた。なむさん。生玉心中上「南無三寶あれ見や、あの菅笠著て來る女房、鹽町の姉じやん。同「南無三寶長作が來ぬ先に、姉も往んで下されかし」

**南無諸佛分身** 雙六の骰子(さい)の面に刻みつけた字。これで一から六まで順位を示した。もと淨土雙六でかく記した名残であるといふ。丹波興作上「はい



しる道中すごろく、南無諸佛分身と、書いた六字を六角の、さいは櫻木花の都をまん中に」

**なめ** 無禮。もと形容詞「なめし」の語幹であるが、動詞の中止形のやうに用ひる。生玉心中上「ア、いや〜なめすぎた置かんせ」。夕霧阿波鳴渡上「扱なめたり〜」。この夕霧に足もたすは、こりやちと慮外そうな」

**なめもの** 無禮者。吉野都女楠四「扱々なめもの此の所を知らぬか。坊門の宰相さまの御下やしき」

**なもだ** なまうだの約。あむあみだぶつ。なもをみ豆腐 南無阿彌陀と豆腐とかけていふか。物種集上「なもをみ豆腐煮てもやいても」

**なやはうた** 納屋端唄。漬納屋などをぞめき歩く者が歌ふ端唄であるといふ。天網鳥上「浮かれぞめきのあだ淨瑠璃、役者ものまねなやは歌」

**なゆた** 那由他。梵語Nāyata(ナユタ)。極めて大きな數量の稱。萬億數。傾城酒吞童子「百億の寶鐸、那由他の羅網」

**なゆたごふ** 那由他劫。佛語。萬億劫。極めて長い劫。無量劫。碁盤太平記「那

由他劫が其間、阿鼻の若患は受くるとも、一言なり共主君の忠、親の願を達する事、喜ばしや」

**なよせ** 名寄。物の名稱を寄せ集めること。又、それを記したものと名づくし。吉野忠信四「彼の里に綴り置きたる名寄あり」

**なよせたたき** 名寄たたき。名の讀み込んであるたたき歌。俗つれ〜五淋しくば之を讀ましやれと、太夫の名寄たきの本を禿が貸しける」

**なら** (助詞)でも。といひ。から。やら。大矢數四「米なら金なら錢なら藏なら、寢入鼻取集めたる夢の月」。堀川波鼓上「姿なら、面體なら、京のどなたの奥様にも誰が否とは因幡山」

**ならうち** 奈良岡扇。大和國奈良から製出する岡扇。判じものなど畫き、公への献上品で精選したものは柄を疊んで立てるといふ。ねぎうちは、二代男「遣手のみやが聲して、この寒空に奈良岡扇の土産はいやでござんすといふ」。百日曾我四「鏡岡扇や奈良岡扇」

**ならがたな** 奈良刀。大和國奈良の刀工が鍛へた刀。後には鈍刀の別名のやうにいふ。大職冠四「奈良刀のなま燒き

ならず者は奈落の種」

**ならず** 奈落。(一)地獄。地獄におちること。前條の例文参照。(二)物事の最後。はてのはて。文武五人男三「奈落までも勘當ぞ」

**奈良の底** 前條(一)と同じ。壽門松中「奈落の底までこの與次兵衛が切つたに成つて、相手が死んだら切らぬ、覺悟」

**ならこんがう** 奈良金剛。ならざうり(奈良草履)に同じ。「こんがう」の條参照。ならざ 奈良座。讀ひの家元。京がかりに對して、大和奈良に住んだ金春・金剛・喜多の三座、又、その末流の稱。大職冠四「奈良座の讀ひの口拍子」

**ならざうり** 奈良草履。大和奈良から産する細緒の草履。織留「奈良草履屋を二足三文に仕舞うて」。女腹切中「雪駄片足になら草履」

**ならしだけ** かけぎを(掛竿)のこと。横にわたして衣服・手拭などかける竹。博多小女郎下「今の小町屋惣七は、博多小女郎がならしだけ、いつも心に懸けておく」

**ならず** ならずもの(破落漢)の略。物にならぬもの。

**ならずの森の柿の木** 「ならずの森」は

な

な

「糺の森」をもちつた語。「成らず」、或は「實がならず」の意をかけて、つまり、口に入れることならぬといふ洒落。一代男三「外の方へは、思ひもよらずと申す程に、是はならずの森の柿の木口へはいる物こそと」

ならずまげ ならず者の紮ふ鬻か。織留六「観世こよりの帯して、髪はならずまげにも結はず、廿日もゆあみせねば、其身毛蟲の如くなりて」

ならずもの 生活が不如意である人。どうもならぬ者。二度しがたい人間。物にならぬ人物。のらもの。やくざもの。よた。破落漢。無頼漢。

ならそ 奈良麻。奈良産のあさ。ならを。丹波與作中「戀に心をひねりの苧の、をがせみだいた胸の中、何とならそのうき身ぞや」

ならちや 奈良茶。奈良から産する茶。その茶汁。大職冠四「根本仕出しの御奈良茶」。ならちやめし(奈良茶飯)の略。二代男六「川海老の吸物に、ひね米の奈良茶」。槍権三下「饅飴蕎麥切、きり、く」と押廻し、豆腐奈良茶と茶を賣るも」

ならちやぶね 奈良茶船。奈良茶飯を賣

る船。伏見と大阪の間の船着場などに商賣してゐたうろく船。

ならちやめし 奈良茶飯。豆くわる。栗など入れて茶汁で煮た飯。もと奈良の東大寺、興福寺で行はれたものに擬したのて名づけたといふ。後には、普通の茶に豆腐汁・煮染など添へた一膳飯。奈良茶粥ともいふ。

ならずには なり(助動詞)の打消轉用。の以外には。二代男三「一年中に銀三十枚ならでは入らぬものなり」

ならぬおや 成らぬ親。どうも成らぬ親。貧しくて暮しの成らぬ親。二代男一「二十三夜の月代もあがりて、容無しの女郎が拜うで居らるゝ、無用の信心なり。それよりは成らぬ親の方へ、少しづつのお初穂を上げ給へ」と。次條参照。

ならぬ世帯 自由に成らぬ生計。やりくりの苦しい暮し。貧乏世帯。置土産四「夏は蚊屋なし、冬は綿入なしに(中略)、三つ違ひ四人まで娘の子を設けしは、是程ならぬ世帯の中にさりとては情なし」

ならはかし 習はかし。ならはし。ならはせ。油地獄下「お澤が一家一門みな侍、その習はかしか思ひ切つては見返

ならず、義理がたい生れ付」

ならひかせ 東北から吹く風。ならひ。五人女四「ならひ風はげしく、師走の空、雲の足さへ早く」

ならべじま 並縞。縞を並べた織物。一代女四「ならべ鳥の大幅帯」

ならべまくら 並枕。並べてある枕。枕を並べること。共に寝ること。男色大鑑七「ならべ枕に打ちとけてより」

ならべもん 並紋。並べた紋。紋形を並べること。對の紋。比翼紋。五人女四「黒羽二重の一振袖に、栴・銀杏のならべ紋、紅うらを山道のすそ取り」

ならまんぢゆう 奈良饅頭。奈良名物の饅頭で、中華饅頭(かすてらの皮で餡を包んで、圓く平たく焼いたもの)の類。大職冠四「下戸衆には奈良饅頭、上戸には奈良諸白」

ならもの 奈良物。刀劍にいふ。奈良刀で鈍刀を意味する。大下馬二「奈良ものにして然も焼刃もかつてなければ」

ならもろはく 奈良諸白。奈良から産する諸白(米も麴もよく精じた白米で醸製した酒)。奈良酒。大職冠三「上戸には奈良諸白」

ならゆえん 奈良油煙。奈良墨の原料と

する油煙。最も上品であるといふ。物種集上「秋をかきぬる年が薬じや、霧ふかき山また越えてなら油煙」

ならを 奈良亭。ならそ（奈良麻）に同じ。

なりあひ 成合。成るがまゝにしておくこと。成り次第。文武五人男「素顔にかゝる吹き鬢の、髪のとさへなりあひに、神になげうつ身は構はねど」

なりきん 成金。將棋の語。敵の地盤へ入つた駒が金となるのでいふ。壽門松中「まづ飛車先の歩をつきませう。やこの成金して遣らうでの、かう寄りませう」

なりけり 成り行きのみ。事の終つたまゝ。武道傳來記五「其なりけりにすます所に」

なりさう 成相。見込どほりになりさう。物事の成就するやうに見えること。一代男四「身は黒衣を着せおき、なりさうなる御方たちに附けて遣はし」

なりさま 形様。なりふり。様子。一代男二「その後子供のならさまを尋ね、火事などいふ時も駈け合ひ」。二代男三「今その御なりさまにておはしけるに、逢うて進せいでは」

なりに似せて經亭を巻く（談）人は自

らの形に似た經亭（そ）を巻くといふやうに、各自のもちまへを示す行ひをする。蟹は甲に似せて穴を掘るの類。

なりはてばうず 成果坊主。成り果ててしまふこと。成れの果てのみすばらしいこと。又、その人。俗つれど「人は其時に移りて、かく淺ましく成果坊主」

なりはぶく 鳴羽振。羽を振はせて音を立てる。「振る」を「ぶく」といふは古語に據つたもの。國性爺五「口を抜けば數多の蜂、鳴羽ぶいてぞ出でにける」

業平袖の下 松風村雨東帶鑑三「醫者心もあるかして、業平袖の下といふ手合せの萬病圓、殊に女子によく利くげな」

なりひらづくり 業平作。業平のやうなつくり。好男子の相を備へてゐることにいふ。五十年忌歌念佛下「花橘の袖の香に、昔男の業平作り、黒い羽織が好きなすき油、鬢付髪付眞つ黒々、黒目がちなる目の中に、鼻筋通つて櫻色」

なる（擬名）茶屋の仲居、仲間、遊女屋の主婦など、よく世話をやき、口の達者なものに用ひる。一代男五「それは何事もおなるの利發で持があく」。五人

女三「下立賣烏丸上ル町に、しやべりのなるとて隠もなき仲人かゝあり」。榮花咄三「吉田屋のなるが呑み出して、今にすたらぬ宿の噂の挨拶よし」

鳴瀧の盗人 男色大鑑七「早繩をかけられて、鳴瀧の盗人と引かれしは、座輿にしろも胸しづまりかね」

なるほど 成程。なるだけ。なるべく。出来るかぎり。一代男五「どれでも構はぬ、此所でなる程いき過ぎて、男ふるほどの女郎よべと」。永代藏五「世間とかはり、成程愴氣強き女房ならば、我が婬に取りたきとの願。（白）たしかに。確實に。武道傳來記「他行の事もと聞きあはずに、成程宿に在りながら踏みつけたるしかた」。同七「成程かやうに承りたると達て斷るにつけて」。白いかに。まことに。人の言をうなづく時にいふ。

なるもの 酒の飲める者。飲酒のなる（出来る）ものといふ意。俗つれど「一方の御盃飲まぬ様なれど、目出度申し納むる所で押へられ、重ねて祝はれ、日比なるものはといふさへ、はや理も聞えず」

なれこまひ 馴講舞。馴子舞。互に馴れ

な

親しまうとて、寄合つて舞ひあそぶことであるといふ。何によらず、藝をして舞ひ踊ることと見える。大矢數五「月にたけ鳥がはゝもなれこまひ、秋めづらしき馬市の角(ツノ)。一代男四「なれこまひ、何にても藝をせよといひる。是非なく立て、花の都の、ぬめりぶし。長い刀に、脇指をほつこんで、をせさ、よいさと、歌へど、權興もない、顔してゐる」

**名を鳴く鳥** 古歌に「郭公名のりがほ」などいふので、時鳥のことと思はれるが、下例は、白梅に配してあり、鶯の異名であらうといふ、いかが。一代男六「紫の羽織に紅のくけ紐を結びさげ、立木の白梅に、名をなく鳥をとまらせ、ぬきあしのぬめり道中」

**なんきん** 南京。⇒南京から渡つたものに冠らせる語。一般に支那、その他の外國から渡來のものにもいふ。胸算用五「南京の刺身皿四十枚」。出世瀧徳上「かたじゆけなんきんの八(鉢)幡、酒には酔はぬ」。⇒凡ての珍奇なもの、小さくて愛らしいものにもいふ。  
**なんきんやき** 南京焼。慶長年中、支那から渡來した焼物。なんきん。

**なんきんわた** 南京締。南京わたりの綿。今宵心中上「おききと深き中入れの南京締の上へには、手のない様に仕立口」

**なんこよぶ** 子供のあそび。若干の小石など握つたまゝ、差出し、その何箇であるかを言ひあてて勝負する遊戯をいふ。なんこ。一代男五「よい年をして螺(ばい)まはし扇引、なんこよびておのづと子供心に成て立ちさわぎ」。二代男三「手相撲又はなんこよぶもあり、火渡し・糸とり。淨土双六、心に罪なく浮かれ遊ぶ」

**なんざんだいし** 南山大師。弘法大師のこと。比叡山を北嶺と呼ぶに對して高野山を南山といふに據る。俗つれん、二「三途八難の苦は女人を根本と、南山大師の法語なり」

**なんじやし** 何ぢやし。「何ぢや、かぢや」を言ひさしたやうな心持の語。「し」は強めの助詞。五十年忌歌念佛上「米になれば炊きます、飯になれば食べます。何じやし、徒居る間とてなく、御無沙汰」  
**なんしよく** 男色。だんしよく。⇒若衆としての意氣地。衆道。宵庚申上「男色たてぬく詞の優しさ」。⇒鶏姦。おかま。

⇒若衆。男色の相手。かげま。ちご。  
**なんだ** 難陀。難陀龍王のこと。八大龍王の一。跋難陀龍王と兄弟で、釋尊降誕の際、雨を降り灌ぎ奉つたと傳へられる。源氏鳥帽子折五「天の岩戸の暗き世も、爰は姪子の御社、御誕生の折柄に、難陀が口より熱湯を出し、跋陀が口より温湯を出し」

**なんど** 納戸。衣服・調度を納めておく部屋。一代男六「住吉屋の納戸にして、きぬかへ、初雪、火燧の火にて、おけそくの團子を手にふれ」  
**なんどぐひ** 納戸食。遊女が納戸のかけなどで物を食ふこと。かくしぐひ。次條及び前條參照。

**なんどめし** 納戸飯。遊女が納戸に入つて食ふ飯。客に見えないところで取る食事。二代男八「秋夜に納戸飯を喰はせず、物にたる男には逢はせず」

**なんどり** おとなしく。おだやかに。會我會稽山三「エ、悪い聲付、同じ物のいひ様で、あゝ畏まつたといひなんどりと、お受けは成らぬことかは」  
**なんばやき** 難波燒。「なにはやき」に同じ。  
**なんばんけくわ** 南蠻外科。南蠻流の外

科。西洋流の外科醫術。それを行ふ醫師。薩摩歌下「長崎に黄陳といふ南蠻外科、昔の華陀が仙方を傳へ」。「なんばんりう」をも見よ。

なんばんごろ 南蠻吳絛。南蠻舶來の毛織物、ごろふくれん(吳羅服連)。もと駱駝の毛で織つたが、後には羊毛や綿絲を交へて織つた。又、刀劍の絞鞘の紋様にいふ名稱の一。傾城反魂香中「南蠻ころの大小對の金鏢」

なんばんりう 南蠻流。南蠻の流義、やりかた。尼利期以來、るそん・しゃむ・爪哇・亞瑪港などの地方、及びその地方に殖民してゐた西洋人を南蠻と稱した。

就中、醫術、殊に外科をいふ。松風村雨束帶鑑三「この膏藥で手負は癒らず、南蠻流に人の脂。うぬめは脂がありさうな、刀日入れてくゝし上げ」

なんひん 難非。愚なこと。又、愚な人を嘲つていふ語。又、難物。手に負へぬもの。「代女」銀遣ふ客を疎かにして、不斷隙で暮すは、主倒し、我が身知らずのなんひん(難非)なり」

に

にあがり 二上。三味線の二の紐を、本調子より高くして弾くこと。又、二上りで弾く曲の名。若みどり四「二上り(中略)三下り」

にあはせ 似合。似合ふこと。にあひ。大下馬四「或時内助、にあはせの事ありて、同じ里より年がまへなる女房を持ちしに」。五人女三「かゝる山家に似合せの縁もがな」

にうばう 女房。にようばう。妻。婦人。永代藏五「拙者が旦那は人に變り定まる女房(にうばう)家主(いはうじ)なし」

にうめん 煮麵。素麵に醬油を加へて煮たもの。永代藏三「客耳をよるこぼせ(中略)雑煮なるべしといふ。又ひとりはおよく考へて煮麩とおちつきける」

にうりや 煮賣屋。煮賣をする店。煮賣茶店。煮賣茶屋。又、それを營む人。一代女四「數寄屋橋の河岸端なる煮賣

屋に恥を捨て駆け込み、餓餓少しと云ひ様。又は米の期日上「茶屋・くら屋。煮賣屋で、鍛冶屋の大匠平様と、誰知らぬ者もない」

にえこむ 陥没する。おち入つてくひ込む。はまり込む。曾我五人男三「松の桁えん釘はなれ、石ずゑ土にぞにえこみける」

にえる 煮える。(一)煮えくりかへる。湯が煮えるやうに大混雑する。出世瀧徳上「勝二郎が追放で八幡はにえる、おりや見て來た」。(二)腹が立つ。業が煮える。にかいぐら 二階藏。二階造りの倉。櫻陰比事三「三間に五間の二階藏を普請して」。二階土藏。

にがくち 苦口。にがくしい物言ひ。にくまれ口。毒ぐち。悪口。薩摩歌中「又してはく、さしてもないことにが口いふて、我も瞋恚をもやしたり」

にがびやくたう 二河白道。二河は水河と火河で、食欲と瞋恚とを意味し、白道は二河の中を通ずる道で、清淨な信心を意味する。迷界の此岸から極樂の彼岸に至る現世の實態を喻示したものである。二河。二河喻。委しくは善導大師の「觀經散善義」に出てゐる。

なに

に

にがふはん 二合半。二合五勺。酒。飯などの小量をいひ、又、それを一日分として貫つてゐる身分の軽い士を卓めていふ。薩摩歌上「跡を濁さぬ水の水、這出の蛙二合半」。こながら(二合半)。

にがり ながみ(苦)。しまつて苦味のある顔などに言ふ。りりしげ。榮花咄「にがりの走りたる太夫、客をのかせぬ仕かけの名人」

にぎり 搦。博奕の語。特にかるた(骨牌)を用ひて行ふものにいふ。札を握つてゐること。大戦冠「つんばね・あざばね、にぎりのそろでぞ勝つたりけり」

にぎりずみ 搦墨。型に入れないで手で握り固めた墨。用明天皇職人鑑「人の心に花咲けば實もなら油煙手合せに、朽ちぬ寶や握りずみ、すむも濁るも世のならひ」

にくくあひ 肉合。肉づき。ししおき。にくい者は生けて見よ(諺)憎い者は殺さずに、その成り行く末を見よ。憎い者も我慢して寛大に扱へ。緋縮緬卯月紅葉中「内に悪魔のある事も、憎い者は生けて見よ、是れも世上のふせうぞかし。あゝ淺しや」

にくちん 肉陣。美女などを身の周圍に

立たせて、屏風に代へること。肉屏風。豪奢なことにいふ。唐の楊忠國の故事がある。

にくくい 憎體。憎々しいさま。にくくしきう。吉野忠信「憎ていにさげしめば」

二月堂の行 奈良の二月堂の行事。二月朔日から十四日まで。大下馬「二月堂の行ひに參詣せし旅人」

二月堂の牛王 奈良の二月堂から出す牛王の札。札の面に「南無頂上佛面除疾病、南無最上佛面願満足」などの文字が判にしてある。ごわう(牛王)の條を參照。薩摩歌中「二月堂の牛王と、お伊勢様の御被」

にさい 二歳。二才。若者を罵つていふ。生玉心中「ヤア二才め打たれたるようかと、ぶちかくる」

にさう 二藏。仁藏。丁稚などの擬名。男色大鑑六「三月三日はあらがねの槌打二藏まで(中略)遊ぶ日なり」。又は水の朔日と「灰まぶれの鍛冶屋の仁藏にしぬし(主)の訛。おまへ。汝。恭盤

太平記「これきにし達、物を問ひ申すべい。我がとうは常陸からつん出た」にし 二字。實名のこと、多く二字であ

るのでいふ。名乗。又、武士の二字。油地獄上「旦那より御扶持を蒙り、二字を首に懸けたる森右衛門、慮外者を取つて押へ」

にしきがは 錦華。紫の地に白く紋(模樣)を染め出した韋。おもてがは。はうと思ふ女の家の戸口に立てるといふ、一尺ばかりで五色に塗つた木。女が同意すれば取入れる。取入れられぬ時は、男は次々に立て加へて、千度を限りとして女の靡くを求めるといふ。俗つれん「彼是の忍び文一つ二つも千束となり、東路の錦木もかくあるべきと思ひ合せり」

にしきて 錦手。五彩の模様をうは薬で畫いた染附の磁器。もと支那からの舶來品、後には我が國で製した。生玉心中「濃い茶茶碗屋嘉平次は、さがが情の錦手に、染め付けられて親兄弟の、異見も耳に蓋茶碗」

錦の棚 京都の魚屋のある町。櫻陰比事「春は櫻鯛、秋は紅葉鮎とて魚賣の利發者、錦の棚に住みけるが」

にしぎかな 西看。初春の祝儀に用ひる看。東から來る春を迎へる義で西看と

いふ由。又曰く、魚は西海を美味とするので稱すると。俗つれど「春の初めの蓬菜、妓の都にし着、各居蘇を酌みかはし」

にじじま 虹縞。虹のやうな縞。その縞織物。二代男五「下には花柴の千種がへし、虹縞の糸居帯」

にじぞめ 虹染。前條の類語。織留五「虹染の抱へ帯」

西の海へさらり (諺) 悪事災難を西の海へ拂ひのけよといふ意。雪女五枚羽子板上「悪魔外道打拂うて、西の海へさらり」(中略)、悪魔外道ぶつばらつて、西の海へぶんなげろ(初春厄はらひ)

西の洞院(どる)へ流す 前條の洒落。西洞院は京都四條烏丸の西。戀八卦柱曆上「男猫(中略)重ねて屋根でさかつたら、四つ足括つて、西の洞院へ流してしまふ」

西の洞院中道寺 京都の遊女町。後に鳥原に移された。

西の宮の居籠 攝津國西の宮は惠比須様で名高い。その社に參籠すること。胸算用四「津の國西の宮の居籠り」

二十一間の十露盤 桁数の二十一ある算盤。男色大鑑八「二十一間の十露盤彈

き、酒着茶煙草大かた中づもりにして何程と」

にじぶごう 二十五有。佛語。二十五所の果報(むくい)。欲界に十四所、色界に七所、無色界に四所の果報があると

いふ。

にじぶごにちさま 二十五日様。法然上人の稱。その命日の正月二十五日であるのでいふ。置土産「廿五日様の名號まで質に置き、後世を取りはづす時も、金子十兩の合力」

にじぶごもんめ 二十五匁。遊女「天神」の揚代。「てんじんの條參照。大矢數四「二十五匁とられてぞ行く、いにしへの天神様が有難い」

にじぶにしやまうて 廿二社詣。二十二の社を參詣して巡ること。廿二社巡り。卯月紅葉「吉き都やなにはがたく、廿二社詣でいそがん」

にじやまそういん 西山宗因。檀林派俳諧の祖。名は豊一。通稱は次郎。梅翁、西翁、梅花翁、向榮庵、その他の號を用ひた。天和二年三月廿八日歿、年七十八。大阪西寺町西福寺に葬る。永代藏

二「連誦は西山宗因の門下となり」

にじようさぶつ 二乗作佛。聲聞と緣覺

との成佛をいふ。百日曾我四「二乗作佛の誓は無作三身の谷に轉り」

にじりあがり 調上。茶室の滞り口。

にじる 調。じりくと動く(自動)。押しつけて廻はず(他動)。男色大鑑六「足を十付ければ水邊ににじる蟹あり」。武道傳來記八「一寸も調らせぬがと、刀に反を打てば」

二世の固め 夫婦の契りを結ぶこと。「親子は一世、夫婦は二世、師弟は三世」といひ、夫婦は現在と將來とに縁がなくなるといふ。及は水の朔日中「二世の固めの起請文」

二世の語りひ 二世の契りを語りあふこと。夫婦約束。二代男六「二世の語りひ、人も知つて淺からず」

二世のつま 二世の妻。二世の夫。二世までたのみ契つた妻、又は夫。

にそくさんもん 二足三文。二束三文。物を捨賣りにする値段。二そくを錢三文に賣ること。織留一「奈良草履屋を二足三文に仕舞ひて大阪を離れ」

二道の色噂 男色と女色との噂。衆道女道の評判。武道傳來記八「二道の色噂になりて言ふはくどけれど」

にたにたし 似て非なるさまをいふ。「似

に

に

た」を重ねて形容詞とした語。吉野都女楠三「義貞の智略に乗せられ京童の笑草、にたくしき首共をまませしげにまかけたり」

にち 謙。にちること。ねだること。強請。二十不孝「形に人恐れければ、博奕の場に鬮り込みて謙を言うても、口過ぎなるまじき身體にあらず」

にち 「にちる」を、「にち」「につ」と活用するものと類推して、連用形にしたのであらう。萬年草中「サア證據を出せと、にちければ」。百日曾我四「お取次よい様に頼み申すとにちかけける」

にちゆうざ 二重座。提燈の造り方にかふか。又は、或部分を一段高く造つた座席の稱か。二十不孝三「大道筋の南向、二十七八間檜木造の臺格子に、二重座の提燈を打輝き、奥深に豊なる住居見るさへ羨まし」

にちゆうばん 二重判。二重に判をおすこと。一方に契約の判を押しながら、同じ条件を他にも契約して判すること。

にちる ねだる。にちる。ねぢくれる。強請する。色道大鏡一「にちる。ねぢるも同意、五音相通なり、物をねだる心

なり。「にち」の條参照。

にちる にじる(鬮)の假名ちがひ。榮花咄二「川端に蛤にぢりて、据腰ふなつきて」

につくわろびき 日光挽。下野國日光町で製出する挽物(轆轤ではした造つた器具)。懷視二「日光挽のはした盆」

につこらし 似つかはし。まことらしい。百日曾我二「長口上紛らかして通らんとや。熊野山にて見たると、につこらしく云ひます」

につさか 日坂。新坂。東海道五十三次の一驛。金谷と掛川の間、日本橋から二十六番目。丹波與作上「襦袢笑顔やサアにつ坂の蕨餅」

につしゆ 日暈。病名。武道傳來記四「過ぎし九月十九日に日暈といふ病にて逝去せられ」

につしんさま 日親様。大阪高津中寺町正法寺のこと。日親は日蓮の弟子で、京都で布教し、眞言宗出身の足利將軍義教の爲に迫害せられ、遂に燒鍋を冠らせられた。俗に鍋冠日親といつて名高い上人である。正法寺には、この日親堂があるので、日親様といふ。重井筒中「宗門なれば日親様の御門で死なせ

て下さんせ」

につちうり 丹土賣。染料などを賣つたものか。大矢數目「どこの包ぞ十貫入、近年の仕懸物也丹土賣」

につてん 日天。佛語。日天子の略。二つとり うるほひねばりけあるさま。二つとり 都男に採まるれば、鹽じむ肌につとりと、油に髪赤ばりも」

につばい 日牌。毎日佛前で供養すること。又、その標となるもの。二代男四「三十三兩これにて石塔を供養し、日牌も建て、歸れ」。虎溪橋「日牌や立行雲の奥の院」

日本の神(しん)ぞ 誓ひの詞。契約など違へないといふ心を、神かけて相手に誓ふ時に用ひる。一代男七「是非行けと申せば、今日に限つて、日本の神ぞ、行かぬと申す」。武道傳來記七「此義に於て日本の神ぞ他言は申さず」

二疊敷の住居 遊廓で局(つぼね)のことをいふ。置土産「太夫から二疊敷の住居、今まで幾人か見た事」

にてん 二天。佛語。日天子と、月天子と。又、梵天と帝釋天と。曾我會稽山二「禪師坊二天四天の威をかつて組合



うたり

になひがひ

荷買。天秤で兩方一度に物を荷ふやうに、二人の遊女を一度に買ふこと。五人女二「鳥原の野風、新町の荻野、この二人を毎日荷ひ買ひして」

になひこぶ

荷癩。物を荷ふためにすれて出来る癩。こぶ。にもちこぶ。

になひぢやや

荷茶屋。茶釜その他の器具を一雙の茶箆筒に飾り、所々へ荷ひ歩いて茶を立てて賣るもの。その賣る人。もと正月元日に、京都勸修寺家へ出入する某が、禁中へ伺候して點茶を獻じたのに起るといふ。永代藏四「その日過ぎにして才得男、荷ひ茶屋しをらしく拵へ、其身は玉だすきをあげて、くより袴利根に、烏帽子をかしげに被き、人より早く市町に出、互びすの朝茶といへば」

になひぶろ

荷風呂。所々へ荷ひ歩いて、錢を取つて入浴せしめる風呂。

にぬきたまご

煮抜卵。ゆでたまご（茹玉子）。女腹中「髭口寄せて頬ずりは、わさびおろしに煮ぬきの玉子、痛そな顔の痛々し」

にのあし

二の足。歩みをためらふこと。事を見合せるにいふ。堀川波鼓下「今日

は延引せまいかといへば、皆二の足にぞ成りにける」。「二の足を踏む」。

にのくちむら 新口村。（地名）。大和國磯城郡の内。雲途飛脚上一もとは大和新口村藤木孫五右衛門といふ大百姓の一人子

にはかいられい 俄幽霊。急に幽霊となつて現れること。

にはかがは 俄川。急に出来た川のこと。

にはかたいじん 俄大盡。忽ちに財産家となること。又、その人。俄長者。俄分限。

にはかぶんげん 俄分限。にはかぶげん。前條に同じ。櫻陰比事二「質酒兩店の商賣して俄分限の者なり」

にはかまど 庭竈。畿内の俗。正月、家の庭に竈を築き、家族一同がその周圍に坐して竈神を祭り、その庭火で餅など焼いて祝ふこと。胸算用四「奈良の庭竈」にはあろり（庭圍爐裡）ともいふ、その條を見よ。

にはくなき 庭來鳴。鶺鴒の異名。にはくなぶり。日本振袖始四「扱こそあの鶺鴒を、庭來鳴、庭叩、戀教鳥とも云ふぞとよ」

にはくら 庭藏。内藏（うちぐら）に對し

て、庭に離れて建てた藏。胸算用五「内藏・庭藏、大座敷の壁にも、砂粉は光を嫌ひ」

にはこ 庭籠。庭に据ゑおいて飼鳥を入れる籠。普通より大きな鳥籠。五人女五「その奥に庭籠ありて、はつがん。唐鳩・金鷄さま」の聲なして」

にはこ 庭子。にはだから（庭寶）に同じ。

にはせん 庭錢。（京都の遊廓でいふ語。正月・三月・五月・七月・九月の五節句（紋目）を約束する客から、遊女その他の者に祝儀として出す錢。色道大鏡三「庭錢の事。上職十貫文、天職六貫文、園職四貫文也」。一代男八「太夫様より宿への時服・庭錢撒き散らす。禿・やり手、御供の男ども上を下へと返す」。永代藏四「鳥原正月買ひの庭錢はすれど、京の人すぐれてはしはし」。（宿驛で荷物を問屋に留めおく時拂ふ錢）。

にはだから 庭寶。下男下女の間に生れた子の稱。庭子（にはこ）。卯月紅葉上一「内の手代やにはだからの、侮り者になし果て」

にはたき 庭叩。鶺鴒の異名。にはくなき（庭來鳴）の條を見よ。

に

に

にはとりあはせ 鶏合。とりあはせ。開

鶏。もと支那の古俗、我が國では三月三日に禁中清涼殿の南階で行はれたものであるといふ。後には民間でも行はれた。五人女五、三月三日童子草餅くばるなど、鶏あはせ、さまゝの遊興ありしに」

にはとりほこ 鶏銚。京都祇園會に出る山鋒の一。山車の軒に鶏の形をつけたもの。堀川波鼓下「打ちかち時の鶏銚と、門出を祝ふ力紙」

にはとりめし 鶏飯。鶏の肉を交へた飯。今の親子井の類であるといふ。置土産「悪所にして鶏飯をふるまはれて」

にはゐろり 庭園爐裡。にはかまど(庭竈)に同じ。胸算用四「奈良中が仕舞うてはや正月の心、家々に庭ゐろりとして、釜かけて焼火して、庭に敷物して、その家内旦那も下人も一つに樂居して、不斷の居間は明けおきて、所慣はしとして輪に入りたる丸餅を、庭にて焼き喰ふも賤しからずふくきなり」

にはんばへ にはんばえ(二番生)。次男の稱。二番息子。雪女五枚羽子板下「鳥立ちも知らぬわか草や、二番ばへなる若侍」

にひおはくろ 新御齒黒。女が新しく鐵槌(かね)をつけること。新妻になること。新妻。

にぶつちゆうげん 二佛中間。釋迦と彌勒との二佛の中間。即ち釋尊入滅後、五十六億七千萬年を経て彌勒佛が出現する筈であるので、その中間にあつて衆生を教化すべく高僧碩徳のことにいふ。懷硯三「あゝ二佛中間の利益は、この菩薩に止らせ給ひぬるよ」

にへこむ 「にえこむ」に同じ。出世景清ニ「双六盤片手に取つて投げつくれば、(中略)、首は胴にぞにへこみける」

にべもない 愛敬がない。つやがない。情合がない。「にべ」は「にかは」で、粘着力が強いものであるが、そのねばりけがないといふ義。傾城反魂香上「ハアにべもなう埒あいた」。天網島上「五左衛門殿はにべもない昔人」

にぼく 似ト。一代男「腰附にえも云はぬ所ありて、似トが遺練合點か」

にほのうみ 鳩の海。琵琶湖の異名。蟬丸四「鳩の海邊を濱づたひに、坂本さしてぞ急ぎける」

にほひずみ 匂墨。匂の高い墨。香墨。又、それで書いたもの。その墨つきのもの。蟬丸「火花も薫れとにほひ墨、くべんとせしを引留め」

にほひだま 匂玉。匂袋の、玉のやうな形にしたもの。織留「一紅の大房に匂ひ玉を結びさげ」

にほんだうぐ 二本道具。大名の行列に立てる二本の槍。二代男「二本道具の大名も此身變ることなし、先手はいはいと聲かけけれども、天下の町人の氣まゝは、足早にもよけず」

にほんづつみ 日本堤。江戸吉原へ行く途中の堤。一代男「淺草川の二挺立、駒形堂も跡になして日本堤に差懸り」

にまいがた 二枚肩。駕籠を二人で昇くこと。(三枚肩、四枚肩などに對していふ)。

にまいど 二枚戸。觀音びらきの戸。二枚びらきの戸。二枚の戸の各端を蝶つがひで取附け、中央で左右に開くものがむめ 煮梅(にうめ)。砂糖で煮た梅の實。男色大鑑「一昨日は煮梅かたじけなく候」。又漬物の一種にもいふ。

にもちこぶ 荷持癩。荷物を持つために出来る癩。にこぶ。になひこぶ。又、その癩のある人。冥途飛脚下「あのお婆は荷持癩の傳が婆、ア、いかい茶吞

四六四

みぢやがの  
にやくいちわうじ 若市王子。若宮一王子の略。紀伊國熊野權現の攝社の諸王子中、第一位にあるもの。

にやくだう 若道。「じやくだう」に同じ。にやくい やにこい。もろい。女にあま

い。のろい。夕霧阿波鳴渡中「下地がにや。この旦那様、小舌だるふ仕掛けたら、ぼつかりと喰付いて、田も遣らふ畦も遣らふで」

によい 如意。佛語。玉・角・竹などで作り、先端が手を半ば握つたやうになつたもの。(意の如く痒きをかくことを得る義であるといふ)。曾我會稽山三「文殊菩薩の獅子の駒、御手の如意は鞭と成り」

によいほうじゆ 如意寶珠。これに種々の要求をすると、意の如くならぬはないといふ、靈妙な珠。大職冠「覺りの佛性を如意寶珠にたとへ」

にようごこく 女護國。によごのしま(女護島)に同じ。女ばかり住む島。女島。二代男「女護國に住む美面鳥なり」

によろばういへぬし 女房家主。主婦の稱。にうばういへぬし。いはうじ。い

に

主奢りて。椀久一世物語下「大方は女房家主奢りて無用の腰元仲居を抱へ」

によきたん 女喜丹。春薬の一種。一代男「地黄丸五十壺、女喜丹貳十箱。菜花咄三「長崎の金太夫が手合せの女喜丹」

によごのしま 女護島。女ばかり住むといふ想像上の島。女人島。俗に八丈島の異名ともいふ。「にようごこく」の條参照。一代男「是れより女護の島へ渡りて、つかみ取りの女を見せんといへば」

によじゆ 女媧。富中の女官。掃除・點油などの雑務を分掌するもの。傾城酒吞童子「京の御所より女媧がおすゑか一兩人呼び候はん」

によだう 女道。女色のこと。遊女を相手に遊興する趣味。衆道又は若道の對語。五百韻「月夜よし衆道女道のあなめ」。五人女三「衆道女道を晝夜のわかちもなく、さまざまの遊興つきて」

によつと 出しぬけに現はれるさま。によつほり。ぬつと。出世濃徳上「そこを此方から先越してによつと押しかけ」

によにやく 女若。女と若衆。女色と男色と。女道と若道と。檜權三上「どうで

も權三はよい男、諸ひはやらす美男草、女若二つの戀草を、飼ひにかふたる月毛の駒」

によにんだう 女人堂。女の參籠する堂。特に高野山にあるものの稱。不動坂口にあつて、これから奥へ女人の入口を禁制した。昔は高野の山口七箇所にあつたといふ。萬年草下「五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ着きにける」

女人地獄使能斷佛種 女人は地獄の使で能く佛種を斷つと(唯識論)。松風村雨東帶鑑三「エ、淺まし」。女人地獄使能斷佛種、此世からなる地獄ぞや」

によひつ 女筆。女の筆跡。女流の筆。男色大鑑「女筆ながらいつぞやの手に生き寫しなれば、不思議と詠むる所へ」

によほふ 如法。柔和なさまにいふ。或は、眞に、全くなどの意。もと佛語、法の如くすることから轉じた。今宮心中上「伊五郎は如法なる氣もまる額にこやかに」

によぼん 女犯。邪淫の戒を犯すこと。僧が女と通ずること。萬年草上「結果清淨の御山、假りにも女犯の穢あれば、一山荒れて震動し、其の身は狗糞に五

に

體を裂かれ

にやらいかけて 如來かけて。誓の詞。

神かけてといふ類。油地獄中「微塵も愛着残らぬと、如來かけての母が言ひ分」にやらいはだ 如來肌。肉つきよく、なめらかな、あたゝかな肌。六日飛脚「一切衆生を仲人いらす、端傾城如來肌とや申すらん」。大句數上「床はなれ嶺にわかるゝ如來肌、揚屋につかふかね殊勝なり」。次條参照。

女來善光に負はる 女來は如來、善光は善光寺の願主本田善光である。善光は本尊の如來を負うて信濃に行つたといふ。遊女が下男に負はれて揚屋に出入するをそれに見立てていふ。二代男「薄雲様の御迎（中略）、角内が背中に乗り移り給ふ有様は、女來善光に負はれ、御身よりの光、今の玉蟲色の御小袖、紫磨黄金の肌、胸高に開けかけ、縁ある衆生は、あの御懷に救ひ入れ給ふ」

によろによろ (擬態語) 蛇などのうねり歩くさま。轉じて、人にもいふ。のろのろ。のそゝ。一代女「これを愴氣の初めとして我を忘れて如鸞(によろ)ゝと進みて、女心のはかなや」

にれを嚙む 牛などが一旦嚙んで吞下したものを再び口に出して嚙む。にれかむ。反芻する。用明天皇職人鑑「野飼ひの牛のむつくと起きて懸け隔り、にれを嚙み立て角を振り」。轉じて、人が憤つて商がみするさまなどにいふ。

にわうだう 仁王堂。大和國多武峯の麓にある地名。旅縁さする野郎などが、坊主相手に賣色した處と見える。永代藏「或時多武峯の麓里二王堂と云ふ所に、京大阪の飛子の隠家を、しるべの人こそゝのかされ、爰に通ふことつりて戀の二道をかけ」

にわろりき 二王力。二王のやうな大力。金剛力。

にんがい 人界。人間界。じんかい。人間の住む世界。百目曾我「定めがたきは人がいなるはと今こそ思ひしられられ」

人間は一生造惡の娑婆世界 (謔) 人間は生涯この世の中で罪つくりをするといふこと。

にんぎやうまはし 人形廻。人形をあやつり舞はせること。又、その人。人形づかひ。

にんぎやうや 人形屋。人形を商ふ家。

又、それを造る人。二代男「額の生えぎは、人形屋外記も鉤を栗つべし」

にんぎよ 人魚。武道傳來記「後深草院寶治元年三月二十日に、津輕の大浦といふ處に人魚はじめて流れ寄り、其形は首くれなるの鶏冠ありて、面は美女の如し。四足瑠璃をのべて、鱗に金色のひかり、身にかをり深く、聲は雲雀笛のしづかなる音せしと、世のためしに語り傳へり」

人魚を食ふ 人魚を食へば、いつまでも老いることがないと傳へられる。織留五「三十にあまる年も唄入り時の姿の今に残りて人皆女仙と名付け、是はあやかり物といへり。此女不老丸も飲まざ人魚も食はねど」

にんくわい 任愧。三槐(三公)に任ずること。太政大臣・左大臣・右大臣の官に任命すること。傾城酒吞童子「其身は即ち准三后、高房卿も任愧有り」

にんげんさんかふ 人間三合。人間が三合年(さんがふどし)に會ふことか。人が飢饉などにあふことであらう。武道

傳來記「この六月朔日を正月になして祝ふべし、さもなれば人間三合になるべしと、愚痴の世をはかりて神託とおどしければ」。「さんがふどし」の條参照。

にんさうじや 人相者。人相を見て、その人の運命吉凶を判断する者。人相見。人相家。相者。

にんじゆをまく 人數をまく。人數を整へる。従者などの勢揃をする。百日會我「大名小名人數をまき、皆々假屋に入り給ふ」

にんじん 人參。特に朝鮮人參のこと。よく、氣つけぐすりとして用ひられた。二代男「春は花、秋は月、氣附は人參、女郎ぐるひは金の浮世」。男色大鑑「引入る息の頼み少なき時、人參口に入れて岩もる拳を手して運び、肩を温め正氣付けて」

にんじん 人神。但言集覽に「時憲曆箋釋、逐日人神所<sub>レ</sub>在、不宜<sub>ニ</sub>灸針、注、人神者六氣陰陽之表裏也、忌<sub>ニ</sub>灸針」とある。眼の皮が動く症状であるといふ。栲狩劍本地「思ひ立つ日に人神なし、土用八專構ひなし」

人參て行水 醫藥のかぎりを盡して治療

する譬。壽門松中「病には療治さまん、有る。國法で取らるゝ命には、人參で行水させてもいかなく、助からねど」

人參のつきつけ 人參のつきつけ賣り。人參のおし賣り。「つきつけ」の條を見よ。

にんちく 人畜。畜生のやうな人間。非道な人。人畜生。蟬丸「天道知らずの人畜め」

にんぼつ 人罰。人から受ける罰。人の罰。天罰の對語。

にんひちく 人皮畜。人非畜。人の皮を着た畜生。人でなし。人非人。人畜。武道傳來記五「忠信の者を無實の科に詐りて殺害す、よしや存命して人皮畜の世界にあそんで」

にんびちくしやう 人非畜生。人皮畜生。前條に同じ。武道傳來記七「私を無實の科におとし給はんと、の御はかり事、此上は人非畜生を主とも存ぜず」

にんみやう 人命。人間といふこと。人。松風村雨東帶鑑五「天から寶が天降つて、にんみやう草木増長すれば」

にんみやくすぢ 人脈筋。人の命を断つべき急所。脈筋の急所。卯月潤色中「髮削を咽にがばと突立て、(中略)人脈筋

を四つ五つ、聲をかけて刺通し」

# ぬ

ぬかくぎ 糖釘。諺にいふ「糖に釘」の略で、手ごたへのしないこと。又は米の

朝日上「鐵槌こたへぬ糖釘で、後は吹きあげふいご吹く」

ぬがす ぬがす(逃)の訛。冥途飛脚下「早うぬがしてくれよ」

ぬかぬか 大膽に不意にあらはれるさま。つか。栲狩劍本地「おもだか次郎ぬか」と出で、諸任が胸ぐらを

取つてつき退け」

ぬかばたらき 糠餽。甲斐のないことに働くこと。むだばねをり。徒勞。

ぬかぶくろ 糠袋。ゆあみに用ひる糠を入れる小袋。當時は男女に限らず特に洒落者が用ひたと見える。一代男「棹竹のわたし、とびぎやの脚布、糠ぶく

る懸けてありしはくせ者なり、兼好が見たらば命盗人と申すべき婆々あり」

萬年草上「これ久米殿、お暇もらふて往なしやらば、糠袋はおれに下され」

糠味噌の行水 俗つれ。三「痔の養生、

練味噌の行水、我が身の祕傳くすね抜の毛の穴までを問はず語り」

ぬからぬかほ 抜からぬ顔。油断のない顔。平氣な顔。何事も知らぬ顔つき。ぬかる 抜かる。氣が抜けてゐる。又、してやられる。油断して失策する。一代男六「眼ざしぬからず、物ごしよく。」

日本振袖始「エ、ほんにだまされた。抜かれてのけた」

ぬきかけ 抜掛。ぬきかけ(脱懸)。遊女の衣裳の着こなしにいふ語。襟の後方をずつとおろしてゐることであらう。「衣紋を抜く」などいふ類語。一代男五「まだ脇あけの女、さのみかかし顔もせず、ゆたかに脱懸して、肌帷子の紋所に地蔵をつけてゐる。」二代男二「奥の間より、手燭ともさせて、ぬきかけして、遙かに見ゆるは、暗がりにても初音なり」

ぬきざめ ぬき鮫。刀のこしらへにいふ語。男色大鑑三「風流なる美少(中略)、朝顔染の大振袖、ぬき鮫の大小、この取りまはしのさゝやかなる」

ぬきぎに 貫錢。ぎにさし(錢拵)に貫いた錢。二代男五「燈火ひそかにして四五人寄り合ひ、附目の跡で置かぬかと、

貫錢の音は小勝負なり」ぬきつる 抜連。刀を一同に抜く。打連れて抜刀する。

ぬきもの 貫物。抜物で抜染(ぬきぞめ)のことか。二代男五「あら竝に海松茶の裏を附け、下に貫物の菜種色なるを着て」

ぬく 鈍物。のろま。ぬく太郎。ぬけ作。人を罵る語。槍權三上「ヤイ、く、く、餘程にあがけよ、そこなぬくめ」、ぬくぬく 温かいさま。又、骨を折らずにうまいことをするさま。うま〜。

ぬくぬく 温かいさま。又、骨を折らずにうまいことをするさま。うま〜。國性爺三「太刀も會せず、矢の一本も放さず、ぬく〜と味方せば」。油地獄中「よふも〜此母をぬく〜とだましたな」

ぬぐひいた 拭板。漆で塗つた板。字を記し、幾度でも拭ひ消しては用ひられるやうにした板。ぬりいた。物種集上「けいこはやしの松の下露、薄紅葉入目をあらふぬぐひ板」。一代男四「小座敷の片隅に、ぬぐひ板敷き合せ、女らく寝をすれば」

ぬぐひうるし 拭漆。さつと拭つたやうに漆を刷くこと。戀八卦柱脛上「心はさつぱり、ぬぐひ漆の刀かけ」

ぬくめどり 温鳥。親鳥が雛を羽の下に抱いてぬくめてやること。又、寒夜に鷹が小鳥を掴んで来て、わが脚を温めること。翌朝小鳥を放つが、鷹はその日はその小鳥の飛び立つた方へは行かないと傳へられる。

ぬくもる ぬくもる(温)におなじ。一代男四「まだ身もぬくもらず」

ぬけがけ 抜駈。廓詞。下文を見よ。色道大鏡二「ぬけがけ。戰場のぬけがけに比していへる詞也。定りてあふ女郎をさし置きて、別宿にて外の女郎をはなす事也。又連の男といひ合せ、來るいづくの日行きて誰々を呼ばんと約し置きて、其内一人かけぬけて、女郎をはなすなどをいふ」

ぬけさんぐら 抜參宮。父兄又は主人を出しぬいて、その家の子弟・奴婢などが、伊勢まゐりをする事。丹波與作下「契り初めしはさをと〜し、抜參宮の道づれに(中略)、ほんに口説いた其眞實が」

ぬけさんけい 抜參詣。前條に同じ。二代男三「勘七笠に書付をしてぬけ參詣の眞似」

ぬけぬけ 知つて知らぬ風をするさま。

鐵面皮なさま。しやあゝ。槍權三上「エ、こな様はなふ侍のぬけ」と、能ふ嘘をつかしやんす。もと、氣が抜けてゐて、人にたぶらかされるさま。  
ぬけふう 抜風。間(ま)のぬけたさま。大下馬一「源八兵衛はぬけ風の俳諧して、埒のあかぬもの」

ぬけぶね 抜船。他を出し抜いて、漕ぎ行く船。ぬけがけの船。一代男五「浮世の事は仕舞うた屋の金左衛門を誘ひて、(中略)抜け舟を急がせ、其夕暮の空ほでりして戀の湊に押し附け」(廊の詞。下文を見よ。色道大鏡「ぬけぶね。抜船つかふともいふ。抜がけと同事なり。番々を定め、役義にかゝりゐる舟の、さしぬけて所用を達するなど抜船つかふと云ふ、是に比していへり」。大矢數三「人の心夜の間に替る相場也、何國の浦へかぬけ舟つかひ、つる根太押付けられてうみを出し」。「ぬけがけ」の條参照。

ぬけまゐり 抜參。ぬけさんぐう(抜參宮)に同じ。物種集上「わづかに残る錢は戻りじや、ぬけ參七騎となつて木曾越に」。胸算用一「出女せし時、木賃泊りの抜參につらく當り」

ぬし 主。定つた情夫。をつと(夫)。卯月紅葉申「主といひぬしある身に、この様な無作法は覺悟なうてはならぬ筈」  
主ある花 契約を交はした相手のある若い女又は若い男に譬へていふ。槍權三上「さては娘がお氣に入らぬの。(中略)エ、知れた。疾うから外に約束があるさうな。左様ぢや」。主ある花は是非がない。可惜男に戀がさめた」  
ぬしづく 主附。我が物とする。我がその主となる。領する。傾城反魂香上「某嫁に申し請け、この伴左衛門に縁邊し、七百町をぬしづかんと、當てはめておいたもの」

主は細工の人 諺に「細工貧乏人賣」といって、細工上手の人は、世には重寶がられるが、自分では貧乏してゐる者とされる。女腹切上「主は細工の人だから、貧乏な世帯のひまなしで」  
ぬしや 塗師屋。塗物を造り、又は賣る家。又、その人。五十年忌歌念佛上「塗師屋もわるい合點」

ぬすびとあめ 盗人雨。わたくしあめ(私雨)のことであらう。大矢數二「内方の犬に後を見する事、盗人雨が降つたり止んだり」。同「徒歩合羽盗人雨が降

つて来て、物見の松の陰に暫く」  
盗人たけだけし (諺)人に氣をおくべき盗人の、平氣で闊太いこと。悪い事を働きなが大膽で氣まゝであること。女腹切上「やあ、盗人たけくしく、其のさまになつてさへ、まだ惣稼めをいたはるか」

盗人におひ (諺)損をした上に、更に損を招くやうなことをする譬。盗人におひ錢(追加金)を與へる。「おひを打つ」ともいふ。丹波與作申「盗人におひなれば、この出入はこちや知らぬ」  
盗人の畫隠 (諺)夜稼ぐあてがあつてすること。物事はどこにか目的があつて爲される。女腹切申「傍若無人の繼父、えせ笑ひ、ようぬかすな、盗人の畫隠もあてがある。おのれが母に何の見込はなけれども、おのれを賣つて喰はうため女夫となつた」

ぬつくり 温かなさま。又、事をひそかにうまくりやつて平氣であるさま。ぬくぬく。うまゝ。生玉心中申「際の日に商人の見世を捨て、何處へぬつくり這入つてぞ」  
ぬつけり 前條に同じ。宵庚申下「アノぬつけりとした顔はいの、こちと夫婦は

ぬ

ぬ

ぬつべり 顔かたちの穏かで奇麗な様。しまりがなくて美しい顔。のつべり。曾根崎心中「あの正直な徳兵衛めをば、ぬつべりとした顔をして、どのやうにだましたやら」

ぬつぼり 物事にうつつかりしたところのあるさま、又、その者をいふ。俳言集

きはしらかぬ也、月夜に釜をぬかしたる人、時宜なしの居風呂、まき狩の時のからかさ」などと説いてゐる。日本振袖始三「こりや畜生奴、たつた今聞いて驚いた。数年ぬつぼりと親を能うだましたなア」。當麻中將姫三「ぬつぼりの豊成には随分と取入つて」

ぬつぼりまつ ぬつぼりとした松。傾城反魂香上「わり松たい松ぬつぼり松、われらが息子に岩松長松」

ぬのたかみや 布高宮。近江國高宮から産する織物。たかみやぬの(高宮布)に同じ。「たかみやじま」の條参照。織留「江州の布高宮買ひとりて國に出見世」

ぬのつきん 布頭巾。布で作つた頭巾。ぬひきり 縫切。布の所々を種々の色糸

で縫つて、模様をやうにしたものか。一代女四「小袖の紋柄も此程の仕出しに縫切の櫻鹿子、脇よりは染着物の様に見せて、なか／＼百色の美糸をつくしける」。ぬひわけじま(参照)。

ぬひはく 縫箔。ぬひとり(刺繡)に、金銀の絲を交へたもの。

ぬひはくかのこ 縫箔鹿子。縫箔のある鹿子しぼり。五人女五「縫箔鹿子の衣裳取りちらし、是も入らぬものなれば、天蓋・幡・打敷にせよ」

ぬひはくや 縫箔屋。縫箔を業とする家。又、その人。縫箔師。一代男三「柳の馬場の縫箔屋のおさつといへるを捨金百五十兩」

ぬひわけじま 縫分縞。縫つて縞模様をあらはした布。男色大鑑八「縫分縞のうね帯」

ぬめくる ぬる／＼と滑る。あちこちとぬめる。軀山姥四「丸太船を漕ぎ出す如く、ぬめくつて歩み寄り」

ぬめりうた 萬治以前から寶永頃まで唄はれた小唄。俠客などが、流行語で唄つたもので形も一樣でなかつたといふ。「ぬめり」は當時の流行語で、ぬめり男・

ぬめり節・ぬめり道中などを用ひて、今いふ、ぶら／＼ぬら／＼、遊治などの意であつた。劇場の合方では、江戸長唄の天人羽衣の「花の色香もよい姥櫻」のあたりを、御殿女中などの出に用ひて、ぬめりと稱へてゐるといふ(日本歌謡史)。

ぬめりこむ 滑り込む。する／＼と入り込む。

ぬめり道中 太夫(遊女)が、しづ／＼とぬめるやうにして道中すること。或はぬめり歌に連れて道中することといふ。一代男六「ぬきあしのぬめり道中」

二代男三「揚屋町の北口より南の門までは、太夫ぬめり道中百九十六足の所なり」

ぬめりふう ぬめりの風。「ぬめり」を見よ。

ぬめりぶし ぬめり歌の節。又、その歌。一代男四「花の都のぬめり節、長い刀に脇差をぼつこんで、をせき、よいさと唄へど、権輿もない顔してゐる」

ぬめりんず 続繪子。繪子の類で模様のないもの。ぬめ。下文は、これと「ぬめる」とかけた例。又は氷の期日下「見世の帳面皆ぬめりんず、らしやもない



こと

ぬめる 滑。(ハ)すべる。ぬら／＼する。

(ニ)なまめく。めかす。うかれる。意氣なきまに仕立てる。傾城反魂香上「おろし歩みの道中は、花の立木の其のまゝに、ぬめり出でたる如くなり」

ぬらくらぐち すら／＼と取りとめなくしやべる。背庚申上「ぬらくら口に

ぬらしよね 濡娟。うるほひある娟妓。色けたつぶりの遊女。

ぬらりぬらり ぬる／＼とぬけるさま。ぬらぬら。ぬるり。大矢數三「遣錢何國をさして百ぬらり」

ぬらりころり ぬらりくらり。ぬらくら。のらくら。

ぬりうちば 塗團扇。竹を裂いて網代(あじろ)に編み連ねた團扇の両面に、種種の色漆を塗つたもの。百日曾我四「丹や緑青ぬりうちば」

ぬりがさ 塗笠。薄いへぎ板で作り、紙を張つて漆で黒く塗つた笠。二代男二「昔塗笠に觀世こよりの緒をつけて」

五人女三「ぬり笠にとら打て千筋ごよりの緒をつけ」



さがりぬ

ぬりじやくし 塗杓子。漆で塗つた杓子。二代男三「表具の仕替へ、塗杓子を取交ぜ」

ぬりだい 塗臺。織留。「世に住む付屑とて、塗臺に小鯛魚一連」

ぬりばうず 塗坊主。僧を嘲つていふか。「ねつたい坊主」などの類であらう。大矢數三「身の行衛納所坊主の塗坊主、二六時中の鐘を預る」。兩吟一日千句「大豆の粉に塗坊主をやおとすらん、煙酒の二つ下戸と上戸と」

ぬりをけ 塗桶。眞綿を載せて引きのばすに用ひる桶形の具。瓦又は木で作り漆塗りにしてある。室町千疊敷「妻は渡世の塗桶に丸綿・雪洞・額綿、いろいろありと看板の、綿を摘むには口傳も入らず」。又、漆塗りの桶。

ぬれ 濡。男女情を交はすこと。戀。情事。色ごと。一代男七「露に時雨に、兩袖をぬれの開山、高雄が女郎盛を見んと」。二代男五「柳八が八千代に忍びのぬれも、禿が危き手引せし事」。五人女五「人の戀もぬれも世のある時の物ぞかし」

ぬれえん 濡縁。雨戸の敷居の外に作つた縁。雨に濡れるのに任せる縁の義。

武道傳來記七「此の屋敷に忍び入り、濡縁より簀子の下に隠れ」

ぬれかかる 濡掛る。色事をしかかる。ぬれかか。濡掛く。色事をしかける。戀をしかける。戀八卦柱上「こりや三毛よ、わるい男持つなよ。灰毛猫が濡れかけたら、一度が大事ふつてのけ」

ぬれごけ 濡後家。色ごのみの後家。いろけのある寡婦。

ぬれのふみ 濡の文。戀の文。艶書。好色物語。大矢數三「岡に契りし戯女に飽き、濡の文箱のふりばをかたどりて」

ぬれはうず 濡坊主。好色の坊主。

濡れはしつぽりと京にしかず 晝夜用心記四「歌舞伎狂言の芝居は大阪、拍子事は江戸、ぬれはしつぽりと京にしかずと淺間が獄のあさからぬ煙くらべより見物の山を崩しける」

ぬれもの 濡者。ぬれ掛りやすい人。情事の相手とするに足りる人。なまけしり。それしや。やさをんな。堀川波鼓上「袖垂る風俗は、國に名とりの濡者と、聞えしもさる事ぞかし」

ぬんなり 兩吟一日千句「守山の陰もかたちもしろうるり、草津の姥はぬんなりとして」

# ね

**ねいせき角を叩く** 寤威が齊の桓公に用ひられようと、牛の角を叩いて歌つた故事。呂氏春秋、擧難篇「寤威飯牛、居車下、望桓公而悲、擊牛角疾歌」。男色大鑑「十和が玉に泣き、寤威が角を叩きしと思はれ」

**ねがひて** 願手。後生を願ふ人。信心者。宵庚申中「八百屋伊右衛門、淨土宗の願手、了海坊の談義に打込み、開帳廻向の世話やき」

**ねがひのいと** 願の絲。七月七日の棚機祭に織女星に捧げる五色の絲。乞巧の意をこめたもの。兩吟一日千句「影照らす月宮殿にほうちつほ、ねがひの絲や鹿子ゆふをと」

**ねかわ** 根輪。堀井戸の最下部にある桶輪。根の方にある井戸がは。五人女「蓋なしの外井戸(中略)、次第に涌水ちかく根輪の時」

**ねごい** 寢濃。よく眠るさま。いぎたない。寢坊なことにいふ。一代男七「頻りに訪るゝに、寢ごい八千代さへ目覺め

**ねごころ** 根心。こゝろね。本心。雪女五枚羽子板上「入道が根心、上へ對して其意を得ず」

**ねこそげ** 悉く。全體。ねこそぎ。そつくり。胸算用「この大釜に一步一杯欲しや、根こそげに済ます事ぢや」

**猫に石佛** (諺) 何の心配もない譬。「猫に鰻節」などいふ反對。一代女「猫に石佛、そばに置いてから何の氣づかひもなし」

**猫に傘** (諺) 「猫に小判」といふ類。物の價値を知らぬさまにいふ。五人女「あるじの老人に金子一兩とらしけるに、猫に傘見せたる如く、いやな顔つきして茶の錢置き給へといふ」

**猫の手も借りたい** (諺) 多忙を極めてゐる譬。

**猫の前に鼠の晝寝** (諺) 危害の身に迫るを知らぬ譬。

**ねごころをしき** 根來折敷。紀伊國那智郡根來から製出する漆塗のをしき。

**ねざめ** 寢覺。次條の略。男色大鑑「どうもいはれぬ處ぞと、木間六兵衛に寢ざめ開かせ見しに、自然と蒔繪に虎溪の昔を畫きぬ」

**ねざめさげちゆう** 寢覺提重。野遊びなどに携へ行く輕便な提重箱の一種。二代男「寢覺の提重、桐の挾箱、紫の蒲團一つ」。油地獄上「寢醒提重・五升樽、坊主持して」

**ねしき** 根敷。又、寢敷か。床板か、疊の類か。物種集上「ねしきまで引まくりたる草の庵、後生大事の物が見えぬは」

**ねしやうしゆ** 文武五人男「八瀬のエイ、ありやそりや、ねしやうしゆは、靜原がよひ」

**ねしろぐさ** 根白草。芹の異名。二代男七「根白草を手して揃ゆるに取付き」

**ねずみいと** 鼠絲。ねずみ色の絲か。新小夜嵐物語上「お貌見知る程の大臣(中略)、冬編笠を仔細らしく被き、鶺鴒色の羽織、鼠糸の長柄を見せかけ、小提(ささえ)開かせて吞出し」

**ねずみきど** 鼠木戸。芝居の木戸口の稱。客が押合つて鼠が入るやうであるのでいふとも、不寢見木戸の義であると

**ねずみこもん** 鼠小紋。鼠色の小紋染。

**ねずみざんよう** 鼠算用。算術の級数。

鼠が子を産みふやすやうにする算用といふ義。ねずみざん。下例はその轉用で、行き届いた分別・思案。壽門松中「如何にもく、お慈悲な鼠算用、成程私が逃しませう」

**ねずみそろばん** 鼠承露盤。前條に同じ。

傾城反魂香下「某が父主計の介、天文の曆算に達し、鼠承露盤といふものを巧み、積物・割物、人の聲にしたがつて、承露盤の表明白に顯はるゝ」

**ねずみつかひ** 鼠使。鼠を使って藝をさせること。又、それを業とする人。胸

算用「長崎水右衛門が仕入れたる鼠使ひの藤兵衛を雇ひに遣はし」

**ねずみつつき** 鼠突。槍術などの未熟なこと。又、その槍を嘲つていふ。堀川波

鼓下「なんの己れが鼠突、鼓の胴こそ握るとも、鎗の柄握る習ひは知らじ」

**ねずみど** 鼠戸。ねずみきど(鼠木戸)に同じ。晝夜用心記曰「狂言かぎりあり

て(中略)、押し合はぬ先にと、手を引

て鼠戸を出」

**ねずみび** 鼠火。花火の一種。三寸ばかりの蘆の管に火薬を込め、点火すれば鼠の走るやうに、しゆうくと廻るや

ね

うに作ったもの。ねずみはなび。雨吟一日千句「薬がまはる萩の上風、鼠火も夕間暮こそしゆうと」

**ねすりごと** あてこすり。あてこと。いやみ。故意に他の氣にさはるやうに物を言ふこと。重井筒上「娼御のねすり

言、聞きつらや聞きにくや」。五十年忌歌念佛中「ねすりごとばかり。同じ口でかはいやといふ事がならぬか。意地のわるい」

**ねする** ねすりごとをきく。あてつけて

言ふ。曾根崎心中「女房へは一錢も戻さぬ故、遣ひすてたの、げじいたのと、ねするゝを苦にしてか」

**ねずる** なする。罪を人にぬりつける。

懐硯二「咎を我にねずりて、通ふ者ありと父に告げ知らしめられしに」

**ねたにおもふ** 妬に思ふ。妬ましく思ふ。

恨めしく思ふ。戀八卦柱曆中「そなたの文を焼いて捨てをつたも見てゐる、それを妬に思つて、針を棒に取りなして」

**ねたにこむ** 前條の轉であらう。妬みを抱く。恨みに思ひ込む。今宮心中「き

さが念ごろ致せしを、由兵衛めがねたにこみ、何がな見出さう」と、文言知れぬ手形を書き」

**ねたば** 疑双。切れ味の鈍くなつた刀劍の双。又、いねたば(稻束)で双を磨く

ことを、「ねた双をあはす」といふ。**ねだりもの** 強請者。物をねだる者。ゆ

する人。胸算用「あの連合浪人はねだり者なれば、聞きつけ來ぬうちにこれを扱へ」

**ねだれごと** 強請言。強請事。ねだり

ごと。理窟をならべて強請すること。又その文句。冥途飛脚中「田舎の客が身請の事、今日も今日とて鳥屋にて、理窟を詰めてねだれごと、腹が立つやら憎いやら」

**ねだれもの** 強請者。ねだりものに同じ。

懐硯二「大小見ながらねだれ者、酒手くれねば通さぬ男は」

**ねだれる** (他動下一段)。ねだる(他動

四段)の轉。強請する。百日曾我曰「是非に於てお馬を、後ともいはず、たつた今、給はらんとぞねだれける」。又、言を左右にする。斷言を憚る。武道傳來記曰「さまゝ、穿鑿すれども、(中略)辻番ねだれて効なく」

**ねぢいは** 捻岩。高野山大門口の路傍にある岩の稱。捻ぢれたやうな形の岩。大師の母が登山できぬのを残念に思つ

て捻ぢた岩だと傳へられる。萬年草下「あはれ佛の御母も、女の罪の捻岩や」

**ねぢかこ** 捻籠。小供の遊戯に、麥藁でねぢれた榮螺形の籠など作る事。又その籠。一代男二「折しも麥は秋の半から竿の音のみ、里の童部、ねぢ籠、雨蛙の家などして」

**ねぢじやうご** 捻上戸。拗上戸。すねる酒癖のあるもの。酔つて理窟をいふ上戸。俗つれく「三」にもかくにも捻上戸、百萬の厨子といふ町に生駒屋の傳六とて」

**ねぢつゑ** 捻杖。ねぢくれてゐる杖。二代男三「風呂敷包みに竹の捻杖を持ち添へ」

**ねぢみやく** くづ／＼して決しかねるさま。しみたれなこと。きまりのわるい形容。萬年草中「サアしやんと打ちませふ、と手を廣げる。イヤまあ打つまい。ハテねぢみやくした」

**ねぢやう** 根帳。元帳、臺帳などの類語であらう。永代藏三「年久しき手代根帳をメめ、錢藏銀藏は渡して、三間に五間の小判藏一つ、主人のまゝにもさせざる内は」

**ねつたい** ねたし(妬)の音便。最明寺殿

百人上臈上「ねつたい佐々木殿、高名せうとて不覺ばし仕給ふな、此頃疊のかづきも絶え、みるめも繁つて見え候」  
**ねつたいばうず** せつたい(接待)坊主の訛であるといふ。坊主を嘲つていふ。ぬりばうず(塗坊主)などいふ類か。曾我會稽山五「鳥の毛を引く芥子の花もぐ、ずんぼろ坊主、ねつたい坊主鉢坊主、是かお寺の長助」

**ねばさ** 粘る度合。ねばいさま。又、にぶくのろ／＼したさま。行動のゆつくねばさは、あれこそ本のくらがり牛、鞍馬の牛」

**ねばし** 粘。ねば／＼とするさま。又、鈍くて重い。まのろい。丹波與作中「飛脚の足もとのねばいは、三河者に極まつたぞ」

**ねはん** 涅槃。ねはんゑ(涅槃會)の略。釋迦の入滅を追悼する法會。又、その日の稱。即ち、陰曆二月十五日。永代藏三「明の年の涅槃の比まではおのづからの精進して」

**涅槃の雲の名礎** 諺に「雪の果は涅槃」といふを轉用した語。涅槃は涅槃會のこと、前條を見よ。五十年忌歌(念佛中「未

だきさらぎの臘夜や、涅槃の雪の名殘の門、立留りつ立去りつ」

**ねび** 寢火。火は灯つて、ねあかり、即ち有明(ありあけ)のことであらう。物種集上「灯明何と寢火はともさぬ、しはんぼう三井の古事かねはあれど」

**ねびき** 根引。根のついたまゝ引くこと。(一)遊女を請出すこと。みうけ。置土産「田舎の大匠が(中略)、根引にして國へ連れて歸ると無分別に進めば」。出世瀧徳上「いはで心にかこち草、根引にせんと言ひかはす」

**ねびもの** 老成者。大人びたもの。特に年齢に比してませた者。曾我會稽山三「一萬といひし時よりも、兄十郎はねび者にて危忽せぬ生れ付」

**ねぶと** 根太。ふともゝ、臀部など、脂肪の多い所に出来る腫物の一種。遊蕩兒によく出来るものとされてゐる。大句數上「なく雉子尻のすわらぬ野を過ぎて、根ぶとつづせば水橋の末」。「つるねぶと」の條参照。

**ねほり** 根掘。「根掘り葉掘り」の略。悉く。全く。委しく。重井筒中「連添ふ事も限りとは、ねほり知つての上なれば」

**根掘の大筒** 根こぎの丸太か。出世景清

四「千引の石村木を積み重ね、首には根掘の大筒を、三本までかづかせたり」  
根掘り葉掘り 根本から枝葉まで。何から何まできはめ盡すにいふ。

ねほれがみ 寝惚髪。寝て亂れた髪。起きたまへ手を入れない髪。百日曾我一

「町の年寄五人組、ねほれ髪に袴肩衣」  
ねほれこゑ 寝惚聲。ねぼけこゑ。

ねまつり 子祭。大黒天の祭。陰曆十月甲子の日にけふ。

ねまる すわる。居る。碁盤太平記「大星由良之介殿と云ふは、この屋臺にねまりめさるか」。又、つくばひゐる。ひれふす。背庚申上「是れ軍右衛門がねまり申して、手をつかへる。こりやき拜み申す」

ねむざう 眠藏。ねむたがり。寝坊。ねむがる人の稱。大矢數五「冷汁うこく佛法の晝、眠藏は朝寝を立てほがらかに」

ねむしろ 寝庭。寝るに用ひるむしろ。ねごぎ。一代女二「屏風の陰なる寝庭を取り出し、ひそかに帯を初めから解きて」

ねむづかり 寝むづかり。眠るときむづがること。小兒が眠氣がさして泣くこと。

ねめつく 脱附。にらめつける。女腹切上「うろたへものと、ねめつけ」

ねや 根矢。征矢。鎬矢。雁股などの俗稱。時に、ヤじり(鎌)の大きな矢。楊弓に用ひる矢に對していふ。曾我五人兄弟

三「杉の梢を目前にして、暫し保つて放つた矢が、一二の枝をはた〜と根矢の立つたる如くなり」  
闇の扇 謡曲「班女」の故事。美濃國野上の宿の長の娘花子が、吉田少將と契つて形見に扇を取替はし、「花子扇に詠め入り、闇より外にいづる事」もなかつたが、遂に父親から叱られて、家を出ることになる。五十年忌歌念佛上「闇の扇は、班女が親骨にせかれ」

ねよく 様子。大矢數三「様子を仕懸けた山雀の籠、不性者今朝起きて見る秋の霜」  
ねりかづき 練被。練絹で作つたかづき(被衣)。男色大鑑四「十四五なる美女の白き練被せしが外記に取りつき、自らも跡には残らじと思ひ極めし有様」

ねりくやう 練供養。行道供養。陰曆四月十三、十四の兩日、大和國當麻寺で行ふ法會。當日は本尊及び二十五菩薩の假面を彫り、それを迎接するのである

と。行道(ねり)とは、蓋し、迎接する義からいふ。大矢數三「翁の面は老いやしぬると、此の里に事傳つて練供養」

ねり島 練縞。練絹の縞物。一代女四「若殿様の御下に召すとて、ねり島の裏形にいかなる繪師が筆をうごかせし、男女のまじはり」

ねりしゆ 練衆。行列をして練り歩く人たち。祭禮などの時、行列して歩く人。天網島上「粉屋の孫右衛門、祭の練衆か氣違か、遂に指さぬ大小ぼつこみ」  
ねりついぢ 煉築地。煉つた土と瓦とを交互に積み重ねて造つた築地塀。

ねりぬきみづ 練貫水。近江國三井寺の麓、練寺にある清水。天智天皇の御衣を練つたといふ名水。又、豊太閤が茶の湯に用ひたといふ。傾城反魂香上「練貫水の天津酒」

ねりもの 練物。祭禮などの時、通りを練つて歩く行列。ねりしゆ(練衆)の類語。一代男五「京より結構なる伊勢參りがあるはと、門立ちさわざ、練物をみる如くぞかし」

ねりものや 煉物屋。種々の薬物を煉り合せて、寶石類を擬造することを業とする家。又、その人。ねりものし(煉

ね

ね

物師)。用明天皇職人鑑「いざ屏風屋の小かげにて、君とわれとはねり物や」

ねりものや 練物屋。絹を練ることを業とする家、又、その人。練物師。

ねりや 練屋。筑前國博多で、練酒といふ銘酒を造る家の稱。俗つれ「博多に隠れもなき練屋左衛門様はこれか」

音を入る 鳴くのをやめる。「音を鳴く」の反對。織留六「今は鶯の局も音を入れて、昔の形變りて」

ねんいう 念友。衆道の友。男色關係を結んだ友、特にその兄弟をいふ。念者(ねんじや)。武道傳來記三「仁七郎が念友駒谷左衛門」。男色大鑑三「男も念者の數に笠をかづかすと、どよみ作つて笑ふ、蘭丸立留まり、われに念友の數ありとや」

念友す 念友として交る。五人女五「命を捨てて淺からず念友せしに、又あるまじき美兒」

ねんえん 念縁。念友としての縁。衆道の契り。若契。男色大鑑「この念縁を同じ家中に結びたまへり」

ねんきよく 年玉。年始の祝として人に

贈るもの。としだま。年始物。織留二「年玉(ねんきよく)の遣ひ物、火箸間鍋または餅あぶり網など、買ひよる人蓬萊の山をなして」。同四「ある醫師は年玉に埒のあかぬ煉薬をこしらへ」

ねんきり 年切。(一)奉公人などの勤める年限。定めた年季。(二)年季男又は年季女の略。(二)代男「あれがあのやうにあ手拍たるゝほどに、見好げになりぬ」

ねんきりまし 年切増。年季の期限を延ばすこと。女腹切上「慾づらの繼父めが年切増のもがりごと、急々にせがむと見えた」

年切増す 年限を延べる。定めの年季を延長する。一代男八「手形の十年より外に年切まして、御勤めのうちに」

ねんきりをんな 年切女。年限を定めて召抱へおく女。年季女。永代藏「めしつれたる年切女」。大下馬二「年切の女に名を久と呼びて」

ねんごろ 念比。懇意にすることから轉じて、男女戀情を交はすこと、又は男色關係を結ぶことにいふ。萬年草上「一命やつたる中なれども、只今ねんごろ切る上は(中略)、ふびんとも存ぜず」。

次條参照。

念比切る 縁を切る。關係を絶つ。「あいさつきる」などの類。用明天皇職人鑑三「傾城なれば、飽いた時は念比きる」

念比す 密情をかはす。特別の情を通ずる。前條参照。一代男四「われ若年の時衆道の念比せし人」。男色大鑑二「身に替へて念比して、浮世の思出に念者を持つてかはゆがりて見たし」

ねんごろぶん 念比分。ねんごろな關係を結んである人。特に、衆道に於ける兄弟分。武道傳來記五「文つかはしければ其返事に自身來りて、念比分ありとの言譯なりしかども」

ねんじや 念者。男色關係に於て、兄弟たる者はいふ。若衆の對語。念友。念人。男色大鑑四「今年十八の角前髪、いまだ美童のたゞ中なるに、その身は早念者にかはり」。丹波與作上「一代若衆にならずに、はえぬきの念者ぢや」

ねんじやく 念若。念者と若衆と。男色關係に於て、念者たり若衆たること。男色大鑑傳來記六「いつとなく執心かけ、その後に念若の誓約堅く」

ねんじやくるひ 念者狂。念者を求めて溺狂ふこと。衆道に於ける兄弟の愛に溺

れること。一代男「袖の時雨はかゝるが幸ひ、はや念者ぐるひの事」

ねんじやぼん 念者坊。念者たる坊主。萬年草中「念者坊の祐辨様」

ねんじん 念人。念者に同じ。男色大鑑「一笑百媚の風情、見し人男子とは思はず、今十五歳まで念人のなき事はすぐれたる美少これをゆるせり」

ねんつう 念通。念者として若衆のもとに通ふこと。男色大鑑「何の契約もなかくおのづと念通の親しみ、忍びく」に丹之介屋形の裏なる大河を越して通ひぬ」

念に思ふ 心にかけて思ふ。もしかと氣にかけてゐる。念の爲にすることにいふ。永代藏六「夫婦最前の薬師を念に思ひ」

年年花は替らず 劉廷芝の代、悲白頭翁との詩句「年年歳々花相似、歳々年年人不」に據る。男色大鑑「年年花は替らず、歳々人おなじ姿にあらずといへり」

ねんぶつこう 念佛講。念佛する講中。相寄つて念佛する組合。二十不孝「念佛講の貸盛物」。輪転すること。曾我虎磨上「我々は名ある鎌倉武士、振るか

振らぬか立かはり入かはり、念佛講のかねの威光、買うて見せん」

ねんまへ 年前。年季の明けるきは。定めた年限のきれる前。曾我會稽山四「木瀬川の三浦とて年まへの太夫」

ねんもない 念も無い。思ひもかけない。とんでもない。次條参照。殘念な、物足らぬさまにいふ。男色大鑑「ねんもない繪などは見劣りて」

ねんもないこと 念も無い事。思ひも寄らぬ事。とんでもないこと。又、無論の事。置土産五「かやうの振舞申してまゐりましてから、念もない事、いたします事ではござらぬと」。武道傳來記六「弓を手に取りたるを見たる者なし、鏡などは念もない事、及ぶまじきを」

ねんやく 念約。念者たるべき約束。念者の契約。男色大鑑「肩をぬげば、草紙巻、封じ小刀にて若道の念約の印、紫立つて少しおもはれたるを、おもへば我れゆゑの御身の疵」

念力岩をとほす (謔) 思ひこんだ一念は何事をも成し遂げるといふ譬。念を遣ふ 念を押す。だめを推す。曾根崎心中「これお初殿、構へて身共は金

は拂はぬぞや。必ず念を遣うたと、言

ひ捨て奥にぞ入りにける」

の

の 野の和字。布の幅を數へるにいふ語。はばぬの。五十年忌歌念佛中「今日は蚊帳の祝義とて、萌黄のすゞし六爵七爵、屋の内祝ひ賑へども」

のあひくさ 野合軍。野に出て戦ふこと。のいくさ。丹波與作中「城攻の一番乗、野合軍の一番鎗」

のうげしなん 能化指南。能化と指南と。併せて師匠たる僧の稱。孕常盤三「同學の児法師を疵つけ、能化指南も恐れぬあぶれ者」

のうにん 能仁。釋迦(梵語Śakya)の譯。能く一切の機類に應じて苦を抜き樂を與へ、或は忍耐能く事に安んずる故の稱であるといふ。釋迦如來誕生會「能仁大師、法界を總て我が智とし、虚空を悉して我が身とし」

のうふだ 能札。觀能の札か。能舞臺へ入る證か。物種集上「能札の五まい甲を引捨て、羅生門より通る奥口」  
のえ 野江。京街道野田村と内代町との

間の村。刑場のあつた處。曾根崎心中「どうで野江か飛田もの」

**のがけ** 野懸。野驪。野山に出て遊ぶこと。野外の行樂。もと狩から起つた稱であらう。源氏冷泉節上「さゆる野掛の暖め酒、竈にたゞむ石橋山」。大矢數三「野懸と申し殊更に山、出る月も一つは所の外聞じゃ」

**のがけあそび** 野懸遊。前條に同じ。二代男四「若紫といふ野懸遊びに品替へて、幕十張二丁程の間に所々への仕出し、女郎十八人(中略)、晝までの酒限り知られず」

**野がけの茶店** 野原、路傍などに簡単に設けた茶見世。油地獄上「所こそあれ野がけの茶屋で、若い女子のざまで入子鉢の様なんぐの子供の世話ばかり焼きをらむ」

**のがけぶるまひ** 野懸振舞。野懸に携へて行く飲食物。野懸に於ての饗應。二代男五「野懸振舞に木具拵、また重箱に飯入れて、あへ物一つ瓢箪の酒も樂みは同じ」。男色大鑑三「野懸振舞の長持は都への取遣し、十二の棹の内か」  
**のがた** 野方。農作などに關する事。用明天皇職人鑑四「牛かひか草かりか、い

かさま野がたの御奉公と承りぬと云ひければ」

**のかぬなか** 退かぬ仲。切つても切れぬ縁つづき。退き去りのならぬ關係。「退かぬ身の上」などともいふ。五人女三「わが子いまだ定まる妻とともなし、そなたものかぬ中なれば、是れにと申しかけられ」

**のがみ** 野髮。馬の髪につくるひをせず、自然に垂れたもの。曾我會稽山三「浦丈に口こわく、乗入れもせぬ野髮の馬」のきざり 退去。〇そこに人を置いて自分が去ること。おきざり。大職冠三「和御寮は五郎介の馴染じやの。それ程心が残らば、のきざりせずともなせ戴いてはゐやらぬ」。〇去りわかれること。離れ去ること。離縁。宵庚申下「こちや未來まで、のきざりせぬ聞の同行が」

**のくれのさとくれ** 野七里今七里。野暮れ里暮れ。大平記十四、箱根竹下合戦の條に、この書き方が出てゐる。大矢數二「野七里今七里(ノクレノサトクレ)山よりは濱、巡見衆曇らぬ月の空見えて」

**のけがね** 除金。取りのけてある金。取つておきの金。

**のけは** 除場。物を取りのけて置く處。退けば他人(諺)一旦別れ去れば他人と同じ關係になる。男女の縁にいふ。織留四「まことにのけは他人、さてもおそろしの人心や」

**のこぎりあきなひ** 鋸商。鋸が押すにも引くにも物を切るやうに、彼れからも此れからも利を得るやうにする商。永代藏四「自ら歩行荷物(かちにもつ)して江戸に下り、本町の呉服棚に賣りては、登り商に奥筋の紺綿とよのへ、さす手引く手に油斷なく、鋸商にして十年たゝぬうちに、千貫目餘の分限とはなりぬ」。傾城酒吞童子三「揚屋・女郎屋親子して、鋸商ひ金銀は、鋸屑と溜りける」

**のこぎりばば** 鋸婆。人置嚙。すあひをんな。雙方から利を取るのいふ。  
**礎らぬたはけ者** 極めてたはけな者。愚物の骨頂。大阿呆物。置土産「手あきがあるに、さりとは無用の斟酌、さても礎らぬたはけ者」

**のざきまゐり** 野崎參。河内國讚良郡野崎村にある福聚山觀世慈眼寺(本尊は十一面觀音)に參詣すること。毎年四月無緣經を八日間修し、大阪からの參



詣者が非常に賑ふ。油地獄上「野崎参りの屋形船、卯月なかばのはつ暑さ」のさもの のさばる者。氣まゝもの。のらもの。松風村雨束帯鑑五「まづ太郎冠者呼び出して申しつけうと存ずる。のさ者あるかやい」

のされ 野晒。野にさらされること。又、そのもの。野ざらし。  
のしあがる 仰上。のさばる。つけあがる。横柄にかまへる。出世瀧徳上「旦那の身代空にして今の様な雑言、仰しあがつたつら見れば、火に入る事も思はれぬ」

のしこんぶ 慰斗昆布。のしこぶ。伸した昆布。めでたいことに用ひる昆布。萬年草中「お梅が祝言（中略）、口取は慰斗昆布、肴はするめ」

のしざかな 慰斗肴。魚肉を伸して干したものの、即ち、魚のひらき、干物の類であらう。武道傳來記五「黒衣を脱ぎ捨て、乞ひ請けて慰斗肴を喰初め、その儘心を還俗して」

のしはる 伸張。のさばる。我を張る。頼朝伊豆日記三「早く山をおりまいか、わるくのしはる物ならば、山おこのの焼きとがし」

のしめ 慰斗口。腰のあたりから袖にかけて縞をあらはした練貫の衣物。もと武家の禮服として、麻上下の下に着たもの。物種集上「のしめといへる衣かせ山。夕霧阿波鳴渡中」のつし慰斗目に麻がみしも」

のしゆつとう 野出頭。出頭の役にある者を卑しめていふ。「しゆつとう」の條参照。宵庚申上「お家相傳の弓頭、坂部郷左衛門、六十の皺の夜盡なく、お側去らずの野出頭」

のぞきからくり 硯機關。大きな箱の中に種々の繪が轉回して現はれるやうに仕掛け、前方の目鏡から覗かせるもの。のぞき。のぞきめがね。

のぞき句 俳諧の「去嫌ひ」に關係ない句か。大矢數三「どきどきと道頓堀の春は花、のぞき句なればさほ姫もあり」のたれを打つ のたうつ。身をもがいて動かす。卯月潤色中「反つつ返しつのたれを打ち、苦む中にも」

のちぐすり 後藥。將來の藥となること。後の身のためになること。又、そのもの。

のちせやま 後世山。後瀬山で大隅國の名所。薩摩歌下「契りは此世後世山、懸

すほどなほ世にもれて」  
のちのあした 後朝。男女相會した後の朝。きぬぐ。一代男六「血しほりの白無垢、後の朝の名残をそめぐ」と書きつゞけたる着物」

後の白鳥 (書名) 色里の評判記の類。「白鳥」といふ書に對したと見える。白鳥(しろがらす)の條参照。二代男七「後の白鳥または鳥原懷草の形の部取廣げて、太夫の足の大きなと書きし所を、讀みもあへず笑ふ」

後のすけ 酒宴の言葉と見える。人の呑みさした後を引き受けて、酒を呑むことか。置土産「誰に遠慮もなく足手ののばし、後のすけを呑むまい物と、現のやうにいひ」

のちばる のしあがる。のさばる。強情張る。吉野都女楠二「うぬがつらつき只者ならず、眞直に白状せよ。のちばらばしや面を、はつてはりはまはさん」のしはる「參照」。

のづくゑ 野机。火葬場に据ゑて焼香などするに用ひる机。武道傳來記八「野机の煙くらぐ」  
のつけ 仰向けになること。日本振袖始三「兄が太股尻(しゝ)の口ほど切下げ

られ、のつけに返せば突懸り」  
のつさのつさ のさく。平然たるさま。  
行動の鈍くおもいさま。のそく。大  
職冠「鳳闕を憚らず、のつさく」と玉  
座にどうと居かゝり」

のつしり どのつしり。づつしり。重りが  
あり餘裕があるさま。浦島年代記四「川  
地持とてのつしりと、身に備はりし炮  
烙頭巾、野邊の千草を見るふりも」  
のつたり 次條に同じ。

のつとり おち着いて追らぬさま。ゆつ  
たり。悠々。釋迦如來誕生會三「この人  
相、鷹揚にしてのつとりとした果報の  
相」

のづめ 野爪。野飼ひにした馬などのひ  
づめ。自然に伸びるに任かせた爪。  
のづら 野面。石工の語。自然のまゝの  
石面。人工を加へない石のはだ。用明

天皇職人鑑五「大江山の麓に土城を築  
き、野づらの石垣むぎわら塀」。「野面  
御影」。「野面石」

のてつぼう 野鐵砲。むやみに撃つ鐵砲。  
あてどもなく鐵砲を放つこと。二代男  
五「大阪の法師の、浪人に刺殺されしも  
(中略)野鐵砲撃ちしも中らねばこそあ  
れ」

のとさば 能登鱈。能登國から産する名  
物の鱈。

のどのかき 喉鍵。咽喉を鍵又は鈎の仕  
懸けになつてゐると考へた修辭。次條  
も同じ。槍狩劍本地三「上唇、咽の鍵、  
舌の鈎緒」

のどのかげがね 喉の懸鑑。室町千疊敷  
「えいやと引く拍子、喉のかけがね、  
首の骨がつくり折れて」。前條參照。

のどくさり 喉鎖。命を繋いでゐる鎖  
の意。咽喉。前條の類語。女腹切下「南  
無阿彌陀佛の聲を力に、喉のくさりを  
一刀、うんと計り目もくれなるの」

喉より剣を吐く (謔) 悪事を告白する苦  
しさの非常なさまに譬へる。冥途飛脚  
上「忠兵衛も盗みせうより外はなし。男  
の口から斯様の事、いはれうものか推  
量あれ。喉より剣を吐くとても、これ  
ほどにはあるまじ」

のねいた 野根板。土佐國野根山から産  
する薄板。屋根葺に用ひ、又、木戸の  
扉などにも用ひる。のね。一代男七「前  
裁にありて(中略)、のね板の戸あくる  
をも音せず」

ののさま 日月、神佛を敬稱する小兒語。  
ののうさま。ののさん。のんのうさ

ま。男色大鑑六「いたいけなる手を合し  
て、あれはのゝ様かと目もふらず拜み  
ける」

ののめく ののしりさわぐ。大聲を立て  
る。釋迦如來誕生會二「摩耶夫人御懷胎  
とて宮中ののめき」

のはか 野墓。野中の墓。又、火葬場。  
織留四「西風のたびく」に野墓の煙か  
よひ」

のぶか 筧深。矢の筧(矢竹)の深く入る  
こと。武道傳來記六「肩骨より胸もと  
まで筧深に、たちまち絶入して倒れ」

のぶくに 信國。山城國の刀工、來信國。  
來國俊の子、了戒の系を繼ぐもので同  
名が多い。萬文反古「信國の小脇差」

のぶづもの のはうづ(野方圖)なもの。  
横柄な人。のぶとい者。

のぶとい 野太い。大膽なさまを卑めて  
いふ。づぶとい。百日曾我「ヤイく  
賣女奴、待ちをらう、ヤアのぶとい奴  
め」

のべ 延。次條の略。西鶴五百韻「のべ  
を枕に戀はもみくしや、讀めもせぬ御  
文殊にいつぞやは」。一代女六「延の二  
つ折り、似せ金の黒骨を持ちて」  
のべがみ 延紙。すぎはらがみ(杉原紙)

の一種。竪七寸、横九寸ばかり。鼻紙、書簡などに用ひる。小形。のべ。一代男「延紙に數楊枝を見せかけ」。二代男四「封じ紙三枚、延紙五折」

のべのふみ 延の文。延紙に書いた文。傾城酒吞童子「鼻紙の中から出す延の文」

のべはながみ 延鼻紙。「のべがみ」に同じ、鼻紙に用ひるのでいふ。一代男ハ「のべ鼻紙九百丸、まだ忘れたと丁子の油を貳百樽」

のべまい 延米。年貢米の俵に通常の一俵入より餘分の米を増して入れること。又、その米俵。でめまい(出目米)。椀久一世物語下「廣庭には延米を借りて積み重ね」。新小夜嵐物語下「延米を連判借にして、その米にて諸分を立てけるに」

のぼす (一) 上氣させる。戀情などをつつらせるにいふ。傾城反魂香中「買人のお身もすたらず、女郎ものぼさぬ様に舵を取るが引舟」。(二) おだてる。煽動する。丹波與作中「男と見こんで頼むとのぼせば、此奴がのぼされて成程盗んでくれうといふ」

のぼりあきなひ 登り商。都の方へのぼりながら商ひすること。永代藏四「江戸に下り、本所の呉服棚に賣りては、登り商に奥筋の絹綿とゝのへ」

のぼりしほ 上潮。あげしほ。上げ満ちて来る潮。「ひきしほ」又は「おちしほ」の對語。最明寺殿百人上臈上「上り潮、落潮、片潮、諸潮」

のぼりすがた とりのぼせた姿。熱中した姿。次條参照。

のぼりつむ 登詰。(一) 極度まで上る。(二) のぼせあがる。上氣して夢中になる。(三) 熱中し切る。博多小女郎下「二世も三世も變らじと、登り詰める坂の下、今おちぶれの身と知らば」。冥途飛脚中「のぼり詰めるその手間で、肩ける所へ肩けてしまへ」

のまはり 筥廻。筥の太さ。矢竹の周圍。のみしこる 飲みしこる。しきりに飲み續ける。飲んで夢中になる。生玉心中上「奥には猶も飲みしこり、踊るやら諸ふやら、騒ぐどさくさ若草の」

のめく 「ののめく」の誤か。騒ぐ。大聲にいふ。孕常盤三「平産ありての上なれば、歸されかしとのめく聲」

のめめ 言ひがひないさま。おめめ。重井筒中「何面目にのめくと、人につらまぶられん」

のめりのめり のめめ。おめめ。雪女五枚羽子板上「鶴と龜奴が何打食つて、すつ百萬年、のめりくとくたばり外れにあやかりなされ」

野もの 野武士又は野伏(山伏)などの意か。萬文反古「夜に入りて我々洛中の野ものと名乗りかけて、爰をしる事不思議や、おもひに家さがして」

野守の鏡 野中に溜る水の面。それに物の影の映ること。袖中抄に「昔雄略天皇が狩を遊ばした時、御鷹が逸れて見えなくなつた。野守を召して御下問あると、野守は鷹の在りかを申しあげた。どうしてかくも明かに申すぞと重ねてのお問ひに、この野の水に影が映じたのと申し上げた。これによつて野守の鏡と言ひ傳へた」由が出てゐる。

のやづくり 野屋作。野家造。野にある家の作り。野中に家作りすること。又、その家。新可笑記「播州飾磨の市立ちさかりたる野屋づくり、都を爰に見る錦の曙」

のら (一) なまけること、怠惰。又、のらくらもの。怠惰漢。女腹切上「この半七の大的らめは、帳面も埒あけず」。(二) た

②

はけたこと。馬鹿をつくすこと。又、遊藝のこと。軀山姥三「三味線・胡弓・淨瑠璃・もんさく、のら一まきの諸藝なら、こつちへ任せておく座敷」

のらかはく のらを盡くす。なまけてゐる。源氏冷泉節下「女房どもはのら」と、何處にのらをかはいてゐる」

のらからす 野鳥。何々鳥、何々雀などいふは、常にその地にゐて、その事情に通じてゐる者の譬である。のらからとして、よく其態に出入してゐるやから。鳥とは罵る心持がある。出世瀧徳上「思ひ綻ぶ袖口を、九軒阿波座の野良がらす、月夜はなほか闇の夜も」

のらぞんざい なまけて物事を本氣にしないこと。しだらなく投げやりにするさま。傾城反魂香中「思ひやり手となつたるも、のらぞんざいでなれうか」

のらつぽ なまけもの。怠惰漢。「のら」を更に卑めていふ。宵庚申下「コリヤのらつぽ、今朝卯の刻から内を出て、何時じやと思ふ」

のらのら なまけるさま。のらくら。のろのろ。又、氣のぬけたさま。天網島中「三五郎只一人のらくとして立歸る」のらぼうず 野良坊主。のらを盡くす坊。

道樂坊主。

のらふそく 野蠟燭。裸蠟燭などいふに同じであらう。「野」は自然のまゝで人手を加へないものにいふ。或は野でとぼす蠟燭の義からいふか。兩吟一日千句「袖の露こぼし所は野蠟燭、ひつそぎにして竹籬く陰」

のらまつ 野良松。のらものを呼ぶ擬名。野良藏などいふ類。軀山姥「是のら松、ひまのない旅籠屋奉公」

のらもの 野良者。なまけ者。どら者。ならずもの。

のららしい のら者らしい。「のら」を參照。天網島上「野良らしい、だて乗自慢といひそな男」

のり 生血。ねばりけのある血。なまち。五十年忌歌念佛中「死骸を夜著に押包み、立ちあがれば血(のり)落ちて滑つてのつげにどうと臥す」

のりうち 乗打。馬その他の乗物に乗つたまま打ちすぎること。下乗しないで通ること。釋迦如來誕生會上「乗打は推參なり、下馬をせよ」

のりおき 糊置。染色にいふこと。布の或部分に糊を塗つて、そこに色の染まないやうにすること。友禪禪形「地は

そうでんから茶、琴、のり置にして上にて繪をかき、菊はさいしきでい入」のりかひもの 「のりかひもの」を見よ。乗りかかつたる船 (謔)一旦着手したことは、行きがかり上、中止しがたい譬。「乗りかゝつた馬」「渡りかけた橋」などともいふ。櫻陰比事「この女には恐れしが、これまで乗りかゝつたる船と思ひ」

のりかけ 乗懸。宿驛の駄馬は、三十六貫負はせるのを本馬と稱し、それに對し二十貫荷物を附け、その上に一人乗るのを乗懸といつた。又、その馬。乗懸馬。一代男七「龜屋の清六、乗懸よりおりもあへず」。武道傳來記「乗掛二匹を追いひたて、上野の宿に入りけるは」

のりかけうま 乗懸馬。乗懸に用ひる駄馬。前條參照。一代男五「大阪の黒舟といふ乗懸馬、伏見のさびなみ、淀のはんくはい、かれこれ三疋揃へて」

のりかひもの 糊をつけた布類。宵庚申下「コリヤさんよ。のりかひ物が干あがるがな、とりへてたゝんで打盤出して、ちよきと打て」

のりした 乗下。乗るところの下の方。駄馬の鞍の下部。一代女三「大津馬に四

斗入の酒樽を乗下に付け、(中略)右に手綱、左に鞭持ちて」  
のりしゆ 乗衆。乗る人々。乗つてゐる人達。のりてしゆ。乗組員。乗客。  
のりなしぶね 乗無船。後家。寡婦。未亡人。

のりものいしや 乗物醫者。外出の時乗物に乗る程の醫者。かちいしや(歩行醫者)に對して生計のよい醫者をいふ。晝夜用心記三「表は門づくりに玄關がま(中略)腰かけの上に釣り並べたる乗物醫者あり」

のろまにんぎやう 野呂間人形。近代世事談三「江戸和泉太夫が芝居に野郎松勘兵衛といふもの、頭ひらたく色青黒き、いやしげなる人形をつかふ。これをのろま人形と云ふ。野郎松の略語なり。又謙齋左兵衛は、かしこき人形をつかひ、相共に賢愚の體を狂言せし也。それより鈍きをいやしめてのろまといひ、癡漢に比したり」  
のんこ 男の髪のかつ方の一種。のんこまげ。伊達衆肌の者の好みであつたらしい。天網局上「のんこに髪結ふて野良らしい、だて衆自慢と云ひそな男。宵庚申上「打揃ふたる血氣ざかり、立

ちかけのんこのあたまがち」(の)らも。又、怠惰で見えごのみするもの。油地獄上「煙草一服致さうかと、腰打掛もものんこらし」

のんこまげ 前條の(を)見よ。  
のんこわげ 前條に同じ。

のんやほぶし 端唄の一。のんやほと唯すのでいふ。しよんがえ節などと共に、近松の淨瑠璃に挿入されたものも尠くない。松の葉三「のんやほぶし。戀は憂きもの、のんやほ、待宵きぬくつらや、つらい逢ふ夜ながらもわが涙、のんやほ、のんやほ」  
のんやほほをどり のんやほぶしに合せて踊るをどり。二代男七「居間は禿揃へて、のんやほゝ踊」

# は

はい 螺。(貝の一種。法螺貝の類。大下馬三「何とやら磯臭く頭魚の尾なるもあり、螺のやうなるもあり」。(ばいごま(螺獨樂)の略。一代男五「螺まはし、扇引、なんこよびて、おのづと子ども心になりて」

はいがい 沛艾。馬の勢よく躍り上ること。又、その馬。油地獄上「栗毛忽ち泥付毛、沛艾鞍もしづまらず」

はいくわ 梅花。次條の略。油地獄上「とりとせいも種油、梅花紙漉し在の油」

はいくわあぶら 梅花油。梅花の油。梅花の香のやうな匂があるといふ水油。梅久一世物語下「梅花の油辨慶が其の若衆の權之助」。梅花香。

はいくわかう 梅花香。(煉香の一。梅花の香に似せたもの。(前條に同じ、一代女六「顔には白粉眉の置墨、丈長の平元結を廣壘みに掛けて、梅花香の帯を含ませ、象牙のさし櫛」

はいくわのあぶら はいくわあぶら(梅花油)を見よ。

はいごま 陀螺。貝獨樂。螺(ばい)の介殼に、溶かした鉛をつぎ込んで作つたもの。後には木でも作る。竹のさきにつけた革紐で廻す。ばいつく。ばいげた。螺獨樂。

ばいた 賣女。淫賣婦。よたか。惣嫁。又、遊女を卑しめ罵るにいふ。百日會我「ヤイ〜ばいたため、待ちをらう、ヤアのととい奴め」

はいだう 俳道。俳諧の道。俳諧の學問。

は

は

虎溪橋「田代松意佛道修行の爲めとてはるく上りて」

ばいつく 螺つく。貝獨樂(ばいごま)と同じ。男色大鑑ハ「秋の末より螺つくはやらし」

ばいて 遺出(はひで)。田舎から出たばかりの者。山だし。新參。かけだし。堀川波鼓上「獨りをなごはいでなりや、お客が一人あつてもア、不都合な事ばかり」

はいどくさん 排毒散。敗毒散。解毒劑。どくけし。大矢數ニ「引こむは敗毒散でをなるもの、されども入るな水風呂の瀧」。女腹切中「この年まで敗毒散一服飲まぬこの親仁」

ばいにん 賣人。商人。あきうど。五人女四「八百屋ハ兵衛とて賣人、むかしは俗姓賤しからず」。釋迦如來誕生會一「賣人土民の子にてさへ、七歳ハ歳より東西を辨へて」。又、賣女をもいふ。

ばいの實 蝶の身(肉)か。西鶴五百韻「堺の春か通ふ鹽尻、ばいの實のからになりてもすけべいじや、むかしは花をやるさくら鯛」

はいふう 梅風。梅花の香を送る風。はいまう 敗亡。負けて、他に從ふこと。

蟬丸ニ「母はすがり悲めば、入道親子も敗亡し」。天網島中「どうぞ助けて」と、騒げば夫も敗亡し」

はいまはし 螺廻。海螺弄。ばいごま(貝獨樂)と同じ。又、それを廻して遊ぶこと。一代男五「よい年をして、螺まはし、扇引、なんこ呼びて、おのづと子ども心になりて」



しはまいは

はいもう

はいもう(敗亡)と同じ。今宮心中上「提灯も打破れ、山兵衛も敗もうし」

はいよせ 灰寄(はひよせ)。火葬の後、灰を掻き寄せて骨を拾ふこと。骨あげ。遺骨拾ひ。五百韻「はいよせの跡は夢野となりけり、男の子はなし武庫の山風」

はいれき 梅曆。梅花の開落を見て季節の推移を知ることにいふ。一代女「爰に引籠りて七年、開ける梅曆に春を覚え」。五人女五「山中の梅曆、うか」と精造の正月をやめて」

ばいをう 梅翁。西山宗因の號の一。「にしやませういん」の條を見よ。織留一「佛語は難波の梅翁を里にむかへ」

はうおんこう 報恩講。門徒宗の佛事。十一月廿二日から廿八日まで修する親鸞上人の忌。十月に取り越しして行ふものをお取越といふ。

はうがくみ 方角見。じしやく(磁石)のこと。二代男八「懐中せし方角見を取出し、この劍先の振る方へ御趣向と申す、定つて北へ向ふ針先、西に幾たびもはうかし 放下師。鞞鼓、さくら又は小切子(こきりこ)などを弄び、歌ひつ舞ひつさまぐの藝をする僧。もと放下とは田樂法師の類で、禪僧の悟入して萬事を放下した義から起る稱といふ。はうかそう。一代男三「其次は放下師、世わたる品々輝絶えがちなる風情」織留一「白化(しらばけ)に放下師までも品玉とる」



しはうは

はうぐみ 方組。藥劑の調合法。又、それを書いたもの。處方。處方箋。大下馬「西大寺の豊心丹の方組を細字にて書きつけ」。源氏冷泉節下「石藥韓藥

に、毒蟲などの處方(はうぐみ)は、毒藥にては候はぬか」

放火の笑ひ后

烽火(ほうくわ)の笑ひ后。周の幽王が、愛妃褒姒の笑を得ようとして、偽りの烽火(のろし)を屢々揚げて臣下の兵を欺いた爲に、眞の仇が來冠した時に遂に滅されたといふ故事(史記周紀)。男色大鑑六「諸見物たばこの吸ひがらに袖の煙を知らざるは、放火の笑ひ后をなぞらへて猶想はれる」

はうぐわんびいき

判官虫貞。弱者や不利不遇な位置に居る者に、理非を問はずに同情を寄せること。源九郎判官義經は、頼朝及び梶原景時に對する關係上世人から常に同情を以て見られてをり、淨瑠璃歌舞伎などすべて判官虫貞であるところから、かく一般的に用ひられる語となつた。大句數上「定舞臺つらみせ時めめぐり來て、その前髪を判官虫貞」。宵庚申下「判官虫貞の世の中、お前の名ほか出ませぬ」

はうこじ

庸居士。唐の人、名は蘊、字は道玄。もと襄陽の人で世々儒を業とした。貞元の初、石頭希遷に謁し、又丹霞天然と交る。更に江西に遊んで馬

は

祖道一に參し法旨を承け、留ること二年、爾來機鋒甚だ迅捷で、震旦の維摩と稱される。女に靈昭女がある。「れいせうぢよ」の條參照。永代藏四「唐土庸居士が娘の靈昭女は惡女なるべし」

はうさいねんぶつ

泡齋念佛。下文を見よ。近代世事談五「泡齋念佛。葛西の土人、鉦太鼓に笛を交へて、躍念佛にて江戸の大路に徊す、之を葛西念佛と云ふ。泡齋と呼ぶことは寛永のころ泡齋といふ狂人の法師ありて町小路を奔る。わらんべ集り、氣違ひよ泡齋よと囃せり。今以て云ふ事ありて、氣違の名目となれり。この泡齋唯されて踊るかたち異形にして人の笑を重ねしむ。かの葛西念佛が踊る所一様ならず。左へ飛ぶあり、右へ跳ぬるあり、頭をうなだるれば又一人は尻をふりて、おのがむきく心々にして、定まれる拍子もなく只物に狂ふが如し。泡齋坊が踊るに等しく、よつて泡齋念佛とよぶ。誠に氣違念佛ともいふべきなり」



佛念いさうは

痘瘡の神 痘瘡の事を司るといふ、疫病神の一。一代男「髮置袴着の春も過ぎて、痘瘡の神祈れば痕なく六つの年へて」

痘瘡の山あげ

痘瘡は發熱三日、出齊(デソロヒ)三日、廻漿(ミヅモチ)三日、貫膿(ヤマアゲ)三日、收靨(カセ)三日を順當の経過とする。武家義理物語一「兄弟の娘一度に痘瘡の山をあげしに、美なる姿の姉むすめ、貌いやしげに、さりとは昔と變りぬ」

はうじやう

放生。捕へた生きものを放ちやること。松風村雨束帶鑑三「世々放生の願あつて」。蟬丸三「放生第一の靈水にて捨身思ひもよらず」

はうじやうく

放生供養。放生供養。

はうじやうゑ

放生會。八幡宮の神事の一、八月十五日に放生を行ふ法會。

はうしん

亡心。亡者の靈。亡靈。妄念。

はうずおち

坊主落。坊主墮。坊主が墮落して還俗すること。又、その人。坊主のなりさがり。

ばうずがち

坊主勝。世間に坊主の多いこと。二十不孝「娑婆塞げに今の世に多きものは、供一人連れし醫師と道心

者、扱も坊主勝にぞなりにける」  
**ばうずごろし** 坊主殺。私始の一種。坊主を特に相手とするもの。年若の女には無く、三十にあまり四十に傾く位のが、寺参りなどにかこつけて坊主に近より誘ふのである（好色訓蒙圖彙）といふ。一代男二「中寺町、小橋の坊主ごろし、色町を睨（のぞ）き兼ねつる隠居の親仁の、とつて置銀を、みなになす事はぞかし」

**ばうずもち** 坊主持。途中で坊主に逢つたら荷物を替つて持つこと。同行者の携帯品を替るゝ持ち行く一手段。油地獄上「寝醒提重、五升樽、坊主持して北うずむ」

**はうだたり** 方崇。方位の崇り。方角が凶であるために災厄にあふこと。織留四「當年の金神にあたるといへば、この末世に何の方だたり、こつちへ任せ給へ」と。戀八卦柱曆中「今年は爰が金神に當つた、それで是はうだたり」

**はうづ** 方圖。かぎり。際限。日本振袖始三「この寶を奪ひ取り、帝へ上れば御褒美恩賞方圖は知れぬ」  
**はうて** その場の有様に心が打たれてお

ちけること。場おくれ。動詞の中止形のやうに用ひられ、下に打消の語が來ることが多い。「ばうてず」「ばうてもせまい」

**はうばうず** 方方す。諸方に奉公する。方々にわたり歩く。恭盤太平記「世には無筆も多けれど、己れが年まで方方して一文字引くことも讀むこともならぬとは」

**はうばうまゆ** 眉毛の中へ細く墨で心を入れたものであるといふ。ほうくく眉。  
**ばうはち** 忘八。亡八。「くつわ」と讀ませてある。遊女屋の稱。置屋。又、遊女買をすること。もと、仁義禮智孝悌忠信の八を失ふ義であるといふ。

**はうびき** 寶引。正月の遊びなどに、品物を闇取りにすること。又、數多の繩を一人が握り、その一本の端に寶の證となるものを隠して附け、多勢の者に引きあてさせること。博奕の一手段としても行はれた。大矢數三「夕露も結びを取て歸る也、一文たして方引の末」。

織留三「御吉例として正月三日の夜、（中略）寶引を仰せ付けられる。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋なげ出して、手毎に一筋づつ引取り、この

緒の末に付け置かれし物を下されける」

**ばうふざん** 望夫山。支那武昌の北にある山。昔、或貞婦がこの山に登つて、その夫の國難に赴くを送り、夫を望んでいつまでも立ちつし、遂に石に化したといふ望夫石のある山（幽明録）。  
 國性爺上「唐土の望夫山、吾が朝の領中磨山、今の我が身のわが思ひ、石ともなれ、山ともなれ」

**ばうまはし** 坊まはし。でくのばう（木偶坊）廻しか。即ち、人形使、傀儡師の稱か。大句數上「植髮も白髮と見ゆる雪の暮、袖うちはらふてこの坊まはし」

**はうりやう** 方量。かぎり。際限。方圖。新可笑記四「許せば又方量もなく我がまゝをして、所の宮地を狭め」  
**はうれんさう** 菠薐。菠薐草。一代男八「はうれんさうのひたし物、椎茸などにて飲みかけ」

**はうろくづきん** 炮烙頭巾。炮烙の形した頭巾。大黒さまが冠つてゐるので、大黒頭巾ともいふ。置頭巾。丸頭巾。二代男二「惠比須大黒を下ろし（中略）、こなたへは槌が行く、あなたへは炮烙頭巾」。焙烙頭巾。



はうろくびや 焙烙火矢。銅製の丸に火薬を籠め、布で包んで漆を塗り、點火して投げ爆發せしめるもの。國性爺四「日本祕密のはうろく火矢、打つて放つその聲」

はえさがり 生下。おひさがり。女の髪の後方へ垂れ下つたもの。

はおりし 羽織師。羽織などの仕立を業とするもの。羽織屋。

はか (助詞)よりほか。ほか。しか。女腹切上「私を布袋とはか云ひませぬ、それも道理じや。あの人は腹がはりの兄弟で十五違ひ」

はがい 尙痒。「はががいい」の略。はがゆい。もどかしい。じれつたい。

はがいじめ はがひじめ(羽交締)が正しい。兩腕で抱きしめること。又、罪人など縛するに、左右の二の腕を括ること。鳥が兩翼を閉ぢた形に締めくくると。鳥が兩翼を閉ぢた形に締めくくると。鳥が兩翼を閉ぢた形に締めくくると。鳥が兩翼を閉ぢた形に締めくくると。

はかばかず 墓坊主。墓場へ行つて讀經する坊主。火葬、埋葬の際に同向する僧。榮花咄三「この悪所焼かざ直るまじと、墓坊主にさへ笑はれて」

はがひ 羽交。鳥の兩翼の打ちちがふと

ころ。轉じて、はね、つばきの稱。出世瀧徳上「この惣兵衛と肌を合せ羽交について廻らつしやれ」

はがひじめ 羽交締。「はがひじめ」を見よ。

はがま 羽釜。尙釜。鏝のある、普通の釜をいふ、上方の方言。一代男四「ちんからりに羽釜一つの樂しみ」。永代藏三「洗ひもやらぬ羽釜さげ來て、錢百文借り行く」

はかり かざり。限りをつくすこと。冥途飛脚下「土にどうと平伏して、聲をはかりに泣きければ」。吉野忠信四「足をはかりに駈廻り」

ばかんせき 馬肝石。馬の肝に似た石であるといふ(難波土産)。國性爺「南海の火流布、刺支國の馬肝石、その外邊國島々の寶」

はきかけ 刷掛か。染模様の名。色を刷毛ではいたやうに染め出した模様である。五人女四「對のさし櫛、はきかけの置手拭」

はきかけおび はきかけ帯。「はきかけ」に染めた帯。前條參照。二代男四「世間にはきかけ帯のはやる時、袖縞の丸ぐけも思はしからず」

はきき 羽利。羽ぶりのよいこと。はぎの利くこと。又、その人。

はきき 龍門に葉菊の五所紋」下黒き葉菊。紋所の名。男色大鑑二「上はぎしみ 尙軋。怒り。恨み。忍耐などの表情。又、眠つて齒をきり／＼音させること。はがみ。はぎしり。切齒。源氏烏帽子折二「手足も慄ひ凍れれど、その色見せず尙ぎしみし、拳を握り」

はきには 掃庭。掃き清めてある庭。武家義理物語五「はき庭の木陰に埋みおきぬ」

はぎのと 萩の戸。もと禁中清涼殿の御室の名。後には、武家の下屋敷などの室名としても用ひたと見える。武家義理物語二「萩の戸のかけにて身をかため(中略)國づくしの間に居ながれて」

はぎやき 萩焼。長門國阿武郡松本村から製出する陶器。もと毛利家が朝鮮の陶工を萩に召して焼かしたものに創まるといふ。黄白の釉薬を用ひたもので、別稱、松本焼。生玉心中一「茶碗鉢ぬるその音を、聞くにもさがが袖しぼる、露の萩焼大皿出し」

はざり 齒切。はざしり。はざしみ。女腹切上「大きな足を突出すやら、齒切を

は

は

するやら寝言やら」

**はく** 白。はくじん(白人)の略。卯月潤色中「茶屋で此方のまるる茶は、新造の振かつめ茶か、但しは白の白茶か」生玉心中上「忍ぶ戀路をせき臺の、女蘭男蘭は呂州の姿、白と眺めて白牡丹」

**はくえん** 白鷺。繪師の號か。男色大鑑八「幽禪が萩の柑書き白鷺が若松、色々の模様好み、素人目にはあだに見るらん」

**はくかん** 白鷗。鷗は雉の一種。羽毛は白いのが多く、尾の長さ二三尺、嘴と爪とが赤い。男色大鑑六「白鷗枯木の陰に宿し、鼻梢に身を動かし」

**はくぎん** 白銀。贈答用とした銀。銀を三寸ばかりの平たい楕圓形として、紙に包んだもの。通用銀の三分に當り、銀何枚と呼んだ。銀子。萬年草上一包みの白銀、目録添へて渡しければ」

**はくざうす** 白藏主。和泉國大鳥郡小林寺の僧。和漢三才圖會「當寺の塔頭耕雲庵に白藏主といふ者あり。又、鎮守稻荷社の邊に二足の野狐あり。藏主之を愛して慈育す。常に脚下に在りて隨仕すること恰も侍童の如し。その頃大藏某といふ妓藝の譽ある者、この戲事

を見て、釣狐の狂言を作る世に所謂こんくわい狂言これ也。百物語では之を甲斐國寶塔寺の事とし、老狐の化けものとしてゐる。男色大鑑七「白藏主の住み給へる松林寺の三足狐咄しもをかしからず」

**はくじん** 白人。(しろうと(白人)の音讀。今「素人」と書く語に當る。(遊女の一種。もと、京都の祇園、大阪の島の内新地等に居た私娼の稱。伯人。泊人。白(はく)。織留六「或ひは風呂屋白人を忍び連れて」。天網島中「紀の國屋の小春といふ白人」

**はくちやう** 白丁。白布の狩衣を著た仕丁。松風村雨東帶鑑二「遁すまじと白丁ども、一度にとつと込み入りたり」

**はくてい** 博奕の用語。特に骨牌ばくちにいふ。大職冠四「一枚ひねつて額にあて、彼のばくていに飛入れば」

**はくのなは** 不動明王の手に持つてゐる繩。惡魔を縛るための繩。萬年草下「戀と思ひに縛られて、情のきづな縛の繩、不動坂にもさし懸り」  
**はくのふた** 狛の札。狛といふ獸の形を描いた札。狛は、狛が熊に、頭が獅子に、鼻が象に、眼が犀に、尾が牛に、脚

が虎に似たもので、毛は黑白の斑である。邪氣を拂ひ殊に惡夢を喰ふものと云ひ傳へられ、之を描いた札を、節分大晦日の夜などに敷いて寝ることが行はれた。俳諧では「狛の枕」といふ題がある

一代男三「厄はらひの聲、夢違ひの狛の札、寶舟賣など、觸格をさして、鬼打豆、宵より扉をしめて」

**はくもんどう** 麥門冬。百合科の植物。觀賞用として栽培し、地下部は薬用とする。やぶらん。薩摩歌上「旦那茯苓いたされ、詮議まぢく、麥門冬」

**はくや** 莫邪。支那の名劍。古來、「千將莫邪」と並稱されてゐる。その條を見よ。雪女五枚羽子板上「エ、これ我君、莫邪を鈍しとし、鉛刀を鈍しといひ」は、賈誼の弔屈原の文に「莫邪爲鈍兮、鉛刀爲銛」とあるに據つたのである。  
**はくわん** 箔椀。薄椀が正しい。椀の一



種。形状の薄いもので、岩代國會津から産するのが最も名高い。大矢數四「榮耀者とならず箱椀、けふは山あしたは芝居あきつては」

はぐん 破軍。破軍星の略。北斗の第七の星で、劍狀をなすもの。毎月運行して十二時に随つてその位置をかへる。陰陽家ではその尖端の指す方を萬事に凶として忌むといふ。碁盤太平記「破軍は辰巳に向ふたり、東の門より南について乗れや〜」

破軍が直る 運が向いて來るといふ意。前條参照。堀川波鼓下「サア破軍が直つた仕済したと、そゝろに笑ふて勇みをなす」

はけ 刷毛。(→)遊び仲間を呼ぶに用ひる語。五百韵「刷毛と申すは遊び子の供、待宵やうたふも舞ふも糊細工」。(→)頭髮の先端。はけさき。次條参照。

はけの彌五郎 前條の「はけ」(→)を諱名のやうに用ひた例。又、「はけさき」を長くして、伊達風にしてゐたからの稱でもあらう。油地獄上「同商賣の色友達、はけの彌五郎、かいしいゆの善兵衛」

はご 鶺鴒。小鳥を捕へるために、囀(をとり)のそばに立てておく、竹又は木の

の枝などに鶺(もち)をつけたもの。はが。雪女五枚羽子板中「これは〜と手足も叶はず、はごに罹りし野末の鳥」

はごてんじゆ 箱傳受。金など箱入のまま傳へ受けること。箱のまゝの授受。大矢數三「大事のことは思ひ出されぬ、千貫目手形まぎれて箱傳受」。同四「符付けて人知らずな箱傳受、近年仕出しのからくり扇」

はごぼしご 箱階子。箱梯子。段の下部が抽出し箱又は戸棚などになつた梯子。五人女二「かゝは箱階子おりて」。曾根崎心中「箱梯子の二つ目より」

はごぶね 箱舟。兩吟一日千句「箱舟にいけどられ宛二年もの、未進請はれてせはしなの世や」

はごむね 箱棟。棟の造り方の一。箱形に組んで、横樋のやうにしたもの、男色大鑑二「丑の刻に、大書院の箱棟に少女の聲して」

はござし 羽指。鯨を捕へる人にいふ。和訓栞に「森鋒をもて鯨をさす者をいふ。長袖の短衫を着たり。鯨を見ては羽袖を振りて指揮す。よつて羽指と呼ぶなるべし」と。永代藏二「鯨つきの羽指の上手に天狗源内といへる人」

はさみむすび 挾結。帯のさきを結ばないで挟み込みにしたものを。はさみおび。一代男一「わけ知りだてなる茶糴子の幅廣、挟み結びにして」

はさみもの 挾物。酒宴などの席で、箸で挟み取つて配る肴。はさみざかな。とりざかな。物種集上「はさみ物七日が間浮き思ひ、芝居のはなも盛すぎ行」

はさらがみ 婆娑羅髮。さばけ髪。亂れ髪。ちらし髪。關八州繫馬一「思ひみだるゝばさらがみ」

はさららうぜき 婆娑羅狼藉。放肆亂暴なこと。男伊達などの振舞にいふ。はし 端。はしちよらう(端女郎)の略。物種集上「さくはなのよし野おろしてはし局」。百日曾我一「着のまゝながらのはしにおろされ」

はし(助詞)「し」と似て上の語を強めるに用ひる。松風村雨束帶鑑二「必ず人ばし恨むるな」。曾我會稽山四「所領の仇ばしし給ふな」

はしかからふ はしかからう。はしかくあらう。「はしかし」はちく〜痛む、いら〜するさまなどの形容詞であるが、轉じて、あまり身にこたへないさま、むず〜するさまなどにいふ。孕

常盤「御年は十六七までは往くまい、姫君様には似合ひごろ。十五夜、我々にはちとはしかからふ、と云ひければ、ア、驕つた事ばかり。はしこふてもこそばふても、たとへゑぐふて、跡で口が腫れても身は構はぬ」

橋がなければ渡りがない (諺) 橋がなければ渡られぬともいふ。手がかりがなければ、物事は成立たぬ譬。槍權三上「橋がなければ渡りがない、臺子が縁の橋わたし」

はしかのこ 端鹿子。端が鹿子しぼりになつてゐる布であらう。永代藏六「はし鹿の子の後帯ひとしほ見よげなり」

はじき 彈。小兒遊戯の一。きしやこ貝、小石などを出し合つて、指で彈いて數取りすること。おはじき。二代男三「手づから玉拾ふ業して、まゝごとの昔を今に、はじきと云ふなどして遊びぬ」

はしけいせい 端傾城。はしちよらう(端女郎)に同じ。永代藏二「様子を聞けば二奴どりの端傾城なるが」

はしこふても 「はしかうても」の假名ちがひ。「はしかくても」の音便、「はしかからふ」の條を見よ。

はしざぶらひ 端侍。はしざむらひ。は

ざむらひ。木葉武者。

はしぜせり 端ぜせり。端の方をせむりいちらといふので、小店などに入つてこそゝ遊びすること。或は端女郎などを弄ぶこと。博多小女郎上「廓の縦横十文字、昨日まで端ぜせりした我々、俄分限は見らるゝ通り。今日からは太夫狂ひ」

はしたちよらう 端女郎。次條に同じ。はしちよらう 端女郎。下級の遊女。色道大鏡二「端女(はし)。端女郎とも、

局女郎とも、あそびとりともいふ、けちぎり女の事なり」。縫留三「忍び／＼に端女郎ぐるひして、夜見世過ぎて霜月の比、よし原町の五分女に、虎之助といふ局に火鉢移りに人の見知るもかまはず」

はしつき 端織。布の端を織ぐこと。又、その物。二代男二「龜屋織の着物に、はしつぎの有る帯右の脇に結び」

はしつばね 端局。端女郎のこと。又、その居る室。一代男五「都に近き女郎の風俗も替りて、はし局に物いふ聲の高く」

はしぬひ 端縫。布などの端を狭く折りかへして縫ふこと。はぬひ。薩摩歌中

「心通はずはしぬひの、詞の縁こそあはれなれ」

はしの子 階の子。きざはしの段。はしごだん。はしご。梯。一代男七「二階には、久都はしこの上り下りまで吟味して」。一代女四「亭主が目づかひ見れば階の子教へける」

はしば 羽芝。羽柴。「はしばの煙」の條を見よ。

はしばし 端端。あのはしこのはし。あちこち少しづつ。萬文反古五「密夫をこしらへ、二とせあまりも忍びあひしが、七十五度にも及びけるが、はし／＼此沙汰いたせしに」

はしはの煙 羽芝。羽柴。橋場。江戸郊外、千住の東、火葬場のあつた處。吉原失墜「花露に曰、(中略)淺草にて瓦をやき、はしばにて死人をやき、さんやにて女郎かひをやく」二代男一「太夫に焼立てられ、羽柴の煙限りと思ひつく」。

はしひめ 橋姫。「宇治の橋姫」を見よ。はじめ 始。物のはじまり。轉じて、由來、來歴、頭末などの意。五人女五「西圓寺といへる長老に始を語り、心からの出家となりて」。榮花咄五「老僧初めのあらましを語り」

はしもと 橋本。山城國綴喜郡の内、

山八幡の西南、京河内街道の一驛、淀川に沿つてゐる。大下馬三「橋本狐川の渡に見馴れぬ玉火の出でしと」

ばしやく 馬借。馬で荷物を運び賃金を取ること。又、それを業とする人。うまかし。馬の駄賃取。懷視五「この津の繁昌、馬借隙なく」

ばしやくどひや 馬借問屋。馬借を營業とする問屋。丹波與作中「昔とちがうて當代は、道中筋も吟味つよく、馬借問屋へ斷られ、悪名が立つては」

ばしやれもの 婆娑羅者の訛。ばしやれたもの。縮りのないもの。遠慮會釋のない者。夕霧阿波鳴渡中「我々がなんぼ沙汰を致さずとも、あの傾城のばしやれ者、それをいはずに居ませふか」

ばしやれる 婆娑羅を訛つて、動詞のやうに用ひた語。しどけないさま、無遠慮な、はずはなさまにいふ。又は米の朔日中「迎に來たは乳兄弟、(中略)町方に居る分に云成したわしが身が、ばしやれたなりで逢はれもせず」

柱一本の至 磔刑(はりつけ)に處せられた者。雪女五枚羽子板上「洛中を引渡し、なんでも柱一本の主にしてくれん

もの」

はしらかし 次條の略。一代女四「黒米にはしらかしに朝夕送れば、いつとなく艶らしき形を失ひ、我ながらかくも亦とりなり賤しくなりぬ」

はしらかしじる 走汁。手輕にこしらへた汁。ちよつと火にかけて作る汁。織留「一つ釜の加賀米にはしらかし汁、鰯菜も同じやうにすわりて」

はしらぐみ 柱組か。組み立てた柱であらう。大矢數三「此所新地ながらもはしら組、なほ行末の若宮八幡」

はしらもち 柱餅。肥前國長崎で行はれた、歳晚餅搗の一風習にいふ。下文を見よ。胸算用四「可笑しきは柱餅とて、仕舞ひ一白を大黒柱に打ちつけ置き、正月十五日の左義長の時、これを炙りて祝ひける」(長崎の柱餅の條)。

はしり 走。厨で物を洗ひ流すところ。臺所のながし。物種集上「はしりの先へ人通ひけり、摺子木の影法師より名が立ちて。今宮心中下「はしりの先の菜刀でなりとも」。又、魚鳥・野菜・果物などの初物の稱。

はしりこきり 走りくらべ。はしりこくら。徒歩競走。

はじりこん 吸出膏藥の名。拉丁語 *Incise* の訛。大職冠三「てれめんていな、ばじりこん、さんたらにいによう萬能膏」

はしりぢゑ 走智慧。先きばしりする智慧。早のみこみで淺はかな物の理會にいふ。五人女一「手くだの爲に出しけるとは、かしこき神もしらせ給ふまじ。ましてやはしり智恵なる兄嫁なんどが何として知るべし」

はしりひきやく 走飛脚。いそぎ走る飛脚。急飛脚。丹波與作下「あれあれへ見へる早提灯、走り飛脚と覺へたり」

はしりもと 走元。はしりの元。ながしもと。

はしりもの 走者。出奔者。かけおち者。道行きもの。重井筒下「外の欠落走者と違ふて、明日尋ねふとはいはれぬ。死に出た心中なれば」

はすきりばな 蓮切鼻。上に向いて低い鼻の稱。孔があからさまに見える鼻。日本振袖始「鹽口に蓮切鼻、猿眼に鉢額」

はずこみ 管込。矢管を深く射込むこと。はずね 蓮根。小兒に出来る瘡の一種であるといふ。二代男六「耳より下に流れ

は

は

て、少しの蓮根の痕、人の眼にかゝる程にはなきに」  
蓮の絲にて大石を釣下ぐ。不可能なこと

の譬。到底かなはぬこと。嶺山姥五「匹夫の分にて某を滅さんこと、蓮の糸にて大石を釣下げんとするに似たり」

はすのいひ 蓮の飯。蓮の葉に包んで蒸した糯米の飯。はすめし。孟蘭盆に佛前に供へ、又、親戚に贈りなどする。

二十不孝五「連れあひの佛棚も飾らず、蓮の飯の祝ふべき始末もなく」。又、蓮の葉を蒸して細かに刻み、鹽に和して交へた飯をいふと。

蓮の葉商賣 その季節の物を商ふこと。きはものあきなひ。はすはあきなひ。

二十不孝五「桃や櫻や梨の子、これぞ蓮の葉商賣(あきなひ)、七月十三日の曙夕暮は、麻柯の焼火して、世に亡き魂を祭る葉の哀れは秋なり」

はすのはめし 蓮の葉飯。「はすのいひ」に同じ。

蓮の葉物 (一)蓮の葉に包んで、孟蘭盆の佛前に供へるもの。胸算用二蓮の葉物、五月の甲、正月の祝道具。(二)物のよくない品にいふ。一代女五「蓮葉女(中略)この名を付けぬ、物のよからぬを蓮の

葉物といふ心也」

はすのめし 蓮の飯。はすのいひ(蓮飯)に同じ。二代男一「旦那殿より蓮の飯を賜はり、鏡の餅をすわる」

はすは 蓮葉。(一)はすはをんな(蓮葉女)の略。一代男三「色つくりたる女、肌には紅鬱金の絹物、上にはかちん染の布子、縞縞子の二つ割左の方に結び、赤前垂して桐の引下駄を穿きて(中略)、あれは問屋方に蓮葉と申して、見目大方なるを、東國西國の客の寝所さすために抱へて、己が心任せの男狂ひ、小宿を替へて逢ふ事、いたづらの晝夜に限らず出歩く事も、親方の手前も耻ぢず」。

(二)女の浮気なさま。身持のかるはずみで、いやにめかしたてるさま。双は水の朔日中「華美はすはなる身に染まり、うはの空なる世にならひ」。生玉心中「柏屋さがははすはに御座る」

はすはあきなひ 蓮葉商。「蓮の葉商賣」を見よ。

はすはそて 蓮葉袖。はすはに見える袖。はすはな衣裳にいふ。傾城反魂香下「髷いれずの二ツ袖、鴨のはなりのはすは袖」

蓮葉な世 浮いた調子の世。輕薄な世間。

曾根崎心中「草の蓮葉な世にまじり、三十三に御身を變へ、色で導き情で教へ」

はすはをんな 蓮葉女。京阪地方で、問屋に抱へておいた賣春下女。一代女五「難波の浦は日本第一の大湊にして諸國の商人爰に集りぬ。上問屋下問屋數を知らず、客馳走のため蓮葉女といふ者を拵へ置きぬ。是は飯炊女の見よげなるが、下に薄綿の小袖、上に紺染の無紋に、黒き大幅帯赤前垂、吹鬢の京弁、伽羅の油に固めて、細緒の雪踏延の鼻紙を見せかけ、其身持それとは隠れなく、随分面の皮厚うして人中を恐れず、尻据ゑてのちよこゝ歩き、びらしやらするが故にこの名を付けぬ。物のよろしからぬを蓮の葉物といふ心也」。一代男三「上方のはすは女と思しき者十四五人も居間に見え互りて」。二代男五「問屋の蓮葉女なるべし」。永代藏二「都にて蓮葉女といふを所詞にてしやくといへる女」

はすむ おごる。奮發して出金する。置土産二「近日著物羽織拙者はすむでござる」

はせがはちやうさう 長谷川長藏。畫家。

長谷川流に屬する人であらう。織留四  
「都の清水に長谷川長藏が筆にて、五郎朝比奈が力くらべを書けり」

ばせん 馬髭。馬の鞍の上に覆ふもの。布皮の類で作る。くらおほひ。曾我會稽山二「馬髭に投げ付け繩りつく」

はたあきなひ 旗商。大阪で、米穀の投機取引をする商人の稱。堂島の米市で、それらの商人が旗で信號したのに基づくといふ。

はたえだ 幡枝。(地名)山城國愛宕郡岩倉村の内。

はたかいくさ 裸軍。部下もなく助け手もなく、單身でするいくさ。又、素肌でするたたかひ。

はたかいちぶ 裸一步。裸金の一步。物に包まない一步金。

はたかきん 裸金。物に包まない金。裸のままの金。榮花唱二「裸金にて二千兩」

はたかしま 裸島。裸の人ばかり住んでゐるといふ島。五人女二世界の圖にある裸島とて

はたがたな 肌刀。肌近くつけてゐる刀。ふところ刀。懐劍。武家義理物語二「懐中を探しけるに、案の如く肌刀を

さしてあり、是は曲物なり」  
はたかたびら 肌帷子。肌に直接つけて着る帷子。一代女六「白き肌帷子、地紅に御所車の縫ある振袖」

裸花髻百貫 次條の轉用。雪女五枚羽子板下「裸花髻百貫、くわんくわんとも鳴るは」

はたかひやくくわん 裸百貫。男は裸でも百貫の値がある。男子は無一物でも百貫文を價する。五人女一「男は裸が百貫、たとへてらしても世はわたる、清十郎様せき給ふな」

はたかひやくびき 裸百疋。前條に同じ。はたか (他動四段) 搦く。叩く。永代藏二「いつとも捨ておく骨を源内貰ひおきてこれをたかせ、又油を取りけるに」。又、拂ふ。つかひ盡くす。

はたく (他動下二段) 拂ふ。つかひ盡くす。吉野郡女楠二「棘味噌桶まではたけ出し」

はたしじやう 果狀。果し合ひを求める狀。決闘申込狀。武道傳來記六「果し狀付けられて詫びごとしたりとの取沙汰」

はたしたしゆ 旗下衆。はたあきなひ(旗商)の人達。その條を見よ。又、果し

た衆で、賣り方を指すともいふ。油地獄中「はたした衆の下りを祈るは、高きお山を時の間に麓に下る」

はたしまなこ 果眼。打果さうとする眼つき。ちまなこ。武道傳來記三「下人あまためしつれ、はたし眼にて来る」

はだせうまい 肌背馬。はだかうま(裸馬)。鞍を置かない馬。恭盤太平記「馬の腹帯を締めかねて、はだせに乗つて駈くるもあり」

はただいしやう 旗大將。主將の旗を掌るもの。又、江戸幕府の軍旗を掌る職。老中の支配に屬し、與力同心などを部下としてゐたもの。はたぶぎやう(旗奉行)。武道傳來記四「其府の旗大將白峰村右衛門」

はたたき 羽撃。はばたき(羽搏)に同じ。

はたたらいてん 霹靂雷電。はたたがみ。雷電のはたたくこと。日本振袖始五「はた、雷電また、く間」

はたつき 肌着。はだぎ(肌衣)に同じ。はたてんがい 旗天蓋。旗と天蓋と。或は単に天蓋のことをいふか。大下馬一「導きの長老旗天蓋をさしかかけ」。一代男七「中の二階よりは、旗天蓋、葬禮の

は

道具を出せば

はちえふのくるま 八葉の車。網代車の一種。車體に八葉の紋所を畫いたもの。高貴の方が物見などに用ひられたもの。懷硯ニ「八葉の車轟かし、御名代なるは、無禮するなど」

はちえふれんげ 八葉蓮華。八瓣の蓮花。又、淨土の稱。

はちかくし 恥隠、(一)女の湯具。腰まき。ふたの(二布)。武道傳來記六「くれなるの恥隠し一重の有様」。(三)恥となるべき缺點を覆ひかくすこと。又、その物。

榮花咄ニ「當世衣裳は恥かくしと、ひとり」に讚をつけて、いやがる耳こすり言へるは」

はちくさうり 淡竹草履。淡竹(はちく)といふ竹の皮で作つた草履。はちくの皮草履。

はちげんはなつ 發言放つの訛であるといふ。確言する。大言壯語する。碁盤太平記「この老僧が手足をもいで取らば取れ、渡す事は叶はぬと、はちげん放つての給へば」。吉野都女楠三「腹切つて伏すべきと、はちげん放つて申せしは」

はちじふしゆがう 八十種好。佛にのみ

具はるといふ、清淨奇妙な八十種の相好。釋迦如來誕生會「四八の相好、八十種好」

八十八の升搔 ますかき(拵搔)は八十八歳の老人が切ると幸運になるといふ。蓋し、八十八は米に縁を持たせたものであらう。下文を見よ。永代藏六「八十八歳の年のはじめに、誰かひひ出して升搔(ますかき)を切らせけるに、すな

はなる竹の林も切り絶ゆるばかり。京都の諸商人是を望みけるに、商賣に仕合せあつて、いよゝもてはやして、三夫婦の升搔として、俵物はかるにこぼれ幸ひあり」(智慧をはかる八十八の升搔の條)。

八十末社 多くの末社の稱。末社は幫間(太鼓持)のこと。大盡を大神と見て、それに屬するものといふ洒落である。もと、伊勢の内宮に屬する八十の末社のことであるのを轉用した語。田世瀧徳上「大酒・食悦、おかげを蒙る八十末社、流石の曲輪、駕籠切れて」

る。文珠八字法。  
はちだいでうじ 八大童子。八大金剛童子。不動明王の使者、慧光・慧喜・阿耨多・指徳・烏俱婆迦・清徳・矜羯羅・制陀迦の八童子の稱。  
はちだいでりゆうわう 八大龍王。八大龍神。難陀・跋難陀・娑羯羅・和修吉・徳叉迦・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅の八體の龍神の稱。  
はちたなき 鉢叩。十一月十三日の空也忌から四十八夜の間、京都の内外を修行して歩く空也宗の僧。鉦と瓢とを叩いて念佛唱歌し、施物をば瓢に受ける。多くは有髮妻帯で、常は茶筌などを作つて賣つたものであるといふ。空也節。踊念佛。武道傳來記五「空也上人の流れを汲む鉢叩の物哀れなる聲して」



きたたちば

はちなん 八難。さんづはちなん(三途八難)を見よ。  
はちにんがた 八人肩。八人の人夫が昇くこと。一代男七「八人肩の大乗物、五人の太鼓持」



はちばうす 鉢坊主。托鉢して歩く坊主。

托鉢僧。はちひらき。鉢坊。

はちばち 鉢鉢。托鉢坊主が物を乞ふ時にいふ語。はつ。はつち。孕常盤。御法體とは申せども(中略)我等風情の門に立ち、鉢々(はち)と宜旨有り」

はちばち 恐れてふるふるさま。わぢわぢ。わな。ぶる。堀川波鼓。土身の毛も立つて怖しく、はぢ。懼ふて居たりしが」

はちびたひ 鉢額。廣い額。出額(でびたひ)などを嘲つていふのであらう。日本振袖始「鹽口に蓮切鼻、猿眼に鉢額」

はちひらき 鉢開。はちばうす(鉢坊主)に同じ。一代男七「その跡にて鉢ひらき紙屑拾ひが集めて」。大句

數上「數の袋はむめや溢そめ、石灰の煙をたつる鉢ひらき」



きはひち

はちひらきばうす 鉢開坊主。前條に同

じ。胸算用「米の乏しき鉢ひらき坊主となりて」

はちびん 撥鬘。元祿頃流行した男の髪その形が三味線の撥に似てゐるのといふと。薩摩歌上「きみよい頭のすり鉢びん、江戸すりがらしと見へたよな。すりばちびん(搦鉢鬘)の條參照。



んびちは

はちぶ 八部。佛語。天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の稱。八部衆。

はちぶぞり 八分反。延寶の頃、江戸で流行した編笠の一種。

はちぼく 八木。米のこと。米の字を分解していふ。永代藏「難波の入港に、八木の商賣をして」。新小夜風物語上

「今の八木に見合せては、少し相場を替へたきものなり」

はちまいがた 八枚肩。はちにんがた(八人肩)に同じ。曾我會稽山「乗物やれ參れと傳へて八枚肩、徒歩すねはきやつこらさ、邊をはねてはね馬の」

はちまん 八幡。八幡の神に祈誓をかける詞。轉じて、「眞に」、「斷じて」などの

副詞のやうに用ひる。槍權三上「八幡われらも心底かはらぬ」。武道傳來記「八幡免さじと、刀ぬきかざして打つてかゝれば」。一代男「八幡氣に入り申候、けふつかひ初めて、此文を書きまゐらせ候」

はちまんしせん 八萬四千。佛説に甚だ多い數をいふ。八萬四千の法門、八萬四千の光、八萬四千の煩惱など。

はちまんぢごく 八萬地獄。八萬四千の煩惱に應じてあるといふ地獄の稱。多くの衆生の煩惱のために受ける苦に譬へていふ。

はちまんほふざう 八萬法藏。八萬四千の法門。佛が説かれた一切の聖教。法は佛法で藏は護持してゐる義。釋迦如来誕生會「提婆達多は八萬法藏を讀み覺え」

はちもんじ 八文字。八の字の形。露の形、又、遊女の道中の歩み方に、内八文字、外八文字などいふ。吉野都女楠「しやならくの八文字は、二王をゆるがすやくなり」

はちもんじや 八文字屋。京島原の遊女屋の名。榮花咄「八文字屋の内儀御迎ひに」。(八文字屋染を染め出した京

は

は

都の染物屋の名。①八文字本を板行した。②都駄屋町の書肆。

はちもんじやぼん 八文字屋本。前條①の八文字屋左衛門。自笑の板行した小説類。八文字屋物。

はちや 葉茶。茶の若葉から製した茶。

茶。ひき茶の對語。

はちやしやうばい 葉茶商賣。葉茶を商ふこと。櫻陰比事二西の岡屋といへる葉茶商賣の者あり。

はちやみせ 葉茶見世。葉茶を賣る店。葉茶屋。永代藏④程なく元手でかして葉茶みせを手廣く。

はちりしやう 罰利生。罰と利生と。威嚴と温情とに譬へる。又は氷の朝日上「罰利生ある方にて涙を止め」

はちんちく 破陣樂。舞樂の名。皇帝破陣樂・秦王破陣樂・散手破陣樂・陪臚破陣樂・武將破陣樂の總稱。何れも武舞である。又、秦王破陣樂（じんわうはちんらく）の略、即ち「七徳の舞」と稱する雅樂。唐の太宗の作であるといふ。

はつあさ 初朝。正月元日の朝。元旦。一代男⑥「丹波口の初朝、小六が罷出で御慶と申し納め」

はつあつさ 初暑。初夏の暑さ。季節初

めの暑さ。油地獄上「卯月中ばのはつあつさ、末の閏に追ひぐりて」

はついきさ 初戦。初めて合戦。又、初陣

はついろ 初色。うぶな美しい容色ある女。若々しい色香ある女。五十年忌歌念佛上「その但馬屋の初色に、立つや浮世の濡草鞋、笠がよく似た菅笠の、雫積りて戀の淵」

はつかくめだま 八角目玉。角の入つた目の玉。角だつた目つき。

はつがひ 初買。新年初めて物を買ふこと。特に初春に遊女を買うて遊ぶ事。正月買。二代男②「わきから思ふた程の物入りにもあらず、面白きは初買なり」

はつかん 八寒。はちかん。八寒地獄の略。雪女五枚羽子板上「こよひの雪に埋もれてこどやかし殺されし、此世からの八寒の、くげんは我身ひとつにて」

はつがん 初雁か。五人女⑤「その奥に庭籠ありて、はつがん唐鳩金鶏さま」の聲して」

はつきのぼたん 葉附牡丹。紋所の名。胸算用「葉つきの牡丹と四つ銀杏の丸、女中方のはやりの」

はつきみ 初君。正月初めて買ふ遊女。

正月買の相手たる傾城。はつくどくち。浄土にあつて、澄淨・清冷・甘美・輕軟・潤澤・安和・飲時調適・飲已無慮などの八つの功德を具へてゐるといふ池水。夕霧阿波鳴渡下「この水は、極樂の八功德池の水と思ひ」

はつくん 拔群。群を抜いてゐること。轉じて、相違の甚だしいさまにいふ。一代男③「さりとは、各思はるゝとは拔群の違ひ」

はつつけ はりつけ（磔）の略。

はつけば 八付場。はりつけば（磔場）、刑場。しおきば。萬文反古④「しやれかうべの露にきらつき、八付場こぎみわるく」

はつけん 博見。僧家でいふ法兄（はふけい）の訛であらう。あにでし（兄弟子）。甲子祭③「一先某が博見（はつけん）播州書寫寺に、常陸坊海存とて候へば」

はつごよみ 初曆。新年の曆。新ごよみ。戀八卦柱曆上「十一月朔日、來る丑の初ごよみ」

八歳の宮 後醍醐天皇第九の皇子懷良親王のこと。太平記⑧「八歳宮御歌事」

の條「遠寺の晚鐘幽に聞えければ、つくく」と思ひくらしして入相の、鐘を聞くにも君ぞ戀しき(中略)、是こそ八歳の宮の御歌よとて、甞ばぬ人は無かりけり。」一代男「北は金龍寺の入相の鐘八歳の宮の御歌も思ひ出され」

はつさいもの 發才者。大阪方言。婦女の才氣ばしつたもの。おちやつびい女。

はつさう 八相。佛語の八相の轉か。八方の義。曾我會稽山ニ「長刀の刃を戴けと、八相に振つて懸る」

はつきかづき 初盃。新年に初めて飲む酒盃。特に遊廓で遊女が初春の内祝として飲む酒盃。これをすまして禮まはりに出かけるのであるといふ。壽門松上「初盃の内祝ひ、過ぎて諸禮の技揃へ雪踏の音のしやらく」と

はつきく 八朔。八月朔日。この日を農家では田實(たのみ)の節、轉じて「頼むの節」とも稱し、その年實つた稻を折敷土器に入れて、禁裡又は己の主家などへ獻じて祝つた。後には各家で繪行器(ゑほかる)に時果や餅などを入れ絲雀(つくりすゞめ)などを添へて贈答することが行はれた。又、江戸幕府では、徳川家康が天正十八年のこの日に

初めて江戸城に入つたといふので、特に節日の一とし、大小名直參の諸臣が白帷子を着て登城、祝詞を申し上げた。置土産ニ「けふは祝ふ八朔なりと、手づから鱈にして」

八朔の白小袖 八朔の祝儀に、江戸吉原の遊女が白小袖を着ること。「八朔の雪」ともいふ。

八朔の雀 八朔の祝ひの贈物に添へる絲雀(つくりすゞめ)。葱菰(すゝたま)の莖につけた、絹布で作つた雀のこと。

はつきく(八朔)の條参照。胸算用「八朔の雀は數珠玉に繋ぎ捨てられ」

はつしの糸 糸を拵などから外す意と初と恥しとをかけていふのであらう。薩摩歌中「其袖なりのいきかたも、何も彼もまだはつしの糸の、いとしままでに思はくの」

はつしゅうけんがく 八宗見學。八宗兼學が正しい。博く諸藝に通達してゐること。もと八宗は、俱舍・成實・律・法相。

三論・華嚴・天台・眞言の稱で、これらの教義を兼ね學ぶ意である。二代男「この道に身を染め、八宗見學、女色一遍上人の勧めに」

はつすん 八寸。八寸膳の略。高さが

八寸ある足付の膳。(八寸釘の略。萬年草上「思ひ痛める胸の内、釘を打たる八寸の、給仕も更に手につかず」

はつすんそてぐち 八寸袖口。長さ八寸に仕立てた、衣服の袖口。普通より長く意氣なものであるといふ。榮花咄五「八寸袖口の大匠仕立の衣裳を着る男ども」

はつせ 初瀬。香木の名。花やかで艶があり、よく匂ふものであるといふ。新小夜嵐物語上「初瀬などいへる名の木を大割にして焼きかけぬれば」

はつせん 八專。曆の詞。壬子の日から癸亥まで十二日間をいふ。但し、その中の間日(まび)を除き八日になるのでかく稱する。一年に六度ある。この間は降雨多く、嫁娶・造作などを忌む。西鶴五百韻「韋駄天妾執の雲も晴れがたし、須彌の四州は八せんの入」

はつた 跋陀。八大龍王の一、跋難陀の中略。なんだ(難陀)の條を見よ。

はつたい 撰。製。新米・新麥を炒つて粉にひいたもの。こがし。上方・西國の方言。

ばつたくさ ばたくさ。棒などでいきなり物を叩くにいふ擬聲語。女腹切下「町

は

代夜番が棒ちぎり木、ばつたくきばに置く霜の」

**はつたんがけ** 八端懸。八段掛。八丈鳥から産する八丈絹の一種で、その一段が、黄紬の八段に替へられるので名づけるといふ。合せ糸を二つ撚り合せて綾織にしたもの。帯地として用ひる。

一代男「中は紅鹿子ひつかへし、上は淺黄八丈の八端懸」。二代男「昔の筋緞子、八端掛の八丈」

**はつち** ばつち(棍襦)か。次條を見よ。西鶴五百韻「かし銀や利は朝の間にまはるらん、はつちにいるゝ善六が門」

**ばつち** 棍襦。朝鮮語 *baggi* の轉。絹布製の股引。京阪では絹・縮緬・木綿等で製つた長い股引をいふ。

**はつちばうず** はちばうず(鉢坊主)に同じ。戀八卦柱脛中「鉢坊主(はつちばうず)の手の内ほど、米も取つたこの梅龍」

**はつちはつち** 鉢鉢。はちはち(鉢鉢)を見よ。

**はつちや** (感動詞)驚き怖れ、はつと感じた時に發する聲。傾城酒吞童子「用捨せば共に片端喰はずぞ。はつちや怖しと會釋もせず」

**はつちやう** 八町。近江國大津の町名。一代男五「大津への辰駕籠に(中略)、はや八町につけば」

**はつつけばしら** はりつけばしら(礎柱)の音便。又、礎刑に處せらるべき人を罵りていふ。丹波與作虫馬方仲間の恥さらし。エ、はつつけ柱め、と脊骨をさうと踏みければ」

**ばつてうがさ** 竹の子笠の一種、淺くて大形のもの。

**はつてん** 八天。八方天。東方の帝釋天、東北方の伊令那天、南方の閻魔天、東南方の火天、西方の水天、西南方の羅刹天、北方の毘沙門天、西北方の風天の總稱。

**はつと** 法度。おきて。制度。轉じて、禁制。してならぬこと。男色大鑑五「大歌舞妓御法度の後」

**はつどこ** 初床。少女が初めて男に接すること。水揚。新枕。

**はつとりそだち** 服部育。攝津國島上郡服部村で育つたこと。壽門松下「見つきはきつい服部育ち」

**はつとりたばこ** 服部煙草。前條にいふ服部村から産する煙草の稱。出世瀧徳上「去りながらはつとり煙草煙草入、煙

管の餘計あるならば」  
**はつね** 初音。香の名。男色大鑑七「五月雨のしめやかなる夜は、初音焼きかけ」。源九郎義經が愛玩したといふ鼓の銘。吉野忠信「是を御身に贈るぞと、初音といへる鼓に添へ、黄金絹布陽はりて」。美濃國の村里の名。

**はつねどり** 初音鳥。その季節に初聲を鳴く鳥。武家義理物語五「南枝若衆の美花、物ごしは初音鳥も奪はれ、ちうの聲も出ず」

**ばつば** はで(華美)。耀やかしいさま。又、南蠻舶來の上等の鮫皮のこと。一代男四「裏付け袴の股だちとつて、ばつばの大小おとしざし」。武道傳來記四「筋天鷲絨のはやり結び、ばつばの大小一様に、六人編笠目に立ちて」

**はつぼうむぐう** 八方無窮。八方を窮りなく。あらゆる隅々。平家女護鳥四「虚空を相手に八方むぐう、受けつ流しつ切合ひしが」

**八百八禰宜** 奈良春日神社に仕へる多數の禰宜の稱。物種集上「貧乏神ついでまはつた春日山、なせと八百八禰宜すむ里」。一代男三「罷り出でたるは此邊に八百八禰宜の子供」

初尾(はつほ)くぼりの状 初穂配りの

状。御供物を配る時に添へる書きつけ。織留<sup>四</sup>「此所は太神宮のお蔭にて、年中さまん」の身過ぎあり、諸國へ初尾くぼりの状、大杉原一束を銀一匁八分の書き賃、中杉原のざつとしたる状は、一束一匁三分にて、隙なる醫者浪人のこれを書きぬ

はつまくら 初枕。初めて枕をかはすこと。にひまくら。一代女四「初枕の夜も何の繕ひなしに、首尾調ひけるを」

はつむ 「はずむ」の假名ちがひ。一代男八「江戸に無い珍しい物じゃと、亭主に一包はづむ」。重井筒上「豆板一粒はつとはづみ」

はつむかし 初昔。銘茶の名。上等の煎茶、抹茶。三月廿一日に摘むので、廿一日の三字を合して昔といふ。置土産<sup>五</sup>「お茶は初むかしか」。卯月潤色中「五にこひ茶の初昔」

はつめいげつ 初名月。八月十五日の夜の月。芋名月。出世瀧徳中「徒歩ではほど行くこと、はつめい月や一口(いもあらひも)、堤つたひの長繩手」

はつもとゆひ 初元結。元服の時、髪を結ぶに用ひる紫の紐。轉じて、初めて

は

元服すること。又、若々しく髪を結びあげてゐること。卯月紅葉上「殊にこの頃我親と初元結の我が夫」。國性爺<sup>五</sup>

「小陸が髪は初元結、諸軍勢の元服頭」はつもんび 初紋日。廓の詞。正月初めての紋日。齋門松上「おるせ揚屋の付肩初紋日の買論も、わしが獨りの胸算用、年<sup>六</sup>の有るう(年切増し)はつる 少しづつ取る。かじる。萬文反古四「宮川町にて聞きはつり申候や、今のはやり歌もそこ(く)をうたひ申候」

はづれ つまはづれ(棲外)の略。一代男六「地顔素足の尋常、はづれゆたかにほそく」。一代女四「年の程はづれ麗しく身の取りまはし一つとして悪しき所なく」

はつを 初尾。はつほ(初穂)が正しい。神佛に捧げる金銀・米錢の稱。おはつほ。一代男八「懐よりは是を初尾と、金子十兩投げ出せば」

はて 仰山な。事をあらだてるさまにいふ。二枚繪草紙上「脇指押取出でんとすれば、鳥引留め、ハテはでな人様じゃ」

はてぐち はでな語りぶりのことであらう。武家義理物語三「出羽義太夫が淨りのはでぐち、又太夫が舞を聞く人」

はとのかい 「法度の害」で不正な事をして、人をだぶらかすことであるといふ。

又、はとのかひ(鳩の飼)で、人を欺いて金を取る巫祝の類であるともいふ。一代男四「何をか申す事ぞ、胡散なるはとのかひめと、何でもなう聞捨てしに」はとのかひ 鳩の飼。前條を見よ。最明寺殿百人上臈上「義經の再誕と、はとのかひの附正にたぶらかされ」

はとのつゑ 鳩の杖。頭部に鳩の形を刻みつけた杖。鳩は明ばないものゆゑ、老人が用ひるのであるといふ。孕常盤ニ二人の内侍鳩の杖、網代の笠を携へて」

はとのめ 鳩の目。鉛製の薄い小錢。十目で錢一文にあたる。はとめ。伊勢參宮の者が、社頭で散米の代りに蒔いた錢。伊勢宮錢。勢州宮錢。胸算用「大神宮にも算用なしに物使ふ人嬉しくは思召さず、そのためには散錢さへ一貫といふを、六百の鳩の目を拵へおき、宮めぐりにも隨分物のいらぬ様にぞ遊ばしめる」

はとのみね 鳩峯。山城國男山の別稱。雪女五枚羽子板下「道明けき鳩の峯、正八幡の鎮座なる」

**はとぶく** 鳩吹。兩掌を合せて吹き、鳩の聲をまねる。獵師が獲物のある合圖とする。又、人を呼ぶ時などにもすること。大矢數三「鳩吹や慰みながら病みあがり、命ひろうて遠山を見る」

**はとむね** 鳩胸。(→胸が鳩の胸の様に圓みをもつて突出てゐるさま。→鏡の前方、鳩の胸のやうな圓みのついた所。)

**はな** はなうた(鼻唄)の略。堀川波鼓中「海道百里をはなでやる。花もさき手の供道具」

**はな** 場面。組。群。五十年忌歌念佛上「濱納屋の下で組んづ轉んづして居たを、いくはなを見て来た」

**はな** 花。てんとう(纏頭)。歌舞など演じたものに與へる金品。はなだい。傾城酒吞童子四「これは太夫達のお客方より今日の花か、扱々念比な過分々々」又、揚代(あげたい)。

**はなあしらひ** 鼻の先であしらふこと。人を見くびつて冷遇すること。

**はなあらし** 鼻嵐。鼻いきをあらく立てること。

**はないか** 花風。花の形を描きたいかのぼり(紙寫)。又、花の形に作つた風。又は水の朔日中「其思はくの紋付けて、

袂すじしき小袖いか(中略)、菊や牡丹の花いかを、戴きあぐるたいこいか」

**はないくさ** 花軍。花の枝で撃ち合ふ戦。慰みにすること。大矢數四「花軍敵も味方もから詞、まづ今日は鎧梅の先。二代男三「花軍は見ぬ唐土の事」

**はないろ** 花色。はなだいろ(縹色)の略。薄い藍色。出世瀧徳上「太夫様へ花色纏子の前巾着、人參入れてお錢別」

**はなうさぎ** 花兎。(→花と兎との模様。又、紋所の名。永代藏三「淺黄地の花兎、紺地の雲鳳」丹波與作上「時代の金欄、鶴びし、たすき花うさぎ、寢に設」

**はなかいらぎ** かいらぎ(梅華皮)に同じ。薩摩歌上「花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃庭の」

**はながつを** 花鱈。鱈節の赤い色の部分を薄く花びらのやうに削つたもの。

二代男一「半兵衛が花鱈など掻く、よもや今時分蕎麥切ではあるまじ、但し湯豆腐か」

**はながみぶくろ** 鼻紙袋。墨紙。布。革



はななみぶくろ

などで作り、鼻紙・薬品・金など入れるもの。紙いれ。二枚繪草紙中「鼻紙袋へ文をも入れ、ぐるぐく捲きし」

**はなぎん** 花銀。花として與へる銀。纏頭。花代。天網局下「磯市が花銀五つ、こればかりじや」

**はななくやう** 花供養。四月八日の佛生會に、多くの花を飾つて佛に供養すること。釋迦如来誕生會一「卯月八日の花供養、佛法流布の因縁なり」

**はなざら** 花皿。法會の時、散華に用ひる具。薄い金屬製のもので形が皿に似てゐる。けこ(花籠)。華篋。

**はなしば** 花柴。花と柴とを染め出した友禪模様的一種であらう。二代男五「花柴の千種がへし、虹縞の糸屋帯」

**はなしほ** 花鹽。型に入れて種々の花形に製した燒鹽。播磨國赤穂の名産。二代男一「雪に深草の花鹽を交せて、これ一種の口取にして吞むほどに」

**はなしめぬき** 放目貫。刀の日釘の上に何も巻かないでおくもの。はなちめぬき。戦時用の刀は、目釘のぬけないやうに絲や草で巻いて押へておくが、禮式用のものは巻かないといふ。女腹切上「放目貫の性よしも、つい燒きつけて

悪性に」  
はなじろ 鼻白。鼻と鼻とつきあふこと。  
はたと折悪しく行き逢ふことにいふ。  
曾我扇八景上「筋違橋の見附にて、はな  
じろにはたと行きあうたり」

はなせん 花甍。はなまうせん(花毛甍)  
の略。一代男ハ「車三輛のうへに、花甍  
をしかせ、太夫様かたへ申し遣はし」  
はなぞろへ 花揃。多くの花をならべて  
眺めること。又、美しい遊女などが多  
く打揃つて會すること。二代男「花揃  
卯月八日に定め、吉田屋の吉左衛門方  
へ、色深き太夫天職を二十人の大寄せ」

はなだい 花代。歌舞など演ずるものに  
與へる金品。はな。二十不孝。「揚屋の  
とだけ、野郎の花代」。生玉心中上「花  
と色とはも一つ、されば身を賣る金  
の名を、花代とこそ名づけけれ」

はなたちばな 花橋。銘酒の名。一代男  
「京より持たせたる舞鶴。花橋の樽の  
口を切りて」

はなだんぎ 花談義。花時に行はれる御  
談義。春季の説教。櫻陰比事。「或時東  
山の花談義に一家残らず参詣すれば」

はなちまき 花粽。枕久「世物語下「愛宕  
のしるべの花粽かたげて」

はなちめぬき 放目貫。「はなしめぬき」  
に同じ。

はなどり 花鳥。渡り奉公する者に譬へ  
ていふ。薩摩歌上「誰が呼子鳥草履取、  
一季半季の花鳥も、とかくは御縁次第  
なり」

はなぬり 花塗。塗師屋の詞。上塗りを  
すること。

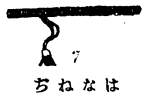
はなねち 鼻捻。木の柄の末にわなを附  
けたもので、荒れ馬の鼻先  
を挟みねちて引き廻す具。

はなねぢり 西鶴五百韻「乗  
掛の尻にとりつく蠅まゝいり  
鼻ねち持つてはらひきよむ  
る」。堀川波鼓中「荷物に附けしはなね  
ち引きぬき」

鼻の先智恵 (諺) 鼻の先ばかりの思慮。  
遠い深い考のないこと。女の浅慮にい  
ふ。鼻の先思案。一代女「惣じて母の  
親鼻の先智恵にて」

鼻の下が干あがる 食ふに困る。鼻の下  
の口を糊するに窮する。あごが干あが  
るの類。女腹切中「年寄つたこの親が、  
鼻の下が干あがる」

はなのぼうし 花の帽子。はなだいろ(縹  
色)の帽子。僧侶のかぶる帽子。武道



傳來記「をしや盛りを待つ花の帽子、  
身は墨染の櫻ちる世がたり」

はなのもと 花の本。連歌の宗匠の勅許  
によつて稱へる號。もと、禁中の連歌  
の際、花の下に圓座を賜つたのに起る  
といふ。宗祇法師初めてこれを賜つた。  
轉じて連歌師、又、その宗匠家をいふ。  
戀八卦柱曆上「をととひ花の本の連歌  
の會に夜をふかし」

花は三吉野人は武士 (諺) 「花は櫻木人  
は武士」に同じ。

はなひ草 (書名) 鎌屋立圃の著、連句の  
法則を書いたもの。織留「牛は闇に二  
句嫌ふかと尋ね、はなひ草口から四枚  
も覚えぬ者が」

はなひとしんあう 花人親王。「用明天皇  
職人鑑」の主人公、豊日花人親王、即  
ち後に用明天皇と申しあげる。

はなびら 花平。はなびらもち(花餅餅)  
のこと。花びらのやうな形をした餅。  
二代男七「我も好みの人より、春の朝を  
知らせて、花平といふ餅など送る」

はなぶえ 鼻笛。呼子の笛。胸算用「こ  
れ一番の見物と、諸人勇みて鼻笛を吹  
きけるに」

はなみこそて 花見小袖。花見の時に着

は

る小袖。源氏冷泉節下「花見小袖の雛形を、手づから畫いておはします」  
**はなみま**く 花見菘。花見の宴席に張る菘。

**はなみやしき** 花見屋敷。花見のために設けた下屋敷。涼み屋敷、雪見屋敷などに對していふ。櫻陰比事四「下屋敷を數多こしらへ、東山の花見屋敷に、葉山といへる手掛あり」

**鼻も動かさず** 何氣ないさま。巧みに知らぬ顔をするにいふ。織留六「お食もたべぬ程氣をなやみましてと、鼻も動かさず偽いへば」

**はなもち** 花餅。稗の粉をこねて、黄・青などの色をつけ、笹の形などに作つたものといふ。さゝもち(笹餅)。又、いただきもち。はなくさもち。圓く平たく糕(しんこ)を凹めて、中に小豆餡を載せたもの。四月八日灌佛會に供するといふ(俚言集覽)。武道傳來記「御家の作法を覺えたる老女、花餅のしほらしく作りなし、上へあげて下まで祝ひぬ」。二代男七「茶事の花餅などして、娘に胡麻を買ひて遣はしけるに」

**はなゆ** 花袖。袖の一種。小袖の俗稱。和漢三才圖會「小袖は俗に花袖と云ふ、

即ち蜜箒也。葉や薄く小さく、花も亦小なり。その實は八月熟し正黄色にして小さし。その皮皺脹起して醜く、その瓣甚だ苦く、食すべからず。たゞその花最も芬馥、摘みて酒膳の中に投じ、或は茗及び未だ黄ならざるものを採り、皮の切片を入れるも亦香美にして眞袖に勝れり」。一代男三「たばね牛房に花袖など提げて」。永代藏「豆腐・花袖の小買物につかはしけるに」。兩吟一日千句「はなゆは戀の袖にとまりて、青物がけふも來りて候ぞ」

**はなれもの** 雕物。仲間からのき離れたもの。又、世の當でないもの。普通の考で斷定されないもの。

**花をやる** 花やかに風流をつくす。華香をきはめる。念佛往生記五「都ぞ春の錦の小路、あやに包みし四條通、あやめふかねど、やれ花をやる、又夕顔の花をやる五條わたりのたそがれに」

**はにやすぢしん** 埴安地神。大地を守る神。日本振袖始三「此地の底にまします埴安地神にも見放され」

**はぬひ** 端縫。「はしぬひ」に同じ。

**はね** 撥。はねて取つたもの。うはまへのはね。武道傳來記八「袋に扶持かた米

のはね入れさせ」  
**はねざうり** 跳草履。爪先のはねあがつた草履。つまがくし。前の緒をつめて、前部を上にとらせ、足の指の見えないやうにしたもの。

**はねだいまく** 跳題日。南無妙法蓮華經の各字の筆端を延して、末を跳ねて書いたもの。ひげたいまく。

**はねばかま** 撥袴。糊ごはで、穿つと端がはねあがるやうな袴。大矢數三「黄鳥もはね袴着て阿爺(と)の代」

**はねもとゆひ** 撥元結。ヒ髻結。結んだ端をはねあがるやうにした元結。金紙などで、中に針金を入れて作つたもの。一代女四「髪は引下げて、ヒ髻結を掛け額ぎはを火塔に取つて」。男色大鑑八「おとし懸のはね髻(もとゆひ)、すかし形のさし櫛」

**はば** 幅。はぶり。威勢。特に金力の威光。一代男六「幅のなき男は、おそれてあふ事稀也」。榮花咄三「五百貫目の幅にては天職も思ふまゝ成りがたし」

**ははぎり** 羽羽斬。素戔鳴尊がやまたの大蛇を退治せられたといふ名劍。日本振袖始四「ははぎりの名劍を渡し給へば稲田姫、戴く劍をわきわけの、袖に



包んで衣更一

ははこぐさ 鼠麴草。どぎやう、かうぢはな、もちよもぎ、とうご、などいろいろに呼ばれる。二枚繪草紙上「芽は繁りそふ母子草」

はばさま 幅様。はばのきく人の尊稱。一代女二「越後の幅様とて、前の吉野様の御客」

ばばぜ ばばごぜ(婆御前)の略。祖母又は老婆の尊稱。

ははぢや ははぢやひと(母者人)の略。はゝびと。母御。

はばに 幅に。(副詞)澤山に。誇るほどに。榮花咄三「次第に幅に金銭溜まりて千貫目にあまりぬ」

はばにす 幅にす。自由にする。幅をきかせることとする。榮花咄三「此廣い吉原を三人の幅にして、又珍しうなりぬ」

母の親 母親といふに同じ。一代女四「惣じて母の親鼻の先智恵にて」

幅をやる 幅をきかせる。榮花咄二「無上の幅をやりて、中卑(ひく)なる顔も鼻高う見えぬ」

ばばん ばば(婆)の訛。假名手本忠臣藏六「みさき頭がしゆんだる程に、親仁出

て見や、ばゝんつばゝんつれて、親仁出て見や」

はびき 双引。刀劍などの刃を引きつづしたるもの。切れないやうにした刃。武道傳來記四「差したる刀脇指を見れば、双引にして目釘竹を外しおき」

はびせせり 灰をいぢること。灰を弄ぶこと。火なぶり。

はひて 這出。田舎から出たばかりの者。新參。山出し。織留五「つかひ盛り這出が、口の世で置いてくだされませいと詫言いふべし」。薩摩歌上「跡を濁さぬ水の面、這出の蛙二合半」

ばひとりがち 奪取勝。うばひ取るを勝ちとすること。我れがちのうばひ合ひ。松風村雨東帶鑑四「夫婦見つけて嬉しさの、奪取勝の我袖に、残る匂ひの松茸の」

はひはらひ はへはらひ(蠅拂)の訛。ほつす(拂子)。蠅を拂ふのに用ひるのでいふ。

はひびやくしん 這柏横。びやくしん(檜柏)の變種。地上を這ふのでいふ。

はひぶき はひぶきはふ(灰吹法)の略。銀分を含んでゐる鈴の中から銀を採取する法。骨灰を底とした爐中に強風を

送つて吹きわけるのでいふ。薩摩歌上「黒印うつて私儀は、銀座にながく使はれ、かご乗物のはい灰吹き、京者の正じん」

はひよせ 灰奇。「はいよせ」を見よ。一代女三「待夜参りの更けるを待ちかね、灰よせの曙も別れと思へば」。重井簡中「サア房様の灰寄せじや」

はぶくら 矢の羽の所の稱。矢に短い羽。蟬丸三「誰が刈積みし稻村に、羽ぶくら込めてずばと立ち」

はぶしにだす 商節は商の根のある部分。口外する。商節は商の根のある部分。はぐき。

はぶし 羽伏。相撲の語。双方が共に倒れること。同體になつてまろぶこと。

ばふせう 乏少。些少。輕少。松風村雨東帶鑑二「悦び入つたる心さし、乏少なから御酒一つ」

はぶづ 法圖。方途。はうづ(方圖)に同じ。傾城酒吞童子四「御所車一輛買ふてくれ、乗つて歩こと法圖もなき」

はふりこ 祝子。(古語)神職。はふり。生玉心中上「祝子宮奴棒つき散らし」

はま (拳けん)の語。八のこと。(圍碁碁)の用語。あげいし。敵の石を圍んで

は

取つたもの。濱のまさごの意であるといふ。國性爺四「敵のはまを拾ひあげ」。

④濱。大阪方言で河岸(かし)のこと。冥途飛脚中「大阪の濱に立つても、こなさん一人は養うて、男に愛き目かけまゐもの」。

はまがは 濱側。濱に沿つた側。大阪方言で河の縁の方。河岸がは。堀の岸邊。重井筒下「名残つきせぬ濱側の、此處は竹田か夜は何時ぞ」。

はまぐりこ ①蛤に同じ。②蛤粉。蛤の貝を砕いて粉にしたもの。

蛤にじる 沙干に蛤をあさる。足で踏み、又棒の先でつゝいて、蛤のありかをさぐる(攝津方言)。茶花咄三「川端に蛤にち(じ)りて、据腰ふなつき」。「はまぐりふむ」も同意。

蛤て海をかへる (謔)到底不可能なこと。譬。蜆貝て海を測るともいふ。

はましばる 濱芝居。大阪で濱(河岸)に沿へて掛け物小屋。大下馬四「萬の濱芝居まで休みて物の淋しき夜」。一代女五「八橋の吉と濱芝居の千歳老、不斷眠れど見よきもの」。

はませせり 濱邊をあさること。特に、大阪で河岸の納屋のあたりに出没する

密賣婦を買ふこと。次條及び「濱に立つ」一條参照。夕霧阿波鳴渡中「長屋へ比丘尼引入れ、日が暮れると濱せせり」。

はまなや 濱納屋。大阪で、河岸に造つた納屋をいふ。河岸藏。五十年忌歌念佛上「男とをな子と喧嘩して、濱納屋の下で、組んづ轉んづしてゐたを」。二枚繪草紙上「くら屋へ下り、後には濱の納屋のかげ、一本立にて候」。

はまにかい 濱二階。濱側にある家の二階。濱にのぞんだ二階。

濱に立つ 大阪で、濱側に立つて淫賣することにいふ。惣嫁のかせきをする。

はまなや(濱納屋)の條参照。冥途飛脚中「宮島へも身を仕切り、大阪の濱に立つても、こな様一人は養うて、男に愛き目かけまゐもの」。

濱の宮 出雲の海岸にある。槍權三上「遊に出でし濱の宮、鳥居通りの流鏑馬馬場」。

はまやき 濱焼。料理法の一。魚類などを鹽で蒸し焼きにしたもの。もと濱の鹽竈の火氣で焼いた物であるといふ。永代藏六「椀家具の音伏見までひびき、濱焼のかをり橋本葛葉にかよひ」。國性爺三「豚のこくせう、羊の濱焼、牛の蒲

鉾」。一代男一「少し酒などはれより給べましてといふもいやらしく(中略)、無下に捨て難く、戴けば、濱焼の中段を不束に挟みて抑へまするといふ」。

はまゆみ 破魔弓。はま(藁で圓座のやうに丸く組んだもの)を射るに用ひる弓。正月の戯れに、この弓で、小高い所から投げまらばす「はま」を射ることが行はれた。細長い板に弓矢を飾り付けて、その下に武者人形などを押繪にして正月の贈物に用ひるのは後のことである。一代男六「羽根・羽子板・破魔弓、玉光りをかざり」。

はまり はまること。おぼれること。女色に迷ふこと。又、そのために失敗すること。手ぬかり。大矢数上「情強(じやうごは)にいひ懸つてはおはまりじや、勤の外のかね捨てうなら」。五人女二「さらにおせん殿に心をかくるにはあらず、只信心の思ひ立(中略)と、我が物にして行くは久七がはまり也」。

はまる ①陥る。おぼれる。②色に迷ひ耽る。新小夜嵐物語上「大阪に通ひ馴れて五年立たぬに二百三十貫目(中略)、是程迄はよくも耽(はま)りける物ぞ」。

③欺かれる。一杯くはされる。松風村

五〇四

雨束帯鑑三「葎丸といふ大悪人、必ずいづれも拵るまい」。薩摩歌上「尤も氣のつく管もなく、妾やはまつたは是非もなや」

**はまをんな** 濱女。濱への女。船つきばなどで春を賣る女。總嫁。

**はみかへる** 食返。一旦言つたことに背いて、もとの通りに言動する。もとの悪性にかへる。天網島中「本人間の上々と、聞けばあとからはみ返る、そもいかなる病ぞや」

**はみだし** 食出。次條の略。女腹切上「二口屋のはみだし、猪熊の革づか、なぜに遅い」

**はみだしつば** 食出鏝。鏝の一種。鞘及び柄の上に少し食みだしたやうになつたもの、短刀のこしらへ方にいふ。夕霧阿波鳴渡上「今日の寒さを喰ひしばる、食出し鏝も神さびて」

**はむ** 鱧。はも。萬年草上「豆腐や薬弱を鯛やはむじやと思ふて喰へ」

**はめだて** 嵌立。おとし入れようとすること。欺罔をたくらむこと。萬年草中「京の者をはめだてしたら、返報を喰はふ」

**はもじさ** 恥しき。最明寺殿百人上臈下

は

「この月帯の御祝儀と、言のはもじさつつましき、袖かき合せ着座ある」

**はものずき** 双物好。はものごのみ。双物のえりごのみすること。女腹切上「いはれぬ猪瀬が齒も立たぬ、双物ずきして高知行の、高木殿と張合うて人中で恥辱うけ」

**はやうち** 早打。馬などを早く走らせて急用に使うこと。又、その使者。早飛脚。最明寺殿百人上臈下「晝夜の早打際もなく、近國残らず觸れにけり」

**はやうるし** 早漆。採りたての漆か。兩吟一日千句「すみよしの月落ちかゝるみがき砂、はやうるしにて其白菊を、山人の袖ぬぎかけて灸のあと」

**はやおひ** 早追。晝夜兼行で駕籠又は馬などを急がせること。急行の乗物。碁盤太平記「こちは相州の馬方、三條堀川まで早追の通しに來ました」

**はやかご** 早駕籠。いそぎの駕籠。はやおひの駕籠。

**早駕籠の兩** 早駕籠の兩方の御籠。萬文反古三「兩風もなき日和に、早駕籠の兩をおろし」

**はやかはおり** 早川織。早川主馬といふ人、常に色のよいふんどしを用ひてゐる

たので、赤ふんどしを「早川」と稱したといふ(嬉遊笑覽)が、それと縁ある語

か。赤色の縞織などをいふか。一代女五「顔に白粉絶えて、早川織にそぎゑりを掛け」

**はやし** 囃子。能樂芝居その他演藝に伴ふ音楽の稱。特に能樂の笛・太鼓・大鼓つみ・小鼓つみをいふ。一代男「一鼓も優れて興あれども(中略)、囃子に一倍、三百目の借手形」。織留三「能はやし亂れ道成寺まで傳受して」

**はやずし** 早鮎。いちやずし(一夜鮎)。一夜のうちに製した鮎。なまなり。二代男七「鯉は絲作り、焼卵、早鮎、毎日自由を調へ」

**はやぢやうちん** 早提燈。早く走り行く人の提燈。急飛脚の提燈など。丹波與作下「あれくあれへ見へる早提灯、走り飛脚と覺えたり」

**はやてぶね** 疾風船。疾風に追はれて走る船。

**早納の和布刈(めかり)** 豊前國早納明神の神事。十二月大晦日の子の刻頃に、社人が寶劍を奉じ松明を持つて社前の石段を降りて行くと、海水が左右に分れる。その間に海底の和布を一鎌刈つ

は

て歸り、翌朝神前に供へるといふ儀式。胸算用<sup>四</sup>「津國西の宮の居籠り、豊前國早鞆の和布刈」。長門國の和布刈社と同じに行ふこと。

はやなは 早繩。(一)人を捕へて縛る繩。とりなは。(二)たちのを(太刀緒)。二代

男三「獅子の目貫、早繩一條」

はやびきやく 早飛脚。定めの外に、特に差し立てて急がせる飛脚。大句數上

「早飛脚とぶが如くにあがり口」。出世瀧徳下「御吉左右の早飛脚いきり切つて案内す」

速日の岸 日向國の名所、速日の海岸。陸摩歌下「舟も潮も引く方に、下り行く濱ははや日のきし」

はやみち 早道。逸道。又、巾着のこと。錢入。

はやめぐすり 早藥。出産を催し早めるための藥。虎溪橋「はやめ藥今で御座るぞこしの山、親類中へ雪をめぐらす」

はやものがたり 早物語。即興談。輕口などの意か。胸算用<sup>四</sup>「世間の色話、小唄、淨瑠璃、はや物語、謠に舞に役者の眞似」

はやゆり 早百合。早く花の咲く百合。又、その花。

はやりねんぶつ 時花念佛。空也念佛の類か。櫻陰比事ニ「昔都の町に時花念佛

嵯峨の安樂坊とて聲細長う節を付けて常とは格別、世界の人心後生の益となりぬ」。はちたなき(鉢叩)の條参照。

はやを 早緒。船具。櫓につける綱。又、車などにつけて引く綱。二代男二「車の早緒といふものを繩にかけて」

はやをけ 早桶。死體を入れる下等の棺桶。大下馬三「火葬を見るに、早桶薪の外へこけて」。櫻陰比事ニ「此脇指は早桶に入れしを」

はらおびのぢさう 腹帯の地藏。女が腹帯をする時、安産を祈る地藏尊。子安地藏。

はらおびのみやうじん 腹帯の明神。女が着帯の時、安産を祈る明神。子安の明神。

ばらけがみ ばらばらな髪。振りみだしである髪。結はずにおく髪。

はらすぢ 腹筋。腹筋をよつて笑ふべきこと。をかしなさまにいふ。槍權三下「甚平からく」と笑ひ、ア、腹筋な」

傾城酒吞童子「大聲あげてからく」と笑ひ、やれ腹筋や腹の皮、鬼の腕を切つたるが何程の高名ぞ」

はらすぢせんばん 腹筋千萬。笑ふべきことのかぎり。をかしくてたまらぬこと。百日曾我四「イヤしやらくさし腹筋

千萬、三度の高名を珍しさうに何事ぞ」腹筋をよる 甚しく笑ふ。をかしさに笑ひきれないほどのさまにいふ。腹の皮をよる。

はらそうぎやてい 婆羅僧揚謠。眞言陀羅尼の文句。萬年草中「讀んで婆羅僧揚謠を立て」

はらのかは 腹の皮。笑ふべきこと。はらすぢ(腹筋)に同じ。

腹は貸物(諺)「腹は借物」ともいふ。母親の腹は、父又は子に貸したものであり、父又は子の借りたものである。生まれ子は母の身分にあまり關係がないとの譬。武道傳來記ハ「此子も我腹は貸物と、そのまゝ刺殺し」

ばらばらどり 曉に鳴きたつ鶏をいふ。又、その聲。藍染川ニ「まだ短夜のばらばらどりしのゝめ近くなり行けど」。主馬判官盛久ニ「いさむる涙はらばら」はらばらどりの聲をへて、夜はしらばらとあけぼの」

はらはれ 腹はれ。腹のはれふくれてゐるもの。金持を嘲つていふ。胸算用ニ

「中京の分限者の腹はれどもが、因果と若死しける」

**はらみく** 孕句。連歌俳諧などで、豫め腹案をしておいた句。百日曾我「ひよつと變るなかはらじの、其言の葉ではらみ句や、連歌師の山様」

**はらみつげ** 婆羅密花。婆羅密樹に咲く花。

**はらもんくりげ** 婆羅門栗毛。栗毛の駒の馱しがたいのを戯れて呼ぶ。曾我會稽山「外道月毛婆羅門栗毛これへこれ（中略）、婆羅門栗毛の口によれば跳ねあがり」

**はらや** 水銀粉。いせおしろい（伊勢白粉）のこと。水銀に明礬鹽を和して製した薬品を原料としてつくるもの。はおしろい。胸算用「はらや一箱、折本の曆、正眞の青苔五把」

**はらやぐら** 腹櫓。相撲の手の名。相手を腹の上に吊りあげて運び出すもの。  
**はらやばこ** 水銀粉箱。「はらや」を入れた箱。二代男「鏡臺一つ流れ寄るを、引出だしゆかしく見るに、はらや箱に玉蟲、盆前の書出しども」

**はらりしやん** きれいさつぱりとしたさま。女腹切中「かたりめが挨拶はらりし

やんと切つてしまひ、年切増して奉公するか」

**ばら**を 散緒。幾筋かの細い緒をより合せて作つた鼻緒。一代男「佛神に詣でけるにも置綿、ばら緒の雪踏音高く」。俗つれ、四「ばら緒の草履」

**腹を**いる 腹を癒す。腹いせをする。鬱憤をはらす。女腹切上「目の前へ連れていて、敲き殺して腹をいる。サアうせぬか」

**はり** 張。①張りひらいてゐること。そのさま。一代男七「顔にあいきやう、目のはりつよく」。②いきぢ。いぢ。氣の緊張してゐること。一代男六「京の女郎に江戸の張をもたせ、大阪の揚屋であはば、此上何かあるべし」。天網島中「ちと目をあいて氣にはりを持ちや」

**はりあひ** 張合。張りあふこと。意地を張つて競争すること。天網島上「この男が女房に持つか、紙屋治兵衛が請出すか、張合の女郎」

**はりあひにんぎやう** 張合人形。玩具の一種。兩手又は兩足などの重みを同様

に作り、中央を一點で支へて平均を保たしめるやうにした人形。つりあひ人形。彌次郎兵衛。水波人形。正直正兵衛。

**はりうなぎ** 針鰻。大句數上「時ならぬ汗水流す針鰻、適（たま）の御出に豆腐さへなし」

**はりかご** 張籠。布、紙などを張つた籠。  
**はりがさ** 張笠。ぬりがさ（塗笠）の類であらう。僧などの冠るもの。懷硯「張笠の上に音なして降り續きたる五月雨」

**はりかた** 張形。陰莖又は女陰の形につくつたもの。

**はりくち** 針口。天秤ばかりの名所。天秤（衡）の中央、支柱の上部、平均を示す針のある所。又、分銅（おもり）に對して、俗にその天秤をいふ。和漢三才圖會「天平、今云針口。法馬、今云分銅」。榮花咄「利銀請取る針口の音、賤しき物ながら」。永代藏五「町人は算用こまかに、針口の遣はぬやう」

**はりこかす** はり倒す。なぐつて轉はす。曾我會稽山五「四つ五つはりこかし、羽搔締に引つくり」

**はりごくら** 張較。はりつくら。なぐりくらべ。互に打ちあふこと。百日曾我「はりごくら踏みごくらは、此膝骨のくだくるまで」

はりすぢ 針筋。針で縫つたあと。ぬひ

め。

はりたて 針立。鍼を立てて療治すること。

又、それを業とする人。鍼醫。男

色大鑑セ「針立の張紙しても呼ぶ人な

く」

はりて 針手。針を使ふ手。縫ひ仕事。

又、縫ふわざの巧みな人。大句敷上」に

しきの袋八重のしほ海、磯馴松針手の

うごく風の音」

はりてきき 針手利。縫ひ仕事の上手で、

達者なこと。又、その人。

はりりんぎやう 張人形。はりあひにん

ぎやう(張合人形)の略であらう。物種

集上「さとり道の道にかぶりふらるゝ、黄

金のはだへこまかな張人形」

はりぬき 張抜。型へ紙を重ねて貼つて、

糊の乾いた後、その型を抜いて作つた

もの。はりこ。

はりひぢ 張臂。手を懐へ入れて臂を左

右へ張つてゐること。遊女などのする

姿にいふ。

はりまくら 張枕。紙で張つた枕。大句

敷上「夕ぐれは風の通ふ張まくら、松に

ねぐらの鳥も出逢屋」

はりまなげ 相撲の四十八手の一。相手

の身體の片側に両手をまはして、その

禪を取つて投げるもの。雪女五枚羽子

板下「樽にかけてはりまなげ、あぐる剛

扇やあぶぎの芝に」

はりまぶし 播磨節。淨瑠璃節の一派。

寛文の頃、井上播磨掾が創めたもの、

晝夜用心記「あちらには出羽播磨ぶ

し、こなたには加賀掾、角太夫ぶし」

はりもの 張物。見えを張るもの。人前

をつくるふことにいふ。永代藏五「人の

内證は張物、大晦日の提灯おそろしく」

はりりん 擬聲語。槍權三上「響の音はは

りりん、泥障の音はばた、り、り」

針を藏に積む(諺)いくら多くあつて

も足りないとの譬。榮花咄「それが心

に叶ふ様に勤めて取らせなば、針を藏

に積みてもつゞく事にあらず。永代藏

五「いつとなく懸にほころび、針を藏に

積みてもたまらず」

はるなが 春永。春の日の永いこと。永

日。

はるなぐさみ 春慰。春の慰み。特に初

春の遊びごと。正月の慰みごと。五人

女「正月廿二日の夜、戀は引手の寶引

繩、女子の春なぐさみ、ふけゆくまで

取りみだれて」

はれい はれ(晴)の訛。出世景清「やあ

是なる下郎めは、かゝるはれいの庭な

るに、頬かぶりは緩急なり、色代せよ」

はれきぬ 晴衣。はれき(晴着)に同じ。

はれこそて 晴小袖。晴著の小袖。

はれどころ 晴所。晴れの場。人前の晴

晴しい場所。

はれやれ(感動詞)はてさて。やれ、

さて。さあ。五十年忌歌念佛

上「はれやれ、大膽な、暮れるまで大

阪の町をぶら、と、女の身にて何事

ぞ。丹波與作上「はれやれ、り、り、き

り、り、乗らつしやれ、馬やろい」

はんあんじん 潘安仁。晋に仕へて中書

令に至る。張文成の「遊仙窟」に、そ

の才學姿色を稱へてゐる。傾城酒吞童

子「艶かなる御形、潘安仁が母方の甥

にも譬ふべかんめれ」

はんがい 半兒。兩掛葛籠(つづら)の片

方。衣類など入れる行李。丹波與作中

「夏の物ははんがいに襦袢が一枚なさ

さうな」

はんかう 半頭。半髪。「はんがみ」の音

便。頭髮を後半分だけ剃り残したもの。

奴あたまの中程まで剃り、後方を残し

ておくこと。

はんかうびたひ 半頭額。半頭に刺つた額つき。

はんがく 板額。城資國の女。強力無雙、殊に射術を善くした勇婦。甥資盛のために頼家の將佐々木盛綱と戦ひ武功を立てたが、遂に捕へられて鎌倉に致された。後、淺利與市義遠の妻となる。

ばんがしら 番頭。武家の番衆の長。隊長。江戸幕府には大番頭・書院番頭・小姓番頭などあつたが、諸侯にもこれに準じたものがあつた。堀川波鼓申「我は是より番頭へ訴へ、御暇申し捨て」。丹波興作上「御家中にて番頭伊達の興作」

はんぎおし 板木押。阪木で押して刷つたもの。一代男「押繪を見れば、花かたげて吉野参りの人形、板木押の弘法大師」

はんきち 半きち。半吉か。又、半きちがひの略か。大矢數「泣いて見たり笑うて見たり夜は明けて、時の鼓をならす半きち」

はんきゆう 半弓。大弓の半分ほどの長さの弓。二代男「楨骨の障子、綿繰、半弓、割松など買物して」

はんぎり 半切。底の淺い、盥のやうな形の桶。はんきりをけ。半桶。盤切。

は

胸算用五「半切に移し並べたる蕃椒」

はんきゐ 半季居。半季奉公をしてゐること。一年を一季といふに對して半年を半季といふ。半年居ることに定めた奉公。又、その奉公人。一代男「機織る女さへ給分の積りあり、爰は半季居の稀なる所かと申せば」

はんくわん 盤桓。進みがたいさま。ためらふさま。「撫孤松」以盤桓「歸去來辭」。孕常盤「人に心を付顔に、戻られもせず盤桓と、編笠傾けおはせしに」はんげ 半夏。「からすびしやく」の異名。夏季花を開く。根を藥用とする草。薩摩歌上「我等は川苧持おなじ所に當歸まで、半夏くと季をかさね」

はんげさう 半夏草。かたしるぐさ（三白草）の異名。夏季、淡黄色の花を開く。はんげしやう。日本振袖始五「芙蓉林檎、長春、半夏草」

はんげしやう 半夏生。曆の詞。夏至から十一日目にあたる日。農家で田植の終期とする。戀八卦柱下「顔にはいつの半夏生、縛られし手の冷さは、我が身一つの寒の入り」

はんげつ 半月。半月の形したものにいふ。半月形の兜の前立。陣立を半月の

形にすること。又、馬で川を渡すさま。最明寺殿百人上臈と「のだめがたに突流され、半月に乗る處もあり」

はんこわう 盤古玉。支那太古の天子と傳へられる。或は盤固。述異記「盤古氏、夫婦陰陽之始也、天地萬物之祖也」

はんごんかう 反魂香。漢の孝武帝が李夫人の亡魂を呼び反さうと欲して、方士に作らせた香。これを焼けば、煙の中に姿が現はれるといふ。二代男七「反魂香を焼きて、世になき姿を見し事、本朝にも相州の阿和手の森にて例あり」。傾城反魂香中「今麴香に立つ煙、反魂香と煙ゆるかや」

はんごんじゆ 反魂樹。前條反魂香を香木と考へて稱する。松風村雨東帶鑑「梅檀木や反魂樹、常磐の森の初紅葉」

ばんじき 盤涉。十二律の一。盤涉調。鏗字（ばんじ）の明。鏗字は眞言密教で、金剛界の大日如來の本體を現はす梵字の發音、バン（Vam）を示す。明（みやう）は眞言といふに同じ。

ばんしやう 番匠。大工の稱。もと、大和・飛騨などから京都へ上つて勤番した大工のことであつた。永代藏「都よりあまたの番匠をまねきて、寶塔を建

立」

**ばんじやう** 盤上。盤の上。又、盤の上とする遊び。碁將棋・雙六などの稱。五十年忌歌念佛下「茶の湯、盤上、打唯し、男の藝に一つでも」

**はんしやうぞく** 半装束。數珠にいふ稱。片方の五十四顆の珠を水晶で、他の片方を木珠で作つた數珠。孕常盤「大事の數珠、勿體なくも氣にかゝる。水晶と琥珀と半装束の紫房」

**ばんしやうばこ** 番匠箱。番匠の道具箱。大工の道具入。出世景清「番匠箱をおしひらき、大鑿小鑿手斧鋸鉋、屈竟一の手裏劍と」

**ばんしゆ** 番衆。番をする人々。椀久一世物語上「くちなし色の物を遣らぬ番衆なれば、開けぬもことわり」。武家の職名。殿中・營所に當直・勤番する者。ばんしゆう。番方。源氏冷泉節下「日は五十人夜は百人の番衆をつけ」

**ばんしよ** 番所。番人の詰所。見張所。二代男五「人を殺しに參りけるもの、只はおかじ番所へ御斷り申す」

**はんする** 半帥。なま半可な粹。なまなか粹人ぶること。ほんする(本帥)に對する語。榮花咄五「遣はぬ先から半帥に

なつて、同じ捨てる銀も譯よく捌きける」

**ばんた** 番太。自身番に使はれてゐる者。番太郎。胸算用四「おのれが父は、町の番太をした奴ぢや」。出世瀧徳上「辻の番太が夢くらふ、ばくろう町」

**はんぢよ** 班女。はんによ。班婕妤のこと。漢の成帝の寵妃、後、趙飛燕のために成帝の愛を奪はれ、空閑に怨恨した。二枚繪草紙上「通ひ路遠き獨居の、はんぢよが閨の淋しさは」

**ばんつづら** 番葛籠。番人の寢道具など入れる粗末な葛籠。  
**はんで** 番手。陣立に於て、部署を定めた隊伍をいふ。それらの組。百日曾我「仰せきびしき御狩場の、番手々々の槍印」。番をきめて物をする事。かはりばん。順番。五人女三「蚊帳に入り給へば(中略)、寝入り給ふまで、番手に剛扇の風靜なり」

**はんでふ** 半疊。芝居小屋で、賃錢を取つて觀客の數物に貸す一人分の小さい疊又は蔦蓆。新小夜嵐物語上「札錢二十四文、半疊の錢五文、煙草火繩三文」

**ばんとう** 番頭。ばんがしら(番頭)に同じ。釋迦如來誕生會三「弓手馬手に取

罔み、番頭(ばんとう)大音上げ」

**ばんどう** 八のこと。駕鼻などの用ひる隠語。日本西玉母三「だり。ばんどう、いつかのがれんきりがれん駕やろい」

**はんどく** 榮特。釋迦の弟子。周利榮特の略。性闇愚で法門を解せず、殆ど度しがたい程であつたが、釋尊の善巧方便で遂に證果を得たといふ。古來愚人の例とされる。大矢數二「今我をれ目に見ぬ富樓那大矢數、木の下闇は愚癡の榮特」。次條參照。

**榮特が愚痴も文殊が智慧** (諺) 愚痴なものも正直にして道に違はなければ、智慧ある者と同じであるとの譬。釋迦如來誕生會三「智慧に進まず愚を捨てず、正直自然は秤のおもり(中略)、りんも違はぬ天の道、誠を以て身の寶、扱こそ末世の譬へ草、榮特が愚痴も文殊が智慧、終に羅漢の果を得たり」

**はんなり** はなやか、はれく〜などの意。今宮心中上「釜もちやく〜あちや橋、跡へはんなり入花の、茶びんど橋はこち〜と」

**はんによ** 「はんぢよ」を見よ。  
**ばんのういつしん** 萬能一心。諺に「萬能足りて一心足らず」といふに據つた



語。

**ばんばん** 盤盤。まはりくねるさま。うねく〜と續くさま。卯月潤色中「去此不遠の水を荷ひ、盤々たる山路に薪を拾ひては」

**ばんばん** 番番。聲に勢あるさま。松風村雨束帶鑑「番々たる大音上、我を誰かと思ふ」

**はんびつ** 半櫃。長持の小さいもの。衣類など入れるに用ひる。五十年忌歌念佛中「半櫃・箆筒昇出させ、ぐはらりぐはらりと打明けて衣類引出し」。懷硯「宿より半櫃を取寄せ、これに納め」。

兩吟一日千句「奈良の小川や放下師の種、半櫃の鎖をせよつてねぢけ人」

**はんぶ** 半ぶ。遊女の名であるといふ。又「笑ふ女」に「はんぶ」。山形にて私娼をいふと何かの書にて見たり。廢語か現行語かも知らず。(中略)、隱語輯覽には「はんぼ」とあり、それと關係ある語か。傾城酒呑童子四「髭籠に籠めし祇園坊、半ぶ御鼠舁も引き方」

**はんまちどり** はまちどり(濱千鳥)の訛  
出世瀧徳上「横の鳥、はんま千鳥も友を呼ぶ」

**はんめう** 斑猫。毒蟲の名。昆蟲類の中、

鞘翅類に屬する。體は細長くて綠色。季節によつて五たび變化する。發泡劑に用ひられるといふ。武道傳來記「或時菓子に斑猫の大毒を仕込みて」。王不留行蟲。葛花亭長。斑蝥。地膽。

**はんや** 半夜。遊女の一種。京都烏原の遊女、かこひ(闇、又は鹿戀など)が、晝夜に分つて客をとつて稼ぐのをいふ。はんやをんな。色道大鏡「半夜。圍職の女を晝夜にわけたるものなりされども圍職の傾城を分けて賣るにはあらず、外に半夜女あり、兼約する時は圍職のなみなり」

**はんや** 掛聲の一。松風村雨束帶鑑五「綾が千反錦が千反、唐物を積みたよへてはんや、ハツアコリヤ〜」

**はんやざる** 半夜猿。半夜と猿とであらう。何れも下等のあそび女である。西鶴五百韻「世をわたる業はさま〜はんや猿、すりには訴人月に群雲」



(左) はんや

# ひ

**ひあひ** 火相。防火の用意。火の用心。織留五「身過ぎをする人は(中略)、女家主小袖を着ること勿れ、内蔵火相よく念を入れ、つらがまへの賢き男猫一定飼ふべし」

**ひい** 鳥鹿などの鳴く音、又、笛の擬聲語。雪女五枚羽子板上「代々に聞ふる笛の音の、ひいや兵亂治りて」

**びいどろ** 硝子。葡萄牙語(Vidro)の訛。がらす。二代男三「呑懸け引懸け、硝子(びいどろ)與平次が、不調子の小唄」

**ひうち** 火打。紙衣にいふ。袖附の下部、即ち八口(やつくち)の所に、別にあてて貼つた三角形の紙。夕霧阿波鳴渡上「紙衣の火打、膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草」。傾城反魂香上「身代はうすき紙子の火打箱」

**ひうち** 日裏。日かげ。日のあたらぬ所。精進館「墨夜著目裏の水紋きえて、油こぼせば鯨うく浪」

**ひえいさんの二十一社** 比叡山に屬する日吉山王の末社が、上七社・中七社・下

七社に分れてゐたのでいふ。油地獄中「熱病さまし冷すには比叡山の二十一社」

**ひがいす** 厄弱。きやしやで、弱々しいさま。ひがやす。曾根崎心中「あのひがいな小男を、おのれが大きな鉄平で、ようも〜踏みこたな」

**ひかき** 火搔。①火をかき出す具。②十能(じふのう)。火とり。火斗。薩摩歌中「火搔がすぐに塵取」

**ひがきづくり** 檜垣作。船の造り方の一。檜垣船の作り。團(かこひ)を檜垣にした荷船をいふ。博多小女郎上「沖に何待つ檜垣作り、十四五端の廻船に、船頭水夫は襦袢着て」

**非學者、論に負けず** (諺) 無學な者は、亂暴な議論をして、却て道理のある人に負けない。

**ひがしぐち** 東口。大阪新町の廓にいふ。東の出口。西口に對する語。出世瀧徳上「土か砂場の西口や(中略)、霞が關か東口、爰ぞ浮世をだての大木戸」

**ひがしじろ** 東白。夜のあけ方、東雲の白むこと。又、その空。  
**ひがしふさがり** 東塞。陰陽家のいふ、東の「方塞がり」のこと。下文は、金に

困つた半七が、東方にある遊女屋に出かけることが出来ないのをいふ。女腹切中「半七といふ職人の弟子、爰らあたりの拂ひさへ時あかず、東ふさがりになつた者、打ちみしやいでも粒三文ないは知つてゐる」

**ひがしもん**と 東門徒。東本願寺派に屬する門徒。懷硯三「持佛に勤めなす有様東門徒の名號、いと殊勝に拜まされる」

**ひかしやか** びらしやらと、いや味ある言動を形容する語。今宮心中中「傍へ寄ればひかしやかと拗言の有るじやう(中略)。ア、いやらしい〜」

**ひかしやかぶる** びかしやかする。いゝ氣になつてびらしやらす。薩摩歌上「よい男さへ稀なれば、すこしよめなる女房のびかしやかぶるはとがならず」

**火が降る** (諺) 極めて貧しいさまにいふ。一代男三「内證は提燈ほどな火が降つて、大晦日の空おそろしく、萬懸帳埒明かず屋の世之介。尙、「提灯ほどな火が降る」を見よ。

**ひかへ** 控。生花の語。傾城反魂香上「たれて雪見のひかへの枝、是々これ〜、ずつと伸びたるながしの枝。孕常盤」

「笑顔計りの梅櫻、流し控への睨みあひ

心には中の思ひかや」  
**ひかへづな** 控綱。神佛の冥護に譬へていふ。神佛が目に見えぬ陰に控へて助けの綱を持つて居給ふといふ心。又は氷の朝日下「神や佛の控綱、のばす命と知らばこそ」

**ひがみなり** 火神鳴。雷神に、火神鳴と水神鳴とあるものと假想していふ語。日照りをさせるといふ雷火。大下馬二「一つの大鼓鳴り黒雲舞ひ下つて、赤禪をかきたたる火神鳴の來て、里人に申す」

「みづがみなり」の條參照。  
**ひがやす** 厄弱。「ひがいす」に同じ。卯月紅葉上「さあ、おのれ在所へ駕で送らせんと、ひがやすな與兵衛を引立て駕に押込めば」

**ひがらめ** 瞞眼。やぶにらみ。すがめ。斜視。又、その人。

**ひかりもの** 光物。①光を放つて空中を飛ぶもの。流星。人魂。②金銀の稱。光る君 光源氏。源氏物語の主人公。出世瀧徳上「渡つた〜光る君の渡つた、

夢の浮橋六十帖を渡り詰め」  
**ひきあふぎ** 引扇。舞の詞。ひく手の時の扇づかひ。

**ひきいれ** 引入。①元服の時に冠を被ら

せること。又、その役。(⇒仲間)に引き  
いれること。おびき入れること。國性  
爺「天下悉く李路天が引入にて、驢  
夷の奴と成り」

ひきうま 引馬。貴人の外出の時に、飾  
り立てて鞍覆をかけて引き行く馬。雪  
女五枚羽子板申「引馬・乗馬徒士ざぶら  
ひ七つ道具を押立て」  
ひきおしろひ 引白粉。白粉を塗ること。  
塗つた白粉。

ひきおひ 引負。身に引きうける損。人  
に代つて商賣を試みて、その損失が自  
分の負擔になること。又、負債。永代  
藏「大氣にして主人に損かけぬ程  
の者は、よき商賣をもして取り過しの  
引負をも埋むること早し」。懷硯五「折  
角舞に入れ、一年経たぬに引負、合七  
十貫目」

ひきがき 曳柿。布などに柿の澁を引く  
こと。「引柿する」

ひきかく 引懸く。酒などを勢よく飲む。  
一代男八「一輛には、樽・折・重・肴(中  
略)、出口の門より、はや引懸け飲懸  
け」。二代男三「呑懸け引懸け、硝子與  
平次」

ひきかへし 引返し。衣服の裾まはしに、

表の地と同じ布を用ひること。一代男  
三「十五六なる少人の、との茶小紋の引  
かへし」

ひきぎ 扱木。碾臼(ひきうす)を廻すた  
めに附けた肘のやうな柄。背庚申上「茶  
扱、茶道は扱木にもまる」  
ひきぐち 引口。語つてみた話を止める  
拍子、その止めぎは、などの意か。又、  
その語る話の縁などの義か。一代女二  
「嘉太夫ぶしのなつむ所を語り消して、  
其引口にお前様はどれ様におあひなさ  
れます(中略)といふ」

ひきげた 引下駄。引きずり穿く下駄の  
義。駒下駄。ひきずり。一代男三「赤前  
垂して桐の引下駄をはきて」  
ひきごと 引言。引事。古言故事などを  
引用して説き、文をかざること。

ひきごま 引獨樂。引きよせるやうにし  
て廻す獨樂。松風村雨東帯饅頭「袖のう  
ちなる引獨樂は、よそに漏さぬたまづ  
き獨樂」  
ひきしくかうめ 引四九高目。男色大饅  
頭「苦假尊の片庇の内には松火あかして  
聲をひそめ、引四九高目の祝と物なげ  
る音何事かはしらず」

ひきずみ 引墨。眉を刺つた跡に墨を引

くこと。又、その引いた墨。雪女五枚  
羽子板申「眉のひきずみ男まゆ、おはぐ  
ろ落すみがき砂」

ひきだりう 疋田流。(⇒ひきたかげりう  
(疋田陰流)の略。劍道の一派。天正・文  
祿の頃、神影流の祖上泉伊勢守の高弟、  
疋田文五郎景兼の創めたもの。武道傳  
來記六「何の何某は疋田流の兵法、馬は  
大窪が印可」。(⇒槍術の流儀の一。同  
上、疋田文五郎の創めたもの。

ひきちゆうばこ 引重箱。引物を入れる  
重箱。

ひきはだ 皺皮。蓑皮。(⇒蓑の背のやう  
な皺のある皮。ひきはだがは。(⇒ひき  
はだのやうな皺のあるもの。しぼみの  
あるもの。下例は足袋にいふ。永代藏  
三「皺皮取りすて新しき足袋草履、糞撫  
でつけて」

ひきび 引日。廓の詞。遊女が身あがり  
(費用自辨)して休む日。女郎が自分の  
都合で勤めを引いて休む日。二枚繪草  
紙と「或は紋日をかづかせ、ひき日の立  
前あとから剥げる禿頭」。又は氷の朔日  
上「ひき日の何のと、てつきり七兩は入  
りやせう。私の方で二兩二分は身の皮  
剥いでも調へましよ」

ひ

**ひきびき** 引引。古語で、おのが心の引くにまかせてすることをいふ。又、ひいきびいき(最良々々)。傾城反魂香中「お客衆のひき」で、柳原の法印さま、半井の御典薬」

**ひきふね** 引舟。廓詞。大夫に附添ふかこひ(鹿戀女郎)格の遊女。もと、京都鳥原、大阪新町で呼んだ語で、大夫を大船或は新艘などに見立て、それを引き行き、世話をする義であるといふ。好色由来揃「太夫揚錢五十八匁、外に引舟とて、きはまつて鹿戀女郎一人づつ連るゝ故、この代十八匁」。傾城反魂香中「買人のお身も廢らず、女郎ものぼさぬ様にて、舵を取るが引舟」

**ひきふねぢよろう** 引舟女郎。前條に同じ。織留「引舟女郎に髪撫で付けさせ、舟に足の裏をさすらせ」。置土産「引舟女郎の帯とき、髪のそこぬるもかまはず」

**ひきもちぎら** ひきもちぎら。ひつきりなく。絶えず續くさま。源氏冷泉節下「持槍・持弓・梓弓、引きもちぎらぬ行列」

**ひきやく** 飛脚。遠い處に急用の事を通ずる人夫。又、信書・金錢・貨物などの

送達を業としたもの。飛脚屋。かねひきやく(金飛脚)、さんどひきやく(三度飛脚)、飛脚船などの類語がある。**ひきやくや** 飛脚屋。前條に向じ。重井筒中「火廻し半ば(飛脚屋が、何も御用は御座りませぬか。ヤア房様、京へ上す銀もあり状もあるとの御事。遣はされませぬか、と問ひければ)」

**ひきやくやど** 飛脚宿。飛脚を泊らせる宿屋。又、飛脚を業とする家。冥途飛脚上「暮れるを待たず飛ぶ足の、飛脚宿の忙しさ、荷を造るやらほどくやら」**ひきよう** 羊興。遊女を買つて興ずること。遊興。俗つれ「五」和朝の遊女の色作つて金銀に賣る身と定めての以來この美興に銀つかひ頭の大匠」

**ひきわたし** 引渡。宴席の膳部にいふ語。本膳に盃を三つ添へたもの。一代男七「驛衆が引渡ししさま事過ぎて、はや限りある夜とて、床取りて」

**ひきわたす** 引渡。處刑にいふ語。斬罪以上の重刑者を、縛して馬に乗せ、紙幟に罪名を記して、見せしめに引廻すを「引廻し」といふ。その引廻しに行ふ。戀八卦柱曆中「今の間に召捕られ、洛中を引渡され」

**ひく** 撥く。最良にする。ひいきする。一代女「世上の取沙汰の時も身に替へてひくぞかし」**ひくうた** 比丘歌。歌比丘尼の歌ふ唄。**ひくに** 比丘尼。尼すがたの賣春婦の稱。浮世比丘尼、歌比丘尼なども稱した。その各條を見よ。

**ひくにごしよ** 比丘尼御所。皇女・王女、その他高貴の家の息女が出家して住持してゐる寺。百日曾我三「花山院、頭の中將頭の辨、俄同三司女三の宮、おびくに御所まで稼ぎか」**ひくにぶね** 比丘尼船。大阪川口で、歌比丘尼その他淨瑠璃・祭文などを語るものに乗せて、泊舟などの間を勧進する船。くわんじんぶね。二代男「この里の若き者ども、比丘尼船の仕出し、山伏舟、しらす海老賣るまね」**ひくにや** 比丘尼屋。賣色比丘尼を抱へておく家。ひくにやど。



(太丸)にくび

**ひくにん** びくに(比丘尼)の訛。夕霧阿

波鳴渡中「よい年をして、長屋へ比丘に  
ん引入れ」  
ひくひどり 火食鳥。走禽類の一種。ニユ  
ーギニアに産する。いしわり。かずわ  
る。永代藏五「火喰鳥の卵一つ判金一枚  
に買うて」

ひぐらし 日暮。(→わづかな生計で、そ  
の日だけを暮して行くこと。又、その  
人。二十不孝。「京なる日暮しの八百屋  
へ遣はし。(→うたねんぶつ(歌念佛)を  
唱へる者の姓のやうに用ひる語。ひぐ  
らしばう(日暮坊)。永代藏三「歌念佛の  
日暮しと云ふは、昔伏見の御上代の時、  
諸大名の御成門軒を並べてかがやき、  
金銀珠玉を鑲め(中略)この清らなるこ  
と言葉に述べがたし。彼の京の鉦たゝ  
き、孟蘭盆の比勸進にまはりしが、朝  
日影御成門にうつろひしに、これに氣  
を取られて詠めるに(中略)、實に秋  
の日のならひにて、はや暮れて驚き、  
(中略)あき袋かたげて都に歸るを見て  
人申しならはして日暮坊と、そのすゑ  
ず至今に名だかし。」「歌念佛」の條參  
照。

ひぐらしばう 日暮坊。前條の(→)を見よ。  
ひくわん 被官。大名小名に屬して、そ

の支配を受ける武士。孕常盤「鈴木  
三郎重家と申、平家の被官にて御座候」  
ひくん 美君。美しい貴婦人。美女の敬  
稱。新可笑記三「御寵愛の宮女に曉の小  
納言といへる(中略)、この美君兼ねて  
心痛のなやみ以ての外に氣ざし、忽ち  
世を去り給ひぬ」

ひけ 卑氣。引け。氣おくれ。はぢ。屈  
辱。武道傳來記三「いよゝ親仁の卑氣  
恥の上の恥辱」。釋迦如來誕生會二「を  
な子仲間のひけになる」  
ひけい 庇惠。おかげ。庇護。傾城反魂  
香下「貴殿の御ひけいにて勅勅を免さ  
るゝも、一つは娘が光りぞと、なほな  
ほ落涙」

ひけい 美形。容姿の美しいもの。美貌。  
美人。美女。榮花咄四「是れは何ともな  
らぬ美形、人に見られたき風情もなく、  
成程構はぬ歩みぶり」。又、若衆などの  
美しい者にもいふ。武道傳來記一「市丸  
が心ざし(中略)美形には取りわき摩利  
尊天も後立て」

ひけいろ 引色。氣おくれした様子。負  
けいろ。おちけのついた顔つき。

ひげかご ひげこ(髭籠)に同じ。  
ひげきり 髭切。源家重代の名劍。十三

歳の頼朝が美濃國青墓に落行く途で、  
賊兵を切伏せたもこの名劍である(平  
治物語)。百日曾我四「頼朝が重代、ひ  
げ切・ひざ丸にても認めと有り」  
ひげぐち 髭口。まはり髭の生えた口。  
髭むしやな人の口。

ひげこび 髭首。髭ある人の首絞。  
ひげこ 髭籠。髭のやうに端を編み残し  
た竹かご。ひげ  
かご。どちやう  
かご。永代藏一  
「野老入れし髭  
籠取りそへて下  
向」

ひげたうじん 髭唐人。髭のある唐人。  
又、支那人を嘲る語。

ひげにんじん 髭人參。人參の一品種。  
蔓生するもので、その蔓根を薬用とす  
る小人參。

髭抜く 髭を抜く。當時は、剃るかはり  
に、よく髭(又は髪を生えぎはなど)を  
抜いたものである。梶久「世物語と」足  
さすらせて髭ぬかせ」。一代男三「或時  
は髭を抜かせ、自由に使ひて」

ひげまひ 髭舞。髭をつけて舞ふことを  
戯れて稱した語。男色大鑑七「京への上



ひ

ひ

産に此男の釣髭を持ちて還れば(中略)即座に髭舞と囃出し、座中に腹抱へさせける」

ひげみせ 髭見せ。つくりひげ(假髭)のことか。男色大鑑ニ「剃られし髭を惜み、なげき悲しむ事是非もなき身とて、髭見せをとりおき、此事沙汰なしに還りける」

ひけらかしもの ひけらかすもの。人に誇示するもの。自慢に見せびらかすもの。置土産ニ「北國衆は文を國のひけらかしものに、人丸・貫之の筆より、おのおの様の書捨てを大事にかけ」

ひけらかす 見せびらかす。自慢に見せる。五人女一「色ある娘は母の親ひけらかして、花は見ずに見られに行く」。紫花唱一「男子なれば(中略)すぐに丹波口の噂宿に連れ行き、日比目かけぶりの亭主女房にひけらかしぬ」

ひげをれ 髭折。朝鮮人參の細小なもの。晝夜用心記ニ「朝鮮人參極上々を見たきよし吟味のうへ(中略)、此店にある程の高、髭折七十三兩」

ひごう ひごふ(非業)の誤用か。非道、無理などの意。油地獄下「親仁殿にひごうの金を出さずが笑止さに」

ひごすいき 肥後芋苗(ひごすゐき)。肥後國の名産。蓮芋のずゐきを乾したも。色白く、長くて美味。房中の戯具とされたもの。重井筒中「平野屋ゑきやう、肥後ずいき、サア〜紙燭が皆になる」

ひこずる 「ひこすか」の誤か。即ち「彦すが」で彦介が云々すると續くのであるかといふ。壽門松上「彦介一分たゝぬ(中略)今日から三日ひこずるつかんだ。相場の高い總嫁の買初め任り、金銀米錢ぐはらり〜」

ひごん 非言。非難の言。抗議。松風村雨東帶鑑「若宮のお乳の人、長點なりとありければ、北の御方非言して(中略)、エ、癖の悪いと太股を、爪らせ給へば」

ひさろせき 砒霜石。白色の劇毒ある物質。無水砒酸。永代藏ニ「斑猫砒霜石より怖しく」

ひさうてん 非想天。佛語。三界諸天中の最も高い天。有頂天。委しくは、非想非非想天といふ。  
ひさうに 祕藏に。(副詞)大事に。大切に。珍重して。武道傳來記八「雲雀毛を空彌求めしとて祕藏に乗りたり」

ひさぎめ 販女。物を賣りひさぎ女。百日曾我三「室町の糸屋・組屋・ひさぎ女に」

ひさくりげ 膝栗毛。徒歩で旅をすること。膝を栗毛の駒に代用する義。雪女五枚羽子板上「榎・膝栗毛・膝栗毛、慰斗昆布にかはら毛と、祝ひ乗つたるは、さつても伊達なお侍」

ひさげ 提子。鉉のある小さい鍋狀の具。後には酒を盃に注ぐ銚子と同じやうに用ひた。

ひさげの水が湯となる 松の落葉六「いつの間にかは秋風の、吹くや越路の山こえて、彼の三國のわけある里へ、悪性がよひのつらくくや、ひさげの水は湯となれど、まだ覺めやらぬ我思ひ、つらしねたまし、腹立ちやと、すがりつては泣くばかり(傾城佛原)」

ひざり 日指。指定した日限。日どり。新小夜風物語下「人に無用の約束して、其のあと方もなく日ざし違へ、又は遣る物を遣らず」。又、日刺。日光のさすこと。又、ひあし(日脚)。

ひさつ 飛札。至急の書面。飛脚に持たせて遣はす急用の手紙。  
ひざつき 膝突。膝の下に敷く半疊ほど

の薄縁又は布帛。

**膝とも談合** (謔) 思案にくれたあげくは、自分の膝とも相談する。困つた果ては、つまらぬ者をも相手として何か談合の結果を得ようとする事。

**びじ** 美兒。びせう(美少)に同じ。五人女五(念友せし)に又あるまじき美兒

**ひざまる** 膝丸。源家重代の名劍。ひげきり(髭切)の條参照。

**ひざや** 緋紗綾。緋色の紗綾。織留。「ない物もある顔して萬つ隠し、うちの肌著に不斷緋紗綾の下帯かく事、人の知らぬ費えなり」

**ひざら** 火皿。煙管のがんくび(雁首)の稱。京都の方言。一代男五「煙管放さず(中略)夜着の下より尻をつき出すを、不思議に思へば、その邊りに響く程の匂ひ、二つまでこく所を火皿にて押へける」

**ひし** わざはひ。災難。すべて身の不幸不利益となることをいふ。曾根崎心中「頼もしだてが身のひしで、だまされさんした」。今宮心中上「御馳走が身の菱屋酒盛つて尻踏まれた」

**ひじ** 非時。佛語。日中から後夜までの稱。又、ひじじき(非時食)。僧が日中

を過ぎて食事すること。とき(齋)の對語、その條を参照。薩摩歌中「何ぞ一種で非時をせい、さらばお布施を包まう」

**ひしつむぎ** 菱袖。俚言集覽に、好色伊勢物語を引いて、「好色男ありけり。下女しげるものの許にヒシツムギといふ物をやるとて、思ひあらば六さい宿にねもしなん、ヒシツムギをば袖にしつづも」とあり、その頭書に、「ヒシツムギ、絹也、さもしき女にはかゝる物に限らず、帯さし袖かたびらなど、戀のよすがに贈る常の習也」とある。或は房中の具であるといふ。重井筒上「平野蒟弱、菱袖」

**ひしぎ** 「ひゞき」か。神樂・能樂などで、囃子の太鼓小鼓を打出す懸りの合圖として、鋭く強く吹く笛の音。松風村雨東帯鑑「神樂をさまると太鼓のかしら、笛のひしぎに若宮は、わつとばかりに御目を見詰め、御息絶入り給ひけり」

**ひしやもんだち** 毘沙門立。毘沙門天王のやうに立つこと。仁王立といふ類。毘沙門天王は四天王の一。身に甲冑を帶し、須彌山の第四層、北水精宮に在つて北方を守護し、數多の夜叉、羅刹を統領する。吉野都女楠五「覆面を取つて捨て、毘沙門立にすつくと立ち」

**ひしぎだけ** 拉竹。竹を押しつぶして平たくしたるもの。押しひしげた竹。一代男「お手水の、ぬれ縁ひしぎ竹のあらけなきに、かな釘の頭も御心もとなく」

**ひしやもんむかへ** 毘沙門迎。正月、大

**ひしぐる** ひしぐ(拉)の訛。ひしげる。押しつぶす。蟬丸「兄が鼻までひしぐるか。夫を寢どられ口惜しうは思はぬか」

**ひしこ** 鯁。ひしこいわしの略。鯁の類。せぐろいわし(背黒鯁)の異名。長さ四寸ばかり、背が藍黒色、腹が白い魚。又、その幼魚をいふ。大句數上「信樂城の壺のひしこも尋常に、枯葉の蔭に霞

か」

ふるらし」

和國奈良で行はれた俗習。毘沙門天は俗に七福神の一に數へられてゐるので、惠比須・大黒などと同じく、福を迎へる心で、この風習も生じたと思える。下文を見よ。胸算用「漸う夜も明け方の元日に依迎々々と賣りけるは、板に押したる大黒なり。二日の曙に惠比須迎とて賣りける。三日の明け方に毘沙門迎と賣りける。毎朝三日が間福を賣るぞかし」

**ひしゆかつま** 毘首羯磨。佛語。美術・工藝の汎稱。又、それに巧みな人。古來、誤つて天竺の佛師の固有名詞のやうに用ひる。生玉心中「如何にも〜、嵯峨の釋迦、毘首羯磨の御作といつてもだんない」

**ひしゆひがく** 非修非學。佛語。修行も學問もしないこと。

**ひじりあんどろ** 非寺里行燈。聖行燈。遊女屋の局見世の格子、又、風呂屋の揚り場の軒などにかけて、看板に代へた掛行燈。その形が高野聖の笈に似てゐるので名づけるとも、聖窓（ひじりまど）の軒にかけたので稱するともいふ。二代男七「非寺里行燈の光を請けて大方便日を暮しかねたる女郎」

**ひじりなんどろ** 前條の誤か。榮花咄五「姉が小路の和泉風呂へ入相の頃より行きて、吹いてふかれてちつと揚り場に座して、ひじりなんどろの光に映して、喰ひさき紙を拵へ」

**ひじりきる** 聖切。聖になりきる。佛道修行に精進する。佛道を行ひます。曾我七以呂波「髪を剃り衣を染め、妙音比丘尼とひじり切て候が」

**ひじりばうず** 非寺里坊主。ひじりほふし（聖法師）、即ち、僧侶、法師といふに同じ。又、特に高野聖（かうやひじり）を稱した。六日飛脚「余所をふくもめん合羽の雪の風、非寺里坊主の竹の葉がくれ」。「かうやひじり」の條參照。

**ひじりまど** 聖窓。下等の遊女屋に設けた一種の窓。出格子に似てそれより小さく、箱のやうに作つて外に張り出したもの。

**ひじん** 美人。男にもいふ。美男。胸算用二「こなたの御子息にしては（中略）、玉の様な美人、近比押しつけたる所望なれども、私貰ひまして聲にいたします」

**ひすかし**（形容詞）心のねちけたさまに

**ひすらし**（形容詞）前條の類語。ずるい。こすい。槍狩劍本地三「此のひすし人心、かたりのあるまいものでもなし」

**ひすらこし** わるがしこい。ずるい。特に金錢にかけて、慇心ふかく、わる智慧を働かせるさまにいふ。西鶴五百韻「稻葉亂れて小米屋のかゝ、ひすらこふ上目をつかふさほの雁」。永代藏四「ひすらこきは日本、次第に針を短く摺り、織布の幅をちぢめ、傘にも油をひかず」

**ひすらし** 前條に同じ。永代藏三「四五年来に銀二貫目あまり仕出し、なほひすらく人に情を知らず。或は「ひすらこく」の「こ」を誤つて脱したか。

**ひせいごう** 緋精好（ひせいごう）。緋色の精好緋。精好は、經緯ともに練絲で織つた厚くて美しい絹布。最明寺殿百人上臈「水千の衣紋かきつくるひ、ひせいごうの長絹」（女せいごろへ）

**ひせう** 美少。美呪。美しい少年。美少年。美童。若衆。男色關係の弟分の稱。男色大鑑五「平井靜馬など申せしは、未



代にあるまじき美少年なり

びせうがしら 美妾頭(びせうがしら)。或は、美少頭か。懷硯「坐禪の夢覺めては美妾頭に誘はれ、鹿子の袖の吹返し、留木の薫きく間も」

びせうじん 美少年。びせう(美少)に同じ。男色大鑑「十二三なる美少年、まだ夏ながら紅葉傘を持つて差さで來にけり」。武道傳來記「大津兵之助といへる美少年今年十七」

びせうなづみ 美呪なづみ。美少年に戀着すること。萬文反古「おもひもよらぬ美呪なづみ、しのばせたる狀のあらまし」

びせせり 火をせまること。火を弄ぶこと。火なぶり。火いちり。俗つれ「火せせりの徳兵衛」

びぜんくにみつ 備前國光。備前國長船の刀匠。又、その作の刀。槍櫃三下「一之進が嗜む備前國光」

びぜんすりばち 備前搦鉢。備前焼(備前國和氣郡伊部(いんべ)村製出の陶器)の搦鉢。殊に丈夫であるとの名が高い。物種集「弔ひや齋非時續くとろろ汁、藤戸の浦や備前すり鉢」

びぜんばち 備前鉢。備前焼の鉢。又、

前條の略。

ひぞり 乾反。日に乾いてそりかへること。或は、そのそりかへつたもの。又、すねて腹を立てること。今宮心中「ききにすね言ねすり言、乾反し直し上下を、盤にかけて打ちけるが」

ひぞりごま 獨樂のひぞりまはるもの。殊更にくねりまはるやうな獨樂。松風村雨東帶鑑「いぶりぶり獨樂そりやひぞり獨樂、又打合ひて口舌獨樂」

ひぞり大盡 物にすねた大盡。わからずやの野暮な大盡(遊客)。

ひだろ 美道。しゅうだう(衆道)に同じ。五人女五「女色の道はふつと思ひ切りし佛願なり、されども美道前髪事はやめがたし」。男色大鑑五「この身も美道はやめ難く、玉川心淵集とて(中略)衆道の心掛ある人は見るべき書物なり」

非道は天命 非道な事をすれば天命によつて罰せられる。悪事は天命を受ける。曾根崎心中「非道は天命、只今彼めが駈來り、九平次にぬかした事、後の證據に各々も、とつくと聞いてみて下され」

ひだか 日高。日の高くある時。日暮れ

に間のあるころ。置土産五「日高に京入して三條の何某とかいふ人の宿借りて」

ひたち 直地。ひたちみ(直路)。ひとすぢ。まつすぐ。一途。百日曾我「天のあたへと弓と矢つがひ、駒をひたちに歩ませ寄せ」

ひだち 非太刀。非難。批點。缺點をあげて難ずることを「非太刀を打つ」といふ。

ひたちおび 常陸帶。常陸國鹿島神宮の祭の時に行はれた古俗。男女が帶の端に懸想する男女の名を記して神前に供へ、社人の結び合せた結果によつて、各自の婚を下したといふ。晝夜用心記「とかく闇取に引合ふ常陸帶の契りにせよとて」

ひたちこはぎ 常陸小萩。「常流小栗判官」の女主人公、照手姫の假名。てるひめ)を見よ。

ひたちばうかいぞん 常陸坊海存。源義經の臣。丹波の人。人と爲り魁岸奇偉、勇力無雙。夙に義經に擧兵を勧めたが、平氏の捕卒の來るに及んで一旦踪跡を失し、又顯はれて擧兵を勧める。後、再び平家の目をくらまして常陸に到り

伴つて舟夫となる。平家追討には殊に船戦の事に與つて功を立て、辨慶と共に馳名を轟かし、義經の蝦夷渡海には、豫め舟を用意し、鹿島浦から發し去つたと傳へられる。

ひたぬひ 直縫。布一面に縫ふこと。又、そのもの。

ひだのぞう 飛騨掾(ひだのじょう)。山本飛騨掾清賢。人形づかひの名手。重井筒下「包む袂のひだのぞう、二つ使ひの手づまにも」

ひたひたれ 額剃。かみそり(剃刀)のこと。卯月紅葉「髮剃二挺取出し、これも母様の額たれとて譲り也(末期の道行)」

ひたひたれる 額を剃る。髪を「剃る」とを、「垂れる」といふ。重井筒中「剃刀出し合せ砥に(中略)、あんまり好い月影に、額たれうと思つて」

額に毛抜をあてる 額に角(すみ)を入れるために、毛抜を使ふ。「すみいる」の條を見よ。壽門松上「額に毛抜もあてる者が、いとしばげに女郎衆いちづつて何の男」

ひたひらなな 鏝半文。鏝錢半文。「ひらなな」は、きなな(寸半)ともいふ、半

錢のこと。「きなな」の條参照。博多小女郎上「京大坂ではひたひらなな、我が物がまゝならず」

ひたひわた 額綿。綿帽子に同じ。又、月代を刺つた男優が、女に扮する時、額におぼつた綿。

ひたもの (副詞)ひたすら。一途。大下馬「この金子ひたもの數多くなる事目出たし」

ひだりあふぎ 左扇。ひだりうちは。左の手で團扇を使ふこと。安樂なさまにいふ。

ひだりがつて 左勝手。左を本として物を配置すること。又、主人が客の左前に位置すること。ひだりきき(左利)。

ひだりがま 左鎌。左の手に鎌を持つこと。腹など切る時の鎌のつかひ方にいふ。大職冠「利劍の鎌、錦の袋より取出し、左鎌に押取直し、乳の下をかき切り」。日本振袖始「腹に突立て引廻はず、母が誠の左鎌」

ひだりなは 左繩。左撚りにした繩。

ひだりまへ 丹波與作中「ハテかう左繩

ひだりまへ。丹波與作中「ハテかう左繩

ひだりまへ 左前。衣服の左衽を下にして着ること。左衽。事がかくひちがふこと。不運になること。ひだりなは。織留「商賈左前にて立所居所にて損銀かさなり」

ひだりをり 左折。烏帽子の先を左に折ること。又、その烏帽子。ひだりをりゑぼし。ひだりゑぼし。

ひぢがさ 肘笠。肘を頭の上にあげて雨を凌ぐこと。蟬丸「かづく袖笠、笠笠の雨に木の葉も亂るゝ初時雨」。又、肘笠で防ぐほどの雨。にはか雨。

ひぢがね 肘金。開き戸に用ひる具。鐵で肘のやうに曲げて作り、戸の枠に打ちつけ、扉の肘壺と相合せて、開閉の用にするもの。

ひぢつぼ 肘壺。開き戸の樞(くるゝ)に用ひる具。鐵で壺のやうに作り、扉に打ちつけ、戸の枠から出てゐる肘金と相合せて、開閉する用にするもの。前條参照。大句數上「谷の戸は關東まで

まかくれなし、ひぢつぼ掛金かち橋の末」

ひちやう 日帳。日記帳。一代男セ「諸分の日帳」

美女は悪女の敵 (諺)「美女は醜婦の仇」ともいふ。武道傳來記六「とかく美女は悪女の敵と申し傳へしと、大笑して」

美女は命を斷つ斧 (諺) 女色に耽るものは若死するといふ諺。呂氏春秋「靡曼皓商、伐生之斧」。一代女「美女は命を斷つ斧と古人もいへり。(中略)色道に溺れ若死の人こそ愚なれ」

ひぢわた 眩綿。綿をつむにいふ語。眩にかけて綿を廣げること。又、その綿の稱。和漢三才圖會に越前國土産の中「眩綿」を擧げてゐる。

ひつかへし ひきかへし(引返)の音便。その條を見よ。一代女「八丈袖のひつかへし」

びつくりまる 潰膽丸。大盃の銘。男性大鑑六「情の大盃潰膽丸」。俗つれ「銅の武藏野潰膽丸」

ひつこきがみ 引扱髪。鬘を出さないで結ふ髪の總稱。京阪方言。ひつこきわげ。

ひつこきわげ 引扱鬘。前條を見よ。

ひつさかれ 引裂かれ。女を罵つていふ詞。丹波與作中「ヤイ爰な引さかれ、其涙は與作に泣け」

ひつしき 引敷。腰にあてて敷くものの

稱。織留「火燧に紫ぶとんをかけ、茶縹子の引敷」。又、特に、毛皮で敷皮のやうに作り、緒を附け、腰にあてて結ぶやうにしたもの。腰當(こしあて)。

源氏烏帽子折「成佛せよと拜み打ち、頭よりひつしき迄、左手右手へぞ捌きける」

ひつしごきおび 引扱帶。しごきおび(扱帶)のこと。一幅の布を引きしごいて用ひるのでいふ。二代男「馴染も無き男に、引つ扱きの帶を貰はれ」

ひつし米 ひつぢ(糶)米。刈つた後に、再び生える稻を「ひつぢ」といふ。それから取つた米。「ひつし」は假名ちがひであるが、下例は「必死」にかけたのであらう。大句數上「喰口をひとりへそふか(減さうか)ひつし米、いづれの秋にとりつき世帯」

ひつしやりほん 物の落ちた音。或は、物の打ちあふ音。又、全く塞がり止まるさまなどにいふ。吉野郡女楠「この軍始つて國中のよい衆は、わらんぢがけで逃げごしらへ、遊山所かいかかと、我等がしよさいひつしやりほん」

ひつしよなし (形容詞)取りみだしたさまにいふ。自制を缺いてゐるさま。や

るせない。文武五人男「大膽な、なぜ追はんすと、腹立がほのひつしよなく、妬しあどなし悪性らし、色には早く亂れ行く心の糸の頼義公」

ひつしよなりふり 「ひつしよなき」と「なりふり」とをかけて約した語。取りみだした姿。

ひつそく 逼塞。(ト)士分、僧侶に科する刑の名。三十日又は五十日間の閉門、夜間のみ陰に潜門から出入するを得るもの。(ト)おちぶれて世間に出られないこと。隠遁すること。博多小女郎中「山科邊に逼塞いたし」。戀八卦柱曆中「家屋敷をも人にあづける逼塞の身」

ひつそばむ ひきそばむの音便。引きよせる。又、人に見えぬやうに身につける。出世禮徳下「あゝあり難い、神佛のあてがひか、と戴き〜ひつそばめ」

ひつたがのこ 疋田鹿子。粒の特にきは立つた鹿子しほり。ひつたしほり。

ひつたきや ひたき(鶺)と梵語(不詳)とをかけてあやなしの語。釋迦如來誕生會「花鳥の聲も姿も變らねど、名のみ異なる西天竺(中略)、ひつたきやとは青柳のみどりは同じるはにほへ」と

ひつちゆうぐは 備中鉄。二箇乃至五箇の股になつた、水田用の鉄。國性爺ニ「和藤内つくく、見て、備中鉄からりと捨て」

ひつばなし ひきはなし(引放)の音便。言葉の切り方のさつぱりとしたこと。きびくした言ひきり。齒ぎれのよい

断言。宵庚申上「如何様とも御存分に遊ばせと、どこやら詞のひつばなし、残る所が武士かた氣」

ひつぱりぎり 引張切。引つ張り裂いて切ること。國性爺五「承引なくばたつた今、目前にて一官を引張切にせん。とくの返答早申せ」

ひつぱりだこ 引張風。はりつけ(磔刑)のさまに譬へていふ。五十年忌歌念佛上「清十郎は片假名の木の空で、此のやうに手を廣げ、引張風は知れたこと」

ひびむ ひびめる。引詰める。苦める。さいなむ、出世瀧徳上「かの新七のいきずりめ、お爲顔で旦那をひびめ、お家久しい我等を押退け。又、強ひて儉約する。油地獄下「此三百の錢のらめに遣るのか。つねく身をひびめ始末して、あいつに遣るは淵へ捨つるも同前」

ひてんらん 悲田院。昔、京中の貧困な

病者、行路病者などを救済し施療した所。その門前では「悲田院の蘭金剛」といつて、非人共が草履を作つて賣つてゐたといふ。一代男「悲田院の上ばかりきまでもみづからして」

ひとあひ 人間。人づき。人に對する愛想。

ひといかだ 人筏。人を多く水に流し溺れしめることの譬。吉野忠信四「大衆取駈けて葛に縋り渡るべし。其時根こぎに引切つて、吉野の川に人筏、流して遊ばん」

びどう 美童。びせう(美少)に同じ。萬文反古三「二八にならぬ美童、顔付のうつくしき京にてもつひに見た事なし」

ひとうち 一打。猿の身の急所をいふ。下文を見よ。松風村雨束帯鑑五「こゝに猿の一打と申して、たつた一打で死にまする急所がござります」

ひとろり 人賣。人身の賣買。人あきなひ。人あきうど。女腹切中「半七が目には其方を人賣と見た、もがりと見た」

ひとおき 人置。雇人の周旋屋。一時奉公人を宿らせて置くのでいふ。二十不孝「母親娘を悲み、人置のかゝを招き(中略)、奉公に頼みければ、人置も袖

をしぼり、十分一は取らずに済まし申すべきと連れ行く」

ひとおきかか 人置驛。人置を業とする女主人。

特に遊女の奉公口を世話する女。せげん。織留六「人置の驛さかあまりの木さやくは(中略)、茶屋へやつて一年に一貫四五百目は取れますと」

ひとおきばば 人置婆。前條に同じ。武道傳來記七「下女暇を出され(中略)人置婆がもとに集まり」

ひとかた 人形。人の形。又、人の形をしたもの。下例は、にんぎやう(人形)或は、形代とは別義。二十不孝「人形を並べおきて、文太左衛門が恥を曝させる」。同「人形ありて羽あるもの、聲は宛然犬にして」

ひとかひ 人買。人をかどはかして賣買する悪人。人賣、人商人などの類語。大矢數「志賀の浦これ人買よく、麓に山王猿轡あり」



かかきおどひ

ひとかひぶね 人買船。人買の乗つてゐる船。二代男二「小舟に女郎一人(中略)人買船よと、どやく、それは賣物に極まつた女」

ひとがまし 人といはれることを、をこがましく思ふ心を表はす語。人といふも過分である意。國性爺四「如何なる人に有るやらん。人がましやな名もなき者、我れ日の本に昔より、住馴れたれば住吉の、大かい童子と申す者」。又、ひとかどの人物らしい。相當立派な人で、人がましき方、請取り給へ」

ひとときもいり 人肝煎。人の世話をやくこと。特に、雇人の周旋をすること。人置の類語。武家義理物語四「或時諸國へ、人肝煎の噂尋ね來り(中略)、このお子もいかなる武家の御前にならせ給ふも知れまじと」

ひとときりば 人切場。人を切る處。斬罪人の刑場。又、人がよく殺される場處にいふか。大句數上「このわたり松はさびしき人切場、羽衣ぬすむその三種が崎」

ひとときをり 一季居。一季居ることに定めた奉公人。一代男「世之介様のお寢

巻と答ふ、一季をりの女、そこ〜に疊みかけて」

ひとくちあきなひ 一口商。買ふか買はぬかの一言で定める賣買。轉じて、一言で大事の決定される談判にいふ。國性爺三「頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否といはば即座の敵」

ひとこ 一粉。ひとつ(一箇)に同じ。又、いつしよ。いつしよこた。傾城酒呑童子「變化も鬼神も悪人も、一とこに仕廻ふと駈出る」

人事言はば蓮敷け (謔)「噂をすれば影がさす」の類。人の噂はすぐに當人に聞える。噂をするなら、蓮を敷いてその人を迎へる用意をせよ。重井筒中「人事言はば蓮敷け。徳兵衛様さうな」

人事言はば目代置け (謔) 前條に同じ。目代(めじろ)は見張の意。噂をするなら、目代を置いてその人の來るのに備へよ。

ひとこぶし 一拳。鷹狩にいふ。一度鷹を放すこと。竹庚申上「鷹野出立のりしげに(中略)、殿には今一こぶし遊ばし御入りあるぞ、せく事はあらぬい」

ひととぢがけ 一筋懸。ひとすぢもとゆひとすぢ元結を懸けて髪を結ふこと。島田わげなどにいふ。一代女「小枕なしの高島田、一筋懸の隠し結び、細疊みの平元結」

ひとすぢもとゆひ 一筋元結。紙を一筋にしごいて撚つた元結(組緒の元結に對する)か。梶久世「物語上「黒髪そげず、一筋元結かけて、半折れたる差櫛、これ曲者」

ひとせり 人競。人が先を競ふこと。人がこみあふこと。ひとごみ。武道傳來記「人せりに推し倒され」

ひとそばへ 人戯(ひととそばえ)。人にそばへること。人にたはむれること。まじめに人に接しないこと。丹波與作下「わたし許りに恥さらせか、一人敷けか物思へか。口で云へば人そばへ、先立つて埒あけうと、取付く脇指」

ひとだかい 人だかり。物見だかく、人

ひ

の集まること。人立ち。大矢数「一人だ  
かい獨もやらじ關の月、今度の噪き薄  
に草に」

ひとだまひ 副車。古語。従者に給はる  
車。

ひとつがき 一つ書。一つ何々と書くこ  
と。條目を分けて、頭に一を記すこと。  
大句数上「一つ書文の返事を松の風」

ひとつがひ 一つ買。えつて一つを買ふ  
こと。僅に物を買ふこと。一度買ふこ  
と。

ひとつざい 一つ菜。兩吟一日千句「一  
つ菜(サイ)室の八鳥や見えぬらん、那  
須野の露もしまつに置かるよ」

一つなる口 酒も少しは飲める口。曾根  
崎心中「春を重ねし雛男、一つなる口  
桃の酒」

ひとつまへ 一前。重ね着した衣服の前  
を、一つに合せ揃へること。(一枚毎に  
合せないこと)

ひとて 一手。射術の語。一手矢の略。  
即ち、外(と)向きの矢と内向きの矢と  
の二本。甲矢(はや)と弟矢との一對。  
武道傳來記「僕が持てる弟矢と一手  
に紛ひなき證據に」  
ひとていり 一出入。出入を一回するこ

と。一談判。一閃着。でいり(出入)の  
句を參照。油地獄上「田舎者に仕負けて  
は此與兵衛が立たぬ、小菊めが歸るを  
待つて一出入」

人でも九位でもなし 諺にいふ「人でも  
杖でもなし」にかけた句。恩義知らず、  
人でなしと嘲る意。大職冠「如何に  
鎌足、六位七位八位を下げれば、汝は人  
でも九位でもなし。禁中には穢はし」

ひととめをんな 人留女。とめをんな(留  
女)に同じ。二代男七「品川泊りの夜、  
一兩二歩餘りしを(中略)人留女にくれ  
て立ちけるとなり」

ひとのひ 人日。じんじつ。正月七日の  
稱。支那の古俗に、元日を鶏、二日を  
狗、三日を豕、四日を羊、五日を牛、  
六日を馬、七を人、八日を穀とした(東  
方朔書)のに據る。一代女「人の日の  
始め、都の西嵯峨に行く事ありしに、  
春も今ぞと」

人は落目の心ざし (諺)「人は落目が大  
事」ともいふ。落目は零落。おちぶれ  
た人を助けるのが親切といふもの。又、  
人は零落した時に自重すべしとの意。  
五十年忌歌念佛中「人は落目の心ざし。  
これ餅は正月の、在所へ遣らうと思

へ共、君に何が惜しからん」  
人橋かける 幾人も幾回も使者を出す。  
しきりに人を遣はす。二代男七「祭のご  
とく人橋かけるは、高橋今の御威勢也」  
男色大鑑「人橋をかけて賢に預けた  
る脇指もどせと催促」

人は種性が恥し (諺)「人は筋目が恥し」  
ともいふ。人は、氏や育ちが尊い。人  
に取つて貴むべく恐るべきは種性であ  
る。出世景清「人はすじやうが恥し、  
子中をなせし阿古屋めが、夫の訴人を  
したりしに、御身は命に代らんとは、  
頼もしや嬉しやな」

ひととはな 一花。人氣などの一時集るこ  
とにいふ。一時祭えること。萬文反古  
四「二千兩まで請合ひ、新芝居取立て  
(中略)、又一花はいづれも見申すべく  
候」

人は盗人、火は焼亡 (諺)人と火とに  
は氣がゆるせない。二十不孝「人は盗  
人火は焼亡と、舞々の又太夫が言葉の  
末」

ひとへぎり ひとよぎり(一節切)の詠。  
その條を見よ。天下馬「常に一節切  
(ひとへぎり)吹きて萬の調子を聞きた  
るに」

ひとへふつか ひとひ(一日)二日の訛。

一兩日。置土産<sup>三</sup>「愛宕參詣と、ひとへ二日の旅用意」。同<sup>三</sup>「ひとへ二日のうち便を求め」

ひとぼうころ 人奉公。他人のために利益となつて自己のためにならぬこと。永相手の人にばかり儲けられること。永代藏<sup>五</sup>「年中人奉公して勝手迷惑」。胸算用<sup>四</sup>「算用の外の利を得たる事一年もなくて、皆銀の利にかきあげ、人奉公して氣を凝らしける」

ひとぼし 灯をとぼすこと。又、燈明の世話などする人。ひともしをとこ。大矢數<sup>四</sup>「祇園會の山が動くときとせまいぞ、其の化妖物(ばけもの)は火とぼしといふ」

人前廢れる 面目が廢る。名譽が汚れる。國性爺<sup>一</sup>「主君を捨て、名を捨てても命惜いから。彼奴は人前廢つた」

ひとみごく 人身御供。人の身を生きたまゝ、神などに捧げること。又、その身。いけにへ。犠牲。日本振袖始<sup>四</sup>「八岐の蛇とて大蛇あり、(中略)色よき娘を人身御供に取らざれば、一在所崇りをなす」。ひとみごくう。

ひともし 一文字。葱(ねぎ)をいふ、女

ひ

の詞。重井筒中「ひともし、エ、しやら臭い」

ひともしをとこ 火點男。燈火の事にあづかる男。油坊主。ひとぼし。織留<sup>四</sup>「祇園の社に火ともしの大男、雨の夜麥わらの笠著て」

ひともしすき 一本薄。すすき(薄)の名。長さ六尺内外に達するもの。又、一本の薄のこと。

ひとよぎり 一節切。尺八に似て細く短い笛。一節の竹のま

つすぐなので作り、長さ一尺八分で、節から上を三寸八分、下を七寸の割合にしたもの。歌口も孔の数も尺八に同じであるが、長さ太さと、その有無が尺八と違ふ點である。祭花咄<sup>四</sup>「一節切の名人、蟬の時雨、鹿の草枕などいへる一手を吹き出し」。二代男<sup>三</sup>「一節切の連吹き」



りぎよさひ

ひとよぎりしやくはち 一節切尺八。前條に同じ。「一節切の尺八」ともいふ。

ひとよぎりぶし 一節切節。小唄の一種。一節切に合せて唄つたもの。

ひとよさ ひとよ(一夜)に同じ。一晚。

壽門松上「母の命が一夜さの傾城代にあるならば」

一人言へば三人聞く(諺) 事の漏れ易い譬。「壁に耳」などの類。

ひとりすぎ 一人過。一人で身過ぎすること。獨身生活。一人ぐらし。一代男

三「四十に及び獨過ぎの噂、晝はふせりて、暮より身ごしらへ」。織留<sup>一</sup>「母かたの嫉ひとり過ぎして暮されしが」

ひとりばら 一人腹。一人で尻目を立てること。槍權<sup>三</sup>「權三が方を尻目にかげ、相手知れずの一人腹」

ひとりむしや 一人武者。一人すぐれた武者。四天王などいふに對して稱する語。大下馬<sup>二</sup>「於佐賀部殿の四天王一人武者これなり」。傾城酒吞童子<sup>一</sup>「一人武者保昌は、綱が徒然尋ねんと」

獨り物に狂ふ 諺に「狂人も獨りは狂はぬ」といふを逆用した句。戀八卦柱曆下「むだくと腹切るも、獨り物に狂ふに似たり」

一人も一人から 「一人も一人、たつた一人」といふ意。一人子の人物のよしあしは特に親の身に感ずる意にいふ。又、一人子にも人物の如何によつて、愛すべきものと然らざるものとがある意。

ひ

二十不孝四「一人も一人からと利發にして、親の氣を助け」同五「一人も一人からと悲しく、今は教訓の言葉も盡きたる。孕常盤四「瑠璃をのべたる顔かたち、一人も一人からなれや、大内育ちにかしきもて」

ひとりわらひ

獨笑。ひとりで笑ふこと。

春菫。枕繪。わらひ繪。又、それを形に作つたもの。大矢數「世の業や目鼻を付けて持遊び、獨りわらひは戀の根本」。榮花咄「吉野が姿をからくり仕掛のひとり笑ひ」

人を抜く。人を欺く。人をだます。永代藏四「人をぬく事は跡つゞかず、正直なれば神明も頭にやどり」

ひながた

雛形。一貨物に似せて作つた小形のもの。ひひながた。一折烏帽子の名所。前額の「やまがた」の下に突出したのも。源氏烏帽子折三「ひながたに間をあらせ、くしがたをいかく」と

ひなはぎせる。火繩煙管。火繩で吸付ける煙管。俗つれ「野に働く男の火繩煙管を借りて」

ひなはや。火繩屋。火繩を作つて賣る家。丹波與作中「みな口の火繩屋のおげん」

ひなびたる

鄙樵。ひなびた粗末な樵。

大職冠三「若き男の山柵(あふこ)、重箱ひなび樵の酒、一荷に擔うて」

ひなぶり。火鬨。火を弄ぶこと。火いちり。重井筒中「涙を包む火鉢の下、人待つ宵の火鬨や」

ひなみ

日並。日のよしあし。日がら。日より。一代男三「辻堂にあかして、明日の日並を待ちしに」

ひなをとこ。雛男。雛のやうな美男。曾根崎心中「春を重ねし雛男」

ひなんさう。美男草。美男蔓(ひなんかづら)のこと。さねかづら(南五味子)ともいふ。木蘭科の常緑木本。蔓莖で他物に纏ふ。夏季、白みある花を開き、赤色小球の實を結ぶ。莖の粘液は、糊料・髮油用とする。拾樵三上「誦ひはやらす美男草」

ひなんせき。美男石。美男蔓の莖から採つた粘汁。髮の油に用ひる。前條参照。

ひにんかたきうち。非人敵討。歌舞伎芝居の外題。福井彌五左衛門の作で、春藤治良右衛門が、弟の新七と共に、非人となつて敵を狙ふといふ筋を仕組んだもの。出世瀧徳と「今のまにごきさげて、心からの非人敵討、どこぞこら橋の下、新七はるやらぬか」

ひぬか。乾燥。干して乾かした糠。下例に人の稱呼に用ひたのは、日のあらい筋にかけるといふ洒落。丹波與作中「ひぬかの八藏目のあらい男知らぬかい」

ひぬ。物のふるくなること。動詞の連用形のやうにも用ひる。國性爺「年よりひぬし御心」

ひねくろし。古く煤けてくろい。女腹切と「ぼんぼり綿のひねくろしく、背中に皺の寄るべなき」

ひねりぶくさ。拮服紗。服紗をひねつて金錢など包むこと。又、その服紗。ねぢぶくさ。一代女四「ひねりぶくさよりこまがね取出して、丸盆の片脇に置きて」

ひねりぶみ。拮文。昔の手紙の様式の一。本文を書いた紙を巻いて、その上を白紙(禮紙といふ)で包み、更に禮紙の上を白紙を横にして包むもの。たてぶみ。置土産三「宿の噂がひねり文に五兩ばかり持添へ」

ひねりもち。捻餅。身體の筋肉をひねり、痛みを與へることに譬へる。曾我會稽山「母きつと見て、又ななく、ひねり餅ちりけ一炷(ひ)据えうかと、ねめ付けられて身を縮め」



ひねりもとひ 捻元結。紙を捻つて元結

としたもの。重井筒中「引つ裂き紙の捻り元結で火廻しを、ひのし、ひの絹」

ひの 日野。日野絹の略。「日野は上野の邑名也。今上州安中松井田富岡の絹を」と爲す。武州之に次ぐ(三才圖會)。永代藏「日野・郡内絹類」。一代男「日野の洗濯着物」

非の入る 非難される。缺點を指摘される。楢権三上「大概非の入らぬ程の御用の間に合せませう」。女腹切上「非の入らさうな事どもを、いひくろめ」

樋の上の切荒布 樋の上とは、大阪道頓堀清津橋西詰の地。そこには昆布屋などがあったといふ。臺所への大坂土産としたものである。卯月潤色中「大坂の名物樋の上の切荒布」

ひのえうま 丙午。女の生れ年として忌まれる(今もいふこと)。五人女「我は世の人の嫉ひ給ふひのえ午なると語れば」。男色大鑑「ひのえ午の女はかならず男を喰へると、世に傳へしが」

ひのからす 日鳥。太陽の中にあるといふ三足の鳥。轉じて、太陽のこと。月を玉兔といふに對する稱。

ひのきじよえん 檜木書院(ひのきじよ

ん)。楡づくりの書院。雪女五枚羽子板と一鯉に追はるゝ心ちして、楡の木書院(しよえん)に出にけり」

ひのきぬ 日野絹。ひの(日野)の條を見よ。今宮心中「積重ねたる染地の日野絹」

ひのきぶたい 楡木舞臺。楡づくりの、能樂・芝居などの舞臺。傾城酒呑童子「豫て催す楡木舞臺も成就し、今日こそ爰に晴の能」

ひのざう 脾藏。胃底外側の大血管腺。ひざう。ひ。これの強い者は聲が大きいとされてゐる。傾城酒呑童子「脾の臟強き大音にて、こりやびり奴」

ひのぜに 火の錢。燈火を照らす錢。燈火料。又、てらせん(寺錢)をいふ。六日飛脚「天の岩戸へ舉る火の錢」。大矢數「いつそに燃えて火の錢とやら、骨揚のやうすを問うて泣涙」

ひのたう 火の當。日頭(ひのとう)が正しい。山城國男八幡宮の神事。日使の神事ともいひ、四月三日に行はれたもので、八幡宮の山崎離宮から、男山に遷幸の儀式であるといふ(神道名目類聚抄五)。又、山崎離宮日使神事記に曰く「貞觀二年庚辰二月九日の夜、離宮

より兩輪耀出現、一輪は男山に遷座、是によりて勅使木工權頭從五位下和氣彝範、同四月男山遷宮。その儀式今日使なり。日使は八幡宮第一の神事とす(中略)。山崎の神人、日使の祭の頭を勤むる故に、日の頭と云ふ。頭を勤めし人を日の長者といひ、一郷の上首とす。先々頭を勤めたる衆を長者衆と云ふ」と。物種集上「千石からは神といふらん、ひのたうの先に立つたる男山」

一代男「火の常見に、小倉の人のぼられしに、此の里の花もおもしろからず」

ひのむらさき 日野紫。紫色の日野絹。ひの(日野)を見よ。二代男「日野紫の棲高に、後より駕籠釣らせて」

ひのもくだいり 萬歳の唄ふ文句。「日の本内裏」ともいふ。戀八卦柱曆下「おりのみかど日のもくだいり、王は十善神は九ぜん」

ひのをか 日岡。(地名)山城國山科から京都栗田口へ越える峠。傾城反魂香上「越えた峠は日岡の石原草原」

ひばさみ 火鋏。銃の名所。めあて(照星)と、火繩の穴との間に出てゐる拇指狀の金。龍頭。武道傳來記「小筒に鑽玉を仕込み、火鋏切つて駆寄るを」

ひ

ひ

ひはだ 檜皮。(一)檜の皮を薄くへいだ板。

又、それで葺いた屋根。雪女五枚羽子板上「門のひはだを踏越ゆる」。(二)ひはだいろ(檜皮色)の略。檜皮のやうな色。赤みある藍色の黒みあるもの。

ひばちうつり 火鉢移。火鉢映。火鉢の火の光が映ること。織留<sup>三</sup>「火鉢移りに人の見知るもかまはず」

ひばちざげ 火鉢酒。長火鉢などのまはりて酒を飲むこと。

ひはづもの 織弱者。ひよわいもの。きしやでよわししいもの。

ひばら 脾腹。脾のあるあたりの腹。横腹。よこつばら。ひのざう(脾臓)の條参照。

ひばりげ 雲雀毛。馬の毛色。黄白まじつたもの。鬣と尾とが黒く、脊に黒筋のあるのが普通である。ひばり鹿毛。武道傳來記<sup>八</sup>「このたびの若馬は、雲雀毛の太く逞しく」

ひばりぶえ 雲雀笛。(一)玩具の一種。細竹で造り、中央の飾りに土製の鳥を附け、水中に入れて吹くと、雲雀の鳴るやうな音のする笛。「一代男」「芥子人形おきあがり、雲雀笛を取揃へ」。兩吟「日千句「びりく〜と雲雀笛ふく」。

ひばりぼね (一)雲雀を捕へるために吹く笛。特に、瘦せこけた腕や脚に譬へる。「雲雀のやうなる腕先」などともいふ。松風村雨東帶鑑<sup>二</sup>「雲井に揚れひばり骨、瘦せたる膝節高からげ」

ひばりやま 雲雀山。(地名)大和國宇陀郡宇賀志の東にある日張山、又、紀伊國有田郡絲我村鶴山であるともいふ。中將姫の籠居した山として名高い。

ひびき ひび(縛)のこと。茶碗などの「ひび」。

ひひながた ひひながた(雛形)に同じ。ひふた 火蓋。(一)銃の名所。火皿の火口を蓋ふもの。(二)藏などの窓の扉。火事の時に閉ちて、中に火の入らぬやうにするもの。櫻陰比事<sup>二</sup>「二階藏を普請して、窓には銅の火蓋、針金の綱を張り」

ひぶつ 祕佛。厨子の中に安置したきりで、人に姿を拜ませない佛。開帳したきりで、秘めておく佛。二代男「祕佛の光堂へ参るが如く、有難いと思つてばかり、尊い膚も拜ませず」。置土産「緋縮緬の戸帳拜ませず、この女郎を祕佛の太夫と名高く」

ひぶみ 日文。日毎に送る文。女腹切中

「日文ちぶみの付届け、いよしごげんと書いたるは」

ひぶろ 日風呂。日中に風呂に入ること。晝風呂。晝湯。大矢数<sup>二</sup>「身は養生の日風呂する也、慾も垢も腰ぬけわざにてかなふまじ」。永代藏<sup>三</sup>「花見舟遊び日風呂入」

ひぶん 非分。分際以上のこと。分に過ぎたこと。又、道理にあはぬこと。ひがとご。織留<sup>三</sup>「我が非分とはわきまへながら」

ひば 妣母。亡き母。萬年草上「且那が妣母第七年にあたりし故」

ひまけ 日負。日の光に負けること。日の暑さで身體の弱ること。曾根崎心中「傘は被ずとも召さずとも、照日の神も男神、除けて日負けはよもあらじ」

ひませ 日交。一日おき。隔日。宵庚申上「日ませ〜の御鷹狩」

ひまち 日待。前夜から身を淨めておいて、翌朝の日出を待つて拜すること。もと、日祭の義。その日は多く三日とか十五日とかに定め、寄り合つて振舞などして遊んだものである。榮花咄<sup>五</sup>「月待日待御一代の吉事」。胸算用<sup>三</sup>「町の藝者といはれて、月待日待到物真似

して人の氣に入りける」  
**ひまちばう** 日待坊。日待の時に招かれて讀經などする坊主。俗つれ〜(五)此の大夫御祈念の日待坊も毎日お見舞申し

**ひまはし** 火廻。遊戯の名。數人環坐して、一本の線香又は紙捻に火を點じたものを持ち、頭字の同音なる物名などを考へ言ひては順次に廻し、言ひ詰まつて火の消えるのを負とする。火わたし。火まはり。重井筒中「ひねり元結で火廻しを、ひのし、日野絹」

**ひむろもり** 氷室守。夏まで氷を貯へておくために、山陰などに作つた穴の室を氷室といつた、その守番。百日曾我「とけぬ心の氷室もり、夏の氷もあればある」

**ひめがひ** 姫貝。いがひ(貽貝)の異名。黒褐色の長圓形又は不等邊三角形の貝殻を有し、細絲狀の足絲といふもので岩石に固着してゐる。肉は食用となる。いのかひ。國性爺二「ちらと見せし姫貝に、一筆書きて送りたいらぎ」  
**ひめいひ** 姫始。曆の詞。正月に姫飯(ひめいひ、今日の飯)を供し初める吉日の義であるといひ、又、飛馬始で馬

の乗始めであるといひ、或は衣物の縫始めであるなどいふ。俗には、新年初めて男女が同衾する日であるとする。五人女三「正月一日吉書萬によし、二日姫はじめ、神女の昔より此の事戀しり鳥のをしへ、男女の昔より此の事戀しり」。戀八卦柱脛中「ゆどの始に身を清め、新枕せし姫始」

**ひめんてう** 美面鳥。春鳴く美しい鳥であるといふ。かほよどり。かほどり。女護が鳥に棲むといはれる鳥。腰から上は顔も兩腕も人(女)のやうで、背に兩翼を負ひ、腰のまはりには長い羽をまとひ、脚は鶴などに似て長い(二代男の挿畫に據る)。二代男「日馴れぬ翅の飛び來つて、これは女護國に棲む美面鳥なり」

**ひもじ** (名詞)ひもじいこと。ひだるいこと。一代男「あるじの出で、後にひもじにならぬ程まゐれといふ」

**ひものざいく** 檜物細工。檜・杉などの薄板を曲げて器物を作ること。又、その細工もの。大下馬「檜物細工をするもの、杉の木をさし曲げる折ふし」  
**ひものや** 檜物屋。檜物細工を業とする家。又、その人。曲物屋。檜物師。用

明天皇職人鑑「さし物やより檜物やの、曲らぬ木竹ねちまげて」  
**ひや** 火屋。毘屋。火葬場。やき場。茶毘所。二代男「道頓堀の火屋に一寸法師の夏書してゐるを」

**ひやうござり** 兵庫鎖。兵庫寮の工人が作つた鎖の義。太刀の足につける組緒のやうにした鎖。傾城酒吞童子「兵庫鎖の白銀づくり」。次條參照。  
**兵庫鎖の太刀** 帶取(太刀の緒)に兵庫鎖をつけた太刀。吉野都女楠三「太刀は鳥首兵庫ぐざり」。前條參照。  
**ひやうごずな** 兵庫砂。二代男「切戸引き明ければ、兵庫砂蒔きて、遙かなる隠れ縁に蘭鉢三十並べて」

**ひやうごまげ** 兵庫鬘。女の髪を結ひ方の一。播津國兵庫の佐比江町の遊女が結ひ創めたといふ鬘。  
ひやうごわげ。ひやうご。一代女三「兵庫鬘古し、五段鬘も見にくし」

**ひやうし** 兵師。劍術の巧みな人。劍術つかひ。ひやうはふづかひ。  
**ひやうしうた** 拍子歌。踊の拍子に合せて歌ふ歌。一代男「十六番の拍子歌、



ひまごうやひ

加賀の大正寺の時太鼓」  
拍子利く 拍子ごとが上手である。男色  
大鑑六「舞事すぐれて、萬づの拍子き  
て」

ひやうしぎやく 拍子木役。拍子木を打  
つ役。夜まはりの勤。薩摩歌上「夜前始  
めて拍子木役、奥とも口とも存ぜず」

ひやうしごと 拍子事。芝居や長唄など  
に伴ふ大鼓・小鼓・笛などの總稱。特に  
長唄などのはやし。男色大鑑五「よろ  
づの拍子事、又の世にも出来まじき名  
人」。晝夜用心記四「歌舞伎狂言の芝居  
は大阪、拍子事は江戸」

ひやうやく 乗燭。燈火の一種。油皿の  
中央にある躰のやうなものに、燈心を  
立てて点火するもの。大句數上「ひやう  
燭の光貴き如來様」

ひやうどうだいゑ 平等大慧。一切の現  
象及び一切の衆生を平等と観ずる佛の  
智慧の廣大なこと。百日曾我四「一乘菩  
提の駒は、平等大慧の園に嘶ふ」

ひやうはふづかひ 兵法遣。劍術つかひ。  
劍術に達した人。兵師（ひやうし）。出  
世瀧徳上「兵法遣ひ・座頭・茶の湯者」

ひやうぶがへし 屏風返。屏風のやうに  
倒れるさま。うしろに仰向いて膝を伸

したまゝ倒れること。  
ひやうぶきやう 兵部卿。香の名。特に、  
匂袋に入れて用ひけるもの。その香劑の  
配合によつて名づけるといふ。又、白  
粉の名にもいふ。一代男「身にへうぶ  
きやう、袖に焼きかけ」。五人女四「肌  
につけし兵部卿のかをり、何とやらゆ  
かしくて」

ひやうぶまくら 屏風枕。屏風と枕と。  
又は、まくらびやうぶ（枕屏風）の語序  
を轉じたか。一代女「男は屏風枕に遠  
慮もなく」

ひやうほふづかひ 兵法遣。「ひやうはふ  
づかひ」を見よ。

ひやうもん 表紋（へうもん）。豹文。狂  
文（經文と混ずるので、ひやうもん）と讀  
む。評文。いろ／＼の色でいろどつた  
もの。又、紋をつづけず、放して丸紋  
にしたものといふ。最明寺殿百人上臈  
上「表紋（ひやうもん）の唐衣に、唐縫し  
たる柳裏」

ひやうり ひやうし（拍子）の訛。  
ひやくがう 白毫。佛語。佛の眉間にあ  
つて光を放つといふ毛。三十二相の一。  
後には、これに擬して、佛像の眉間に  
作つた圓形の光明を放つものをいふ。

大職冠三「二度玉を取返し、觀世音の白  
毫に籠めおきたり」  
百菊作るに由つて花變ず（詠）經驗・修  
行を積んで物事は成る。いろ／＼苦勞  
した結果、他に變つた働きもするやう  
になる。二代男三「世の中の巾着切も、  
腹の中からのそれしやにもあらず。百  
菊作るに由つて花變じて咲き出づる」

ひやくじゆつ 白朮。菊科の多年生草本。  
をけら。根は薬用とされる。薩摩歌上  
「白朮和中散」

ひやくぜに 百錢。楮（さし）に貫いた錢  
百文の稱。一代男七「手元にありし百錢  
をぬきて」

ひやくだう 白道。にがびやくだう（二  
河白道）を見よ。

ひやくにちほつけ 百日法華。他宗の信  
者が一時法華宗に歸依すること。油地  
獄中「代々の念佛捨て、百日法華にな  
る」

ひやくはずすめ 百羽雀。模様の名。多  
くの雀をつけたもの。五人女三「鼠糞子  
に百羽雀のきりつけ」

ひやくはち 百八。佛説にいふ數詞で、  
數珠、煩惱・鐘などに冠らせて用ひる。  
百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八の提善樹。菩提樹の實で作つた珠の

百八顆ある數珠のこと。最明寺殿百人上臈と「百八の菩提樹ならで、御身に添ふる物はなし」

ひやくはちまる 百八丸。百八顆の珠ある數珠。懷硯三「手に水晶の百八丸、蓮華に持添へながら」

ひやくみ 百味。多くの飲食物。各種の好味に食膳の豊かなこと。佛語に、「百味の飲食（おんじき）」などいふに據る。丹波與作下「西は百味の旅籠屋に、觀音せいし手を取つて」

ひやくものがたり 百物語。夜間、多勢の人が寄つて、妖怪の出る話などすること。化物ばなし。妖怪談。大句數上「ほどもなく鼠が荒れて猫の聲、半ばでやむる百ものがたり」。武道傳來記五「何と化物の出づる百物語とやらを始めては」

百様知つて一様知らぬ（諺） 博く物事に通じてゐるやうであるが、たほ片寄つた所がある。曾我會稽山「百様知つて一様知らぬとは御邊が事。的矢を業の矢といへばとて、惡業の業と心得、親の敵を射る事と、故實を一偏に覺えしな」

ひやくらい 白癩。誓ふ詞。若しこの誓

ひに背いたならば、罰として白癩といふ惡疾に罹つても厭はぬといふ意。轉じて南無三寶などと同じく、不意の出來事などに驚いた場合、又、決心など表はす時に用ひる。大職冠四「人をなぶるか、白癩開かぬと腹立つる」。武道傳來記七「文字に切付くれば、白癩これとは拔合せ」

百里來た道は百里歸る（諺） 榮花を極めたものは、また憂日に逢ふことも甚だしい。己れに出たものは己れにかへる。夕霧阿波鳴渡中「百里來た道は百里歸る。昔の榮耀ほどき目を見れば罪消えず」

ひやくみん 百韻。俳諧（連句）の一體。百句で一卷を成すもの。懷紙四枚を各二つ折にして用ひ、第一頁を初表と稱し、最後の第八頁を名残の裏と稱して、この二頁には各八句を記し、その他の頁、即ち第二頁（初裏）から第七頁（名残表）までの六頁には各十四句を記し、都合百韻（百句）とするもの。連俳中最も長い形式で、千句以上の形式も、この百韻を繰返したものに過ぎない。物種集上（是非果さんと行けばほどなく、百韻もすでに名残の花所）

ひやじる 冷汁。冷した汁。ひやしじる。大矢數五「坊主麥や爰を愚僧に任せよとて、冷汁うごく佛法の毒」

火屋へ片足（諺） 老いて死ぬに間がない譬。「棺桶に片足突つ込む」の類。五十年忌歌念佛上「年六十に餘つて、火屋へ片足踏込んで」

びゆ 美遊。おもしろい慰み。愉快な遊興。置土産序「世界の偽かたまつて、ひとつの美遊（びゆ）となれり。是を思ふに眞言を語り、揚屋に一日も暮しがたし」

ひようがしら 日用頭。日雇人の頭。日傭人の取締役。胸算用三「請取普請の日用頭に、富妻那の忠六といふ男」

ひようじ ひようじん（火用近）の略。火の用心。傾城反魂香上「曙近き火ようじの、聲高鳥の屋形には」

ひようそく ひやうそく（乘燭）に同じ。大矢數三「乘燭（ヒョウソク）も空にのぼりて薄霞、成るほど疾（シハ）い人の山住」

ひよく 比翼。比翼の鳥の略。雌雄各一翼一目で、常に二羽一體となつて飛ぶといふ想像上の鳥。古來男女の縁の濃かなことに譬へる。檜權三上「庭掃く羽

ひよくぎせる 比翼の悪縁底深き」

吸口が二本に分れてゐる煙管。又、一本の煙管で男女隣じく煙草を呑むことともいふ。冥途飛脚下「これぞ一蓮花生と、慰めつ又慰みに、比翼煙管の薄烟」

比翼の誓紙 夫婦約束を記した誓紙。「ひよく」の條参照。天網島中「熊野の牛王の村鳥、比翼の誓紙引きかへ」

ひよくのとりに 比翼鳥。「ひよく」を見よ。一代男「比翼の鳥の形は是ぞ」

ひよりにまち 日和待。日和を待つてゐること。よい天候を待合せてゐること。新可笑記「大湊に着きて日和待の舟景色を見しに」

ひよりにみ 日和見。日和を見はからふこと。天氣模様を伺つてゐること。又、その人。一代男「夢も結ばずありしに、日和見に起され、帆をまく音」。轉じて、事の大勢を觀望してゐて去就を明かにしないこと。

ひよん へん(變)の轉か。異様なこと。妙に解(げ)しがたいさま。困つた、をかした。大矢數三「若い時ひよんな事して入黒子(ホクロ)、其の戀衣月も得脱かぬ」。出世瀧徳上「ひよんな事が出来

ました、私やなんと致しませう」

ひらいんろう 平印籠。匣の特に平たく出来てゐる印籠。一代男七「平印籠に、色革の巾著」

ひらうどん 平饅頭。平たく幅ひろに打つたうどん。ひらうんどん。ひもかはうんどん、きしめん(類)。一代男二「芋川といふ里に(中略)、所の名物とてひら饅頭を手馴れて」

ひらかた 枚方。京街道の驛の名。今の河内國北河内郡枚方町。昔は牧場で、名馬「生倭」は此處の産といふ。

ひらぎき 枚開。神社の名。薩摩國の一の宮、祭神は猿田彦神。薩摩歌下「たれひらぎきの神の氏子の神うたや」

ひらく 開。退く。退散する。松風村雨東帶鑑「帝都を開き、妻子方まで散り散りの有様」

ひらくにち 開日。曆の詞。ひらく。諸藝の稽古始め、屋作り、引越し、出行、奉公人の雇入、婚禮、元服などに吉とする日。戀八卦柱下「我が身の悟りひらく日、あゝ嘆くまじ今更に何くよくよと凶會日(くゑにち)の」

ひらくら びらく。布片などの垂れ下つた目障りな形容から轉じて、不始末、

ふしだら、不義理の意。特に、借金など未済のまゝでおくこと。二枚袴草紙下「弟の善次郎は、兄にあぶせて銀ぬすみ、所々のびらくらを仕舞はんと」

ひらさら ひとへに。ひとへに。是非とも。努めて。一代女六「そなたの姿ながら、うか〜と暮し給ふは愚なり、ひらさら人なみに夜出給へと勧めける」

ひらしひ 平誣(ひらしひ)。次條の誤。大矢數三「有馬山湯でも水でも今飲ませ、ひら誣(シイ)にする笹原の末」

ひらじひ 平強。ひたすらに強ひること。押しつけて求めること。

ひらしやら しまりないさま。ひらしやら。びらりしやらり。卯月紅葉上「如何に男を持つたとて、若いなりしてびらりしやらと、あんまりほたへさつしやるな」

ひらたくたい 平たい。ひらつたい。うちつけた。不躰な。槍狩劍本地「鈍口そらして、どうさんせ、かうさんせと、ひらたくたい口上が、どう主人へ言はるゝものか」

ひらたらう 平太郎。常陸國の百姓牧太郎(ひらたらう)のこと。その妻と共に深く親鸞上人に歸依した話は、平太郎

事蹟談などいふ書物にもなつてゐる程である。

**ひらだる** 平杖。手のない桶に似た、平たい椀。

**ひらづけ** 平着。ひたと着けること。ちかきに寄せつけること。

**ひらづつみ** 平包。うはざし(上刺)をした風呂敷の類。又、それで包んだもの。

卯月潤色中「やあゑいと、平包をどうと下ろして」

**ひらなか** 半文。半銭。びたひらなか(鑑半文)を参照。油地獄下「一生夫の銭金、文字ひらなか違へぬ身が」

**ひらに** 平に。ひたすら。一途に。初めから。一代男一「ひらに若衆狂ひも面白

いものぢやと、世之介様をさまゝ勤めて」。又、どうぞ。是非とも。重井

筒中「堺の客は正月を頼まねばならぬ人、ひらにやつて下さんせ」

**ひらのごんにやく** 平野蒟蒻。攝津國住吉郡平野莊から産する蒟蒻(攝陽群談)

重井筒中「平野蒟蒻、菱つむぎ」

**ひらのちゆうあん** 平野仲庵。(人名)仲庵はまた仲安に作る。書家。松葉軒と

號して、京都に住んだ。松花堂(昭乘)の門人である。永代藏ニ「手は平野仲庵

に非道をゆるされ」

**ひらのめ** 平野目。木綿に用ひた秤の目。大矢數ニ「綿賣や關東までも隠れなし、利根な顔つき平野目がきく」

**ひらのやゑきやう** 平野屋ゑきやう。「ひらのやくすり」(平野屋藥)の誤寫であらうといふ。一種の房藥。重井筒中「平野屋ゑきやう、肥後すいき」

**ひらはり** 平張。天井の平たい張幕。あげばりの對語。日本振袖始ニ「梓川原に平張うたせ」

**ひらもとゆひ** 平元結。平髻。長丈(たけなが)の紙を細く疊んで作つた元結。たけなが。一代男七「髪ちご額にして、金の平元結を懸けて」

**ひらよみ** 賭博の用語。特に、骨牌で行ふものにいふ。大職冠四「かねて工みし事なれば、又ひらよみにまき直し」

**ひららく** はららくの轉。ばららくにな鳴るくわれ散る。曾我會稽山一「ごんと略、あとはひららく天窓の骨、碎けて百八ぼんのくぼ」

**ひらりしやらり** 右行左行。あちこちと動くさま。一代女四「同じ所を四五へんも、右行左行(ひらりしやらり)と連れ

て廻り」。又、ひらしやら。

**ひらりばうし** ひらり帽子。女が外出の時、笠の下に用ひたもの。紫緋縮で額を覆うて左右に垂れ、鍔(おもげ)を入れず、ひらひらと翻りやすいので稱する。もと、歌舞伎役者の女形が創めたものであるといふ。卯月潤色中「ひらり帽子に加賀笠、大振袖の後帯、どんな者でも見返りて」。油地獄上「ひらり帽子のふか〜と、眉は隠せどとりなり

の」

**ひられんじゆ** 平連衆。普通の仲間。俳諧などで、特に稱呼も役目もない連中。

**ひらをかのみや** 牧(枚)岡の宮。河内國中河内郡枚岡村にある官幣大社。祭神は天兒屋根命、その他二柱。祭日は二月一日。大職冠三「鎌足は河内の國平岡の宮、兒屋根の御神にて一七日御參籠」

**ひらんば** 毗藍婆。梵語(Vairahdya)。

大暴風。猛風。毗藍婆風。ひらん。ひらんのかせ。釋迦如来誕生會四「我慢にとぼす萬燈なれば、汝が一念、らんば、ひらんばの悪となつて、萬燈を一時に打消し」

**びり** 小さい者を譬つていふ。こわつぱ。こめらう。こびつちよ。傾城酒吞童子

ひ

四「こりやびり奴、(中略)サアぬかさぬか」

びりこく 備利國。遊治郎の名であらう。二代男四「怒めしの世や、備利國が針立に成るも、木半が土人形をするも、鳥吉が小道具店出すも、是れ皆味な事知り過ぎてなり」

ひりほふけんてん 非理法權天。楠正成の旗に記した五字。非は理に、理は法に、法は權に、權は天に、それ、打勝つことが出来ないといふこと。織留六「正成が一戦のさし物旗に、非理法權天この五字を書きしして、義を重く死を軽く、非は理をもつてうち、理は法をもつてうち、法は權をもつてうち、權はまた天運にまかせ、數度の戦に利を得ざるといふ事なし」

びりよ 尾閭。大海の底にあつて、絶えず水を漏らすといふ穴(莊子、秋水篇)。織留三「人間に一つの口あり、この尾閭の如し、一生のうち朝夕食物かざりもなし」

ひる 簸る。穀物の塵などをあふり振ふ。箕などに入れた穀物を、風の立つてゐる處で振ひ落して、屑を去る。男色大鑑ニ「箕實、笠でひるの類なるべし」。新

小夜風物語下「細かに踏み碎きて、ひたり篩うたり」

ひるがね 蛭金。金屬を伸して板のやうにしたもの。いたがね(板金)。傾城酒呑童子「兵庫領の白銀作り、筋金・ひる金・しのぎの金」

ひるこ 蛭子。伊弉諾尊の生み給うた御子。三年経つても、足が立たず、舟に乗せて海原へ流されたと傳へられる。十福神の惠比須様はこの神であるといふ。源氏烏帽子折五「天の岩戸の暗き世も、爰は蛭子の御社、(中略)海を譲りに受取り給ひ、西の宮の惠美須御せん」

ひるさがり 書下り。未(ひつじ)の時。午後二時ごろ。

蛭に鹽 (諺) 青菜に鹽ともいふ。何の抵抗もなく、すぐにくた〜となる譬。蛭は鹽に弱いのでいふ。

蛭の地獄 永代藏三「この鐘(無間の鐘)を突きて分限になれば、今の世の人末の世には蛇になる事もかまふべきか、まして蛭の地獄など恐しからず」

ひるばしり 晝走。晝間に走ること。船路などにいふ。夜行の對語。男色大鑑七「風なくて十一日の晝ばしり、備後の鞆の浦に入り」

ひれ 位牌に冠らせるもの。納地などで作り、袋状をなしてゐる。鏡臺の附屬品にいふ領巾(ひれ)と同じやうなものに見える。卯月潤色中「白縮緬のくけ帯(中略)、位牌のひれに結びつけ、端をゆん手にしつかと絡み」

ひれふるやま 領巾振山。肥前國東松浦郡唐津の東南にある山。大伴狹手彦が唐土へ渡るとき、その妻佐用姫がこの山へ登つて領巾を振りつゝ見送り、惜別の悲みの爲めに石に化したと傳へられる名高い山。ばうぶざん(望夫山)の條参照。

ひろろ 尾籠。をこ(尾籠)を音讀した語。無禮。失禮。出世景清五「當座の御恩は早忘れ、尾籠の振舞面目なや」。又、ふしだらなこと。汚しいこと。油地獄上「若い女が若い男の帯といて、そして跡で紙で拭ふとは、尾籠至極うたがはしい」

ひろぐ 爲す・行ふなどの動詞にかへて言ふ語。他人の行爲を罵るに用ひる。(四段活用)。日本振袖始三「蘇民將來が道だてひろいで貧乏かはく」。油地獄中「うち〜ひろがば町中寄せて追出すと」。同下「よい年をして馬鹿ひろぐな」

五三四



ひろしき

廣敷。臺所の上り口に接した板の間。又、茶の間などの板敷のところ。永代藏五「掛乞(中略)、廣敷の中程に腰かけて、煙草吸はず、茶飲まず」。織留六「お膳の取り捌き、廣敷より内の掃きさうぢ」

ひろびろ

なまめくさま。しまりのないさま。娥歌可留多四「女子を見ればびろ」と。戀八卦柱曆上「その猫め、ぎやあぎやあと吠えるが能で(中略)、男猫を見てはびろ」と、屋根も垣もたまらぬ」

ひわたし

火渡。ひまはし(火廻)に同じ。二代男三「紙燭の消えぬ間に、愛宕様と火渡して」

ひんが

頻伽。迦陵頻伽の略。梵語(Hya Iavika) 逸音鳥、妙聲鳥などと譯す。形體・音聲ともに衆鳥に秀で、微妙超逸、見聞する者をして神思を愉悅ならしめるといふ。かりやうびん。國性爺一「數多の女官同音に、かちどき揚ぐる頻伽の聲」

ひんかがみ

鬢鏡。鬢など映して見る鏡。小さい懐中鏡。武道傳來記「求馬は鬢鏡取出し、姿を映じて、黒髮撫で付け」貧家には故人疎し(謔) 貧しい家には

ひ

舊知の人も自然に疎遠にする。貧すれば親しい人にも疎んぜられる。大職冠五「貧家には古人疎しとは、今身の上知られしと、かき口説き」と。本朝文粹、橋在列の句「家貧親知少、身賤故人疎矣」

鬢切る 鬢を剃る。薩摩歌上「これゝ先な絲鬢の鬢かりつけた鎌鼯奴」

びんぎり 鬢切。鬢を引きしめるやうにして、たぼ(髷)から離し透かせて結ぶこと。若衆又は少女などに行はれた髪の方。一代男一「其頃下坂小八がかりとて、鬢切して立懸けに結ふこと時花(はや)りけるに」。榮花咄四「鬢切したる女童に足の裏をいらはせ」

びんきりせうぢよ 鬢切小女。髪を鬢切にしてゐる少女。新可笑記「うかれ女に使はれし鬢切少女一人」

びんごおもて 備後表。壘表で、最上なもの。備後地方から産するので稱する。



り き ん び

丹波與作上

「蕨の外踏みもならはぬ備後表、エ、此座敷は、ぎやうに滑つて歩かれぬ」

びんざさら

編木子。拍板。一種の樂器。長さ五寸、幅二寸程の薄い板を數十枚合せて、その一端を絲で綴ぢ、他端を動くやうにし、兩手で引つ張つて鳴らしたるもの。もと、田樂法師など用ひたが、後には歌比丘尼などが用ひた。一代男七「びんざさらに乗せて、來ずに待たする殿はうらみと歌ひしは、やれ、爰の傾城町とや」

ひんしやん

びんしやん。びんしやん。跳ねあがるさま。活動のきびくしてゐるさま。油地獄下「いかい世話のと、弄つてひんしやん行きすぎる」

ひんず

和訓栞に「ひんづ、俗語也、干水の義なるべし。ひんづ」とある。今日京阪地方で「有り餘る」又は「豫想外」などの意に用ひ、「ひんづの物入」などいふ由。松風村雨東帶鑑「拙者は一度死ぬべき身、御情にて今までながらへたるがひんずの命、何處にゆかりもかりもなし」

ひんせん

貧錢。貧賤の誤か。なまなか

ひ

貧乏の種になる錢といふ意の造語か。  
永代藏<sup>四</sup>「この家に傳はりし貧乏錢を二代長者の奢り人にゆづり、忽ちに繁昌さすべし」

ひんづる ひきいづる(引出)と、佛語の賓頭盧(びんづる)とをかけた語。せびる。無理に取る。せがんで手に入れる。松風村雨東帯鑑<sup>三</sup>「たま〜逢うた男を、餓鬼の物をひんづる、小猿の頬を押すやうに、あんまり出来ぬ御差配」  
ひんとする 腹を立てた様子にいふ句。つんとする。最明寺殿百人上臈上「エイ錢取つて濱へ行くやうな者ぢや御座んせん」としてひんとする」

ひんなり しなやかなさま。すんなり。  
ひんぬき 引拔。えりぬき。その特色を表はしたも。きつす(生粹)。物の上手。丹波興作中「あそこへ譲うて来る本小むるのひんぬきは、興作々々」  
貧の花ずき(謔) 身分に過ぎた風流。最明寺殿百人上臈上「斯様のさまに衰へ、言はれぬ貧の花好きと、皆人々に參らせて」

ひんばくわ 頻婆果。頻婆といふ木の實。林檎に似て極めて赤いものであるといふ。

貧は諸道の妨げ(謔) 貧乏では何事も思ふやうにならぬ。吉野都女楠<sup>二</sup>「貧は諸道の妨と、世のことわざも我が身の上、エ、無念口惜しや」

びんびざけ びん美酒。美酒に同じ。びんとは口拍子に添へていふ。戀八卦柱曆上「曆くばりの先々の、びん美酒の麴の花、ちろ〜目にて立歸り」  
びんびと ばつばと。紙類を惜しげもなく使ふさま。冥途飛脚上「親仁の咄に、鼻紙びんびと遣ふ者は曲者じやといはれたが」

びんぼふゆるぎ 貧乏揺。膝などぶるぶる揺がすこと。何かの折に癖として身の内を動かすこと。貧乏ゆすり。大矢數<sup>二</sup>「尾行(ビコ)〜と貧乏ゆるぎ森の月」

びんみづ 鬢水。びんを撫でつける時用ひる水。又、美男かづらの莖を漬けた水。鬢の艶を出す水油。  
びんみづいれ 鬢水入。鬢水を入れておくと固く平たい器。小判形のびんつけ入。冥途飛脚上「この櫛箱に焼物の鬢水入」  
ひんよゑい 木遣歌のかけ聲。萬年草上一時に麓の山とよむ、木遣にのりのひんよゑい」

びんらうじ 檳榔子。染色の名。暗黒色。次條参照。  
びんらうじぞめ 檳榔子染。檳榔子色に染めた布。榮花咄<sup>三</sup>「黒赤物、檳榔子染、小太夫が首筋」

ひんらく 貧樂。貧乏すれば氣が樂なこと。貧しいながら心が安いこと。大矢數<sup>二</sup>「昔はむかし喰はず貧樂、寝て起きてきて其後は目を塞ぐ」。置土産<sup>二</sup>「この後は我々うけとり、貧樂に世を渡すべし」

ふ

ふ歩。貨幣の名目。一兩の四分の一。一代男<sup>四</sup>「十人の舞子集めける、一人金子一步也」

ぶあく 武悪。武悪といふ者を主人公とする狂言の曲目。亡靈となつた武悪が冥土の話などして、太郎冠者と共に大名を愚弄する話である。大矢數<sup>三</sup>「浄土の春をぶあくが語る、年玉の扇もとらせ何もかも」  
ふあひ 不合。仲の悪いこと。不和。武家義理物語<sup>四</sup>「かねてふあひの仲間、豊

浦浪之丞そねみにて有るべき。櫻陰比事二「この四五年間(ふあひ)に罷り成り候人の名を指し」

ふいごまつり

鑪祭。陰曆十一月八日、鍛冶屋・鑄物師その他、鑪を用ひる業をしてゐる人達が、その守護神とする稻荷様を祭ること。ふいがうまつり。火燒。大矢敷二「食乏鍛冶まで鑪祭に、まつ七日八日上りし稻荷山」。一代男五

ふいご

「小鍛冶の弟子(中略)、吹草祭(ふいごまつり)の夕暮に立ちしのび」  
ふいごい ぶいごい、ぶうごい、又はぶつくと、腹立たしく咳くさまにいふ。又、その咳く奴、ぶいごい言ふ人を罵つていふ。油地獄上「何きぶいごい共、人嚇しの腕に色々の彫物して喧嘩に事よせ」

ふうぎ

風義。風儀。様子。身のこなし。態度。一代男六「風義は一文字屋の金太夫に見ますべし」。同七「この太夫風義を、萬につけて、今に女郎の鏡にする事ぞかし」

ふうすい

風吹土。風水洞が正しい。支那の名勝。じせつすい「の條を見よ。」

ふうぞく

風俗。前々條の類語。身なり。衣服の着こなし。すがた。容貌。二代

男八「生れつきたる風俗を、俄に作り直しても、鼻缺けは直らず」。同一「近江竊一反裁合せば、風俗も見よきに、殘して何の役にも立たざりしきれを惜み」

ふうぞくかがみ

風俗鑑。俗つれん。紅粉は白皮を彩る花、男女に限らず、身の暗み深きを人の風俗鑑といへり」

ふうぶう

「ぶいぶい」の類語。ぶつくと理窟をこねること。又、その人。ゆずり。丹波與作中「じたい八めはぶうなり」。又、風の吹く擬聲語。夫婦は同じ體(謔)夫婦は一心同體ともいふ。出世景清四「夫婦はおなじ體なれば、皆是れわが身をせむることわり」

ふうらいじん

風來人。何處から來たかわからぬ人。流浪人。國性爺二「ヤアアアうぬはいづくの風來人、我が功名を妨ぐる」

ふうらいもの

風來者。前條におなじ。ふうりうちん 風流陣。唐の玄宗皇帝が、華清宮で楊貴妃と宴する時、百餘人の宮女を兩陣に分けて、手毎に旗を持たせて戦はしめ、敗けた方に罰盃を課したといふ故事。國性爺二「勝つも負くるも風流陣かゝれやかゝれと宣旨ある」

ふうりん

風輪。風の神。又、風が輪のやうに廻つて吹くこと。

ふう男

富男か。不男か。加増曾我二「とかく浮世にない物は、頭巾着ぬ犬黒殿、雷のかん調子、扱戀知りのふう男、是が世界のきれ物」

ふえのくさり

笛の鎖。喉笛の鎖。咽喉の氣管。卯月紅葉書「わが咽喉(中略)南無阿彌陀佛とふえのくさり、髮刺の刃も折れよと一とぞり」

ぶかう

不功(ぶこう)。つたないこと。無巧。巧者でないこと。未熟。孕常盤三「馬追ふことは不功なれど」

深江のお七ざし

菅笠にいふ語。河内國深江村から産する菅笠で、お七好みの刺し方をしたものであるといふ。一代女三「黒羽二重の頭隠し、深江のお七ざしの加賀笠」

ふかくさのげんせい

深草元政。法華宗の高僧。京都の人。諱は日政、號は妙子。空子。幻子などいつた。性至孝で、内典外典に通曉し、世塵を離れて山城國深草に庵を結び、常に勤修を怠らなかつた。寛文八年二月寂す、年四十六。永代藏二「詩は深草の元政に學び」

ふかしい

深い。「委しい」などから類

ふ

推した語。深い、こみ入つた。重井筒と「わたしが詩合ひふかしい事こそ」

ふかづきん 深頭巾。頭巾を深く冠ること。又、布で深く顔を覆ふこと。戀八

卦柱脛上「目ばかり出す深頭巾」

ふかづつて 不勝手。勝手のわるいこと。暮し向きのわるいこと。貧乏。百日曾

我五「たゞさへ不勝手の時我殿、御兄弟に離れ、さぞ不自由に候はん。貧者の

お茶只飲みはいかゞなり」

ふがてん 不合點。合點しないこと。聞きわけないこと。不承知。源氏烏帽子

折二「是非追拂へと云ひけれども、女房更に合點せず(中略)、エ、不合點な、いで某が追退けん」

ふか(鱧)の刺身 極めて贅澤なおごりとされてゐた。置土産三「病中の願に鱧の刺身を食うて死にたい」。俗つれれ三

「細元手をやう〜に仕出し、折節は鱧の刺身も食ひ」

ふがはり 斑替。普通よりも違つた斑。毛色のかはつたものなどいふ類。源氏

烏帽子折二「斑替の雀が來つて、由なき事を囁るよな」

ふかふか うか〜(浮々)に同じ。うつかり。梟狩劍本地一「かゝる御會議もな

くふか〜との將軍宣旨、御政道の暗き事。ふか〜。

ふかんぜんし 豐千禪師。支那天台山國清寺の僧。髪を剪り眉を齊へ、一布衣

を着し、虎に乗つて道歌を誦しながら出行し、衆僧を驚したといふ。同寺の

寒山と拾得との二人の奇僧は、豐千の拾つて來たものであるとも傳へられ

僧と、その虎との睡つた圖のことである。傾城反魂香上「豐千禪師の四睡の

虎」

ふきあげ 吹上。風の吹きあげること。又、その吹きあげるもの。吹きあげ

ところ。五人女四「谷中の鐘せはしく、吹上の榎の木朝風はげしく」

ふきかけてぬぐひ 吹懸手拭。手拭を「ひらりばうし」のやうに用ひたもの。

塗笠などを冠るとき、よくする風である。一代男二「今

はやるふき懸手拭、塗笠の内たゞ人も見えず」

ふきづと 吹巻。巻をふくらませた髪。十二段二「置手拭の下くゞる、風のふき



ひくぬてけかきふ

づと露こぼす」  
ふきぬき 吹貫。吹抜。旗の一種。圓い輪に布をつけて、中を風が吹きぬけるやうにしたもの。もと、軍陣に用ひたもの。一代男八「緋縮緬の吹貫」。出世景

清一「弓・槍・長刀・ふきぬきに」

ふきの雪うと 落の姑。落の菜(たう)の稱。雪う五枚羽子板下「茅花杉菜にさいたづま、妻は誰が妻老いぬれば、落の姑〜」

ふきびん 吹鬢。ふくらんだ鬢。鬢をだぶ〜と出して結つた髪。俗つれれ〜

四「顔は日のうつりに向はせて陰より見透かし、ふき鬢の沈みやうにして、地髪は少きは知れるものぞかし」。文武

五人男一「素顔にかゝる吹鬢の、髪のつとさへなりあひに」

ふきや 吹矢。木製の筒に紙の羽の矢を入れ、強く吹き出して物を射るもの。物種集上「ねがへ只來世の事は長茄吹

矢の筒は六角の寺」

ふきや 吹屋。金鴈のふきわけ(精鍊)又物を鑄ることを業とする家。又、その人。源氏冷泉節下「何處ぞに、銅の吹屋

が棲んださうな」

ふきやうぼさつ 不輕菩薩。凡そ見ると

ころのもの皆を禮拜・讚嘆し、且つ「我れ深く汝等を敬ひて輕慢せず。蓋し汝等は皆菩薩の道を行ひて、まさに佛となるを得べければなり」と、信じてゐた菩薩の稱。不輕比丘。常不輕菩薩。百口曾我曰「不輕菩薩は打擲され、憎まれながら妙覺の、佛の位に至り玉ふ」

**ふきよう** 不興。ぶきよう。ぶけう。興をさますこと。又、機嫌をそこなふことを。不機嫌。不快。

**ぶきようす** 不興す。無興す。氣をわるくする。腹を立てる。武道傳來記ハ「岸右衛門以ての外不興して、散々しかられし迷惑」天網島上「侍大きに無興し」

**ふきよせどう** 吹寄藤。弓に藤を二所づつ寄せて巻いたもの。

**ふくさ** ふくさう(福相)か、ふくしや(福者)か。胸算用四「賤しからずふくさなり」

**ふくさ** 服紗。(一)柔かい絹。五十年忌歌念佛中「生れて知らぬ木綿物、服紗の衣と引締めて」。(二)物を包み、又は贈物などにかける、絹・縮緬などで作つた裏付の方形のもの。(三)茶の湯で、茶器を拭ひ、又、茶碗を受ける方八寸程の帛。

**ふくしま** 福島。(地名)大阪堂島の北、

ふ

名物雀餅を賣る店があつたといふ。今宮心中上「櫻山庄左衛門福鳥ちやとおしやる。心はの。(中略)、藝に味もある口中のしよりくしたる雀餅」

**ふくしん** 服心。服する心。納得する心持。懷硯曰「再々嫁入りし事ある様に語るに(中略)それには少しも襟はずと、服心なかりし上」

**ふくじん** 福人。福のある人。有福者。金もち。資産家。永代蔵三「江戸の福人伊勢參宮の downward にこれを見そめ」

**ふくそう** 福僧。有福な僧。金持ちの坊主。男色大鑑五「諸國諸山の福僧京着して、御法事の後色河原を見物しけるに」

**ふくとじる** 河豚魚汁。河豚を料理して味噌汁などにしたもの。ふぐじる。西鶴五百韻「假令死んでも彌陀の本願、ふぐと汁空々じやく」腹心」

**ふくぼんしゆ** 覆盆酒。覆盆子(いちじく)で醸した酒。莓酒。

**ふくみじやう** 含狀。恨みごとなど認めた信書。心の中を訴へる書面。兩吟一日千句「送らるゝ爪に添へては含狀、おもひの色をみだれすがかき」。最明寺殿百人上臈上「一期の遺恨を書きあらはし、口に含んで失せ給ひし、ふくみ

狀と申すもの」

**ふくらすずめ** 服雀。ふくらかに肥えた雀。又、その羽を延ばした形の模様など。

**ふぐり** まつふぐり(松穂)の略。まつかさ。物種集上「ふぐりおとすな岸の松風」。又、陰囊のこと。

**ふくりふ** 腹立。腹を立てること。立腹。怒ること。大下馬「何の情もなしとて腹立して御殿に駈入り」

**ぶくりやう** 茯苓。菌類の一種。松根に寄生し、塊根状をなし、厚い皮部と肉質顆粒状の内部とがある。古來、薬用とする。陸摩歌上「うまい事仕り、旦那茯苓いたされ、詮議まち」麥門冬」

**ふくろくづ** 袋葛。袋に入れて賣るやうにした葛粉であらう。萬文反古五「安元に澤山なる袋葛三、又まげ物は鹽漬の穂蓼にて御座候」

**ふくろご** 袋子。胎兒の卵膜に包まれたまゝ生れたもの。孕常盤三「逆子、袋子、徳利子、あとさき膨れて中で詰つた瓢箪子でも」

**ふくろざや** 袋鞘。槍の鞘に、羅紗・なめし皮などの袋を嵌めたものをいふ。薩摩歌上「すゝ竹らしやの袋ざや」

ふ

ふくろたな 袋棚。床の間などの脇に壁に張り出して作る棚。ふくろとだな。

ふくろたひ 袋足袋。親指を入れるところのない、たゞ袋の様に作った足袋。

一代男七「運齋織の袋たび、中ぬきの細緒をはき」

ふくろちぢ 袋乳。袋のやうにふくらんで、だぶ／＼した乳房。松風村雨東帯

鑑一「その名は包む袋乳、乳筋は爾方十二筋」

ふくろぬひ 袋縫。縫ひ方の一。裁つた布の端の合せ目が見えないやうに、一旦表から縫つて、更にその部分を内側に隠して縫ふこと。榮花咄「肌に白

繻子、袋縫ひの小袖着て」

ふくろぶ ぼころぶ(縦)に同じ。男色大鑑七「無理ばきの革足袋のふくろぶる

を用捨なく。傾城反魂香中「堪へるだけと包めども、咽びふくろび泣きゐたり」

鼻は松桂の枝に鳴く 白氏文集、凶宅詩の句に、鼻鳴松桂之枝、狐藏蘭菊之叢とある。荒廢した景を叙したもので、太平記や、謡曲などにもよく引かれてゐる。下文もこれに據つた例である。一代男一「鼻松桂、草がくれ」。兩吟

一日千句「秋の風鼻に頭巾きせさせて、松桂の月時宜なしに出よ」

ふくろまち 袋町。路の行きどまりになつた町。又、地名。二十不孝三「分別ばかりして、袋町乳森の遊女を知らず」

ふくわい 不會。不和。ふあひ(不合)の類語。武道傳來記「權之逸と自分が日比不會なる事は、少しも遺恨の子細に非ず」

ふけい 符契。わりふ。符節。

ふけた ふかだ(深田)の轉。泥の深い水田。大下馬三「百日の早、ふけ田も干湯となつて」

ぶんげん 分限。金持の身分。富豪。ぶんげん(分限)ともいふ、その條参照。一代男四「親もなく子も持たず七代の大分限。二十不孝一「隠居の貯へあるに、極まれる分限なれども」

ぶんげんしや 分限者。前條に同じ。薩摩歌中「お國はおろか、つくし九箇國隠れないぶんげんしや」

ふご 舂。籠。繩の紐をつけた竹製の籠。棒の先などにかかけ、物を擔ひ運ぶに用ひる。大矢

數四「秋の雨かうした



棒は笠の内、まつ肩越て細道の籠(フゴ)。二代男一「舂に酢徳利、鹽朽ちたる目黒(中略)、片荷には横骨の障子」

ぶこう 不功。不巧。ぶかう(無巧)に同じ。

ふこうぎ 不公儀。公儀を知らないこと。世なれないこと。不作法又は非社交的なこと。こうぎ(公儀)の参照。虎溪橋「不公儀を大臣なげき給ひけり、衛士籠などは知らぬ袖の香」

ふごじり 舂腎。舂のやうな聲。大きくて平たい聲。

ぶさい 無菜。菜のないこと。副食物のないこと。轉じて、御馳走の少ないこと。粗釜。五人女二「来る十六日に無菜の御齋(とき)申上たく候。武道傳來記

六「無菜の振舞に是非呼びうけ、食類に和(まじ)へて一服さすれば」

ぶさた 無沙汰。怠ること。油斷。不用心。不取締。卯月紅葉中「男ぎれは一人も居ず、倉に錠もおろさぬか、扱々ぶ

きた千萬」

ふさつきまくら 房付枕。飾りに房を附けた枕。ふさまくら。榮花咄「炬燵に房付枕二つ並べたる、悪い程しほらし」

ふさぬ 總括する。ふさ(總)を動詞とし

た語。頼朝伊豆日記曰「伊東・河津・宇佐美三箇の所、是をふさきねて精美の庄と申也」

ふさまくら 房枕。前々條に同じ。男性

大鑑曰「晝寢の房枕夜すがらの戯れ」

ふさよじき 不作餘食。佛語。餘分の食事をしないこと。定まりの食以外に食べないこと。乞食・次第乞食・一坐食・

一掃食・不中後飲漿と合せて、六種食と稱する。不作餘食法。孕常盤二「不作餘食と申して、一時の食の外とは、受けぬが頭陀の法ぞかし。只一錢一粒の施しあれ」

ふざんのしんによ 巫山の神女。楚の襄王が晝寢の夢の裡で契つたといふ女。

女、去るに及んで王に曰ふ、「妾在巫山之陽、高丘之岨、且爲朝雲、暮爲行雨、朝々暮々、陽臺之下」(宋玉文、高唐賦)。

ふざんよう 不算用。損得を考へないこと。まうける心がないこと。打算にうといこと。出世瀟灑下「思へば、不算用、そなたの身を賣らす程ならば、三百兩もしてやつて、賣りへぎの百兩も手に持たがよい筈」

ふじおろし 富士威。編笠の一種。富士

の山の形をした大きな菅笠。男性大鑑  
\*「富士おろしといふ大編笠ぬげば」

ふしかねぞめ 五倍子鐵漿染。染色の名。

ふしのき(膚木)の樹皮又は葉に生ずる暗色瘤状の五倍子と鐵漿(かね)とを原料とした染料で染めた色。黒い色。五人女二「女はふしかね染の縞を織りならひ」

ふじさんり 風市三里。灸點の語。膝の關節の下へ、上に一つ、下に二つ、富士山がたに据ゑるものといふ。日本振袖始二「足へ下ればふじ三里、灸と針とに行方なく」

ふししば 伏柴。しば(柴)。小さい雜木。釋迦如來誕生會曰「荷ひて通ふ伏柴の、暫しやすらひ立ち給ふ」

ふしづけ 柴漬。伏漬。體を養卷などにして水中に沈めること。もと、魚を捕へるために、柴を束ねて水中に沈める

柴漬に形が似てゐるのでいふ。源氏冷泉節下「玉の様なをのこ子を(中略)、松川の水底に、伏漬に沈め給ふ」

富士と一里塚 (諺) 相及ばぬことに譬

へる。一里毎に築き、上に樹木を植ゑて道標とした塚は、富士の高きとは比べものにならぬ。五十年忌記念佛中「主

の娘と念比など、駿河の富士と一里塚、及ばぬことを、エ、あはうな」

富士の烟と長柄の水底 前條と同意。懸隔の甚だしい譬。武道傳來記「富士の

烟と長柄の水底程の思はく違ひ、いかなる縁にや是程いとほしき御方に逢ひ參らするも不思議の一つ」

富士の人穴 富士山の麓(富士郡)にある

穴。源頼家の命によつて仁田四郎忠常が五人の従者と共に探検し一晝夜を要して従者を皆失ひ、一人歸還したと傳へらる。曾我會稽山曰「富士の人穴に入つて、地獄の底まで名を顯はし」。廣塚

談「予此の穴に入る事三十間計り、内の様子を見るに、譬のほとりまでひたり、中々先へ行く事を得ず、寒き事雪中に

立居るが如し。(中略)、此の穴のある所を人穴村といふ。彼の穴を此の村の氏神なりといふ、その神號を知らず

富士は磯 磯は(沖に對して)物事の淺近

な譬、富士の高きも、男女の思ひの丈に比べると言ふに足らぬ(磯である)などの意にいふ。いそ(磯)の條參照。色道大鏡「磯、富士は磯といふ上略也。富士は磯といふ詞は昔より人の能く知りたることなれば、是を略し短くいふ

ふ

よ

也。虎溪橋「雪汁に富士は磯なるいはしさい、五文で買った田子の浦浪。懐硯ニ「何處の虹ぞ、今反橋渡せる夕景色、紀三井寺の有様、近江なる湖此處に譬へて、都の富士は磯と詠めり」ふしはかせ 節博士。霰譜。諸物。語物などの文句の傍に、墨でその節の高低、長短を指示した符號。ふしづけの記號。はかせ。ごま(胡麻)。

ふしみさんずん 伏見三寸。嫁入道具の小さい葛籠(つづら)の名。五人女ニ「縁の約束極め、(中略)吉日をあらためられ、二番の木地長持ひとつ、伏見三寸の葛籠一荷、糊地の挾箱一つ」伏見のさざなみ 乗懸馬の呼び名。一代男五「大阪の黒舟といふ乗懸馬、伏見の漣波(さざなみ)、淀のはんくはい、かれこれ三疋揃へて、七つ蒲團を白縮緬にしめかけ」

ふしもの 賦物。連俳の用語。連句の中に、名所・物語の名、調度の名、景物の名などを讀み込むこと。和歌の「物名」から轉化したもので、いはゞ言語上の遊戯である。これに上賦と下賦とある。例へば、上賦の題は「賦山何」、下賦の題は「賦何山」の如く記して賦物を定め

「何」の字に代るべき字、即ち「山」と連續して一語の意を成す字を句中に讀み込むのである。この法は、もと、連句のすべてに施されたものであつたが、後には發句にのみ試みられるやうになつた(俳諧辭典に據る)。大句數上「戀といふ一字は世々にあるならひ、賦物は何うき名立つらん」

ふしやう 不祥。不運。因果。迷惑。特に、迷惑なことを因果としてあきらめる場合にいふ。「なり」の活用を附して形容詞的に用ひるのが常である。不承。不請。五人女ニ「物にやはらかなるが氣には入らねども、親類のふしやうなりと、膝枕してゆたかに臥しける」。織留

六「貫ひ乳の不自由さ、盡こそ人も世のふしやうにてくれける」。胸算用五「世の不祥なればとて、邊の衆に思はぬ厄介かくる事、これ大きな罪とぞ嘆きける」。同「入聲の不祥に出ていなしやるが男の本意ぢや」

ふしやう 不請。願はしからぬこと。いや／＼がらすること。ふしやうぶしやう。迷惑。萬年草中「九兵衛不請な調子にて」。前條参照。ふじやう 不祥か。不情か。

宵庚申中「そなたもかる／＼三度の嫁入、尤も始めの男(中略)、心ふじやうに身舂を持ちくづし、たゞずみもない様に成果てあかね別れ」ふしやうがほ 不請願。不請な顔つき。迷惑さうな顔。源氏烏帽子折目「さあちやく／＼と咄さば咄せと、不請顔にて聞きわたる」

ふしやうながら 乍不祥。憚るべきことながら。人に迷惑のかゝることながら。一代男七「不祥ながら腰懸けて、小盃も數重なれば」ふじゆ 膚受。膚にちかに受けること。痛切な訴へごとなどにいふ。論語の顔淵篇に「浸潤之譖、膚受之愆」とあるに據る。

ふしゆしやうがく 不取正覺。佛語。正覺を取らないこと。成佛しないこと。阿彌陀佛の誓はれた語で、四十八の願文の終には一々この語がある。この願の成らぬときは、長へに正覺の果位に入らざるべしとの誓約は、遂に成就して、衆生はこの悲願によつて安樂界に到ることが出来る。この堅固な願力に乗ずることを、安全な輿に乗るに譬へて、「不取正覺の輿」といふ。



**ふしゆび** 不首尾。結果のわるいこと。

不とき。不都合。不始末。二十不孝  
「一歩残らず撒散らして、不首尾顯は  
れ渡り」

**ふしよぞんにん** 不所存人。所存のよく  
ない人。考への悪い人。腹ぐるい人間。

曾我會稽山三「京の小四郎の不所存人  
さへ、ひつ添うて看病」

**ふじんいしや** 婦人醫者。婦人科の醫者。

**ふじんじやう** 夫人城。「朱序が母」の條  
を見よ。

**ふしんぢゆう** 不心中(ふしんぢゆう)。心  
の中に誠のないこと。特に男女の仲に  
於て眞實の缺けてゐること。薄情。武  
家義理物語「かかると不心中の女、何と  
てすゑ、頼みがたし」。天網鳥上「無  
心中か心中か、誠の心は女房の、その  
一筆の奥深く」

**ふしんぢゆうもの** 不心中者(ふしんぢゆう  
もの)。不心中な者。薄情者。不實も  
の。義理しらず。天網鳥中「あの無心中  
者なんの死なう、灸をすゑ薬飲んで命  
の養生するはいの」

**ふす** 不好。きらひ。きらひなもの。浦  
島年代記三「雷の神を入るゝため、殿上  
の獄屋、嬉しや我らがぶす、おかげで

向後神鳴の根切り」

**部す** (動詞)まどめる。書物などを撰す  
る。部立をする。俗つれ、「西鶴の  
作し置かれし一つの書あり、取るに捨  
つる事を律す、部せむ事を思ひ」

**ふづくる** 「ふづくる」の假名ちがひ。た  
くらむ。榮花咄五「是れは一興とふづく  
り出し」

**ふすぶ** 煙。ねたむ。いびる。いちめる。  
卯月紅葉上「かげごと。中ごと。さ。へ  
口、立つてはふすべ居てはそしり」

**ふぜい** 風情。様子。容姿。身だしな  
み。一代男三「世に住めば袴肩衣もむ  
づかし、人の風情とて朝毎に髪ゆはす  
るも心に懸れば」。名詞・代名詞の下  
に接して、など・てあひの如き、など  
の意に用ひ、人を輕しめる語。

**ふせい** 無精。ふしやう(不精)。精を出  
さぬこと。てぬかり。油断。出世瀧徳  
下「エ、親子の業がふせいな、餘所へ取  
られてこの藤が一分立たず」

**ふせう** (一)ふしやう(不詳)に同じ。卯月  
紅葉中「憎い者は生けて見よ、これも世  
上のふせうぞかし」。ふしやう(不請)  
に同じ。卯月紅葉上「親子と存する故ふ  
せうの事も堪忍して」

**ふせんりやう** 浮線綾。浮綾の綾の總稱。  
丹波與作中「ふせんりやうに紅梅裏の  
袋を開き」

**ふた** ふたの(二布)の誤か。置土産五「女  
のすなるさし揃、絳縮緬のふたをして」

**ふだ** 札。巡禮札。鏝札。木戸札。質札  
などいろ／＼ある。下例は質札である。  
織留五「蚊屋の釣手二筋さし出しける。  
是にも札書く事のむつかしやといひさ  
ま、錢十六文かしければ」

**ふたい** 不退。佛語。功德・善根を修め積  
んで退轉しないこと。又、不退地の略。  
曾我會稽山四「六根の罪障消滅し、不退  
の彼岸に到れよ」

**ふたいいしやう** 舞臺衣裳。役者が舞臺  
に出るとき着る衣裳。

**ぶたいご** 舞臺子。舞臺に出る若衆。芝  
居子。少年俳優。俗つれ、「藝は匆  
匆に見て、それより舞臺子呼び、酒  
に亂れて」。同「舞臺子の洒落て紫の  
手細取り捨て、男なりけるも面白し」

**ふだいの** 札板。護符などを貼つた板。  
木製のお守札。大下馬「叡山より御祈  
念の札板おるせば」

**ふたいぢ** 不退地。佛語。極樂淨土。不  
退の所。百日曾我五「清風に乗じて不退

ふ

ふ

地の雲に遊ぶと皆禮拜し」

ふたいてん 不退轉。佛語。退轉することなく勤行すること。ふたい。萬年草

上「不退轉の御回向頼み存じ候と、包みの白銀、目録添へて渡し」

不退の友 不退地の友。極樂淨土に於ての友。釋迦如來誕生會三「我れ成道して

主従の縁盡きず、不退の友となるべきぞ」

ふたうけ 不道化。場所がらに似合はぬ

たはむれ。惡洒落。氣味のわるいおどけ。出世瀧徳下「是ぞほんの丹波越と、不道化云うて忍び出る」

ふだうにん 不道人。道ならぬ行ひをする人。亂暴する悪者。不道者。

ふたおき 蓋置。茶家の用具。釜の蓋、柄杓など載せおく竹又は陶器の筒。大矢數目「肝心の竹の一よに南無三寶、鋸むねん蓋置をわる」

ふたかほめ 二皮目。二重まぶち。美人の相の一。二代男「鼻筋差通つて、二皮目の形うるはしく」。武道傳來記四

「二皮目なれば唇あつく、姿すらりとすれば鼻低く」

ふたくちや 二口屋。二口に食つて、すぐにのど(咽喉)を通すといふ洒落で、

「二口屋能登の守」と餓頭屋の屋號の如く續ける。物種集上「八鳥の浦はさんもち餓頭、二口屋能登の守とぞ名乗りける」。一代男「日本一の餓頭あり申す(中略)、其の數九百、二口屋能登に申し付けて」

ふたごやま 二子山。相模國箱根山脈の内、芦の湖の東南に聳えた二つ峯の並んだ山。武道傳來記八「箱根を越えて(中略)、妹背の如く姿を二子山になら

べ」

ふたしなみ 無嗜。嗜みのわるいこと。慎みの足らぬこと。不用意。釋迦如來

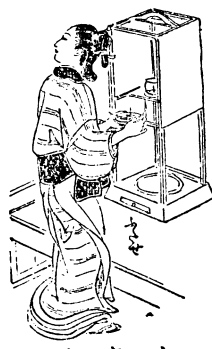
誕生會四「是猪口はの、ぶたしなみな口中で、むしやうに女子の口吸うた報いぢや」

ふだしよ 札所。巡禮者が札を受けるところ。三十三所觀音、八十八箇所などの靈場の稱。

ふたすぢかけのもとゆひ 二筋懸の髻。緒に綯つた元結か。摺元結(こきもとゆひ)の對語であらう。一代男「一世の風俗も糸鬘にして、くりさげ、二すぢ懸の髻、上髷のこして」

ふたせ 二瀬。下女と妾とを兼ねた勤めをすること。或は茶屋などの雇女の下

女と酌婦とをかねること。又、その女。ふたせをんな。一代女五「二瀬の約束して、晝は水汲み茶を沸し、夜は親仁様の足でもさする筈」。重井筒中「ふたせ仲居も小差出で」。次條參照。



ふたせをんな 二瀬女。前條及び下文を見よ。一代女六「飯焚く下女も見るとまねに色造りて、大客の折ふしは次の間に行きて、機嫌を取る、これを二瀬女とはいふなり」

ふたせん 札錢。芝居・見世物などの入場料。木戸錢。新小夜嵐物語上「札錢二十四文、半疊の錢五文」。又、振賣りの錢札を貰つた時の公納金。

ふたつがしら 二頭。紋所の名。つ挿すこと。又、その櫛。もと、戰國

時代の遊女が、首實驗の首洗ひに召さ

つ挿すこと。又、その櫛。もと、戰國時代の遊女が、首實驗の首洗ひに召さ

れるとき、その一つを使ふ用意としたに起ると傳へられる。

**ふたつだうぐ** 二道具。にほんだうぐ(二本道具)。大名行列の二本槍。丹波興作下「御家中の物がしら、采配までゆるされ、二つ道具をつかせし身が」

**ふたつづかひ** 二使。手妻人形にいふ語。一人で二つの人形を使ふこと。山本飛騨掾が試みたといふ。

**ふたつどり** 二取。二つの中から一つを選び取ること。大矢數三「同じくは金の逆鋒波の月、ふたつどりなら内藏の露」

**ふたつなは** 二繩。綱渡りなどにいふ語。二本の綱。男色大鑑六「染川林之助が乗初めし二つ繩を一筋にしわたたり」

**ふたつひきりやう** 二引兩。紋所の名。丸の中に横線を二つ引いた形。吉野都女楠三「中黒のはた二つ引兩」

**ふたつひとつ** 二一。二つに一つ。二つの中何れか一つ。

**ふたつもじ** 二文字。平假名の「こ」の稱。徒然草に「二つもじ牛の角もじすぐな文字ゆがみ文字とぞ君はおぼゆる」とあるに據る。

**ふたつもつかう** ふたつもくかう(二木瓜)。紋所の名。

**ふたつものがけ** 二物賭。二つの中何れかに定まるべき賭けごと。のるかそるかの勝負。いちかばちかの試み。五人女三「追付け生死の二つ物掛、是ぞあぶなし」。胸算用四「踏ん込んで買置きの、思ひ入れ合ふ事より、拍子好く金銀嵩む事ぞかし。こゝの二つ物がけせずしては一生變る事なし」

**ふたつわり** 二割。二つに割ること。又、その割つたもの。特に、帯地の一幅を二つに裁つて仕立てたもの。半幅帯。一代男三「縞縹子の二つわり左の方に結び」。同「黒縹子の二つわり前結びにして」

**ふたつをり** 二折。遊女などの髪結び方にいふ語。二代男三「扇屋の萩野後れ毛なしの二つ折に、髪先長く」

**ぶたて** 部立。部類に分けること。分類して名目を立てること。又、その部分けたもの。松風村雨東帯鑑四「歌書の部立をかたどりて、四季の獨樂を始めとし、神祇・釋教・戀無常」

**ふたの** 二布。女の腰巻。ゆもじ。ゆぐ。一代男三「二布は越後晒赤染」

**ふだのつじ** 札辻。制札を立ておく辻。後には、その邊の地名のやうに呼んだ。一代男三「小谷札の辻のくら者」

**ふたのもの** 二布物。前々條に同じ。椀久一世物語下「本紅の二重なるふたの物して」

**ふたまただいこん** 二股大根。甲子祭(きのえねまつり)の供物にするといふ。宵庚申下「宵庚申甲子が近い。二また大根のけておけ」

**ふたまただけ** 二股竹。(一)大阪天王寺南門内にあつて、縁結びの竹と稱され、天王寺七不思議の一つであるといふ(大近松全集註釋辭典)。(二)二股になつて生ひ出た竹。

**札を打つ** 各地の札所を巡禮する。參拜の記念として、札所の門柱・壁などに商賣の名など刷つた札を打つて廻る。武道傳來記六「西國巡禮、五歳七道より順逆かまはず打つ札の」。又、商品に正札などを打つける。

**ふだんいしや** 不斷醫者。常にその家に出入してゐる醫者。かゝりつけの醫者。胸算用二「不斷醫者は次の間に鍋を仕懸け」。俗つれく「不斷醫者持脈を取り」

**ぶち** むち(鞭)のこと。平常盤三「腰に馬柄杓竹の鞭(ぶち)」

**ぶちう** 府中(ぶちゆう)。今の静岡。大下馬三「富士風の騒しく、府中の町も用心時」

**ぶちうちん** 浮中沈(ぶちゆうちん)。漢方醫の用語。寸關尺を三部といひ、各部中に浮中沈の三候があるといふ。源氏冷泉節上「流石の法眼手もふるひ、浮中沈の三かうも、心肝腎も命門も、右にあるやら左やら」

**ぶちがしら** 縁頭。刀の柄の先の部分。又そこを覆ふ金具。つかがしら(柄頭)。女腹切上「兩替町の銀づくり、御池の町のぶち頭」

**ぶちかたごめ** 扶持方米。扶持として貰ふ米。扶持米を受ける者を扶持方といふので、単に「扶持米」といふべきをかうも稱する。武道傳來記八「袋に扶持かた米のはね入れさせ」

**ぶちこぶ** 藤瘤。藤の蔓の太く節のやうになつたとこ。又、藤の、松などに寄生したもの。

**ぶちたか** 縁高。縁を高くした折敷(をしき)。ついがさね(衝重)に似て、足のついたのも、つかないのもある。五人

女三「菓子品の品々を縁高へ組みつけて」  
**ぶちたきやうげん** 藤田狂言。藤田小平次の演ずる芝居。次條参照。五人女三「四條川原にさがり、藤田狂言づくし三番つづきのはじまりといひけるに」

**ぶちたこへい** 藤田小平次。京都で風三右衛門と西敵した名優。特に、實事得意として人氣を博した。棠大門屋敷に「髻れなるかな小平次、一生顔に紅粉を塗らず、裸にならず。不斷撫付鬘に、上下か羽織はづさず。年中姿をかへず、實事をして見物に嫌といはれず、思へばく上手なり」と。出世瀧徳上「幼少の時、藤田小平次と申した狂言役者へ、奉公やら養子やらに參つて」

**ぶちなはめ** 藤細目。ふしなはめ(伏細目)の轉訛。白と薄藍と紺との筋ある染革を細く斷つて緘した鍛(貞丈雜記十四)。細かい段だらに見えるをどし。ふしなはめのをどし。武道傳來記「藤細目の鍛を著て、くれなるの天巻(はちまき)」

**ぶちのまる** 藤の丸。大阪で名高い薬種屋の名。胸算用二「長町の藤の丸の脊薬屋。曾我扇八景下「藤の丸のかうやく」  
**ぶちのもり** 藤の森。(地名)山城國紀伊郡深草の里。藤杜の社のある所。一代男一「東山の片陰、又は藤の森、ひそかに住みなして」  
**ぶちやうごふ** 不定業。佛語。定業でないこと。即ち、前世から定つてゐる業報でないこと。定業の對語。  
**ぶちやうせかい** 不定世界。佛語。定めのない世。無常の世。盛衰の定めがない娑婆。  
**ぶちやべうのはな** 巫女廟花。和漢朗詠集に「巫女廟花、紅似粉。昭君村柳、翠於眉」とあるに據る。巫女とは楚の襄王が夢中に契つたといふ神女。王、夢覺めて心苦しくおぼえて、神女を祭る、その廟を名づけて巫女廟といふ。花は即ち美人に譬へたのである。「ぶざんのしんによ」の條をも見よ。  
**ぶちゐて** 藤井寺。河内國南河内郡長野村にある。西國三十三所第五番の札所。冥途飛脚下「すぢりもぢりて藤井寺」  
**ぶつかぎろ** 二日灸。二月二日に灸點す

れば、息災であるとの傳へによつて据ゑる灸。八月二日に行ふのを、後の二日灸といふ。二日やいと。大矢數「二日灸今まで待つも不思議なり、道竹故に命拾ふた」

**ふつかごころ** 二日心。二日酔の心持。曾我會稽山「二日心か公用か、酔うてはならぬ首尾もある。その足元を見て張合ひかけ平強ひ」

**ふつかのひらひひ** 二日拂日。二日は掛買などの支拂日である。傾城反魂香中「正月しまへば節旬朔日、今日は二日の拂日なり」

**ふつきさう** 富貴草。牡丹の異稱。松風村雨東帶鑑「花の八重菊ふつきさう」又、大戟たかとうだい科の草本、「きちにちさう」のこと。

**ふつきさ** つぶやくさま。ぶつく。ぐづぐづ。百日曾我「かまひませぬと口の内、ぶつきさう／＼つぶやきて」

**ふづくりごと** 文作事。ふづくつたこと。たばかりごと。詐計。織留「大方の文作事にては合點せぬ時世になりぬ」

**ふづくりをんな** 符作女。ふづくりに使はれる女。次條を見よ。

ふづくる 文作。符作。たぶらかす。い

ひまぎらす。たくみいつはる。色道大鏡「ふづくる。尋常のふづくりは、物をとゝのふる事にいふ。例へば縁邊をふづくる養子をふづくるなどいへり。又障子張に紙をふづくるともいふ。是も能くとゝのふる心なるべし。當道(色道)のふづくりは、謀をもて人をたぶらかすことをいふ。究竟これは偶人より出でたる詞也。」一代男「房付の念敷など入置きて、符作り女よりさきへ男を廻し」。丹波與作下「やまけふづくる内儀の心」

**ぶつぐわん** 佛願。佛への願。佛にかける念願。

**ぶつげん** 佛眼。佛語。一切の事實現象を照らす佛の眼。諸法實相を照覽し給ふ佛のまなこ。又、佛眼尊の略。即ち大日如來の化身の稱。佛母尊。

**ぶつげんしんごん** 佛眼眞言。佛眼尊を祈る時の咒文。南誦三曼陀勃駄南唵勃駄嚩遮尼索訶(なまくさまんだぼだなんおむぼだろしやにそわか)といふ。

**ぶつしんずるは** 佛神水波。佛と神とはもと一體で、本地と垂跡の差に過ぎぬといふ意。「神といひ佛といひ、只これ水波のへだてなり」(謠曲、誓願寺)。曾

根崎心中「佛神水波のしるしとて、覺並べし新御靈」

**ぶつちやうがほ** 佛頂額。愛想のわるい顔。むつとふくれた顔。ぶしつつら。ぶつちやうづら。

**ぶつちやうづら** 佛頂面。前條に同じ。壽の門松下「烟吹き出す佛頂つら」

**ぶつと** 物を斷つさま。轉じて、これぎり。さつぱり。きれいに。全然。重井筒上「ぶつと思ひ切つたぞ」。又、少しも。さらに。油地獄下「人の難義といふことに、ぶつとと眼付かざりし」

**ぶつつり** 前條の類語。物の絶え又は行き詰まるさま。びつたり。全く。重井筒上「こなたの留守の言ひわけに、ぶつつりと事は缺く。又、つね(抓)るさまにいふ。

**佛とも法とも** 謬に、「佛とも法とも知らぬ」といふ。五十年忌歌念佛下「佛とも法とも、一廻の念佛申せしこともなく」

**ぶつとり** 「ぶつと」と、又は「ぶつつり」の轉か。二代男「昔は名も有りし人の息女を、ぶつとり十五の秋の頃買取りしに」

**ぶつぷり** ぶつつり。斷然。壽の門松中「暴れ廻ることぶつ／＼止め」

ふ

**ぶつぽふそう** 佛法僧。鳥の名。鳴く聲が、佛僧法と聞えると傳へられる。男

が大鑑に「佛法僧の鳥は、高野・松の尾、河内の國高貴寺に限りて、夏中然も眞の間に鳴くなり」

**佛法の秋** 次條と同じく、佛法の盛んなことをいふのであらう。大句數上「佛法の秋は繁昌智恩院、眞菖が原も家藏となる」

**佛法の畫** (諺) 佛法が盛んに行はれること。佛寺に參詣する善男善女の賑はふこと。佛寺の榮えること。一代男八「畜生門の邊に暮うたせて、誠に佛法の畫なり」。胸算用五「釋迦も錢ほど光らせ給ふ。今佛法の畫ぞかし」。大矢數一「餅搗く寺はいつも正月、佛法の畫をしたり又起きて」

**ぶづまり** 思ふやうに慰まれないこと。窮屈で心のび／＼せぬこと。氣づまりなどの意。榮花咄五「萬づ談合男になつても、物つかはずにはいつとなくふづまりなり」

**ぶつみやう** 佛名。次條の略。一代女六「佛名の折節、我も唱へて本堂を下向し」

**ぶつみやう系** 佛名會。佛語。十二月十

九日から三日間、佛名經を誦し、諸佛の名號を唱へて、罪障を懺悔する法會。宮中及び諸寺院で行はれる。佛名懺悔。俳諧師手鑑「罪障の山やくづるゝ佛名會(月山)」

**ふてがき** 筆柿。柿の一種。果實の長さが二寸ばかりで、筆の穂先のやうな形したものだ。

**ふてきなし** 「不敵なり」といふに同じ。「不敵」に、いとけなし、かけじけなしなどの「なし」を附した語。薩摩歌中「戀に心のふてきななく、又ふるさとに立歸り」

**ふてざや** 筆鞘。槍鞘の、筆の穂の形したものだ。ふでなりざや。薩摩歌上「白猪の丸筒裾ぶくら、同じく筆鞘」

**ふてすてまつ** 筆捨松。枝ぶりなどがよくて、商家も描き得ず、筆を投げるほどの見事な松の稱。下例は、紀伊國藤代山にあるもの。傾城反魂香中「涙にくれて筆捨松の、雫は袖にみつ沙の、新宮の宮居」

**ふでだち** 筆立。筆のはこび。筆さま。筆蹟。又、書き出し。ふでたて。傾城酒呑童子「様まるる、身よりとばかり薄墨に、御筆立のうづ高き、御文體までさぞくと」

**ふてつぐさ** 筆津草。つくし(筆頭菜)の異名。ふでつばな(筆津花)ともいふ。

**ふてつむし** 筆津蟲。こぼろぎ(蟋蟀)の異名。物種集上「天下に一人の武藏野の跡、てなれ富士は探幽が筆つむし」

**ふてとり** 筆取。筆を取つて書くこと。又、その役。書記。特に、矢數俳諧の執筆。大矢數序「五人の差合見、八人の筆とり」

**ふてやく** 筆役。前條の類語。書き役。右筆。武道傳來記「百五十石にて筆役」

**ふてゆひ** 筆結。筆を作ること。又、その工人。中古語。用明天皇職人鑑職人並「こゝに見えしは筆ゆひの」

**ふと** 與風。(副詞)思ひがけず。不意に。ひよつと。今もいふ「ふと」に同じ。一代男七「與風(ふと)、御事ども思ひ出し」

**ぶどう** 無道(ぶたう)。ぶいきな、又亂暴なさま。戀八卦柱曆上「棟物屋の灰毛猫は、憎らしくぶとうな形で、遠慮會釋もなう」

**ぶどうざか** 不動坂。高野の登山道。京口ともいふ。一心院谷にある。路傍に内の不動、外の不動があるので、不動坂

口と呼ぶ。  
不動の鐵縛 自由に動くことの出来ないやうにする呪ひ。油地獄申「走り人盗人いごかせぬは不動の鐵縛(かなしじり)」

ふどうまゐり 不動參。不動様にお參りする事。下例は、大阪北野稻荷山の南不動寺に參詣すること。冥途飛脚上「不動まゐりに待ちまする」

ふところかがみ 懷鑑。書名。色里評判記の類。一代男六「まさり草。懷鑑にも此女の事ありのまゝに記す」

ふところご 懷子。懷に抱かれる兒。膝子。又、祕藏子。うぶな子。人づれのしない子。二代男四「嫁取りて人の懷子を乗物すぐに、奥座敷にかき入れて」懷で錢よむ うつつ向いてゐる比喩。天網島上「一言の挨拶もなく、懷で錢讀むやうに、さてくうつぶいてばかり」

ふとざしたび 太刺足袋。太い糸で刺縫ひした足袋。一代女六「白木綿の帶うしる結び、ふとざし足袋にわら草履」

ふとどし ふんどし(褲)のこと。一代男一「ふとどしも人頼まず、帶も手づから」

ふとばし 太簍。正月の祝ひの膳に用ひる太い簍。柳で作るので柳簍ともいふ。

雜煮簍。もと、足利義勝が、元朝に用ひた簍が折れて死し、弟義政の代から太い簍を用ひたのに起るといふ。永代藏二「太簍の由來を問ひける。あれは穢れし時白げて一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表すなり」

ふとものだな 太物棚。太物賣店。即ち、太い木綿糸で織つた反物を賣る店。永代藏二「傳馬町の太物棚」。又、一艘に、反物店の稱。

ふとり ふとおり(太織)の約。粗末な太い絹糸で織つた布。ふとぎぬ。二代男五「着物は、ふとりを花色にして」

ふとんばり 蒲團張。蒲團を敷くこと。堀川波鼓中「おつどら馬や(中略)、蒲團ばりしてナ小姓衆を乗せて」

ふなあきうど 船商人。船客に物を賣る人。船で物を商ふ人。

ふなあらしそひ 船争。船を得ようとならそふこと。船についての鬭着。

ふなあらため 船改。船を取りしらべること。又、その役。武道傳來記五「村芝與十郎といへる船改め、身體は輕けれども」

ふない 府内。(地名)豊後國大分郡の内。ふないりばし 船入橋。(普通名詞)藏屋敷のある濱(川岸)で、荷船の出入の便宜のために、川から屋敷内に引き入れた流に架けた橋の稱。天網島下「浪花小橋から、舟入橋の濱傳ひ」

ふなこじり 船鑄。刀劍のこじりの、船底なりに反つたもの。

ふなだま 船靈。船魂。船を守り、航海を安全ならしめ給ふといふ神。俗に住吉の神を稱する。胸算用一「住吉の船玉、出雲は仲人の神」

ふなだまがみ 船靈神。前條と同じ。國性爺四「住吉と申すは(中略)、沙干玉沙満玉を以て御船を守護し、舟玉神とも申すなり」

ふなつく ふなくする。ふらくする。ふらつく。祭花咄二「据腰ふなつきて、行き亂れて」

ふなばり 船梁。船内に渡した横木。その位置によつて、胴船梁・艫船梁その他の名稱があり、又、河船と海船によつて、作りが違ひ、名稱も異なる。一代男三「舟ばりたゝきて大笑ひ」

ふなふな ぶらつくさま。ぶらつく。一代男六「ふなくと腰も定めかね、思つき忙しく」

ふなまつり 船祭。大阪天満天神の祭禮。

ふ

四月二十五日に行はれ、神輿が船によつて恵比須島の御旅所へ遷御あるので見する。枕久「世物語」に「天神の船祭を賜た事もなく」

**ふなやど** 船宿。船の運送を業とする家。萬文反古に「舟宿中國屋」。又、遊船を仕立てる宿。江戸では特に吉原へ舟で通ふ客を送迎する茶屋を稱した。

**ふなゆさん** 船遊山。船あそび。大矢數四「舟遊山忘れた物は御座らぬか、三里さかつて大阪堺」

**ふならふなら** 氣力の抜けたさま。ふなふな。ふらく。

**ふなり** 不形。なりのわるいこと。ぶざま。ぶかつかう。

**ふなわたばうし** 船綿帽子。綿帽子の大きなもの。てぼそ。こきんわた。塵塚談下「我等若年の頃は、瀬川ばうし、船綿帽子、その外流行の帽子を賣り歩きける」(綿帽子賣の事)

**ふなをか** 船岡。(地名) 京都の北郊(愛宕郡の内)にある墓所。傾城反魂香中「思ふ願が叶はずは、西所川原か舟岡へすぐに飛ばうと」

**歩(ふ)にかかる** 相當の値よりも非常に格安に賣買されるとの意。二代男七「九

十貫目に高い物と思ふは小さき眼からなり、歩にかかる家よりは安し。祭花咄に「最早慾をも止めて、歩にかかる家屋敷を求め、樂々と世を渡り」。次條及び次々條參照。

**歩(ふ)に首打たる** つまらぬ者に首を打たれる。歩は夫で、卑しい人夫などの意。堀川波鼓に「殿様の御勘當受け、歩に首打たる、法もあれ、偽りはない」。次條參照。

**歩に首を提げらる** 前條に同じ。壽の門松中「都詰にならうが、金銀は手放さぬ、歩あしらひで見知らせう。こなたも歩をもつて、歩に首を提げらるが悔みはないか」

**ふねどめ** 船留。船の出るのを留めること。船の往來を禁ずる。ふなどめ。

**ぶねん** 不念。無念。心づかぬこと。おちど。不注意。粗漏。武道傳來記四「一應ことわりなきは不念といひながら」。櫻陰比事「何心もなく普請仕る由、まづ町人の不念もあり」

**不破の萬作** 豊臣秀次に愛された若衆。武林録「天下の美少年は秀次公の小姓不破萬作、蒲生氏郷の小姓名越山三郎なり」。一代男一月まためづらしき、

不破の萬作、勢田の道橋の詰にして、蘭癖のかほり人の袖にうつせし事も」とあるは、「新著聞集」にも詳かに出てゐる話である。

**ふふくくわ** 腐復化。男色大鑑に「見る人詩魔に便を付けられ、腐復化するを忘れ、樽の出し口を仕掛け、少人まじりに飲みかはし」

**ふへんじ** 不返事。なま返事。ろくな返事もしないこと。重井筒中「サア此處へと呼びかくれば、病人といひ兄の命、異議も言はれず不返事に、もちくしと」

**武邊者** (動詞)武邊者として振舞ふ。武勇ある者の風を示す。武邊だてする。武道傳來記五「言はれぬ所に、爲右衛門が武邊して、諸士の物笑ひになり」

**ふへんもの** 武邊者。武勇あるもの。勇者。武家義理物語二「世に隠れなきぶへん者、大平丹藏といへる男と、まぎれもなき臆病者、柳田久六」

**ぶほうこう** 不奉公。奉公に精を出さぬこと。主への勤めを怠ること。丹波與作下「御厚恩報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にて」

**ふまへ** 踏。踏へどころ。定つた考。思



慮。出世景清四「あとさきのふまへもなく、當座の腹立やる方なく、ともかくも申しつる」

**ふみうまごめん** 踏馬御免。馬を連れて行く時、踏むのを恐れて御免を乞ふこと。下例は踏みと文(ふみ)とをにかけていつた。丹波與作下「しやんと一筆ふみ馬御免」

**ふみかぶる** 踏被。ふみかぶること。不利益を自ら招くこと。罪を身に負ふこと。出世瀧徳上「新七が言譯けなく身のあつさに切つたと、皆手前のふみかぶり。(中略)そのやうに短氣では、わしや心もとない」

**ふみかぶる** 踏被。自ら不利を負ふ。又、他の術中に陥る。天網島上「ごんせと留めたる女景清、鍔と頭巾、ついふみかぶる客もあり」

**ふみこかす** 踏倒。踏みこころばす。京阪では「倒す」を「こかす」、「倒る」を「こける」といふ。萬年草中「燭臺ふみこかす」

**ふみさがす** 踏散らす。「ちらす」を「さがす」といふは大阪方言。天網島上「頬がまち踏みつけ踏みつけ、踏みさがされて土まぶれ」

**ふみづら** 文面。ぶんめん。文章に書いたところ。手紙のおもて。一代男六「文づらけ高く、長ぶんの書き手」

**ふみまくら** 文枕。(一)枕もとに置いて見せる草子の類。一代男六「餘所には洩さぬむかしの文枕と、かいやり捨てられし中に」。(二)枕の下に敷いて寝る文がら。

**ぶめい** 武命。(一)武家の命令。(二)武士としての運命。武運。武道傳來記「村之助密通かくれなく、武命の盡きとさみせられ」

**ふもんぼん** 普門品。法華經二十八品の内、第二十五品。委しくは、觀世音菩薩普門品。

**ふゆあみがさ** 冬編笠。冬、編笠を被ること。又、その編笠。夕霧阿波鳴渡上「冬編笠も垢張りて、紙衣の火打膝の皿、風吹き凌ぐ」

**ふゆがまへ** 冬構。冬ごもりの用意。冬の寒さを防ぐ設備。五人女五「里は冬がまへして萩柴折添へて」

**ふゆどし** 冬年。去年の冬のくれ。昨年末。胸算用五「冬年南都大佛建立の爲めとて」。傾城反魂香上「冬年お日に懸つたら、借錢乞の帳面を爰から消して貰はうもの」

**ふらうぐわん** 不老丸。年の奇らぬ効能があるといふ丸薬。織留五「三十に餘る年も嫁入り時の姿(中略)、この女不老丸も飲まず人魚も喰はねど」

**ふらくきよ** 不落居。落着しないこと。きまりのつかぬこと。五十年忌歌念佛中「お道具も出来致し、代銀残らず渡し職人の手前は濟みなながら、不落居な事にて道具を留められ」

**ふらすこ** 葡萄牙語(Erago)。今、化學實驗などに用ひる硝子燂。當時は酒、油などの容器として珍重した。傾城酒呑童子四「瑠璃白玉のふらすこに、ちんだ泡盛、薬と波むや玉の井が」

**ふり** ふりそで(振袖)又、振袖新造の略。卯月潤色中「茶屋でこなたの參る茶は、新造のふりか、つめ茶か」。轉じて、若い女の意。夕霧阿波鳴渡中「まじやうもの(眞性者)といはれた故、片町のふりを内へ呼入れ、師走に廣めが有つた、

**ふりうり** 振賣。物を提げ又は擔つて、聲を立てて賣り歩くこと。振りく賣り歩く義である。又、その歩く人。ぼてふり。ふり。織留三「何にても智恵の振賣」。宵庚申下「町中を振賣し、元は僅かの八百屋店」

**ふりがかり** 降懸。雨などの降りかゝる

こと。轉じて、ふとした事からの縁。袖ふれただけの縁。松風村雨束帯鑑三

「一樹の蔭のふりがかり、ほんに粗相な事なれども、構ひなくば夫婦になり」

**ふりかく** 振懸。なりふりを整へる。着かざる。或は、振袖を着ることか。男

色大鑑八「腰元中通りの女までも皆色めきて振懸け、乗物つらせて」

**ふりかねぞめ** 大句数上「織のべのふりかね染の始まりて、天満さびしき蓬生の宿。「ふしかねぞめ」の誤か。

**ふりかぶろ** 振禿。かぶろさや(禿鞘)に同じ。薩摩歌上「白頭の振禿、二本松の城主とかや」

**ふりじやくし** 古杓子か。織留三「寶引を仰せ付けられける(中略)、ふりじやくしを取れるもあり、知行取りは黄金を引き當り」

**ふりしやり** 怒つてすねるさま。ぶんぶん。松風村雨束帯鑑四「心据らずぶりしやりの、いぶりぶり獨樂そりやひぞり

**獨樂**

**ふりずはひ** 振梢(ふりずばえ)。ふりづばい。ふりづんばい(振礫)に同じ。二代男四「襟狩の折筋、所の人の手馴れし

振梢を打懸け、ばらりと落つるは」

**ふりずんばい** 振りづんばい(振礫)の假名ちがひ。その條を見よ。

**ふりそてしんざう** 振袖新造。若い遊女。新造とは、禿上りの年の若い見習女郎で、まだ勿論一本立の部屋持とはならぬもの。まづ太夫附の妹女郎といつた格である。通例、赤色勝の振袖を着てゐたので、振袖新造、略して振新などと呼ばれた(川柳吉原志)。振袖。「ふり」の條参照。

**ふりだし** 振出。芝居の語。梅の木・松の木などを大柱に仕掛けて登ること。枝を廻るやうに拵へ、樂屋から枝を舞臺の方へ振出すので稱すると。

**ふりづんばい** 振礫 飄石。竿の先を二つに割つて、そこに小石を挟み、打ちふ

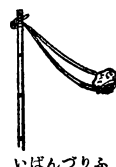
つて遠くへ投げるあそび。又、竿の先に

糸をつけて、それに

小石をかけるやうにして投げる遊戯。

ぶんばい。ふりづばい。「腕なしの振りづんばい」の條を参照。

**ふりてがた** 振手形。今の小切手の類。下文を見よ。胸算用「近年銀なしの商



いばんづりふ

人ども、手前に金銀ある時は、利なしに兩替屋へ預け又いる時は借るためにして、こざかしき者振手形といふ事を仕出して、手廻しの互によき事なり(中略)、大拂ひの時、米屋も、呉服屋も(中略)、来るほどの者に、その兩替屋で請取れと、振手形一枚づつ渡して」

**振手の女郎** 振手(ふりて)は振る人。客をよく振る女郎。毎度客を嫌ふ遊女。振りに詰まる。ふりまはしに困る。やりくりに窮する。永代藏六「借錢かさみ次第にふりにつまり」

**ふりばり** 女を罵る語。ふんばり。丹波興作中「イヤ死にめらうのふりばりめ、竹のぶち(鞭)をくらふなよ」

**ふりぶり** 振振。「たまふりぶり」を見よ。雙生隅田川四「幼遊びのぶり〜や、ぎつちやう手鞠つく羽根の、峯にこだまのどう〜〜」

**ぶりぶりぎつちやう** 振振毬打。前條に同じ。「ぶり〜ぎつちよ」ともいふ。

**ぶりまはし** 振廻。ふりまはすこと。金銀の自由が利くこと。金を融通すること。やりくり。次條参照。胸算用四「妾をかくまへおきける(中略)、それは手前もふりまはしもなる人の事、貧者の

前もふりまはしもなる人の事、貧者の

ならぬ事ぞかし」

ふりまはしの人。ふりまはしの出来る人。金に困らぬ人。一代女三「有銀五百貫目より上のふりまはしの人、太夫にも會ふべし」

ふる 布留。(地名)大和國山邊郡、今の丹波市邊の古稱。石上布留社がある。ふる 振。(一)ふりすてる。嫌ふ。特に、遊女が客を嫌ふをいふ。二代男一「振るまいと思ふ床入には、肌着も古き白無垢に成し」。百日曾我三「奉公に如才なく、客をばふらず」。(二)柵などつくる。最明寺殿百人上臈上「山手には二重三重の柵をふり」

ふるかく 古格。古い仕方。舊式になつた手段。いつもきまつた、新味のない風。

ふるかけ 古掛。古い掛代金。舊債。雪女五枚羽子板上「捨てたふるかけ、今年はくるく」(廓の全盛)

ふるかねかひ 古金買。古鐵買。金屬器具の古物など買ふこと。又、その人。轉じて、古物商賣。或は屑買。屑屋。置土産一「古金買に見せても三百貫目より内の身代にはあらず」

ふるて 古手。(一)使ひふるしたもの。古

着。古道具など。(二)古くから用ひつづいた手段。月並なこと。ふるかく(古格)。

ふるてかひ 古手買。ふるて(古手)(一)を買ふこと。又、その人。古物買。冥途飛脚下「巡禮古手買節季候に化けて」ふるてや 古手屋。前條の類語。

ふるな 富樓那。釋尊の十六弟子の一人。辯舌を能くし、説法の巧みなこと、衆中第一であつたといふ。故に、口の達者なこと、能辯家の代表にいふ。胸算用三「富妻那の忠六といふ男、常に輕口叩き」

ふるなそんじや 富樓那尊者。前條の尊稱。

ふるのみやしう 布留御社。ふる(布留)の條を見よ。

ふるみ 古身。古刀(こたう)のこと。即ち、古く鍛へられた刀劍。又、槍にもいふ。普通には、慶長以前に作られたもの。稱。女腹切上「堅い親仁の輕口も刀屋とてや古身なり」。槍權三下「槍の權三が古身の槍」

ふれろり ぶりろり(振賣)に同じ。二代男八「棒一本で振賣(ふれろり)に渡り」

ふれじやう 觸狀。人々にふれ知らせる

書狀。宛名順に廻すので廻狀ともいふ。大勢に出す案内狀。一代男五「女中方申入度のよし、觸狀つかはされけるに」

ふろ 風呂。(一)湯屋。風呂屋。(二)風呂屋者の略。又、風呂屋者を抱へ置いて、揚屋のやうに客に接せしめる家。一代男五「立花風呂丁字風呂、即ち家の揚屋也」。天網島上「南の風呂の浴衣より今この新地に戀衣、紀の國屋の小春とは」

ふろがま 風爐釜。茶の湯の席上に置いて湯をわかす土製又は鐵製の爐。圓形の縁の一方を缺き、風を入れるやうにしたもの。ふる。胸算用三「棧敷に風爐釜を仕掛け」

ふろしき 風呂敷。風呂の敷物。湯殿の揚り場に敷いてあるもの。一代女五「座を取つて風呂敷の上に直れば、わけのある方へも無き方にも、揚り場の女近寄りて」。又、その形の似たところから轉じて、今もいふ風呂敷のこと。ふるしき。

ふろふき 風吹。大根などを厚く輪切つてゆで、熱い中に味噌をつけて食ふもの。その食ふさまが、次條の「ふろふく」に似たのでいふ。

ふ

**ふろふく** 風呂吹く。身體に息を吹きかけて垢を搔く。嬉遊笑覽九「風呂吹とは息をふきかけて垢をかくなり。湯氣の中に吹くれば其處うるほふなり。卜養狂歌集に、名を衛門といふ若き人、風呂吹くこと上手なれば云々。今も巧拙ある事となん。又、或人風呂を新に立て入りそめしけるに、入風呂に祝うて三度長いきにふく〜と吹く」

**ふろや** 風呂屋。ふろ(風呂)の(白)に同じ。織留六「茶屋に一日あそびを約束し、あるひは風呂屋白人を忍びつれて」

**ふろやもの** 風呂屋者。一種の私娼。風呂屋に抱へられて、浴客に春を賣つたもの。ふろをんな。白人。湯女。呂州。風呂。垢かき。さる(猿)。物種集上「背中の垢をかやくや川舟、風呂やものとめてかふ瀬の浪枕」。織留三「貧なる太鼓がついて、風呂屋者をすゝめ」

**風呂を留める** 風呂を買ひきりにする。とめぶろ(留風呂)にする。一代男七「或日世之介風呂をとめて、もろ〜の末社をあつて、(中略)、揃へ浴衣、皆揃き髪になつて、下帯もかゝず」

**ふろをんな** 風呂女。風呂屋者に同じ。

**ふろやをんな** ころやをんな。  
**ぶん** 分。銀(貨幣)の目方。一匁の十分の一。二十不孝「餅搗頃の蒸籠、晝は三分、夜は二分」

**ぶんかう** 文庫。書類・雑品など容れる箱。又、その蓋に大高紙を敷いて菓子なども盛る。丹波與作上「お菓子さま、ぶんかうに盛入れ」  
**ぶんざり** 分切。長いものを一定の短さに断ちきること。織留六「針屋の弟子となる身は、舞雩の忙しく耳穴のあけくれ分切の仕事」

**ぶんげん** 分限。(→ぶげん。財産家。富豪。二代男六「平城の袖鑑に、よい衆・分限者・銀持とて、是れに三つの分ちあり(中略)分限と言ふは、所に人も許して商賣は止めず、其家の風を手代に捌かせ、其身は諸事を構はぬなるべし」。永代藏「銀五百貫よりしてこれを分限といへり」。尙、「ちやうじや」「ぶげん」「かねもち」、「よいしゆ」の各條参照。

(→分際。身のほど。  
**ぶんげんちやうじやきやう** 分限長者經。分限や長者になる教を記した書。二代男「鎌倉屋の何某、分限長者經にも入れ、九千貫家繼に譲りに」

**ぶんごらめ** 豊後梅。梅の變種。花も實も普通の梅より大きい。もと豊後大分郡に産したものとす。織留三「庭に豊後梅の花落ちるなるに、是もうらめしさうに」

**ぶんごしぼり** 豊後絞。豊後國から産する絞りぞめ。二代男三「豊後絞りの脇わけ、まだそんな事は知らぬ尻付なる娘九人」

**ぶんざう** 文藏。佐川文藏。俳優、悪役の名人。油地獄下「油屋の女房殺、酒屋に仕替へて、(中略)殺手は文藏憎いけな」

**ぶんざること** 分散(サル)事。ぶんざん事であらう。次條を見よ。大矢數三「節振舞又口上が届かねば、分散(サル)事は喰倒れ也」

**ぶんざん** 分散。身代かぎり。破産。倒産。永代藏「分散にあへば衣類双物も皆人手にわたりて」

**ぶんせに** ぶんせん(文錢)を見よ。  
**ぶんせにこま** 文錢獨樂。文錢を五六枚重ねて作つた獨樂。當時(元祿)の流行。雪女五枚羽子板上「禿がぶんせに獨樂はふるさに」  
**ぶんせん** 文錢。ぶんじせん(文字錢)の

こと。京都方廣寺の大佛の銅像を毀ち、寛文八年から天和三年にかけて、江戸龜井戸で鑄造したもの。背面の孔の上部に文の字を極印したので名づける。大佛錢。ぶんぜに。文の字の錢。又、紋所の名。

**ぶんぜんわう** 文宣王。孔子の諡（おくりな）。百日曾我。「文宣王は大野に狩して麒麟を獲」

**ぶんたい** 文臺。短冊・書籍など載せる机。一代女三「文臺に入れしは、熊野の半玉・酢貝」

**ぶんだりげ** 分陀利花。梵語(Pundarik)蓮華、又は白蓮華と譯す。印度に於ける最優等の華。釋迦如來誕生會ニ「寄れば露散る香散る、匂芬々分陀利花」

**ぶんづゑ** 文杖。文書を挟んで貴人の前にさし出す自木の杖。長さ五尺ばかり、端に鳥口といふ金具がある。ふづゑ。ふばさみ(文夾)

**ふんどろ** 分銅。天秤ばかりのおもり。楕圓の中央が左右からくびれてゐるのが、普通の形である。ふんどん。

**ふんどろなり** 分銅形。分銅の形したものの。薩摩歌上「素槍の中じめて、ふんどろなりの一對は、備前の岡山」

**ふんどろや** 分銅屋。兩替屋。錢屋。ぜにみせ。常に秤の分銅を使つて銀錢を計る商賣であるのでいふ。永代藏

「分銅屋の何某(中略)、九尺間の棚借りて錢見せを出し(中略)、次第に兩替屋となりて」  
**ふんどして** 揮手。字の拙いことを戯れていふ。胸算用「無用の手本書いて(中略)、今の世に男と生れ、これ程かかぬものはないに因つて、これを揮手とぞ笑ひける」



(薩暖)やうどんふ

**ぶんのじのぜに** 文の字の錢。ぶんじせん。ぶんせん(文錢)を見よ。大矢數ニ「吳服所に色なる水のぬるみ來て、波の数よむ文の字の錢」

**ぶんばり** 踏張。女を罵つていふ。ふりばり。戀八卦柱曆中「ぶんばりめ、血迷うて何ぬかす。請人たしかに預けた」

**ぶんぶくちやがま** 文福茶釜。上野國館林の茂林寺に於て、狸の化けた守鶴といふ僧が住職してゐる時に用ひたといふ釜。「この釜を庵室の圍爐裏にかけ置け、一度水をさせば五七日がほど涌出

で、水をさす事なし。常にぶんぶくぶんぶくと沸きける。守鶴、生をあらはしければ、この釜のぬしは、毛が生えたりと人々いひあへり(俚言集覽所引本朝俗談志)。雙生隅田川「文福茶釜に毛が生えた、茶釜で刺つても未だ刺れぬ」

**分別過ぐれば愚に返る** (諺) 餘り考へ過ぎると、却てよい考へが出なくなる。「分別過ぎれば無分別。」「分別も久しくすればねまる」ともいふ。日本振袖始

「分別過ぐれば愚に返る。初一念に御進みと」

**ぶんべつぶくろ** 分別袋。いろ／＼の分別が出て來ると假想した袋。分別のものと。智慧袋、堪忍袋などいふ類。大句數上「何故ぞかやうになるも年故ぞ、分別袋家中一番」

**ぶんほう** 文法(ぶんぼう)。文章の筋みち。文の書き方。最明寺殿百人上萬上「含み狀と申すもの、文法やはらかに候へども、無點のものに候へば、一遍教へ奉らん」

**ぶんまはし** 分廻。圓を描く具。まるかき。大矢數ニ「あさつてといふかと思へば染物屋、ぶんまはしより形たちまち」

ぶ

ぶんやぶし 文彌節。淨瑠璃節の一派。

元祿年中、京都の人で、山本土佐掾の門弟であつた岡本文彌の語り創めたもの。特に大阪で持てはやされたもの。

ぶんり 分里。わけざと(分里)の音讀。遊里。色町。一代女ニ「分里數女(ぶんりのすぢよ)」

ぶんりやう 分量。分際。ほど。博多小女郎中「猫は火燧に寝ぶしする、犬は土邊で物食へど、火燧な猫の眞似せぬは、身の分量を知つたる故」

へいあんじやうよしくに

平安城義國。刀工。姓は橋、豊後守と稱す。寛永年間の人。京都三條堀川に住したのでかく呼ぶ。武家義理物語六「刀は平安城義國と、銘ありながら」。又、永延寛弘の頃にも同名の刀匠が三條に住した。

へいぐはい 平懐(へいくわい)。禮儀にかまはぬこと。ぞんざい。無遠慮。色道大鏡凡例「都に、平懐放埒の詞少々これ有り」。博多小女郎上「どなたも船中の平ぐはい御免。よいお近づきもとめ

し

へいけ 平家。平家物語又は平家琵琶の略。晝夜用心記ニ「三味線を聞き飽かれ平家を語る座頭呼んで」

へいけざとう 平家座頭。平家琵琶を語る座頭。晝夜用心記ニ「平家座頭を同道しける」。前條参照。

へいしよく 乘燭。燈火を點すること。又、その時刻。ゆふがた。「ひやうそく」の條参照。

へいたらう 平太郎。「ひらたらう」を見よ。

へいちもん 平地門。へいちゆうもん(屏中門)のこと。築地塀(ついちべい)の中に造つた門で、二本の柱はあるが笠木はない。扉は二枚で障がたに化粧木をつけるのが常である。屏重門。

へいつきぼし 塀築星。大矢數ニ「遠いへ出でぬ春の夜の月、四五日の留守を預る塀築星、風が氣遣一群の雲」

へいにん 平人。普通の人。なみの人。庶民。一般人。

へいもつ 聘物(へいぶつ)。贈りもの。進物。大職冠ニ「婚禮の聘物、花原馨」

へいらい 平禮。烏帽子を折つてかぶること。又、その烏帽子の稱。即ち折烏

帽子の類で平侍の着するもの。へいれい。ひれ(用明天皇職人鑑)「風折烏帽子、折々は(中略)、平禮こゆひなし打や、烏帽子屋なれば」

へいれい 平禮。前條に同じ。又、帶劍しない平侍の稱ともいふ。最明寺殿百人以上薦「長袴きり袴、へいれい白張」(女せいぞろへ)

べう 犬の吠える聲をいふ。二枚繪草紙上「空を慕ひて泣く犬の、べう(別府)の湯元はあれとかや」

へうきんだま 瓢金玉。へうきん(剽輕)なこと。氣がるでおどけたこと。又、その人。大矢數ニ「あこがるゝへうきん玉と思へども、暮の陸言半分はうそ」。剽輕玉。

へうさう 表相。表にあらはれた人相。つらだましひ。表具の表装にかけて用ひる。傾城反魂香上「一國をおのれが狩場の野原にせんずる表相、重罪遁れず繩かゝれ」

べうさん 廟參。はかまわり。墓參。宵庚申上「親の廟參、奇特々々」

へうしきく 拍子(ひやうし)利く。「ひやうしきく」(拍子利く)の條を見よ。

へうたんくじ 瓢箪公事。公事は訴訟ご

と。その裁断が、人の意表に出て巧みなことをいふか。大矢数三「是れで身代ろくに据わつた、聞及ぶへうたん公事の埒明けた。胸算用ニ「借屋の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄をさせ」

瓢箪に吊鐘 (諺) 提燈に吊鐘といふ類。瓢箪の川流れ (諺) ふはくして落ちつきのわるい譬。

へうたんまち 瓢箪町。大阪新町の廓の町名。新町の總名にも用ひられた。新町橋を延長した通りで、新町筋・瓢箪町と續き、この廓町の中心になつてゐた。出世瀧徳上「月夜は猶か闇の夜も、瓢箪町を腰づけに」

瓢箪より駒を出す (諺) 「瓢箪から駒が出る」といふのが普通である。意外なところから意外なものが出る譬。支那の長果老の故事。

へうぶきやう ひやうぶきやう(兵部卿)の假名ちがひ。その條を見よ。

へうもの 俵物。俵に入れたもの。たはらもの。永代藏「杉ばへの俵物」

へうりもの 表裏者。うはべと腹の中と違つた人。言行の相異なつた者。うらぎりもの。傾城酒吞童子「鬼神退治の證據を失ひ、表裡者の名を取らん」

へかこ 下まぶたを下に引いて嫌ひ拒む意を示すこと。あかんめ。めかかう。べつかつかう。轉じて、單に語として「いや」の意に用ひる。女腹切中「千兩道具の娘を、廿兩の目くさり金で、女房に持たうや、へかこ、まあなるまい」

へかこのちやのみや 前條に同じ。

へぎ 片木。へいで薄くした板。へぎいた。二代男「片木に札書きて」又、へぎ板のをしき(折敷)。一代男五「置手拭をして、へぎに切慰斗の取肴を持ちて」

へきしよ 壁書。へ壁に書くこと。又、その文字。へ捷・法度など、壁に貼つた書附。かべがぎ。雪女五枚羽子板下「御壁書をそむき不義の科」

へきもち かきもち(缺餅)のことであらう。大矢数四「鉋を懸ける木庵和尚、へき餅のこゝ驚かす富士の山」

へきら 汨羅。楚の屈原が入水して死んだ處。今の湖南省長沙府湘陰縣の内。雪女五枚羽子板上「汨羅に沈んで、江魚の腹中に葬られん」

へきらく 碧落。あをそら。碧空。孕常盤「上は碧落、下黄泉を探せども」

へぎり 部切。ひがきぶね(檜垣船)などの、間(ま)をしきつた板。部屋をしき

り。博多小女郎上「あひのへぎりを小楕にて」

へくさかづき 可盃。一旦酒を注げば、飲みきらぬうちは下におけないやうに底を狭小に作つた盃。又、底に穴があつて指で押へて酒を受けるやうに作つた盃ともいふ。何れにせよ、可の字は、漢文式の書き方では、常に上において下に置かないので名づける。榮花咄三「越前が可盃」。俗つれづれ「夜まで爛鍋絶えず、可盃の後みなく氣強くなりて」



盃くべ

へくのみ 可飲。可盃を飲むこと。又、酒盃を下へ置かずに傾け飲むこと。

へこむ 凹。へる(減)。轉じて、損をす。失敗する。重井筒上「四百目といふ銀を何にするとして借つたぞ。くひ込んだか、へこんだか」

へしあふ おし合ふ。かさが減るやうに互に壓する。

へしつく おし附く。壓さへつく。壽の門松上「金銀といふ強者には、又してもへしつけられ」

へそかはらけ 躰土器。小形の土器の稱。こぢゆう(小重)。物種集上「ちつくりと

へ

くはん請申す稻荷山、へそ土器に三つの灯火」

臍が茶を挽く(謔)「臍で茶をわかす」ともいふ。嘲笑に堪へぬさまにいふ譬。

へそくりがね 臍鉄金。内證に、ちびちび貯へた金銀。ほそくりがね。

べたべた しどけない、なよ〜としたさま。べつたり。冥途飛脚中「べた〜した取りなり(姿)、帯もきり〜としたほしや」

へちまのかは 絲瓜の皮。何の用にもならぬものに譬へる。つまらぬもの。丹波興作下「恩も禮義も忠孝も、死ぬる身にはへちのかは」。又、意に介するに足らぬもの。

へつひどの (臆殿)。かまどの神様。又、かまどのあるところ。出世景清「かまど賑ふ(ついで)」

べつくわ 別火。葬祭などの時、穢れを忌んで、火を別にして煮焚きすること。べつび。

べつじのねんぶつ 別時念佛。多くは淨土宗の寺院で、僧俗一道場に會し、二七日、三七日、九十日など期日を限つて、唱名念佛すること。べつじねんぶつ。

べつしよごんろゑもん 別所權右衛門。狩野派の畫家。名は則房。號は雪山。

權右衛門(大日本人名辭書には權左衛門とある)は通稱である。京都の人。初め狩野永納に、後に探幽に學んだ。延寶の頃、名をあげたが、生没年月不詳。

へつりがね 刺金。へづり取る金。かすめ取つた金。冥途飛脚上「手代の目を忍んで、わづか二百目三百目の(へつり金)べにうこん 紅鬱金。べに色がかつた鬱金色。」一代男三「色つくりたる女、肌にはべにうこんの絹物、上にはかちん染の布子」

べにとび 紅鷲。紅色がかつたとび色。一代女一「羽織は紅鷲にして」

べにはな 紅の花。べにばな(紅藍)。菊科の二年生草木。高さ四五尺になる。花は頭狀花序に列び、紅黄色の筒狀花冠を有する。その花冠からべに(臘脂)を製する。くれのある。すゑつむ花。

永代藏三「當年の紅の花の出来は、青芋は何程と」。萬年草中「紅の花のやうな小判二百五十兩」

べにや 紅粉屋。紅粉を商ふ家。戀八卦柱曆上「隣の紅粉屋の赤猫は」

へのじなり へ字形。(へ)の字の形に曲つたもの。(へ)未熟で、手ぎはのわるいこと。物事がうまくまともたらぬさま。

一代男五「どうやらかうやら、への字なりに埒明けさせて」

へまむし 「へまむし入道」の略。假名のへまムシの四字で人の顔を書いて戯れること。一種の文字遊びである。大矢數三「彼の入道がいたづらの春、樂書や又へまムシしるされたり」。又、へまむしよ入道といふのは、へまムシヨの字で入道の顔を書くあそび。

へらずぐち 減らず口。口が減らないのをよいことにして、出まかせにしやべること。出放題を叩く口。戀八卦柱曆中「今年は爰が金神に當つた。それでこれ方だたり(中略)、曆の事はおされぬと、減らず口して歸りけり」

べらつく 「べらつく」に同じ。べら〜搖れる。べら〜歩く。日本振袖始三「牛と思ふな牛の尾も、べらつきや遅い」

べらぼう 便亂坊。見世物の名。たはけて、おろかなものをいふ筥棒(べらぼう)からの思ひつきであらう。永代藏四「利發なる男ありて、烏を驚なる見せ

見せ



物を拵へ(中略)、ある年は形のをかし  
げなるを便亂坊と名づけ」

べらべら のんきなさま。ぶら〜。背  
庚申下「半兵衛は藏にべら〜何して  
居やる」

へらをつかふ 箆を使ふ。箆は塗つたり  
剃いだりする時に使ふもの。轉じて、  
あれにも、これにも、どちらつかずの  
曖昧なごまかしをする。雪女五枚羽子  
板中「上は立派な鞘口に、へらを使うて  
わかれける心の内こそ不覺なれ」  
べりたてる しやべり立てる。づに乗つ  
て、調子づいて口をきく。油地獄下「小  
菊様連れましてちとお出で。やれお盃  
持つてこいと、たつた獨りでべり立て  
る」

へりぬり 縁塗。へりぬりゑぼし(縁塗  
烏帽子)の略。へりを漆で塗つた烏帽  
子。吉野都女袖三「へりぬり取つて打ち  
かづき」。へんぬり。

へろへろ もろくて弱いさま。ひよろひ  
よる。出世景清四「生きようとと思ふ程な  
らば、へろ〜柱の五十や百、この景  
清が物のかずとも思ふべきや」  
へろへろむしや へろ〜とした武者。  
弱くて手ごたへのない武者。

へを擧。鷹の脚を結びとめる紐。あし  
を。

へんがいの 變改。變替。かへあらためる。  
からりと違へる。もやうがへする。  
又、破約する。破談する。今宮心中上  
「隠居様へ任せて在所はへんがいの  
がよい」。萬年草中「あちらを變改なさ  
れて、久米様へ進ぜられまいか」

へんがへへ へんがいの(變改)のみまり。又、  
變替。二代男八「俄に斯くの仕合せとへ  
んがへして西國へとも申し」

へんがら 辨柄。べんがらじま(辨柄縞)  
の略。置上座「べんがらの大縞の風呂  
敷」

べんがらいと 辨柄絲。印度のべんがら  
地方から舶來した木綿絲。たういと(唐  
糸)。べんがら紬の緯とする。五人女三  
「手づからべんがら絲に氣をつくし、末  
末の女に手紬を織らせて」

べんがらじま 辨柄縞。べんがら紬の縞  
もの。二代男三「べんがら縞の風呂敷  
包に」

べんがらつむぎ 辨柄紬。印度べんがら  
地方から輸入した紬。縹が紬で、緯が  
木綿絲である。後には、我が國でも織  
つた。「べんがらいと」の條を參照。

べんくわ 卞和。楚の人。玉を山中に得  
て厲王に獻じたが、石と認められ、左  
足を斬られた。武王が立つに及んで、  
またその玉を獻じ、また石と目ざれて  
右足を斬られた。文王の時に及んで、  
卞和は玉を抱いて三日三夜血涙を流し  
玉の眞價の認められぬのを泣いた。  
文王、乃ち玉人をしてその玉を理めし  
め、遂に寶玉を得るに至つたといふ(韓  
非子、卞和篇)。二代男「一人の男に  
指を並べて三度切ること、卞和が心玉、  
惜しきは年の明き前なり」

べんけいやりて 辨慶遣手。單に辨慶と  
もいふ、やりて(遣手)のこと。辨慶が  
七つ道具を振り廻すやうに、遊女を引  
廻すことの手きびしい遣手女をいふ。  
傾城反魂香中「十二人の大夫様を一人  
して廻せば、辨慶遣手がいそがしき、  
口説の中を押隔て、打物業にて叶ふま  
じ」

へんしやうなんし 變生男子。女子が男  
子に生れかはること。女身が變じて男  
子となり、菩提を成就すること、即ち  
佛語にいふ「變成就」の果を得ること。  
胸算用三「山伏が來て、變生男子の行  
ひ」

へん

へんじやく 扇鶴。支那戦國の世の名醫。姓は秦、名は越人。死人も生かし、時と場合によつて、如何なる種類の患者にも専門的の醫術を施して、之を治せしめたといふ。印度の着婆と並稱される。夕霧阿波鳴渡下「病氣はどうで御座ります(中略)、着婆扇鶴でも叶はぬ」へんつき 偏突。中古語。一種の遊び。文字の旁(つくり)を出して、順次いろ／＼の偏をつがせ、又、それを讀ませ、つかへたものを負けとするもの。又、詩句などの偏を隠し、旁を當てさせるものといふ。

へんとを 別當(べつたう)の假名違ひ。辨慶京土産五「一院のべんとを萬里小路の俊定在判と讀み終り」

へんねし へんしふ(偏執)の訛誤であるといふ。ねたみ、いちわるくするさまの形容詞。

へんべん 返辨。借りたものを返すこと。返濟。百日曾我五「あたひを受けん様はなし、返辨いたす」

へんべん 便便。時をむだに過ごすさま。つまらぬことをなが／＼と續ける様。だら／＼。だらり。べん／＼だらり。二代男六「京屋の端居して、祇園の山鉾

ほう

の咄しべん／＼と」。國性爺三「病死するまでべん／＼とも待たれまい」

べんべんだらり 前條に同じ。源氏十二段長生鳥臺「茶を飲む人もない所にべん／＼だらりと長居して」

はいやり やさしく笑みをふくむさま。心の穩かなさま。背庚申下「母はいやりと笑顔して」

ほうが 奉加。社寺のために、金品を奉ること。もと、神佛に寄進する財物の中へ、わが財物を加へ奉ること。又、その寄進された金品。二代男三「千日寺にさる方様の石塔を建つる奉加の大部分るを」

ほうがぎん 奉加銀。奉加する金銀。社寺への寄附金。ほうがぎん(奉加金)。冥途飛脚下「銀子一枚取出し、これは難波の御坊の御普請の奉加銀」

ほうがくみ ほうがくみ(方角見)を見よ。

ほうがちやう 奉加帳。奉加の金品及びその寄進者の氏名など記す帳簿。奉加

簿。寄進人名簿。轉じて一般の寄附金名簿。一代男五「城春が三味線の奉加帳心得た、小判のついでに、なんでも無心は御座らぬか」

ほうきりん 寶龜院(はうきりん)。高野山内の一院。開基は觀賢。大師御衣のことを司る。又、その院の住持の稱。大下馬四「ほうき院は晝寝をしてみました」

ほうぐみ 棒組。駕籠かきの相手。あひぼう。轉じて、仲間。あひかた。特に、悪仲間。悪友。二十不孝四「よき友は少なく、悪しき連はあるものぞかし(中略)、甚七源七紙子頭巾を被り、棒組の口を揃へ御厄拂に出でける」

ほうぐみきやく 棒組客。棒組の客。常に相連れる客。

ほうけい 寶鑿。磬を尊んでいふ。への字形に作つた石の樂器。棒に吊して打鳴らすもの。後には銅で作る。又、きん(磬或は鑿)のこと、その條を見よ。釋迦如来誕生會五「すはや御法もかいびやくの、ほうけいの聲告げわたる」

ほうげた ほうげた(頬桁)の假名違ひ。一代女五「笠の緒のあたりしほうげたをさすり、わらんち摺の跟(きびす)を

揉んで」

ほうける。 毫。惚。ほうく(惚)の口語。

ぼんやりとなる。心が不確かとなる。そよける。みだれる。重井筒中「私ねごとがな申したか。但しお前が病みほうけて、空耳でがな御座りましょ」

ほうこうかまひ

奉公構。奉公の出来ぬやうにする仕置(しおき)。何家へも奉公のならぬやうに、處を追はれることを、「奉公構ひの改易」などいふ。

ほうこうびな

奉公雛。嫁入の時持つて行く雛。下文を見よ。木偶故實「この人形は、嫁入の具にして乗物の先に立て行くべし。先方にて生涯奉公する人形とて、御伽奉公ともいふ、決して離縁の憂なく、伶俐の子をまうけて後めでたかるべき吉例の人形なり」。二代男

嫁取りて人の懐子を乗物すぐに奥座敷にかき入れて(中略)、奉公雛の置所、腰巻したる女、長柄くはへの品を盛り」

ほうこうひの

奉公日出。威勢のよい家に奉公すること。日の出のやうな勢ある家の奉公人。曾我會稽山四「浪人の我々が錆太刀と、奉公日の出の殿原が、

ほ

又を試して討死せん」

ほうこうぶん 奉公分。奉公のつもり。奉公人の格。奉公人といふ名義。薩摩

歌中「定めて頼みの来る方も、大分取れの見込みで、奉公分というであらう」。ほうこく 寶國。極樂淨土の稱。寶所。ほうごたな 反古棚。反古類を入れておく戸棚。萬年草上「その状は、法印様繰返し披見あり、反故棚へ入れ錠おろし」

ほうざや 棒鞘。刀劍の鞘のまつすぐでそりのないもの。又、白鞘の稱ともいふ。懷硯「棒鞘の合口握りて」。雪女五枚羽子板中「盗みといへば氣もおくれ、前後棒ざや身はふるひ」

ほうしんたん 豊心丹。奈良の西大寺の坊中から賣出した薬。さいだいじ。大下馬「西大寺の豊心丹の方組を細字にて書きつけ」

ほうづくめ ぼうづくめ。棒の有りたけ持ちよること。棒を盡くす義。又、棒疎で、棒で叩いてすくませる義か。傾城酒呑童子四「家内が寄つて棒づくめ」

同五「親兄弟棒づくめにして、追出せ叩き出せ」

ほうぞうびく 法藏比丘(ほふざうびく)古淨瑠璃、説經節の曲名。その筋は下

の通り。天竺國王の太子が讒に遭ひ、

姫宮と共に深山に通れて二兒を生む。後、太子は國民に迎へられて歸つたきり消息がない。姫宮母子は跡を尋ねて遙々都に上る途中、鹿野苑で母宮が病む。二兒が介抱する甲斐もなく、母宮は遂に死する。そこへ新國王となつた父宮が迎へて来て、愛妃の墓を弔ふ。これは皆佛の教化の手段で、太子と姫宮との本地は、阿彌陀と薬師とであつたといふ。油地獄中「そも、法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀佛と薬師は御夫婦と云々」

ほうだたり はうだたり(方崇)を見よ。

ほうちぎり 棒乳切。棒のちぎれはし。棒きれ。棒。棍棒。ちぎりき。

ほうちぎりき 棒乳切木。前條に同じ。武道傳來記八「手毎に棒乳切木、或は割竹にて敲き立て」

ほうちつほ 兩吟一日千句「影照らす月宮殿にほうちつほ、ねがひの糸や鹿子ゆふおと」

ほうづくめ 「ぼうづくめ」を見よ。氣の抜けた時の副詞とする。釋迦如来誕生會「なだれ返して詰めかくる、俱

牟波羅ほうと詰まりしが

ほうねち 棒捻。棒の両端を持つて、互に反対の方向に捻ぢあふ力くらへの遊戯。ほうねちり。

ほうばいづき 朋輩づき。朋輩とのつきあひ。友達の氣受。朋輩への人づき。ほうはつら ぼほ(頬)はつら(面)。(謔)名は違ふが同じもの。どちらをどちらへ使ふも同じこと。又は氷の朔日上「三雨餘りは今日明日に請取る筈の約束、はて、ほうはつら、この銀を請取り次第やりませう」

ほうはん 謀判。にせ判を作ること。又、その判。偽印。偽造判。曾根崎心中「おれをねだつて銀取らうとは、謀判よりも大罪人」

ほうびや 棒火矢。鐵製の筒に火薬を込めて、砲から發射したもの。矢に火を仕掛けて射た普通の火矢から起つたので名づける。男色大鑑「浮香・棒火矢を申立に御合力」

棒まかれな 棒で打たれるな。夕霧阿波鳴渡上「百貫目も遣ふ大盡の言ふ様な。棒まかれな」

ほうらい 蓬萊。次條の略。



いらうほ

永代藏「春の物として是非調へて蓬萊を飾りける」

ほうらいかさざり 蓬萊飾。新年の祝ひの飾物。米・慰斗・蛇・伊勢海老・勝栗・昆布・野老・商染などを三方に載せ飾つたもの。山棚。

ほうらいざん 蓬萊山。(支那の傳説に、東海の中にあつて神仙が棲むといふ美しい山。蓬萊島。前條に同じ。二代男「飾り置かせし蓬萊山の、北の洲崎の海老の髭に、唐織の金帯一筋懸つて、春の初風に翻る」

ほうらく はうろく(焙烙)の訛。物を煎るに用ひる、平たい素焼の土鍋。一代男「餅花を散し、炮烙(ほうらく)に香らせ」

ほうらくづきん はうろくづきん(焙烙頭巾)の訛。一代女五「この親仁、襟に綿帽子を巻き、夏冬なしの炮烙(ほうらく)頭巾」

ほうれんさう はうれんさう(菠薐)を見よ。

ほうろく 土鍋(はうろく)。「ほうらく」の條を見よ。土鍋(ほうろく)の一盃 諺か。胸算用二「揚屋の酒小盃に一盃四分づつにつも

り、若衆宿の奈良茶一盃八分づつにあたるといへり。これを氣をつけて見れば、格別高いものながら、これ土鍋の一盃とて何のやうなし」

ほうろくづきん 土釜頭巾。はうろくづきん(炮烙頭巾)に同じ。俗つれん(「いふ事に槌のきくも、土釜頭巾を被つて、異見たらだらいはれし親仁の御蔭」)ほうろくびや はうろくびや(焙烙火矢)を見よ。

ほえづら 吠面。泣きがほ。特に泣顔を卑めていふ。泣きつら。國性爺「エ、大事の門出、不吉の吠顔、そこ立退け、日に物見せん」

ほえづらかく 泣顔かく。泣きつらをす。油地獄上「お慈悲〜とほえづらかく」

ほかい 行器(ほかる)。食物を入れて運ぶ器。圓形で高く、三本の脚が外へそつて附いてゐる。一代男七「茶菓子は、雛の行器に入れ」。卯月潤色下「御名残をしき椀家具、法界ほかいの御回向、偏に頼み奉る」。外居。

ほかつく ほかくする。熱く感ずる。ほてる。堀川波鼓上「一つ過ごする酒好み、亂れぬ顔もほかつきて、重たき頭

撫櫛ヤ

ほからかす 放つておく。打捨てておく。ほつたらかす。油地獄上「餘所の事はほからかして、サア〜參らう日がたける」

ほぐし 火串。ともし(照射)の松を挟む木。曾我會稽山「照射する火串の影のねらひ獵」

北洲の千年 (諺) 北洲は須彌山の周りに在る四大洲の一。北方にあつて、他の三洲の何れより勝つた洲で、こゝに生れるものは千年の壽を保つといふ。ほくしゆ 木主。位牌のこと。史記周紀

に出てる語。吉野都女楠三「周の武王は木主を作つて殷の世を傾け」

ぼくせう ぼふせう(乏少)の轉。津國女夫池「ぼく少輕微ながら、是れ今晚の進上」

ほくそづきん 苧屑頭巾。がんだうづきん(強盜頭巾)に同じ。男色

大鑑五「さき羽織着て、ほくそ頭巾に山刀さして」



んきづそくほ

ほくち 火口。燧石で、うち出した火を

ほ

移し取るもの。柔かで乾いてゐて火のつき易い綿状のもの。いちびの殻などで作るといふ。ほくそ。生玉心中下「下緒の房のしげ絲を、ほくちとなしてかち〜、かつしと打つて吹付くる火影」

ほくび 穂首。槍の穂の柄に接したところ。銚にもいふ。けらくび。しほくび。釋迦如來誕生會二「報いを見よと突かれたる銚のほくびをゆん手につかみ」

ほけ 火氣か。大矢數「雲の通ひ路はなつ鐵砲、ほけかたつ早晩(イツモ)ながらの雁の聲」

ほこ 矛。鋒。ほこだし(鋒山草)の略。やまほこ。(弓の幹の稱)。

ほごしちやう 反古紙帳。反古で作つた紙帳。

ほこぶすま 銚襖。銚を多く揃へて敵を防ぐこと。鋒先を隙間なく並べて敵に向ふこと。日本振袖始「麓に數萬の軍兵鏃を揃へ、銚襖を作つて攻め上る」

ほこへし大木 誇り榮えし大木の義といふ。あふひのうへ「神木により見ればさしもほこへし大木の、こずゑ小枝もかれ〜」

ほごやき 反古燒。俳諧師手鑑「反古や

きや名もすみぞめの櫻鯛(忠山)「ほこり 埃。はした。あまり。殘金。萬年草中「二千貫目足らずのあきなひに、九貫目のほこりを取り」

ほこりとり 埃取。ほこりを取るもの。埃をよけるもの。衣服にいふ。うはつぱり(上張)の類。二代男「上着二つ、下着二つ、ほこり取の木綿着物一つ」

ほざく (一)理窟を言ふ。大聲で物言ふことを卑しめていふ語。國性爺「しやぐはん」と喚きける(中略)、ヤア餓鬼も人數、しほらしい事ほざいたり。(二)行ふ。爲す意を嘲つていふ。特に惡事にいふ。天網鳥上「こりや縛り付けられた。扱は盗みほざいたな」

ほさつ 菩薩。米の異名。種子の時は文珠、苗の時は地藏、稻の時は虚空藏、穂になる時は普賢、飯の時は觀世音と、それ〴〵菩薩の名で呼ぶ(清良記)。俗つれ〴〵「酒の一滴は菩薩七十粒より出づるをしたみ」

菩薩の六度 菩薩が修行して涅槃の彼岸に到る六法。即ち、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の稱。

ぼさつまつり 菩薩祭。八月廿二日、肥前國長崎で支那から來航した舟人達が

ほ

行つた船神の祭禮。

ほしかぶと 星冑。冑の鉢に凸形の鉄を打ちつけたもの。文武五人男五「光りや天つ星かぶと、鐵形高く打つてつけ」

ほしきりふ 星切斑。矢羽の一種。全體黒い中に、星のやうに白い斑點のあるもの。

ほじそあか 菩提娑婆訶。陀羅尼の文句。萬年草中「讀んで波羅僧掲諦を立て、ほじそあかなる面相」

ほしやう 歩障。几帳・衝立の類。日本振袖始四「子細は何と白綾の、歩障を中に押しつれば(中略)、稻田姫、尊の仰せを蒙りて、歩障の影より聲作り」

ほそがね 細金。金銀の箔を細かに刻んだもの。衣物などの模様、その他飾りに用ひる。大矢數三「佛三尊中川の宿、ほそがねつかひすまして泥引に」

ほぞくりがね へそくりがね(銚線金)に同じ。永代藏一「毎年かきみて二十餘年に胞(ほぞ)くり金拾貳貫五百目になしぬ」

細谷川の丸木橋 踏みかへる(文返る)の縁にいふ句。源平盛衰記、三十八卷、平通盛の歌に「我が戀は細谷川の丸木橋ふみかへされて濡るゝ袖かな」とある。

る。萬年草上「飛脚の九兵衛が心まで、細谷川の丸木橋、文返れとぞ祈りける」

ほそづくり 細作。料理の語。魚肉などを細くつくること。又、そのもの。大矢數三「細作り鯉の鱗をならべつゝ、今日の俵は波次第なり」

ほそびきあみ 細引網。囚人の駕籠に、細引繩の網をかけ、逃走を防ぐこと。又、その網。

ほそゐりう 細井流。槍術の一派。武道傳來記「安川流、細井流とて、鎗に一流づつのほまれをあらはし」

ほぞん ほんぞん(本尊)の略。吉野都女楠「お肌に御ほんぞんかけてか」

ほぞんかけたる時鳥 時鳥の鳴聲を、「ほんぞんかけたか」といふに據つた句。吉野都女楠「ほぞんかけたる時鳥、あやめの沼は水あさし」

ほだいもん 菩提門。佛語。菩提に入る門。又、葬場の四方の門の中、西方のもの。

ほたえあがる やかましく亂暴なことをいひつゝのる。ふざけたことが高じて來る。油地獄中「やいかしまい、あたり隣もあるぞかし、よつほどにほたえあがれ」

ほたはら 馬尾藻。正月の祝ひの蓬菜に用ひるもの。馬尾藻を刈取つて干し、藁しべて米俵の形に束ねたもの。織留「ゆづり葉を賣る山賤、ほたはら數の子を賣る海人」

ほたへじに ほたえじに。ほたえながら死ぬこと。わがまゝを盡くし、ふざけたまねをしつゝ死ぬこと。卯月潤色中「榮耀が餘つて、こなた衆がほたへ死にめさるゝを、己れ兄弟が知つたか」

ほたへる ほたえる。ほだえる。ふざける。あまえる。おどける。ざれあまえる。天網島上「お前は何處ぞわきで遊んで下さんせ、といへどもほたへた顔付にて」。卯月紅葉上「若いなりしてびらしゃらと、あんまりほたへさつしやるな」

ほたゆ 前條の原形。あまえる。たはむれる。

ほた小こむ 放り込む。投げ入れる。博多小女郎上「しめ殺して海へほたり込め」

ほたゑる ほたえる。「ほたへる」の條を見よ。油地獄中「おかちはずち擲きなされても、あんだらめには拳一つあてずほたゑさせ、萬事に遠慮が身の仇」

牡丹花下の睡猫 牡丹の花の下に睡つて

る猫は、花の美に酔うてゐるのでなく、花に戯れてゐる蝶に目的があるとの意。敵は本能寺にありといふ類。

ほちく 甫竹。(人名)茶杓工。和泉國堺の人。千利休及び古田織部の傳を受けて茶杓を作つたといふ。二代男「吳竹を所望して、茶杓といふものに切るといふ、主、奥より甫竹がためたる一節に、鹽瀬が服紗を取添へ」

ぼつかける おつかける(追駈)の訛。源氏烏帽子折四「随分ぼつかけ牛若を討留め」。生玉心中上「すねる男をぼつかけて、そこら〜をずんづと飲ましまる〜」

ぼつかへす おつかへす(追返)の訛。

ぼつかり (ウ)うつきり。氣づかぬさま。又、すつきり。百日曾我三「誠にやかにさゝやけば、海野ほつきりとたらされ」又、ほつきか。 (ウ)口を開いて喰ひつくさま。孕常盤四「いとらしいお顔や、ほつきかりと喰ひつきたい」。又、ほつきかり。ばくり。

ほつきあぐ 持うちこむ。金など悉く使ひはたす。遊興費に入れあげる。丹波與作中「何もかもほつきあげ、今は布子

ぼ

と襦袢と」。次條参照。

ぼつく 金を浪費する。惜まず遊興に使ふ。重井筒上「あのやうにほつては、やがて身代は木賊色で、おろす様になつてのけう」

ぼつけながや 法華長屋。法華庄次郎屋敷のこと。今の大坂堂島裏二丁目永來町といひ、船大工町・中町・渡邊橋以东が、この屋敷であつた(大坂町鑑)。又は水の瀬日中「青葉がくれの鳥の音も、ほつけながやの名を立てて」

ぼつこしゆもない 馬子などの語。つまらない。引きあはない。ばか〜しい。「ほつこしゆもない」。「あつたほこしゆもない」ともいふ。「欲しくない」などから訛つたか。碁盤太平記「狀ことづかつて、くたげれながらほつこしゆもないと持つて来る。天智天皇五「馬方怒つて、エ、畜生めこりやあ、枝骨が折れたか、ほつこしゆもないとぞ打ちける」

ぼつこむ 打込。(ウ)入込む。踏込むなどを強めていふ。蟬丸四「博雅の三位が庵とは是ならぬ、ぼつこんで討取れ」。(ウ)差す(刀を)。佩ぶ。はく。薩摩歌中「たしなむ一腰ぼつこんで」

ぼつし ぼぐした絲。棒からはづした絲。はづし。

ぼつしやうずいもう 法性隨妄(ぼつしやうずゐまう)。法性は實相眞如の義。法性を妄想煩惱が妨げること。一心五戒魂「法性すいもうの雲厚く、十二因縁の峰にたなびき」

ぼつしやうむろ 法性無漏。法性の域に達して煩惱のないこと。悟入して迷はぬこと。釋迦如來誕生會四「法性無漏の知慧の火は石にあるか燧にあるか」

ぼつしり 靜かに物を思ふさま。しみじみ。しつぽり。しめやか。槍權三上「家内は寝入り、ぼつしりと、何を思ふと咎め手の、無きが我が屋の取得」

ぼつせ 法施(ほふせ)。神佛に對して經を誦し法文を唱へること。

ぼつたい 法體。僧形となること。僧侶の姿。二十不孝二「法體しての十徳、名を善入と呼ばれ」

ぼつたいらうじん 法體老人。僧形の老人。大下馬一「法體老人集まり」

ぼつたて 追立て。おつたての訛。強めていふ。吉野都女補「犬畜生餘すまじと、ぼつ立て〜叩き立て」。國性爺「揃ひも揃うた供廻り(中略)、二行

に立つてぼつたてろ」  
ぼつちらす 追ひちらす。放り散らす。  
離れ行かせる。ぼつちらかす。曾我會  
稽山四「名字を借つてぼつ散らし、某他  
人に成つたる徳」

ぼつつむ 追詰。おひつむ。おつつむの  
訛。強めていふ。源氏冷泉節上「既にぼ  
つ詰め捕つて伏せ」

ぼつて 發傳。鎧の名所。嗣の後の最下  
部。どうじり(嗣尻)。吉野都女楠二「押  
付板・發傳・高紐」

ぼつても とても。どうしても。いかな  
ことでも。出世景清四「命を申受け、出  
家させんと思ひしが、最早ぼつてもな  
らぬ」

ぼつとり 柔かみがあつて美しいさま。  
ふくくしく愛嬌あるさま。

ぼつとりもの ぼつとりとして人目を引  
く女。曾根崎心中「戀知りの初様とて、  
町一番のぼつとり者」

ぼつる 解ける。ほどける。はつる。ほ  
つれる。結んだものなどが、ばらば  
らになる。

ぼつれいづ 解出。ほつれて出る。又、  
のがれ出る。にげ去る。

ぼて 胸。うでを卑しめていふ。うでつ

ぶし。日本振袖始三「物書くほで打折つ  
てくれん」

ほていごえ 布袋肥。布袋のやうに肥え  
ふとつてゐるさま。二十不孝「業生を  
勸むるもとてもなく、布袋肥に齋米を  
費し」

ほていのり 布袋乗。布袋が坐つたやう  
に、くつろいで、打ちひろがつて駕籠  
などに乗ること。曾我會稽山「乗物の  
戸八文字に開かせ、布袋乗に乗つたる  
は、梶原平次景高也」

ほていやがるた 布袋屋骨牌。「うんすん  
がるた」の類で、布袋屋といふ店で賣  
出したものか。或は繪札に布袋のある  
ものか。懷硯「舟人が糶米櫃より、布  
袋屋骨牌の、十馬八九の足らぬ取集め  
物を出しければ」

ほてがくねる 「ほて」は腹をいふ。上方。  
中國・四國方言。腹すちがよれるといふ  
類。嘲笑する時、又は小癢に思ふ時に  
いふ。孕常盤二「ヤアほてがくねるはい  
小意氣過ぎた前髪奴、摘み出してくれ  
うと、腹を張れば」

ほてくろしい 腹ぐるい。轉じて、あつ  
かましい。無遠慮なさまにいふ。宵庚  
申上「手付に一寸ほてくろしい事、御免

御免」  
ほてたつ 「ほて」は腕のこと。腕の立つ。  
腕の利く。自然居士三「この内にほて  
たつ奴は一人もなし」

ほてつばら 布袋腹。大きな腹。ふくれ  
た腹。ふとつばら。ほてばら。又、ふ  
くれ腹の者を罵る語。丹波與作中「戻り  
馬やろい、ほてつばらめ」

ほててんごう てんがうに同じ。ふざけ  
ること。わるいたづら。惡戯。丹波與  
作中「ほててんごうの貧乏神、何もかも  
ほつきあげ」

ほてふり 棒手振。ふりうり(振賣)に同  
じ。織留五「ひとり過ぎの棒手振」。孕  
常盤二「ヤアほて振の賣人め、弓取の法  
は知るまじい」

ほてぼし うでぶし(腕節)の訛。うでつ  
ぶし。うで。

ほてれん 腹のふくれたさま。身持ちの  
さま。萬年草上「善哉餅を十三杯、それ  
から身持になつたやら、ほてれんぢや」

佛金色の身あがり 用明天皇職人鑑の繪  
入本の外題の脇に、「付り佛は金色の身  
あがり日本まぶの始り」とあるをいふ。

金色の佛身と、遊女の身あがりするこ  
とをわけてふ。二枚繪草紙上「曾根崎の



ゆかりの芝居初様も、定めし佛金色の、身あがりときく外題にひかれ」

**佛頼んで地獄へ落つる** (諺) 結果の意外である譬。聖徳太子繪傳記「笑止笑止、聖徳太子、佛頼んで地獄へ落つる不便さよ」

**ほとけだほし** 佛倒(ほとけたふし)。佛像のやうに直立したまゝ倒れること。

聖徳太子繪傳記「誰れが射るとも白羽の矢、鳥主が眞額に裏をかゝせてはつしと立つ、大事の手なればたまり得ず、佛倒しにかつばと臥す」

**佛の顔も三度** (諺) おとなしい人も、度度無禮をすれば怒る。委しくは、「佛の顔も三度撫げれば腹立つる」といふ。冥途飛脚上「親の心や佛の顔も、三度飛脚の江戸の左右」

**佛の箸を割がす** (諺) 怒のために目が暗んで佛削をも恐れない。僧侶の不身持にいふ。賀古教信七墓廻三「佛物を盗み取り、佛のはくをはがすとは御坊のことよ、年にも足らで遊女狂ひ、最早出家はすたつたり」

**佛の御手の絲** 阿彌陀如來の右の御手にかけてある五色の絲。衆生が、それに繞つて淨土に導かれて行くといふ絲。

ほ

「善の綱」の條参照。曾根崎心中「大慈悲の頼みにて、かくる佛の御手の絲」  
**佛は金ほど光る** (諺) 佛も金ほど光る」といふが常である。「釋迦も錢ほど光る」ともいふ。その條を見よ。賀古教信七墓廻三「佛は金ほど光るといふ、金銀たんと有るならば、我身を受け出し、佛體と拜まれて見せ申さん」

**佛は見通し** 諺に「神は見通し」といふを轉用した句。武道傳來記「佛は見通し、もつたいなき事」

**ほところご** ふところご(懐子)の訛。萬年草中「風にもろき鼻紙や、まだ十七のほところご」

**ほとぶ** 水にふやける。轉じて、湯につかる。特に、長湯する。傾城酒吞童子四「あたまの鉢に立つ湯氣は、富士の煙の上もなまき、ほとび過ぎたる湯上りの」

**ほなが** 穂長。うらびじ(裏白)のこと。尚朶。源氏烏帽子折三「藁屋が軒も飾り繩、穂長ゆづり葉」

**穂長の煤** 裏白の穂長と、長く垂れた煤とをかけていふ。又は水の別日中「穂長の煤を打拂ひ、人に情を掛鯛のむしり肴と春めかす」

**穂に穂を出す** 多くの穂を續いて出す。

いろくの穀が次ぎに實る。松風村雨東帯鏝三「山田に四季の穂に穂を出し」

**ほねうづき** 骨疼。梅毒が骨髓に入つて、うづき痛むこと。骨がらみ。結毒。

**ほねつきぬき** 骨突貫で、骨まで叩いて料理することか。骨附抜で、骨の附いたところを抜きとることか。「一代女」骨つきぬきの小鴨、飯汁、相焼」

**ほぼしらだち** 帆柱立。帆柱のやうに立つこと。棒立。油地獄上「さきに與兵衛帆柱立ち、あとに二王の張番立ち」

**ほびあげる** 追上げる。罵つていふ。戀八卦柱脛上「やい男ども、隣のあき屋の二階へほび上げ、下に急度番をせい」

**ほひだす** 追出す。罵つていふ。油地獄中「分別も何もいらぬ、ほひ出してのけさつしやれ」

**ほふかい** 法界。(ほふかいりんき(法界悋氣)の略。懷硯三「法界ではなけれど、あの男めに通つたら、女房を持たせて置かさへ腹立つに」。白氣まぐれなこと。おちつきのないこと。浮氣。重井筒上「どうで湯か茶か呑みにである、法界の男ぢやと思へば濟む」

萬有を含む廣大無邊の境界を法界といふ。その法界の生類中、救度すべき縁故のないもの。法界無縁の者。

ほふかいりんき 法界悋氣。おのれに直接關係のないことに腹を立てること。

特に、他人同志の戀をねたむこと。をかやき。槍權三上「奥には得手に法界悋氣、瞋恚の怒綱きれて」

ほふけん 法眷。法門の眷族の義。同一の法門に學修し、同一の法味を樂しむ者。ほつけん。懷硯「法眷の僧の、寺

持てるを幸ひに尋ね行き」  
ほふざうびく 法藏比丘。「ほうぞうびく」を見よ。

ほふせ 法施。「ほつせ」を見よ。  
ほふらくづきん 法樂頭巾。はうろくづきん(僧帽頭巾)に同じ。「ほうらくづきん」を見よ。

ほほ 懐。ふところ。今いふ「ほんほ」などの類。「一代男」「かたまりを、わがはだへは是じやと、ほゝに投入させ給ふ」

ほほがまち 頬輔。ほほげた(頬折)に同じ。壽の門松上「吾妻むつと、頬がまちひつしやりと見しらせ」

ほほぐすり 重皮藥。厚朴の樹皮から製

した風藥。ほほ。

ほほげた 頬折。(→頬の骨。あごの上下の骨。かまち。つらがまち。女腹切中「べりくしやべる頬げた、蹴放いて仕舞はん」)→頬折を動してしやべる事。口をきくこと。萬年草中「ヤア京々とや

かましい、頬げたが過ぎる」

頬すいたる 頬の肉の瘦せたさま。博多小女郎上「物案じ顔も頬すいたる、中に頭の毛判九右衛門」

頬は面(つら) (諺)「頬は顔」ともいふ。實は同じで名だけ違ふ譬。どちらにしても同じとの意。「ほうはつら」の條を見よ。

ほほんほん 鼓の音に擬した語。戀八卦柱曆下「ほんくく」と鳴る鼓、(中略)ほんほんんとぞはやしける」

譽はそしりの基 (諺) ほまれを得るのは、やがて人にねたみそしられる基となること。

ほむら 焔。ほのほ。轉じて、怒り・恨み。嫉みの情緒のはげしく作用すること。戀八卦柱曆上「嫉みのほむらに提子(ひさげ)の水が湯となつた」

ほめく ほてる。熱く感ずる。もと、火めく義。ほとほる。

ほめくさもなびく 讚草も驕く。多くの人々が讚める。口々に賞めそやす。二人不孝二「美男なれば讚草も驕き、二人の親も我が子自慢して」

ほや 穂屋。薄の穂で葺いた小屋。男色大鑑三「玉笹の陰深く、里人の穂屋造りて、瓜の番せし跡より」

ほやほや 笑ふさま。にこ〜。日本武尊吾妻鑑三「まだほや〜笑うてゐるやうなと、死骸にひつしと抱きつき」

ほやり 前條に同じ。雪女五枚羽子板中「につこりほやりの笑顔は誰だ、ア、それだか是れだか、春の司の佐保姫君」

ほゆ 吠。人の聲を立てて泣くのを罵つていふ。油地獄下「母様〜というてほえをります」又、やかましくいふ。どなる。

ほらどこ 洞床。茶室の床で、一方の前面を洞のやうに塗つたもの。茶室にはこの他に、洞棚。洞口などいふ棚や通口がある。

ほらなる金銀 ぼろい金。ぼる金、ぼり取る金の義。あぶくぜに。あんぶく鏡。永代藏四「當座々々の榮花と極め、思ひ出なる人心、これを思ふにほらなる金銀まうくる故なり」

ほらほら 裾などのひるがへるさま。ひらひら。傾城酒呑童子三「小棲ほら〜立出れば」

堀川の惠比須 大阪天満堀川惠比須社。

廿二社の第三番。卯月紅葉上一「こりや堀川の惠比須殿、北野は天満と御一鉢」

ほりがよひ 堀通。道頓堀の芝居見物に通ふこと。男色大鑑一「山賤女も、堀通

ひに身をやつし手業を忘れ」

ほりだす はふりだす(放出)の約。投げだす。博多小女郎上「綿の代まで相添へて、投出すほり出す、頂くに、亭主が

臆ぞ草臥れける」

ほるてら 菓子の名。「かすてら」からの造語か。天神記一「かすてら・ほるてら」

ほるなん 「ほるとがる」又は次條の語から思ひついで戯れた語であらう。國性

爺二「ほるなん五郎、うんすん六郎」

ほるねら 浮泥。日本から海上三千九百里の南海にある熱島國であるといふ。

ボルネオ(Borneo)の誤傳か。

ほろ 母衣。もと戦陣の具。矢を防ぐに用いたもの。後には、背に負うて飾りとし、災難よけのまじなひとした。虎

溪橋「石臼の岩よとなるまで廻りましょ、母衣にかけたる天の羽衣」

ほろそ 母衣裾か。大矢數三「天人も衰へ懸り泪の露、ほろそかがる布引の漣」

ほろたいしやう 母衣大将。母衣の事を掌る役。大将は旗大将などいふ類の大將である。男色大鑑二「母衣大将神尾

刑部」。武道傳來記四「二百石の御加増くだし賜はり、母衣大将に御役替まで

なし下され」

ほろつけ 母衣付。兜の名所。四天座(兜の鉢の前後左右にある鉢)の下にある

穴から、母衣を附けるために出した緒。即ち、ほろつけのくわんの略。わな。

文武五人男五「光りや天つ星兜(中略)、母衣付・鉢付、吹返」

ほろぶにあ 滅日。曆の詞。萬事に凶であるとする日。滅門日。戀八卦柱曆下

「遂に命のほろぶ日、湯殿はじめに身を清め」

ほろほろあめ ほろ〜と降る雨。はらはらと亂れ降る雨。「ほろろふる」の條

参照。

ほろむしや 母衣武者。母衣をつけた武者。三鐵輪「ほろ武者も運命爰に月暮

れて」

ほろろろうつ 羽ばたきする。羽ばたいて鳴く。武道傳來記八「驚く鳥のほろろろう

ち弱りしを捕へける」。次條の例参照。ほろろふる 雨や雪がほろ〜と降る。はら〜と散るやうに降る。曾我扇八

景下「雉子の鳴く聲もほろ〜うづつやほろ〜ふる、ほろ〜雨に駒なづむ」

ほん 本。(一)まこと。本當。根本。持ちまへ。(二)代男六「人に笑はるゝをほんとする傳八も」。置土産四「何につけても

馴染がほんなり」。(三)正しいさま。端然。一代男七「物やはらかにかしこく、行儀

ほんとして、座につきてより假にも立たず」

ほんあみ 本阿彌。刀劍鑑定の名家。妙本阿彌を祖とする。その七世光心の女

婿、光悦が特に名高い。物種集上「本阿彌に天の逆鉢たのみ寄り」。雪女五枚羽

子板中「研拭ひたる玄關前、これは本阿彌の屋造と、日利したるも理りなり」

ほんう 本有。佛語。本來固有の性徳。本来。

ほんうつて 本討手。仇討の主たる人物。助太刀する者に對していふ。當の討手。

槍權三下「助太刀して本討手の名に疵つけな」

ほんうば 本乳母。抱乳母に對して、實際乳を與へる乳母の稱。織留六「本乳母

ほ

抱姫とて二人まで氏素姓までを吟味して

ほんおくじま 本奥島。眞正の奥縞。おくじま(奥縞)を見よ。一代男六「男は本奥島のはやり出」

ほんか 本歌。(一)本式の和歌。正式の和歌。狂歌・俳諧などに對していふ。一代男七「秋の野を書かせ、是によせての本歌、公家衆八人の銘々書」。(二)先人の和歌に採つて詠じた歌に對して、その先人の和歌をいふ。後人の詠のもととなつてゐる歌。

ほんぎん 本銀。元金。もときん。永代藏。「本銀に不足出来そめ、それより次第に穴明きて」

ほんくれなる 本紅。正眞の紅色。眞紅。婉久「世物語下」「本紅の二重なるふたの物」

ほんけ 本卦。生まれ年の干支と同じ干支の年に廻り合ふこと。六十一歳になること。一代男八「すではや、くる年は本卦にかへるほどふりて」

ほんけい 本系。本系帳の略。一門族の系統を總覽することの出来るやうにしたもの。系圖書。つりがき。

ほんけがへり 本卦回。本卦に廻り来る

こと。還暦。前々條参照。大職冠。「年積つて六十一歳、本卦還り未の白髭」

ほんこ 本子。(一)實子。(二)たたいぶこ(太夫子)に同じ。胸算用。「太夫子小さくて、本子には仕立てがたし。置土産五」

「雪山松之助、年十九、野郎なり、座に着きたる所、本子に取返へる程に候」

本國寺芋木の下 萬文反古三「鹿子の色色十二までは無用に候(中略)、是も本國寺芋木の下のつや鹿子は、十二の内にて六百四五十日の違ひあり」

ほんこむろ 本小室。小室節の純正なものを。本小室節。丹波與作中「あそこへ講うて来る本小むろのひんぬきは、與作與作」

ほんごろ 本吳絹か。榮花咄三「油屋絹の本ごろ半疋、六十日の地を六十五匁にて染むる事、中々身代薄き人の成るまじき小袖なり」

ほんきん 盆山。(一)箱庭などに作つた石の山。盆景の山。一代女五「奥深に小園き家作り、盆山に那智石を蒔きて」。(二)盆の上に、石と砂礫で作つた山。盆石の山。(三)小さい山。

ほんじやり 愛らしく、ふくやかなさま。

雪女五枚羽子板中「ほんじやり咲いて、匂うた梅の花」。五十年忌歌念佛下「ほんじやりとしてきつとして、花橋の袖の香に」

ほんすゐ 本帥。本粹。本當の粹。眞に粹人らしい粹人。はんすい(半帥)に對していふ。榮花咄五「色町廢めるが本帥のつめひらき」

ほんそろう 奔走。大事にすること。心をかけて愛すること。槍權三上「茶の湯を上手になさるゝ故、人の用ひほんそろうもある」。次條参照。

ほんそろうご 奔走子。いつくしみ愛されてゐる子。愛子。祕藏子。大矢數五「軒は甲の立物の雲、奔走子が光もつよき夏の月」

ほんだいじん 本大臣。本大盡。本當の大盡客。新小夜風物語下「酒長じて不足を言ひ出し、立ちさまに科もなき壘を切り裂き、屏風障子にあだしける、是れ本大臣の爲ぬ事なり、國土の費ぞかし」

ほんだち 本道。漢方醫で、内科の稱。出世瀧徳上「醫者はすれども、本道守らぬ日薬師」

ほんだはら 本俵。馬尾藻。「ほだはら」

を見よ。壽の門松上「樞勝栗、うそで御座らぬ本俵」

**ほんち** 本知。もとからの知行。もとの俸祿。先知。武道傳來記四「何時にても討ち得たらん時には、本知相違なく下さるべき由仰せ出され」

**ほんぢん** 本陣。宿驛で大名などの宿る大旅籠屋。下宿に對していふ。本陣宿。姫山姥「この家ならで、御本陣になりさうな家なし」

**ほんぢんやど** 本陣宿。前條に同じ。姫山姥「本陣宿の忙しき、數多の出女下僕」

**ほんて** 本手。琴・琵琶・三味線などの本式の手。かへ手に對する普通の手の稱。永代藏六「小唄はほんての名人」

**ほんてん** 梵天。佛語。梵天王の略。印度に於て、天地創造の神とせられ、諸神の主位を占めてゐる。又、佛教守護の神として、帝釋天と共に、佛像の左右に侍してゐる。⇒修驗道の祈禱に用ひる幣束の稱。松の落葉五「三瀬川、げに／＼はしも三本木、比は卯年といふしでの、ほんてんすごく立てならぶ、小家の燈火きえのこる」

**ほんてんこく** 梵天國。梵天王の國。大

矢數三「是は又千里の車雲に飛、梵天國より細引を引く、それしばれ淨土双六負けたらば」

**ほんと** 先斗。骨牌の用語。骨牌で賭博をするときに、眞先に金をかけることであらうかといふ。葡萄牙語の Ponto 英語の Point で、物の先端の義に起る。次條「ほん」と町の名も亦この義で河の中へ突出した洲崎の意から起つたものであらうと（新村博士著南蠻更紗の説に據る）。二十不孝三「先斗に置いて来た男」。同「人の小判を、二十兩宛先斗にはられしを見て」

**ほん」と町** 先斗町。京都の色町。三條四條の間で加茂川西岸に沿うたところ。一代男六「ほん」と町の小宿にかへりぬ」

女腹切中「前には戀の底深き、淵にうき身をほん」と町」

**ほんなは** 本繩。罪人を縛る、本式の繩のかけ方。かりなは（假繩）の對語。丹波與作中「本繩に縛りあげ、宿の庄屋へ預けおく」

**ほんのくぼ** 盆窪。⇒後頭部の頸筋ちかく窪んだところ。⇒盆のくぼで運不運を卜するとの俗説から、運の意に用ひる。丹波與作中「千三百石から馬追まで

成下るほんのくぼ、よい事はない筈」  
**ほんはつね** 本初音。香の名木。俗つれづれ五「この家に本初音とて百双の名の木なり」

**ほんぼりわた** 綿帽子の一種。薄く透いた綿帽子。ほんやりわた。ほんぼりまゐるわた。女腹切上「浴衣を假の旅出立、ほんぼり綿もひねくろしく」

**ほんぼん** ほん（眞實）の疊語。雪女五枚羽子板中「ほん／＼においくつが定ちやまで」。傾城反魂香中「打明けて下さんすが、ほんぼんの御眞實」  
**盆も正月も一時** 諺に「盆も正月の一時に來たやう」といふに據る。多忙を極めること。落ちついてゐられないこと。戀八卦柱曆下「さあ／＼、盆も正月も一時に來ました」

**ほんゑ** 本繪。繪師が本式に書いた繪。染模様などに對する。五人女三「本繪にかゝせて左の袖に吉田の法師が面影」

# ま

**まいあひ** まゆあひ（眉間）の訛。眉の間。みけん。二枚繪草紙上「檢非違使がまい

合を、破れてのけとはたと打つ」

まいす 賣僧。商賣をする俗僧。僧を罵つていふ。大矢數一「賣僧はすかぬ敬入の人、すこし露哀れと思へ山は山」

まいすばうす 賣僧坊主。前條に同じ。

賣扇の祖母子は手に日をかざす 男色大鑑二「賣扇の祖母子(ばば)は手に日をかざし、箕篋でひるのたぐひなるべし」おのれの商ふ品を大切にする譬。

まいまい まひまひ(舞々)の假名遣ひ。幸若など舞ふものをいふ。轉じて舞ひ廻るさまに用ひる。松風村雨束帶鑑四

「安からぬ世にまい」と、何時まで一人舞ひくらす」

盲龜も浮木に逢ふ 諺に「盲龜の浮木」といふ。(人間の佛にあひがたいことを譬へたもので、法華經の如き一眼之龜値浮木之孔の本文に據つたものである。)この句はその諺に據つて、出逢ふことは難いが、それでもよく偶々出逢ふものであるとの意を述べたもの。

まうけ 眞受。眞に受けること。言ふことを眞實であると考へること。萬年草上「じやれを眞受の顔ひねて」

まうしご 申子。神佛に祈つて申し受けて生んだ子。神佛から授つたと稱する

子。懷硯五「祈るしるしのまうし子、その程なく誕生して」

まうしこす 申越。普通には、他から我れに言ひ來ること。下例は、我れから他に言ひ送ることである。萬文反古五

「先日はわけもなき事御申越」

まうしても 申しても。いうても。何と

いうても。つまるところは。

まがいおり まがひおり(紛織)。他の原料などを交へ、その本物に似せて織ること。又、その織物。一代男七「帯は薄

風のまがい織」

まかせ 任。(ま)まつかせ。よし來た。心得た。二代男一「誰やら二階から見さんすものと云ふ、それこそまかせ、所帯の取付くろめて遣らうと」。(ま)任せること。任意。置土産三「やりてのまかせに金にかまはぬは昔の事」

まかせてをける 奴詞の「まかせておける」といふににかけていふ。雪女五枚羽子板中「ふれくお先押立てろ、まかせてをける春の霜」

まかせの水 次條に同じ。名残之友二「笈の竹絶えて、まかせの水の落行く風情、爰計りの時雨ぞかし」

まかせみづ 任水。引いて流れるにまか

せておく水。引き水。一代女一「笈音成して、任せ水清げに」。大矢數一「げに思ふ草の庵の悪性宿、内證の首尾はまかせ水波む」

まかなひ はからひ。つくりひ。又、ごまかし。又は氷の朔日上「思ひ切つたが定まれば鐵火に怖い事はない。但しは當座まかなひに、金取欺しの空誓文か」

まかなふ 取りはからふ。處置する。娘歌可留多一「隨分粗略なきやうにまかなふべし」

まかは 眞皮。本當の皮。正(しやう)の皮。なめしてない皮。萬文反古五「丸ぐけの帯に眞皮の前巾著をさげ」

まがはぬ花 續拾遺集に「夕日かけさすかと思えて雲間より紛はぬ花の色ぞ近く」。源氏冷泉節上「實にも榮ある景色やな、紛はぬ花と詠せしは咲かぬ梢も有りつべし」

まがひえだ 紛枝。活花の用語。聖徳太子繪傳記一「見通し枝か切れ枝折れ枝まがひ枝」

まがひおり 紛織。「まがいおり」を見よ。

まかぶら 險。まぶた。まぶち。釋迦如來誕生會四「險に骨立つて、巖に鏡かけたる如き兩眼にて、はつたと睨み」

**まかふんだりげ** 摩訶分陀利花。佛語。

ふんだりげの美稱。大きな白蓮の花。

釋迦如來誕生會ニ「匂芬々分陀利花、摩訶分陀利花咲亂れ」

**まがまがし** いまはしい意の「まがまがし」でない。まことらしい。眞顔らしい。まじめらしく装ふさま。大職冠ニ

「少しなぶらんと、まがしき顔つきにて」。油地獄下「フウ、まがししいあのうそはいの。まだ尾鰭付けていはいしやんせ」

**まかまんだらげ** 摩訶曼陀羅華。大天妙華又は大適意華と譯す。「まんだらげ」

を見よ。釋迦如來誕生會ニ「摩訶曼陀羅華・曼殊沙華、匂はば匂へ咲かば咲け」

**まきいし** 蒔石。中庭などに、處々に蒔いたやうに置いた石。とび石。男色大鑑六「中門左の方の蒔石いろく、木の

間く釣燈籠」

**まきごころ** 蒔心。蒔かうとする心。同行の者を紛らし捨てようとする心。五人女ニ「伏見から夜船で下り給へと、はやまき心になりて氣のせくまゝにいそぎ」

**まきごめ** 蒔米。撒米。神佛に參拜する時、蒔いて施しにする米。松風村雨東

帶鑑一「古例を引いて御輿の先、金錢・銀錢・まき米や」

**まきじた** 卷舌。今日いふ意とちがふ。丁寧な、四角ばつて口を利くこと。きりこうじやう(切口上)。絶狩劍本地ニ

「さも慇懃に兩手をつきまき舌の挨拶に、梅の井くつゝ笑ひ出し」

**まきすなご** 蒔砂子。金銀の粉を蒔いたやうに附けたもの。金砂子・銀砂子など。

**まきずるめ** 卷鯛。するめを巻いて輪切りにしたもの。巻いて渦のやうに切つた鯛。

**まきせん** 蒔錢。神佛に參詣する時、施與のために蒔く錢。特に伊勢參宮の時にしたこと。まきごめ(蒔米)の條參照。大矢數三「ようこそは春は御ざれの伊勢參、五文十文まき錢の山」永代藏四

「宮めぐりの蒔錢に鳩の目と云ふをかして」

**まきぞへ** 卷添。質を置く時、要求金額に對する質物の不足分。質種の追加。傾城反魂香中「どうぞ首尾してくださんせ、まきぞへが要るならば、私が繻子の帯もある、八丈の袷もござんす」。

又、連坐。かゝりあひ。

**まきたて** 卷立。髪結び方の一。若衆などの結つたもの。髻を幾筋かの元結で巻いて長く立てた形。男色大鑑三「おくれ髪の赤き卷立に結はせ」。同四「若年の如く思ひつゞけて、黒き筋なき薄鬢に花の露を注ぎ、卷立に結ひなすもをかし」

**まきだる** 卷樽。繩で巻いた樽。贈答の酒など入れたもの。二代男ニ「金銀の烏臺、卷樽・箱肴・衣装の色かさね」

**まきつつみ** 卷包。巻いて包むこと。又、その物。戀八卦柱曆上「進上曆の卷包」

**まきばね** 眞木骨。楨骨。楡の木で作つた障子などの骨。二代男ニ「片荷には楨骨の障子」

**まぎら** 紛。まぎらかすこと。まぎらかし。ごまかし。重井箇中「重き心を輕口に、蒲團被つて行く振も、涙くるめしまぎらなり」

**まくぐし** 幕串。幕を張る時の支柱。堀川波鼓中「知らぬもなべて行列に、舌をまく串挾箱」

**まくしだす** 追出す。追立てる。重井箇上「又喰ひ酔うたか、春は早々まくし出しや」

まくらかけ 枕掛。毎月掛金を出しあつて費用を集め、交り番に廊で遊興すること。

まくらがへし 枕返。木枕を多く積み重ねて掌上に据ゑ、打返したり、左右の人に渡したりして戯れる遊び。永代蔵六「枕がへしなどはいにしへ傳内に横手をうたせ」。傾城反魂香上「二八ばかりの少人枕がへしの曲枕」

枕定む 遊廊で相方を定める。男女共に寝る。一代男五「何れなりとも氣に入らば、それに枕定めん」

まくらづけ 枕附。死人の枕もとに物を供へること。又、その物。蟬丸五「死人に供へし枕付の供物、松の下に棄ててあり」

枕の伽 閨の伽。又、その伽を勤める者。寢所の對手。又、一夜妻。丹波與作中「枕のお伽が御用ならば、振袖なりとつめなりと、足さすつて腰打つて」

まくらばこ 枕箱。枕を入れておく箱。用捨箱の枕簞箱の條に「客のまうけなんどにや、枕五つ宛を重ね箱にいれたるあり」と説いて枕箱を圖に示し



こほらくま

てゐる。堀川波鼓下「風呂釜・茶碗・枕箱」。又、古くは、はこまくら(箱枕)のこと。

まくらびき 枕引。一つの木枕を指先に持つて引きあひ、引きとつた方を勝とする遊戯。物種集上「まけました別れの床の枕引」

まくらびやうぶ 枕屏風。枕もとに立てる小形の屏風。

まくらめし 枕飯。まくらづけ(枕附)にした飯。懷硯四「さまよひ歩くうちに、野邊の送りの枕飯といふ物を、ちよつと盗み初めて」

まくらものがたり 枕物語。寝ものがたり。ねばなし。一代女三「住寺と枕物語聞く時は、この年この身になりてもこの道やめ難く」

まくらやり 枕槍。枕元におく護身用の短い槍。常に身邊におく用心の手槍。武道傳來記「用心の枕鎧」

まくらわきざし 枕脇差。枕もとにおく用心の脇差。枕刀。枕脇差。枕もとにおくまくら糸 枕槍。春蚕。わらひ糸。大句數上「富士の山鹿子の小袖手かけもの、まくら繪にくむ足柄の關」

まくらをどり 枕踊。枕を踊らせる義。

「まくらがへし」の類語。一代男五「夜もすがら夢も結ばず、枕躍り、よい年をぎど、ばいまはし」。二代男三「俄に騒ぎ舟、女郎交りの枕踊、四竹の拍子に合せて」

枕をなほす 枕の伽をする。「枕の伽」を参照。武家義理物語三「近くは召されながら、つひに御枕をなほさぬ事を恨み」枕を割る 枕を砕くともいふ。思案にくれる。

まくり 海人草。生兒に與へて胎毒を下すといふ薬。海藻の海人草に甘草を加へて製する。どくまくり。五人女四「夫婦連立ち出さまに、まくり甘草を取持ちて」

まくりて 捲手。うでまくり。新可笑記「紋羅のかたぎぬ、まくり手の紫紐」

まくりのみ 捲飲。つづけさまに飲むこと。片端から飲みまわること。吉野都女楠四「酒盛にかくれなき一騎當千の御肴、磯打つ波のまくりのみ」

まくりいしゆら 摩醯首羅。佛語。摩醯首羅天王の略。大自在ともいひ、欲界天の主で、印度諸神中、三大神の一。崑崙山上の七寶地上にある宮殿に居り、六十の天神に守られ、百千の天女に圍



繞せられるといふ。三日・八臂で、白牛に騎り、手に三叉戟を執つてゐるのが、普通の相である。大職冠「欲天の摩醯首羅、胎内に宿ると夢見て出生したる逆臣」

まげばら 負腹。負けて腹を立ること。負けたあまりの怒り。大職冠「負腹の習ひに勝逃げ忌めば、あたりに近づく者もなし」

まげほうく 負惚。負けほうける。負けてぼける。負けきる。大職冠「屋財家財負けほうけ、あげくに年季の此の玉を抵當に張つて」

まげようじん 負用心。負けることを恐れて豫め用心すること。槍權三上「イヤ草臥とは負用心、勝負せねば堪忍せぬ」まげる 曲。質に入れる。天網島中「これを曲げては勘太郎が、手も締もない袖なしの」

まけろくほぶぐみ 負六法組。負六方組。六法男達の喧嘩に負けた方。二代男「親方の十露盤持つて居るは、負六法組の反り刀よりは恐し」

まごじやぐし 孫杓子。手に持てば抱瘡が軽くなるといふ杓子。越前國南條郡湯尾峠の茶屋から出すもの。傾城反魂

香上「湯尾峠の孫杓子、盛りこぼしたる花重ね」

誠ある傾城 世に無いものに譬へる。夕霧阿波鳴渡上「天地開け始りて、誠ある傾城と、迦陵頻の雄鳥は、繪に書いたも見た者はない」

まごのて 孫手。竹などの先端を、物を搔く時の手の形に作つたもの。手の届かぬ處を搔く具。爪杖。摩胡。大矢數二「お肌に添へしあはれ摩胡の手」

まごろく 孫六。美濃國の刀匠。「關の孫六」を見よ。武道傳來記「孫六の大脇指」

まさなし 正無。卓怏なさま。應したさま。まさざま (→あり)。眼前に見るやうに明かなさま。(→うま)。巧みなさま。二十不孝「知れたる年を、まさざま」と五歳隠されし」

まさざま さまざま (→あり)。眼前に見るやうに明かなさま。(→うま)。巧みなさま。二十不孝「知れたる年を、まさざま」と五歳隠されし」

まさざらぐさ 勝草。(→菊の異名。(→書名。ざ)しい夢を見ました」

色里評判記の類。一代男六「まさざらぐさ、懐鑑にも、この女の事、ありのまゝ書き記す」

まし まし(ら)に同じ。さる。松風村雨東帶鑑五「やいましよ、小猿の時から飼ひおいて」

まじくら まじ(交)ること。ませこせになること。出世瀧徳上「中から提灯、引舟まじくら、禿が諺うて客送る」

ましたし 助動詞の「ます」と「たし」とが連接した語。梨花咄五「御意見頼みましたき事あり」。一代男八「智慧を仲間から借りましたいと申す」

まじなひは理外 (謬) 呪ひごととは道理の外。理窟にあはぬ呪ひごとでも効能がある。今宮心中「まじなひは理外にて、卜庵氣にや徹しけん。これは不思議千萬、俄に宿へ歸りまし」

まじやう 眞情。眞正。ましやうじき。眞實であること。兩吟一日千句「義經は地體まじやうな育(カタギ)也、向ふ齒そつて物をもいはず」

まじやうもの 眞情者。眞性者。まじやうなもの。ましやうじきもの。夕霧阿波鳴渡中「人の氣に入り履はれて、まじやう者と云はれた故」

ま

**まじり** 交。雜。まじること。接尾語的に用ひる。一代男五「女郎まじりの大蹄」。二代男二「光叔一中まじりに、楊弓の會も眺め暮し」

**ますおとし** 升落。拵落。鼠を捕る仕拵の一。拵を臺の上に立てかけておき、その下の餌を鼠が喰ひに来て觸れるとすぐに落ちかゝつて鼠を覆ふやうにしたもの。男色大鑑四「膳棚の端に升落をしかけ置かれしは、出家の身にも暴れる鼠はうるさくや」

**ますかき** 升搔。拵搔。拵に盛り上げた穀類を、縁(ふち)と平にならすに用ひる短い棒。木、又は竹で作る。とかき(概)かいらし。ますかけ。永代藏三「八十八の時、聞傳へ升搔を切らせ」

**ますかけ** 拵掛。前條に同じ。薩摩歌上「目出たい苦業に、升かけをきり米」。「八十八の升搔」の條参照。  
**ますがた** 枅形。城門の一、二の門内の廣く平な地。此所で人數を量り出すのでいふと。武者だまり。枅の形をした物又は場處。街路の辻の廣場など。曾我會稽山一「大名小路の升形より、引馬に五つ道具」

**ますら** 益良。「用明天皇職人鑑」中の人

物。伊賀留田の益良。花人親王の敵山彦皇子に加擔する外道の士で、吹目の術を行ひ、人の秘密を知る魔法を使ふもの。二枚繪草紙上「さてもますらが此目の玉ぐつとぬけ出、花人親王の蜷川の御所の體とつく見肩け候へば」

**ません** 「ませう」の意。希望又は未來の意を表す敬語助動詞。源氏烏帽子折二「いかに乙若、母上の寒からんに、物着せません、尤もと、兄弟帯解き」

**まそつと** 今少し。まちつと。重井筒中「無心ながらまそつとして、ま一度寄つて下さんせ」

**またい** 全。まつたい。「またし」又は「またき」の音便。女腹切下「私がさもししい心から、律義またい半七に悪根性がつきせめ」

**またぞろ** 又候。また。又も又。又しても。大下馬四「子もある中なるに、またぞろや此方を迎へ給ふ」

**またふり** 杈極。杈。木の枝の岐(また)になつたところ。又のある木の枝。

**まだまた** まだるいさま。ぐづぐづしてゐるさま。だら。徒に。漫然。傾城酒呑童子一「いやまだ」と阿房らしい。咄さるゝことでなし」

**まだも** まだ(未だ)を強めていふ。萬文「反古」まだも人の氣のつかぬうちに覺悟して」

**またもの** 又者。陪臣。また家來。釋迦如來誕生會二「おのれは婆將軍が家來又者」

**またものかこ** 又者籠。又者の乗る駕籠。待たるとも待つ身になるな(諺)人を待つことの堪へがたいのをいふ。

**まちうま** 待馬。客を待ちあはせて乗せる馬。

**まちおくり** 町送。「ちやうおくり」を見よ。

**まちかた** 町方。町の方。町の風儀。まちきんだち 大夫達。古語。まちきみたち。まうちぎみたち。まへつぎみたち。群卿。公卿達。朝廷に奉仕する臣等の敬稱。

**まちじやうらふ** 待上臈。次條に同じ。傾城酒呑童子二「我々は男勝手知らず、待上臈も何も彼も、萬事そちを頼む」

**まちぢやうらう** 待女郎。婚禮の時、新婦に附添つて世話をする侍女。待女房。雪女五枚羽子板中「お興添にも女ども、待女郎にも女ども」

**まちどしより** 町年寄。令達。收税などの

市街の事務を掌り、名主の管理を兼ねた役人。京都・江戸・大阪・長崎などに各町一人宛置かれたもの。出世瀧徳上「町年寄・庄屋まで觸れあるいて、藏々に封をつけさせ」

まちのりもの 町乗物。町の人の乗るもの。町の辻待の駕籠。大職冠「おん供廻りかろ」と、わざと忍びの町乗物「まちぼうけ 待徳。待ちくたびれてぼんやりすること。まちぼうけ。重井筒中「先で何事も談合せんと、今まで待ちぼうけになつたれども」

まちまはり 町廻。町を見廻り歩くこと。又、町飛脚が町を廻つて、金銀・書狀などを集配すること。  
まちやうもの まじやうもの（眞性者）に同じ。槍權三下「さもしい氣は微塵もなく、まちやう者の孝行者」

まちやく 町役。町内で行ふ仕事に對する勤務。町内のつきあひづとめ。織留五「いやといはれぬ祝言振舞、町役の野送り」ちやうやく。  
まちちろつぼう 町六方。町人の男達。町内の俠客。もと、六つの團體をなして、江戸市内に任俠を振舞つた町奴の稱。

「ろくばう」の條參照。武道傳來記三「本町二丁目能登藤内とて、名を得し町六方の隠れなく」

まつ 松。太夫職の遊女の稱。松の位。武家義理物語四「この子は松に極めてなるべきものと、末たのもしく思ひ」  
まつかいさま 眞返様。まつかへさま。全く反對なさま。又、まつさかさま（眞逆様）。最明寺殿百人上臈上「まつかいさまにぞ讒しける」。同中「肝の束ねを射通され、まつかい様に跳返し」

まつがさき 松が崎。（地名）京都の郊外。愛宕郡の内、高野川右岸。二代男入「歌の中山松が崎の送火」  
まつかせ まかせ（任）の音便。心得た。よしきた。さあ来い。傾城反魂香上「それ伴左衛門もいで取れ。まつかせと立ちあがる」。丹波奥作中「まつかせとつく程に」

まつかせこむ 任込。よしきたと呑みこむ。大丈夫引きさうける。博多小女郎上「油断するな。まつかせ込んだ。皆の衆ぬかるな」  
まつかせこゑ 任聲。まつかせと叫ぶ聲。博多小女郎上「下人がをめぐまつかせ。櫓の上へ躍り上るを」

まつかは 松皮。紋所の名。まつかは菱の略。大矢敷四「紋なしに雲の袂の衣配り、已前が悔し釘貫松かは」  
まつかへさま 眞返様。全く反對なこと。まつかいさま。曾我會稽山三「菜先へ駆抜けてまつかへさまに言上し」

まつぎ 眞搗。眞春。穀類をばよく搗いてしらげること。特に麥を水に浸して一度搗き（片搗といふ）、更に、それを日に干して再び搗くこと。又、その麥。一代男七「遣手に小麥を遣れと云はしやつたによつて、眞春にして二俵まで今日も運ばせ」

まつくだし 眞下。まつすぐに下すこと。刀・槍などを働かせるさまにいふ。  
まつくだり 眞下。まつすぐに下ること。前條の類語。百日曾我一「膝口よりくろぶし迄、まつくだりにかけ通せば」  
寢毛讀まる 馬鹿にされる。又、ばかさかへつて眉毛（まつげ）讀まるべし

まつこうする 先づ斯うする。「まつ此のやうに」などともいふ。「まづ」の「ま」が強く發音されて、「づ」が無聲化された。油地獄下「何としをる。まつこうすると、攫みつく」

まつごのみづ 末期の水。臨終に飲む水。

しにみづ。萬年草下「こぼす涙はおのづから、互ひの口に傳ひ入り、末期の水となりけらし」

まづ遮る盃「手先づ遮る」の條を見よ。懐視ニ「男女取揃つての酒宴して、まづさへぎる盃に千代を重ね」

貧しき家には故人疎し（諺）「貧家には故人疎し」を見よ。

まつしまつきげ 松島月毛、源頼朝秘藏の名馬の一。百日曾我「御ひさうの御名馬みちのくより召されたる、松島月毛を賜はりなば」

まつしや 末社。太鼓持の異稱。暫間。大盡客を大神にかけて本社に譬へ、太鼓持をそれに屬する末社とした（好色由来揃）。一代男五「山ばかり詠め居る末社召連れ」。二十不孝「諸々の末社口を揃へ」

まつしよ 末書。註釋書のこと。

まつすくもの 眞直者。眞正直者。直情な人。一こくもの。萬年草中「與治右衛門眞直者、ぐつと急いて」

松茸の石づき 分娩の時の後産をおろす妙薬であるといふ。胸算用ニ「三人四人の取揚婆（中略）、何に入る事ぢややら、

松茸の石づきまで取寄せて」

まつづくし 松盡。歌曲の名。松の名を各種並べてあやなし衛のもの。五人女ニ「京の音頭、道念仁兵衛が口うつし、山くどき、松盡し、暫く耳に飽かず」

松の位 太夫職の遊女。松。秦の始皇が松に大夫の位を授けた故事に據る。生玉心中上「太夫の威勢備はりて（中略）、松の位とたとへられしも憎からず」

松のしん 「しん」は心。生花などの中心にする松の枝。萬文反古五「御堂にまゐり、松のしん下草取りあはせて三文ばかりが手に持ちて」

松の尾 (地名)山城國葛野郡の内、嵐山の南にあたる。大字山田にある松尾神社は、松尾大明神とも稱し、酒屋の守神様として名高い。今、官幣大社で祭神は大山咋命・市杵島姫命。大矢數ニ「秋は松の尾くみて作り初めしより、末は富貴を松の尾の宮」

松の尾大明神 前條を見よ。俗つれ、直の頭に松の尾大明神も宿らせ給ひ」

松葉の煙草 まつばたばこ。磐城國相馬郡松川産の煙草の葉の稱。嶺山姥ニ「煙草々々と待宵の、松葉の煙草のやはら

こき」

まつばやし 松囃子。松拍子。正月の嘉例として演ぜられた一種の歌舞で、室町時代に殿中ではれたのに起る。徳川期に於ては、將軍家・堂上家ともに、正月の二日三日その他の吉日に、各座の能樂太夫を召して行つた諸初（うたひぞめ）の式を稱し、或は鼓舞をも演じた。松は長久の義に取つたのである。

二代男五「松囃子のためにとて寒聲を使ふなど」。櫻陰比事ニ「さる御所に宵は松囃あつて直ぐに泊り」

松葉屋のかるた 五人女四「錢八十と、松葉屋のかると、淺草の米饅頭五つと、世に是よりほしき物はない」

まつばらどほり 松原通。(地名)京都の五條の通(今の五條通の北)。二代男ニ「忍び駕籠、松原通を急がせ」

まつばらどとり 松原踊。一代男に「松原越えてと踊れば」とある、それか。二代男七「只今誘る女の足は、松千代が松原踊の足よりは、殊にさもしけれども」。永代藏四「宮廻りの蒔錢(中略)、立ちかゝりて拾へば、松原踊の袖にあま

り、味噌漉よりこぼれて、しばしは小歌撥音の鳴りをやめて」

まつべる まとめる。集める。揃へる。孕常盤ニ「御果報は御父清盛(中略)、諸人の憎みそねむまで、引きまつべてあやかり給へ」

まつよひ 待宵。(一)人を待つ宵。特に戀人を待つ宵。新古今集の「待つよひに更け行く鐘のこゑ聞けば、あかね別れの鳥はものかは」の戀歌に據る。曾根崎心中「よその待宵きぬも、思はでつらき鐘の聲」。(二)八月十四日の月夜兩吟「日千句」待宵やほどなく明けて十五日。「一代男」十三夜の月・待宵。名月、いづくはあれど」

待宵の諸袖 書名。五人女五「見臺に書物ゆかしさにのぞけば、待宵の諸袖といへる衆道の根元を書きつくしたる本なり」

まつらさよひめ 松浦佐用姫。大伴狹手彦の妻。「ひれふるやま」を見よ。

松若が物見の松 越前國の名松。松若といふ盗人が物見をした松であると傳へられる。傾城反魂香上「西行が鹽こしの松、あそふの松若が物見の松」

また (助詞) 動詞・助動詞の終止形の下に接して、その終止の語義を強めるに用ひる。大下馬三「情しる人の膝が借り

ま

たいまで」天網島中「誰ぞ拾うたかしらんまで」

まてばしる まてばしひ。鐵斗科の常縁喬木。椀狀の鐵斗を有する長卵形の實を結ぶ。さつましひ。まてがし。

まどころ 間所。間(室)とする所。へや。間。堀川波鼓上「留守の事なり小身なり、間所とてもなきまゝに(中略)、斯様に親の所にて」

まどしき まづしき。貧乏の程度。まとのかく 的の角。的の角形なもの。菱形などの的。織留ニ「へぎを張り立て黒星を書きつけて、鐵砲的の角に仕立て」

まとひぶぎやう 纏奉行。馬じるし(武器)の纏の事を掌る役人。旗奉行などいふ類の武家の役人。

まどふ 償。つぐなふ。うめあはず。辨償する。雪女五枚羽子板中「五兩は某まどふべし」。孕常盤四「あれ〜笛がやんだば。まどつてかやしや笛返やしや」

まどぶた 窓蓋。窓の蓋になる戸。窓の戸。大下馬一「白壁窓蓋まで打破れども」

まどほ 間遠。織目のあらい布。二代男七「山姫の、間遠の衣着なれて」

まとや 的矢。的を射る矢。矢柄はさし(白)筈に黒漆を薄く塗つたもので三節、管を節で作り、鷹の羽ではぎ、鐵は平題(いたつき)とするのが普通である。曾我會稽山一「的矢を葉の矢といへばとて」

まとや 的屋。矢を射る所。楊弓場。又、表向は楊弓場で私娼をおく所。やば。まないたぎ 組木。樋の前面にあつて、水門の戸を上下させる木。天網島下「その抱帯こなたへ」と(中略)、樋の組木にしつかと括り」

まなく 間無。間もなく。すぐ。一代男ニ「憎き御仕方、間なく元の如くにと申す程に」

まなご 眞砂。(古語)まさご。すな。眼に角を入れる 眼にかどを立てる。恐しい眼付をする。武道傳來記八「眼に角を入れて往來に鞘あてをして」

まなばし 眞名箸。眞魚箸。料理に用ひる鐵製の箸。魚肉など切裂くに用ひる。二代男一「其鹽鯛も刺すなど、常に持たざる眞名箸あれば、あらもどかしやと、鉞振上げ頭をはる」。胸算用ニ「庖丁まなばしの切刃を研ぎつけて」

間にあはず その場を巧みに言ひつくる

間にあはず その場を巧みに言ひつくる

ふ。ごまかす。大職冠四「厄介なりと申したと、間に合はすれば打笑ひ」。生玉心中上「頭痛がして休んでゐると間に合せ、盃の相手になつて」

**まねき** 招。烏帽子の前面の上部、「ひなさき」などの上方に突出してゐるところ。曾我會稽山「烏帽子のまねきを切落され」

**眞野の長者** 豊後國眞野の長者。俗説に、用明天皇が皇子でおはした時、この長者の婿になり給はうとして草刈童となられたと傳へられる。永代藏三「昔の眞野の長者も、この齋には何としてかは及ぶまじ」

**まば** 眞羽。鴛の尾羽ではいだ矢の羽。松風村雨束帶鑑三「銀管の眞羽の矢負ひ」

**まはし** 廻。腰に廻してかけるもの。婦人・力士などの腰に纏ふ布。五十年忌歌念佛上「男ぢやもの、まはしをせいでよいものか」

**まはしもの** 廻者。敵の方に廻し入れて、その情勢を探らせる者。問者。五十年忌歌念佛上「どうでも是は廻し者、近ごろ悪い仕方」

**まはず** 廻。(一)人を思ふまゝに使ふ。こ

き使ふ。榮花咄五「さてもにくくしき心だて、あの女にまはさるゝ女郎いとしや」。(二)遊廓の詞。色道大鏡一「まはす。男の氣にちがはじと、女の方よりしたがふ貌なら。例へば風車の風にまかせて、くるくると廻るやうに、男の心に隨ふなるべし」。一代男三「女郎寝てまはせば、男は酔ひて前後を知らず」  
かきまはず。あれこれとさし出口してまるめる。

**まばらや** 疎屋。屋根板などまばらに葺いた家。隙間の多い住居。あばらや。武道傳來記六「あすの命も頼みなきまばらやに心地例ならずして二日惱み」。拾遺集冬部に、「杉の板をまばらに葺ける間の上に驚くばかり震ふるらし」などある。

**まはりあひ** 廻合。まはりあはせ。めぐりあはせ。運命のこと。戀八卦柱曆中「二人に不義の誤は、微塵程もなけれど、ほんの因果のまはりあひ」

**まはりがね** 廻金。運轉してゐる金。融通の金。

**まはりぎ** 廻氣。猜氣。あらぬ事に氣をまはして心配すること。邪推しやすしい氣質。悋氣。松風村雨束帶鑑二「それ

はそもじのまはり氣よ。廻らば廻れ御所車、御所は悋氣も物やさし」

**まはりごんじやう** 廻根性。前條に同じ。

**まはりぢぢ** 廻智慧。小ざかし立ちまはる智慧。小才の利く智慧。淺薄な思慮を働かすこと。油地獄下「可愛がつてもらひたさ、是も女の廻り智慧、許して下され」

**まはりぶるまひ** 廻振舞。膳を廻して饗應することか。廻膳の御馳走か。俚言集覽に「廻り膳。膳の菜の物ばかりを食ひまはすをいふ」とある。物種集上

「まはり振舞絶えて久しき、寶聲も聞かぬ片野の櫻鯛」。櫻陰比事三「杉焼の廻り振舞して、町衆四五人參會の折節」

**まび** 間日。(一)曆の詞。八專の中、丑・辰・午・戌の日の稱。はづせん」の條參照。戀八卦柱曆下「思へば天一天上の、五すい八せんま日もなし」。(二)ひまの日。あひだの日。休日。大職冠三「庚申・甲子、一夜の間日もあることか、身が燃えかへる」

**まびきな** 間引菜。間引きした菜。うるぬいた菜。おろぬき菜。

**まひぎり** 舞錐。錐の一種。軸に、軸と十字形を成すやうに横木を通し、その



りぎひま

両端から糸を軸にかけて之を上下し、回轉せしめて穴をあけるに用ひる。織留六「針屋の弟子となる身は、舞雉のせはしく耳穴のあけくれ」

まびしやく 馬柄杓。馬に水を與へるに用ひる柄杓。孕常盤三「すぐに門出の馬追冠者、腰に馬柄杓竹の鞭」

まひぞこなひ 舞損。十分に成熟しないこと。又、そのもの。殊に瓜類の不成育に終るをいふ。弘徽殿鶴羽産家三「初なりの、茄子の蒂のまひぞこなひと見たは僻目か」

まひだいふ 舞太夫。幸若を舞ふ太夫。幸若の音曲家。織留二「そのかみ舞太夫の幸若越前より都にのぼる時」

まひづる 舞鶴。舞ひ遊ぶ鶴。松風村雨束帯鑑五「千歳の姿舞鶴の、舞ひ悦ぶや」

銘酒の名。二代男「京より持たせたる舞鶴、花橋の樽の口を切りて」

舞の芝居 神樂・幸若などの舞を観る座席。又、その舞。織留四「舞の芝居で同

じ筵に居たる人」

まひまひ 舞舞。扇拍子だけで舞ふもの。幸若。くせまひ。又、幸若舞などする一種の乞食藝人。但言集覽には「佛菩薩の因縁を唱へ人を勧め慰むる僧也」とある。胸算用一「東隣には舞々住みけるが、元日より大黒舞に商賣かへ」

まぶ 問府。鏡山の坑(あな)。坑夫の詞。辨慶京土産五「しりくめ繩を引きはへて、山神祭るまぶの口、神酒に御供に御燈の光」

まぶ 問夫。眞夫。密夫。遊女の特に愛する客。遊女の情夫。色道大鏡一「表向の買手にあらずして、密通する男をいふ。眞實に思ふ夫といふ事なり」。一代男三「五七日騒ぎの内に残らず密夫とされる」

まぶぐるひ 問夫狂。密夫狂。遊女が問夫の愛に溺れ狂ふこと。榮花咄五「密夫狂ひ古今の開山一遍上人と名に立ち、天職から太夫残らずよい事をして」

まぶる 守。見守る。見まはす。懐視一「昨日の腹にて今日は淋しく、置ける棚をまぶれど、鼠も荒れぬ宿の悲しく」置かぬ棚をまぶる」の條参照。まぼる。まもる。大事にする。戀八卦柱屑

上「女房ひとりまぶつてゐる男とてなけれど」

まぶる 塗。まみる。汚れる。けがれに染まる。五十年忌歌念佛中「空言に身はまぶれても、心のたまかさ公道さ」

まへおき 前置。文章又は話などの、本題に入る前に述べること。轉じて、用心。心得。又、まへがき(前置)も同意に用ひる。

前かたなる仕かけ 以前に行はれた仕掛け。舊式な策略。古るくさいやり方。置土産一「そんな前かたなる仕かけ、四も五もくはぬ事」

まへかど 前簾。従前。先度。この前。一代男六「宿よりは前簾の書出し、親方よりはせかる」

まへがね 前銀。ぜんきん(前金)のこと。まへがみ 前髪。額上に束ねた髪。轉じて、前髪を取つて髪を結つてゐる者。童男。丁稚。若衆。男色大鑑三「追鳥獵に前髪仲間四人」

姓山脇小七郎、生花屑を花盆に、花の露うく前髪さかり

**まへがみだち** 前髪立。前髪を立ててゐる年ごろ。元服以前。二十不孝三。前髪立の野郎には巾着切を教へ。武道傳來記「十太郎前髪だちの時、假初ながら好みあれば」

**まへがみだて** 前髪立。女の前髪に入れて高く張り立たしめる具。鯨髭で作るといふ。榮花咄三「首筋より上ばかりに入る物十六品(中略)、小まくら。平元結忍び元結。笄。さし櫛。前髪立。紅粉。白粉」

**まへがみどの** 前髪殿。前髪を立ててゐるものの敬稱。下例は、丁稚を呼びかけていふ。女腹切上「これ、そこな前髪殿、盆一枚貸さつしやれ」

**まへぎんちやく** 前巾着。前腰へ提げる巾着。巾着の上に、紐通しの孔をつけ、それに帯革を通し、前腰に提げたもの。一代男「御物師が縫うてくれし前巾着。今宮心中「主人の帯の前巾着、後へ廻る紐とけて」



くやちんざへま

まへく 前句。連歌又は俳諧の附合に於

て、上の句をいふ。又、次條の略。大矢數四「待たるゝ物は前句の日ぎり、此頃は疑ても覺めても空を見る」

**まへくづけ** 前句附。雜俳の一。連俳の二句の附合ともいふべきもので、多くは七七の句を出して、五七五の句をつけること。宗匠がその秀逸なものに賞を與へたのである。例へば「大方かたち見えかゝる時」といふ句に、「芋むしが片羽の蝶と名をかへて」と附ける類。物種集上「さあ取ものといふ浪の音、前句附書集めたる藻鹽草」

**まへずもう** 前相撲。相撲で、幕の内より以下の地位。又、その地位にある力士。まへ。

**まへたくみ** 前工。前から計畫してゐること。かねての企て。曾我會稽山四「御狩中はゆるりと酒盛りしよとの前たくみ」

**まへたれほうこう** 前垂奉公。前垂をかけての奉公。仲居奉公など。戀八卦柱曆中「姪などを、むざと前垂奉公などに出すものではおりにない」

**まへのうを** 前の魚。晝夜用心記三「鯛の風味殊に勝れたるを、前の魚といふは、何國はあれど、津の國西の宮前の海よ

り取れる名なり。これ惠比須三郎殿、所見立てゝ釣残されし跡なれば尤なり」

**前挟みの帯** 前に挟んで止めた帯。遊女などの寛いだ風。二代男四「さる太夫殿(中略)前挟みの帯自然と解けて」

**まへひろに** 前廣に。「前面を廣く取りて」の義か。あらかじめ。かねてから。前以て。女腹切中「壁に馬乗りかては明くべき時、も明かぬもの。前ひろに手形しようが爲に呼びにやつた」

**まへほろ** 前母衣の義か。幘鼻禪の前方。井筒業平河内通五「大の男の前ほろ掴み」

**まへめ** 前目。事の極度に到らぬうち。控へ目。新小夜嵐物語上「是を思へば色遊びも前目がよし」

**まま** うぶ。無疵。純なもの。特に、きむすめ。一代女四「まだ男心を知つた子ではなしまゝでござる」

**ままたで** 繼子立。碁石でする遊びの一種。黒二・白一・黒三・白五・黒二・白二・黒四・白一・黒一・白三・黒一・白二・黒二・白一のやうに、合計三十箇の黒白の石を並べて數へて、十に當るものを除くもの(俚言集覽)。かくして次々に數へて行けば白石が皆無となる。「子三



十人あり。内十五人は先腹の子也、十五人は當腹の子也。かくの如く立てな  
らべて十に當るをのけ、又廿にあたる  
をのけ、廿九までのけて、殘る一人に  
あとを譲り候はんといふ時に、繼母、か  
くの如く立てたる也」(新編塵劫記三)  
といふ。物種集上「度々に人をぬくこそ  
安からね、石に見るさへうき繼子立」

**ままし** 繼父母・繼子の間柄にあるをい  
ふ形容詞。懷硯三「九歳の時母に後れ、  
五年經たさるうちより、まましきに掛  
りぬ」

**まめいた** 豆板。豆板銀のこと。豆状の  
銀貨幣。慶長豆板・元祿豆板などいひ、  
大小輕重一定せず、量目によつて通用  
したるもの。豆銀。銀豆。小玉銀。上方  
では、こつぶ、粒銀とも稱した。大矢  
數四「夫火宅又は車に打乘りて、世々の  
豆板抓まれて行く」。永代藏一「小判を  
大豆板に替へ、秤にひまなく懸け出し」

**まめしげ** まめ(忠實)なる様子の義。た  
のもしげ。丹波與作中「世間でわるう諸  
はれて、まめしげもなき浮世や」  
**まめどり** 豆鳥。まめまはし(豆廻)とも  
いふ。いかるが(斑鳩)の異名。豆を食  
ふとき、嘴で旋轉するので稱するとい

ふ。鳴禽類の一種。嘴は黄色、頭上・翼・  
尾羽は黒色で青い光澤がある。翼を閉  
ぢると白條が見え、背・腹面は灰色で茶  
色がかつてゐる。いかる。

**まめをとこ** 忠實男。まめな男。特に好  
色の道にまめな男。風流男。夕霧阿波  
鳴渡中「お國の御川新玉の、此處に年取  
るまめ男、阿波國平岡左近と宿札も」  
**まもの** 眞物。本當の物又は事。まこと。  
ほんもの。釋迦如來誕生會三「懷に手を  
入れて、ヲ、眞物ぢや〜、是から御  
身持猶大事」

**まもの** 綱のことか。曾我扇八景上「手こ  
のまものにしぱりあげ」  
**まもりめ** 守目。(中古語)守る人。守護  
の役。目附け。又、神佛の守護。  
**まやがたけ** 摩耶嶽。攝津國菟原郡(武  
庫郡)の内。山上に佛母山切利天上寺  
がある。元弘の忠臣赤松則村の據つた  
ものこの山で、「摩耶が城」と稱した。

**まゆあひ** 眉間。みけん。兩眉の間。ま  
いあひ。  
**まゆぎは** 眉際。眉毛の生えぎは。  
**眉垂る** 眉を剃る。「ひたひたれる」の條  
参照。  
**眉に火が附く**(諺)「眉毛に火がつく」

ともいふ。焦眉の急。燃眉の危急。  
**まゆやま** 眉山。眉のかたち。まゆ。武  
道傳來記三「人の風俗今ぞ髪かしら、眉  
山の姿も見好げになりぬ」

**まらせぬ** まらす(助動)に、ぬ(打消動)  
動)の接した形。ませぬに同じ。背庚  
申上「死なねば心中が見えませぬ」  
**まりかかり** 鞠懸。蹴鞠の場所。又、そ  
の場所の垣に植ゑた木。長(東北)に櫻、  
巽(東南)に柳、坤(西南)に楓、乾(西  
北)に松を植ゑるのが普通である。こ  
の他に、三本懸り、五本懸り、六本懸  
りなどもある。まりのかかり。かかり。

**まりがき** 鞠垣。蹴鞠の場處の周りの垣。  
又、鞠のかかり。前條参照。男色大鑑  
一「ある暮風絶えて、鞠垣の柳楓も動か  
ず」  
**鞠垣の大綱** 鞠のそれないやうに、鞠垣  
にひき張る綱。雪女五枚羽子板中「鞠垣  
の大綱をそろり〜と引延し、四方に  
張つて包み」

**まりしそんでん** 摩利支尊天。印度の女  
神の名。その形相が捕捉しがたいとい  
ふので陽炎と譯する。帝釋天の眷屬で  
日天に屬し、四天下を自在に巡行する。  
之を念ずれば一切の災を免れ、又能く

身を隠すを得るといふ。日本では古來武士の守護神とされてゐる。

**まりしたん** 摩利支丹。摩利支天と切支丹とを混淆した戯語。武道傳來記三「勿體なくも兄弟分とする事、之を摩利支丹も憎しと思しめさん」

**まりそんでん** 摩利尊天。「まりしそんでん」の略。武道傳來記「美形には取りわき摩利尊天も後立強く守らせ給はん」

**まるあめ** 丸飴。丸くまるめた飴。二代男三「丸飴賣る軒端に、三方荒神引き掛け」

**まるあんどん** 丸行燈。行燈の紙を張る棒を丸く圓筒状にしたもの。まるあんど。まはしあんどん。えんしうあんどん。大下馬「小判は是にありと、丸行燈の陰より投げ出せば」

**丸い芋桶に角の蓋** (諺) 相合はぬことの譬。顔氏家訓にも猶「方底而圓蓋、必不<sub>レ</sub>合矣」とある。戀八卦柱簾「あはせて見ても合はぬ中、丸い芋桶(をこけ)に角の蓋」

**まるがかみ** 丸鏡。丸い形の鏡。圓鏡。三鐵輪「金の間にいざ立寄りて丸鏡、門跡様のかみそりたふとや」

まるがな 丸假名。皆假名であること。全部假名。又、平假名の異稱。聖徳太子繪傳記「この文懷に押込んたる心入(中略)、上書見れば丸がなに、かはかつさま、ム、上はわざと戀の文」

**まるぐけ** 丸釘。丸くくけること。丸がたにくけたもの。萬文反古「丸ぐけの帯に眞皮の前巾着をさげ」

**まるぐち** 丸口。まるぐるのみ。その物ごとごとく。そつくり。全部。新小夜嵐物語上「丸口七八匁が物やるにしてから別の事なく」

**まるこき** 丸こき。前條の類語。まるきこき虚(うつけ)なれば」

**まるごし** 丸腰。武士の刀を差してゐないこと。佩刀がなく腰の丸いまゝである義。二十不孝四「その後は丸腰になつて武士の顔色もせず」

**まるしまだ** 丸島田。丸みの多い島田わけの稱であるといふ。若い娘などの結つた髪。

**まるそて** 丸袖。袂の隅を丸みをつけて仕立てた袖。袖口の下部を丸く角をつけて縫つた袖。男色大鑑三「丸袖の時服五重」。俗つれ「男子は十七の

春定つて丸袖になし」

**まるた** 丸太。比丘尼の姿で色を賣るもの。吉野都女楠目「しよがゑ、少くわんくわんとぞ語りける。ヤイ、やかましい丸太めら、暮に及んで何事ぢや」

**まるたぶね** 丸太船。一本の丸太(木)を刳りくぼめて作つた船。丸木船。賣色比丘尼の乗つてゐる船。五十年忌歌念佛下「我も焦るゝ丸太船、浮世渡る一節を、諦へや諦へうたかたの」

**まるづか** 圓柄。刀の柄の圓いもの。**まるづきん** 丸頭巾。はうろくづきん(焙烙頭巾)に同じ。その條を見よ。

**まるづつ** 丸筒。槍鞘の丸く筒形になつたもの。薩摩歌上「白猪の丸筒裾ぶくら」

**まるにうめばち** 丸梅鉢。紋所の名。輪の中に梅鉢の入つたもの。**まるにみつづた** 丸三萬。紋所の名。輪の中に、萬の葉を三つ組合せて入れたもの。二十不孝「格子造の綺麗なる門口に、丸に三萬の暖簾かけて」

**まるにみつびき** 丸三引。紋所の名。引兩の一。輪の中に三本の筋を引いたも



んきづるま

の。永代藏ニ「紋所を定めず、丸の内に三つ引又は壹寸八分の巴を付けて」  
**まるばのやなぎ** 丸葉の柳。次條を見よ。  
五人女ニ「丸葉の柳の根に腰をかけしを」

**まるばやなぎ** 丸葉柳。「やまならし」の異名。楊柳科、でる屬の落葉喬木。葉は菱狀廣橢圓形で、縁邊にはあらい鋸齒がある。葉柄は平たく、長さ一二寸。昔は、これで扇子箱を作つたといふ。  
**丸葉の柳**。はこぎ。はこや。よめふり。をかやなぎ。武道傳來記ニ「丸葉柳の陰にして息をつぎしに」

**まるめろ** 榲桲。蘭語 (Mameh) の訛。薔薇科、ぼけ屬の落葉喬木。葉は卵形又は橢圓形。春季、淡紅色の花を開く。果實は木瓜(ぼけ)の實に似て圓く、芳香と酸味とがあり、砂糖漬などにされる。おにめる。

**まるやま** 丸山。(地名) (一) 京都四條通の東端祇園社の後方の地。高文反古(一) 丸山の林阿彌へ「錢一貫」。(長崎の色町。胸算用(一) 長崎に逗留の中、つひに丸山の遊女町覗かず)  
**まるわけ** 丸曲。丸髷。まるまげ。髪のかたひ。少女が結つたもの。永代藏ニ「八

歳より鬘に袂をよごさず(中略)、毎日髪かしらも自ら梳きて、丸曲に結びて」  
**まるわた** 丸綿。綿帽子の類語。まるわたばうし。武家義理物語(一) 丸綿かづきて偽りの世渡り」



**まれもの** 稀者。類まれな者。特に色好みに關して、すぐれた者。えら物。二代男ハ「色を好く人の此處に住まいではと、山屋の座敷に稀者集つて」。又、希代の美形(美人・美童)。男色大鑑(一)「しら」と顔見とむる人もあらぬ程にして近代の稀者」  
**まれをとこ** 稀男。類稀な男。好い男。冥途飛脚上「國細工には稀男、色のわけ知り里知りて」。前條參照。

**まろがせ** 塊。かたまり。日本武尊吾妻鑑(一)「坂東よりの貢物(中略)、砂金のまろがせ盤に積み」  
**まらせ候にやる** 大方にしてすます。よ

い加減にして結末をつける。「参らせそろにす」ともいふ。女腹切中「どうせうか斯う焼香場を、うに遣つてすて」。夕霧阿波鳴渡上「どうなりともとりにやらしやんせ」  
**まゐりげかう** 参下向。神佛に参詣して歸ること。社寺参拜に通ふこと。胸算

用ニ「樂隠居して、寺道場へ参り下向して」  
**まゐる** 参。古く「食す」の敬語としたが、下例には、單に「食ふ」の意に用ひてある。織留(一)「此人才覺にて夏蛤の一升を(中略)身を煮てまゐりて、扱は此方へと」

**眞芋うむ** 眞芋を績(う)む。芋麻を細く裂いて長くより合せる。「眞芋を繰る」ともいふはその續んだのを繰るのである。よく「まを」は間男とかけて用ひる。戀八卦柱脛下「眞芋、うみ溜めて綿ひませて」

**間をわたす** 間にあはせる。急場の用をとまかくもして辨ずる。重井筒上「側にあつたを幸ひに、この子に著せて間を渡したも、わしが智慧ではあるまい」  
**眞芋を繰る** 眞芋うむの條を見よ。槍權三進持「我れは涙のをがせ繰る、眞芋をくるとや世の噺。「まを」は間男にかていふ。

**まんがち** 自分勝手。人の機先を制して氣儘にふるまふこと。吉野都女桶(一)「ヤア傳五平それはまんがち、今宵は身がとめぶるだ」。天鼓ニ「お主下人の別ちもなく、そちよこちよとまんがちに、

ま

路次に駈け出で走り入り」

**まんが直る** 幸運が向いて来る。仕合せになる。雪女五枚羽子板上「この年越からまんが直つた」。油地獄下「際の日、寶、まんがなをろとさし出せば」

**まんきんたん** 萬金丹。もと、藥の名であるが、形が似てゐるので、一步金などの異稱としたか。一代女六「月掛りの男、萬金丹一角づつに定めて」

**まんぐわんまつ** 萬貫松。せんぐわんまつ(千貫松)を見よ。織留「北野の千貫松、淡路の萬貫松」

**まんこがたま** 萬戸が玉。唐の太宗の勅使として、萬戸將軍が日本に持つて来たといふ寶玉。面向不背の玉と稱する(大職冠)。孕常盤「まんこが玉の玉琴の、調子まばらに狂ひけり」

**まんざいけいせい** 萬歳傾城。夕霧阿波鳴渡上「こゝま萬歳傾城(中略)、萬歳傾城の因縁知らずか。侍の足にかけて蹴らるゝを萬歳傾城といふぞや。誠に目出たう侍ひ鞍る」。萬歳の歌の文句は、「誠に目出たうさぶらひける」と終るので、それとかけて嘲つた語。

**まんざら** 全く。まさしく。今日の用ひ方と違ひ、下に打消の語が來ない。置土

産<sup>三</sup>「後のとりなり、まんざら人のおかためきたるといへば」。吉野忠信<sup>三</sup>「其方まんざら素人にて、廓のわけを知らぬ故」

**まんだら** 曼陀羅。梵語(Mandala)。壇又は輪圓具足と譯す。もと、土壇を築いて諸尊を安置して祭ること。後には、輪の圓滿にして、缺けたところが無いやうに、一切の法門を圖畫に示したものをいふ。又、單に名號を記したものを呼ぶ。胸算用<sup>四</sup>「日蓮上人自筆の曼陀羅を、兼々宇治に望みの人ありて(中略)、淨土宗になられければ、この名號手にも取られず」

**まんだらく** 曼陀羅供。佛語。曼陀羅を掲げて供養すること。

**まんだらげ** 曼陀羅華。梵語(Mandurava) 適意華・白華・天妙華などと譯する。小さく圓く美しい花。微妙な清香を放ち、接する者をして身心を快適ならしめるといふ。曾我五人兄弟<sup>四</sup>「たとへば優曇華・曼陀羅華、七重寶珠の花とて也」

**まんぢうはだ** 饅頭肌(まんぢゅうはだ) 饅頭のやうに、白くやはらかで、つやつやしい肌。傾城反魂香上「落雁かすてら羊羹より、菓子盆はこぶ腰元の、饅

頭肌ぞ懐かしき」

**まんとう** 萬燈。まんどう。(佛に捧げる數多くの燈火。(祭禮の時に用ひる、長い柄をつけた行燈がたのもの。又、それを澤山に供へて行ふ祭禮。佛事の萬燈會の類。俗つれ<sup>五</sup>「當社(天満宮)に萬燈のありし時」)

**まんどうくやう** 萬燈供養。佛前に萬燈を點じて供養すること。

**まんどうあ** 萬燈會。前條に同じ。釋迦如來誕生會<sup>四</sup>「法の燈火明けき、須達長者の萬燈會」

**まんにち** 萬日。萬日供養又は萬日回向の略。櫻陰比事<sup>二</sup>「亡き人のために萬日を申すべし」

**まんにちくやう** 萬日供養。長い日數にわたつて供養すること。

**まんにちのあかう** 萬日の回向。前條に同じ。胸算用<sup>一</sup>「これから萬日の回向しやと、藥籠を叩いて責念佛」

**まんにちあかう** 萬日回向。前條に同じ。胸算用<sup>三</sup>「いかなく萬日回向の果てたる場にも(中略)、錢が一文落ちてなし」

**まんねんぐさ** 萬年草。高野山に生ずる一種の苔。紀伊國名所園會「御廟の邊

に生ず。苔の類にして、根莖をなし長く地上に延く。處々に莖立ちて高さ一寸ばかり。細葉多く簇り生ず。採り來り貯へおき、年を經と雖も、一度水に浸せば忽ち蒼然として蘇す。この草漢名を千年松といふ。物理小識に見えたり。俗に旅行の人の安否を占ふに、この草を盤水に投じ、葉開けばその人無事なり、凋めば人亡しといふとぞ。萬年草下「このお山の萬年草は、人の命の生死を示し給ふと申すゆゑ」

**まんねんごよみ** 萬年曆。永代曆。開運・相性などの俗説を集め記した書。雜書。三世相命鑑などの類。永代藏五「萬年曆のあふも不思議あはぬもをかし」

**まんねんふて** 萬年筆。久しく使用に堪へる筆。二代男六「昔の殘る袖口より、打曇の短冊巻きのべて、萬年筆を染めもあへず、捨てし身のと五文字書附ける」

**まんのういちれんもの** 萬能一連物。「萬能足りて一心足らず」の諺に據つて言つた語。萬事に長じてはゐるが身持の悪いもの。双は米の朔日上「讀み書きかな文鐵ばさみ、とかく萬能一れん物、鐵槌こたへぬ棘釘で」

**まんのうかう** 萬能膏。傷・腫物など一切に効能があるといふ膏藥。

**まんばいにち** 萬倍日。一粒萬倍になるといふ日。物の種を蒔き、又、金を貸すによいとされる日。

**まんぼち** 萬八。①酒の異名。當麻中將姫「常々酒をすき候故、日用の萬八と申候、イヤ其様な異名をば家老の名には呼ばれまじ。」②うそ。いつはり。又、深いたくらみ。

**まんびやうゑん** 萬病圓。何病にでも効能があるといふ丸藥。轉じて、健康のためによいといふ意にも用ひた。槍權三上「夜が短い、早く寝せて疾く起し、晝あがかせたが萬病圓」

**まんまと** うま〜と。うまく。首尾よく。手ぬかりなく。一代男八「燒鹽にて飲出し、まんまと夢になりぬ」

**まんまるとりげ** 眞丸鳥毛。鳥毛の槍鞘のまんまるいもの。薩摩歌上「まん丸鳥毛は筑前福岡のおん城ぬし」  
**まんろく** 眞に全いこと。十分なこと。思ひどほりなこと。卯月紅葉中「和御寮達は甥姪なり、どちらに最偏偏頗もなない。まんろくをいふ時は、皆與兵衛めが悪いぞや」

# み

**みあがり** 身上。身揚。遊廓の語。遊女が費用を自辨して勤めを休むこと。一代男八「御息災に、身あがりも遊ばさず」。一代女「定りの紋日も宿屋へ身上りの御無心」

**みあつめ** 見集。取締り。監督。目附け。五人女「野あそびとて女中駕籠つらせて、跡より清十郎見集に遣はしける」  
**みあはせ** 見合。①かれこれと見くらべて取繕ふこと。置土産五「何ぞ引肴見合せにと書付け」。②中止して様子を見ること。

**みいはひ** 身祝。その身についての祝ひ。その祝ひの品。大矢數四「身祝ひの銚子の口にさし懸、適々ことの勝手取持」  
**みいら** 木乃伊。藥用として、瘡氣・痔へ。食傷・腎虛などによしとされた。大矢數二「木乃伊をば取るは大事の花車、春の野に出つき付人參」

**みいれ** 見入。深く思ひ込んで離れぬこと。執心。又、魅入れて、物怪などのついてゐること。油地獄下「夫婦になり

み

たいと思ふ氣病に、ちとほかの見入れありと云ふ」

**みうけ** 身請。年季を定めて身を賣つて居る遊女の、身の代金を支拂つて、その勤めを退かしめること。落籍。

**みえいく** 御影供。①尊者の御影を掲げて供養すること。又、その法會。特に三月廿一日の弘法大師の御影供。一代男八「けふは東寺の御影供いざと誘ひける」。②法華宗では、十月十三日の日蓮上人の忌日をいふ。胸算用三「法華寺の御影供、淨土宗の十夜談義」

**みえいだう** 御影堂。扇子の一種。京都五條橋西にある新善光寺の僧尼の製出したもので名づける。その折方を御影折といふ。百日曾我ニ「御影堂の扇折、ほね身を碎きかせげども」

**みおし** 水押。和船の舳先に出てゐる波を切る木。みよし。みづおし。ねうし。をなごたつ。

**みがちもの** 身勝者。自身さへよければよいとする者。自分勝手をする者。わがまゝ者。天鼓「一時景もとより身がち者」

**みかづきぼね** 三日月骨。馬の相にいふ

語。馬の頰骨の稱。  
**みかはみづ** 御溝水。禁中の御庭を流れる溝の水。

**みかまぎ** 御薪。①御籠木の義。王朝時代、正月十五日に、諸寮・諸司及び五畿内の國司から、禁中の一年中の御料として奉つた御薪。又、その儀式。②江戸時代、正月十五日に、武家の屋敷の門柱に、割つた薪に十二の線を引いて建てかけたもの。

**三木とつらねし言の葉** 「武隈の松は二本を都人いかゞと問はゞ三木と答へん」の橘季通の詠に據る。傾城反魂香上「一本松を二木とも、三木とつらねし言の葉の、それは老木の松が枝なれど」

**みきね** 三杵。伊勢神宮では、三杵米(みきねよね)と言つて、三度臼で搗いた米を御饌に炊ぐといふ。その「三杵米」の略であらう。源氏烏帽子折五「天照大神、(中略)丸木柱に茅の屋根、供物は三杵きねが神樂を參らする」

**みぎはまさり** 汀優。著しくまさること。目立つてすぐれてゐること。

**みぎより** 右より。初めから。もとより。武道傳來記七「よし〜、右より誠に討つべきと思はば、此状見するまでもなし」。

し。同「口説きかゝり給ふに、右より合點せざれば、幾度仰せられても」

**みきり** 砌。水限の義。軒の雨だれ下の敷石などいふ。轉じて、場。庭。松風村雨東帶鑑三「賢王のみきりには松も花の咲くべきこと(中略)、松に花の咲きけるは、此波の底は龍宮にして龍王のみきり疑ひなし」

**みけうしよ** 御教書。將軍家から下される書。形式に種々あり、内容にも補任。吹舉・安堵・御感・召文・裁許・廻文等いろ〜ある。最明寺殿百人上臈上「判官誅伐の御教書」

**みけんじやく** 眉間尺。(人名)眉間が廣いので稱する。楚の人。父の仇楚王に報いようとして、自ら首刎ねて知己鮫山人に渡す。鮫、之れを王に奉る。王、その首を煮たが爛れず。鮫、王の頭を切つて、また、自刎する。三者の頭、湯の中に喰ひあひ三つ巴になつて争つたといふ。(太平記十三卷、兵部卿宮薨去の條参照)大職冠三「眉間尺が古へは、首に留る念力の、仇を報じてその譽れ、名を三國に三つ巴」

**みこう** 獼猴。猿のこと。ましら。びこ

彌猴が帝釋天を嘲る。(諺)小智の者が

大智の者の心を測る。及びもつかぬこととの譬。曾我會釋山四「彌猴が帝釋天を嘲るとやら、おのれが足らざるを以て人の大智を計らんとして、却て愚智が顯はるゝ」

みこし 見越。物を隔てて見ること。又、見越の位置にあるものにいふ。一代男

「軒のつま見越の柳しげりて」

みこしがたけ 御輿が嶽。見越が嶽。相模國鎌倉長谷大佛の北方にあたる山。

みこしにふだう 見越入道。妖怪の一種。頸長く、非常に丈の高い法師姿で、金棒など杖にしたものといふ。孕常盤

「二玉の様な法師武者、人か見越入道か」

みこす 見越す。遠くから物を見る。物を隔てて見る。一代男七「吉野の花を見越し、全盛の春にぞありける」

みごとだいじん 見事大臣。見事な大盡。立派な大盡客。俗つれど五「長者町の見事大臣、残る三千兩思ひ切りて止まり所」

みこみ 見込。見たところ。見ば。つくづく見た目に映る様子。五人女三「見込みのやさしさ」

みごもり 水籠。水の中に浸つてゐること。水中に隠れて物の見えないうこと。

みさきばらひ 御前祓。口寄せする時、神のおり来る道先を祓ひ清めるための祈禱。或はいふ、寄つて来る死者の側には、みさきがら(御前鳥)といふ鳥が居て、死者に手向けるのを奪つて食ふと。つまり、市子への禮金である。

卯月潤色中「御祈禱が口寄か(中略)、神おろし致してはお十二銅が一包み、御さき祓百二十、お望み次第」

みじかし 短慮。短氣。性急であることにいふ。百日曾我「ア、みじかし忠常」

みしまごよみ 三島曆。應仁・文明の頃、伊豆國三島神社から發行した曆。假名で細かに記したもので、相模・伊豆の兩國に行はれた。

みしまちよろしゆ 三島女郎衆。伊豆國三島町の女郎。

みじまひ 身仕舞。身なりをととのへることを。身支度。俗つれど五「揚屋の晝を勤めて身仕舞に歸るに」。重井筒中「さあ身仕舞して早う行きや」。轉じて、身過ぎの始末。巧みな暮しぶり。俗つれど三「渡世の業は、宜しく勤めける

手代に任せおき、何につけても残る所なき身仕舞ひ、諸人は是を羨みける」

みしやういぜん 未生以前。佛語。生れぬき前。前生。轉じて、遠くの昔。ずつと以前。丹波與作中「九郎助のことか。それは未生以前で、今は挨拶ざりぎりす」

みしやぐ ひしやぐ。ひしぐ。つぶす。戀八卦柱曆上「まあ一貫目が、打つてもみしやいでも無いといひの」。「うちみしやぐ」の條參照。

みしやりぞ 誓ひの詞。もし、言に背いたら、身はしやれかうべ(鬮體)となつても厭はぬぞといふ義。みしやれかつたみ(身鬮體・癩病)ともいふ。

みしらす 見知。ひどい目にあはせる。苦しいことを経験させる義。女腹切上「伯母をも知らいで見しらすした」

みしりごし 見知越。見知つて居ること。かねてからの知合ひ。松風村雨東帯鑑三「コレ業平殿、見知りごしとな思されそ、論言なれば見遁しに成り申さぬ」

みしん 未進。年貢の未納。又、未進米の略。兩吟「日千匁」未進請はれてせはしなの世や」。丹波與作中「村の父様二石二斗の未進に詰り、六十六で水牢」

み

み

**みしんまい** 未進米。未納の年貢米。丹波與作中「私が親の未進米、この六日の吉書に立てねばもとの水牢」

**みすがら** 身すがら。獨身で係累のないこと。一本立ちで暮してゐる身。天網島上「われら女房子なければ、舅なし親もなし伯母持たず、身すがらの太兵衛と名を取つた男(中略)もらえ、この身すがらがもらうた」

**みすぎ** 身過。身を過ごして行くこと。くらし。なりはひ。口過ぎ。生計。生業。二十不孝「世に身過は様々なり」。永代藏四「惣じて三人口までを身過とはいはぬなり」

**みすぎづく** 身過盡。身過を主とすること。萬文反古「惣じての女をとこを持申すこと一生の身過づくに御座候」

**身過は草の種** (諺) 身過には種々の手段がある。世渡の方法は数多い。織留五「よろづの蟲を取つて賣るなど、身過は草のたねぞかし」

**身過は八百八品** (諺) 前條に同じ。織留三「身過は八百八品、それ／＼にそなはりし家職に油斷する事なかれ」

**みすぢ** 三筋。①三味線のこと。傾城島原蛙合戦「三筋の絲の音に引かれ」。

②町の通などの三筋になつてること。下例は、大阪新町の廓が、大通り三つになつてゐるのをいふ。即ち中央の新町筋、飄箆町と、北の九軒町、佐渡屋町と、南の越後町、佐渡島町との三筋の稱。冥途飛脚上「里は三筋に町の名も、佐渡と越後の相の手を」

**みすぢまち** 三筋町。京都島原の古稱。傾城反魂香中「里は都の未申(中略)、通ひたらぬぞ三筋町」

**みすのさと** 三栖里。山城國伏見の西南。みすや針を創めて作り出した地であるといふ。

**みすやばり** 三栖屋針。京都三條通河原町東御簾屋針店で製出する有名な針。用明天皇職人鑑「絲もて通すみすや針、綻びやすき浮き名をも」

**みせかけだいじん** 見せ掛大盡。大盡のやうに見せる遊客。みせかけりきみ 見掛力み。虚勢を張ること。女腹切中「頭つきは兩替町、内證は曾我殿、見せかけ力みおいてくれ」

**みせかど** 見世門。店の門口。一代男「見世門も明けはなれ、それより足ばやになりて」

**みせさしごろ** 店鎖頭。店の戸をとざす頃。閉店する頃。夕方。みせさしどき 店鎖時。前條に同じ。女腹切上「うか／＼咄して、あれ見世さし時」

**みせせり** 身をせまること。身をもぢもぢすること。身ぶるひ。又、怯れて尻こみすること。背庚申上「咳に紛らし身せせりし、ぐつと云ひ手もなかりけり」

**みせぢよろう** 見世女郎。はしぢよろう(端女郎)に同じ。冥途飛脚中「位はよしや引締めて哀れ深きは見世女郎、さらさ禿が知るべして」

**みせつき** 見世附。店の様子。又、店に居て物を商ふこと。或は、その人。男色大鑑五「首尾よく隙を貰ひて(中略)、世間向の見世つきとて紙を商賣させ」

**店をあぐ** 店頭に並べあるものを片つけ店を張つてゐたのを閉ぢる。曾根崎心中「見世をあげつ門鎖しつ、寝るより早く高軒」

**みせをんな** 店女。私娼の一種。店にゐる客をあしらひながら、私に春を賣つたもの。一代女五「また一人は絲屋者、これもみせ女に掛へ」

**みせをんな** 店女。私娼の一種。店にゐる客をあしらひながら、私に春を賣つたもの。一代女五「また一人は絲屋者、これもみせ女に掛へ」

**みせをんな** 店女。私娼の一種。店にゐる客をあしらひながら、私に春を賣つたもの。一代女五「また一人は絲屋者、これもみせ女に掛へ」

**みせをんな** 店女。私娼の一種。店にゐる客をあしらひながら、私に春を賣つたもの。一代女五「また一人は絲屋者、これもみせ女に掛へ」

**みせをんな** 店女。私娼の一種。店にゐる客をあしらひながら、私に春を賣つたもの。一代女五「また一人は絲屋者、これもみせ女に掛へ」



**みせんざん** 彌山。安藝國嚴島神社の

背後の山。須彌山に擬した名。

**みぞおち** 鳩尾。胸骨の下の、中央の凹

んだところ。みづおち(水落)。きうび。

**みそかすばうず** 味噌糟坊主。坊主を罵

る語。みそすり坊主といふ類。

**みそぎ** 御衣木。神佛の像を造る材。大

職冠。「赤梅檀のみそぎにて、五寸の釋

迦の尊像玉の中にまし〜」

**みそざけ** 味噌酒。俗つれ〜。「浮世小

路に仕出しの後家有りて、是に定りて

味噌酒をあがりて、明けはなれて宿に

歸り」

**みそだま** 味噌玉。たまみそ(玉味噌)に

同じ。一代男「くづ屋の軒に貫きし

は、味噌玉か何ぞと人のひもじがる時」

**みそはぎ** 千屈草。みそはぎ(溝萩)とも

いふ。多年生草本で高さ二三尺となる。

披針形の葉が對生し、七月頃、淡紅紫

色の花が咲く。湿地に自生し、又、観

賞用として栽培され盆の佛前に供へら

れる。又は氷の朝日下「盆には我も新精

靈、親子の盃みそはぎの、露の手向と

引きかへて」

**みぞれざけ** 美酒。大和國奈良の名産。

麴が解けないで、霞のやうになつてゐ

み

るので、霞酒ともいふ。梶久一世物語

下「秋は菊花、冬みぞれ酒、さま〜吞

みさわぎて」

**みぞろいけ** 御菩薩池。山城國愛宕郡の

内、上加茂神社の東にあたる。周圍十

八町といふ。美曾呂池。又、御泥池。

俗つれ〜。「萬景見えずくらぶ山、み

ぞろ池の大蛇と飲みくらべても」

**みだい** 御臺。次條の略。菅原傳授手習

鑑「御臺若君もるともに、しやくりあ

げたる御涙」

**みだいどころ** 御臺所。貴人の妻の敬稱。

「御臺盤所」を略して轉用した語。戀八

卦柱脛上「御臺所か姫君のやうに」

**みたからぐち** 御寶口。ありがたい、尊

い口を利くこと。佛の靈驗など語る口。

男色大鑑「さま〜御寶口かしこき

法師」

**みだけいと** 亂絲。「みだけ」は、「亂れ」

と「碎け」との混淆語であらう。みだれ

た絲。陸摩歌中「思へば心みだけ絲、過

ぎし其夜を忘れかね」

**みだけぜに** 亂錢。錢緋(せにさし)にさ

してない錢。零細な錢。ばら錢。みだ

しぜに。みだれぜに。一代女「彼男の

袖より見だけ錢を取出し。萬文反古三

「年々みだけ錢を日夜に入れ」

**みだけそ** 亂字。亂れた字。もつれて解

けがたれものに譬へる。戀八卦柱脛中

「むすばれて、なまなかつらきみだけ字

の、おさん茂兵衛は夢にだに、戀せぬ

中の戀となり」

**みたつ** 見立。(もてなしをわろくする。

見捨てる。一代男「こなたの氣に入る

様にした物を、今年の夏仁和寺の堤が

切れて水が入つたと思つて、みだてら

るゝが口惜しいと、男泣きにして歸る」

(白)面倒を見る。後見する。(白)見送る。

(白)品評する。鑑定する。

**みたて** 見立。見て定めること。鑑定。

病氣の診斷。轉じて、分別。思案。永

代藏「少し見立おせけれども、いまだ

よい所あるは。同「何をしたらればとて

商ひの相手はあり、珍しき見立もがな」

**みだれ** 亂。歌謡の伴はない能樂の舞の

一種。織留「能はやし亂れ道成寺まで

傳受して」

**みだれきり** 亂桐。模様の名。胸算用三

「おまつの御任著せは、定めて柳煤竹に

亂れ桐の中形でござら」

**みだれく** 亂碁。碁石を指につけて取り、

多く得たのを勝とする戯れ。又、碁盤

の筋の上に石を並べ、その筋の順に石を取って行き、筋違ひに取らぬ事がある。それらの類の戯かといふ。らんどらご。或は、盤上に黑白を戦はせてゐるさまの稱。國性爺<sup>四</sup>「軍は花の亂れ碁や、飛びかふ鳥、群れゐる鷲と譬へしも」

**みだれごと** 亂事。とり亂した事。亂りごと。みだらごと。淫事。

**みだれざけ** 亂酒。無作法に飲む酒。酒を飲みちらすこと。二代男六「いやはやどうもならぬと、亂酒になつて、不斷の座敷に變つて」

**みだれぜに** 亂錢。「みだれぜに」に同じ。織留<sup>三</sup>「貧者は我と身を引きて、わづかなる亂錢のそばへも寄りかね」

**みだればこ** 亂箱。蓋のない箱で、化粧道具など入れるもの。うちみだりのはこ。髪を梳つて、その亂髪を入れたので名づけるともいふ(和漢三才圖會)。

二代男五「表具外して、亂箱に疊み込み、すき紙と見せ」。一代女三「烏羽毛の髪落ち、みだれ箱十寸鏡の二面」

**みちさう** 道さう。道らしい。薩摩歌申「寺道場に參るのつたらしい。薩摩歌申「寺道場に參るのが、まづ道さうに御座んする」

**みちぢ** 道路。道を共にすること。途中の語らひ。一代男一「我との道路(みちぢ)を忘れずとや、さりとはむごき御心入」

**みちてんごふ** 道轉業。途中で戯れること。道草など摘むこと。菅原傳授手習鑑<sup>三</sup>「千代様に行逢うて、連立つて來る道轉業、今日の祝の浸しにと、よめなたんぼ、二人の仕業」

**みちばか** 道程。道を行く早さ。歩行のはかどり。歩む行程。

**みちみち** みし〜。みつしり。みちゆき 道行。(芝居などで男女連れだつて行くさまを演ずること。又、その情景を淨瑠璃などの文章に綴りなしたもの。二代男三「道行づくしの淨瑠璃本」。轉じて、途中の事。本筋に關係ないこと。枝葉のこと。傾城反魂香中「御祝言の時刻ちがふ。道行ばかり言はずとも、要ること計り申せ〜」

**みちより** 道寄。途中で他に寄すること。寄りみち。

**みちわけのいし** 道分石。しるべの石。石の道標。吉野忠信三「此方へ〜と打連れだつて返うて行く、道分けの石、筆のあと」

**みちんこつぽひ** 微塵骨灰。微塵粉灰。こなみちん。こなん。こつぽみちん。

**みちんこほひ** 微塵粉灰。前條に同じ。

**みづあげ** 水揚。(船荷を陸揚げすること。(船家で少女が始めて男子に接すること。船の初荷を水から揚げて客に勧めるといふ意からいふ。武家義理物語<sup>四</sup>「天職に仕立て、明日より水あげに出すといふ(中略)、遊女に成るべき事口惜しく。二代男<sup>四</sup>「公儀十年と申すは、水揚の日より定めぬ」。(生花が切口から水を吸ひあげること。

**みづあんどろ** 水行燈。水が懸つてゐて、灯がともるやうに仕掛けた行燈であらう。二代男六「五尺四方の盆石に、水行燈仕懸け、宇治勢多の螢を取寄せ」

**みづいはひ** 水祝。新婚した嫁の家に、翌年の正月、親戚朋友が酒肴を携へて相集り、嫁に水を浴せて祝ふこと。みづあびせ。水かけ。水かけいはひ。物種集上「水祝ひ西から東北南、戀風春風わたる四ツ橋」

**みづいらず** 水不入。近親の者のみ寄つてゐる仲。俚言葉集「親しき者の中に疎きもの間雜するを油に水のまじりたる如しと云ふ、それにうち反して親

たると云ふ、それにうち反して親

しき者ばかり集り會ふをかく云ふ。二枚繪草紙中「湯を沸して水いらざるの親の内で盗をする」

みづおし 水押。「みおし」を見よ。二代男三「押せ」と、水押に立上りて聞けば」

みづかけいはひ 水掛祝。みづいはひ(水祝)に同じ。武道傳來記三「若き者集りて、いざ文助に水掛祝ひといひ出づれば」

みづかけぶるまひ 水掛振舞。水祝ひを受けた謝禮に、聲の家で發應すること。みづがしら 三頭。(刀のきつさき(切先)。(さんづ(三頭)の訓讀であらう。)

百日曾我「新田は馬上の名人にて、樂天が三つ頭、玉良がひみつの鞭、尾筒をしつかと取り」

みづがなわ 三鐵輪。三金輪。三方に相對座すること。みづがなへ。鼎座。卯月紅葉上「讓狀が物をいふ、三つがなわで讀んで見よ」

みづかのこ 水鹿子。水色の鹿子しぼり染。「一代男四「下には水鹿子白むく、上には紫しぼりに青海浪」。二代男一「大宮の左吉結の水鹿子も、今加賀絹に變れど」

みづかばうす 三日坊主。物事に飽きやすい者を嘲つていふ。胸算用「わづか朔日二日三日坊主」

みづがみなり 水神鳴。降雨を司るといふ雷神。火神鳴(ひがみなり)の對語。大下馬二「此のほどは水神鳴ども若氣にて、夜這星に戯れ、可惜水を減らし

て」。男色大鑑「子ども買うて遊ぶ座敷へ水神鳴の落つると」

みづからうす 水確。みづうす。水車で穀類を搗く臼。西鶴五百韻「水確や瀧のしら浪、うどんの粉絶えて久しくなりぬれど」

みづからくり 水機關。水力を利用して、物をあやつる仕掛け。生玉心中上「心太屋の水機關もさうは見て居られずうろすれば」

みづきばうし 水木帽子。綿帽子の一種。京都の俳優水木辰之助の創めたもの。みづぐし 水櫛。齒のあらひ、水に浸して用ひる櫛。一代男四「黃楊の水櫛落ちてけり、油臭きは女の手馴れし形見ぞ」

みづぐそく 三具足。佛具の花瓶・燭臺・香爐など、三つで一揃としたものをいふ。三具(さんぐ)。胸算用「佛具も人手に渡るべし、中にも唐かねの三具足、

代々持ち傳へて惜しければ」

みづくり 水栗。かはばね(河骨)の異名。睡蓮科の多年生草本。太い根莖を有し、葉は水中に沈んでゐるものと、水面上に伸びたものと形を異にしてゐる。七八月の頃、黄色の花を開く。男色大鑑六「柳軍の煮しめ物、水栗酢味噌に天木蓼(またまび)」

みづぐるま 水車。刀・長刀などをはげしく振りまはして敵に斬りかゝるさま。武道傳來記六「長刀を小脇に搦込みて走り出で、澤之助を水車に切伏せ」

みづけ 見付。目について見やすい部分。位置・物についていふ語。楯形の城門の外部に面する部分。外門。菅庚申上「留守の屋敷は大手の見付、お鷹歸りの御入とて」。又、廣間などの入口から正面に見えるところ。武道傳來記「番組は(中略)、大廣間の見付なる長押に張り置きしを。なほ、能舞臺には見附柱(みつけばしら)がある。」

みづこ 水子。嬰兒。生れたばかりの子。又、胎内の子。孕常盤三「辛しと思ふ胎内の、水子ゆゑにうき目に逢ひ」。大職冠三「水子を我等が苦にして、貰ひ乳して育てたも」

み

**みづこし** 水漉。水を漉すこと。又、馬のすなどで底を取つた篩。みづぶるひ。羅斗。水囊。一代男七「水漉の詮義あり」

**みづこひどり** 水懸鳥。燕雀類の一種、川蟬の一種である、みやませうびん(深山魚狗)の異名であらうといふ。

**みづこぼし** 水翻。茶器。茶碗など洗つた水を翻し入れるもの。こぼし。一代男七「茶菓子に罐の行器に入れ、天目、水漉も橋の紋付け」

**みづごころも** 水衣。虎溪橋「鳥や今水衣着て歸らん、磔を打ちし岸の高浪」

**みづさふする** 水雑炊。水の多い雑炊。雑炊は、粥に燒鹽などを入れ、野菜を刻み込んだもの。おじや。増水。一代男五「燒火の薄鍋に燃えて、ざつと水雑炊をと好みしは」。又、あづき粥。

**みづし** 水仕。炊婦。もと、御厨子所(みづしどころ)に仕へた女の稱。轉じて、臺所に働くこと。下働きの女中。勝手働きの女。百日曾我ニ「みづしの下女にせられて、竈の火を炊き湯殿の水汲み」。水仕女。

**みづすぢ** 水筋。水の湧き通ふ筋。水脈。櫻險比事ニ「井戸のある所兩方の氣に

入らざれば(中略)所を見立て水筋を吟味して」

**みづせがき** 水施餓鬼。ながれくわんちやう(流灌頂)のこと。又、水ばかりを餓鬼に施す法であるといふ。蟬丸五「龍女成佛水せがき」

**みづせがは** 三瀬川。三途の川。冥土に赴く途中にある川。生前の業によつて、渡るに三つの瀬があるといふ。松風村雨東帶鏝ニ「三瀬川絶えぬ涙の浮瀬にも」

**みつだから** 三寶。唐土から傳へたといふ、華原磐・洞濱石・面向不背玉の三つをいふ。諺曲の「海士」、近松の「大職冠」などにもこの語がある。俗つれづれニ「異國より渡したる三つ寶にも換へじと」

**水たまらねば月も宿らず** 夢窓國師の弟子、如大尼(俗名千代野)の詠に「賤の女が戴く桶の底ぬけて水たまらねば月も宿らず」とある(國花萬葉記・閑田次第四)に據つた句。蟬丸五「うづなければ夢も結ばず、水たまらねば月もやどらず」

**みつち** 三地。小鼓を打つ手の名。いつち(五地)の條を参照。

**みつちや** 菊石。あばた。痘痕。二代男ニ「みつちやは無いかと問へば、まだ白齒ちやと申す」

**みつちやづら** 菊石類。みつちやのある額。あばたづら。兩吟一日千句「みつちやづら投げそ鏡にとがも無や」。男色大鏝ニ「げにや人の親のみつちやづらを嘆かぬはなし」

**みつちやや** 水茶屋。路傍で煎じ茶など賣つて、通りの人を休息せしめる店。茶見世。二代男八「五十八箇所の水茶屋の女も、夜目には白帷子に黒き帯ぞかし」

**みづつき** 水付。辮の名所。手綱を結びつける所。古くは、おもがいを通すかねの所をいひ、後には、ひつて(辮の右方)をいふ。みづき。釋迦如來誕生會ニ「辮の水つきしつかと取り」

**みつつと三つの里** 三十三所の札所と、難波の一名を三津の里といふにかけた語。曾根崎心中「難波津や、みつづつととみつとのさと、札所々々の靈地靈佛」

**みつてら** 三津寺。大阪島の内、三津寺町筋にある觀音。三十三所の第廿番。梳久一世物語上「ある日三津寺の觀音

の前にてやり手の久米に遇ひける」  
みつてらばちまん 三津寺八幡。大阪島の内、木綿橋の東。廿二社めぐりの第十番。

水と火との相性 水と火とは相尅で、凶を意味する。出世瀧徳上「左程お氣に入らぬは、水と火との相性か。餘りといへば曲がない」

みづな 水菜。十字花科二年生草本。京都の名産。特に東寺附近が第一の産地である。別名、京菜。

みづなは 水繩。(→細長い材に溝を穿ち、水を盛り、その水平面によつて物の傾斜を測るもの。みづもり。みづばかり。兩吟一日千句「頭痛の脈や水繩で知る、やれおこせ飛驒の工がさし枕」(→)檢地の具。地積の廣狭を測るに用ひるもの。苧を三つ繰りに筆の軸の太き位に縛ひ伸縮しないやうに、柿澁や蠟などを塗り、六十間ほどにしたもの。大矢数三「ぬるみゆく水繩打つて際目論、物にかまはぬ尼蛙まで」

みづなぶり 水颯。水を弄ぶこと。水面などびちや／＼叩くこと。水いたづら。大矢数四「お花ごりやう互に影を水なぶり、氷消えては戀があぶない」

み

みつのくるま 三車。羊車・鹿車・牛車の稱。衆生を火宅から救ひ出す三乗に譬へられる。やうろくごしや(羊鹿牛車) みつのだと 三津の里。難波の一名。御津と記すが本来であらう。「三津の浪花の里」とも續ける。 水の月取る猿 (諺) 及ばぬことをする者に譬へる。

みつのなにはのさと 三津の浪花の里。「みつのさと」の條を見よ。出世瀧徳上「直下にみつの浪花の里、戀も所の氣につれて」 みつのを 三緒。(→三つの緒を張つた樂器。さんげん。五絃・七絃などに對していふ。(→)三味線のこと。

みづはじき 水弾。空氣の壓力で水をはじき上げる仕掛のもの。ほんぶ、龍吐水、又、水鐵砲の類。百合若大臣野守鏡「りんぼう船を立並べ、水弾を湛へ」

みづばなれ 水放。水から離れること。又、親の手元を離れること。稚氣を脱すること。卯月紅葉上「かたぢの父の親の手を水ばなれせぬ龜とは、一人娘の命をば、萬代祝ふ名なるべし」

みつばのそや 三羽征矢。矢柄の三方に

羽を附けたもの。走羽(はしりば)・外懸羽(とがげば)・弓指羽(ゆすりば)の三羽の稱。これに遣羽(やりば)を加へて四羽としたものを四立(よつたて)といふに對して、三立(みつたて)の征矢ともいふ。早いことに譬へる。壽の門松上「段々儲けの商ひ拍子、千兩にするは三つ羽の征矢」

みつばよつば 三葉四葉。三間四間で、間(ま)は棟の義。催馬樂に出てゐる語で、建築の壯麗なさまをいふ。 みつひき 三引。三引兩の略。丸の中に三つ線を引いた形の紋所。

みつひき 水引。(→水引幕の略。劇場で舞臺の上方、又、相撲の四本柱の上に横に張る細長い幕。(→)進物を結ぶに用ひる、紙より糊を引いて固めたもの。 みつぶとん 三蒲團。蒲團を三枚重ねて用ひること。一代男七「床とるにも、三つ蒲團替へ夜着」

みつぶねいし 水船石。石の水船。石材で作つた水槽。吉野都女楠五「御手洗の水舟石」

みつぼし 三星。紋所の名。星の形を品字形に並べたもの。 みつぼしこもん 三星小紋。三星を小紋

に染めた模様。永代藏五「三星小紋の布子に、緋の肩衣」

みづまでら 水間寺。和泉國水間の里にある、觀音様で名高い寺。聖武帝の御本願で、僧行基の開基にかゝる。二月初午が縁日。永代藏一「泉州に立たせ給ふ水間寺の觀音に、貧賤男女詣で」

みづむけ 水向。水を手向けれること。櫻陰比事三「水ゆゑ命を取られければ、其者の墓所を隣屋敷の内に築き込め、則ち其井戸を水向にして跡弔へ」

みづめがかり 三日懸。大きな指の稱といふ。基盤を片手に握むとき、拇指が三つの目にかゝる程の大指。基盤太平記「基盤引寄せ片手さし、三つ目がかりの大ゆび拉ぎ」

みづもの 水物。水菓子。くだもの。俗つれん、<sup>四</sup>「水物は留山の梢、四季折々の枝もぎ」

みづものをんな 水物女。浮氣女。男には水性男などいふ。十六夜物語一「さては浮草の誘ふ水もの女也」。信田小太郎三「身を浮草の根を絶えて誘ふ水もの女ぞと、仲人口に色々と言寄る人の多けれど」

みづづのう 水屋能。四月の四日・五日、

大和國奈良水屋川の南、水屋の社(祭神素戔鳴尊と稻田姫)で、疫氣を祓ふ祭をする時、土地の人が催す能樂。俗つれん、<sup>三</sup>「謠ひもおのづからに聞き習ひ、水屋能の見物に罷りしに、狸々の亂れこれ一番」。水屋の能。

みづゆび 三指。拇指から中指まで三本の稱。又三指をついて禮をすること。武道傳來記三「いか様公儀の權威もありやと、三つ指になつて伺ひぬるに」

みづらう 水牢。牢の下に水を湛へて、罪人を責めること。又、その牢屋。懷硯<sup>四</sup>「幾度か水牢に打込まれ、未進首丈にも驚かず」

みづわぐむ 三輪組。甚しく年老いることにいふ語。又、單に腰を曲げる意にもいふ。語源に定説がない。或は、みつわ(三勾)ともいふべきさまに腰の曲ることといひ、或は、僅に落ち残つた三齒を組合す義であるなどいふ。みつわはくむ。みつわさす。男色大鑑三「首を縮め、三輪組みて袖をかざす」。五女人二「三輪組みすがたの老女」。又、老女が髪を三輪髷に結ふことであるともいふ。蟬丸<sup>四</sup>「七十有餘の老女、頭の雪も

みつわぐむ、老いさらばひて」  
水をくれる 水責にする。傾城反魂香中「こりや遣手め重ねての詮議には水をくれる、用心せよ」

みつをり 三折。<sup>一</sup>男の髪を結び方の一種。みつをりかへし(三折返)の略。我衣、芝肴賢、日儲取など正徳まで此の風を用ふ(中略)、元結一寸卷、まげ一寸、はげ先一寸、三つに折る故なり。<sup>二</sup>女の髪を結び方の一。五女人二「髪はつみつをりに、帷子は廣袖に桃色の裏付」

みとほし 見通。心の中まで見ぬくこと。洞察。又、神佛の照覽すること。天眼通。胸算用<sup>四</sup>「高野參詣の志を見通しの弘法大師、さぞ可笑しかるべし」

みなくち 水口。<sup>一</sup>田へ水をせき入れる口。<sup>二</sup>地名。近江國甲賀郡土山川の北岸。東海道五十三次の一驛。藤細工を産する。殊につづら笠が名高い。又、みなくちぎせる(水口煙管)、水口泥鰌などを名産とする。

みなくちどちやう 水口泥鰌。前條を見よ。丹波與作上「一口二口みな口鰌節りこえ」

みなとがみ 淡紙。もと和泉國大鳥郡淡村で製出した紙。壁、襖などの腰張など

に用ひられる下等な鳥の子紙。宿紙。こしばり。「代男五」金の間も漆紙の腰張に變りぬ」

**みなとやき** 漆焼。和泉國大鳥郡漆村で製出する陶器。胸算用。「漆焼の石皿五枚」

**皆にする** 皆無くする。盡くす。無一物にする。「皆になす」又、自動詞的に「皆になる」ともいふ。孕常盤曰「若衆を皆にしやつた、元の様に入れて返しや」。二十不孝「この金、物の見事に皆になし」

**南の茶屋** 大阪島の内を南と呼ぶ、そこにある茶屋(遊女屋)。重井筒上「重井筒屋といふ南の茶屋の弟で」

**南の風呂** 大阪島内の風呂屋、又は風呂屋者。前條参照。天網島上「南の風呂の浴衣より」

**南の御堂** 大阪東本願寺の別院。難波の御坊ともいふ。南船場、今の北久太郎町と南久寶寺町との間で西横堀川寄りの處。

**身になす** 親しくする。大事にする。心頼みとする。

**身になる** 身のためになる。胸算用三「隨身になる手代よりは、愚なる我が子が

が増し」  
**見ぬ商ひは出来ぬ** (諺) 物事は實際を見ないでは相談は出来ない。

**見ぬが佛** (諺) 知らぬが佛といふ類。  
**みねいり** 峰入。おほみね(大峰)の條を見よ。「代男三」最上の山伏大樂院といふ人、先達して、峯入とて由々しく通られ」

**みねのくわんおん** 峰の觀音。遠江國、佐夜の中山の峯にある觀音(三才圖會)。永代藏三「佐夜の中山に立たせ給ふ峰の觀音に參り、後世はともあれ現世を祈りて、いつの世には埋みし無間の鐘の有り所を尋ね」

**みねのやくし** 峰の薬師。三河國鳳來寺の俗稱。本尊は薬師如来である。孕常盤曰「矢矧の長者の一人姫、淨瑠璃御前と聞えしは、蜂の薬師の申し子とて」

**みのかは** 身の皮。衣服のこと。「一代女「有る程の身のかはを日算用すまして、よき事を願へど」

**みのもて** 箕手。左右に灣形に出張つた様。みのもてなり。大職冠五「太鼓。鉦をみの手に立て、虎を入鹿にけしかくる」

**身の蜂拂ひかぬ** (諺) 自分の不始末が覆ひきれない。自身で始末をつけかねる。槍權三下「彼奴も身の蜂拂ひかね、お暇申し捨て、駈落いたすを」

**みのひし** 身のひし。「ひし」は「ひしぐ」の「ひし」であらうといふ。人のために盡したことが、自身の災難になるなど、一般に、苦しい立場のことにいふ。尙、「ひし」の條を見よ。重井筒中「いとしい人の身のひし、一門中の憎しみ受け、そなたを鬼よ蛇よといふ」

**みばえ** 實生。種子から芽を發して生長すること。又、その草木。根分けなどに對していふ。

**みはら** 三原。刀劍の銘。即ち備後國三原住の刀匠、正家を祖とする家。今宮心中「三原の相口、時代の印籠」

**みはらぢゆうだいふ** 三原重太夫。敵役の俳優として聞えてゐた人。今宮心中上「敵は三原重太夫、序にて作りし惡心の」

**みはれ** 見晴。身に罪のないことが明かであること。青天白日の身。國性爺「主君の言ひわけ我等が身晴れ。急いで繩かゝれよ」

**みひらき** 身開。身の言ひ開き。身の疑ひを解くこと。罪のないあかしを立てること。雪女五枚羽子板中「折紙道具失

ねる。槍權三下「彼奴も身の蜂拂ひかね、お暇申し捨て、駈落いたすを」

せたりと、家來は面々身開きに、上下騒いで共吟味、出入を穿鑿する所へ」  
**みぶ** 壬生。京都郊外、四條の西にあたる壬生村。壬生寺のある處。  
**みぶきやうげん** 壬生狂言。壬生寺で三月十四日から廿四日まで（今は四月中旬から五月にかけて）法會を行ふ間、堂前の舞臺で演ずる一種の無言劇。正安の頃、副覺上人が融通念佛を修してから始り、毎年同寺の講中の者が集り、之を演じて無智の輩を誘ひ、菩提の道に入らしめる方便としたといふ。壬生念佛。

**みぶさた** 身不沙汰。身の不都合。身の不行肩。身の不調法。  
**みぶし** 身節。身のふしど（節々）。ほねみ（骨身）。  
**みまさる** 見優。まさつて見える。立ちこえて見られる。

**みまず** 見増。前條に同じ。一代男「風義は一文字屋の金太夫に見ますべし」  
**みみかき** 耳搔。耳の穴を搔くこと。又、それに用ひる具。耳くじり。一代男「藤の棚借りて、鯨細工、耳搔などして一日暮しはかなし」  
**みみくみ** 耳組。莫産などの織りはしを

組むこと。又、その組んであるもの。  
**一代男**「耳組の御座一枚」  
**みみくわはう** 耳果報。耳が受ける果報。耳を喜ばせること。羽し出さうな物じこと。大矢數四「今一樂は出さうな物じや時鳥、彌勒この世に耳果報なり」  
**みみこうしや** 耳功者。耳の聴い人。音聲を聴きわけけることのすぐれた者。一代女「萬づ上京と下京の違いありと耳功者なる人の云へり」  
**みみこすり** 耳擦。耳にさはる言。あてこすり。いやがらせ。榮花咄「いやがる耳こすり言へるは、深い罪にも成りぬべし」。又、耳うち。私語。  
**みみざうだん** 耳雜談（みみざふだん）。耳に口を寄せて雜談すること。つまりらぬ話を耳語すること。二代男「何の子細も無き事を、耳雜談などしかけ、とやかく隙入れ」  
**みみず** みみづ。針のあな。針のめど。みみ。めど。俗つれど、目「この婆が眼が見えぬとおもやるか、針のみみずなりとも通して見せん」  
**みみせせ** 呼。耳の後の高い骨。みみせせのほね。みみせせほね。みみせせほね。完骨。男色大鑑「いまだ呼（みみせせ）」

には昔の垢の名残りも見え」  
**みみづ** 耳穴。「みみず」を見よ。織留六「舞雉のせはしく耳穴（みみづ）のあけくれ」。薩摩歌中「針目人目も思はねば、（中略）誰れがみみづに聞き傳へ」  
**みみづか** 耳塚。斬り取つた耳を埋めた塚。京都大佛門前に豊臣秀吉が築かせたといふのはその一例である。大矢數四「今聞きました耳塚の春、長閑なる矢數を尻服へとつたけな」

**耳取つて鼻かむ**（諺）「耳を削いで鼻へつける」ともいふ。取つても附かない。不適當な譬。三代男「耳取つて鼻かむばかり、猶委しくと跡について行きし」  
**耳取つて鼻が笑ふ**（諺）前條の轉用か。おのれに解らぬことを嘲る。全く見當ちがひな考へで他を諷るなどの意か。二代男「武藏野の土になるぞとどよぐを、何と聞いたやら、遣手の宮が聲して、此寒空に奈良岡扇の土産は嫌でござんすといふ。耳取つて鼻が笑ふと聞き捨てに、丹波口より駕籠を戻し」  
**耳に針を刺す**（諺）聞く人の急所を捕へて物を言ふ。聞く人の最も恐れてゐることを言ふ。

**みみより** 耳寄。聞きたいと思ふこと。



自然とそれに耳を引寄せられること。  
二代男「問はず語りも聞く程耳よりなり」

**みめ** 見目。名譽。手柄。みえ。天網島

中「結構なばかりがみめではない」

**みめうとのますかき** 三夫婦の升搔。三

夫婦揃つた家の老人に、拵搔を切つて

貰ふと、幸運になるといふ俗説がある。

永代藏六「三夫婦の升搔とて、俵物は

かるにこぼれ幸ひあり」。八十八の升

搔」の條を参照。

**みめうのはし** 御廟の橋。高野山奥の院、

大師の御廟の前の橋。高野山名所圖會

「玉川に架せり、一に迷悟橋といひ、又、

俗にむみやうの橋と稱す。長さ四間四

尺、幅一間五尺五寸(中略)、橋板三十

七枚の裏に、金界三十七尊の種子を書

せり。罪障の深いものは渡られぬとい

傳へられる。萬年草下「深く心を奥の

院、渡らぬ先に渡られぬ、みめうの橋

の危さも」

**みめは果報の一つ** 「みめは果報の基」と

いふ諺に據つた句。永代藏「美日は果

報のひとつと、これを聞き傳へて随分

女子を大事に育てけれども」

**みめわる** 見目悪。みめの悪いこと。又、

その人。不器量者。  
みや 宮。「くじみや」及び「公事のみや」の條を見よ。

**みやうがせん** 冥加錢。神佛の冥加に對

するお禮として、社寺に奉納する金錢。

冥加金。冥加銀。又、御賽錢。二枚縮

草紙中「講中お茶所の冥加錢残らず爰

に持ち集まり」

**みやうがない** 冥加ない。「ない」は「か

たじけない」「勿體ない」などの「ない」

から類推して附した辭。冥加を感じて

ゐる心を示す形容詞。博多小女郎中「ハ

ア、冥加ない有難い」。同下「冥加ない

とも忝ないとも、お前に禮をいふ詞」

**冥加に盡く** 神佛に見放される。冥加を

受けることが出来ぬ。戀八卦柱曆下「大

事のお慈悲のこの銀を(中略)人の寶に

なす事は、冥加に盡きると思ひ」

**みやうじぬすみ** 名字盜。名字即ち姓名

を盜むこと。他人の氏を詐稱すること。

曾我會稽山四「彼も仁田、是も仁田、(中

略)誠の仁田が面を見せ、名字盜を面

縛せん」

**みやうじのおや** 名字の親。名字を受け

づいた家の親。養子先の親。

**みやうじのかたき** 名字の敵。名字を汚

す仇。一門一家の仇かたき。  
**みやうせき立てる** 名跡立てる。名跡即

ち名字の跡目を繼いで家を起す。家運

を振起する。油地獄中「名跡立てて下さ

れたその恩徳は、ほんの親にも變らず」

**みやうだうく** 冥道供。佛語。密教の供

養法の一。罪障を消滅し福壽を増進す

る爲めに、閻魔王を本尊として、蠟燭

二百餘位を供養するもの。

**みやうばつ** 冥罰。神佛の冥々の裡に加

へ給ふ罰。人知れず被る神佛の罰。

**みやうぶ** 命婦。名婦。稻荷の神の使で

あるといふ狐の異名。太平記卷三十九、

「大元より日本を攻むる事」の條に「稻

荷山の命婦、比叡山の猿、社々の仕者」

と出てゐる。天鼓「みやうぶの御告な

らずんば、只うか〜と渡しやせん」

**みやうへんばう** 明遍坊。明遍上人。眞

言宗の學僧。藤原通憲(信西)の季子。

少時から英氣があり、諸兄が僧官とな

つて顯榮であるを辱しとせず高野山に

隱栖し、再三迎を遣はしても終に出な

かつたといふ。

**みやうり** 冥利。神佛の人知れず降り給

ふ利益。冥加。  
**名利の千金** 俗つれ〜「名利の千金

み

は頂を撫づるよりも易く、善根の半錢は爪を放つよりも難し

**みやかはちやう** 宮川町。京都鴨川左岸、四條南の色里。女腹切上「祇園狂ひか宮川町か繩手か」

**みやがらす** 宮島。書名。遊女評判記の類。俗つれ「五」さるによつて女郎の志おのづから強くなりぬと、宮島といふ書物に見えしに違はず

**みやぎ** 宮木。宮殿建造の用材。大下馬「里中山入して、宮木を引き登を刈り」

**みやこがほ** 都顔。都人のやうな顔つき。お上品な顔などの意。精進階「都顔手水手拭しぼらせて、あらし折込幽善が白地」

**みやこづめ** 都詰。將棋の語。王を盤の真中に詰めること。壽の門松中「座敷半へ入らうが、都詰にならうが、金銀は手放さぬ」

**みやこてんない** 都傳内。江戸堺町の劇場「都座」の主。都座は寛永十年正月廿二日に官許された(日本演劇史)。永代藏四「都傳内といふ芝居の近所に」

**みやこのふじ** 都富士。(白編笠の一種。男色大鑑「人なほ頻りに汗を悲み、都

の富士といふ時花出(はやりで)の大編笠をかづきつれたるは、叡山の兒若衆是こそ戀の根本」。白比叡山の別稱。二代男「額には志賀の浦を疊み、頭には都の富士の雪を戴き」

**みやすずめ** 宮進。古語。大宮仕へに怠りなく進み仕へること。

**みやすずめ** 宮雀。(神社に仕へる、身分の卑しい者。神職を卑めていふ。胸算用「稻荷殿は身代の尾が見えぬ様に守らつしやる神と、宮雀聲々商口を叩く」。織留四「宮雀一人して、小宮五つも六つも請取り」。白宮に棲む雀。又、宮に集る乞食。

**みやぢしはる** 宮地芝居。宮の境内で興行する芝居。祭禮などの時の小屋掛芝居。みやしはる。

**みやづかへ** 宮仕。貴人の家に仕へること。主人を持つこと。奉公。釋迦如來誕生會四「師を尊みの宮仕へ、難行苦行苦衣」

**みやのまへだいこん** 宮前大根。和漢三才圖會の蘿蔔の條に「攝州天満宮前、相州波多野、共出細長者、長二尺許、周可二寸半、而本末均似白紐、漬糟練爲二香物」とある。二枚繪草紙中「穠

ぐ體をば親兄に、これみやの前大根を、荷うて家居に戻りける」

**みよしげた** 三好下駄。博多小女郎中「土産に大坂のみよし下駄頼むぞや」

**みよしのぞめ** 三吉野染。武道傳來記八「みよしの染めの著物に前結の帯のにくさ」

**みらいき** 未來記。未來の事を記した書。轉じて未來の有様。孕常盤二「一門かばねを曝すべき、重盛が未來記は其時思ひ知らるべし」

**みらいのさかづき** 未來の杯。未來に逢ふことのないといふ別れの杯。最後の杯。曾我扇八景「親子の志、御感心淺からず、一家に未來の杯させ、靜かに暇を取らすべし(十番斬)」

**みるくひ** 海松食。軟體動物斧足類の一種。介殼は稍橢圓形で、長さ三寸ばかり、外面暗褐色。殼の口に海松が多く生じ、それを食ふやうに見えるので名づける。一代男二「是れなる岸に有るてふ海鹿藻、海松食を取揃へ」

**みるちや** 海松茶。海松の色のやうな茶色。暗緑色がかった茶色。

**みるちやぞめ** 海松茶染。海松茶の色に染めること。又、そのもの、永代藏二

「絹物としては袖の花色、一つは海松茶染にせしこと」

みるぶさ 海松房。海松の枝葉のふさぶさとしたのをいふ。美しい黒髪などの形容。

みるめかぐはな 視目嗅鼻。閻魔の廳にゐる司法の役の鬼で、善部童、惡部童の二者をいふ(俚言集覽)。又、閻魔の廳の人頭幢(にんづどう)といふ幢の上に載せた人の頭。能く亡者の善惡を見分けるといふ。傾城酒吞童子四「視目嗅鼻より恐ろしき親方の眼を忍び」。轉じて物を仔細に視察検分すること。西鶴五百韻「つかんだか煙は空に火の車、ふき出しの銀見る目かぐ鼻」。大矢數「正眞の佛さまなら證據出せ、石日の所見る目かぐ鼻」

みるろく 彌勒。釋迦の入滅後、五十六億七千萬歳の時、世に出て人天を化益し給ふといふ菩薩。

みるさうめん 三輪素麩。大和國磯城郡三輪町から製出する素麩。男色大鑑五「盆前になれば三輪素麩十把貰ひ」

みわのやま 三輪山。大和國磯城郡三輪大明神のある山。みわやま。百日曾我五「偕こそ所も三輪の山、しるしの杉の

ふる事を」  
身をうつ 身を捨てる。身を滅す。女腹切上「親方も機嫌よく、戀に身をうつ事もない」

身を過ぐ 身を過ごして行く。世を暮して行く。渡世する。永代藏「一生一大事、身を過ぐるの業、士農工商の外、出家神職に限らず」

身をなす 身を入れる。熱心になる。その事に身を打込む。五人女「十四の秋より色道に身をなし」。置土産「女郎狂ひに身をなし」

みんづり みんづりか。みづくしく。はつきり。兩吟「日千句」永わづらひや養老の瀧、みんづりと叶はぬ戀がかなひ来て、揚屋のたいこもちまる長者」

# む

むいろうじゆ 無愛樹。むうじゆ。むゆうじゆ。梵語に阿輪迦(アリンカ)といふ。因果經に「二月八日夫人(摩耶)往藍毗尼園、見無憂華、舉右手摘、從右脇一出」とある。蓋し、釋尊がこの樹下に誕生せられた時、母子ともに愛惱がな

かつたので樹名としたのであらう。佛生樹(佛教辭林)。釋迦如來誕生會「色香すぐれて咲きたるは、無憂樹といふ木にて、文字には憂ひ無しと書く」  
むいきに 無理やりに。押通して。持統天皇歌車法「短氣の犬死むいきに事を仕損ぜしといはれうが腹が立つ」  
むいき人 無理に事を押通さうとする人。頑固一徹な人。十六夜物語「道理も知らぬむいき人、千日千夜の給ひて、此世があほの世へかへる共、中々なびき申すまじ」

むいきりき 無息力。むいき者の出す力。無茶な力。ばかちから。壽の門松上「どれに下地の無息力、これはどうぞと引退くる、引舟にむかふ風」  
むうじゆ 無憂樹。「むいろうじゆ」を見よ。  
むうんてん 無雲天。佛語。欲・色・無色の三界の中、色界の第四禪天の一。第三禪天までの諸天の、何れも雲に依つて住するの對して、この天から上は、雲上に超出して空中に居する故の稱。

むえんほふかい 無縁法界。佛語。法界無縁といふに同じ。法界とは宇宙の一切萬有をいひ、無縁は縁故のないこと。熟して、法界の中、救度すべき縁故の

む

ないもの。轉じて、自分と何の縁もゆかりもない世の人達の意。二十不孝一「覺えもなき奉加帳取出し、無縁法界六親眷屬までに搔取られ、悲しやこの金、物の見事に皆になし」

むかうきず 向疵。前面から受けた疵。

むかうのさと 無何有の里。何物も有る無き里の義。無爲自然の郷。莊子に出でた語。萬葉集卷六にも「心をし無何有のさとに置きたらば、藐姑射(はこや)の山を見まく近けむ」とある。

むかうば 向齒。上の前齒。むかば。

むかしいんろう 昔印籠。昔風の印籠。時代のついた印籠。男色大鑑五「むかし印籠になめし革の中着」

むかしこそて 昔小袖。昔風の小袖。むかし仕立の小袖。一代女「眼は入方の月影幽かに、空色の昔小袖に八重菊の鹿子紋」

むかしぞめ 昔染。古風な染模様。むかし好まれた染めかた。

むかしながびつ 昔長櫃。古風な長櫃。むかし出來の長櫃。高文反古三「むかし長櫃の底より手形箱ひとつ取出し」

昔の菜刀 永代藏四「今の劍、昔の菜刀とさびて」。諺に「昔の劍、今の菜刀」と

いぶを轉用した句。

むかしをとこ 昔男。在原業平のこと。伊勢物語の「昔男ありけり」の句に據る。五人女「自然と生れつきて、むかし男をうつし繪にもまさり」

むかはり 一年の周つて來ること。一周年。滿一年。胸算用「明日はそのむかはりになるが惜しいことをしました」

むかひませ 迎ひませ。「ませ」は敬語助動詞か。「申し」の約か。「迎へまゐらせ」又は「お迎へ」などの意。丹波與作上「歷々の侍衆が迎ひませに參つて、江戸へ御座れば入間殿の物領嫁子と、かしづかれる御身じやぞや」

むかふきず むかうきず(向疵)に同じ。

むかふさま 向様。むかひさま。むかうさま。相對する様。眼前に、又は正面になるさま。最明寺殿百人上臈上「佐々木の廣綱、むかふ様に駒乗入れ」

向ふ猪には矢も立たず (諺) 勢ひ猛に突進して來る者に對しては、勇者も怯む。度胸のよい者に對しては、勇者も怯む。一心五戒魂三「ずん／＼に刻みてなりとも(中略)と首さし伸べて居たりけり。渡はとかうの詞もなく向ふ猪には矢も立たず」

むかふば 向齒。むかうば。上の前齒。一代男六「餅花を散らし(中略)、向ふ齒のつゞけ程食へど」

麥飯で鯉を釣る (諺) つまらぬ物を與へて立派なものを得る。「鯉で鯛釣る」ともいふ。松風村雨東帯鑑「魚一疋で天下を取るは、麥飯で鯉を釣り竿や」

むきよう 無興。ぶきよう。興のないこと。又、興をさますこと。不機嫌になること。不興。懷硯四「責めて湯なりとも沸して飲むべしと無興すれば」

むぐう 無窮。又、無隅。窮りなく。到らぬ隅のないこと。藍染川三「弓手に薙ぎ伏せ馬手に斬り伏せ、八方むぐうにはら／＼はら」

むくおき むくりと起きること。勢ひよく、無造作に起きること。武家義理物語六「我と惡心ひるがへして、それよりむくおきにして去り」

むくつけやつこ むくつけき奴。顔などのむしやちくしやした奴。

むくらんぢ もくらんぢ(木蘭地)に同じ。赤く黄色を帯びた布地。狩衣直垂などに作る。

むくりこくり むくり(蒙古)とこくり(高句麗)と熟した語。後宇多天皇の時、

む

蒙古高勾麗の來襲したのをかく稱した  
が、轉じて、恐ろしい物に譬へる。小  
兒の泣くのを止める時などいふ語。  
又、無理・非道なこと。大矢數ニ「薄霞  
蒙古國裏(ムクリコクリ)か起謂文、契  
のかため難魚寢なるらん」。二枚繪草紙  
上「やつかいしつかい、むくりこくりに  
むくり取られとの御託宣」

むくりとる 無理に取る。理不盡に奪ひ  
取る。前條を見よ。

むくろじも研き入りては色になる むく  
ろじば無患子の實、羽子の珠とするも  
の。諺に「無患子は三年磨いても黒い」  
といふを轉用した句。壽の門松上「比翼  
の羽子板、木槩子も研き入りては色に  
なる」

むくろばら むか腹を立てること。癩癩  
を起すこと。

むけい 無景。見るべき、興をひく景の  
ないこと。二代男「何ぞや危き海上を  
越え、無景の女鳥に渡り給へり。目前  
の喜見城とは、吉原・島原・新町」

むげない 無下ない。無下に扱ふさま。  
情ない。ひどい。二代男「明石屋のう  
るさ、丹波屋のむげない」。重井筒中「無  
下なうせくではなけれど」

むげむげ 無下無下。むざく。無理・非  
道なさま。

むげん 夢現。(人名)僧侶であらう。萬  
文反古ニ「このたび右のかひなの六字  
夢現書(き)たる入はくる川に立ち申  
候」

むげんならく 無間奈落。佛語。八大地  
獄の一、無間地獄のこと。五逆罪(殺  
父・殺母・自佛身・出血・殺阿羅漢・  
破和合僧)の一を犯した者が落ちて、  
一劫の間、間斷なく痛苦を受けるとい  
ふ地獄。無間獄。無間。

無間の鐘 遠江國佐夜の中山の北、光明  
山にあつたといふ鐘。和漢三才圖會に  
曰く「光明山(中山より三甲北)、寺有  
り、俗に云ふ、當寺の鐘を撞けば、必  
ず福德を得るも、後世無間地獄に墮つ  
と。今は地に叩し、之を撞かしめず。  
恐らくは恠談也」と。大句數上「其上に  
無間の鐘を月の暮、さよの中山短い秋  
じやが。一代男「七代の大分限、先祖  
は無間の鐘をつかれけるとかや」

無間の釜 無間地獄の釜。戀八卦柱曆下  
「冥土は主従一緒にて(中略)、無間の釜  
で茶を沸し」

むこうしや 無功者。無巧者。巧者でな  
いこと。つたないこと。初心であるこ  
と。大矢數「商はまだ無功者な初時  
雨、江戸へ行くとて涙あしがら」  
むこがね 犁となるべき人。豫て定めて  
おく犁。  
むこひきてもの 犁引出物。婚禮の時、  
舅から新郎への贈物。むこひきて。生  
玉心中「この脇指は死んだ母と身共  
が祝言の時、犁引出物として舅より貰  
ひ」

むさい 無菜。「ぶさい」を見よ。  
むさい 「むさし」の口語。むさくるしい。  
きたない。汚しい。つたない。見にく  
さる。大職冠四「胸ぐら取り、むさい事め  
さるかな」

むさう 夢想。神佛が夢中に示現あるこ  
と。夢枕に立つて神佛が御示しになる  
こと。織留四「あはれ薬師の御夢想にて  
このなほる妙薬もがたと願ひぬ」

むさう 無想。無相。有無・善惡などの思  
慮のない状態。無念無想。

むさうかももの かはゆい者。あはれむべ  
き者。薩摩・肥前の方言といふ。平家女  
護鳥三「縁あればこそ抱いて寝て、むぞ  
うか者ともおもしろやつてたもりめす」

むさうむねん 無想無念。有無・一多・善

悪、正邪等、一切の思慮・差別の念のないこと。萬法を一體と觀じて差別の思念を去るること。

むざうらし かいさう。ふびんな、哀むべきさまにいふ。又、むごたらしい。

(長崎方言)博多小女郎「血が走るいろ、涙が出るいろ(中略)、今思へばむぞうらしげに、そがいにせでも大事なかたん」

むさくさ 亂れたさま。むしやくしや。

むささんじん 無作三身。作爲せず自然のまま、法身・報身・應身の佛徳を具へること。百日曾我四「二乗作佛の營は無作三身の谷に嘯り」

むさしあぶみ 武藏鏡。昔、武藏國から製出した鏡。その端へさすが(美女金)を作りつけにるので、「さすが」にかけて歌に詠む。伊勢物語「むさし鏡さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし」

むさしの 武藏野。大きな酒盃の稱。飲みつくさず(野見盡さず)の義からいふ。織留「むかし上戸の飲みつくさぬとて名づけし武藏野といふ大盃はないかといふ」



盃のしきむ

百日曾我四「奴がうけし武藏野の」武藏の七黨 武藏國の黨(地方の豪族がその一類を以て一隊の兵を組織してゐるもの)、丹治・私市・兒玉・猪俣・西野・横山・村山の稱。

むさしのびつくりまる 武藏野潰膽丸。大盃の銘として戯れた語。「むさしの」を見よ。俗つれ「爛をして、銅の」

武藏野潰膽丸といへるに丁と注いで。「びつくりまる」の條参照。

むざと (副詞)わけもなく。無造作に。うかと。薩摩歌上「むざと男の來る所へ來たが不祥。國性爺三兵共粗相すな、むざと鐵砲放すな」

むさぶりつく むさぼりつく。むしやぶりつく。狂氣のやうに取りつく。前後もわかまへずすがりつく。賀古教信七幕廻「推參者はやく搜せとむさぶりつき」

むさぼりつく 前條に同じ。  
蟲がさす 蟲がつく。悪い者に見込まれる。女腹切中「半七といふ蟲がさいて、何のかのと入れ性根」  
むしこ 蟲籠。蟲かご。又、蟲かごのやうに細く縦に長く組んだ格子。むしこ格子。又、その窓。堀川波鼓下「源右衛

門むしこより手を出し、軒に立つたる槍おつ取り」

むしこがうし 蟲籠格子。前條を見よ。

むしこなし 蟲熱。俗にいふ腹の蟲をこなすこと。腹の氣持をよくすること。氣分を晴すこと。一代男三「世之介申せしは、遊びつくして胸つかへて、蟲こなしに少しの商ひすると」

むしじまど 蟲籠窓。蟲籠格子のある窓。

むしじろし 蟲印。女の臂に宮守(おもり)の血を塗つて、その貞操を試すこと。下文を見よ。櫻陰比事四「男格氣深く、旅立つ折節は女の知らざるやうに、宮守の血を取つて左の腕に附けおきぬ是を蟲印とて、其女、男に見えぬ中は何程洗うても落ちざる例なり。往者如何なる好色人かこれを工夫し出されける」。事文類聚「漢武帝時、以端午日、取蜥蜴置之器、飼以丹砂、至明年端午、搗之以塗宮人臂、有所犯消没不爾則如赤痣、故得守宮之名」

むしそば 蒸蕎麥。蒸して作つた蕎麥きり。むしそばきり。

むしだしかみなり 蟲出神鳴。春の初雷鳴響き渡りしと。五人女四「蟲出しの

神鳴ひゞき渡り」  
むしづよい 蟲強。氣の強い。堪忘づよい。精根の強い。日本振袖始三「いかな蟲づよい腰元でも、この爺と寝たらば、破れ障子で骨ばかり」

無始の煩惱 無始以來の煩惱。無限の過去からの煩惱。

むしばやし 蟲早。氣の早い。氣の短い。

むしやう 無性。無上。物の法外なこと。今いふ「やたらむしやう」の「むしやう」である。極めて放埒なこと。二代男八「女郎十一人打込み、むしやうと云ふ物に呑み出して」。樹久一世物語上「大方積りもあるに、むしやうといふ男是なり」。又、無常の意もかけていふか。新小夜嵐物語上「我とても佛頼むにあらず、念佛申さず、むしやうといふ身なれども、茶屋・風呂屋・揚屋惣じての花代残る所なく濟ましければ」

むじやうかぜ 無常風。無常の風。諸行無常を告げわたる風。無常が人命を奪ふことに譬へる。無常の嵐。女腹切中「どつち風でもない、今夜はしよざいの無常風、沙汰はない事葬禮の戻り」

むじやうき 無常氣。沈んだ氣分。淋しい心持。五十年忌歌念佛中「彼の蚊屋を

生絹の衣にして著たい。只無常氣でおかしうない」

むしやうきり 無性斬。やたらむしやうに斬ること。滅多斬り。

むじやうごころ 無常心。無常を感じる心。

むじやうてう 無常鳥。冥途に棲むといふ鳥。一切衆生臨命終時、閻魔法王遣閻魔卒。一名奪魂鬼、二名奪精鬼、三名縛魂鬼。即縛三魂。至門關樹下。樹有荊棘、宛如鋒刃。二鳥栖掌。一名無常鳥、二名抜目鳥。我汝舊里、化成鸚鵡、示怪語、鳴別都頓宜壽（十王經）。或は註して無常鳥は杜鵑であるといふ。加古教信七墓廻「十王經に曰く、閻魔卒三魂を縛して關樹下に至る、二鳥棲んで可く、一を無常鳥、二を抜目鳥と名付く、汝が舊里に於ては、鸚鵡鳥と化して別都頓宜壽と鳴く」

むじやうどり 無常鳥。時鳥の異名。前條を参照。二十不孝三「卯月ひとへ（一日）の明方に、無常鳥の鳴出し、親兄弟に深く歎かせ」。新小夜嵐物語上「峯に心の猿叫び、幽に無常鳥の音信」

むしやうなる野人 無性なる野人。極めて野卑な人間。むしやう（無性・無上）

の條を参照。一代女二「むしやうなる野人にはあらず、遣ひすごして揚屋を闇りに通る男、又は内證のよき手代か武士」

むじやうの 無常野。墓原。墓地。火葬場。男色大鑑三「無常野に行きて、埋みし灰まで探してもその跡方もなく。武道傳來記八「無常野に白布の幕うたせ」

むじやうばなし 無常咄。世の無常に關する話。しめやかな、人の氣をしんみりさせる話。浮いた話に對していふのであらう。一代男五「恭のお相手になり雀を吹き、無常咄し内證事、萬づ人さまの氣をとることぞかし」

むしやうやみ 無性闇。極めてむやみなさま。あたりに構はず、やみくも。一代男五「小間屋の若き者、戀も遠慮もむしやうやみに、見しりごしなる悪口」。又、全くの闇。眞の闇。

むしやぞろへ 武者揃。武者を揃へること。軍勢を催し整へること。せいぞろへ。

むしやばしり 武者走。軍船の名所。舳から櫓に通ずる船側に沿うた路。船縁から少し下げて板を張つて作る。又、舷に垣楯を並べた内をいふと。百合若

む

大野守鏡「射手船には一枚楫、つき立てて、武者走り高く上げ」

**むしやわらぢ** 武者鞋。「ごんずわらぢ」に同じ。九州の方言。むしやわらんぢ。

むしやわらんづ。福山姥「戰場出陣の折ならで、召しも習はぬ武者草鞋、それにはあらぬ藁沓に」

**むしよく** 無色。色のないこと。色氣のないこと。女氣のないこと。榮花咄「見れば善悪の沙汰もむつかし、兎角は無色の脇道行けと」

**むしろびやうぶ** 筵屏風。筵を横にして立て、屏風のやうに圍ふこと。筵のかこひ。

**むしんていもの** 無心底者。心底のよろしくない者。恩義をわきまへぬ者。情知らず。武道傳來記「無心底者と引寄せて刺殺し」

**むす** 博奕の用語。産(ム)すであらう。二倍にする。丹波與作中「こちは八貫出しておく、負ければそれで取り遣りなし。勝てばむして十六貫なんで済ます合點ぢや」

**むすおれ** むすをれ。むすと折れること。たやすく折れること。俄かに衰へること。曾我會稽山「雪折松のむすおれ

に、俄病の萬死の床」

**むすぢがけ** 六筋懸。三味線の類で絃を六筋掛けたもの。一代男「挾箱より接棹の黒檀六すぢ懸を取出し、僕唄へといへば」

**むすぢあもん** 六筋右衛門。頭髮の少ない者の擬名。十筋右衛門の類。二代男「白日勝にて天窓は六筋右衛門、何に一つ取得なし」

**むすびのかはらけ** 結の土器。縁を結ぶ時、土器を取交はして酒を呑むこと。縁結びの盃事。結びの盃。

**むすびのさかつき** 結の盃。前條を見よ。**むすをれ** 「むすおれ」を見よ。

**むせいはい** 無成敗。無理な成敗。非道な處置。

**むぞうかももの** 「むざうかももの」に同じ。**むぞうらし** 「むざうらし」に同じ。

**むそく** 無足。無にすること。無駄。無益。あだ。

**むそくする** 無足する。むだになる。その事の甲斐がなくなる。永代藏「萬の義をしきと思へば、忽ちむそくすることなりしに」

**むたい** 無體。無理なこと。非道。無法。國性爺「無體の難儀を云ひかけ」

**むだむだ** 徒徒。あだにするさま。むざむざ。戀八卦柱屏下「一生の誤、むだむだと腹切るも、獨り物に狂ふに似たり」

**鞭鐙を合はず** 鞭と鐙とを合せる。馬を駆けさせる時に、鞭打つ搦子と合せて鐙をあふる。

**むつくり** むくく。ほやく。温かにくつらんださま。槍權三上「女子でさへ心氣がわく、肌身をむつくりと抱いて寝たい」

**むつける** むつく(憤)の口語に訛つた語か。むつとして不快になるなどの意。武家義理物語「なまぐさき風吹きかよひ、人の身にあたると否や、むつける程に草臥つきて」

**むつちり** 愛らしく肥えふとつたさま。むつくり。むくく。生玉心中上「どれ、前の様にむつちりと肥えてか、嘉平次めが吸取つたか、肌が見たい」

**六つの巻** 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道の稱。六趣。二枚繪草紙「冥土は六つの巻ぞや、迷はぬ案内あの煙の」

**むつむさし** 六武藏。六六指。「十六むさし」の簡單なもの。駒六つでさすもの。につき。又、「十六むさし」をいふ。



一代女<sup>三</sup>「子供相手に六つむさし、氣をつくす事にもなりぬ」。源氏冷泉節下「七つ道具に六つ武藏、辨慶は押への役」

むづをれ 「むづをれ」を見よ。源氏烏帽子折<sup>三</sup>「花珍しくむづをれに、くわつと赤らむ顔をあげ」

むてん 無點。漢文で訓點のないこと。返り點・送り假名などのないこと。最明寺殿百人上臈上「含み狀と申すもの、文法やはらかに候へども無點のものに候へば」

むどくしん 無得心。無道の心。不人情。無理。源氏冷泉節下「わが科を弟子に塗る無得心や候ふべき」。日本振袖始<sup>三</sup>「その無得心からは、定めて宇賀石も殺してがな捨てつらう」

むながい 胸がい。むなぐら。衣服を合せた胸のあたり。油地獄下「どつこい、捕つたと、胸がい攫んでねちすゆる」

むながけ 鞅。「むなかき」の音便。「おしかけ」の一。馬の胸から鞍橋（くらぼね）にかける緒。

むなさんよう 胸算用。胸中で算用すること。心の中で見つめること。胸勘定。心算。大句數上「胸算用は夜の寢覺も、

そこに月こゝにかし銀まき散し」

むなだか 胸高。帯など胸のあたりまで高く締めること。胸高帯。百日曾我一「包む色にや胸高の、帯でかくすもしほらしづく」

むなづくし 胸盡。むなぐら。胸がい。吉野忠信<sup>三</sup>「立寄る處を、胸づくしに摺みつき」

むなづばらし 胸がつまるやうなさま。胸がつぶれるやうな心持の形容。むなまへだれ 胸前垂。胸からかける前垂。卯月紅葉中「むなまへだれに草鞋がけ、親の辛苦一つにて」

むにむさん 無二無三。唯一つのこと。轉じて、一心不乱。一散。ひたすら。もと、法華經の句「唯有<sup>三</sup>一乘法、無二亦無<sup>三</sup>」とあるに據る。

むねあて 胸當。武具。胸部にあてるよるひ。小兒の胸にあてる布製のもの。よだれがけの類。新可笑記<sup>一</sup>「胸當して乳房くはゆる子」

むねうち 胸打。棟打。刀の背(みね)で打つこと。又、棒・杖などで叩くことにもいふ。出世瀧徳上「狼籍して、息杖の胸打をくらふか」

むねつてん 無熱天。佛語。三界諸天の

一。色界の第四禪天の九天の一。意識状態調柔にして、清凉自在、よく熱惱を離れてゐる故の名といふ。

むねづばらし 「むなづばらし」に同じ。冥途飛脚下「顔をつれく、眺むれば、梅川いゞむねづばらしく」

むねまへだれ むなまへだれ(胸前垂)に同じ。むねよし 宗吉。象眼師。山城伏見の人。正保年間、金澤藩に仕へて三百石を賜つたといふ。下例も同人か。二代男一「よしなか染の宗吉が白鳥にも書くに盡きせず」

むねわけ 胸分。むなわけ。鹿・馬などが胸で草を分けること。松風村雨東帶鑑一「嵯峨野の草になむむ駒、鞭をくれたるむねわけの尾花かき分け走り來る」

胸をつく 胸をうつ。びつくりする。ぎよつとする。出世瀧徳下「はや談合がきはまつたか、さても胸をついた事」

むねんむさう 無念無想。むさうむねん(無想無念)に同じ。何の思慮もないこと。道理を辨へぬこと。むかさんがへ。無分別。

むのじ 無の字。無益(むやく)しい、無念、無間地獄など、無が語頭につく言

む

葉を略していふ。主として女の用ひる詞。下例は無暗(むだしなみ)などの意。曾我會稽山(問はれて云ふはむの)じながら、虎でござんす」

**むはふやぶり** 無法破。甚しき亂暴なことを。又、その人。百日曾我(この朝比奈を投げて見よと、大手を廣げ追廻せば、我が儘者の無法やぶり、かまひはせぬと口の内)」

**むぶつせかい** 無佛世界。釋尊が入滅して、彌勒が未だ世に出ない世界。みるく(彌勒)の條参照。

**むべも富みけり** 催馬樂に「この殿は、むべも富みけり、さきくさの、三つば四つばに、殿つくせり」とあるに據つた句。出世景清「むべも富みけりさきくさの、三つば四つばの大伽藍」

**むぼんでん** 無煩天。佛語。三界諸天の一。即ち、色界の第四禪天中の一。欲界の苦及び色界の樂を離れ、苦樂共に滅して、煩惱がない故の稱。「無雲天」

「無熱天」の條参照。

**むまい** うまい(旨)。おいしい。美味であること。一代男六「海藻凝(と)ころてん」を喰はせ、むまいなあと言はせし」

**むまおひ船頭お乳の人** (諺)「むまおひ

は馬追である。「馬追船頭お乳の人」を見よ。

**むみやう** 無明。佛語。一切萬物の眞理を悟り知ることの出来ない煩惱。又、煩惱のために思慮を失つてゐる状態。織留「無明の眠の中にその家の亂ること數をしれず」

**むみやうのうげ** 無明能化。無明に住してゐる衆生を教化すること。凡夫を悟りの道に導くこと。宵庚申下「無明能化の門前に、念佛をたより辿り来る」

**無明の酒** 無明が本心をくらますのを、酒が人を酔はしめるに譬へていふ。曾根崎心中「無明の酒の酔さます、木々の下風ひや」と

**無明の眠** 無明の境界にさまよひをること。「むみやう」の條の文例参照。

**むめ(梅)を唇** ばいれき(梅唇)を見よ。武家義理物語四「月も覺えず、年も忘れ軒端の梅を唇に、さては春にも成りけるかと驚き」

**むやくし** 無益し。つまらない。取るに足りない。はしたない。一代男二「様といふ尻聲もなく、大方は機嫌とりて、むやくしき事も程過ぎて」。又、いまいましい。いとほしい。百日曾我(この

體を見て無益しくや思ひけん、つかつかと寄り(中略)御祕藏の名馬をひかせて、どれへがなといへば」

**むやくしがほ** 無益顔。無益しきうな顔。うるさきうな顔。宵庚申中「内に居ぬ人呼び立て、むやくし顔の色合を」

**むやくや** むしやくしや。物の亂れてゐるさま。もしやくしや。

**むやむやのせき** 無耶無耶關。和漢三才圖會に曰く、「卒夜卒夜關。良材集に八雲御抄を引いて云く、卒也卒也乃關は陸奥出羽の交に在り。但し關は出羽の方に在り。草木森然として行人乗せざれば往來し難し。武士の出るさ入るさに乗するをち」とちのむやの關。按ずるに、俗に有也無也と謂ふは訛也(中略)。或は云ふ、鳥海山の近處此の關ありと、未だ審ならず」と。

**油地獄上** とやと通りのむやの關、二度と越し申さない」

**むゆうじゆ** 無憂樹。「むいじゆ」を見よ。

**無用の口に風引かす** (諺)言はでもすむことを言ふ。又、折角口を利いても効がない。「あつたら口に風をひかす」ともいふ。

**むらごう** むらご(村濃)の訛。同じ色で

所々に濃い所と薄い所とある染め方。濃濃。百日曾我「棧敷に一段高く、むらごうの大幕うたせ」

**むらさき** 紫。鯛をいふ女詞。肉色が紫黒であるのでいふ。

**むらさき** 紫女。一種の妖怪美人。變化

(へんげ)の淫婦。大下馬「物の淋しき突揚窓よりやさしき聲をして、伊織さまと名を呼ぶ(中略)、是ぞ世に傳へし紫女(むらさき)といふ者なるべし。是に思ひつかるゝこそ因果なれ、人の血を吸ひ一命とりし事ためしあり」

**むらさきごし** 紫腰。蹴鞠の技の階級を表はす語。或修行を経たものに授ける紫色の袴。すべて、此の種の装束・袴は飛鳥井家及び難波家の許を得て授けられたものであるといふ。織留「鞠は紫腰をゆるされ」。櫻陰比事「紫腰を御免下されしを、彼の男これを猜み、その後鞠を蹴留まり」

**むらさきさかづき** 紫盃。紫貝といふ貝の殻の盃であらうといふ。吉野都女楠三「稚兒のやうな傾城が、むらさき盃手に据ゑて」

**むらさきの** 紫野。(地名)京都の北郊。

愛宕郡の内。天徳寺のあるあたり。

**紫の冠** 紫色の冠。大化の制定による七色の冠の中の第三位のもの。大職冠「勅説もなき紫の冠を譲り」

**むらさきばうし** 紫帽子。紫縮緬で作つたやらうばうし(野郎帽子)のこと。俳

優水木辰之助等の工夫になるといふ。置土産五「松之助、年十九、野郎なり、(中略)中にも紫帽子が取徳ちや」。俗つれん「川舟に紫の帽子懸けたる野郎あまた乗りて」

**むらさざる** 群猿。織留「猿飛といふけしき所を、群猿數かぎりもなく渡りしに」

**むらむらわつと** さわがしく聲を立てて俄に亂れ散るさま。むら／＼ばつと。大職冠「家内の上下門外に、むら／＼わつとと逃散つて」

**むりじに** 無理死。無理をして死ぬこと。大矢數「無理死や三輪の山本道もなし、十市の里の御場よごすな」

**むりばき** 無理穿。穿きものを無理に穿くこと。男色大鑑七「無理ばきの革足袋」

**むりむり** 物の裂け離れる音にいふ。めりめり。

**むりやう** 六絲緞。支那舶來の繻子。和漢三才圖會に曰く、「按ずるに六絲緞は廣東・南京・福建より出づ。八絲緞(しゆす)に似て絲少なき故に名づく。その光滑も亦稍劣れり(卷第二十七、絹布類)。壽の門松上へ被く布圍の緞子よりむりやうの事ぞ思はるゝ」

**むろ** 室。(むろあぢ(室鱒)の略。宵庚申上「鯛膾、焼物はむろの酢いり」(地名。播磨國室津の略。白土佐國安藝郡室津の浦の略。

**むろぎみ** 室君。播磨國揖保郡室津の遊女。大職冠「室の港に室君の、夜な夜なかはる契りには」

**むろだう** 無漏道。煩惱の根を絶つたと。又、その境界。

**むろつ** 室津。五人女「春の海しづかに寶船の浪枕、室津は賑へる大湊なり」。むろぎみ(室君)の條参照。

**室の戀里** 室津の遊里。大職冠「播州(中略)室の戀里花月と申す傾城を」

**室の明神** 播磨國室津にある明神。五人女「願狀を書きて室の明神へ命乞し奉りにけり」

**室の八島** (八島は釜であるといふ。大晦日の夜に籠の灰をさらへて火を取つ

む

むめ

て置き、それが消えきらぬさまによつて、次の年の吉凶などを占つたものであるか(袖中抄十八)といふ。新可笑記四「思へば假の枕、錦の褥をかざれども夕の煙ぞ形見なる。室の八島の土に還る一世の榮花多生輪廻の基なり」と。六日飛脚「繪又室の八島の霧煙、誰が子のためたのもの節句」。香の名。茶花咄四「名所香を聞きて、富士、淺間、室の八島、煙さま」袖にとまりて、是は堺の伽羅大臣」

め

めいげつばし 名月橋。今、渡月橋といふ。山城國嵐山の麓、大堰川に架した橋。俗つれ、四「京都を同じ日旅立ち、此秋名月橋のもとへ一度に立ちかへる約束」

めいしよ 名のある遊女。位のある太夫。一代男八「紋日の事なれば、名所は一人もなし」

めいしよかう 名所香。各地の名所を名とした香料。茶花咄四「夫婦寝ながら名所香を聞きて、富士・淺間・室の八島、

煙さま」袖にとまりて」

めいしよづくし 名所盡。歌文・繪畫・模様などに、名所を書き集めたもの。二代男一「裾に嵯峨野の名所盡し、そこが嵐山、これが廣澤の月、大井川には花筏」

めいた 目板。羽目・坂塀などの板の合せ目にうち附けた狭い板。つぎ目を塞ぐ板。

冥途の鳥 時鳥の異名。又、無常鳥。めいはう 名方。名高い處方。効能のすぐれた調劑。孕常盤一「唐土の醫者の名方、不老不死の藥」

めいぶつき 名物記。名物を記した書物。又、名物切(めいぶつきれ)、即ち有名な古書畫の斷片を集めた帖の類。永代藏四「定家の小倉色紙、名物記に入らる外六枚」

めいめいがき 銘々書。一枚の紙面などに、若干の人数で、文句・繪畫などを銘銘に書くこと。よせがき。一代男七「かの懸物に、めい」書の五句目まで」と更に聞き事也」

めいめいかせき 銘銘稼。各自が稼ぐこと。ともかせき。萬文反古一「針手き」申候て、めい」かせきに致しかぬる

ものにては御座なく候。次條參照。

めいめいすき 銘銘過。前條の類語。各自がおのれの業に従ふこと。めん」すぎ。萬文反古二「婦夫(めをと)は、銘銘過いたせば、女房持つも勝手づくに罷成候」

めいめいてう 命命鳥。梵語(Urainaka)即ち若波若波の譯。若波は生の義で、生々鳥、又は共命鳥とも譯す。一身兩頭の鳥であるといふ。昔雪山中、有共命鳥、一身二頭。一頭常食美果、欲使身得安穩。一頭便生嫉妬之心。(中略)彼常云、何食好美果、我不曾得。即取毒果食之。便二頭俱死。蓋比之釋迦與提婆(和漢三才圖會所引雜寶藏經)。武道傳來記八「愚に命々鳥の宿木に夜を籠め」

めいもん 命門。漢方醫家の用語。十四椎の下、臍の邊。源氏冷泉節上「心・肝・腎も命門も、右に有るやら左やら、病人よりも醫者殿の脈打亂るばかり」

めいよ 名譽。而妖。怪しいこと。不思議なこと。奇妙。めいよう。めんよう。一代男五「さて」名譽じや、(中略)兩人はさても驚く。二代男三「五音を聞くも名譽なり」。轉じて、非常、甚

だなどの意にもいふ。一代男「名譽の好きにて、命を取る所あつて」。同「名譽の上手なれども」

めいよう めんよう。前條に同じ。大下馬「只今までたしか十兩見えしに、めいようの事ぞかし」

めいる 衰へる。勢ひがなくなる。榮花咄「久しく此里めいりけるが、人は移氣にして又色も狂へば若やぎて」。又、深く凹む。めり込む。

めう 妙。梵妻。だいく。特に日蓮宗でいふ語。書夜用心記「寺中の坊主上下五人、男一人、妙一人、已上七人」

めうくわ みやうくわ(猛火)。盛に燃える火。日本振袖始五「大蛇は怒りの鱗を立て、めう火の腮は利劍を吐き」

めうしきえ 妙色衣。たへいろごども。美しく妙なる衣。釋迦如來誕生會「天つ粉(かとり)の妙色衣、御腰にまつはれて」

めうしやうごん 妙莊嚴。過去世に出たといふ國王の名。初め、外道婆羅門等の法を信じて佛法を信じなかつたが、

後、夫人の淨徳、二人の子淨藏・淨眼といふ者の諫めによつて佛に歸依し、如來の許に行つて法華經を聞くに至つた

め

といふ(法華經第廿八品、妙莊嚴王本事品)。「百日曾我回」「子出家の功力によつて、妙しやうごんの悟りを得」

めうしんじ 妙心寺。臨濟宗の一本山。正法山と號する。山城葛野郡花園村にある。もと花園天皇の離宮であつた。

開祖は關山國師。又、參河國岩津村にもあり、法性山といふ。

めうといけ 女夫池(めをといけ)。大阪天神橋筋の北端、池田町あたりにあつた池。昔旅に出た夫の久しく歸らぬを待ちわびて、妻が身を投げて失せた後、

夫が歸つて来て深く之を悲み、妻の跡を追つて又入水して果てたので名づけるといふ(蘆分舟)。大矢數「天滿に屋敷京に御手懸、夕暮は喧嘩のたねの女夫池」

めうとぼし 女夫星(めをとぼし)。牽牛。織女の二星の稱。大矢數「有漏地の歌一休に恨あり女夫星、けふ汲みかへる堀ぬき井の水」

めかい 目界。見ること。目のこと。百合若大臣野守鏡「めかいかの見へぬ女の身、とがあらば一思ひの殺し様も」

めかけぶり 目掛振。目を掛けてゐる様子。愛顧してゐること。最辰ぶり。花咄「日比目かけぶりの亭主女房にひけらかしぬ」。武道傳來記五「日比目掛振を爰に出し、著婆扇鶴が再來の如くもてはやしければ」

めがたき 女敵。妻と通じた男。姦夫。間男。その夫からいふ語。薩摩歌「あれ體の下司奴を、三五兵衛が女敵といふも口惜しい」。槍權三上「一之進は女敵を討ちあやまり」

めがたきうち 女敵討。妻と通じた男を討つこと。姦夫に對するあだうち。

めかどつよし 目角強し。物を見ること

めが鋭い。眼力がよく利く。曾我會稽山三「祐經元より目かど強く」。戀八卦柱曆下「目かどの強い人じやの、毎年の事でもこちはすきと覺えぬ」

めかり 和布刈。謡曲の名。早朝明神の和布刈の神事を脚色したもの。シテ龍神(前は漁翁、ツレ天女(前は海士)、ワキ早朝神職。一代男「きのふの和布刈の脇は高安はだしと譽め」

めかり(和布刈)の神事 長門國豊浦郡住吉和布刈神社及び豊前國門司關早朝神社で行ふ神事。「早朝の和布刈」の條を見よ。

目かりを利かす 目はしを働かせる。物

をよく視る。轉じて、氣を利かせる。  
 宵庚申下「あた鈍な念佛講、こんな時はめかりきかして延したがいよ」  
**めかれ** 目離。古語。目を離すこと。見ざりにること。男色大鑑六「狂言の初めより目がれもせず平八郎を眺め」  
**めきき** 目利。目を判かすこと。物を見て眞偽・正邪・善惡を判断すること。又、その人。鑑定。鑑定家。女腹切上「目利の家へ似せ物を、ぬく〜と寢所へまで手引させ」  
**めききがしら** 目利頭。目利する人の頭役。五人女四「役者のかしこき奴を目利頭に、花見がへりを待つ暮」  
**めぐ** (動詞、下二段、また四段活用)。こぼつ。破る。福山姥二「あたる物を幸ひに、打ちめぐ打ち破る」。頼朝演出三「おのれ傾城め、怒づらめがんと駈け出れば」  
**めくぎ** 目釘。刀劍が柄からぬけないやうに、目釘孔に挿す釘。竹の目釘。一代男四「鎖帷子を着て同じく鉢巻、目釘竹に心をつけ、最前の方に走りつき」  
**めくさりがね** 目腐金。僅少の金を罵つていふ。特に、物惜みする人の所持金を嘲る語。戀八卦柱曆下「これしきのめ

くさり銀」  
**めくすし** 目薬師。目醫者。眼科醫。出世瀧徳上「本道守らぬ目薬師なんと」  
**めくちかかあき** 目口渴。目も口も渴いてゐる義。輕薄で慾の深いこと。或は、艶氣のないこと。又、その人。晝夜用心記六「下女とおぼしき色姿、一人五十ばかりの目口かわきの婆なれど」  
**めくらじま** 盲縞。經も緯も紺の木綿絲で織つた布。紺無地の織物。  
**盲千人目明千人** (諺) 世の中には愚者も居れば賢者もある。「目明千人盲千人」ともいふ。  
**めくらぶね** 盲船。四方を板又は楯で圍ひ周らした船。舳艫共に楫をつけた船で、水戦に用ひるもの。  
**めくり** めくりがらた(捲骨牌)、又は、めくりふだ(捲札)の略。兩吟「日千句」「霞扇棧那めくりをこころざし」  
**めくりがらた** 捲骨牌。「うんすんかるた」の簡單にされたもの。即ち、「うんすんかるた」の五種中、「うる」を除いた四種の札を探り、各十二枚總計四十八枚としたもの。「うんすん」の條参照。又、めくりふだ。はなふだ。  
**めけぎせる** 「めけ」は「めける」の語幹。

即ち、ひしげた煙管。二代男三「松屋町焼の土火入に、反碗の貫入、取集めたるめけ煙管」  
**めげごき** めげ御器。缺御器。こはれた食器(椀茶碗の類)。男色大鑑三「口の缺けたる徳利をならし、めげごきを持つて人の手より口に移し」  
**めげる** 缺ける。こはれる。五人女五「青磁の道具限りもなく、飛鳥川の茶入、かやうの類ごろつきてめげるも構はず」  
**めざし** 目刺。小兒の額の垂髮。目を刺すほどの長さである故の稱。中古語。竹串などに刺した鯛の干物。出世景清三「和布まじりのめざしほす、鹽屋が軒に竹見えて、おきな鶯音をぞ鳴く」  
**めざましぐさ** 目覺草。煙草の異名。雪女五枚羽子板上「一吹ついで煙らす、めざましぐさ」  
**めしあはせ** 召合。次條の略。引合せ戸。五人女一「中戸をさし、火用心めしあはせの車の音、神鳴よりはおそろし」。又二枚立の障子。  
**めしあはせのと** 召合戸。兩方から引合せて閉すやうにした戸。引合せ戸。二代男八「寢所を閉して置き、めしあはせの戸を明けかけて」

めしくだし 召下。貴人が召古るしを下  
部に與へること。又、その物。御着用  
後の下されもの。

めしつぎ 召次。取次ぎの役を勤めるも  
の。もと、院の廳の下官。

めしめし 召召。各自が召具してゐるこ  
と。多勢の者が召連れてゐる者。百日  
會我五「近習外様の召々の人残らず法  
施をさゝげられ」。めしぐ(召具)。

めしろ 目代。後見。監督。武道傳來記  
四「自然の時の目代にその儘抱へおき  
て」。槍權三上「目代になるこの乳母は  
ぐるなり」

めずき 目好。目數奇。見て好み選ぶこ  
と。目の好みに任せること。又、その  
好みに適つたもの。二代男ニ「揚女郎に  
もさのみ劣らぬ姿を一軒に五十人づつ  
も見せかけ(中略)、罪なく浮かれ遊ぶ  
を、目數奇にどれにても一歩に定めて」  
目づき。

めせきあみがさ 目塞編笠。次條に同じ。  
一代男六「目せき編笠、うね足袋に紅の  
くけ紐」

めせきがさ 目塞笠。編目の細かい深い  
蘭笠。目の前に来る部分に隙がある。  
日關笠。二枚繪草紙上「本を召せ〜日

關笠」  
めだか 目高。目のよく利く人。鑑識の  
すぐれた人。

めたたく またたく(瞬)に同じ。丹波與  
作中「首打落せし早業は、めたくく間の  
稻妻なり」

めだれがほ 目垂額。めだりがほ。面目  
ない顔つき。言行の醜いさまにいふ。  
めつかう まつかう(眞向)。面額。額の  
眞中。又、兜の鉢の前面。國性爺四「面  
額打割る、天窓を碎く」

めつき 滅金。鍍金。大矢數目「月の光こ  
れは滅金と申しけり、雲霧包みて五兩  
十兩」

めつき 目附。めずき(目好)に同じ。目  
について好ましいもの。晝夜用心記三  
「とても事に、主の目づきなるを取ら  
せたり」

めつきしやつき 滅鬼積鬼。牛頭阿旁の  
俗譯であるといふ(但言集覽)。牛頭。馬  
頭。阿房羅刹といふ類。地獄の獄卒。  
日本振袖始三「轎牛の二足連れ、鐵杖提  
げ、三熊の分身隠れなき、滅鬼積鬼と  
いふ早業」。轉じて、亂暴に又は執拗に  
振舞ふさまにいふ。

めづくる 芽作。芽が生える。又、胎内

に子が宿る。受胎する。日本振袖始三  
「女房の腹に惣領がめづくつた、彼奴は  
入らぬ」

めつけ 目付。監督。見とどけの役。  
もと、武家の職名。即ち、君の耳目と  
なつて、國勢を監察密告し、戦時には  
士卒の行動を推知することなど司つた  
者。一代男八「廿日鼠の宇兵衛を目付に  
遊ばし、かけるくに仕り」。又、密偵。  
目づるし。目標。

めつけぎ 目付木。矢數俳諧の用語。「大  
矢數」の役人の中、「懷紙番繰、衣笠一  
鶴。目付木、山田西長。線香見、池山  
西戎」などあり、又、大句數序「番付の  
懷紙・文臺・目付木・左右の置物・提書等  
あと望みの方へ是を譲るべし」

めつけもん 目付紋。「目附繪」を紋所で  
行ふこと。二代男ニ「大橋は轉寝、長谷  
川は目付紋あはして、客はまだ來ず」

めつけ糸 目附繪。あて事遊びの一。多  
くの繪の中の一つに目を附けさせ、他  
から、その目を附けたものを云ひあて  
るものであるといふ(嬉遊笑筈)。

目つこ 目つく(突)の訛であらう。永代  
藏六「むかし植ゑたる柵、後には大木と  
なつて(中略)、筋分の夜も鬼の目つこ

め

は是を用ひ」

めつたに 滅多に。みだりに。むやみに。

今日の打消の語を伴ふ用法とは違ふ。

傾城反魂香中「わな〜懐ひ手酌にて、

滅多に呑んでぞむたりける」

めつたばら 滅多腹。むやみに腹が立つ

こと。怒り易い感情。日本振袖始「一本

悪女とはあの事惚れて進ぜる男はな

し、滅多腹が立つてのわんざん」

めつたまと 滅多的。一種の賭弓。布な

どで目を塞いで、的を射、あたれば賭

物を取るもの。大矢數「春日野の月は

消えずも丸の内、滅多的より通る秋風」

晝夜用心記「めつた的の矢取」

めつたむしやう 滅多無性。むやみやた

ら。やたらむしやう。めつたやたら。

めつたむじん 滅多無盡。前條に同じ。浦

島年代記「あひの高垣ぐわり〜」

と切りやぶり〜、めつたむじんに踏

みひろげ」

めつちち 滅日。めつもんち(滅門日)

を見よ。

めつぶし 目潰。義經東六法下「さし竿の

めつぶし抜けば大身の槍、つらゝの輝

く如く」

めつぶれ 目潰。物の見さかひのない者

を罵る語。見わきまへのない者。

めつぼふ 滅法。むやみなさま。めつた

やたら。法外。滅相。滅法界。

めつもんち 滅門日。曆の詞。萬事に

凶であるといふ日。めつちち。めつも

ん。

めづら(目面)も明けぬ 極めて混雑して

忙しいさま。「目面を掴む」ともいふ。

めどき 目時。眼力のするどい年輩。目

のよく利く年頃。五人女目「老眼のさだ

かならず(中略)、我なら目時の目にて

抜かん物を」

めどき 箸。占ひの用具。めどきはぎ

(鐵掃帚)といふ草の莖(五十本)を用ひ

るのでいふ。後には竹で作るので筵竹

といふ。兩吟「一日千句」爰はめど木を

しゆらでひく音、手の筋もふとき中綱

はやさぬか。二代男「この法師人相

を見給ふ(中略)、床に日月の懸繪、著

古曆を飾り置かれり」

めなご 女子。をなご。むすめ。雪女五

枚羽子板上「てゝら、かゝらに爺ばゝ息

災、めなご。小悴、産みの儘なる餓鬼十

二疋」

めなしちご 目無兒。(→遊戯の名。めく

らおに。めかくし鬼。めなしおに。(→

ばけ物の名。目のない稚兒の姿をした

ものであらう。榮花唱「難波の大寺に

住める目なし稚子と言へる化物なるべ

し」

めなしどち 目無どち。前條に同じ。

二代男「目無どちを始めて、取當りた

る娼様をそれ〜の縁ぞとあれば」

目に見えて 目前で。見る前で。織留

「手元にあり合ける小道具なども、目に

見えて取直しける」

めぬき 目貫。刀劍の中身と柄とを貫い

た孔に挿す金具。古くは頭と挿込む部

分とを作りつけたが、後には頭を別に

し目貫といつて飾りを施し、挿入部を

目釘といふに到つた。

めぬき 目抜。人の目を盗んで悪事をす

ること。下例は前條の目貫とかけた語。

雪女五枚羽子板上「この太刀も、主の日

抜の盗みもの」

目の鞘はづす 目をよく利かす。油断な

く目をくばる。傾城反魂香中「目の鞘は

づすが遺手の役」。雪女五枚羽子板中

「柄に手を懸け睨み合ふ、目の鞘はづし

の下はばき」

目の鞘はづる 目が利く。眼力がするど

い。懷硯「目の莢の外れし男ありて、



是に氣をつけて、與太夫にあらぬ事を  
見出しけれど「

**めのはり** 目の張。目つきに張りのある  
こと。目ざしの凜としたこと。壽の門  
松上「戀と利發を目の張に、情こぼるゝ  
道中は」

**めはじき** 目彈。目をしばたゝいて意を  
知らせること。目くばせ。一代女六「裏  
口より雪踏の音の聞えしが、かゝ目は  
じきして立向ひ」

**目はつこ** 西鶴五百韻「あぶら榊柳亂れ  
てときつ風、たまにもぬけてなづる目  
はつこ」

**目ふる間** 目をしばたゝく間。またゝく  
間。短い時間。物種集上「目ふる間の夢  
のたのしみ、唐綱はひぢをまげてや打  
ぬらん。二代男一「千里飛ぶ車もがな、  
目振る間行くべきものをと云ふ」

**めませ** 目交。「若右衛門隣（めませ）」せは  
男色大鑑三「若右衛門隣（めませ）」せは  
しく立ちすくみ、うき世の限りを驚き」  
（四）目くばせ。めはじき。女腹切上「狼狽  
者と睨めつけ、目ませで知らすれば」  
响。

**めまひごころ** 目眩心。めまひがする心  
持。眩暈の氣分。織留四「日まひ心に足

が冷えまして」  
**めめざこ** 目目雜魚。目高などの小魚。  
兩吟一日千句「水にすめるめゝ雜喉、  
梅にやどる鳥」

**めやす** 目安。裁判の時の訴狀。胸算用  
三「借錢に目安付けられ。又、一般の公  
用書。永代藏六「人中にて長口上もい  
ひかねず、目安も自筆に書きかねず」

**目安上げる** 目安を裁判所に上げる。訴  
訟を起す。戀八卦柱曆上「三日限りに家  
渡すか銀立つるか。返事次第に五日に  
は目安あげる」

**めやすうらがき** 目安裏書。裁判所で、  
訴狀即ち目安の裏に、出廷の期日など  
を書いて被告に通告するもの。  
**めやすがき** 目安書。目安を書くこと。

又、目安に同じ。天下馬三「目安書して  
世を渡りける。大矢數一「内證の苦は  
色かゆる目安書、十露盤上手といはれ  
し我も」

**目安付ける** 「目安上げる」に同じ。戀八  
卦柱曆上「目安付けるもかまはぬが」。  
「めやす」の條の文例参照。

**めらう** 女郎。女を卑しめていふ。天網  
鳥中「去狀入らぬ、女郎來いと引立つ  
る」

**めらりひよん** 西鶴五百韻「野にきりぎ  
りす豔ははやらす、秋の霜立るひ男は  
めらりひよん」

**めり** 減へること。損。物種集上「旅つゝ  
ら高野聖のときほどき、商口のめりの  
ことわり」

**めりやす** 莫大小。葡語（Meras）西語（Meras）もと共に靴足袋の義。轉じて靴  
足袋などにする織物地の名となる。女  
利安。大矢數一「紅毛よりも紙帳賣、め  
りやすが脱れぬ事なら草履ぬげ」。同二  
「メリヤスをはいて蛤刺陥まれたり」

**めをとほし** 女夫池。「めうといけ」の條  
を見よ。

**めをとほ** 女夫湖。最明寺殿百人上薦  
上「片潮・諸潮、めをとほ、投げ潮」  
**めをとつか** 女夫塚。男女を合葬した塚。  
下例は男塚・女塚と相並んだ塚で、謡曲  
「女郎花」の故事に據つたもの。女郎花  
塚。松風村雨東帶鑑四「末は淀のや男  
山、麓に立てる女夫塚、その二道に頼  
風の」

**めをとねんぶつ** 女夫念佛。夫婦連立つ  
て唱へる念佛。

**めをとぼし** 女夫星。「めうとぼし」の條  
を見よ。

め

**目を抜かる** 目をくらまされる。だしぬかれる。してやられる。油地獄上「口惜しい目を抜かれた」

**目を引く** 目をつぶす。模様などあるのを更に染めて無くする。萬文反古「小紋の羽織を何茶になりとも目を引き、袖下はともつぎにして」

**目を振る** 瞬きする。まばたく。「目ふる間」の條参照。一代男五「宮川町に早駕籠、目をふるうちにござりました」

**目を見出す** 眼をいからす。懐硯「甚助眼を見出し、其方は知るまじ(中略)と延上りて氣色するを」

**めんいう** 面友。表面だけの友人。うはべの交際だけしてゐる友。

**めんかうふはい** 面向不背。面を向くるに背かずの義。何れから見ても同じに見えること。又、そのもの。二代男六「片膝立てて、蹴出しの裾深く、面向不背の姿見るにぞつとして」。次條参照。

**面向不背の玉** 何れから見ても同じに見える寶玉。唐土から傳來の三寶の一。奈良興福寺の寶物となつたといふ。下文を見よ。大職冠「唐朝に傳はる花原磐・酒濱石・面向不背の玉」。同三「面向不背の寶珠、龍宮世界三十丈の玉塔に

籠めたりしを(中略)、人界の善惡不二、面を向ふに背かず、萬劫末代不易の寶」

**めんざう** 眠藏。もと禪家で寢所をいふ。寢室。納戸。

**めんどりば** 雌鳥羽。めどりば。和漢三才圖會に曰ふ「鳥の雌雄別たざる者は、翼を以て之を知る。右、左を掩ふ者は雌なり。左、右を掩ふ者は雄なり」と。即ち、この雌鳥の翼のやうに物を重ねること。右を上にした重ね方。五人女三「織女に貸小袖とて、(中略)色々七つめんどりばに重ね」

**めんないちどり** 目無千鳥。「めなしどち」に同じ。冥途飛脚下「腰の手拭引きしほり、めんない千鳥百千鳥、泣くは梅川河千鳥」

**めんばく** 面縛。兩手を後に廻して縛り、面を前方に差出させること。吉野都女補四「生捕りて面縛せられ」

**めんめん** 面々。各自。めいめい。めんめ(大阪方言)。油地獄上「入子鉢のやうなめんめの子供の世話ばかり焼きをわらす」

**めんめんかせぎ** 面面稼。「めいめいかせぎ」に同じ。出世瀧徳上「戀のめんめ稼ぎじやと、ばらばら立つてぞ入りに

ける」

**めんめんさばき** 面面捌。各自が思ふままに處置すること。おのの自由のさばき。

**めんめんじがい** 面面自害。各自の心からする自殺。めいめい勝手の自害。卯月潤色中「云はど面々じがいとも、心中の外の心中ぞや」

**めんめんすぎ** 面面過。「めんめんかせぎ」に同じ。面々活計。俗つれ「これが女房は御夢想の餡焼して面々活計、今日を暮せしが」

**面面の楊貴妃** (諺) 人は皆おのれの妻女。情婦を美人であると思ふこと。

**面も笠も脱ぐ** 謝禮又は謝罪する。又、借錢などをきれいに返済する。生玉心中上「壹厘残さず物の見事に仕まうて、待つて居や節句から面も笠も脱がせう、や借錢の笠は脱いで、傘は放されぬ、又降つて来た」

**めんよ** めんよう。あやしい。面妖。

も

**もうる** 莫爾爾。葡語(moer)の訛。「織

物の名。緞子に似た浮織。風流色芝居「緋綸子の下着をほのめかせ、毛疏(もう)る)の帯に紫縮緬の抱帯」。①國名。和漢三才圖會「毛宇留。日本に内る三千八百里。按ずるに、南天竺の至、最も是れ大國也。人物暹羅に似て色稍黒く、四季暹羅に同じ。英領以前の印度。

もうを 藻魚。硬鱗類の一種。體の長さ一尺餘に達し、鱗細かく、尾、鱗が赤い。もいを。いそめばる。永代藏「毒魚と知りながら鮫汁、これに風味變らずして藻魚といふもの何の氣遣ひなかりき」

もえぐひぐさ 燃杭草。書名。「たきつけもえぐひぐさ」を見よ。

燃杭に火 (諺)「燃杭には火がつきよい」ともいふ。一度縁がついてゐると、たとひ切れても再びもとへ戻りやすい。一代男「いつとなく散切に撫でつけ、衣は雑巾となり(中略)燃杭に火とは、この人の昔にかへる」

もがみひと 最上人。田舎人といふ心か。男色大鑑「よきもの人も知る事ぞと、最上人も商口を出して、萬の買物」。ひさご「こひにはかたき最上侍」

も

それが物を掛けて乾すやうにしたもの。重井筒上「門の戸明くれば徳兵衛、もがりの蔭に隠れしを、それとも知らで」。②もがること。無理を言つてねだること。ゆすり。かたくり。二代男「世に無理は虎落の目安書くよりは」胸算用「これ、其方の虎落今時は古し」

もがりごと 虎落事。ねだり事。ゆすり事。詐計。女腹切上「怒づらの繼父めが、年切増のもがりごと、急々にせがむと見えた」

もがりたいみやうじん 虎落大明神。大のもがりて。虎落を仰山に言つた語。織留「大かたの人は肝つぶして、いかなる虎落大明神のおとし子にてもあるらんと」

もがりやま 殯山。美濃國喪山(もやま)のこと。天稚彦の死後、その妻下照姫は、味耜高彥根命の容貌が稚彦に似てゐるので、わが夫の猶生存してゐる者と思ひ、且喜び且慟した。高彥根命は之を忿つてその喪屋を斫り仆した。是が即ち落ちて山と爲り、今、美濃國藍見川の上にある。喪山とはこれで、世人が、生を死と誤るを忌むのは、かゝる因縁に據るといふ(日本紀、和漢三才

圖會)。日本振袖始「殯山の巖窟に、三熊野大人と申す惡鬼隠れ住み」

もがる 強請する。たくさんで取る。かた。壽の門松申「七十になる淨閑が、もがられたといふ外聞悪き」

もぎごと 理にあはれないこと。もぎだう(莫義道)なことであらう。大句數上「山鴉しつた顔なる花盛り、もきことおしやる古今三鳥」

もぎどを 莫義道(もぎたう)。沒義道。理にはづれたこと。意地わるいこと。邪慳。用明天皇職人鑑「はてもぎどをな、討たれまいやら討たれうやら、ま一度詞もかはさせぬ」

もくじき 木食。木の實ばかりを食ふこと。又、さうして修行する人。大下馬「短齋坊といふ木食ありしが、佛棚も世を夢の如く暮して百餘歳になりぬ」。二代男「關寺の邊に尊き木食のましまして」

もくば 木馬。拷問の具。馬の背のやうなもの。これに罪人を跨らせて兩脚に石を釣り下げる。傾城酒吞童子「柱を横に渡して、足に石を括りつけ、木馬とやらに乗せられ」

もさ 關東者を嘲つていふ。關東人は語

尾に「もさ」とつけるに因るといふ。轉じて、田舎者の卑稱。油地獄上「ヤイもさめ、この女郎こつちへ貰ふ、置いて歸れ」

もさう 摸相。もつさう(物相)のこと。

飯を盛る器。又、それに盛つてある飯。

もつさう飯。運歩色葉集「摸相・盛相(モツサウ)、盛飯之器」。俗つれ、三「衆

寮に集まる僧も摸相を許され」

もし 若。或は。又は。もしくは。萬文

反古「笛吹き」の勘太夫、もし浪人の左

もじ 文字。(接尾語)。その物事を美しく、うちわに、品よくいふ時に、當の

語の頭字などに附ける辭。松風村雨東

帶鑑「御かもじ様恪もじに」。生玉心

中上「心々の願立に、神のお身さへア、

いそもじの」

もじ 緞子(もち)。麻絲で目をあらく織

つた布。五十年忌歌念佛中「人目を忍ぶ

緞子の蚊屋」

もじかたきぬ 緞肩衣(もちかたきぬ)。

緞で仕立てぬ肩衣。堀川波鼓下「茶字の

裾にもじ肩衣」

もじどうろう 緞子燈籠(もちどうろう)

緞で張つた燈籠。

もじひらなか 文字ひらなか。一文半錢。

又、文字ひらがな(平假名)の音韻錯置

で、少しも曖昧なく、正直である事と

いふ。油地獄下「一生夫の錢金、文字ひ

らなかちがへぬ身が。曾根崎心中「商

ひ物も文字ひらなな違へたことのあら

ばこそ」

もじやくじや ごとつくこと。ごとく。

悶着。出世灌徳上「奥様のお呼びなさる

時のもじやくじやも如何と、お暇を

乞ひましたれば」

もじやもじや 前條に同じ。丹波與作中

「父様の事も埒あかぬ。もじやく云へ

ば氣がもどる」

もじる 振(もちる)。ねちる。よちくる。

まはして、もつれるやうにする。壽の

門松上「蹴もじるを、引倒し」

もたい 甕(もたいひ)。瓮。酒などを容れ

る器。松風村雨東帶鑑「もたいの蓋の

ひらくと見えしが」

もたいな 勿體無。もたいなしの略。も

つたいなし。

もだくだ 「もじやくじや」に同じ。ごと

ごた。

もたせぶり 持たせぶり。相手に氣を持

たせるやうな素振。思はせぶり。大磯

虎稚物語三「掃部は彌心くれ、差俯向いてゐたりして、虎扱はもたせぶりと、少し憎くや思ひけん」

もたひ 瓮。「もたい」を見よ。

もだもだ 悶えなやむさま。懊惱するさま。榮花咄「昔ならば此君を請出す物をと、氣をもだくとして別れぬ。重

井筒中「徳兵衛心もだくと、かはいや房を今まで待たせ」

もたれし女 もたれかゝる女。しなだれる女。しつこい、濃情な女。主馬判官

盛久「扱ももたれし女かな、助けられ

ても迷惑なり、軍半ばの事なれば、是非こゝを放してたべ」

もち 持。賣買にいふ語。現物を持つて

ること。油地獄中「俵物の相場商ひ、上

げうと下げうと高下は自由、持の御方

が値あげたい祈りには」

もち 緞。麻絲で目をあらく織つた布。

辰。

もちいひ 餅飯(もちいひ)の約。餅のこと。

もちいどの 餅飯殿。大和國奈良の町名。

三世相一「此比は眼病ゆゑ毎日餅飯殿

の目醫師の方へかよひ候」

もちくち 持口。受持の區域。負擔して

ゐる範圍。守り保つてゐる方面。

もちごもり

持籠。胎内に子を宿してゐること。妊娠してゐること。特に、そのまゝ死ぬ時にいふ。傾城酒呑童子四

「懐妊すれば本妻同然、僅四百兩情んで廊の中で持ちごもりに殺した」

もちごもり 持籠。懐妊する、腹に子を待つ。特に、そのまゝ死ぬのをいふ。傾城酒呑童子四「見すく、我子を持ちごもつて死ぬる」。同「持ちごもりて死ぬる身の」

もちせきて

源氏冷泉節下「國を療治のはやり醫者、法眼が藥のむ人は、長生不老門前に、藥代禮物もちせきて、藥こしらへひまもなく」。持ち來りて、處せき(狭)意か(近松全集注)。

もちづつ 持筒。自分の持料の鐵砲。自分用の銃。

もちなし

持成。身の持ちかた。もちあつかひ。とりおき。處置。一代男「さもなくば人も、もちなしから也」

もちばな 餅花。餅を小さい扁い圓形にして、柳の枝などに花のやうにつけた玩具。嬉遊笑覽に「餅花、もと節物なるを、江戸目黒の餅花などは常にあり(中略)、吉野の花餅を學びたるものなり」と。胸算用三「天井裏に差したる餅

花に春の心して」。萬文反古「娘どももまた餅花よろこぶ時分にはあらず候」

もちぶね 餅舟。安産の御禮に神佛に供へる餅、舟は器物の形からいふか。物種集上「産後の宿にはらふ惡風、餅舟にあやかしが付て候よ」。一代男「近所に幸ひ子安のお地藏は御ざり、大義なれど、百の餅舟は阿爺(と)がするぞ、氣遣ひなしに帶とけと」

もちまるちやうじや 持丸長者。金持。富豪。兩吟一日千句「揚屋のたいこもちまる長者、紙屑のちりが積つていく藏も」。雪女五枚羽子板上「家は治まる持丸長者の、四方に四萬の藏の戸前」

餅屋のお福

餅屋の看板、木馬の頭にお幅の面を冠らせたもの(用捨箱)。見かけよりうましの謎。轉じて、お多福な醜女の意。傾城反魂香中「たとへ餅屋のお福でも、山姥と祝言するとも」

もちやり 持錠。持料の錠。又、それを持つて供するもの。源氏冷泉節下「持錠持弓・梓弓、引きもちざらぬ行列は」

もちゆみ

持弓。梓弓、引きもちざらぬ行列は持つて供するもの。前條の文例参照。

もちり 飯。そでがらみ(袖摺)のこと。

袖からんで罪人など捕へる武器。もちりば 振羽。羽のもちれること。もちれた羽。

もちる 振。ねちる。よちる。すちる。源氏烏帽子折「左手もちり右手ちがひ、呟と云うて捻けれは」

もつかう もくかう(木香)。南蠻諸國から渡來した藥用植物。其の根が枯骨のやうなもの。薩摩歌上「浮世は陳皮のかは、肩に木香かたげても」

もつかう

もつかうつば もくかうつば(木瓜鏝)。紋所の木瓜のやうな形の鏝。紋所の木瓜のやうな形の鏝。

もつげがほ 物怪顔。意外に思ふ顔つき。な事がいうて來ました」

もつげがほ

物怪顔。意外に思ふ顔つき。な事がいうて來ました」

もつさう 物相。飲を盛り量る器。又、

も

飯を盛つて人別に給する器。盛相。模相。もさう。

もつさうあたま 物相頭。物相のやうな形の頭。孕常盤二「月山の端に二合半、

もつさう頭の奴が聲」

もつたい 勿體。物々しいこと。尊大ぶること。様子をつくろつた態度。織留

四「大屋の女の勿體に見あいた。國性爺三「優々たる絹笠も、さすが五常軍

廿輝と名に負ふ其の勿體」

もつたう 没倒。没收。取りあげること。平假名盛衰記四「當山は兵火に焼かれ、

寺領までももつたうせられ、佛法衰微致し申し候」

もつたてる 持立。もち上げる。強ひて敬ぶ。

もつてうずる 鄭重にする。尊敬する。「もつてう」は「勿體」の訛か。勿體をつ

けて扱ふなどの義からいふか。國性爺三「おのれをおのれと奉つて、味方に頼

まんにめなるに、もつてうずれば方圖もない」

もつてひらく 以開か。開きなほる。あらたまつて物言ふ態度にいふ。武道傳

來記一「主命そむくこと存じもよらずと、もつて開きて申し聞かせしに」

もつともかし 尤もかし。「尤も」を強めていふ。文武五人男三「はて苦しからず

眞直に申せ。尤もかし、殿御のいとしさそれはく日本唐天竺七萬寶にも換

へがたく」

もつともやく 尤役。何事にも尤もと言つて、人に使はれるものをいふか。永

代藏五「音曲好きの甚八は又九郎が芝居に入りて、やうく口の世で抱へら

れ、朝から晩まで尤役につかはれ、身をそれになしける」

もてあつかふ 持扱。もてあます。扱ひに困る。當惑する。傾城反魂香中「檢使

の人々もてあつかひ、よいはくもう黙れ」

もてかやす 持返。もてかへす。上を下へと混雜する。ごつたがへす。

もと 居。聯。鷹を數へるに用ひる。百日曾我一「鷲熊鷹、白鳥捕りの朝鮮鷹、

そろへて三千餘もとなり」

もとあら 本荒。木立の本があらいこと。林などの木々の根もとが、まばらに生

えてゐること。

もどく あらがふ。抗辯する。悪評する。織留四「男の言葉をもどくからは、暇を

とらす程に」

もどくび 元首。頸の根もと。首もと。源氏冷泉節上「言語道斷の慮外者、元首

に繩つけて引きずり寄せよ」

もとしめ 元締。おほもとの取締りをすること。又、その人。

もとしめやく 元締役。元締する役。松風村雨東帶鑑一「元締役や國元の御用」

もててんまぢやう 本天満町。大阪船場今の伏見町、堺筋から三休橋筋あたり

までの稱。町幅も狭く、軒も低く、ひつそりとした通りであつたといふ。

元の空阿彌 (謔) 一旦立派に暮した者が、再び元のつまらぬ者に歸ること。空

阿彌はもと南都の一人の名。筒井順昭にその音聲が酷似してゐたので、順

昭の死後、敵國を欺くために、筒井家に迎へられ順昭と同じやうに仕へられ

てゐたが、嗣子が長ずるに及んで、再び元の市井の一人になつた(天正軍

記)といふ傳説に基づく。新小夜嵐物語上「身代落花となつて元の空阿彌」

もとめづか 求塚。攝津國菟原郡(武庫郡)今、住吉村御田と、東明と、味泥

と三箇所に分れてある墓。萬葉集にいはゆる芦屋少女の墓、又、大和物語に

も傳へられてゐる處女塚である。芦屋

の女に二人の男が戀を争ひ、遂に三人とも生田川に身を投げて死んだといふ。今宮心中下「昔のためし求塚、これも男と女郎花」

**もどりばし** 戻橋。京都一條堀川に架した橋。三善清行が蘇生して戻つた故事から名づける(京羽二重)。傾城酒呑童子「南北に飛び東西へ戻り橋に著きけるが、黒雲道を遮つて雷火電光震動し(中略)、或は一角一眼、又は三日八臂の鬼形、枝有る角に赤頭、火焰の如く見ゆるもあり」

**もとわたり** 元渡。古く外國から渡つて來た品物。こわたり(古渡)。榮花唱「尺に足らいで用に立つ物、もとわたりの錦、金太夫」。萬年草中「二階にはもと渡りの大紋緞子」

**ものいひとぎ** 物言伽。話の相手。又、闇の相手。博多小女郎波枕上「この六人を請出して、こゝに居らるゝ人々の物言伽。明日まで待たぬ今日の中に首尾させい」

**ものいふはな** 解語花。かいごの花。美人のこと。語を解する花の義。草木の花を「物言はぬ花」といふに對する。俗つれ「二「慢慕を絞れば、解語花ども

顯はれ」  
**ものいり** 物入。費用がかゝること。ついえ。

**ものうち** 物打。太刀などで物を打切る時に、その物に觸れる部分。切先から柄もとの方に向つて刀身の廣がり切つたあたり。切先三寸。曾我會稽山四「こは如何に、物打より切先まで刃を石にて叩き潰し」。又、棒にもいふ。同一「柘の棒ひつ提げて駆込む所を母飛びかゝり、棒の物打しつかと取り」

**ものが** 「もの」ともいふ。物を大抵に見つもつていふ語。置土産四「廣い大坂にもものが五人までは見えませぬ」

**ものがしら** 物頭。物の長。頭だつ役をするもの。名主・庄屋など。置土産「所の物頭もすれば、少しは小百姓の思ふ所を忍び」(武家に於ける諸隊の首領。組頭。足輕頭・同心頭などの類。武道傳來記「藤澤甚太夫とて物頭なりしが、廻番にて御江戸を勤め」)

**ものがしらく** 物頭役。前條に同じ。  
**ものかず** 物數。(品物の數。總計。椀久「世物語上」枕箱より一步物數四百取り出し」。(言葉數。口かず。  
**ものきは** 物際。節季の際。支拂日間き

は。世事の特別忙しい日の間際。生玉心中中「晦日前・物際は、武士の軍の虎口ぞい」

**ものごし** (物の言ひぶり。言語。一代男「しめやかなる物ごして(中略)、昔が思はるゝと語る」。日本振袖始「歩き振は家鴨の所知人、物ごしは破れ鍋」。(身のこなし。そぶり。  
**ものさぶ** 何となくさびる。古くなる。出世瀧徳下「古への手代新七、木棉布子も物さびて」

**ものし** 物仕。物師。物爲。世事にたけた人。策士。色道大鏡「物仕。男によらず女によらず、功者にして、物ごしなしのつどまやかに整ふる人をさしていふ」。二代男八「この里古今の物爲なれば、太夫より身を任せ來る時(中略)それに獨りおよれと起出づる」

**ものしやる** 物する。物言ふ。口を利く。宵庚申中「必ず聲高に物しやるな」  
**ものすき** 物好。特別な物好み。變つた趣味・風情。一代女四「昔は女帯六尺五寸に限りしに、近年長うして物好見よげになりぬ」  
**ものつくり** 物作。農作をすること。又、その人。小作人。百姓。五十年忌歌念

も

も

佛上「正眞の貧乏暇なし、物作りの事なれば、いや大根時の綿時の」

ものなり 物成。(一)田畠からの收穫。五穀。雪女五枚羽子板下「世よし人よし物なりよし、仕合よしの今年ぞと、祝ふ春こそめでたけれ」。(二)租税。田畠に課する貢租。とりか(取箇)。永代藏「五十萬石三年の物成、これに入りける」となり

物には阿訶ある (諺) 物には呼吸がある。物事には加減が必要である。

物には七十五たび (諺) 物事には大抵限りがある。如何に内密の事でも度重なればいつか必ず現はれる。胸算用

「餉の足は日本國が八本に極まりたるものを、一本づつ切つて七本にして賣れども、誰か是に氣のつかぬ事にて賣りける。(中略)物には七十五たびとて、必ず現はるゝ時節あり」

物には料簡品もある (諺) 物事にはいはなく考へ方がある。何事も一向きではない。

物は言うて見ようもの (諺)「物は談合」

「物は言うて見づく」の類。戀八卦柱曆上「ア、嬉しい嬉しい。物は言うて見ようもの。かゝさまにも囁いて、お心

をやすめよう」

ものび 物日。(一)特別な物事のある日。祝日、祭日、又は支拂日など。傾城反魂香中「ほんに」物日なかに瘦せた

はいな。(二)もんじ(紋目)、即ち、女郎の賣日。色道大鏡「物日。毎月傾城の賣日をいふ」。置土産「物日の出懸け姿、柏屋丸屋の二階に、衣裳はとかく赤きが一入目立つものぞかし」

ものまう 噂。ものまうす(物申)の略。他の家に行つて案内を請ふ聲。これに對して家内から取次が「どれい」又は「どれ」と答へる。夕霧阿波鳴渡中「早や玄關に物まう、(家人)どれい」。武道傳來記「手に汗を握り、噂あればすは

やそれかと肝をひやし」。轉じて、案内。櫻陰比事四「私宅へ噂を乞ひ、壬生の庄屋よりの使と申し」

ものまうどれ 噂。ものまうと案内を請ふ聲と、「どれ」と答へる聲とを合せた語。武道傳來記「噂とといふ俄正月」

ものまね 物真似。人畜その他の音聲・風采・動作等を真似る一種の興行物。物真似狂言。曾根崎心中「物真似聞きにそれ其處へ」

ものまへ 物前。物日のまへ。節季の前。

ものぎは。榮花咄「物前の銀は、京も田舎も切れものぞかし」。永代藏「けふと明日との物前、さもいそがはしき片手に」

ものみだけし 物見猛。物見だかい。物を寄つてたかつて見たがるさま。物を見る好奇心がつよい。一代女「裏借屋に住める女の物見だけけて、細露次より立出でしを」。傾城反魂香中「京わらんべの物見だけく」

ものもう 「ものまう」に同じ。雪女五枚羽子板中「三盃機嫌の朝ぼらけ、物もう、どれい」

ものもどれ 「ものまうどれ」に同じ。兩吟一日千句「又留守に居て引く茶磨山、物もどれ真田が参りたるよしを」

ものよみ 物讀。書物を讀むこと。讀書の學。學問。繰留「物讀は宇都宮に道を聞き」

もまた もはや(最早)。もう。すでに。物種集上「前髪やおろしてもまたよいものを」。二十不孝五「才兵衛を潜かに招き、もまた其方も十九の春なれば」。一代女三「もまた其の年も年なるに、あだなや親の懷そだちぞと」



**もみうり** 揉瓜。うりもみ(瓜揉)に同じ。瓜を薄く切り、鹽で揉んで酢をかけたもの。

**もみくさ** もみくた。もめくちや。皺になるさま。

**もみくじ** 揉團。紙に文句を記して細く撚り、幾本かの中からその一本を引いて占ふくじ。吉野都女楠四「寝る時ほもみ團でしぶいて来い」

**もみたつ** 採立。①せき立てる。頻りにいそぐ。懷硯五「一日も早いがよしともみ立て」②はげしく採む。採みにもむ。

**もみたび** 採足袋。甲冑を着ける時に用ひる毛皮製の沓。毛沓。馬上沓。つらぬき。つなぬき。

**もみちがさ** ①紅葉傘。天井ばかり青いのを紅葉といひ、ぐるりの青いのを軒青と云ふ。俗に、蛇の目傘と稱する(俚言葉覽)。男色大鑑二「十二三なる美少年、まだ夏ながら紅葉傘を持つて差さで来にけり」②紅葉笠。ひでりがさ(日照笠)の別稱。古今集に「雨ふれば笠と

り山の紅葉は、行きかふ人の袖さへぞ照る」とあるに據つて、照る笠の義であらうといふ(嬉遊笑覽)。あやむがさ(綾蘭笠)。松落葉「おれが日あての菅

笠うれし、御供にと續かたて助が腰をよぢらす紅葉笠」

**もみちがさね** 紅葉襲。もと襲の色目の名であるが、下例は単に高雄の縁で、「旅衣」の修飾とした。一代男七「高雄が女郎盛を見んと、紅葉がさねの旅衣、八人肩の大乗物」

**もみぢぶくろ** 紅葉袋。紅絹地袋。糠袋(ぬかぶくろ)の別稱。薩摩歌上「人に見せじと包みたる、もみぢ袋の色に出る、こぶら太殿いと黒く」

**もみひき** 靱挽。靱を白でひくこと。又、その人。一代男三「物の淋しきあしたは御藏の靱挽とて雇はるゝ女のあるぞかし」

**もみふり** もみうり(揉瓜)に同じ。**もみゑぼし** 揉烏帽子。柔かに揉めて皺のある烏帽子。冑の下に冠るもの。梨子打ゑぼし引立ゑぼしなどの種類がある。吉野都女楠三「もみ烏帽子引立て血まぶれの冑箱御前にさし出し」

**もむない** うまみ(旨味)ない。もみない。うまくない。むもない。大阪方言。今宮心中上「大坂の男ちやとて喰ふに二つの味ひなし、一人の娘に親の身で、もむない男を喰はさうか」

**もめ** 揉。色道大鏡一「もめる。金銀の沙汰なり。物をつかふ貌也」とある「もめる」の中止形。費用を辨ずること。出費。「てもめ」の條参照。油地獄下「野崎参りの入用はおれがもめ、割付も何にも知らぬ」

**もしなぞめ** 百品染。ひやくしなぞめか。織留二役者の著さうなる袖口、百品染の白じゆすの帯を腰の見えぬほどまとひ」

**ももじり** 桃尻。馬乗の掛いこと。桃の實が轉ぶやうに、尻が鞍にすわらぬ義。轉じて、落ちつきのないさま。浮腫であること。

**ももぞのしんわう** 桃園親王。清和天皇第六皇子、貞純親王のこと。源經基の父。尊卑分脈一「貞純親王。母神祇伯棟貞女、號二桃園親王、此親王於二條桃園池爲二七尺龍之山、時人多見二夢、云々、仍號二桃園一歟」

**桃園の御葉末** 前條桃園親王の御後裔。孕常盤五「末くも清和のうてなを出で、桃園の御葉末、源の牛若丸」

**桃の酒** 桃の花を浸した酒。三月三日に之を飲めば、疫病を除き、顔色を美しくするといふ。桃花の酒。曾根崎心中

も

「春を重ねし雛男、一つなる口桃の酒」  
もやくる もやくともつれる。もやつく。ごたつく。いらだつ。さわぎ立てる。曾根崎心中「後の月からもやくり出し、押しして祝言させうとある。そこでおれもむつとしくして」

もやつく もやつくする。上氣する。いらだつ。宵庚申上「魂すゑて返事せるともやつく後に小七郎」。又、ごたつく。混雜する。出世瀧徳下「吾妻が客を切つたと町のもやつき」

ももやや 上氣して思慮のなくなる様。五人女二「かず」の通はせ文、清十郎ももやくとなりて、御心には従ひながら。夕霧阿波鳴渡中「皆に氣を付けられて、はやもやくと腹が立つ」。又もやつき。ごたつき。悶着。今宮心中上「おききも若い人の事、後日のもやもややかまし」

もらかす 貰はせる。與へる。人へつかはず。置土産二「三毛も男猫を見つけ、これさへ餘所へもらかしける」。曾我會稽山「毎度の無心合力、何貸せ彼貸せもらかせの騙り事」

もらふ 貰。廓の語。或客に買はれてゐる遊女を、更に他の客のため、或は遊

女自身の都合などのために暇を取ること。「借る」ともいふ。尙、「かし」及び「かす」の條を見よ。一代男六「正月二十五日まで、はらひも代らはず」。二代男二「太夫貰へ」と云へば、今日のお客はまだ深きお馴染にあらねばならぬよし。又、遊女が親方から暇を取るにもいふ。二代男三「親方に年の内を貰ひて」

もりかた 盛形。或形に盛る料理か。大矢數五「盛かたや第一のけんは梅の風、指身がのぼる花の瀧浪」。織留六「跡のしれる盛形の菜は喰ひもせりしに」

もりきりおだい 盛切御臺。御臺に盛つたきりの飯。「おだい」の條の参照。もりぐち 守口。河内國北河内郡、淀川昨の町名。守口大根、守口漬の原産地。もりつぶす 盛潰。酒を澤山盛つて飲ませて酔ひ倒れしめる。萬年草中「しめし合して酒肴、下では下人盛りつぶし」

もりどみやうじん 森戸明神。相模國三浦郡逗子と葉山との間にある明神。杜戸の明神。もりをけ 漏桶。雨漏りを受ける桶。俗つれ、四「雨もたまらぬ板廂、漏桶も限りあれば」

もろあぶみ 諸錠。兩方のあぶみ。馬を走らせるに、「諸錠をあはせる」、「諸錠を踏む」など用ひる。

もろいき 諸息。出る息と入る息と。呼吸。二十不孝。「その後親仁は諸息通ひ出で」。新可笑記三「呼びたてしに、諸息次第につのつて、左の脈ありし昔に替らず正氣になりぬ」

もろおり 諸織。兩筋縫合せた絲、即ち「もろいと」で織つた布。永代藏五「油屋絹の諸織をけんぼう染の紋付」

もろかが 諸加賀。兩加賀。諸織の加賀絹。最上等の加賀絹。一代女四「兩加賀半疋、紅の片袖龍門の帶」

もろかづら 諸葛。香料の名。一代男五「此の木は何と御開き候と申す。正しくもろかづらといふ。さても名譽の香聞きかな」

もろくわはろ 諸果報。兩方からの果報。金と女とに恵まれてゐること。欲と色との幸福。榮花咄四「この暮しにて美なる女房を持つて、この諸果報なれば、何か外には願ひ有るまじ」

もろこし 唐土。京都鳥原の名妓の名。榮花咄一「八文字屋の内儀御迎ひに、親仁の逢はるゝ太夫唐土、引舟一家の女

郎三十八人。大矢數一「門立のもろこし様に續くものは、初瀬の寺のかね持てこい」

**もろこしもち** 蜀黍餅。もろこしきびの粉で作つた餅。もろこしだんご。一代男六「秋の寢覺に、もろこし餅・酒など持たせて」

**もろごゑ** 諸聲。諸ともに發する聲。互に泣く聲。續けて呼ぶ聲。男色大鑑八「箱の中より吉三々々と諸聲のする事疑ひなく」

**もろしほ** 諸潮。最明寺殿百人以上藤上「片潮・諸潮・女夫潮」

**もろしらが** 諸白髮。ともしらが。夫婦ともに老いて白髮になること。借老。

**もろたづな** 諸手綱。馬の轡の左右につけた手綱。もろさしなは。「さしなは」と「ひきさしなは」と。重井筒中「内と外との引合ひの、心の駒の諸手綱」

**もろなみだ** 諸涙。諸袖に絞る涙。もろ共に泣く涙。國性爺「母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して、そゞろ涙にくれるが」

**もろは** 諸刃。兩刃。刀劍などの刃が、身の兩邊にあるもの。

**もろはく** 諸白。上等の酒。麴も米も、

も

よく精げた白米を用ひて醸造した酒。大下馬三「諸白二斗切に呑み干しける」

**もろはのみや** 兩羽の宮。山城國宇治郡山科の四宮神社。俗に兩羽大明神といふは、祭神天兒屋根命・天太玉命の兩神が、天孫のために棟梁の臣となり、左右の兩翼の如く奉仕した故であるといふ(和漢三才圖會)。蟬丸三「はら〜〜と、風にもろはの宮どころ、今日を限りとふし拜み」

**もろひねり** 諸捻。刀の柄絲の巻きやう。女腹切上「刀屋の半七と深い中ごとと正銘の、互の誠とぎ入れて、縮めた心のもろひねり」

**もろまゆ** 諸眉。諸眉烏帽子の略。烏帽子の眉(前額の中央に當る部分の菱形)が左右兩面になつてゐるもの。源氏烏帽子折三「くしがたをいか〜と、もろまゆ付けて左折り」

**もろなみ** 諸醜。醜したまゝで、糟を漉さない酒又は醬油。俗つれ〜五「初鮭に諸味をかけて出る。傾城酒呑童子二「酒は醜の手づくり」

**もろむすび** 諸結。緒の結び方。右端を左の下に廻して右に返し輪を作つておき、左端を廻してその輪に引通して結

ぶもの。をとこむすび(男結)。  
**もろわちがひ** 諸輪違。棒(武具)の術の名。雪女五枚羽子板下「打つてかゝれば藤内五郎、棒の祕術の水車(中略)、片手輪ちがひ諸輪ちがひ」

**もんぐし** 紋櫛。定紋をつけた櫛。一代女五「會ひもせぬ太夫・天神の紋櫛など持つこと、心恥しき事なれども」

**もんさく** 文作。即座にをかした文句を作ること。即興の滑稽言葉。一代男七「興に乗じて、まだ所望々々といふ程に後は大道に出て、もんさく、何れか腰をよらざるはなし」。永代藏六「文作には神樂・願西もはだし」

**もんさくけいづ** 文作系圖。戯作系圖。でために作つた系圖。雪女五枚羽子板「もんさく系圖」

**文作の三味線** 歌詞を文作しながら、それを三味線に合せて唄ふこと。即興唄の三味線にかけること。置土産五「文作の三味線よくひき申し候」。男色大鑑八「文作の三味線ひきかけ」

**もんさし** 門鎖。かきさし。門をしめること。閉門。二代男「鳥原の門さしは、何時の事と申す」

**もんち** 反對であること。あべこべなさ

もや

ま。「もんどりうつ」などいふ。「もんどり」と關係あるか。或は「門地」で、他家と格式作法を異にする義に據るか。百日曾我「晝まで寝るを作法にて、よそともんちの揚屋町、くつわの亭主下まで、それを習ひに朝寝する」もんぢやうちん 紋提燈。定紋をつけた提燈。男色大鑑六「紋提燈に和光の陰間子は知らず」

もんつきかがみ 紋付鑑。家々の定紋を一覧にしたものであらう。永代藏一「近代江戸靜にして松はかはらず常盤橋、本町吳服所京の出現世紋付鑑にあらはし、柵守手代それ〴〵の得意の御屋敷へ出入ともかせぎに勵みあひ」

もんどづかさ 主水司。宮中の役所。樽。水・氷室などのことを司る所。もひとりをつかさ。もんどのつかさ。傾城酒呑童子ニ「主水司の初米、佛の闍伽と碎かれて」

紋なしの衣 法衣のこと。墨染の衣。紋様ない故の稱。武道傳來記ニ「一生夫妻のかたらひ捨てて、身を紋なしの衣になし」もんば 孟八郎。愚人を罵つていふ。もんび 紋目。廓の詞。ものび(物目)に

同じ。色道大鏡ニ「紋目。物日の事なり。家々の紋のやうに定まりたる事なるに依つて紋目といふ」。洞房語函にも、五節句を五所の紋になぞらへていふ説を述べてゐるが、「ものび」の音便とする説に従ふべきである。一代男七「紋目缺かさぬほどの大盡」。雙生隅田川三「あすは星の祭ぢや、祭は紋目、紋日々々をかぞへ〜て」

もんまう 蚊虻。文盲。野暮で、たしなみのないさま。無造作。殺風景。一代男五「ふと布の花色羽織に、さしわたし四寸五分計りの紋に、鎌と輪と、ぬの字をつけて、蚊虻なる出立、わが身ながら、是は〜醜い物」

もんやうじ 紋楊枝。芝居の役者などの定紋をつけた楊枝。兩吟一日千句「さく花の都のつてに紋楊枝、どこやら花車な舞臺子が春」。新小夜嵐風語上「それ〴〵の君の紋楊枝を持つことのやさし」

もんら 紋羅。織模樣のある羅。あやのあるすざぬ。永代藏五「白き紋羅のひとつかへし」。新可笑記ニ「緋の袴こしだかに紋羅のかたぎぬ」。紋縞。もんりふじぶん 門立時分。門立ちする

時刻。夕景か。「かどぢち」の條參照。椀久一世物語上「歩行にてやう〜南の端の橋わたる時、乳守女郎門立(もんりふ)時分にて、濱邊の松陰に人待ち顔なるを見て」

わ

やあゑい 力を入れて動作する時の掛けごゑ。釋迦如來誕生會ニ「頤を押上げ、やあゑいと首掻きおとし」。薩摩歌甲「いかうふらつく、やあゑいと手枕すれば」

やいと 灸。きう。灸點。出世景清四「あすからはおとなしう月代も刺り申さん、灸をもすゑませう」

やいとぎやう 灸饗。灸を据ゑる小兒などに、褒美として菓子など與へること。灸點の後にする慰勞の饗應。やいとげ。灸行。今宮心中中「なんと灸行いひ付けは無かつたか。冷麥か素麵か、なまなか茶漬位なら、いつそ戻つて寢てくれう」やいとのはば 灸を据ゑるとき衣服の形をいふか。「はば」は小兒語のべ〜(衣

服)の轉か。今宮心中「そんなら爰でかう向いて(中略)、小蒲團敷けと、捨くるりと灸のぼよ、前を後に目は見えず、何をせうとも願いて」

やいとばし 灸箸。灸をすゑる時、灸をはさむ箸。二十不孝三「人皆花車に世智賢く、灸ばしにて目を突く如く、その忙しさ」

やいばわたし 刃渡。刀屋の用語。こちらへあげた刀剣を、註文主に渡すこと。その時には註文主から祝儀が出る。女腹切下「定めてお悦びに刃渡しの御祝儀、お振舞有るさうな。定めし酔うて戻られう」

やうがうせき 影向石。神佛の本體が應現し給うた事蹟の標石。

やうきおしろい 楊貴妃白粉。白粉の名。楊貴妃が病んで色が青黒くなつた時、仙人が来て製法を教へたといふ(人倫訓蒙圖彙)傳説に據つた名。男色大鑑六「銘々の楊貴妃おしろい有りがたし」

やうきひざくら 楊貴妃櫻。八重櫻の一品種。昔、大和國奈良の僧玄宗の愛した櫻である故に名づけるといふ。

楊貴妃の匂粉 「やうきひおしろい」に同

じ。織留五「一度の大願に楊貴妃の匂ひ粉をぬり」

やうきやう 楊香。支那二十四孝子の一人。晋の人。十四歳の時父と共に田に行き、父が虎に捕へられたので、身に寸鐵をも帶びず、たゞ一向に虎に躍りかゝつてその頸を引締め、父の害を救うたといふ。

やうけ 家請。家を賃借する時の請人。たなうけ。特に借家の保證人。博多小女郎中「惣七殿には口合家請もある仁」やうじやうざしき 養生座敷。養生のために逗留する座敷。出養生のための室。一代女「西國方の女中、川原町に養生座敷を借りて」

やうすもの 様子者。様子の好い者。見るべき様子のある者。姿の美しい人。大矢數二「天乙女ことに勝れて様子者、通ひ男め布引の漣」

やうちん 屋内。家のなか。家内の人達。釋迦如来誕生會四「毎日頭陀にお出なれ共、屋内が通りやくとて、叩かぬ計りに追出す」

やうちん 永沈。地獄のこと。もと淨土雙六の用語、一度落ちれば再び出ることが出来ない處の稱。

やうやうとして 漸くにして。やうく。釋迦如来誕生會四「やうくとして置曇沙彌起き直り給へども」

やおち 矢落。射た矢の落ちる所、的の下部。天神記「矢落には錦の幔幕」

やかず 矢數。射た矢の數。特に、遠い距離の的に、弓勢の續く限り相競つて矢を射ること。とほしや(通矢)の競技。競矢。おほやかず。物種集上「金のゑぼしや又金の幣、矢數とて都へ上り給ひしに」。武道傳來記「三十三間に矢數の武勇を思はれ」。矢數俳諧の略。大矢數「天下矢數二度の大願四千句也」

やかずさけ 矢數酒。滿を引いてしきりに飲む酒といふ意の戲語。狸々飲みにする酒。二十不孝五「三十三間の矢數酒のんどを通る勢」

やかずはいかい 矢數俳諧。多數の句を想のある限り、矢數けて吟ずること。大矢數序「比は延寶八年庚申の年、生玉に大暮打たせ、一日四千句の矢數俳諧を吟ず。當地宗匠親疎ともに連なり、内五人の差合見、八人の筆と、その外名を得るも得ぬも稻麻の如くこぞり」

やかた 屋形。(→身分ある人の邸宅。館。

や

たち。(一)屋形船の略。(二)牛車の車體の屋根。

**やかたじろ** 館城。館(邸宅)と城とを兼ねたもの。居城。

**やかたぶね** 屋形船。屋形に擬して、屋根・戸障子など設けた遊山船。御座船。

屋根船。樓船。

**やかたまち** 屋形町。貴人邸宅の立ちつづいた町。屋敷町。武家町。武道傳來記三「奥方の病中に重寶なる者として、屋形町心やすく出入仕る」

**やかたもん** 屋形紋。その家の定紋。又定紋を表はした模様。日本振袖始三「屋形紋の錦に悲しく、其身は床几に悠々と」

**やがら** 矢矧。矢柄。魚名。硬鱗類の一種。體圓く細長くうす赤色。尾鰭の間から赤色の絲状のものを出す。あはがら。懷硯三「山井神原などいへる宿に、矢矧と名に付し、目馴れぬ魚もをかしく」

**やからあみ** ヤがらあみ(矢柄網)で、前條の「やがら」を捕る網であらう。二代男三「茂りの苜添へに立つ浪は、やから網をうつ音のみ」

**やがらせめ** 矢柄責。拷問の一手段。矢

柄(矢の幹)で打ち叩いて責めること。  
**やかん** 野干。きつね(狐)の異名。射干。傾城反魂香中「さもあれ、狸野干の業も有る」

**やき** 八寸。馬のたけ、四尺八寸のこと。馬の丈は四尺を定尺として、それ以上を一寸(き)二寸(き)と數へる。曾我會稽山三「秘藏の名馬(中略)、その丈八寸餘り。肉十分にふし高く」

**やきいひ** 焼飯。握飯の表面を焼きこがしたものの。やきめし。

**やきいんあみがさ** 焼印編笠。焼印の押してある編笠。編笠茶屋で貸す編笠。忍び編笠。榮花咄「浮世頭巾を取つて捨て、焼印の大編笠を着せ」。胸算用「藁鳥も不斷焼印の大編笠を見つけて、これも供なしの大盡と思ひ」

**やきがしら** 焼頭。魚などの頭を焼くこと。又、その焼いた頭。櫻陰比事二「近江鮒の焼頭せし所を」

**焼鳥に綜緒(謔)** 用心の上にも用心せよ。綜緒(へ)をば、繰りへた絲の紐。焼鳥にも、それをつけて飛ばさぬやうにせよの義。基盤太平記「やき鳥にへを、用心に飽きはなぬ。拍子木をたやさず、替りくゝに寝ずの番」

**やきみそ** 焼味噌。炙り焼いた味噌。一代男七「眞柴折りくべ、焼味噌おかしく」

**やきめし** 焼飯。「やきいひ」に同じ。大下馬三「焼飯拵へまづ犬どもに近寄り」

**やきもちぢやや** 焼餅茶屋。焼餅など賣る茶見世。孕常盤三「戀塚を、隣に住めば藁葺の、焼餅茶屋の妹背まで、色を酌み茶の女夫あひ」

**やきもちひ** やきもち(焼餅)のこと。

**やぎり** 矢切。しのびがへし。扉。門などの上に、先を尖らせた竹・木・釘など並べて、人の忍び入るを防ぐもの。男色大鑑三「柏の梢、矢切を飛び越す面影を見付け」。雪女五枚羽子板下「入道、門の矢切に立つて」

**やくうま** 役馬。おかみのために、用立てる馬。公役に出す馬。又、夫役に徴される馬方。

**やくおとし** 厄落。節分の夜に行はれた一種の迷信行為。厄年の人が、厄難を免れるためとして、家を出て身につけたものを故意に途中に落して顧みず、乞食などに拾はせること。永代藏五「我がが主人は(中略)、さる大名御厄落しの金子四百三十兩拾ひしより、

段々大銀持になられしとかや。厄拂。  
やくおん やくをん(藥園)であらう。藥  
草を栽培する園。大句數上「やくおんは  
式三番の翁草、彌右衛門一代庭のきれ  
いさ」

やくぎ 役義。役儀。やくめ。任務。

やくしや 役者。(一)俳優。(二)人形つかひ。  
大下馬四「人形も一つ」細工人心を  
盡して拵へ、役者も銘々の魂入りて、  
源平西東に立ちわかかれ、大軍の所をつ  
かひけるほどに」

やくしやこども 役者子供。舞臺子。芝  
居子。若衆などの類語。

やくしやものまね 役者物真似。役者の  
聲色身振を真似ること。油地獄下「口た  
だおくは恥らしく、役者物真似。地の  
物真似、小唄。淨瑠璃。口てんがう」

やくじんまらひ 厄神拂。疫病神を拂ひ  
のけること。

やくじんまらひ 厄神參。正月十九日に  
山城國男山八幡宮の境内にある疫病神  
に參詣して、その年の災厄を拂ふこと。  
やくじんまらひ。一代男八「末社厄神參  
りの事(目録)、岩清水に詣でて、毎日つ  
く空言を神ぞしるらん、厄はらひにい  
ざ思ひ立ち、明日は十九日」

や

やくたい 次條の略か。やくに立たぬこ  
と。邪魔されること。迷惑に感ずること。  
曾根崎心中「走り出でんと思へど  
も、おうへには亭主夫婦、上り口に料  
理人、庭では下女がやくたいの、目が  
繁ければ左もならず」

やくたいなし 益體無し。埒がない。し  
まりない。たわいない。女腹切上「生き  
る死ぬるの場になりても、やくたいも  
ない氣を持つまいぞ」

やくたう 藥湯。(一)煎じ藥。湯藥。(二)く  
すり湯。藥風呂。

やくだたり 厄祟。厄年に祟られること。  
厄難にかゝること。曾根崎心中道行「誠  
に今歳は此方様も、二十五歳の厄の年、  
妾も十九の厄年とて、思ひ合うたる厄  
祟り」

やくはらひ 厄赦。厄拂。(一)身の厄を拂  
ふこと。疫病神に參ること。やくじん  
まらひ。或は、やくおとし。その各條  
を見よ。胸算用「厄拂ひの包み錢」。  
(二)大晦日又は節分の夜などに、滑稽な  
文句を唱へて人家の門に立ち、厄を拂  
ふと稱して金品を乞ひ歩くもの。胸  
算用「家毎に餅に錢添へて取らせけ  
る、これを思ふに大阪などにて厄拂に

やくはらひ 厄赦。厄拂。(一)身の厄を拂  
ふこと。疫病神に參ること。やくじん  
まらひ。或は、やくおとし。その各條  
を見よ。胸算用「厄拂ひの包み錢」。  
(二)大晦日又は節分の夜などに、滑稽な  
文句を唱へて人家の門に立ち、厄を拂  
ふと稱して金品を乞ひ歩くもの。胸  
算用「家毎に餅に錢添へて取らせけ  
る、これを思ふに大阪などにて厄拂に

同じ

やくみ 藥味。(一)藥品。藥用の品類。(二)  
食物に添へて用ひる香料の類。

やぐら 櫓。相撲四十八手の一。やぐら  
なげ。

やぐらだいこ 櫓太鼓。櫓の上で打つ太  
鼓。相撲場又は芝居で、人寄せなどの  
ために打つ太鼓。矢倉太鼓。一代男三  
「遊かなる里ばなれに矢倉太鼓の聞え  
ける、是は藤村一角が旅芝居と聲立て  
呼びぬ」

やくりき 藥力。藥の効能。藥のききめ。

やくわらばく 藥王木。藥王樹。藥品中  
の最たる藥王を採る木。

やくわんごゑ 藥鑼聲。がら／＼とした  
騒しい聲。石原藥鑼の聲。傾城酒吞童  
子三「遣手の鍋が藥鑼聲、煮えかへつた  
る顔付して」

やけつまど 燒妻戸。比叡山法性房の妻  
戸。燒痕があるのでいふ。菅原道眞の  
靈が、この坊に現はれて、僧正の參内  
に就いて拒んだが聽かれず、赫怒して  
佛前の栢榴を口に吐いて吐くと、それが  
忽ち火焰となつて燒痕を残したのであ  
るといふ。

燒面(やけつら) 火に懲りず (諺)「やけ

ど火に懲りず」ともいふ。曾ての失敗に懲りず、同じ事を繰り返す譬。

やけふんべつ 總分別。自暴自棄した後の思慮。やけになつたあげくの思案。

やげん 薬研。漢方の製薬に用ひる金屬製具。船のやうな形で、細長がく、凹くなつてゐる。

これに薬品を入れて、扁圓状の車輪のやうなもの(薬研車)の軸を廻し、押しすつて碎く。くすりおろし。



やげんつば 薬研鏝。薬研車(前條参照)のやうに圓くて、周圍の尖つたつば。

薩摩歌上「腰に一本薬研鏝」

やげんばば 薬研婆。子をおろす婆といふ意の戯語。薬研がよく薬種をおろして粉にするのでいふ。傾城島原蛙合戦「大きな腹(中略)、この指二本でやるすほどに、けるほどに、薬研ば」と申します」

やこ 野狐。野狐禪の略。少しばかり禪學を修めたのみで、眞の悟りに入らぬいのに、自らは悟つた風をするもの。なまぜん。

やこゑのとり 八聲鳥。曉に屢く鳴く雞。百日曾我「とぶらひかはす八聲のと

り)、野寺の鐘のひびきまで」  
やさか 八坂。(地名)京東山八坂(祇園)神社附近の遊里。胸算用「表の若い者どもも、八坂へ出かくる無分別をやめ」

やさがた 八坂方。城方。京都八坂に住んで居た盲人城元(じやうげん)を祖とする琵琶法師の一派。如一流を一方といふに對する。大山・妙聞・櫻の諸派に分れ、その名に城を用ひた。下例は、この「やさがた」と、優形(やさがた)とをかけていふ。権久一世物語下

「彼の女法師やさがたなる聲して、この邊に妙清と云へる人の庵はと尋ね」

やさがた 優形。形又は氣だて、ふるまひなどの、品よくおとなしやかなこと。

やさしを 優男。やさしい男。やさし男。やさがた男。

やさびと 優人。やさしい人。風流な人。やさもの。

やさめ 風流女。優女。やさをんな。容色の美しい女。男色大鑑「近江國筑摩の祭を見しに、この里の風流女(やさめ)縁なくて去られ」権久一世物語下

「上町に名のありし風流女に久米と云へるを更に又呼び入れ」

やさもの 優者。(一)やさしい人。(二)うかれめ。遊女の類。一代男「この宿に口きくやさ者はと品定めける。鹿・山吹・みつとてこの三人(中略)すさみにも歌ふほどの女とて」

やし 矢籠。矢を盛る器。堀川波鼓中「弓に靱に矢籠、矢箱、二重の覆ひさせながら」

やしきがた 屋敷方。武家方。町方の對語。

やしきまち 屋敷町。武家の邸宅の立ちつどいた町。武家屋敷町。屋形町。一代男「數百人連れだうて屋敷町を行くその中によきもの見立て」

やしきみがき 屋敷磨。屋敷づとめをして、容色をつくること。

やしきもやう 屋敷模様。屋敷方ごのみの模様。胸算用五「屋敷模様の散らし形」

やしなかず 「養はず」の訛。養はせる。養はしめる。養育させる。織留六「子はけしからず泣きやまぬに(中略)、それ程の乳なればよき所へ勤め、その銀付けて養なかつて」

やしなはしどころ 養はせる所。養育をさせる所。



やしはご 玄孫。やしやご。自分から數

へて第五世。曾孫の子。松風村雨東帶鑑三「其の子・その孫・彦・やしは子・某は六代の鶴の孫」

やしほもみぢ 八鹽紅葉。八入槭樹。もみぢの一品種。春の芽の出たてに赤く美しく、秋に至つて綠色に變るもの。

やしほ。榮花咄四「花は白菊、やしほ紅葉の箱植」

やしやく 野錫。野釋。僧が自らをいふ卑稱。愚僧。野衲。用明天皇職人鑑三

「そもくやしやくは、この尾上の松の下蔭に、一夏を送る道心なるが」

やしよく 夜食。(→)一日二食の時、夜間別に食事すること。(今の夜食と異なる)。(→)賣春婦。

やしよめ やさめ(優女)の轉といふ。萬歳の歌の繰りかへしにいふ。もと、蓮如上人作といふ守歌の發語。戀八卦柱曆下「やしよめやしよめ、京の町のやしよめ、うつたる物はやしよめ、うつたる物は何々」

やしららぶし 彌四郎節。晝夜用心記六「白女(中略)妹女郎に和國とて、情深うてかしこく、酒もなり、彌四郎節よく、淨瑠璃は虎屋喜源までを似せ」

やじり 矢尻。(→)矢柄の先につけて射通すに用ひる具。鐵。(→)矢先の腕まへ。

射る技倆。曾我虎磨下「小藤太が矢じりの細かき、これ見給へ、なむ八幡」

やじり 家尻。家後。家藏などの後の方。女腹切中「いつそ手をよう巾着か屋尻切れ」

やじりきり 家尻切。家尻を切つて入る盗人。冥途飛脚中「巾着切から家尻切、果ては見切」。又、人を罵る語。わるもの。わる。人でなし。

やじりごま 鐵ごま。置土産五「楊弓の鐵ごまに、一年を三貫目に盛りつめての世帯、昔思ひ出して何か面白かるべし」

やす (助動詞)「ます」の轉訛。生玉心中上「大方は四口までと私が請合ひおきやすした」

やすかた 安方。「うとうやすかた」の略。やすかたのと。夕霧阿波鳴渡下「うたふ聲にも血の涙、子は安方の囀りや」

やすくめ 矢疎。矢を多く射かけて動きの取れぬやうにすること。吉野郡女楠三「某、矢すくめにして討伏せ首取つて候」

彌介の鼓 萬文反古四「彌介の鼓の筒、孫六の大脇指」

やすだいじ 易大事。たやすいやうに見えて實は大切なこと。堀川波鼓上「申してもやす大事、拙者は他言致すまいが」

やすぢがけ 八筋懸。三味線の類で、絃を八筋かけたものであるといふ。置土産五「さる御方の隠し藝に、八筋懸を忍駒にて引かせられしが」

やすつな 安綱。伯耆國大原刀匠の祖。大同年間の人。或は云ふ、横瀬三郎太夫と稱し、名刀鬼丸の作者であると。又云ふ、大原太郎太夫と稱し、天應弘仁年間の人で、渡邊綱が鬼の手を斬つた太刀などの作者であると。なほ傳へる所區々である。

やすてら 安寺。大矢數四「自墮落な烟の末の荳若盆、はし局をばやす寺といふ」

やすのぶ 安信。備前國長船の刀匠。なほ山城、越後、薩摩、大隅、豊後その他の地にも同名の刀匠があつた。

やすばいた 安賣女。下等の賣笑婦。賣女を卑めていふ。物種集上「やす賣女是を娘にも譬へたり、つけざしの酒糟も残さず」

やすぶ 安分。安い歩合。ぶあひの低廉なこと。割やす。出世瀧徳上「詩出された吾妻とやら、どうなる事ぞ。あつた

や

らもの、安分でこつちへ貰ひたい」  
**やすより** 安頼。播磨國の刀匠。正元年間の人。或は云ふ、寛元頃の人で本國は大和、播磨粟粟に住し、權守と稱したと。

**やすらひばな** 也須良日花。山城國高尾の法華會が障壁なく行はれることを祈るために、三月十日に京都西賀茂附近の農民が行ふ祭事。一説に、花鎮祭(はなしづめまつり)の遺風といひ、又、紫野今宮社に疫病神を祭るためといひ或は祇園會の餘風ともいふ。この日午の刻から各村の農民相寄り、赤毛を頭に被り、赤補襦を着、鉦太鼓を持つもの四人、同じ姿に烏帽子を着け、羯鼓を持つ兒二人に、花籠を載せた大絹傘を差しかけ、その他數十人の銘々が、烏帽子素袍姿に刀を荷ひ扇をかざしつ

つ従ひ、「やすらひ花よ、安らに咲いた云々」と歌ひ踊り囃しつゝ、今宮神社に詣でる。やすらひ花よの歌は寂蓮法師の作だといふ。傾城酒吞童子<sup>三</sup>「過ぎし彌生やすらひ花の歸るさ、白髮頭に赤ら顔、浪人らしき親仁めが」。やすらひまつり。

**やすりのとう** 矢搦藤。弓のにぎりの上

(やすり)に捲きつけた藤。  
**やすみてんじん** 安居天神。大阪新清水の南にある。廿二社巡りの第十二番。安井天神。

**やすみのふち** 安井の藤。京都東山松原通り上ルにある安井御門跡の境内にある藤。五人女<sup>三</sup>「春深くなりて、安井の藤今を紫の雲の如く」

**やせが** 瘦我。瘦我慢の略。  
**やせがくし** 瘦隠。馬の尻におほひかけるもの。だおひ(駄負)。

**やぜん** 夜前。前夜。昨夜。一代男<sup>七</sup>「夜前の行燈消えがたてに」  
**やた** 弱點。難點。わるい癖。生玉心中中「エ、譯の悪いお人ぢやのう。(中略)日比やだのあるこの嘉平次、さぞ逃げた走つたと評判でござらう」

**やたい** 家體。屋臺。祭禮などの時、踊舞臺とする小さい家の形したものを。又、芝居の舞臺。男色大鑑<sup>五</sup>「風吹けば沖つしら聲にて歌ひ出して、家體の御簾を明けての面影(中略)、十四の春よりも都の舞臺を踏み初め」。又、小家を罵つていふ。

**やたい** やてい(野體)に同じ。  
**彌陀次郎が跡** 山城國西粟生野に在る、

報國山光明寺の開基、宇都宮蓮生房、俗名「彌三郎」の事に據つていふ。彌三郎字は頼綱。源頼朝が頼綱の謀叛の風説を聞き追討の使を下さうとしたので彼は北條義時によつてその無實の旨を陳じ、髻を切つて蓮生房と改名し、源空上人に法を聞き、後に一寺を建立するに至つたといふ(和漢三才圖會)。永代藏<sup>五</sup>「彌陀次郎が跡たれて發心もならざれば」

**矢立の杉** 相模國箱根路にある杉。建久四年、曾我兄弟が親の復讐のために富士の狩倉に行く途中、この杉に矢を射立てて弓勢を試みたといふ。尙、この他にも例があつて、一般に武士が出陣に際して、山の立木に矢を射立てる事は古來の遺風である。萬葉集卷<sup>三</sup>、笠金村の鹽津山に於ける作歌「丈夫の弓末ふり起し射つる矢を後見ん人は語りつぐがね」。後には戰陣の吉凶を占ひ、或は山神への祈願の心など籠めて射られたのであらう。更に轉じて、願ひごとの縁に用ひる。曾我五人兄弟<sup>三</sup>「身も心も抛つて可愛がりたき願ひにて、神にさゝぐる楊弓の矢立の杉よ杉ならばやりてやよそに洩れ聞かん」

**やちうま** 強くあばれるくせのある馬。

やんちや馬、だまをこねる馬の義。又、「おやちうま」の略で、父馬即ち牡馬であるともいふ。兩吟一日千句「下り坂には荷とるやち馬、月影やもそつと右へより給へ」

**やつかいしつかい** 厄介悉皆（やくかいしつかい）。厄介を強めていふ。やつかいいもつかい」などの類。二枚繪草紙上「親里の合力なんどと申して、やつかいしつかいむくりこくり」

**やつがしら** 八ツ頭。時刻を言ふ。八つ時の上刻。午前又は午後の二時から四十分まで。曾我會稽山門「けふ晝過八つがしら」

**やつぎ** 家繼。家をつぐこと。又、その人。相續人。あとつぎ。二代男「九千貫家繼に譲りにし」

**やつこあたま** 奴頭。奴の結ぶ髪のまま。月代（さかやき）を深く廣く剃り込み、兩鬢と後頂に残した毛で短く鬪に結うたもの。又、その鬘。重井筒上「盆に買ったる踊の鬘、奴天窓をふりながら」

**やつこひげ** 奴髭。奴の生やす髭。鎌のやうに上にはねた髭。かまひげ。

**やつし** 僧。やつしがた・やつしげい・や

つしごとなどの略。油地獄上「やつしは甚左衛門」

**やつしがき** 僧書。字畫を省き又はくづして書くこと。又、その書いたもの。

**やつしがた** 僧形。芝居で遊治郎・やさきとこななどに扮する役。特に、その名人。

**やつしげい** 僧藝。「やつしがた」の演ずる藝。俗つれん「五」上方に坂田藤十郎と申しまして、やつし藝の名人あれども」

**やつしごと** 僧事。前條に同じ。西鶴五百韻「やつし事萬能丸を花にきて、ころは彌生の未の棧敷」

**やつす** 僧。鬘。①字畫などを省き、又はくづす。略する。②くつろぐ。打ちとける。一代男セ「こと過ぎて跡はやつして亂れ酒、いつにかはりての慰み」。

③その風をまねる。うつす。永代藏「夏の夕涼み女宗の花軍をやつし、扇軍とて數多の美女を左右に分け」

**やつち** 八乳。乳房のあるのが三味線に張つて珍重される。松風村雨東帶鏝「三味線の皮八乳にも、負けはいたしませぬ」

**やつちや** 「おつと來た」などいふ意を示す掛聲。やつてやらう、してやらうなどの約か。博多小女郎上「幸府の源様が來て御ざる、見廻うたか。やつちや一角せしめんと、人の巾著あてにして」

**やつちややつちや** 芝居の役者などを褒める嘩し聲。やつた〜。やんや〜。

**油地獄上**「日本」の名人様やつちややつちやと譽める歌より譽めさする、金ぞ諸藝の上手なる」

**やつはしけんぎやう** 八橋檢校。筑紫筆及び三味線の流儀八橋流の祖、八橋城談のこと。陸奥岩城の人。少時江戸に出て三絃を學び勾當となり、山住姓を胃したが、檢校となつてから遂に八橋と改めた。又、筆は江戸に技を授けてゐた筑後善導寺の僧法水に學び、後、肥前に赴き玄恕について其の蘊奥を極めた。所謂筑紫筆である。更に東歸して、伊勢、源氏の詞章を探つて多く新曲を作つた。最後に京都に上り、六角西に住して、盛に業を授け、門人多く集り、以後筆曲に諸流が生じたが、一として八橋を祖述しないものはない。貞享二年六月死、年七十二。黒谷光明寺に葬る。

**やつば** 矢坪。矢で狙ひ射るとこ

る。的中せしめようとするところ。やどころ。武道傳來記六「矢坪御望次第に射落して見せん」

やつまと 八的。騎射の一。花扇・小刀・楊枝などの的を八箇所に立てて射ることであらうといふ。曾我虎磨上「笠懸八的など御覽あるべきか」

やつめかぶら 八日鎗。鎗矢の鎗に多くの日(八)をつけたもの。やつめのかぶら。やつめのかぶらや。

やつめのあらんづ 八日草鞋(やつめわらんぢ)乳の八つあるわらんぢ。八葉蓮華にかたどつたものであるといふ。修験者などが用ひる。孕常盤ニ「頭陀の袋・麻衣、鐵鉢を御手に据ゑ、八ツ目の草鞋召さるれば、二人の内侍鳩の杖」

やつめあらんぢ 前條を見よ。

やつもん 八つ門。扉などに於て、八つ時に開けることに定めてある門。織留「丹波口にて夜半の鐘、とかうするまに八つ門明きて、宵より夢見し客、名残惜しきは」。よつもん(四つ門)の條参照。

やてい 野體。粗野な風。野暮くさい様子。ぶいき。一代男五「忍べばこそ供をも連れず、風俗も野體に出でしに」と

やといど 雇人(やとひど)。やとひびと。博多小女郎上「血が走るいろ、涙が出るいろ、頭抱へてやといどにかろわれ、小宿さなへ往んだがの」

やどおり 宿下。奉公人などが、暇を乞うて親もと又は周旋人・保證人などの所へ歸ること。やどさがり。一代女四「季中に病作りて御暇請ひて、本郷六丁目の裏店へ宿下をして」

やどこや 宿小屋。宿と小屋と。又、宿とする小屋。小屋のやうなみすばらしい家。

やとこぞめ 八所染。男色大鑑八「白らしやの羽織に小鳥づくしの唐衣の裏をつけ、八所染の胸紐解きて、白糸の長柄ぬき出し」

やどちや 宿茶。家を借りた人が、借家の披露として、相借家の人々に酒など饗應すること。引越しのふるまひ。

やどばひり 宿這入。家庭を持つこと。身代を持つこと。宿を得てそこへ入る義。新永代藏三「相應の者を女房に持ち宿ばひりの初め」

やとひかか 雇喚。雇つておく喚。日雇などの喚。人家に雇はれる下賤の人妻。やとひこしもと 雇腰元。一時雇つてお

く腰元。雇人。「やとひびと」の約。「やといど」の條参照。

やどふだ 宿札。その宿屋に宿つてゐることを示すための名札。宿泊者の姓名を記したふだ。松風村雨東帶鑑三「旅の人(中略)、宿札ちらりと見て」。おのれの家であることを示す札。門札。標札。

やどほり 矢通。矢場で、矢の通る所。射手の位置と築(あづち)との間。

やとまりかなもの 矢留金物。鑑の胸板の金具。吉野都女楠三「鑑引きよせつくづく見て、矢留り金物・押付板」。矢止金物。

やどめ 矢留。矢を射ることを止めること。武家義理物語五「江州姉川合戦、永祿十二年六月二十六日に、敵味方暫く矢留をして、つかれをはらす時」

やどや 宿屋。女郎を呼んで遊ぶ處(吉原失墜)。揚屋。やど。色道大鑑「宿屋。同じく擧屋の事也。おかしき名目なれども、是も擧屋にむかひて用捨の詞也。又、擧亭と云ふ」

やどやいり 宿屋入。遊女が宿屋に入ること。あげやいり。吉野忠信三「道中は

繰出しの浮き歩み、宿屋入の飛び足」  
**やどわり** 宿割。多人數泊るときに、それぞれ宿屋を割りあてること。宿泊者の割りつけ。

**やなぎうを** 柳魚。はえ(鮓)の一種、柳鮓のことか。男色大鑑八「吸物は背から六色か、今一度桂川の柳魚に松菜をあしらひて蓋茶碗にて輕う出せ」

**やなぎがみ** 柳髪。美しい髪。綠髪。油地獄上「柳髪やなぎ髪とろりとせいも種油」。柳の髪。

**やなぎごし** 柳腰。柳の枝のやうにしなやかな腰。りうえう。前條文例を見よ。

**柳煤竹にやる** 柳煤竹は緑がかつた染色の名。その柳とかけて、しなやかに逆はずに振舞ふ義。重井筒上「お内儀は結構者、柳煤竹にやつてぢやが」

**やなぎたけ** 柳茸。男色大鑑六「精進かたく、焼灸、柳茸の煮しめ物」

**柳の五つ衣** 柳がさねの五衣。五衣の何れも、表白裏青で、これに紅の單(ひと)を著ること。

**柳の枝** 正月の餅花をつけるに用ひる。もち(餅花)の條を見よ。

**柳の髪** 柳の葉のついたまゝを髪飾りとしたもの。三月の節句の嘉儀として

や

用ひた。

柳の髪。「やなぎがみ」に同じ。  
**柳の九市** 太鼓持の名か。二代男「柳の九市が内證論、小堀法師がまさり草」

**やなぎはえ** 柳鮓。鮓の一種。形が柳の葉に似てゐるので稱するといふ。

**柳は緑、花は紅** (諺) 世の中のことには、それぞれ自然に定つた習はしがある。又、自然はさまゝである。文武五人男四「柳はみどり花は紅、さまゝ」の世のならはしこそ定めなき(四天王くまの道行)」

**やなぎはら** 柳原。(一)京都洛東。八條北七條南、高倉東鴨川に至る地。(二)江戸神田川に寄つた地の汎稱。

**やなぎぶろ** 柳風呂。榮花咄二「播磨室の色港にさつと著きける、こゝに一夜はかゝる情とて、亂るゝ柳風呂に入りて」

**やなぎまち** 柳町。筑前國博多の遊女町。一代男五「都より飛梅、筑前の柳町を見にまかりぬ。昔は博多小女郎と申して、かぶき者ありける」

**やなぎもと** 柳本。大和國磯城郡の内。戦國の頃、柳本氏の據つた處。

**やなり** 家鳴。家が鳴り響くこと。家の鳴動。

**やにちやばう** やんちやばう。手に負へない小兒。「やんちや」を参照。富士石「いらたか數珠西瓜のさねややにちや坊」

**屋根越しの天の川** (諺) 遠くて話が届かぬといふ譬。

屋根の輪 板葺屋根の押へに載せた石が轉び落ちないやうに用ひる輪。永代藏「取葺の屋根の輪」。尙、「とりぶき」の條を参照。

**やはす** 矢管。武道傳來記八「草ふかき宿ながら、火燧に袖の紫ぶとんをかけて眞綿引き、矢管のもとに伽羅割の鈍などのありしに、何とやら此女奥ゆかしく」

**やばたい** 野馬臺。ヤマト(日本)の漢字譯。

**やはたごばう** 八幡牛蒡。山城國八幡産の牛蒡。萬文反古「八幡牛蒡三把」。丹波與作中「あの旅人は京の八幡の生れやら、足にごんばの毛がむくくじや」

**やはたのうまお** 八幡の馬下。「うまおり」の條を見よ。

**やはら** 柔。じうじゆつ(柔術)。柔道。物種集上「取とめて其時おれが居たれやこそ、よしつねすこしやはらはら覺えて」

やはらこし やはらかし(柔)に同じ。やはらかい。やつこい。 軀山姥三 烟草烟草と待宵の、松葉の烟草のやはらこき、女中仲間ぞ賑しき」

やはらとり 柔取。やはら(柔)に同じ。やはららく 夜半樂。雅樂の一。平調の曲。明皇自<sub>レ</sub>州還<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>、擧<sub>レ</sub>兵夜半誅<sub>二</sub>章后<sub>一</sub>、故作<sub>二</sub>夜半樂<sub>一</sub>、還京樂<sub>二</sub>(文獻通考)。

やぶ 野夫。やぶ。田舎にゐる男。田夫。野人。武家義理物語五「昔は少知もとれる者なりしが、浪人して後此里の野夫なり」。一代女六「同じ里の野夫と連れて出しが」

藪蚊の餅搗 藪蚊が群をして上下に飛びさまをいふ。蚊柱をなして飛びかふこと。傾城反魂香中「小氣味のわるき籠が本、軒に藪蚊の餅つきも」

やぶさめ 流鏑馬。馬に乗つて馳せながら箭矢で的を射る術。水干に綾蘭笠を着け、重藤の弓を持つ。的は方板で串に挿み、三箇所に立てておく。槍權三上「鳥居通りの流鏑馬馬場」

やぶしわかず 日の光のくまなく照すこと。君の恵みに譬へていふ。古今集十七、布留今道の詠「日の光やぶしわか

ねばいそのかみふりにし里に花も咲きけり。「やぶしわかねば、藪をも分たず照せば」の意。松風村雨東帶鑑三「須磨の一木の松が枝に、五色の花咲いでしと奏聞す。やぶしわかざるめぐみのしるし、見て參れとの勅を受け」

やぶすま 矢換。隙間なく並んで矢を射ること。雪女五枚羽子板下「弓箭の武者百騎許りが、一面に矢換作つてどつと寄せ」

やぶだたみ 藪壘。藪の幾重にも茂りかさなつたところ。藪垣。又、竹の枝を束ねて結つた垣。武家義理物語四「犬は(中略)嬉しげに立歸る、その行衛を見るに、藪壘の破れよりぐりぬ」

やぶちから 藪力。ばか力。法外な力。或は野夫力か。

やぶに功の者 (諺) 藪醫者の中にも功者なものもある。もと藪は野夫(やぶ)で、野夫の中にも功者がある義。つまらぬ人間の中にも取るべき者があること。豈知<sub>三</sub>野夫有<sub>二</sub>功者<sub>一</sub>也(三國志)。源氏冷泉節下「一僕連れぬ我々でも、やぶに功の者、いかな大病でも(中略)、活すか殺すか何方へぞ驗は見せう」

やぶみ 矢文。文書を矢柄に結びつけ、

又は養目(ひきめ)の孔の中に入れて射遣はすもの。

破れ車てわが悪い (諺) 「わ」は我と輪とにかけた。つまり、おのれが悪い。「人はわるない我が身がわるい破れ車で輪がわるい」(山家鳥蟲歌・諸國盆踊唱歌)。卯月紅葉と「世の中のうきふしはのう、我が善きに人の悪しきがあらばこそ、破れ車てわが悪い」

やへあめ 八重雨。頻りに降る雨。新可笑記「旅僧袖かざして、八重雨玉を散らして止むことなく、我が軒下に宿りて」

やへおり 八重織。地を厚く織ること。又、その織物。

やへむじん 八重無盡。幾重にも際限なくからげ縛るさま。八重千文字。用明天皇職人鑑四「繩をかゝれと踏伏せて、足手を取つて八重むじんからかけ付け」

やぼすけ 野暮助。次條の類語。朱雀信夫摺下「いかな粹穂も空人(やぼ介も)やぼたらう 野暮太郎。野野た男、不粹な男の擬名。二代男「皆日の野暮太郎はむごうてならず、中位なる奴は何時とても飛ばすなり」

やほつ 夜發。やほち。夜、辻などに立つて通行の男の袖を引き、春を賣る女。

つじぎみ。よたか。たちぎみ。一代男  
三「夜發の輩、一日暮し、月雪の降る事も、益も正月も知らず」。一代女六「夜發のつけ聲」

やぼてりがき 染色の名。澁色の濃いもの。重井筒上「裾に清十郎とねずみ色、京の吉岡紙子染、やぼてりがきか、うす柿か」

やぼてん 野暮天。野暮の骨頂。極めて野暮なこと。極端な野暮太郎、野暮助。

野暮の粹 野暮のやうで粹なこと。不粹に見えて結局は粹なこと。傾城酒呑童子三「さて打明けたおつしやられやう。それが結局野暮の粹」

八百屋八兵衛 五人女四「本郷の邊に八百屋八兵衛とて賣人、昔は俗姓賤しからず、此人ひとり娘あり、名はお七といへり」

やま やまほこ(山鉾)の略。大矢數四「今度の公事はおれが出て埒、祇園會の山が動くとせくまいぞ」。櫻陰比事四「祇園會の眞似して、童子集り山の形を造り」

やまあげる 山を上げる。痘瘡の經過に

ついて、發熱後十日から三日間を貫膿(やまあげ)と言ふ。

やまあぶご 山枋。山びとなどの用ひるあぶご。山仕事に用ひる枋。

やまうり 山賣。山を賣ること。鑛山・山林の賣買。又、それを業とする人。或は、山師に類する賣買。又、それを仕事とする者。永代藏四「博奕仲間、山賣、人參のつき付」

やまおふご 山枋(やまあぶご)の假名ちがひ。その條を見よ。一代男四「鹿おどしの弓、山枋ふりあげて、だいたんなる女め」

やまかけちゆうなごん 山影中納言。藤原山蔭のこと。能く魚鳥を割き、庖丁の術を得たと稱された。仁和四年薨。菅庚申上「七五三、五五三、山影中納言の家の切りかた、料理一通りは承り傳へしゆゑ」

やまがたな 山刀。山かせぎに用ひる鉈のやうな刃物。木こり用の刀。男色大鑑「北國者に隠れもなき男(中略)、さき繞着て、ほくそ頭巾に山刀さして」。二十不孝三「山刀をさして枕槍提げ」

やまぐさ 山草。した(商桑)の異名。大下馬一「樵、かち栗、神の松、やま草の

賣りごゑ」

やまくじ 山公事。鑛山、山林に關する訴訟事件。大矢數五「山公事や繪圖までもなし富士の雪、鷹場に極まる頼朝已來」

やまぐちゑんきう 山口圓休。織留二「十姓香は山口圓休に聞き覺え」

やまくどき 山口説。歌曲の名。山づくしのくどきぶし。くどきぶし「及びまづづくし」の條を参照。

やまぐま 山隈。山の折れかきなるやうになつたかけ。山かけ。

やまこかし やまし(山師)。鑛山、山林など賣買して、人を踏み倒すもの。又、不正な手段によつて互利を得ようとする。或は、その者。晝夜用心記六「大阪京の眞中にて借屋かまへ見世つきよく、又は座敷がりの武士諸色を買ひがかり、日限切つて五分六分にて虎の子渡しに扱ひ、徒黨を組みての肝煎仲間、これ山こかしといふ者なり」

やまごし 山越。蹴鞠の用語。一種の曲鞠。一代女三「杵音靜かに鞠垣に袖を翻して、櫻襲・山越などいへる美曲を遊ばしける」

やまごぼう 山牛蒡。商陸。多年生草本。

や

地下部は薬用にする。たうごばう。じやこすぎ。いをつき。いぼのき。

**やましゆ** 山衆。おやましゆ。遊女たち。女腹切中「太郎、山衆貸してたも」。同

「言ひたい事も山衆の手前、客の手前も置りかね」

**やまだし** 山出。山から材木など出すこと。又、その出す人。山出し人足。

出世景清曰「山だし七十五人して、曳いたる桶にてあげほだしを打たせ」。田舎から出て来たまゝの者。田舎風まる出しのこと。

**やまだち** 山立。山賊。二十不孝三「この男山賊(やまだち)をして渡世とす。或

夜(中略)我が親の方に立入り」。又、かりうど(獵人)。

**やまだち** やまがたな(山刀)に同じ。懐

硯「主がましき野夫の、裂織といへる袖の恰しく、山刀(やまだち)をさして眞柴手東て」

**やまちから** 山力。山かせぎする者の力。暴力。ばか力。「やぶちから」などの類語。

**やまちざけ** 山路酒。山路の酒。山路で飲む菊の酒(九月節句の酒)。續齊諧記「九月九日(中略)登高飲菊花酒、此禍

可除」。男色大鑑曰「香りはさすが、菊といへる山路酒」

**やまづきん** 山頭巾。山人の冠る頭巾。山かせぎに用ひる頭巾。

**やまづくし** 山盡。山又は山鉾の形を多く描き、或は、その名を集めて叙べること。

**やまでん** 夜摩天。耶摩天。佛語。欲界第六天中の第三天。常に光明が輝いて

ゐる天で、晝夜の差別なく、ただ、蓮花の開閉によつて之を分つのみであるといふ。曾我五人兄弟曰「夫婦まくらのやまたの、ちぎりは抱き合ふと聞く」

**やまとかぢ** 大和鍛冶。大和國奈良の鍛冶。古くからその名を稱されてゐる。

**やまとがは** 大和川。淀川の一支流。大和國龍田から西流して中河内に入り、

長瀬・玉中の二川となり、更に合流して攝津國東成郡から淀川に入つてゐた。今の大和川と流域が違つてゐたので、舊くは野崎から眞西に當つてゐたといふ。

**やまとだいく** 大和大工。大和國の大工。古來、同國には大建築の工事が多かったので、大工の腕まへは十分に磨かれて居たものとする。出世景清「大和大

工に飛驒たくみ、そま人木づくり事畢り」

**やまとばた** 大和機。かみばた(上機)のこと。和漢三才圖會三六「上機は和州に多く用ひて、麻布及び紬を織る」。永代

藏五「女は麻布を織り延べ、足引の大和機を立て」

**やまとや** 大和屋。京都の俳優、大和

屋甚兵衛のこと。家は大阪に於ける劇場の名代であつたので、初め大阪でその技倆を揚げたらしいが、元祿二年十一月に、京都都萬太夫座に聘されて、「大福丸」といふを演じ、翌三年春、傾城

袖の海」といふを演じて、大に京人の好尚に投じ、その十一月から同地に自ら座元となつた、寶永元年一月死。彼の藝は俗受けのした割合には技倆に乏しかつたが、踊は第一の長所であり、「こんくわい」と、槐久(前記袖の海)とは、最も得意とする所であつたといふ

(日本演劇史)。槐久「世物語下」世の取沙汰を大和屋が狂言に作りて、甚兵衛が身ぶり其のまゝ槐久を生きうつし、

是を見し人戀を知るも知らぬも涙を求めける。(天網鳥(近松戯曲)に於て、紙屋治兵衛と紀國屋小春とが逢引した



お茶屋。

やまとやざ 大和屋座。大阪の劇場。前條参照。俗つれ、ニ「大和屋座の唯方ども大方二階に上り」

やまとやじんべゑ 大和屋甚兵衛。「やまとや」を見よ。永代藏ニ「跡は大和屋の甚兵衛に立ちならび」

山の芋鱧になる (諺) 物事が成りあがり、意外な變化をする譬。

山の芋で足を突く (諺) 「長芋で足突く」ともいふ。うつかりして、つまらぬ事に失敗する譬。思ひも寄らぬものにしてやられる。宵庚申上「こりや尤も、いや尤も、あやまり申した」。そちが云ひ分眞直に、御前へ申すが又御馳走、やれ〜やれ〜山の芋で足突いた」

やまのかみ 山神。妻の卑稱。もと、いろは歌の句、「うゐのおくやまの「おく」が「やま」の上(かみ)にある義で、おく(奥)といふ洒落であるといふ。

やまのてやつこ 山手奴。江戸の山の手(高臺の地)に住んでゐる奴。あかさかやつこ(赤坂奴)に同じ。

やまばち 山蜂。熊蜂のこと。くまんばち。頭と腹とが黄色で、他は全身黒褐

や

色。蜂類最大のもので、毒の力も猛烈である。大黃蜂。すゞめばち。

やまばといろ 山鳩色。萌黄色の黄の勝つたいろ。きくじん色。麴塵。

やまひめ 山姫。山を司る女神。最明寺殿百人以上瀨下「木々の木の葉を吹きためて、今日山姫の衣配り」

やまぶ やまぶし(山伏)の略。油地獄中「ヤ珍しいお山ぶ、こなたは見知つた白稻荷殿、妹が病氣祈りのためか」

やまぶきもち 山吹餅。山吹色の餅菓子。武道傳來記「この山吹餅をひとりは開かず」

やまぶた 山豚。おのしし(猪)のこと。山猪。曾我會稽山「皮に疵なく、山猪の眉間の骨を射くだきしは淺利の與市」

やまぶみ 山踏。山を踏みあるくこと。佛道修行の一。蟬丸三「我々は清閑寺の稚兒なるが、山踏の行法に、御在所は存じたり」

やまぼこ 山鉦。だし(山車)の一種。主として京都の祇園會に出るもの稱。臺の上に猩々緋などで山の形を作り、頂に高く各種の鉦(長刀鉦・函谷鉦・放下鉦・鶴鉦・菊水鉦・月鉦・船鉦など)を立て、周圍に錦織の幕を張り、正面に

は、寶冠を戴いて、羯鼓を腰につけた稚兒が、左右に童子を侍らせて立つ。團扇を以て揮揚すれば、笛・太鼓に囀されて、屋臺は車輪二雙に附けられた大繩に取りつく數十人の者によつて揺々と曳かれる。やま。ほこ。織留六「七日の祇園の山鉦の有様つひに見たる事もなく」。堀川波鼓下「祇園會の山鉦を見に行く」

やまみち 山道。山の輪廓のやうな形を連ねたもの。だんだら。段々。女の衣服の裾などの取りかた、又、模様にいふ。一代男六「袖口も黒く、裾も山道に取るぞかし」。五人女四「紅うらを山道のすそ取り」

やまめ 贅やもめ(寡)。夫を失つた女。後家。生玉心中「おきはを廢にする替り、身が腹に突込んで」

やまもとかくたいふ 山本角太夫。上方淨瑠璃節、殊にその軟派の代表者。硬派の井上播磨太夫と並稱された人。京都に住んでた。永代藏六「淨瑠璃は山本角太夫とたかりくらべ」

やまもとぶんゑもん 山本文右衛門。織留四「天満天神に掛け奉りし大森彦七が繪馬、山本文右衛門が筆勢、大きに

や

出来ものど沙汰しければ」

**山も見えぬ胸算用** (諺) どうなるか分らぬうちから、利を打算すること。結果の知れぬことをあてにすること。山小判などの山、轉じて最もよい結果の意。源氏鳥帽子折三「たつた今搦め捕り、牛若殺して牛の見た、大判小判のつかみ取りと、山も見えぬ胸算用、六波羅指してぞ急ぎける」

**山を移す** 山盛りにする。澤山にあるさまをいふ。愚公移山の故事からの着想か。一代男七一金を拾はせてお目にかけると、服紗をあけて、一步山をうつして有りしを」

**やまをしき** 山折敷。山家で作り出す分厚で粗末な折敷。又、白木作りで、正月神前に物を供へるに用ひるをしき。大矢數三「溢地くらゐの食椀の露、初紅葉詠めに續く山折敷」

**やみからげ** 病に絶えずかゝつてゐること。又、その人。

**闇の錦** (諺) 「夜の錦」ともいふ。功を遂げても郷里の人に知られぬこと。富貴不歸、如衣錦夜行(漢書項羽紀)轉じて、注意すべきものにも一向無頓着であること。

**やみほうける** 病んでぼける。病氣してぼんやりとなる。油地獄中「病みほうけたこのなりで」。「ほうける」の條参照。

**やみらみつちや** 「みつちや」は「あばた」の意。めちやくちや。無茶苦茶。曾根崎心中「心の内はむしやくしやと、やみらみつちやの皮袋、銀事やら何じややら」

**病む目より見る目** (諺) 病んでゐる本人より、傍で看護する者の方が心を勞すること。もと「病む身より見る目」といふ。

**やめ** 野女。田野に働く女。賤の女。俗つれん(三)「働く野女の咽喉の渴きを助けしに」

**やもめだふし** 寡倒。ごげだふし(後家倒)を見よ。

**やや** 赤兒。みどりご。やゝこ。松風村雨束帶鑑「一夜添乳の手枕は、やゝより親に許せかし」

いたせり。時慶卿記「やゝこ跳り也、雲州の女樂也」

**やらい** 矢拂。追ひやらぶ義で、立入ることの出来ぬやうに、竹・丸太などで縦横に組み結んだ假のかこひ。柵。矢來垣。懷視(四)「四四方方に矢來を結はせ」

**やらう** 野郎。歌舞伎の若衆の前髪を刺つたもの。前髪のある若衆が風俗を亂すといふので禁ぜられたのである。野郎あたまの若衆。半髪。姣童。一代男五「野郎もてあそびは、散りかゝる花のもとに、狼の寝てゐる如し」。又、男子を卑しめていふ。

**やらうあそび** 野郎遊。野郎を相手に遊興すること。永代藏(四)「京都にのぼり野郎遊びに打込み」

**やらうあたま** 野郎頭。若衆の前髪を刺つた頭の前髪。後には、頭の中程を細く剃り、又は形をおいて中剃したもの。

**やらうかぶき** 野郎歌舞伎。野郎あたまの俳優が演ずる歌舞伎。



やらう

勘三郎が芝居を見しに、日頃はふつふつと野良嫌ひなれど、藝の間に尋ねて「やらうぐるひ。野郎狂。野郎を相手に遊興に耽ること。置土産<sup>ニ</sup>。野郎狂ひのやむ事なく、明暮れ四條河原に通ひけるに」

やらうざいもん 野郎祭文。歌祭文の一種。野郎の名を集めて節をつけたもの。

やらうばうし 野郎帽子。もと、野郎が假髪<sup>ニ</sup>の代りに用ひた帽子。即ち、若衆歌舞伎が禁ぜられて野郎歌舞伎となつたとき、なほ假髪が許されなかつたので、その前髪を剃つた痕を覆ふのに、手巾・綿帽子などを用ひたのに起る。紫縮緬などで作るのが常である。むらさきばうし。天網鳥下「謠の本は近衛流、野郎帽子は若紫」



やらうひも 野郎紐。一代女<sup>六</sup>「野郎紐のうね尾袋穿くなど」

やらうもんやうじ 野郎紋楊枝。紋楊枝の一。野郎歌舞伎俳優の紋所をつけた楊枝。男色大鑑<sup>五</sup>「いづれの工か削りなして、野郎紋楊枝といへるを始めて、世にもはやらかしぬる」

やらうや 野郎屋。次條に同じ。  
やらうやど 野郎宿。野郎を抱へておく家。かげまや。野郎の遊客に宿を貸す家。俗つれ<sup>六</sup>「五つひに揚屋の手にも渡らず、まして野郎宿の花にもならず」新小夜嵐物語下「聊爾に野郎宿にて湯濱も喰はれず」

やらうわかしゆ 野郎若衆。野郎あたまの若衆。野郎で歌舞伎を演ずる役者。野郎役者。野郎。陰間。

やらはらだち やたらに腹を立てる事。むやみに立腹すること。凜静胎内拵<sup>二</sup>「めをと喧嘩のやら腹だち」  
やり 遣。やりて(遣手)の略。壽の門松上「極彩色の越後町(中略)、やりが前垂茜さす」槍。

やりらめ 鐘梅。槍梅。梅の一品種。や淡紅色を帯びた白い花を開く。香が高い。大矢數<sup>四</sup>「花千兩分別五兩と申す也、家老役として持たす鐘梅」

やりおとがひ 槍頭。槍のやうに尖つたおとがひ。釋迦如來誕生會<sup>四</sup>「これくさいづち頭、鐘おとがひの報いを問うて聞きやらぬか」

やりがんな 遣鉋。槍鉋。身が槍の穂尖のやうで、豪をつけないで用ひる鉋。

さをがんな。出世景清<sup>一</sup>「橋柱、しらげたつるや擲鉋、雲をそなたに遣鉋」  
やりごゑ 槍聲。とがりごゑ。するどくいらだつた聲。

やりした 槍下。槍で突き伏せられること。又、突き伏せること。「槍下に名を留め」

やりじるし 槍標。行列又は出陣などの時に、家名を表すために、槍の印附(しるしづけ)の環につける標。百日曾我<sup>一</sup>「仰せきびしき御狩場の、番手々々の槍印、御馬印」

やりて 遣手。廓の詞。遊女の監督、遊客への取持などする女。  
色道大鏡<sup>二</sup>「遣女。遣手のことなり。遣手といふは、傾城に付きて、その請待する舉屋へやりわたす故に遣手といふ。やりてばうし。けんぢよ。花車。鶉婦。一代男<sup>六</sup>「やり手が慾ばかりの算用も聞かす」。榮花咄<sup>五</sup>「遣手は傾城に我儘をさせぬと、客が偽いふを恥かすする役ぢや」。次條参照。



やりてばうこう 遣手奉公。遣手として奉公すること。一代女<sup>六</sup>「遣手奉公をする事(中略)風俗備つて隠れなし。薄色

や

やゆ

の前垂、中幅の帯を左脇に結び、萬の鍵を下げ、内懷より手を入れ、後を少し引きあげて、大方は置手拭、足音なしの忍びありき、不斷作り顔して心の外に恐ろしがられ、太夫引きまはす事」

やりなは 遣繩。牛馬などを進退せしめるために付けた繩。曾我會稽山三「乗入れもせぬ野髮の馬(中略)、遣繩・追繩・口取繩」

やりはご 遣羽子。一つの羽子を二人以上で突きあふこと。おひばね。

やりぶすま 槍襖。槍を隙間もなく並べること。槍の穂尖を揃へて、隙間もなく突きかけて來ること。亂槍。

やりや 鎧屋。槍屋。槍を作る人。槍師。

やりやまち 鎗屋町。大阪東區上町の町名。

やりをどり 槍踊。槍を持って踊る一種の踊。俳優水木辰之助が演じたものといふ。松の葉卷三の「さわぎ」に「やりをどり。振りやれおふりやれ、大鳥毛の振袖行列、云々」

やゑもんだち 彌右衛門立。立は裁か。

二代男三「腰の屈みし髭親仁の、廣袖の襲れ着に、彌右衛門だちの袴に、綿帽

子にて天窓を包み」

やんがて 「やがて」の訛。すぐ。松風村雨東帶鑑三「今の内こそ貸しておけ、やんがて此方へ取りかへす」

やんちや 小兒が開きわけなく、だゝをこねること。又、その小兒。やんちやばう。やんちやん。丹波與作上「氣の毒やお姫様、關東へ往く事は、いやじやいやじやとやんちやばかり御意なされお袋様も殿様も、たらしつ叱つつ遊ばせども」



ゆい る(維)の訛。日本振袖始五「八岐にまたがる大蛇が姿、東南西北四面四ゆい、はたゞ雷電瞬く間、八つの形は顯然たり」

ゆいせき 遺跡(ゆるせき)。ゐせき。古跡。舊蹟。あつぎ。後繼者に傳はる領地。

ゆうちやうらう 雄長老。京都建仁寺の塔頭如是院にゐた僧。狂歌を善くした。名は永雄、字は英甫。天正の末、同寺の長老となつたので、永雄長老といふ

べきを略してかく呼ぶ。慶長七年に敵した。新撰狂歌集・雄長老詠百首狂歌などの著がある。兩吟一日千句「狂歌盡しになさげやはらく、雄長老落つる心にあらねども」

ゆうゆう 融融。融和して、のどかで楽しいさま。松風村雨東帶鑑三「夏は涼風冬は暖風、さつ〜〜ゆう〜〜と吹きわたり」

ゆえんひげ 油煙髭。油煙で塗つて書いた髭。奴などは鍋器に油を和しても書いた。薩摩歌上「後な奴が國處、あもともとの赤松を打割り、松の油煙髭、氣味よい頭の搦鉢髭」

ゆがけ 弓懸。礮。弓を射るとき、手指の痛まぬやうに用ひる手袋。

ゆかずごけ 行かず後家。嫁に行かぬままで老婦になつたもの。未婚の老寡婦。義經東六法上「つれなくも白らをゆかざごけになさんと、さてもむごい御心底」

ゆがのほつする 瑜伽の法水。佛語。瑜伽とは、主觀・客觀が一切の事物と相應融合して不二となること。それを水が萬物を潤すに譬へていふ。つまり眞言祕密の教法が、一切の志望を満足せし

める利益を有することを示した修辭。  
**ゆがみばしら** 歪柱。茶室の内に、張り出して立てる柱。ゆがみ曲つた材を用ひる故の稱。なかばしら(中柱)。

**ゆかり** 縁。ゆかりのいろ(綠色)の略。即ち紫色の異稱。古今集「紫の一本ゆゑに武藏野の、草はみながらあはれとぞ見る」の和歌に據つていふ。

**ゆきあひあね** 行合姉。行合兄弟の關係に於ける姉。父を異にする姉。下文は、母を異にする姉に轉用した例。國性爺「和藤内(中略)、二歳で別れし娘なれば、我等とも行きあひ姉」

**ゆきあひきやうだい** 行合兄弟。父を異にする兄弟。異父同母の兄弟。雪女五枚羽子板中「叔母の子息の競瀧口、源三位頼政の小姓立、猪俣太とは行合兄弟」

**ゆきおろし** 雪風。雪を伴ふ風。雪を吹きおろす山風。

**ゆきげた** 行桁。橋の長さに沿うて、柱から柱に渡した桁。橋げた。又は氷の朔日中「夜々を重ねて大江ばし、はしのゆきげた雪ならば」

**ゆきこかし** 雪ころばし。雪まろげ。雪まろばし。

**ゆきさを** 雪竿。積雪の深淺をはかる竿。

又、一面に雪の降る地で、物のしるしに立てる竿。永代蔵三「北國の雪竿、毎年一丈三尺降らぬと云ふ事なし」

**ゆぎしやう** 湯起請。古語に探湯(くがだち)といふ。神に誓ひ、熱湯に手を入れて、爛れるのを邪とし、爛れないのを正として、正邪を斷ずること。又それによる起請文のこと。

**ゆきづき** 雪月。十二月の異名。織留一「銅細工する人をかたらひ、はじめ懐爐といふ物を仕出し、雪月比より賣りける程に」

**ゆきのした** 雪下。(植物の名。虎耳草。多年生草本。高さ一尺餘。葉は心臟形で毛があり、下面が赤く、花は白色で不整齊の三瓣のうち二瓣が大きい。いはぎりさう。とのらのみみ。(地名。相模國鎌倉鶴岡八幡宮の東南にあたる。)

**雪は五穀の精** (諺)「雪は豊年のしるし」といふ類。

**ゆきほとけ** 雪佛。ゆきだるま(雪達磨)の類。大矢數三「世界みな一度は消ゆる雪佛、あるにもないにも風の行く末」

**ゆきみざけ** 雪見酒。雪見の時の酒。雪見しながら飲む酒。源氏冷泉節上「盞を變へての雪見酒、寒風却て春風と、左

扇の歡樂に」

**ゆきみやしき** 雪見屋敷。雪見をするための邸宅。櫻陰比事四「賀茂川近き涼み屋敷(中略)、北山の雪見屋敷」

**ゆきむかし** 雪昔。銘茶。男色大鑑七「壺入の客には雪むかしの口を切り」

**ゆきをれだけ** 雪折竹。(雪のために折れた竹。(紋所の名。)

**雪折竹に本来の面目を悟る** 國性爺三「アツア面白し。雪折竹に本来の面目を悟り、腕を切つて、祖師西來意の輪を開きしも尤もな、ことわりかな」。難波土産に註して曰く「初祖(達磨大師)に神光といふ僧來り參ずるに、祖はたゞ端坐して教の詞なれば、かの僧庭に立ちけるに、大雪降りて竹を折れども退かず。夜明くるまで立居たりしかば、初祖あはれみて、汝何事を求めんためにか雪中にありやと問ひ給ふに、かの僧涙を流し、師たゞ願はくば教へ給へといふ。初祖の曰く、諸佛無上の仁道は汝が如き小智小徳の慢心ももつて得べきにあらずと。かの僧聞くや否や、刀を以て左の臂を切り、師の前に置きて曰く、諸佛の法印聞くことを得べしや。祖の曰く、諸佛の法印は己が心に

ゆ

ゆ

あり、他より求むべけんや。(中略)かの借つひに悟りを開けり」と。

**ゆきをそんな** 雪女。雪が多く降つた時、雪の精が化して出るといふ雪白妖怪。

俚言集覽「雪女。雪女郎とも云ふ。雪國には庇合のやうなる處に、氣立ちあがりて雪にて人の姿をなすをいふと云へり。又、鬼物也」。兩吟「日千句」「見た事がなうて消えます雪女、おもひ積つて北國の山」。雪女五枚羽子板上「白衣白髮白妙の、雪女とも謂つべし」。

**ゆぐ** 湯具。もと入浴の時、身に著けた衣。又、男女ともに前を覆うたもの。轉じて、女の腰巻。ゆもじ。ゆまき。

ふたの。二幅。永代藏「女房が、うす汚れたる二幅(ゆぐ)一つに三分借りて」

**行先** 的が立つ 行く先々に罰的の立つてゐる。將來は必ず罰を受ける。天網島上「此の罰たつた一つでも、行く先の的が立つ、斯くては家も立つまじ」

**ゆぐち** 湯口。湯に入る口。浴室の出入口。又、そこに接した室。百合若大臣野守鏡「小湯女ども、湯口に集り」。又温泉の出る口。

**湯口を勤める** 風呂に入る客の世話をする。湯女の勤めをする。百合若大臣野

守鏡「湯口を勤め座敷へ出、六十六國の機嫌を取り」

**行く水に數書く** (諺) 伊勢物語「行く水にかず書くよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり」の句を取つていふ。

はかないこと、たよりないことの譬。數書くは、もと、涅槃經に身の無常を説いて、「如書水、隨書隨合」とあるに據る。武道傳來記「行く水に數の思ひをなし、泡沫の一度に消ゆる身ならば」

**行くも歸るもの關** 近江國逢阪關の稱。これやこの行くも歸るもわかれては、知るも知らぬも逢阪の關(後撰集、蟬丸)に據る。永代藏「狼の黒焼はと、聲の可笑しげに賣りて、行くも歸るもの關越えて、知るも知らぬもにつき付商ひ」

**ゆげしやう** 湯化粧。湯上りして化粧すること。湯に入つてお作りすること。

**ゆげた** 湯拵。湯を漉へておく箱又は桶。ゆぶね。浴槽。槍櫃三「但馬の湯拵數ふれば」

**ゆさんあるき** 遊山歩。遊山に出あること。氣ばらしに出かけること。

**ゆさんじよ** 遊山所。遊山に適した場所。

遊樂地。ゆさんどころ。  
**ゆさんぶね** 遊山船。船遊山に用ひる船。遊船。屋形船を多く用ひたので、又、屋形船の別稱とする。

**ゆさんやど** 遊山宿。遊山する人の宿。あそびに行く宿。遊山茶屋。又、遊女のゐる宿。一代女六「神風や伊勢の古市、中の地藏といふ所の遊山宿に身をなして、世間は娘といはれて、内證は地の御客を勤めける」

**ゆずぐくり** 袖括。袖の果實を紐で括つて干しかためたもの。根付などに用ひる。晝夜用心記「腰を探れば、袖括の根つけばかり残りけるに」

**ゆすらうめ** 櫻桃。櫻屬の落葉灌木。春の初めに白色の五瓣花を開き、一枝に多くの實を結ぶ。その形が桃に似てゐるので桃の字を用ひる。熟すると濃紅色を呈し、味は酸くて甘い。梅桃。山櫻桃。

**ゆすり** 強請。ねだり。おどし。菜花咄ニ「今時はやるゆすりといふ仕掛けなるに」。次條参照。

**ゆする** 色道大鏡「ゆする。心たゞしき人をおどしかけ、くぜつしかけ、心を見る貌なり」

ゆするつき

冴杯。ゆする(冴)とは、頭髮を洗ふこと。又、それに用ひる湯水。杯は、その湯水を容れる器。ゆするに用ひる杯。古くは土器、後に漆器・銀器。びんだらひ。孕常盤<sup>四</sup>「楊枝・手拭・冴杯、定め役々勤めつ」

ゆだのたゆたに

大いにゆれて、定まらぬさま。少しも落ちつかぬさま。ゆたにたゆたに。古今集<sup>一</sup>「いでわれを人なとがめそ、大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ」(戀<sup>一</sup>)。松風村雨東帶鑑<sup>三</sup>「解くにとかれぬ涙の雨の、ゆだのたゆたに漂ふ有様」

ゆだま

湯玉。煮え立つ湯の玉。沸騰する湯の泡。大矢数<sup>四</sup>「鍋島の暮は湯玉があがつたり、穴一やめて足あらひをれ」

ゆたやか

ゆたか(豊)に同じ。二代男<sup>四</sup>「太夫様塗下駄の道中、ゆたやかにありしを」

ゆたん

油單。單(ひと)の布又は紙などに油をひいたもの。水氣のしみるを防ぐために物に覆ひ、又は敷いて用ひる。油斷。武道傳來記<sup>二</sup>「臍指油斷に仕込み」。又、油單包の略。大句數上<sup>一</sup>「西行法師油單おろして、名山を墨繪にさつと書かれたり」

ゆたんづつみ

油單包。油單に包んだもの。旅装などを油單に包んだもの。二十不孝<sup>三</sup>「心靜に油單包を檢め、肩に懸けて」

油斷は怪我の基 (諺) 油斷は失策の因となる。油斷すれば、やりそこねる。ゆづのつまぐし 湯津爪櫛。古語。齒の繁く多い櫛。つまぐしとは、齒の密につまつた櫛の義。五百箇爪櫛。湯津津間櫛。伊那那岐命が、黄泉國の伊那奈美命から逃げ歸ります時、よもつしこめ

(黄泉醜女)に追ひかけられ、乃ち、湯津爪櫛を引き缺いて投げ棄てられるとそこに筭が生える。それを「しこめ」が抜いて食うてゐる間に、命は逃げ歸られた(古事記)。後世、櫛の折れるを忌む俗習は、この故事に起るといふ。油地獄<sup>下</sup>「髪引くゆづの妻櫛の齒の、ハア悲し一枚折れた、惘れてとんと投げ櫛は、別れの櫛と思むことを」

ゆと ゆと(湯桶)の略。食事の後に飲むべき湯を容れる器。木製で注口・柄があり、多くは漆塗とする。一代男<sup>二</sup>「もし御茶をまゐらばと、ゆとに天目置きて歸る」。ゆつき。

湯殿の曇み階子 密會の魂膽。「くらど

と」の一。一代男<sup>四</sup>「湯殿のたよみばし子といふ物あり。是は外よりは手桶の通ひもなく、たしかに見せかけ、裸になりて入らせられ、内より戸をしめ給ふ時、天井から細引の階の子おろして上へ運ばせ、事すましておろしぬ」

ゆどのはじめ 湯殿始。新年になつて始めて湯に入ること。戀八卦柱曆<sup>下</sup>「ゆどの始に身を清め、新枕せし姫始」。又、生兒に、産湯の後三日目に湯をつかはせること。

湯とも水とも知れず 胎兒の男女、何れとも知れないこと。釋迦如來誕生會<sup>一</sup>「摩耶夫人御懷胎とて宮中のよめき、いまだ湯とも水とも知れざるを、五天竺の主定まりしなんど」と

ゆとりめし 湯取飯。水を多く入れて米を半ば過ぎ炊いた後、いがき(籾)に汲みあげて、ねばりけのないまで洗ひ、更に蒸籠などで蒸した飯。胃弱などの人によいと考へられたもの。ゆとり。櫻陰比事<sup>三</sup>「食物の御吟味ありしに、不

斷の湯取飯、汁は鱸の白煮」

ゆな 湯女。温泉宿に居て客に隨從し、入浴の時を知らせ、浴衣を肩にかけて案内し、衣服を預りなどし、又、酒席

ゆ

に侍して歌など歌ふ女。特に、有馬の湯女が名高く、大湯女・小湯女の稱も定つてゐた。一代男三「このいたづら、津の國有馬の湯女に替る所なし」。又、「風呂屋もの」をもいふ。

ゆのこ 湯の子。釜の焦げつき飯を掻きおとして、湯を加へたもの。兩吟一日千句「臆病風の秋はかなしき、影照す月は愛せて湯の子ずき」。甲子祭三「常に酒を飲み、朝夕ゆのこを好み食すと云ふ」

ゆのだんこ 湯のだんこ。流行唄か。女腹切中「皆まで云ふな湯のだんこか。湯治するなら遣ひ錢、(中略)、今はありまのゆのだんこ、しよんがゑ」

ゆのをたうげ 湯尾峠。越前國南條郡の内。「まごじやくし」の條を見よ。

ゆはずだか 弓筈高。弓筈を高く振立てるさま。

ゆばどの 弓場殿。宮中に設けられた弓を射る御殿。弓場(内裏の射術場)に面して設けられた御殿。射場殿。ゆみばどの。  
ゆばな 湯花。ゆだま(湯玉)に同じ。にえゆばな。  
ゆびがね 指金。ゆびわ(指輪)のこと。

一代男三「顔は湯氣に蒸したて、手に指がねをさゝせ、足には革踏(たび)はかせながら寝させて」

ゆびきり 指切。男女間の誓約の證として、指を切つて相手に渡すこと。丹波與作下「起請一枚書かねども(中略)、二世三世、指切しての云ひかはせ」。尙、「指を切る」の條参照。白小兒が約束のしるしとして、互に小指をかけあつて引くこと。

ゆびくわはらう 指果報。「こぼれさひはひ」の類語。傳倭。曾我會稽山四「二の宮が驛を後楯にかけ合ひ、こぼれ幸・指果報。あつたら若者を思はず討つて残念などは、義を知つた武士の云ふこと」と

ゆひしばこもん 結柴小紋。柴を束ねた模様の小紋染。二代男三「結柴小紋の鼠色に目印ありて」

ゆびにんぎやう 指人形。極めて小さい人形。指先で舞はせる人形。大矢數四「指人形をまはしたり月、秋はけき御機嫌直し枕かや」

ゆびぬき 指貫。裁縫の時、針尻の當る指にはめる指輪やうのもの。革、金屬などで作る。薩摩歌中「神に誓ひを掛け

針や、この血を染めし指貫なり」と  
ゆひわた 結綿。眞綿を重ねて中央を結んで束ねたもの。祝儀に用ひる。

指を切る 男女の間の誓約に行はれた一習俗。殊に遊里に於て遊女が心中の誠を示す證として、指を切つて男に渡したのである。新小夜風物語下「昔は勤の女、是非もなき口説になりて、指を切り爪を放ちける。是さへ見苦しきに、何時の比よりか芝居子、分よき大臣に指を切りて遣はしける」

ゆふぜち 夕節。夕方の節振舞。益・正月等の節日の馳走を夕方に行ふもの。あさせ(朝節)に對する語。雪女五枚羽子板中「沙汰しやんなとゆふ節の、人に紛れて入りにけり」

ゆふべけ 夕氣。昨夜の疲れの残つてゐること。前夜の氣分の晴れやらぬこと。一代女三「奥様はゆふべけにて今に御枕も上らず、旦那は強藏にて米辟きて顔洗ひ」

ゆふまがき 夕籬。夕方の籬の景。娼家の見世先の夕景。大磯虎稚物語三「思はぬ人にも大磯の、長者が門の夕まがき、そのかざりの遊君の」  
ゆふみくさ 夕見草。松の異名。又、心



ゆぶるの異名であるといふ。  
ゆぶる 橋。ゆる。ゆすぶる。二十不孝  
四「膝の上に抱きあげ、鶏々(ととと)と」  
ゆぶれども泣きやまず」

ゆぶる 湯風呂。湯をわかした風呂。そ  
の風呂に入ること。又、特にむしぶる  
(蒸風呂)のこと、据風呂に對していふ。  
即ち、浴室を密閉して、湯氣で身を蒸  
し温める風呂。

ゆべし 柚餅子。柚子の汁で、味噌・米粉・  
麴粉・砂糖等をませたものを捏ね固め  
て、蒸して作る一種の菓子。ゆびし。  
榮花咄「酢がけの牛蒡、柚べしなどに  
て酒飲み暮し」

ゆみがしち 弓頭。弓足輕(徒歩で弓射  
る卒)を統べる者。弓大將。弓組の長。  
宵庚申上「お家相傳の弓頭、坂部郷左衛  
門」

ゆみたいしやう 弓大將。前條に同じ。  
武家義理物語三「治る國の守の弓大將  
に、隼人といへるあり」

ゆみのほこ 弓の矛。弓の幹。上下に管  
がある。吉野都女楠四「梢を動かし、弓  
のほこにて驚かせば」

弓は三つ物 騎射の三式。流鏑馬(やぶ  
さめ)、笠懸(かさがけ)、大追物(いぬ

おふもの)の稱。  
弓も引き方 (謔) 弓も引き方によつて、  
あたりはづれのあること。又、少しで  
も關係ある方に最原するが人情。「相撲  
も立ち方」といふ類。傾城酒呑童子四  
「半ぶ御最原、弓も引き方鞍の客」

ゆみやがみ 弓矢神。弓矢の事を司る神。  
武道の神。いくき神。

ゆみややはちち 弓矢八八。次條の語を  
戯れていふ。新小夜風物語上「壹文くれ  
ぬか、弓矢はちち」といふ」

ゆみややはちまん 弓矢八幡。誓ふ詞。も  
と、弓矢の神八幡も照覽あれといふ義。  
轉じて、(一)神かけて。誓つて。斷じて。  
二十不孝五「弓矢八幡(中略)、身が燃え  
て女は嫁と言ひきつて」。(二)しまつた。  
南無三寶。一代男六「弓矢八幡、大事は  
今」。二代男六「弓矢八幡殘念と」

ゆめあはせ 夢合。夢を合せ考へて吉凶  
を占ふこと。夢判じ。ゆめうらなひ。

ゆめくひばく 夢食糞。惡夢を食ふとい  
ふ假想の獸。ばくのふだの條を參照。

ゆめすけ 夢介。夢助。夢中になつて浮  
かれてゐる人、夢見氣分である人の擬  
名。一代男一「浮世の事を外になして、  
色道二つに、寝ても覺ても夢介とか

(「名呼ばれて」。又、よく眠る人。寢坊  
のことにいふ。

ゆめさかひ 夢違。惡夢を見た時、それが  
實現されぬやうに呪ひなどすること。  
夢違ひの御札 夢違ひの猿の札 惡夢を  
見た時、夢違ひをするために用ひる、  
猿の繪を描いた札。又、惡夢を見ない  
ために用ひる。「ばくのふだ」の條參  
照。胸算用。「夢違ひのお札を買ふ」

ゆめちがへ 夢違。前々條に同じ。薩摩歌  
下「心許なや我夫に、怪我過ちの知らせ  
の夢(中略)、夢違へしつ轉じかへ」

ゆめどの 夢殿。大和國法隆寺境内、八  
角寶形堂の俗稱。最明寺殿百人上臈上  
「上宮太子の身は夢殿にありながら、魂  
は震旦の天台山上に逍遙ある」

ゆめのうきはし 夢浮橋。(一)もと、大和  
國吉野の夢のわた(又はわたり)といふ  
處で、吉野川に架けた橋を稱した。轉  
じて、夢の通ひ路、夢、はかなし世な  
どの意に用ひる。(二)よく眠つてあるこ  
と。(三)源氏物語の巻の名。御播磨國夢  
前川(ゆめさきがは)に架けた橋の稱か  
武道傳來記「鐵拐が峰に別れ、夢の浮  
橋、生田の里、布引川など渡りて」

ゆめはんじ 夢判。夢の吉凶を判じること

ゆ

ゆよ

と。ゆめうらなひ。又、それをする人。  
ゆめびと 夢人。夢で見た人。夢の中の  
人

ゆめひやうぢやう 夢評定。夢の吉凶に  
ついて論議すること。夢はんじの評定。

ゆめまくら 夢枕。(一)相撲の手の名。鴨  
入首、向附、逆附、鴨羽返、とんぼが

へし、猿の一飛その他と共に、「まがひ」  
と稱する十二手の一。夢の枕。

ゆめみぐさ 夢見草。櫻の異名。

ゆめむし 夢蟲。蝶の異名。精進脛「夢  
蟲の飛ぶ間のよくをおさえたが、下戸

かたつけて手枕の野邊」  
ゆめゆめし あてにならぬさま。傾城反  
魂香上「急げばまはる瀬田鰻、只今膳所

から貰ひまして、練貫水の天津酒、ゆ  
めくしうござりますれども、この春

からお仕合せが直つて、鰻の穴から出  
るやうに、御世にお出なされませ」

ゆる 許。ゆるされる。又、ゆるりとな  
る。くつろぐ。男色大鑑五「今は心もゆ  
りて」

ゆるしいろ 膿色。聽色。禁色の對語。  
何人も着ることの出来る衣服の色。例

へば紅色・紫色などの薄いもの。一代男  
一「秋の小袖膿色(ゆるしいろ)にして

物鹿子

ゆめしよがき 由緒書。素性・來歴など記  
すこと。又、その記したもの。履歴書  
といふ類。松風村雨東帶鑑「氏・素性

構ひなし、身元・成立ち偽らず、具さに  
申せと一々に、由緒書にぞ記しける」

ゆめせき 遺跡。(一)舊跡。あせき。(一)家  
の後繼者。又、その後繼者に傳はる領

地。  
ゆあんひげ ゆえんひげ(油煙髭)に同  
じ。

ゆんでもぢり 弓手振。弓を射る時の姿  
勢。左手を後方に曲げるやうにして、

弓を引くこと。蟬丸三「兔一疋追出し、  
弓矢取つて打ちつがひ、弓手もぢりに

放つ矢を」

よ

よいしゆ 好い衆。「よいしゆう」の約。  
身代のよい人達。資産家。素封家。夕

霧阿波鳴渡上「何も身過ぎ、あの様な好  
い衆には、蹴られても損は往かぬ」。長

町女腹切上「大阪で伽羅屋といへば、町  
によい衆・屋敷方、人に知られて」。尙、

次條参照

よいしゆう 二代男六「平城の袖鑑に、よ  
い衆、分限者、銀持とて、是れに三つ

の分ちあり。俗語によい衆といふは、  
代々家職も無く、名物の道具傳へて、

雪に茶の湯、花に歌學、朝夕世の業を  
知らぬなるべし」。ぶげんじや(分限者)

の條参照。  
よいすい よいすぬ。よき推量。お祭し  
のよいこと。又は米の朔日中「道頓堀で

ござんしよの。よいすい、三十郎の  
初日見て、芝居では大酒」

好いてなこと よい加減なこと。自分に  
ばかり都合よきこと。勝手なあて推量。

槍權三上「乳母が不調法とは、好い手な  
事おつしやられな」

好い中の垣(謔)「好い中には垣をせよ」  
の略。親しい間柄でも、遠慮すべきこ

とは遠慮せよ。仲の好い人同士も互に  
禮を守れ。生玉心中上「この春おのれに

三百目銀借つた。念比の中、手形もい  
らぬとぬかしたれど、よい中の垣と預

り證文してやつた」  
よう ゆう(勇)の訛。勇氣。源氏烏帽子折

上「情知らぬは匹夫のよう。殊に我が妻  
のためには主君なり。彼れ是れ助けて

落さんと」

ようがい 用害。要害(えうがい)が正しい。用心する。警戒すること。武道傳來記「厳しく用害して、大藪なる惣堀の内に門々かためて」

ようぎ 容儀。風采。すがた。容姿。一代女三「女は(中略)、其のようぎ次第に男の方より金銀取る筈の事なるべし」

ようしや 用捨。(一)ひかへ日(二)にすること。堪へること。がまん。容赦。武道傳來記「心ある人はいづれも用捨して酒ばかり飲みて」(三)用ひると捨てると。轉じて、下人などの使ひ加減。使用のしかた。武家義理物語五「家中に市崎猪六郎とて、大酒を好み(中略)、世を我がまゝに暮しぬ。下人用捨も常にかかりて使ひければ、此の家を見限り、大方は缺落して、朝暮人を缺かれし」

ようじんとき 用心時。用心をすべき時。注意を必要とする時刻。一代男六「用心時の夜道、心もとなきと申せし」

用心に飽きはない (諺) 用心はいくらしても、これで十分といふことはない。碁盤太平記「用心に飽きはない、拍子木をたやさず、替り〜に寝ずの番、必ず油断召さるな」

よ

ようたんばう 酔うたん坊。泥酔者をいふ。上方の詞。

ようにんしゆ 重要人衆。武家に於て、主君に近侍して重要な事にあづかる役人達。家老の次に位し、主として出納の事務に當つた重職。御用人衆。槍權三上「用人衆まで何うて、その上は縁次第」

夜神樂の庄左衛門 太鼓持の名。單に神樂ともいふ。「かぐら」の條参照。男色大鑑七「さる程に夜神樂の庄左衛門口笛に、もろ〜太鼓おもひ〜の藝わたし」

世が泥の海になる 天地の大變するに譬へる。五十年忌歌念佛上「世が泥の海になるとても、一文も銀はない」

よかんなり よいといふこと。物類稱呼に據るに、ヨイと云ふ事を筑紫でヨカと云ひ、遠州でヨカンと云ふ。西行法師の撰集抄に、いとヨカ也とあり、但し、ヨカン也と讀む口傳であると(俚言集覽)。

よき衣着たる兩人 うまくやつて居る商人。古今集序に「文屋康秀は詞たくみにして、そのさま身に負はず、いはゞ商人のよき衣着たらんがごとし」とあるに據る。雙生岡田川三「歌人に似たる譬

へ草、夫は詞を工にして、よき衣着たる商人の、有るが中にも商人」

よくいにな 蕙苴仁。はとむぎ、つじだま、じゆずだま、たうむぎ、しくむぎなどの異名がある蕙苴の實。漢方の醫藥とする。煎じた汁を、外用又は服用すると、疔の療治などに効がある。

よくぼる よくぼる(慾張)に同じ。むさぼる。織留四「一文に千貫の入れかへよきを、くわつと投げ給へと慾ぼりける」

よこぎる 「横をきる」に同じ。寝物がたり「雪隠の口に禿を番に置き、主は彼の男かたへ行きよこぎらせ侍り」

よこぐるま 横車。(一)横に車を推すこと。無理なこと。意地のわるいこと。よこがみ(横紙)、よこがみやぶりなどいふ類。(二)棒(武具)などの手の一。雪女五枚羽子板下「棒の祕術の水車、横車。腰車、片手輪違ひ、諸輪違ひ」

よこちやうぐるひ 横町狂。よこまちぐるひ)に同じ。

よこづち 横槌。頭と柄とが丁字になつた槌に對して、頭と柄と同じ方面に造られた、頭の横側で物を打つに用ひる槌の稱。藁など打つ槌。二十不孝五「小升横槌を枕として日ばかりうごつき」

よ

**よこてぶし** 横手節。永代藏三「横手ぶし」といへる小歌の出所を尋ねけるに、紀路大湊泰地といふ里の妻子のうたへり」

**よこばしこ** 横梯子。梯子を横に倒して使ふこと。

**よこまち** 横町。横の方に入込んだ町。轉じて、狭斜の巷。色町。よこちやう。

一代男七「車屋の黒犬に咎められて、又西の横町へまはるもをかし」次條参照。

**よこまちぐるひ** 横町狂。横町に通つて遊びくるふこと。色町ぐるひ。兩吟一日千句「通ひ馴れて夜るの契は茶々むちやこ、よこ町くるひにうつる唐瘡」

**よこめ** 横目。監督すること。又、その人。監督。横目。附又は横目役の略。置土産二「この妻の横目を頼み、外より男の出入は堅く吟味して」。男色大鑑二「横目夜廻りを忍び、風俗を變へて」



**よこめつけ** 横目附。もと、武家に於て將士の舉動を監視して非違を彈劾する役。轉じて、見張番。監督。晝夜用心記六「店毎に無役の手代四五人、横目付

あつて、切一寸の紛失をも改め油斷せねば」

**よこめやく** 横目役。横目附の役。前條を見よ。武道傳來記四「十二箇條の惡事、横目役より言上申せば、御僉議極まり」

**よこもの** 横物。横に表装した軸・額などの稱。大矢數三「横物書す黄檗の寺、山水を波上げらるゝ關伽の桶」

**よこや** 横矢。①木工・檜物師などの道具。横槌又は「かけや」の類か。天下馬

「檜物細工をする者(中略)、横矢といふ道具を取直して、だましすましてぶたんと思へば」②横合から射る矢。

**よこれんじ** 横連子。横格子のれんじ。格子が横長に組んである橋子窓。

**横をきる** 廓詞。人の揚げた遊女を私かに犯す。「横番切る」ともいふ。

**横を申す** 無理を言ふ。相手の思ひがけない難題を持ちかける。横槍を入れるといふ類。櫻陰比事一「川島は買取り、前らぬと云ふ。然らば其の證文があるかと云へば、其の方は預け置きたる證文があるかと横を申しかゝられ」

**横を行く** 意地を悪くする。理不盡にふるまふ。一代男六「今日を限りに難儀を

申しかけ(中略)、抑もより横を行けども、はや合點して、少しも氣やぶらず」

**よこをりふす** 横折伏。横に折れまがり伏す。古今集東歌「甲斐がねをさやにも見しかけゝれなく、横をりふせるさやの中山」。釋迦如來誕生會二「横折伏せる松が根に、取つて引据ゑ」

**よさ** 夜さ。「よる」又は「よ」に同じ。重井筒上「夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寝たところ」

**よざかり** 世盛。よごころ(世心)のついた盛り。いろざかり。女腹切上「井筒屋のお花、よ盛り戀盛り」。又、一般に、極盛の時期或は年齢。

**よざくたんば** 與作丹波。丹波與作。馬方の擬名。又、歌舞伎歌の曲名。二代男三「三方荒神引掛け、そりやあたるわのいて」と、與作丹波が馬方の言葉つきも忙しき折節」

**よさこい** 夜さ來い。よさこいぶし。元祿當時の流行唄。土佐國高知から起つたといふ。

**よざとし** 夜敏。いざとし(寢聽)に同じ。眠のさめ易い。すぐに眼のあくさま。

**よざとに** 前條の語幹に、助詞「に」を添へた副詞。眠のすぐさめるやうに。今

宮心中中「久三も表をようしめて、よぎとに寝や」

**よしない** いはれの無い。つまらない。益のない。曾根崎心中「よしない金は遣はせませぬ」

**よしなかぞめ** 二代男「よしなか染の宗吉が白鳥にも書くに盡きせず」

**よしなに** よろしいやうに。都合よいやうに。然るべく。二代男五「萬事よしなに申しなして」

**よしの** 吉野。人名。京都烏原の名妓。

諸國遊里好色由來揃「中興遊女の開山、吉野といへる女郎は、天性つとめ女に備はり、風俗町女にかはりて、伊達にしていやしからず、生れつきて欲を知らず、艶類は貴妃に比べて推量するに、五割もよかるべし」。二代男五「都をば花なき里に成しにけり、吉野を死出の山に移してと、或人の詠めり。亡き跡まで名を残せし太夫、前代未聞の遊女なり」

**よしのうるし** 吉野漆。大和國吉野に産する漆。永代藏六「吉野うるし屋して、人の知らぬ埋み金ある人もあれば」

**よしのがや** 吉野榧。大和國吉野に産する榧。俳言集覽「吉野にては、この木を

財産として數へ、何某は榧の木いく本を所有」などいふ由。又、その榧の實

正月の祝ひとして、三寶に飾る一材料とする。壽の門松上「祝うてどこも吉野榧、かち栗うそでござらぬ本はら」

**よしのたばこ** 吉野烟草。大和國吉野地方から出る烟草。姫山姥二「吉野烟草の刻み賣り、股引がけて三味線とは」。よしのこみいっ。

**よしののやま** 吉野の山。流行唄の曲名。「吉野の山を雪かと思れば、雪にはあらで、やこれの、花の吹雪よの、やこれの」。二代男「吉野の山を雪かと思ればと、唄ひながら起きて」。置土産五「甲

ばつた聲にて、よし野の山を歌ひしを」  
**姫山姥**二「吉野の山の連弾も」

**よしはら** 吉原。①江戸の遊里。②東海道五十三次の一驛。駿河國、原と蒲原との間。③大阪天満池田町の北端、火葬場。二枚繪草紙下「こゝに煙ゆるは吉原よ、あれにふすばる梅田の墓」

**よしはらすずめ** 吉原雀。①よしきり(葦切)の異名。燕雀類の一種で、形色ともに鶯に似てゐるが、尾長く、腹が白い。夏季、葦の中でやかましく鳴立てる。出世瀧徳上「までくと啼く吉原

雀、よしみくの言の葉に。②よくしやべる人のあだな(諺名)。二代男二「吉原雀の早口の茂助めなり」。③江戸吉原の遊廓に常に出入して、よくその内情に通じてゐる者の稱。

**よじべゑ** 與次兵衛。大阪の俳優、荒木與次兵衛のこと。日本演劇の創始期に於て、福井彌五左衛門の陶冶を受け、名優嵐三右衛門と藤田小平次とを折衷したやうな藝風を以て聞え、尙、六方の名手と稱され、手負を巧みにし、且、武道と太刀打とに妙を得てゐた。晩年堀江に劇場を建て、その太夫元となつた。元祿十三年十二月歿(日本演劇史)。胸算用三「與次兵衛が顔見世の初日に」

**よしやがかり** 「よしやふう」に同じ。一代男四「世之介はじめての遊女狂ひ、兩人ともにこの善吉仕懸けを見習へと、挟箱持小者と召連れ、よき風の大男、袴高く、裾取つて、大小よしやがかりに、編笠ふかく着てさしかゝる」

**よしやくご** 「よしやふう」をした男達(をとごども)の組合。俠客の團體の一。俗つれど、「よしや組も若盛り的事、大小の神祇組も、天の岩戸の靜かなる

よ

この御時」  
よしやづくり 次條に同じ。男色大鑑ニ

「あたまつき後下りに髪先短く、上下黒  
き龍門に葉菊の五所紋、絲打の平帯、  
よしやづくりの大小、いかさま衆道の  
わけらしき風俗なり」

よしやふう 「よしや」は縦しやで、ま

よの意。嬉遊笑覽に「このよしやとい  
ふことは、浮世狂ひ、ばさら風流に出  
立つを、よし人は何とも言はゞ言へと  
他を顧みざるをいふ」とある。即ち萬  
治、寛文の頃流行した、一種異様な、  
人目を引く俠客の風體の稱である。よ  
しやがかり。よしやづくり。その各條  
を参照せよ。大矢數「すは〜うごへ  
はよしや風、一ふしに無常は煙土堤は  
月」同四「月もよしよしや〜とよし  
やふう、數紋付けて袖の稻妻」

よしやわざくれ えゝまゝよ。どうでも

構ふものか。自暴自棄して、成りゆき  
に任せる時發する語。「よしやふう」の  
流行と同時に行はれた言葉(嬉遊笑覽)  
よしをかかみこそめ 吉岡紙子染。紙子  
を吉岡染即ち「けんばうぞめ」にした  
もの。憲法染紙子。けんばう(兼房)の  
條を見よ。重井筒上「京の吉岡紙子染、

やぼてりがきか、薄柿か」

四筋の町 大阪新町の廓の内、東西に通  
じた大通り、阿波座、瓢箪町・越後町・吉  
原町の稱。

よせい 餘情。(一)景氣のよいきま。元氣  
を見せること。得意。もと、僭上を「せ  
じやう」と約して「世情」と記し、そ  
れを更に湯桶讀みにしたのであるとい  
ふ。「せんじやう」を見よ。二代男ニ

「今日、出雲加賀の入札に行きて、それ  
からこれへ參つたと、よせいなる商ひ  
ばなし、箱屋の腰つきは隠れも無し」。  
武道傳來記五「水主船頭にあがめられ  
ながら塗情に生れつき」。(二)風情。艷容。  
一代男「身に兵部卿、袖に燒きかけ、  
いたづらなるよせい、おとなも恥かし  
く」。堀川波鼓上「重たき頭撫柳や、向ふ  
鏡によせいあり、殿侍顔の夕べかな」

よせがね 寄金。懷硯三「菊流しの模様  
染、帶の寄金(中略)あり〜と書き

たるは、その儘奥様の生寫し」  
よせがまち 寄櫃。(一)商店の入口の敷居。  
晝間は取りはづし、夜間戸を閉ぢる時  
に入れるやうにしたもの。五十年忌歌  
念佛上「みなこれ戀路のよせがまち、根  
太も根づよき門柱」。(二)中敷居を取りは

づし、二間の部屋を續けて一間とする  
時、一方の隙間に入れる櫃。疊を片寄  
せた隙におく櫃。(近松全集註)

よせごと 寄事。かこつけごと。口實。  
よせことば 寄詞。かこつけに言ふこと  
口實とする言。口實。

よそつま 餘所妻。他人の妻。又、餘所  
におく妻。かこひもの。

よたか 夜鷹。夜、出あるくものに譬へ  
る。大職冠三「大事の男を夜鷹にして、  
あげくにこゝまでのさばりづら」。又、  
特に、やほつ(夜發)のこと。

よだつ 與奪。その人に代つて職權を行  
ふこと。名代。又、その権力。鎌倉室  
町代の語としては、奪に意なく、譲り  
與へる義。最明寺殿百人上臈下「鎌倉の  
御臺所(中略)、自ら執權の與奪ぞと」  
曾我會稽山「御留守なれども、式日  
の、御禮は御臺所に與奪あり」

よつ 四。(一)四つ時の略。午前又午後の  
十時。(二)よつはうぎん(四寶銀)の略。  
正徳元年二月に鑄出された銀貨幣。寶  
の字四つを極印に打つたもの。しはう  
ぎん。  
よついでふのまる 四銀杏丸。紋所の名。  
胸笥川「今は世間に皆紋所を葉附の

牡丹と四つ銀杏の丸、女中がたのはやりもの」

**よつかはり** 四變。(→著物の兩袖と上前(うはまへ)と下前(したまへ)とが、それぞれ色の變つてゐること。又、その著物。一代男五「十二三なる娘の子、四つ替りの大ふり袖、菅笠に紅裏うつて」(→四種の色で染めた布。四色を交互にませた染め方。五人女三「吉彌笠に四つがはりのくけ紐をつけて」

**よつじろ** 四白。馬の毛色。膝から下の毛が白。もの。四つの足が白いといふ義。あしぶち。雪女五枚羽子板下「馬上はよしや芦毛に、雪のよつじろ白覆輪や」

**よつだけ** 四竹。四枚の竹片を兩手の各に二枚づつ握り、掌を閉閉してかちかちと打鳴らすもの。曲節に合せて歌ひ囃しつゝ踊るに用ひる。男色大鑑五「承應元年(中略)、その頃長崎より一平次といへる男來りて、四竹といふ事を始めて、手拍子犬うつ童子まで世にこれをはやらかし、貴人の御手に觸れるゝ物にはあらず」。一代女三「耳か



しましき四つ竹、小比丘尼に定まりての一升柄杓」

**よつだけうち** 四竹打。四つ竹を打つこと。又、四つ竹を打つて歌ひ歩く乞食など。

**よつだけぶし** 四竹節。四つ竹に合せて歌ふ小唄。長崎の人、一平次が創めたといふ。「よつだけ」参照。

**よつづか** 四塚。山城國葛野郡の内。西は藪渡(桂川)に斜に馳せ、南は上鳥羽村鴨川まで直路、造道と稱する(和漢三才圖會)。「一代男七「四つ塚の茶屋あみ戸をあらく叩き起して」

**よつて** 四手。(→相撲で、互に兩手をさし延べて取組むこと。よつてがらみ。(→活花の用語。(→よつてあみ(四手網)の略。例よつてかご(四手籠籠)の略。

**よつてがらみ** 四手搦(相撲の略)。四つ手でがらみつくやうに取組むこと。

**よつとうま** 四馬。影・毛・肉・骨に觸れて驚く馬の喩(増一阿含經)。釋迦如來誕生會四「鞭の影に驚く馬皮を打たれて駭く馬、肉を打たれ骨を打たれ、始めて驚く馬あり。無常に驚く譬へにて、四つの馬に法の水、三界流轉の濁江は、いつか波みつくさん」

**よつのえびす** 四夷。東夷・西戎・北狄・南蠻の稱。四方の野蠻人。源氏烏帽子折一「四つの夷八つつの隅、春ものどかに立つ波の」

**よつのおきな** 四翁。商山四皓のこと。即ち、漢の高祖の時、國難を避けて高山に隠れた四老人、東園公・綺里季・夏黃公・角里先生の稱。髪や眉が白色であつたので四皓といふ。

**よつのかね** 四つの鐘。四つ時を知らせる鐘。四つは午前又は午後の十時。遊廊では、午後の四つ時に大門を閉ぢる習ひであつた。よつもん(四門)の條参照。一代男五「日暮より枕を定め、やうやう四つの鐘の鳴るとき、どうやらかうやらへの字なりに埒明けさせて」

**よつのとりのわかれ** 四鳥別。四羽の鳥が母に別れること。下の話によつて、母子の離別の悲みにいふ。孔子が衛にゐた時、朝夕顔回が側に侍した。或時、哭者の聲を聞いて、孔子は顔回にその何故に哭するかを問うた。回は、その哭聲の單に死者のためのみならず、離別による悲みをも表はす旨を答へた。子曰、何以知之。對曰、回聞、桓山之鳥生四子焉、羽翼既成、將分二千四

よ

海、其母悲鳴而送之、哀聲有似<sub>レ</sub>於此、謂<sub>二</sub>其往而不返也、同竊以<sub>レ</sub>音韻<sub>レ</sub>之。孔子使<sub>三人</sub>問<sub>二</sub>哭者<sub>一</sub>。果曰、父死家貧賣<sub>レ</sub>子以葬、與<sub>レ</sub>之長決。子曰、同也善<sub>二</sub>於讖<sub>一</sub>音矣(孔子家語顔回篇)。

よつはう 四寶。四寶銀の略。しはうぎん。四寶字銀。「よつ」の(ヨ)を見よ。油地獄中「主人の金四つ寶三貫目餘り引負ひ」

よつぼに よい程に。いゝ加減に。油地獄中「かしましい、あたり隣も有るぞかし、よつぼにほたへあがれ」

よつめごろし 四目殺。圍碁の用語。我が四箇の石を以て相手の一石を圍んで取ること。國性爺四「先例吉野の碁盤忠信(中略)四つ目殺しに中手を入れて」

よつめぬき 四目貫。一代男セ「鐵の古鏝ちいさく、柄長く、金の四目貫うつて」

よつもん 四門。四つ時に閉ぢる門。遊廓で四つ時(午後十時)の太鼓が鳴ると大門を閉ぢることになつてゐたのでいふ。遊客はこの四つ門前に歸らねばならなかつた。二代男六「又騒ぐ中に、四つ門打つとて觸るれば、名残惜しきは」冥途飛脚下「馴れし換の終夜も、四つ門の跡夢もなし」。「やつもん」の條参照。

よつをり 四折。女の髪のかひ方の一。一代男一「髪は四つ折りにしどけなくつかねて」

よとき 世時。ときよ(時世)。時勢。世よとも に 夜と共に。夜すがら。終夜。重井筒中「夜が寝られぬに、夜と共に話さう」

淀の小橋 山城國淀にあつた小橋。長さ七十二間。大橋(長さ百二十八間)に對していふ。伏見から大阪に下る船は、この橋の下を通つたといふ。

淀のはんくはい 乗掛馬(のりかけうま)の名。一代女五「大阪の黒舟といふ乗懸馬、伏見の漣浪、淀のはんくはい、かれ是三疋揃へて」

よどみ 淀。よどんでゐること。停滯。逗留。丹波與作上「島田金谷に二日のよどみ、仕合せよしの旅すご六里」

よとり 世取。後とり。後繼者。よつき。冥途飛脚上「これの世とりに貫ひしが」

よなかはんじのとけい 夜中半時時計。夜中、半時毎に鳴る時計。半時は今の一時間にあたる。薩摩歌上「夜なかはんじの時計の聲、心せかするばかりなり」

よなべ 夜鍋。夜業。家並(よなべ)で、夜を並べて仕事する義とも、夜鍋で、鍋をかけ松のひでを焚き、その明りで夜業をする義ともいふ。萬年草下「里のよなべも時過ぎて」

よなほし 世直。地震又は雷鳴などの時厄を恐れて唱へる呪文。もとの通りに吉き世に直るやうにとの義であるといふ。日本振袖始一「御殿も搖ぐ雷聲、わつとひれふす女房達、世直し、桑原と、生きたる心地はなかりけり」

よなみ 世並。(ヨ)世間なみ。世のならはし。その時の慣例。二十不孝一「借次の長崎屋、世並にて百兩取つてため」。(ヨ)普通の經過。肥立(ひだち)。「疱瘡の山あげ」参照。博多小女郎上「溜息ほつとついたるは、世並の悪い抱瘡に二番湯かけし如くなり」

世にある人 時めく人。景氣のよい人。二十不孝一「世にある人の衣配、丹後鱈の肴掛を羨み」

よになしもの 世無者。世間に認められない者。世に捨てられた者。落ちつづれた者。大職冠四「世になし者の鎌足を取立てんため」

よぬけ 夜脱。夜の間を利用して竊かにぬげ去ること。夜にげ。武道傳來記八「宿には早夜脱して居らず」



**よね** 美女。又、遊女。娼妓。女郎。花咄五「銀があるか大臣振がよいか、何れにてもこの二つの中、其の身に備はらずして、よねの来るものでなし。二代男三「當世男にして娼(よね)の好くべき風俗なり」

**よねぐるひ** 娼狂。遊女におぼれること。女郎ぐるひ。置土産三「よね狂ひの意氣地を語りて」

**よねしゆ** 妓衆。遊女たち。女郎衆。曾根崎心中「こゝな妓衆は異な事で、おれらが様に金遣ふ大盡は嫌ひなきうな」

**よねづかをにぎる** 妓柄を握る。女郎買の道に達してゐる。遊女と思ふまゝに樂しむ腕前を得てゐる。色道大鏡「一柄を握る。當道を好みて道をたしむ心なり」。二枚繪草紙上「他國から上つてこの大阪で、よねづかをも握るものが、通例の男と思ふか」

**よねへん** 米偏。こめへん。字畫に於て、米を偏とするもの。下例は、よね(妓)にかけていふ。雙生隅田川四「難波の色里偏に、車偏屋の小里と云うて、人の憎まぬ米偏なるが、その美しさ天人偏の磨きたてたる玉偏故に」

**よねまんぢゆう** 米饅頭。皮を米で製し

た一種の饅頭。

もと、江戸淺草金龍山の麓の名産。五人女四「淺草の米饅頭五つと世に是よりほしき物はない」

尙、近代世事談の飲食門「米饅頭。根元は淺草金龍山聖天宮の麓鶴屋也。慶安の頃、この家の女におよねと云ふあり、すぐれて才智也。この女はじめてこれを製す故、およねまんぢうといへり。根本はふもとの鶴屋うみつらん、米まんぢうは玉子なりけり、これ遺佚(戸田茂睡)がよみし狂歌也」

**世の賢は醫者智者福者(諺)** 織留四「世の賢は醫者智者福者といへり、中にも醫者のなき里には住むことなかれ」

**よのなか** 世の中。その時その處の人氣生業、風俗などをいふ。下例は、米作のこと。織留五「播磨路の世の中が悪うて、つかひ盛り這出が、口の世で置いて下されませいと」

**世は五つの借物(諺)** 身は五つ借物ともいふ。「いつつのかりもの」の條を



うゆぢんまねよ

見よ。

**よはざう** 弱藏(よわざう)。卑語。精力の弱い男。男の性的虚弱者。強藏の對語。一代女「男の弱藏は女の身にしては悲しきものぞかし」

**よばしり** 夜走。夜走ること。船などの夜行にいふ。男色大鑑七「錨を上げてとり母の音、(中略)、七日夜ばしりけはしく」

**世は張りもの(諺)** 世間は外見を張るもの。世の中は見えをかざるが常である。永代藏六「世は張物なれば手まはしばかりにて、大分の借金の有るも存ぜず」

**よばひど** 流星人。よばいど。よはひびと。よばひ(婚)をする人。又、夜、思ふ人の許へ忍んで行く人。一代男二「雲に懸けはしとは、むかし天へも流星人ありや」

**よはひぼし** 流星。婚星。りうせい(流星)。女の許へ通ふ義を寓していふ。萬年草上「なぜに女松が生えまいならば、夜這星でも飛ぶまいか」  
**よひがらしん** 宵庚申。かうしんまち(庚申待)をする日の宵。宵の庚申。「かうしんまち」を参照。宵庚申下「今日は五

日、宵庚申甲子が近い」

よびつぎ 呼次。呼びつぐこと。次々に呼び傳へること。又、その役。取りつぎ。大矢數四「割付の狀呼次の濱、友衛飛ぶが如くに思へども」

よひねまどひ 宵寝惑。宵に眠たがること。宵に眠ること。又、その人。よひまどひ。釋迦如來誕生會ニ「肩々を過ぎ給へば、春の夜ちと短うして、宵ねまどひの後達、前後も知らず寢入ばな」

よひのぞき 宵覗。宵に人家を覗くこと。又、その者。盗みなどの下心あるもの。よひのとし 宵年。年越の日の宵。大年の宵。大晦日の夜。胸算用五「宵の年の切なき事を忘れがたく」

よひまどひ 宵惑。「よひねまどひ」に同じ。懷硯ニ「お袋様の宵まどひの時、竊かに乳母が手引して」

よひやくし 宵薬師。宵に薬師に參ること。ゆふやくし。織留五「八月十二日宵薬師、天神へは願が御ざりまして月まゐり」

よぶ 呼。迎へる。貰ひとる。娶る。二十不孝四「煙も裸ではよぶ人なく」

よぶろぼね 胴骨。「よぶろ」はよぼろ(胴)。即ち、ひかがみ(膝の後の窪み)

の骨。

よほひよほひ 二代男八「更け行く天を見れば、降りもせず曇りて、南の障子に怪しき影法師の映る。誰ぞと問へば、袖野が聲して、お月様が出さんしたといふ。それは忝なにいに、よほひ〜」歌うて、お盃さへ廻りを忘れ」

よまいがた 四枚肩。四人で駕籠を早くこいごと。又、その駕籠。しまいがた。よまいごと よまひ言。愚痴をひとりごとこと。わけのわからぬ繰り言。釋迦如來誕生會四「何やらぶつ〜よまいごとが聞きともない」

よまをとこ 夜間男。「よんまをとこ」の條を見よ。

よみうり 讀賣。世間の出来事を文句に綴つて刷物とし、讀み又は歌ひながら賣り歩くこと。又、その人。

よみがるた 讀骨牌。骨牌の一種。「うんすんかるた」、「めくりがるた」などに對して、讀んで取り得ない幼稚な者の間に行はれたものであらうか(賭博史)といふ。物種集上「札うち初むる三熊野の山、讀みかるた馬の通ひはなかりけり」

よみせ 夜見世。(→夜、通りへ出張つて

物を買る店。(→遊廓で夜間見世を張ること。最初は晝ばかりの營業であつたが、延寶の頃から夜見世を許された。それも、初めは、十一月十二月をば除いて之を許したのであるが、後には、この二箇月をも許し、つまり一年中の夜間營業を許されたのである。織留三「端女郎ぐるひして、夜見世過ぎて霜月の比」。出世瀧徳上「曲輪すまひ(中略)晝にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや」

よみせぐるひ 夜見世狂。遊廓の夜見世に行つて遊興に耽ること。夕霧 波鳴渡中「濱せせり、まだ其の上に(中略)この頃は、夜見世狂ひもついたげな」

よみちがへり 黄泉歸。黄泉から歸ること。死んだものが生きかへること。よみがへり。蘇生。

よみとかう 讀みと伽烏。讀みは「よみがるた」、伽烏は、かぶ(めくりかると)の簡単にされたもの)の古名かといふ。何れも賭博に用ひられるもの。即ち、賭博のこと。大職冠四「彼の親方博奕うち、よみとかうとに屋財家財負けほうけ」

よみや 夜宮。祭日の前夜に行はれる簡

單な祭。宵まつり。一代男八「岩清水に(中略)、いざ思ひ立ち、明日は十九日、人の埃をかづくも由なし、夜宮にといふ」

**よめ** 容貌のよいさま。好目(よめ)即ち「好く見える」義からいふか。薩摩歌上「よい男さへ稀なれば、少しよめなる女房の、びかしやかぶるはとがならず」。又、女を親んで呼ぶ。婚姻當時の女をいふ嫁の轉用か。傾城酒吞童子ニ「あれは御所へ柴入るゝ臚の清水のおよめでないか」。下文は、この「およめ」が自らを「よめ」といつた例。同「柴入れた冥加のため、薪はよめが續けませう」

**よめいりこてん** 嫁入御殿。嫁入の式をする御殿。  
**よめいりびやうぶ** 嫁入屏風。嫁入の時持參する屏風。嫁入道具の一。永代藏ニ「娘おとなしくなりて、頓て嫁入屏風を拵へとらせけるに」

**よめいきさき** 嫁后。嫁となるべき后。嫁の格である后。  
**よめそしり** 嫁誘。(地名)河内國にある田、又、堤の名。嫁を誘ふことにかけ

ていふ。大矢數ニ「爰に又嫁誘田を植ゑ初めて」。一代男「轉合書のあるを(中略)、稻白を挽く藁驥に讀んで聞かせ侍るに、嫁誘田より駈けあがり、大笑ひやまず」。俚言集覽に、河内名所鑑を引いて曰く「志紀の郡の堤を世話にヨメソシリ堤といひならはし侍る。狂歌、よめそしり堤の原を見わたせば、つれ立出づるふきのしうとめ久在」と。

**よめつき** 婬突。羽子を突くに、「ひとこに、ふたご、みわたし、よめご」など數を讀みながら突くこと。大矢數ニ「嫁突や一二三四波の玉、姿は白の米は白みて」。大下馬ニ「この女(中略)獨り羽子を突きしに、それは婬突かと申せば、男も持たぬ身を婬とは、人の名を立て給ふと、切戸おし明けて走り入り」

**よめとりよし** 嫁取吉。曆の詞。嫁取るによい日の稱。懸八卦柱曆下「曆が啜繰り返す、思へばわしが嫁取よし」  
**よめの節** 夜日節。馬の脚の白い部分あるものをよめ(夜目)といふ。即ち、馬の膝關節。源義經將基經「ほねあひしゝなみ。よめのふし」

**よめりする日は死に立** 嫁入する日は再び生家の人として歸らぬ覺悟の扮装

をするといふこと。薩摩歌中「先づ一旦は縁付に、遁れがたなう極まりし、よめりする日はしに立、葬禮の儀式と聞く」

**よめりつき** 嫁入月。嫁入するによい月。三月を忌み、四月を吉とする。傾城反魂香中「娘の年も廿棹、いつのまにかは長持に、桐の葉茂るよめり月、銀杏の前の御祝言」

**よめりぶね** 嫁入船。「よめいりぶね」に同じ。大職冠五「雪の春日の神風や、唐土さして嫁入船、和國に寄する寶舟」  
**よもぎがしま** 蓬島。蓬萊島のこと。ほうらいざん(蓬萊山)を見よ。男色大鑑四「長生のたのしみ、蓬が島の甘い物を喰うて」

**よもぎがほら** 蓬洞。前條に同じ。又、轉じて仙洞御所。  
**よもぎのや** 蓬矢。蓬の葉を羽としてはいだ矢。男子が生れた時、これを桑の弓につがへて四方を射、將來その子が四方に雄飛するための祝ひとした。古く、支那に行はれた習俗で、我が國でもそれを學んだ。松風村雨束帶鑑ニ「産屋の儀式桑の弓、蓬の矢事七夜の御賀」

**よやりひやり** 夜遣日遣。夜も遣り晝も

よ

遣る義。夜も行けば晝も行くこと。晝夜の分ちなしに乗物など遣り進めるさま。一代男も「八枚肩の大乗物、(中略)夜やり日やりに行けば、宇津の山邊のぼり詰め。又、いつといふ定めなく悠々との義か。

よりあひすぎ 寄合過。相寄合つて働き、世を過ぐすこと。互に稼ぎ合つて生計を立てること。ともかせぎ。萬文反古ニ「京も田舎も住みうき事少しも變らず、婦夫はよりあひ過ぎと存じ候」

よりおや 寄親。身を寄せる親方の義。よりこ(寄子)の對語。奉公人の身元保證人。薩摩歌上「中間頭寄親の四十平下見をして、ム、何れも好い奉公人衆」

よりかぜ 頼風。小野頼風。諸曲「女郎花」の主人公。平城天皇の御代、頼風は男山に住んでゐた。契をかはした京の女が、頼風の無情を恨んで、八幡の放生川に身を投げると、その衣の跡に女郎花が生じたといふ傳説がある。「女郎花」の曲はこれに據つて二人の靈を表はし、僧に弔はしめるといふ筋である。

よりきん 綾金。金糸を縊りあはせたもの。一代男「紅の綱前だれ、より金の

玉だすき

よりこ 寄子。寄親に對して、その寄親にかかつてゐる奉公人の稱。武道傳來記「一家一族、寄子の輩まで追々にかけつけ」

よりじま 寄縞。縞織物の一種。五人女ニ「帯は唐織寄縞の大幅前にむすびて」よりせき 寄關。相撲の語。寄り方の關の義か。二十不孝五「勸進元の大關は丸山仁太夫、續きて和歌之助萬之助、寄關には扉閉右衛門、關脇に鹽釜白藤左右に立別れ」

よりそ 縊麻。縊字。縊つた麻の緒。博多小女郎下「駕籠により苧の細引綱」よりたけ 寄竹。浪に打ちよせられて來る竹。流れ寄つた竹。

よりにんぎやう 寄人形。靈を寄らしめる人形。修験者が祈りをする時、生靈又は死靈の代りに供へておいて、祈りつけ降參せしめる童子。かたしもある(形)の類。祈りの後には川へ流すのもある。釋迦如來誕生會「これ摩耶夫人調伏のより人形、生れ年御名を書き、封じこめしは覺えあらん」

よりぼう 寄棒。相手を傷つけないで召捕へる道具、即ち寄り道具の一。罪人

を叩き伏せ、その所持の刃物を打落したりする棒。桿棒。雪女五枚羽子板中「突出す槍を桿棒にて打つつ拂うつ叩きあひ」。生玉心中「すは盗人よ、より棒よ」

よりもとゆひ 縊元結。縊りあはせた元結。雪女五枚羽子板中「小枕捨て、丈長も、よりもとゆひに大たぶさ」よろこびづかひ 喜使。よろこびを述べの使。祝儀の使者。

よろづりちやう 萬賈帳。賣つた種々の品物、その代價、その日附など一切を記しておく帳面。

よろづかけちやう 萬懸帳。かけうり(懸賣)にした種々の品物を記しておく帳面。新小夜風物語上「鳥原へ數年商ひをせし、萬懸帳持たせ、年の暮を急ぎて行くに」

よろづさうばひきやく 萬相場飛脚。種々の商品の相場に關する通知狀を運ぶ飛脚の義であらう。晝夜用心記「一物に心得たる京大阪の萬相場飛脚」よろづやりちやう 萬やり帳。やりは遣で、萬づの支拂を記した帳簿。精進庵「小紫が仕懸今となつて憎い、萬やり帳響昔(きのふ)の雲と消えて行く」

よろひぐさ 鏝草。(→牡丹をいふ、女詞。

白芷。繖形科の草本。薬用となる。

高さ三四尺に達し、奇数羽状複葉を有

し、花は複繖形に開く。かさもち。さ

はうど。すいくち。びやくし。

よろひづき 鏝付。着てゐる鏝を揺りあ

げて、隙間のないやうにすること。鏝

築。鏝突。

よろひどほし 鏝通。九寸五分の短刀。

多くは反(そり)がなく先方が尖つてゐ

る。太刀、脇指に添へて佩び、敵と組ん

だ時に刺すに用ひ、又、自害にも用ひ

る。武道傳來記「はや懐の中にて、鏝

通を心もとに刺し込みながら息絶え

ぬ」

よろひはじめ 鏝初。鏝著初。武家の男

子が十三四歳頃に、初めて甲冑を着る

儀式。

よろひむし 鏝蟲。昆蟲類中の鞘翅類の

總稱。甲蟲(よろひむし)。

よわざう 弱藏。「よはざう」を見よ。

よわみそ 弱味噌。名だけよくて質の悪

い味噌。おにみそ。又、見かけだけで

内心の弱い人。よわむし。大矢數三「弱

みそが一門の肝を潰しけり」

世を渡る 永代藏「惣じて三人口まで

よら

を身過とはいはぬなり。五人より世を

渡るとはいふ事なり。下人一人もつか

はぬ人は、世帯持ちとは申さぬなり」

よんま 夜間。よのま(夜間)の音便。夜

の隙。勤め人などの、夜得る自分の時

間。晝夜用心記「糸繰りの通ひ女、夜

間(よんま)六齋は宿に歸り思ひ」の

約東男、これに命をのぶる心の花をや

りける」

よんまをとこ 夜間男。夜間に忍び會ふ

男。私娼の情夫。他家に奉公などして

ゐる女が、夜の隙の時を定めて、情を

通はす密夫。一代女五「當分の世渡りに

西陣の絲繰りに雇はれ、月に六齋の夜

間男、これもおかしからず」。よまをと

こ。尙、前條及び「ろくさい」を参照。

ら

らいがらばしら 來迎柱。佛堂で本尊を

安置する位置の近くにある圓柱。須彌

壇の四隅にあるもの。武家義理物語「

柿の夏頭巾を著たる頭、來迎柱の順

にちらりと見えけるを」

らいぎ 來儀。來ることの敬稱。來て儀

式に加はること。「來儀の風風」

らいくにつぐ 來國次。刀匠。山城の刀

匠來國俊の門人で、其の女婿となり、

正應の頃頼朝に來て正宗の門人となつ

た。世に鎌倉來と稱される。なほ、國

次に就いては異説多く、同名の刀匠が

時代を異にして諸國にあつた。二代男

七「この刀を見るに、來國次二尺三寸無

疵にして」

らいくにみつ 來國光。刀匠。山城の刀

匠來國俊の子。正和嘉曆年間の人。或

は、國俊の門人で建武の頃に出でたと

もいふ。武家義理物語「外記之進刀

は來國光が作なり」

らいし 品紙。文言を書いた紙の上を巻

く別の白紙。書狀の包紙。又、張紙の

文句の餘白。武道傳來記「この番組の

張所を暫く眺め、惣じてかやうの物は

文字のくらゐ、品紙を見合せ張ること

なり。禮狀。又、書狀の端に書くこと。

追書。

らいぜがね 來世金。來世の冥福を祈る

ために、佛へ上る金。死後の冥加を願

ふための献金。夕霧阿波鳴渡下「あつた

六五九

**らいち** 畠地。餘つて、あいてゐる土地。餘分の地。永代藏<sup>六</sup>。「一間四方の畠地に柀一本植ゑて見るも」

**らいてう** 頼朝(よりとも)の音讀。根元曾我五「義秀・重春狼藉の事、すぐに傳奏してける故らいてう御きげん常ならず」

**らいはいせき** 禮拜石。大阪天王寺南門内太子堂の附近にある石。當寺四石の一で、俗に熊野遙拜石といふ(近松註釋辭典)。

**らうえいがたに** 朗詠谷。京都北郊、岩倉と長谷との間にある。一條天皇の御代、藤原公任が和漢朗詠集を撰した所(京師巡覽集)。

**らうかばんしゆ** 廊下番衆。廊下番の人達。廊下番は江戸幕府の奥向に仕へる番衆の一で、能役者の中から抜擢して補し、苗字を改めて勤番せしめたとす。下例は、それを鎌倉期のものとして用ひた。曾我會稽山「蒲殿御入りと廊下番衆取次げば」

**らうくだし** 牢腐。牢屋で死ぬこと。浦島年代記三「汝ら不忠の臣、命は獄屋の牢くだし、骸は爰に朽ちるとも」。惟喬惟仁位諱四「この者共をば一生牢く

だしに思ふ故、かたの如く牢舎を丈夫に申付けしは」

**らうごし** 牢輿。囚人を載せて送る輿。條を見よ。一代男三「我ふり捨てゝと、らうさい一拍子あげて」。同四「らうさい、その聲の美しさ、彈手は上手」

**らうさい** 勞瘵。勞咳の異稱。即ち肺病。勞症。又、神經の過勞から來る病氣。戀の病、虛勞、鬱症の類ともいふ。兩吟一日千句「らうさいのあけの所を望まれて、お情ながら飲まずにひかへた」。同「弄齋(らうさい)に同じ。榮花唱三「なづまぬ物、鬼のらうさい、主殿が三味線」

**らうさいかたぎ** 勞瘵氣質。神經衰弱から來た氣鬱症。精神過勞の結果、氣のふさいでゐること。前條参照。一代女六「この御坊に晝夜おびやが、かされて、らうさいかたぎになりけるが、人間には限りあり、その強藏様も煙とは成り給ひし」

**らうしや** 籠者(らうしや)。籠舎、即ち牢舎に同じ。らうや。獄屋。又、牢に入ること。動詞のやうに用ひる。天下馬三「様々の申譯その證據もなければ、

是非なく籠者してありける」。二代男六「如何なる事にや、京の籠者をせしに、深く嘆きて」

**らうしや** 牢舎。前條を見よ。重井筒中「二重賣 二重判、牢舎は鏡にかけた事」

**らうそく** 老足。老人のあゆみ。老脚。武道傳來記「老足なれども此道は追付くべし」

**らうそくざや** 蠟燭鞘(らふそくざや)。蠟燭の形をした槍鞘。堀川波鼓下「らうそく鞘の槍印」

**らうにんあらため** 浪人改。浪人の來歴などを調べあらためること。永代藏五「主はこの善惡をたゞさず置きしに、世の浪人改めに皆々所を送りける」

**らうにんせんぎ** 浪人詮議。浪人の身の上を取りしらべること。前條の類語。

**らうばらひ** 牢拂。籠ばらひ。牢屋の罪人を赦してやること。一代男四「御法事に付諸國の籠ばらひ、有りがたやあぶなき此の身をのがれて」

**らうひつ** 牢櫃。籠櫃。牢屋のこと。冥途飛脚中「何を當に人の金、封を切つて撒散し、詮議に逢うて籠櫃の繩かゝると云ふ恥」

**らうやう** 老陽。九のこと。偶数は陰、

奇数は陽、一を若陽といふに對して、九を老陽といふ(貞丈雜記)。碁盤太平記「數は九つ老陽」

らうらいし 老萊子。支那二十四孝子の一人。周の人。七十歳の頃、五色の斑斕の衣を着て童子の姿となり、戯れて舞ひ、親をしてその老を忘れしめようとしたといふ。俳諧師手鑑「父孝に舞ふこきの子や老萊子(如貞)。永代藏三「老萊子が舞振、足にはたらきて」

らうらう 勞勞。つかれたさま。傾城反魂香中「四郎二郎はらうらうと疲れわびたる如くなり」

らかん 羅漢。(一)佛語。阿羅漢。(二)羅漢舞をするもの。兩吟一日千句「小芝居の中は十六左八つ、羅漢うごけば太鼓の一曲」

らかんまひ 羅漢舞。佛語にいふ羅漢の姿に立出つて、舞つたものであらう。小芝居などで、多勢揃つて演じたものと見える。物種集上「一芝居いろくゝとする羅漢舞」。兩吟一日千句「數は十六むさし野の色、花をめでいかなる風に羅漢舞」。前條(一)を参照。

らくあそび 樂遊。したい放題の事をし遊ぶこと。ふざけて楽しみあそぶこ

ら

と。一代男七「末社らくあそび」

らくあみ 樂阿彌。俗世を避けて、安樂に暮す者の擬名。東海道名所記の主人公を樂阿彌陀佛、略して樂阿彌といふ。一代男三「昔は男山、今こそ樂阿彌と、八幡の樂の座といふ所にたのしみを極め」

らくがん 落雁。乾菓子的一種。妙粉(いりこ)に砂糖を加へて、種々の型に入れて固めたもの。傾城反魂香上「落雁。かすてら・羊羹より」

らくきよ 落居。事の定まりおちつくこと。決着。落着。卯月潤色中「娘が願を立て申す、落居の後にはま兄弟、家を迫出し」

らくくわごころ 落花心。みだれ心。熱のさめた心。枕久「世物語上」松原屋の初花に逢ひしが、問もなく落花心になりて、四五日はよね狂ひも止めぶんにして」

らくさく 落索。酒食の残りもの。下學集に「日本俗、呼ニ殘盃冷炙、爲ニ落索一也」。大句數上「らくさくは御心やすく存じ候、關送りして跡の留主事。大矢數四「らくさくや嘯昔はてて鮎胸、心やすさは内海の中」

らくしや 洛叉。梵語(Laksya)。數量の名。十萬。落沙。

らくしゆ 落首。落書の一首の義。又、落書の音轉であるともいふ。嘲弄・諷刺を籠めた、作者匿名の狂歌などの類。女腹切上「難波の京の物語、今の狂歌の取りませし、京童の口ずさみ、落首洛外とりふ」に」

らくしゆつけ 樂出家。世を安樂に暮すための出家。その人。樂阿彌といふ類。男色大鑑四「不斷醫者・樂出家まじりに横手をうちどよみをつくつて笑ふ」。又逸樂に日を送つてゐる、のんきな僧。

らくすけ 樂助。氣樂な男の擬名。のんきばう。又、生活を樂にしてる者の稱。織留二「鹽うりの樂助」。同「身體外より見ての苦み、内證の樂介格別ぞかし」

らくちうづくし 洛中盡(らくちゆうづくし)。洛中即ち京都中の名所などを、繪や文句に書いて並べたもの。永代藏二「煙入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡しを見たらば見ぬ所をありきたかるべし」

らくぢやく 落著。罪科の決定。吟味の結果をつけること。百日曾我四「曾我一類の落著は、ふじ野にて御きた有るべ

し」

らくのりもの 樂乗物。安樂な乗物。お駕籠のこと。榮花咄ニ「樂乗物の窓の飾り、五色の玉房」

らくぼうず 樂坊主。氣樂に暮してゐる僧。樂出家。二代男ニ「こゝに都の樂坊主、したい事して遊びしに」。俗つれづれニ「家菜えたる樂坊主」

らくへんげてん 樂變化天。欲界の六天の中、第五天。自ら五塵(色・聲・香・味・觸)を化して自ら娛樂する故の稱。化天。化樂天。曾我五人兄弟四「とそつ天には手を取交はし、らくへんげ天の戀衣」

らくやうぶんげんそてかがみ 洛陽分限袖鑑。京都の資産家を一覽にした書。そてかがみ(袖鑑)の條を参照。織留ニ「洛陽分限袖鑑の第二十八番目に、山崎屋と見えしは」

らけいくわせい 羅計火星。九曜の星のうち、羅睺曜星と計都と火曜との稱。これに土・水・金・日・月・木の六曜星が加はつて九曜である。  
らごらそんじや 羅睺羅尊者。釋尊の嫡子。羅睺羅の尊稱。母胎に六年間覆障せられて生れなかつたので覆障即ち羅

睺羅と名づけたといふ。佛の十大弟子の一人で、密行第一と稱される。釋迦如來誕生會ニ「生れ給ひて御名をも羅睺羅尊者と聞えける」

らせつこく 羅刹國。羅刹といふ、暴惡な食人鬼のゐる國。  
らちあかずや 埒明かず屋。事の埒をあけない家。掛買の支拂などすまさない人を嘲つていふ。一代男ニ「萬懸帳埒あかず屋の世之介」。胸算用ニ「惣じて掛は取りよい所より集めて、埒明かず屋と知れたる家へ終にねだり込み」

らふそくざや 蠟燭鞘。らうそくざやの條を見よ。  
らんき 亂氣。氣が狂ふこと。きちがひ。狂氣。男色大鑑ニ「身にかへての念頃したしと、俄に口走つて亂氣の眼ざし」

らんくい 亂杖(らんぐひ)。方々に序を亂して打込んだ杖。川・壕など水底に打つて敵を防ぐに用ひる。物種集上「衆道とて股つくさへも有物を、わたる泪の川のらんくい」  
らんけん 舶來の羅紗類。葡語(Laken)の訛。ラーケン。博多小女郎上「さるぜ。羅紗・すためん・かるさい・らんけん・縞子・天鷲絨」

らんじや 蘭麝。蘭花と麝香の香。又、蘭の芳香に似てゐる麝香。かをりのよい香。一代男「蘭麝のかをり人の袖にうつせし事も」

らんじやたい 蘭奢待。奈良東大寺の正倉院御藏の名香。蘭奢待は、胡語で物の善いのを褒譽する義。この三字の畫の内に東大寺の三字が含まれてゐるので、聖武帝が特に珍重せられたといふ。吉野都女楠ニ「帝より賜はりし、蘭奢待の名香」

らんしゆ 亂酒。入りみだれて酒もりすること。又、酒をみだりに飲むこと。太鼓持の綽名。次條の略。永代藏「都の末社四天王、願西、神樂、あふむ、亂酒にそだてられ」

亂酒の與左衛門 太鼓持の名。亂酒を得意としてゐた故にいふ。二代男「鸚鵡の吉兵衛、亂酒の與左衛門まじりに、揚屋町を立破りて」  
らんじん 亂人。國を亂す人。狂人。きちがひ。二代男「昨日までは子を抱きし乳母の、空懷になりて、涙兩袖を貫き(中略)、亂人となつて、悲しや養ひ君は」  
らんたふ 卵塔。周圓くて卵形をした塔。



層を成さぬ石塔。蘭塔。二十不孝ニ「墓に詣り、(中略)卵塔の水ぶねに腰をかけ」。又、卒塔婆。墓石。

らんでんくさり 細かな鎖の上に、紋鎖を入れたものといふ。八重鎖(安齋隨筆)。酒呑童子枕言葉五「大將は(中略)らんでんくさりの墨み具足」

らんにん 亂人。「らんじん」に同じ。男色大鑑六「どれお山の吉彌はと男めづらしく詠め、俄に亂人のごとし」

らんばこ 覽箱。宜旨など入れる箱。蓋のある藤莢の箱。又、骨柳の筥ともいふ。御覽箱。覽筥。

らんばじん 藍婆神。法華經陀羅尼品「爾時有羅刹女、一名藍婆」。日本振袖始「鳩樂茶・夜叉神・藍婆神」

らんばふう びらんばふう(毘藍婆風)の略。「びらんば」を見よ。釋迦如來誕生會二「前へ走ればらんばふう、後へ戻れば毘藍婆風」

らんびやうし 亂拍子。猿樂・能樂などの舞の拍子の一。

らんぶげい 亂舞藝。亂舞の藝。笛・鼓に合せ、亂れて舞ふこと。雪女五枚羽子板下「親の躰けし亂舞藝(中略)、囃せや鼓、吹けや横笛、打てや太鼓」

り

りあひ 利合。利益の歩合。利得。まうけ。繰留「一年の賣物七貫目に足らず、この利合にて上下六人口を過ぎて」又、利息のこと。

りろ 六。ろく。むつ。拳(けん)を數へるにいふ。冥途飛脚中「はま、さんきう、ごう、りう、すむゐ(中略)、こなさん拳の上手」

りうご 輪鼓。鼓の胴のやうに、長くて中のくびれた形のもの。紡錘(つむ)に依めて、しらべ絲をかけるに用ひる具。輪子。立鼓。

りうござや 輪鼓鞘。輪鼓の形をした槍鞘。薩摩歌上「黒らしやのりうござや」

りうこしや 龍骨車(りゆうこしや)。火消用の具。大きな匣の中に、押上げばんぶの仕掛を施し、上に附けた横木を上下して、水



(二) やしこうり

を遠くへ彈き出すもの。りうこし。龍吐水。(二)水をあげて田に注ぐ仕掛のもの。大きな車輪狀に幾多の板を横にして連結し、小川などに仕掛けて廻轉して水をはねあげられるもの。村童などが廻轉の役にあてられた。一見龍骨が横たはつたやうである故の稱。りうこしや。男色大鑑二「秤なやむ町人の悴子、龍骨車にたよる里わらは。又は氷の期日下「すがる涙のりうこしやに、あひの水さへまかすらん」

りうしようん 龍松院(りゆうしようん)。奈良東大寺内の一院。住僧公慶上人は、貞享元年大佛復興の勅許を得て、翌年諸國を勸進してまはつた。

りうぢよ 流女。ながれの女。遊女。俗つれづれ五「高尾は流女、古今の能書」

りうとう 龍燈(りゆうとう)。(一)海中の燐火の、燈火のやうに連なつて現はれるもの。龍が點するものと考へての稱。男色大鑑四「和歌の浦(中略)、七月十日の夜に定りて毎年此所より龍燈の上る事うたがひなし」。(二)社頭にあげる神燈。五人女三「龍燈のあがる時、白髭の宮所につきて」

りうねん 流年。流れ去る年の義。轉じ

り

て、年齢。年輩。新可笑記曰「流年盛り  
の時も過ぎ、黒髪山も霜を削れる齡と  
なる」。武家義理物語六「父藤五左衛門  
いまだ流年さかんれば、後婦は求め  
ずして、美形の妾を置きて」  
龍の駒にも蹴つまづき（諺）弘法にも  
筆のあやまづといふ類。槍權三上「拙者  
程の馬の名人なれども、龍の駒にもけ  
つまづき、馬から落ちて落馬した」  
龍の髭を蟻がねらふ（諺）蟻螂の斧と  
いふ類。大それた、及ばぬことを願ふ  
譬。

りうはくりん 劉伯倫。晋の人。劉伶。  
字は伯倫。大酒家で嘗て酒徳頌を作る。  
常に鹿車に乗り、酒一壺を携へて人を  
して飲を荷つて従はしめ、飲死すれば、  
再び酒徳利の土になるべき心組みをし  
てゐたといふ。

りうまい 置土産四「米も加賀の大ひね、  
或はりうまい又は赤米」

りうもん 龍門（りゆうもん）。龍紋。綾  
紋の訛といふ（但言集覽）。一種の絹布。  
織目が斜で、地が厚く強くて光澤のな  
いもの。よく織地として用ひられる。  
二代男五「龍門の大幅、白縮緬に梅の落  
葉など散らしたる帯するぞかし」。五人

女二「清十郎、龍門の不斷帯」  
りうん 利運。よいめぐりあはせ。好運。  
又、その好運に乗じて、他を顧みない  
こと。自分勝手に振舞ふこと。理運。  
天網烏中「あんまり利運過ぎました。治  
兵衛殿こそ他人なれ、子どもは孫かは  
ゆうは御座らぬか」

りかん 利勘。利得を勘へること。利益  
を打算してかゝること。勘定づくなく  
と。永代藏三「これも利勘にて大佛の前  
へあつらへ、一貫日につき何程と極め  
ける」

りきしだち 力士立。仁王立。金剛力士  
の立つたやうな形。  
りきしや 力者。頭髮を剃つた、中間（ち  
ゆうげん）やうの者。馬の口を取り、  
輿を昇き、長刀を持つて外出の供に立  
ち、その他勞働的の仕事をして、大寺  
などに奉公してゐたもの。力者法師。  
又、力士（相撲取又は金剛力士）のこと。

りきよ 里魚。鯉魚。こひ。又、孔子の  
子の鯉魚。西鶴五百詠「里魚に別れて  
淨土双六、子曰三人よればなぐさみ事」  
りきよ 鯉魚。孔子の子の名。前條參照。  
五十年忌歌念佛下「孔子は鯉魚に別れ、  
思ひの火をば胸に焚き」

りきりやうもの 力量者。力量のある者。  
力のある人。力の強いもの。  
りきん 利銀。利息の金。又、まうけの  
金。利金。

りきんじま 縞織物の一種。一代男二「折  
節春深く、藤色のりきん烏に、わけし  
りだてなる茶縹子の幅廣」。同「最前の  
りきん烏、うそよこれたる淺黄のに替  
りて」

りくき 六氣。天地間の六つの氣。陰・陽・  
風・雨・晦・明の稱（左傳）。又、寒・暑・  
燥・濕・風・雨を陰陽の六氣とする（素  
問）。

りくぎ 六義。もと、詩にいふ六種の體。  
風・賦・比・興・雅・頌の稱。轉じて、和  
歌の體にもいふ。大句數上「六義聞ゆる  
廻文の歌、さくら草定家六つの櫻容」  
りくぎ 六儀。支那でいふ六つの儀容。  
祭祀之容・賓客之容・朝廷之容・喪紀之  
容・軍旅之容・車馬之容の稱（周禮）。轉  
じて、道理、義理などの意。生玉心中  
上「若い時は男を研ぎ、物の筋道りくぎ  
を立て、無理をいふ人でもなく」

りくきゆう 六宮。支那で皇后の宮殿の  
一と、その他の夫人以下の宮室五との  
總稱。



り

蟬丸五「陰陽の二氣相和して一氣と成り、(中略)是を大始と名づけて形のはじめ、理のつきにて、薬師如來の受取りなり」

りはつ 理髪。元服又は裳着(もぎ)の時、頭髪を調へること。又、その役にあたる人。「理髪給仕」。

りふござ 立鼓。りうご(輪鼓)に同じ。

りふござや 輪鼓縮(りうござや)。「りうござや」の條を見よ。

りふじん 李夫人。漢の孝武帝の夫人。「はんごんかう」の條を参照。

りやうがへ 兩替。料金を取つて、或種の貨幣を他種の貨幣と取換へること。又、貨幣と他の物とを換へるにもいふ。

りやうがへだな 兩替店。りやうがへてん。兩替を業とする店。兩替商。兩替屋。

りやうがへや 兩替屋。前條に同じ。胸算用。「利なしに兩替屋へ預け」

りやうぎん 兩吟。連俳の用語。連句を二人で付合ふこと。獨吟の對語。大矢數三「兩吟を思ひ定めて懸る時、常はよい中風かはる也」

りやうぐち 兩口。兩方の口。兩方から馬の口を取ること。一代男五「馬子も兩

口を取るぞかし。又、兩方の入口。二つに分れた店先。織留。「この家の兩口より群衆して、萬を調へて歸れば」

りやうげちがひ 了簡達(れうげんちがひ)。誤解。又、不心得。宵庚申下「ちつとしたりやうげ違ひで、物思はせたいとしたりやの」

りやうけん 了簡(れうげん)。思慮。かんがへ。分別すること。又、こらへること。忍ぶこと。一代男六「名の立ちかれば、了簡して止めさせ」

りやうじ 聊爾(れうじ)。粗忽なこと。失禮なこと。一代男六「胸をおさへて、是は聊爾なざる」といふ」

りやうぜん 靈山。靈鷲山(りやうじゆせん)のこと。釋迦の説法の地として名高い。中印度摩訶陀國にある耑闍崛山。山形が鷲に似てゐるゆゑとも、鷲が多くゐる故ともいふ。靈山淨土。

りやうぜんがさき 靈山崎。相模國鎌倉稻村崎の北東に連る崎。

りやうゑん 梁園。支那、梁の孝王の御苑。修竹苑のこと。竹の園。竹の園生。吉野都女楠四「先帝はりやうゑんのむかしの御遊」

りやくかうふしぎ 歴劫不思議(りやく

ごふふしぎ)。いかに多くの劫(長い時間)を經、どんなに考へても不思議であること。法華經「弘誓深如大海、歴劫不思議」。出世景清五「景清の首(中略)觀音の御首と變じ給ひける、歴劫不思議ぞ有難し」

りゆうこしや 龍骨車。「りうこしや」を見よ。

りゆうこつしや 龍骨車。前條に同じ。

りゆうたつ 隆達。隆達節の創始者。即ち、文祿の頃、和泉國堺町に住んでゐた僧隆達。物種集上「堺を出て西海のみ、隆達へ唄の望をなげきしに」

りゆうもん 龍門。「りうもん」を見よ。

りようぜんがさき りやうぜんがさき(靈山崎)を見よ。

りよぐわい 慮外。ぶしつけ。無禮。松風村雨束帶鑑三「何者ちや慮外な」

りよぐわいの 慮外者。無禮者。ぶしつけ者。最明寺殿百人上臈上「慮外者奴と柄に手をかけ」

りをん りうん(利運)の訛。仕合せ。榮花咄四「越後町の男もりをんに内へ呼び入れ」

りんきかう 悋氣講(りんきかう)。下賤の噂達が寄合つてする無盡講。寄りあ

りやくかうふしぎ 歴劫不思議(りやく

へば夫の悪口など言ふ故に稱する（但言集覽）。轉じて、唯婦人ばかりが寄合つて相語らひ、男の噂などして恠氣を晴らすにもいふ。一代女三「長蠟燭の立切まで、恠氣講あれかしと進め給へば、忽ち御顔持よるしく」

りんきしんき 恠氣辛氣。恠氣と辛（心）氣と。又、恠氣即ち嫉妬のために心をなやますさま。出世瀧徳上「麓に立てる女郎花、りんきしんきとなまめきて、くねる心の男山」

りんざう 輪藏。佛語。轉輪藏の略。一切經などを入れ置く書棚。軸の上を廻轉するやうに作つたもの。建大層龕、中心立二柱、啓二八面、而實諸經、謂之輪藏。令三信心者推之、一匝則與之看讀、同レ功（和漢三才圖會所引釋氏稽古略）

りんじきやく 臨時客。定まつた時でない場合の客。特に、昔、春初に、攝政。關白の家で大臣以下公卿を招いて饗應すること。

りんしやく 恠憤。ものをしみすること。りんせき。最明寺殿百人上臈上「紅が谷經世が屋敷を某望み申せども、御用の場所とて吝惜あり」

りる

りんしよう 林鐘。十二律の一。即ち音樂にいふ語であるが、十二律を十二箇月に配して、六月の稱とする。萬文反古「林鐘十一日」

りんす 遊女が、「御座る」、「有る」などの語尾（變化）として特に用ひたもの。女腹切上「こりや旦那で御座りんすか（中略）、一寸逢ひたう御座りんす。親方ぎよつとし、はていかうりんす」と云ふをなごじや

りんせいぶし 林清節。說經節の一派。林清といふ大夫の語り創めたもの。晝夜用心記「說經は小栗判官、林清ぶしに涙をこぼし」

りんせんせき 臨川堰。山城國葛野郡嵯峨村大井川渡月橋の東、臨川寺の前にあつた石堰。

りんだめ 厘秤。厘。厘毛などの極めて小さい量ををはかる秤。れいてんぐ（釐等具の唐音）。れいてく。れてぐ。胸算用五「小判を厘秤（りんだめ）にて懸ける事なし、輕きを取れば又そのまゝ先へ渡し」

りんと（副詞）きちんと。精確に。嚴正に。永代藏「秤の上目にて一匁二分りんとある事をよるこび」。釋迦如來誕生

會三「秤のおもり、おもりん、りんとかけては、厘も違はぬ天の道」  
りんのたま 輪玉。金屬製の玉。閨中の戲具。一代男八「りんの玉三百五十」

りんぼうせん 輪寶船。旋轉自在に用ひられるやうに造つた船。輪寶はもと佛語、轉輪王が遊行するとき、常に先行して山を崩し岩を破いて坦途にするといふ寶器。百合若大臣野守鏡「先陣にりんぼう船を立並べ、水彈を湛へ」

りんみやうじゆう 臨命終。臨終のこと。命の終りきは。死にきは。

りんもじ 恠文字。恠氣をいふ、女詞。もじ（文字）の條を参照。

りんゑ 輪廻。佛語。車輪のやうに轉廻して、生死の境界から脱し得ないこと。轉じて、執念ぶかいこと。思ひきりのわること。出世景清「十歳、袂をふり切つて、エ、輪廻したる女かな、そこ退けと突きかけて」

る

るす つす（豆子）の轉訛。豆子を宋音で「つす」といふ。もと禪僧の唱へはじめ

るれ

た語。ちよく(猪口)と壺との間のもの。朱塗の木椀。五人女ニ「椀家具壺平るすちやつ迄とりさばき」

るすをさす 留守をさせる。妻にする。家政を取らせる。五十年忌歌念佛上「行くく清十郎が留守をもさせんと存じおさんと申す娘分、連れて姫路へ罷り下る」

るてん 流轉。佛語。生死因果の絶えず轉廻して窮りないこと。輪廻。釋迦如來誕生會ニ「大悲の棹を取らずんば、流轉の波路はよも越さじ」

るふ 流布。世に弘まること。世間に知れわたること。轉じて、噂。評判。武道傳來記「今になつて由なき流布せらるゝ事、天命知らずなり」

るりとう 瑠璃燈。(一)龍燈におなじ。「りうとう」を見よ。懷硯三「海上風絶えて、浪間に金色の光(中略)、鬢づら結びの童子數十人、瑠璃燈を捧げ」。(二)書院の軒などに吊して點ずる燈。武道傳來記「軒の松無用の嵐をおとづれ、瑠璃灯のゆらぐを、誰かは外せとありしに」

せば、これに類友なれば、それは道理と」

るみせつ 縹緲。縹緲は繩、緹はつなぐ。繩目にかゝること。囚人になること。

るるせん 類船。難破した船。難船すること。虎溪橋「類船や京江戸大阪三ヶの月、誰か浦手形落つる雁金」。懷硯四「風絶えて、類船爰に寄せ、泊りの磯といふ所に」

れ

れいあふぎ 禮扇。年始の廻禮などに配る扇。俗家でよく用ひたもの。二代男五「古き縮帽子に寺の禮扇を持添へ」

れいがへし 禮返。禮物のかへし。返禮。萬文反古五「元氣の時禮がへし、又よろこびにまゐり」

れいがんじま 靈岸島。靈巖島。今、東京市京橋區内の東北部の一劃。隅田川に臨み三方溝渠をめぐらして、自ら島地となつてゐる。もと、靈巖寺のあつた所で、佗住居などするものが多かつたと見える。

れいさう 靈想。神佛の感應。靈感。れいじん 靈神。靈驗あらたかな神。感應あざやかな神。

れいじん 俗人。音楽を奏する人。舞樂をする人。樂人。物種集上「はじまつてれいじんの舞は果てにけり」

れいぜいぶし 冷泉節。淨瑠璃節の節付の名。十二段草子の文句から出た語。源氏冷泉節下「冷泉節」

れいせうちよ 靈照女。靈昭女。廬居士の女。禪宗に歸依して悟る所があり、唐の元和年中、魚籃を市に賣りあるいて、父母を養つたといふ。「はうこじ」の條を参照。

れいてく れいてんぐ(釐等具)の約。「りんだめ」の條を見よ。大矢數三「おもりの仕懸分別の外、れいてく星の光もおもしろい」

れいてんぐ 釐等具。りんだめ「に同じ。れいば 禮場。葬禮の場所。會葬場。一代女三「珠數は手に持ちながら(中略)、禮場よりすぐに悪所落の内談」

れいはう 靈寶。よい寶物。寺の珍藏物などを尊んでいふ。榮花咄三「持傳へし物どもを一七日靈寶出だすといへば」

れいりん 伶倫。れいじん(俗人)に同

れうけん もと、支那古代の樂人の名。勘忍すること。宥恕。武道傳來記セ「いつまでも了簡頼むし言ひたるに。又思慮。分別。百日曾我曰「それでは海野が一分立たず、了簡しなほせ朝比奈」

れうけんぶかい 了簡深。思ひやりの深い。同情の厚い。堪忍のつよい。壽の門松中「沙汰なしにそつと逢はせましょ。ア、有難い。了簡深いお菊様」

れうさ 了佐。鑑定家、古筆了佐のこと。古筆氏の祖、名は節世、正覺庵樸材と號す。源姓平澤氏。近江國西川の人、初め彌四郎と稱し、薙髮して了佐といふ。近衛前久に従つて書畫の鑑定を學び、終に古筆鑑定を以て業とした。寛文二年正月廿八日歿、年八十一（大日本人名辭書）

れうさきはめ 了佐極。古筆了佐が鑑定したものの。一代男六「了佐極めの手鑑、定家の歌切」

れうじ 聊爾。そこつ。ぶしつけ。無作法。松風村雨東帶鑑「これ此處な人はいの、近頃聊爾千萬な、女子の裾へあられもない」

れ

び歩く義。錢のこと。おあし。傾城酒呑童子三「料足五十貫文に買取ると」

れうりきき 料理利。料理の手の利いてゐること。料理の道に達してゐること。又、その人。

れうりばかま 料理袴。料理する時に著ける袴。料理人の袴。

れそ それ(其)の倒語。廓などで、男女の一方を陰に指示するに用ひる。「これ」を「れこ」ともいふ。冥途飛脚上「や、れそが言傳したぞや。近日一座致したいと」

れふきかせ 獵きかせ。懷硯三「新艘の舟出(中略)、住吉の松太夫は白幣を騎し、舟魂をいさめ、獵きかせの大藏坊は錫杖を振りたて、この仕合丸上下の順風」

れんげろう 蓮花漏。時計の名。翻譯名義集「廬山遠公之門、有僧慧要者、患山中無漏刻、乃於水上、立十二葉美渠、因波而蓮、以定十二時、昇景無差、今日遠公蓮花漏是也」

れんしや 輦車。もと、宮城の建禮門内を乗るに、皇族その他の貴族に用ひられた車。手で挽くので、てぐるまともいふ。轉じて、貴族が他出に乗り用ひた車をもいふ。男色大鑑三「左近喜悅の

迎ひに、小偷母子共に輦車して來り、御前に誘ひけるに」

れんじやく 連尺。商品を負ひ又は荷つて賣りあるること。又、それに用ひるもの。男色大鑑五「ほくそ頭巾に山刀さして、肩にれんじやく掛け、都の霜先をかながへ、狼の黒燒賣りに上りしが」。連索。又、れんぢやく(連著)とも記す。

れんじやく 連雀。燕雀類の一種。雀より大きく、全身とき色。嘴は扁側で、頭上に冠狀をした羽毛を戴いてゐる。山中に棲んで群をなすもの。

れんじゆ 連衆。俳諧の連句を吟ずる仲間者の稱。織留「昔日の俳諧師(中略)、いづれの連衆にてもよろしき付句をいたされし時は」。又、江戸幕府の連歌始めの時、登城して連歌に加はるもの。

れんしよ 連署。鎌倉幕府で、執權を輔佐し、公文書に連署する重職。最明寺殿百人上臈上「連署昵近の庶々」

れんだう 戀道。戀愛の道。特に男色の道をもいふ。男色大鑑四「二人共に一生女の顔をも見ず、この年まで世を過し、是れ戀道少人を好ける鑑ならむ」

れろ

れんぢやく 連著。(→連著歌(れんぢやくのしりがい)の略。組緒に總を並べて着けたしりがい。(→れんじやく(連尺)に同じ。)

れんとび 連飛。輕業(かるわざ)の類。或は連飛とも書く(嬉遊笑覽)。又、私娼などの、輕佻で、おてんばで、所謂「ちよんの間」の客を取るをいふか。

一代男二「目黒の茶屋を探し、品川の連飛、白山さん崎の得しれぬもの、淺草橋の内にてうなづく事迄を合點して」

れんばい 連俳。俳諧の連句。俳諧を連ねてよむこと。付合。大矢數九「射たりや與市それは磯也大矢數、連俳の直中波の卯の花」。永代藏二「連俳は西山宗因の門下となり」

れんばんがね 連判銀。連判で借りた金。二人以上が連名で判を押して金を借りること。榮花咄二「家賃、或は連判銀、是等は命にも代る程の才覺なり」

れんばんがり 連判借。連判で借りること。新小夜嵐物語下「延米を連判借にして」

れんぼながし 戀慕流。萬治以前に流行した小唄の一。尺八の曲に合せた歌から出たものであるといふ。その「替り

ぶし」に「ゆふべ〜」に身は淺草の、露をふみ分けあの吉原に、しどろもどろと君ゆゑたどる、レンボレツレ」といふ類(日本歌謡史)

れんり 連理。一本の木の枝が、他の木の枝と連なること。男女の情合の濃かな譬とする。「一代男」花つくりて梢にとりつけ、連理は是、我れに取らする」

ろ

ろうごし らうごし(牢興)に同じ。その條を見よ。百日曾我曰「ろうごしの前後きびしく取圍み」

ろうさい 弄齋。弄齋節の略。弄齋といふ俗の歌ひ始めた小唄の節。又、勞瘵(らうさい)といふ病名(この唄を聞けば藥用にまさる義)に起るともいふ。

籠濟又は朗細とも書く。昔々物語「その後(隆達の流行後)百三十年ばかり以前に籠濟といふ遊び坊主、これも歌舞伎者の浮坊主、隆達が事學んで、是も歌を作り、歌の名を籠濟とつけてうたふ。聲はよし拍子ぎきなれば、隆達より格別はやり、諸人弟子に附く(中略)」

唱歌といふは、山がらす、何をいとひて墨染の、淺ぎにあらであたら此の世を、などといふ。らうさい(勞瘵)の條を参照。

ろうしや 籠舎。らうしや(牢舎)に同じ。その條を見よ。新可笑記二「僅のながめに籠舎の難儀數多あり」

ろうのりもの 籠乗物。「らうごし」に同じ。武家義理物語六「切腹仰付けられ、皆指をさし、籠乗物に押入れらるゝ面影を笑ひぬ」

ろうばらひ 籠拂。らうばらひ(牢拂)に同じ。大矢數三「慈悲の春此時ときく籠拂」。新可笑記二「籠拂ひ極まれば此の訴訟仔細あらじ」

ろうひつ 籠櫃。らうひつ(牢櫃)に同じ。今宮心中「籠ひつに入る時、菱屋の婆が阿房盡し盗人飼ひたて」

ろく 陸。正しいこと。平かなこと。全くのこと。十分なこと。まろろく。完全。圓滿。大句數三「岩角をろくにならして柱立て」。同「勝軍磯うつ波のまくり切り、今鳥はらはろくに治る」。二代男七「築山を直しましよ、人いらずに家のゆがみを陸にしましよ」。碌。

ろくかくだう 六角堂。京都、誓願寺通



烏丸にある。正しくは、六角堂頂法寺といふ。本尊は如意輪観音、開基は聖徳太子。坊舎五軒ある内、池之坊は立花の宗匠である。曾て聖徳太子が、その奉持する如意輪観音の像の夢想によつて、此處にあつた大杉を切つて殿を作り、その字(のき)が六稜から成る故に名づけるといふ(和漢三才圖會)。

ろくぎ 六義。りくぎ(六義)を見よ。

ろくけんまち 六軒町。大阪島之内、塗屋町(今の玉屋町)の遊女町。堺屋、桔梗屋、重井筒屋、藤十郎・美濃屋・春木屋伊右衛門・河内屋勘兵衛の六軒の女郎屋があつた故の稱。重井筒中「月は早、渡り初めして中橋や、六軒町の小夜格子」

ろくこん 六根。佛語。眼・耳・鼻・舌・身・意の稱。すべて人間の罪障は、この六つを根原として生ずると説かれる。曾我會稽山四「六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ」

ろくこんじざい 六根自在。佛語。罪障を消滅し、汚濁を遠離して、六根の力用が無礙自在であること。

ろくこんじやう 六根淨。佛語。六根から生ずる妄執即ち色・聲・香・味・觸・法

の執を斷つて、無礙の妙用を得ること。六根清淨。

ろくさい 六齋。一・六・二・七・三・八など定めた、一箇月中の六日の日數。佛語の六齋日から轉じた語。西鶴五百韻「月

に六さい自由なる影、秋の夜は枕ならべてよい加減」。一代女六「江戸に勤め

し時、月に六齋の忍び男、麴町の岡平にまがふ所なし」

ろくざう 六藏。馬方の擬名。轉じて、八藏ともいふ。大矢數二「六藏や冥途の道もきかぬ奴」

ろくじかりんぼふ 六字河臨法。佛語。船を河に浮べて、壇を設けて修する法。六觀音を本尊として、調伏と息災とを祈るための修法。

ろくしき 六識。佛語。六根から生ずる六つの作用。見る・聞く・嗅ぐ・味ふ・觸れる。思ふ。即ち眼・耳・鼻・舌・身・意の知覺作用の稱。

ろくじなむゑもんぶし 六字南無右衛門節。慶長の頃、京都の女太夫六字南無右衛門が語り創めたといふ淨瑠璃節の一派。二十不孝二「觀音經讀むもあり、六字南無右衛門節の淨瑠璃を語るもあり」

六十四部の諸論 印度に行はれる外典(支那の典籍)天文・醫學・文學・博物等の諸論をいふ。釋迦如來誕生會三「傳へずして六十四部の諸論に通じ」

六十の手習 (談) 晩生の譬。時期を過ぎ

ての修業。榮花咄三「今までは夢に見し事もなき三谷通ひ、これ六十の手習ひ」

六十年は送り六十日(の)事暮し難し「六十年は暮せど六十日を暮しかぬる」といふ諺に據る。長い一生はともかくも融

通して暮すが短い間のやりくりにて差支へる。永代藏六「六十年はおくりて六日の事暮しがたし。これを思ふに、それ」

ろくじぶろくぶ 六十六部。諸國巡禮の修行者。六十六部の法華經を書寫して、日本六十六箇國の靈場に一部づつ納めたことから起る。後は、男女ともに鼠

木綿の著物、手おほひ・甲がけ・股引・脚半も同じ色のものを著け、鉦を叩き、

或は鈴を振り、或は扇子を負ひ歩いて家毎に錢を乞ふ者をいふ。六部。基盤

太平記「六十六部の納め經者」

ろくしや 六社。ろくしよのみや(六所宮)を見よ。

ろくしやく 六尺。一)駕籠かきの男。り

よくしゃ(力者)の訛であるといふ。お  
 るせ。轆杓。陸尺。一代男五「乗物二挺  
 並べて(中略)六尺十二人すぐりて」。  
 織留四「毎日八分づつのやとひ轆杓、肩  
 も揃はず昇かれて」。白「酒屋の下部男を  
 いふ、京都の方言。下男。織留一「飯櫃  
 に車しかけて、六尺三人引いてまはり」  
 漉酌。

ろくしやくづつみ 六尺裏。駕籠かきな  
 どがする鉢巻。又は、頬かぶり。

ろくしやくもやう 六尺模様。六尺の著  
 物に染めた模様。駕籠昇好みの模様。

薩摩歌上「六尺模様はぐる〜」  
 ろくしやのみや 六社宮。ろくしよのみ  
 や(六所宮)のこと。その條を見よ。

ろくしゆう 六宗。佛語。奈良時代に於  
 ける、華嚴・律・三論・法相・成實・俱舍の  
 六宗派。南都の六宗。

ろくしゆきん 漉酒巾。酒を漉す頭巾。  
 晋の陶淵明が、酒の熟する毎に頭上の  
 角巾を取つて酒を漉し、漉した後で復  
 た之を著けた(晋書)との故事に據る。

ろくしゆしんどう 六種震動。佛語。佛  
 が説法の時、大地が六種に震動する瑞  
 相。即ち、動・起・踊・震・吼・擊をいふ。

六種中、前三は形に就き、後三は聲に

就く。動は搖颯する、起は高く昇る、  
 踊は地面が凸凹する、震は地鳴がする、  
 吼は大震鳴、擊は打搏して覺悟せしめ  
 るのをいふ。この中、形に就く動の一  
 を取り、聲に就く震の一を取つて、六  
 種震動と呼ぶ。この瑞相は、佛が世界  
 を感動し、惡魔を愕伏せしめるために、  
 その神力を用ひて作り給うたものであ  
 る(佛教辭林)。六種動。

六種の夢 六夢(りくむ)のこと。周禮占  
 夢にいふ六つの夢の種類。正夢、噩夢、  
 思夢、寤夢、喜夢、懼夢の稱。

ろくしよのみや 六所宮。その国内の神  
 社六所を、その國の國府又はその附近  
 に合祀したもの。六所明神・六所大明  
 神・六所權現・六所大神宮など稱して諸  
 國に在る。或は六社宮ともいふ。

ろくしん 六親(りくしん)。父・母・兄・  
 弟・妻・子の稱。又、父・子・兄・弟・夫・婦  
 の稱ともいふ。二十不孝一「無縁法界六  
 親眷屬」

ろくしんつう 六神通。佛語。六つの神  
 通力。一に天眼通、何事何物をも自在  
 に見通す力。二に天耳通、すべての言  
 語音聲を自由に聞き得る力。三に知他  
 心通、他の心中に思念することを自在

に知る力。四に宿命通、自他の宿命・所  
 作事を知る通力。五に身如意通(神足  
 通)、よく山海を飛行して動作意の如く  
 なる力。六に漏盡通、よく煩惱を滅盡  
 して生死の苦を脱し得る力。六通。こ  
 の六通は阿羅漢の得る通力である。雪  
 女五枚羽子板中「天へや飛ばん地へや  
 潜らん、六神通の阿羅漢も、遁れつべ  
 うはなかりけり」

ろくそんわう 六孫王。源經基のこと。  
 經基は清和天皇第六の皇子、貞純親王  
 の子である故に稱する。

ろくだい 壇置臺。平維盛の子、六代御  
 前にかけていふ。大矢數三「只下屋敷は  
 犬の通路、壇置臺(ロクダイ)の君を誰  
 ぞか心懸」

ろくだう 六道。佛語。地獄・餓鬼・畜生・  
 修羅・人間・天上の稱。人は善惡の業因  
 によつて、この六道の何れへか到り趣  
 くべきものとされてゐる。故に又、六  
 趣ともいふ。

ろくだうししやう 六道四生。佛語。六  
 道の中に、胎生・卵生・濕生・化生の別が  
 あるのでいふ。

ろくだうぜに 六道錢。ろくだうせん。  
 死人を葬るとき、棺の中に入れる錢六

六

文の稱。冥途に於て、三途川を渡るときの拂ひにするといふ。新小夜嵐物語上「汝六道銭の内壹文くれぬか」。一代女六「節季を待たず貳角づつ、鬼に六道銭を取らるゝが如し」

ろくだうのうけ 六道能化。佛語。六道の辻にゐる死人を能化・引導する義。地藏尊の異稱。普原傳授手習鑑四「冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の川原で砂手本」

六道の巻 六道の分岐點。六道の辻。ろくだう(六道)の條參照。

ろくだん 六段。淨瑠璃などの仕組にいふ語。一代男五「人形まはして(中略)、六段ながらの出來坊動き出でける」

ろくち 陸地。陸路。りくち。くが。道。すち道。武道傳來記「玉銚の陸地をふみ」。傾城反魂香中「口は陸路をわけながら、胸はしどろの山坂や」

ろくちく 六畜。馬・牛・羊・犬・豕・雞の稱。

ろくちざう 六地藏。佛語。地藏菩薩一體の分身、延命・寶處・寶手・持地・寶印・堅固意の稱。これらは六道にあつて衆生を導かれるといふ。地名。もと

ろくちまゐり 六條參。京都の本願寺に參詣すること。本願寺は東西ともに

六箇所に建てた地藏の稱であつたが、その一つが伏見に残つてあるので、轉じて、其處の地名となつた。仁壽二年小野篁が地藏六軀を造つて安置したのが、伏見法雲山大善寺で、その後保元二年、平清盛が之を御菩薩池(みぞろがいけ)・山科・伏見・鳥羽・加豆良・常盤の六箇所に分けて建て、同時に供養したといふので、伏見に残るのは一體であるが六地藏と呼び、處の名としてもゐる(和漢三才圖會)。一代男「六地藏の馬かた、下り舟待つ旅人」

ろくつう 六通。ろくじんつう(六神通)を見よ。釋迦如來誕生會「六通自在の神足に」

ろくてう 六條。京都六條西洞院のこと。鳥原に遊廓が設けられない前の遊里であつた。

ろくてうがはら 六條河原。京都六條の賀茂河原。よく刑場とされた。

ろくてうどのまゐり 六條殿參。次條に同じ。懷硯「一村の祖母五十人程、小舟に乘行くは、六條殿參りとて有りがたく」

ろくてうまゐり 六條參。京都の本願寺に參詣すること。本願寺は東西ともに

ろくばある。五百韵「一群の鷲たつた東西、六條まゐり源氏のは、かと肝をけす」。五人女三「おかか殿は六條まゐりをさせまじよ」

ろくてん 六天。佛語。欲界の六天。ろくよくてん(六欲天)に同じ。轉じて、天のこと。大矢數三「六天の雲や残つて花に風」

ろくど 六度。佛語。六種の行、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の稱。これを成就すれば佛果を得るといふ。ろくはらみつ(六波羅密)ともいふ。

ろくぬすびと 祿盗人。無能でありながら多くの俸祿を食ふ人を罵つていふ。ろくばう 六方。ろつばう。六法。萬治寛文の頃、江戸にあつた男達(俠客)の六組、鐵砲組・旅籠組(ざるぐみ)・神祇組・鶴鶴組・吉屋組・唐犬組の稱。町六方。六方男達。芝居で役者が花道から揚幕に入る時にする一種の歩み方。兩手を交互に頭上に振りかざし、足を高く踏みしめて行くもの。椀久一世物語下「嵐三右衛門が六法」

ろくはらみつ 六波羅密。佛語。ろくど(六度)に同じ。

ろくばんがしら 六番頭。武家の殿中の

宿直・警衛を勤める役。堀川波鼓中「六番がしら・使番、侍大将・奏者番」

ろくぶ ろつぶ(六腑)を見よ。

ろくぼふ 六法。ろくぼう(六方)を見よ。

ろくまいがた 六枚肩。六人で駕籠を昇くこと。二代男六「六枚肩は三十六文、是は日暮より二時に十里半の道を行く事ぞかし」

ろくみぐわん 六味丸。精力増進劑。大矢數「五月雨のぬれといふ事したいほど、かの六味丸きくほととぎす」。次條參照。

ろくみぢわろぐわん 六味地黄丸。地黄を原料に用ひた六味丸。榮花咄五「通町に六味地黄丸の賣るゝ事大分なり。數百萬人の男、濡なしに暮したるは一人もなく」。和漢三才圖會「仲景が六味丸は之(地黄)を以て諸藥の首と爲す」

ろくみややく 六脈。漢方醫術にいふ六種の脈。心・肝・腎・肺・脾・命門の稱。孕常盤「聲を聞いて六脈を察し、一粒一七の藥を與へ」

ろくよく 六欲。佛語。凡夫の欲求する六つのもの。一に色欲、諸色及び男女の色に對して貪著を生ずる。二に形貌欲、端容・美貌に對して愛著を生ずる。

三に威儀姿態欲、行步・進止・風采態度を見て愛染する。四に語音聲欲、巧言・美音等を聞いて愛著を生ずる。五に細滑欲、男女の皮膚の細かで滑かなのに愛溺する。六に人相欲、男女各々愛する相手を得て互に貪欲するをいふ。

ろくよくてん 六欲天。佛語。欲界の六天。四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・樂變化天・他化自在天の稱。

ろくろく 陸陸。ろく(陸)の重言。十分なこと。存分。重井筒上「せめて三日はろくろくに、寢物語もあれかし」

ろくろく 轆轤。車の走る響。轆轤。又馬の嘶く聲。

ろくろくび 轆轤首。飛頭登の俗稱。頭を非常に長く伸ばし、又短くするを得るといふ一種の妖怪。もと支那の傳説に出でたもの。和漢三才圖會の一説に曰く「漢武帝の時、因假國南方に使す。解形の民有り。能く先づ頭をして南海に飛ばしめ、左手は東海に飛び、右手は西澤に飛ぶ。暮に至つて頭肩上に還る。兩手は疾風に遇へば海水の外に飄る」と。兩吟「日千句「咲花も火ともしてとふるくる首、朽木の柳こはいはなしぢや」。二代男二「轆轤頭の脱けて

鰓堀の崩橋に出でて」

ろくろくりん 六六鱗。鯉の異名。鯉には脇の鱗が一條三十六ある故にいふ。六々魚。三十六鱗。曾我會稽山「龍の氣ざしの六々鱗、(中略)鱒を誂いて龍門の」

ろくろびき 轆轤引。轆轤匏(ろくろがんな)で細工すること。轆轤細工。その細工物。二代男五「飛鳥川の茶入を、妹が轆轤引に静め」

ろさい 邏齋。佛語。禪僧の托鉢にまはつて齋食を乞ふこと。轉じて、乞食のことともいふ。

ろざんずみ 廬山炭。支那の廬山(江西省にある名山)から製出する炭であるといふ。

廬山の雨の世捨人 白樂天のこと。彼の廬山草堂、夜雨獨宿の詩句に「閑省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」などあるに據つていふ。卯月潤色中「廬山の雨の世捨人、捨てても捨てぬ面影は」

ろしう 呂州。呂衆(ろしゅう)。ふろやもの(風呂屋者)のこと。生玉心中上「女蘭男蘭は呂州の姿、白と眺めて白牡丹」

ろせい 盧齋。盧生のこと。邯鄲の邸舎で呂翁と遇ひ、その枕を借りて眠り、

一生の榮花を夢みたといふ青年。いはゆる邯鄲之夢の主人公である。大矢數三「盧齊は見ざる夢の世の中、なら坂や聲が止つて哀也」

ろせい 盧生。前條を見よ。

ろぢぐち 露路口。露路の入口。建物の間の狭い通路の出入口。露地口。

ろつぼう ろくぼう(六方)を見よ。晝夜用心記六「嵐三右衛門が六方」

ろつぶ 六腑(ろくぶ)。六府。漢方醫の語。大陽・小陽・膽・胃・三焦・膀胱の六つ。槍權三上「五臓六腑を吐出し」

ろてん 露轉。陰莖の異稱。朱雀信夫摺下「露轉のさき」。一代男四「女らく寢をすれば、ろてんの通ふ程落し穴あり」

ろどこ 櫓床。船中の間所。櫓をかける所である故の稱。一代男八「櫓床の下には、地黄丸五十壺」

ろはん 魯般。魯の人、公輸般といふ。機械を作ることが巧みで、曾て雲梯を作つて宋を攻めようとしたといふ。一代男五「魯般が雲のよすがもなく」

ろびやうし 櫓拍子。櫓を操縦する拍子。櫓を押し漕ぐ拍子。

ろびらき 爐開。茶家で十月朔日に地爐を開いて、茶會を催し、新茶の壺の口

など切つて用ひること。口切。爐蒸(三月晦日に塞ぐ)の對語。

ろまいびつ 櫓米櫃。船中に備へておく米櫃であらう。懷視「舟人が櫓米櫃より、布袋屋骨牌の、十馬八九の足らぬ取集め物を出しければ」

ろませ 拳(けん)の語。六(むつ)のこと。冥途飛脚中「拳の手品の手もたゆく、ろませ、さい、とうらい、きんな」

ろまら 櫓魔羅。櫓の入子に合せて櫓を受けるもの。櫓床に出た小さい杭。ろべそ(櫓脚)。

わ

わいかぢ 脇枳。傍柁。わきかぢの音便。船の脇腹につけた板。又、そこにかけて押す櫓。

わいら わいら(我等)の訛。おのれら(第二人称)。きさまたち。汝等。博多小女郎上「わいらが居ればやかましい、とつと、行け」

わうじ 王子。小社をいふ。特に紀州熊野權現の攝社を何々王子と呼ぶ。傾城反魂香中「飛鳥の社濱の宮、王子々々は

九十九所」  
わうじやうずくめ あふじやうずくめ。人をおどして無理に書かする文を厭状といふ。轉じて、無理に人を押しつけることを、壓狀づくめといふ。無理壓狀(むりわうじやう)も同じ。養生と書くは非也(近松全集註)。弘微殿鶴羽産家二「又五郎義長はわうじやうずくめの坂川の金時、後さがりの掛鳥帽子、直垂のそば高く顔に塗つたる赤月、夢にも見ぬ大太刀がたなに腰かつられて、あゆめばちぢかり又五郎」

わうだう 横道。道に外れたこと。不正。又、横着なこと。新可笑記四「肝心の武役を缺く事横道なり」。戀八卦柱屏上「私が少しの間、横道致せば事が済む。と言うて盗みするでもなく、人の目をかすめる事」

わうだんじん 黄痘神。黄痘を司るといふ疫病神。日本振袖始三「眞黄に染まる朽葉色、木の葉衣の裏ふれて(中略)、疑ひもなき黄痘神、汝が手では判の色も違ふべし」

わうなん 横難。思ひがけない災難。不慮の災厄。晝夜用心記五「寶を離さねば其の身に横難疫病が取りつくか」

わうにんてい 王仁庭。皇仁庭。壹越調の高麗樂の曲。皇仁。

わろばん 黄幡。陰陽家で、吉凶の方位を司るものとして祭る神の一。羅睺星の精で、常に丑・未・辰・戌の方角を運轉し、他方に行かず。この神の方角に向つて門を立て、土を採ることを忌むといふ。百合若大臣野守鏡三「當年の吉方は知らねど、黄幡も年徳も、本國こそは吉方なれ」

わうまうにち 往亡日。陰陽家で、往くと亡びるとして忌む日。即ち門出・出陣・船乗・移轉その他一般の出行、又嫁娶・元服・建築などに凶であるとする日。すべて一年に十二日ある。戀八卦柱下「雪の松原この世から、かゝる苦患に往亡日、島田亂れてはらく」

わか 若。幼兒。わこ。榮花咄「この若五百八十までと口の中にて祝ひける」

わかえびす 若夷。若惠比須(わかえびす)。京都で正月元日に賣り歩く、鞍馬の毘沙門天並びに惠比須神などを紙の札に畫いたもの。諸人之を買つて、門戸に貼り或は年徳棚にあげて福を祈る。一代男三「扇はく、おえびす、若えびす」と賣る聲に、すこし春の心

地して、日のはじめ靜かにゆたかに「

わかけがね 輪懸金。輪になつたかけがね(紫金)。戸じまりのかけ金の輪の形したものの。大矢数「輪懸がねかけた

わかしゆ 若衆。「男子の元服前、前髪を結つてゐるもの。(念者(ねんじや)の相手たるもの。武道傳來記「若木の

を賣る若者。かげま。又、歌舞伎若衆。置土産「若衆は松島半彌が色盛に遊

わかしゆがた 若衆形。芝居で女らしいやさしい男形に扮する役者。

わかしゆかぶき 若衆歌舞伎。前髪のある少年俳優の演ずる歌舞伎。野郎歌舞伎に對する語。

わかしゆがみ 若衆髪。若衆の結つた髪。わかしゆわげ。

わかしゆぐるひ 若衆狂。若衆を相手として遊興に耽ること。若衆の色に狂ひおぼれること。

わかしゆごろ 若衆頭。若衆として最も美しいころ。わかしゆざかり。

わかしゆしたち 若衆下地。若衆に仕立

つべき者。少年俳優に仕込むべき者。陶算用目「十二二三の若衆下地の小供の、随分々々色品よきを」

わかしゆじま 若衆自慢。若衆たることと得意。若衆としての美を自慢すること。武道傳來記「我が身ながら若衆自慢なりしに」

わかしゆてたち 若衆出立。若衆として出立つこと。若衆の姿をすること。一代男「或時は若衆出立、姿をかへて墨染の長袖」

わかしゆわげ 若衆鬘。わがしゆがみ(若衆髪)に同じ。最明寺殿百人上臈下「左右に白齒の御腰元、島田ほどいて若衆鬘」

わかだいしゆ 若大衆。若い大衆。多数の若い僧徒。

わかたう 若黨。若い郎黨。従者たる若侍。出世景清四「若黨小ものあまた連れ」

わがたつそま 我立袖。比叡山のこと。傳教大師の詠「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、我が立つ袖に冥加あらせ給へ」

に據る。吉野都女楠「わが立つ袖や都の富士、西坂本にぞ入り給ふ」

わがままあめ 我儘雨。或一小區域だけ

に不意に降る雨。「ぬすびとあめ」、「わたくしあめ」といふ類。二代男「蟹が坂を下るに、此所の我がまゝ雨、夕日は照りながら降りて、参宮人も立騒ぎ」わかみんづり 若みんづり。わかみづ(若水)の轉訛といふ。壽の門松上「去年より今年はみづくくく、若みんづりの井筒屋と」。「みんづり」參照。

我が物喰へは籠將軍(諺) 他の世話にならずに自分の働きで暮して行けば、一家の主である。織留「我が物喰へば籠將軍といへど、京も田舎も住みなせる町人、その所々の作法一つも漏るゝ事なかれ」

わかやがす わかやぐやうにする。特に酒もりを賑かにする。酒盃をしきりにやりとりする。源氏十二段長生鳥臺「御酒が御用なら、此方へ入らせおはしませ、酒わかやがせんとぞ興じける。わかや 若代。年若い者としわか。一代女「この度の御用は若代の手代業には申し渡さじ、御隠居夫婦にひそかなる内談」年若い主人。若旦那。置土産「若い女郎に付けたき者はふるき遺手なり、町家の若代に家久しき手代あると同じ」。俗つれ「五年久

しく埋れしが、若代の物となり」わかゑびす 若惠比須。わかえびす(若夷)に同じ。戀八卦柱曆「若惠比須商ひ神と顯はれ給ひて」

わかゑびすうり 若惠比須賣。わかえびす(若夷)を賣るもの。椀久一世物語「烏帽子著て若惠比須賣、曆賣」

わき 脇。脇句の略。連歌・俳諧の第二句。大矢數「思ひ草桔梗かる壹脇になり、さて第三はそこで遊ばせ」。能狂言のシテに次ぐもの。副主人公。脇役。向衣の腋にあたる部分。側傍。傍に退けておくもの。のけもの。一代女「妾の分として殿の氣に入り、本妻をわきになして」

わきあげ 脇明。腋明。年少の男女の、衣の袖を身ごろに縫ひつけずに、腋下(やつくち)を明けておくこと。袖を縫ひつけることを「脇を詰める」、「脇を塞ぐ」といふ。俗つれ「少年の時脇明の袖下長く、男子は十七の春定まつて丸袖になし、女子は縁につくもつかざるも、十九の秋塞ぐこと」。日本振袖始「稻田姫、戴く劍をわき明の袖に包んで衣更へ、太刀を一振かくせしより、わき明を振袖とは、此時よりぞ

始めける」。一代男「脇あけの下人に風情をつくらるゝもあり」

わきあげこそて 脇明小袖。脇を明けて仕立てた小袖。脇明の小袖。

わきがかり 脇懸。わきの物事にかりあふこと。局外者にかゝづらふこと。他に責任をもつて行くこと。壽の門松中「日頃引寄せて異見もして下さつたら(中略)と、我が子のたはけは思はず、脇懸りの恨みが出る」

わきごころ 脇心。脇に心を移すこと。あだしごころ。うはき。五人女「こちや是がすきにて身に替へての脇心、文珠さまは衆道ばかりの御合點」

わきごゑ 脇聲。矢數俳諧に於て、脇座の役から聲のかゝることか。それを謡曲の脇師の語ふ聲とかけていつたのであらう。大矢數「脇聲や今をはじめの事なれば、てにはの悪い所はなほせ」同「俊寛ばかり夢の春也、脇聲や心ほそくも立霞、まづ書いて見て執筆に見せる」

わきざ 脇座。矢數俳諧の役人の一。大矢數「大矢數役人(中略) 脇座十二人」能舞臺の脇柱から少し左後方。わきじろ 脇城。でじろ(出城)のこと。

即ち國主の居城の枝城。特に國境などに築いて敵に備へるもの。又、それを守る城代のこと。薩摩歌上「常江戸・脇城・國脇まで」

わきだいふ 脇太夫。能樂の脇を演ずる役者。わきし(脇師)。又、淨瑠璃の一座で第二位にある太夫。わきがたり。わき。

わきだち 脇立。佛像の本尊の左右に侍立する像。夾侍(けふじ)。わいだち。わきし。織留五「丹後國切戸の文珠堂に金童子といへる脇立あり」

わきつば 脇壺。腋の下。又、あばらばね(肋骨)のこと。曾我會稽山「逃る八幡が肩骨脇つば迄切下げられ、うんと反るを」

脇詰む 衣服の脇を詰める。わきあけ(脇明)をつめそで(詰袖)にする。「わきあけ」の條を参照。槍權三上「まあ二三年して顔も直し、脇つめたら、しつくりの長門印籠」

わきつめ 脇詰。脇を詰めること。その詰めた衣服。又、その衣服を著た者。傾城反魂香上「十八九なる脇詰の、後結びも各別に、銚子盃前に置き」  
わきのう 脇能。脇の人物が重ぜられる

能樂。初番に演ずる能。神事能。傾城酒吞童子四「能の番付大きなせんざいさんん」そう、脇能身の程を白髭、八鳥の崩れ」

わきばら 脇腹。めかけばら。妾腹。庶腹。本妻以外の腹に出來た子。又、よこばら(横腹)。腹の側面。  
わきひら 側邊。かたはら。あたり。そば。そばひら。

わきひら見す 側邊を見ず。あたりかまはず。むやみに、無法なことをする。「そばひら見す」ともいふ。日本振袖始「三」劔を横たへ待ちかくれば、逃るにわきひら水なき井出の、小川を越えて逃げんとす」

わきふさぎ 脇塞。わきつめ(脇詰)に同じ。一代女二「脇ふさぎを又明けて、昔の姿に返る」

わきへなる 傍へなる。そつちのけになる。よそ事になる。今宮心中「流石子飼の主心、叱る心はわきへなり、思はず涙を流さるゝ」

わきまふ 辨。ととのへる。つぐのふ。辨償する。  
わきまへ 辨。わきまへること。つぐのひ。辨償。釋迦如來誕生會四「暇取らう

と思へども、給分のわきまへが、身の皮剥いても叶はぬ」  
わきもこ 脇母子。わきもこ(吾妹子)と母子とかけた戯語と見える。大句數上「脇母子が胸あてていて新枕、くちすはれては唾流るゝ」

わきをどり 脇師。顔見世の芝居で、三番叟の後、大序の始る前に演ずる狂言。脇狂言。

脇を塞ぐ 衣の脇を塞ぐ。わきあけ(脇明)の條を見よ。男色大鑑三「十五にも足らず脇をふさぎ、世に惜しむ人もなく」

わぐ わげ(鬻)にする。たわめまげる。冥途飛脚下「昨日の儘の髪つきや、髪の鬻目のほつれたを、わけて進じよと櫛を取る」

わくざし 棹指。棹指鳥居の略。四足鳥居(よつあしどりゐ)ともいふ。稻荷鳥居の各柱の前後に、貫(ぬき)を備へた控柱をつけたもの。つまり、二本の大柱と四本の袖柱とから成る鳥居。權現鳥居。

わくせき あくせく(醒醒)の訛。せかせかするさま。ゆとりのないさま。薩摩歌下「胸も心もわくせきして、帆掛船さ



「まだるうて」。雪女五枚羽子板中「姫君心わくせき」と。轉じて、心中の鬱積。鬱懷。生玉心中「云ひたい事のわくせきも、主人が見る目憚りて」

**わぐたむ** わがねる。たわめて曲げる。釋迦如來誕生會「ばつと亂れし髮髭は、金銀の針金を、わぐため亂せし如くなり」

**わくらばに** 邂逅。たまさか。まれに。下例は、わくらば(病葉)とかけていふ。夕霧阿波鳴渡中「玄關の戸をとんくと、叩く楓のわくらばに、應ふる者もなかりける」

**わくわく** 心のせき亂れるさま。わくせきするさま。釋迦如來誕生會五「疾しや遅しの途すがら、心わく〜せきかくる」

**わけ** 譯。分。和氣。(戀のいきさつ。情事。好色。賣笑。大句數上「夜半にや君がわけを見つけた、戀といふ一字は世々に有るならひ」。一代男「假名文の反古張、上書悉く破りしは、わけらしく見えて、一間小暗く拵へけるこそくせものなれ」(しよわけ(諸分)。諸雜費。支拂。永代藏「道頓堀にての遊興の分の立たぬ事、一つ書きにして」

**わけが悪い** 道理がわからぬ。とはいもない。すぢの立たない。

**わけがた** 大矢數「棺桶に入れたてまつる六代目、此の通路はわけ方の外」

**わけぎ** 分葱。ねぎの一種。冬になつて茂るもの。ふゆき(冬葱)。置土産「烏賊つくりて、わけぎ膾の蕪り」

**わけこ** 分子。男色大鑑「昔は衆道といへばあらげなく力み、言葉に角を入れ、大若衆を好み、身に拵付くるを此道となしぬ、之をも傳へて分子迄も双物業無用の事と云ふまでもなし、今は山王の祭さへ血を見ず」

**わけざと** 分里。わけ(譯)の行はれる里の義。色里。遊廓。ぶんり。永代藏「分里の美形を見なれたる目なれば」

**わけしらず** 譯知らず。わけ(譯)を知らぬ者。野暮な人。傾城酒呑童子「大事の女郎に立入りし御物語、さぞ譯知らずと思されん」

**わけしり** 譯知。わけ(譯)をよく解してゐること。又、その人。色道大鏡「和氣しり。粹といふまでの詞なり。常道の味をよくわかまへたるといふ心なり是より出でて和氣をたつとも、諸和氣を糺すともいふ。兩吟一日千句「お

もはくの露戀しりわけしり、花薄とても亂れた上からは」。一代男「わけはわけ知りの世之介様なれば何隠すべし」

**わけのさかづき** 戀情を盛つた酒盃。思ひをこめてきす盃。女腹切中「思ひまるらせ候べく、わけの盃見えて。わきてのいづみの思はくは」

**わけのつとめ** 譯(分)の勤。遊女としてのつとめ。客を取ること。一代女「我れまた身の置所なくて、居物宿(すゑものやど)に行きて分の勤も耻かし」

**わけのみち** 譯(分)の道。色の道。戀の道。曾根崎心中「心々の譯の道、知るも迷へは知らぬも通ひ、新色里の賑はし」

**わけめ** 鬻目。鬻に結つた髮の筋目。冥途飛脚下「髮の鬻目のほつれたを、わけて進じよと櫛を取る」

**わけよし** 譯善。譯のよくわかること。又、その人。粹な人。「わけが悪い」との反對。一代男「善吉と語るにわけよし」。又は水の朔日中「女子亭主の譯よしが、穂長の煤を打拂ひ、人に情を掛鯛の」

**驛をたつる** (情を通ずる。遊女が客の

わ

思ひを遂げさせる。(一)事のきまりをつける。諸分(支拂)をすませる。尙、廓の詞としては、下文を見よ。色道大鏡一「わけをたつる。當道に於て、他の批判にあづからぬやうにする也。例へば、(二)女郎の身にして、さし合ひなどきらびやかに繰るか、(三)買手ならば、買ひやうにむざげなく買ふか、遣るべき時分にまぎらはさず祿をつかはすか、(三)揚屋なども曇りたることなく、欲を離れて客をかけひくなどの類なり」

**わこ** 和子。吾が子。又、小兒・幼童を親しんで呼ぶ。わか(若)。若子。織留六「若子様を大事にかけまゐらする事ぞかし」

**わこく** 和國。(一)日本國。(二)倭國。(三)織物の名。大和襦の袖か。二代男八「その時はやればとて、孔雀織網代升形、やうきも和國などの大袖にて、女郎買とは云はれじ」

**わこくびしんぞろへ** 和國美人揃。書名。日本美人畫集ともいふべきもの。大下馬四「その美しき和國美人揃の中にも見えず」

**わこと** 相手の人を親しんで呼ぶ。おこと。おん身。

**わごりよ** 和御寮。和御料。「わごれう」の約。相手を親しんで呼ぶ。男にも女にもいふ。わこと。わぬし。大職冠三「和御寮は五郎介の馴染ちやの」

**わざくれ** 自暴自棄の心を表はす時に發する語。まよ。どうでもなれ。薩摩歌中「頼みを取つてはもう遅れぬ、わざくれ焼けぢや」。又、やけになること。やけ。冥途飛脚上「繼母がかりのわざくれに、悪性狂ひも出来るぞと、父御前の思案で」

**わざくれごころ** やけになつた心。すてばちの心。永代藏四「はかどらぬ算用捨てゝわざくれ心になりて、丸山の遊女町に行きて」

**わざごめ** 早稻米。早稻から收穫した米。わせごめ。

**わざだいはち** 和佐大八。和佐大八郎のこと。弓術家。紀州侯の臣葛西園右衛門の弟子。貞享三年三月、京都三十三間堂に於て、一萬の矢數の中、八千八百七十八矢を中てたといふ。時に年十八。

**わざもの** 業物。技物。すぐれた技を振つて作つたもの。名工の鍛へた利刀。快劍。逸品たる打物。

**わさわさ** 浮き〜と。陽氣に。さわやかに。俚言集覽「わさ〜。清の卯月潤色中「簾を上ぐれば妻のお龜にこやかなる縁の眉、芙蓉の目もとわさ〜と」

**わさん** 和讃。經文の中の偈頌を、國語で七五調の句にうつしたるもの。信徒が佛前に寄つて吟誦するもの。今宮心中下「宵にや和讃夜中にや念佛」  
**鷺の巢を鼠が狙ふ** (諺) 及びもつかぬ譬。「蟪蛄の斧」といふ類。

**わしのみね** 鷺の峯。靈鷲山のこと。りやうぜん(靈山)の條を見よ。重井筒中「鷺の峯ぞと一筋に、這うつ辿りつ傳ひ行く」

**わしのやま** 鷺の山。前條に同じ。五十年忌歌念佛下「烟は同じ鷺の山、りやうぜん淨土で待つべきぞや」

**わじやうらふ** 和上臈。上臈を親しんで呼ぶ語。貴族の女子に用ひる第二人稱代名詞。蟬丸一「なう、和上臈は何人ぞとあれば、さいふ御身は何者ぞ」。又、貴族の男子を呼ぶにも用ひる。

**わじゆず** 輪數珠。數珠のこと。輪になつてゐるのといふ。背庚申下「ア、有り難い南無阿彌陀佛と、輪數珠くり〜

出でにけり」

**わすれがひ** 忘貝。殻は扁平で厚く、前方が少し尖り、後方が圓く、淡紫色で裏面は白い。松風村雨東帯鑑ニ「此の世も忘れ貝、浦の露貝うつせ貝」

**わせる** 来る。女腹切上「さつきにわたした下の町の酒屋のかみ」。槍権三上「眞の臺子の願ひにはあわせなんだか」

**わたあき** 綿秋。綿の收穫時分。綿の出来る季節。置土産ニ「今年も良き綿秋なれば」。俗つれ、五「綿秋を見懸けて」

**わたうちゆみ** 綿打弓。木綿彈弓。「わたゆみ」を見よ。

**わたかまる** 蟻。横取りする。私かに著服する。五十年忌歌念佛下「勘十郎、おのれ一旦主人の金子をわたかまり、清十郎に無實を言ひかけ」

**わたがみ** 綿上。鎧の名所。かたがみ(肩上)の轉であるといふ。押付の板から續いて、前の胸板を釣るために、兩肩にあたつて幅を細くしたところ。吉野都女楠ニ「具足(中略)、わたがみ取つて着せんとす」。又、頭の後方の稱。

**わたくしあめ** 私雨。一地方のみ降る雨。わがままあめ(我儘雨)に同じ。

二代男「この所のわたくし雨、濡るゝ

わ

を厭はず」。五人女五「葛はひかゝりて、おのづからの滴、愛の私雨とや申すべき」

**わたくり** 綿繰。綿繰車の略。木製の車で、軸を廻轉し、綿花を繰り核を去るに用ひるもの。二代男「綿繰・半弓・割松など買物して」。又、綿花を繰ること。或は、その人。

**わたくりぐるま** 綿繰車。前條を見よ。

**わたぐるま** 綿車。いとよりぐるま(紡車)のこと。つむぎ車ともいふ。綿から絲をつむぎ出す車。又、絲をより合はせる車。宵庚申中「内温かに下女、並んでつむぐ綿車、手廻もよくいくはへか」

**わたざね** 綿賃。兩吟一日千句「綿賃も碎けて物やおもふらん、二人が中にもしもとまる子」。置土産ニ「其身はわたざねの油屋に通ひ、かなからうすを踏みて」

**わたし** 渡。わたしかけたもの。一代男ニ「大溝あつて、日影うつろふに棹竹のわたし、とびざやの胸布、糠袋かけて」

又、あゆみいた。わたりいた。

**わたしをんな** 渡女。取次などに召使はれる女。大家で雑用を勤める女。一代

女三「御末女渡し女に至るまで憚りなく、三十四五人車座に見え渡り」

**わたす** 渡。ととのへる。間にあはせる。一代男三「日頃の太盡、よろしくさばき置かるゝと見えて、大座敷わたし、亭主内儀が入替り、けいはく敷を盡くし」

**わたのしんぼち** 和田新發意。南朝の忠臣、和田賢秀のこと。幼時禿髮して新發意と稱した。正平年中楠木正行に従ひ細川顯氏と住吉に戦ひ、後、高師直の軍と四條畷に奮戦して死んだ。彼は特に眉尖刀を善く用ひ、正行等の既に戦死した後も獨り敵に混じて、師直に肉迫したといふ。

**わたぼうし** 綿帽子。眞綿を平たくして作つた帽子。もと老官女が用ひたもの。後には婚禮の時に新婦が面を覆はるに用ひ、又、一般に外出する時などにも用ひた。おきわた(置綿)かづきわた。わたぼうし。一代男三「竹杖をつきて腰をか

がめ、頭わたぼうしに包みまはし、人の中よけて、わき道を行く老女ありけり」



わたぼうし 子帽たわ たわんきこ

わたもち

腸持。臍腑のある、生きてゐるもの(木像などに對していふ)。晝夜用心記六「婆なれど、心は綿持の佛と」。蟬丸四「わたもちの大黒殿ちと拜み奉らんと、その手を取つて引出し、よく見れば直姫なり」

わたゆみ

綿弓。綿うちゆみ。繰綿をはじき打つて打綿とする具。たうきゆう(唐弓)の條を見よ。

わたり

(一)舶來。外國から渡來すること。又、その物。萬文反古ニ「わたりの緞子蓋」。(二)渡り歩く者。わたり奉公するもの。大矢數三「わたり相手に狼藉千萬」

わたりなみ

渡並。世間なみ。普通一般。出世瀧徳下「客の双物預るとは渡並の客のこと」

渡りに舟

(諺)その時に取つて最も好都合なこと。願つたり叶つたり。如「渡り得る船、如「病得る醫(法華經藥王品)。梳久一世物語下「妾の遣りどころ案じけるに、この女渡りに舟、中津川の親里に歸りぬ」

わたりびやうし

渡拍子。祭禮の神輿の渡御を囃す拍子。雙生岡田川五「神の氏子も夏神樂、(中略)渡り拍子の鉦太鼓、天満宮の神事まで」

わたりぼうこう

渡奉公。諸方を渡り歩いて奉公すること。處々の主人に仕へる奉公。物種集上「さめ鞘の身は秋風のいづく共、雲井の雁の渡り奉公」。わたりのもの。わたりびと。

わたりもの

(一)渡物。外國から渡つて來たもの。わたり。舶來品。(二)渡者。渡奉公する者。

わだん

和談。ねんごろに談合すること。妥協。懇談。一代男六「この時和談して、三人同じ枕を並べながら」

わちうさん

和中散(わちゆうさん)。藥種店、定齋方の賣藥の名。暑氣あたりなどの妙藥とされる。男色大鑑「梅の木の家屋とて和中散の賣藥あり、汗をしのぐ冷水うれしく。丹波與作中「梅の木をせさいの辻で、身を粉にはたいてやつて見た。和中散でもきくにこそ」

わちがひ

輪違。(一)輪を打違へて重ねたやうな形。棒(武器)の術などにいふ。雪女五枚羽子板下「棒の祕術の水車(中略)、片手輪違ひ、諸輪ちがひ」。(二)紋所の名。大矢數「かり衣裳何惜からじ御紋付、龜甲輪ちがい箔の置上」

わちわち

わななくさま。ふるふるさま。曾我會稽山四「今わななく。ふるふる。曾我會稽山四」今

臂の雨

臂の雨は身にかゝり、ぞつこん通つてわぢく、物悲しう罷り成る」

わづか

僅。織。つまらぬ。微弱な、名もない。傾城反魂香上「元信と申すわづかの繪かき」。又、貧弱な。まづしい。永代藏「穢なる人なども、その時にあうて旦那様と呼ばれて」

わつさり

爽かに。さつぱり。あつさり。二代男八「好き風の羽織も着たし、わつさりとも仕替へたし」。出世瀧徳下「ア、氣が晴れた、わつさり嬉しや」

わつば

小童。童子を罵つていふ。又、童子自らの卑稱。釋迦如來誕生會「わつばが在所は流沙のかはべ、車匿童子と申すもの」

わなむすび

畏結。輪の形にして、引けば縮るやうに結ぶこと。又、そのもの。綱結。天網島下「先を結んで狩場の雄子の、妻ゆる我れも首締め括る畏結び」

わにあし

鰐足。歩む足つきにいふ語。うちわに、又は、とわに歩くこと。わにぐち。鰐口。(一)恐しい世間の評判に譬へる。重井筒下「あれ見返れば人聲の、我れを尋ねて高津の町を、急ぎ遁るゝ鰐口や」。(二)大きな、見にくい口に譬へる。(三)神佛の堂の軒先などにかけ

太い布紐で打鳴らすやうにした一種の樂器。中空扁平で、鰐の口のやうに下部を裂いた銅製のもの。

わにひやくばい 鰐百倍。鰐の執念に百倍した執念。鰐に見込まれると遁れられぬといふが、それに百倍した執拗さ。曾我會稽山「よし〜今は逃すとも、我が見込んだは鰐百倍、一度はとらで置くべきか」

わぬげ 輪拔。輕業などで、輪をくどりぬけること。

わのり 輪乘。馬術の語。輪の形に乗りまはすこと。武道傳來記「梅の馬場にて輪乘までしたるを」

わびいんじや 倍隠者。わびしく住んでゐる隠者。隠栖する倍人。

わもじ 和文字。われ(第二人称代名詞)おまへ。そなた。

わや 道理の通らぬこと。無茶なこと。無理。わやく。雪女五枚羽子板中「情も了簡もあるべきこと、此の上はわやにする、取戻してくれんず」生玉心中上「わやにしてもさせぬ〜」

わやく 無茶なこと。無茶なこと。前條の類語。

わやくにん 無理をいふ男。わんぱく者。亂暴者。わやくもの。

わらう 和郎。男子を親しんで呼ぶ語。わろ。

わらかか 藁曝。藁の屑にまみれてゐる曝。百姓の妻。農家にはたらく女。一代男「稻臼を挽く藁曝に、讀んで聞かせ侍るに」

わらす 破。くだく。割る。未代藏「正直の頭をわらして、暫時も只居せず」

わらびなは 蕨繩。蕨の根莖から蕨粉を取つた後、その筋で綯つた繩。彈力があつて水に堪へる。

わらふて 蕨筆。藁の穂の心(しん)で作つた筆。わらしべを束ねた筆。傾城反魂香中「隈筆・藁筆・泥引筆」

わらべぎ 童氣。わらはぎ。童の心もち。子供のやうな心。わらは心。わらべごころ。稚氣。

わらべし 童し。童らしい。子供らしい。釋迦如來誕生會「二十八九と見えながら、筆の持ちやうわらべしく、師匠か兄か手を取つて教ふる人も」薩摩歌上「女は相手にならぬと言ひたい者じやが、それも口まねわらべしい」

わらべすかし 童贖。童をだましなぐさ

めること。又、それに使ふ物。子供だまし。傾城反魂香上「上り下りの旅人の童贖の土産物、三錢五厘の商ひに」

わらべたらし 童詰。前條に同じ。わらべたたく 藁を焚く。おだてあげる。煽動する。入れ智慧をしてその氣をつのらせる。冥途飛脚中「鳥屋の客に賄賂取りて、梅川に藁を焚き、彼方へ遣らうといふ事か」

わらんぢをはく 草鞋を穿く。實際の相場を欺いて、うはまへをはねる。下駄を穿く。わらんぢを穿く。

わりき 割木。割つた薪。まきの割つたもの。一代男「手ごろの割木に此の如く眉間を打ちて」

わりぎく 割菊。菊の紋所の一。菊花を割つて合せた形。三割菊、三割裏菊などある。今宮心中「分けてわりなき割菊の、紋の風呂敷引包み」

わりきどき 割口説。ことわりを立てて言ひかきせること。道理を細かに説きあかすこと。今宮心中「我子に意見する如く、叱りつ泣いつわり口説き、二郎兵衛も唯泣入つて」。宵庚申下「さるお寺で、五戒の割口説き聽聞した」

わりぐるみ 割胡桃。男色大鑑五「割胡桃

わ

のはなち目貫の小脇指に、むかし印籠になめし革の中着」

**わりざや** 割鞘。刀劍の鞘の兩がは(差表と差裏)が、それ〴〵色を異にするもの。二十不孝≡「馬乗あけし長羽織に、割鞘の大脇指さして」

**わりちやうづけ** 割帳付。矢數俳諧の役人の一。大矢數≡「割帳付、齋藤幸船」

**わりない** わりなしの口語。理(ことわり)のない、分別のない、隔てのないなどの意。丹波與作中「縁なればこそ情ふれて、抱いしめつゝのわりないこと、嬉しいやら悲しいやら」

**わりばさみのせめ** 割袂のせめ。槍物細工(ひものさいく)などに用ひる具。曲げた槍材などを挟み押へておくものか。天下馬田「割袂のせめといふ物、自然とはづれける」

**わりひざ** 割膝。膝の間をすかして坐すること。雪女五枚羽子板中「頭下げるに隙もなく、割膝痛く」

**わりふ** 割符。破符。符を分割したもの。竹又は木に文字を記して半分づつ分ち持ち、後日合せ見て證とするもの。轉じて、符に限らず、後日に合せ見て證とするものの稱。わりふだ。戀八卦柱

曆上「丁度割符があひました」  
**わりぶた** 割蓋。二枚以上合せた一つの蓋となるやうに作つたふた。桶などに用ひる。  
**わりまつ** 割松。割つた松の薪。特に、松のひでを細かに割つて、燈火用にするもの。二代男「割松など買物して」一代女≡「晝は杉の嵐、夜は割松の光見るより何の樂みもなかりしに」  
**わりまつうり** 割松賣。割松を賣ること。又、それを業とする者、西鶴五百韻「住吉の割松賣は秋さびし、ちいさい時には鹽をふまする」

**わるあがき** 悪足掻。わるふざけ。甚だしくあばれまはること。悪戯。わるいたづら。大句數上「わるあがきいくたび袖を引破り」。槍權三上「母様、悪あがきはしませぬ、わしは侍ちや、槍つかひ習ひます」

**わるがね** 悪銀。質の粗悪な金銭。又、不正な手段によつて得た金銭。あくせん(悪銭)。大矢數≡「悪銀などを見ぬ者のため、浮世茶屋やうすがあつて立破り」

**わるき** 悪氣。わるい考。悪意。又、邪推の心。まはり氣。薩摩歌中「彼の子に

わる氣を付け、人の目を暗ますは」  
**わるくちがまし** 悪口らしい。悪口に似た物の言ひ方の形容。

**わるぐるひ** 悪狂。悪所に行つて狂ふこと。色ぐるひ。大矢數四「悪なるひ二親様へ告の松、露も時雨も大懸り也」

**わるごう** 悪巧(わるごう)。わるふざけ。わるじやれ。悪いてんごう。わるごふ(悪業)。わるがふ。一代男「ひとつも口をあかせず、わるごう有るほど盡して」。傾城反魂香中「銀くれる遣手に、水くれるとは悪ごうな」

**わるすい** 悪推(わるすい)。悪く推量すること。邪推。薩摩歌中「尼の話が蘭が噺に似た故に、そこを以てのわるすいか、イヤ是はいかいおはまり」

**われ** 割。勝負事で、勝負のつかぬこと。あひこ。ひきわけ。もち。

**われずまふ** 割相撲。われ(割)となつた相撲。勝負なしの相撲。

**わらう** 勝。[わらう]の約。わらは。こせがれ。奴僕などをも呼ぶ。釋迦如來誕生會「ヤレ、うまい和郎がある」曾根崎心中「それをば聞くとこの和郎が、顔色がちがうて」

**わわりつく** 取亂してすがりつく。わめ

きながら取付く。日本振袖始<sup>三</sup>「五百襷驚き、わより付き、餘りな無理無駄、きたない欲心持たうより、いつそ奇麗に盗みしたがよいわいの」

**わんきう** 梶久。大阪錦町の豪商、梶屋久右衛門の略稱。その性、もと淳朴で曾て遊里に足を入れなかつたが、其の友に、常に彼れを母が聞いて大に憂へ、新町の遊女松山に喝して遂に耻を免れることを得しめた。彼れはこれに縁つて深く松山に馴染を重ね、果ては親戚に咎められ、座敷に幽せられる始末となり、鬱氣のあまり狂して浮き名を後世に歌はれるに到つた。延寶五年九月七日歿。法名を宗連といひ、墓は寺町實相寺にある。

**わんぎりだいこん** わぎりだいこん(輪切大根)の音便。輪のやうに、切口を圓く切つた大根。

**わんざくれ** 「わざくれ」の音便。その條を見よ。

**わんざん** わざん(和譚)の音便。陽に和するやうにして陰に譏すること。轉じて、無理難題をいふこと。悪口雑言。又、無法非道。日本振袖始<sup>一</sup>「本悪女と

わ  
る

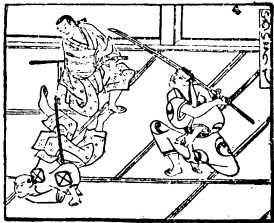
はあの事、惚れて進ぜる男はなし、滅多腹が立つてのわんざん。何方の御意見でも聞入れのある氣質でない」

**わんぼう** 襦袍(をんぼう)。粗末な衣服。卑賤の着る衣服。また、衣服をけなして呼ぶ。わんぼ。本朝三國志<sup>三</sup>「此わんぼうは兵吉に貴殿よりのおしきせ」。姫山姥<sup>四</sup>「身に纏ひし古わんぼう」

# ゐ

**ゐあひ** 居合。劍術の一種。居ながら手

速く太刀を抜いて敵と立ちあふもの。林崎重信に起るといふ(書言字考節用)。長短の打物により、所の廣狭、地の形の高下、坐してゐると立つてゐるとによつて、いろいろの型がある(人倫訓蒙圖彙<sup>三</sup>)。利方。居合ぬき。



(左)てりま (右)ひある

**ゐあひごし** 居合腰。居合の身がまへ。又、それに似た腰つき。普通には、片膝を立てて坐した形。源氏烏帽子折「兩方りきむ居合腰、太刀の柄も掛けよと、振りひしぎ」

**ゐあひぬく** 居合拔。居合の技を演ずる。居合を行ふ。物種集上「居合ぬく習ひ有りとは山の腰」

**ゐがき** 井垣。井の字形の垣。鳥居などの兩脇から作りつけたもの。

**ゐかつげ** 「いかつげ」におなじ。

**ゐがん** 居眼。相撲の語。紛(まがひ)の十二手の一。

**ゐきやく** 違却。違格。もと格式に違ふこと。轉じて、不都合。不届。不埒。薩摩歌上「いらぬ化粧業、何ともゐきやく千萬」

**ゐげん** 遺言(ゆゑごん)。死ぬる時言ひのこと。いひげん。萬文反古<sup>三</sup>「それぞれに相渡し申せとのゐげん、則ち目録の通り書きし」

**ゐごもり** 居籠。社寺に參籠すること。胸算用<sup>四</sup>「津國西の宮の居籠り」

**ゐざになる** 居座に成る。ゐたけ高になる。傲慢にかまへる。「居座高になる」ともいふ。三社託宣<sup>四</sup>「治部卿のわざにな

り、いやこれ左近、破戒無慚とは愚かなり」

**ゐずくみぞ** 居ながら身がすくむことにならざる。誓ふ詞。もし、この話が偽りならば、身が居ずくみにならう」の意に用ひる。冥途飛脚中「かう言へば忠兵衛をにくみそねむやうなれど、ゐずくみぞ、あの男が身のなるはてがかはい

**ゐずまう** 居相撲。すわりずまう。大句敷上「居相撲は作法の外の手取にて、見たところよりすわる腰骨」

**ゐだてん** 韋駄天。佛語。佛法を守護する神。俗に、魔王が佛舍利を奪つて逃げた時に、之を追ひかけて取戻したといふので、よく走る神とされる。韋天將軍。韋駄天神。大句敷上「霞に韋多天雲にかけはし、佛舍利を忽ちとつて歸る雁」

**ゐだてんあしげ** 韋駄天韋毛。よく走る韋毛の馬の稱。

**ゐづつ** 井筒。木又は石などで造つた井戸の圍ひ。井戸がは。或は圓く、或は角形にする。ゐげた。一代男「井筒によりて、うなるこより」

**ゐづつどうろう** 井筒燈籠。井筒の形をした燈籠。囃山姥「井筒燈籠・井戸屋形、這ひまつはる」朝顔の

**ゐづつのをんな** 井筒の女。伊勢物語二十三段「つつゐづつ井筒にかけしまろがたけ、すぎにけらしな妹見ざるまに」とある妹に因んでいふ。

**ゐて** 井手。ゐるせき(堰)。水をせいで止めるところ。せき。卯月紅葉道行「樋の口の、ゐでのみくさの漲つて、ざんぶとこそは沈んだれ」。地名。山城國綴喜郡井手。山吹の名所。

**ゐてん** 位田。位によつて給はる田。大寶令に定められた田制の一で、親王以下五位以上の臣下に給はるもの。大職冠「大織冠といふ冠を脱がせ、位田の所領を取上げ」

**ゐとく** 威徳。威と徳と。又、威光。効能。おかげ。今宮心中下「老女房のゐとくに、男に家を買はせたと、譏りし人にうらやませ」

**ゐどやかた** 井戸屋形。井戸の側に柱を立て、その上に屋根を葺いて、井戸水を覆ふやうにしたもの。囃山姥「井戸屋形、這ひまつはる」朝顔の、花のうてなの輪々ごとに」

**ゐなかやね** 田舎妓。田舎の遊女。

位のある松 秦の始皇が松に大夫の位を授けた故事によつていふ。傾城酒呑童子「位のある松の床柱、とんともたれて寄添ひの」

**ゐのうへはりま** 井上播磨。播磨瑠璃太夫、井上播磨掾要榮。通稱市郎兵衛、京都の人。寛文の頃、虎屋源太夫の門に出て、所謂上方淨瑠璃の開祖として、山本角太夫が軟派の代表者であるに對しその硬派の主將となり、大坂道頓堀に操座を起して好評を博した。井上節と稱してその流を汲むもの多く、遂に大才竹本義太夫を出すに至つた。貞享二年五月十九日歿、年五十四。大下馬「淨瑠璃の太夫に井上播磨とて、さまざまの節を語り出して諸人に口眞似させる」

**ゐのくま** 猪熊。京都の町名。堀川通りと大宮通りとの間にある通りの一。

**ゐのこ** 亥子。亥子。十月の初亥の日の稱。十月には北斗の斗柄が亥の方に指し向ふといふので、初亥の日の亥の刻に餅を食へば病なしと傳へ、上下共に「ゐのこもち」と稱して祝ふ。又猪は子を多く産む故に子孫の繁榮を祝ふのであるともいふ。次々條參照、置土



産二十月の始ゐのこに、こなたからいやと言はせぬ男。縫留「孫子の家を祝ひ」

ゐのこづち 牛膝。ゑのこづち。こしつ(牛膝)を見よ。

ゐのこもち 玄猪餅。亥子餅。十月の初亥の日に祝ひとして食ふ餅。大豆・小豆・大角豆・胡麻・粟・柿・糖の七種を混じて作るといふ。前々條参照。出世瀧徳上「頃しも初冬亥猪餅、小豆織のべんがら縞」

ゐはいちぎやう 位牌知行。先代から譲られた知行。父祖の勳功によつて得てゐる俸祿。永代藏四「末々の侍、親の位牌知行を取り」。雪女五枚羽子板下「忠孝にことよせて、位牌知行に膝を屈むる臆病者」

ゐやいごし ゐあひごし(居合腰)の訛。博多小女郎上「詞は下げてゐるやい腰、いやといはば切りかけんず氣色」

ゐやしき 居屋敷。主人が常に住んでゐる邸宅。武家でないふ、かみやしき(上屋敷)のこと。戀八卦柱曆上「下立賣の居屋敷を町衆の加判でおとよし三十貫目の家賃に入れ」

ゐやひ ゐあひ(居合)の訛。ゐやい。

ゐやひごし ゐあひごし(居合腰)の訛。ゐやいごし。

ゐらん 違亂。法を違へること。きまりを亂すこと。傾城反魂香中「傾城は賣物値段極まる上からは、名古屋山三が妨げいうても叶はぬ管、然るを違亂に及ぶとは」

ゐんがう 院號。院といふ稱號。下例は、修驗者(山伏)の年功を経たものに附する號をいふ。油地獄中「おんあぶら屋仲間の山上講、俗體ながら數度のお山、院號請けたる若手の先達新客まじり」

ゐんがく 韻學。音韻に關する學問。漢字の音韻學。

ゐんぎんこう 慇懃講(いんぎんこう)。禮儀を重んじてする集會。無禮講の對語。鎌田兵衛名所歪下「ゐんぎんこうも取置き、打ちくつるいできげんよう、客ぶり出しに酔うてたべ」

ゐんぐはぼね いんぐわぼね(因果骨)に同じ。

ゐんげん いんげん(因言)に同じ。

ゐんつう 員子。ぜに。おかね。金子。金錢。一代男「前代未聞の傾城ぐるひ男はよし、ゐんつうは有り、親はなし」男色大鑑五「本國佐渡が島へ歸り、明け

くれ員子をためける」  
ゐんつうもち 員子持。員通持。員子を持つてゐること。かねもち。金満家。新小夜嵐物語下「員通持の本大臣には聞かす事もうるさし」

# ゑ

ゑいや 掛聲。えいや。力を入れ、勢ひをつける時などにいふ。源氏烏帽子折「獅子王の力を出し、ゑいや」と捻ぢあへば」

ゑいやおふ 掛聲。百日曾我「箆竹笠かなぐりすて、ゑいやおふと聲をかけ」

ゑいゑいおう 唯し聲。源氏烏帽子折「平家の赤旗討取つたり、勝鬨揚げよ、ゑいゑいおう」

ゑか 會下。佛語。會集して講説を聽聞する學徒。ゑげ。ゑげそう(會下僧)。俗つれん「越前の永平寺は世塵を遠ざかりて、蜀魂も早く聞き、會下の詩人も魂を樹頭に飛ばす」

ゑかちがね 回向鐘。回向する時に叩くかね。  
ゑがらてんじん 荏柄天神。相模國鎌倉

大蔵の東にある天神社。

ゑぐし 蕨。舌や咽をいら〜と刺すやうに感じさせる味の形容。ゑがらい。

ゑごい。よごい。孕常盤<sup>四</sup>「たとへゑぐうて跡で口が腫れても、身は構はぬ」

ゑぐな 蕨菜。蕨菜の義であらう。水邊に生ずる芹に似た草。ゑぐ。えぐ。くろくわぬ。最明寺殿百人上臈下「妻は手足も土大根、蕨ゑぐなも摘み持ちて、歸る山路の」

ゑげ 會下。佛語。禪宗・淨土宗などで、學徒が會集して講説を聽聞する所。また、その學徒なる僧。ゑげそう。ゑか(會下)參照。

ゑさうふばく えさうふばく(依草附木)が正しい。その條を見よ。

ゑさし 餌差。餌刺。鷹の餌とする小鳥を刺して捕へること。又、それを業とする人。江戸幕府では、鷹匠の部下に屬する職をいふ。源氏烏帽子折二「鷹に捕らるゝ餌差にさゝれな」。又、とりさし(鳥刺)のこと。即ち、鴉竿(もちぎを)で小鳥を刺して捕へ、或はその小鳥を賣買する人。櫻陰比事三「浪人餌刺の許に行きて、同道して御屋形に參り木末の鶯を刺し留めさせ」

ゑじかご 衛士籠。衛士の篝火を焚く籠の形に似た香爐の稱。「みかきもり衛士の焚く火の夜は燃えて、晝は消えつゝ物をこそ思へ」の詠に據つていひ出したもの。ゑじこ。晝は消えて夜はやうやう戀衣」。物種集上「衛士籠の煙と成りし感陽宮」。一代男「香包み、衛士籠」。名残の友「田舎人は、たとへ衛士籠を、雛の綿の塵よる物かといふも笑ふまじ」。次條參照。

ゑじこ 衛士籠。前條と同じ。亂曲揃「香箱みかきもりゑじこふせごはねやの物」。同書頭註に「ゑじとは禁中の火をたくもの也、こゝはきやう(香)のふすべかご也」

ゑすだれ 繪簾。繪をかきあらはした簾。兩吟一日千句「繪簾に餘所目をせくもはづかしや、りんきははれな夕暮の月」

ゑせもの えせもの(似非者)。あやしむ者。うろんな人。國性爺三「和藤内といふゑせ者」

ゑせわらふ えせわらふ(似非笑)。そらわらひする。強ひて笑ふ。せゝらわらふ。百日曾我「一祐經ゑせわらひ、緩怠なり忠常」

ゑそらごと 繪空事。繪の上のそらごと。想像を加へて畫いた繪の稱。轉じて、物事におまけての多い譬ともする。

ゑちかり股 十分にまたぎ得ないこと。足の運びのすくんでゐること。弘徽殿鶉羽産家二「大太刀がたなに腰かつられて、歩めはゑちかり又五郎」

ゑちござらし 越後晒。越後國から産するざらし布。ゑちご上布。

ゑちごまち 越後町。大阪の遊廓新町の町名。吉原町の北に並んだ通り、西は佐渡島町に續く。一代男六「越後町の北側、中程の格子に」

ゑちぜんわた 越前綿。越前國から産する綿。ひぢわた(駄綿)のこと。大矢數上「越前わたや袖なし羽織」

ゑづ いとはしい時發する語。ゑづく(嘔吐)の略であらう。傾城反魂香中「あの死骸の傍へ出ることか、ア、ゑづ。さりながら、いやと云ふも子細らし」

ゑつさい えつさい(悦哉)を見よ。百日曾我「御鷹は、つみゑつさい。さしぱ」

ゑどる 繪取。いろどる。彩色する。双は氷の朔日中「吹かぬ風もつ扇いか、雲をゑどるに異ならず」

**ゑにち** 慧日。惠日。佛語。佛智の廣大

で、あまねく衆生の冥府を照らす日に譬へていふ。釋迦如來誕生會「三千世界三世の衆生、惠日に照らす大恩教主」

**ゑのこづち** 牛膝。ごしつ(牛膝)に同じ。

**ゑのころ** いぬころ(狗兒)のこと。ゑぬころ。犬の兒。

**ゑのぼり** 繪幟。繪をかけた幟。五月の節句などに立てる、繪を染め出した幟。油地獄中「見れども餘所の繪幟に、影も隠れて」

**ゑば** ゑばみ(餌食)に同じ。

**ゑはう** 惠方。えはう(吉方)。陰陽家の祭る歳徳神(としとくじん)のおはす方角。又、明きの方ともいひ、萬事に吉であるとする。年によつてその方角を異にする。としとく(年徳)の條参照。

織留三「年徳棚を買ひければ(中略)惠方をあらため釣りに歸りぬ」

**ゑはうがみ** 惠方神。「えはうがみ」を見よ。出世瀧徳下「この浪花津の惠方神、民安全こそ目出たけれ」

**ゑはうくわはう** 惠方果報。うんぶてんぶ(運否天賦)といふ類。天運で如何ともしがたいことにいふ。女腹切中「もみ

團は惠方果報、後に無理いふまいぞ」  
**ゑはうまゐり** 惠方參。えはうまゐり(吉方參)を見よ。

**ゑばみ** 餌食。鳥獸・魚蟲に食はせる物。

**ゑば** ゑさ。ゑ。置土産ニ「何ぞと見れば棒振蟲、是れ金魚のゑばみなるが」

**ゑびすじま** 夷島(えびすじま)。和泉國大鳥郡の内。和漢三才圖會「寛文四年八月八日始めて涌出せる島なり。(中略)

嘗て聞く、此の海中に石像の戎あり、故に戎を以て町の號とすること久し云々」。置土産ニ「毎日に忍び御座舟に、みねのこごらしを乗せて、夷島の遊興」

**ゑびすむかへ** 惠比須迎。「えびすむかへ」を見よ。

**ゑぶご** 餌釜。餌を入れるぶご。特に、鷹の餌を入れる器。えぶくる。ゑつぼ。

**ゑぼしたから** 烏帽子寶。むすこ(息子)のことをいふ。口奇の巫女の常套語。

立烏帽子、或は寶の烏帽子ともいふ。又、親のこと。卯月潤色中「烏帽子寶の親仁様、内のみまめに廻はされて」

**ゑぼしづげのまり** 烏帽子附の鞆。蹴鞠の語。天下馬四「飛鳥井殿のゑぼしづげの鞆を見て」

**ゑぼしはじめ** 烏帽子始。男子が元服し

て、始めて烏帽子を着けること。又、その儀式。

**ゑぼしや** 烏帽子屋。次條を見よ。

**ゑぼしをり** 烏帽子折。烏帽子を造ること。又、それを業とする人。ゑぼしや。

織留四「烏丸に烏帽子折は年ふりたる事にて」

**ゑまいしや** 繪馬醫者。はやらぬ醫者のこと。病家を廻るやうに見せかけて、

寺社の繪馬堂などを見て目を暮らす醫者の義。永代藏ニ「醫師も傾城の身に同じ(中略)、身すぎは缺けて隙の有る程氣の毒なる者はなし。人には繪馬醫者といはれ、口をしかりし」

**ゑみやう** 慧命。佛語。佛法の命脈。又、智慧の稱。智慧はよく無明を排除して、衆生が本來具有する佛法の命を保つ故にいふ。

**ゑむしろ** 繪筵。繪席。茵をいろ／＼に染めて、繪模様など織り出したむしろ。花むしろ。一代男「二つ折の繪むしろに、木枕の音もをかしく」

**ゑむしろおり** 繪席織。繪席を織ること。又、それを業とする人。ゑむしろうち。椀久一世物語上「傾城狂ひを必ず止まるべし、やめずば末々繪筵おりか道心

者になるべきと

**ゑんまいしや** 繪馬醫者。ゑまいしや(繪馬醫者)に同じ。織留四一世間に繪馬醫者といふ事子細を尋ねけるに(中略)、難波の寺社をまはりて目を暮し

**ゑらぼね** 「えらぼね」を見よ。

**ゑりくりゑんじよ** 「えりくりえんじよ」を見よ。

**ゑりつき** えりつき(櫛附)を見よ。

**ゑんあうのつるぎ** 鴛鴦の劍。鴛鴦のふすま」といふに因み、且、鴛鴦の劍羽(おもひば)にかけて言つた語。武道傳來記五「かさねる袞(ふすま)はこれぞ鴛鴦の劍を以て、いとしと思ふ兄分の敵を討て」

**ゑんごくしやうじき** 遠國正直。迂濶で馬鹿正直なことか。榮花咄四「汝が望み次第、開合せて參れとあれば、あるじ喜び、出す吸物段々申しつけて、彼の問屋へ行く。さりとは遠國正直見えたる、先づ貫はぬといふ事手ぬるし」

**ゑんざ** 圓座。藁・菅・藁などで、圓く渦のやうに編んで作つたしきもの。わらふだ。二代男六「板の間には敷捨ての圓座」。五人女三「圓座借りて遠目をつかひ」

**ゑんしう** 遠州。(人名)小堀遠州の略。遠州流茶式の祖。名は政一。初め豊臣秀吉に仕へ、後徳川家康に仕へて遠江の田一萬石を賜はり、從五位下に叙せられ、遠江守と稱した。禁裏又は柳營の作事奉行を勤め、元和九年伏見奉行に補せられた。在職二十四年、正保四年六月六日卒、年六十九。點茶の外、和歌・書畫・活花・器物鑑定なども善くしたといふ。男色大鑑五「若衆と庭木と大きにならぬものならばと、物敷寄よき遠州も申されしとなり」

**ゑんしうあんどん** 遠州行燈。まるあんどん(丸行燈)の一名。和漢三才圖會、家飾



丸あんとん

具、行燈の條に、「或は圓周の二字とす。近世の制、圓くして内外三柱あり。上下輪を設け、内なる者搖がず、外なる者能く旋りて開闔意に任ず。或は云ふ小堀遠近守正一が始めて之を制す、故に、俗に遠州行燈と曰ふ」と。男色大鑑二「世に遠州行燈程の事もまた出来まじき物ぞかし」

**ゑんしやうすけさだ** 永正祐定か。備前國長船の刀匠、横山氏與三左衛門尉は延徳の祐光の子で、永正天正年間の人、祐定の初世である。傾城反魂香上「叶はぬ時はゑん正すけさだ、あつちへ遣るか此方へ取るか首がけの博奕」

**ゑんでんかう** 袁天綱。唐、成都の人。親相の大家。太宗に仕へた。新可笑記「一人相を以て善惡を知ること、唐の袁天綱、我朝の清明ごときさへ偶中といふ事もあり」

**ゑんとん** 圓頓。佛語。圓は教法がまだか、缺損も障礙もないことを顯はし、頓は化益の効の頓速である意を示す。つまり、華嚴・天台のやうな一乗教の、圓融無碍自在で、如何なる機根の者をも、忽ちに佛道を得しめることをいふ。この教によれば、功德圓滿して成佛が頓速である故の稱。

**ゑんべん** えんべん(縁邊)の條を見よ。  
**ゑんまてう** 圓魔鳥(えんまてう)。作り物の見世物として、かく名づけるものが興行された。永代藏四「鳥を驚の見世物を拵へ、一年は圓魔鳥とて作り物珍しく。俗つれ」五「堺町にて見世物のゑんま鳥の木戸番」

# を

**をかざき**

岡崎。小唄節の名。をかざきをどり(岡崎踊)の略。一代男五「やうやう此のほど岡崎を覺えたる手つきして只やかましき撥音」

**をかざきぢよろしゆ**

岡崎女郎衆。前條に同じ。丹波興作上「岡崎女郎しゆ〜岡崎女郎しゆと、もつれ寝よやれ藤川に」

**をかざきづきん**

岡崎頭巾。熊坂頭巾(丸頭巾に鍔のついたもの)に同じかといふ。

**をかざきをどり**

岡崎踊。踊に合せた小唄節の名。三河國岡崎で唄ひ出されたもの。「岡崎女郎しゆはよい女郎衆」といふ歌詞は、古く天正年間に行はれ、寛永年中には箏歌にも用ひられた。又、一節切や三味線にも用ひられた。踊の様は、還魂紙料に「今の踊に六拍子といふが、是れ即ち岡崎拍子なり」とあるのみで詳かでない(日本歌謡史)。

**をかしなかま**

可笑仲間。をかしがる仲間。物に興ずる人達。

**をかしなげ**

をかしげ(可笑氣)に同じ。をかしさう。一代男三「上方のはすは女とおぼしき者十四五人も居間に見えわたりて、其の有様をかしなげに、髪ぐる〜巻いて」

**をがせ**

苧袴。麻袴。麻を巻く具。麻をからむ纏車(かせぐるま)。槍權三進行「思ひは千筋百筋の、我は涙のをがせ繰る」

**をかづけ**

陸著。荷物を陸路によつて運びつけること。ふなぢ(船路)の運搬に對する。胸算用五「諸國より荷物、船路陸着の馬方」

**をかばしよ**

岡場所。江戸で、吉原以外の私娼の居つた所。

**をがみうち**

拜撃。刀の柄を両手で握つて、高く頭上から打ちおろして切ることを。をがみぎり。

**尾が見える**

ぼろが出る。不始末があらはれる。特に、家計上の破綻が見える。永代藏三「年の暮に見えて二百三十貫足らず、今は内證に尾が見えて」。榮花咄五「別の事もなき身體を(中略)、次第次第に見苦しう、包む世間に尾が見えて、稻荷の前つぼ〜かま〜作り賣り」

**をかめはちもく**

岡目八目。岡基から起

つた諺。局外者から他人の岡基を見れば、當人よりも八目も勝れてよく見分けられること。碁盤太平記「一門も縁者も、岡目八目傍からはいひよいもの」

**をぐらづつみ**

小倉堤。山城國巨麻池の堤。

**をぐり**

小栗。⇒常陸國小栗の城主、小栗満重のこと。應永年中、足利持氏の軍と戦ひ城陥り自殺した。或はいふ、三河に出奔したと。俗に小栗判官といひ、照手姫との情事を以て名高い。近松の「當流小栗判官」には兼氏といふ名になつてゐる。一代男三「世之介是非に入聲、小栗もいにしへにあらず」。

畫家、小栗宗丹のこと。小栗満重の子、名は助重、小二郎と稱した。父と共に小栗城に在つたが、落城に先立つて遁れた。後落髮し、京都相國寺に入つて僧となる。晩年は大徳寺に住んで周文を師として畫道に精通し、遂に名手となる。寛正五年正月九日歿、年、六十九。照女のこととは、宗丹の傳にもあるが、満重に關する事蹟と混じたであらうといふ。傾城反魂香上「禁中の繪所小栗と筆の争ひにて」

**をけがはどう**

桶側胴。鎧の胴の一種。

を

かなどう(金胴)ともいひ、鐵を延べて作り、胴ばかりなもの。鏝の下に着る。又、最上胴丸の類だらうといふ。

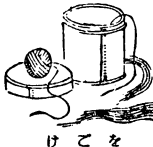


せぶけを

をけぶせ 桶伏。桶をかぶせること。特に、遊里で、揚鏡の支拂の出来ぬ者に、風呂場の桶をかぶせて支拂を請合はせること。物種集上「鬼のかしらを桶ぶせにして、鮎くさい人くさいとや思ふらん」。あづま物語の狂歌に「やかれつゝ、金のあるほどとられんば、後は必ず桶伏と知れ」

をけゆひ 桶結。桶をゆふ人。桶を作る人。桶屋。桶匠。用明天皇職人鑑「桶結ひの久馬平とて、小兵ながら大力」

をこげ 麻小筍。俗に苧桶といふ。楡のへぎ板を曲げて桶のやうに作つたもの。麻をうんで入れるもの。「おごけ」参照。



をこげ

をさかき 箄搔。箄を作る人。人倫訓蒙圖彙六「梭搔(ヲサカキ)。竹をもつて品々に組むなり、長縁・打樋・椽等、品々の職人かはれり」

をさかきだ

こ 箄搔  
肝眠。箄搔の手に出来るたこ。「おさかきだ」参照。



きかさを

をささのさか 小篠坂。大和國吉野山の奥一里、大峰山の入口にある。峰入の人達が潔齋する所。油地獄中「おささの坂を杖もつかずつゝと下る、お山の衆が考へ、ア、有りがたい」

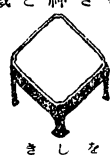
をさふね 長船。備前國邑久郡長船(今、行幸村の内)村に住した刀匠の打つた刀劍の稱。をさふねうち。大句數上「今が最期備州長船ふり上げて」

をさめがほ 納額。をさまつた額。とりすました顔つき。まじめがほ。

をさめすきる 納過。いやに落ちつく。懸八卦柱肘中「何の用とはをさめ過ぎた」

をじかのその 牡鹿苑。ろくやをん(鹿野苑)。中印度の波羅奈斯(今のベナレス)城の北東四英里にある。釋尊成道して佛陀伽耶の道場を離れてから、最初に説法した聖地。施鹿園。鹿苑。鹿

林。二枚綺草紙と「笛に誘はれ妻戀ふる、牡鹿のその」法の導きこれなれや」をしき 折敷。へぎ板で作つた、食器を載せる角盆。脚のあるのをあしうちをしき(足打折敷)といふ。神前に物を供へる時などによく用ひる。永代藏



をしき

をしごと 「おしごと」を見よ。

をしほやま 小鹽山。山城國乙訓郡大原山の別稱。小鹽山十輪寺がある。在原業平が鹽を焼いた地といふ。又、櫻の名所として聞えてゐた。

をしやれ 「おじやれ」を見よ。

をたけしふ 小竹集。書名。小唄集であらう。一代女五「十露盤を枕として、小竹集をひらきて、尻扣きて拍子を取り」

をだやむ 少しやむ。をやみとなる。雨などが小降りとなる。武家義理物語六「神鳴も落ちかた知れずをさまり、雨も

をだやみて

をだゆむ 小弛。前條に同じ。

をたれ 尾垂。建物の軒先の、樺の木口を隠すために用ひる横板。はなかくし

(鼻隠)。堀川波鼓下「辻の門に手を懸けて柱を傳ひ、貫木ふまへ、をだれより這ひあがつて」。又、ひさし(廂)をいふ、關西の方言。

まつつ 尾筒。尾のつけ根の筒状になつたところ。松風村雨東帶鑑「駒立直せば尾筒を取り、乗出せば鑑を控へ」。又、馬の尾を包む袋。

まつど 越度。をちど。あやまち。失策。缺點。武道傳來記「それはいかやうなる越度あつての事にて、この仰付にてさふらふ」。又、失意。おちめ。

まつこえらみ 男選。よい男を選むこと。夫たる男を選むこと。

まつこかさり 男飾。男を飾ること。又、それを用ひる物。

まつこげいせい 男傾城。男で傾城(遊女)のやうな玩弄物になるもの。男色を賣り、又、女に弄ばれる男。一代男

中「かはつた物は男傾城、江戸屋敷方女中の事」。傾城反魂香上「山三は元來お小姓立、前髪を酒林で殿を酔はせし男

傾城。男地獄。

まつこしもと 男腰元。男に仕へる侍女。男子に召使はれる腰元。織留「形よろしければ男腰元に出すべき女を、分限を聞き立て、且那好色なるを知りて、其家へ仕着せばかりにて御奉公」

まつこぜ おとこぜ(乙御前)を見よ。榮花咄「母の親の習ひにて、たとへばを

と御前の面なる娘も、我が子自慢して」

まつこだて 男達。男伊達。俠氣を出して、弱者の味方となり、約を重んじ、義の爲に命をかけて振舞ふこと。又、その輩。俠客。一代男

「けんぼうといふ男達」。同五「或は小尻とがめ、又は男たて、一町に九所の喧嘩」

まつこちくしやう 男畜生。男を罵つた語。

まつこづく 男盡。男氣を立てぬくこと。男の意地づく。曾根崎心中「男づくで貸したぞよ、手形も入らぬと言うたれば」

男でもない杭でもない (諺)「人でも杭でもない」といふ。男でも何でもない



てだこみを

い。男としての取得のないことを嘲つていふ。油地獄下「お二人の葬禮に、立派な乗物に乗せうといふ氣が無ければ、男でもくろでも無い」

男は氣でもて (諺) 男は意氣で世に立て。男は氣で食へ」といふ。

まつこぼしら 男柱。橋などの端にある太い柱。又、建物などで、中心となり、最も力になつてゐる柱。大句數上「必ず舟は傾く管じや、酒藏の男柱やしまらん」。松風村雨東帶鑑「憂しとな言ひそ色に染む、その唐錦から白の、男柱もねたまし」

男は裸百貫 (諺) 男は裸にしても百貫の價値がある。

男は松・女は藤 (諺) 女は男に頼つて立つといふ譬。

まつこぼし 男星。牽牛星のこと。又、男をそれに譬へていふ。だんせい。とぼづま(遠夫)。櫻樓比事四「此方も歴

歴の男星ながら年に一度逢ふ方もなく織女殿には劣り給ふ」

まつこまをとこ 男間男。他の男(夫たる人)との姦通。妻のある男と密通すること。

まつこみやうり 男冥利。男に生れて來

ただけの冥利。男たるものの冥加。を  
とこみやうが。又、その冥利にかけて  
誓ふ詞。博多小女郎上「男冥利・商冥利、  
虚言ごさらぬ、お供なされ」

をとこむすび 男結。垣・矢來などを結ぶ  
に用ひる緒の結び方。右端を左の下に  
廻して輪を作つておき、更に左端を廻  
してその輪に引き通して結ぶもの。

をどつて おつとつて(押取つて)か。新  
可笑記「家老職の人をどつて評判致  
されしに、双方共に越度無し」。「おつ  
とつて」を参照。

をとなやく おとなやく(大人役)の條を  
見よ。吉野都女楠「如何にをさなけれ  
ばとて、十にあまればをとなやく、な  
ど左程にも辨へなき」

をとほちのを 乙(おと)は血の緒。乙子  
(おとこ)即ち末子は血縁が特に深いとい  
ふ。十二段「末子の御子の牛若君  
(中略)、をとほちのをといとをしく」

をとぼね おとぼね(音ぼね)を見よ。  
をどりうた 躍歌。踊歌。踊と歌と。又、  
踊につれて歌ふうた。大矢敷「參る藥  
師は躍歌也、色になる笹谷分けて行末  
は」

をどりがさ 踊笠。踊りに用ひる笠。踊

りの笠。茶花咄「唐土が年寄つての踊  
笠」

をどりこまち 踊小町。一代女「夢の如  
く浮かれて、欲しや男、男欲しやと、  
踊小町の昔を今に唄ひける一節にも、  
戀慕より外はなく」

をどりだいこ 踊太鼓。踊りに用ひる太  
鼓。踊りの拍子に合せて打つ太鼓。胸  
算用「踊太鼓を打ち破り」

をどりねんぶつ 躍念佛。踊念佛。太  
鼓などを打ち踊りながら唱へる念佛。  
一遍上人から創つたといふ。遊行念佛。  
空也念佛。大矢敷「鉦は手づから躍念  
佛、春は花秋は平野に詣でつ」。尙、  
はうさいねんぶつ(泡齋念佛)を見よ。

をながとり 尾長鳥。にはとりの雄鳥の  
こと。一代男七「高橋その日の装束は  
(中略)、萌黄の薄衣に、紅の唐房をつ  
け、尾長鳥のちらし形」

をなごゐずまひ 女子居住まひ。女子の  
坐つた姿。雪女五枚羽子板中「割膝痛く  
兔もすれば、女子居住ひしどけなく」

をのりう 小野流。書道の流儀。小野道  
流を祖とするもの。武道傳來記「小野  
流のふるひ筆をとめて遣はせば」

をのれやれ 「おのれやれ」を見よ。傾城

反魂香中「今は六條三筋町、上林が内み  
やと云ふ、流れの身よりあさましい、  
遣手はしてものをれやれ、一度は狩野  
元信が、内儀と言はれうと、四年  
が間の氣の張弓」

尾羽打ちからす 落ちぶれてみすばらし  
い姿となる。やつれて元氣がない。物  
種集上「浪人の果ては物うき血の泪、尾  
羽打枯らす善知鳥(うとう)やすかた」

をばなうつば 尾花靱。尾花で作つた靱  
(矢入れ)。箒形の靱。蟬丸「明暮殺生  
を樂み、尾花靱に弓取添へ、今日も狩  
場に出でにける」

尾羽を枯らす 「尾羽打ちからす」に同  
じ。出世景清「某は尾羽を枯らせし鎌  
倉の浪人者」

尾鱗がつく 面倒になる。複雑して来る。  
戀八卦柱曆上「結局物に尾鱗がつく」。  
次條参照。

尾鱗をつける つけ加へをする。おまけ  
を言ふ。事實以上に飾る。  
をふさ (に)じ(虹)の異名。「おふさ」の條  
参照。

をみごころも 小忌衣。祭事・節會などに奉  
仕する者が、装束の上に著る單の服。  
狩衣のやうな形で、白布に春の草・小鳥



などを青摺にしたものを。をみ。をみのころも。源氏烏帽子折五「百拜千拜幣帛を纏へす小忌衣」

をよる およる。寢るの敬語。おやすみになる。御寢あそばす。生玉心中「一目もをよらず、お心疲れお身の毒」

をりうめ 折梅。模様の名。梅の折枝の模様。二代男「折梅の肌膚、今夜は何奴が抱いて寝るぞ」

をりかけどうろう 折掛燈籠。細く削つた二本の竹を、四角な板に四つ手のやうに挿して、紙を張つた燈籠。盆の靈祭りの棚に供する。をりかけ。

をりかご 折籠。食品など入れる、折のやうに作つた籠。

をりかた 折形。をりがみ細工。をりする。赤飯などの進物に添へて、鹽など包んでやるもの。

をりがみ 折紙。折紙道具、又折紙物の略。鑑定書づきの道具。女腹切上「この脇指を賣りに来て(中略)、代物問へば三百貫の折紙」。進上物の目録などを記す紙。奉書、鳥の子等の用紙を二つ折りにする故の名。

をりがみだい 折紙代。折紙道具の代金。女腹切上「三百貫の折紙代一倍まし、二

百拾兩に買求め」  
をりがみだい 折紙臺。折紙を載せる臺。進物の目録を載せる臺。陸摩歌中「附紙臺・折紙臺、三荷に擔はせ、まづ萬事首尾なつて私まで大慶と昇きこめば」

をりがみだうぐ 折紙道具。鑑定書及び價格などの書附の添へてある道具。折紙附の道具。雪女五枚羽子板中「百貫の折紙道具盗まれし場へ行懸り」。轉じて保證つきの最上なもの。請合ひの上物。男色大鑑「この専十郎折紙道具不破の萬作に八割まし」

をりがみたち 折紙太刀。鑑定書づきの太刀。女腹切上「諸役御免の受領職、折紙太刀の御用まで」。前條参照。

をりがみもの 折紙物。折紙つきの物。特に、大小刀の價格の、金四枚以上のもの、即ち金參拾兩以上のもの。

をりぎく 折菊。模様の名。莖や葉のついた菊の模様。俗つれ「鹿形の挿櫛に、切金の折菊」

をりく 折句。俳諧で、判者が上の一句(五文字)を出し、これに中の七文字、下の五文字の句を付けしめるもの。又、和歌では、五文字の語の一文づつを五句の各句頭に置いて詠むもの。

をりすゑ 折居。紙を折つていろ／＼の形を作ることを。をりかた。をりがみ。又、香道にいふ語。「一代男」或時はをり居(すゑ)をあそばし、比翼の鳥のかたちは是ぞと給はりける」

をりは 折羽。雙六の打ち方。雙方十二づつの駒を用ひ、竹筒から二つの采を振り出して、その目の數を取合つて多い方を勝ちとするもの。曾根崎心中「駕籠をはや、をりはの乞日三六の、十八九なるかほよ花」

をりびろうと 折天鷲絨。天鷲絨を折つて用ひたものか。五人女「帯は敷瓦の折びろうと、御所かづきの取りまはし」

をりぶみ 折文。折りたゝんだ手紙。文を書いた紙を疊んだまゝのもの。武道傳來記「橋に懸けしや思ひの深き所見えわたりたる折文を、爰にかしこに落し置きしに」

をりめ 折目。物を折りたゝんだあと。轉じて、言葉の句切り、起居、動作などをいふ。雪女五枚羽子板上「折目正しき正月言葉」

をりやう 折りやう。の條を見よ。

をりやなぎ 折柳。若衆の髪結び方。男色大鑑「白鷺の清八とて(中略)、一

を

を

生美道に身をなせば、手づまも優れて折柳とて一流結び出し、髪先二の曲の清らなれば、普くこの床にたよりて曙より前後を争ふ」

をりぬのどう 折居の胴。下居(おりぬ)の胴。大和國磯城郡多武峯の東麓、下居村彌助の作つた鼓の胴。彌助は胴作り名人であつたといふ。傾城酒吞童子曰「この鼓を調べしに、御存じの折居の胴、拍つて見ればばと〜と」

尾を見せる ぼろを出す。特に、商賣上の缺損・不始末をしでかす。「尾が見える」の條を参照。永代藏五「賈掛もたとへば十貫目の物三つ一ぶんにして、三貫目と請け拂ひすれば、世間に尾を見せず」。氷の朔日上「身代の尾も見せず、暮すは小かんの孝行故」

をんじやく 温石。病中又は冬季などに、懷中して身體を温めるに用ひる石。輕石又は鹽に包んだ瓦などを焼いて、綿・布などにくるんで用ひる。やきいし。

をんじゆ 飲酒。酒を飲むことであるが、特に「飲酒の戒」の義に用ひる。萬文反古五「飲酒(をんじゆ)は破つて寢酒は少しづつたべ申候」

をんぞろ 恩候(おんぞろ)。亂髮で衣服

などのしどけない様を、名古屋邊で、おんぞろのやうなといふ。厄拂節氣候の類に恩候と稱する異風な物乞があつたか(近松全集頭註)。賀古教信七墓廻「化物ならばをんぞろか、たとへ誠の人間にても、手なみを見よ」

をんでもない 手なみを見よ。もと狂言の用語。おほせまでもない。いふまでもない。勿論である。萬年草上「元の様念比にかはいがつて下さるか。をんでもない事」

をんなあんじや 女案者。訴訟ごとの文書などを代筆する女。日安がきの女。をんないうひつ 女祐筆。女右筆。文筆を巧みにする女。文筆の事で主に仕へる女。一代女三「諸禮女祐筆」。織留六「作法の役の外に物書く事女右筆ともいふ程なり」

をんないへぬし 女家主。主婦。女房家主。織留五「女家主小袖を著る事なかれ」

をんなじま 女鳥。女ばかり居るといふ鳥。女護が鳥。女護國。二代男「危き海上を越え、無景の女鳥に渡り給へり」榮花咄四「鳥原は女鳥となつて、戀の抓み取り」

をんなてがた 女手形。女が關所を通過するための手形。をんなとほりてがた。年齢・性質・旅行の目的・行先・人相・日限なども記入するを要した。兩吟「日千句「おひまして腰のしらねや善光寺、おは」といへど女手形は」。一代男三「今切の女手形も、人の情にて立てこし」

をんなてつかい 女鐵拐。女の鐵拐仙人。自ら姿を變へるのでいふ。てつかい(鐵拐)を見よ。

をんなてら 女寺。尼寺。又、女子を教へる寺子屋。永代藏二「女寺へも遣らずして筆の道を教へ」

女の家 油地獄下「嫁入先は夫の家、里の家といふ物なけれども、誰が世に許し定めけん、五月五日の一夜さを、女の家といふぞかし」

女の力と首の無い石佛 役に立たぬもの。曾我會稽山「女の力と首の無い石佛、外の用に使はれぬ、何の役に立たぬ物」

女は相見互ひ (謔) 女は互に同情し合ふべきもの。天網島中「女は相見互ひごと、切られぬ所を思ひ切り、夫の命を頼む〜」

補遺

女は鼻の先 (諺)「女の智慧は鼻の先」の意。女は思慮が淺薄である。胸算用  
一「惣じて女は鼻のさきにして、身代た  
たまるゝ宵まで二つ挑灯」。「女の猿智  
慧」ともいふ。

をんまむすび 女結。緒の結び方。男結  
びの右から始めるのを、左から始める  
もの。をとこむすび(男結)を見よ。

をんなもがり 女虎落。女のもがり。女  
のゆすり(強請)。もがり(虎落)参照。  
織留六「借銭こひの言葉質を取りま  
まと女虎落と名に立ち」

をんなものし 女物師。女のお針役。胸  
算用三「内儀に腰元、仲居、女物師を添  
へて」

をんまはず おんまはず。追ひまはずの  
音便。吉野都女楠四「楠帯刀正行と名乗  
りかけ、わり立てをんまはずし、火水に  
なれとぞ職ひける」

をんをん 怨怒。厄神の眷屬を勵ます掛  
聲。日本振袖始三「日本を魔國にせん、  
勇めや進め眷屬ども、怨々やつと喚く  
霹雲にこだまの木の葉を鳴らし」

あいこん 愛根。愛情の生ずるもと。煩  
惱の種となるもの。近代艶隠者四「家の  
一類親しく語る友に心當して、書置き  
こまんと調へ、自ら愛根の髻を切り  
捨て」

あがまへ あがめ(祭)。あがめること。  
尊敬。聖徳太子繪傳記三「ふつと守屋の  
下知を聞き、あがまへがこうじくして  
今で地頭の名はあれど、それは假令(け  
れう)なんの守屋に恩は受けず」

あくち高 あきくち(開口)高で、袴脛當  
などを高くはくにいふ。平家女護鳥三  
「脚當をあくち高にしつかとはき」

あげ木す あげ木は、あがき(足掻)の音  
轉、木は當字。足で地を搔く。身もだ  
えする。曾我虎磨下「山鳥一羽のし來  
り、くりのこずゑにあげ木して、つば  
さをすくめてとまりけり」

あこだぶり 青黄瓜。あこだぶり。南瓜  
の屬。食用となるが賞美されない。き  
んとうぐわ(紅南瓜)。あかだぶり。朱  
雀信夫摺上「色のわるき處、青黄瓜の化  
身實正明白也」

あごたほね 腮骨。あごの骨。あご。本  
朝三國志三「松下もはつと閃たる腮ほ  
ね、くひちがひてぞ見へにける」

あぢをやる 小齋をやる。福山姥四「ヤア  
ラでつちめあぢをやるよ」

あつそん あそん(朝臣)の轉。平家女護  
鳥四「正四位下能登守平の朝臣(あつそ  
ん)教經と鳴弦し」

あまのいはと 天の岩戸。徳利の名。名  
残之友四「天の岩戸といふ大徳利に、不  
老酒といへる名酒を詰めおき」

ある物でなし 「これより外に」といふ語  
が、上にあるべきを略して用ひる句。  
朱雀遠目鏡上「目もとちと細目なり、笑  
顔はある物でなし」。同下「床入のけい  
は、ある物でなし」

いさうれ 「いそふれ」に同じ。その條を  
見よ。いそうれ。平家女護鳥五「いさう  
れおのれら能登がさいこの供せよ」

いそうれ 前條に同じ。梶狩劍本地三「い  
そうれ房若いざ給へ」

いたりあゆみ 至歩。勿體ぶつた歩み。  
氣どつてあゆむこと。朱雀信夫摺上「居

腰(すゑごし)のいたり歩み、素足に朱のはな緒にて紅葉をふみわけ」

いふも管ながら 言ふも管(くだ)ながら。今さら言ふのもくだししいが。説くに及ばぬことながら。朱雀信夫摺上「いふも管ながら手跡酒の興よし」。

同「いふも管ながら御茶無双」

いりわたる 入渡る。入合ふ。うめあはせる。持統天皇歌軍法四「殺生をする者は、じひをせねば入わたらぬ」

うけふるまひ 有卦振廻。有卦は無卦の對語。年の干支と、その人の年齢及び木火土金水の性とによつて、有卦に入る、無卦に入るなどいふ。有卦に入ると吉事が多いとて祝ふ、その振舞の稱。曾我扇八景中「八日は千葉殿うけ振廻」

うづたかさ 堆高き。立派さ。見事さ。酒呑童子枕言葉「御筆立のうづたかさ、御ぶんでいまでさぞ〜と」

うどんげの御出 優曇華の御出。珍しい御出かけ。珍客の御光來。曾我虎磨上「寶來屋のてい主、うどんげの御出且

うんちん うんちん(運賃)に同じ。娥歌可留多五「ちよつと見るより戀と見た、船頭は戀の渡し守、うんちんもかまは

ぬ、戀にこがるうき舟、サア召せ召せ」

えだぶらす 枝振らす。(動詞)枝ぶりを整へる。名残之友五「見越の松杉さまさまに枝ぶらせ」

えてかたき 得手堅氣。甚だしく律義なこと。非常に打算に長じて物がたいさま。朱雀遠目鏡序「そろばん枕にする、えてかたきなるをのこも、覺えずわつさりとなり、衣紋つき鬢つきをたしな

み」

おこづく 起きかゝる。曾我虎磨上「大石はずんで二ツ三ツ、どう〜〜とおこづきて十間餘りころ〜〜」

おちや 御茶。廓の隠語。遊女の陰部をいふ。朱雀遠目鏡上「目もおちくぼになり給へり。尤も利口發明なり。御茶よし。床入のおもしろさ、くるわ第二」

おとなし様 おとなしいことを敬つていふ。槍狩劍本地三「ア、おとなし様に、お目がかたい、少お休あそばせ」

おふへい 大平(おほへい)。不遜なさま。横柄に同じ。朱雀遠目鏡下「此人は何をあてにやら、めつたと大平なり。くるわの上らう其外した〜〜までも叱るぞや」

おやぞん 親孫。親の名を恥かしめない子孫。槍狩劍本地五「天晴武功の親ぞんと、母は悦びかぎりなし」

おやは「やはらかい」ことを上品にいふ語。おやはらかいこと。おやさしいさま。朱雀遠目鏡下「心あまりおやはなれば、わきでではがゆきことあり」

かいしよなし かひしやう(甲斐性)なしの約。かひんしくない。はかが行かない。曾我虎磨中「はちく草履のかいしよなき、をなごたびこそ、さたかなら

ね」

かうぐしよ 香具所。香具を調へる所をいふか。名残之友三「香具所の宇野、河内といへる俳友」

かたはひ 片はひ。片寄つた處。片はし。古語「かたちはひ」と縁あるか。近代艶隠者三「名所をはや見終へぬ。それより市中の片はひに出づるに」。同五「武藏野の片はひに暫しは留り居つゝ、珍しき西國行脚の物語して」

かはらけの願がけ 耳の遠い者は、土器(かはらけ)に穴をあけて薬師に願をかけると癒るといふ。朱雀信夫摺下「ちと耳が遠し、しはい人じや、あれ程やす

い土器にあなをあけて願をかける事も

しゃらぬ」  
かひをつくる 貝を作る。べそをかく。  
泣きさうになる。梶狩劍本地三「おりや  
樊噲じやといふ顔に、貝をつくるぞ哀  
れなる」

かべせう 壁訴訟(かべせしよう)。筋  
のちがった處への訴へ。又、間接に遠  
廻しにする訴訟。曾我扇八景上「いひよ  
いとて祈經を小だてに取つてかべせ  
う、顔に似合はぬさもしい」

かほもち 顔持。おももち(面持)。顔の  
やうす。持統天皇歌軍法四「戀もさかり  
のかほもちは見す〜情ありげなり」。

曾我虎磨上「はや涙ぐむかほ持も、詞づ  
かひも風俗も」

かまくらぶた 鎌倉系。相模國鎌倉地方  
産の豚。朱雀信夫摺下「名にしおへる鎌  
倉系にあはるべし」

かんせい 感情。特に愉悅の充進するこ  
と。又、その極度の状態。朱雀信夫摺  
下「感情にあたりては、えならぬ御こゑ  
があがるなり」

かんぼうくづし 下賤の生業をする者を  
いふ。「かんぼう」は韓坊のことか。梶  
狩劍本地三「なふ久作殿、こなたひとり  
は何してもゆるりつと過ぎかねぬ身を

持つて、女房子故にかんぼうくづし憂  
き苦勞」

九十九三 懷紙に歌を認めるときの字配  
り。初行に九字、第二行目に十字、第  
三行目に九字、最後の行に三字を書く  
を法とする。本朝三國志三「御祝儀に一  
首仕らんと、はや御機嫌に大高檀紙、  
九十九三に定家やうさら〜と  
かく」

くりしめ しりくめ(尻久米)の音韻錯  
置か。傾城鳥原蛙合戦四「懷中よりくり  
しめのしめなけ取出し」

けいし 傾肆。傾城の居る店。傾城屋。  
遊女屋。近代艶隠者四「日夜遊宴に富み  
て、慰む業を事々し、同じ心したる友  
と傾肆に入りて明かし」

けいしよく 傾色。傾城の類語。遊女。  
近代艶隠者三「色里の友、これも程な  
く、傾色の情止まず、流牢の身となつ  
て、行方を知らず」

けいふ 傾婦。傾城。遊女。近代艶隠者  
四「夕べ傾婦に語りし事ども、是れ世上  
の習ひなるよと觀ずれば」。同二「あだ  
に通ひし一夜妻、迷ひに妾を重ねし傾  
婦の枕」

けいもじ 傾文字。傾城のこと(あらは

に呼ぶを避けていふ語)。寝物語「さる  
かたのけいもじより、めづらしき文貫  
ひたると云ふ。同「ぜんせい人は持た  
ず、はやらぬけいもじのする事なり」

けにも晴にも 何にもかにも。「け」は藝  
である。善いにも悪いにも。傾城鳥原  
蛙合戦一「かさいの郡司は一人の男子  
源六は勘當、けにも晴にもびはと申す  
娘」

けんとした 慳とした。容貌又は氣だて  
に、堅く強いところのあるさま。朱雀  
信夫摺下「面體よし。しかし慳とした顔  
だち、心ばへも石原に木賊生えたやう  
なり」。同「けんとしたかたぎは、名に  
おふ山城の生妻を皿に盛つたいきほひ  
あり」

こうしつがた 後室方。ぢみな風の男を  
いふか。朱雀遠目鏡下「御心はりあひな  
風なり」

こうせい 好情(かうせい)。好色の類語。  
朱雀信夫摺と「いふも管ながら御茶無  
双御好情の事、其味又千中無一なり」

ごぼち 五八。遊女の揚代、銀五十八匁  
の略。轉じて、五十八匁を價する遊女  
の稱。上品女郎。さんばち(三八)及び

そうしう(惣州)の條の文例参照。

ごはつさう 五發草。藥草の一種。朱雀信夫摺上「粹にもたせたらば、五發草よりきよがはやかるべし」

ごぶに山椒 昆布で作つた「みづから」といふ菓子に、山椒を入るので、附合物の譬とする。絶狩劍本地「花に鶯紅葉に鹿、ごぶに山椒戀に酒」

こみせもの 小見世物。こしばる(小芝居)の類語。その條を見よ。名残之友「女がまへの芝居といふ小見世物の木戸番ども」

こもがい 熊川。茶碗の名。朝鮮咸鏡道熊川郡から出る茶碗。茶の湯に珍重される。本朝三國志曰「此茶碗はかうらいのこもがいな」

ころり山椒みそ すぐに屈服してしまふこと。ころりと倒れること。「山椒味噌」は口拍子に添へた言葉。朱雀遠目鏡上「いかなるむゐき成る大臣も、一服でころり山椒みそ、もろこし舟にはいかりをおろすなり」

ざごろう 座功。座敷を勤める經驗。座敷勤の敷を踏むこと。朱雀信夫摺下「惣じて新女は座功の上る程よろづ替り行けば、初段のきたは諸事むやく」

さしこはらし 「さしほらし」か。いかめかしく指すことか。酒呑童子枕言葉五「綱は好む大あらめ例の鬼切さしこはらし」。持統天皇歌軍法「大斷臘(だら)指しこはらし」

さんくわんあめ 三官餉。江戸、芝の菓子屋三官の製した餉。朱雀遠目鏡上あいらしき顔色の、鼻の思はく一つにて、けおされて見ゆる事は、あたら三官餉にすの有るがごとし」

さんびやくめ 三百目。問男の相場であるといふ。平家女護島「龍宮のつよもたせ三百目の玉塔」

參を以て 參上しての意か。持統天皇歌軍法「日比のお勤御手がらく參を以てお悦び申さんと存ずる折から」

しう 州。人稱名詞の類につく接尾辭。「呂州」、「惣州」、「山州」などいふ。朱雀信夫摺上「むかしを准へば、光源州のあしまに沈むと詠み給ひし紫の上もかくやあるらん」

しくわん 士官。役人。有司。官吏。近代艶隠者「國主城主の威を重うして、士官を携へ、假にも權を厚うするは、皆民の上たる役にして、人を治むる爲めに有り」。同「事ある時は士官と成

り、從僕を携へ」

しさんや 四三屋。質(七)屋といふ洒落。寝物語「手まへなりがたき故に、皆々四三屋へあづけると云ふ」

しばわらは 柴童。柴刈る童。柴掃く子供。しばびと(柴人)の條参照。近代艶隠者「朝は人より早く松葉浚へ、柴童に與へ、夕はまた夜まで掻き寄せて里男に配る」

しんしう 新州。賣出したばかりの女郎。新殿。新女。朱雀信夫摺下「是も新州當八月十四日 未通揚(みづあげ)也」

じんばり 腎張。性慾の強いこと。又、その者。朱雀信夫摺上「皮膚圓満にて腎張ならば、かゝる大臣のおとがひで蠅を追はぬはあらじ」

すいほ 粹穂(するほ)。粹な人。粹士。朱雀信夫摺下「いかな粹穂も空人介(やばすけ)も、はだへにしめてねゝしたか因果」

すおふへい 素大平(すおほへい)。大平は横柄に同じ。横柄なことを卑めていふ語。朱雀遠目鏡上「わかき人にあはず、す大平なりとて皆々しかり申すなり」

ずがたのしなもの 姿乃科物。姿の品物。

風姿の品の優れたさま。又、その優れた者。朱雀信夫摺上「姿の科物なる所は女郎花の露をおび、青柳の風にそよぐにたとへてもまだ不足なり」

**すをこふ** 酔を乞ふ。手出しをする。事をしかけて他を怒らしめる。娥歌可留多三「そばから喧嘩のすを乞ふも、是かんにんのせごしなる」。國性爺後日合戦「うぬが方から酔をこふて御無用なやつら」

**ぜんせいす** 全盛す。廓詞。遊女として盛にもて囃される。朱雀遠目鏡上「全盛し給ふ事、水の岩間にあふれ、花の春陽を得たるがごとし」。同下「むかし三四郎が八千代全盛して、其名都鄙にかくれなかりしかば」

**ぜんたん** 禪單。禪堂に於て、己れが座床の前に置く板をいふ。單板。單は、もと己れが名を記す札。轉じて座禪する席をいふ。禪單。近代艶隠者五「線香に煤けたる圓窓あり、是れより内を差覗き見るに、年の程五十ばかりの僧の髪うちかぶり、爪長なるが、禪單を出でて、誦經するにありけり(中略)早御經も終りて、また單に入り給ふを三拜して」。同五「卑しからず作りたる亭

に、子昂が馬繪、目馴れぬ花入の粧ひ脇には禪板禪單も見えたり。同二「常に馬を好んで、朝は釜の沸りに楽しんで、禪單工夫を凝らし世を送りし異人」

**ぜんぶつ** 前佛。釋迦のこと。彌勒を後佛といふに對する。平家女護島一「前佛さつて後佛を待つ首數都合五十六級、七千萬歳」とは、釋尊入滅後、五十六億七千萬歳で、彌勒が出現するといふ佛説に據つていふ。

**そいより** 添寄(そひより)。寄り添ふこと。又、取りつくしま。寄り添ふべきところ。朱雀信夫摺下「容儀(かたぎ)にそい寄のない處」

**そうしう** 惣州。そうか(惣嫁)に同じ。「州」は一種の接尾辭で、「呂州」「敵州」などの例もある。朱雀信夫摺上「上品女郎の五拾八奴より、下五分壹分の惣州に至るまで」

**そうゑ** 惣衛。前條に同じ。朱雀信夫摺上「惣衛の中間へいれてからが、闇ならではかづくまじ」

て呼ぶ語。朱雀信夫摺下「問客日々寂寥たりしゆゑに、當官におりられたり」。同上「當官に備はし給ふは、壹本橋を渡るがごとし」

**だうすぢ** 道筋。街道筋の略か。路傍。往來。朱雀信夫摺下「心だてやさしければ、道筋の黒犬までがよくなつけり」

**たすけおひ** 助帯。かゝ(おび)(抱帯)などの類か。力を添へよすがとする帶の意か。近代艶隠者三「侍婢の(中略)、品好みたる裝束、花を枝折帶に、紫濃き助帯までも、石流(さすが)故ありげに調じて」

**だら** 斷臘。だんびら。段平。刀劍の身の幅の廣いもの。持統天皇歌軍法島「葶(をがら)頭巾ひつこふて大斷臘指しこはらし」

**ちよれん** じよれん(鋤簾)の訛か。近代艶隠者三「賤家の奴焼く沙煙に其身をもろどけ、手桶に肩を樂め、ちよれんに手を慰めて、さしも憂へる色無く立ち並ぶを」

ひる。寝物語「傾城に何にても諸道具をこしらへとらすこと、是月の聲のする事なり」。同「月の聲なる男は、けいせいになじみ申す事、けなりがり申物也」

つじだいに 辻太鼓。辻で時を知らせるために打つ太鼓。近代舞隠者「臥しては時を告ぐる辻太鼓を恨み」

づねり 頭形。頭の恰好。特に髪形。朱雀信夫摺上「頭形よろしうて、ゆひぶりわきて一風そなはれり」

づねんをはらふ 頭燃を拂ふ。頭の火を拂ふ。速かにすることの譬。朱雀信夫摺下「此道を知らんと欲せば、頭燃をはらふごとくして先此人にあふべし」

ていさう 體相。身のこなし。態度。朱雀信夫摺上「今は御體相に殊勝氣がさいたり。面體更に難なれども憔悴し」

てきしう 敵州。遊廓に於て、相手かたを「敵」と呼ぶ。「州」は一種の接尾辭。風呂屋者を「呂州」といふ類。下例は、遊女から相手の客を指していふ。朱雀遠目鏡上「敵州のまじはりにて、わけて情あるべき事ども有りしが」

てぐすみ 出ぐすみ。外出に手間どること。他出が億劫なこと。曾我虎磨中「な

んのかのと出ぐすみはなごのくせ、遅なはつたが氣の毒や」  
とうかいづくり 東海道。明の歸化人、吳東海の作り出した帆船の稱。百合若大臣野守鏡「廿五たんのとうかいづくり、かな物づくめ七百餘騎四十八丁櫓を立て」

とうげんせかい 鳥原(たうげん)世界。京都鳥原(しまばら)の遊廓。朱雀信夫摺上「平安の樂寢鳥原世界、喜見城の榮花陽持之寂光土、此より西にあたれば」

どうよくに (副詞) いとはしい、いまでに甚だしく。朱雀信夫摺下「御茶はどうよくにひきし」

なりひがふう 氣むづかしく、すねるさまを言ふか。朱雀信夫摺下「及ばずともなりひが風を慕はば、此女郎にあふてこそ」

なりんじこと 成りにし事。成事。娥歌可留多ニ「なりんじことをばとかず、どげんじことをばいさめず」

にべる つらねる。にべ(鰐膠)を活用させていふか。或は俳人が和歌を誘つていふ「ぬめり」、「ぬめる」の音轉か。平家女護島ニ「歌連歌にべる都人夢にも見やしめすま」

念に及ばず 念を押すに及ばず。心配無用。本朝三國志三「胎内の御子をしかと御世に立つべきな、ハテ念に及ばず、亡君尊靈もせうらんあれ」

ねんらう 年臘(ねんらふ)。年を相當に取つてゐること。臘(又は薦)は、もと僧が安居の功を積んだ年を數へるにいふ語。年功者。年増。朱雀遠目鏡下「柏屋の内にては、おもくしき年臘なり」

のぞきをくる 「覗きを與へる」義。一寸見る。立寄つて覗く。特に、遊里に足を入れることにいふ。朱雀信夫摺上「當世女郎の品を論じて、いまだのぞきにくれざる衆生に是を結縁す」。同上「清らに肥えあがらづきたる脛のこもちよいに、のぞきをくれて、目くれし仙人さへあるを」

ばしふう 破志風。朱雀信夫摺上「糸萩のすがたのてづよう見ゆるも破志風あり」

はぢかはし はづかし(恥)に同じ。朱雀遠目鏡下「つゝゐづゝゐづゝにかけしまるがたけ、過ぎにけらしなと、はぢかはしく見えし」

はつき はつきり。それと明かに。朱雀遠目鏡下「ざしきのつきはつきと利發

念に及ばず 念を押すに及ばず。心配無用。本朝三國志三「胎内の御子をしかと御世に立つべきな、ハテ念に及ばず、亡君尊靈もせうらんあれ」



には見えず」

八町三度 疾走のさま。八町を三度に飛  
び越すほどの速力。本朝三國志「坂を  
のぼりに韋駄天走、八町三度足もため  
ず飛んで来るは」

光りはくはぬ 威嚇には乗らぬ。狐山姥  
「こりや、をだ巻とやらくだ巻とやら  
光りはくはぬ出直しや」

びさう 貧相(ひんさう)。風情のないさ  
ま。無愛想。朱雀信夫摺下「大晦日にか  
け乞に行くも是にはいかど一分の貧  
相也」

ひそく ひやうそく(乗燭)の約か。とも  
し火。寝物語「禿にひそくもたせ」  
びたつく べたつく。いやに媚び諂ふさ  
ま。朱雀遠目鏡上「びたつきたるとて難  
ずる人もありげなれど(中略)、牛の角  
を風の吹きまるとく、けもなき顔し  
たるは、つら憎きものなり」

ひまどな 隙(時間)がむだになるこ  
と。ひまどつてうるさいこと。國性爺  
後日合戦「エ、隙どうなと小腕とつ  
て突き放され」

ふくだいじん 福大臣。有福な大盡客。  
金に困らない遊び客。朱雀遠目鏡下「太  
鼓おろせに至るまで、長くて細きお目

をかけさせられ、福大臣様と尊むべき  
もの也」

ふぐとう 河豚魚。ふぐ(河豚)のこと。  
ふぐと。朱雀信夫摺上「面體わきて醜  
ふ、北國には河豚魚(ふぐとう)が化  
けてあのやうなものになると語る」

ふたくち 二口。二口屋の餓頭といふ略。  
朱雀信夫摺上「二口がむしたてを、獵虎  
の皮につゝめるもかくや」

佛法けづる 佛法を誹謗する。傾城烏原  
蛙合戦「夫は佛法けづる共、そつと隠  
して回向しや」

ほびらきうつ 帆開打。勢よく帆に風を  
孕む。百合若大臣野守鏡「船は沖へ十  
町ばかり、ほびらき打つて走りしは、  
鳥の伸し羽の如くなり」

みへぎり 三重切。ひとよぎり(一節切)  
などに類する笛か。近代艶隠者「奇異  
の世落人來りて、巖の上に裾打掛けて  
在りしが、やゝ暫し袂より三重切の竹  
取り出し、より金の花鬼を織りたる白  
緒の結び解いて片脇に直し、椒蘭の燕  
りしめやかなるよ通し抜いて、半呂の  
音に調べつゝ吹きすさむに、其聲儼然  
として己れを忘るゝが如し」(谷中の三  
重切男の條)

蟲が早い 腹の虫がをきまつてゐない。

氣が早い。曾我扇八景中「ア、おたしな  
みなされ、むしが早い、おとし付けて  
思案あれ」

めんしき 面色。かほいろ。容貌。朱雀  
信夫摺上「面色もとより清らに座配よ  
し」。同下「面色あかみあれども、じた  
い美し」

もろおもひ 諸思。兩方で思ふこと。相  
思。近代艶隠者五「親の許さざりし縁を  
約して、人目の鬪を恨み、諸思ひする  
人の偶々相遇ふにてありけり」

やうそく 容色(ようしよく)。貌と色と。  
又、顔色。朱雀信夫摺上「眞盛りなる女  
郎、容色(やうそく)そこから清らにし  
て六根うるはし」

りふねん 立年。「而立」の年か。即ち三  
十歳をいふか。論語爲政篇「三十而立、  
四十而不惑」。近代艶隠者三「内に立年  
と見ゆる男の、四つ竹といふ物を拍ち  
て樂むあり」

りんによがる いとしがる。りんによぎ  
やる。平家女護鳥「娘よ妹よ鬼せろ角  
せるときやつてりんりよがつてくれめ  
せかし」。同「都人のござんすより、り  
んによぎやアつてくれめすが、身にし

みわたる」

れんしん 戀心。こひしがる心。戀ひする心。戀慕。近代艶隠者「戀心彌増し、身も消え行くやらんと、我ながら怪む程にて」

れんまん れんま(練磨)の訛。寢物語「いき品の上手は、れんまんのこつにてすると待り(中略)ならはずしては鞠もならず、けいせいもその如く、いき品の上手はれんまん。數人にもまれ、禿の時より上手の鞠のつめを心がけ」

わかだち 若立。わか／＼しい姿。もと草木の若ばえをいふ。朱雀信夫摺下「すらりとしたる背のいきほひ、玄賓の衣をかけられし若立なり」

わつさ 「わつさり」の略。朱雀遠目鏡下「御年の程さかりなれば、わつさとしておもくれず、ざはいおもしろし」

ゑんとうもの 遠島物(ゑんたうもの)。遠島から來た物の意で、異様な感じのするさまをいふか。朱雀遠目鏡下「むかし竹の中より出られし、かぐや姫のかがやくかたちを取りおきたらば、此の人のやうにあらまし、とかく遠島物なり」

元祿文學辭典終